

# 鳥羽遺跡

G・H・I区

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第11集一

《本文編》

1986

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 鳥羽遺跡

G・H・I区

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第11集一

《本文編》

1986

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

本県を縦走する関越自動車道（新潟線）は、首都圏と新潟とを結ぶ大動脈として多くの人々に利用されています。この関越自動車道建設事業に伴い、数多くの埋蔵文化財包蔵地等が調査されましたが、ここに報告します鳥羽遺跡もその一例であります。本遺跡の周辺には推定上野国府跡、国分寺跡などが近接しており、律令時代における群馬県の中心地域として知られています。

鳥羽遺跡は、昭和53年度から昭和58年度にかけて6カ年にわたる発掘調査によって、古墳・奈良・平安時代及び中世にわたる集落跡で、居館跡・基跡等を含む膨大な遺構・遺物が発見されました。特に奈良・平安時代を中心とする住居跡は、前橋市元総社町・群馬郡群馬町稲荷台及び塚田にわたる広い地域に及び、且つ条里による制約を受けていることが推定されるなど示唆に富むものとなりました。また、鍛冶工房跡・神社跡と推定される遺構など、本県の律令社会を研究する上で貴重な資料を得ることができました。

これらの資料の活用を図るために昭和59年度より整理事業を進めておりますが、まずその第I巻として「関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財調査報告書第11集・鳥羽遺跡（本文編・図版編）」を刊行する運びとなりました。

本報告書の刊行にあたっては、日本道路公団東京第二建設局・同高崎工事事務所・前橋市教育委員会・群馬町・群馬町教育委員会・群馬町国府農業協同組合はじめ御指導いただいた各位、また労を惜しまれなかった地元の方々はじめ多方面にわたる関係者の御協力をいただきました。ここに厚く謝意を表するとともに、本書の成果が斯界に寄与するものとなり、一般の方々にも広く活用されることを念じまして、序文といたします。

昭和61年9月30日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎



## 例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地域は前橋市烏羽町から群馬郡群馬町大字塚田に至る地域の1,200mの区間で、A～Oに区分してある。  
本書は全4巻の中の第1巻である。なお、この報告は昭和57・58年度の調査にかかわるもので、G・H・I区を対象とし、主に堅穴住居跡を掲載した。また、本書は本文編と図版編に分冊してある。
3. 発掘調査は昭和53年4月から昭和59年3月にわたって実施した。但し、昭和53年4月から昭和55年3月までは群馬県教育委員会がこれにあたり、ひきつづき群馬県埋蔵文化財調査事業団が事業を行った。
4. 事業主体者 日本道路公団
5. 調査主体者 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査の体制は、次の通りである。（別表A）
7. 発掘調査及び本書作成にあたって次の諸氏・諸機関ほか多くの方々のご指導を得た。  
穴沢義功、新井房夫、石井栄一、石井則孝、伊藤正義、稲葉和也、井上喜久雄、岡田精司、小川貴司、川原純之、倉田芳郎、斎藤孝正、坂詰秀一、関 茂、玉口時雄、寺村光晴、戸根与八郎、仲野泰裕、植崎彰一、西宮秀紀、水野正好、宮本長二郎（五十音順・敬称略）  
文化庁文化財保護部記念物課、奈良国立文化財研究所
8. 発掘調査にあたって次の諸氏・諸機関の他多くの方々のご協力があった。  
石川喜平次、石川道緒、加藤和四郎、斎藤一正、篠田わし、砂長実治、砂長竹男、関谷林造、塚田正雄、藤井英男、藤井立一、堀江俊江、本多房松、真塩宇一、真塩義美（五十音順・敬称略）  
日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所、前橋市教育委員会、群馬町役場、群馬町教育委員会、群馬町国府農業協同組合、群馬町稲荷台地区、前橋市元総社地区
9. 本書作成の整理作業は昭和59年4月より昭和61年3月まで行った。
10. 本書作成のための整理作業は、次の通りである。（別表B）
11. 奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏には、建築学の立場から掘立柱建物跡についての論考をお願いした。また第二章第二節の2については川原嘉久治氏に執筆をお願いした。
12. 石器の石材鑑定は飯島静男氏にお願いした。
13. 本書に使用した遺物写真は佐藤元彦技師が担当したほか、宇賀達夫氏・中央航業株式会社に委託し、遺跡全景写真は、北沢廣氏、青高館航空写真、株式会社サンシャイン工業に委託した。なお、遺構の写真撮影は調査担当者が行った。
14. 金属製品の保存処理は、関邦一技師と北爪健二嘱託員がこれにあたった。
15. 本書に用いた地図は、国土地理院発行「前橋」1：50000である。
16. 発掘調査・整理作業に関係する史・資料は総て群馬県埋蔵文化財調査センターにこれを保管してある。
17. 本書の編集は、唐澤・綿貫の協議でこれを行い、本文の執筆はことわりがない限り編集者が行った。

(別表A)

管理・指導体制	調査・研究体制
<p>群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課</p> <p>課長 磯貝 福七(53～54) 関 茂(55～56)</p> <p>森田 秀策(57～58・※事53～56)</p> <p>参事 白石保三郎(53～56) 新藤俊雄(57～58)</p> <p>井上唯雄(57～58)</p> <p>補佐兼任長 阿久津宗二(54・※長53)</p> <p>調査員 神保 甫史(58)</p> <p>主任 秋池 武(55～57)</p>	<p>群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課</p> <p>調査員 松本 浩一(53)</p> <p>文化財保護主事 市 隆之(53) 大江 正行(54)</p> <p>石塚 久剛(53) 河口 正史(54)</p> <p>嘱託 内田 憲治(54) 田辺はるみ(53～54)</p> <p>木津 博明(54) 石守 晃(54)</p>
<p>財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>常務理事 小林起久治(55～58)</p> <p>事務局長 澤井良之助(55～58) 白石保三郎(57～58)</p> <p>調査研究課長 井上唯雄(55～56) 松本 浩一(57～58)</p> <p>管理部長 大澤 秋良(58)</p> <p>庶務課長 近藤 平志(55～57)</p> <p>調査研究第一課長 平野 進一(55～58)</p> <p>主事 固定 均(55～58) 笠原 秀樹(57～58)</p> <p>山本 朋子(56～58) 吉田 有光(57～58)</p> <p>柳岡 良宏(55～58)</p> <p>補助員 野島のお江(55～58) 並木 綾子(55～58)</p> <p>吉田 恵子(55～58) 吉田 美子(55～58)</p> <p>今井もと子(57～58)</p>	<p>財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>主任調査研究員 市 隆之(55～56)</p> <p>調査研究員 大江 正行(55) 唐澤 至朗(57～58)</p> <p>綿貫 邦男(56～58) 石守 晃(55～56)</p> <p>谷藤 邦彦(55～56) 神谷 佳明(55)</p> <p>関根 慎二(55・58) 友廣 哲也(56～58)</p> <p>新倉 明彦(56・58)</p> <p>嘱託員 反町 公己(56～58)</p> <p>補助員 水口 九思(57～58)</p> <p>委託測量士 並木 秀行(57～58)</p> <p>事務作業員 清水 享子(55～58) 太田けい子(55～57)</p>

注(職員は担当時、数字は担当年度)

(別表B)

管理・指導体制	調査・研究体制
<p>群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課</p> <p>課長 森田 秀策</p> <p>参事 新藤俊雄(59) 中島 喜三(60)</p> <p>井上唯雄</p> <p>補佐兼調査員 徳江 紀</p> <p>主任 真下 高幸</p>	
<p>財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>常務理事 白石保三郎</p> <p>事務局長 梅澤重昭</p> <p>管理部長 大澤 秋良</p> <p>調査研究部長 松本 浩一(59) 上原 啓巳(60)</p> <p>調査研究第一課長 平野 進一</p> <p>調査員 定方 隆史(60)</p> <p>主事 固定 均 笠原 秀樹</p> <p>須田 朋子 吉田 有光</p> <p>柳岡 良宏</p> <p>補助員 野島のお江 並木 綾子</p> <p>吉田 恵子 吉田 美子</p> <p>今井もと子 石田 智子(60)</p> <p>今井あや子(60) 松井美智子(60)</p>	<p>財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>調査研究員 唐澤 至朗 綿貫 邦男</p> <p>補助員 伊藤 淳子 手塚ふみ江</p> <p>笠井 初子 筑井 弘子</p> <p>高橋 初美 岸 トキ子</p> <p>金子 恵子 岩間 節子</p> <p>田中 富子 都筑 桂子(59)</p> <p>佐子 昭子(60) 中澤 久子(60)</p> <p>笹尾 ヨシ子 立見 美代子</p> <p>八木 淳子(60)</p>

注(職員は担当時、数字は担当年度)



## 凡 例

1. 本報告書は鳥羽遺跡のG・H・I区の3区域をその対象としている。しかしその一部を時間的制約や紙数の都合で割合せざるを得なかった。未報告の部分については第二分冊中に掲載する予定である。
2. 本書における遺構名称は各区に独立させた。

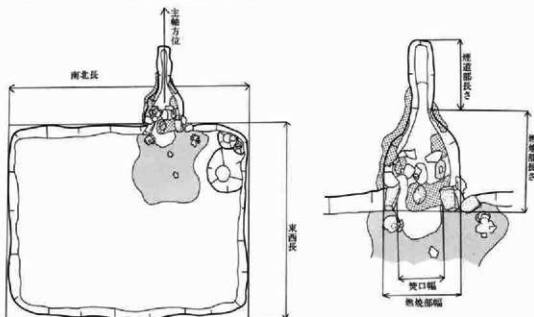
### 例・G1号住居跡、H10号住居跡

最初の alphabet は区名を表し、数字は調査時に調査した順に付したものをそのまま使い、両者を併用して個々の固有名とした。よって、数字そのものはいかなる順位も示すものではない。

3. 本書における遺構図版はそれぞれに比例尺を付したが、基本的には次のようである。竪穴住居跡・井戸跡 1/60 竪穴住居跡竈・炉 1/30 墓跡・土坑 1/40 掘立柱建物跡・溝 1/80 但し遺構によってはその限りではない。
4. 本書における遺物図版にはそれぞれに比例尺を付したが基本的には次のようである。土器・羽口・石器 1/3 鉄器・転用砥石その他小形遺物 1/2 但し遺物によってはその限りでない。
5. 本書に使用した編目は次のことを表す。



6. 本書における遺構図版中の断面基準は標高でこれを表した。単位はmである。
7. 本書における遺構についての主な項目は表組で示し、その他は本文中に記述した。
8. 本書における遺物観察は表組でこれを示した。計測値単位はcm・gである。
9. 遺物図版中の番号は、遺構図版の遺物出土位置の番号及び遺物写真番号と同一である。
10. 土器の色調は「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所監修によった。
11. 土器の実測図は原則として四分画法をとった。残存量が二分の一以下の遺物の場合は180°展開して図上復元とし、中心線は点線で示した。
12. 遺物の拓影は一角法によって貼付した。
13. 遺構についての主な計測は以下に示した図のように行った。





# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	4
第2章 鳥羽遺跡の立地と歴史的環境	7
第1節 立 地	7
第2節 歴 史 的 環 境	9
1 周 辺 の 遺 跡	9
2 国府周辺の古社	12
第3章 G区の遺構と遺物	17
第1節 G区の概要	17
第2節 G区の竪穴住居跡と遺物	19
G1号住居跡	19
G2号住居跡	22
G3号住居跡	23
G4号住居跡	25
G5号住居跡	28
G6号住居跡	29
G7号住居跡	31
G8号住居跡	33
G9号住居跡	34
G10号住居跡	41
G13号住居跡	43
G14号住居跡	45
G15号住居跡	47
G16号住居跡	50
G18号住居跡	52
G19号住居跡	55
G20号住居跡	57
G21号住居跡	64
G22号住居跡	68
G23号住居跡	72
G24号住居跡	73
G25号住居跡	74
G27号住居跡	76
G28号住居跡	77
G31号住居跡	78
G33号住居跡	82
G34号住居跡	86
G35号住居跡	87
G36号住居跡	88
G37号住居跡	90
G38号住居跡	92
G40号住居跡	94
G41号住居跡	95
G42号住居跡	97
G43号住居跡	99
G44号住居跡	101
G45号住居跡	102
G46号住居跡	105

G47号住居跡	106	G70号住居跡	152
G48号住居跡	108	G71号住居跡	154
G49号住居跡	109	G72号住居跡	157
G50号住居跡	113	G74号住居跡	159
G51号住居跡	115	G75号住居跡	160
G52号住居跡	117	G76号住居跡	162
G53号住居跡	120	G78号住居跡	164
G54号住居跡	120	G79号住居跡	165
G57号住居跡	122	G80号住居跡	167
G58号住居跡	124	G81号住居跡	169
G59号住居跡	127	G82号住居跡	171
G60号住居跡	129	G83号住居跡	172
G61号住居跡	131	G84号住居跡	175
G62号住居跡	133	G85号住居跡	177
G63号住居跡	135	G88号住居跡	179
G64号住居跡	139	G89・90号住居跡	180
G65号住居跡	142	G91号住居跡	181
G66号住居跡	144	G92号住居跡	182
G67号住居跡	146	G93号住居跡	183
G68号住居跡	147	G95号住居跡	185
G69号住居跡	150	G96号住居跡	187

#### 第4章 H区の遺構と遺物 189

第1節 H区の概要	189		
第2節 H区の竪穴住居跡と遺物	191		
H1号住居跡	191	H16号住居跡	215
H2号住居跡	194	H18号住居跡	216
H3号住居跡	197	H19号住居跡	219
H4号住居跡	200	H20号住居跡	221
H5号住居跡	200	H21号住居跡	223
H6号住居跡	203	H22号住居跡	225
H7号住居跡	205	H23号住居跡	228
H8号住居跡	206	H24号住居跡	231
H9号住居跡	198	H25号住居跡	232
H10号住居跡	207	H26号住居跡	234
H11号住居跡	209	H27号住居跡	235
H12号住居跡	209	H28号住居跡	237
H13・14号住居跡	211	H29号住居跡	240
H15号住居跡	214	H30号住居跡	241

H31号住居跡	243	H45号住居跡	278
H32号住居跡	246	H46号住居跡	280
H34号住居跡	249	H47号住居跡	282
H35号住居跡	254	H48号住居跡	283
H36号住居跡	258	H49号住居跡	284
H37号住居跡	261	H50号住居跡	285
H38号住居跡	263	H51号住居跡	287
H39号住居跡	268	H52号住居跡	289
H40号住居跡	270	H53号住居跡	290
H41号住居跡	270	H54号住居跡	292
H42号住居跡	272	H56号住居跡	297
H44号住居跡	277		
第3節 H1号掘立柱建物跡と出土遺物	301		
第5章 I区の遺構と遺物	398		
第1節 I区の概要	398		
第2節 I区の竪穴住居跡と出土遺物	400		
I1号住居跡	400	I22号住居跡	469
I2号住居跡	402	I23号住居跡	470
I3号住居跡	405	I25号住居跡	474
I4号住居跡	407	I26号住居跡	476
I6号住居跡	411	I27号住居跡	478
I7号住居跡	417	I28号住居跡	480
I9号住居跡	419	I29号住居跡	487
I10A号住居跡	421	I30号住居跡	492
I10B号住居跡	423	I31号住居跡	494
I11A号住居跡	433	I33号住居跡	496
I11B号住居跡	435	I34号住居跡	498
I12A号住居跡	437	I35号住居跡	502
I12B号住居跡	439	I36号住居跡	504
I13号住居跡	440	I37号住居跡	508
I14号住居跡	441	I38号住居跡	510
I15号住居跡	442	I39号住居跡	511
I16号住居跡	445	I40号住居跡	513
I17号住居跡	447	I41号住居跡	514
I18号住居跡	448	I42号住居跡	515
I19号住居跡	457	I43号住居跡	520
I20号住居跡	459	I44号住居跡	525
I21号住居跡	464	I45号住居跡	526

I 46号住居跡	530	I 79号住居跡	658
I 47号住居跡	535	I 80号住居跡	662
I 48号住居跡	538	I 81号住居跡	666
I 51号住居跡	539	I 82号住居跡	669
I 52号住居跡	545	I 83号住居跡	672
I 54号住居跡	561	I 87号住居跡	673
I 55号住居跡	562	I 88号住居跡	678
I 56号住居跡	572	I 89号住居跡	684
I 57号住居跡	573	I 90号住居跡	687
I 58号住居跡	576	I 91号住居跡	694
I 59号住居跡	579	I 92号住居跡	697
I 60号住居跡	582	I 93号住居跡	703
I 61号住居跡	586	I 95号住居跡	706
I 62号住居跡	601	I 96号住居跡	712
I 63号住居跡	605	I 97号住居跡	716
I 64号住居跡	609	I 98号住居跡	717
I 65号住居跡	619	I 99号住居跡	725
I 68号住居跡	622	I 101号住居跡	727
I 69号住居跡	630	I 102号住居跡	730
I 70号住居跡	634	I 103号住居跡	734
I 71号住居跡	638	I 105号住居跡	741
I 72号住居跡	640	I 107号住居跡	747
I 73号住居跡	643	I 108号住居跡	749
I 74号住居跡	645	I 109号住居跡	756
I 75号住居跡	648	I 110号住居跡	761
I 76号住居跡	650	I 111号住居跡	762
I 77号住居跡	652	I 113号住居跡	764
I 78号住居跡	655	I 115号住居跡	766
第6章 成果と課題			768
第1節 上野国府の外郭構造と鳥羽遺跡の位置付けにむけて			768
別稿 鳥羽遺跡の神殿建築について		国立奈良文化財研究所 宮本長二郎	772
付図1 周辺地域地形図			
2 遺跡地形図			
3 遺跡全体図			
4 H1号掘立建物跡等高線図			

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

昭和前期の激動の時代を経験した我が国では、交通体系の近代化が時代的要請となり、その進展がはかられてきた。その中で道路網建設の一環として「国土開発自動車道計画」が立案された。これにより昭和32年に「国土開発幹線自動車道建設法」が公布され、いよいよ我が国も高速交通時代に入ることとなり地域産業の育成・地域間交流による新たな国土及び産業開発・文化の発展が期待された。

関越自動車道新潟線は、首都圏と日本海地域圏を短時間で直結する重要幹線道路として、昭和42年2月、「道路整備特別措置法・第3条」により建設大臣の事業認可がなされ、東京都練馬区内を起点とし、同時計画された北陸自動車道と新潟県長岡市内で結合する計画が実施に移されることとなった。群馬県下では、藤岡市・多野郡新町・佐波郡玉村町・高崎市・前橋市・群馬郡群馬町・北群馬郡吉岡村・渋川市・勢多郡北橋村・同郡赤城村・利根郡昭和村・沼田市・利根郡月夜野町・同郡水上町の14市町村が通過対象になった。

群馬県は我が国屈指の文化財保有県であるが、ことに埋蔵文化財については旧石器文化の初見や水田及び畑作遺構・大古墳群や官衛遺構・城郭など、多種多様にわたる様相を呈している。道路建設計画の実施にあっても、数多くの遺跡が路線内に含まれることになり、「文化財保護法」の理念に則して、文化財保護行為と開発行為との間で協議・調整がはかれてきた。

群馬県教育委員会では事業主体者である日本道路公園との協議を踏まえ、予定路線内の埋蔵文化財の分布調査を実施し、本県通過区間に55遺跡の存在を確認した。

鳥羽地域は、前橋市鳥羽町・同元総社町・群馬郡群馬町稲荷台及び塚田を地籍とするが、55遺跡の南から16番目の埋蔵文化財包蔵地で、鳥羽遺跡(KK16)と通称している。

当遺跡は、上野国府城との関連や古代七歳道の一つ東山道通過推定地として注目されていた地域である。路線距離約1,200m、面積79,400㎡が調査対象となった。

発掘調査に先立ち、昭和48年4月1日付けで、日本道路公園東京建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「関越自動車道新潟線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する了解事項」が交わされ、鳥羽遺跡の調査もこれに拠って、昭和53年4月より実施に移された。実施に際しては、日本道路公園東京第二建設局を委託者、群馬県教育委員会管理部文化財保護課を受託者として、委託契約が締結された。

なお、昭和55年度以降は、公益法人として設立された財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会よりさらに受託をし、調査を継続した。群馬県教育委員会は、文化財保護行政の視点から仲介及び指導を行い、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は、これを受けて調査の実際を執行した。

## 第2節 調査の方法

鳥羽遺跡は延べ6年間の調査期間を要し、その間には既述のように調査体制の変更が行われている。このため、調査方法においても多少の変更が生じている。そのうち最も大きな変更は方眼設定の基本軸である。

昭和56年度以前は関越自動車道建設地内の中心杭を選定してこれを結び基本軸とした。遺跡地の最南端の100m区画からそれぞれ対A～Oのalphabetを付して区名とした。各区は、設定された南北方向の基本線から遺跡地全域を覆う2m方眼の区画が設定され、各方眼の東西・南北線に数字を与え交差する南東点の数字の組み合わせをもってその区画の呼称とした。この方法をもって調査を実施した区はA～F区がその対象である。

昭和56年度以降は国家座標軸に則った方眼設定に変更されたが、南北方向への100範囲での区割りや区名称、及び2m四方の方眼設定とその呼称などの基本的な方法については従前のものに習ってこれを踏襲した。実際の調査に当たっては、昭和53・54年度に実施された試掘調査の所見を基に重機械による削平・排土を行った。削平の程度は、通常第3層とした浅間C軽石を混じえる暗褐色土の上面までとした。しかし、地点によってはこの限りではない。遺構の調査に先立ち、対象区域全体には東西6m・南北10m毎に杭を設けて基点を設定した。6×10mの範囲は遺構の20分の1実測の際に使用する方眼の大きさを考慮したものである。

遺跡地内及び周辺は、宅地化や耕地化が進み、当遺跡の土層厚は一様でない。自然堆積の状況が比較的良好に残されていると考えられるH区の土層堆積状況をもって、当遺跡の標準的土層堆積の説明を加える。

標準土層は、概ね次の5層に大別できる。I 耕作土層。II 砂質暗褐色土層(浅間B降下軽石混り)。III 暗褐色土層(浅間C降下軽石混り)。IV 暗褐色土層。V Loam層。

これらの層序の観察によれば、II 砂質暗褐色土層の下には部分的に浅間B降下軽石の純堆積(Ashと軽石Unit)あるいは純度の高い軽石の堆積が残される。中世を含め以降の遺構はこれらの層によって埋没し

ているが当既期遺構の検出にはIII 暗褐色土層の上面まで削平した。基本的にはIII層上面まで重機によって取り除いた。III層上面は主に平安期の遺構構築面とみなされるが、遺構埋土との識別が困難で、かなりの削平を要した。また、平安期の遺構でも、新しい時期のものは埋土上面に浅間B軽石層の堆積が認められている。奈良期の遺構は、IV 暗褐色土層上面で確認された。この土層は極めて粘性、締まりが強く、火山性の降下物の混入が少ない。遺構の埋土には、わずかながら浅間C軽石の混入が認められる。古墳時代の遺構はこのIV層中に検出されているが、遺構埋土には棒名二ツ岳降下火山灰層(FA)が堆積あるいは流入するものもある。

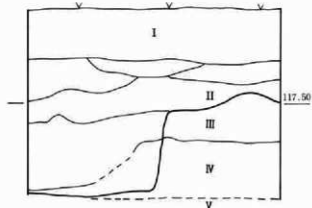


Fig.1 鳥羽遺跡基本層序



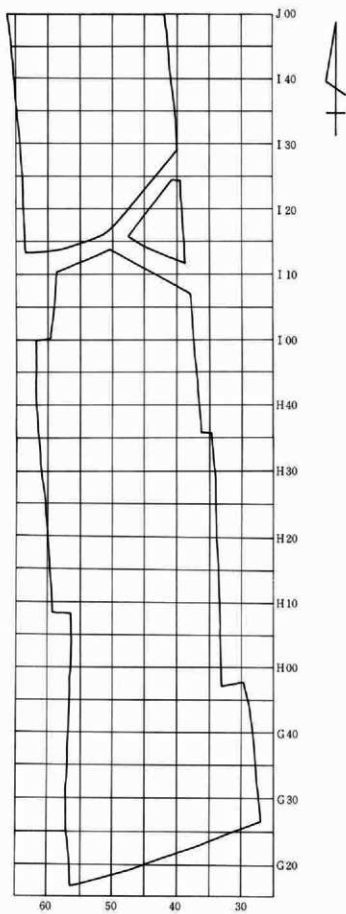


Fig. 2 G・H・I区方眼配置図

### 第3節 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、試掘及び本調査を含めて、昭和53年度当初から昭和58年度末日に至る6ヵ年を要した。調査は、用地買収に係る民間住宅等施設の移転・工事工程に係る工事用道路及び構造物設定箇所の取り扱い、生活環境の保全などについて、日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所と地元群馬町福荷台隣接住民との協議に則して進められた。

調査の具体的成果及び進行経過は当該項目で詳述するので、本節では各年度毎の調査を概観する。

#### 昭和53年度の調査

A区の一部とE区並びにF区の一部について調査を実施した。A区は、古道東山道の通過する地点と推定され検出が期待されたが、古道と断定される遺構は確認できなかった。ここでは東西に走り幅10mを超える大規模な溝跡を確認した。

E区ではその大半を調査し、堅穴住居跡10・溝跡5・井戸跡6・その他土坑を確認した。ほとんどが奈良～平安時代の所産である。溝のうち2例は同一の環濠遺構に伴うもので、二重構造となっていた。東辺・北辺・北東隅の各部分を調査したが、本年度中には内部施設の確認には至らなかった。濠内の堆積土の様相や浅間山噴出のB軽石が存在しないことなどから、遺構は中世以降の所産と考えられる。

F区では北半を調査し、堅穴住居跡40・掘立柱建物跡3・溝跡14・井戸跡12・その他土坑多数を確認した。掘立柱建物跡はいずれも3間×2間のものであり、長軸方向を東西と南北にもつものがあった。溝のうち1例はE区のものと同様、環状を呈すると考えられるが東半分が調査対象区域外となっているため、形状の確認には及ばなかった。この溝の北辺は東西に走る大溝と交差し、濠内の堆積土からE区の例と同様中世以降の所産と考えられる。

#### 昭和54年度の調査

B区の試掘及びD～F区の発掘を継続・拡張調査した。

B区は工事用土の仮置地とするため試掘にとどめ、本調査は用土の撤去後に行うこととした（実施は昭和58年度）。試掘の結果は、堅穴住居跡1・溝跡・畚跡などを確認した。A区で確認できなかった推定東山道は当区の試掘でも特定出来なかった。遺物は土師器・須恵器の他「八田小石次」の寛幅のある平瓦などが出土した。

D～F区では、平安時代の堅穴住居跡10・土坑多数を検出した。またE～F区にまたがって大溝・土塁を伴う中世館跡を調査した。館跡の内部には同時性については検討を要するものの、堅穴状遺構・柵列・墓跡・井戸跡を確認した。

#### 昭和55年度の調査

今年度より鳥羽遺跡は鳥羽Ⅰ・鳥羽Ⅱの2班編成とし、Ⅱ班がL～M区を担当することとした。

B区の一部及びC区では古代末から中世にかけての畚跡を中心に、平安時代の堅穴住居跡などを検出・調査した。畚跡は規則的な単位が認められ、条里制の規範に則したものと推定された。

E区の一部は過年度の継続調査により、中世館跡の溝部分についての調査を行った。

L～M区は年度末に試掘調査を実施したが、台地下は袋谷川の旧氾濫原であり、台地上のみ遺構が存在すること、遺構は奈良～平安時代にかけて集落跡を中心とすることなどを確認した。

#### 昭和56年度の調査

鳥羽Ⅰ班は過年度分の処理も含め、B～G区の調査を実施した。鳥羽Ⅱ班は昨年度の試掘調査結果に従っ

てL～M区の台地上を調査した。

B～G区の調査では、堅穴住居跡101・掘立柱建物跡4・中世の井戸跡25・平安及び中世の墓跡18・中世館跡（過年度報告）・鍛冶遺構・土坑多数を検出した。住居跡はG区においてその集中の度合いが高く、既調査区の中では最も著しい重複状況をしめしている。出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・風子硯・銅鏡などが検出された。墓跡は土坑墓・火葬跡・火葬墓など各種の形態がみられた。鍛冶遺構は中世以降のもので、土坑内に一括投棄された鋳型・炉壁片・鉾滓などが出土している。

当該地区は「金尾」の地名が残り、鍛冶あるいは鑄造に関係のある地区として注目される地域である。館跡は、二重に巡る方形の濠が調査され、東辺と南辺が明らかになった。なお南辺には横脚痕が検出された。濠内からの出土遺物には宝篋印塔・板碑・石臼などがある。

鳥羽II班は、4つの台地縁辺地形からなるL～M区を調査した。遺構は、縄文時代後期の堅穴住居跡1・古墳時代～平安時代の堅穴住居跡64以上・火葬墓1・掘立柱建物跡1・棚列跡1・土坑7・溝跡3などのほか、電の構架材採掘跡3地点を確認した。出土遺物には、遺構が未確認ながらも弥生時代後期の樽式・古墳時代初頭の石田川式の土器類が検出されている。奈良～平安時代にかけては多量の土師器・須恵器のほか石製丸靴及び巡方、銅製丸靴・和鏡などがある。

#### 昭和57年度の調査

本年度より2班体制を統合して、従来の1班体制での調査となった。調査区は、G区の北半部・H～K区の側道供用部及び構造物建造位置・昨年度鳥羽II班の継続部分のL区であった。H～K区間での側道供用部は全長約45m・幅6～8mの南北に長く東西が極端に狭い範囲となった。このため全容の把握には多少の困難があったが、重複の著しい大規模な集落跡であることが確実となった。その時代は、奈良～平安時代を中心に古墳時代より近・現代にわたる。

古墳時代の遺構は、主に堅穴住居跡であり20余りを検出・調査した。時期は前・中・後期にわたり、明確な間仕切り構造をもつ大形住居もみられた。

主流を占める奈良～平安時代の遺構は、堅穴住居跡300余・墓跡3・土坑多数が確認された。さらに、I区には鍛冶炉跡38が確認された。同区の未調査区域には炉壁片・羽口・鉾滓の散布が著しく、大規模な鍛冶関連遺構の存在が想定された。遺物は堅穴住居跡に伴う土器類のほか、鉄器・石器が多量に出土している。I区では前記の羽口のほか、小型砥石類の出土が顕著であった。

鎌倉時代以降は、大小の溝21・掘立柱建物跡1・井戸跡7（近・現代の井戸跡8を除く）・墓跡2・土坑多数があった。溝の中でG・Hを画するものは、幅10m余・深さ2mであった。墓跡のうち1基はI区の南端に位置し、一辺8mの方形に巡る溝を伴っていた。主体部は伸展土葬で、遺骸は北枕西顔である。墓坑の上面、遺骸の上半部分にあたる範囲は小円礫が敷き詰められている。削平のため遺存はしていないが盛土の存在も想定された。

L区の電構架材採掘跡からは、採掘方法や規格の異なる数種類の用材が採掘されていたことが窺い知れた。

#### 昭和58年度の調査

発掘調査の最終年度にあたり、工事用土の仮置きを行っていたB区の本線部分、H～K区は構造物に次いで本線分の調査を実施した。B区では、平安時代の堅穴住居跡9が検出されたが、主体は畠の畝間遺構であった。畝間の方向から3区画の地割り耕作状況が想定できた。

H～K区では、前年度の側道供用部等の調査結果を踏まえて、各区ごとに対応を計った。

古墳時代の堅穴住居跡は、あわせて31棟であった。遺跡内でのまとまりはなく散在していたが、北部のJ

第1章 発掘調査の経過

～K区に比較的多く存在した。

奈良～平安時代の遺構は、本年度分で堅穴住居跡219・掘立柱建物跡3に及んだ。これらはJ～K区に最も集中し、I区はこれに次いだ。I区では昨年度に引き続き鍛冶遺構が検出された。これらは、長軸約15m・短軸約7mの堅穴状遺構内に炉を整然と配したもので、生活施設はなく純粋な工房跡であると考えられる。当区の堅穴住居跡からは磁石が多量に出土しており、地区的特色となっている。H区では、次章以降で詳述する特殊な掘立柱建物跡が検出された。三重の周濠と一重の垣に囲まれた建物跡であり、多量な須恵器遺類が出土した。祭祀関連の遺構であることが想定されている。

鎌倉時代以降は、溝8・墓跡6・井戸跡25などが検出されている。

実施年度	調査主体	実施期間	面積	対象区	備考
昭和53年度	群馬県教育委員会	(1) 53. 4 (2) 53. 8. 1～53.12.23	(1) 1,000㎡ (2) 9,575㎡	(1) A (2) E～F	「関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査概報VI」 「月報 鳥羽」
昭和54年度	群馬県教育委員会	54. 7. 2～55. 3. 21	4,600㎡ 試掘 16,200㎡	D～F B～C	「月報 鳥羽」
昭和55年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	I 55. 5.11～56. 3 II 56. 1 ～56. 3	I 6,500㎡ II 1,700㎡	I B～C II L～M	「財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報I」
昭和56年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	I 56. 4.15～57. 3.25 II 56. 4.14～57. 3.25	I 12,000㎡ II 5,000㎡	I B～C・G II L～M	「財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報I」
昭和57年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	57. 4.28～58. 3.25	12,332㎡	G～K L	「財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報II」
昭和58年度	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	58. 4.21～59. 3.31	26,893㎡	B H～K	「財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報III」

## 第2章 鳥羽遺跡の立地と歴史的環境

## 第1節 立地

鳥羽遺跡は群馬県前橋市鳥羽町・元総社町・群馬郡群馬町におよぶ地域にある。前橋市の西方約3.5kmに位置し、市街地を形成する地帯である。

遺跡の立地する地域は大きくは前橋台地と呼ばれ洪積層からなる。台地の構成基盤層は火山泥流の堆積物でいわゆる前橋泥流の堆積面である。上層には水成上部 Loam 層、黒土(表土)層が順次堆積する<sup>(1)</sup>。台地の北東縁は前橋市域の中央部を形成する広瀬川低地帯(沖積低地)と接している。この前橋台地は台地を南北に貫流する利根川によって左右に分断され遺跡地はその右岸にある。榛名山を北西方向に望みその東南麓に広がる裾野の火山灰台地がようやく傾斜角度を減じ平坦面をなさんとする辺りに存在する。

榛名山麓に源を発し、並列するように流れ下る午王頭・八幡・牛池・染谷川などの中小諸河川は火山灰台地を細長く区割りして幾筋もの微高地を造り出している。

鳥羽遺跡はこれら諸河川の一つの染谷川の右岸にあり、この川によって形成された段丘上に立地している。地形的に北から南へ緩い斜傾を示し、南北に長い調査地域は標高115~120mの間にある。遺跡地の南端は榛名山の火山灰台地の端部にあたり、これより南は大きく開く平野部に臨んでいる。

遺跡が占地する一帯の地質は半凝固した凝灰岩質層がほぼ普遍的に存在する。この層は遺跡内の堅穴住居に設けられる竈の用材として多量に切り出されている。これは前橋台地の基盤層である前橋泥流層と水成上部 Loam 層中に挟まれる前橋泥炭層の間に介在するものである。1~2万年前の生成であり、内容物の純度が高く短期間の堆積物であろうとされている。またこの種の層は河川に沿って存在することも特徴的である<sup>(2)</sup>。

この凝灰岩質層の分布は、遺跡の南端では急激に落ち込む状態で水成 Loam あるいは黒褐色腐植土の厚く堆積する湿潤性の低湿地域に変化する。また同じような湿潤帯は遺跡地の南西方向に深く北に向かって入り込む。東側は染谷川によって遮られ、ちょうど舌状台地の体をなしている。

前橋泥流層の堆積以後平坦化した前橋台地は排水系の消失したことによる湿潤化の過程でも、この層の流出あるいは短期間の堆積による高所の出現は鳥羽遺跡における遺構の構成内容にもかなり色濃く反映しているようである。

遺跡地の南部に低地帯を抱えながらも、この地は比較的乾燥化の傾向があり現在では耕地のほとんどが桑畑として利用されている。一方で、地下水位は高く地下2~3mで滞水層に行き着く。鳥羽遺跡の遺構密集度からみても住時から地形・地質の選択は的を得ていたようである。

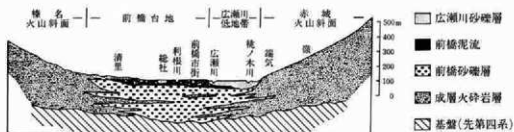


Fig. 3 前橋市の模式的な地質断面 (『前橋市史』転載)

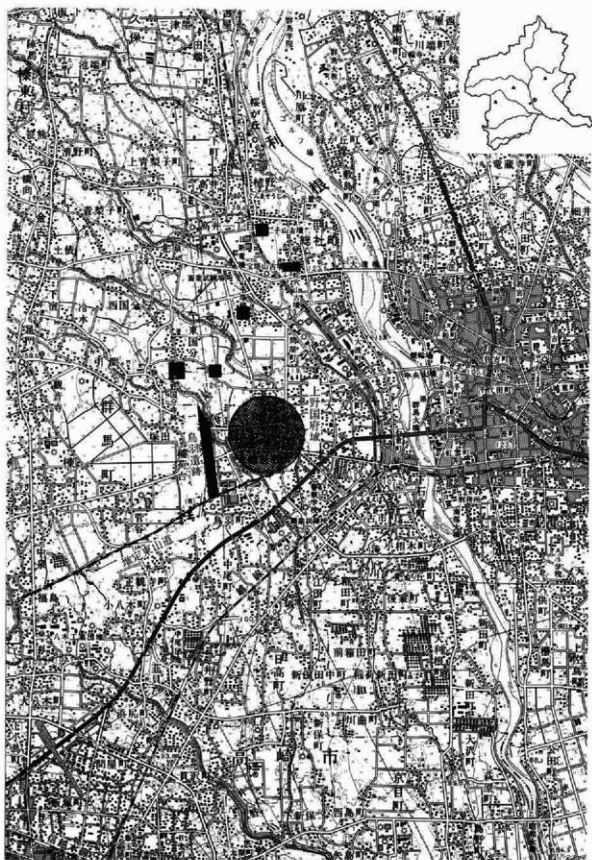


Fig.4 鳥羽遺跡周辺の遺跡

1:50,000

## 第2節 歴史的環境

鳥羽遺跡は昭和53年より調査が開始され昭和58年までの5年間にわたって実施された。遺跡地は調査当初より古代七道の一つ東山道の検出が期待され、また上野国府城の西城を構成する地域として注目されていた遺跡である。遺跡の東を北から南に流れる染谷川の対岸間近には推定国府跡が、さらに北方約1kmには上野国分寺の僧寺・尼寺が存在している。

鳥羽遺跡の位置する利根川右岸一帯は、榛名山東南麓の火山灰台地を流れ下る幾筋かの河川によってそれぞれ独立するように区画された微高台地が形成されている。これら台地には古墳時代終末から奈良・平安時代にかけて古代文化が一斉に華開き、上野国の中枢の地になった。古墳時代が幕を閉じようとするころ、中央畿内と軌を一にするように卓越した石工技術を駆使した巨石建造物が出現し、来るべき律令社会体制への政治的・文化的背景が準備された。仏教文化の強い影響が窺われる宝塔山古墳とともに精美な切石工法の蛇穴山古墳や県内最古の寺院跡の一つに数えられ、白鳳期の建立といわれる山王廟寺の建造物は古墳時代の最後を飾り、これ以後展開される上野国古代史上において新世紀の幕明けを告げる存在である。

鳥羽遺跡の中心的時代背景は8世紀から11世紀の後半である。遺跡の形成は古墳時代の前半から徐々に開始され近・現代まで連続と続く複合遺跡である。遺構の構成は800余軒におよぶ竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡・井戸跡・墓跡・溝・さく状遺構・中世館跡・古代および中世の鍛冶関係遺構などこれらに伴う遺物とともに多種・多彩にわたっている。とくに8世紀から9世紀にかけて操業が行われたと考えられる4基の大規模な鍛冶工房跡の存在は注目に値する。その活動時期や立地からみても当然のごとく国府の政治的意を受けて組織・運営された付属工房跡の性格が看取される。また関連遺構から鉄製釘類のほか増埒・鋼板などの鋳鋼製品の発見もあり銅製品の生産も同時に行われていたことが窺われる。天平十三(741)年に発せられた国分二寺創建の詔に始まる建立の活動に何等かの係わりをもっていた可能性が十分に考えられる。さらに、鍛冶工房跡の南、わずかな距離を隔てこれと近接した時期に存続していたと考えられる特殊建造物が存在する。これは三重の壘と一重の柵列に囲まれた掘立柱建物跡である。国府城を目指し東面する構えであり、現在推定されている国府城のほぼ南辺延長線上、国府城南西に位置する遺構である。

このような諸遺構によって構成される鳥羽遺跡の歴史的位置付けには、律令制社会の具現的存在である上野国府の構造的な解明とともに国府体制によって遂行された政治・経済・文化的な諸事象を背景に据えない限り、的確な結論は導きだすことはできない。裏返せば、鳥羽遺跡のもつ属性の抽出は国府城の構造、とくにその外郭景観を鮮明に浮かび上がらせることになると考えられる。

ここでは鳥羽遺跡の置かれている歴史的環境を明らかにするため、密接に関係すると思われる上野国府をはじめ、国分寺などの周辺遺跡とともに古社についての様相を概観する。

### 1. 周辺の遺跡

鳥羽遺跡の北方の総社古墳群は6世紀代にその形成が始まり、前半ごろの王山古墳から後半の総社二子山古墳など70~90m級の規模の古墳が築造される。古墳群中その初期に位置づけられる王山古墳の石室は自然石による乱石積み両袖型横穴式で、その長さは県内でも最大級の規模をもつ。前方後円墳の総社二子山古墳は前方部と後円部にそれぞれ横穴式石室が構築されている。前方部・後円部の石室はともにその一部に巨石<sup>(3)</sup>が使用され、壁石には加工痕が残される。

総社古墳群の本格的巨石文化は、宝塔山・蛇穴山古墳の出現によって展開される。宝塔山古墳と蛇穴山古

墳は総社町総社字町に所在している。ともに破壊が著しく旧態は全く失われているが大形の方墳および円墳とされている。石室は截石の切積積み工法によるもので、用材は硬質の角閃石安山岩・輝石安山岩などを用い、その精美な作りは当時の最高の石材加工技術をもって構築されたものといわれる。また複室構造の両袖型横穴式をもつ宝塔山古墳には脚部が格狭間に切られた家型石棺がある。これも輝石安山岩を使い、石室同様見事な作りである。この両古墳には畿内飛鳥時代と軌を一にするような巨石建造物の展開が行われ、さらには石棺に施された格狭間の意匠は明らかに仏教文化あるいは仏教そのものが色濃く表現されているといつてよいであろう。これから述べる山王廃寺の石製騎尾・根巻石などの石材加工法とその技術の共通性から深く関連するものとされている。<sup>(4)</sup>

山王廃寺は総社町総社字昌葉寺廻りに所在する。塔の芯礎と塔基壇の一部が遺されるが寺域や伽藍配置・規模などは不明であった。しかし塔心礎の規模や伝えられる高さ1mを越す一対の騎尾、花卉をかたどった根巻石などの大きさから壮大な伽藍が考えられている。

昭和49年以來7次にわたって前橋市教育委員会によって調査が実施され、新しい発見が多くなされている。それによれば一辺約200mの寺域の範囲が確認されている。また「放光寺」の寫書きや刻印のある瓦が発見されている。この瓦によって山ノ上碑文に記載される放光寺との関連が注目されている。その他出土遺物には緑釉水甕・椀・皿・銅椀・塑像小仏頭などがある。創建期に関しては出土した瓦に素弁八葉蓮華文をもつものがあり白鳳期7世紀後半に考えられている。<sup>(5)</sup>

宝塔山古墳・蛇穴山古墳との関係については尾崎喜左雄博士の研究によって、宝塔山古墳・蛇穴山古墳の石材加工とその構築技術の共通性から同一石工人集団によるものとされている。<sup>(6)</sup>

これら巨石建造物や寺院建築の展開はその技術的・思想的な面で、大化の改新後施行される律令体制社会への大きな背景としてとらえられる。

上野国府の位置については、前橋市元総社町が充てられているがその実態については明らかではない。国府の研究はまず地名の考証から始まった。元総社町に鎮座する総社神社を中心に東方域に遺る石倉・大友・古市などの地名と西辺を区切る袋谷川に囲まれた地域が設定された。その後昭和36年ごろから推定国府城内での調査が行われ、以後昭和43年まで続けられた。しかし8世紀代のもとのみられる数棟の掘立柱建物跡の検出に止どまり、官衙関係の遺構が想定されたのみで国府に直接拘わるような遺構の発見はされていない。国府城に関しては多くの研究者によって方六町説、方八町説などが発表されているが、いずれも従来の地名を中心に散布する遺物からの間接的追及で未だ定説の確立には至っていない。<sup>(7)</sup>

昭和57年・58年の前橋市教育委員会による発掘調査によって東辺と北辺の国府城を面すると考えられる大規模な溝の検出があいつぎ、現在のところ方八町の国府城が想定されている。しかしながら国府中心部は密集する民家や中世の蒼海城築城による破壊が著しくその実態はいまだ不明な点が多い。<sup>(8)</sup>

園分二寺は群馬町東園分から前橋市元総社町にかけての地域に所在する。伽藍配置は東大寺様式と考えられており、南大門・中門・金堂・講堂・塔などの位置は比較的明瞭に遺されている。尼寺は僧寺の東方にあり、昭和45年の調査によって講堂跡をはじめ金堂・中門などの検出・確認が行われている。

園分寺の創建は明らかではないが『続日本紀』の叙位記事などから8世紀中頃に建立されたとする説が有力である。昭和55年度から始められた保存整備事業に伴う発掘調査によって金堂などの構造や寺域の確定が進められている。また、重複する壱式住居跡の年代から11世紀の後半には園分寺としての実体は失われていたという調査結果が得られている。<sup>(9)</sup>



## 註

1. 新井房夫「地形・地質」『前橋市史』第1巻 1971
2. 群馬大学 新井房夫氏の御教授による。
3. 尾崎喜左雄「豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』第1巻 1971  
 総社古墳群にはこのほか、前方後円墳の通見山古墳(72m)、円墳の愛宕山古墳(50m)などが存在している。愛宕山古墳は横穴式石室に輝石安山岩の巨石使用がなされ、石室は家型石棺で覆岩石製とされる。形態は宝塔山古墳の石棺に類似するとされるが、石室用材の使用傾向が加工しやすい凝灰岩から堅い安山岩へ移るとされ、安山岩使用の宝塔山古墳より前出とされる。その構築年代は7世紀初葉が考えられている。
4. 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」吉川弘文館 1966  
 「蛇穴山古墳調査概報」文化財環境整備事業に伴う発掘調査 前橋市文化財研究所 1976
5. 「山王庵寺跡第1次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1975  
 「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1976  
 「山王庵寺跡第3次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1977  
 「山王庵寺跡第4次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1978  
 「山王庵寺跡第5次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1979  
 「山王庵寺跡第6次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1980  
 「山王庵寺跡第7次発掘調査概報」前橋市教育委員会 1981
6. 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」吉川弘文館 1966  
 山王庵寺・宝塔山古墳・蛇穴山古墳について、①根巻石は金堂に伴う。②石造物の使用尺度は高麗尺。③伽藍建造は金堂から塔の順。④石造物は技法的にはいくつかの根巻石からよくみられる塔心礎。⑤宝塔山・蛇穴山古墳と山王庵寺の建造順は山王庵寺の根巻石は宝塔山の石棺がほぼ同時期。蛇穴山石室が築造された後、塔心礎が置かれる。この間、金堂の建築が進められ宝塔山古墳が築造された。⑥石製銅鏡は百濟大寺のものを探し、塔心礎は本義師寺東塔・義師寺西塔の心礎から変化したものである。⑦根巻石を伴う金堂から塔の建造時期は、両古墳の築造と並行して行われ、大化の改新から天平2年の間とする。  
 津金沢吉茂「古代上野国における石造技術についての一試論」『群馬県立歴史博物館紀要』四号 1983  
 津金沢氏は山王庵寺の根巻石について、尾崎喜左雄博士の研究を踏まえ、さらに精密な観察を行っている。加工技術の検討・同時期寺院の石造物・宝塔山古墳の石室・石棺との比較、使用尺度、さらに根巻石の性格にも言及する。それによると、①適用尺度を得たもの計量値が必ずしも想定通りでない。②根巻石は金堂ではなく塔心礎に巻いたもので塔心礎と一緒になる。③建築工程として塔心礎が根巻石より新しいものではない。などの疑義をあげ、年代観に再検討を求める。氏は年代観を、根巻石・塔心礎が作られた時期は塔の建設を意味するものとする。新たな年代観の根拠として、塔の心礎の形を飛鳥寺の心礎に求め、敷石列柱の配置の意図(共通性)から山王庵寺の塔の建設時期がさかのぼる可能性を指摘する。また実際の年代観として、「放光寺」跡のある土出土から上野の碑との関係をもって、681年には金堂・塔などの主要伽藍は築いていたと推定されている。
7. 上野国府に關連する研究にはつぎのような議論がある。  
 郡木正作「国府政庁の跡について」『上毛及び上毛人』第120号 1927・近藤義雄「上野国府の所在地について」『史学報』第1号 1947・「上野国府について」『上毛史話』第5号 1954・「上野国府をめぐる地名」『史学会報』第1巻第1号「信濃」第33巻第2号 1961・金坂清洲「上野国府とその付近の東山道及び群馬、佐位郡家について」『歴史地理学紀要』16 1974・松島栄治「上野国府」『歴史公論』10 1976・峰岸純夫「東道—東山道の復元—」『佐渡郡東村誌』一寛一 川原嘉久治「推定上野国府跡地—寛文書き試み1」『鳥羽遺跡月報』1616 1980
8. 尾崎喜左雄「横穴式古墳の研究」吉川弘文館 1966  
 「上野国府跡発掘調査概報」前橋市教育委員会 1966  
 「上野国府跡発掘調査概報」前橋市教育委員会 1967  
 「上野国府跡発掘調査概報」前橋市教育委員会 1968  
 尾崎喜左雄「国府跡推定地の発掘調査」『前橋市史』第1巻 1971  
 「元総社明神遺跡Ⅰ」土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財調査概報 前橋市教育委員会 1983  
 「元総社明神遺跡Ⅱ」土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財調査概報 前橋市教育委員会 1984
9. 「上野国分寺跡発掘調査報告書」群馬県教育委員会 1970  
 「上野国分寺周辺地域発掘調査報告書」群馬県教育委員会 1971  
 「上野国分寺寺域縁辺の調査」群馬町埋蔵文化財調査報告書第1集 群馬郡群馬町教育委員会 1975  
 「上野国分寺隣接地域発掘調査報告」1973  
 「史跡上野国分寺跡—寺域確認発掘調査概要—」群馬県教育委員会 1980  
 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要」2 群馬県教育委員会 1981  
 東大門付近で検出された竪穴住居跡(SJ02・03・04・07)は10世紀末から11世紀前半にかけてのものと考え、また削平された築垣基壇上面に浅間山B群石層の純地層が確認されるなど『上野国交特異誌録』の記事に符号するものとして国分寺の在り方が注目された。  
 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要」3 群馬県教育委員会 1982  
 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要」4 群馬県教育委員会 1983  
 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要」5 群馬県教育委員会 1984  
 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要」6 群馬県教育委員会 1985  
 塔跡の南西部で検出された竪穴住居跡(SB12)は8世紀前半—中葉の竪穴住居跡を切つて構築されている。この竪穴住居跡跡は、塔などの遺構に關連して設置された施設の可能性が考えられている。これは「純日本紀」天平勝元年(749)の叙位記事に關連して、このころに国分寺が一定の完成をみたものと判断されている。また東大門周辺の調査情況と同様に南大門周辺の調査においても其敷布面に浅間山B群石の純層が確認され、築垣・各面の大門は、11世紀初頭までには全境でつくりおきられたと推定されているとされる。

## 2. 国府周辺の古社について

本稿は鳥羽遺跡に検出され、神社址として推定された特殊建築物遺構との関連で、「上野国神名帳」を始めとして、「蒼海城古図」<sup>(2)</sup>、「群馬県群馬郡村誌」<sup>(3)</sup>、「群馬県神社輯覧」<sup>(4)</sup>記載の神社名、祭神名を軸に、国府周辺古社の趨勢と性格の検討を依頼され、それを受けての現況報告である。

古代における神社の性格は、自然神の崇拜に始まり、ともに生活を営む同族の氏神へと派生し、やがて集落の共同神から鎮守神として祀られるようになる。古社名の存在は、旧時において祭祀を執り行う住民や、工人達の集団的在り方を示すものが多く、中には律令機構の一端を示すものも見られるようである。

律令制下における地方圏の政治・経済・文化の中心は国府で、国司政治に深く関る神社のまづりは祭政一致による民衆等の思想支配の理念に基づくもので、国司の任務に見る祠社はそれをよく表わしているが、平安時代末期になると律令政治体制の形骸化から、国司の巡拝祠社も省略され、国内の諸社を一ヶ所に集め祭政を行う神社として総社が発生する。したがって総社は国府郭内やその周辺に祀られる場合が多くなっていくが、総社成立の背景には在地有力者の存在と、その影響力は当然大きく被さってくるもので、国府周辺古社の性格には、国府を支えた在地有力者の思想と、律令政治機構との繋がりを有するものと考えられよう。

以下、表-1により、既説や新知見を合せて、諸社の概要を述べることにする。

## ① 総社神社（蒼海大明神・惣社大明神。旧泉社）（前橋市元総社町字屋敷）本殿・累重文

推定上野国府のほぼ中央、鳥羽遺跡神社址の東約1.1kmの位置に鎮座、神事として簡粥式、火炭式を行う旧泉社で、創建年代は平安時代末期頃と推定されている。社伝によると崇神天皇の代、豊城入彦命の上野国入国の折に武神経律生命を奉祀し、後に親神の磐筒男神・磐筒女神を合祀、③宮鍋の地に社殿を建立したとあり、安閑天皇代には上毛野小熊の社殿改築を期に、郷名の蒼海に因み蒼海大明神と称したとある。

正平6年(1351)に長尾忠房が宮之辺(③宮鍋)の地に蒼海城を築いたが、永禄9年(1566)北条・武田の戦火により総社神社と蒼海城は灰燼に帰し、その後元龜年間の1570年頃①の現在地(無記銘青銅製雲板、室町期の板碑などが出土。隣接の徳藏寺境内には平安時代末期の瓦が散布する)へ本殿を再建したものと伝えられるが、本殿は木造三間社流造で、唐様の組物など戦国・桃山風の建築様式を見る。

上野国総社神社で、最も重要な意義をもつものに「上野国神名帳」がある。巻子仕立てで紙幅27cm、長さ4mで鎮守神10座と、上野国内の549座が攝社として記載されているが、神名帳は、律令国司による国内諸社巡拝の省略化などにより成立した総社の実体と、上野国における有力氏族間の勢力圏など信仰の実状をよく表わしている。神名帳はその奥書に永仁6年(1298)とあり、貞和4年(1348)と、弘治3年(1557)の二度に亘る書写を経て現在に伝えられているが、当初99座を合祀したとする伝記もあり、神名帳原本の作製は、永仁6年(1298)以前に遡る可能性も考えられる。

また、神名帳のほかに、天正14年(1586)銘の「御正体・弥勒菩薩」と、天正17年(1589)銘「惣社大明神」普賢菩薩の懸仏二面を社宝として蔵するが、神名帳に見る総社神社の「本地仏・弥勒菩薩」及び、懸仏・弥勒菩薩と、鳥羽遺跡における地名弥勒との関係は最も重要な意味を示すものと考えられる。

## ② 御霊神社(従四位下学校院若御子明神) (前橋市元総社町字屋敷、通称 別当)

「上野国交替実録帳」<sup>(5)</sup>に荒廃した学校院や神社などの記載がある。また、「上野国神名帳」群馬西部に「従四位下学校院若御子明神」の記載がある。さらに「蒼海城古図」には、学校院若御子明神と五堂社が並列して図示されている。鎮座地の通称別当は蒼海城本丸跡の西北隅に近接する小範囲にあるが、その一部の小さい所に御霊神社がある。この社殿の背後に伝学校院若御子明神の石宮が鎮座しているが、古くから東覚院と

言う名称も残されている。この鎮座地は、国学の跡地に関連し、神名帳の従四位下学校院若御子明神の鎮座地として推定されているが、総社神社の旧社地と共に重要な位置を占める神社である。

⑤ 宮鍋社（総社神社の元宮）（前橋市元総社町字屋敷、通称 宮鍋、宮之辺）

宮鍋社の西200m余りの位置は、②の学校院の鎮座地である。宮鍋社と学校院を結ぶ線の中央北側は、推定上野国府の中枢部に考えられる通称長谷川（序屋の変化した名称）に当る地である。

この宮鍋社周辺では、近年筆者による表面採集踏査で羽口片や鉄滓等を多数採集したのであるが、このことと神社名、祭神（経律主命）などの性格から、当宮鍋社は、叡治神の性格をもっていたものと考えられる。

④ 鏡宮神社（従三位大伴明神）（前橋市大友町字村内）

鏡宮神社は前橋市大友町に鎮座するが、地名称の大友から、国府守護軍団と大伴氏との結び付きが考えられ、「上野国神名帳」群馬東郡記載の「従三位大伴明神」に擬定されている。しかし大友の西に接する推定上野国府東縁中央部東門附近の前橋市総社町集島分に⑭、⑮の赤鳥明神（祭神建角身命）が鎮座していたことは「蒼海城古図」により明らかである。この祭神建角身命（八咫鳥）は、紀・記神武紀により中州平定軍の統率者である日臣命を通じて大伴氏と結ばれる経緯を窺うことができる。したがってこの地域こそ大伴氏に深い関わりをもつ地として考えられ、従三位大伴明神は、⑮の赤鳥明神であると言ふことになる。

⑤ 鏡神社（従五位下鏡明神）（前橋市江田町字宅地）

「上野国神名帳」群馬東郡所載の「従四位鏡明神」に比定される。この鏡神社の鎮座地は、筆者推定上野国府東縁・東縁の交点の真南1,800m程の位置にあたり、この線を南北の直線で延長すると、鏡神社一国府東縁一宝塔山古墳を結ぶ線となり、国府造宮との関連も考えられる。詳細不明、社室に一面の鏡がある。

⑥ 鏡宮神社（従五位大友明神？）（高崎市小八木町字宮巡）

鏡宮山光明寺別当を伝承し、祭神天懸神を通じて④の鏡宮神社の同性格が考えられ、「上野国神名帳」群馬東郡記載の「従五位大友明神」に擬定されても地名称とは結びつかないが、「和名抄」所載地名の八木に因めば小八木は古八木とも考えられよう。附近には小円墳が10数基存在し、古社的要素は備えている。

しかし、大友明神については地緑色の濃い社名と考え、その鎮座地を前橋市大友町に求めたところ、幸にも明治10年（1877）の『群馬県群馬郡村誌』の中に、前橋市大友町字諏訪台鎮座の②諏訪上下社境内社の中に地主神大友社を見つけることができた。⑥鏡宮神社（高崎市小八木町）と、②地主神大友社（前橋市大友町）の鎮座地「和名抄」所載「群馬久留木国分を東西二郡、新中開郡」の記事で見ると、②地主神大友社は明らかに群馬東郡に鎮座していることになる。したがって、地名と、「和名抄」による郡界を考えた場合、②による地主神大友社を、「上野国神名帳」群馬東郡記載の「従五位大友明神」として推定し得ることもなる。

⑦ 妙見社（本地・妙見菩薩）（従三位息災寺小祝明神）（群馬郡群馬町引間字妙見）

国分寺（僧寺）の西南100m余り、推定国府跡の西北1.1kmの地に位置する。上野妙見寺の初見は、『続日本紀』宝龜8年（777）8月条の「妙見寺 上野ノ国ノ群馬ノ郡ノ五十畑ノ美作ノ国勝田ノ郡ノ五十畑ヲ捨ニ妙見寺」の記録であるから、その建立時期はさらにそれよりも遡ることができよう。

北斗七星を神格化し、本尊を北辰菩薩とする北辰祭制度に起こり、その功德の祭文は「朝野郡載」に記載されるが、国府設置などについては、特に国土擁護、災害滅除等風水思想による占いで官衙地区などの構築が行なわれたことと考えられ、いわゆる星占の神の聖殿として妙見社がこの地に祀られた意義は大きいのである。

現在、妙見神社参道中央正面に拝殿を彷彿させるように妙見堂があり、その後には妙見社本殿が建っているが、現妙見寺の山号は七星山息災寺として伝えられ、息災寺の鎮守神として小祝神社があてられている。こ

## 第2章 鳥羽遺跡の立地と歴史的環境

の両者を合わせ「上野国神名帳」群馬西郡記載の「従三位息災寺小祝明神」に比定されるものである。

### ⑧ 小祝神社（本地・妙見菩薩）（従四位上小祝明神）（群馬郡群馬町冷水川窪）

「上野国神名帳」群馬東郡記載の「従四位小祝明神」に比定され、祭神は医薬に關連した少彦名命であるところから、位置的に近接した国府・国分二寺などの施業・医療神的可能性がもたれる。現小祝神社は、染谷川の旧河川敷に「妙見宮乳母神、小祝神」の文字を刻んだ宝暦四年（1754）銘の小さい石宮を残すのみである。

### ⑨ 胸形神社（従四位下胸形明神）（群馬郡群馬町棟高字南八幡街道）

宝暦2年（1752）八幡宮の棟札をもち、旧社名を八幡宮とするが、本来の主神を宗像三神とするところから胸形神社と改められた。また地名の棟高も宗像の変遷によるものと言われ、北九州地方を中心に信仰圏をもつ宗像神が、国府から比較的近い当地に祀られている状況は、古代上野国の有力氏族と、北九州地方の宗像神信仰氏族との関係を探る上で格好な基礎資料となるものである。したがって「上野国神名帳」群馬西郡に見る「従四位下胸形明神」が当社にあたるものと考えられている。

### ⑩ 熊野神社（従三位大奈知明神）（群馬郡群馬町西国分字葉師巡）

紀伊国の熊野三所権現の分祀と言われ、尾崎博士は「熊野三所権現の那知早玉明神の本地仏薬師と、西国分字葉師巡の地名共に共通点があるところから、西国分の熊野神社は那知明神を祀ったもの」と推定した。

なお当社は、「上野国神名帳」群馬西郡所載の、「従三位大奈知明神同小奈知明神」の二説をもついわゆる論社であるが、いずれにしても古社的性格をもっていることは疑いない。

### ⑪ 神明宮（正五位下高井明神）（前橋市高井町字桃木）

現地名称と神名称が一致する条件は前橋市高井町桃木で、当所の神明宮を古社として考えられなくはないが、高崎市柴崎町の進雄神社近くに高井明神の塚を称する場所があって、その境内に左井・右井・高井の三井が近年まで残されていた事実もあり、今後の研究成果によらなければならぬ。

### ⑫ 三宮神社（正五位上伊賀保別大明神）（群馬郡吉岡村大字大久保字宮通称 清祭）

御神体に本地仏の十一面観音を安置している。社名の三宮は上野国十二社の古名に因む名称でなく、三主祭神によるものなどと言われている。社伝による勧請年代は天平勝宝2年（750）とされ、「上野国神名帳」群馬東郡「正五位上伊賀別大明神」として比定されているが、8世紀代の上野国律令制支配に直接影響を与えていた在地豪族、有馬氏の崇拝した神社であってその鎮座地は重要な意味をもつものと考えられる。

### ⑬ 巢鳥明神（正五位抜鉾若御子明神、⑬の旧社地）（前橋市総社町巢鳥分）

巢鳥神社は現在社宝として木彫りの四神像を蔵しているが、これの旧社地は「蒼海城古図」によると推定上野国府の東縁中央の100m程南寄りに図示されている。前出⑩の赤鳥明神と共に国府東門の守護神の状況を呈しており、その祭神は石上・物部氏系信奉の経律主命である。「上野国神名帳」群馬東郡に「正五位抜鉾若御子明神」に擬定しておきたい。特に当巢鳥神社の社宝、木彫り四神像は重要な意味をもつものである。

### ⑭ 丁間稲荷（正五位上小河原明神）（前橋市総社町字稲持塚）

神社の近くに小河原の地名のあるところから「上野国神名帳」群馬西郡の「正五位上小河原明神」に擬定。

### ⑮ 天神様（⑮菅原神社）（前橋市元総社町字天神）

推定上野国府南縁に沿い、南北の中軸近くにあった神社で、国府天神との関わりが考えられる。詳細不明。

### ⑯ 美留目明神（美留目神）（高崎市中尾町字原）

社名の美留目は、「延喜式神名帳」所載の、攝津国八郡部の没亮神社に充てられる敏馬神社の敏馬の変化し

た古社名である。中尾町的美留目明社の鎮座地は国分僧寺東辺の南端から2.4km程の地に当り、そのほぼ中央近くに鳥羽遺跡の主要遺構を置くが、美留目明神の俗称こおり様と合せて、当社を古社として考えたい。

㊦ 八幡宮（国府八幡？）（前橋市本町2丁目）

現利根川を隔てた前橋市の中央にあたり古墳上に鎮座するもので前橋市の総鎮守。社殿が国府の方へ向いて建てられているところから、国府八幡の推定論もある。勧請年代は貞觀元年（859）と伝えられる。

おわりに

以上のように、国府周辺には古社性格と特色を有する神社が数多く鎮座するが、国府に限定して見た場合、国府郭東・南・北に比べて西縁地域では蒼海城古園に稲荷神社㊤及び、元総社村古絵園に西川稲荷神社㊦の記載は見られるが古社存在の状況を見ることができない。このことは神社の消滅・移祀などによる結果の表われとして受け上めることもできよう。以上現資料による追究を以て資としたい。

川原嘉久治



Fig.5 鳥羽遺跡周辺の神社

第2章 鳥羽遺跡の立地と歴史的環境

表-1 「国府周辺の諸社・祭神と鎮座地」

No.	神社名	主な祭神	推定古社名他	鎮座地
①	総社神社	経津主命他	惣社大明神	前橋市元総社町字屋敷
②	御霊神社	上毛野田道他	從四位下字校院若御子明神	(通称: 別当)
③	宮鍋社	経津主命	總社神社の旧社地	(通称: 宮鍋・宮之辺)
④	鏡宮神社	天懸神他	從三位大伴明神?	前橋市大友町字村内
⑤	鏡神社	石坂魂命他	從五位下鏡明神	前橋市江田町字宅地
⑥	鏡宮神社	天懸神	從五位上大友明神?	高崎市小八木町字宮蓋
⑦	妙見社	天之四斗主神 (兼三・妙見菩薩)	從三位息災寺小祝明神	群馬郡群馬町字関字妙見
⑧	小祝神社	少彦名命他	從四位下小祝明神	群馬郡群馬町冷水字川窪
⑨	胸形神社	宗像三神他	從四位下胸形明神	群馬郡群馬町棟高字南八幡街道
⑩	熊野神社	彦彦之男命他	從三位大奈知明神	群馬郡群馬町西四分字栗鋪蓋
⑪	神明宮	大日靈命他	正五位高井明神?	前橋市高井町字桃木
⑫	三宮神社	彦火々出見命他	正五位上伊賀保別大明神	北群馬郡吉岡村大字大久保字宮
⑬	集鳥神社	経津主命他	⑬集鳥明神の移祀地	前橋市総社町字給人町屋敷 (通称: 集鳥)
⑭	赤鳥神社	健甕身命他	⑭赤鳥明神の移祀地	前橋市古市町字宅地浜
⑮	集鳥明神	経津主命	從五位左衛門若御子明神?	前橋市総社町集鳥分 (No.13の旧社地)
⑯	赤鳥明神	健甕身命	從三位大伴明神?	(No.14の旧社地)
⑰	飯玉神社	宇気母智神他	俗称こおり様合祀	高崎市中尾町字天神
⑱	丁間稲荷	宇迦之御魂神他	正五位上小河原明神	前橋市総社町字稲荷塚
⑲	八王子権現	五男三女神合祀	(詳細不明)	前橋市元総社町字屋敷
⑳	天神様	菅原道真	㉑の旧社地	前橋市元総社町字天神
㉑	菅原神社	菅原道真他	㉑の移祀地	前橋市石倉町字天神前
㉒	諏訪神社	健甕名方命他	⑬鏡宮神社へ合祀境内社に地主神大友社	前橋市大友町字諏訪台
㉓	稲荷神社	宇迦之御魂神他		群馬郡群馬町藤岡台字村内
㉔	美留日明神	美留日明神	⑬飯玉神社へ合祀俗称こおり様 (即高守護神?)	高崎市中尾町字宮
㉕	八幡宮	菅田別命	国府八幡?	前橋市本町二丁目
㉖	稲荷神社	保食神	①総社神社へ合祀	前橋市元総社町字西川

註

- 「上野国神名帳」には、総社神社所蔵本、一之宮貫前神社本、群書類従本とあるが、本稿では明神名の統一を期するため、一部総社神社所蔵本を使用したほかは、すべて一之宮貫前神社所蔵本によった。
- 長尾一央氏蔵「善海城古図」推定江戸中期
- 『群馬県群馬郡村誌』群馬県 1877
- 『群馬県神社編覧』群馬県学芸部編 1927
- 『上野国文書実録帳』長元元年(1028)竹内理三編『平安文』第九巻 1974
- 『和名類聚抄』(和名抄)天慶元年(938)撰上。元和刊行本 1974
- 『国史大系』『続日本紀』1977
- 『朝野群載』巻三 文章下(祭文)『国史大系』1938
- 尾崎善左衛門『上野国神名帳の研究』1973
- 『国史大系』『延喜式』(前) 1977
- 石井徳司氏蔵「元総社社給図」推定江戸期

## 第3章 G区の遺構と遺物

### 第1節 G区の概要

当区は鳥羽遺跡のほぼ中央部に位置し、行政区分は前橋市元総社町分に所属する。区の南側には、南北方向に県主要幹線道路前橋—安中線が通る。このため、区域の全体を調査するには至らず、区のおよそ1/4はこの道路下に入る。調査は昭和56年度と58年度の2期に渡って実施された。調査面積は約3,050㎡である。地形は区の東方を北から南へ流れる染谷川の台地上に占地し、周辺を含め畑地として利用されている。現地表は平坦に近い様相を示すが遺構検出面では、区の南側約2/3の範囲は前橋泥流構成層の一つである凝灰岩質層が南に向かって深く落ち込んでいる。台地原形では染谷川から沢状に枝谷が入り、埋没谷を形成していたと考えられ、水性 Loam や黒褐色土の層厚が増し、現地表に近い平坦面をなしている。遺構はこれらの堆積土上に構築されている。

検出された遺構は主に奈良時代後半から平安時代にかけての堅穴住居跡96軒、奈良時代および中世の掘立柱建物跡あるいはこれと推定される遺構6棟、中世以降の墓跡5基、井戸跡7基、溝2条、さく状遺構16条大小の土坑状遺構100余基がおもな構成内容である。

堅穴住居跡の区内における分布状態については、明らかな偏在性が認められる。中央部南側および南東部に著しく集中しており、特に南東部の一画は十数軒の住居が重複する状況である。一方、北部から西部にかけての一番は集中の度合いが薄くまばらに点在する程度である。この遺構分布の状況は住居以外の遺構についても同様な傾向が窺われる。検出された96軒の住居跡は奈良時代から平安時代にかけての所産であるが、さらにこれら住居群から、集落の本格的な形成は奈良時代以降平安時代等入ってからと考えられる。それは、奈良時代と考えられる所産の住居群は全体の約15%の15軒を数えるのみで、大多数は平安期のもので占められる。この15軒の中で前半代の時期のものは、わずかに1軒の検出である。残りは後半から終末にかけての所産になる。奈良時代の堅穴住居跡はそれほどの偏在性は認められず、また重複の割合も少ない。

堅穴住居の構造は各期をとって類似する傾向である。平面形態は方形を呈し、竈が検出された遺構については4号・47号住居跡が北壁に付設されるほかは総て東壁に検出されている。また貯蔵穴を持つ場合、ほとんど竈石側に設けられるのが通例である。柱穴をもつ住居跡は少なく、当区では明らかなものとして20号住居跡にのみ4柱穴がみられる。

住居跡からの出土遺物で特筆すべきものは、38号住居跡出土の和鏡片、59号からは釣り金具状の金銅製、また、10号・61号住居跡からは風字硯などの出土がある。

掘立柱建物跡は奈良時代に属するものは4棟検出されているが、桁方向がほぼ東・西面するものと北・南面するものがある。また中世以降の考えられる2棟は東・西面するが、柱穴の掘形は前者と比べ貧弱なものになっている。

墓跡は5基検出されているが、2号墓跡は動物遺体を埋葬するもので比較的近年のものと考えられる。また、5号墓跡は平面が楕円形を呈し東辺に凸部をもつもので火葬の痕跡がある。火葬墓か火葬場かは明らかではない。他の3基の埋葬方法はいずれも土葬で、横臥屈葬の形をとる。土坑の形態には長方形(1・4号)と正方形(3号)に近いものがある。

井戸跡は7基検出されているが、いずれも中世以降のもので平面形は円形ないし楕円形を呈し柵施設など

### 第3章 G区の遺構と遺物

を持たない素掘り工法である。深さは2～3mを測る。5号井戸跡は最も規模が大きく多量の川原石で埋り、人為的な埋め戻しが行われたようである。



Fig.6 G区全体図



## 第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

G1号住居跡 (Fig. 7~10 PL. 3)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.4 ×	N-83°-E	東壁やや南寄り	楕円形 90 × 66 × 25

G区南西部に位置し、55-56G17~19の範囲にある。住居跡西半は調査区域外に延びるため未検出である。壁高は約22~32cmで傾斜をもって立ち上がる。床面は竈前部分が固く踏みかためられ北壁近くは軟弱でわずかに窪む。竈内及び前部には灰層が広がり貯蔵穴にも及んでいた。貯蔵穴内には下位から中位にかけて灰層が堆積しており灰の流出は使用時と廃棄後の2度が考えられる。竈は袖無し型で明瞭な煙道部を持たない。燃焼部中央には円形に6個の小穴が、また外部には3個の穴が穿たれている。前者は支脚機能が、他は電壁の補強材の痕跡と想定される。出土遺物は少なく竈周辺に散在していた。

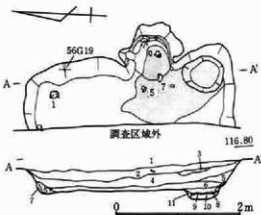


Fig.7 G1号住居跡

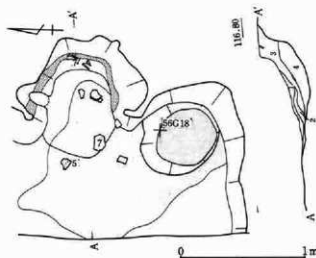


Fig.8 G1号住居跡竈

## G1号住居跡

- 1 褐色土 B粒石を含む。
- 2 褐色土 B・C粒石・炭化粒を少量含む。
- 3 褐色土 C粒石を含む。
- 4 暗褐色土 C粒石・炭化粒を含む。
- 5 暗褐色土 C粒石を含み、灰白色粘質土塊(5×5cm)を混える。
- 6 暗褐色土 C粒石・炭化粒を少量含む、灰白色粘質土塊(1cm)を混える。
- 7 暗褐色土 C粒石を少量含む。
- 8 暗褐色土 Loam 塊を含む。
- 9 灰層
- 10 灰色土 灰を含む。
- 11 褐色土 Loam 粒を含む。

## G1号住居跡竈

- 1 灰層 焼土粒を含む。
- 2 灰層
- 3 焼土面
- 4 暗褐色土 C粒石・炭化粒を含む。

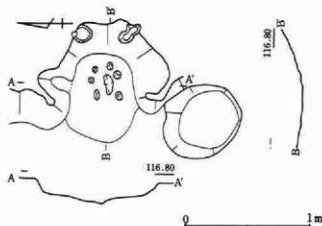


Fig.9 G1号住居跡竈形状

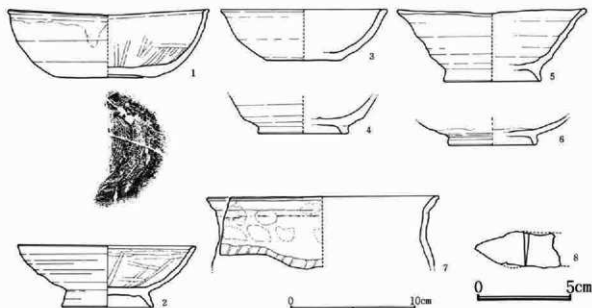


Fig.10 G1号住居跡出土遺物

G1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
			口径 × 底径 × 器高	出土位置			③胎土 その他
10-1 3-1	内黒土器 杯	口～底 片	16.1 × 8.1 × 4.9	北東隅床 面	轆轤。右回転糸切り。内体部～見込部放射状。口唇部横方向磨き。	①酸化・良好 ②浅黄橙 ③緻密	
10-2 3-2	内黒土器 椀	口～底 完	7.1 × 3.6 × 4.9	埋土	轆轤。右回転糸切り。内面放射状及び横方向磨き。付高台無で。	①酸化・良好 ②黄橙 ③細砂混る 表面化粧	
10-3 3-3	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 6.0 × 4.0	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。厚手。	①還元・良 ②によい 黄橙 ③細砂混る	
10-4 3-4	須恵器 椀	体～底 片	— × 7.4 × (2.8)	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台外面回転削り。内面無で。	①還元・不良 ②黄灰 ③細砂混る	
10-5 3-5	須恵器 椀	口～底 片	15.0 × 7.8 × 5.7	竈内	轆轤。右回転糸切り。体部水焼き強く、口唇部厚手。付高台無で。	①還元・良 ②青灰 ③総裡一部混る	
10-6 3-6	灰釉陶器 椀	底 片	— × 7.0 × (2.2)	埋土	轆轤。付高台回転削り。体部内外磨き。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
10-7 3-7	土師器 壺	口～頸 片	18.7 × — × (5.6)	竈内 貯蔵穴内	頸部指押痕顯著。体部上位横方向削り。内面無で粗い。	①酸化・良好 ②によい 赤褐 ③細砂混る	
10-8 3-8	鉄製品 鏝?	先端部	長(4.6) 幅1.8	埋土			

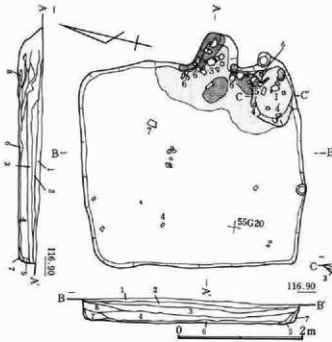


Fig.11 G2号住居跡

G2号住居跡

- 1 暗褐色土 B・C軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を含み、灰白色粘質土塊(1cm大~5cm)を混える。
- 5 暗褐色土
- 6 灰褐色土 灰白色粘質土塊(1cm)を含み、C軽石を少量混える。
- 7 暗灰褐色土
- 8 暗褐色土 Loam塊(2cm大)・C軽石を含む。

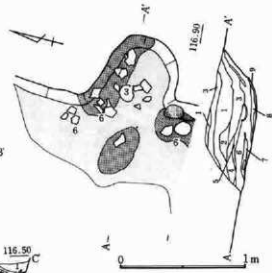


Fig.12 G2号住居跡

G2号住居跡野藏穴

- 1 暗褐色土 Loam塊を含む。
- 2 焼土 灰を含む。
- 3 粘土塊

G2号住居跡竈

- 1 明褐色土 Loam塊を多量に含む。
- 2 明暗褐色土 Loam粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・Loam粒・C軽石を含む。
- 4 暗褐色土
- 5 明暗褐色土 Loam塊を多量に含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を多量・Loam粒を少量含む。
- 7 Loam塊
- 8 焼土 灰を含む。
- 9 灰層 焼土粒を少量含む。

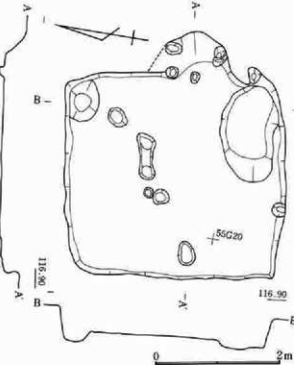


Fig.13 G2号住居跡掘形

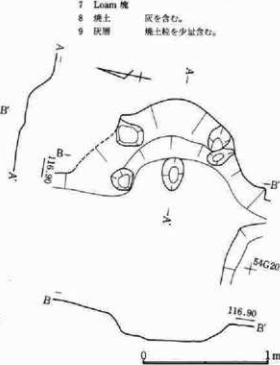


Fig.14 G2号住居跡竈掘形

第3章 G区の遺構と遺物

G 2号住居跡 (Fig. 11~15・PL. 4、5)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.38 × 3.30	N- 84° -E	東壁やや南寄り	円形 99 × 65 × 24

G区南西部に位置し、54~56G19・20の範囲にある。壁高は約30cmを測りほぼ垂直である。床面は中央部が固く踏み固められる。竈前面に灰が広がり貯蔵穴を覆い、内面下層にも堆積する。竈は右側に袖が残り左袖部には掘形が残る。燃焼部中央には支脚痕と思われる小穴がまた外部には1号住居跡と同様3個の穴が穿たれる。遺物は主に竈内及び、貯蔵穴内に検出されている。

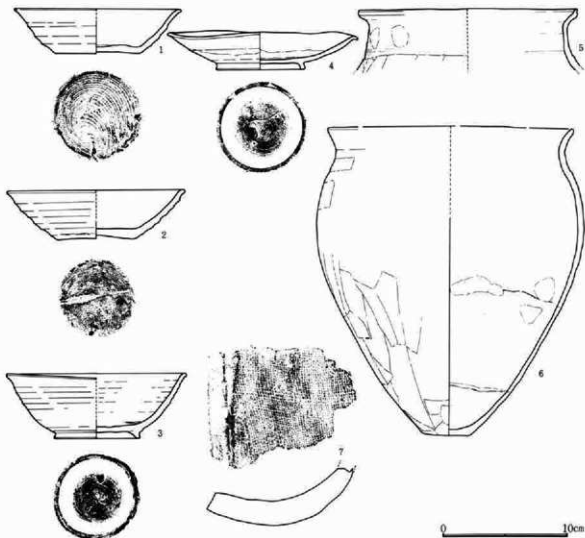


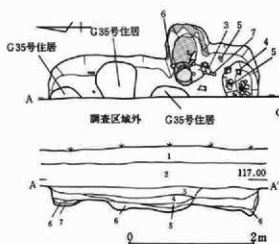
Fig.15 G 2号住居跡出土遺物

G 2号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
15-1 5-1	須恵器 杯	口~底 片	13.6 × 6.8 × 3.5	電内	輪軸。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや不良 ②灰 ③細砂混る
15-2 5-2	須恵器 杯	口~底 小片	12.2 × 6.2 × 3.9	埋土	輪軸。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②によい黄褐色 ③砂混る
15-3 5-3	須恵器 杯	口~底 片	14.4 × 6.4 × 5.3	電内	輪軸。右回転糸切り。付高台外面粗い面 で、内面撫で。	①加酸化還元・低温 ②橙 ③緻密
15-4 5-4	灰釉陶器 皿	端~底 (完)	15.2 × 7.1 × 3.2	南東壁下 床面	輪軸。右回転糸切り。底部回転糸切り。 付高台撫で。体部内外輪軸刷毛塗。光り 丘期。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
15-5 5-5	土師器 甕	口~頸 片	17.6 × — × (5.0)	貯蔵穴周 床面	頸部指押後撫で。体部上位横方向削り。 内面鈍撫で。	①酸化・良好 ②によい橙 ③緻密
15-6 5-6	土師器 甕	口~底 片	19.7 × 3.8 × 24.3	貯蔵穴周 床面	紐造。頸部撫で。体部上位横方向、中~下 位縦方向削り。内面鈍撫で。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
15-7 5-7	瓦 平瓦	小片	厚 1.9	床面	紐造。上面布目織。下面叩打後撫で。端 部面取。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る

G 3号住居跡 (Fig. 16~18・PL. 6)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.45 ×	N—83'—E	東壁やや南寄り	円形 50.5 × 50.5 × 24



G 3号住居跡 Fig. 16 G 3号住居跡

- 1 バラス
- 2 暗褐色土 細粒軽石を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石が細か。
- 5 暗褐色土 炭化粒を含む。
- 6 暗褐色土 白色粘土を含む。
- 7 白色粘土 白色粘土・炭化粒を少量を含む。

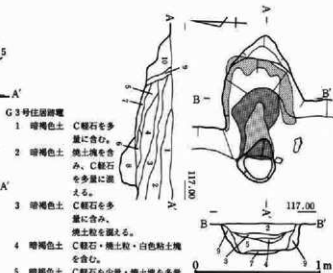


Fig. 17 G 3号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石を少量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土塊を含み、C軽石を少量に混える。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量に含む。焼土塊を混える。
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒・白色粘土塊を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石を少量・焼土塊を少量に含む。
- 6 崩落焼土 焼土塊
- 7 黒灰色土 黒灰が主。
- 8 黒灰色土 黒灰が主。
- 9 崩落焼土 焼土塊
- 10 暗褐色土 C軽石を少量・炭化粒を少量含む。

### 第3章 G区の遺構と遺物

G区南西部に位置し、56G23～25の範囲にある。西半は調査区域外に延び未検出である。35号住居跡と重複関係にあり35号住居跡より古い。壁高は約18cmを測りほぼ垂直であるが、北東部隅はだれている。竈は袖無しで煙道部を持たない。遺物は竈内と貯蔵穴周辺に集中する。

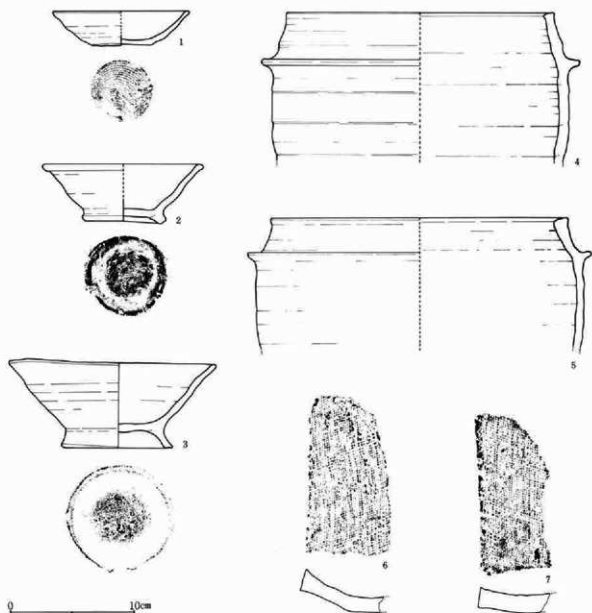


Fig.18 G3号住居跡出土遺物

G3号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
18-1 6-1	カワラケ 杯	口～底 片	11.0 × 5.0 × 2.7	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口唇部突 出、一見外反。	①酸化・良好 ②によい黄橙 ③緻密
18-2 6-2	須 恵 器 椀	口～底 片	12.9 × 6.7 × 4.1	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で、変形。	①還元・良好 ②灰 ③細礫砂混る
18-3 6-3	須 恵 器 椀	口～底 片	16.4 × 8.7 × 7.1	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台粘付後無で。	①酸化・良好 ②によい褐 ③細砂混 る
18-4 6-4	— 羽 釜	口～中 片	21.5 × — × (11.8)	電・貯蔵 穴内	紐造。横撫で。	①酸化 ②明赤褐 ③砂混る
18-5 6-5	— 羽 釜	口～中 片	23.6 × — × (10.4)	南東隅床 面	紐造。横撫で。	①酸化・やや低温 ②灰黄褐 ③砂混る
18-6 6-6	瓦 平 瓦	小 片	厚 1.3	電 前 床 面	西面布目。側面度調整	①酸化・やや軟 ②赤褐 ③小石混る
18-7 6-7	瓦 平 瓦	小 片	厚 1.1	電 前 床 面	西面布目。側面度調整。	①酸化・やや軟 ②明赤褐 ③小石混る

G4号住居跡 (Fig. 19～23・PL. 7～9)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.88 × 3.08	N—4°—W	北壁	円形 70 × 61 × 12

G区南西部に位置し、49・50G18～21の範囲にある。住居跡南辺で5号住居跡と重複関係にあるが新旧の確定はできなかった。よく整った方形を呈し、当区では数少ない北壁に電を付設する住居である。床面は電前方から中央部にかけては固く踏みかためているが、周縁は軟弱で多少の凹凸がある。壁高は34～38cm垂直に近く立ち上がる。一部西壁から南壁に沿って不明瞭ながら壁下溝が巡る。溝の幅約10cm、深さ5～8cmを測る。

電は燃焼部が精円形に掘り込まれ、燃焼部の先端から浅く長い煙道部が延びる。両袖には凝灰岩の加工材が埋設されている。燃焼部中央に一对の石材が埋め込まれているが、壁面とは間隔があり補強材とはならず、支脚と考えられる。袖部内法は約70cm、燃焼部長さ約1.4cm、煙道部長さ約60cm、幅約20cmを測る。出土遺物は少なく電周辺に限られる。

第3章 G区の遺構と遺物

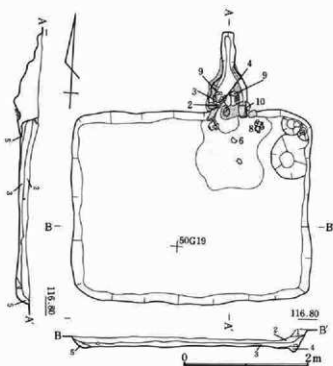


Fig.19 G4号住居跡

G4号住居跡

- |        |            |
|--------|------------|
| 1 褐色土  | C軽石を含む、砂質。 |
| 2 褐色土  | C軽石を含む。    |
| 3 暗褐色土 | C軽石を含む。    |
| 4 暗褐色土 | 粘性。        |
| 5 暗褐色土 |            |

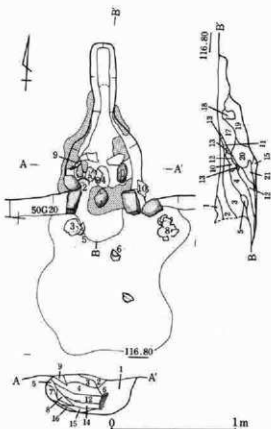


Fig.20 G4号住居跡竈

- |         |             |          |
|---------|-------------|----------|
| G4号住居跡竈 | 11 暗褐色土     | 焼土粒を少量含む |
| 1 茶褐色土  | 12 暗褐色土     |          |
| 2 褐色土   | 13 焼土       |          |
| 3 暗褐色土  | 14 赤褐色土     | 崩落焼土     |
| 4 黒褐色土  | 15 赤褐色土     | 黒灰を少量含む  |
| 5 黒色土   | 16 焼土を多く含む。 | C軽石を含む。  |
| 6 茶褐色土  | 17 暗褐色土     | 焼土粒を多量含む |
| 7 暗褐色土  | 18 暗褐色土     | C軽石を含む。  |
| 8 黒色土   | 19 暗褐色土     | 焼土粒を少量含む |
| 9 褐色土   | 20 灰層       |          |
| 10 明褐色土 |             |          |

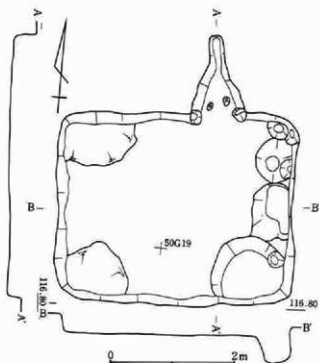


Fig.21 G4号住居跡掘形

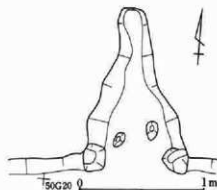


Fig.22 G4号住居跡竈掘形



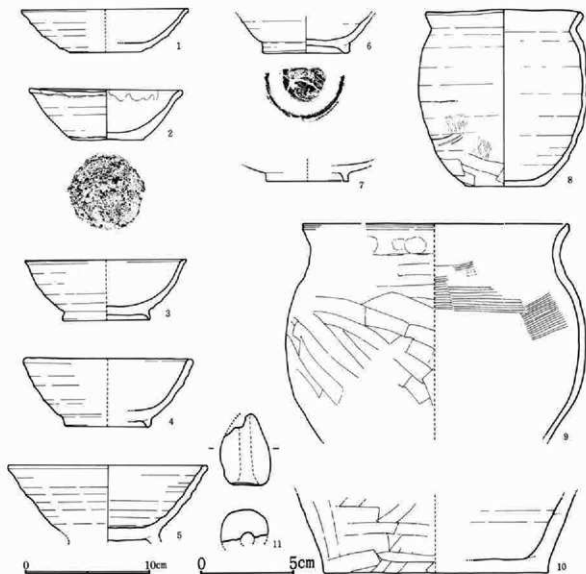


Fig.23 G4号住居跡出土遺物

G4号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
23-1 8-1	須恵器 杯	口～底 片	13.4 × 5.6 × 3.4	埋土	轆轤。右回転。切放不明。	①還元・低温 ②暗灰黄 ③微細砂混る。
23-2 8-2	須恵器 杯	口～底 (完)	12.3 × 5.7 × 4.2	竈内	轆轤。右回転糸切り。無調整。口唇部内外に油性炭化物付着。	①還元・低温 ②浅黄 ③細砂混る。
23-3 8-3	須恵器 碗	口～底 片	13.0 × 6.8 × 4.8	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。内外一部に炭化物付着。	①還元・低温 ②浅黄 ③細砂混る。
23-4 8-4	須恵器 碗	口～底 小片	13.6 × 6.8 × 5.4	竈内	轆轤。右回転。切放不明。付高台無で。口唇部厚手。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る。

第3章 G区の遺構と遺物

G 4号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 その他
23-5 8-5	須恵器 椀	口~底 欠	15.8 × 6.8 × 6.3	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②によい橙 ③細砂混る
23-6 8-6	須恵器 椀	下~底 欠	— × 7.0 × (2.9)	電子前床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①加酸化還元・低温 ②茂黄橙 ③細砂混る
23-7 8-7	緑釉陶器 皿	底 小片	— × 6.6 × (1.6)	埋土	轆轤。付高台回転甕形。	①還元・低温 ②オリーブ灰 ③緻密
23-8 8-8	土部器 口(欠)	口~底 (欠)	13.6 × 6.1 × 14.0	竈右手前床面	紐造。横撫で。体部下位斜方向、底部不定方向荒削り。中位以下炭化物付着。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
23-9 8-9	土部器 壺	口~中 小片	21.1 × — × 17.2	竈内	紐造。口頸部指押後撫で。体部斜方向荒削り。内面荒撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
23-10 9-10	土部器 壺	下~底 小片	— × 18.0 × (6.2)	貯蔵穴内	紐造。体部斜及び横、底部不定方向荒削り。	①還元 ②灰褐 ③砂混る
23-11 9-11	土製品 土錘	片	長 3.8 幅 2.7 厚(1.5)	埋土	特付型。一端面取。	①酸化・良好 ②灰白 ③緻密

G 5号住居跡 (Fig. 24・PL. 9)

G区南西部に位置し、48~50G18の範囲にある。南半は調査区域外のため未検出である。4号住居跡と重複しているが、遺物の検出もなく新旧の確定はできない。また住居跡としての諸施設の検出もなく積極的なよりどころはない。なお東壁は掘り込みが浅く範囲は明確ではない。

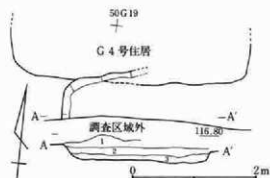


Fig.24 G 5号住居跡

G 5号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C 軽石・炭化物を含む砂質土。
- 3 黄褐色土 Loam 層・炭化物を多量に含む。

G 6号住居跡 (Fig. 25~28・PL. 9、10)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形跡・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.18 × 3.15	N—83°—E	東壁ほぼ中央	円形 57 × 36 × 9

G区南部に位置し、44・45G21~23の範囲にある。住居跡中央部には北走する1号溝と、南東部には38号住居跡と全体は4号掘立柱建物跡と各々重複関係にある。新旧の序列は新しい順に、1号溝・38号住居跡・6号住居跡・4号掘立柱建物跡である。壁高は4~8cmと浅い。竈は南半と前面を38号住居跡と1号溝によって破壊され全容は明らかでない。推測するならば、袖無しで明瞭な煙道部をもたない形であろう。掘形によれば燃焼部壁沿いに径5~6cmの小穴が穿たれている。貯蔵穴は南東隅、1号溝の底面に痕跡程度認められた。

出土遺物は少ない。

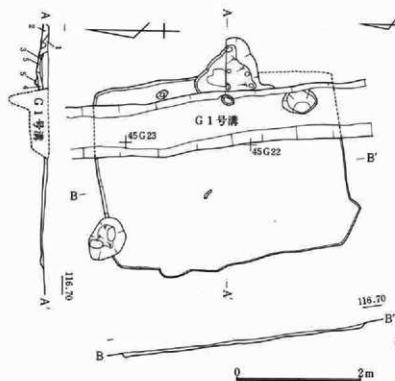


Fig.25 G 6号住居跡

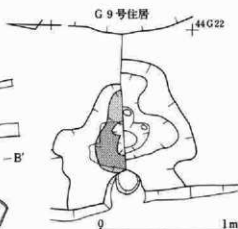


Fig.26 G 6号住居跡竈

## G 6号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 1' 暗褐色土 C軽石を含み、黒灰・粘土粒を多量に混える。
- 2 黄褐色土 Loam・粘土質。
- 3 崩落焼土 黒灰・C軽石を少量含み、崩落焼土粒を多量に混える。
- 4 崩落焼土 黒灰・C軽石・崩落焼土粒を少量含む。
- 5 茶褐色土 Loam塊・C軽石・崩落焼土塊を少量含む。
- 5' 茶褐色土 C軽石・Loam塊・黒灰を少量含む。

第3章 G区の遺構と遺物

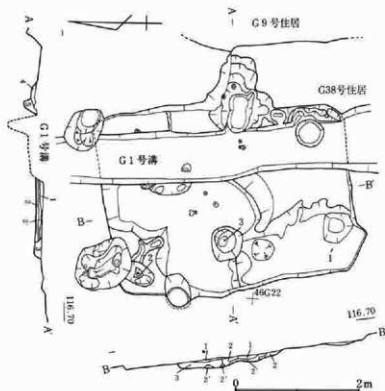


Fig.27 G6号住居跡掘形

G6号住居跡(掘形)

- 1 暗褐色土 C軽石を多量含み、粘性の低いさらりとした層。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含み、Loam塊を多量に混える粘る粘性土。
- 2' 黄褐色土 C軽石を少量含み、Loam塊を少量に混える粘る粘性土。
- 3 暗褐色土 C軽石・Loam塊・炭化粒を含む。
- 4 茶褐色土 C軽石・Loam塊・炭化焼土粒を少量含みやや粘性あり。
- 5 暗褐色土 粘性のある層。



Fig.28 G6号住居跡出土遺物

G6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存状況	計測値 (cm) 口徑 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③他
28-1 10-1	土器 杯	口~底 1/4	11.0 × 7.4 × 3.0	南西隅掘形	指押。口縁及び内面側で。底部、底面不定方向蹴削り。	①酸化・良 ②橙 ③黒雲母粒混る
28-2 10-2	土器 杯	口~底 1/4	12.0 × 9.0 × 3.2	北西隅掘形穴	指押。口縁及び内面側で。口唇部直立。体部下位斜。底部不定方向蹴削り。	①酸化・良 ②橙 ③黒雲母粒混る
28-3 10-3	土器 杯	口~底 1/4	13.0 × 7.3 × 3.1	中央掘形穴	指押。口縁及び内面側で。口唇部薄く直立。体部下位斜。底部不定方向蹴削り。	①酸化・良 ②橙 ③黒雲母粒混る

G7号住居跡 (Fig. 29~31・PL. 10, 11)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.37 × 3.20	E-4.5°-W	東壁やや南寄り	円形 68 × 41 × 20

G区南西部に位置し、46・47G24~26の範囲にある。南東隅がやや張り出し不整形を呈する。壁高は浅く約12cmである。床面は電前面を除き極めて軟弱である。電からは厚く灰層が流出しており、貯蔵穴を含め住居跡南東部を覆う。電構造は明確ではなく掘形段階で右袖部に袖石痕、燃焼部中央に支脚痕と思われる小穴を検出した。出土遺物は貯蔵穴付近に集中して検出されたが全体に散的である。

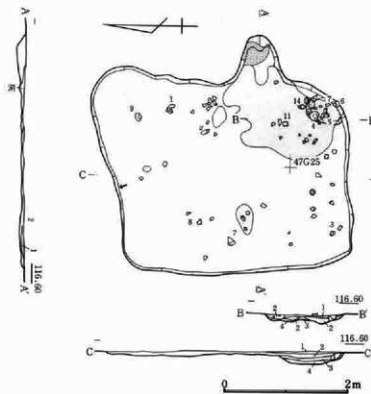


Fig.29 G7号住居跡

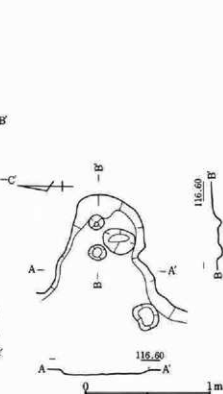


Fig.30 G7号住居跡竪掘形

## G7号住居跡

- 1 褐色土 炭化粒を含む。
- 2 灰褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 灰褐色土 灰色が強い。
- 4 褐色土 灰白色焼土層を含む。

## G7号住居跡貯蔵穴

- 1 赤褐色土 はり硬、非常に堅く締る。
- 2 褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 堅い。
- 4 焼土層

第3章 G区の遺構と遺物

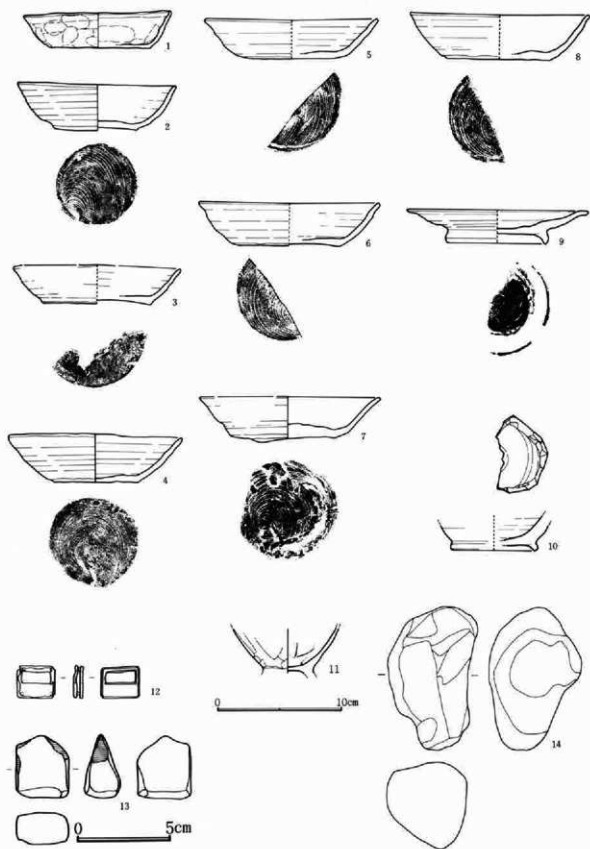


Fig.31 G7号住居跡出土遺物

G7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
31-1 11-1	土師器 杯	口～底 残	11.8 × 8.1 × 2.6	北東部床 面	指押。口縁及び内面撫で。体部横、底部 不定方向荒削り。	①酸化・良好 ②橙 ③黒黄母粒混る
31-2 11-2	須恵器 杯	口～底 残	12.7 × 6.6 × 3.9	南東部床 面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
31-3 11-3	須恵器 杯	口～底 残	13.6 × 9.2 × 2.9	南西部床 面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
31-4 11-4	須恵器 杯	口～底 (完)	13.6 × 7.0 × 3.8	南東部床 面	轆轤。右回転未切り。体部下位から中位 へ斜方向撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
31-5 11-5	須恵器 杯	口～底 残	14.0 × 6.2 × 3.2	南東部床 面	轆轤。右回転未切り。はみ出し撫で。	①還元・軟質 ②灰 ③緻密
31-6 11-6	須恵器 杯	口～底 残	14.6 × 7.8 × 3.4	南東部壁 着	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰 ③緻密
31-7 11-7	須恵器 杯	口～底 残	14.5 × 8.5 × 3.7	南東部・南 西部床 面	轆轤。右回転未切り。二度切。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
31-8 11-8	須恵器 杯	口～底 残	14.4 × 7.8 × 3.6	北西部床 面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・軟質 ②浅黄橙 ③緻密
31-9 11-9	須恵器 皿	端～底 残	14.6 × 7.4 × 2.8	北東部床 面	轆轤。右回転未切り。付高台撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
31-10 11-10	反軸陶器 甕	下～底 残	— × 7.0 × ( 2.7)	埋 土	轆轤。右回転。付高台横撫で。	①還元・良好・硬質 ②灰白 ③緻密
31-11 11-11	土師器 台付 甕 小片	下～底 小片	— × ( 4.0) × ( 3.5)	南東部床 面	紐造。斜方向荒削り。内面荒撫で。台部 剥落。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
31-12 11-12	銅製品 帯金具	完	縦 1.7 横 1.9 厚 0.5	南東部 埋 土	逆方。	
31-13 11-13	石製品 石	小片	長 3.3 幅 2.8 厚 1.9	埋 土	楔形。全面使用。仕上げ。	凝灰岩
31-14 11-14	石製品 石		長 11.3 幅 7 厚 7.4	貯蔵穴 左 床	多面使用。	角閃石安山岩

## G8号住居跡 (Fig. 32～34・PL. 11)

G区南部に位置し、43・44G23～25の範囲にある。西半で1号溝、竈及び東壁は37号住居跡と重複しており、1号溝より旧く、37号住居跡の上に構築されている。住居跡の輪廓、竈とも痕跡が認められたのみで全客は明らかでない。とくに東壁と西壁は重複もあり図化し得ない。北・南壁の立ち上りは4～5cmの高さである。

### 第3章 G区の遺構と遺物

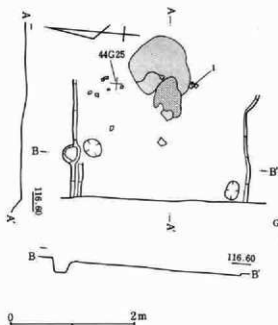


Fig.32 G8号住居跡



Fig.33 G8号住居跡竈

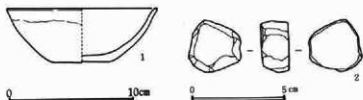


Fig.34 G8号住居跡出土遺物

#### G8号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
34-1 11-1	内黒土器 杯	口~底 1/2	12.2 × 4.9 × 4.3	進手前床 面	器面粗く調整不明。吸灰処理後の艶磨不 鮮明。底部は小平底。	①酸化・良好 ②淡黄橙 ③細砂混る
34-2 11-2	須恵器 転用面子		縦 2.8 横 2.8 厚 1.5	進手前床 面	大塊体部片打割。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

#### G9号住居跡 (Fig. 35~41・PL. 12~15)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	進 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.63 × 3.19	N-86' -E	東壁やや南寄り	円形 80 × 72 × 12

G区南端中央に位置し、42・43G21・22の範囲にある。10号住居跡・38号住居跡・75号住居跡と重複関係  
 により新旧の序列は新しい順に38号住居跡・9号住居跡・10号住居跡・75号住居跡である。壁高は約30cmを



測り垂直に立ち上がる。床面は竈前面が固く踏みしめられている。竈は袖をもち短い煙道部が付く。両袖には同一個体と思われる30cm大の扁平な川原石を半載して備える。また燃焼部には右手に円錐形の石を、左手に平瓦を対にして埋め込んでいる。支脚の機能をもつと考えられる。袖内側は約90cm、燃焼部長さ約60cm、煙道部長さ約25cmを測る。竈前には両袖にかかる天井石と思われる凝灰岩の長方形の切り石が倒壊している。遺物は量が多く、とくに竈内に多く検出されている。鉄製紡錘車・刀子などの出土がある。

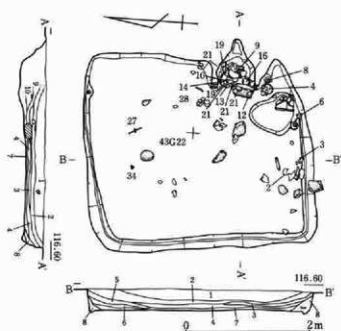


Fig.35 G9号住居跡

G9号住居跡

- 1 褐色土 C粒石・焼土・炭化粒を多量に含む。
- 2 褐色土 土粒が細かくやや暗い。
- 3 暗褐色土 C粒石を少量含む、やや粘性あり。
- 4 暗褐色土 C粒石・焼土粒・炭化粒・Loam塊を含む。
- 5 褐色土
- 6 褐色土 Loam塊を多量に含む。
- 7 暗褐色土 焼土粒を含み、粘りなし。
- 8 暗褐色土 粘性、粘りなし。
- 9 明褐色土 Loam塊を多量に含む、粘性が強い。
- 10 暗褐色土 Loam塊・焼土粒・炭化粒を多量に含む。

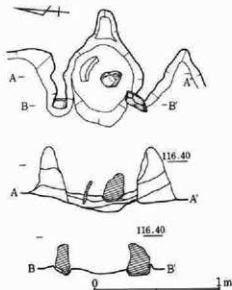


Fig.37 G9号住居跡竈掘形

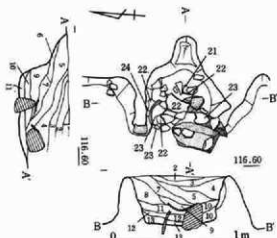


Fig.36 G9号住居跡竈

G9号住居跡竈

- 1 褐色土 C粒石・焼土・炭化粒を多量に含む。
- 2 褐色土 全体的に粒が細かくやや暗い。
- 3 明褐色土 Loam塊を多量に含む、粘性が強い。
- 4 暗褐色土 Loam塊・焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土 Loam塊を多量に含む、粘性あり。
- 6 赤褐色土 焼土粒を多量に含む、やや粘性あり。
- 7 暗褐色土 焼土塊を少量含む。
- 8 暗褐色土 焼土塊を少量、Loam塊を多量に含む。
- 9 崩落焼土 焼土塊を多量に含む。
- 10 暗褐色土 粘性が高い。
- 11 暗褐色土 白色粘土塊を含み、粘性あり。
- 12 暗褐色土 粘りなし。
- 13 暗褐色土 炭化粒を含み、粘りなし。

第3章 G区の遺構と遺物

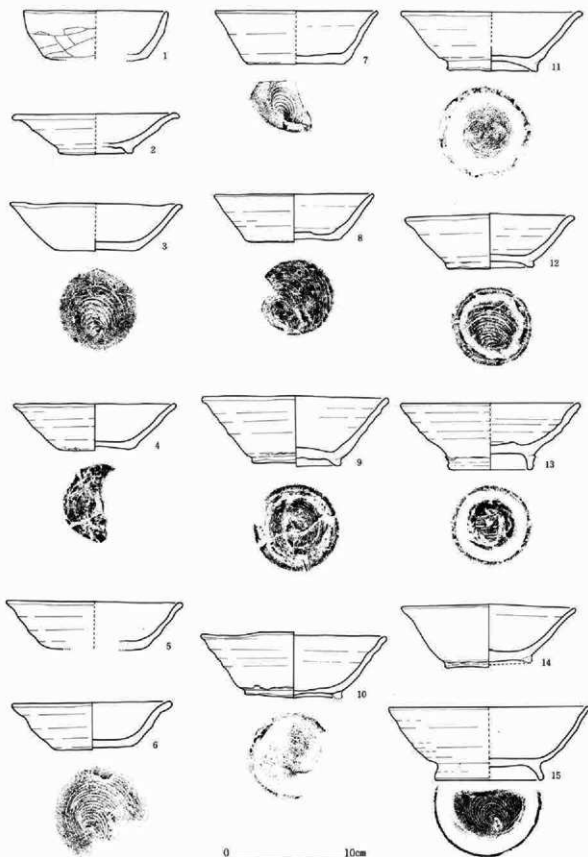


Fig.38 G9号住居跡出土遺物(1)

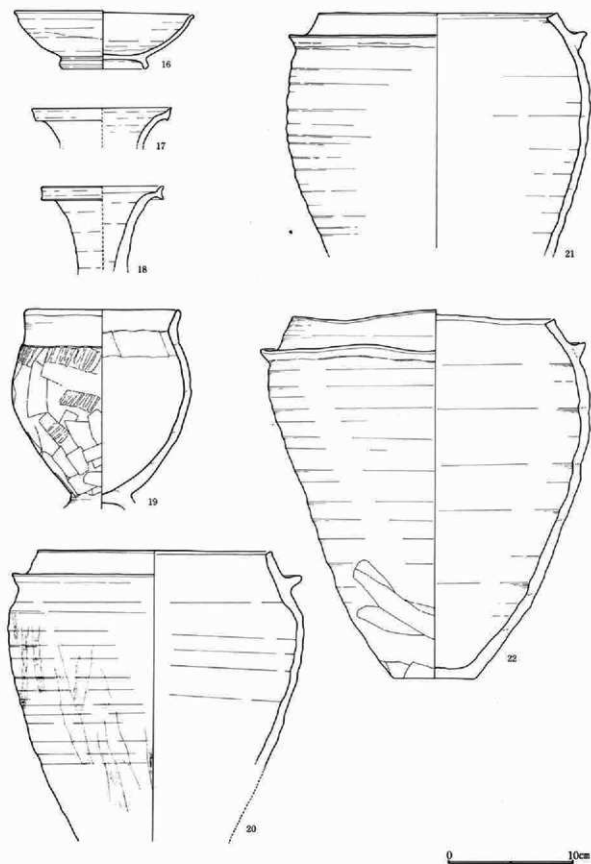


Fig.39 G9号住居跡出土遺物(2)

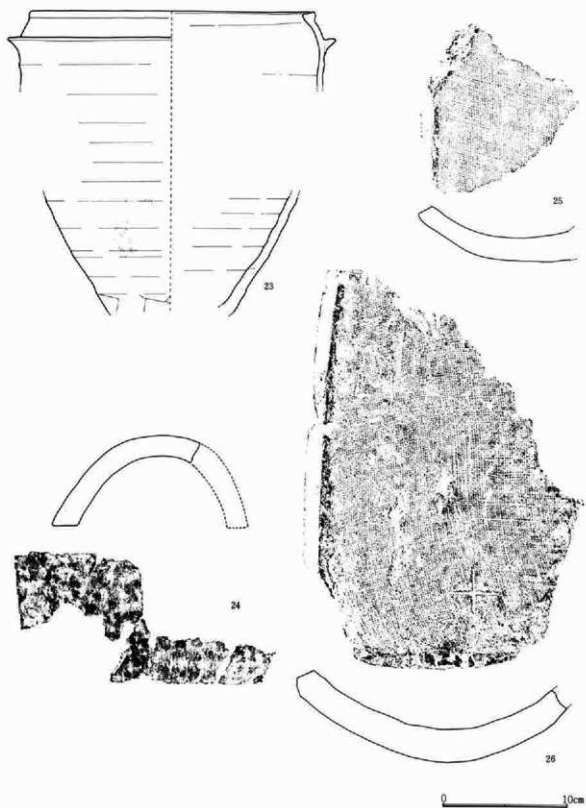


Fig.40 G9号住居跡出土遺物(3)

第2節 G区の整穴住居跡と遺物

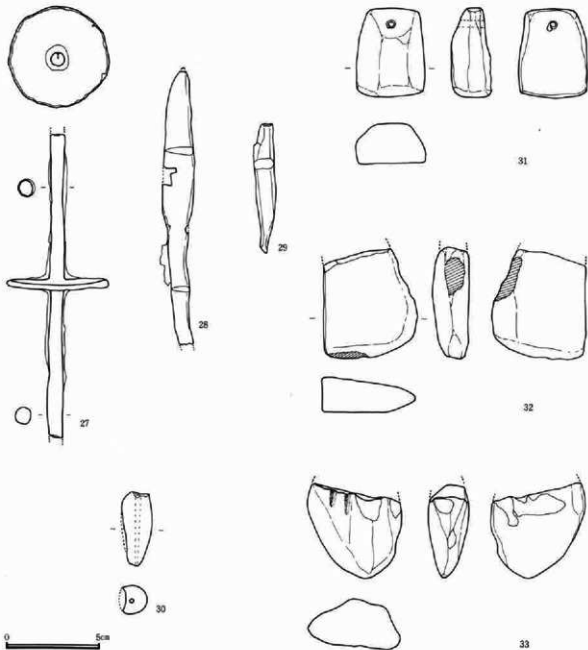


Fig.41 G9号住居跡出土遺物(4)

G9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
38-1 12-1	土師器 杯	口～底 小片	11.6 × 8.2 × 3.9	床下埋土	口縁及び内面無で、体部斜方向削り後、 無で。底面削り。	①酸化・良 ②残黄橙 ③細砂混る
38-2 12-2	須恵器 皿	端～底 片	13.4 × 6.0 × 3.3	南西部床 面	轆轤。右回転未切り。付高台横無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂・細礫混る
38-3 12-3	須恵器 杯	口～底 片	13.7 × 6.5 × 3.8	南西部床 面	轆轤。右回転未切り。底面縁辺使用によ り磨減。内面灰化物付着。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂・細礫混 る

G9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②土質 ③胎土 ④色調 ⑤その他
38-4 12-4	須恵器 杯	口~底 %	13.0 × 6.0 × 3.7	電子前床	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
38-5 12-5	須恵器 杯	口~底 %	14.0 × 7.4 × 3.8	電内	轆轤。右回転糸切り。無調整。底部縁辺 厚減。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
38-6 12-6	須恵器 杯	口~底 %	12.9 × 6.2 × 3.7	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
38-7 13-7	須恵器 杯	口~底 %	13.2 × 7.6 × 4.2	電内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②青灰 ③緻密
38-8 13-8	須恵器 杯	口~底 %	12.8 × 7.7 × 3.8	南東部床 下埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。底部縁辺 厚減。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
38-9 13-9	須恵器 椀	口~底 %	15.0 × 7.2 × 5.6	電内	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・低温 ②にぶい黄橙 ③緻密
38-10 13-10	須恵器 椀	口~底 %	14.9 × 7.7 × 5.3	南東部床 下埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。歪 み顕著。	①酸化・低温 ②淡黄 ③細砂混る
38-11 13-11	須恵器 椀	口~底 %	14.4 × 7.2 × 4.7	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②淡黄 ③細砂混る
38-12 13-12	須恵器 椀(完)	口~底 (完)	13.6 × 7.0 × 4.4	電内	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。厚 手。	①還元・低温 ②淡黄 ③砂混る
38-13 13-13	須恵器 椀	口~底 %	14.3 × 6.5 × 5.3	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で、接合 不良。	①還元・低温 ②灰白 ③小磯混る
38-14 13-14	須恵器 椀	口~底 %	14.0 × 7.0 × 5.0	北東部強 形・覆内	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。ゆが み顕著。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
38-15 13-15	須恵器 椀	口~底 %	16.2 × 8.8 × 5.8	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
39-16 13-16	灰釉陶器 碗	口~底 %	14.4 × 7.2 × 4.6	電内	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横 撫で。体部内外施釉7色塗。	①還元・良好・硬質 ②灰白 ③緻密
39-17 13-17	灰釉陶器 長頸壺 小片	口~頸 小片	10.4 × ー × (2.9)	貯蔵穴内	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
39-18 13-18	土師器 長頸壺 小片	口~頸 小片	9.8 × ー × (6.5)	埋土	紐造後轆轤。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
39-19 13-19	土師器 台付壺	口~底 %	12.3 × ー × (15.6)	中央部床 面	紐造。口頸部撫で。体部横及び斜方向瓦 削り。内面磨撫で。台部欠損。保付着。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
39-20 14-20	一 釜	口~下 %	18.8 × ー × (24.9)	電内	紐造。横撫で。体部下位縦及び斜方向瓦 削り。	①酸化 ②にぶい橙 ③砂混る
39-21 13-21	一 釜	口~中 %	19.1 × ー × (19.0)	電・貯蔵 穴内	紐造。横撫で。	①還元・一部酸化 ②灰白 ③細砂混る
39-22 14-22	一 釜	口~底 (完)	21.0 × 6.5 × 29.1	電内	紐造。横撫で。体部下位斜方向瓦削り。	①酸化 ②橙 ③砂混る

G9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
40-23 14-23	一 羽 釜	口～下 小 片	22.6 × — × (24.0)	南西部床 面	紐造。横溝で。体部下位斜方向彫り。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
40-24 14-24	瓦 丸 瓦	小 片	一 幅15.7 厚 7.2	南西部床 面	上面無で。下面布目肌。端部部取。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
40-25 14-25	瓦 平 瓦	小 片		南西部床 面	上面布目肌。側端部二度面取。	①酸化・硬質 ②橙 ③砂混る
40-26 14-26	瓦 平 瓦	小 片		竪 内	上面布目肌。「+」貫通。端部二度面取。	①還元・硬質 ②灰 ③砂混る
41-27 15-27	鉄 製 品 紡 錘 車	輪部両 端欠損 完	長(16.0) 輪径 5.4 輪厚 0.5 輪径 0.5	北東部床 面	輪部円形柱状。	
41-28 15-28	鉄 製 品 刀 子		全長14.4 刃部幅1.3 刃渡 8 柄部幅0.8	中央部床 面、竪寄	柄部先端欠損	
41-29 15-29	鉄 製 品		長(6.8) 幅1.1 厚 0.5	埋 土		
41-30 15-30	土 製 品 土 罎		長 3.9 幅 1.6 厚 1.5	床下埋土	棒付罎。	①酸化・良好 ②黒 ③細砂混る
41-31 15-31	石 製 品 砥 石	完	長 4.7 幅 3.7 厚 2.1	床下埋土	垂孔両面穿孔。全面使用。仕上げ砥。	流紋岩 (砥沢?)
41-32 15-32	石 製 品 砥 石	小 片	長 5.8 幅 5.0 厚 2.0	床下埋土	全面使用。仕上げ砥。	流紋岩 (砥沢?)
41-33 15-33	石 製 品 砥 石	小 片	長(5.0) 幅 5.0 厚 2.2	北西部床 面	球状使用。仕上げ砥。	流紋岩 (砥沢?)

G10号住居跡 (Fig. 42~44・PL. 15、16)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.80 × 3.00	N-86.5°-E	東壁ほぼ中央	

G区南端中央に位置し、42・43G21・22の範囲にある。9号住居跡にほぼ重なり、竪及び東壁の一部と北壁を抽出できたのみである。なお東壁の南半は75号住居跡との重複のため明らかにはできなかった。床面は9号住居跡が深いため主要な部分は消滅している。壁高は約22cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。竪は袖をもち、方形に作り出された燃焼部に凸部程度の短かい煙道部がつく。袖部には補強材の痕跡はなく、基層の暗褐色土を掘り残していると考えられる。燃焼部幅約55cm、奥行約60cm、煙道部長さ約15cmを測る。

第3章 G区の遺構と遺物



G10号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。  
2 暗褐色土 C軽石を多量に含む、砂りあり。

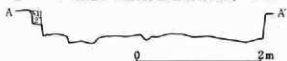


Fig.42 G9号住居跡掘形・G10号住居跡

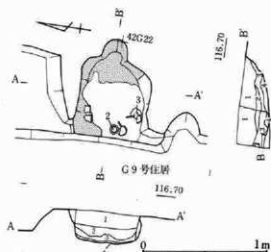


Fig.43 G10号住居跡電

G10号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。  
2 暗褐色土 砂りあり。  
3 崩落粘土 崩落境土塊を多量に含む。  
4 黒灰

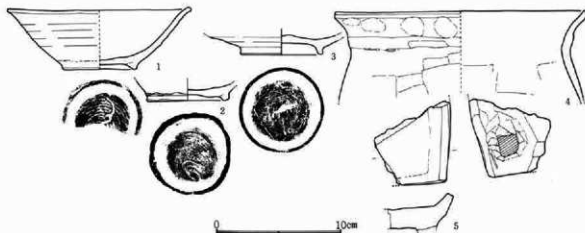


Fig.44 G10号住居跡出土遺物

G10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
44-1 16-1	須恵器 椀	口~底 1/2	14.8 × 6.0 × 4.8	竈内埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②にょい性 ③細砂混る
44-2 16-2	須恵器 椀	底全	— × 6.6 × (1.8)	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
44-3 16-3	須恵器 椀	底全	— × 6.6 × (1.5)	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る



G10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
44-4 16-4	土師器 壺	口～上 小片	20.2 × — × (7.0)	竈内埋土	紐造。口頸部兩押後施で、体部上位横方向瓦彫り。内面瓦無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
44-5 16-5	須恵器 風子甕	小片	— × — × (2.7)	埋土	右視尻部。側縁は緑帯巡る。裏面は脚装着痕あり。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

G13号住居跡 (Fig. 45~47・PL. 16、17)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.53 × 2.87	N—80.05—E	東壁やや南寄り	楕円形 10.5 × 72 × 22

G区南部に位置し、40~42G24・25の範囲にある。14号住居跡・3号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、双方よりも新しい時期の所産である。壁高は約24cmを測り立ち上がり角度はゆるい。床面は竈前から南半は比較的固く踏みしめられているが北西部は軟弱である。住居跡の掘形では、床面の固い部分に、不整形形を呈する浅い土坑状の窟が認められた。

竈は東壁に作り出され、楕円形を呈し袖部のない形で煙道もない。掘形でも袖石・支脚などが埋設された痕跡は認められなかった。燃焼部幅約65cm、奥行約70cmを測る。出土遺物は少なく散在している。

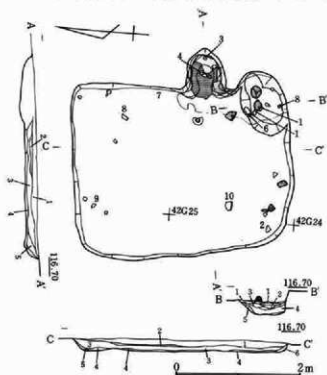


Fig.45 G13号住居跡

## G13号住居跡

- 1 褐色土 Loam 塊・C硝石を含む。
- 2 褐色土 Loam 塊を含む。
- 3 暗褐色土 C硝石を少量含む。
- 4 灰褐色土
- 5 暗褐色土 Loam 粒を少量含む。
- 6 褐色土

## G13号住居跡貯蔵穴

- 1 灰層
- 2 暗褐色土 灰を含む。
- 3 灰層 Loam 粒を含む。
- 4 暗褐色土 Loam 粒を含む。
- 5 Loam

第3章 G区の遺構と遺物

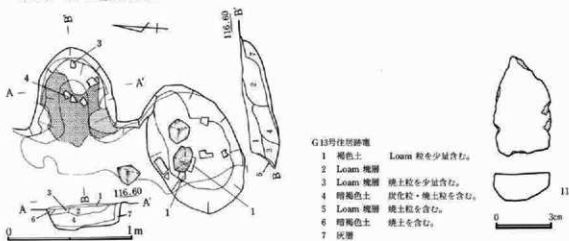


Fig.46 G13号住居跡

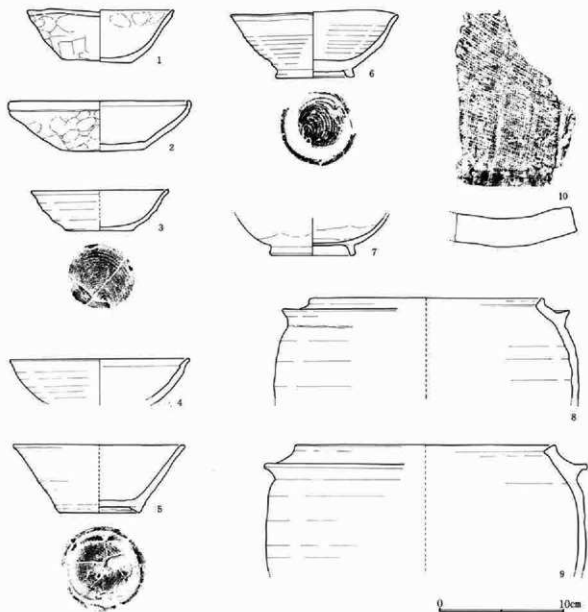


Fig.47 G13号住居跡出土遺物

G13号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
47-1 17-1	土器 杯	口～底 残	11.2 × 5.5 × 4.2		南東部床 面	指押。撫で。口唇部に沈線2条。体部横、 底部不定方向彎削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
47-2 17-2	土器 杯	口～底 残	16.3 × 6.5 × 4.0		南西部床 面	指押。撫で。口唇部内湾、沈線1条。体 部横、底部不定方向彎削り。	①酸化・良好 ②にぶ い黄橙 ③細砂混る
47-3 17-3	須恵器 杯	口～底 残	11.0 × 5.4 × 3.2		竈内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化 ②淡黄 ③細砂混る
47-4 17-4	土器 模	口～体 残	14.3 × — × (3.5)		竈内	轆轤。右回転。口唇部内側段付。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
47-5 17-5	須恵器 碗	口～底 残	13.7 × 6.5 × 5.5		床下埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。歪み あり。厚手。全面吸灰。	①酸化・良好 ②黒 ③砂混る
47-6 17-6	須恵器 模	口～底 残	13.5 × 6.4 × 5.5		南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。口 縁歪む。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
47-7 17-7	灰釉陶器	体～底 残	— × 6.6 × (4.5)		北東部床 面	轆轤。右回転。付高台横撫で。体部内外 施釉刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
47-8 17-8	— 羽蓋 小片	口～上 小片	18.6 × — × (8.0)		北西部床 面	組造。横撫で。	①酸化 ②浅黄橙 ③砂混る
47-9 17-9	— 羽蓋 小片	口～上 小片	20.2 × — × (10.0)		北西部床 面	組造。横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
47-10 17-10	瓦 平瓦	小片			南東部貯 藏穴	撚巻叩打。上面布目痕。下面撫で。潮部 削取。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
47-11 17-11	石製品 砥石		長 5.2 幅 3.0 厚 1.4		埋土	使用面1。裏砥。	角閃石安山岩

G14号住居跡 (Fig. 48～51・PL. 17, 18)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯藏穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.78 × —			

G区南部に位置し、40～42G25・26の範囲にある。13号住居跡・15号住居跡・3号掘立柱建物跡と重複関係にあり、13号・15号住居跡より古い時期の所産であり、3号掘立柱建物跡よりは若干時期が新しい。住居跡東南部はほとんど13号住居跡によって破壊され床面の状況は明らかではなく、電燃焼部がわずかに検出されている。南壁下には幅約6cm、深さ約4cmの溝が沿う。竈は全容を知ることはできないが、楕円形の作り出しで、煙道部はない。残存する燃焼部幅約65cm、奥行約30cmを測る。

第3章 G区の遺構と遺物

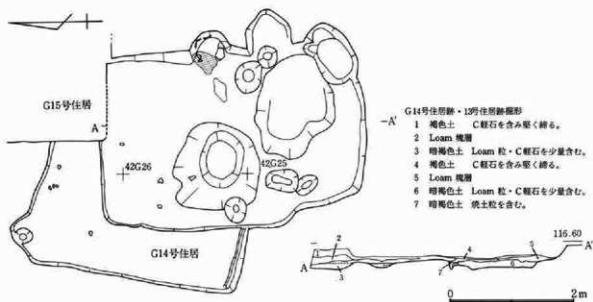


Fig.48 G13号住居跡掘形・G14号住居跡

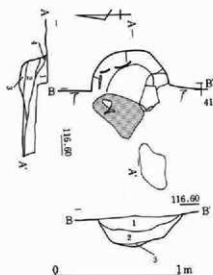


Fig.49 G14号住居跡掘

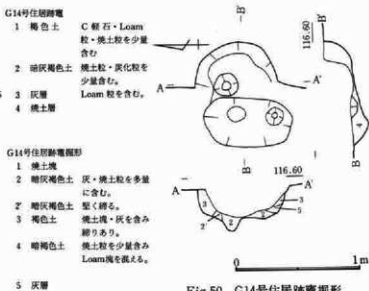


Fig.50 G14号住居跡掘掘形

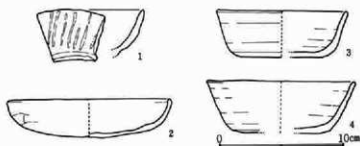


Fig.51 G14号住居跡出土遺物

G14号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調査の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
51-1 18-1	土師器 杯	口~底 小片	— × — × (3.6)	埋土	口縁無で。体部横方向直削り。内面化粧 後放射状暗文。	①酸化 ②橙 ③緻密
51-2 18-2	土師器 杯	口~底 片	13.2 × 10.2 × 3.0	埋土	指押。口縁無で。体部及び底部直削り。 器面荒れ顕著。	①酸化 ②橙 ③砂質
51-3 18-3	須恵器 杯	口~底 小片	10.6 × 6.6 × 3.7	埋土	縞縷。右回転。底部回転直削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂質
51-4 18-4	須恵器 杯	口~底 小片	12.0 × 7.8 × 4.2	埋土	縞縷。右回転。底部回転直削り。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂質

G15号住居跡 (Fig. 52~56・PL. 18, 19)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.00 × 2.84	N-94°-E	東壁ほぼ中央	円形 34 × 39 × 40

G区南部に位置し、40・41G26・27の範囲にある。13号・14号住居跡と重複関係にあり、13号より旧く14号より新しい時期の所産である。東壁から北壁にかけての北東部に後世の擾乱がおよんでいる。壁高は約20cmでゆるい傾斜をもって立ち上がる。床面は電前方が固く踏みかためられるが周辺は軟弱である。

竈は川原石が据え付けられ両袖を作っている。燃燒部は楕円形に作り出され、短い煙道部がつく。この煙道は使用面検出の時は看取できず、掘形の段階になって確認された。燃燒部には支脚材と思われる川原石が対になって検出されたが右側のそれは埋土中にあった。燃燒部幅は袖石内法で約50cm、奥行約50cm、煙道

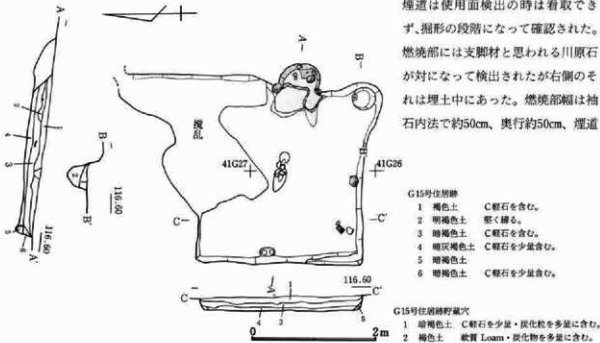


Fig.52 G15号住居跡

### 第3章 G区の遺構と遺物

部長さ約30cmを測る。床下は住居跡中央から南半にかけて8～10cmほど掘り窪めてある。

遺物は南半の床下からの出土が多い。

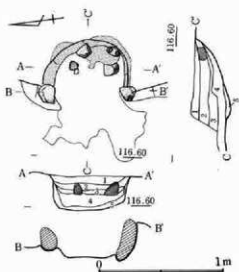


Fig.53 G15号住居跡断

#### G15号住居跡断

- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | C軽石を多量に含む。          |
| 2 暗褐色土 | C軽石・崩落焼土塊を含む。       |
| 3 赤褐色土 | C軽石を少量・崩落焼土塊を多量に含む。 |
| 4 黒灰   | 焼土塊を下層に少量含む。        |
| 5 焼土   | 電底部が破く壊れており小石が多い。   |

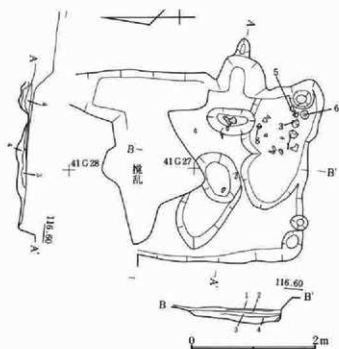


Fig.54 G15号住居跡掘形

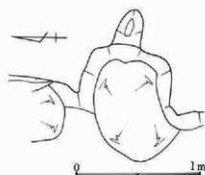


Fig.55 G15住居跡掘形

#### G15号住居跡掘形

- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 15号住居の底。            |
| 2 褐色土  | C軽石を含み、堅く締る。        |
| 3 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒・C軽石を含み堅く締る。 |
| 4 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒を多量に含み堅く締る。  |

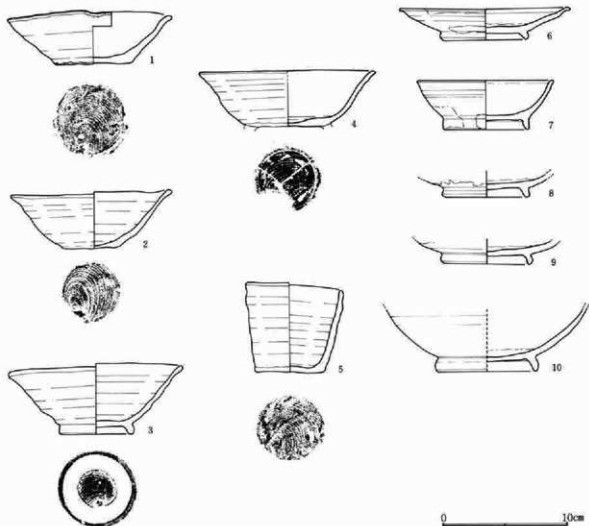


Fig.56 G15号住居跡出土遺物

G15号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
56-1 19-1	須恵器 杯	口～底 欠	13.2 × 6.4 × 4.3	南東部床 下	轆轤。右回転糸切り。体部撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
56-2 19-2	須恵器 杯	口～底 完	12.8 × 4.6 × 4.6	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
56-3 19-3	須恵器 碗	口～底 欠	14.0 × 6.0 × 5.6	南東部床 下	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。全 面撫で。	①還元・低温 ②黒 ③細砂混る
56-4 19-4	須恵器 碗	口～底 欠	14.2 × 7.0 × (4.6)	竈内埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台斜落。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
56-5 19-5	須恵器 杯	口～底 完	7.8 × 5.6 × 7.2	南東部床 下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る

G15号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
56-6 19-6	灰軸陶器 皿	端～底 突	14.8 × 7.1 × 2.7	南東部床 下	轆轤。右回転。付高台及び底部回転部削り。体部内外接軸刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
56-7 19-7	灰軸陶器 椀	口～底 片	11.0 × 6.6 × 3.9	埋 土	轆轤。右回転。付高台及び底部回転部削り。体部内外接軸とよぶげ。	①還元・良好 ②灰白 ③細線混る
56-8 19-8	灰軸陶器 椀	底 片	— × 6.6 × (1.7)	南東部床 下	轆轤。右回転。付高台及び底部回転部削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
56-9 19-9	灰軸陶器 椀	底 片	— × 7.0 × (1.7)	埋内埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部回転部削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
56-10 19-10	灰軸陶器 椀	体～底 小片	— × 8.0 × (5.0)	埋 土	轆轤。右回転。付高台及び底部回転部削り。口径内外接軸刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

G16号住居跡 (Fig. 57～60・PL. 20, 21)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	建 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.02 × 3.55	N-85.5°-E	東壁やや南寄り	

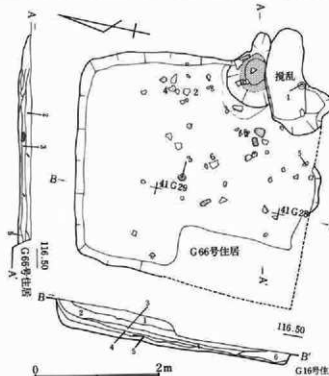


Fig. 57 G16号住居跡

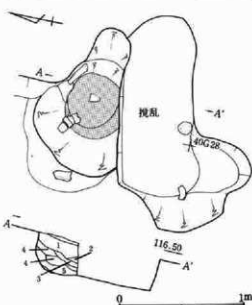


Fig. 58 G16号住居跡電

G16号住居跡

- 1 灰褐色土 C粒石・焼土粒を多量に含む粘性なし。
- 2 褐色土 C粒石・焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 3 褐色土 C粒石・焼土粒・炭化粒を少量含む。
- 4 褐色土
- 5 暗褐色土 粘性あり。
- 6 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。

G16号住居跡電

- 1 暗褐色土 C粒石を多量に含む。焼土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 3 灰黒褐色土 黒炭を主とし、焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒・黒炭を多量に含む。



第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

G区中央部やや南に位置し、39~41G 27~29の範囲にある。南西部で66号住居と重複しており、66号住居跡より古い時期の所産である。また、南壁沿いに後世の複乱があり竪右側と南壁の大部分は明らかでない。壁高は北壁で約45cmを測り立ち上がりは傾斜をもつ。床面は竪前から西へ延びる。南半が固く、北側は軟弱である。竪は袖部の無い形で燃焼部の作り出しは、ほとんどが住居内にある。わずかに煙道にあたる部分が突出している。燃焼部幅約50cm、奥行約25cm、煙道部長さ40cmを測る。床下は南半を10~15cmの深さに掘り込まれておりかなり凹凸がある。竪掘形は火床部分が円形のすり鉢状に窪む。

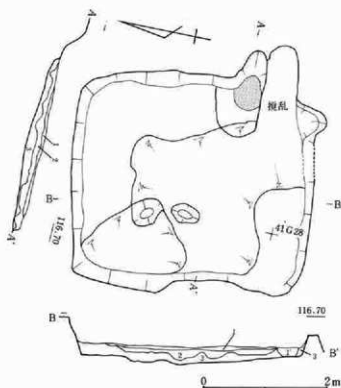


Fig.59 G16号住居跡掘形

G16号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量・炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・軟質 Loam 粒・焼土粒を少量含む。
- 1' 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む黒灰も混入。
- 3 暗褐色土 黄褐色 Loam 粒を少量含む。

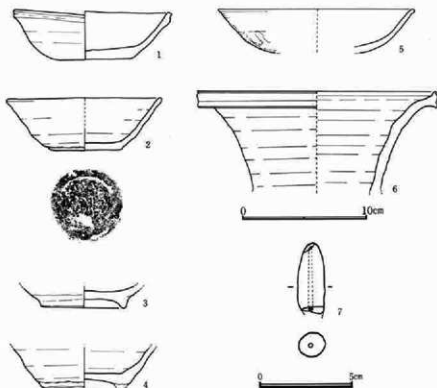


Fig.60 G16号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 ④その他
60-1 21-1	須恵器 杯	口~底 完	12.7 × 6.5 × 4.4	南東部祝 乱穴	轆轤。右回転。口縁部沈線1条。厚手。 底部不定方向置削り。歪み大。	①還元・低温 ②オリーブ黒 ③砂混る
60-2 21-2	須恵器 杯	口~底 1/2	12.5 × 6.0 × 4.1	北東部床 面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①酸化 ②におい異情 ③砂混る
60-3 21-3	須恵器 椀	底	— × 6.8 × ( 1.5)	中央部床 面	轆轤。右回転未切り。体部下位縦方向削 で。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
60-4 21-4	須恵器 椀	体~底 1/2	— × 6.6 × ( 3.1)	北東部床 面	轆轤。右回転未切り。付高台横溝で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂多量混る
60-5 21-5	灰釉陶器 椀	口~体 小片	15.8 × — × ( 3.5)	南東部床 面	轆轤。右回転。口縁~体部短軸磨毛塗。 厚粉多し。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
60-6 21-6	須恵器 甕	口~腹 1/2	19.4 × — × ( 8.5)	中央部床 面	轆轤。右回転。	①還元 ②灰白 ③細砂混る
60-7 21-7	土製品 土	瓦	長(3.7) 幅 1.4 厚 1.3	埋 土	棒付握。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る

G18号住居跡 (Fig. 61~64・PL. 21, 22)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.63 × 3.13	N- 95° - E	東壁やや南寄り	円形 68 × 55 × 21

G区中央部やや南に位置し、40~42G29~31の範囲にある。北側で42号住居跡、19号住居跡と重複する。新旧関係は両者より新しい時期の所産である。また上面には以降と考えられるさく状遺構が検出されている。壁高は遺存の良好な南壁で約35cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い。床面は比較的平坦で、電前から西方にかけて南半が圓く踏みかためられている。竈は東壁を楕円形に掘り込み、1段高くなって煙道部を作り出している。右袖部にのみ川原石を用いてある。燃焼部には支脚材と考えられる川原石が対に埋め込まれる。燃焼部幅は約48cm、奥行約65cm、煙道部長さ約20cmを測る。床下は全体に10~15cmほど下がる。電前とはとくに深く約20cm程の窪みとなる。

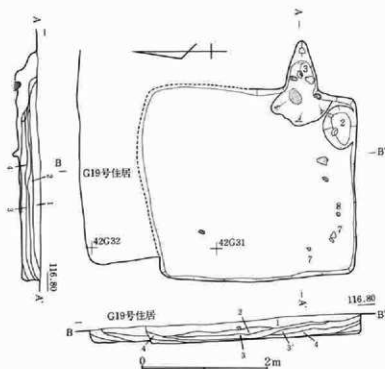


Fig.61 G18号住居跡

G18号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含み、締りあり
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含み、締りあり
- 3 暗褐色土 粘性あり。
- 4 暗褐色土 粘性あり。

G18号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含み締りあり。
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を少量含む。
- 5 暗褐色土
- 6 焼土残層
- 7 赤褐色土 火を受けて、赤化している。
- 8 黒褐色土 黒灰を主とし焼土粒を少量含む
- 9 暗褐色土 C軽石を多量に含む。

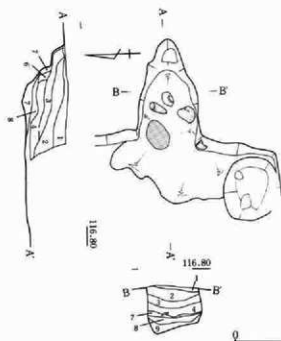


Fig.62 G18号住居跡竈

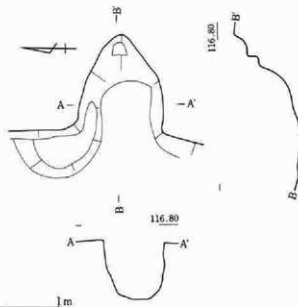


Fig.63 G18号住居跡竈掘形

第3章 G区の遺構と遺物

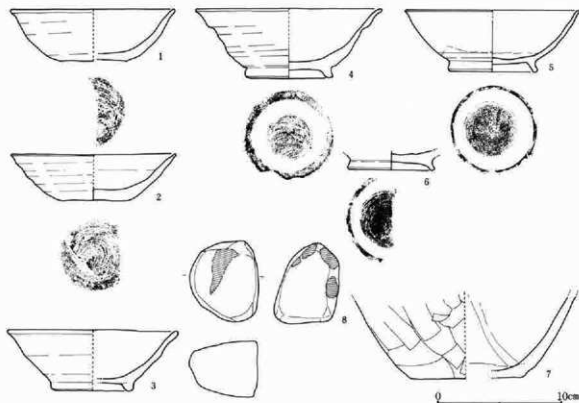


Fig.64 G18号住居跡出土遺物

G18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存域	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
64-1 22-1	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 5.6 × 4.1	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・低温 ②淡橙 ③砂混る
64-2 22-2	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 5.6 × 3.7	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
64-3 22-3	須恵器 椀	口～底 片	13.7 × 6.6 × 4.8	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台模痕で。	①酸化・低温 ②焼灰 ③緻密
64-4 22-4	須恵器 椀	口～底 片	15.0 × 7.0 × 5.5	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台模痕で。	①酸化・低温 ②によ い黄橙 ③細砂混る
64-5 22-5	灰輪陶器 椀	口～底 片	14.0 × 7.2 × 4.9	埋土	轆轤。右回転。口縁～底部指輪模転づけ。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
64-6 22-6	須恵器 椀	底 片	— × 3.4 × (1.5)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台模痕で。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
64-7 22-7	— 羽蓋	下～底 片	— × 9.0 × (6.3)	南西部床 面	紐造。模痕で。体部下位斜及び横方向、 底部不定方向貫列り。	①加酸化還元・低温 ②によい黄橙 ③砂混 る
64-8 22-8	石製品 砥石		長 6.5 幅 5.5 厚 4.4	南西部床 面	円蹄状に全面使用。荒砥。	角閃石安山岩

G19号住居跡 (Fig. 65~68・PL. 21, 22)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.60 × 2.80	N- 89° - E	東壁やや南寄り	

G区中央部に位置し、40~42G30~32の範囲にある。住居跡南半は18号住居跡、東壁北側で20号住居跡、西側で42号住居跡と各々重複している。18号より旧く、20号・42号より新しい時期の所産である。18号住居跡より掘り込みが浅いため南半の床面と南壁から西壁にかけての一部は破壊されている。壁高は遺存の良好な北壁で約20cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。竈は東壁を楕円形に掘り込み短い煙道部を作り出す。袖部の無い形で袖石や支脚材の埋設痕は確認されなかった。火床面下は深さ10cm程度のすり鉢状の窪みになっている。燃焼部幅約60cm、奥行約60cm、煙道部長さ約20cmを測る。

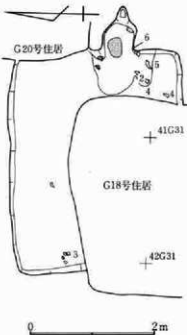


Fig. 65 G19号住居跡

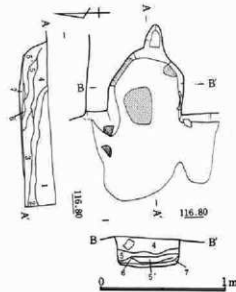


Fig. 66 G19号住居跡竈

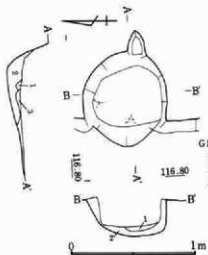


Fig. 67 G19号住居跡竈形

## G19号住居跡遺物形

- 1 暗灰色土 灰白色灰を多量に含む。
- 2 茶褐色土 灰を含み締りよし。
- 3 黄土層

## G19号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 粘性あり。
- 4 暗黒褐色土 C軽石・焼土粒を含み、粘性強い。
- 5 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 6 灰褐色土 崩落焼土塊を多量に含む。
- 7 灰層

第3章 G区の遺構と遺物

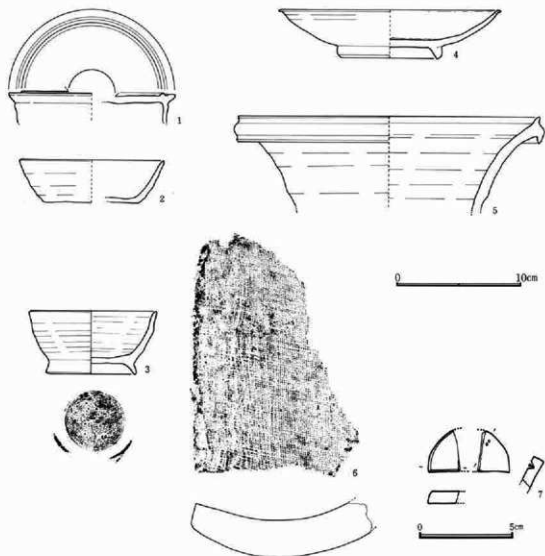


Fig.68 G19号住居跡出土遺物

G19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③断土 その他
68-1 22-1	酒器 蓋	楕円蓋	11.9 × - × (1.2)	埋土	轆轤。	①還元・過高温 ②明 オリブ灰 ③細砂混 る
68-2 22-2	酒器 杯	口～底 片	11.6 × 7.7 × 3.5	埋土	轆轤。右回転。底部回転痕有り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
68-3 22-3	酒器 椀	口～底 突	10.1 × 7.1 × 5.0	北西部床 面	轆轤。右回転。静止糸切り。付高台横溝 で。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
68-4 22-4	灰輪陶器 皿	端～底 片	18.0 × 7.0 × 5.0	南東部床 面	轆轤。付高台及び底部横溝で。口唇部外 反。端部～体部輪軸褐色染。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
68-5 22-5	酒器 壺	口～腹 片	24.8 × - × (7.4)	南東部床 面	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②暗オ リーブ灰 ③細砂混る

G19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
68-6 22-6	瓦 瓦	小片		埋土	横巻印打。上面布目肌。側端面取2度。	①還元・良好 ②褐灰 ③砂混る
68-7 22-7	石製品 丸	片	縦(2.2)横(1.6)厚0.65	埋土	欠損断面以外、研磨良好。	蛇紋岩

G20号住居跡 (Fig. 69~75・PL. 23~26)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯藏穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	6.60 × 5.20	N-93°-E	東壁やや南寄り	

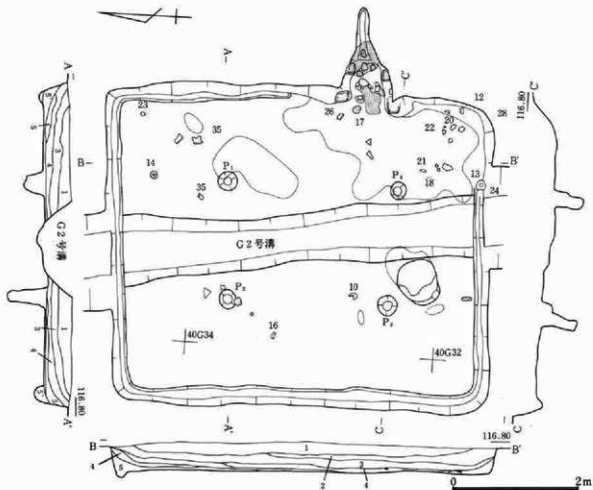


Fig.69 G20号住居跡

### 第3章 G区の遺構と遺物

#### G20号住居跡

- |         |                     |
|---------|---------------------|
| 1 褐色土   | C軽石・焼土・炭化粒を含み、罫りあり。 |
| 2 褐色土   | 焼土を多量に含む。           |
| 3 暗褐色土  | C軽石・焼土・炭化粒を少量含む。    |
| 4 暗褐色土  | 焼土・炭化粒を少量含む。        |
| 5 黒褐色土  | 粒子が粗く罫りなし。          |
| 5' 黒褐色土 |                     |

#### G20号住居跡断面

- |         |                       |
|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色土  | 黄色土粒を含む。              |
| 2 灰褐色土  | 黄色土粒を多量に含む。           |
| 3 灰褐色土  | 黄色土粒・焼土粒・炭化粒を含む。      |
| 4 暗褐色土  | 黄色土粒・焼土粒・炭化粒・灰を多量に含む。 |
| 5 暗褐色土  | 黄色土塊を多量に含む。           |
| 6 黒灰    |                       |
| 7 暗褐色土  | 焼土粒を含む。               |
| 8 暗褐色土  | 粘性あり。                 |
| 9 褐色土   | 20号住居跡床部。             |
| 10 暗褐色土 | 焼土粒を含む。               |
| 11 灰褐色土 | 黄色粒を含む。               |
| 12 暗褐色土 | 黄色土塊・焼土粒を少量含む。        |

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 13 暗褐色土 |                  |
| 14 暗褐色土 |                  |
| 15 暗褐色土 |                  |
| 16 暗褐色土 | C軽石を含む。          |
| 17 暗褐色土 | C軽石・焼土粒を少量含む。    |
| 18 灰褐色土 | 黄色土粒を含む。         |
| 19 暗褐色土 | 黄色土塊を含む。         |
| 20 灰褐色土 | 焼土・灰・黄色土塊を多量に含む。 |
| 21 暗褐色土 | 黄色土粒を多量に含む。      |
| 22 暗褐色土 | 粘性あり。            |
| 23 暗褐色土 | 罫りあり。            |
| 24 暗褐色土 | 粘性が強い。           |
| 25 黒灰   |                  |
| 26 暗褐色土 | 焼土粒・灰・黄色塊を含む。    |
| 27 暗褐色土 | 焼土粒・黄色土粒を含む。     |
| 28 暗褐色土 | 黄色土粒を含む。         |

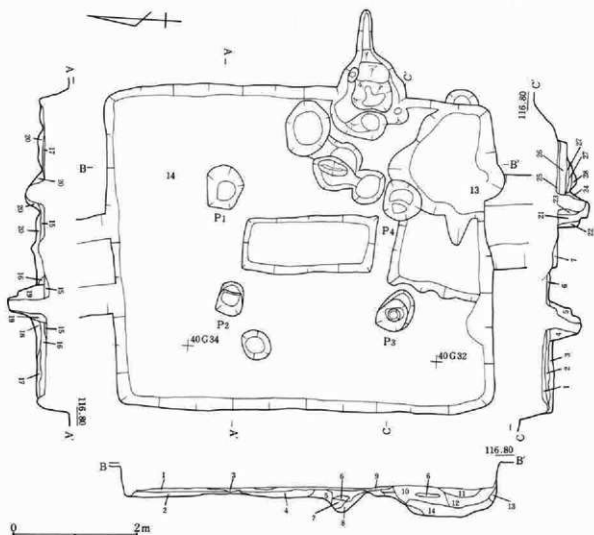


Fig.70 G20号住居跡撮影形



G区中央部に位置し、37~40G31~34の範囲にある。当区に検出された竪穴住居跡の中で最大の規模をもつ。南西部で19号住居跡、南東部で21号住居跡と重複している。また住居跡中央は南北に延びる2号溝によって断ち切られている。19号・21号住居跡との新旧関係は両者より古い時期の所産である。壁はいずれも遺存状態が良好で高さ30~40cmを測る。南東の一部を除き各壁下には溝が巡る。幅10~20cm、深さ4~12cmを測る。主柱穴は4個検出されている。検出時の観察では柱径は約10cmであった。断割による各柱穴掘形の深さはP<sub>1</sub>30cm・P<sub>2</sub>64cm・P<sub>3</sub>58cm・P<sub>4</sub>54cmを測る。南方やや西よりに炉跡と考えられる施設が検出されている。長径84cm、短径70cm、深さ20cmの円形で上層には青黒色の灰層が堆積し、底面は焼土化している。竈は東壁を楕円形に掘り込み、長い煙道部を作り出す。袖部には凝灰岩質で長方形の加工材が立てられる。またこの袖石と間隔をおいて燃焼部奥部に同質の切り石を対置させている。竈壁の補強材と考えられる。燃焼部中央の火床には、円錐形に成形された凝灰岩質の支脚材が埋設されている。燃焼部幅約60cm、奥行約65cm、煙道部長さ約80cmを測る。出土遺物は竈周辺に多く検出された。

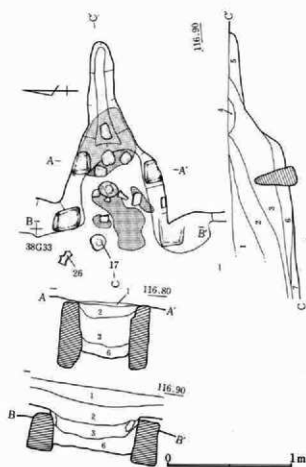


Fig.71 G20号住居跡竈

## G20号住居跡竈

- 1 褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 灰灰を少量・赤褐色土を多量に含む。
- 4 黒灰・焼土塊を含む。副底焼土。
- 5 暗褐色土 焼土粒・C軽石を含む。
- 6 灰層
- 7 灰層

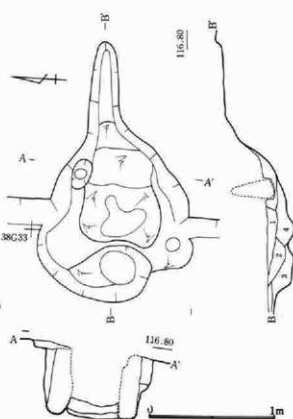


Fig.72 G20号住居跡竈掘形

## G20号住居跡竈掘形

- 1 褐色土 焼土粒・白色灰・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・白色砂質土を含む。
- 3 炭化層 黄色Loam塊を多量含む。
- 4 暗褐色土 焼土塊・灰を含む。

第3章 G区の遺構と遺物

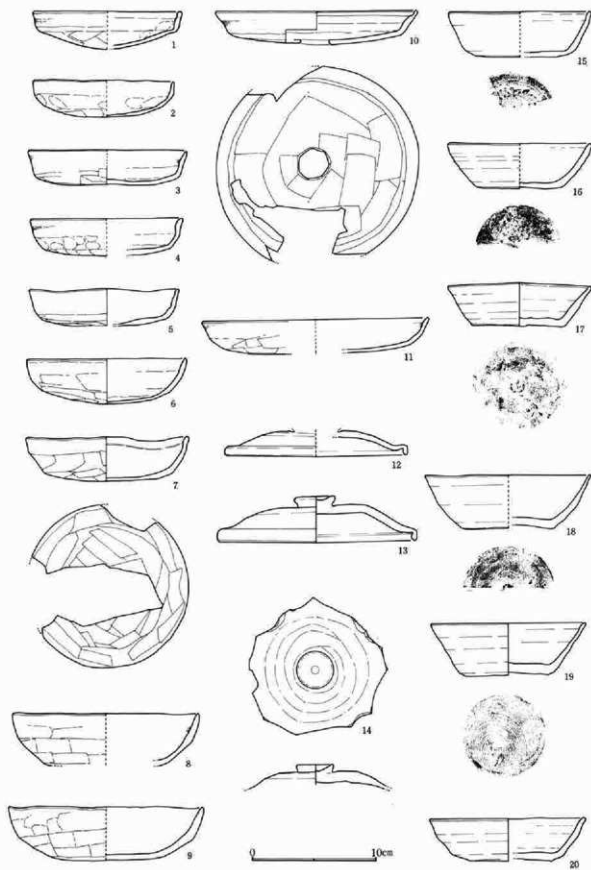


Fig.73 G20号住居跡出土遺物(1)

第2節 G区の整穴住居跡と遺物

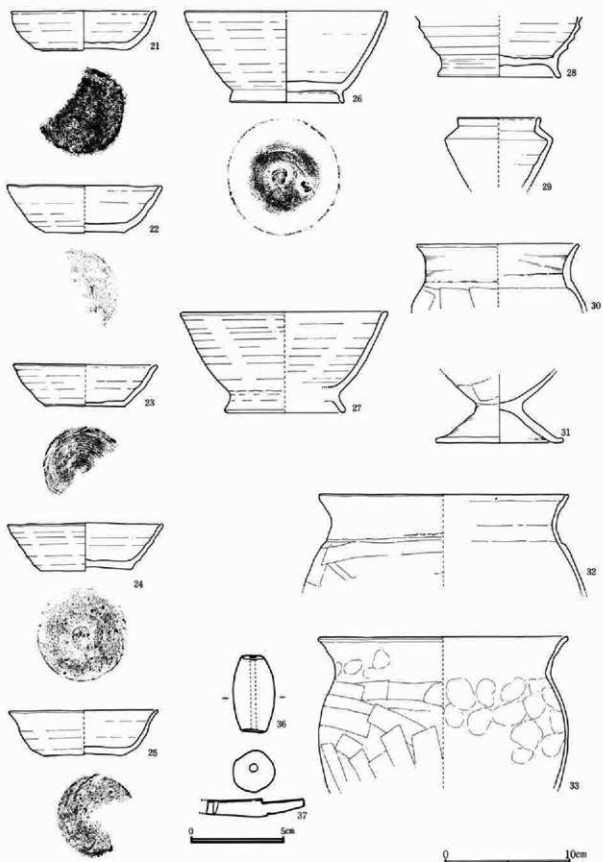


Fig.74 G20号住居跡出土遺物(2)

第3章 G区の遺構と遺物

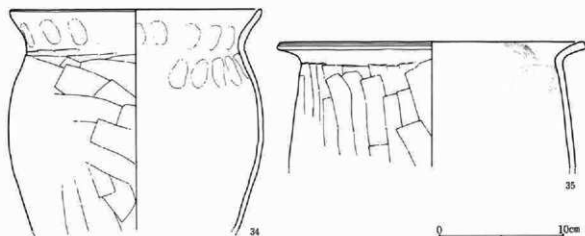


Fig.75 G20号住居跡出土遺物(3)

G20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③他
73-1 24-1	土器 杯	口~底 1/2	11.9 × 11.0 × 3.0	貯蔵穴埋 土	指押。無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・並 ②によい ③細砂混る
73-2 24-2	土器 杯	口~底 1/2	11.3 × 9.4 × 2.9	埋 土	指押。無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
73-3 24-3	土器 杯	口~底 1/2	12.8 × 11.3 × 2.8	床下埋土	指押。無で。腰部横方向、底部不定方向 寛削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
73-4 24-4	土器 杯	口~底 1/2	12.2 × 10.2 × 3.0	床下埋土	指押。無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
73-5 24-5	土器 杯	口~底 1/2	12.0 × 10.0 × 3.0	床下埋土	指押。無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
73-6 24-6	土器 杯	口~底 1/2	12.8 × 10.0 × 3.6	貯蔵穴・ 床下埋土	指押。無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
73-7 24-7	土器 杯	口~底 1/2	13.0 × 10.3 × 3.5	貯蔵穴・ 埋土	指押。体部無で粗い。底部不定方向寛削り。 口縁部歪み顕著。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
73-8 24-8	土器 杯	口~底 小片	15.0 × 10.0 × 4.2	埋 土	体部横方向、底部不定方向寛削り後、口 縁部無で。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
73-9 24-9	土器 杯	口~底 1/2	15.6 × 9.5 × 4.2	2号溝重 複部埋土	体部横方向、底部不定方向寛削り後、口 縁部無で。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
73-10 24-10	土器 皿	端~底 1/2	16.2 × 13.4 × 2.7	南西部床 面	端部無で。底部不定方向寛削り。見込部 寛削り後無で。底部中央、焼成後穿孔。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
73-11 24-11	土器 皿	端~底 小片	18.2 × 14.7 × 2.7	床下埋土	指押。無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

G20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口徑 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
73-12 24-12	須恵器 蓋	横穴頂 蓋	14.6 × ー × ( 2.2)	南東部床 面	轆轤。右回転。頂部3段回転削り。	①加酸化還元・良好 ②灰黄 ③細砂混る
73-13 24-13	須恵器 蓋	横～端 蓋	16.0 × 横 3.3 × 3.7	南東部床 下	轆轤。右回転。頂部回転削り。環状溝。 涙みあり。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
73-14 24-14	須恵器 蓋	横～頂 蓋	(11.0) × 横 3.0 × 2.0	北東部床 下	轆轤。右回転。頂部回転削り。環状溝。 底部意匠的打削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
73-15 24-15	須恵器 杯	口～底 小片	11.4 × 7.8 × 3.6	竈内埋土	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密 一部砂混る
73-16 25-16	須恵器 杯	口～底 片	11.5 × 6.8 × 3.6	北西部床 面	轆轤。右回転。底部削り後撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
73-17 25-17	須恵器 杯	口～底 (完)	11.5 × 8.6 × 3.5	電手前床 面	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
73-18 25-18	須恵器 杯	口～底 片	13.3 × 7.4 × 4.3	南東部床 面	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
73-19 25-19	須恵器 杯	口～底 片	12.4 × 7.4 × 4.8	南東部床 面	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
73-20 25-20	須恵器 杯	口～底 片	12.5 × 6.7 × 3.3	南東部床 面	轆轤。右回転。底部撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
74-21 25-21	須恵器 杯	口～底 片	11.5 × 7.5 × 3.1	南東部床 面	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
74-22 25-22	須恵器 杯	口～底 片	12.4 × 6.4 × 3.7	南東部床 面	轆轤。右回転削り。腰部に強い撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
74-23 25-23	須恵器 杯	口～底 片	11.5 × 6.4 × 3.3	北東部床 面	轆轤。右回転削り。無調整。	①加酸化還元・良好 ②灰白～灰黄 ③緻密
74-24 25-24	須恵器 杯	口～底 片	12.4 × 6.7 × 4.1	床下埋土	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
74-25 25-25	須恵器 杯	口～底 片	11.9 × 6.5 × 3.6	床下埋土	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
74-26 25-26	須恵器 碗	口～底 片	14.2 × 9.1 × 7.3	電手前床 面	轆轤。右回転削り。 無調整。付高台横溝で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
74-27 25-27	須恵器 碗	口～底 小片	16.6 × 9.7 × 8.0	埋土	轆轤。右回転。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
74-28 25-28	須恵器 碗	体～底 片	ー × 9.8 × ( 4.8)	南東部床 面	轆轤。右回転削り。無調整。付高台横 溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
74-29 25-29	須恵器 小 片	口～体 小片	6.5 × ー × ( 5.5)	埋土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②暗緑 灰 ③細砂混る
74-30 25-30	土器 台付 壺	口～頸 片	12.9 × ー × ( 5.0)	埋土	紐造。口頸部撫で。体部横方向削り。 内面横方向削り。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③砂混る

第3章 G区の遺構と遺物

G20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	高さ × 器高			
74-31 25-31	土師器 台付甕	下~台 1/2	—	× 10.2 × ( 5.3)	埋 土	紐造。体部削り。台部削り後撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
74-32	土師器 甕	口~上 1/2	20.0 ×	— × ( 7.5)	埋 土	紐造。口頸部削り後撫で。体部横方向削り、内面横方向直撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い赤褐 ③細砂混る
74-33 25-33	土師器 甕	口~中 1/2	20.0 ×	— × (12.0)	埋 土	紐造。口頸部指押、削り後撫で。体部上位横~斜方向、中位縦方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
75-34 25-34	土師器 甕	口~下 1/2	20.2 ×	— × (17.5)	埋 土	紐造。口頸部指押後撫で。体部上~中位斜方向、下位縦方向削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
75-35 26-35	土師器 甕	口~上 1/2	24.6 ×	— × (10.0)	北東部床 下	長胴。口頸部強く外反、撫で。体部縦方向削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②にぶい褐 ③細砂混 る
74-36 26-36	土製品 土	完	長 4.1	幅 2.2 厚 2.2	北西部床 下Plt	棒付握。両端取又は棒。	①酸化・良好 ②灰白一部黒変 ③緻 密
74-37 25-37	鉄製品 刀		長(5.3)	刃部長(3.2) 刃部幅0.7 柄部幅0.4	埋 土		

G21号住居跡 (Fig. 76~80・PL. 26, 27)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.81 × 2.66	N-92.5°-E	東壁やや南寄り	円形 65 × 45 × 14

G区中央部に位置し、36~38G30~32の範囲にある。北西部で20号住居跡と南部で22号住居跡と重複している。新旧関係は、20号住居跡より新しく、22号住居跡より古い時期の所産と考えられる。南壁のほとんどと貯蔵穴の一部は22号住居跡によって破壊されている。壁高は約18cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床は電前から中央部にかけて固く踏みしめられている。床面下の掘形によれば、中央部は10~20cmの深さに掘り窪められ、Loam粒混りの粘質土で埋められている。電の前方から貯蔵穴上面にかけて多量の灰が流れ出しており、貯蔵穴にかかり灰層の一部は22号住居跡の掘形によってとり除かれている。電は東壁を隅円形に掘り込んでおり、煙道にあたる部分の作り出しは無かったようである。袖部には袖材にあたるような用材は検出されていないが、掘形の段階ではこの部分に径約18cm程度の小穴が認められ、袖材が存在したと想定される。燃焼部は深さ10cm程度のすり鉢状の窪みになる。袖部小穴による内法は約30cm、燃焼部幅約35cm、奥行約55cmを測る。

出土遺物は比較的多く、とくに貯蔵穴周辺に集中している。

第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

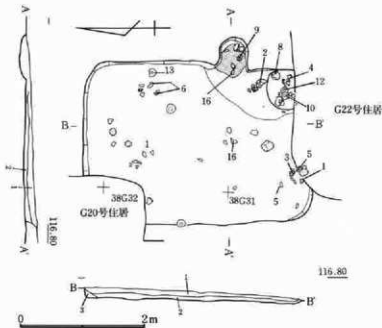


Fig.76 G21号住居跡

G21号住居跡

- 1 褐色土 C軽石を含む。
- 2 褐色土 C軽石・炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 2よりC軽石の量が少ない。

G21号住居跡遺形

- 1 火床 細粒・C軽石・Loamを含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石を多く含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・Loamを少量含む。
- 5 暗褐色土 Loam塊を含む。

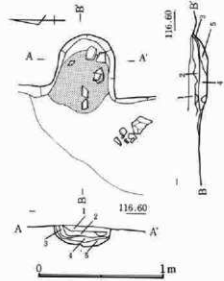


Fig.77 G21号住居跡竈

G21号住居跡竈

- 1 褐色土 C軽石・焼土粒を少量含む。
- 2 焼土粒層 焼土粒・灰を多量に含む。
- 3 褐色土 焼土粒を含み、堅く締る。
- 4 火床
- 5 暗褐色土 灰・焼土粒を含む。

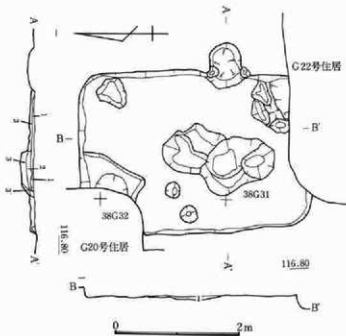


Fig.78 G21号住居跡掘形

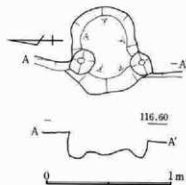


Fig.79 G21号住居跡電探形

第3章 G区の遺構と遺物

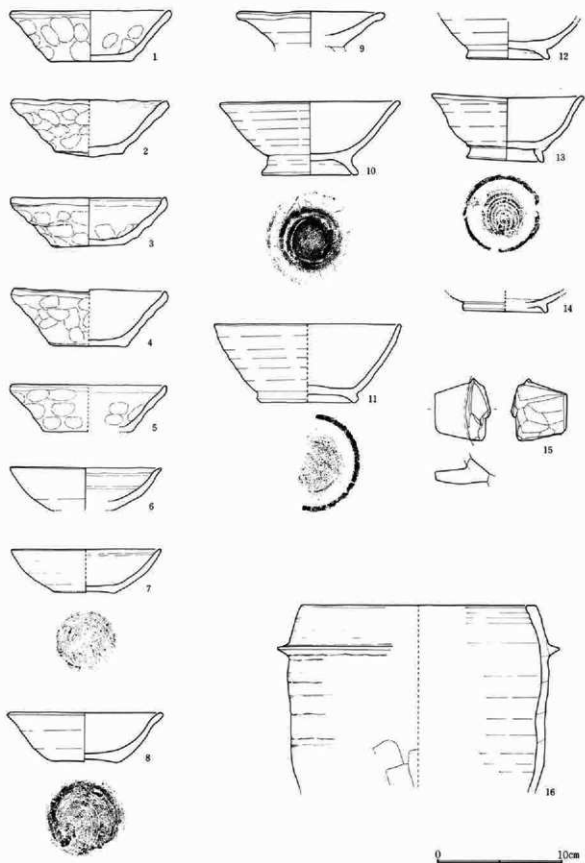


Fig.80 G21号住居跡出土遺物



G21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
80-1 27-1	土師器 杯	口～底 片	13.0 × 6.6 × 4.0	南西部床 面	指押。口縁及び内面撫で。底部不定方向 削削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
80-2 27-2	土師器 杯	口～底 片	12.8 × 5.5 × 4.5	南東部床 面	指押。口縁及び内面撫で。底部不定方向 削削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
80-3 27-3	土師器 杯	口～底 片	12.6 × 6.0 × 3.9	南西部床 面	指押。口縁及び内面撫で。底部不定方向 削削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
80-4 27-4	土師器 杯	口～底 片	12.5 × 6.0 × 4.5	南東部床 面	指押。口縁及び内面撫で。底部不定方向 削削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
80-5 27-5	土師器 杯	口～体 片	12.5 × 7.0 × 3.7	南西部床 面	指押。口縁及び内面撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
80-6 27-6	カワラケ 杯	口～底 片	12.1 × 5.0 × 3.4	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
80-7 27-7	カワラケ 杯	口～底 片	12.0 × 5.0 × 3.4	北西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
80-8 27-8	須恵器 杯	口～底 片	12.5 × 5.1 × 3.9	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
80-9 27-9	カワラケ 皿	片 高台部 欠損	11.8 × ( 5.7 ) × ( 2.9 )	竈 内	轆轤。右回転糸切り。	①酸化・並 ②淡橙 ③砂混る
80-10 27-10	須恵器 椀	口～底 片	14.4 × 7.7 × 5.7	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②淡黄 ③細砂混る
80-11 27-11	須恵器 椀	口～底 片	15.0 × 8.1 × 6.2	貯蔵穴	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・不良 ②橙 ③砂混る
80-12 27-12	須恵器 杯	体～底 片	— × 6.6 × ( 3.2 )	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
80-13 27-13	須恵器 椀	口～底 完	12.1 × 6.2 × 5.2	北東部床 面	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。 歪み顕著。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
80-14 27-14	灰輪陶器 椀 小片	底 小片	— × 6.6 × ( 1.6 )	埋 土	轆轤。付高台及び底部横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
80-15 27-15	須恵器 杯	耳		埋 土	両面削削り。端部面取。	①還元・良好 ②暗灰 ③緻密
80-16 27-16	一 羽	口～中 片	18.6 × — × ( 14.5 )	中央部床 面	紐造。横撫で。体部下位斜方向削削り。	①還元・低温 ②灰白 ～によい黄褐色 ③細砂 混る

第3章 G区の遺構と遺物

G22号住居跡 (Fig. 81・85・PL. 28、29)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.57 × 3.50	N—86°—E	東壁	円形 65 × 65 × 33.5

G区中央部に位置し、36・37G28～30の範囲にある。北部で21号住居跡と東部で23号住居跡と重複している。新旧関係は、21号・23号住居跡跡跡より新しい時期の所産である。壁高は約26cmを測り、電の付設される東壁を除き北、西、南壁の下には幅約12cm、深さ4～5cmの溝が巡る。床面は全体によく踏みしめられていたが掘形では中央部を除き南北寄りに多くの土坑状の窪みが掘られている。電は東壁に楕円形に作り出されており袖部あるいは煙道部は認められなかった。掘形においてもそれらしき痕跡は認められない。燃焼奥

部には電補強材と思われる川原石が対の形で埋設されていた。火床下は10～17cmの深さで2個のすり鉢状の窪みが検出された。燃焼部幅約70cm、奥行約65cmを測る。遺物は散在していたが、床下面からも出土している。

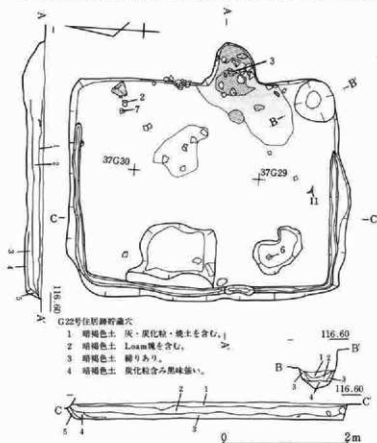


Fig.81 G22号住居跡

G22号住居跡電

- 1 褐色土 C軽石多量・炭化粒を少量含む、締りあり。
- 2 褐色土 C軽石は1より少なく、炭化粒が多い。
- 3 灰褐色土 C軽石少量・炭化粒・灰を多量に含む。
- 4 褐色土 Loam層を含み、灰を散らす。
- 5 褐色土 焼土粒を含み、締りなし。
- 6 灰層
- 7 焼土層

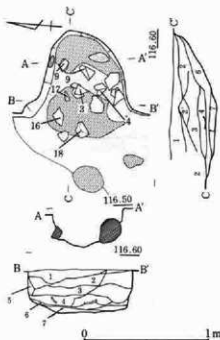
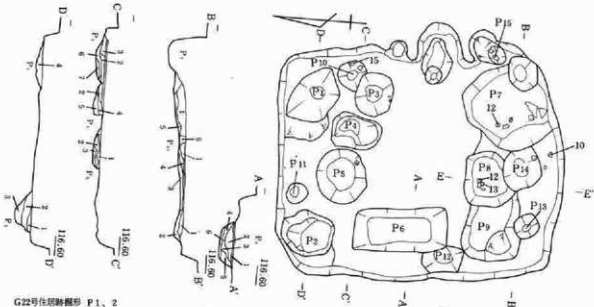


Fig.82 G22号住居跡電



G22号住居跡断形 P1, 2

- 1 暗褐色土 Loam 粒・C 軽石を含み細り、粘性あり。
- 2 褐色土 Loam 粒を多量に含み、粘性あり。粘性細りあり。
- 3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒・C 軽石を含む。
- 4 暗褐色土 炭化粒・焼土粒・C 軽石を含む。

P3, 4, 5

- 1 床
- 2 灰褐色土
- 3 焼土層
- 4 灰褐色土 Loam 層を含み、粘性あり。
- 5 暗褐色土 Loam 粒を含む。
- 6 暗褐色土 褐色味が強い。
- 7 暗褐色土 堅く細り粘性の強い層。

Fig.83 G22号住居跡断形

P6

- 1 床
- 2 暗褐色土 C 軽石・粘性褐色土塊を含む。
- 3 褐色土 粘性土
- 4 暗褐色土 粘性あるが細り少ない。
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 堅く細り粘性強い。

P7, 14

- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化粒・Loam 粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘性・褐色味強い。
- 3 明褐色土 Loam 粒を含む。
- 4 明褐色土 粘性
- 5 明褐色土 粘性弱い。
- 6 暗褐色土

P8, 14

- 1 床
- 2 暗褐色土
- 3 明褐色土 堅く細っている。
- 4 明褐色土 粘性
- 5 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 6 暗褐色土 粘性強い。

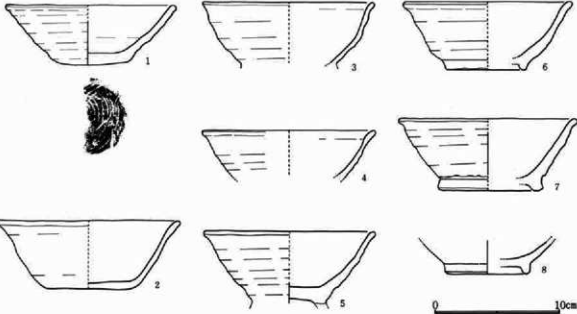


Fig.84 G22号住居跡出土遺物 (1)

第3章 G区の遺構と遺物

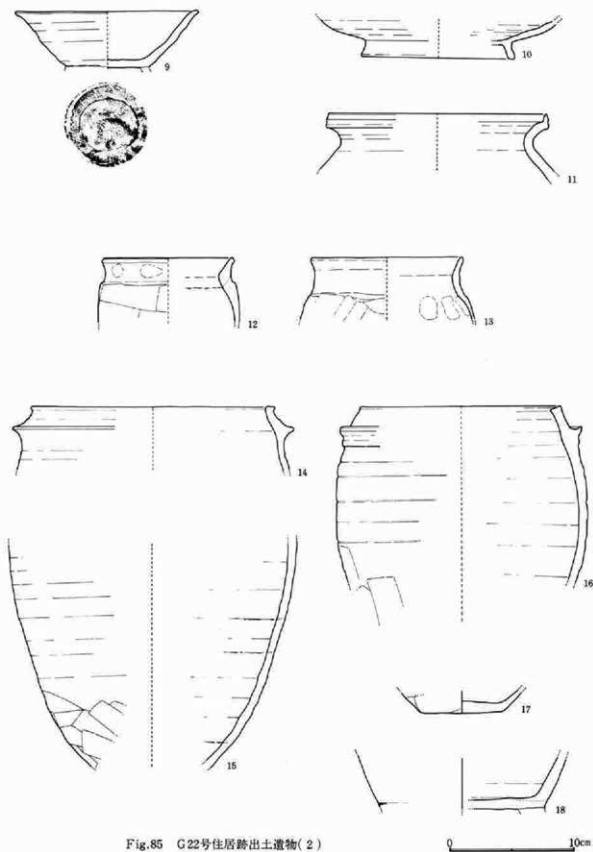


Fig.85 G22号住居跡出土遺物(2)

G22号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
84-1 28-1	須恵器 椀	口～底 片	13.9 × 5.0 × 4.8	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。厚手。	①酸化・低温 ②にぶい赤褐色 ③砂混る
84-2 28-2	須恵器 椀	口～底 片	14.6 × 6.6 × 5.4	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。厚手。	①還元・低温 ②灰褐色 ③砂混る
84-3 28-3	須恵器 椀	口～体 小片	14.0 × — × (3.8)	窠内	轆轤。右回転。	①酸化 ②橙 ③砂混る
84-4 28-4	須恵器 椀	口～体 片	13.8 × — × (4.8)	窠内、貯 蔵穴埋土	轆轤。右回転。	①酸化 ②橙 ③砂混る
84-5 28-5	須恵器 椀	体～底 片	— × 6.8 × (2.6)	床下 Pit 内	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
84-6 28-6	須恵器 椀	口～体 片	13.3 × 6.0 × 5.4	南西部 Pit内	轆轤。右回転。付高台横断で。底部意図 的穿孔か。厚手。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
84-7 29-7	須恵器 椀	口～底 片	14.2 × 6.2 × (4.5)	窠内	轆轤。右回転糸切り。付高台剥落。	①還元・低温 ②灰黄褐色 ③細砂混る
84-8 29-8	須恵器 椀	口～底 片	15.4 × 7.0 × 5.7	北東部床 面	轆轤。右回転。付高台横断で。厚手。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
85-9 29-9	須恵器 椀	口～底 片	13.8 × (6.0) × (5.7)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台大部分欠損、 横断で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る
85-10 29-10	須恵器 盤	体～底 小片	— × 12.4 × (3.0)	南壁中央 寄床下	轆轤。右回転。付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
85-11 29-11	須恵器 盤	口～頸 小片	9.8 × — × (5.2)	南壁中央 寄床面	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③緻密
85-12 29-12	土師器 壺	口～上 片	10.3 × — × (5.1)	南東、南 西部床下	紐造。口頸部指押後横断で。体部横方向 寬削り、内面横断で。	①酸化・良好 ②明赤褐色 ③細砂混る
85-13 29-13	土師器 壺	口～上 片	12.2 × — × (5.2)	貯蔵穴南 西部床下	紐造。口頸部横断で。体部横方向寬削り、 内面寬断で後断で。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③細砂混 る
85-14 29-14	— 羽蓋	口～上 小片	19.4 × — × (5.0)	貯蔵穴	紐造。横断で。	①還元・低温 ②灰 ③砂混る
85-15 29-15	— 羽蓋	中～下 小片	— × — × (11.8)	北東部床 下	紐造。横断で。体部下位斜方向寬削り。	①加酸化還元・低温 ② 浅黄褐色 ③砂混る
85-16 29-16	— 羽蓋	口～中 片	15.6 × — × (13.8)	窠内灰面 甕手前床 面貯蔵穴	紐造。横断で。体部下位縦方向寬削り。	①加酸化還元・低温 ②灰白～明黄褐色 ③砂 混る
85-17 29-17	須恵器 壺	底 片	— × 6.6 × (1.8)	窠内灰面	轆轤。右回転。体部下位横方向、底部不 定方向寬削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
85-18 29-18	軟質土器 壺	下～底 片	— × 13.2 × (4.2)	窠内灰面	底部円柱。体部強い横断で。底部不定方 向寬削り。付高台剥落。	①酸化・良好 ②稀灰 ③緻密

第3章 G区の遺構と遺物

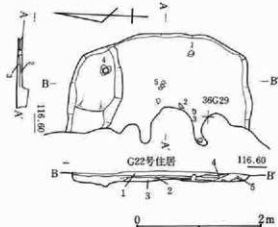


Fig.86 G23号住居跡

G23号住居跡 (Fig. 86, 87・PL. 29, 30)

G区中央部に位置し、35G28～30の範囲にある。竈など住居跡を示すような諸施設の検出はなく、ここでは可能性のある遺構として扱う。22号住居跡と重複しており、新旧関係は22号住居跡より古い時期の所産である。西半は22号住居跡によって破壊されている。壁高は約14cmを測り、床面は総じて軟弱である。遺物は少数で散在している。

G23号住居跡

- 1 褐色土 C軽石を含む。
- 2 灰色土 焼土粒を少量含む。
- 3 褐色土 焼土粒・炭化粒を少量含む。
- 4 灰層
- 5 灰層

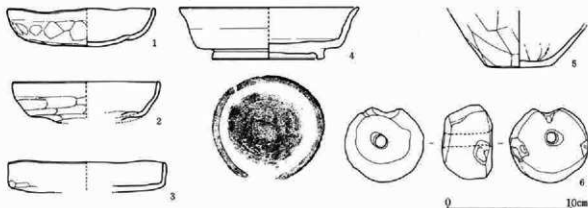


Fig.87 G23号住居跡出土遺物

G23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
87-1 30-1	土師器 杯	口～底 1/4	11.9 × 11.0 × 3.0	東部床面	指押。撫で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
87-2 30-2	土師器 杯	口～底 1/4	11.8 × 9.0 × 3.3	東部床面	指押。撫で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
87-3 30-3	土師器 杯 小片	口～底 小片	12.6 × 12.2 × 2.4	東部床面	指押。撫で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③細砂混る
87-4 30-4	須恵器 椀	口～底 1/4	14.4 × 9.0 × 4.1	東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横撫で。腰部寛撫で。	①還元・良好 ②オリ ープ灰 ③細砂混る
87-5 30-5	土師器 甕	下～底 1/4	— × 5.2 × (4.5)	東部床面	紐造。体部斜方向、底部不定方向寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
87-6 30-6	石製品 紡錘車	完	縦 5.9 横 6.3 厚 4.0	埋土	研磨。両面穿孔。	輝石安山岩 (軽石)

G24号住居跡 (Fig. 88~92・PL. 30)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竪 位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.79 × 3.30	N-74°-E	東壁やや南寄り	円形 73 × 64 × 22

G区中央やや東寄りに位置し、34・35G30~32の範囲にある。壁高は10~16cmを測り、傾斜をもって立ちあがる。床面は全体に軟弱である。竪は東壁を隅円形に掘り込み、左袖部は地の土を残している。右袖部には袖材を埋設したと考えられる浅い小穴が検出されている。電磁形では燃焼部の中央と周縁には小穴が穿たれ支脚材及び電壁補強材の存在したことが窺われる。遺物の出土は少量である。

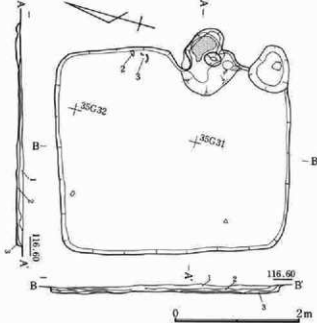


Fig.88 G24号住居跡

## G24号住居跡

- |        |                  |
|--------|------------------|
| 1 褐色土  | C軽石・焼土粒を含む。      |
| 2 暗褐色土 | C軽石・焼土粒炭化粒を少量含む。 |
| 3 暗褐色土 |                  |

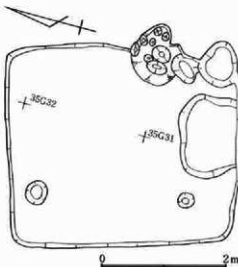


Fig.90 G24号住居跡掘形

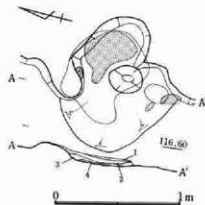


Fig.89 G24号住居跡竪

## G24号住居跡竪

- |        |              |
|--------|--------------|
| 1 暗褐色土 | やや粘性あり。      |
| 2 暗褐色土 | 崩落焼土・黒灰を含む。  |
| 3 黒灰層  | 黒灰           |
| 4 赤褐色土 | 電床部・焼土化している。 |

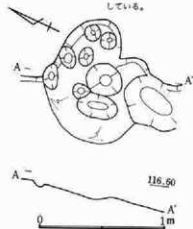


Fig.91 G24号住居跡竪掘形

第3章 G区の遺構と遺物

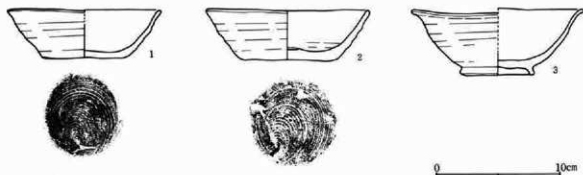


Fig.92 G24号住居跡出土遺物

G24号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
92-1 30-1	須恵器 杯	口~底 1/2	12.6 × 6.4 × 3.9	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化する元・低温 ②によい黄澄 ③細砂混る
92-2 30-2	須恵器 杯	口~底 1/2	13.1 × 6.9 × 4.0	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。見込部中 央に引上突起。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
92-3 30-3	須恵器 椀	口~底 1/2	13.8 × 6.0 × 5.2	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①酸化 ②によい黄 ③砂混る

G25号住居跡 (Fig. 93~96・PL. 31)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.18 × 3.90	N— 95° — E	東壁ほぼ中央	円形 55 × 55 × 13

G区東寄りに位置し、31~33G31~33の範囲にある。壁高は約16cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。壁下には幅約12cm、深さ約6cmの溝が走り、溝の中には径6~10cm前後の小穴が検出されている。南壁には、壁下の溝は明瞭ではないが、数個の小穴が確認されており、本来は存在していたと考えられる。また、溝中の小穴の間隔は不統一であり、各壁下に存在する数も一様ではない。床面は南半が固く踏みしめるが、とくに電前が固い。床下には多数の小穴が穿たれるが、何らの規則性も認められず、その機能、目的を知る事はできない。電は、東壁に2基列して付設される。いずれも壁を楕円形に作り出してあり、煙道にあたる部分は存在しないようである。A・B電の相貫点はA電には明瞭な袖部がなく、B電には袖部が存在する点である。またB電からはAと比べて広範囲に灰の流れ出しが見られる。A、Bの電の新旧関係はかならずしも明確ではないが、袖部の存在や、灰層の分布範囲を考慮するならば、多少ともB電が新しく構築された様相が認められる。

遺物は比較的少なく、電内及びその周辺に出土する。



第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

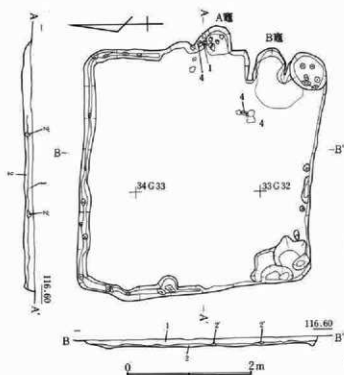


Fig.93 G25号住居跡

G25号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・白色粘土塊を含む。
- 2 暗褐色土 白色粘土塊・C軽石を含む。
- 3 白色粘土 C軽石を含む。

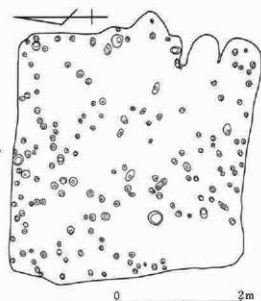


Fig.94 G25号住居跡撮影

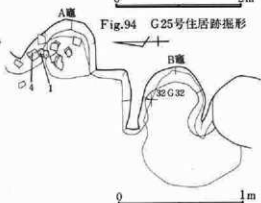


Fig.95 G25号住居跡竈A・B

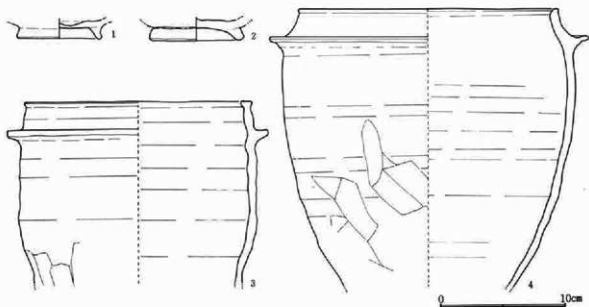


Fig.96 G25号住居跡出土遺物

G25号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調査の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
96-1 31-1	須恵器 椀	底	— × 6.8 × (1.2)	竈内	縞縷。右回転糸切り。付高台横撫で。焼。	①酸化 ②黒 ③砂張る
96-2 31-2	須恵器 椀	底 片	— × 7.6 × (1.8)	竈内	縞縷。右回転糸切り。付高台横撫で、厚手。	①酸化 ②にぶい橙 ③砂張る
96-3 31-3	— 羽蓋	口~中 小片	18.4 × — × (14.5)	埋土	縞造。横撫で。体部中~下位縦方向覆削り。	①還元・低温 ②灰白 ③砂張る
96-4 31-4	— 羽蓋	口~下 片	20.8 × — × (22.2)	竈内・竈 手前床面	縞造。横撫で。体部中~下位斜方向覆削り。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂張る

G27号住居跡 (Fig. 97、98・PL. 32)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.90 ×	N-100°-E	東壁ほぼ中央	

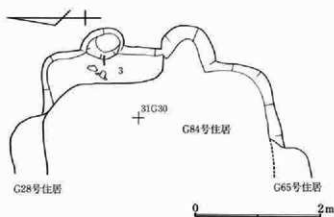


Fig.97 G27号住居跡

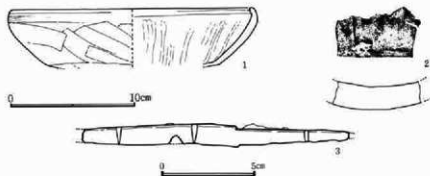


Fig.98 G27号住居跡出土遺物

G区東南部に位置し、30・31G28~30の範囲にある。28・65・78・84・90号の住居跡と重複し、あるいは重複関係にあると思われる。但し明らかな新旧関係が確認できるものは、78号と84号住居跡である。84号住居跡より旧く、78号住居跡よりは新しい。重複によって住居跡のほとんどが破壊され、残存するのは東壁、北壁のわずかな部分である。また竈も84号住居跡の竈とほとんど重複しており明

瞭な形ではとらえられていない。遺物は少ないが鉄器の出土がある。

G27号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存数	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高	厚			
98-1 32-1	土師器 鉢	口～体 4	19.2 × 13.8 × 4.5		埋土	口唇部内溝。口縁横方向磨き。体部斜方向磨削。内面割で後、放射状磨き。	①酸化 ②浅黄橙 ③細砂混る
98-2 32-2	瓦 平瓦	小片		厚 1.8	埋土	横巻叩打。上面布目痕。下面織目叩打痕。端部面取。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
98-3 32-3	鉄製品 刀子	両端 欠損	長さ(14.1) 刃部幅1.1 柄部幅0.6		北東部 床面	両端欠損	

G28号住居跡 (Fig. 99・PL. 32)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.41 × 2.90			

G区南東部に位置し、30～32G29・30の範囲にある。27・65・78・84・90号の住居跡と重複し、あるいは

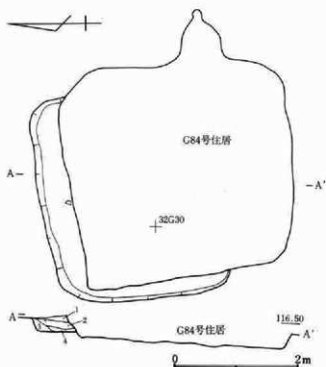


Fig.99 G28号住居跡

重複関係にあると思われる。但しの中で、27号住居跡との新旧関係は明らかでない。65・78・90号住居跡より新しく、84号住居跡より古い時期の所産である。ほとんどが84号住居跡と重なり東北隅から北壁と西壁の遺存が確認できたにすぎない。竈など諸施設の検出はない。壁高は約13cmを測る。

## G28号住居跡

- 1 褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。大粒C軽石・焼土粒を少量含む堅く締る。
- 2 暗褐色土 Loom 織を含み粘性あり。
- 3 褐色土 Loom 織を含み粘性あり。
- 4 焼土 灰を含む。

G31号住居跡 (Fig. 100~103・PL. 32~34)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.60 × 2.40	N-87.5°-E	東壁やや南寄り	

G区東南部に位置し、28~30G26・27の範囲にある。40号住居跡と重複しており、新旧の関係は40号住居跡より新しい時期の所産である。北側と南側は予備調査時の試掘溝及び攪乱がありその一部は破壊されている。

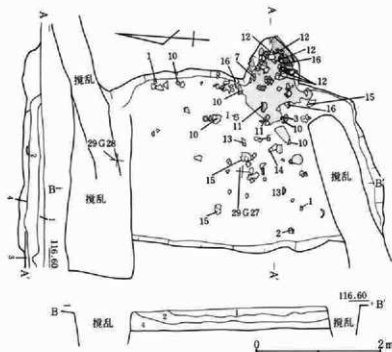


Fig.100 G31号住居跡

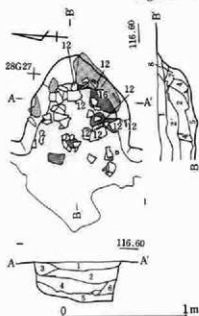


Fig.101 G31号住居跡電

とくに北壁はまったくその様相を知り得ない。壁高は約32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は竈前面が固く踏みしめられている。竈は東壁を楕円形に掘り込み、袖・煙道部などの作り出しはない。竈燃焼部幅約80cm、奥行き約80cmを測る。遺物は多く竈内及びその前方に散在状態で出土している。

## G31号住居跡

- 1 暗褐色土 住居・竈等の土を含む。粗い。
- 2 暗褐色土 住居・竈等の土を含む。細かい。
- 3 淡黄色土 住居・竈等の土を含む。
- 4 暗褐色土 住居・竈等の土を含む。細かい。

## G31号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石を多量、炭土粒・炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 竈周材の砂質土粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を多量、C軽石を少量含む、竈周材と思われる砂質土塊を混入。
- 4 暗褐色土 炭土粒・炭化粒を多量含む。
- 5 灰層
- 6 焼土 焼土粒・炭化粒層
- 7 焼土塊 砂質
- 8 焼土

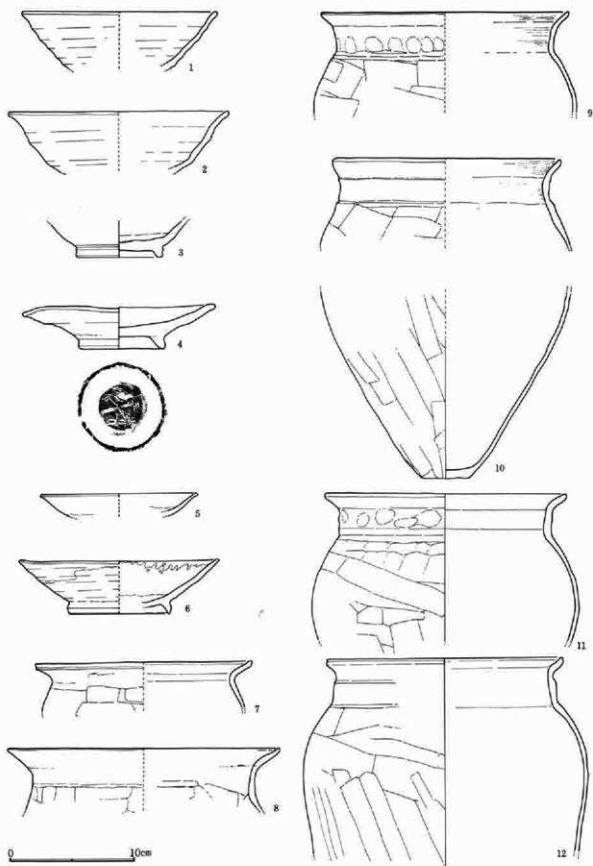


Fig.102 G31号住居跡出土遺物(1)

第3章 G区の遺構と遺物

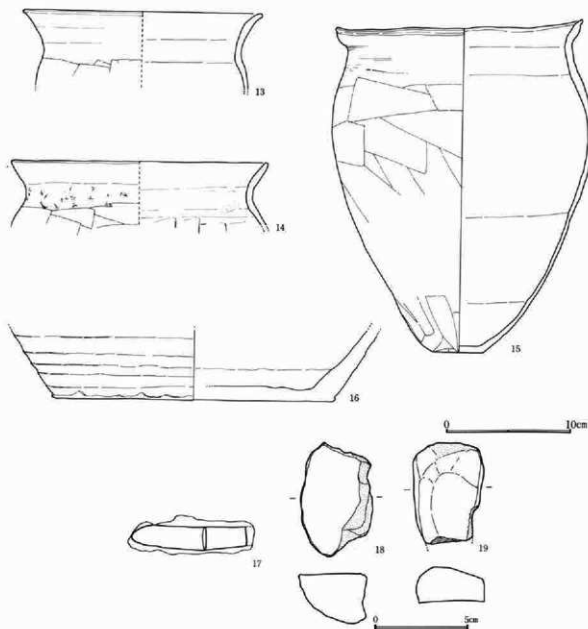


Fig.103 G31号住居跡出土遺物(2)

G31号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
102-1 33-1	須恵器 椀	口~体 片	15.6 × - × (4.6)	東部床下	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
102-2 33-2	須恵器 椀	口~体 小片	17.8 × - × (4.8)	東・中央 部床下	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
102-3 33-3	須恵器 椀	体~底 面	- × 7.0 × (2.6)	南東部床 面	轆轤。右回転未切り。付高台横断で。見 込部椅子状置置き。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

G31号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 画 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
102-4 33-4	須 恵 器 皿	口～底 ½	15.4 × 6.7 × 3.5	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。口縁歪む。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
102-5 33-5	灰 輪 陶 器 碗	口～体 ½	12.6 × 一 × (2.0)	貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転。口縁内外施輪刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
102-6 33-6	灰 輪 陶 器 碗	口～底 ½	16.2 × 7.8 × 4.3	中央部床 面	轆轤。右回転。体部指輪、口縁割落。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
102-7 33-7	土 師 器 壺	口～上 ½	17.3 × 一 × (3.8)	窠 内	紐造。口頸部撫で。体部上位横方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい赤褐 ③細砂混る
102-8 33-8	土 師 器 壺	口～上 ½	21.7 × 一 × (5.0)	埋 土	紐造。口頸部撫で。体部上位横方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混 る
102-9 33-9	土 師 器 壺	口～上 ½	19.8 × 一 × (8.0)	中央部床 面	紐造。口頸部指押後撫で。体部上位横方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混 る
102-10 33-10	土 師 器 壺	口～底 ½	18.2 × 3.7 × (21.0)	窠 内	紐造。口頸部撫で。体部上位横、中～下位縦、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③砂混る
102-11 33-11	土 師 器 壺	口～中 ½	19.2 × 一 × (10.6)	中央部床 南東床面	紐造。口頸部指押後撫で。体部上～中位横、下位縦方向寛削り。	①酸化・良好 ②褐 ③緻密
102-12 33-12	土 師 器 壺	口～中 ½	18.8 × 一 × (18.0)	窠 内	紐造。口頸部撫で。体部上位横、中～下位縦方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
103-13 34-13	土 師 器 壺	口～上 ½	19.1 × 一 × (6.0)	中央部床 面	紐造。口頸部撫で。体部上位横方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
103-14 34-14	土 師 器 壺	口～上 ½	20.6 × 一 × (5.0)	中央部床 面	紐造。口頸部粗い撫で。体部上位横方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
103-15 34-15	土 師 器 壺	口～底 ½	19.8 × 4.0 × 26.2	床面敷在	紐造。口頸部撫で。体部上位縦方向後、横方向寛削り。中～下位縦方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混 る
103-16 34-16	須 恵 器 壺	下～底 ½	一 × 22.7 × (5.7)	南東部床 面	底部・胴部下半寛削り	①還元・良好 ②灰 ③密・黒色較混る
103-17 34-17	鉄 製 品 刀	刃部	長(6.2) 幅1.2	埋 土		
103-18 34-18	石 製 品 砥 石	一部欠損	長 5.4 幅 3.8 厚 1.9	埋 土	各面使用。荒砥。	角閃石安山岩
103-19 34-19	石 製 品 砥 石		長 6.0 幅 3.8 厚 3.0	埋 土	円礫面を残す。1面使用。側部に刃当痕。荒砥。	角閃石安山岩

G33号住居跡 (Fig. 104~109・PL. 34~36)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	羅 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.23 × 3.13	N-76°-E	東壁	楕円形 113 × 70 × 20

G区東部南寄りに位置し、28~30G29~31の範囲にある。住居跡北西隅は予備調査時の試掘溝で破壊されている。壁高は約11cmを測る。床面は全体に軟弱で、東半は竈からの流出と思われる灰層によって広く覆われている。床下は中心部を除き土坑が掘られ、灰、焼土混りの土が埋め込まれている。竈は東壁を僅かに掘り込んであり、袖部・煙道部などの作り出しはない。掘形によれば燃焼部縁辺に5個の小穴が穿たれている。燃焼部幅約35cm、奥行約40cmを測る。遺物は比較的多量で、貯蔵穴内及び南西部にかけて多く出土している。とくに貯蔵穴内には竈構築材と考えられる、人頭大の川原石が見られる。

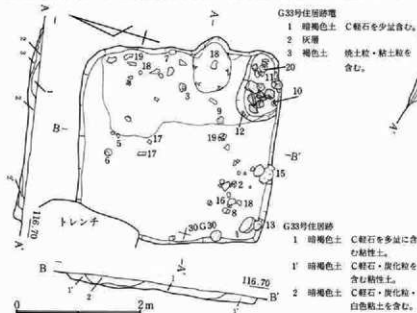


Fig.104 G33号住居跡

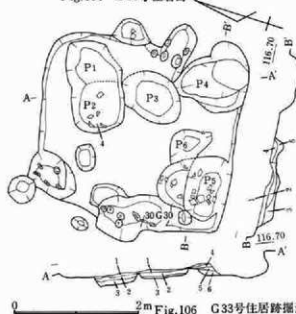


Fig.106 G33号住居跡掘形

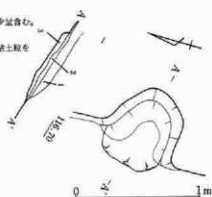


Fig.105 G33号住居跡竈



Fig.107 G33号住居跡竈掘形



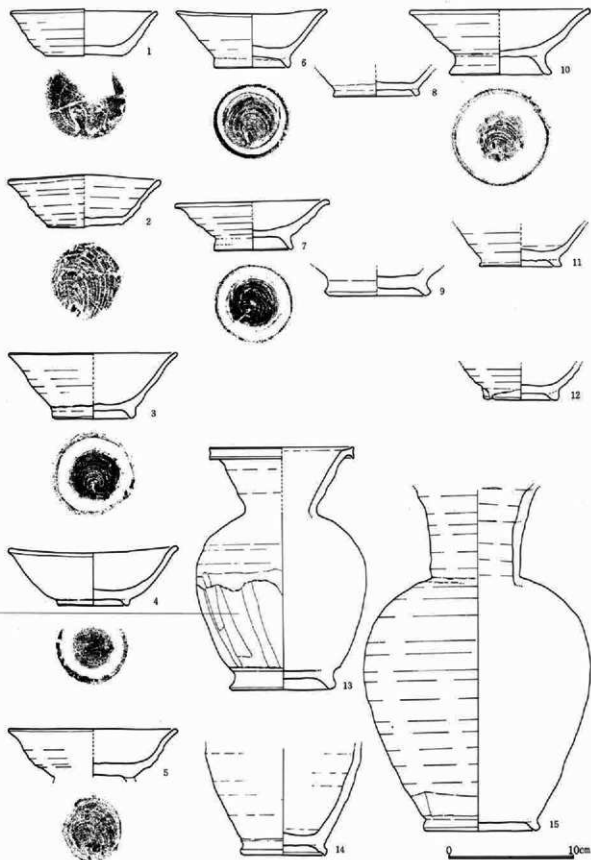


Fig.108 G33号住居跡出土遺物(1)

第3章 G区の遺構と遺物

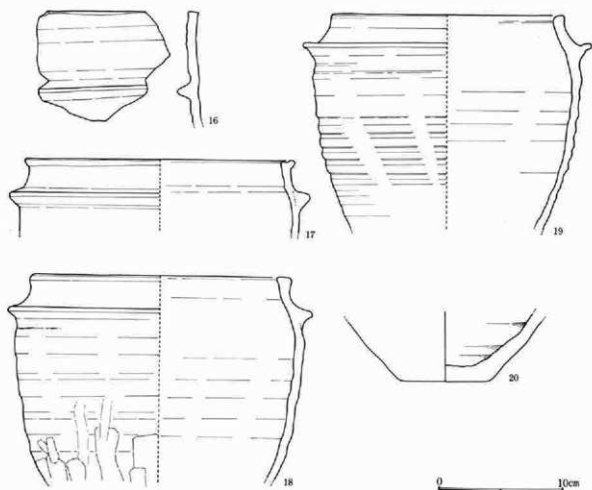


Fig.109 G33号住居跡出土遺物(2)

G 33号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④色調 ⑤その他
108-1 35-1	須恵器 杯	口~底 1/2	10.7 × 6.2 × 3.7	南西部床 下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
108-2 35-2	須恵器 杯	口~底 1/2	12.2 × 6.0 × 4.2	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②明オ リーブ灰 ③細砂混る
108-3 35-3	須恵器 椀	口~底 1/2	13.6 × 6.4 × 5.2	東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①酸化・良好 ②によ い赤褐 ③緻密
108-4 35-4	須恵器 椀	口~底 1/2	13.7 × 5.7 × 4.7	北部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①酸化 ②によい褐 ③細砂混る
108-5 35-5	須恵器 椀	口~底 1/2	13.5 × ( 6.6 ) × ( 3.8 )	北部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台剥落。	①加酸化還元・低温 ②黒 ③砂混る

G33号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 ④その他
108-6 35-6	須恵器 椀	口～底 1/2	12.2 × 6.2 × 4.6	北部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
108-7 35-7	須恵器 椀	口～底 1/2	12.3 × 6.2 × 3.9	東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
108-8 35-8	須恵器 椀	底 1/2	— × 6.9 × —	南西部 床面	轆轤。回転糸切り。付高台。	①還元・良好 ②灰 ③粗小石混る
108-9 35-9	須恵器 椀	底	— × 8.5 × —	電前方 床面	轆轤。付高台。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
108-10 35-10	須恵器 椀	口～底 1/2	14.3 × 8.2 × 5.2	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
108-11 35-11	須恵器 椀	底 1/2	— × 6.6 × —	貯蔵穴内	轆轤。回転糸切り。付高台。	①還元・良好 ②灰 ③粗・白色粒混る
108-12 35-12	須恵器 椀	底 1/2	— × 6.9 × —	貯蔵穴内	轆轤。回転糸切り。付高台。	①還元・良好 ②灰 ③粗・砂混る
108-13 36-13	須恵器 長頸壺	口～底 1/2	5.8 × 4.3 × 19.2	南西部床 面	紐造。横断で。体部中位以下縦方向、底部不定方向角削り。付高台横断で。	①還元・良好 ④暗黄灰 ③砂混る
108-14 36-14	須恵器 長頸壺	中～底 1/2	— × 6.6 × ( 8.5)	南部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横断で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
108-15 36-15	須恵器 長頸壺	口縁部 欠損	— × 9.3 × (27.1)	南西部床 面	轆轤。右回転。口頸部接合。体部下位1段横、底部不定方向角削り。付高台横断で。	①還元・並 ②浅黄 ③砂混る
109-16 36-16	— 羽蓋	口 小片	— × — × ( 9.0)	南西部床 面	紐造。横断で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
109-17 36-17	— 羽蓋	口 1/2	21.6 × — × ( 5.8)	中央部床 面	紐造。横断で。口縁外端突出。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
109-18 36-18	— 羽蓋	口～中 1/2	20.8 × — × (16.4)	床面各部	紐造。横断で。体部中位以下縦方向角削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
109-19 36-19	— 羽蓋	口～中 1/2	18.5 × — × (17.0)	北東、南 東部床面	紐造。横断で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
109-20 36-20	土 筒甕	下～底 1/2	— × 7.1 × ( 4.7)	南東部床 面	紐造。横断で。体部下位縦、底部不定方向角削り、不明瞭。底部「×」寛抜き。	①酸化・良好 ②黄灰 ③細砂混る

第3章 G区の遺構と遺物

G34号住居跡 (Fig. 110、111・PL. 37)

G区東南部やや南寄りに位置し、29G32の範囲にある。検出時にはすでに深く削平が及び、住居跡としての輪郭を窺うことはできない。僅かに灰、焼土の分布する竈と考えられる窪みと数個の穴を検出したにとどまった。出土した遺物も少量である。

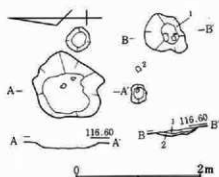


Fig.110 G34号住居跡

G34号住居跡

- 1 褐色土 焼土粒・炭化粒を含み、堅く締る。
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。

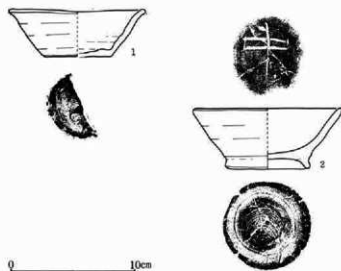


Fig.111 G34号住居跡出土遺物

G34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
111-1 37-1	須恵器 杯	□～底 反	11.0 × 5.0 × 3.8	Pit 内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化 ②褐色 ③砂混る
111-2 37-2	須恵器 椀	□～底 小片	12.0 × 6.8 × 4.8	床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台模撫で。見込部、焼成前貫焼き「中」。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る

## G35号住居跡 (Fig. 112, 113・PL. 37, 38)

G区西部南寄りに位置し、56G24・25の範囲にある。西側は調査区域外に延び、僅かに竈の頂部が検出されている。3号住居跡と重複しており、ほとんど3号住居跡の範囲内にある。新旧関係は3号住居跡より新しい時代の所産である。検出された限りでは、竈燃焼部幅約85cmを測る。埋道部の作り出しはない。

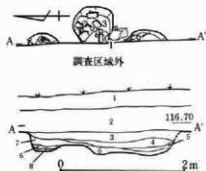


Fig.112 G35号住居跡

## G35号住居跡

- 1 パラス。  
2 暗褐色土 細かい軽石を含む。  
3 暗褐色土 C軽石を含み弱粘性。  
4 暗褐色土 粘土粒・C軽石を含み弱粘。  
5 暗褐色土 炭化粒を含む。粘性なし。  
6 白色粘土 炭化粒を多く含む。  
7 暗褐色土 C軽石・白色粘土・塊を含む。  
8 白色粘土 炭化粒を含む。

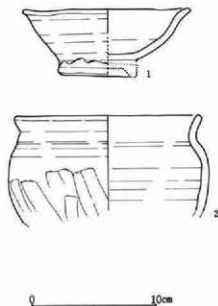
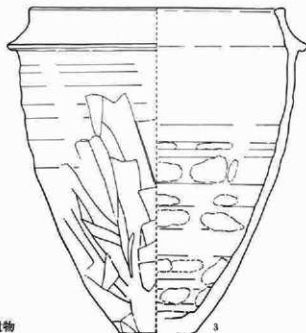


Fig.113 G35号住居跡出土遺物



## G35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
113-1 38-1	須恵器 椀	□~底 片	13.5 × 6.5 × 5.5		竈内	輪繕。右回転糸切り。行高台厚手。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
113-2 38-2	土器 甕	□~中 片	15.0 × — × ( 8.3)		竈内	紐造。横溝で。体部中位以下縦方向莖削り。成形は羽釜に近似。	①酸化・良好 ②に よい黄橙 ③砂混 る
113-3 38-3	— 羽釜	□~底 片	20.4 × 5.9 × 25.8		竈内	紐造。横溝で。体部中位以下縦及び斜方向莖削り。	①加酸化還元・低温 ②に よい黄橙 ③砂混 る

第3章 G区の遺構と遺物

G36号住居跡 (Fig. 114~116・PL. 38、39)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.09 × 3.46	N-80°-E	東壁やや南寄り	隅丸方形 85 × 70 × 18

G区南部東寄りに位置し、31~33G25~27の範囲にある。北側では64号住居跡と西側で5号井戸跡と重複しており新旧関係は64号住居跡より新しく、5号井戸跡より古い時期の所産である。また、東壁北側と南東隅の貯蔵穴の一部は攪乱によって破壊されている。壁高は約22cmを測りやや角度をもって立ち上がる。床面は比較的固くしまりとくに竈前面は固く踏みしる。竈からは灰層が流れ貯蔵穴内及びその上面を覆う。竈は東壁を小さく掘り込み袖部・煙道部の作り出しはない。竈燃焼部幅約35cm、奥行約30cmを測る。遺物は北西部に散在して出土している。

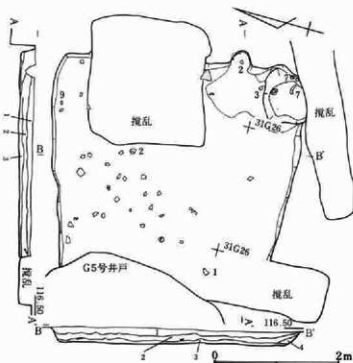


Fig.114 G36号住居跡

G36号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を多量含み締りなし。
- 2 暗褐色土 C軽石少量・焼土粒・炭化粒を含む。
- 3 灰褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 4 暗灰褐色土 褐色土塊(粘性)を含む。締りなし。

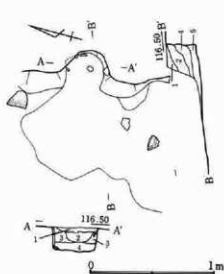


Fig.115 G36号住居跡竈

G36号住居跡竈

- 1 暗褐色土 Loam 粒を含む。
- 2 暗褐色土 土粒細かい、締りなし。
- 3 暗褐色土 Loam 粒を多量に含み、締りあり。
- 4 崩落焼土 灰・焼土粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土 炭化粒・黒灰を含む。

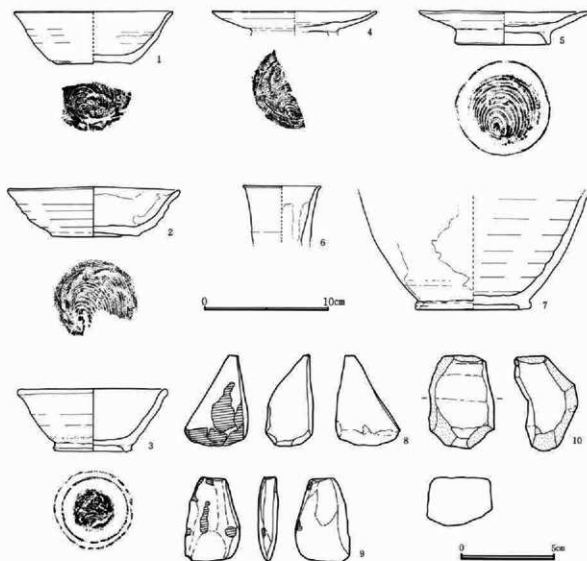


Fig.116 G36号住居跡出土遺物

G 36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
116-1 39-1	須恵器 杯	口~底 小片	12.7 × 6.6 × 4.2	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。内面黒色 付着物。	①酸化・良好 ②褐灰 ③細砂混る
116-2 39-2	須恵器 杯	口~底 %	13.8 × 7.0 × 4.0	北・南東 部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。内面黒色 付着物。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
116-3 39-3	須恵器 椀	口~底 %	12.0 × 6.3 × 5.0	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台模倣で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂・細砂混る
116-4 39-4	須恵器 皿	口~底 %	13.2 × 6.6 × 1.7	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台新着。	①加酸化還元 ②浅黄 ③緻密

第3章 G区の遺構と遺物

G36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
116-5 39-5	須恵器 皿	踵～底 片	13.6 × 7.7 × 2.7		埋土	轆轤、右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
116-6 39-6	灰釉陶器 長頸壺	口～頸 片	6.2 × — × (4.4)		床下埋土	轆轤、右回転。蓋軸全。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
116-7 39-7	須恵器 壺	中～底 片	— × 9.2 × (9.0)		貯蔵穴内	轆轤、右回転。付高台回転磨削。自然胎。	①還元・良好 ②褐灰 ③緻密
116-8 39-8	石製品 砥石	完	長4.8 幅3.5 厚2.6		埋土	3面使用。仕上げ砥。	流紋岩(砥沢?)
116-9 39-9	石製品 砥石	完	長4.5 幅2.9 厚0.5		北東部床 面	小型磨製。端部及び両側面取。楔形。	流紋岩(砥沢?)
116-10 39-10	石製品 砥石		長4.9 幅3.5 厚2.5		埋土	2面使用。	角閃石安山岩

G37号住居跡 (Fig. 117~120・PL. 40)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.20 × 2.50	N-86.5'-E	東壁やや南寄り	

G区中央部やや南寄りに位置し、42~44G23~25の範囲にある。その西側で8号住居跡と重複しており、8号住居跡より古い時期の所産である。比較的小規模な住居跡で南東部隅は肩が張らずだれている。壁高は

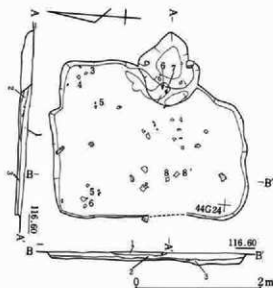


Fig.117 G37号住居跡

約18cmを測り、ゆるい傾斜をもって立ち上がる。床面は全体に固く踏みしめられている。床下は壁前から東西に地の土を残し、北側、南側には大きな土坑状の窪みが掘られる。凹みには灰・焼土・Loam塊を混える層で整地されたかのようなのである。また遺物の出土もある。竈は東壁を不正円形に大きく掘り込んであり、袖・煙道部などは作り出されていない。燃焼部はすり鉢状に掘り窪められる。燃焼部幅約1m、奥行約1.15mを測る。遺物は散在して出土する。

G37号住居跡

- 1 暗褐色土 C 磁石を含む。
- 2 暗褐色土 C 磁石・灰化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C 磁石・多量の灰化粒を含む。



第2節 G区の整穴住居跡と遺物

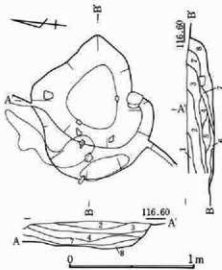


Fig.118 G37号住居跡窠

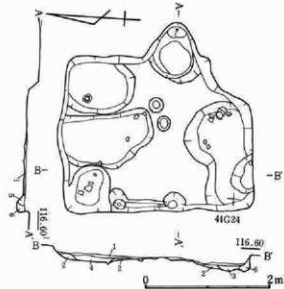


Fig.119 G37号住居跡掘形

G37号住居跡窠

- 1 焼土 上位焼土で下位に薄く黒色灰を含む。
- 2 暗褐色土 C粒石・大粒の炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C粒石・米粒大の炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 C粒石・焼土粒・Loam 塊を含む。
- 5 褐色土 C粒石・焼土・炭化粒を含む。
- 6 暗褐色土 炭灰土を多量に含む。
- 7 黒灰層
- 8 暗褐色土 焼土塊を多量に含む。火灰。

G37号住居跡掘形

- 1 褐色土 ほり床・焼土粒を含み、よく撚る。
- 2 茶褐色土 炭を含む。
- 3 茶褐色土 炭・黄白色粘土粒を含む。
- 4 茶褐色土
- 5 暗茶褐色土 少量の焼土・白色灰を含む。
- 6 暗褐色土

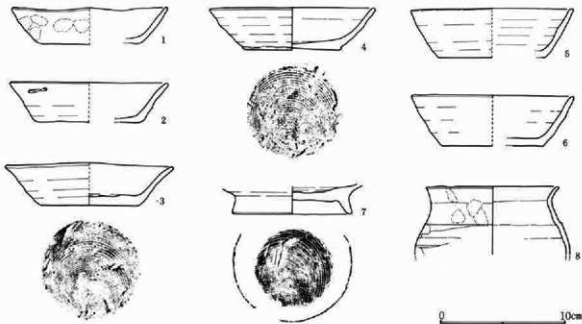


Fig.120 G37号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G37号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
120-1 40-1	土師器 杯	口~底 反	12.5 × 8.6 × 3.9	埋土	指押。撫で。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
120-2 40-2	須恵器 杯	口~底 小片	13.6 × 9.2 × 3.2	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。灰被り。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密
120-3 40-3	須恵器 杯	口~底 瓦	13.6 × 8.0 × 3.4	南東部床 下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
120-4 40-4	須恵器 杯	口~底 瓦	13.2 × 8.0 × 3.4	南東部床 下	轆轤。右回転2度糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
120-5 40-5	須恵器 杯	口~体 小片	13.0 × 8.6 × 3.9	中央部床 下	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
120-6 40-6	須恵器 杯	口~底 小片	13.0 × 8.0 × 4.0	北西部床 下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
120-7 40-7	須恵器 椀	底	— × 10.0 × (2.2)	北東部床 下	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
120-8 40-8	土師器 甕	口~上 瓦	11.6 × — × (5.4)	南西部床 面	紐造。口頸部指押後撫で。体部横方向貫 刺り。	①酸化・良好 ②明褐 ③細砂混る

G38号住居跡 (Fig. 121~123・PL. 41)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.15 × 2.10	N—80°—E	東壁南寄り	楕円形 70 × 30 × 17

G区南部中央に位置し、43・44G20~22の範囲にある。6号・9号住居跡・4号掘立柱建物跡・1号溝の各遺構と重複している。新旧関係は、1号溝より旧く、6号・9号住居跡・4号掘立柱建物跡より新しい時期の所産である。西壁は1号溝によって全く破壊されている。壁高は約10cmを測り立ち上がり角度はゆるい。床面は比較的固く踏みしめられている。遺物は貯蔵穴内及び、

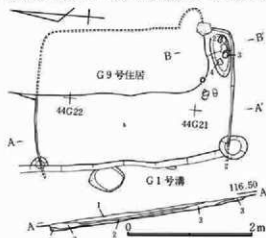


Fig.121 G38号住居跡

貯蔵穴内及び、電前に集中している。なお住居跡中央部床面直上より和織の細片が出土している。

G38号住居跡貯蔵穴

- 1 黒灰層 黒灰が充て、硝りなし。
- 1' 暗褐色土 C軽石を含む粘性あり。
- 2 暗褐色土 黒灰を含む褐色土。
- 3 暗褐色土 黒灰を含む褐色土。

G38住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む粘質土。
- 4 褐色粘土 Loom

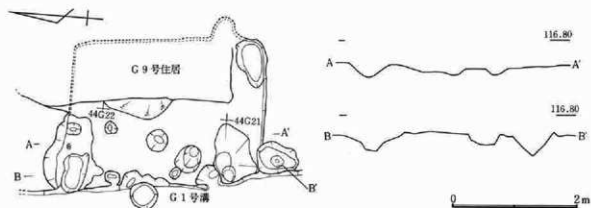


Fig.122 G38号住居跡概形

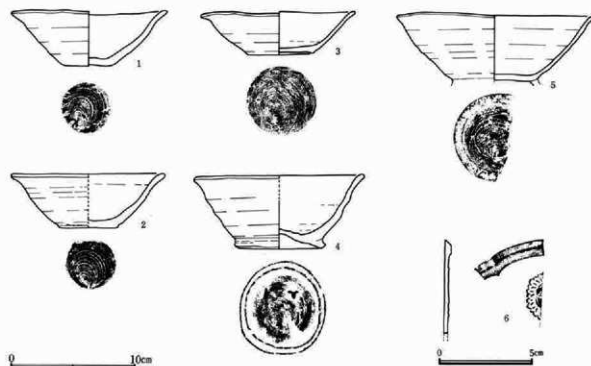


Fig.123 G38号住居跡出土遺物

G38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
123-1 41-1	須恵器 杯	口~底 %	12.5 × 4.6 × 4.5	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元 ②灰白 ③緻密
123-2 41-2	須恵器 杯	口~底 %	12.4 × 4.4 × 4.3	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元 ②灰白 ③緻密
123-3 41-3	須恵器 杯	口~底 %	12.7 × 5.3 × 3.5	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元 ②灰白 ③細砂少混る

G38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 その他
			口径	× 底径 × 器高			
123-4 41-4	須恵器 椀	口へ底 迄	13.6 × 7.3 × 5.8		貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①加齢化還元 ②灰白 ③細砂混る
123-5 41-5	須恵器 椀	口へ底 迄	15.6 × (6.0) × (5.2)		埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台轆轤で、剥落。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
123-6 41-6	銅鏡 八棱鏡	中央部 小片		厚 0.2	中央部床 面	無圈。花浮文。鏡面良好。	

## G40号住居跡 (Fig. 124, 125・PL. 42)

G区南東部に位置し、28～31G25～27の範囲にある。住居跡南側は調査区域外に延びるため全体の様相を知ることはできない。また北側と南側に攪乱が及ぶ。壁高は約28cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は比較的圓く踏みしめられるが細かい凹凸が見られる。遺・貯蔵穴など諸施設は検出されていない。

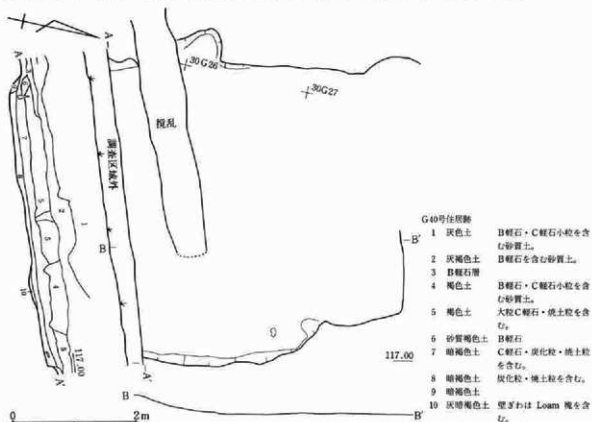


Fig.124 G40号住居跡

## 第2節 G区の竪穴住居跡と遺物



Fig.125 G40号住居跡出土遺物

## G40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
125-1 42-1	土師器 杯	口～底 小片	13.0 × 11.8 × 2.6	埋土	指押。口縁及び内面、強い撫で。底部不定方向段削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
125-2 42-2	須恵器 杯	口～底 片	13.0 × 6.2 × 3.6	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
125-3 42-3	土師器 壺	口～中 片	12.2 × — × (11.0)	北西部床面	紐造。口頸部及び内面撫で。体部上位横方向。中位以下縦方向段削り。台付か。	①酸化・良好 ②灰 ③細砂混る
125-4 42-4	須恵器 板用蓋子	完	縦 2.8 横 2.7 厚 1.7	埋土	大塚体部片利用。周縁打削。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
125-5 42-5	鉄製品		長(9.7) 幅0.6	埋土		
125-6 42-6	鉄製品		長(4.2) 幅1.8	埋土	両側縁刃部?	
125-7 42-7	鉄製品 釘?		長(3.6) 厚0.7	埋土		
125-8 42-8	鉄製品		長(5) 厚1.7×1	埋土		

## G41号住居跡 (Fig. 126～128・PL. 42)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.83 × 3.37	N-91°-E	東壁やや南寄り	円形 70 × 60 × 20.5

G区西部やや南寄りに位置し、51～53G25～27の範囲にある。全体に方形を呈するが、南西隅は角がなく隅丸になる。壁高は約10cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は南半が比較的固く踏みまじるが北半は軟弱でやや窪んでいる。竈は東壁を楕円形に掘り込んであり、袖部・煙道部などの作り出しはない。燃焼部には、支脚に用いられたと考えられる川原石が検出されている。竈燃焼部幅約65cm、奥行約60cmを測る。遺物は竈周辺部より鉄器などの出土がある。

第3章 G区の遺構と遺物

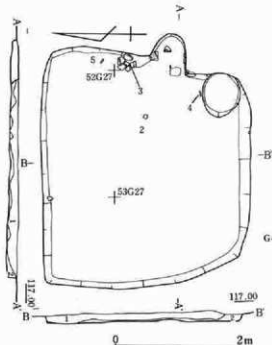


Fig.126 G41号住居跡

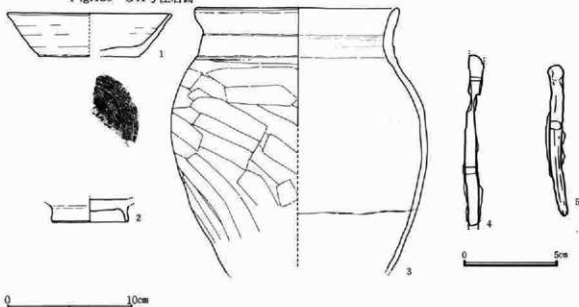


Fig.128 G41号住居跡出土遺物

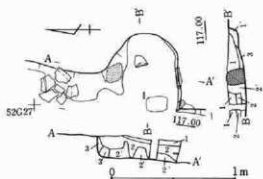


Fig.127 G41号住居跡

G41号住居跡

G41号住居跡

1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。  
2 暗褐色土 粘質土。

G41号住居跡

1 暗褐色土 C軽石を含み、粘性あり。  
1' 暗褐色土 C軽石を多量に含み、粘性あり。

2 崩落灰土 C軽石・炭化粒・灰を多量に含む。  
2' 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含み、粘性あり。

3 暗褐色土 C軽石を少量含む。

G41号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
128-1 42-1	須恵器 杯	口~底 小片	13.2 × 8.2 × 3.4	竈内	縞織。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
128-2 42-2	内黒土器 椀	底	— × 6.2 × (1.9)	中央部灰面	縞織。付高台及び底部横線で。見込部軟炭処理。体部意図的打割。	①酸化・良好 ②に よい黄緑 ③細砂混る

G41号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
128-3 42-3	土師器 壺	口～中 % %	16.4 × — × (17.3)	北東部床 面	紐造。口頸部回転瓦削り。体部上位横方 向、中位斜方向瓦削り。内面磨面で。	①軟化・良好 ②暗赤褐 ③細砂混る
128-4 42-4	鉄製品		長(9) 幅0.6 厚0.4×0.2	貯蔵穴 左端床 面	互はねじれがみられる。	
128-5 42-5	鉄製品 釘		長(8) 厚0.5×0.4 頭部幅0.85	北東部 床 面	角釘・頂部丸く張らむ。	

G42号住居跡 (Fig. 129, 130・PL. 43)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.08 × 3.89			

G区中央部に位置し、41～43G31～33の範囲にある。18号、19号住居跡と重複しており両住居跡よりも古い時期の所産である。電を含め東側と南側の一部を破壊されている。壁高は約18cmを測り、ゆるく立ち上がる。床面は重複している部分は明らかではないが比較的固く踏みしめられている。南東部の電が位置したと考えられる周辺には数ヶ所に薄い灰層の分布が認められた。電は、ほとんどが18号・19号住居跡によって削

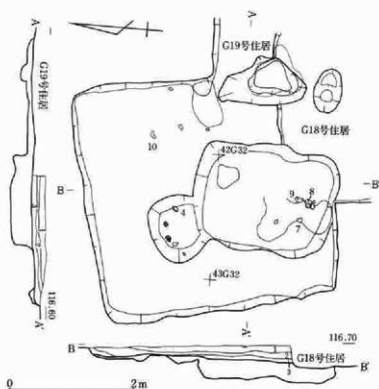


Fig.129 G42号住居跡

平されておりその形態は不明であるが、燃焼部と考える箇所は床面より約10cmの窪みになっており、灰層の堆積がある。窪みは約60×80cmの大きさをもつ。床下には、電部前面に約2.1×1.6mの土坑状の窪みがあり粘性の強い黄褐色土・灰白色土が埋め込まれている。出土遺物は少ない。

- G42号住居跡
- 1 褐色土 C 軽石を含む。
  - 2 暗褐色土 C 軽石を含む。
  - 3 暗褐色土 砂質塊を含む。

第3章 G区の遺構と遺物

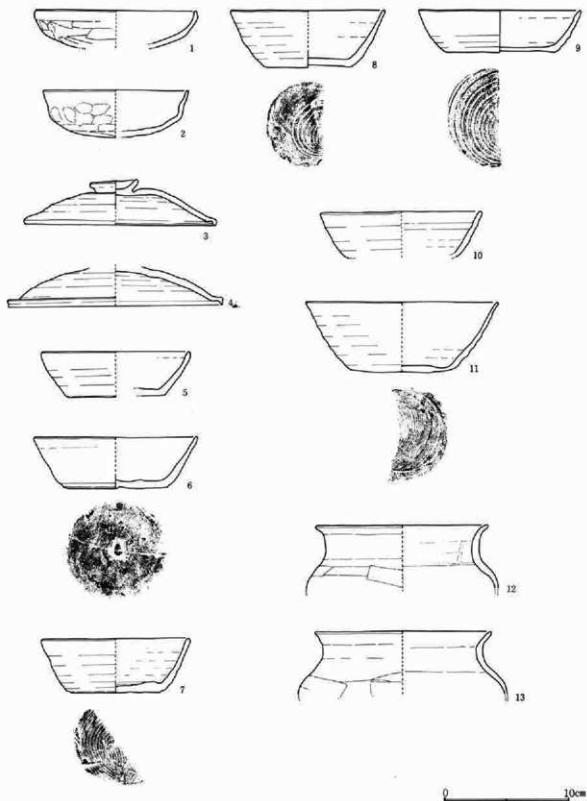


Fig.130 G42号住居跡出土遺物



G42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
130-1 43-1	土師器 杯	口～底 小片	13.0 × 11.0 × 3.1	埋土	指押。微で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
130-2 43-2	土師器 杯	口～底 片	11.7 × 10.4 × 3.7	南部床下	指押。内外指面痕顯著。口縁微で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
130-3 43-3	須恵器 蓋	柄～端 片	14.6 × 柄3.8 × 3.6	埋土	轆轤。右回転。頂部回転寛削り。環状痕。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
130-4 43-4	須恵器 蓋	頂～端 片	19.3 × — × (3.0)	北西部床下	轆轤。右回転。頂部回転寛削り。柄欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
130-5 43-5	須恵器 杯	口～底 小片	12.0 × 8.0 × 4.5	埋土	轆轤。右回転。底部不定方向寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
130-6 43-6	須恵器 杯	口～底 片	13.0 × 8.4 × 4.1	埋土	轆轤。右回転糸切り。底部不定方向無で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
130-7 43-7	須恵器 杯	口～底 片	12.0 × 7.0 × 4.3	南部床下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密・一部砂混る
130-8 43-8	須恵器 杯	口～底 小片	12.5 × 7.0 × 4.5	南西部床下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
130-9 43-9	須恵器 杯	口～底 片	13.0 × 8.8 × 3.3	南部床下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密・気泡多し
130-10 43-10	須恵器 杯	口～体 片	13.0 × 9.0 × (3.6)	北東部床下	轆轤。右回転。底部欠損。	①還元 ②灰白 ③細砂混る
130-11 43-11	須恵器 杯	口～底 小片	15.4 × 8.0 × 5.6	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白・外面黒変 ③緻密
130-12 43-12	土師器 壺	口～上 片	13.8 × — × (5.0)	埋土	紐造。口頸部強い無で。体部上位横方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
130-13 43-13	土師器 壺	口～上 片	14.0 × — × (5.0)	埋土	紐造。口頸部強い無で。体部上位横方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

G43号住居跡 (Fig. 131、132・PL. 44)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.15 × 2.85	N-77-E	東壁やや南寄り	円形 55 × 53 × 22.5

G区の東中央部に位置し、30～32G37・38の範囲にある。46号住居跡と重複しているが、46号住居跡より新しい時期の所産で削平が深く及んでおり確認できた壁高はわずかである。約10cmを測る。床面はほぼ平坦で、凝灰岩質層面をそのまま用い、床下には土坑状の凹凸はない。甕はすでに火床面が露出しており明確な形状は知り得ない。わずかに残された焼土面の範囲から、東壁を楕円形に掘り込んで構築されていると考え

第3章 G区の遺構と遺物

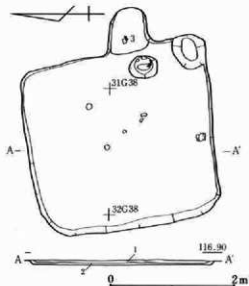


Fig.131 G43号住居跡

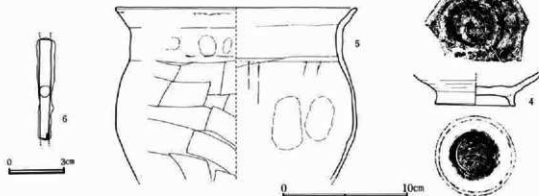


Fig.132 G43号住居跡出土遺物

られる。焼焼部前に43×37cmの穴が穿たれるが、焼土粒混りの灰層が堆積している。出土遺物は少ない。

G43号住居跡

- 1 黒褐色土 軽石を多く含む。  
2 暗黒褐色土 軽石は少ない。

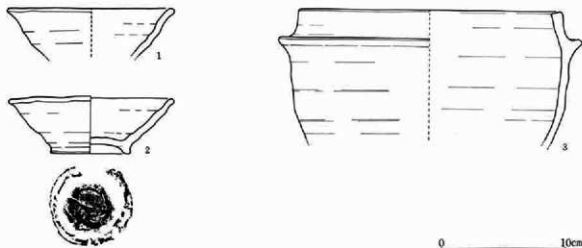
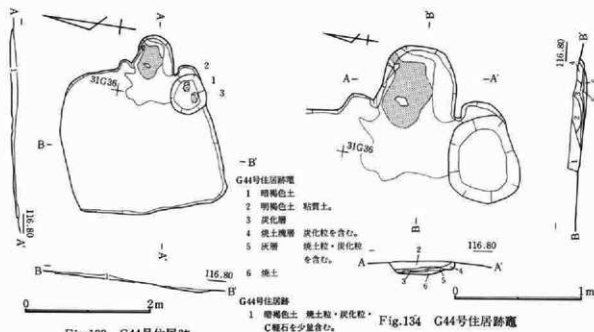
G43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③粘土 ④その他
132-1 44-1	須恵器 碗	口~体 小片	14.8 × - × (4.4)	竈内埋土	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
132-2 44-2	須恵器 碗	口~体 小片	13.8 × - × (4.8)	竈内	轆轤。右回転	①還元・低温 ②灰黄 ③砂混る
132-3 44-3	須恵器 碗	体~底 1/2	- × 8.4 × (3.7)	床下	轆轤。右回転未切り。付高台横割で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
132-4 44-4	須恵器 碗	体~底	- × 6.4 × (2.3)	埋土	轆轤。右回転未切り。付高台横割で。見込部「J」裏描き。	①還元・良好 ②明青灰 ③細砂混る
132-5 44-5	土師器 壺	口~中 小片	19.4 × - × (13.5)	床面	細造。口頸部強い輪で。体部上位横。中位斜。下位縦方向寛削り。内面寛推で。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③緻密
132-6 44-6	鉄製品		長(5.4) 径0.5	器形	断面円形	

G44号住居跡 (Fig. 133~135・PL. 45)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.75 × 2.44	N—87°—E	東壁ほぼ中央	円形 63 × 56 × 18.5

G区東部に位置し、30・31G35・36の範囲にある。住居跡南側で45号・69号・70号住居跡と重複しており3者よりも新しい時期の所産である。削平が深く壁などの遺存は不良で痕跡程度である。方形を呈するが北東隅は角がなく隅丸になる。壁高は約4cmを測る。床面は竈前が若干高く、南西部が低くなっている。前述住居跡との重複があるため総体的に軟弱である。竈は東壁を楕円形に掘り込み、袖部は地の土がわずかに住居跡内に張り出すようであるが袖石などの構築材はなく煙道部の作り出しはない。燃焼部幅約60cm、奥行約50cmを測る。遺物は貯蔵穴内に数点検出されている。



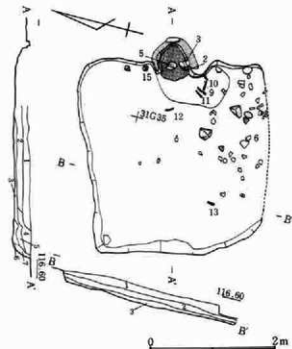
G44号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
135-1 45-1	須恵器 椀	口～体 片	13.4 × — × (3.7)	貯蔵穴内	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
135-2 45-2	須恵器 椀	口～底 片	13.2 × 6.2 × (4.4)	貯蔵穴内	轆轤。右回転永切り。付高台痕で。	①還元・低温 ②黄灰 ③砂混る
135-3 45-3	— 羽蓋	口～上 片	20.6 × — × (10.5)	貯蔵穴内	紐造。横撫で。	①加酸化還元・低温 ②におい黄橙 ③砂混る

G45号住居跡 (Fig. 136～139・PL. 45、46)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.10 × 3.07	N—77°—E	東壁ほぼ中央	

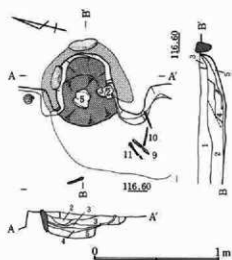
G区東部に位置し、30・31G34・35の範囲にある。44号・69号・70号住居跡と重複している。新旧関係は、44号住居跡より旧く、69号・70号住居跡より新しい時期の所産である。南壁は69号住居跡の南壁と重なり明確な検出はできなかった。壁高は約30cmを測り、ゆるい角度で立ち上がる。床面は比較的固く踏みしめられている。床下は重複の為土坑などの所属が明瞭には認定できなかったが、厚い箇所です約8cm程度にLoamを敷きとくに固く踏みしめてあり、いわゆるはり床状を呈している。竈は東壁に付設される。袖部は地の土を残しており袖石などの構築材はない。楕円形に作り出された燃焼部には支脚痕も検出されず火床はすり鉢状の窪みになる。この燃焼部の奥部と、左壁には長さ20～23cmほどの川原石が埋め込まれており補強材と考えられる。燃焼部幅約45cm、奥行約65cmを測る。煙道部の作り出しはない。遺物は比較的豊富であるが、とくに鎌・釘などの鉄製品が目立ち総数7点の出土がある。



残しており袖石などの構築材はない。楕円形に作り出された燃焼部には支脚痕も検出されず火床はすり鉢状の窪みになる。この燃焼部の奥部と、左壁には長さ20～23cmほどの川原石が埋め込まれており補強材と考えられる。燃焼部幅約45cm、奥行約65cmを測る。煙道部の作り出しはない。遺物は比較的豊富であるが、とくに鎌・釘などの鉄製品が目立ち総数7点の出土がある。

- G45号住居跡
- 暗褐色土 粘性あり。
  - 明暗褐色土 黄土粒を含む。
  - 明暗褐色土 黄土粒を含む。粘性あり。
  - 暗褐色土 黄土粒を少し含む。
  - 暗褐色土 粘性あり。
  - 暗褐色土 粘性あり。
  - 明褐色土

Fig. 136 G45号住居跡



G45号住居跡概

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒・焼土を含む。
- 3 褐色土 網りあり。
- 4 崩落焼土
- 5 灰層

Fig.137 G45号住居跡概

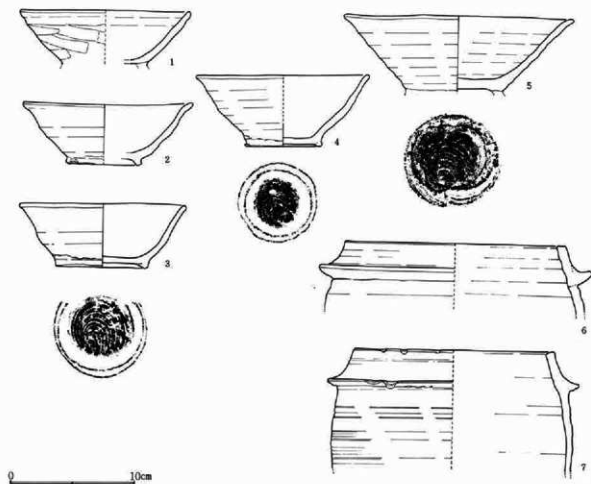


Fig.138 G45号住居跡出土遺物(1)

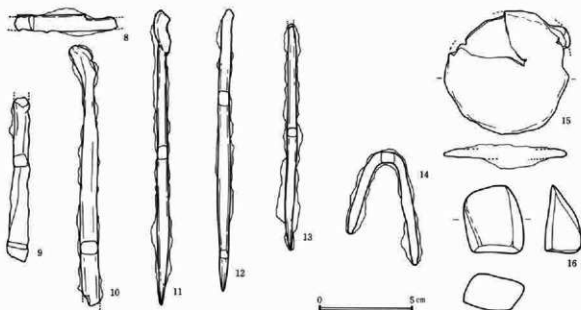


Fig.139 G45号住居跡出土遺物(2)

G45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
138-1 46-1	土師器 筒形	口~底 小片	13.6 × ( 6.8 ) × ( 3.2 )	床 下	轆轤, 右回転糸切り。体部斜方向捩り。 付高台剥落。轆轤土師。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③砂混る
138-2 46-2	須恵器 椀	口~底 %	13.6 × 6.1 × 5.0	電 内	轆轤, 右回転。付高台横撫で。底部意図 的打抜穿孔。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る
138-3 46-3	須恵器 椀	口~底 %	13.3 × 7.6 × 5.2	電 内	轆轤, 右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・低温 ②橙 ③砂混る
138-4 46-4	須恵器 椀	口~底 %	14.0 × 6.2 × 5.7	床 下	轆轤, 右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②黒灰 ③砂混る
138-5 46-5	須恵器 椀	口~底 %	18.4 × 7.7 × ( 6.0 )	電 内	轆轤, 右回転2度糸切り。付高台欠損。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
138-6 46-6	— 羽蓋	口~上 %	18.0 × — × ( 5.2 )	床 面	紐造。横撫で。	①酸化 ②によい橙 ③砂混る
138-7 46-7	— 羽蓋	口~中 %	16.0 × — × ( 9.5 )	埋 土	紐造。横撫で。	①酸化 ②橙 ③砂混る
139-8 46-8	鉄製品 刀	子	長(5.5)刀部長(3.8) 幅0.9 柄部幅0.7	埋 土	両端欠損。	
139-9 46-9	鉄製品		長(8.7) 厚0.7 幅1.2	電右前床 面	中央部でねじれる。	
139-10 46-10	鉄製品 釘	先端部 欠損	長(13.7) 厚0.9 × 0.6	電右前床 面	角釘。	

G45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
139-11 46-11	鉄製品 釘	尖	長 15.6 厚 0.7 × 0.5	電右前床 面	角釘。	
139-12 46-12	鉄製品 釘	頂部欠 損	長(14.7) 厚 0.8 × 0.6	電前方床 面	角釘。	
139-13 46-13	鉄製品 釘	頂部欠 損	長(11.7) 厚 0.5	南西部床 面	角釘。	
139-14 46-14	鉄製品 釘	頂部欠 損	長(11.1) 厚 0.7	埋土	U字形に曲がる。	
139-15 46-15	鉄製品 紡錘車	軸部	径 6.5 最大厚 1.3	電左床 面		
139-16 46-16	石製品 砥石		長 3.6 幅 3.1 厚 1.9	埋土	全面使用。複形。仕上げ。	粘板岩

G46号住居跡 (Fig. 140、141・PL. 47)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.42 × 2.64			隅丸方形 62 × 62 × 25

G区の東中央部に位置し、36・37G30～32の範囲にある。北東部に43号住居跡と重複しており43号より古い時期の所産である。削平が深く壁の立ち上がりはかろうじて観察できる程度である。床面は平坦で、凝灰岩質層面をそのまま用いてある。掘形による凹凸はなく南西隅と中央南寄りに2つの円形土坑状のPitが検出されている。

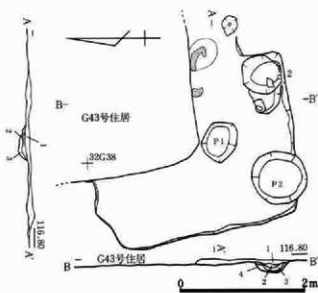


Fig.140 G46号住居跡

電は消失しておりその痕跡と思われる灰及び焼土の分布が東壁側に見られた。電の形状、規模などは不明である。遺物は少量であるが、貯蔵穴より鉄釘の出土がある。

## G46号住居跡

- 1 褐色土 C層石を多量・炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 砂質塊を含む。
- 4 褐色土 粘性强い。

第3章 G区の遺構と遺物

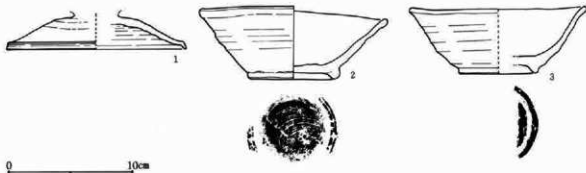


Fig.141 G46号住居跡出土遺物

G46号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
141-1 47-1	須恵器 蓋	頂~端 小片	14.4 × 7.0 × (2.7)	埋土	轆轤。右回転。頂部回転痕有り。焼欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
141-2 47-2	須恵器 椀	口~底 残	15.0 × 7.4 × 5.2	貯蔵穴内	轆轤。右回転未切り。行高台横溝で。	①加酸還元・良好 ②におい性 ③細砂混る
141-3 47-3	須恵器 椀	口~底 残	14.2 × 6.4 × 5.3	貯蔵穴内	轆轤。左回転。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る

G47号住居跡 (Fig. 142~145・PL. 47, 48)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.74 × 2.65	N-11°-W	北壁やや東寄り	隅丸方形 63 × 60 × 24

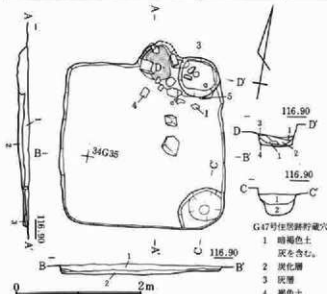


Fig.142 G47号住居跡

G47号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒・C軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 Loom 織・焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土

G47号住居跡土坑

- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を少量含む粘性あり。
- 2 暗褐色土 粘性あり。

G区の東中央部に位置し、32~34G34~36の範囲にある。48号、49号住居跡と重複しており、両者より新しい時期の所産である。当区では数少ない北壁に竈を付設する住居跡の一つである。壁高は約15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は東側と南側がやや高まっている。東南隅に焼土粒・炭化粒を混える土坑状の穴が検出されている。前出の4号住居跡と同じく北側に竈を設ける形態をもつ。北壁を楕円形に掘り込み、煙道部の作り出しはない。左右袖部には凝灰岩の加工材が埋め込まれており、掘形によれば燃焼部中央に支脚痕と考えられる小穴が穿たれる。また電前面には構築材の石が散乱している。両袖内法は約32cm、燃焼部奥行約75cmを測る。遺物は電周辺に出土している。



第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

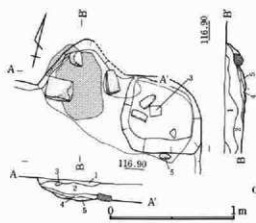


Fig.143 G47号住居跡画

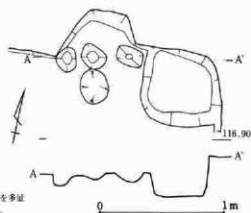


Fig.144 G47号住居跡電照形

G47号住居跡電

- 1 暗褐色土 粘土粒を多量に含む。
- 2 暗灰褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 3 焼土塊
- 4 灰層
- 5 焼土

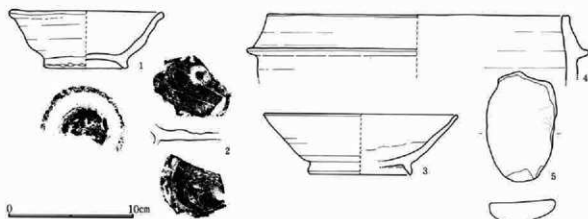


Fig.145 G47号住居跡出土遺物

G47号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
145-1 48-1	須恵器 椀	口~底 片	12.4 × 6.4 × 4.6	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。横。	①加酸化還元 ②黒 ③砂混る
145-2 48-2	須恵器 椀	底		埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。見込部「1」貫通き。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
145-3 48-3	灰釉陶器 椀	口~底 片	15.6 × 8.2 × 4.8	北東部床 面	轆轤。右回転。口縁内面のみ施釉。刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
145-4 47-4	一 羽	口 小片	24.4 × — × (5.0)	庵手前床 面	紐造。横断で。	①加酸化還元 ②灰白 ③砂混る
145-5 47-5	石製品 砥石		長 8.7 幅 5.6 厚 1.9	北東部床 面	礫状。1面使用。荒砥。	角閃石安山岩

第3章 G区の遺構と遺物

G48号住居跡 (Fig. 146, 147・PL. 48)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.40 × 3.33	N—78°—E	東壁やや南寄り	円形 63 × 60 × 13

G区の東中央部に位置し、32~34G35・36の範囲にある。47号住居跡と重複しており、47号より古い時期の所産である。比較的掘り込みが深く、壁の遺存も良好である。壁高約30cmを測り垂直に立ち上がる。東壁を除く壁下には径4~10cm、深さ3~4cmほどの小穴が巡る。床面は中央部がわずかに低くなるが平坦である。竈は東壁を方形に掘り込み、長い煙道部を作り出す。燃焼部周辺には径約5cm、深さ4~5cm大の小穴が穿たれる。燃焼部幅約55cm、奥行約55cm、燃焼部長さ約40cmを測る。焚口下には径40cm、深さ20cmの掘り込みがあり焼土粒を多量に含む層が堆積している。出土物は皆無に近い。

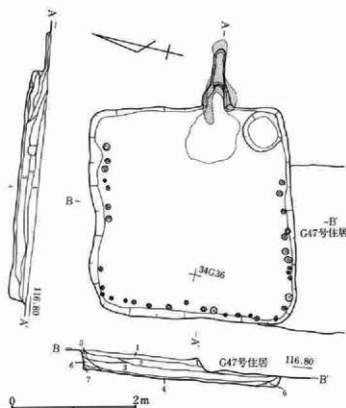


Fig.146 G48号住居跡

G48号住居跡

- 1 褐色土 C軽石・砂質土塊を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・砂質土塊を含む。
- 3 暗褐色土 Loam 粒・塊を多量に含む。
- 4 灰褐色土 Loam 粒を含む。
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 Loam 粒を含む。
- 7 淡黄色土 粘土塊

G48号住居跡埋

- 1 暗褐色土 明褐色土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 明褐色土粒を多量に含む。意味が強い。
- 3 暗褐色土 焼土粒・明褐色土粒を多量に含む。
- 4 褐色土 粘性あり。
- 5 暗褐色土 細焼土粒を含む。
- 6 赤褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 7 灰赤色土 灰・炭化粒・焼土粒を含む。
- 8 焼土層
- 9 焼土 灰を含む。
- 10 暗褐色土 焼土塊を含み粘性あり。

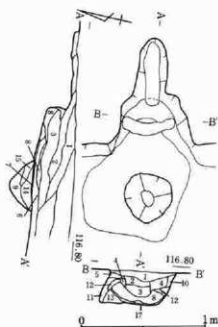


Fig.147 G48号住居跡竈

- 11 褐色土 焼土粒・Loam 粒を含む。
- 12 焼土
- 13 暗褐色土 灰を含む。
- 14 暗灰褐色土 焼土粒・Loam 粒を少量含む。粘性あり。
- 15 赤褐色土 焼土粒を含む。
- 16 暗灰褐色土 Loam 粒を多量に含む。
- 17 淡黄色土

G49号住居跡 (Fig. 148~151・PL. 48、49、50)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.35 × 4.22	N-84°-E	東壁やや南寄り	円形 90 × 85 × 22.5

G区中央部やや東寄りに位置し、34~36G34~37の範囲にある。47号・48号・50号住居跡と各々重複している。新旧関係は、それらの中で最も古い時期の所産である。壁高は約34cmを測り垂直に立ち上がる。東壁と南壁の一部を除き壁下には溝が巡る。幅10~12cm、深さ6~8cmを測る。床面は多少の高低はあるが総じて平坦で、固く踏みかためられている。床下は土坑状の凹凸があり粘土質の土で埋められている。竈は東壁に掘り込まれるがその先端部は47号・48号住居跡によって切られている。袖部は姿を止めていないが竈前面には凝灰岩質の石材が散乱している。焼焼部幅約1m、現存奥行約60cmを測る。

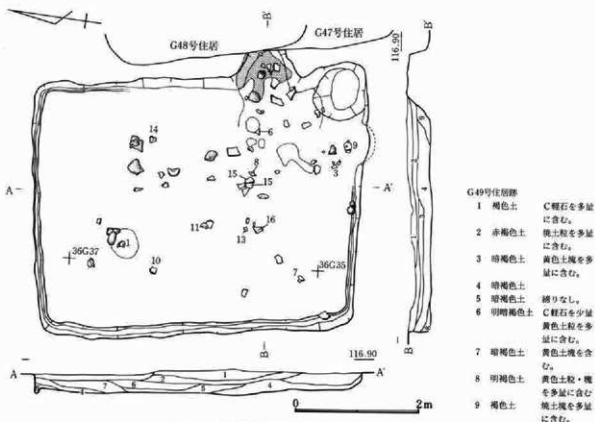


Fig.148 G49号住居跡

第3章 G区の遺構と遺物

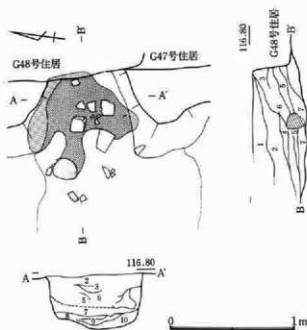
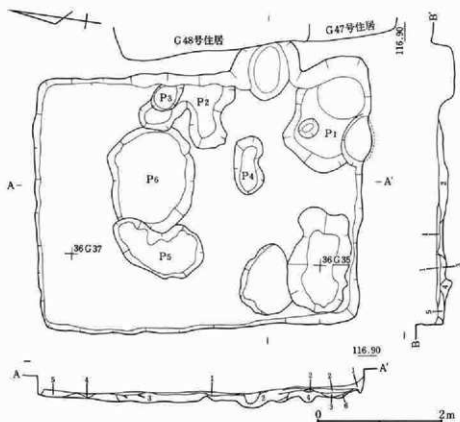


Fig.149 G49号住居跡遺

G49号住居跡層

- |    |      |                |
|----|------|----------------|
| 1  | 褐色土  | 明褐色粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 2  | 褐色土  | 明褐色粘土粒・焼土粒を含む。 |
| 3  | 褐色土  |                |
| 4  | 褐色土  | 焼土粒を多量に含む。     |
| 5  | 褐色土  | 砂質岩・焼土粒を含む。    |
| 6  | 暗褐色土 | 焼土粒を多量に含む。     |
| 7  | 崩落焼土 |                |
| 8  | 灰層   |                |
| 9  | 焼土粒層 |                |
| 10 | 灰層   |                |



G49号住居跡層形

- |   |      |                    |
|---|------|--------------------|
| 1 | 灰層   |                    |
| 2 | 黒褐色土 | 粘土塊を含む。            |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒・Loam 塊を含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 粘土塊                |
| 5 | 暗褐色土 | 粘性。                |
| 6 | 黄色土  |                    |

Fig.150 G49号住居跡撮影

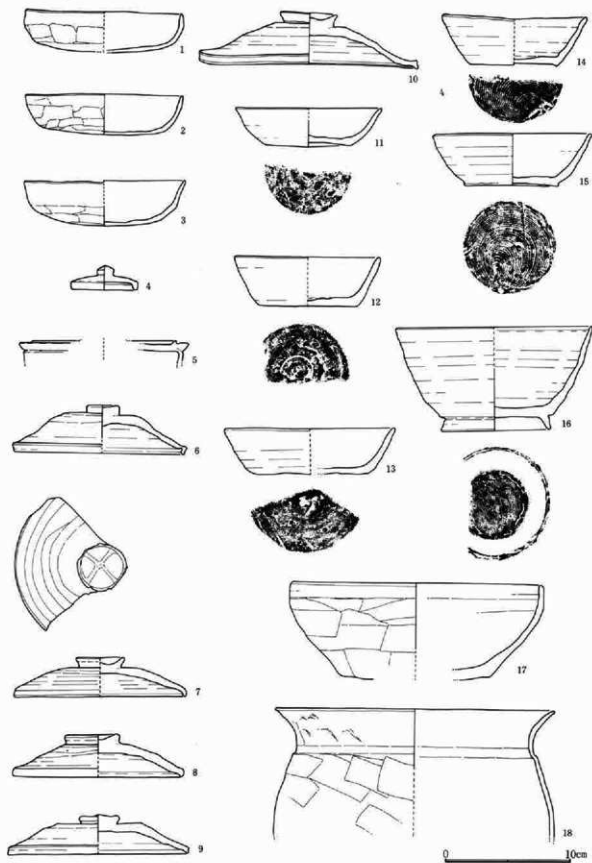


Fig.151 G49号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G49号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
151-1 49-1	土師器 杯	口～底 片	12.5 × 10.8 × 3.3	北西部床 下	指押。口縁及び内面撫で。体部横、底部 不定方向鋭削り。	①酸化・良好 ②によい褐 ③細砂混 る
151-2 49-2	土師器 杯	口～底 片	12.6 × 9.0 × 3.2	埋 土	指押。口縁及び内面撫で。体部横、底部 不定方向鋭削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
151-3 49-3	土師器 杯	口～底 片	13.0 × 9.7 × 3.5	南東部床 面	指押。口縁及び内面撫で。体部横、底部 不定方向鋭削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
151-4 49-4	須恵器 蓋	横～端 (完)	5.4 × 横1.4 × 1.9	南西隅壁 上	轆轤。右回転。宝珠形横。薬器等小型短 頸蓋用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
151-5 49-5	須恵器 蓋	頂～端 小片	13.6 × 一 × (1.8)	埋 土	轆轤。右回転。端部回転鋭削り。灰被り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
151-6 49-6	須恵器 蓋	横～端 片	13.6 × 横2.5 × 3.8	北東部床 下	轆轤。右回転。頂部4段回転鋭削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
151-7 50-7	須恵器 蓋	横～端 片	13.8 × 横3.9 × 3.1	南西部床 面	轆轤。右回転。頂部2段回転鋭削り。環 状横頂部に十字形白影。	①加酸化還元 ②黄灰 ③緻密
151-8 50-8	須恵器 蓋	横～端 片	13.7 × 横4.4 × 3.4	南東部床 面	轆轤。右回転。頂部2段回転鋭削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
151-9 50-9	須恵器 蓋	横～端 片	14.4 × 横3.2 × 2.2	南東部床 面	轆轤。右回転。頂部回転鋭削り。平滑。 環状形横。異胎土で小型。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
151-10 50-10	須恵器 蓋	横～端 (完)	17.6 × 横4.5 × 4.4	北東部床 下	轆轤。右回転。頂部3段回転鋭削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密一部剥脱
151-11 50-11	須恵器 杯	口～底 片	11.4 × 6.8 × 3.1	中央部床 面	轆轤。右回転鋭削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
151-12 50-12	須恵器 杯	口～底 小片	11.4 × 8.0 × 3.9	埋 土	轆轤。右回転鋭削り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
151-13 50-13	須恵器 杯	口～底 片	13.7 × 9.0 × 3.6	電 内	轆轤。右回転鋭削り。無調整。	①加酸化還元・良好 ②によい黄橙 ③緻密
151-14 50-14	須恵器 杯	口～底 片	11.6 × 6.9 × 3.9	南東部床 下	轆轤。右回転鋭削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
151-15 50-15	須恵器 杯	口～底 (完)	12.8 × 7.5 × 4.1	中央部床 面	轆轤。右回転鋭削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
151-16 50-16	須恵器 杯	口～底 片	15.6 × 8.7 × 8.3	中央部床 面	轆轤。右回転鋭削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
151-17 50-17	土師器 鉢	口～底 片	22.0 × 11.9 × 7.6	埋 土	指押。口縁及び内面撫で。体部横、底部 不定方向幅広鋭削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
151-18 50-18	土師器 壺	口～中 片	22.3 × 一 × 10.1	埋 土	紐造。体部横方向鋭削り。後口頸部及び 内面撫で。	①酸化・良好 ②に よい赤褐 ③細砂混る

G50号住居跡 (Fig. 152~154・PL. 50, 51)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.20 × 3.40	N- 85° - E	東壁やや南寄り	楕円形 98 × 65 × 14

G区中央部やや東寄りに位置し、34~36G36~38の範囲にある。49号住居跡と重複するが、新しい時期の所産である。壁高は約10cmを測る。床面は平坦だが、やや南側が低くなる。柱穴と考えられる穴は5個検出されているが主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>と思われる。また北東隅には径約86cm、深さ約58cmの円形土坑が検出されているが当住居に付随するものかどうかは不明である。竈は東壁を楕円形に掘り込んである。左袖には

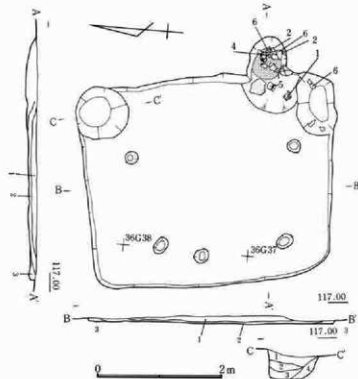


Fig.152 G50号住居跡

人頭大の川原石が配されており、右袖近くは、原位位と思われるが、同様の石が検出されている。また、燃焼部には2個の川原石が並列して埋め込まれており、支脚と考えられる。燃焼部幅約60cm、奥行約60cmを測る。遺物は竈内及び貯蔵穴内からの出土がある。

## G50号住居跡

- 1 暗褐色土 黄土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土

## G50号住居跡貯蔵穴

- 1 暗褐色土 黄土粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土 粘性強い。
- 4 明褐色土 黄色土粒を多量に含む。

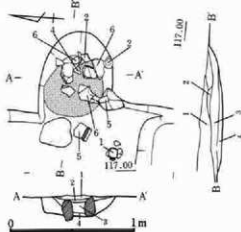


Fig.153 G50号住居跡竈

## G50号住居跡竈

- 1 暗褐色土 緑りなし。
- 2 暗褐色土 黄土粒を多量に含む。
- 3 褐色土 黄土粒・黄色土塊を含む。
- 4 黒褐色土 黒灰を含む。

第3章 G区の遺構と遺物

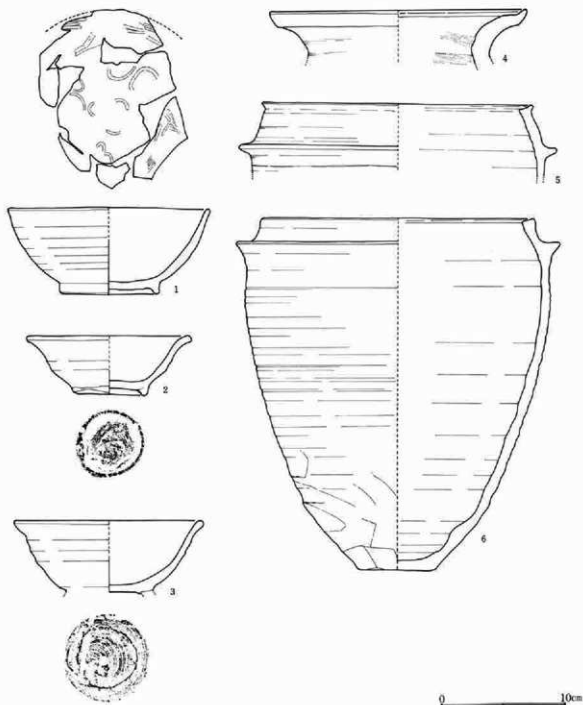


Fig.154 G50号住居跡出土遺物

G50号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
154-1 51-1	土 師 器 椀	口~底 1/2	18.2 × 7.7 × 6.8	電手前床 面	轆轤。右回転。付高台及び底部回転痕有り。見込部螺旋状文。内面平滑。	①酸化・良好 ②明赤褐~黒 ③砂混る
154-2 51-2	須 恵 器 椀	口~底 1/2	13.2 × 6.0 × 4.7	電 内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①酸化 ②明赤褐 ③砂混る



G50号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
154-3 51-3	須恵器 椀	口~底 片	15.2 × 7.0 × 5.7		竈内埋土	轆轤。右回転水切り。付高台欠損。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
154-4 51-4	須恵器 壺	口~頸 片	20.6 × — × (3.8)		竈内	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
154-5 51-5	— 羽蓋	口~上 片	22.0 × — × (5.6)		竈内	紐造。横造で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
154-6 51-6	— 羽蓋	口~底 片	21.8 × 6.1 × 27.9		竈内	紐造。横造で。体部下位斜。最下位横方 向開閉用。	①酸化・良好 ②に よい褐 ③粗

G51号住居跡 (Fig. 155~158・PL. 52、53)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.29 × 3.30	N-84°-E	東壁やや南寄り	円形 105 × 70 × 15

G区北部に位置し、39・40G37~40の範囲にある。52号・53号住居跡と重複している。新旧関係は、53号住居跡より新しく、52号住居跡より古い時期の所産である。壁高は約30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

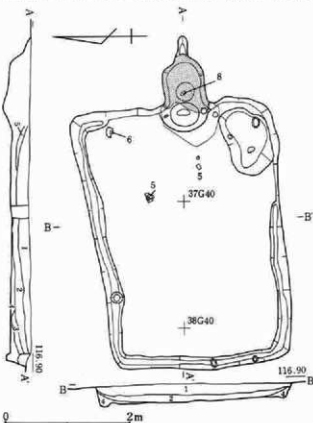


Fig.155 G51号住居跡

東壁を除く各壁下には幅約14~16cm、深さ5~6cmの溝が巡る。床面は平坦で、比較的固く踏みまわっており、中央部床下には径約1.5m、深さ約12cmの円形土坑が検出されている。竈は東壁を方形ぎみに掘り込み、さらに煙道部を作り出す。埴口部及び燃焼部は浅くすり鉢状に窪む。燃焼部幅約70cm、奥行約90cm、煙道部長さ約20cmを測る。出土遺物は少量である。

## G51号住居跡

- |        |                      |
|--------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | C 軽石多量、焼土粒・炭化粒を含む。   |
| 2 褐色土  | C 軽石少量、焼土粒・炭化粒を含む粘土。 |
| 3 黒褐色土 | 黒灰を多量に含む。            |
| 4 明褐色土 | 黄色土粒を少量含む。           |
| 5 暗褐色土 | C 軽石を少量含む。           |

第3章 G区の遺構と遺物

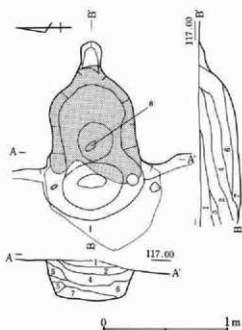


Fig.156 G51号住居跡竈

G51号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒・炭化粒を含む。
- 2 褐色土 C軽石少量、焼土粒・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 5 明褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 6 暗褐色土 焼土塊を多量に含む。
- 7 黒褐色土 黒灰が主で焼土粒を含む。

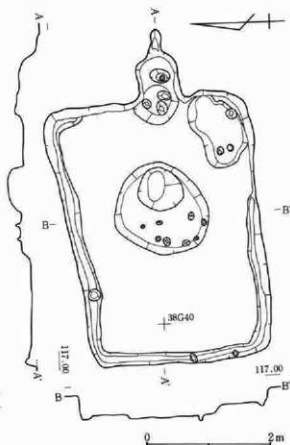


Fig.157 G51号住居跡掘形

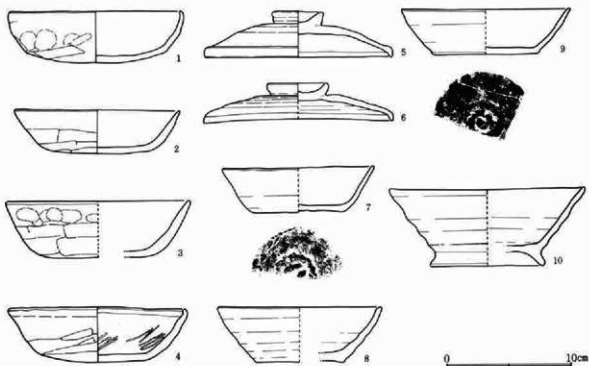


Fig.158 G51号住居跡出土遺物

G51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④色調 ⑤その他
158-1 52-1	土師器 杯	口～底 %	13.9 × 11.2 × 4.0	埋土	指押。口縁部及び内部撫で。体部指頭痕顕著。底部不定方向刮削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
158-2 52-2	土師器 杯	口～底 (完)	13.3 × 8.6 × 3.4	埋土	指押。口縁部及び内部撫で。体部横、底部不定方向刮削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
158-3 52-3	土師器 杯	口～底 %	14.8 × 7.1 × 4.5	埋土	指押。体部及び内部撫で。底部不定方向刮削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
158-4 52-4	土師器 杯	口～底 %	14.4 × 8.8 × 4.4	竈内埋土	指押。口唇部内湾。体部横方向刮削り後、口縁部強い撫で。底部不定方向刮削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
158-5 52-5	須恵器 蓋	横～端 %	15.0 × 横4.2 × 3.6	北東・南 東部床面	轆轤。右回転。頂部3段回転刮削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
158-6 52-6	須恵器 蓋	横～端 %	15.2 × 横5.1 × 3.1	北東部床 面	轆轤。右回転。頂部3段回転刮削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
158-7 52-7	須恵器 杯	口～底 %	13.2 × 8.0 × 3.4	埋土	轆轤。右回転刮削り。無調整。灰被り。	①還元・高温 ②灰 ③緻密
158-8 52-8	須恵器 杯	口～底 %	13.2 × 7.2 × 4.4	竈内埋土	轆轤。右回転刮削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
158-9 52-9	須恵器 杯	口～底 %	13.4 × 8.2 × 3.6	埋土	轆轤。右回転刮削り後、撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
159-10 52-10	須恵器 椀	口～底 %	15.4 × 9.0 × 6.2	埋土	轆轤。右回転。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

G52号住居跡 (Fig. 159, 160・PL. 53, 54)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.50 × 2.20			

G区北部に位置し、38・39G37・38の範囲にある。51号・53号住居跡と重複しているが前者より新しい時期の所産である。壁高は約12cmを測る。床面は、51号住居跡の上に構築されているためか総じて軟弱である。竈は東壁を円形に近く掘り込み構築される。袖・煙道部などはない。燃焼部幅約44cm、奥行約56cmを測る。

第3章 G区の遺構と遺物

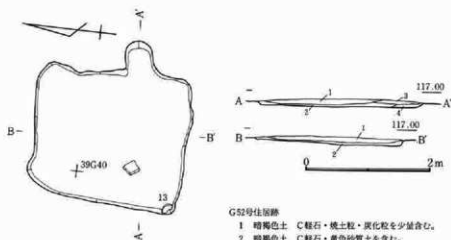


Fig.159 G52号住居跡

G52号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・黄色砂質土を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石小粒を含む。
- 4 暗褐色土 黄色砂質土 (5×5mm) を含む。

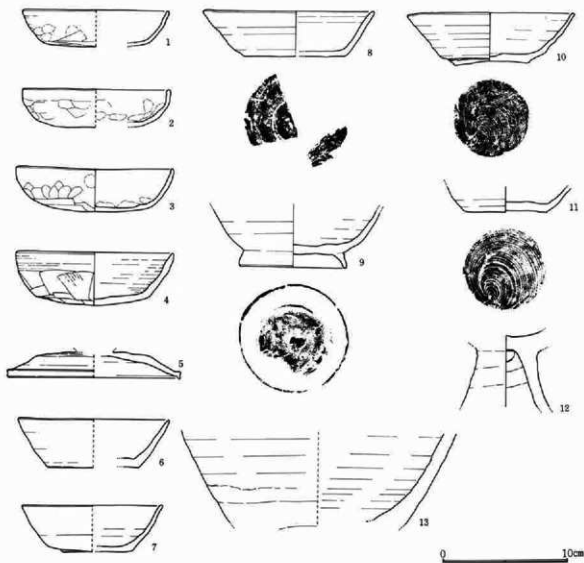


Fig.160 G52号住居跡出土遺物

G52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④色調 ⑤その他
160-1 54-1	土器 杯	口～底 残	11.7 × 8.7 × 2.8	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
160-2 54-2	土器 杯	口～底 残	12.0 × 7.2 × 3.0	床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
160-3 54-3	土器 杯	口～底 残	12.7 × 10.0 × 3.5	南東部床 下	指押。口縁部及び内面無で。体部下位横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
160-4 54-4	土器 杯	口～底 残	12.7 × 15.4 × 4.2	埋土	指押。口縁部及び内面横無で。体部横、底部不定方向幅広削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
160-5 54-5	須恵器 蓋	頂～端 残	13.8 × - × (2.1)	埋土	轆轤。右回転。頂部2段回転寛削り。横欠損。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
160-6 54-6	須恵器 杯	口～底 残	12.1 × 7.4 × 4.9	埋土	轆轤。右回転。底部手持寛削りか。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
160-7 54-7	須恵器 杯	口～底 小片	11.2 × 7.0 × 3.7	埋土	轆轤。右回転寛切り。無調整。	①加酸化還元・良好 ②灰白 ③緻密
160-8 54-8	須恵器 杯	口～底 残	13.8 × 8.3 × 3.6	埋土	轆轤。右回転寛切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
160-9 54-9	須恵器 椀	体～底 残	- × 8.6 × (5.7)	埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
160-10 54-10	須恵器 杯	口～底 残	13.8 × 7.5 × 4.3	南東部床 下	轆轤。右回転2度余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
160-11 54-11	須恵器 杯	体～底 全	- × 6.6 × (2.0)	床面	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
160-12 54-12	須恵器 高杯	脚 残	- × - × (5.8)	埋土	脚部紐造。横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
160-13 54-13	須恵器 要	下 残	- × - × (7.5)	床面	横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る

第3章 G区の遺構と遺物

G53号住居跡 (Fig. 161)

G区北部に位置し、36～38G39～41の範囲にある。51号・52号住居跡と重複しており両者より古い時期の所産である。竈を含め南半は51号住居跡の掘形によってほとんど消失している。壁高は約25cmを測り垂直に立ち上がる。西壁下には径10cm程度の浅い小穴が3個配されるが他には認められなかった。床面は比較的固く平坦である。出土遺物は極めて少ない。

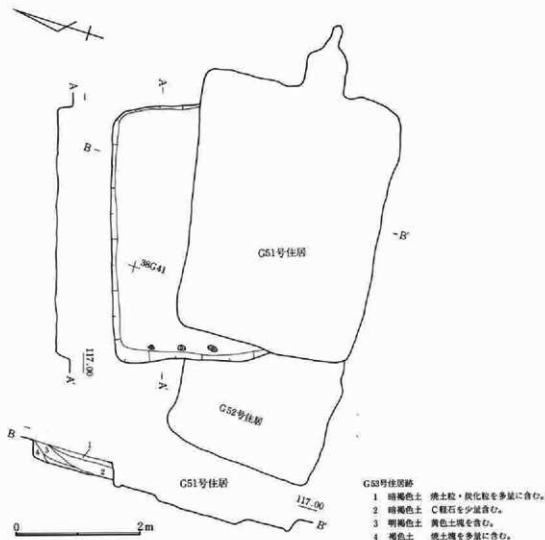


Fig.161 G53号住居跡

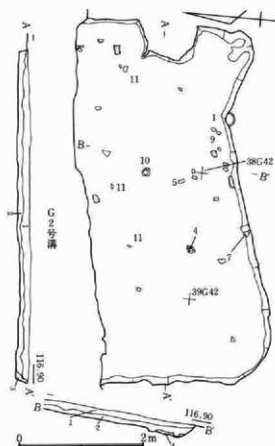
G54号住居跡 (Fig. 162, 163・PL. 55)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.92 ×			

G区北部に位置し、37～39G41・42の範囲にある。2号溝と重複してその北半は全て消失している。壁高は約22cmを測り垂直に立ち上がる。壁面は直線的な掘形をなさずかなり乱れている。床面は凝灰岩質層で形

第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

成されているため固くしまっているが、多少の凹凸がある。重複している2号溝に近く、東壁下に焼土・灰の分布が認められたが、竈の形状その他は不明である。



G54号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒・炭化粒を含み締る。
- 2 暗褐色土 締りなし。
- 3 暗褐色土 締りなし。
- 4 暗褐色土 黄色土塊を多量に含む。

Fig.162 G54号住居跡

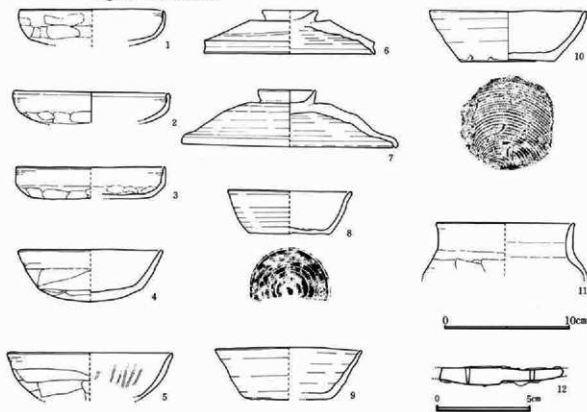


Fig.163 G54号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
163-1 55-1	土師器 杯	口～底 小片	11.8 × 10.2 × (3.0)	床 面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②にぶい褐 ③細砂混 る
163-2 55-2	土師器 杯	口～底 片	12.6 × 11.2 × (2.7)	埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
163-3 55-3	土師器 杯	口～底 片	12.0 × 9.4 × 2.5	埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③細砂混 る
163-4 55-4	土師器 杯	口～底 片	11.5 × 8.3 × 4.1	床 面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向莖削り。丸底。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
163-5 55-5	土師器 杯	口～体 片	13.2 × — × (3.7)	南部床面	口縁部及び内面横無で。体部横方向莖削 り。内面放射状雕文。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
163-6 55-6	須恵器 蓋	横～端 蓋	13.8 × 横4.5 × 3.4	埋 土	轆轤。右回転。頂部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
163-7 55-7	須恵器 蓋	横～端 片	17.4 × 横4.6 × 4.5	南部床面	轆轤。右回転。頂部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
163-8 55-8	須恵器 杯	口～底 片	10.0 × 6.6 × 3.4	埋 土	轆轤。右回転削り切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
163-9 55-9	須恵器 杯	口～底 片	11.8 × 7.0 × 4.1	南東部床 面	轆轤。右回転削り切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂少混る
163-10 55-10	須恵器 杯	口～底 片	12.5 × 7.5 × 4.1	南部床面	轆轤。右回転削り切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂少混る
163-11 55-11	土師器 壺	口～上 片	11.0 × — × (4.1)	南部床面	紐造。口頸部無で。体部上位横方向莖削 り。内面無で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る
163-12 55-12	鉄製品 刀	両端 欠損	長(6.6) 刃部長(3.3) 幅0.8 柄部幅0.5	埋 土		

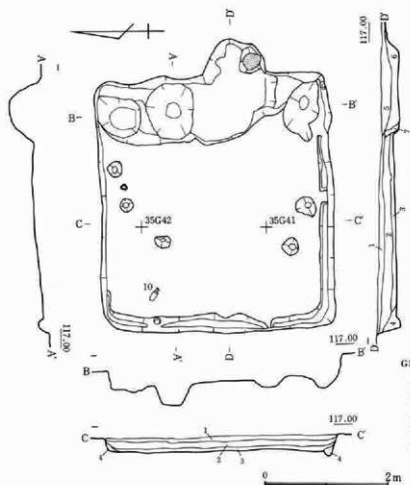
G57号住居跡 (Fig. 164、165・PL. 55、56)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.10 × 3.83	N— 89° —E	東壁やや南寄り	楕円形 90 × 57 × 22.5

G区北部に位置し、33～35G40～42の範囲にある。壁高は約30cmを測り、ゆるく角度をもって立ち上がる。南壁と西壁下には幅10～20cm、深さ約8cmの溝が巡る。床面は判断が困難で結果的には凝灰岩質層に到達してしまっ。東壁に近く掘形を思わせる土坑状の落ち込みが検出されており、すでに床面を削平してしまっ



第2節 G区の整穴住居跡と遺物



た感がある。凝灰岩質層面は固く平坦である。竈は東壁を半円形に掘り込み付設されるが、袖部、煙道部は作り出されていない。また、焼土・灰等の遺存もわずかである。これらのことは、住居跡構築後の使用期間の短かさに起因している現象とも考えられる。竈燃焼部幅約1m、奥行約70cmを測る。遺物の出土は少ない。

G57号住居跡

- |        |                 |
|--------|-----------------|
| 1 褐色土  | C軽石・焼土粒・炭化粒を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒を含む。     |
| 3 暗褐色土 | 灰・焼土粒・炭化粒を含む。   |
| 4 褐色土  | 炭化粒を含む。         |
| 5 暗褐色土 | 黄色砂質粒・C軽石を含む。   |
| 6 暗褐色土 | 焼土粒を少量含む。       |
| 7 褐色土  | 黄色砂質粒を含む。       |

Fig.164 G57号住居跡

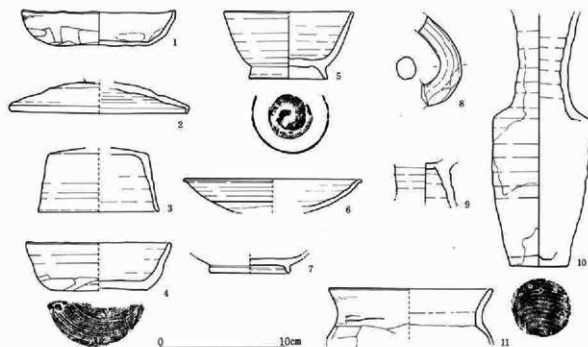


Fig.165 G57号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G57号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
165-1 56-1	土師器 杯	口～底 残	12.4 × 7.6 × 2.0		南東隅床面	指押。口縁部及び内面磨で。体部横。底部不定方向脱削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
165-2 56-2	須恵器 蓋	頂～端 残	14.2 × 8.2 × (2.5)		埋土	轆轤。右回転。頂部回転脱削り。	①還元・良好 ②明緑灰 ③緻密
165-3 56-3	須恵器 蓋	頂～端 残	9.6 × 8.0 × 5.1		埋土	轆轤。右回転。頂部灰被り。短頸蓋蓋か。	①還元・良好 ②褐灰 ③緻密
165-4 56-4	須恵器 杯	口～底 残	11.6 × 7.8 × 3.8		埋土	轆轤。右回転糸切り。腰部手持脱削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
165-5 56-5	須恵器 椀	口～底 残	10.4 × 6.2 × 5.3		埋土	轆轤。右回転脱削り。付高台横削で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
165-6 56-6	灰輪陶器 皿	端～体 残	14.4 × — × (2.6)		埋土	轆轤。右回転。体部内外施釉刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
165-7 56-7	灰輪陶器 椀	底 残	— × 6.2 × (1.2)		埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横削で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
165-8 56-8	須恵器 高杯	脚 残	— × — × (3.2)		埋土	紐造。横削で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
165-9 56-9	須恵器 甕	把手	—		埋土	紐造。重削り後。磨で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
165-10 56-10	須恵器 長瓶	頸～底 残	— × 4.6 × (19.9)		北西部床面	轆轤。右回転。静止糸切り。灰被り。口縁部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少混る
165-11 56-11	土師器 壺	口～上 残	13.0 × — × (4.0)		埋土	紐造。口頸部磨で。体部上位。横方向脱削り。内面磨削で。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る

G58号住居跡 (Fig. 166～169・PL56～58)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.80 × 3.13	N-99° -E	東壁やや南寄り	円形 40 × 35 × 15

G区北部に位置し、44～46G40～42の範囲にある。北西隅で4号墓跡と重複しているが、これよりも古い時期の所産である。また北側は後世の擾乱によって一部消失している。壁高は約8cmを測る。床面は平坦で比較的固く踏みまわっている。竈は東壁を楕円形に掘り込み、住居跡内へわずかに張り出す袖部が認められる。煙道部の作り出しはない。竈前面及び貯蔵穴内には電構築材と考えられる凝灰岩の加工材が散乱している。竈燃焼部幅約45cm、奥行約60cmを測る。遺物は竈周辺と貯蔵穴内から出土が多い。

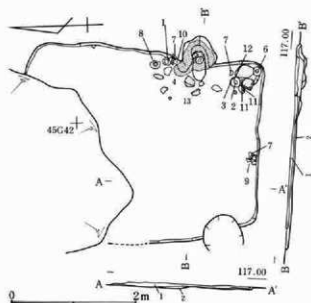


Fig.166 G58号住居跡

G58号住居跡

- 1 褐色土 C軽石を含む。
- 2 褐色土 罅りのある床。

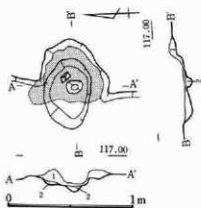


Fig.167 G58号住居跡竈

G58号住居跡竈

- 1 灰褐色土
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。

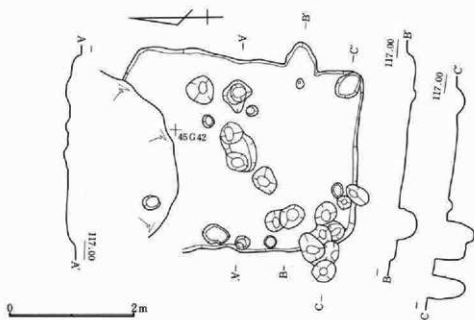


Fig.168 G58号住居跡掘形

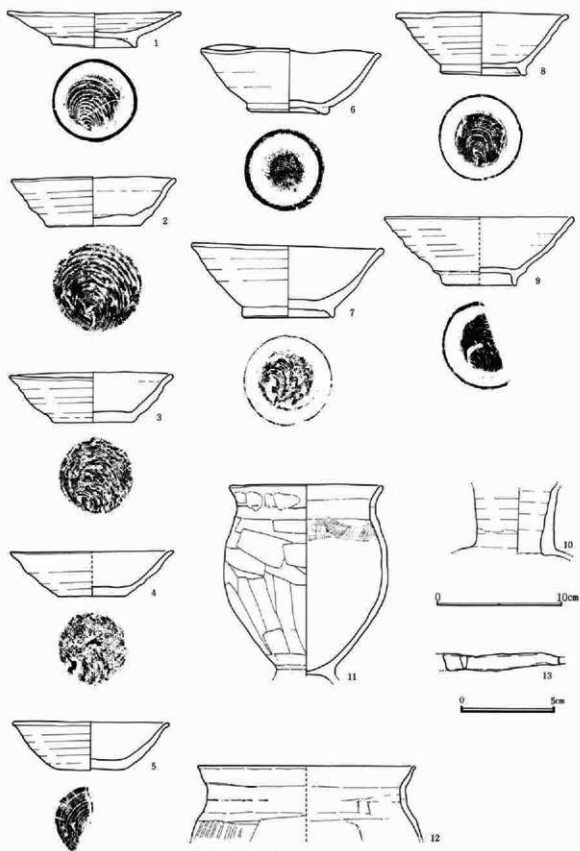


Fig.169 G58号住居跡出土遺物

G58号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	底径 × 器高			
169-1 57-1	須恵器 皿	口～底 残	14.0 ×	7.0 × 3.0	甕脇床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元 ②淡黄 ～灰白 ③細砂混る
169-2 57-2	須恵器 杯	口～底 (完)	13.2 ×	7.5 × 3.9	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
169-3 57-3	須恵器 杯	口～底 (完)	13.1 ×	6.4 × 4.0	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部、 油性炭化物付着。	①加酸化還元・低温 ②淡黄～灰白 ③砂混 る
169-4 57-4	須恵器 杯	口～底 片	13.0 ×	5.6 × 3.5	甕脇床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
169-5 57-5	須恵器 杯	口～底 片	12.6 ×	5.6 × 3.8	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。内外一部 破損。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂少混る
169-6 57-6	須恵器 碗	口～底 完	14.5 ×	7.0 × 5.0	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る
169-7 58-7	須恵器 碗	口～底 片	15.4 ×	7.4 × 5.9	甕脇床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ② 灰白 ③細砂混る
169-8 58-8	須恵器 碗	口～底 片	14.0 ×	7.0 × 5.0	甕脇床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
169-9 58-9	須恵器 碗	口～底 片	15.2 ×	6.0 × 5.4	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂少混る
169-10 58-10	灰粘陶器 長頸壺	頸 片	(3.6) ×	— × (6.0)	甕脇床面	轆轤。右回転。体部付近施軸。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
169-11 58-11	土師器 台付壺	口～底 片	12.4 × (	4.8) × (15.8)	南東部床 面	紐造。口頸部施で、体部上位横、中位斜、 下位縦方向脱脂。台部欠損。	①酸化・良好 ②によい粒 ③砂混る
169-12 58-12	土師器 壺	口～上 小片	17.4 ×	— × (5.6)	南東部床 面	紐造。口頸部、横方向脱脂り後撫で。体 部横方向脱脂り。内面施軸で。	①酸化・良好 ②に よい粒 ③細砂混る
169-13 58-13	鉄製品 刀子?		長(6.2)	幅0.7・0.4	甕左床 面		

G59号住居跡 (Fig. 170、171・PL. 58)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.90 × 3.80			

G区中央やや北寄りに位置し、40～42G37～39の範囲にある。東側で2号溝と重複しており、これよりも古い時期の所産である。調査当初、その確認形態から堅穴住居跡と判断したが、調査の進展に伴い住居跡としての条件を見出すことはできなかった。平面形は方形を呈し、約8cmの深さで落ち込み平坦面をなす。この落ち込みの中央部は径1.4m、深さ26cmの隅丸形状に再び落ち込む。埋土には、炭化粒・焼土を混え

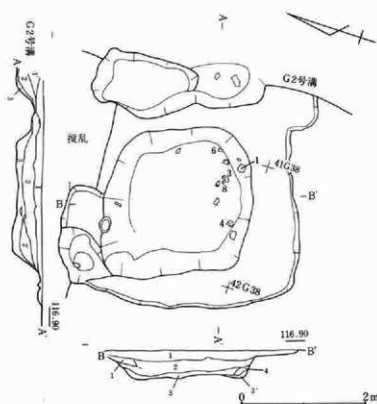


Fig.170 G59号住居跡

る層が堆積し、通常掘形を覆う土層とは異なっている。出土遺物には吊具状の塗銅製品がある。

G59号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
- 1' 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 2' 暗褐色土 Loam粒を含む。
- 3 暗褐色土 粘性、締りなし。
- 4 暗褐色土

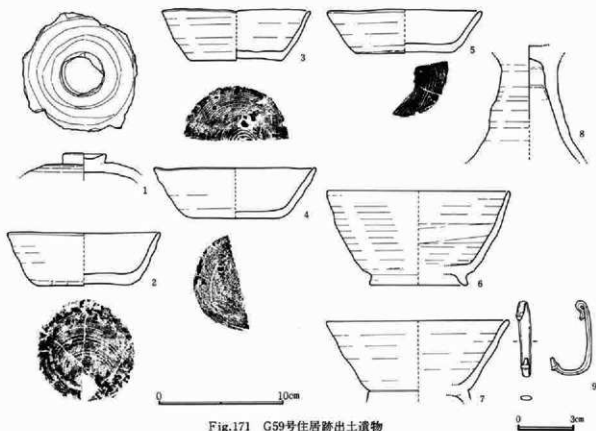


Fig.171 G59号住居跡出土遺物

G59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	底径 × 器高			
171-1 58-1	須恵器 蓋	胴～頂	(9.2) × 3.5	(2.3)	中央部床下	轆轤。右回転。頂部5段回転筋削り。端部打割。機部擦れ。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
171-2 58-2	須恵器 杯	口～底 残	12.3 × 7.6	× 4.3	埋土	轆轤。右回転糸切り。腰部手持筋削り。	①還元・やや軟 ②灰白 ③緻密
171-3 58-3	須恵器 杯	口～底 残	11.9 × 7.4	× 4.0	中央部床下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
171-4 58-4	須恵器 杯	口～底 残	12.4 × 7.8	× 3.4	中央部床下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
171-5 58-5	須恵器 杯	口～底 残	13.0 × 7.4	× 4.0	埋土	轆轤。右回転糸切り。腰部手持筋削り。	①還元・やや軟 ②灰白 ③緻密
171-6 58-6	須恵器 碗	口～底 小片	14.0 × (8.4) × (6.4)		中央部床下	轆轤。右回転。付高台及び底部横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
171-7 58-7	須恵器 碗	口～底 小片	14.6 × 7.8	× 7.5	埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
171-8 58-8	須恵器 高杯	脚 残	— × — × (9.0)		中央部床下	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
171-9 58-9	金銅製品	完	長 3.9 幅 0.6 厚 0.2		埋土	折面楕円形。釣り針状に成形。	金銅

G60号住居跡 (Fig. 172～174・PL. 59)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.50 ×			

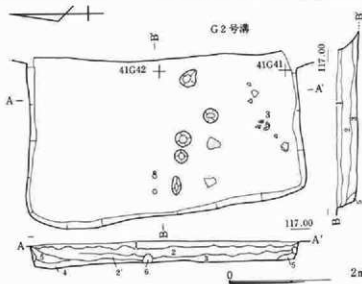


Fig.172 G60号住居跡

## G60号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量・焼土粒・炭化粒を含む。  
 2 灰褐色土 C軽石少量・焼土粒・炭化粒を少量に含む。  
 2' 灰暗褐色土 焼土粒・炭化粒を少量含む。  
 3 暗褐色土 焼土粒・炭化粒・黄色粘土塊を含む。  
 4 灰暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。  
 5 暗褐色土 良く練る。  
 6 目軽石層

### 第3章 G区の遺構と遺物

G区北部に位置し、39～42G40～43の範囲にある。東側は2号溝と西側は62号住居跡と重複している。新旧関係は2号溝より旧く、62号住居跡より新しい時期の所産である。壁高は約40cmを測り垂直に立ち上がる。床面は総じて軟弱で、とくに西側は顕著である。竈は2号溝西縁に焼土の削平が観察され、住居跡東壁に付設されていたことが知られる。その形状、規模等は不明である。また床面の西側には、焼土及び灰の分布が検出されたがこれは重複関係にある62号住居跡竈の削平痕と考えられる。出土遺物は少ない。

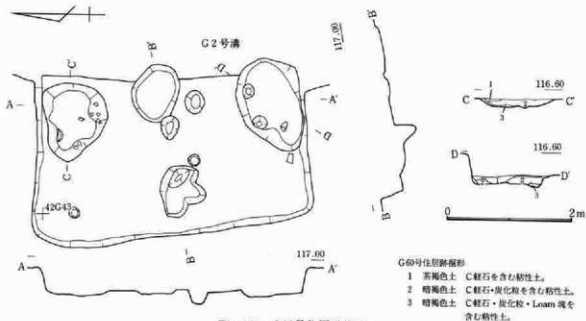


Fig.173 G60号住居跡掘形

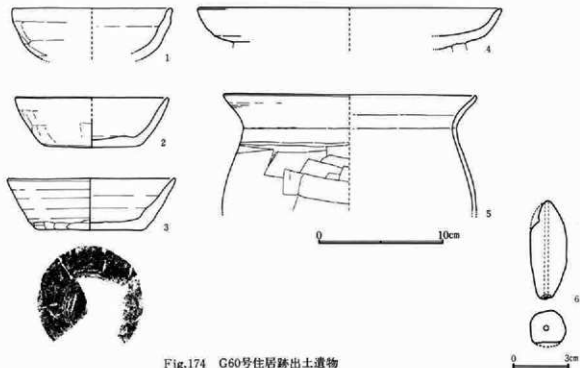


Fig.174 G60号住居跡出土遺物



G60号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
174-1 59-1	土師器 杯	口~体 片	12.8 × 8.0 × (4.0)	埋土	紐造か。口縁部及び内面側で。体部横方向に削り。	①酸化・良 ②橙 ③緻密
174-2 59-2	土師器 杯	口~底 片	12.4 × 8.0 × 4.0	埋土	紐造か。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向に削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
174-3 59-3	須恵器 杯	口~底 片	13.4 × 8.8 × 4.2	埋土	輪軸。右回転。腰部横、底部不定方向に削り。	①還元・良好 ②黄灰 ③緻密
174-4 59-4	須恵器 盥 端~底 小片	端~底 小片	24.4 × (18.6) × (3.3)	埋土	輪軸。右回転。底部回転削り。付高台欠損。	①還元・良 ②黄灰 ~灰白 ③細砂混る
174-5 59-5	土師器 甕	口~上 片	22.3 × — × (9.2)	埋土	紐造。口頸部側で。体部斜方向に削り、内面削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
174-6 59-6	土製品 土 鏝	完	長5.2 幅1.8 厚1.7	埋土	棒状。	①酸化・良 ②黒 ③砂混る

G61号住居跡 (Fig. 175、176・PL. 60)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.90 × 3.68	N-92°-E	東壁やや南寄り	

G区西部に位置し、49~51G29~31の範囲にある。3号掘立柱建物跡と重複しているが、これより古い時期の所産である。また、南北に設定された予備調査時の試掘溝によって電前面部が消失している。壁高は約20cmを測り、直線的に立ち上がる。壁下には幅約6~14cmの浅い溝が巡り溝中には数個の小穴が穿たれる。床面はほぼ平坦で中央部やや南寄りに焼土の分布が見られる。電は試掘溝によってそのほとんどが消失して燃焼部がかかるうじて残る。燃焼部幅約60cm、奥行約60cmと推定される。遺物は少量であるが、南壁沿いに瓦字観が出土している。

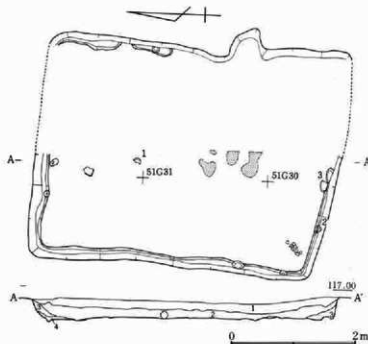


Fig.175 G61号住居跡

## G61号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗灰褐色土 焼土粒・灰化粒を含まないにC軽石を混える。
- 3 暗灰褐色土 Loams 粒を含む。
- 4 暗灰褐色土 練りなし。

第3章 G区の遺構と遺物

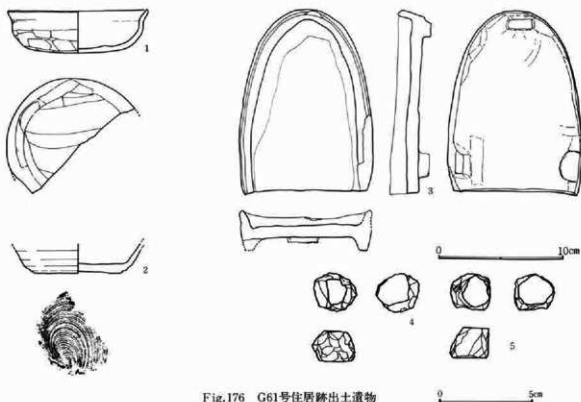


Fig.176 G61号住居跡出土遺物

G61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
176-1 60-1	土器 杯	口~底 片	11.2 × 8.5 × 3.4	中央部床 面	指押。口径及び内面無。体部横、底部 不定方向削り。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
176-2 60-2	須恵器 杯	体~底 小片	— × 7.0 × (2.4)	南西部南 壁下床面	轆轤。右回転永切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
176-3 60-3	須恵器 風字硯	突	長14.6 幅10.8 高3.1	南西部南 壁下床面	右端部の一部、左脚欠損。磨砥残る。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
176-4 60-4	須恵器 転用面子	突	縦2.0 横2.3 厚1.6	埋土	壺頸体部片転用。周縁打割。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
176-5 60-5	須恵器 転用面子	突	縦2.2 横1.9 厚1.6	埋土	壺頸体部片転用。周縁打割。4と同材。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

G62号住居跡 (Fig. 177~179・PL. 61)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	竪 位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	4.68 × 3.30			

G区北部に位置し、40~43G41~43の範囲にある。60号住居跡・5号基跡と重複しており両者より古い時期の所産である。南半は60号住居跡の掘形によって消失している。おおよそ方形を呈すと考えられるが南西隅が約30cm張り出し、径約28cm、深さ約10cmの円形の穴が穿たれる。壁高は約28cmを測り垂直に立ち上がる。

西壁から北壁にかけてと、南壁の一部には幅約20cm、深さ約6~7cmの溝が巡る。竪・貯蔵穴は、60号住居跡の床下から検出されたが、すでに掘形に近い状況で形態や規模は不明である。燃焼部と考えられる窪みは80×70cmの不整形円を呈し深さ約20cmを測る。また竪前の床面には広く焼土及び灰が分布する。出土遺物は少ない。

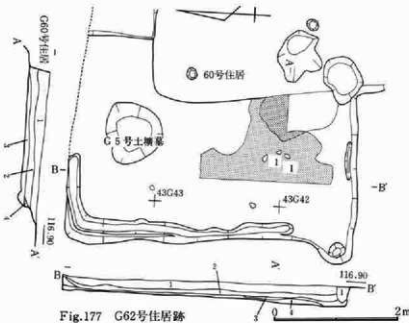


Fig.177 G62号住居跡

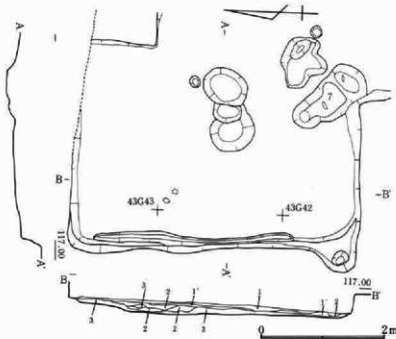


Fig.178 G62号住居跡掘形

## G62号住居跡

- 1 褐色土 C軽石入粒を多量に含む。
- 2 灰褐色土 褐色土塊を含む。
- 3 灰褐色土 灰を含む。
- 4 灰褐色土 網りなし。

## G62号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土塊・炭化粒を多量に含む粘質土。
- 1' 暗褐色土 C軽石・焼土塊多量、炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土塊・炭化粒を少量含む砂質土。
- 3 暗褐色土 C軽石を多量に含む。

第3章 G区の遺構と遺物

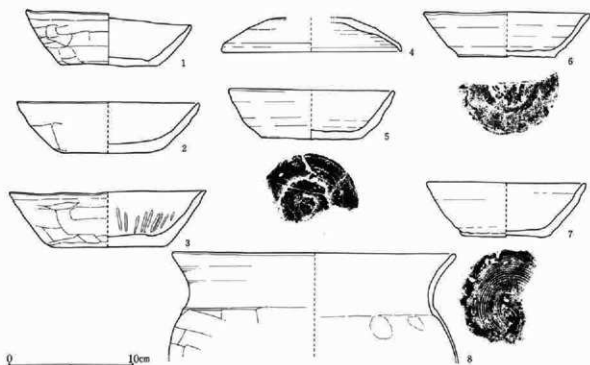


Fig.179 G62号住居跡出土遺物

G62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
179-1 61-1	土師器 杯	口～底 片	13.3 × 7.8 × 4.3	南西部床 面	指押。口縁部及び内面側で、体部横、底 部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
179-2 61-2	土師器 杯	口～底 小片	14.6 × 7.2 × 4.1	埋土	指押。口縁部及び内面側で、体部横、底 部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
179-3 61-3	土師器 杯	口～底 片	15.7 × 9.2 × 4.4	埋土	指押。体部横、底部不定方向旋削り。見 込部スリップ、内面放射状障文。	①酸化・良好 ②橙
179-4 61-4	須恵器 蓋	頂～側 片	14.4 × 6.6 × (2.7)	埋土	轆轤。右回転。頂部2段回転旋削り。損 欠損。	①還元・良好 ②青 ③緻密
179-5 61-5	須恵器 杯	口～底 片	13.4 × 8.2 × 3.9	埋土	轆轤。右回転旋削り。無調整。	①還元・やや軟質 ② 灰白 ③緻密
179-6 61-6	須恵器 杯	口～底 片	13.4 × 7.8 × 3.6	南東部床 下	轆轤。右回転旋削り。無調整。	①還元・良好 ②青 ③細砂混る
179-7 61-7	須恵器 杯	口～底 片	12.8 × 7.4 × 4.3	埋土	轆轤。右回転旋削り。無調整。底部壊れ。	①還元・やや軟質 ② 灰白 ③緻密
179-8 61-8	土師器 壺	口～上 片	22.6 × — × (8.2)	埋土	紐造。口縁部側で、体部横方向旋削り。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る

G63号住居跡 (Fig. 180~183・PL. 62、63)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	遺 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.40 × 3.90	N-78.5°-E	東壁ほぼ中央	

G区南部やや東寄りに位置し、35~38G23~25の範囲にある。79号・85号住居跡と重複するが、これらも新しい時期の所産である。壁高は約30cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床面はわずかに中央部が低くなるが、ほぼ平坦である。竪は東壁を楕円形に掘り込んである。袖材は現存していないが、掘形面で両袖にあたる部分に径約15cm、深さ約10cmの小穴が検出され構築材の存在が窺われる。燃焼部幅約40cm、奥行約1mを測る。遺物は竪右前方に完形に近い杯類が11個体ほど集中して出土している。

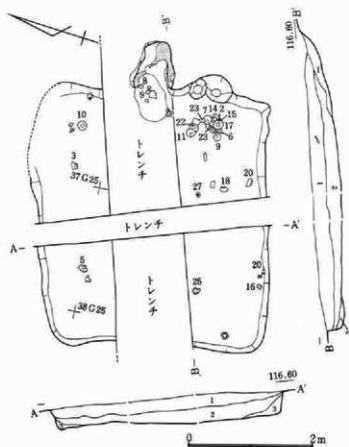


Fig.180 G63号住居跡

## G63号住居跡土層

- 1 褐色土 C粒石多量、焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C粒石少量、焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 練りなし。

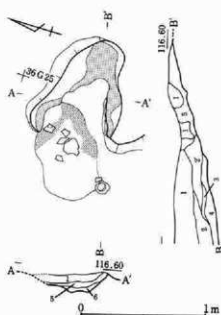


Fig.181 G63号住居跡竪

## G63号住居跡層

- 1 暗褐色土 C粒石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C粒石少量、焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 3 灰層
- 4 灰層 灰を含む砂質土。
- 5 焼土
- 6 黄褐色土 粘質土。

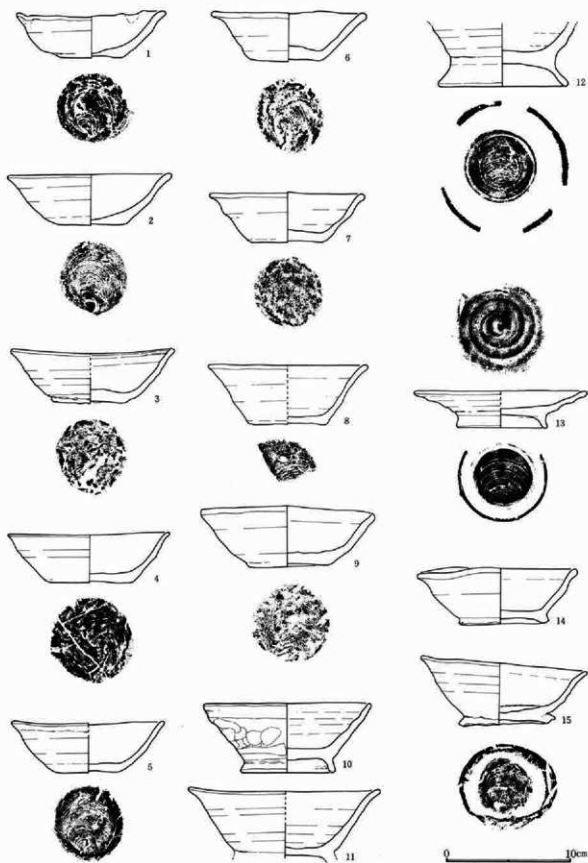


Fig.182 G63号住居跡出土遺物(1)

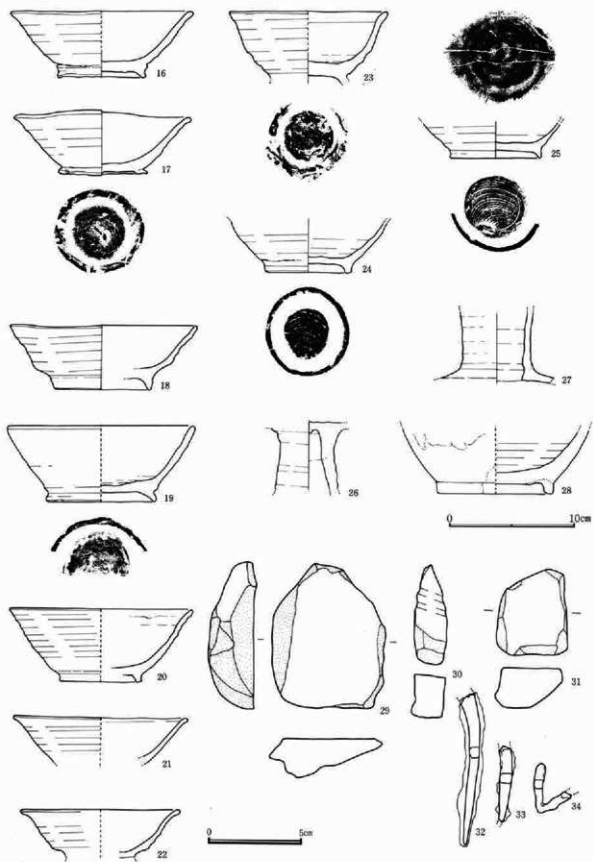


Fig.183 G63号住居跡出土遺物(2)

第3章 G区の遺構と遺物

G63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口 径 × 底 径 × 器 高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
182-1 62-1	須 恵 器 杯	口～底 (完)	12.1 × 5.7 × 3.7	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-2 62-2	須 恵 器 杯	口～底 (完)	13.2 × 5.5 × 4.1	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-3 62-3	須 恵 器 杯	口～底 1/2	13.2 × 6.0 × 4.3	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-4 62-4	須 恵 器 杯	口～底 1/2	13.0 × 6.6 × 4.1	埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。傾。	①還元・低温 ②黒 ③細砂混る
182-5 62-5	須 恵 器 杯	口～底 1/2	12.3 × 4.7 × 4.1	北西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-6 62-6	須 恵 器 杯	口～底 (完)	12.5 × 5.7 × 4.0	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。一部破片。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-7 62-7	須 恵 器 杯	口～底 (完)	12.5 × 5.7 × 4.0	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-8 62-8	須 恵 器 杯	口～底 小片	12.8 × 6.2 × 4.7	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。腰部破で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
182-9 63-9	須 恵 器 杯	口～底 1/2	13.9 × 6.5 × 4.8	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。内面一部 破片。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③砂混る
182-10 63-10	須 恵 器 椀	口～底 (完)	13.3 × 7.7 × 5.5	北東部床 面	指押。体部指面底面著。体部下位横。底部 定方向鋭削り。口縁部。付高台等横断で。	①加酸化還元・低温 ②灰黄褐 ③砂混る
182-11 63-11	須 恵 器 椀	口～底 1/2	15.4 × — × (5.7)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横 断で。付高台欠損。	①加酸化還元・低温 ②灰黄褐 ③砂混る
182-12 63-12	須 恵 器 椀	体～底 1/2	— × 10.3 × (4.8)	埋 土	轆轤。右回転糸切り。大型付高台横断で。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③砂混る
182-13 63-13	須 恵 器 皿	端～底 1/2	13.9 × 7.2 × 2.9	埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。見 込部に大小「×」寛掻き。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
182-14 63-14	須 恵 器 椀	口～底 (完)	12.9 × 7.2 × 4.5	南東部床 面	轆轤。右回転。付高台及び底部横断で。 体部歪む。	①酸化 ②にぶい褐 ③砂混る
182-15 63-15	須 恵 器 椀	口～底 (完)	13.4 × 7.7 × 5.3	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。潰 れ。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る
183-16 63-16	須 恵 器 椀	口～底 1/2	14.6 × 7.2 × 5.2	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①加酸化還元・低温 ②灰白～明赤褐 ③砂 混る
183-17 63-17	須 恵 器 椀	口～底 (完)	14.2 × 7.2 × 5.2	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横 断で。付高台一部。潰れ。	①還元・低温 ②灰白～黒 ③砂混る
183-18 63-18	須 恵 器 椀	口～底 1/2	14.9 × 7.8 × 5.3	南東部床 面	轆轤。右回転。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
183-19 63-19	須 恵 器 椀	口～底 1/2	15.0 × 8.8 × 6.0	埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る



G63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
183-20 63-20	須恵器 椀	口~底 片	14.7 × 6.6 × 5.8	南西部床 面	轆轤。右回転。付高台横撫で。薄手。	①還元・低溫 ②灰白 ③砂混る
183-21 63-21	須恵器 椀	口~体 片	14.0 × — × ( 3.6)	埋 土	轆轤。右回転。薄手。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
183-22 63-22	須恵器 椀	口~体 片	12.8 × — × ( 3.7)	南東部床 面	轆轤。右回転。	①酸化 ②にぶい橙 ③砂混る
183-23 63-23	須恵器 椀	口~底 片	12.6 × — × ( 5.7)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。厚手。	①還元・低溫 ②灰白~黒 ③砂混る
183-24 63-24	須恵器 椀	体~底 片	— × 7.0 × ( 4.0)	埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。付高台端部に置台痕。	①加酸化還元・低溫 ②灰白 ③砂混る
183-25 63-25	須恵器 椀	体~底 片	— × 7.3 × ( 2.8)	南西部床 下	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低溫 ②明青灰 ③細砂混る
183-26 63-26	須恵器 高 杯	脚 片	— × — × ( 5.5)	埋 土	紹造巻上。横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
183-27 63-27	灰輪陶器 長 理 壺	頸 片	— × — × ( 5.5)	南東部床 面	横撫で。体部接合。内外施釉。	①還元・良好 ②灰オリーブ ③やや粗
183-28 63-28	灰輪陶器 壺	下~底 片	— × 9.2 × ( 5.3)	竈内埋土	轆轤。右回転。外面施釉。	①還元・良好 ②緑灰 ③やや粗
183-29 63-29	石 製 品 砥 石		長 7.6 幅 6.1 厚 2.3	埋 土	円礫2カ所使用。荒砥。	輝石安山岩
183-30 63-30	石 製 品 砥 石		長 5.3 幅 1.3 厚 2.3	埋 土	1面使用	角閃石安山岩
183-31 63-31	石 製 品 砥 石		長 4.6 幅 3.8 厚 2.1	埋 土	1面使用	角閃石安山岩
183-32 63-32	鉄 製 品 釘	頂 部 欠 損	長(8.0)厚0.5	埋 土	角釘	
183-33 63-33	鉄 製 品 釘	両 端 欠 損	長(4.0)厚0.5	埋 土	角釘	
183-34 63-34	鉄 製 品		長(4.7) 厚0.5	埋 土	L字状に折れる	

G64号住居跡 (Fig. 184~188・PL. 64、65)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.82 × 2.97	N- 81' -E	東壁ほぼ中央	隅丸方形 110 × 105 × 28

### 第3章 G区の遺構と遺物

G区南東部に位置し、31・32G26～28の範囲にある。31号・36号・78号・88号の各住居跡及び5号井戸跡と重複している。新旧関係は、5号井戸跡・31号・36号住居跡より旧く、78号・88号住居跡より新しい時期の所産である。遺存状態は南西部が5号井戸跡によって消失しているが、他住居跡より深い掘形でおおよその形態などは窺い知れる。壁高は約20cmを測り、垂直に立ち上がる。竈は東壁を円形に掘り込み作り出す。左袖部には凝灰岩の加工材が配されており、右袖部には袖石を埋め込んだと考えられる小穴が検出されている。燃焼部幅は約55cm、奥行約1.1mを測る。遺物は散在して出土する。

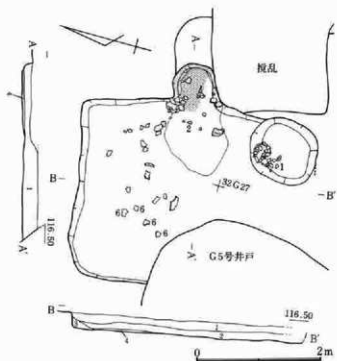


Fig.184 G64号住居跡

#### G64号住居跡

- 1 褐色土 C軽石大粒・焼土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 3 褐色土 C軽石・焼土粒を少量、Loam 塊を含む。
- 4 灰層

#### G64号住居跡竈

- 1 焼土 潤滑焼土・灰を含む。
- 2 灰層 焼土粒を含む。
- 3 灰層 焼土粒を含む。

#### G64号住居跡掘形

- 1 褐色土 C軽石を多量に含み壁く締る(床)
- 2 褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 3 灰層
- 4 暗褐色土 焼土粒を含む粘性土。
- 5 暗褐色土 焼土粒大粒を多量に含む。
- 6 褐色土 Loam 粒多量、C軽石・焼土粒・灰を含む。
- 7 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 8 暗褐色土 Loam 粒を多量に含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒を少量含み粘性強い。
- 9 焼土 焼土粒大粒を多量に含む。

#### G64号住居跡電掘形

- 1 焼土塊 上位に灰層あり壁く締る(席)。
- 2 焼土粒
- 3 暗褐色土 焼土・灰を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 5 褐色土 砂質土。
- 6 暗褐色土 粘性土。
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土

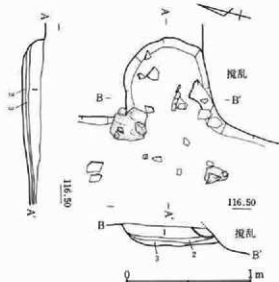


Fig.185 G64号住居跡竈

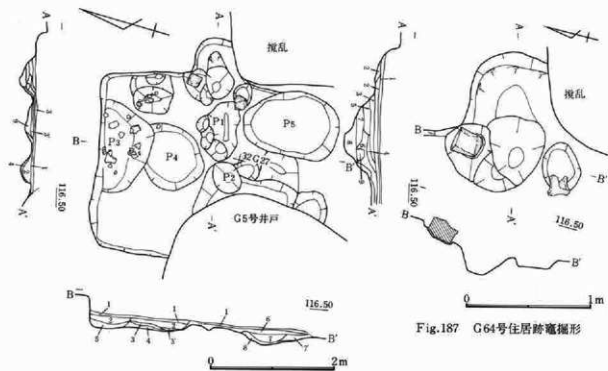


Fig.186 G64号住居跡掘形

Fig.187 G64号住居跡竪掘形

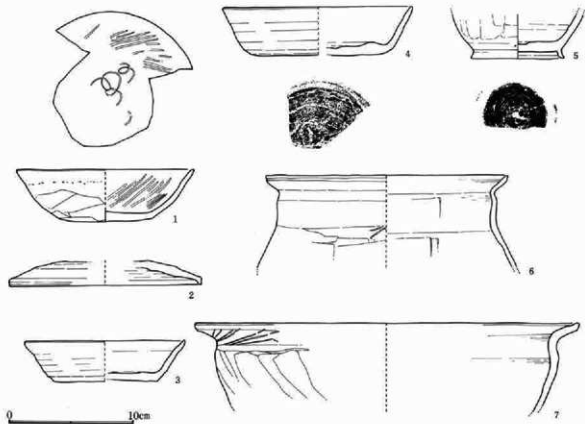


Fig.188 G64号住居跡出土遺物

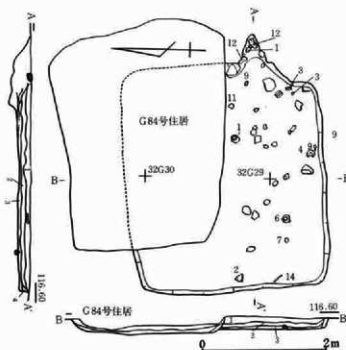
第3章 G区の遺構と遺物

G64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 ④その他
188-1 65-1	土師器 杯	口~底 片	14.2 × 7.5 × 4.1	南東部土 坑内	指折、口縁・内面無で。体部斜、底部不 定方向寛削り。口縁部に刺突列点。見込 部溝状、内面斜状噴文。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
188-2 65-2	須恵器 蓋	頂~端 小片	15.4 × - × (2.0)	北東部床 面	轆轤、右回転。頂部3段回転削り。	①還元・良好 ②褐灰 ③細砂混る
188-3 65-3	須恵器 杯	口~底 片	12.8 × 8.2 × 3.3	埋土	轆轤、右回転。底部及び腰部、手持寛削 り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
188-4 65-4	須恵器 杯	口~底 片	15.2 × 10.7 × 3.8	埋土	轆轤、右回転。底部~腰部、回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
188-5 65-5	須恵器 蓋	下~底 片	- × 7.4 × (3.5)	埋土	轆轤、右回転。付高台及び底部噴無で。 体部縦方向寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
188-6 65-6	土師器 壺	口~上 片	19.4 × - × (7.3)	北西部床 面	紐造。口頸部無で。体部横方向寛削り。 内面噴無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
188-7 65-7	土師器 鉢	口~上 小片	30.8 × - × (7.0)	電・南西 部床下	紐造。口縁部強い無で。体部、下方から 斜上方向寛削り。口頸部窪当復明瞭。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂少混る

G65号住居跡 (Fig. 189~191・PL. 66、67)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.65 × 3.20	N- 83° -E	東壁やや南寄り	



G区南東部に位置し、31~33G28~30の範囲にある。27号・28号・78号・84号・90号の各住居跡及び14号土坑と重複している。新旧関係は、27号・78号・84号・90号より新しく、28号住居跡、14号土坑より古い時代の所産である。壁高は約18cmを測り垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で電前から西部にかけて固く踏みしまる。B-B'電は東壁を三角形に掘り込み作り出される。左袖には凝灰岩が配されるが残欠である。燃焼部幅は約50cm、奥行約70cmを測る。遺物は電周辺に多く出土している。

G65号住居跡

- 1 褐色土 C 凝石・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C 凝石・焼土粒を含み部分的に炭化層を混る。
- 3 灰褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土

Fig.189 G65号住居跡

第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

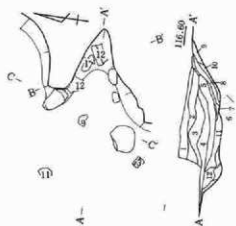


Fig.190 G65号住居跡

G65号住居跡

- 1 褐色土 C軽石多量・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石大粒・焼土粒少量を含み灰化層部分的に属する。
- 3 褐色土 C軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土 灰分を多量に含む。
- 5 暗褐色土 焼土・炭化粒を含みC軽石の量が上層より少量になる。
- 6 焼土
- 7 灰面
- 8 焼土 灰を含む。
- 9 燧壁
- 10 灰層
- 11 茶褐色土 灰を含む。
- 12 灰面
- 13 黄褐色土 黄色Loamを主体、焼土粒を含む。
- 14 茶褐色土 Loam層。

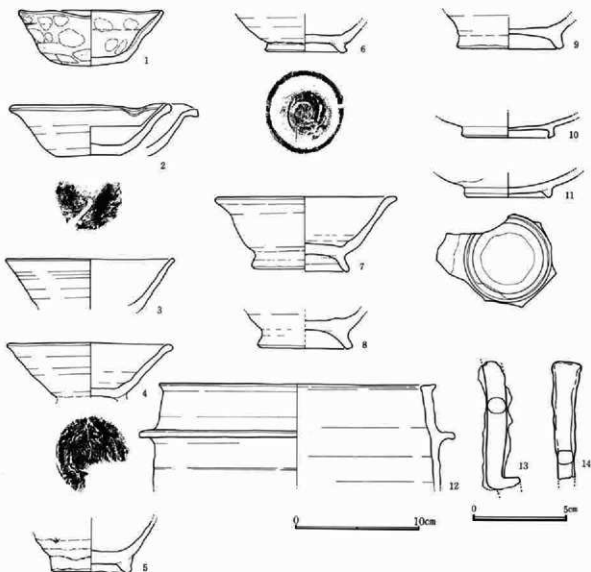


Fig.191 G65号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G65号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
191-1 66-1	土師器 杯	口～底 %	11.5 × 6.1 × 4.4	竈内・南 東部床 面	指押。口縁部無で。体部内外指押痕跡。体部下位。横方向広がり。	①酸化 ②黄褐色 ③細砂混る
191-2 66-2	須恵器 杯	口～底 %	13.0 × 5.2 × 4.0	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口唇部一部片口状引出し。炭灰混る。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
191-3 66-3	須恵器 椀	口～体 %	13.6 × — × (4.0)	南東部床 面	轆轤。右回転。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③砂混る
191-4 66-4	須恵器 椀	口～底 %	13.2 × (5.0) × (4.3)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台剥落。	①還元・低温 ②灰白 ③粗砂混る
191-5 66-5	須恵器 椀	体～底	— × (6.3) × (4.2)	埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部粗い無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
191-6 66-6	須恵器 椀	体～底	— × (6.6) × (3.0)	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
191-7 67-7	須恵器 椀	口～底 %	14.5 × 7.8 × (5.9)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る
191-8 67-8	須恵器 椀	底 %	— × 7.5 × (3.1)	竈内埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
191-9 67-9	須恵器 椀	底 %	— × 8.6 × (3.7)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。厚手。	①酸化 ②橙 ③粗砂混る
191-10 67-10	灰釉陶器 皿	底	— × 7.4 × (1.4)	埋土	轆轤。右回転。施釉刷毛塗。	①還元・良好 ②灰 ③やや粗
191-11 67-11	灰釉陶器 転用硯	底	— × 6.8 × (2.0)	南東部床 面	轆轤。右回転。施釉刷毛塗。底部転用研磨。朱付着。断面にも付着。	①還元・良好 ②灰黄 ③緻密
191-12 67-12	— 羽蓋	口～上 %	22.1 × — × (8.0)	竈内	組造。横無で。	①還元・低温 ②灰白 ③粗砂混る
191-13 67-13	鉄製品		長(6.8) 径0.9	埋土	片端L字状に折れる	
191-14 67-14	鉄製品		長(6.2) 厚0.7~1.4	南西部 床	片端はやや広がる。	

G66号住居跡 (Fig. 192~195・PL. 67、68)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	埋位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.03 × 2.90	N- 89° - E	東壁やや南寄り	

G区中央部やや南寄りに位置し、41・42G28・29の範囲にある。15号・16号住居跡と重複しており新旧関係は両者より新しい時期の所産である。確認段階の平面形は極めて不明確で南壁は最後まで明瞭な決定を下

第2節 G区の壁穴住居跡と遺物

すことはできなかった。壁高は約14cmで浅く、ゆるやかな立ち上がりである。西壁の一部と南壁は凹凸が著しく不安定である。床面はゆるく波うち良好な状態ではなく総じて軟弱である。竈は東壁を楕円形に掘り込んで作り出されるが南側が平坦としない。袖部・煙道部は確認されていない。燃烧部は、火床その後も焼土化の度合いが弱く火床上面に堆積した黒色の灰層の厚みが目立っていた。燃烧部幅約60cm、奥行約55cmを測る。住居跡形状は北壁沿いと南西隅に各々穴が検出された。前者は径約20cm、深さ約30cm、後者は径約30cm、深さ約14cmを測る。かなり凹凸の著しい掘形であるが形態を窺うことのできる土坑の窺みはなかった。遺物の出土は少量である。

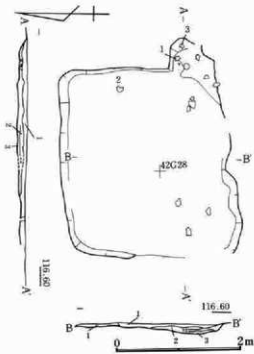


Fig.192 G66号住居跡

G66号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む粘性土を強く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石・Loam 粒を含み堅く締る。
- 3 暗灰褐色土 C軽石・Loam 粒を含み堅く締る。

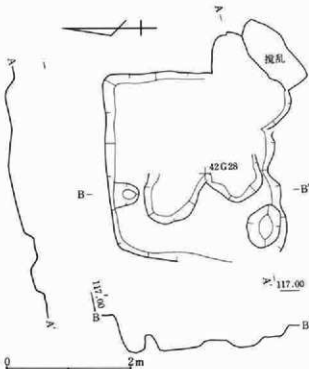


Fig.193 G66号住居跡掘形

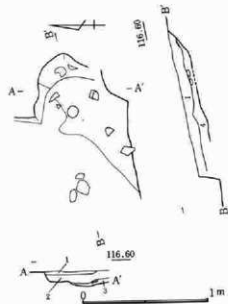


Fig.194 G66号住居跡竈

G66号住居跡竈

- 1 暗褐色土 褐色粘性土・黄色土粒を多量に含み締る。
- 2 褐色土 褐色土粒を多量に含む。
- 3 黒灰
- 4 灰褐色土 C軽石・Loam 粒を含み堅く締る(床)

第3章 G区の遺構と遺物

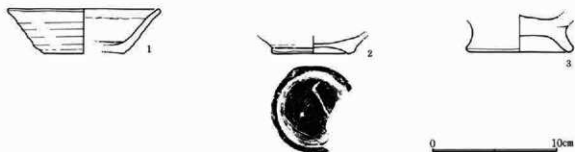


Fig.195 G66号住居跡出土遺物

G66号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
195-1 68-1	須恵器 杯	口～底 ¾	12.4 × 6.3 × 3.6	竈内	轆轤。右回転糸切り。無調整。炭灰顯著。	①還元・低温 ③胎土 ②黒褐 ③砂混る
195-2 68-2	須恵器 椀	底 ¾	— × 6.4 × (1.5)	北東部床 下	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①酸化・軟質 ②にぶい褐 ③細砂混 る
195-3 68-3	須恵器 椀	底 ¾	— × 8.6 × (2.9)	竈内	轆轤。付高台及び底部横断で。厚手。	①加酸化還元・高温 ②灰白 ③砂混る

G67号住居跡 (Fig. 196～198・PL. 69、70)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.24 × 2.98			

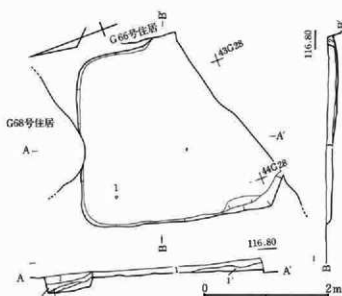


Fig.196 G67号住居跡

G区中央部南寄りに位置し、42～44G 28・29の範囲にある。南壁は削平が著しく消失している。東壁は66号住居跡によって破壊されているが一部残る東壁の線が小さく張る様相があり竈の存在が想定される。焼土等の散布はなく確認はできなかった。壁高は約10cmを測りゆるく立ち上がる。床面は平坦をなすが踏みしまりは弱い。出土遺物は少なく小片を認めたのみである。

G67号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石多量、焼土・炭化粒を少量含む。  
 1' 暗褐色土  
 2 暗褐色土 C 軽石・焼土・炭化粒を少量含む。



第2節 G区の堅穴住居跡と遺物

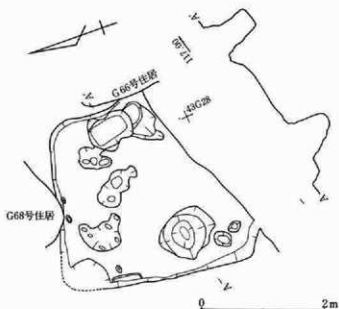


Fig.197 G67号住居跡掘形

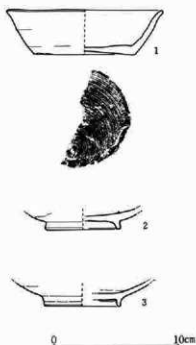


Fig.198 G67号住居跡出土遺物

G67号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
198-1 70-1	須恵器 杯	口～底 片	12.5 × 8.0 × 3.6	北西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
198-2 70-2	灰粘陶器 椀	底 片	— × 6.0 × ( 1.2)	貯蔵穴埋 土	轆轤。内面全施釉。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密
198-3 70-3	灰粘陶器 椀	底 片	— × 6.0 × ( 2.0)	貯蔵穴埋 土	轆轤。指輪刷毛塗。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密

G68号住居跡 (Fig. 199～202・PL. 70、71)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.95 × 2.60	N— 81° —E	東壁やや南寄り	円形 45 × 40 × 19

G区中央部に位置し、42・43G29・30の範囲にある。18号・67号・76号住居跡とわずかな部分で重複しているが新旧関係については明らかでない。出土遺物の面からでは最も古い時期の様相をもっている。壁高は

第3章 G区の遺構と遺物

約30cmを測り垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、竈前面は固く踏みしめる。中央部には固く焼けた火床が検出されている。30×36cmの大きさで楕円形を呈し、掘形はなく床面に直に使用している。火床の南側には灰の分布が認められているが、性格は不明である。竈は東壁を楕円形に掘り込み、袖部・煙道部などの作り出しはない。掘形によれば、燃烧部縁辺及び中央に径約10cm、深さ8~10cm程度の小穴あるいは窪みが検出されている。燃烧部幅約60cm、奥行約70cmを測る。遺物は竈内の出土が多い。

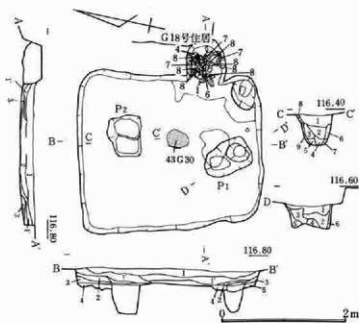


Fig.199 G68号住居跡

G68号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒・炭化粒を少量含む。
- 1' 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・Loam粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 Loam粒を少量含む黒褐色粘性土。
- 4 暗褐色土 Loam粒を少量含む黒褐色粘性土。

G68号住居跡P1

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 Loam塊を含む粘性土。
- 3 暗褐色土 粘性塊。
- 4 暗褐色土 粘性土。
- 5 暗褐色土 粘性土。
- 6 暗褐色土 粘性土。

P2

- 1 褐色土 C軽石大粒を含む。
- 2 暗褐色土 Loam粒・C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 Loam粒を含む。
- 4 暗褐色土 粗粒。
- 5 暗褐色土 粘性土。
- 6 暗褐色土 Loam粒を含む粘性土。
- 7 暗褐色土 Loam粒大粒を含む粘性土。
- 8 暗褐色土 粘性土。
- 9 暗褐色土 粘土塊。

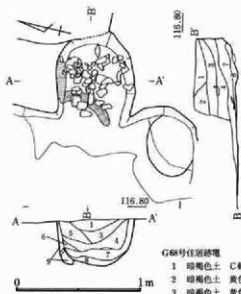


Fig.200 G68号住居跡竈

G68号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含み緊く締る。
- 2 暗褐色土 黄色土塊も多量に含み緊く締る粘性土。
- 3 暗褐色土 黄色土塊少量、焼土粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 3より細く小粒。
- 5 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 6 暗褐色土 黒灰を含む。
- 7 焼土 崩落焼土。
- 8 暗褐色土 灰を含む。
- 9 焼壁

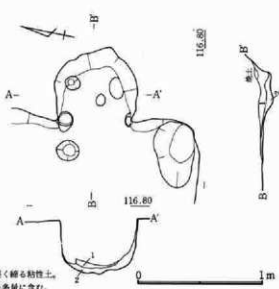


Fig.201 G68号住居跡竈掘形

G68号住居跡竈掘形

- 1 暗褐色土 灰を含む。
- 2 明褐色土 崩落焼土。

第2節 G区の整穴住居跡と遺物

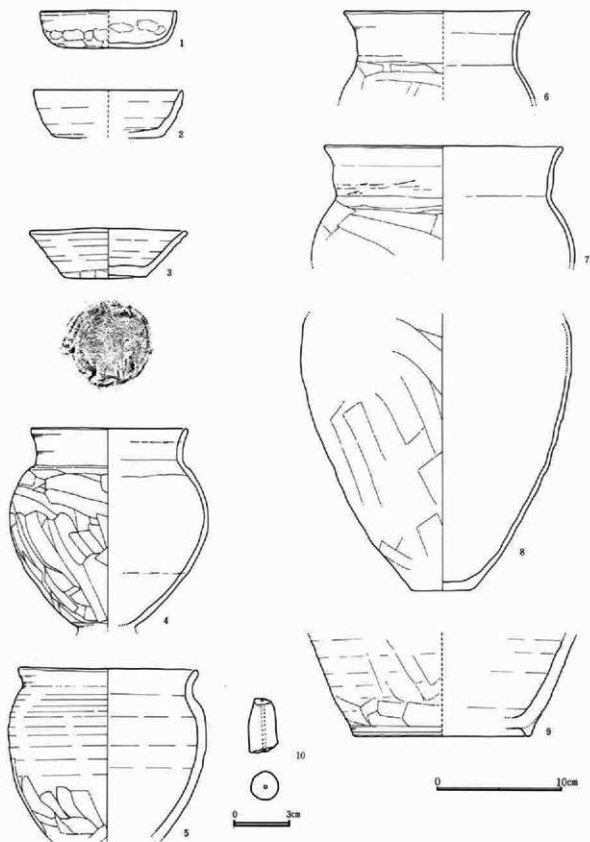


Fig.202 G68号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G68号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③断土 その他
202-1 71-1	土師器 杯	口～底 片	11.0 × 8.2 × 3.0	竈内	指押。縁で。底部不定方向削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
202-2 71-2	須恵器 杯	口～底 小片	12.0 × 9.0 × 3.8	北東部床 面	轆轤。右回転。底部～腰部、回転削り。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
202-3 71-3	須恵器 杯	口～底 片	12.6 × 6.5 × 4.0	埋土	轆轤。右回転未切り。腰部、手持削り。 厚手。	①還元・良好 ②灰 ③細砂少混る
202-4 71-4	土師器 台付壺	口～体	12.5 × 5.0 × (16.0)	竈内	紐造。口頸部強い撫で。体部上位横、中 ～下位斜方向削り。底～台部欠損。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
202-5 71-5	土師器 壺	口～体	14.5 × — × (13.5)	竈内	紐造横撫で。体部下位斜方向削り。成 形は羽釜に近似し上半は回転調整。	①加酸化還元 ②明褐 ～黒褐 ③細砂混る
202-6 71-6	土師器 壺	口～上 片	14.9 × — × (15.6)	竈内	紐造。口頸部撫で。体部上位、横方向削 り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③砂混る
202-7 71-7	土師器 壺	口～上 片	19.2 × — × (9.2)	竈内	紐造。口頸部撫で。体部上位、横方向削 り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
202-8 71-8	土師器 壺	体～底 片	— × 5.0 × (22.0)	竈内	紐造。体部縦～斜方向、底部不定方向削 り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混 る
202-9 71-9	須恵器 壺	下～底 片	— × 13.9 × (7.6)	埋土	紐造横撫で。体部斜、体部最下位横方向 削り。	①加酸化還元・低温 ②によい黄橙 ③細砂 混る
202-10 71-10	土製品 土	片	長(3.3) 幅 1.5 厚 1.5	埋土	棒付握。撫で。下平欠損。	①酸化・良好 ②灰褐 ③細砂混る

G69号住居跡 (Fig. 203～205・PL. 72)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.95 × 2.85	N— 84° — E	東壁やや南寄り	

G区東部に位置し、30・31G34・35の範囲にある。44号・45号・70号住居跡と重複している。新旧関係は3者いづれより古い時期の所産である。45号住居跡にほぼ重なるため南側のほとんど消失している。壁高は約14cmを測り垂直に立ち上がる。床面は45号住居跡の掘形によって不明である。竈は東壁を隅円形に掘り込み、先端には短かい煙道部を作り出す。袖部は検出されていないが、掘形で袖材を配したと考えられる不整円形の窪みが認められた。燃焼部幅約55cm、奥行約70cm、煙道部長さ25cmを測る。出土遺物は少量である。

第2節 G区の整穴住居跡と遺物

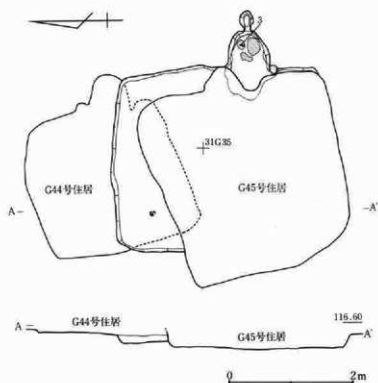


Fig.203 G69号住居跡

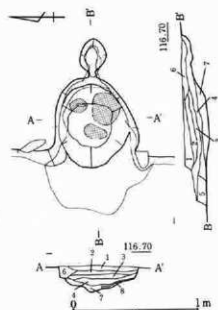


Fig.204 G69号住居跡電

G69号住居跡電

- 1 暗褐色土 C 軽石・Loam 粒・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 灰を含む。
- 3 焼土 崩落焼土に灰を含む。
- 4 灰層
- 5 暗褐色土 Loam 粒を多量に含む。
- 6 暗褐色土 粘性、締りあり。
- 7 灰層
- 8 焼土



Fig.205 G69号住居跡出土遺物

G69号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) □径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
205-1 72-1	土器 杯	□~底 1/2	12.0 × 8.0 × 3.1	貯蔵穴内	指押。口縁部及び内面撫で。体部指痕顕著。底部不定方向宛削り。	①酸化・良好 ②におい性 ③細砂混る
205-2 72-2	須恵器 杯	□~底 (完)	12.0 × 7.3 × 3.5	S J-44 切合部	轆轤。右回転2度余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
205-3 72-3	須恵器 杯	□~底 1/2	13.4 × 6.0 × 4.3	床面	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・やや軟質 ②灰白 ③緻密

第3章 G区の遺構と遺物

G70号住居跡 (Fig. 206~210・PL. 73, 74)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.95 × 2.90	N—84°—E	東壁やや南寄り	楕円形 85 × 65 × 16

G区東部に位置し、30・31G33・34の範囲にある。44号・45号・69号住居跡と重複している。新旧関係は44号・45号住居跡より旧く、69号住居跡より新しい時期の所産である。竈及び南壁を検出したのみで他は消失している。壁高は約13cmを測り垂直に立ち上がる。床面を確認できた両側は比較的固く踏みしまる。床下には多くの土坑状の窪みが検出されたが、当住居跡に属するか否かは確定できない。竈は東壁を楕円形に掘り込んである。左右袖部には凝灰岩の加工材が配される。煙道の作り出しはない。燃焼部幅約50cm、奥行約

60cmを測る。なお、おおよそ燃焼部にあたる範囲は、重複している69号住居跡の貯蔵穴上に構築されている。出土遺物は少量である。



Fig.206 G70号住居跡

G70号住居跡竈

- 1 切暗褐色土 C軽石・黄色土粒を多量に含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石・黄色土粒少量含みやや暗い。
- 3 黄褐色土 黄色土粒を含み粘性強い。
- 4 暗褐色土 C軽石・黄色土粒小粒を含む。
- 5 暗黒褐色土 黒灰・炭化粒多量、焼土粒を含み粘性強い。

G70号住居跡貯蔵穴

- 1 暗褐色土 Loam 粒多量・炭化粒を含む粘性土。
- 1 暗褐色土 炭化粒を含む粘性土。
- 2 暗褐色土 Loam。

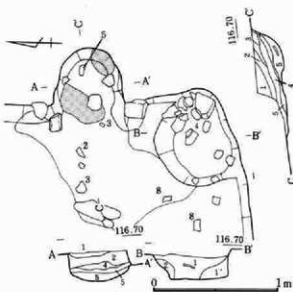


Fig.207 G70号住居跡竈

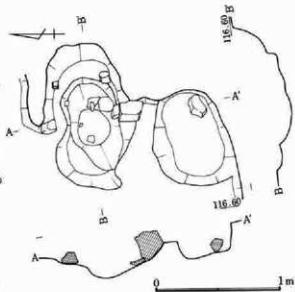


Fig.208 G70号住居跡竈撮影

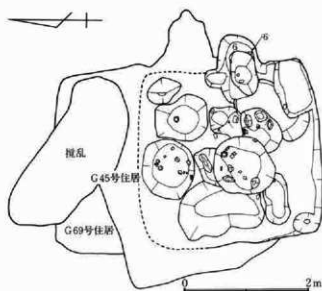


Fig.209 G70号住居跡照形

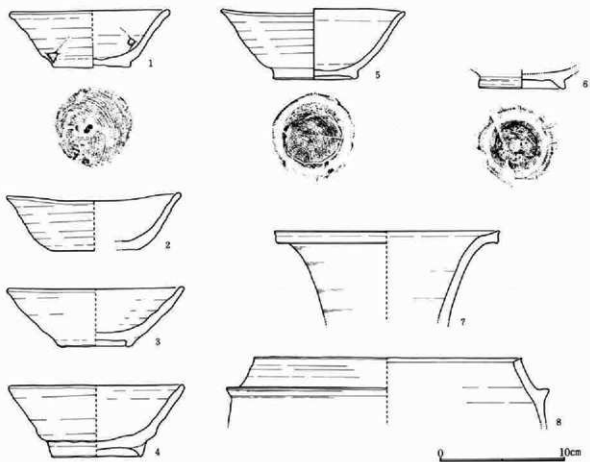


Fig.210 G70号住居跡出土遺物

第3章 G区の遺構と遺物

G70号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 潤 ③胎土 その他
210-1 73-1	酒志器 杯	口～底 片	12.8 × 6.2 × 4.5	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。無調整。口唇部、黒色付着物。	①加酸化還元・低温 ②褐灰 ③砂混る
210-2 73-2	酒志器 杯	口～底 小片	14.0 × 7.0 × 4.4	甕手前床 面	轆轤。右回転。底部撫で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
210-3 73-3	酒志器 碗	口～底 小片	14.4 × 6.0 × 4.5	甕手前床 面	轆轤。右回転。切離し不良のため、底部、高台部分補填後、撫で。	①加酸化還元・低温 ②灰黒へにぶい黄橙 ③砂混る
210-4 73-4	酒志器 碗	口～底 片	14.0 × 7.0 × 5.7	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
210-5 73-5	酒志器 碗	口～底 片	14.8 × 6.6 × 5.5	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
210-6 73-6	内黒土器 碗	底	— × 7.0 × (1.2)	甕内型形	轆轤。右回転。内面吸炭研磨。付高台横撫で。底部脱離り。	①酸化・良好 ②黄橙 ③緻密
210-7 74-7	酒志器 壺	口～頸 片	18.0 × — × (7.0)	埋土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
210-8 74-8	一 羽蓋	口～上 片	21.4 × — × (5.2)	南東部床 面	紐造横撫で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る

G71号住居跡 (Fig. 211～213・PL. 74、75)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.60 × 3.33	N— 85° — E	東壁やや南寄り	

G区南側中央に位置し、41・42G20・22の範囲にある。9号・10号・75号住居跡と重複している。新旧関係は3者いずれより古い時期の所産である。壁高は約40cmを測り直線的に立ち上がる。床面は中央部がわずかに低くなるが平坦である。甕は東壁を不整形円形に掘り込んである。2号溝によって先端部が消失しているため、煙道部については不明である。燃焼部幅約50cm、奥行約45cmを測る。出土遺物は少量である。



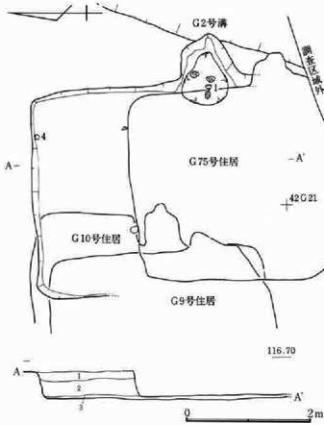


Fig.211 G71号住居跡

G71号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、炭化飯を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒・Loam 粒を含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒・Loam 粒を含む。

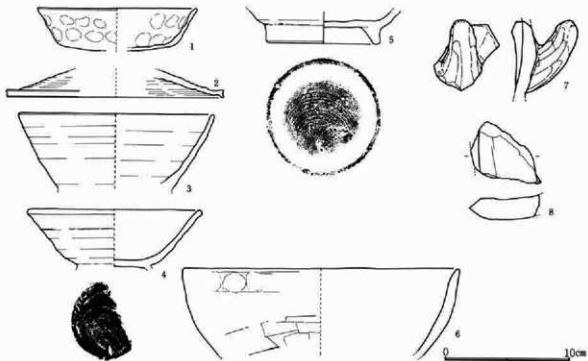


Fig.212 G71号住居跡出土遺物(1)

第3章 G区の遺構と遺物

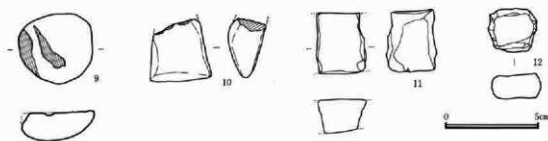


Fig.213 G71号住居跡出土遺物(2)

G71号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②土質 ③胎土 ④色 ⑤調 ⑥その他
212-1 74-1	土師器 杯	口~底 1/2	12.3 × 9.0 × 3.4	埋土	指押。内外指痕痕顕著。底部不定方向鈍削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
212-2 74-2	須恵器 蓋	頂~端 1/2	17.3 × — × (2.1)	北部床面	轆轤。右回転。	①還元 ②灰白 ③緻密
212-3 74-3	須恵器 椀	口~体 1/2	16.0 × — × (5.9)	電内	轆轤。右回転。底部欠損。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
212-4 74-4	須恵器 椀	口~底 1/2	14.0 × — × (4.6)	電内	轆轤。右回転未切り。付高台剥落。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③砂混る
212-5 74-5	須恵器 椀	底	— × 9.0 × (2.4)	埋土	轆轤。右回転未切り。付高台横擦で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
212-6 74-6	土師器 鉢	口~体 小片	22.2 × — × (6.9)	埋土	紐造。口縁部、指痕痕。撫痕明瞭。体部横方向鈍削り。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
212-7 75-7	須恵器 甕	把手		埋土	手捏。置削り後、外面無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
212-8 75-8	瓦 平瓦	小片	厚1.7	埋土	上面布目痕。側端面面取。	①酸化 ②によい褐 ③砂多混る
213-9 75-9	石製品 砥石		長3.9 幅3.7 厚1.5	埋土	小型円礫の約1/2を使用跡。黄砥。	角閃石安山岩
213-10 75-10	石製品 砥石		長(3.4) 幅3.5 厚2.1	埋土	片端欠損。楔形。	流紋岩(砥沢?)
213-11 75-11	石製品 砥石	小片	長3.4 幅3.5 厚2.3	埋土	欠損部以外、全面使用。仕上げ砥。	流紋岩(砥沢?)
213-12 75-12	須恵器 転用面子	完	縦2.6 横2.3 厚1.3	埋土	壘型体部片転用。周縁打割。	①還元 ②灰 ③細砂混る

G72号住居跡 (Fig. 214~216・PL. 75, 76)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.54 ×	N-72.5°-E	東壁やや南寄り	

G区南側やや東寄りに位置し、34・35G23・24の範囲にある。住居跡南側は調査区域外に延びるため未検出である。また北側は平面形確認の際設定した試掘溝によって消失している。壁高は約20cmを測り、直線的に立ち上がる。床はかなり凹凸があり、踏みしまりも弱い。竈は東壁を楕円形に小さく掘り込んである。南側は調査区域外に入り不明である。袖、煙道部の作り出しはない。燃烧部中央はすり鉢状に窪む。燃烧部幅約70cm、奥行約50cmと推定される。出土遺物は少ない。

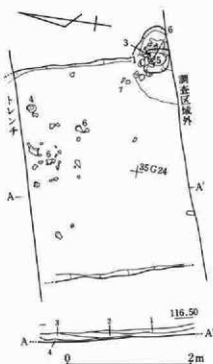


Fig.214 G72号住居跡

## G72号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土 粘土層。

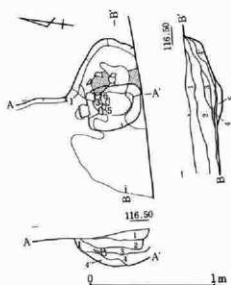


Fig.215 G72号住居跡竈

## G72号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土を多量に含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 締りなし。
- 4 焼土
- 5 暗褐色土 腐葉焼土・炭化粒・黒灰を多量に含む。灰を含む砂質土。

第3章 G区の遺構と遺物

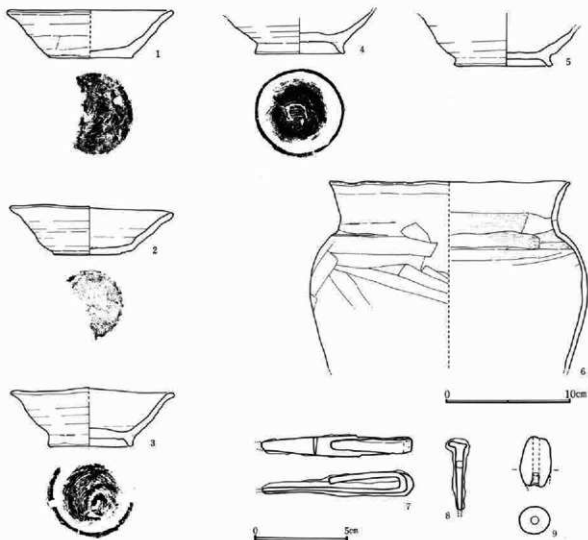


Fig.216 G72号住居跡出土遺物

G72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
216-1 76-1	須恵器 杯	口～底 1/2	13.4 × 6.6 × 3.8	竈手前	轆轤。右回転糸切り。無調整。底部磨。	①加齢化還元・低温 ②褐灰 ③緻密
216-2 76-2	須恵器 杯	口～底 3/4	13.2 × 5.4 × 3.9	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。底部磨。	①還元・軟質・低温 ②灰 ③砂混る
216-3 76-3	須恵器 椀	口～底 1/2	13.2 × 6.8 × 4.8	竈手前	轆轤。右回転糸切り。付高台横磨で。	①加齢化還元・低温 ②褐灰～橙 ③細砂混る
216-4 76-4	須恵器 椀	体～底	— × 7.2 × (3.2)	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横磨で。	①加齢化還元 ②浅黄橙 ③細砂混る
216-5 76-5	須恵器 椀	体～底	— × 7.8 × (3.8)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横磨で。	①加齢化還元・低温 ②褐灰～橙 ③細砂混る

G72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
216-6 76-6	土器 壺	口～中 残	19.2 × — × (15.0)	北東部床 面	楕造。口頸部強。体部上位横、中位斜 方向貫用り。内面磨撫で。	①酸化・良好 ②にぶい焼 ③細砂混 る
216-7 76-7	鉄製品 刀	刃部先 端欠損	長(8.5) 刃部幅1 柄部幅0.7	竪左前床	柄部折れ曲る。	
216-8 76-8	鉄製品 釘	先端部 欠損	長(3.6) 厚0.4	埋土	頂部L字状。	
216-9 76-9	土製品 土	完	長2.7 幅1.5 厚1.5	埋土	棒付置。両端斜平行に厚減。	①酸化・良好 ②焼 ③砂混る

G74号住居跡 (Fig. 217、218・PL. 76)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.96 ×			

G区南側やや東寄りに位置し、41・42G20・22の範囲にある。西壁を除きほとんどは調査区域外に入るため詳細は不明である。75号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。また東壁は2号溝と重複して消失している。壁高は約30cmを測り垂直に立ち上がる。床面は凹凸が目立つ。出土遺物は少ない。



Fig. 217 G74号住居跡

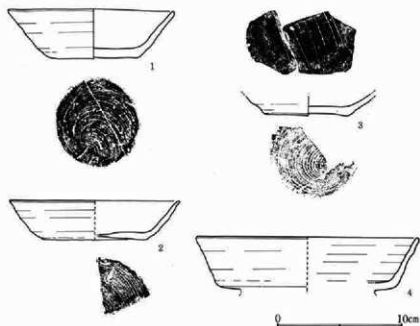


Fig. 218 G74号住居跡出土遺物

G74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
218-1 76-1	須恵器 杯	口~底 1/2	13.4 × 6.9 × 3.9	床面	輪轆。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
218-2 76-2	須恵器 杯	口~底 1/4	13.8 × 8.4 × 3.1	埋土	輪轆。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや軟質 ②灰白 ③細砂混る
218-3 76-3	須恵器 杯	底 1/2	— × 6.5 × (1.5)	埋土	輪轆。右回転糸切り。見込部6条筋付き。	①還元・良好 ②明オリブ灰 ③緻密
218-4 76-4	須恵器 盤	口~体 小片	17.8 × (13.8) × (4.2)	埋土	輪轆。右回転。底部回転盤削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

G75号住居跡 (Fig. 219、220・PL. 77、78)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.40 × 3.13	N-85-E	東壁やや南寄り	

G区南側中央部に位置し、41・42G20・22の範囲にある。9号・10号・71号・74号・2号溝と重複しており、新旧関係は9号・10号・71号・2号溝より新しく、74号住居跡より古い時期の所産である。壁高は約38cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦で竈前面は固く踏みしめる。竈は東壁に付設されるが2号溝によって先端部が消失しているため煙道部の有無は確認できない。袖部は構築材などは検出されていない。掘形によっても明確な痕跡は認められなかった。出土遺物は少量である。

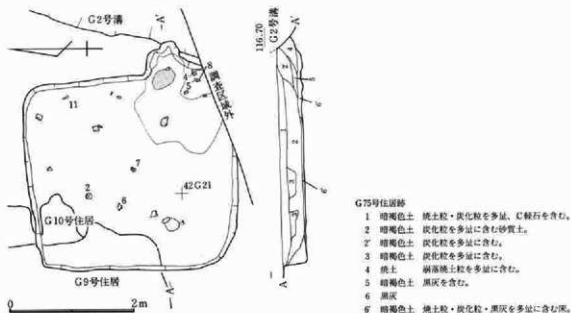


Fig.219 G75号住居跡

第2節 G区の整穴住居跡と遺物

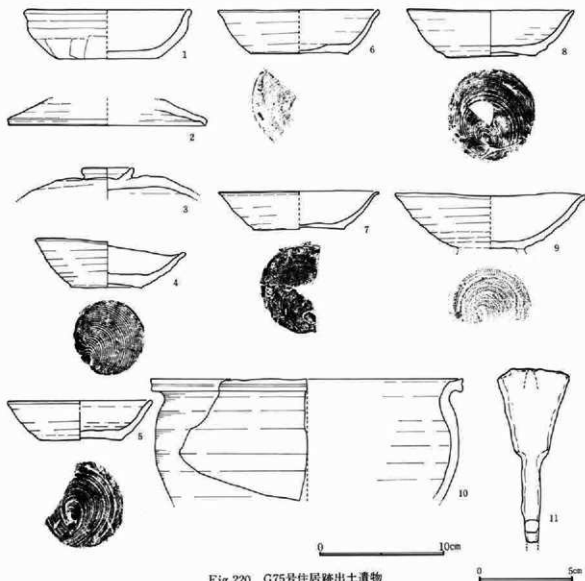


Fig.220 G75号住居跡出土遺物

G75号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
220-1 77-1	土器 杯	口～底 ½	13.4 × 8.0 × 3.9	着手前床 下	指押。口縁部強い擦で。体部横、底部不 定方向旋削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②赤橙 ③細砂混る
220-2 77-2	須恵器 蓋	頂～端 ½	16.0 × — × (2.1)	南東部床 下	轆轤。右回転。頂部及び端部、回転旋削 り。	①還元・やや軟質 ②灰黄白 ③緻密
220-3 77-3	須恵器 蓋	柄～頂 ¾	— × 柄4.2 × (2.0)	床下埋土	轆轤。右回転。ボタン形柄。頂部2段回 転旋削り。	①加酸化還元・低温 ②洪黄 ③細砂混る
220-4 77-4	須恵器 杯	口～底 (完)	12.0 × 5.6 × 3.6	北西部床 面	轆轤。右回転赤切り。無調整。歪み顯著。	①還元・良好 ②灰 ③小石混る
220-5 77-5	須恵器 杯	口～底 ½	11.6 × 6.5 × 3.1	北東部床 下	轆轤。右回転赤切り。無調整。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密

## 第3章 G区の遺構と遺物

## G75号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	口径 × 底径 × 器高			
220-6 77-6	須恵器 杯	口~底 反	12.9 × 8.0 × 3.5	北西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密	
220-7 77-7	須恵器 杯	口~底 反	12.8 × 7.4 × 3.0	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②暗灰 ③緻密	
220-8 77-8	須恵器 杯	口~底 反	13.3 × 7.2 × 3.8	南東部床 下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
220-9 78-9	須恵器 椀	口~底 反	15.2 × 5.4 × (4.5)	貯蔵穴埋 土・他	轆轤。右回転糸切り。付高台剥落。	①加酸化還元・良好 ②赤灰 ③緻密	
220-10 78-10	須恵器 口壺	口~中 小片	25.0 × — × (9.7)	埋土	超過模造で。口径部大きく外反。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少混る	
220-11 78-11	鉄製品 鏝		長(9.2) 幅(3.8) 至厚(0.7)	北東部 床	平根式。(芥箭)		

## G76号住居跡 (Fig. 221~224・PL. 78、79)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.15 × 2.60	N—90°—E	東壁やや南寄り	円形 55 × 50 × 27

G区中央部に位置し、43・44G29・30の範囲にある。68号住居跡・5号掘立柱建物跡・6号土坑と重複している。新旧関係は前2者より新しく、6号土坑より古い時期の所産である。平面形態は隅丸方形を呈すが

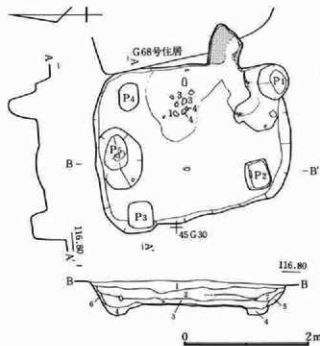


Fig.221 G76号住居跡

南壁から西壁にかけて大きく歪む。壁高は約38cmを測りゆるく立ち上がる。床面はほぼ平坦で中央部が固く踏みしまる。北壁沿いに1×0.7m、深さ18cmの楕円形ですり鉢状の落ち込みがある。竈は東壁を不整形に掘り込む。袖部・煙道部の作り出しは無い。竈前面には灰の流出が著しくかなり広範囲にわたる。竈燃焼部幅約55cm、奥行約65cmを測る。遺物は竈前面に散在するが量は少ない。

## G76号住居跡

- 褐色土 C 軽石多量。Loam 塊を少量含む粘る。
- 暗褐色土 C 軽石少量。Loam 塊を多量に含む粘りあり。
- 暗褐色土 粘性。粘りあり。
- 灰褐色土 粘性。粘りあり。
- 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 暗褐色土 Loam 粒を含む。
- Loam 層 Loam 塊が主体。



## 第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

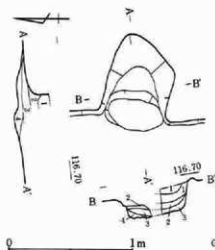


Fig. 222 G76号住居跡電

G76号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含み土粒粗い。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 黒灰が主で褐色土粒を含む。
- 4 明褐色土 焼土多量、やや粘性あり。

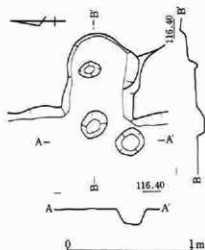


Fig. 223 G76号住居跡電掘形

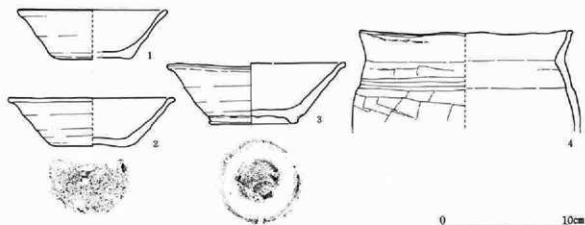


Fig. 224 G76号住居跡出土遺物

## G76号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
224-1 78-1	須恵器 杯	口～底 ½	12.6 × 6.0 × 3.9	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。底縁部磨。	①酸化 ②明黄褐 ③細砂混る
224-2 78-2	須恵器 杯	口～底 ½	13.3 × 6.7 × 3.8	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
224-3 79-3	須恵器 碗	口～底 ½	14.3 × 7.1 × 4.8	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台模造で後、 潰れ。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
224-4 79-4	土師器 壺	口～上 ½	17.0 × — × (7.7)	北東部床 面	紐造。口頸部磨で、指頭痕顯著。体部横 方向磨り後、頸部磨2段、強い磨で。	①酸化・良好 ②暗赤褐 ③細砂混る

第3章 G区の遺構と遺物

G78号住居跡 (Fig. 225、226・PL. 79)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.80 × 4.23			円形 75 × 72 × 27

G区南東部に位置し、30～32G28・29の範囲にある。27号・28号・31号・64号・65号・84号住居跡と各々重複している。新旧関係は65号住居跡より旧く他の住居跡より新しい時期の所産である。上述のように重複関係が著しく、調査段階での検出は必ずしもその順をふんでいない。そのため西半は不明瞭な部分が多い。床面は凹凸があり、踏みしめも弱く不安定な状態である。遺物は貯蔵穴内とその周辺に出土する。竈は東壁に付設されたと考えられるが、焼土・灰の分布がわずかに観察されたのみで詳細は不明である。

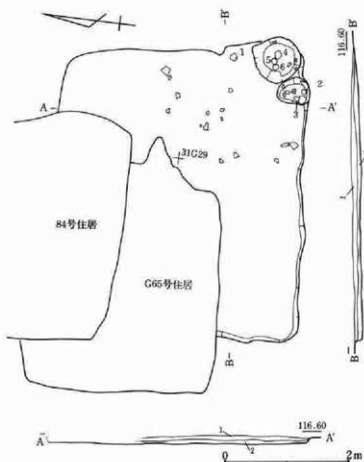


Fig.225 G78号住居跡

G78号住居跡

- 1 褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。  
2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。

## 第2節 G区の竪穴住居跡と遺物

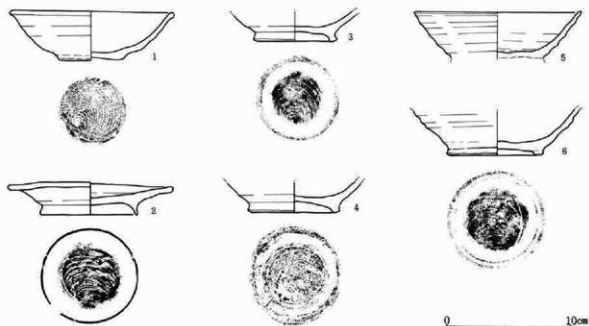


Fig.226 G78号住居跡出土遺物

## G78号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 ④その他
226-1 79-1	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 5.2 × 3.9	南東部床 面	横軸。右回転糸切り。無調整。	①酸化還元元・低温 ②灰白 ③砂混る
226-2 79-2	須恵器 皿	端～底 (完)	13.2 × 7.7 × 2.6	南東部 Pit内	横軸。右回転糸切り。付高台横無で。高台一部歪む。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
226-3 79-3	須恵器 椀	体～底	— × 6.6 × (2.3)	南東部 Pit内	横軸。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰 ③砂混る
226-4 79-4	須恵器 椀	体～底	— × 7.4 × (2.3)	南東部 Pit内	横軸。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元 ②灰 ③白砂混る
226-5 79-5	須恵器 椀	体～底	— × — × (3.6)	南東部 Pit内	横軸。右回転。付高台欠損。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
226-6 79-6	須恵器 椀	体～底	— × 7.7 × (3.5)	南東部 Pit内	横軸。右回転糸切り。付高台横無で。高台下端部、比線1条。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る

## G79号住居跡 (Fig. 227、228・PL. 80)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.90 × —			



Fig.227 G79号住居跡

G区南部に位置し、33・34G22・23の範囲にある。南側は調査区域外に延び未検出である。また北半は63号住居跡と重複して消失している。新旧関係は、63号住居跡より古い時期の所産である。壁はほとんど不明でかろうじて西壁の一部が確認されたにとどまる。壁高は約22cmを測り垂直に立ち上がる。床面は不安定で凹凸がある。竈は東壁をわずかに丸く掘り込む。袖部・煙道部などの作り出しは少なく遺存は不良である。出土遺物は少なく散在している。

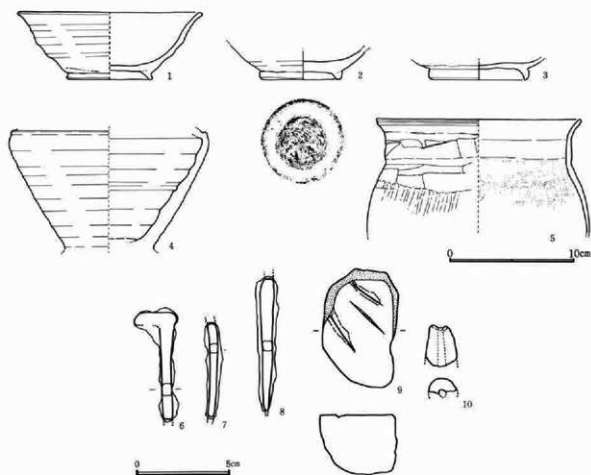


Fig.228 G79号住居跡出土遺物

G79号住居跡出土遺物観察表

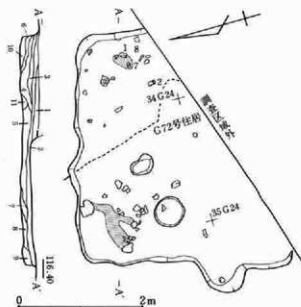
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
228-1 80-1	須恵器 椀	体~底	14.8 × 6.8 × 5.3	東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①酸化還元・低温 ②によい黄褐色 ③緻密
228-2 80-2	須恵器 椀	口~底 1/5	— × 6.5 × (2.7)	東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・低温 ②明緑灰 ③細砂混る
228-3 80-3	灰釉陶器 皿	底 1/5	— × 7.8 × (1.3)	西部床面	轆轤。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
228-4 80-4	須恵器 長頸壺	体 小片	— × — × (9.4)	西部床面	轆轤。右回転。灰被り。	①還元・良好 ②灰緑 ③細砂混る
228-5 80-5	土師器 甕	口~上 1/5	16.4 × — × (9.0)	西部床面	紐造。頸部~体部横方向削り後、口頸部強い痕で。内面荒削で。	①酸化・良好 ②によい赤褐色 ③緻密
228-6 80-6	鉄製品 釘	先端部 欠損	長(5.7) 厚0.5	中央部 床	頂部L字状。角釘。	
228-7 80-7	鉄製品 釘	両端 欠損	長(7) 厚0.5	埋土	角釘。	
228-8 80-8	鉄製品 釘	頂部 欠損	長(4.9) 厚0.5	埋土	角釘。	
228-9 80-9	石製品 砥石		長6.2 幅4.1 厚3.1	西部床面	円縁約5使用。条痕あり。荒砥。	角閃石安山岩
228-10 80-10	土製品 鏝		長(2.1) 径1.5 孔径0.4	埋土		①酸化 ②浅黄褐色 ③ 細土

G80号住居跡 (Fig. 229、230・PL. 81)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.05 × 3.65			

G区南側やや東寄りに位置し、33~35G23・24の範囲にある。電を含め南半は調査区域外に延び未検出である。西半は72号住居跡と重複している。新旧関係は72号住居跡より古い時期の所産である。壁高は約28cmを測り垂直に立ち上がる。西壁南寄りの一部が構円ぎみに約40cm張り出す。床面は凹凸が著しく全体に不安定である。北東部及び北西部の床面直上には焼土塊の分布が検出されたが、施設の意味はいは看取できなかった。遺物は散在して出土しているが北東部より鉄製鏝を検出している。

第3章 G区の遺構と遺物



G80号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石大粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石小粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 粘性強い。
- 4 暗褐色土 炭化粒を少量含む。
- 5 褐色土 黄色を少量含む粘性土。
- 6 暗褐色土 焼土炭化粒を含む。
- 7 明褐色土 黄色土粒を多量に含む。
- 8 明褐色土 黄色土粒を多量に含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 10 暗褐色土 Loom 粒を多量、C軽石を含む。
- 11 暗褐色土 黄色土塊。

Fig.229 G80号住居跡

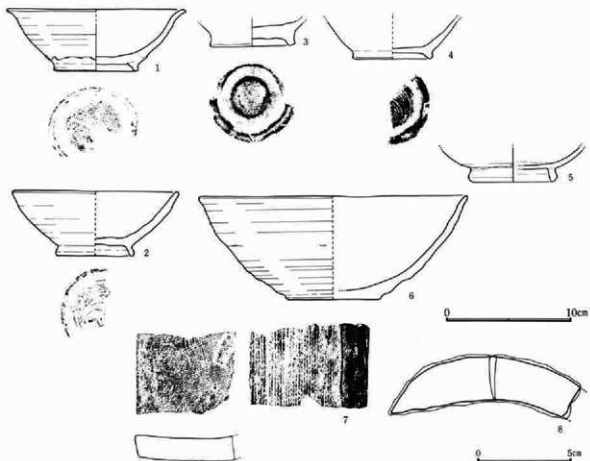


Fig.230 G80号住居跡出土遺物

G80号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
230-1 81-1	須 恵 器 椀	口～底 片	14.4 × 6.8 × 4.9	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低溫 ②灰白 ③砂混る
230-2 81-2	須 恵 器 椀	口～底 小片	13.4 × 6.0 × 5.1	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
230-3 81-3	須 恵 器 椀	底	— × 5.8 × (2.0)	堀 形	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③粗
230-4 81-4	須 恵 器 椀	体～底 片	— × 6.2 × (3.1)	堀 形	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化やや軟 ②褐灰 ③粗砂混る
230-5 81-5	灰 輪 陶 器 椀	体～底 片	— × 6.4 × (2.5)	床 下	轆轤。内外体部無軸、刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
230-6 81-6	須 恵 器 鉢	口～底 片	21.4 × 7.4 × 8.2	堀 形	紐造横撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③小石混る
230-7 81-7	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚1.8	北東埋土	上面布目瓦。下面織目瓦。側端部取割。	①酸化・良好 ②灰黄 ③小石混る
230-8 81-8	鉄 製 品 鎌	基 部 欠 損	長(10.5) 幅2.3	北東部床 面		

G81号住居跡 (Fig. 231～233・PL. 82)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅 丸 方 形	3.25 ×	N— 88° — E	東壁やや南寄り	

G区南部東寄りに位置し、30～32G24・25の範囲にある。南側は調査区域外に延びるため未検出である。80号・82号住居跡と重複しており、新旧関係は両者より新しい。調査段階で確認が遅れ、80号住居跡との検出順を逆転してしまった。東壁の北側及び西壁が歪み不整形を呈する。また北西隅は平面形確認のための試掘溝によって消失している。壁高は約20cmを測り直線的に立ち上がる。床面は凹凸が著しく不安定である。竈は東壁を小さく掘り込んであり、袖部・煙道部の作り出しはない。燃焼部全体が浅いすり鉢状に窪む。燃焼部幅約60cm、奥行約55cmを測る。出土遺物は少なく散在している。

第3章 G区の遺構と遺物

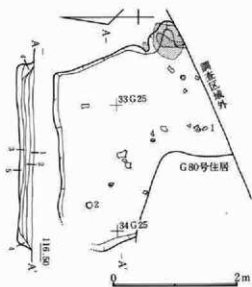


Fig.231 G80号住居跡

- G81号住居跡
- 1 褐色土 C軽石多量、灰化粒少量を含み上位は砂質土。
  - 2 暗褐色土 C軽石を含む。
  - 3 暗褐色土 粘性土。
  - 4 暗褐色土
  - 5 灰褐色土 C軽石を少し含む。

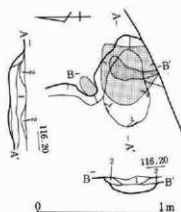


Fig.232 G81号住居跡

- G81号住居跡
- 1 焼土層
  - 2 焼土粒

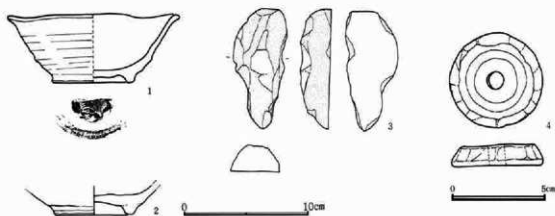


Fig.233 G81号住居跡出土遺物

G81号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
233-1 82-1	須恵器 椀	口～底 反	13.7 × 6.6 × 5.3	床下土坑 内	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
233-2 82-2	須恵器 椀	底	— × 6.4 × (1.7)	北西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①加酸化還元・低温 ②浅黄 ③細砂混る
233-3 82-3	石製品 砥石		長 9.5 幅 4.0 厚 2.1	床下埋土	円礫を棒状に加工。1面使用。上取部等 3ヶ所部状砥面。荒砥。	角閃石安山岩
233-4 82-4	石製品 紡錘車	輪 究	上径4.0下径4.9厚1.1	中央部床 面	両面研磨。側部部取後、研磨。両面穿孔。 両面に磨輪痕。記号状線刻。	蛇紋岩



## G82号住居跡 (Fig. 234, 235・PL. 82, 83)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × —			

G区南部東寄りに位置し、31・32G24・25の範囲にある。南側は竈を含め調査区域外に延びるため未検出である。80号・81号住居跡と重複しており、新旧関係は両者より古い。壁高は約22cmを測り、直線的に立ち上がる。床面は軟弱であるが平坦をなす。出土遺物は散在している。



Fig. 234 G82号住居跡

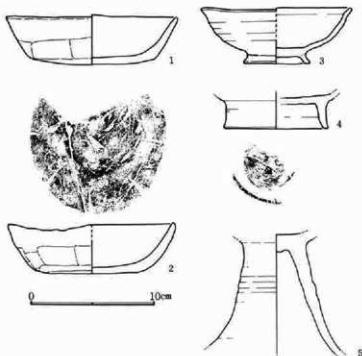


Fig. 235 G82号住居跡出土遺物

## G82号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口徑 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 ③胎土 ④土質 ⑤その他
235-1 82-1	土 師 器 杯	口~底 (完)	13.7 × 10.9 × 3.8	北東部床 下土坑内	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向、 寛削り。底部右回転寛削り。	①酸化・やや軟質 ②よい橙 ③緻密
235-2 82-2	土 師 器 杯	口~底 欠	13.4 × 8.0 × 4.0	北東部床 面	紐造巻上。指押。体部横方向直削り。底 部無で。見込部6カ所「+」筋抜き。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
235-3 83-3	須 恵 器 椀	口~底 欠	12.0 × 5.3 × 4.4	北東部床 面	轆轤。右回転。付高台及び底部、横撫で。 内面のみ横。	①還元・低溫 ②灰 ③細砂少混る
235-4 83-4	須 恵 器 椀	底 欠	— × 8.4 × (2.7)	北東部床 面	轆轤。右回転。付高台横撫で。横。	①還元・低溫 ②黒 ③細砂少混る
235-5 83-5	須 恵 器 高 杯	脚 欠	— × (9.4) × (9.0)	北東部床 面	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

G83号住居跡 (Fig. 236~239・PL. 83, 84)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × 3.25			

G区南東部に位置し、32~34G27・28の範囲にある。64号・88号住居跡・5号井戸跡と重複している。新旧関係は、64号・88号住居跡より新しく、5号井戸跡より古い時期の所産である。竈を含む東壁と南壁の一部は64号住居跡と5号井戸跡との重複のため消失あるいは不明瞭である。竈は、焼土の分布を認めただけで詳細は不明である。壁高は約30cmを測り、直線的に立ち上がる。床面は若干の起伏はあるが総じて固く踏みしまり良好である。床下の掘形は西側に集中して大小の土坑状の落込みが検出され、埋土から土器の出土もある。東側と北東部は土坑が検出されているが、住居跡の範囲外に及んでおり、当跡に伴うか否かは不明である。遺物は比較的多く刀子の他軽石製砥石の出土もある。



Fig.236 G83号住居跡

G83号住居跡

- 1 褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 黄褐色土 黄色土粒を含み堅く締る床。
- 4 暗褐色土 C軽石を多量に含む粘性土。
- 5 黄色土 黄色土粒を含み堅く締る床。
- 6 明褐色土 粘性土。

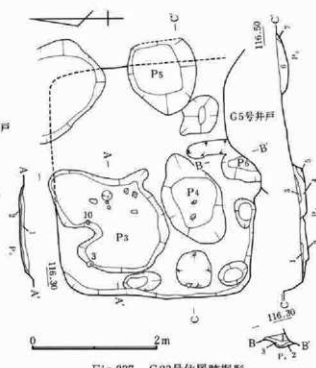


Fig.237 G83号住居跡掘形

G83号住居跡掘形 P3

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・Loam粒を含む。

P4, 5

- 1 褐色土 Loam粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・Loam粒を含む。

4 暗褐色土 C軽石を多量に含む。

- 5 暗褐色土 C軽石・Loam粒を含む。
- 6 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 7 灰 焼土粒を含む。

P6

- 1 褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。粘性土。
- 3 暗褐色土 黄色土 Loam粒を多量に含む粘性土。

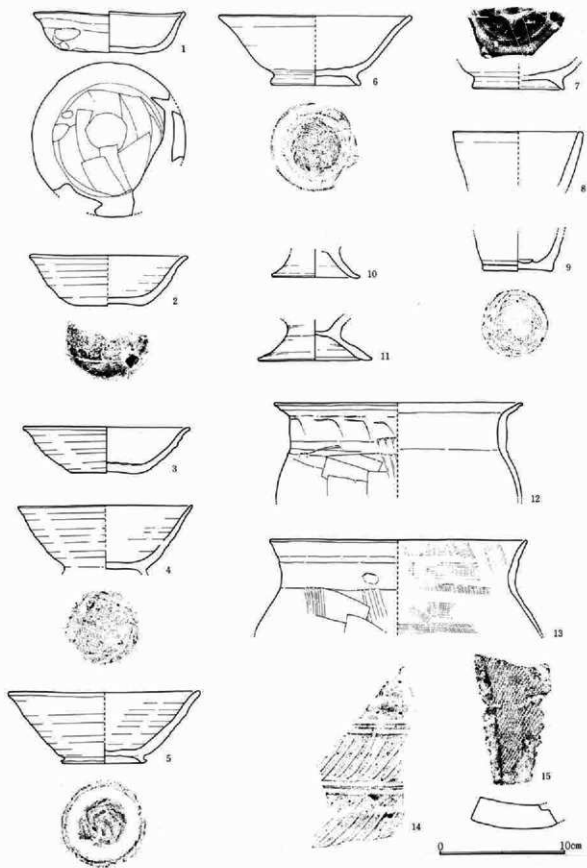


Fig.238 G83号住居跡出土遺物(1)

第3章 G区の遺構と遺物

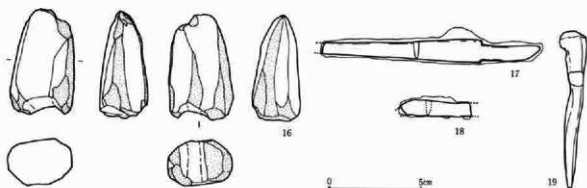


Fig.239 G83号住居跡出土遺物(2)

G83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色 調 ③胎土 その他
238-1 83-1	土 師 器 杯	口~底 片	12.2 × 8.0 × 3.3	埋 土	指押。体部内外撫で。底部弧状寛雨り。	①酸化・良好 ②によい赤褐 ③緻密
238-2 83-2	須 恵 器 杯	口~底 片	12.8 × 6.0 × 4.0	埋 土	轆轤。右回転糸切り。底縁部撫で。	①還元・やや低温 ②灰白 ③細砂混る
238-3 84-3	須 恵 器 杯	口~底 片	13.4 × 5.6 × 3.7	北西部床 下	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや軟質 ②灰白 ③細砂混る
238-4 84-4	須 恵 器 椀	口~底 片	13.8 × ( 6.4 ) × ( 4.8 )	北西部床 下	轆轤。右回転糸切り。付高台剥落。底部 破説。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③砂混る
238-5 84-5	須 恵 器 器	口~底 面	15.2 × 6.4 × 5.7	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
238-6 84-6	須 恵 器 椀	口~底 片	15.3 × 7.0 × 5.5	埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
238-7 84-7	須 恵 器 椀	底 片	— × 7.4 × ( 1.8 )	埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。見 込部2条筋描き。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
238-8 84-8	須 恵 器 杯	口~体 片	10.4 × — × ( 4.3 )	埋 土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
238-9 84-9	須 恵 器 瓶	底	— × 5.6 × ( 2.7 )	床下埋土	轆轤。右回転糸切り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂少混る
238-10 84-10	土 師 器 台付壺	台	— × 7.1 × ( 2.1 )	北西部床 下	撫で。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混 る
238-11 84-11	土 師 器 台付壺	台	— × 9.2 × ( 3.4 )	南東部床 面	撫で。見込部直撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
238-12 84-12	土 師 器 壺	口~上 小片	20.0 × — × ( 7.5 )	西部床面	紐造。全面横方向刮削り後。口頸部強い 撫で。内面直撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
238-13 84-13	土 師 器 壺	口~上 小片	20.6 × — × ( 7.3 )	床 下	紐造。全面横方向刮削り後。口頸部撫で。 内面直撫で。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混 る

G83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存址	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
238-14 84-14	須 恵 器 大 甕	小 片		埋 土	凸縁に区切られた間に篋状工具による斜行文	①還元・良好 ②灰褐色 ③密緻状
238-15 84-15	瓦 平 瓦	小 片	厚2.0	埋 土	上面布目瓦、下面平打叩打。端部取皿。	①還元・良好 ②灰 ③白磁砂混る
239-16 84-16	石 製 品 砥 石		長 5.6 幅 3.4 厚 2.5	埋 土	楕状に砥面を形成。基部に丸型破痕。	角閃石安山岩
239-17 84-17	鉄 製 品 刀	両端部 欠 損	長(11.7) 刃部幅1.2 2~0.6 柄部幅0.8	南 西 部 床		
239-18 84-18	鉄 製 品 刀 子 ?		長(3.8) 幅0.8	埋 土		
239-19 84-19	鉄 製 品 釘	完	長8.3 厚0.7	埋 土	頂部傾らむ。	

G84号住居跡 (Fig. 240~243・PL. 85, 86)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.75 × 3.50	N-86°-E	東壁やや南寄り	隅丸方形 90 × 85 × 25

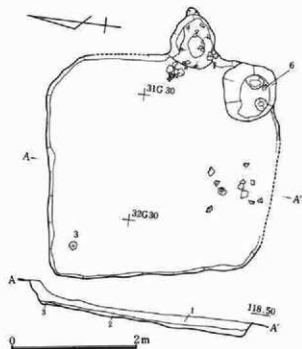


Fig. 240 G84号住居跡

G区南東部に位置し、30~32G28~30の範囲にある。27号・28号・65号・78号・90号住居跡と重複している。新旧関係が明らかなものは、65号・78号・90号住居跡であり、3号より古い時期の所産である。壁高は約24cmを測り、直線的に立ち上がる。床面は比較的平坦で固く踏みしめる。床下は西側を除き大小の楕円形の落ち込みが掘られ焼土混りの暗褐色土で埋められている。竈は東壁を楕円形に掘り込み短かい煙道部が作り出される。燃焼部幅約65cm、奥行約75cm、煙道部長さ約10cmを測る。遺物は竈周辺と南側に多い。

## G84号住居跡

- 1 褐色土 C 軽石多量・焼土粒を含む。  
2 暗褐色土 部分的に灰・焼土を含む粘性土。  
3 暗褐色土 Loam 粒を多量に含む。

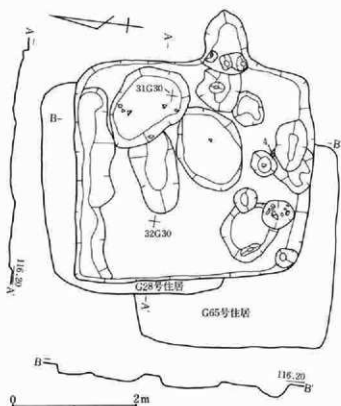


Fig.241 G84号住居跡掘形

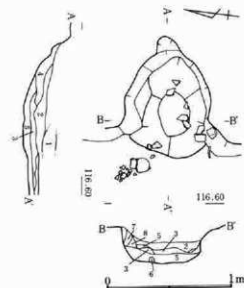


Fig.242 G84号住居跡

G84号住居跡地

- 1 褐色土 C粒石を含む。
- 2 褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 焼土粒 灰を含む。
- 4 灰層
- 5 焼土 崩落堆土塊
- 6 焼土
- 7 灰層
- 8 焼土化層 (覆壁?)

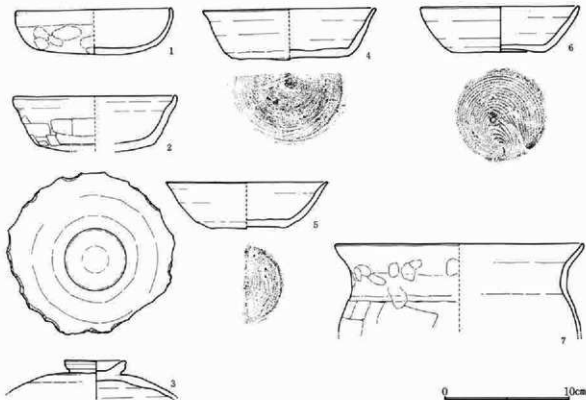


Fig.243 G84号住居跡出土遺物

G84号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
243-1 85-1	土師器 杯	口～底 残片	12.7 × 10.7 × 3.6	電手前床 面	口縁部内外横撫で。体部外面見込部縦溝。 底部直削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
243-2 85-2	土師器 杯	口～底 小片	13.6 × 9.4 × (4.4)	埋土	体部外面横直削り。底部不定方向直削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
243-3 85-3	須恵器 蓋	胴～頂	(13.5) × 胴5.0 × (2.5)	北西部床 面	碗状碗。天井部右回転直削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
243-4 85-4	須恵器 杯	口～底 残片	13.9 × 9.2 × 4.0	南東部床 下埋土	底部右回転直削り。後底部周縁から腰部 回転直調整。	①還元・良好 ②オリブ灰 ③細砂混る
243-5 85-5	須恵器 杯	口～底 小片	13.0 × 6.0 × 3.6	埋土	底部回転直削り。	①還元・良好 ②オリブ灰 ③緻密
243-6 85-6	須恵器 杯	口～底 残片	12.7 × 7.4 × 3.6	貯蔵穴内	底部右回転直削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
243-7 86-7	土師器 葉	口～上 残片	19.9 × — × (7.0)	貯蔵穴埋 土	口縁部内外面横撫で。胴部直直削り。胴部 横直削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る

G85号住居跡 (Fig. 244, 245・PL. 86)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
	3.75× —	N-75°-E	東壁やや西寄り	隅丸方形90×85×25

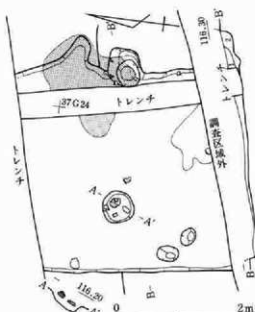


Fig. 244 G85号住居跡

G区南側やや東寄りに位置し、36～38G22～24の範囲にある。南側は調査区域外に延び未検出である。また西側と電前面の南北方向は平面形確認のために設定した試掘溝によって消失している。63号・79号住居跡と重複しており、新旧関係は63号・79号住居跡より古い時期の所産である。東壁の北寄りが不規則に張り出し、この部分を灰・焼土層が覆っている。壁高は約20cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面は大きく起伏するが良好な状態で遺存する。中央部やや西寄りに径約50cm、深さ約18cmの円形土坑が検出され、埋土中より2～3個の川原石が出土している。南側中央部には灰層の広がりが認められるが調査区域外に延びるため全容は不明である。出土遺物は少ない。

## G85号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、Loam 混を含む。
- 2 暗褐色土 Loam 混を多量に含む。

第3章 G区の遺構と遺物

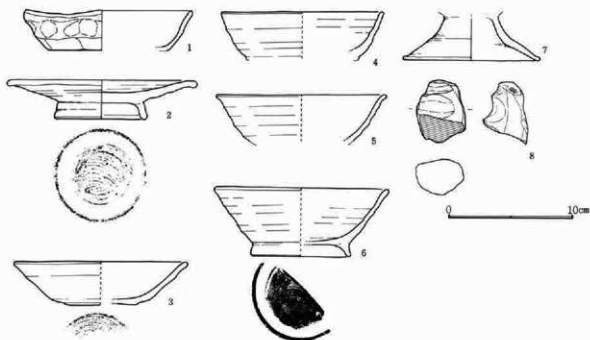


Fig.245 G85号住居跡出土遺物

G85号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 その他
245-1 86-1	土師器 杯	口～底 1/2	13.5 × 9.5 × 3.2	埋土	指押。体部無で。指頭直線着。体部下位。横力向直削り。	①酸化・良好 ②明褐 ③細砂混る
245-2 86-2	須恵器 皿	口～底 3/5	15.2 × 7.6 × 3.1	床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂・磁器混る
245-3 86-3	須恵器 杯	口～底 小片	14.0 × 5.8 × 3.4	床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低溫 ②灰白 ③砂混る
245-4 86-4	須恵器 杯	口～体 小片	13.2 × — × 3.8	埋土	轆轤。右回転。灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
245-5 86-5	須恵器 椀	口～体 小片	13.6 × — × 3.7	埋土	轆轤。右回転。	①還元・低溫 ②灰黄 ③細砂混る
245-6 86-6	須恵器 杯	口～底 3/5	14.0 × 8.0 × 4.4	床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
245-7 86-7	土師器 台付椀	台 1/2	— × 11.1 × (3.5)	床下埋土	紐造。無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
245-8 86-8	石製品 砥石		長 4.9 幅 3.8 厚 2.8	埋土	欠損部以外、全面使用。棒状物用砥石か、瓦砥。	角閃石安山岩



G88号住居跡 (Fig. 246、247・PL. 87)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.80 ×			

G区南東部に位置し、32～34G28・29の範囲にある。64号・65号・83号・89号・90号住居跡と重複しており、64号・89号・90号住居跡より新しく65号・83号住居跡より古い時期の所産である。重複が著しく西壁から南壁及び電の検出はできなかった。壁高は約28cmを測り直線的に立ち上がる。床面は平坦であるが軟弱である。出土遺物は少ない。



Fig. 246 G88号住居跡

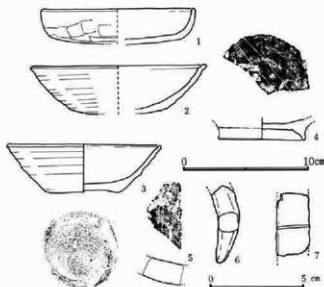


Fig. 247 G88号住居跡出土遺物

G88号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
248-1 87-1	土器 杯	口～底 片	12.5 × 10.0 × 2.8	埋土	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向削り。	①酸化 ②色調 ③胎土 ④砂混る
248-2 87-2	内黒土器 杯	口～底 片	14.2 × 6.0 × 3.8	埋土	轆轤。右回転。底部削り。内面黒色処理。	①酸化・良 ②洗黄性 ③砂混る
248-3 87-3	須恵器 杯	口～底 (先)	12.4 × 6.0 × 3.9	床面	轆轤。右回転永切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
248-4 87-4	須恵器 碗	底 片	— × 7.0 × 1.7	埋土	轆轤。右回転永切り。付高台横側で。見込部2条筋付き。	①加酸化還元・良好 ②灰褐 ③細砂混る
248-5 87-5	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	埋土	上面布目度。下面縄目印打痕。	①酸化・良好 ②電 ③砂混る
248-6 87-6	鉄製品		長(4) 厚1	埋土	角釘?	
248-7 87-7	鉄製品		長(3.2) 幅1.8	埋土	板状。	

### 第3章 G区の遺構と遺物

#### G89号・90号住居跡 (Fig.248～250・PL.87)

G区南東部に位置し、32・33G29・30の範囲にある。28号・65号・78号・84号・88号の各住居跡と重複しており、新旧関係は確定できていない。両跡とも出土遺物の比較によれば、65号・78号住居跡より古い時期の所産と考えられる。北壁と西壁の一部が検出されたのみで詳細は不明である。壁高は各々約20～26cmを測る。出土遺物は極めて少ない。

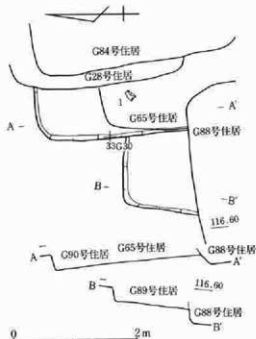


Fig.248 G89・90号住居跡

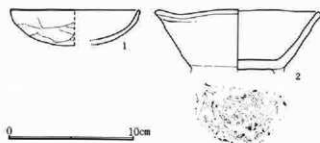


Fig.249 G89号住居跡出土遺物

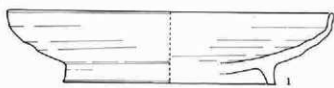


Fig.250 G90号住居跡出土遺物

#### G89号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
249-1 87-1	土器 杯	口～底 小片	10.4 × 4.0 × 2.8	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横～斜、底部不定方向重削り。	①酸化・良好 ②によい権 ③砂混る
249-2 87-2	須恵器 椀	口～底 片	13.2 × 7.0 × 4.6	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台割落。重あり。	①加酸化還元・低温 ②焼灰 ③細砂混る

#### G90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
250-1 87-1	須恵器 盤	口～底 片	26.2 × 17.0 × 5.7	床面	轆轤。底部右回転重削り。付高台横無で。	①還元・良好 ③灰白 ③緻密

G91号住居跡 (Fig. 251、252・PL. 88)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.50 × 2.05	N—91°—E	東壁やや南寄り	円形 60 × 50 × 12

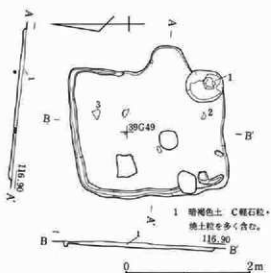


Fig.251 G91号住居跡

G区北部やや東寄りに位置し、38・39G38～49の範囲にある。当区における住居跡の規模からすれば、極めて小規模な部類に属する。小穴群と重複しているが新旧の関係は明らかでない。かなり削平が及んでおり平面形確認ですでに床面が露呈する部分もあった。壁高は約6cmを測る。南壁を除き各壁下には幅約10cm、深さ3～7cmの溝が巡る。床面は細かい凹凸が著しいが、凝灰岩質層を直接床面にするため極めて固く、掘形の過程は見られない。竪は東壁を半円形に掘り込み、袖部・煙道部は確認されない。燃烧部幅約70cm、奥行約50cmを測る。出土遺物は少ない。なお埋土中より大観通寶の出土がある。

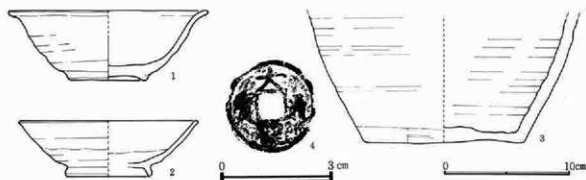


Fig.252 G91号住居跡出土遺物

G91号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口徑 × 底徑 × 器高	出 土 位 置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
252-1 88-1	須恵器 轆	口～底 片	16.0 × 6.2 × 5.6	貯蔵穴内	轆輪。右側軸未切り。付台台横撫で。歪あり。	①加酸化還元・低温 ②灰 ③細砂混る
252-2 88-2	灰輪陶器 碗	口～底 片	14.4 × 6.4 × 4.4	南東部床面	轆輪。右側軸。口縁部内外施釉、刷毛塗。	①加酸化還元 ②明黄釉 ③緻密
252-3 88-3	須恵器 壺	下～底 片	— × 12.6 × (9.8)	北東部床面	紐造轆輪横撫で。底部寬。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
252-4 88-4	銭・貨 北宋銭	完			大観通寶(北宋)。初鑄(1107)	銅銭

G92号住居跡 (Fig. 253~256・PL. 88、89)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.90 × 2.77	N—84°—E	東壁やや南寄り	隅丸方形 65 × 55 × 28

G区北部やや東寄りに位置し、35~37G47・49の範囲にある。北壁と西壁が短かく不整形を呈する。壁高は約8cmを測り、南・西壁はかろうじて痕跡をとどめているのみである。床面は91号住居跡と同様凝灰岩質層を床面にするため極めて固い。西寄り床下には径15~20cm、深さ約20cmの円形小穴が3個穿たれるが当跡に伴うか否かは不明である。竈は東壁を三角形に掘り込み、袖部に凝灰岩の加工材が配される。支脚の痕跡は検出されないが、竈内に円錐形の加工石が出土しており支脚残欠と考えられる。袖石内法約50cm、奥行約

85cmを測る。南西隅に竈構築材と考えられる石が検出されている。遺物は竈内及び住居跡南側に散在する。

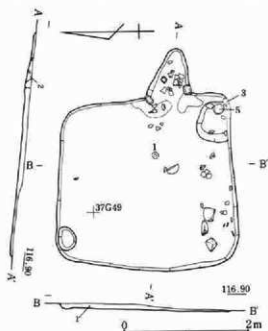


Fig.253 G92号住居跡

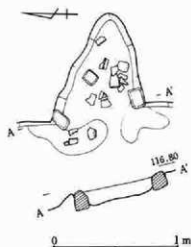


Fig.254 G92号住居跡竈

G92号住居跡

- 1 暗褐色土 B 軽石少量・C 軽石を多量に含む黒色土。
- 2 暗褐色土 C 軽石・焼土粒・炭化粒を少量含む黒色土。

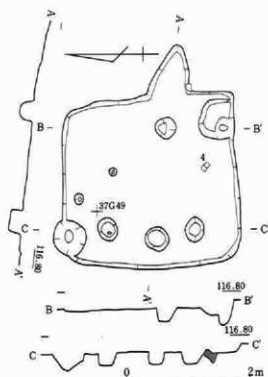


Fig.255 G92号住居跡掘形

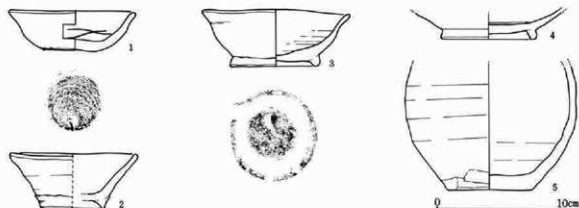


Fig.256 G92号住居跡出土遺物

## G92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
256-1 89-1	須恵器 杯	口～底 (完)	10.1 × 4.4 × 3.2	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。内面体部「×」貫抜き。	①還元・やや低溫 ②灰 ③細砂混る
256-2 89-2	須恵器 椀	口～底 片	10.2 × 5.2 × 4.3	南東部床 面	轆轤。右回転。付高台横溝で。	①酸化・良 ②毒 ③細砂混る
256-3 89-3	須恵器 椀	口～底 完	11.8 × 7.7 × 4.5	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。歪あり。	①酸化 ②灰黄 ③砂混る
256-4 89-4	灰釉陶器 椀	体～底	— × 7.6 × (2.2)	南東部床 下	轆轤。右回転。底部回転削り。内面体部削軸。	①還元・良好 ②灰白 ③白粒混る
256-5 89-5	土師器 甕	上～底	— × 6.7 × (9.8)	南東隅・ 電前床面	紐造横溝で。体部下位横。底部不定方向削り。	①酸化・良 ②にぶい 黄褐 ③細砂混る

## G93号住居跡 (Fig. 257～259・PL. 89)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.00 × 3.70			

G区北西部に位置し、53・54G43～45の範囲にある。西側端部は調査区域外に延び検出されていない。壁高は約40cmを測り遺存状態はかなり良好である。西壁は未検出であるが、各壁下には幅約10cm、深さ6～12cmの溝が巡る。床面は小さな窪みが無数にあり平坦であるが極めて軟弱である。竈は東壁に付設されるが、袖部の構築は粘性のある黄褐色土を主にして長く住居跡内に張り出し、その先端部には凝灰岩の加工材が各々配されている。また電前面には同様の石材が散乱し、天井部の構築材と考えられる。東壁には煙道部に相当するような掘り込みは検出されていない。竈内面の焼土化は弱く、火床については、わずかに確認できたにとどまる。袖石の内法約45cm、袖部長さ約55cmを測る。出土遺物は極めて少量である。当住居跡の様相を総合

第3章 G区の遺構と遺物

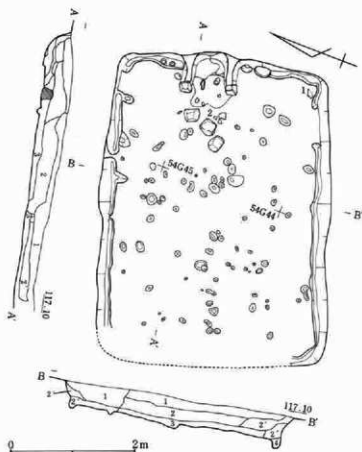


Fig.257 G93号住居跡

的に考えると、床面の軟弱さ、甕の使用頻度、遺物遺存の少なさ等は、居住時間の短さを示す現象とも考えられる。

G93号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石大粒、埴土塊を含み堅く締る。
- 3 暗褐色土 C軽石少量、Loam 塊を多量に含む。
- 2' 暗褐色土 C軽石大粒を含み締りあり。
- 4 暗褐色土 Loam 塊を多量に含む粘性土。
- 4' 暗褐色土 粘性土。

G93号住居跡甕

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石大粒を含み堅く締る。
- 3 黒灰土 Loam 塊・埴土を含む。
- 4 黄褐色土 Loam・粘土。
- 5 暗褐色土 崩落埴土・黒灰・灰を含む。
- 6 灰層
- 7 黄褐色土 Loam 層。

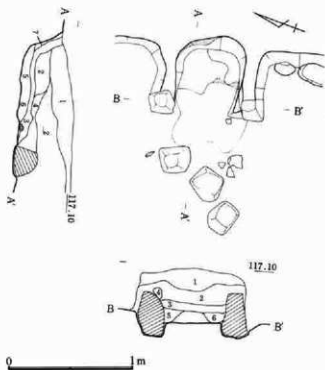


Fig.258 G93号住居跡甕

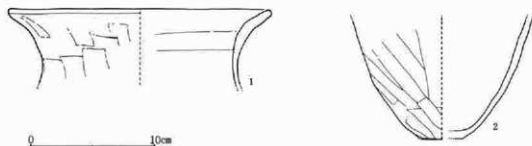


Fig.259 G93号住居跡出土遺物

## G93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
259-1 89-1	土師器 壺	口～頸 片	21.0 × — × ( 6.0)	南東隅床 面	紐造。口唇部無。外面斜方向彫削り。 内面横方向彫削り。	①酸化・良 ②橙 ③砂混る
259-2 89-2	土師器 壺	中～底 片	— × 3.4 × ( 9.5)	電手前床 面	紐造。体部斜方向。底部不定方向彫削り。 内面無。	①酸化・良 ②明褐 ③砂混る

## G95号住居跡 (Fig. 260～263・PL. 90)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.90 × 2.50	N— 82° —E	東壁やや南寄り	円形 45 × 45 × 10

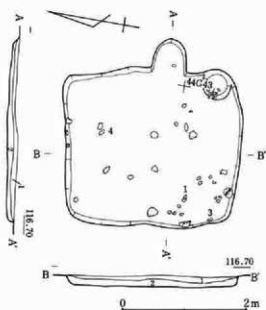


Fig.260 G95号住居跡

G区北部に位置し、42・43 G43～45の範囲にある。壁高は約14cmを測りゆるく立ち上がる。床面は電前前から南側にかけて不安定で若干窪み、掘り面では中央部から東半にかけて土坑状の不定形の落ち込みとなる。電は東壁を楕円形に掘り込み、袖部及び煙道部の作り出しは見られなかった。掘り面においてもその痕跡は認められていない。電燃焼部幅約60cm、奥行約55cmを測る。出土遺物は少なく南西部に散在している。

## G95号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石多量、崩落焼土を少量含む砂質土。  
2 暗褐色土 やや粘性のある砂質土。

第3章 G区の遺構と遺物

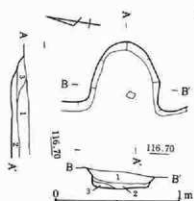


Fig.261 G95号住居跡

- G95号住居跡
- 1 黄褐色土 Loam 塊を多く含む。硬い。
  - 2 暗褐色土 Loam 粒少含む。
  - 3 黄褐色土 砂粒混じる粘性土。
  - 4 暗褐色土 粘性土塊。
  - 5 暗褐色土 軽石粒。炭化粒含む。
  - 6 黒褐色土 軽石粒含む。
  - 7 暗褐色土 焼土粒・砂粒含む。
  - 8 黒褐色土 炭化物粒を含む。粘性土。
  - 9 黒褐色土 焼土粒、炭化粒含む。

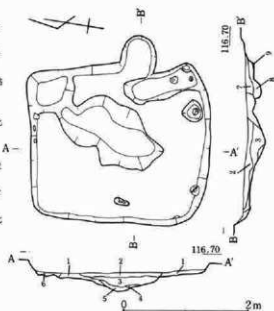


Fig.262 G95号住居跡掘形

G95号住居跡掘

- 1 暗褐色土 粘土粒・砂質粒・焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒を含む粘性土。
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む。

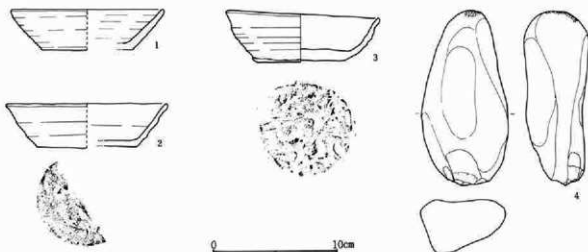


Fig.263 G95号住居跡出土遺物

G95号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び装飾の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
263-1 91-1	ホワラケ 杯	口～底 1/2	12.2 × 7.4 × 3.2	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①炭化・貝 ②によく黄緑 ③砂混 る
263-2 91-2	須恵器 杯	口～底 1/2	13.0 × 8.0 × 3.4	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。灰被り。	①還元・高温 ②オ リーブ灰 ③細砂混 る
263-3 91-3	須恵器 杯	口～底 (完)	12.3 × 7.0 × 4.0	南西部床 下	轆轤。右回転糸切り。底縁部断で。要あり。	①還元・やや軟質 ②灰白 ③緻密
263-4 91-4	石 叩打具	完	長13.8 幅6.9 厚4.5	北西部床 面	片直棒状円頭。両端、叩打痕顯著。	花崗岩



G96号住居跡 (Fig. 264~267・PL. 91)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.65 × 2.10	N-83°-E	東壁やや南寄り	円形 50 × 45 × 24

G区北部に位置し、41・42G44・45の範囲にある。壁の遺存は悪く壁高約8cmを測る。床面は電前面が固く踏みしめるが他は軟弱である。西壁近くには、径約70×64cm、深さ約26cmの円形土坑が穿たれる。北壁及び南壁沿いに検出された円形と方形の土坑は床下に掘られたものである。竈は東壁を不整楕円形に掘り込み、一垣くびれて煙道部を作り出す。竈内には構築材と考えられる凝灰岩の加工材が検出されているがいずれも

原位置を動いており詳細は不明である。掘形によれば燃焼部が若干窪み、その先端に支脚痕と考えられる小穴が穿たれている。しかし袖石を配した痕は確認出来なかった。電燃焼部幅約60cm、奥行約55cm、煙道部長さ約30cmを測る。出土遺物は竈及び貯蔵穴内と西沿いの土坑内より主に検出された。

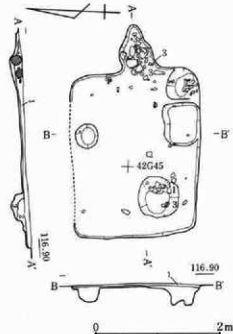


Fig.264 G96号住居跡

## G96号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 3 褐色土 焼土粒を少量含む。



Fig.265 G96号住居跡竈

## G96号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 2 焼土

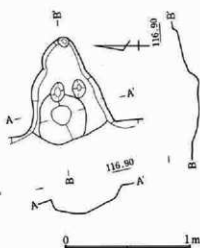


Fig.266 G96号住居跡竈掘形

第3章 G区の遺構と遺物

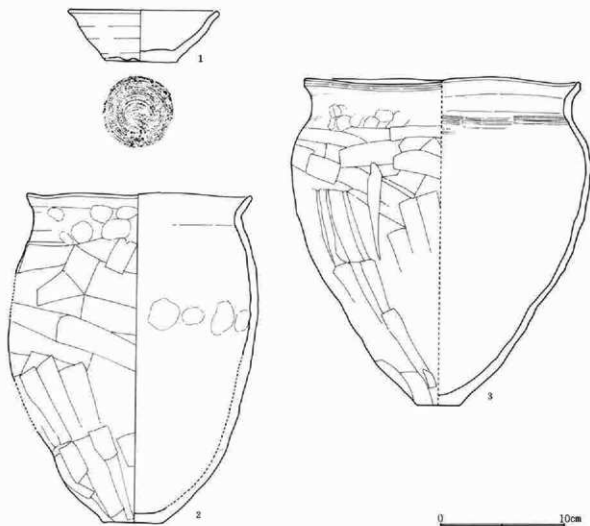


Fig.267 G96号住居跡出土遺物

G96号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
267-1 91-1	須恵器 杯	口～底 %	12.0 × 5.7 × 4.0	南西部土 坑内埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良 ②灰褐 ③砂混る
267-2 91-2	土師器 壺	口～底 %	18.0 × 5.0 × 26.0	貯蔵穴 内、壺内	紐造。口頸部撫で。体部上位横、中位斜、 下位縦方向篋削り。内面篋撫で。	①酸化・良好 ②橙 ～灰褐 ③細砂混る
267-3 91-3	土師器 壺	口～底 %	22.0 × 3.5 × 25.8	壺内、土 坑埋土	紐造。口頸部撫で。体部上位横、中位斜、 下位縦方向篋削り。内面篋撫で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③砂混る

## 第4章 H区の遺構と遺物

### 第1節 H区の概要

H区は本報告書に記載される3地区の中間に位置するもので、前述したG区と同様前橋市の版図に入る。当区の西縁はほぼ群馬町との境界線にあたり、字名「弥勤」の地名が残る。調査は東の側道の一部を昭和57年度に、また本線部分は58年度に実施したもので、調査面積は約4,800㎡である。

当区で検出された主な遺構は竪穴住居跡50軒、掘立柱建物跡2棟、井戸跡12基、溝6条、その他大小の土坑状遺構多数である。

竪穴住居跡は古墳時代後半から奈良・平安時代に至るもので、遺構は区内全体に広がり集中の傾向はなく、重複関係も比較的少ない。時期的な内訳は50軒の住居のうち大半は奈良時代の前半から中期頃までの時期に属し、平安時代と考えられるものは8軒、古墳時代の住居は僅かに1軒を検出している。

住居構造については、平面が長方形あるいは正方形に近い形態をとるが、長軸が東西方向のものと同南北方向のものがある。さらに、28号・50号住居跡は北壁に張り出し施設をもつ。竈の設置は鳥羽遺跡の一般的な傾向と符合しており東壁になされている例が多いが、30号・31号・35号・42号住居跡は北壁に設けられる。また、古墳時代の所産になる56号住居跡は東西壁が消失しているものの床面西側に焼土の散布が見られ、竈は西壁に付設されたと考えられる。柱穴が確認された住居は少なく、20号・50号・56号住居跡の3軒である。

竪穴住居跡からの出土遺物は土器器・須恵器類が中心で、特筆すべきものはない。土器類の出土量からすれば奈良時代と考えられる住居からの出土量は他の時期のものに比べ相対的に少ない傾向が窺われる。

掘立柱建物跡としては、奈良時代中頃と考えられ、2×2間と3×3間の二重に配された柱穴を中心に三重の濠と一重の棚列からなる1号掘立柱建物跡が目される。少なくとも一度の建て替えが想定されるが、全長約50mの方形を呈すると考えられる。柱穴の配列や方形区画の濠・棚列などの存在は一般的な掘立柱建物跡と異なり、神殿などの特異な建築物としての性格が窺われる。遺物は内濠と二番目の濠内に集中して検出されている。さらに、二重目の濠底には十数団体の短頸壺と頸部が検出されている。意識的に割り取られたと思われる長頸壺など祭祀的色彩の強い遺物のほか、大型円面硯が出土している。また、羽口・鍛冶鉋・鋳造鋳型も見られ、I区に検出された鍛冶工戻跡群との時間的・機能的関連も追及されなければならない。

井戸跡はいずれも中世以降の所産と考えられ、井戸枠などの施設はなく円形・素掘りである。深さ2～4mの規模である。

溝は区内の南側で東西走る上幅約9mの6号溝をはじめ、これから派生しあるいは平行走する大小の溝が検出されており、いずれも中世以降の時期と考えられる。この東西走る溝は当区の北に位置するJ区からI区の西側にかけて南北走る同規模の溝と南西部調査区域外で接続すると思われる。

H区における竪穴住居跡の希薄さは前節に報告したG区の南西部に現れた住居の点在現象の延長線上にあるものと考えられるが、竪穴住居跡群の構成される時期に関しては明らかに相異なるものである。この住居跡の集中度に関しては後述するが、I区の濃密な分布状況ともまた異なっている。

第4章 H区の遺構と遺物

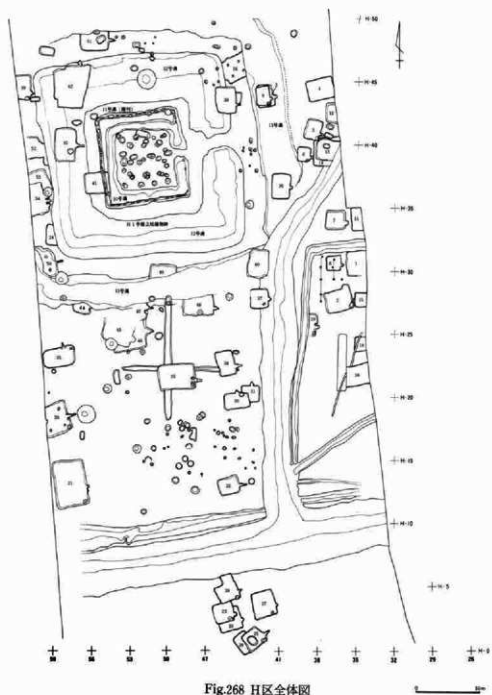


Fig.268 H区全体図

## 第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

H1号住居跡 (Fig. 269~272・PL. 93、94)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.88 ×			

H区東部に位置し、35H29~31の範囲にある。住居跡東半は調査区域外にあり全容は検出されていない。南北に延び、およそ90°の角度をもって東へ向きを変える1号溝と接するようにある。土層観察による壁高は約40cmを測り、直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦で良好な状態である。遺物は多く散在的に出土するが、大型の角礫が目立つ。

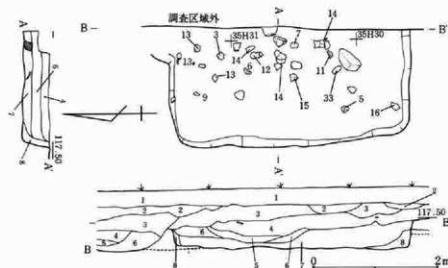


Fig.269 H1号住居跡

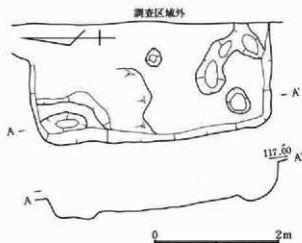


Fig.270 H1号住居跡掘形

## H1号住居跡

- 1 新拌土
- 2 暗褐色土 C軽石粒を含む砂質土。
- 3 黒褐色土 C軽 粒・炭化細粒を含む砂質土。
- 4 黒褐色土 C軽石粒・焼土粒を含む砂質土。
- 5 黒色土 C軽石を少し含み、焼土粒を多量に混入る粘質土。
- 6 暗褐色土 C軽石を少し含み、炭化粒を混入る粘質土。
- 7 暗褐色土 C軽石を少し含み、炭化粒を混入る、6より粘質。
- 8 暗褐色土 壁土の崩落土・砂質土。

第4章 H区の遺構と遺物

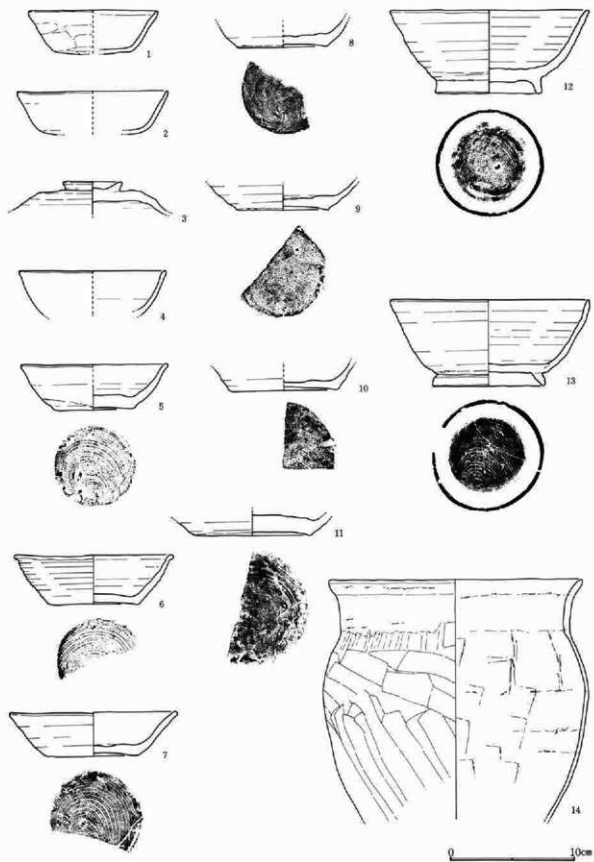


Fig.271 H1号住居跡出土遺物(1)

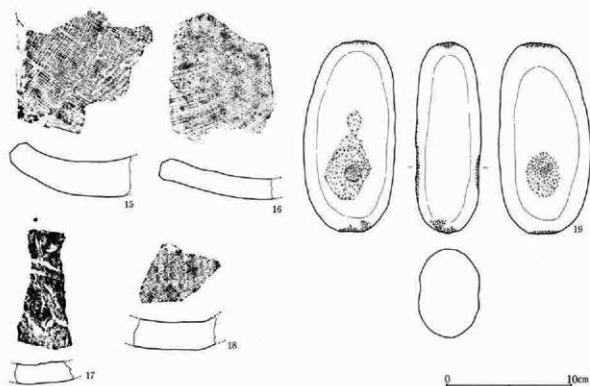


Fig.272 H1号住居跡出土遺物(2)

H1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③釉土 その他
271-1 94-1	土師器 杯	口～底 片	10.4 × 6.3 × 3.5	埋土	指押。体部横方向無で。底部不定方向削り。内面荒撫で。	①酸化・良好 ②に よい赤褐色 ③細砂混る
271-2 94-2	土師器 杯	口～底 小片	12.0 × 8.0 × 3.4	埋土	指押。体部無で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
271-3 94-3	須恵器 蓋	胴～頂	— × 胴4.8 × (2.3)	北東部埋 土	轆轤。右回転。頂部3段回転削り。胴 横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
271-4 94-4	須恵器 杯	口～体 小片	11.8 × — × (3.5)	埋土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
271-5 94-5	須恵器 杯	口～底 片	11.8 × 6.5 × 3.6	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・良好 ②灰赤 ③細砂混る
271-6 94-6	須恵器 杯	口～底 片	12.8 × 7.1 × 3.9	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
271-7 94-7	須恵器 杯	口～底 片	13.4 × 7.3 × 3.4	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
271-8 94-8	須恵器 杯	体～底 片	— × 7.2 × (1.8)	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや軟質 ② 灰白 ③細砂一部混る

第4章 H区の遺構と遺物

H1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
271-9 94-9	須恵器 杯	体~底 片	— × 7.4 × (1.8)	北西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・堅緻 ②青灰 ③細砂混る
271-10 94-10	須恵器 杯	体~底 片	— × 8.6 × (1.8)	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
271-11 94-11	須恵器 杯	底 片	— × 9.4 × (1.6)	南東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
271-12 94-12	須恵器 椀	口~底 片	16.0 × 8.6 × 6.6	北東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂一部混る
271-13 94-13	須恵器 口~底 片	口~底 片	15.9 × 9.0 × 6.8	北部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
271-14 94-14	土師器 壺	口~下 片	20.2 × — × 19.0	北東部埋 土	紐造。口頸部横方向無で。体部上位緩斜、 下位急斜方向置附り。内面荒撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
272-15 94-15	瓦 平瓦	小片	厚2.7	北東部埋 土	上面布目肌。御膳部3段面取り。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
272-16 94-16	瓦 平瓦	小片	厚1.6	北東部埋 土	上面布目肌。御膳部3段面取り。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
272-17 94-17	瓦 平瓦	小片	厚1.5	南部埋土	上面布目肌。	①酸化・良 ②橙 ③砂混る
272-18 94-18	瓦 平瓦	小片	厚2.2	埋土	橋巻叩打。上面布目肌。	①還元・良 ②灰 ③砂混る
272-19 94-19	石 叩打具	完	長15.1 幅5.2 厚7.3 907.7g	南西部埋 土	自然円礫の両端に叩打痕。両面にくぼみ。	輝石安山岩（粗粒）

H2号住居跡 (Fig. 273~277・PL. 95、96)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.40×3.42 突出し部1.25×5.0	N-74.5°-E	東壁やや南寄り	円形 78 × 70 × 18

H区東部に位置し、35~37H26~28の範囲にある。当住居跡の主体平面形は東西に長い長方形を呈するが、北東隅には北に向って張り出し部が付設される。幅約1.2mで北へ約54cmの規模をもつ張り出しである。残存壁高は約40cmを測り直線的に立ち上がる。西壁下にのみ溝が巡る。幅約10cm、深さ3~6cmを測る。床面はほぼ平坦で電前面がとくによく踏みしめる。南西隅及び北東側の各々にPitが設けられる。P1は径50×40cm深さ18cm、P2は60×50cm、深さ19.5cmを測る。竈は東壁に付設され、楕円形に小さく掘り込み短かい袖部を住居跡内に張り出す。煙道部の作り出しはない。燃燒部中央をややはずれ左袖にたおかれるように支脚が検出されている。掘形によれば、燃燒部は楕円形ですり鉢状に約10cm窪む。燃燒部幅約50cm、奥行約50cmを測る。



出土遺物は少量である。

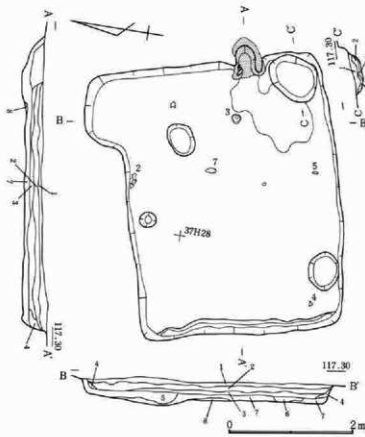


Fig.273 H2号住居跡

H2号住居跡貯蔵穴

- 1 黒褐色土 わずかに軽石を含む粘質土。
- 2 黒色土 炭化物灰層、焼土塊を含む。
- 3 ①層に似る。黄褐色粘性塊を含む。

H2号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石小粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒・C軽石粒を含む。
- 3 黒褐色土 炭化粒・灰粒を含む。
- 4 暗褐色土 粘性の壁面厚土。
- 5 暗褐色土 C軽石を少量含む砂層。
- 6 暗褐色土 炭化・焼土粒層・粘性。
- 7 暗褐色土 焼土塊を多量に含む。
- 8 暗褐色土 硬質粘性地、山6・7。

H2号住居跡溝

- 1 暗褐色土 C軽石小粒を含む粘土質。
- 2 赤灰色土 堀の崩落・焼土塊・灰を含む粘質土。
- 3 暗褐色土 埋土からの流入土・灰を含む。
- 4 黒色土 炭化塊・焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 炭化焼土粒群・粘性土。
- 6 暗褐色土 C軽石を含む砂質層。

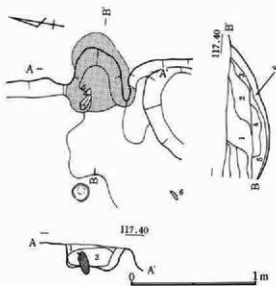


Fig.274 H2号住居跡溝

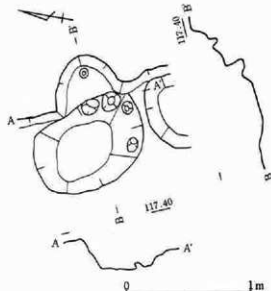


Fig.275 H2号住居跡掘形

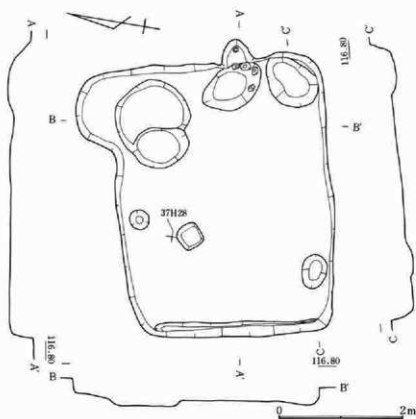


Fig.276 H2号住居跡掘形

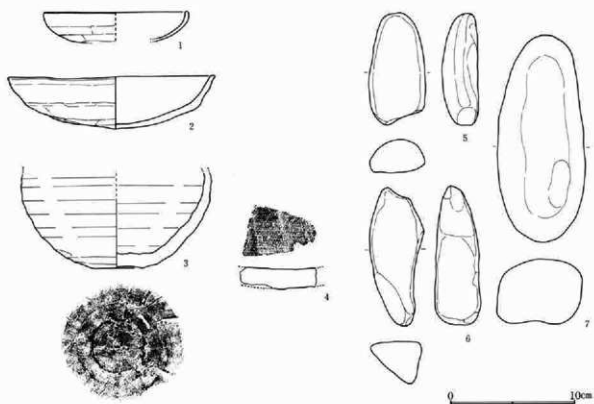


Fig.277 H2号住居跡出土遺物

H 2号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
277-1 96-1	土 杯	器口~体 残	10.8 × — × (3.1)	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 削り。	①還元・良 ②橙 ③細砂混る
277-2 96-2	土 杯	器口~底 残	16.5 × — × (4.1)	北東部床 面	指押。口縁部及び内面無で。体~底部不 定方向削り。	①還元・良好 ②橙 ③細砂混る
277-3 96-3	須 壺	上半部 欠損	— × 4.1 × (7.5)	北東部床 面	轆轤。右回転。体部下位3段及び底部、 回転置削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
277-4 96-4	瓦 平瓦	小片	厚1.5	北西部埋 土	橘色印打。上面布目直。下面平印打後、 無で。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
277-5 96-5	石 一	完	長8.9 幅4.5 厚2.9 152.3g	南東部埋 土	円盤。	輝石安山岩(粗粒)
277-6 96-6	石 一	完	長10.9 幅4.3 厚3.6 187.7g	壺内床 面	断面3角形。円盤。	黒色頁岩
277-7 96-7	石 一	完	長16.4 幅7.0 厚5.1 878.6g	北東部埋 土	円盤。	流紋岩

H 3号住居跡 (Fig. 278~281・PL. 97、98)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯藏穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.52 × —	N-74.5°-E	東壁やや南寄り	

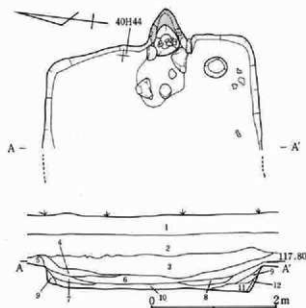


Fig.278 H 3号住居跡

H区北東部に位置し、43~45G39・40の範囲にある。西半は1号掘立柱建物跡を巡る13号溝と重複して消失している。壁高は約48cmを測り直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦をなすが軟弱である。電は

## H3号住居跡

- 耕作土
- 黒褐色土 耕作等による擾乱が多い。
- 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm)炭化粒を含む。
- 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm)炭化粒を含む。
- 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm)炭化粒を含む。
- 黒褐色土 C軽石中粒を含む。
- 黒褐色土 C軽石粗粒・粘土粒を含む。
- 黒褐色土 ほう灰
- 黒褐色土 壁崩落土。

#### 第4章 H区の遺構と遺物

東壁を三角形に掘り込む。煙道部の作り出しは無い。袖部には凝灰岩の加工材が配される。燃焼部はすり鉢状に深く落ち込む。両袖石の内法は約43cm、燃焼部幅約60cm、奥行約80cmを測る。竈前面には袖部構築材と同質の加工材が散乱する。遺物出土量は少ない。なお床下からは当住居跡によって消失した住居跡の存在を確認した。9号住居跡である。

H 9号住居跡 (Fig. 280・PL. 97)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.10 × 2.30	N—80°—E	東壁やや南寄り	

3号住居跡の範囲内にあり、削平されて掘形だけが確認できた。壁はほとんど消失しておりかろうじて平面形がとらえられた。竈は東壁を隅円形に掘り込み、袖部石材は基部が残る。袖石内法約30cm、燃焼部幅約46cm、奥行約55cmを測る。遺物の出土はない。

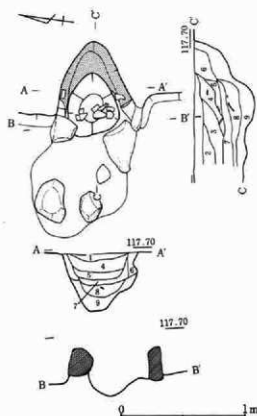


Fig. 279 H 3号住居跡竈

##### H 3号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm炭化粒を含む)。
- 3 灰褐色土 C軽石細粒(1mm以下)
- 4 灰褐色土 焼土塊
- 5 灰褐色土 焼土塊
- 6 赤土塊
- 7 灰層 焼土塊を少量含む。
- 8 黒色土 焼土塊・炭化粒を含む。
- 9 暗褐色土 焼土塊を全体に含む。

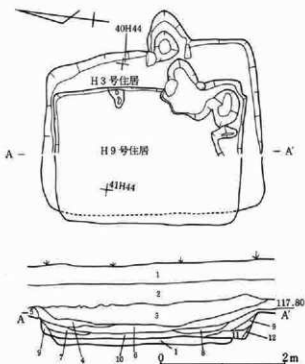


Fig. 280 H 3号住居跡掘形、H 9号住居跡

##### H 9号住居跡

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 耕作等による攪乱が多い。
- 3 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石中粒(5~6mm)を含む。
- 6 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm)炭化粒を含む。
- 7 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm)炭化粒を含む。
- 8 黒褐色土 C軽石小粒(1~2mm)炭化粒を含む。
- 9 黒褐色土 C軽石中粒を含む。
- 10 黒褐色土 C軽石細粒・粘土粒を含む。
- 11 暗褐色土 はり床。
- 12 黒褐色土 壁崩落土。

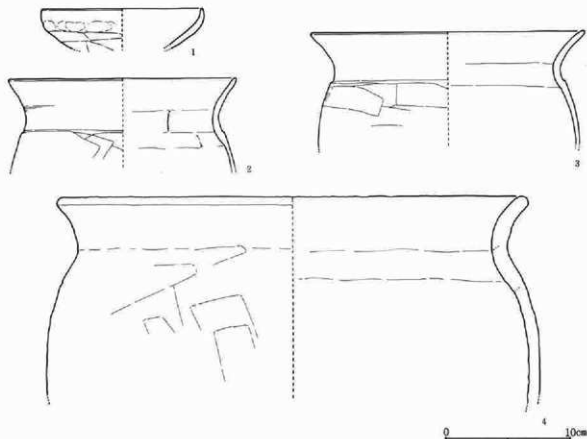


Fig.281 H 3号住居跡出土遺物

H 3号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
281-1 96-1	土器 杯	口~体 小片	12.8 × — × ( 3.2)	南西部床 面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
281-2 96-2	土器 壺	口~上	18.2 × — × ( 7.0)	竈内埋土	紐造。口頸部無で。体部上位横方向寛削 り。内面横方向寛削で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
281-3 96-3	土器 壺	口~上	21.9 × — × ( 9.0)	竈内埋土	紐造。口頸部無で。体部上位横方向寛削 り。内面紐い横方向寛削で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
281-4 96-4	土器 壺	口~中	37.8 × — × (16.5)	床下埋土	紐造。口頸部無で。体部不定方向寛削り。 内面紐い寛削で。	①酸化・良好 ②によ い赤褐 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H 4号住居跡 (Fig. 282・PL. 98)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.40 × 3.40			

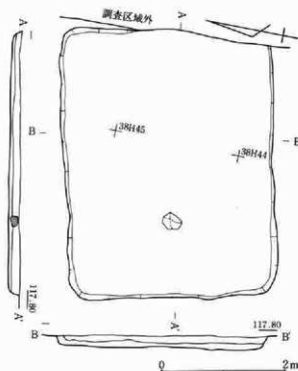


Fig. 282 H 4号住居跡

H区北部に位置し、37～39H43～45の範囲にある。南東隅は調査区域外にかり未検出である。竈等生活施設は認められなかった。壁高は約20cmを測り、ゆるく立ち上がる。床面はほぼ平坦をなすが全体に軟弱で踏みしまりはない。土器類の出土は無く、人頭大の角礫が認められたのみである。当跡は住居としての生活を考える上でほとんどの条件が欠如しており、むしろ堅穴遺構とすべきかもしれない。

H 4号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石焼土・炭化粒を含む。下層に炭化塊 (炭) が集中する箇所がある。

H 5号住居跡 (Fig. 283～286・PL. 99、100)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.35 × 2.60	N— 98° —E	東壁やや南寄り	円形 68 × 45 × 15.5

H区北東部に位置し、38・39H40・41の範囲にある。壁高は約34cmを測り直線的に立ち上がる。北壁西半から西壁下にかけて幅約10cm、深さ6～10cmの溝が巡り西壁下の溝が除切れる南西隅に径約30cm、深さ約32cmを測る方形の穴が穿たれる。床面はほぼ平坦で竈前面から南半にかけては固く踏みしめるが西壁沿いは凹凸が見られ軟弱である。貯蔵穴は竈の右側南東隅に穿たれる。一旦すり鉢状に窪み壁ぎわに2個の穴を設けてある。竈は東壁を三角形に掘り込み袖部の作り出しはない。煙道部は明瞭な体をなしていないが、三角形

頂部の傾斜がゆるくなり燃焼部からの立ち上がりに変化を与えており、この部分を煙道として機能させていたと考えられる。燃焼部奥に小児の頭大の円錐形川原石が検出されたが火床より浮いた状態であり支脚の用をなしていない。掘形でも支脚を据えたような痕跡は認められなかった。同じく袖部については2~3個の小穴が検出されたが左右の間隔が狭く構築材埋設の痕跡としては不適當な感がある。燃焼部幅約60cm、奥行約75cmを測る。出土遺物は室内及び南側に多くみられた。

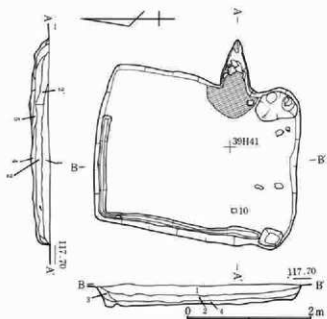


Fig.283 H5号住居跡

H5号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・明褐色塊(5×5cm)を含む。
- 2 暗褐色土 明褐色粗粒・塊を少し含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 締りのない砂質土。
- 5 暗褐色土 灰化粒・明褐色粒を少し含む。
- 6 暗褐色土 4と類似し、灰化粒を多く含む。

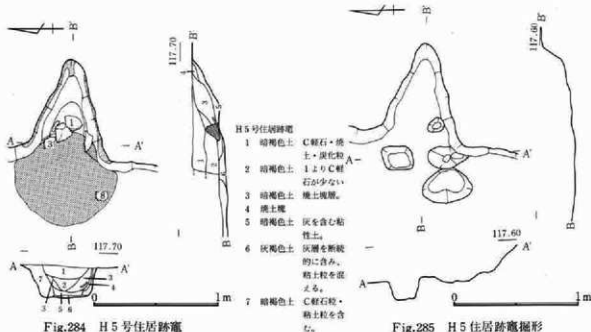


Fig.284 H5号住居跡竈

Fig.285 H5住居跡竈掘形

第4章 H区の遺構と遺物

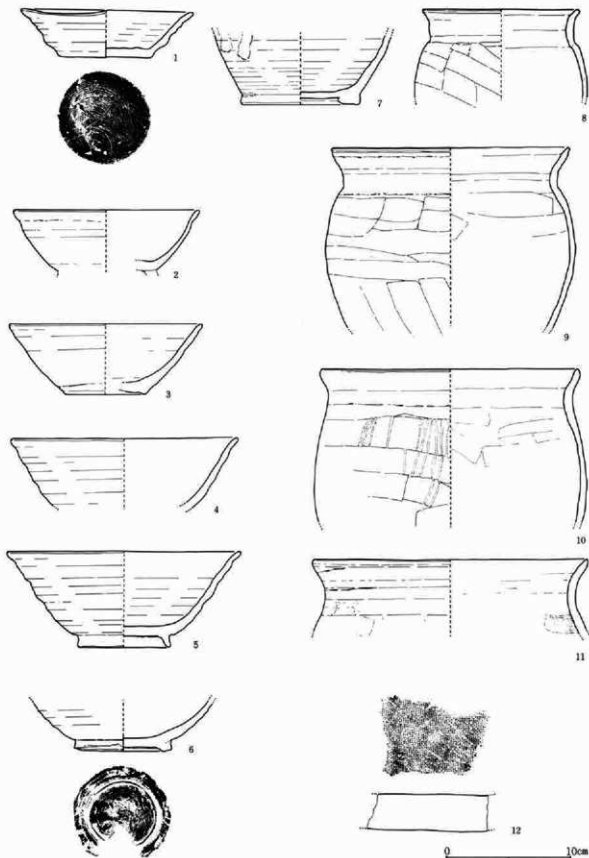


Fig.286 H5号住居跡出土遺物



H5号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
286-1 99-1	須恵器 杯	口～底 残	13.8 × 7.3 × 3.7		竈内床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや低温 ②褐灰 ③細砂混る
286-2 99-2	須恵器 碗	口～底 残	14.9 × 7.8 × (4.8)		貯蔵穴内 埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で、削落。	①還元・低温 ②によい黄褐色 ③細砂混る
286-3 99-3	須恵器 碗	口～底 残	15.4 × 6.2 × 5.6		竈内埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②明褐色～褐 ③細砂混る
286-4 99-4	須恵器 碗	口～体 残	18.3 × — × (5.3)		埋土	轆轤。右回転。	①加酸化還元・低温 ②によい黄褐色 ③砂混る
286-5 99-5	須恵器 碗	口～底 残	18.9 × 7.3 × 7.6		南東部埋土	轆轤。右回転。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②洗黄～灰 ③緻密
286-6 99-6	須恵器 碗	体～底 残	— × 8.0 × (3.9)		北西部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰オリーブ ③砂一部混る
286-7 100-7	灰釉陶器 壺	口～底 小片	— × 9.1 × (5.7)		埋土	轆轤。右回転。	①還元・堅緻 ②灰オリーブ ③緻密
286-8 100-8	土師器 壺	口～中 残	12.5 × — × (7.0)		竈内床面	紐造。口頸部無で。体部斜方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
286-9 100-9	土師器 壺	口～下 残	19.1 × — × (14.3)		竈内埋土	紐造。口頸部強い無で。体部上半横方向、下半縦方向瓦削り。内面瓦敷で。	①酸化・良好 ②暗赤褐 ③緻密
286-10 100-10	土師器 壺	口～中 残	20.8 × — × (12.2)		竈内埋土	紐造。口頸部無で。体部横方向瓦削り。内面瓦敷で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③緻密
286-11 100-11	土師器 壺	口～上 小片	22.0 × — × (5.6)		埋土	紐造。口頸部無で。体部瓦削り。内面瓦敷で。	①酸化・良好 ②褐 ③緻密
286-12 100-12	瓦 平瓦	小片	厚2.8		埋土	印打。上面布目状。下面無で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る

H6号住居跡 (Fig. 287～289・PL. 100)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.30 × 2.13	N-93°	E	東壁やや南寄り 円形 53 × 36 × 16

H区北東部に位置し、39・40H38・39の範囲にある。西端は1号掘立柱建物跡を巡る13号溝によって消失している。当区に検出された堅穴住居の中では小型の部類に属する。残存壁高は約28cmを測り直線的に立ち上がる。床面は平坦をなし比較的良好な遺存を示す。竈は東壁を長楕円形に掘り込み、袖部・煙道部の作り出しはない。燃焼部は床面より7～8cm窪みすり鉢状を呈する。燃焼部幅約45cm、奥行約70cmを測る。出土遺物は少ない。

第4章 H区の遺構と遺物

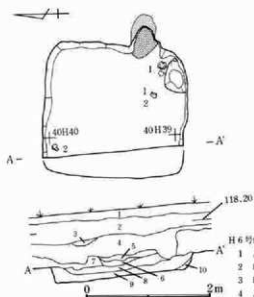


Fig.287 H 6号住居跡

- H 6号住居跡
- 1 黒褐色土 盛土。
  - 2 暗褐色土 耕作土。
  - 3 暗褐色土 下位層C軽石を含む塊状
  - 4 黒褐色土 C軽石細粒（1mm以下）を含む。
  - 5 黒色土 炭化物を含む。
  - 6 黒褐色土 5より炭化粒が少ない。
  - 7 暗褐色土 C軽石細粒・砂粒混合層
  - 8 黒褐色土 C軽石小粒（1～2mm）炭化物小粒を含む。
  - 9 暗褐色土 C軽石小粒は少なく、炭化粒・灰を含む粘性土。
  - 10 暗褐色土 黒褐色の上粒を含む粘性

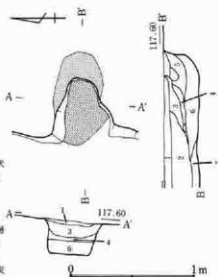


Fig.288 H 6号住居跡

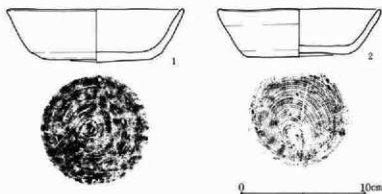


Fig.289 H 6号住居跡出土遺物

H 6号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石細粒（1mm以下）を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石細粒（1mm以下）炭化物細粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼成土。
- 4 黒褐色土 焼土粒を含む、堆埋土。
- 5 黒褐色土 堆土塊・炭化粒を含む。
- 6 黒褐色土 C軽石少量・焼土粒を含む。
- 7 茶褐色土 C軽石・砂粒を含む砂質土。

H 6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成	②色調
						③胎土	その他
289-1 100-1	須恵器 杯	口～底 残	14.2 × 8.8 × 4.2	南東部床 面	轆轤。右回転製切り。底縁部回転製削り。 底部「×」寫掻き。	①還元・良好	②灰白 ③細砂混る
289-2 100-2	須恵器 杯	口～底 残	13.0 × 8.0 × 3.8	北部・南 部床面	轆轤。右回転製削り。無調整。見込部4 本の寫掻き。	①還元・良好	②灰白 ③磨面

H 7号住居跡 (Fig. 290~293・PL. 101)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.25 × 3.03	N-88.5°-E	東壁やや南寄り	

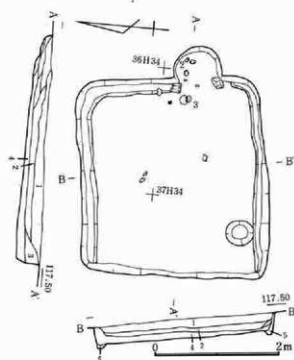


Fig.290 H 7号住居跡

H区東部やや北寄りに位置し、35~37H33・34の範囲にある。壁高は約30cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。西壁を除き各壁下には幅広い溝が通る。溝は幅約16cm、深さ5~7cmを測る。床面は平坦をなし全体的によく踏みまわっている。南西寄りには径約40cm、深さ約17cmの円形の穴が穿たれる。竈は東壁を円形に掘り込み左右袖部に凝灰岩の加工材が配される。煙道部の作り出しは無いが楕円形によれば、燃焼部中央やや奥寄りで段をなして高くなる。また両袖部には袖石の埋設痕が認められる。電槽部内法は約55cm、奥行約70cmを測る。出土遺物は少ない。

## H 7号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石大・中粒を含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒を含む。
- 3 黒褐色土 炭化粒・C 軽石細粒を含む粘性土。
- 4 暗褐色土 2 に似るがC 軽石焼土・炭化粒を含む。
- 5 暗褐色土 4 に似るがC 軽石少なく、砂質土を含む。

## H 7号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C 軽石を含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒・C 軽石粒・粘土粒を含む。
- 3 黒褐色土 焼土粗粒・炭化粗粒・C 軽石粒を含む。
- 4 暗褐色土 焼土塊・炭化粒を含む。
- 5 暗褐色土 炭化粒を含む粘性土。竈の崩落土、焼土を混える。
- 6 黒褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 7 黒褐色土 C 軽石多く、焼土・炭化粒を含む砂質。
- 8 黒褐色土 C 軽石・炭化・焼土塊を含む。

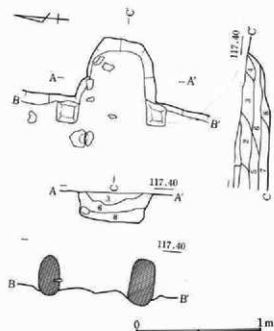


Fig.291 H 7号住居跡竈

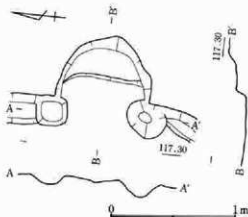


Fig.292 H 7号住居跡竈掘形

第4章 H区の遺構と遺物

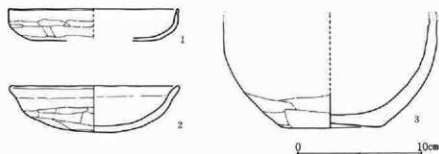


Fig.293 H 7号住居跡出土遺物

H 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
293-1 101-1	土師器 杯	口~底 小片	13.6 × 10.0 × 2.5	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向置附り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
293-2 101-2	土師器 杯	口~底 片	13.6 × - × 3.7	堀内床面	指押。口縁部及び内面撫で。体部部不定方向置附り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
293-3 101-3	土師器 要	上半部 欠損	- × 8.0 × (7.5)	堀内床面	紐造。器壁厚く、器面粗い。体部不定方向置附り。内面撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る

H 8号住居跡 (Fig. 294~296・PL. 102)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.55 × 2.40	N-92.5'-E	東壁やや南寄り	

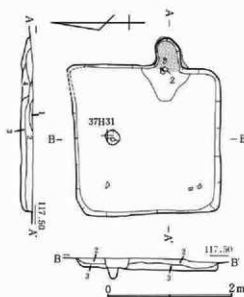


Fig.294 H 8号住居跡

H区東部中央に位置し、36・37H30・31の範囲にある。北壁に沿って1号溝が東走しているため北壁上端

H 8号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を含む軟質砂礫。
- 2 黒褐色土 1より多くC軽石含む。
- 3 黒褐色土 C軽石を少量含む。
- 4 黒褐色土 焼土・炭化粒・C軽石を少量含む。

H 8号住居跡堀

- 1 灰褐色土 細粒粘土層で堀前落土。
- 2 赤褐色土 地土塊で、竈天井内壁部崩落土。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒・C軽石を少量含む。
- 6 暗褐色土 掘道口部よりの流入土。
- 5 黒灰色土 電網落土。
- 6 赤褐色土 電網落土。
- 7 暗褐色土 焼土。

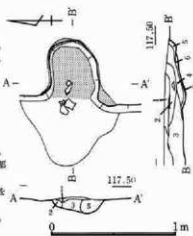


Fig.295 H 8号住居跡堀

はわずかながら消失している。また2号掘立柱建物跡と重複しており、新旧関係は両者より古い時期の所産である。壁高は約25cmを測りゆるく立ち上がる。床面は平坦で甕前は固く踏みしめる。甕は東壁を掘り込み付設される。袖部・煙道部の作り出しはない。遺物は甕内に少量検出されている。

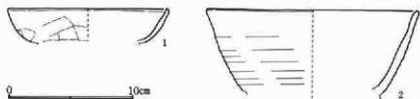


Fig.296 H 8号住居跡出土遺物

## H 8号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
296-1 102-1	土部器 杯	口～体 小片	12.8 × — × ( 2.7 )	埋土	指押。口縁部及び内面強で。体部横方向 鋭削り。	①酸化・良好 ②黄橙 ③細砂混る
296-2 102-2	須恵器 椀	口～体 小片	17.0 × — × ( 6.5 )	甕内埋土	轆轤。右回転。付高台模倣で、剥落。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

## H10号住居跡 (Fig. 297～299・PL. 103)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	甕位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.62 × —	N—98.5—E	東壁やや南寄り	楕円形 60 × 38 × 7

H区東部中央に位置し、38H24～26の範囲にある。西側のほとんどは1号溝によって消失している。また南側甕右を中世の所産と考えられる浅い溝が東走している。壁高は約32cmを測りゆるく立ち上がる。床面は

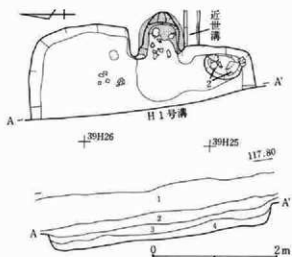


Fig.297 H10号住居跡

検出された範囲では平坦をなし固く踏みしめている。甕は東壁を方形に近い形状に掘り込み、袖部の張り出しと短かい煙道部が作り出される。左袖部先端には凝灰岩の加工材が配されるが右袖には残存していない。掘形では両袖部に円形の小穴が穿たれており、本来は埋設されていたと考えられる。甕燃焼部幅約55cm、奥行約50cm、煙道部長さ約15cmを測る。出土遺物は甕内とその周辺に少量検出されている。

## H10号住居跡

- 1 耕作土
- 2 黒色土 C 軽石・焼土炭灰を含む砂混。
- 3 黒色土 2よりC軽石が少ない。
- 4 黒色土 C 軽石を少し含む。

第4章 H区の遺構と遺物

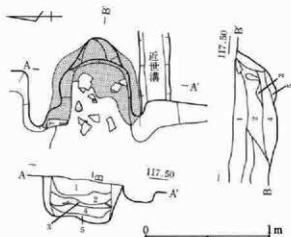


Fig. 298 H10号住居跡竈

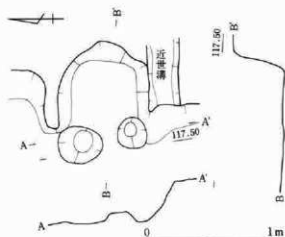


Fig. 299 H10号住居跡竈掘形

H10号住居跡型

- 1 黒色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む砂質。
- 2 黒色土 C軽石を少量含み、4に似るが炭化粒が多い。
- 3 黒色土 黒色土中に褐色粘性塊を含む。
- 4 黒色土 多量の焼土塊を含み、炭化塊を混入。
- 5 黒灰 燐により焼土塊を含む。

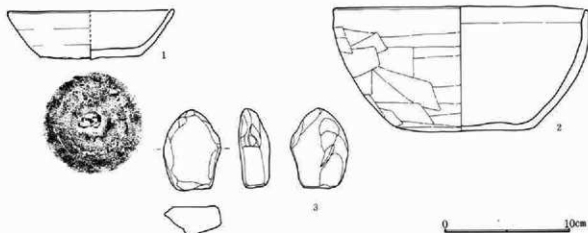


Fig. 300 H10号住居跡出土遺物

H10号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
300-1 103-1	須恵器 杯	口～底 1/2	13.3 × 8.1 × 3.8	埋土	縦軸。右回転置切り。無調整。	①還元・やや低温 ② 灰 ③細砂混る
300-2 103-2	土師器 鉢	口～底 完	29.5 × 11.0 × 9.8	貯蔵穴床 面	紐造巻上。口縁部及び内面無。体部横 方向、底部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
300-3 103-3	石製品 砥石	小片	長 6.4 幅 4.5 厚 2.5 73.2g	埋土	両面及び側面使用。	流紋岩 (砥沢?)

H11号住居跡 (Fig. 301, 303・PL. 104)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	竪位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.65 × ー			

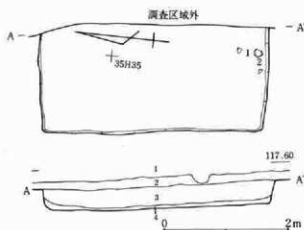


Fig.301 H11号住居跡

H区東部やや北寄りに位置し、34・35H33～35の範囲にある。東半は調査区域外に延び未検出である。壁高は約32cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦をなすが、踏みしまりがなく軟弱である。竪は検出されていない。出土遺物は極めて少ない。

## H11号住居跡

- 1 耕作土
- 2 黒色土 C軽石を含む砂層。
- 3 黒色土 2よりC軽石が多い。
- 4 黒色土 灰褐色砂層を少し含む。

H12号住居跡 (Fig. 302, 304・PL. 104, 105)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	竪位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.10 × ー			

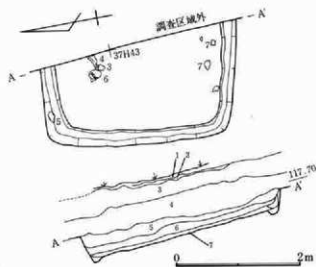


Fig.302 H12号住居跡

H区北東部に位置し、37H42・43の範囲にある。東半は調査区域外に延び未検出である。壁高は遺存が良好で約40cmを測り垂直に立ち上がる。検出された範囲内での南・北・西の各壁下には幅10～18cm、深さ2～7cmの溝が巡っている。床面は平坦で踏みしまりもよく、良好である。竪は東壁に付設されていると考えられるが検出されていない。出土遺物は土師器焼類が多い。

## H12号住居跡

- 1 黒色土 遺土。
- 2 灰褐色土 細砂層。
- 3 暗褐色土 砂質で1、2の混土層、耕作土。
- 4 黒褐色土 C軽石粒多く、層も厚い、泥乱多い。
- 5 暗褐色土 C軽石細粒を少し含む、炭化粒を弱含む。
- 6 黒褐色土 粘土粒・炭化粒を含む。
- 7 灰褐色土 灰を主体とする炭化・焼土粒を含む。

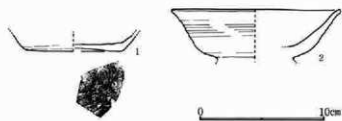


Fig.303 H11号住居跡出土遺物

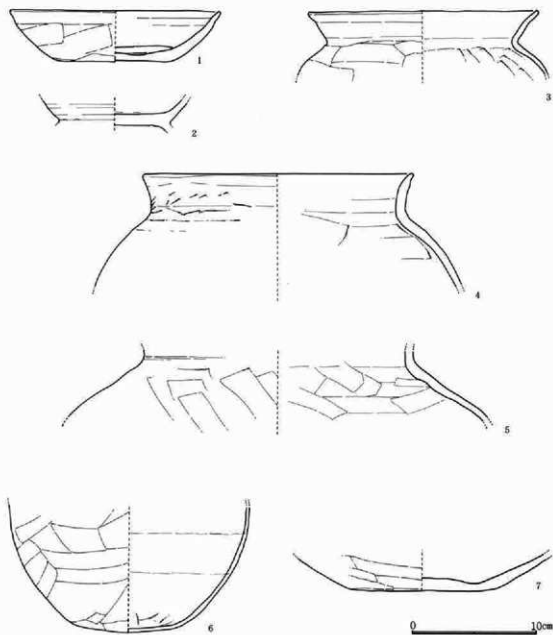


Fig.304 H12号住居跡出土遺物



H11号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
303-1 104-1	須恵器 杯	体～底 片	— × 7.2 × (1.4)	南東部床 面	轆轤。右回転。腰～底部回転部有り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
303-2 104-2	須恵器 椀	口～体 片	13.5 × — × (4.0)	南東部床 面	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

H12号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
304-1 105-1	土師器 杯	口～底 片	16.9 × 8.8 × 4.0	埋土	指押。口縁部及び内面強い割で、体部横 方向、底部不定方向割削り、不明瞭。	①酸化・良 ②にぶい 橙 ③細砂混る
304-2 105-2	須恵器 椀	底 片	— × — × (2.5)	埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
304-3 105-3	土師器 壺	口～上 片	18.3 × — × (5.0)	北東部床 面	紐造。口頸部無で。体部上位横方向割削 り。内面横方向割削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
304-4 105-4	土師器 壺	口～上 小片	21.3 × — × (9.0)	北東部床 面	紐造。口頸部無で。体部上位縦方向割削 り。内面横方向割削り。	①酸化・良 ②にぶい 橙 ③細砂混る
304-5 105-5	土師器 壺	頸～上 小片	— × — × (6.3)	北西部埋 土	紐造。口頸部無で。体部上位斜方向割削 り。内面横方向割削り。	①酸化・良 ②橙 ③砂混る
304-6 105-6	土師器 壺	中～底 片	— × 8.3 × (10.0)	北東部床 面	紐造。体部中位及び底部不定方向割削 り。内面置盤で。	①酸化・良好 ②にぶ い赤褐 ③細砂混る
304-7 105-7	土師器 壺	下～底 片	— × 12.0 × (3.0)	南東部床 面	紐造。体部下位横方向、底部不定方向割 削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る

H13号住居跡 (Fig. 305、306・PL. 106)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.60 × —			

H14号住居跡 (Fig. 305、307・PL. 106・107)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.60 × —			

H区北東部に位置し、37・38H38～40の範囲にある。東側は調査区域外にかかり、南から東側にかけては2号溝との重複によって消失している。13号住居跡は64号住居跡検出後、床下の調査で判明したものである。14号住居跡は北西隅で5号住居跡、北壁で3号土坑と重複している。新旧関係は両者より古い時期の所産で

#### 第4章 H区の遺構と遺物

ある。壁高は約26cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。北壁下東寄りに6個の小穴が穿たれる。床面は平坦をなすが踏みかためは弱い。

13号住居跡は前述したように14号住居跡の床下検出の際確認されたものである。北西部が丸く張り出し不整形方形となる。壁は14号住居跡によって削平されわずかに痕跡として確認されたが、南壁から西壁にかけて

部分的に壁下の溝が検出されている。幅約16cm深さ約6cmを測る。床面は14号住居跡との高低差はほとんどなく中央部が若干窪む程度である。出土遺物は土器類の他石器類も検出されている。

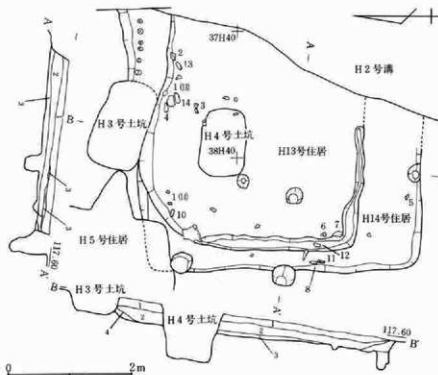


Fig.305 H13・14号住居跡

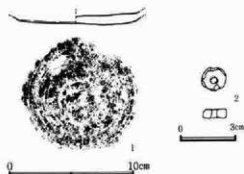


Fig.306 H13号住居跡出土遺物

#### H13号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③断土 その他
306-1 106-1	酒器 杯	底	— × 9.2 × (1.1)	北西部埋土	輪轆。右回転。底部回転痕有り。	①加齢化還元・良好 ②淡黄 ③砂混る
306-2 106-2	石製品 白玉	完	長1.25 幅1.3 厚0.5	埋土	両面研磨。片側穿孔。	滑石

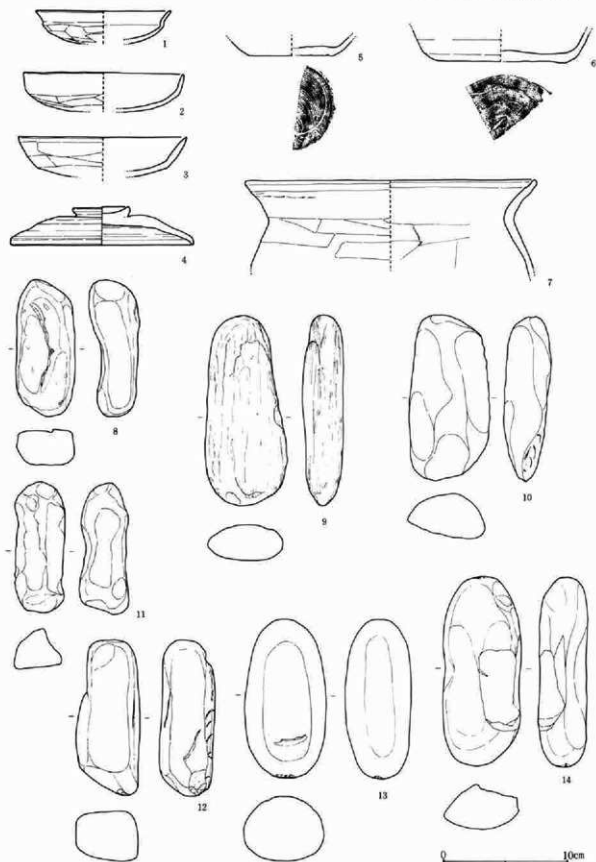


Fig.307 H14号住居跡出土遺物

第4章 H区の遺構と遺物

H14号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
307-1 106-1	土器 杯	口～底 片	10.8 × 9.4 × (2.6)	北西部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向置割り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
307-2 107-2	土器 杯	口～底 片	12.8 × 12.0 × (3.1)	北東部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向置割り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
307-3 107-3	土器 杯	口～底 小片	13.5 × 10.6 × (3.2)	北東部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向、 底部不定方向置割り。	①酸化・良好 ②に よい黄緑 ③細砂混る
307-4 107-4	須恵器 蓋	横～端 片	14.7 × 横4.5 × 3.0	北東部埋 土	轆轤。右回転。頂部3段割転置割り。横 横無で。	①還元・良好・気孔多 し ②灰白 ③緻密
307-5 107-5	須恵器 杯	底片	— × 6.8 × (1.5)	南西部埋 土	轆轤。右回転未切り。	①加酸化還元・良好 ②灰白 ③緻密
307-6 107-6	須恵器 杯	体～底 片	— × 10.8 × (2.4)	南西部埋 土	轆轤。右回転。腰～底部回転置割り。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
307-7 107-7	土器 甕	口～上 片	23.4 × — × (7.5)	南西部埋 土	紐造。口頸部無で。体部上位横方向置割 り。内面横方向置割り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
307-8 107-8	石 —	完	長10.8 幅4.7 厚4.0 287.3g	南西部埋 土	棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
307-9 107-9	石 —	完	長15.1 幅6.5 厚2.8 430.5g	埋土	棒状円礫。	雲母石英片岩
307-10 107-10	石 —	完	長13.2 幅6.4 厚3.8 317.3g	北西部埋 土	扁平円礫。	輝石安山岩(粗粒)
307-11 107-11	石 —	完	長10.4 幅3.8 厚3.0 210.0g	南西部埋 土	棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
307-12 107-12	石 —	完	長12.3 幅5.0 厚4.0 457.0g	南西部埋 土	棒状円礫。両端に打撃痕。	輝緑岩
307-13 107-13	石 —	完	長12.6 幅6.5 厚5.1 676.7g	北東部埋 土	棒状円礫。両端に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
307-14 107-14	石 —	完	長15.0 幅6.2 厚3.5 545.0g	北東部埋 土	棒状円礫。両端に打撃痕。	ひん岩

H15号住居跡 (Fig. 308・PL. 107)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.30 × —			

H区東部中央に位置し、34・35H27・28の範囲にある。東半は調査区域外に延び未検出である。また北東部は深さ約40cmの土坑状遺構によって消失している。壁高は約22cmを測り、直線ぎみに立ち上がる。床面は

## 第2節 H区の整穴住居跡と遺物

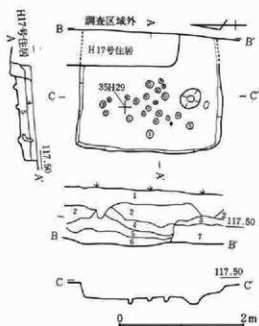


Fig.308 H15号住居跡

平坦をなすが中央部に径7～8cmの浅い小穴群が集中して穿たれる。小穴群のあり方には規則性をみい出すことはできない。竈など住居付属施設は検出されない。出土遺物は極めて少なく土師器の小片が認められたのみである。

### H15号住居跡

- 1 褐色土 耕作土・砂層。
- 2 褐色土 C軽石を多く含む砂質層。
- 3 黒褐色土 大粒C軽石を含み、土粒粗い。
- 4 褐色土 C軽石を含む土粒の粗い砂質。
- 5 明褐色土 土粒を含む砂層。
- 6 褐色土 砂層。
- 7 褐色土 粘性、堅くしまる。

### H16号住居跡 (Fig. 309)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.30 ×			

H区の東部中央に位置し、34・35H23・24の範囲にある。東半は調査区域外に延び未検出である。南西から北方向に延びる3号溝と西側で重複している。新旧関係は不明である。残存壁高は浅く約6cmを測る。床面は平坦で東寄りの部分は比較的良好に踏みしまる。竈など住居付属施設は検出されない。遺物の出土は認められない。

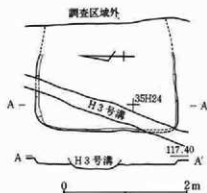


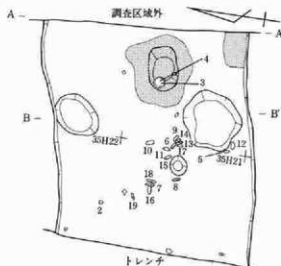
Fig.309 H16号住居跡

第4章 H区の遺構と遺物

H18号住居跡 (Fig. 310~312・PL. 108, 109)

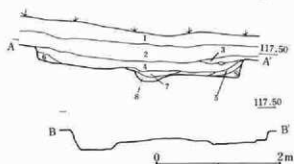
平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.32 × -			

H区の東部中央に位置し、34・35H20~22の範囲にある。東側は調査区域外にあり未検出である。また西側は予備調査時の試掘溝によって消失している。



16号住居跡と同様北西側で3号溝と重複しており、新旧の関係は不明である。壁高は約50cmを測り垂直に立ち上がる。床面はかなり凹凸が著しいがよく踏みしめる。東側中央と南東隅には焼土と灰の広がりが認められ、前者のそれは下位に楕円形の土坑が検出されている。長径約70cm、短径約46cm、深さ約10cmを測る。土坑内の土層堆積状態は、床面に検出された焼土・灰層が堆積している。また南西部のものは、壁ぎわの流れ込み状態を示している。南・西壁に近く各々楕円形の浅い土坑が検出されている。出土遺物は土師器の他、石器類の出土がある。

16号住居跡と同様北西側で3号溝と重複しており、新旧の関係は不明である。壁高は約50cmを測り垂直に立ち上がる。床面はかなり凹凸が著しいがよく踏みしめる。東側中央と南東隅には焼土と灰の広がりが認められ、前者のそれは下位に楕円形の土坑が検出されている。長径約70cm、短径約46cm、深さ約10cmを測る。土坑内の土層堆積状態は、床面に検出された焼土・灰層が堆積している。また南西部のものは、壁ぎわの流れ込み状態を示している。南・西壁に近く各々楕円形の浅い土坑が検出されている。出土遺物は土師器の他、石器類の出土がある。



H18号住居跡

- 1 褐色土 燻作土、砂柄。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 大粒C軽石を含み、締りなし。
- 4 暗褐色土 焼土粒を少し含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒。
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 焼土粒・灰を含み、ボソボソ
- 8 暗褐色土 焼土粒・灰を含み、ボソボソ

Fig.310 H18号住居跡

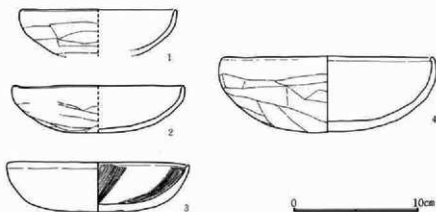


Fig.311 H18号住居跡出土遺物(1)



Fig.312 H18号住居跡出土遺物(2)

第4章 H区の遺構と遺物

H18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 高さ	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
311-1 108-1	土 師 器 杯	口～底 片	12.4 × — × (3.6)	埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
311-2 108-2	土 師 器 杯	口～底 片	13.7 × — × 3.8	北西部床 面	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方向、 底部不定方向瓦削り。	①酸化・良 ②橙 ③砂混る
311-3 108-3	土 師 器 杯	口～底 完	14.6 × — × 4.0	南東部床 面	紐造巻上か。口縁部無で。体底部瓦削り 後、無で。内面、放射状瓦磨き。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
311-4 108-4	土 師 器 大 型 杯	口～底 完	17.4 × — × 6.0	南東部床 面	紐造巻上か。口縁部及び内面無で。体部 及び底部横方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
312-5 109-5	石 —	完	長 9.0 幅 4.6 厚 3.6 198.9g	南部床面	棒状円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
312-6 109-6	石 —	完	長 9.8 幅 4.4 厚 3.7 223.2g	南西部床 面	棒状円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
312-7 109-7	石 —	完	長10.8 幅 5.1 厚 4.0 287.3g	南西部床 面	棒状円礫。	珩質頁岩
312-8 109-8	石 —	完	長12.2 幅4.3 厚3.4 222.2g	南西部床 面	棒状円礫。一端に打撃痕。	黒色頁岩
312-9 109-9	石 —	完	長 9.7 幅 4.6 厚 2.8 174.8g	南東部床 面	扁平円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
312-10 109-10	石 —	完	長10.2 幅 4.6 厚 3.8 268.8g	南部床面	棒状円礫。	ひん岩
312-11 109-11	石 —	完	長11.3 幅 5.5 厚 2.2 207.8g	中央部床 面	扁平円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
312-12 109-12	石 —	完	長11.5 幅 5.2 厚 3.6 270.5g	南部床面	棒状円礫。両端に打撃痕。	輝石安山岩 (粗粒)
312-13 109-13	石 —	完	長 8.3 幅 4.3 厚 3.1 183.1g	中央部床 面	棒状円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
312-14 109-14	石 —	完	長10.1 幅 3.6 厚 3.0 124.3g	中央部床 面	棒状円礫。	黒色頁岩 (化石含有)
312-15 109-15	石 —	完	長11.1 幅 5.3 厚 3.0 193.2g	中央部床 面	扁平円礫。	ひん岩
312-16 109-16	石 叩 打 具	完	長15.5 幅 6.6 厚 4.5 710.5g	南西部埋 土	棒状円礫。両端に打撃痕。	溶結凝灰岩
312-17 109-17	石 —	完	長 9.2 幅 4.5 厚 2.5 171.3g	中央部床 面	扁平円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
312-18 109-18	石 —	完	長10.5 幅 3.9 厚 3.2 180.3g	南西部床 面	棒状円礫。	黒色頁岩
312-19 109-19	石 —	完	長10.6 幅 4.5 厚 2.6 133.1g	南西部床 面	扁平円礫。	砂 岩



H19号住居跡 (Fig. 313~315・PL. 109, 110)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	6.10 × 4.27	N-88° -E	東壁やや南寄り	

H区のはほぼ中央に位置し、47~50H20~22の範囲にある。東西に長い長方形を呈し、当区検出の住居跡群では大型に属する。壁の遺存は良好で壁高約60cmを測り垂直に立ち上がる。床面は細かな凹凸が見られるが平坦で全体によく踏みしまる。竈は東壁を方形ぎみに掘り込み、住居内に張り出す袖部と長い煙道が作り出される。左右袖部の内側には各々人頭大の川原石が配されるがやや燃焼部側に倒れ込んでおり本来の位置を動いている。袖石は両袖部中央に置かれ、芯の機能をもつと考えられる。燃焼部には支脚が検出されているが、やや左に偏して埋設される。煙道部は燃焼部が急角度で立ち上がった後ゆるやかな傾斜をなす。左右袖部はその長さが若干異なり、右袖の長さ約80cm、左袖はやや短かく約65cmを測る。焚口部幅約50cm、燃焼部

幅約70cm、焚口から燃焼部までの奥行約1.2m。煙道部の長さ約60cmを測る。出土遺物は少なく散在している。

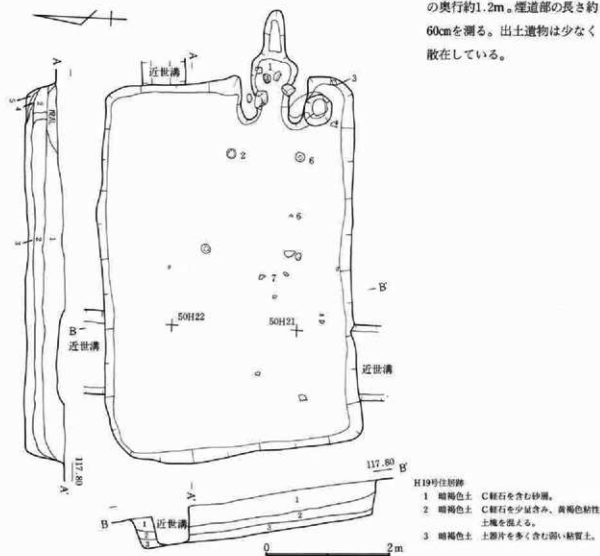
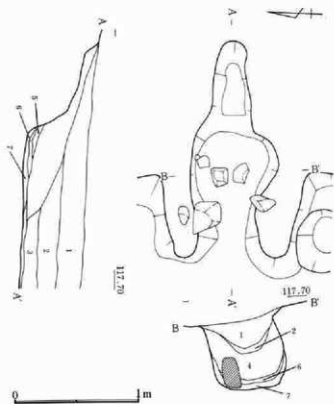


Fig.313 H19号住居跡

第4章 H区の遺構と遺物



- H19号住居跡地
- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂層。
  - 2 暗褐色土 C軽石を少量含み、黄褐色粘性塊を混える。
  - 3 暗褐色土
  - 4 地土 花綱跡。
  - 5 黑色灰層
  - 6 黑色灰層
  - 7 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

Fig.314 H19号住居跡地

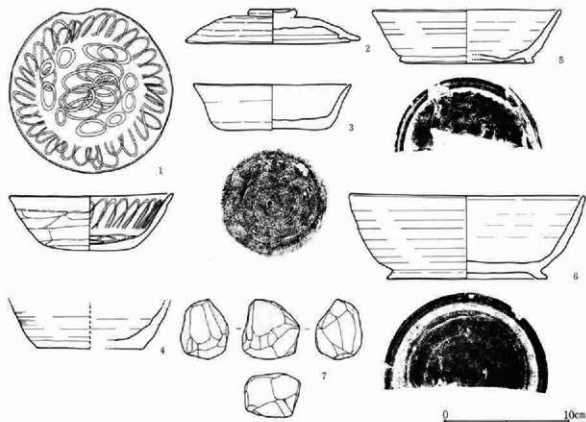


Fig.315 H19号住居跡出土遺物

H19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
315-1 110-1	土師器 杯	口～底 底	13.1 × 7.0 × 4.3	竈内床面	紐造巻上か。口縁部強い態で。体部横、 底部不定方向旋削り。内面及び見込部、 螺旋状彫文。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
315-2 110-2	須恵器 蓋	横～端 底	14.0 × 横3.9 × 2.8	竈内床面	轆轤。右回転。頂部2段回転削り。横 横削で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
315-3 110-3	須恵器 杯	口～底 底	12.7 × 8.0 × 3.7	南東部床 面	轆轤。右回転。腰～底部回転削り。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③細砂混る 粗
315-4 110-4	須恵器 壺	下～底 底	— × 8.6 × 3.3	埋土	轆轤。右回転。腰部削で。底部不定方向 旋削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
315-5 110-5	須恵器 椀	口～底 底	15.2 × 10.3 × 4.2	埋土	轆轤。右回転。底縁部回転削り。付高 台横削で。底中央手持部削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
315-6 110-6	須恵器 大型椀	口～底 底	18.9 × 12.8 × 6.6	竈内・南 西部床面	轆轤。右回転。底部回転削り。付高台 横削で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
315-7 110-7	石製品 砥		縦4.8 横4.4 厚3.5	中央部床 面	円盤のほぼ全面使用。砥紙。	角閃石、安山岩

H20号住居跡 (Fig. 316～318・PL. 110, 111)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.20 × 4.35	N—71°—E	東壁ほぼ中央	

H区の西部やや南寄りに位置し、57～60H16～19の範囲にある。住居跡の西側の一部は調査区域外に延び  
未検出であるが南西隅はかろうじてその様相を知ることができる。各壁の長さには差がなく、比較的整った  
正方形に近い形態が考えられる。壁高は遺存が良好で約50cmを測り垂直に立ち上がる。未検出の両壁を除き  
各壁下には溝が跡切れることなく巡る。溝幅8～16cm、深さ約5cmを測る。床面は平坦をなしく踏みしまっ  
ている。柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の3箇所が確認されている。4本柱が想定されるが、北西寄りに位置すると考えられ  
るものは調査区域外に入り不明である。各柱穴はいずれも上面形は方形の平面形態をとるようである。P<sub>1</sub>は  
上面径46×45cm深さ64cm、P<sub>2</sub>は上面径40×33cm深さ63cm、P<sub>3</sub>は上面径35×25cm、深さ58cmを測る。またP<sub>1</sub>と  
P<sub>3</sub>の柱間は2.74m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>のそれは2.44mを有する。竈は東壁を楕円形に掘り込み、長い煙道部と短かく住  
居内に張り出す袖部を作り出す。袖部には補強材などは検出されていないが、電掘形では左袖の先端部に  
補強材を埋設したと考えられる窪みが認められた。燃焼部幅約65cm、奥行約90cm、煙道部長さ約70cmを測る。  
出土遺物は少なく散在している。

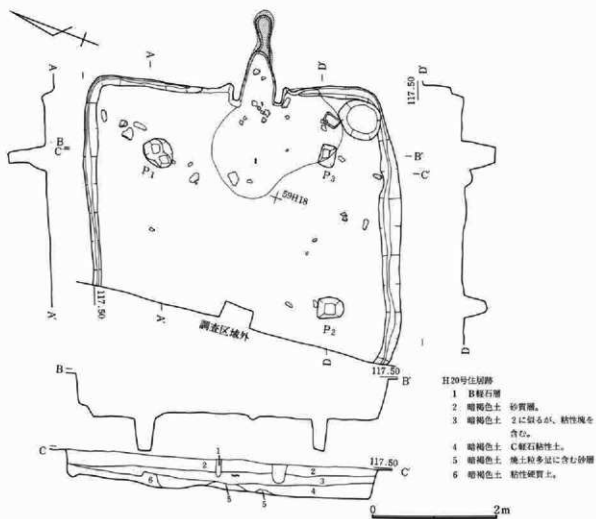


Fig.316 H20号住居跡

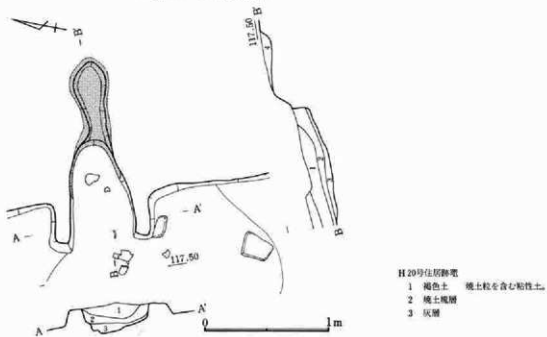


Fig.317 H20号住居跡竈

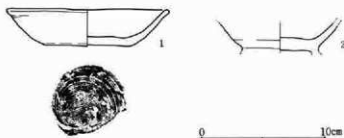


Fig.318 H20号住居跡出土遺物

## H20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存壁	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
318-1 111-1	酒器 杯	口～底 片	13.0 × 7.0 × 2.9	埋土	轆轤。右側転永切り。無調整。	①加齢化還元・良好 ②灰黄 ③緻密
318-2 111-2	酒器 杯	口縁・ 高台穴 損	— × ( 6.0 ) × ( 2.2 )	埋土	轆轤。右回転。付高台～底部損壊で。	①加齢化還元・良好 ②によい黄橙 ③緻密

## H21号住居跡 (Fig. 319～321・PL. 111, 112)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	7.68 × 5.23	N-80.5°-E	東壁やや南寄り	

H区の西部やや南寄りに位置し、56～59H11～14の範囲にある。平面形は南北に長軸をもつ整った長方形を呈し、当区では大型の堅穴住居に属する。この住居跡は調査が2次に渡ってなされている。最初の調査では電が2基並列で検出され、さらに調査範囲がごく限られていたため重複した住居跡であると認定されていた。その後の調査で全様が検出されるに到り、2基の電のうち小規模なものは住居跡の拡張あるいは建替によって消失してしまった前段階のものと考えられる。この拡張あるいは建替が行われた根拠として、上述した電の残物がその事実を窺わせるだけで、住居跡内現象としては他にそれを示すものはない。住居跡自体の遺存は良好で壁高は約37cmを測り垂直に立ち上がる。各壁下には跡切れることなく溝が走り、西壁から北壁については溝中に数個の小穴が穿たれる。溝の幅は約10cm、深さ6～8cmを測る。床面は凹凸も少なく平坦をなすが総じて軟弱で踏みしまりがたい。電は前述したように2基検出されているが、いずれも東壁に並列して付設される。電Aは、住居跡の規模からすれば非常に貧弱な作りである。東壁をわずかに突出させた形で、袖部・煙道部などの作り出しもみられない。また、焼土・灰などの残留物も少なく長期間の使用は考えられない。燃焼部幅約55cm、奥行約40cmを測る。電BはAよりもさらに小型化しており、当住居跡の建替えあるいは拡張の際、その先端部がかろうじて遺存しているのではないかと考えられる。焼土や灰は痕跡程度を観察できたのみである。幅約25cm、奥行約25cmを測る。出土遺物は極めて少ない。

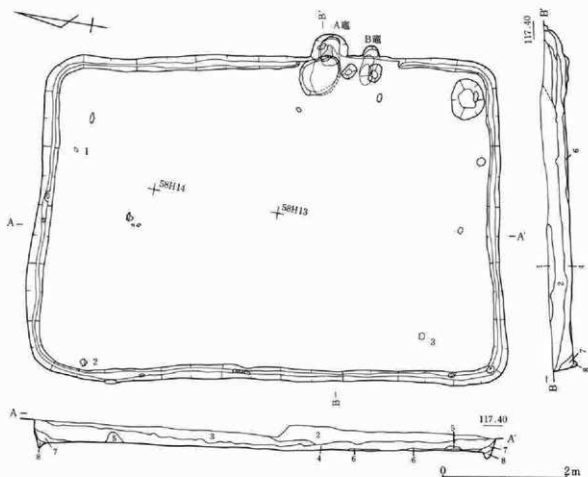


Fig.319 H21号住居跡

H21号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石細粒を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石粒を多量に含み、やや粘性あり
- 3 暗褐色土 2の同質異層。
- 4 黒褐色土 大粒のC軽石粒・炭化粒を含む砂質。
- 5 黒褐色土 堅く締る。
- 6 暗褐色土 C軽石粒・炭化粒を含む。
- 7 黒色土 炭化粒を含む軟質土。
- 8 暗褐色土 炭化粒・C軽石粒・Loam粒を含む、厚薄不均土。

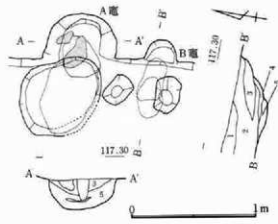


Fig.320 H21号住居跡

H21号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒・焼土粒を多量に含み、FPを少量深える。
- 2 暗褐色土 1層に比べ、C軽石・FPを余り含み、やや粘性がある。崩落地土を多く含む。
- 3 暗褐色土 崩落地土を多く含む。
- 4 暗褐色土 C軽石・FP・崩落土を少量含み、よく締る。
- 5 暗褐色土 C軽石・FP・Loam塊を多く含む。

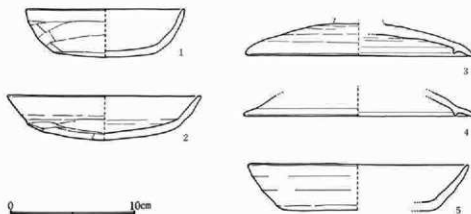


Fig.321 H21号住居跡出土遺物

## H21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
321-1 112-1	土師器 杯	口～底 片	12.7 × 8.2 × 3.8	北東部埋 土	指押か。口縁部及び内面無。体部及び 底部横方向、幅広置削り。	①酸化・良好 ②に よい粒 ③緻密
321-2 112-2	土師器 杯	口～底 片	15.6 × — × 3.5	北西部床 面	指押か。口縁部及び内面、強い無。体 底部不定方向置削り。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
321-3 112-3	須恵器 蓋	頂～端 小片	18.2 × — × (2.5)	南西部床 面	横縁。右回転。頂部広範囲に回転置削り。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
321-4 112-4	須恵器 蓋	端 小片	18.4 × — × (1.9)	埋土	横縁。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
321-5 112-5	須恵器 大型杯	口～底 小片	17.6 × 12.0 × 3.7	埋土	横縁。右回転。腰～底部回転置削り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る

## H22号住居跡 (Fig. 322～325・PL. 112、113)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.43 × 2.85	N-77-E	東壁やや南寄り	

H区の南部に位置し、44～46H12・13の範囲にある。平面形態は東西に長軸をもつ長方形を呈する。壁高は約30cmを測り直線的に立ち上がる。壁下の溝は不連続に巡り、東壁から北壁下にかけてのものと、南壁から西壁にかけてのものがある。南壁から西壁にかけての溝は南側で不規則に広がる窪みに接する。溝の幅は10～12cm、深さ4～6cmを測る。床面はほぼ平坦で全体に固く踏みしめる。竈は東壁を方形ぎみに掘り込み長い煙道部を作り出す。袖部についてはとくにそれを意識させるような施設は検出されていない。焼焼部奥左に片寄って円筒形の川原石が埋設されている。埋設位置に片寄りがあるため、支脚材か否かの認定はでき

第4章 H区の遺構と遺物

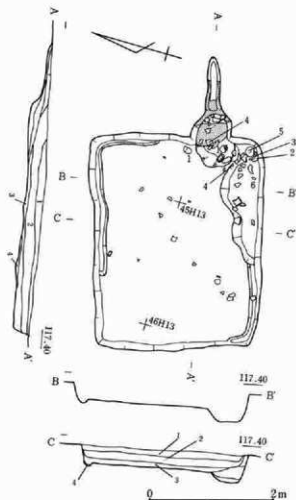


Fig.322 H22号住居跡

ない。燃焼部からゆるい傾斜をもって煙道部へ立ち上がるが煙道部は長く水平に延びる。電燃焼部幅約60cm、奥行約50cm、煙道部幅約25cm、長さ80cmを測る。出土遺物は室内及び竈の右側に集中して検出されている。

H22号住居跡

- 1 茶褐色土 C軽石を多く含み、やや砂っぽい。
- 2 茶褐色土 C軽石・炭化粒・焼土粒を多量に含む。
- 3 茶褐色土 C軽石を部分的に含む砂質土。
- 4 茶褐色土 3に比べC軽石少なく、粘性がある。

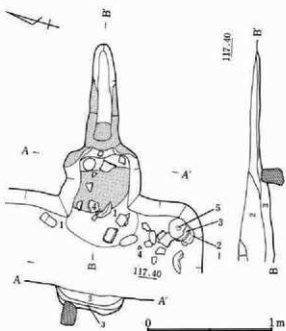


Fig.323 H22号住居跡竈

H22号住居跡竈

- 1 茶褐色土 C軽石を多く含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を多く含み、焼土粒を少量混入する。
- 3 暗褐色土 1に比べC軽石少なく、やや粘性がある。

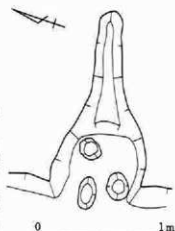


Fig.324 H22号住居跡竈断面



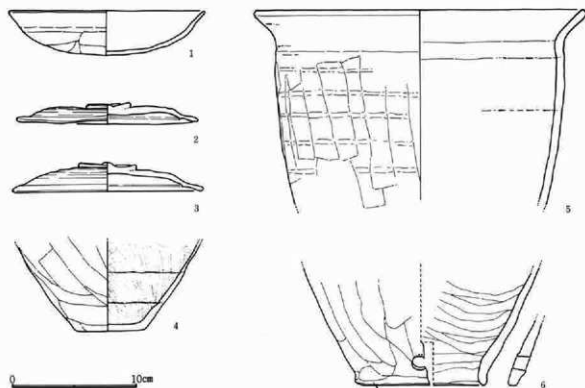


Fig.325 H22号住居跡出土遺物

H22号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
325-1 113-1	土器 杯	口～底 完	15.8 × — × 3.5	竈内床面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向篋削り。	①酸化・良 ②明褐色 ③細砂混る
325-2 113-2	須恵器 蓋	柄～端 完	14.6 × 柄3.5 × 1.7	貯蔵穴床 面	轆轤。右回転。頂部1段回転篋削り。横 横無で。歪み顯著。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
325-3 113-3	須恵器 蓋	柄～端 完	15.4 × 柄4.6 × 2.3	貯蔵穴床 面	轆轤。右回転。頂部2段回転篋削り。横 横無で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
325-4 113-4	土器 甕	底	— × 5.2 × ( 7.0)	貯蔵穴床 面	紐造。体部下位斜方向。底部不定方向篋 削り。内面斜方向篋無で。	①酸化・良好 ②に よい色 ③細砂混る
325-5 113-5	土器 甕	口～中 片	26.1 × — × (15.5)	竈内床面 竈内埋土	紐造。口頸部無で。体部上～中位縦方向 篋削り。内面横方向篋無で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
325-6 113-6	土器 甕	下～底 片	— × 10.6 × ( 9.3)	貯蔵穴埋 土	紐造。体部下位縦方向篋削り。内面横方 向の強い篋で。両面穿孔。	①酸化・良好 ②に よい黄 ③細砂混る

H23号住居跡 (Fig. 326~330・PL. 113~115)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	地 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × 3.13	N-76°-E	東壁やや南寄り	円形 70 × 68 × 10

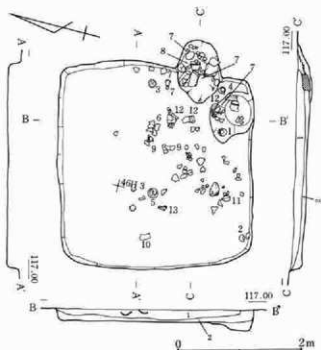


Fig.326 H23号住居跡

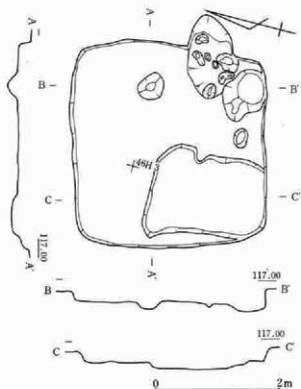


Fig.328 H23号住居跡断面形

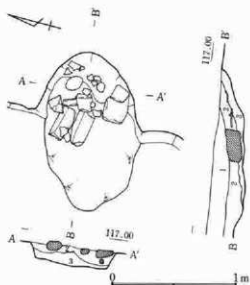


Fig.327 H23号住居跡縦

H23号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含み、硬土粒を少量混入する。
- 2 暗褐色土 1に比べC軽石は少なくやや粘性がある。

H23号住居跡縦

- 1 暗褐色土 C軽石を多く含み、硬土粒を少量混入する。
- 2 暗褐色土 1に比べC軽石は少なく、やや粘性がある。

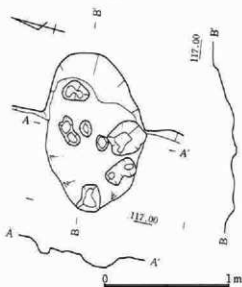


Fig.329 H23号住居跡縦断面形

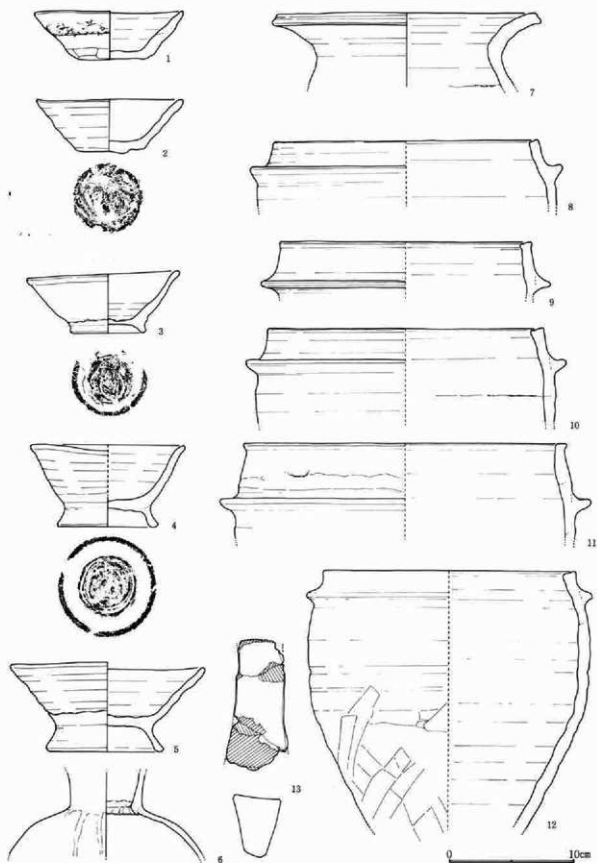


Fig.330 H23号住居跡出土遺物

#### 第4章 H区の遺構と遺物

H区の南端やや東寄りに位置し、44～46H 2・3の範囲にある。北側に接して28号住居跡と、また南半は29号住居跡と各々重複している。新旧関係はこの両者より新しい時期の所産である。壁高は約20cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面はほぼ平坦をなすが、南半はやや軟弱である。竈は東壁を楕円形に掘り込む。袖部及び煙道部の作り出しはないが、竈内には構築材と考えられる凝灰岩の加工材が散乱しており、本来袖部などの構築がなされていたと考えられる。掘形面の調査では不規則な小穴が多く検出されたが、竈材の明瞭な埋設状況を窺うことはできなかった。竈燃焼部幅約80cm、奥行約65cmを測る。出土遺物は多く、竈内や貯蔵穴内及び南半に多く検出されているが、散在している。

H23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
330-1 114-1	土師器 杯	口～底 完	12.0 × 5.6 × 3.8	北東部床 面	紐造巻上。口縁部及び内面無で。体部横 方向、底部不定方向彫削り。	①酸化・良好 ②横 ③細砂混る
330-2 114-2	須恵器 杯	口～底 %	11.7 × 5.4 × 4.1	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰 ③細砂混る
330-3 114-3	須恵器 碗	口～底 %	12.3 × 6.1 × 4.5	北部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横割で。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③細砂混る
330-4 114-4	須恵器 碗	口～底 %	12.4 × 8.1 × 6.5	北東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横割で。口 縁部一部歪む。	①還元・やや低温 ② 灰 ③細砂混る
330-5 114-5	須恵器 碗	口～底 完	15.6 × 9.4 × 6.9	南部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横割で。口 縁部一部歪む。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③細砂混る
330-6 114-6	灰釉陶器 壺	頸～上 %	— × — × (6.5)	北部埋土	轆轤。右回転。胴体部接合部無で。施釉 頸部の一部のみ。横枝窯産か。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
330-7 114-7	須恵器 甕	口～上 %	— × 21.5 × (5.9)	北東部床 面埋土	紐造。横割で。	①還元・低温 ②明オ リーブ灰 ③細砂混る
330-8 115-8	— 羽蓋	口～上 %	21.2 × — × (5.2)	中央部埋 土	紐造。横割で。	①加酸化還元・良好 ②オリーブ黒 ③細砂 混る
330-9 115-9	— 羽蓋	口～上 小片	20.2 × — × (4.2)	竈内床面	紐造。横割で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
330-10 115-10	— 羽蓋	口～上 %	22.0 × — × (7.5)	南部床面	紐造。横割で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
330-11 115-11	— 羽蓋	口～上 小片	26.0 × — × (7.6)	南東部床 面	紐造。横割で。	①加酸化還元・良 ②灰白 ③細砂混る
330-12 115-12	— 羽蓋	口～下 %	20.0 × — × (20.4)	北東部埋 土	紐造。横割で。体部下位斜方向彫削り。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
330-13 115-13	石製品 砥石	両端部 欠損	長(10.3) 幅5.3 厚5.2 180.0g	南部床面	両面使用。加熱により破砕。仕上げ。	流紋岩(砥沢?)

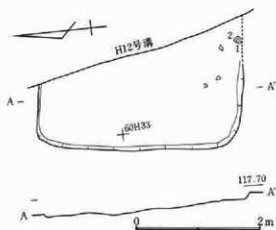


Fig.331 H24号住居跡

## H24号住居跡 (Fig. 331, 332・ PL 115)

H区の西部やや北寄りに位置し、59・60H32・33の範囲にある。東半は1号孤立柱建物跡を巡る12号溝と重複している。新旧関係は12号溝より新しい時期の所産であるが、確認が遅れ東半を消失してしまった。12号溝の掘り下げで竈の存在が認められたが詳細は不明である。竈の付設は東壁にあると考えられる。残存する西半での所見によれば、平面形態は方形を呈し、南北長は約3.25mを測る。壁高は低く約10cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面はやや凹凸があり軟弱である。出土遺物は少ない。

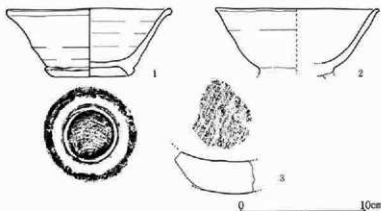


Fig.332 H24号住居跡出土遺物

## H24号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高			
332-1 115-1	深底器 椀	口～底 底完	13.2 × 7.2 × 5.4	南部床面	轆轤。右側糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②橙 ③細砂混る 粗
332-2 115-2	深底器 椀	口～体 底欠	13.2 × — × (5.4)	南部床面	轆轤。付高台横撫で。高台・底部欠損。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
332-3 115-3	瓦 平瓦	小片		厚2.5 床面	凹面布目、凹面は摩耗痕あり。	①酸化灰 ②赤褐色 ③砂混る

H25号住居跡 (Fig. 333~336・PL. 115, 116)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.50 × 3.03	N-51.5'-E	東壁やや南寄り	楕円形 90 × 60 × 12

H区の南端東寄りに位置し、42~44H 0・1の範囲にある。長軸は東西方向にあるがやや北壁が短かく不整な長方形平面を呈する。26号住居跡と重複しており、新旧関係は26号住居跡より新しい時期の所産である。壁高は約28cmを測り垂直ぎみに立ちあがる。北東隅の壁下と南壁から西壁にかけての壁下には溝が巡る。溝幅約10cm、深さ4~7cmを測る。床面中央には後世の土坑が掘られ住居跡床面下に達している。床面は平坦で比較的良好に遺存している。竈は東壁に掘り込まれ長い煙道部を作り出す。袖部には凝灰岩の加工材が両側に埋設されている他、焚口部には同質の石材が落ち込み天井部を形成していたと考えられる。支脚材は検出されていないが、掘形によれば燃焼部中央に径24cmほどの穴が検出されており支脚痕と推定される。煙道部は燃焼部からゆるく立ち上がり、さらに角度を減じて形成される。袖石の内法約40cm、燃焼部幅約50cm、奥行約60cm、煙道部長さ約65cmを測る。遺物は少量で若干検出されただけである。

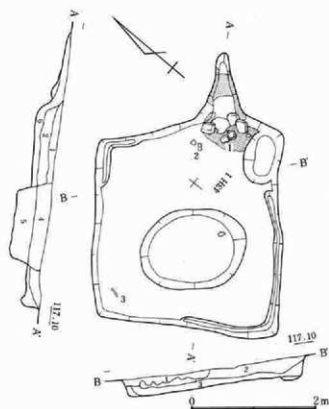


Fig.333 H25号住居跡

## H25号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石粒を多く含み、Loam塊をまばらに含む。
- 2 暗褐色土 1に比べC軽石は少なく黄褐色粘土を多量に含む。
- 3 暗褐色土 Loam塊・粘土塊を含む粘性土。
- 4 暗褐色土 B軽石を多く含み、C軽石を少量混入する砂質土。
- 5 暗褐色土 B軽石粒を多く含む砂土。
- 6 暗褐色土 黒灰・Loam塊・崩落粘土を含む粘性土。

## H25号住居跡電

- 1 崩落焼土層 C軽石を含む。
- 2 崩落焼土層 崩落焼土を含む。
- 3 黒灰 崩落焼土を含む。
- 4 茶褐色 粘性。

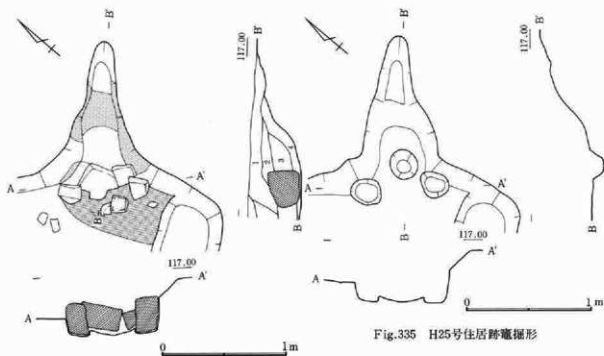


Fig.334 H25号住居跡電

Fig.335 H25号住居跡電掘形

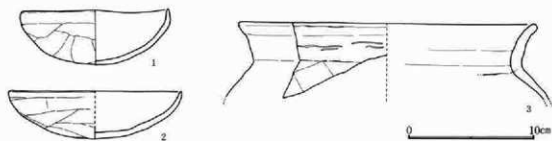


Fig.336 H25号住居跡出土遺物

H25号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
336-1 116-1	土器 器杯	口～底 片	12.0 × - × 4.3	竈内埋土	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③緻密
336-2 116-2	土器 器杯	口～底 片	13.8 × - × 3.8	竈内埋土	指押。口縁部及び内面。粗い面で。体底部不定方向旋削り。	①酸化・やや不良 ②にぶい橙 ③砂混る
336-3 116-3	土器 器小片	口～上	23.8 × - × (6.0)	西北部埋土	紐造。口頸部無で。体部上位斜方向旋削り。内面横方向旋削り。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H26号住居跡 (Fig. 337、338・PL. 116、117)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.45 × 2.45			

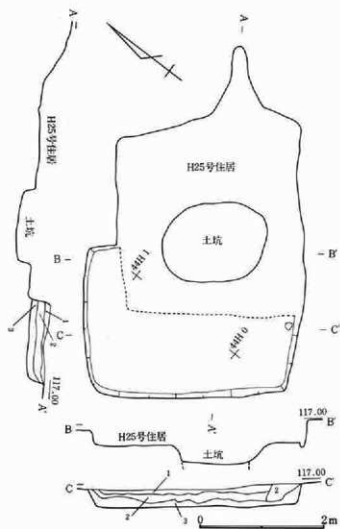


Fig. 337 H26号住居跡

H区の南端東寄りわずかにG区域にかかり、43・44G49・H0・1の範囲にある。東半で25号住居跡に重複している。新旧関係は25号住居跡より古い時期の所産である。東半はまったく消失しており、竈などの検出もない。壁高は約30cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。壁下の溝は検出されていない。床面の東半は25号住居跡によって削平されているが残存部分の観察によるかぎり、平坦をなし良好な遺存状態を呈する。出土遺物は微量である。

H26号住居跡

- 1 環埴色土 C軽石を多く含む、崩落粘土・黒灰をまばらに混える砂質土層。
- 2 環埴色土 1に比べC軽石は少なく、FA塊(2～3mm)をまばらに混える砂質土層。
- 3 環埴色土 FA塊(2～5mm)を多く含む。

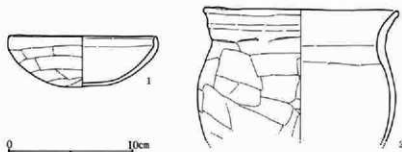


Fig. 338 H26号住居跡出土遺物



H26号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
338-1 117-1	土師器 杯	口～底 1/2	11.8 × — × 4.0	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向、 底部不定方向歪削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
338-2 117-2	土師器 壺	口～中 1/4	15.6 × — × (10.7)	埋土	紐造。口頸部無で。体部横方向歪削り。 内面横方向歪削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る

H27号住居跡 (Fig. 339~342・PL. 117, 118)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.20 × 3.70	N—77°—E	東壁やや南寄り	

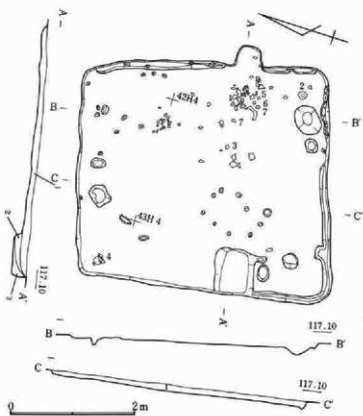


Fig.339 H27号住居跡

## H27号住居跡

- 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含み糊くしまった層。
- 暗褐色土 C軽石を少量含み、黒灰・崩落焼土を多く混える。
- 暗褐色土

## H27号住居跡電照形

- 暗褐色土 C軽石を少量含み、黒灰・崩落焼土粒を多く混える。
- 暗褐色土 C軽石黄赤褐色を含む砂質土層。

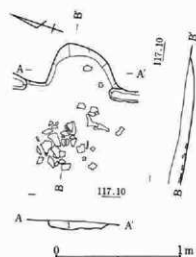


Fig.340 H27号住居跡電

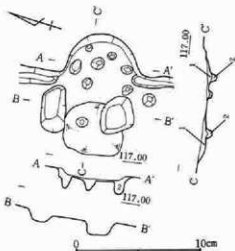


Fig.341 H27号住居跡電掘形

第4章 H区の遺構と遺物

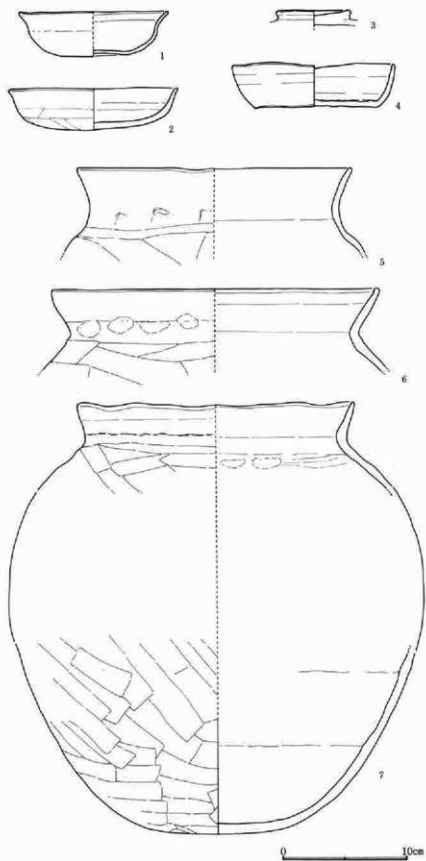


Fig.342 H27号住居跡出土遺物

H区の南端東寄りに位置し、41～43H 2～4の範囲にある。後世の削平が及んでいるためか壁の遺存はわずかである。壁高は約8cmを測る。南壁と東壁の一部に壁下の溝が廻り溝内には不規則な小穴が穿たれる。溝幅は8～14cm、深さ2～6cmを測る。床面は凝灰岩質層を地床にするため硬く平坦をなすが、中央部から西南部及び東壁・北壁に沿って大小の穴が多く検出されている。それらの関係からは規則性を見出す事はできない。竈は東壁を小さく楕円形に掘り込むが、袖部・煙道部などの作り出しはない。掘形によれば左右両袖部に相当する箇所に袖材を埋設したと考えられる痕跡が検出されている。また燃焼部縁辺及び中央部には径10cm内外の小穴が観察され、支脚や補強材の存在が想定される。竈の掘形から窺われる規模は、袖部内法約27cm、燃焼部幅約50cm、奥行約75cmを測る。住居跡南東寄りに径50×40cm、深さ10cmの楕円形を呈する穴が検出されているが、その位置や深さから貯蔵穴として断定は出来ない。出土遺物は竈前部及び住居跡東半に検出されているが散在的な様相である。

H27号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存寸	計測値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	底径	器高			
342-1 117-1	土師器 杯	口～底 片	12.0	6.5	3.5	埋土	指押。口縁部～体部。内面撫で。底部無調整。	①酸化・良 ②に白い ③細砂混る
342-2 117-2	土師器 杯	口～底 完	13.5	10.8	3.2	南東部床 面	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向削削り。	①酸化・良好 ②に白 い焼 ③細砂混る
342-3 117-3	須恵器 蓋	横	—	×横6.0	×(1.2)	中央部床 面	轆轤。右回転。横横撫で。	①還元・良好 ②灰 白・黒地顯著 ③緻密
342-4 117-4	須恵器 杯	口～底 片	13.0	9.9	3.5	北西部埋 土	轆轤。右回転削削り。無調整。口縁部面み顯著。灰被り。	①還元・高温 ②灰 ③細砂混る
342-5 118-5	土師器 葉	口～上 小片	22.0	—	×(7.6)	埋土	紐造。口頸部強い撫で。体部斜方向削削り。内面横方向削削り。	①酸化・良好 ②粗 ③緻密
342-6 118-6	土師器 葉	口～上 片	26.4	—	×(7.8)	埋土	紐造。口頸部撫で。体部横方向削削り。内面撫でか。	①酸化・良 ②明赤褐 ③細砂混る
342-7 118-7	土師器 葉	口～底 片	22.2	—	×33.9	北東部床 面	紐造。口頸部撫で。体部上位横・中位斜・下位～底部横方向削削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②に白 い焼 ③細砂混る

H28号住居跡 (Fig. 343～346・PL. 118)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	1.80×1.80 張り出し部1.83×1.75	N-69・5°-E	東壁やや南寄り	円形 57 × 50 × 16

H区の南端東寄りに位置し、44～46H 4・5の範囲にある。その西南部でわずかに23号住居跡と重複しているが、これより古い時期の所産である。平面形態は北東部が北へ突出するいわゆる張り出し部を有する住居跡である。張り出し部は東西1.84m、南北1.26mを測る。壁高は約20cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床

第4章 H区の遺構と遺物

面は平坦で比較的良好よく踏みしめるがとくに南半は良好な状況を示す。壁下の溝などの施設は検出されない。覆は東壁を楕円形に掘り込み短い煙道部が作り出される。両袖部には凝灰岩の加工材が埋設されている。袖石内法は約46cm、燃焼部は焚口部とほぼ同じ幅をもつ。燃焼部奥行は約55cm、煙道部は短かく約20cmを測る。遺物は少なく甕周辺部に検出されている。

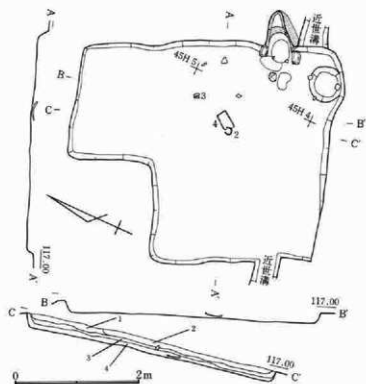


Fig.343 H28号住居跡

H28号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含み、崩落  
焼土を混える。
- 2 暗褐色土 1に比べC軽石はやや大粒
- 3 暗褐色土 1・2に比べC軽石少量。
- 4 暗褐色土 C軽石を少量・崩落焼土塊  
黒灰を多量に混える。

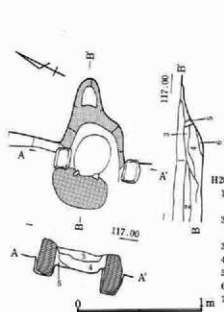


Fig.344 H28号住居跡竈

H28号住居跡竈断面図

- 1 暗褐色土 焼土粒混り

H28号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を少量・崩落焼土塊  
黒灰を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1に比べC軽石は少なく、  
黄褐色土塊をまばらに含む
- 3 暗褐色土 焼土塊。
- 4 暗褐色土 焼土粒多い。
- 5 暗褐色土 粘性。
- 6 暗褐色土 灰を含み、硬りなし。
- 7 暗褐色土 C軽石を少量含み、硬りが  
ある粘性。

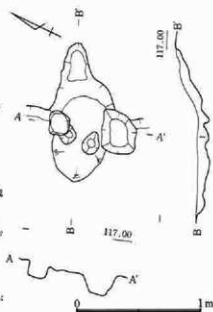


Fig.345 H28号住居跡竈断面図

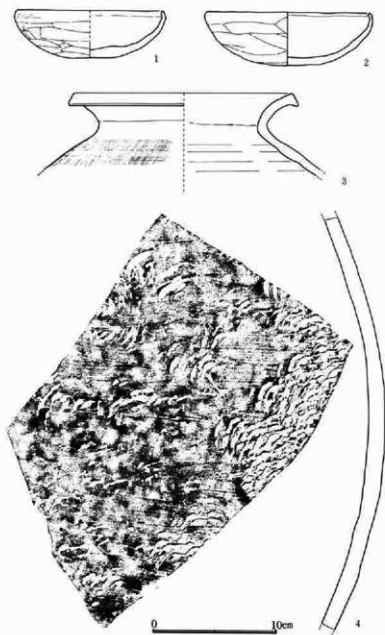


Fig.346 H28号住居跡出土遺物

H28号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
346-1 118-1	土器 杯	口～底 片	12.2 × 3.0 × 3.8	貯蔵穴	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向荒削り。口唇部内湾。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
346-2 118-2	土器 杯	口～底 片	13.5 × 5.0 × 4.2	中央部床 面	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向荒削り。口唇部内湾。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③細砂混る
346-3 118-3	須恵器 壺	口～上 片	17.6 × — × (6.5)	中央部床 面	組造。口頸部横撫で。体部叩打。体部灰 被り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
346-4 118-4	須恵器 大甕	体 小片		中央部床 面	組造。叩打後、撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

H29号住居跡 (Fig. 347~349・PL. 119)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	座 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.68 × 3.63	N-75°-E	東壁やや南寄り	

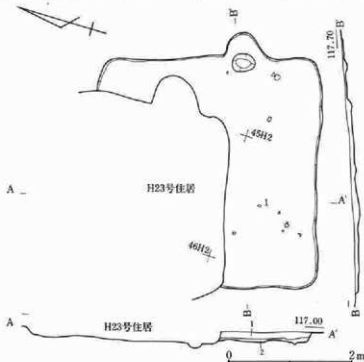


Fig.347 H29号住居跡



Fig.348 H29号住居跡掘形

H区の南端東寄りに位置し、44~46H 1~3の範囲にある。23号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。北半は23号住居跡によって消失しており、北壁及び西壁の一部あるいは北西部床面の詳細は不明である。また全体に削平が及んでいるためか遺存は極めて不良である。壁高は6~8cmを測り、壁下の溝・貯蔵穴などは検出されていない。床面はかなり凹凸がみられるが凝灰岩層を地床にしており固くしまる。電は東壁を半円形に掘り込むが上述したごとく削平が著しくほとんど痕跡を知るにとどまる。掘形によっても袖部等の存在は確認出来なかった。電燃境部幅約70cm、奥行約40cmを測る。遺物は少なく微量の出土である。

H 29号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含み細りあり。
- 2 床面。

H 29号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 C軽石を少量含み細りあり。
- 2 暗褐色土 堅く締る。
- 3 暗褐色土 粗粒C軽石を多量に含む。
- 4 褐色土粘性あり。
- 5 暗褐色土 C軽石を含み粘性あり。
- 6 灰褐色土 砂質。
- 7 暗褐色土 C軽石を含む。
- 8 黄褐色土 C軽石を含む。
- 9 暗褐色土 黄褐色土塊を含む。

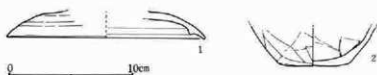


Fig.349 H29号住居跡出土遺物

## H29号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	部 器	種 形	部 位	計 測 値 (cm)	出 土 位 置	器 形・成 形及び調 整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
349-1 119-1	須 蓋	器 形	頂 端 小 片	16.0 × — × ( 2.1)	南西部床 面	輪轆。右回転。頂部2段回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
349-2 119-2	土 師 器	器 形	底	— × 5.6 × ( 3.1)	南西部床 面	紐造。体部斜方向、底部不定方向削り。内面横方向変換で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る

## H30号住居跡 (Fig. 350~352・PL. 120)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.16 × 2.72	N- 4.5' - E	北壁ほぼ中央	円形 70 × 65 × 10

H区の中央部やや南東寄りに位置し、43~45H19・20の範囲にある。住居跡東側で31号住居跡と重複関係にあり、これよりも新しい時期の所産である。当区では数少ない北壁に竈を付設する形態をもつ住居跡の一つである。平面形は東西に長軸をもつ隅丸の長方形を呈すが東壁がややゆがみ不整形をなす。壁高は比較的

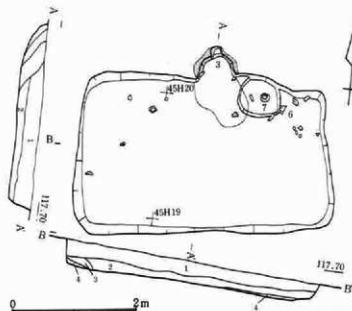


Fig.350 H30号住居跡

良好で約45cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面は中央がわずかに低くなるがほぼ平坦である。竈前面から南部にかけて固く踏みしめる。壁下の溝は検出されていない。竈は北壁中央部にあり半円形に掘り込み極めて短い部を設け煙道部を作り出す。袖部の検出はなく袖石等の構築材もない。竈燃焼部幅約60cm、奥行約40cm、煙道部長さ約22cmを測る。出土遺物は散在しており少量である。

## H30号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 1に似る褐色粘土塊を含む。
- 3 暗褐色土 強い粘性土。
- 4 暗褐色土 炭化灰を多量に含む砂質。

第4章 H区の遺構と遺物

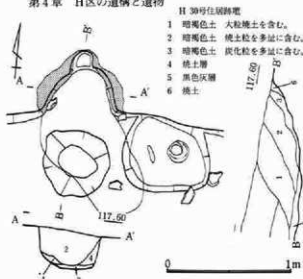


Fig.351 H30号住居跡竈

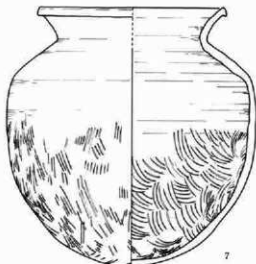


Fig.352 H30号住居跡出土遺物

H30号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存状況	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
352-1 120-1	土師器 杯	口~底 1/2	12.0 × — × 4.0	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向旋削り、器面荒れて不明瞭。	①酸化・良 ②橙 ③砂混る
352-2 120-2	土師器 杯	口~底 1/2	13.0 × — × (3.8)	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向旋削り。	①酸化・良 ②よい ③細砂混る
352-3 120-3	土師器 杯	口~体 1/2	14.8 × — × (3.0)	竈内	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向旋削り。	①酸化・良好 ②よい ③緻密
352-4 120-4	須恵器 杯	口~底 1/2	12.5 × 8.5 × 3.4	埋土	轆轤。右回転。底部回転旋削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
352-5 120-5	須恵器 柄 小片	底 小片	— × 14.0 × (1.6)	埋土	轆轤。右回転。高台~底部回転旋削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
352-6 120-6	土師器 甕	口~上 1/2	14.5 × — × (5.2)	貯蔵穴 石縁	紐造。口頸部撫で。体面上位横方向旋削り。内部横方向旋削り無し。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
352-7 120-7	須恵器 甕	口~底 1/2	14.8 × — × 20.8	貯蔵穴内	紐造。口頸部~体部上半、内外横撫で。下半~底部、平打。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
352-8 120-8	鉄製品	先~中	長(3.8) 幅0.5 厚0.4	埋土	先端扁平。身部は断面長方形。	



H31号住居跡 (Fig. 353~357・PL. 121, 122)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	2.90 × 2.62	ほぼ真北	北壁やや東寄り	

H区の中央部やや東寄りに位置し、42~44H19~21の範囲にある。南西部で30号住居跡と重複関係にあり、これより古い時期の所産である。30号住居跡と同様北壁に竈をもつ形態である。西壁から南壁にかけての一部は重複によって消失し不明である。壁高は約35cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。壁下の溝は検出されていない。床面はほぼ平坦をなし、竈前面一体はとくに固く踏みしる。貯蔵穴と考えられる穴は南東隅に設け

られている。竈は北壁を楕円形に掘り込み、極めて短かい煙道部が作り出される。また左右袖部には縦列に2箇の袖材が埋設されるが、左袖手前の袖材は長胴の要型土器を倒置した状態で埋設する。他は凝灰岩の加工材を用いてある。焼焼部奥寄りには同じ凝灰岩で多面加工を施した先細りの円柱形の支脚が埋設される。袖材内法及び焼焼部幅はほぼ同じで約45cm、奥行約70cm、煙道部長さ10cmを測る。出土遺物は竈内及びその周辺に多く検出された。

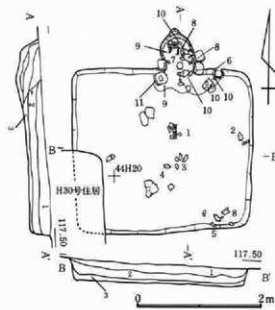


Fig.353 H30号住居跡

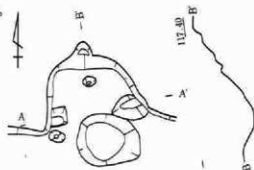
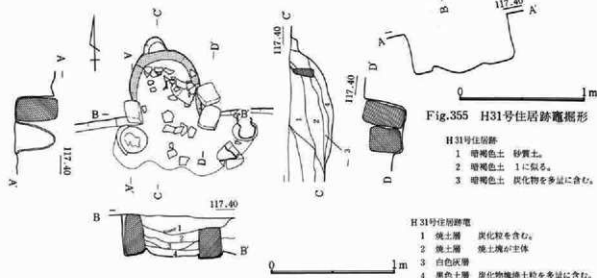


Fig.355 H31号住居跡竈掘形



## H31号住居跡

- 1 暗褐色土 砂質土。
- 2 暗褐色土 1に似る。
- 3 暗褐色土 炭化物を多量に含む。

## H31号住居跡竈

- 1 黄土層 炭化物を含む。
- 2 黄土層 焼土塊が主体
- 3 白色灰層
- 4 黒色土層 炭化物焼土粒を多量に含む。

Fig.354 H31号住居跡竈

第4章 H区の遺構と遺物

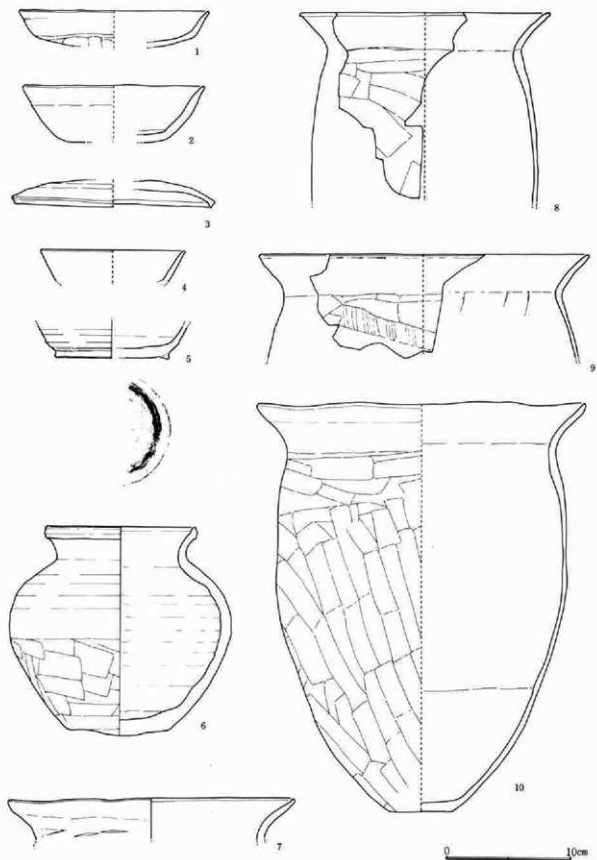
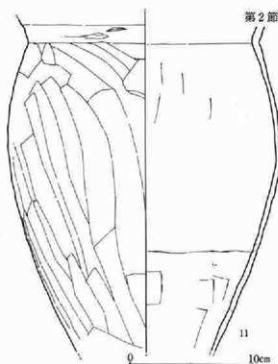


Fig356 H31号住居跡出土遺物(1)



H31号住居跡出土遺物観察表 Fig.357 H31号住居跡出土遺物(2)

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
356-1 121-1	土師器 杯	口~底 片	15.2 × 10.9 × ( 2.8)		中央部床 面	指押。口縁部~体部及び内面無で。底部 不定方向瓦割り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
356-2 121-2	土師器 杯	口~底 小片	14.6 × 7.3 × ( 4.7)		南壁下	紐造を上か。口縁部及び内面無で。体部 横方向、底部不定方向瓦割り、不明瞭。	①酸化・劣化顕著 ② 黄橙 ③緻密
356-3 121-3	須恵器 蓋	頂~端 片	16.2 × — × ( 2.2)		中央部埋 土	轆轤。右回転。頂部2段回転瓦割り。端 部歪み顕著。	①還元・やや低温 ② 灰 ③砂混る
356-4 121-4	須恵器 杯	口~体 片	11.6 × — × ( 2.5)		中央部埋 土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
356-5 121-5	須恵器 椀	体~底 片	— × 9.2 × ( 3.0)		南西部床 面	轆轤。右回転。腰~底部回転瓦割り。付 高台模造で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
356-6 122-6	須恵器 壺	口~底 片	12.0 × 8.0 × 16.6		南東部壁 ぎわ	紐造。体部下半横方向瓦割り後、口頸部 ~体部上半横無で。底部中央、突出。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
356-7 121-7	土師器 壺	口縁	22.9 × — × ( 3.2)		電内	紐造。口頸部無で。寛当頂あり。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
356-8 122-8	土師器 壺	口~中 小片	20.1 × — × (15.0)		電内	紐造。口頸部無で。体部上位横方向、中 位斜方向瓦割り。内面横方向瓦割り。	①酸化・良 ②によ い橙 ③細砂混る
356-9 122-9	土師器 壺	口~上 小片	26.4 × — × ( 8.2)		電内埋土	紐造。口頸部無で。体部上位横方向瓦割 り。内面横方向瓦割り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
356-10 122-10	土師器 壺	口~底 片	26.4 × 5.0 × 32.2		電内	紐造。口頸部無で。体部上位横方向、中 ~下位斜方向、底部不定方向瓦割り。内 面、軽い横方向瓦割り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
357-11 122-11	土師器 壺	頸~下 片	— × — × (27.0)		電左袖	紐造。頸部無で。体部斜~縦方向瓦割り。 内面横方向瓦割り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る

H32号住居跡 (Fig. 358~361・PL. 122, 123)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.30 × 3.45	N-96°-E	東壁ほぼ中央	

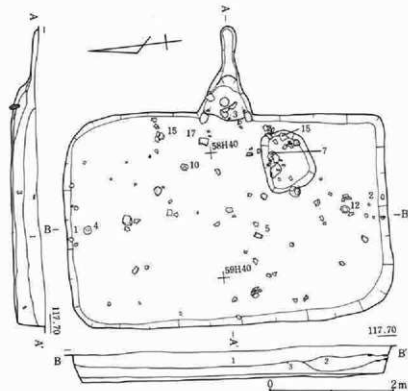


Fig.358 H32号住居跡

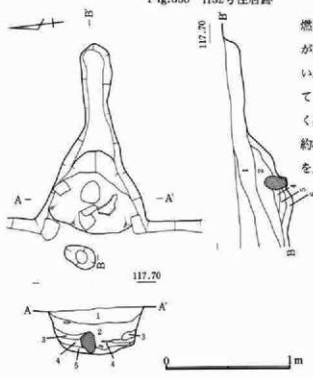


Fig.359 H32号住居跡竈

H区の北西寄りに位置し、57~59H38~41の範囲にある。1号掘立柱建物跡を巡る12号溝と重複しているが、これよりも新しい時期の所産である。南東隅を除き各隅は丸みをもつ隅丸の長方形を呈する。壁高は約38cmを測り直線的に立ち上がる。壁下の溝は検出できなかった。床面は平坦で全体に軟弱だが、竈前は比較的良好に踏み固められている。床面のほとんどは12号溝内に入るため黒褐色土を約5cmの厚さに敷きつめ床土としている。貯蔵穴と考えられる穴は竈右前に検出されている。竈は東壁を方形ぎみに掘り込んだ焼燃部から長い煙道部を作り出す。袖部は左袖に凝灰岩が埋設されていたが、右側のそれには検出されていない。焼燃部中央には丸い川原石が支脚として埋設されている。煙道部は深い焼燃部から立ち上がり水平に近く延びる。焼燃部幅約60cm、奥行約85cm、煙道部長さ約80cmを測る。遺物は比較的多量で散在的な出土状況を示す。

H32号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質層。
- 2 黒褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 砂質層。

H32号住居跡竈

- 1 暗褐色土 砂質層
- 2 暗褐色土
- 3 焼土 凝灰岩。
- 4 黒色灰層
- 5 焼土層
- 6 焼土層

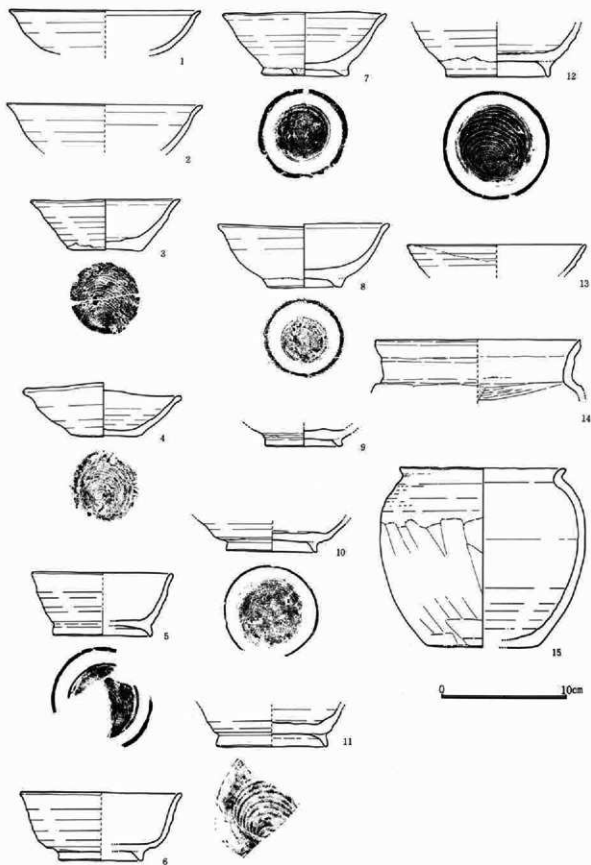


Fig.360 H32号住居跡出土遺物(1)

第4章 H区の遺構と遺物

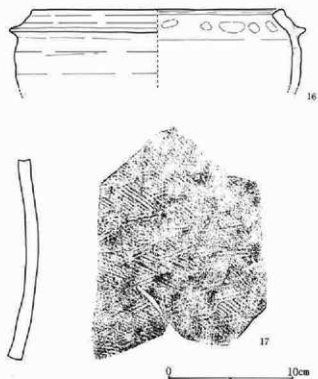


Fig.361 H32号住居跡出土遺物(2)

H32号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存状況	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 ④その他
360-1 123-1	内黒土器 椀	口～体 片	15.4 × — × (3.5)	北部床面	轆轤。右回転。内面黒色処理。	①酸化・良好 ②によ い黄橙 ③砂混る
360-2 123-2	須恵器 椀	口～体 小片	15.6 × — × (3.6)	南部床面	轆轤。右回転。	①還元・良好 軟質 ②灰 ③緻密
360-3 123-3	須恵器 杯	口～底 片	12.0 × 6.0 × 4.0	窠内床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③緻密
360-4 123-4	須恵器 杯	口～底 完	12.8 × 6.0 × 4.3	北部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部重 み顕著。	①加酸化還元・低温 ②によい橙 ③硬混る
360-5 123-5	須恵器 椀	口～底 片	11.6 × 8.0 × 5.0	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①加酸化還元・低温 ②によい橙 ③緻密
360-6 123-6	須恵器 椀	口～底 片	13.0 × 6.8 × 5.4	埋土	轆轤。右回転。付高台～底部横断で。	①還元・低温 ②明褐 灰 ③細砂混る
360-7 123-7	須恵器 椀	口～底 完	13.4 × 7.0 × 5.0	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。内 外吸炭部多し。	①加酸化還元・低温 ②灰黒 ③小砂混る
360-8 123-8	須恵器 椀	口～底 片	13.8 × 6.0 × 5.0	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。見込 部径6cm吸炭部。重焼痕少。	①加酸化還元・低温 ②によい黄橙 ③砂混 る

H32号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
360-9 123-9	須恵器 椀	底	— × 6.2 × (1.4)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。全面吸灰。	①還元・低温 ②灰黒 ③細砂混る
360-10 123-10	須恵器 椀	上半部 欠損	— × 7.4 × (2.6)	北東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好・堅緻 ②灰 ③緻密
360-11 123-11	須恵器 椀	体～底 欠	— × 8.8 × (3.0)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台別胎土、横撫で。	①還元・低温 ②灰白・高台は灰 ③緻密
360-12 123-12	須恵器 椀	上半部 欠損	— × 8.2 × (3.8)	北部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
360-13 123-13	灰釉陶器 椀	口～体 欠	14.4 × — × (2.2)	埋土	轆轤。右回転。口縁一部のみ施釉。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
360-14 123-14	土師器 甕	口～上 欠	16.2 × — × (4.8)	埋土	紐造。口頸部強い撫で。体部上位横方向 鹿削り。内面横方向鹿撫で。	①酸化・良好 ②に よい黄褐色 ③細砂混る
360-15 123-15	土師器 甕	口～底 欠	13.2 × 8.8 × 14.2	北東部床 面・貯蔵 穴内	紐造。口頸部～体部上位横撫で。体部中 位横方向、最下位横方向、底部不定方向 鹿削り。内面横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
361-16 123-16	— 羽釜	口～上 欠	20.0 × — × (6.2)	埋土	紐造。内外横撫で。	①酸化・高温 ②明赤 褐 ③砂混る
361-17 123-17	須恵器 大甕	体 小片		甕前面	紐造。叩打。内面撫で。	①加酸還元・良好 ②によい黄褐色 ③砂混 る

H34号住居跡 (Fig. 362～367・PL. 124、125)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.00 × 2.98	N—78°—E	東壁やや南寄り	

H区の中央部やや東寄りに位置し、44～46H21～23の範囲にある。平面形態は四隅がやや丸みをなし、南北に長軸をもつ隅丸の長方形を呈する。壁の遺存は比較的良好で、深さ約40cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床面は平坦をなし、全体に固く踏みしまっている。壁下の溝・貯蔵穴などの施設の検出はない。甕は東壁の南寄りに付設される。方形ぎみに掘り込まれた燃焼部から長めの煙道部が作り出される。袖部、あるいは袖石などの構築材の検出はされていない。燃焼部幅約70cm、奥行約80cm、煙道部長さ約50cmを測る。遺物はごく少量の出土があるのみである。

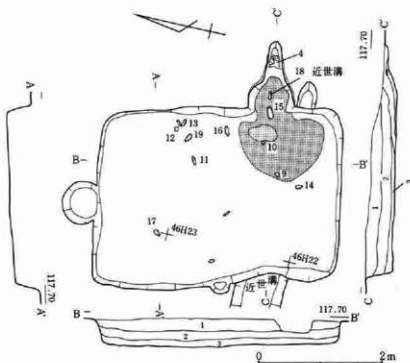


Fig.362 H34号住居跡

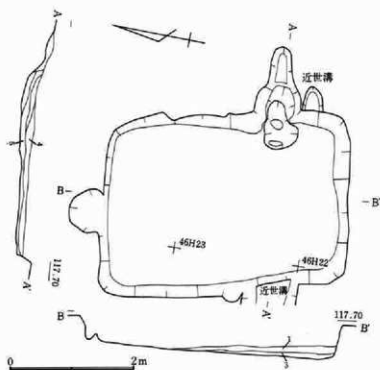


Fig.363 H34号住居跡掘形

H34号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質層。
- 2 暗褐色土 1に依る。
- 3 暗褐色土 2に依る。

H34号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 1に依る。
- 3 暗褐色土 2に依る。
- 4 暗褐色土 C軽石を含む。
- 5 焼土 焼土塊。

H34号住居跡堀

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質層。
- 2 焼土層
- 3 焼土層
- 4 灰層 焼土塊を含む。

H34号住居跡掘層形

- 1 黒白灰層
- 2 焼土塊層
- 3 暗褐色土 焼土粒層。
- 4 暗褐色土 焼土粒多量に含む。



第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

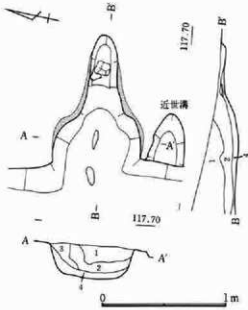


Fig.364 H34号住居跡竈

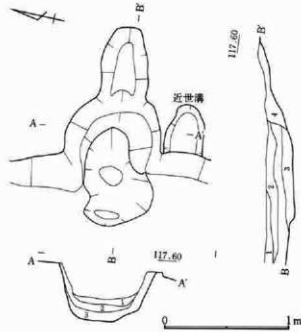


Fig.365 H34号住居跡竈掘形

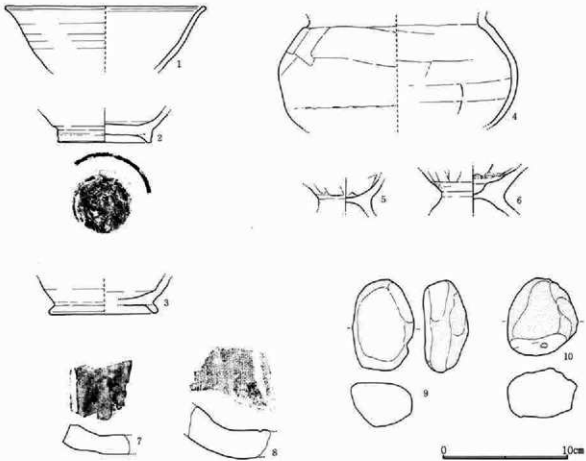


Fig.366 H34号住居跡出土遺物(1)

第4章 H区の遺構と遺物

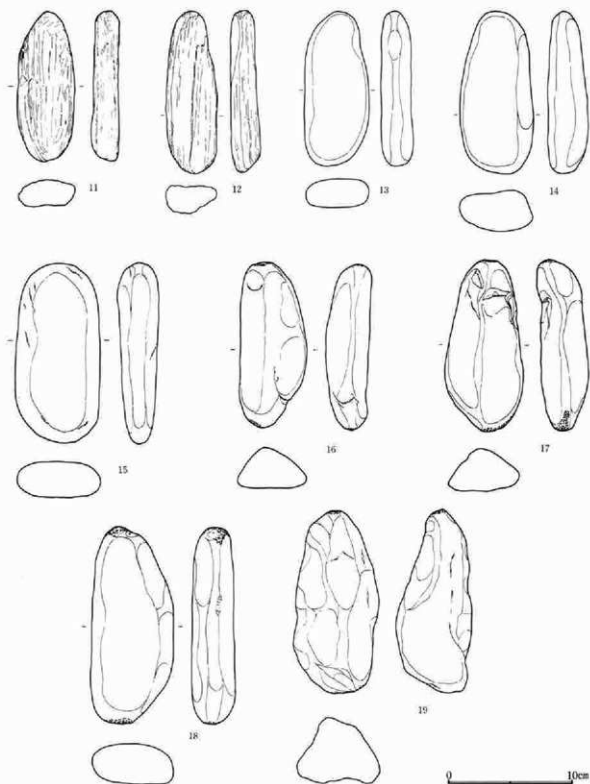


Fig.367 H34号住居跡出土遺物(2)

H34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 容高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
366-1 125-1	須 恵 器 椀	口~体 小片	16.0 × — × (5.0)	埋 土	縦軸、右回転。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
366-2 125-2	須 恵 器 椀	体~底	— × 7.4 × (2.5)	埋 土	縦軸、右回転糸切り。付高台横溝で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
366-3 125-3	須 恵 器 椀	体~底 片	— × 9.0 × (2.7)	埋 土	縦軸、右回転糸切り。付高台横溝で。	①加酸化還元・良好 ②灰黒 ③細砂混る
366-4 125-4	土 師 器 壺	頸~中 小片	— × — × (8.6)	竈内埋土	紐造。頸部強い溝で。体部上位横方向、 中位斜方向瓦用り。内面横方向瓦用り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
366-5 125-5	土 師 器 台付壺	底	— × — × (2.7)	埋 土	紐造。体部瓦用り後、接合部無で。内面 瓦用り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
366-6 125-6	土 師 器 台付壺	底	— × — × (3.5)	埋 土	紐造。体部瓦用り後、接合部無で。内面 瓦用り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
366-7 125-7	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚1.6	埋 土	桶巻叩打。上部布目直。下面無で。左側 端部2段面取り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
366-8 125-8	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚2.2	埋 土	桶巻叩打。上部布目直。下面無で。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
366-9 125-9	石 製 品 砥 石		長 7.2 幅 5.0 厚 3.5	南東部埋 土	円盤。2カ所使用。瓦砥。	角閃岩安山岩
366-10 125-10	石 製 品 砥 石		長 6.2 幅 5.6 厚 3.9	南東部埋 土	円盤。1カ所使用。瓦砥。	角閃岩安山岩
367-11 125-11	石 —	完	長12.0 幅 4.5 厚 2.0 173.2g	北東部埋 土	扁平棒状円盤。	雲母石英片岩
367-12 125-12	石 —	完	長12.8 幅 4.1 厚 2.5 164.0g	北東部床 面	扁平棒状円盤。	雲母石英片岩
367-13 125-13	石 —	完	長12.2 幅 5.3 厚 2.6 277.6g	北東部床 面	扁平棒状円盤。	輝石安山岩(粗粒)
367-14 125-14	石 —	完	長12.8 幅 5.9 厚 3.2 413.3g	南東部床 面	扁平棒状円盤。	燧石
367-15 125-15	石 —	完	長14.2 幅 6.7 厚 2.8 522.0g	竈内床面	扁平棒状円盤。	輝石安山岩(粗粒)
367-16 125-16	石 —	完	長13.1 幅 5.3 厚 3.2 390.4g	南東部床 面	棒状円盤。両端に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
367-17 125-17	石 叩 打 具	完	長13.6 幅 6.3 厚 3.3 380.1g	北西部埋 土	棒状円盤。両端に打撃痕。	砂岩
367-18 125-18	石 叩 打 具	完	長15.6 幅 6.6 厚 3.2 609.0g	竈内床面	扁平棒状円盤。両端及び側面に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
367-19 125-19	石 叩 打 具	完	長14.4 幅 6.6 厚 5.2 601.5g	北東部床 面	棒状円盤。両端にわずかな打撃痕。	溶結凝灰岩

H35号住居跡 (Fig. 368~371・PL. 126, 127)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	壙位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.30 × 3.15	N-15°-W	北壁やや東寄り	

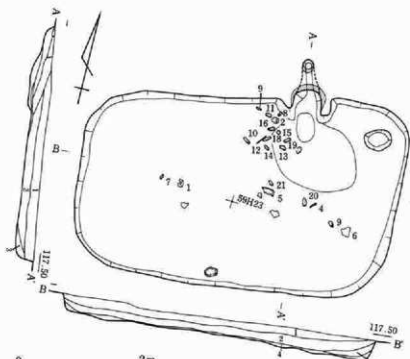


Fig.368 H35号住居跡

- H35号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石・焼土炭化粒を含む。
  - 2 暗褐色土 1に似る。
  - 3 暗褐色土 粘土塊を含む。
  - 4 暗褐色土 炭化粒を多量を含む。

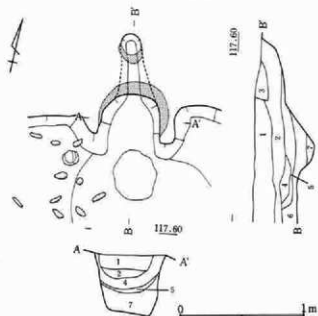


Fig.369 H35号住居跡壙

H35号住居跡壙

- 1 暗褐色土 焼土塊を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 3 暗褐色土 煙道の天井部。
- 4 焼土層
- 5 黒灰層
- 6 褐色土 粘性の強い層
- 7 褐色土 焼土粒を含み黄色穢を少量含む。

H区中央部西側に位置し、57~60H22~24の範囲にある。平面形態は、四隅の丸みが強く東西に長軸をもつ楕円形を思わせるような長方形を呈する。壁の遺存は比較的良好で約30cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。床面はほぼ平坦で比較的良く踏み固められている。壁下の溝は検出されていない。また壙の右側に30×40cm、深さ約20cmの小穴が検出されているが貯蔵穴かどうかは認定できなかった。壙は当既区で4例見出される北壁に付設されたものの1つである。住居跡内に作り出された袖部によって燃焼部は楕円形に形作られる。煙道部は天井部が遺存しており、その先端部には円形の煙出孔が検出されている。燃焼部と煙道部にはほとんど落差がなくゆるく続き、煙出の孔に至り急傾斜で立ち上がる。住居跡内に張り出す袖部長さ約40cm、燃焼部幅約50cm、奥行約50cm、煙道部長さ約50cm、煙出し孔径約15cmを各々測る。遺物は壙前面を中心に散在的に出土している。

## 第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

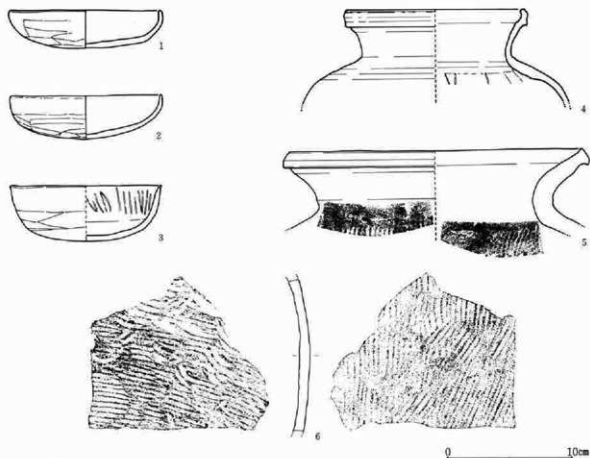


Fig.370 H35号住居跡出土遺物(1)

## H35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
370-1 126-1	土師器 杯	口~底 片	12.1 × — × 3.0		北西部床 面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向瓦削り。	①酸化・良 ②明赤褐 ③細砂混る
370-2 126-2	土師器 杯	口~底 片	12.0 × — × 3.5		北部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向、 底部不定方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
370-3 126-3	土師器 杯	口~底 片	12.2 × — × 4.4		床 下	指押か。口縁部横方向無で。体部横方向、 底部不定方向瓦削り。内面放射状喰文残 る。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
370-4 126-4	須恵器 壺	口~上 片	14.8 × — × (7.4)		北東部床 面	紐造。口頸部横撫で。体部叩打。内面 無で。	①還元・良好 ②褐灰 ③細砂混る
370-5 126-5	須恵器 壺	口~頸 片	23.4 × — × (6.8)		北東部床 面	紐造。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
370-6 126-6	須恵器 壺	体 小片			南東部床 面	紐造。叩打。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

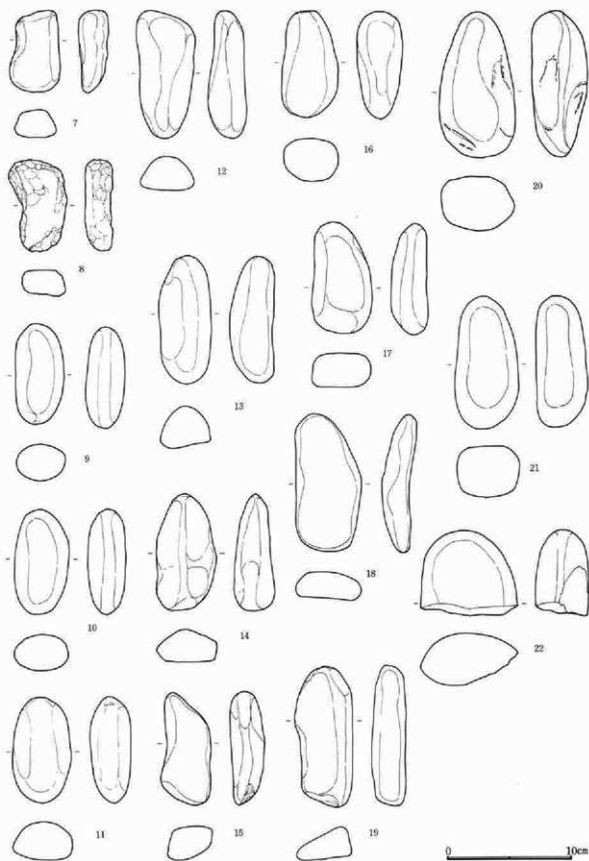


Fig.371 H35号住居跡出土遺物(2)

H35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	底径	器高			
371-7 127-7	石 一	完	長 6.5	幅 4.0	厚 2.4	北西部床面	扁平円盤。	ひん岩
371-8 127-8	石 一	完	長 7.3	幅 4.7	厚 2.2	北西部床面	扁平円盤。打撃調整痕。	流紋岩
371-9 127-9	石 一	完	長 8.0	幅 3.9	厚 3.1	南東部床面	円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
371-10 127-10	石 一	完	長 8.3	幅 4.3	厚 3.1	埋土	円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
371-11 127-11	石 一	完	長 8.4	幅 4.7	厚 3.3	南東部床面	円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
371-12 127-12	石 一	完	長10.2	幅 4.6	厚 3.1	南西部床面	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
371-13 127-13	石 一	完	長10.1	幅 4.2	厚 3.5	南東部床面	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
371-14 127-14	石 一	完	長 9.2	幅 4.9	厚 3.3	南西部床面	扁平棒状円盤。	ひん岩
371-15 127-15	石 一	完	長 8.9	幅 4.0	厚 2.8	中央部床面	扁平円盤。一端に打撃痕。	黒色頁岩
371-16 127-16	石 一	完	長 8.5	幅 4.6	厚 3.6	南西部床面	円盤。	石英閃緑岩
371-17 127-17	石 一	完	長 8.8	幅 4.9	厚 2.7	中央部床面	扁平円盤。	砂岩
371-18 127-18	石 一	完	長10.9	幅 5.3	厚 2.8	中央部床面	扁平円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
371-19 127-19	石 一	完	長10.2	幅 4.6	厚 3.7	中央部床面	扁平円盤。	砂岩
371-20 127-20	石 一	完	長11.5	幅 6.1	厚 4.5	南部床面	円盤。	輝緑岩
371-21 127-21	石 一	完	長10.5	幅 5.1	厚 4.0	中央部床面	円盤。	石英閃緑岩
371-22 127-22	石 一	片	長(6.7)	幅7.8	厚4.3 (304.3%)	埋土	扁平円盤。	石英閃緑岩

第4章 H区の遺構と遺物

H36号住居跡 (Fig. 372~374・PL. 127~129)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.10 × 3.00	N- 95° -E	東壁ほぼ中央	

H区の東側やや北寄りに位置し、40・41H35~37の範囲にある。長軸は南北方向にあり、四隅に若干の丸味をもつ長方形の平面形態を呈する。1号掘立柱建物跡を巡る13号溝と重複しているが、13号溝が完全に埋没した後の所産である。北壁が若干張り出しぎみになるが南北方向に長軸をもつ長方形の平面形態を呈する。壁は比較的遺存が良好で壁高約34cmを測り直線的に立ち上がる。床面は多少凹凸があるものの全体に踏みまじりが良い。貯蔵穴や壁下の溝などの施設は検出されていない。竈は東壁に付設されるが、多くの竈穴住居跡のものとは異なり東壁のほぼ中央に設けられるのを特長としている。燃焼部は壁を楕円形に掘り込み煙道部は見られない。両袖部には凝灰岩の加工材を埋設されるが、かなり風化現象が進んでいる。また燃焼部には南に偏って長楕円形の川原石が支脚として使用されている。袖石内法は約40cm、燃焼部奥行約50cmを測る。竈前面あるいは南側に竈の構築材と考えられる多量の川原石が散乱状態で検出されている。またこれらに混って土器類も多く出土している。

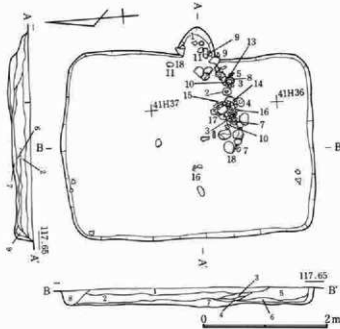


Fig.372 H36号住居跡

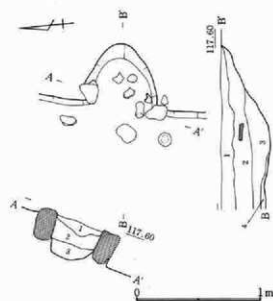


Fig.373 H36号住居跡竈

H36号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含み粘性強い。
- 3 暗褐色土 焼土粒・C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 灰化粒を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石を含み粘り良い。
- 6 暗褐色土 C軽石を含み粘性あり。
- 7 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 8 暗褐色土 砂質土。
- 9 暗褐色土 黄色土粒を含み締る。

H36号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含み締る。
- 2 暗褐色土 C軽石を含み粘性あり。
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 4 灰色土



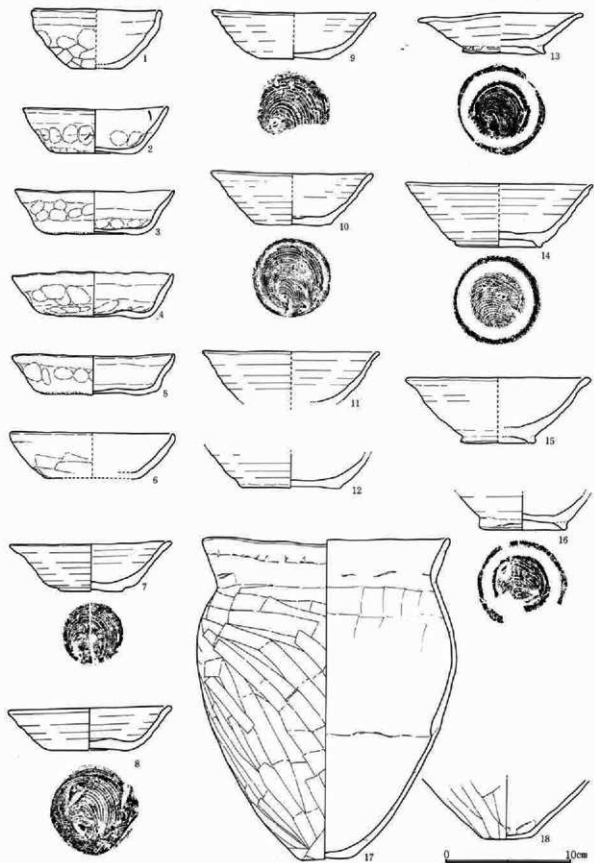


Fig.374 H36号住居跡出土遺物

第4章 H区の遺構と遺物

H36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
374-1 128-1	土師器 杯	口～底 小片	10.2 × 4.0 × 4.7	電内床面	指押。口縁部及び内面無で。体部下位及び底部不定方向片削り。指痕痕顕著。	①酸化・良 ②にぶい ③細砂混る
374-2 128-2	土師器 杯	口～底 完	11.6 × 6.5 × 3.8	南東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部及び底部、指痕痕顕著。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
374-3 128-3	土師器 杯	口～底 片	12.8 × 7.4 × 3.5	南東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部指痕痕顕著。底部無調整。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
374-4 128-4	土師器 杯	口～底 完	12.9 × 9.0 × 3.6	北東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部～腰部指痕痕顕著。底部無調整。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
374-5 128-5	土師器 杯	口～底 片	13.0 × 9.0 × 3.3	北東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部指痕痕顕著。腰部無で。底部無調整。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
374-6 128-6	土師器 杯	口～底 片	13.0 × 7.5 × 3.6	埋土	指押。口縁～体部及び内面無で。体部下位～底部不定方向片削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
374-7 128-7	須恵器 杯	口～底 片	13.0 × 5.0 × 4.0	中央部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②にぶい橙 ③緻密
374-8 128-8	須恵器 杯	口～底 完	13.0 × 6.7 × 3.6	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
374-9 128-9	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 5.8 × 3.8	電内埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
374-10 128-10	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 6.2 × 4.2	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温・軟質 ②灰白 ③緻密
374-11 128-11	須恵器 杯 椀 類	口～体 小片	14.2 × — × (4.3)	電内床面	轆轤。右回転。	①加酸化還元・低温軟質 ②にぶい黄橙 ③緻密
374-12 128-12	須恵器 杯	体～底 片	— × 8.0 × (2.8)	埋土	轆轤。右回転糸切り。底縁部無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
374-13 129-13	須恵器 椀	口～底 片	13.2 × 6.7 × 3.3	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。口縁部及び高台、歪み顕著。	①加酸化還元・低温軟質 ②灰白 ③緻密
374-14 129-14	須恵器 椀	口～底 片	15.0 × 7.0 × 5.0	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。全面積。	①酸化・良好 ②黒褐 ③細砂混る
374-15 129-15	須恵器 椀	口～底 片	14.8 × 6.0 × 5.2	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温軟質 ② 灰白 ③緻密
374-16 129-16	須恵器 椀	体～底 小片	— × 7.0 × (2.8)	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①酸化・不良 ②橙 ③細砂混る
374-17 129-17	土師器 壺	口～底 片	19.8 × 4.0 × 25.5	北東部床面	紐造。2段造。口頸部無で。体部上位傾方向、中～下位斜方向。底部不定方向片削り。内面傾方向片削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
374-18 129-18	土師器 壺	底部	— × 4.0 × (4.8)	北部・北東部床面	紐造。体部下位傾方向。底部不定方向片削り。内面無で。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③緻密

H37号住居跡 (Fig. 375~378・PL. 129~131)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	座 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.08 × 2.95	N-86°-E	東壁ほぼ中央	

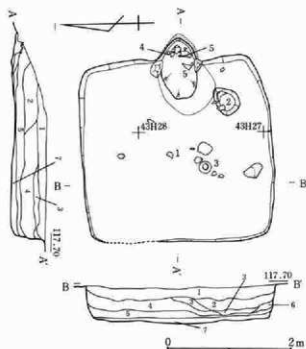


Fig.375 H37号住居跡

## H37号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む砂質褐色土。
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 5 黒褐色土 粘性土。
- 6 黒褐色土 C軽石を含む。
- 7 暗褐色土 強い粘質土。

## H37号住居跡掘

- 1 暗褐色土 強い粘性土。
- 2 焼土灰層
- 3 灰層
- 4 暗褐色土 強い粘性土。

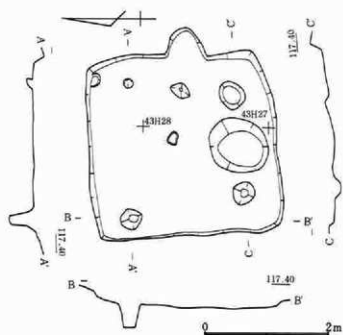


Fig.376 H37号住居跡掘形

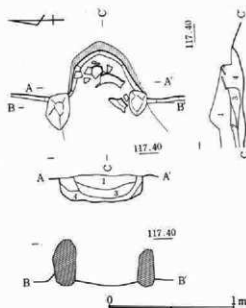


Fig.377 H37号住居跡竈

#### 第4章 H区の遺構と遺物

H区の中央部やや東寄りに位置し、42・43H27・28の範囲にある。竈及び東壁の一部は南北走する2号溝と重複しているが2号溝より古い時期の所産である。平面形態の確認・検出が遅れた為、各壁の検出状況は不明瞭である。確認できた部分の壁高は約40cmを測り直線的な立ち上がりを観察できる。床面は総じて踏みしまりが弱く不安定であるが、竈前面は良好な遺存状態である。竈は東壁を楕円形に掘り込み付設されるが、中央部やや南に偏している。竈先端部は2号溝によって浅く削平されているが煙道部の作り出しは本来されなかったと考えられる。両袖部には凝灰岩の加工材が各々埋設される。袖石内法は約45cm、燃焼部奥行約65cmを測る。出土遺物は比較的少なく、竈内と住居中央部に散在して検出された。

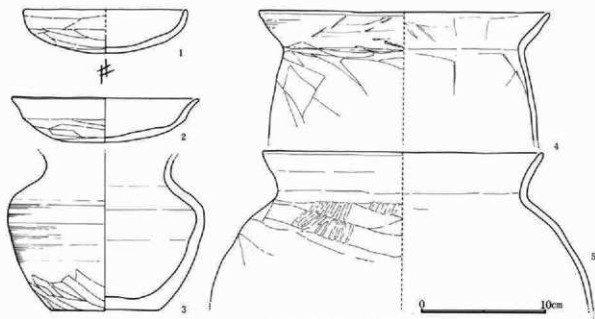


Fig.378 H37号住居跡出土遺物

H37号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 検存量	計測値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他		
			口径	底径	器高					
378-1 131-1	土器 杯	口～底 片	13.0	—	3.5	中央部床 面	指押、口縁部及び内面無で、体底部不定 方向寛削り。底部中央「井」寛推、焼成 煎。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密		
378-2 131-2	土器 杯	口～底 片	15.0	—	3.5	北西部床 面	指押、口縁部及び内面、強い無で、体底 部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る		
378-3 131-3	須恵器 短頸壺	口縁部 欠損	—	8.6	(12.0)	竈内床 面	紐造、2段造。頸部～体部中位、横無で、 体部下位及び底部、不定方向寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密		
379-4 131-4	土器 甕	口～上 片	23.4	—	(10.2)	南部床 面	紐造、口頸部無で、体部上位斜方向寛削 り。内面横方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る		
379-5 131-5	土器 甕	口～上 片	22.6	—	(12.0)	南東部床 面	紐造、口頸部無で、体部上位斜方向寛削 り。内面横方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る		

H38号住居跡 (Fig. 379~383・PL. 131~133)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.18 × 3.37	N- 91° -E	東壁やや南寄り	

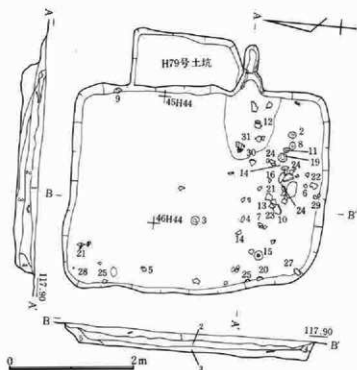


Fig.379 H38号住居跡

H区の北東部に位置し、44~46H 42~44の範囲にある。西半部で1号掘立柱建物跡を巡る12号溝と重複しており新旧関係は12号溝が完全に埋没した後に構築されたものである。壁高は約30cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床面は全体に踏みしまりが弱い。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は検出されない。竈は東壁に付設されているが、燃焼部の掘込みは少なくわずかに突出させ煙道部を作り出す。袖部及び、袖材などの埋設した痕跡は確認されていない。燃焼部幅約45cm、奥行約40cm、煙道部長さ約45cmを測る。遺物は比較的多く住居跡内南側に集中して出土している。

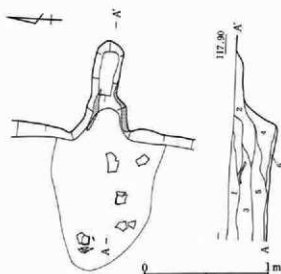


Fig.380 H38号住居跡竈

## H38号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含み部分的に炭化物が混入。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 黄色土塊を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石を多量に含む。

## H38号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 焼土粒
- 3 焼土
- 4 暗褐色土 焼土を含む。
- 5 灰層
- 6 暗褐色土 灰・焼土を含む。

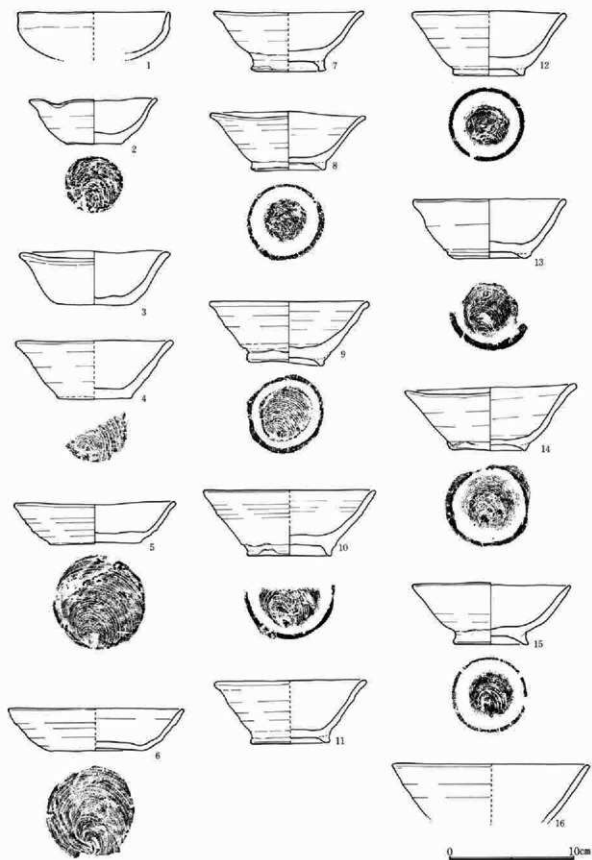


Fig.381 H38号住居跡出土遺物(1)

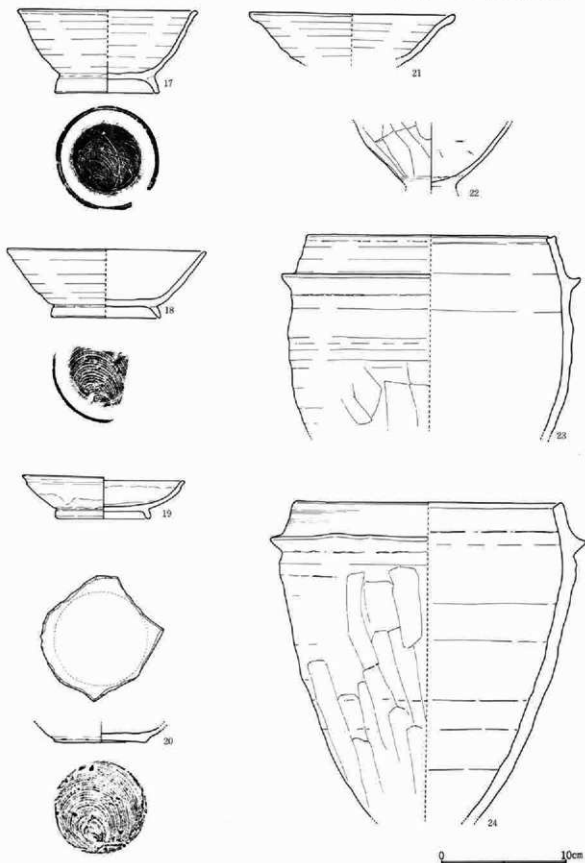


Fig.382 H38号住居跡出土遺物(2)

第4章 H区の遺構と遺物

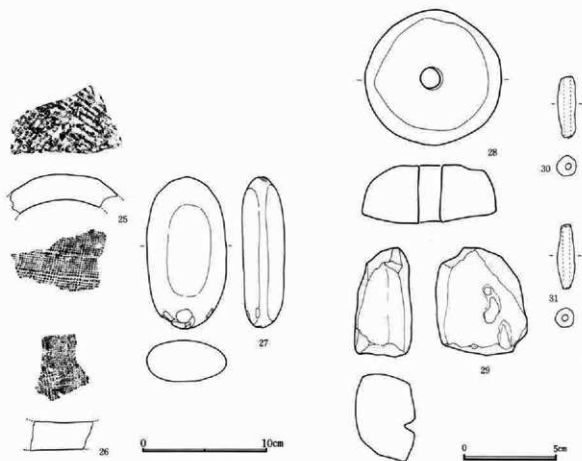


Fig.383 H38号住居跡出土遺物

H38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
381-1 132-1	土師器 杯	口~体 ¼	12.2 × — × (3.7)	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向削り、不明瞭。	①酸化・良 ②によ い橙 ③緻密
381-2 132-2	須恵器 杯(片口)	口~底 完	10.3 × 4.8 × 3.6	南部埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。口唇部に 片口をつくる。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③砂混る
381-3 132-3	須恵器 杯	口~底 完	12.0 × 6.0 × 4.2	中央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部歪 み顕著。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③粗砂混る
381-4 132-4	須恵器 杯	口~底 ¼	12.6 × 5.6 × 4.6	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰黄褐 ③粗砂混る
381-5 132-5	須恵器 杯	口~底 ¾	13.0 × 7.2 × 3.3	南部埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部や や歪み。淡い吸灰。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
381-6 132-6	須恵器 杯	口~底 ¼	14.0 × 7.6 × 3.3	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや軟質 ② 灰白 ③緻密



H38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
381-7 132-7	須恵器 椀	口～底 片	12.0 × 6.0 × 4.7	南東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
381-8 132-8	須恵器 椀	口～底 完	12.5 × 6.0 × 4.6	北東部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。口縁部歪み顕著。全体に淡い吸炭。	①加酸化還元・低温 ②灰 ③細砂混る
381-9 132-9	須恵器 椀	口～底 片	12.8 × 6.3 × 5.2	北西部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で不良。口縁部歪む。	①加酸化還元・低温 ②灰褐 ③砂混る
381-10 132-10	須恵器 椀	口～底 片	13.8 × 6.8 × 5.2	南東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
381-11 132-11	須恵器 椀	口～底 片	12.2 × 6.4 × 5.0	北東部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。見込部吸炭。体部二次焼成。	①加酸化還元・低温 ②によい黄橙 ③細砂混る
381-12 132-12	須恵器 椀	口～底 片	12.4 × 5.8 × 5.2	竈内床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。一部吸炭。口縁部歪む。	①加酸化還元・低温 ②によい橙 ③細砂混る
381-13 132-13	須恵器 椀	口～底 片	12.4 × 6.8 × 4.7	南東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で不良。体部一部吸炭。	①加酸化還元・低温 ②によい褐 ③細砂混る
381-14 132-14	須恵器 椀	口～底 片	13.7 × 6.2 × 5.3	北東部埋土 北東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台、粗い肌で。	①加酸化還元・低温 ②焼灰 ③細砂混る
381-15 132-15	須恵器 椀	口～底 完	12.6 × 5.9 × 5.7	南東部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。内外一部吸炭。器面焼成による黄れ顕著。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
381-16 132-16	須恵器 椀	口～体 片	15.8 × — × (4.2)	南東部床面	轆轤。右回転。	①加酸化還元・低温 ②焼灰 ③細砂混る
382-17 132-17	須恵器 椀	口～底 片	14.4 × 8.4 × 6.6	竈内埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。端整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
382-18 132-18	須恵器 椀	口～底 片	16.0 × 8.8 × 5.4	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
382-19 133-19	灰輪陶器 皿	口～底 完	13.0 × 7.7 × 3.4	南東部埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。口縁部～体部施輪、刷毛塗。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
382-20 133-20	須恵器 転用椀	底	— × 7.4 × (1.2)	北東部床面	轆轤。右回転糸切り。体部意図的打割。見込部縦面転用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
382-21 133-21	須恵器 椀	口～体 片	16.6 × — × (4.0)	竈内埋土	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③粗砂混る
382-22 133-22	土師器 台付壺	下～底	— × — × (5.2)	南東部床面	紐造巻上。体部下位、縦方向篋削り。内面荒撫で。台部接合部、横撫で。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③緻密
382-23 133-23	— 羽釜	口～中 片	20.0 × — × (15.8)	北東部床面 北西部埋土	紐造。横撫で。体部中位以下、縦方向篋削り。全面吸炭。	①加酸化還元・良好 ②黒 ③細砂混る
382-24 133-24	— 羽釜	口～下 片	21.6 × — × (25.0)	南東部床面	紐造。横撫で。体部縦方向篋削り。	①加酸化還元・良好 ②によい黄橙 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H38号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
383-25 133-25	瓦 瓦	小片	— × — × 厚2.0	北西部埋土	叩打。上面叩打痕。下面布目痕。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
383-26 133-26	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚2.3	埋土	叩打。上面布目痕。下面撫で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
383-27 133-27	石 打具	完	長12.0 幅6.4 厚3.4 403.5g	南西部床面	扁平円盤。端部打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
383-28 133-28	石製品 紡錘車	完	上径5.0 下径7.2 厚3.0 孔径1.3	北西部床面	全面研磨。下面球状で滑らか。	角閃岩安山岩
383-29 133-29	石製品 砥石	完	長5.7 幅4.9 厚3.2	南壁下	薄状。2面使用。荒砥。	角閃岩安山岩
383-30 133-30	土製品 土鉢	完	長3.3 幅1.0 厚1.1	電前面床面	棒付握。	①酸化・良好 ②褐灰 ③緻密
383-31 133-31	土製品 土鉢	完	長3.4 幅0.9 厚1.1	電前面床面	棒付握。	①酸化・良好 ②黒 ③緻密

H39号住居跡 (Fig. 384~386・PL. 133, 134)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.97 ×	N—94°—E	東壁やや南寄り	円形 65 × 60 × 26

H区北西部に位置し、60・61H43~45の範囲にある。住居跡西側は調査区域外にかかり、全体を検出することはできなかった。1号掘立柱建物跡を巡る12号溝と重複しているが、12号溝が完全に埋没した後の構築

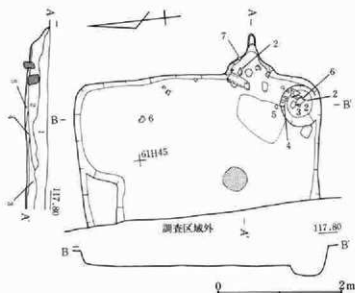


Fig.384 H39号住居跡

であり、これより新しい時期の所産である。壁高は約20cmを測る。床面は平坦であるが電周辺から南側にかけてゆるい傾斜をもって低くなる。この低い部分はよく踏み固められている。住居跡床面中央部に焼土と灰混りの集中がみられるが床面の焼土化はなく、地床炉とは考えられ

H39号住居跡

- 1 褐色土 C層石を含み土粒細い。
- 2 黄褐色土 褐色土・炭化灰を含み粘性あり。
- 3 暗褐色土 C層石を含む。
- 4 褐色土 粘性黄色土塊を含む。
- 5 褐色土

第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

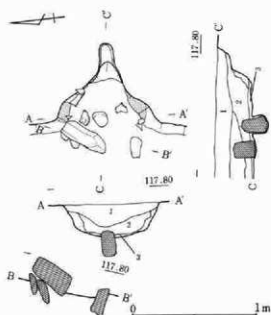


Fig.385 H39号住居跡竈

ず、竈からの流れ出しと思われる。竈は東壁に付設され、幅広の焚口掘形をもち短かい煙道部が作り出される。袖部には長楕円形を呈する小型の川原石が埋設されている。左袖部のは2個並列に配されているが右袖のそれは単独で検出されている。また左袖石には天井石と考えられる凝灰岩で長方形の切り石がかかり、中央に向かって落ち込んだ状態で検出された。燃焼部中央には角のない長方形の川原石が支脚として埋設されている。両袖石間の内法は約40cm、燃焼部幅約70cm、奥行約65cm、煙道部長さ約20cmを測る。遺物は竈内及び野蔵穴周辺に出土したが数量的には少ない。

H39号住居跡竈

- 1 褐色土 C粒石を含み土粒多い。
- 2 褐色土 焼土粒を含む。
- 3 褐色土 粘性黄色土層を含む。

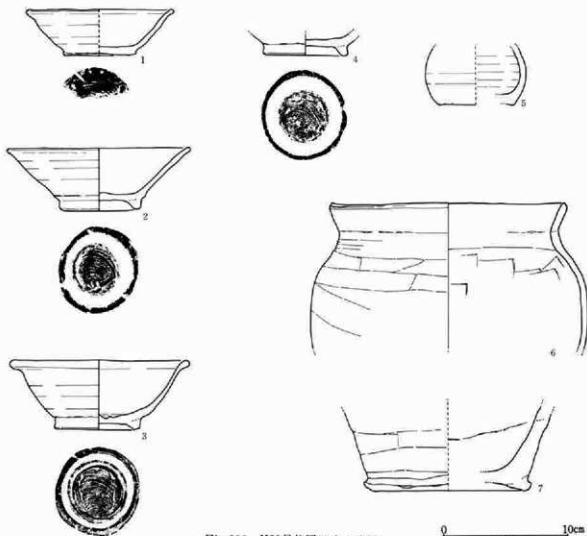


Fig.386 H39号住居跡出土遺物

## 第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

### H39号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
386-1 134-1	須恵器 杯	口~底 小片	11.8 × 5.8 × 3.6	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
386-2 134-2	須恵器 椀	口~底 %	14.6 × 6.5 × 5.0	埋・貯蔵穴	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。不良。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
386-3 134-3	須恵器 椀	口~底 %	14.4 × 6.8 × 5.5	貯蔵穴	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③細砂混る
386-4 134-4	須恵器	底	— × 6.8 × 1.8	貯蔵穴床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
386-5 134-5	灰釉陶器 小瓶	中~底 %	— × 6.0 × (4.5)	貯蔵穴 左縁	轆轤。右回転。細葉筒薄。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
386-6 134-6	土師器 壺	口~中 %	19.0 × — × (11.5)	貯蔵穴・ 北東床面	紐造。口頸部撫で。体部上位横方向、中 位斜方向笠削り。内面横方向笠削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
386-7 134-7	須恵器 壺	下~底 小片	— × 13.2 × (6.7)	竈内埋土	紐造。付高台横撫で。体部下位、回転笠 削り。内面撫で。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る

### H40号住居跡 (Fig. 387、389・PL. 134)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.60 ×			

H区の中央部やや東寄りに位置し、42・43H29~31の範囲にある。住居跡東辺は2号溝と重複しておりまったく消失している。残存壁には竈付設の痕跡はなく、この消失した東壁にあったと考えられる。壁は比較的遺存が良好で壁高約40cmを測り、直線的に立ち上がる。床面は堅牢であるが凹凸が著しい。床面南半は一段底く窪んでいる。壁下の溝やその他の施設は検出されていない。出土遺物は微量である。

### H41号住居跡 (Fig. 388・PL. 135)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.95 ×			

H区の北西部に位置し、55・56H36・37の範囲にある。1号掘立柱建物跡を巡る布掘の柵列及び10号溝と重複しており東壁は消失している。柵列と10号溝によって分断され、その間に帯状に残された床面には灰の

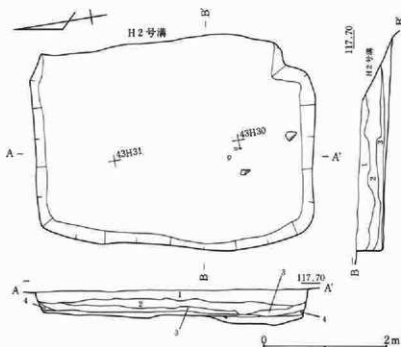


Fig.387 H40号住居跡

H40号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む砂質土。
- 2 黒褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 茶褐色土 C軽石を少量含む粘性土。
- 4 褐色土 壁倒落の粘性土。

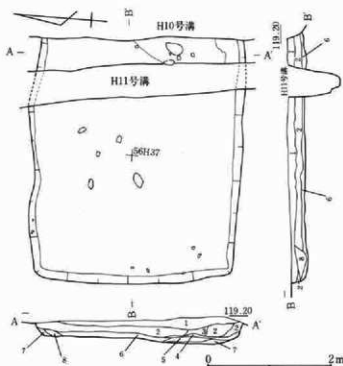


Fig.388 H41号住居跡

分布が認められており、竈から流出した灰と考えられる。残存する各壁はあまり良好とはいえず壁高約16cmを測り、ゆるい傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦であるが総じて軟弱である。出土遺物は少なく土師器の細片を検出したのみである。

H41号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 灰褐色土 罫りのある粘性土。
- 4 暗褐色土 灰を含む砂質土。
- 5 灰褐色土 灰層。
- 6 暗褐色土 罫りがある。
- 7 暗褐色土 C軽石を含み罫りがある。
- 8 暗褐色土 明褐色土粒を含む。

第4章 H区の遺構と遺物

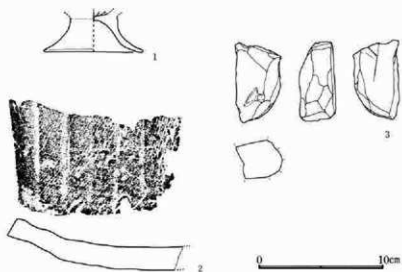


Fig.389 H40号住居跡出土遺物

H40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
389-1 134-1	土師器 台付甕	台 底	— × 8.0 × (3.2)	埋土	紐造。横造で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
389-2 134-2	瓦 平瓦	小片	厚 1.8	埋土	軸巻叩打。上面右目直。下面平叩打直。 前縁部及び左側端部2段、面取り。	①加酸化還元・良好 ②橙 ③細砂混る
389-3 134-3	石製品 砥		長(6.1) 幅(1.6) 厚(1.8)	埋土	撥状。欠損部以外、全面使用。瓦砥。	角閃石安山岩

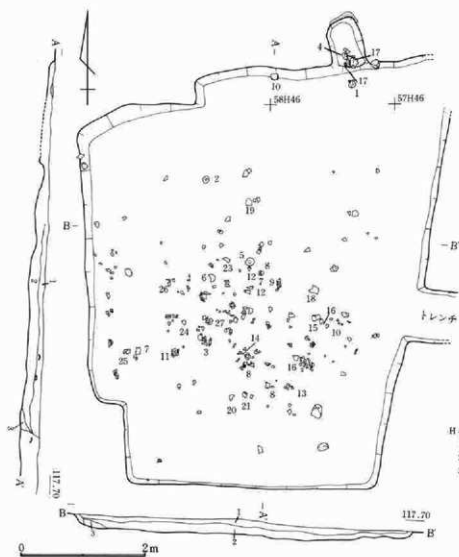
H42号住居跡 (Fig. 390~393・PL. 135、136)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	6.86 × 6.05	N— 4.5° —W	北壁やや東寄り	

H区の北西部に位置し、56~59H43~46の範囲にある。1号獨立柱建物跡を巡る12号溝と重複しているが、12号溝が完全に埋没した後の所産である。当住居跡は構築基盤のほとんどはこの12号溝の埋土によっているため平面形の認定が困難で明確にはできなかった。唯一電の検出ができ、それによって北壁に電を付設することが明らかになった。また床面についても電前面でかろうじて認識できたが全体的には軟弱な面が続き、出土遺物の水平分布によって認定せざるをえなかった。住居跡の平面範囲にしてもこの遺物の広がりによっている。土層観察とこれら出土遺物の状況から壁高は約20cmと推定される。電は前述したように北壁に設けられ燃焼部は長楕円形に掘り込み、煙道部の作り出しはない。燃焼部幅約55cm、奥行約80cmを測る。出土遺

第2節 H区の整穴住居跡と遺物

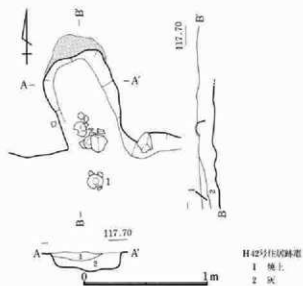
物は多く中央部と考  
えられる広い範囲に  
分布している。



H42号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 炭化粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄色土殻を含む。

Fig.390 H42号住居跡



H42号住居跡断面

- 1 焼土
- 2 灰

Fig.391 H42号住居跡断面

第4章 H区の遺構と遺物

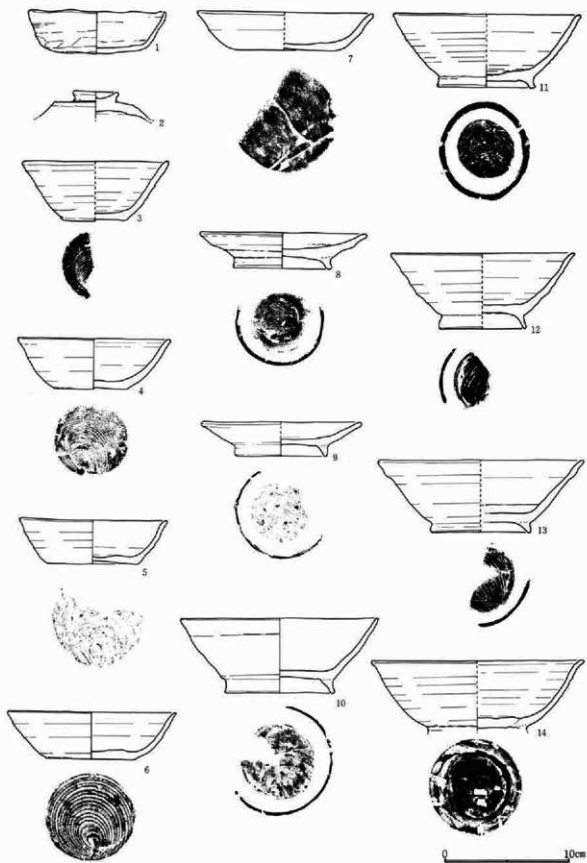


Fig.392 H42号住居跡出土遺物(1)



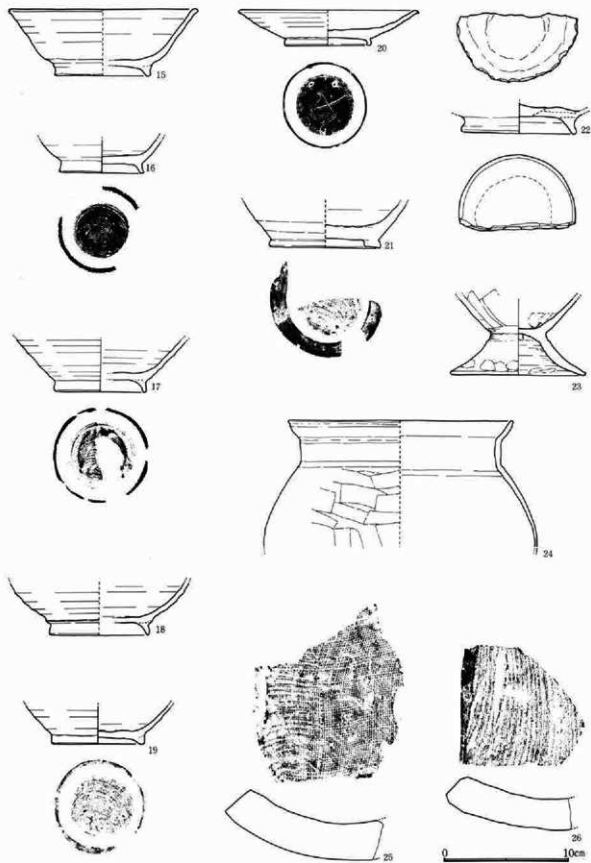


Fig.393 H42号住居跡出土遺物(2)

第4章 H区の遺構と遺物

H42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存址	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
392-1 135-1	土 師 器 杯	口～底 突	11.0 × 8.2 × 3.3	甕・床面	指押。口縁部及び内面無で。腰～底部不 定方向旋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
392-2 135-2	須 恵 器 蓋	胴～頂	— × 胴3.7 × (2.2)	北西部床 面	轆轤。右回転。頂部回転旋削り。胴横撫 で。肩部は意図的打削み。	①酸化・良好 ②に ぶい橙 ③細砂混る
392-3 135-3	須 恵 器 杯	口～底 片	11.8 × 5.3 × 4.7	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。底縁部擦 れ。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
392-4 135-4	須 恵 器 杯	口～底 突	12.2 × 6.0 × 4.0	甕・床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰 ③粗砂混る
392-5 135-5	須 恵 器 杯	口～底 片	11.8 × 7.2 × 3.6	南部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
392-6 135-6	須 恵 器 杯	口～底 突	13.5 × 7.2 × 3.7	南部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。端部。体 部狭い吸炭。	①還元・やや軟質 ② 灰～灰白 ③緻密
392-7 136-7	須 恵 器 杯	口～底 片	14.2 × 8.2 × 3.0	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質・低温 ②暗灰～灰白 ③細砂 混る
392-8 136-8	須 恵 器 皿	口～底 片	13.4 × 7.8 × 2.8	南西・中 央部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
392-9 136-9	須 恵 器 皿	口～底 片	12.8 × 7.4 × 2.6	西部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
392-10 136-10	須 恵 器 椀	口～底 片	15.8 × 8.8 × 5.9	北部埋土 南東部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。内 部狭い吸炭。	①還元・良好・軟質 ②灰白 ③細砂混る
392-11 136-11	須 恵 器 口～底 片	15.0 × 7.8 × 5.8	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・良好 ②灰黄 ③細砂混る	
392-12 136-12	須 恵 器 椀	口～底 小片	14.8 × 7.0 × 6.0	中央・南 部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・良好 ②灰白 ③緻密
392-13 136-13	須 恵 器 椀	口～底 片	16.6 × 8.0 × 5.7	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良・やや軟質 ②灰白 ③緻密
392-14 136-14	須 恵 器 椀	口～底 片	16.8 × (7.8) × (5.6)	西・中央 部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。ほ ぼ剥落。見込部吸炭。	①還元・良好・軟質 ②灰白 ③緻密
392-15 136-15	須 恵 器 口～底 片	15.2 × 7.7 × 5.3	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ② オレンジ ③細砂混る	
392-16 136-16	須 恵 器 椀	体～底	— × 6.8 × (2.7)	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂一部混る
392-17 136-17	須 恵 器 椀	体～底 片	— × 7.2 × (4.2)	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
392-18 136-18	須 恵 器 椀	体～底 片	— × 8.0 × (4.1)	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
392-19 136-19	須 恵 器 椀	体～底 片	— × 7.4 × (3.0)	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

H42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
393-20 136-20	灰輪陶器 皿	口～底 1/2	14.4 × 7.0 × 2.8	中央部床 面	輪轆。右回転。付高台～底部横撫で。内 面のみ施釉。見込部三又砥。底部「×」 施指。焼成肌。大厚型。	①還元・良好 ②灰白 ～浅黄 ③細砂混る
393-21 136-21	遺器 壺	下～底 1/2	— × 9.0 × 3.5	南西部床 面	底部円柱。右回転糸切り。体部輪轆。横 撫で。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
393-22 136-22	遺器 缸	底 1/2	— × 9.2 × (2.3)	北部床面	底部円柱。右回転糸切り。付高台横撫で。 体部意匠的打割。底部縦面転用。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
393-23 136-23	土師器 台付甕	下～台	— × 10.8 × (7.0)	窠内床面	紐造。体部下位縦方向篋削り。内面横撫 で。上部指押。撫で。	①還元・良好 ② ③にふい赤褐 ④精土
393-24 136-24	土師器 甕	口～中 1/2	18.0 × — × (10.0)	南東部床 面	紐造。口頸部強い撫で。体部上位横方向、 中位縦方向篋削り。内面撫で。	①還元・良好 ②に ふい赤褐 ③細砂混る
393-25 136-25	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚2.9	南東部床 面	桶巻叩打。上面布目砥。下面平叩打砥。 前端部及び左側端部2段。面取り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
393-26 136-26	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚2.5	北西部床 面	桶巻叩打。上面布目砥。下面蹴踏で。左 端部3段面取り。	①還元・良好 ②に ふい褐 ③砂混る。

H44号住居跡 (Fig. 394)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.05 × —			



Fig.394 H44号住居跡

H区の中央部西側に位置し、56・57H26・27の範囲にある。1号掘立柱建物跡を巡る13号溝と重複しており、北半は13号溝によって消失している。残存する範囲で窺われる平面形態は不整の隅円形を呈し極めて小型の堅穴住居跡と考えられる。東壁にあたる部分には、少量の焼土粒の分布が認められ、電が存在したことを思わせる。壁

## H44号住居跡

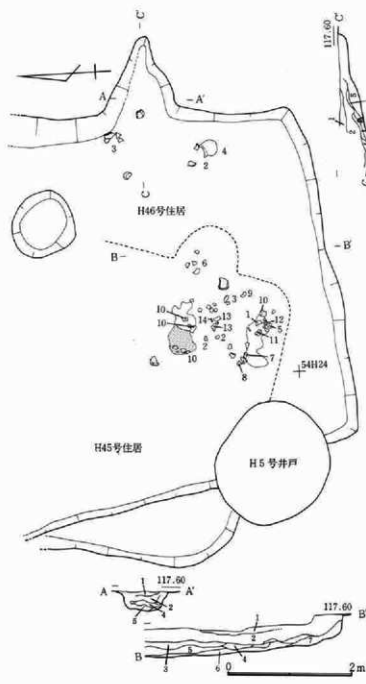
- 1 赤褐色土 C 軽石小粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 C 軽石小粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土 C 軽石粒を少量含む粘性土。
- 4 黒褐色土 粘性が強い。
- 5 黒褐色土 C 軽石粒を少量含む粘性土。
- 6 黒褐色土 C 軽石を少量含む粘性土。

高は約22cmを測りゆるく立ち上がる。床面は平坦であるが踏みしまりは弱い。南壁と残存する西壁には10個ほどの小穴が穿たれるが規則性は認められない。また貯蔵穴や壁下の溝は検出されなかった。出土遺物は少なくとも土師器の小片が検出されたのみである。

H45号住居跡 (Fig.395・PL.137)

H区の中央部やや西側に位置し、52～54H24～26の範囲にあると考えられる。5号井戸跡・46号住居跡と重複しているが新旧関係は5号井戸跡より旧く46号住居跡より新しい時期の所産である。南壁の一部は5号井戸跡によって消失している。西壁の一部を除いて46号住居跡とほとんど重なっている。このため、当住居跡の形態及び範囲の認定ができないまま46号住居跡と同時にその検出を進めざるをえなかった。その結果、東端と考えられる部分に焼土粒と灰の分布が見られ、この部分が竈ないしはその前面と思われた。しかし全体

の平面形態や規模などは明らかにしえず、焼土粒及び灰の存在と遺物の水平分布によってかろうじてその範囲を窺い知ることにとどまった。重複をまぬかれた西端部によれば壁高約18cmを測りゆるく立ち上がる。床面は極めて軟弱で遺物の垂直分布によって知る程度であった。竈の形態その他は不明である。遺物は焼土粒・灰の分布する周辺に多く検出されている。



H46号住居跡

- 1 灰層。
- 2 暗褐色土 C粒石を含む粘性土。
- 3 暗褐色土 C粒石を含む粘性土。
- 4 明褐色土 粘質土塊を含む。
- 5 暗褐色土 黄色土塊を含む。
- 6 暗褐色土 粘性土。
- 7 暗褐色土 黄白色粘質土を含む。

H45号住居跡

- 1 暗褐色土 C粒石を少量含む粘性土。
- 2 暗褐色土 C粒石を少量含む粘性土。
- 3 灰褐色土 C粒石を含む。
- 4 焼土 焼土塊を含む。
- 5 灰層。

Fig.395 H45・46号住居跡

第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

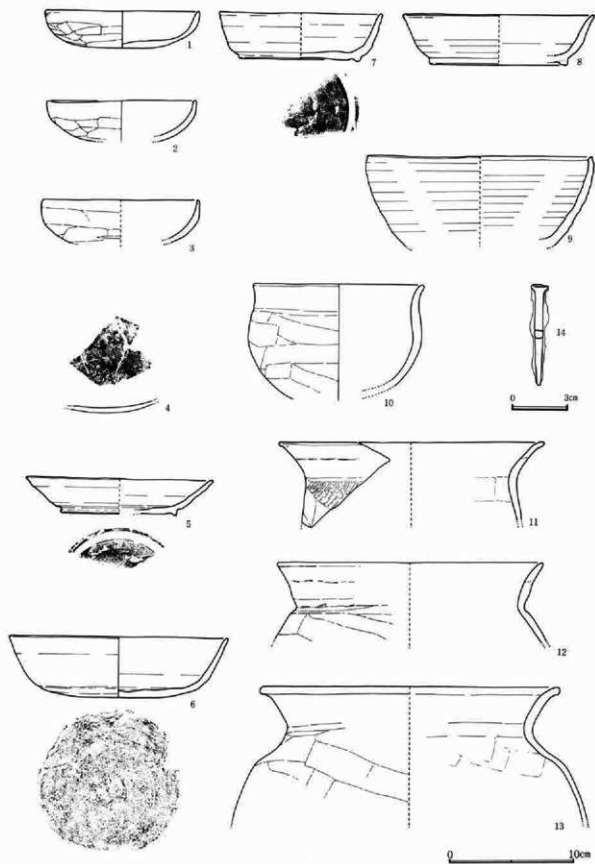


Fig.396 H45号住居跡出土遺物

第4章 H区の遺構と遺物

H45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
396-1 137-1	土師器 杯	口～底 残	12.4 × - × 2.9	南東部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向、 底部不定方向置削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
396-2 137-2	土師器 杯	口～体 残	12.0 × - × (3.3)	南東部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 置削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
396-3 137-3	土師器 杯	口～体 残	12.6 × - × (3.4)	南東部埋 土	指押。口縁部2段及び内面無で。体部横 方向置削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
396-4 137-4	土師器 杯	底 残	- × - × (1.0)	埋土	指押。底部不定方向置削り。見込部× 見揃。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
396-5 137-5	須恵器 皿	口～底 小片	15.0 × 9.2 × 2.8	南部埋土	轆轤。右回転。削出高台。底部回転置削 り。	①還元・良好やや高温 ②灰 ③緻密
396-6 137-6	須恵器 大型杯	口～底 残	17.4 × 12.0 × 4.8	北東部埋 土	轆轤。右回転。底部回転置削り。	①還元・やや低温 ② 黄灰 ③細砂混る
396-7 137-7	須恵器 椀	口～底 残	13.0 × 11.7 × 3.7	南部埋土	轆轤。右回転。削出高台。底部回転置削 り。高台無で。一部吸戻。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
396-8 137-8	須恵器 椀	口～台 残	15.4 × 11.0 × 4.0	南西部埋 土	轆轤。右回転。底部回転置削り。付高台 横無で。	①還元・低温やや軟質 ②灰白 ③細砂混る
396-9 137-9	須恵器 鉢	口～体 小片	18.0 × - × (7.1)	南東部埋 土	轆轤。右回転。歪み、磨き顕著。	①還元・高温 ②灰 ③細砂混る
396-10 137-10	土師器 壺	口～体 残	13.7 × - × (9.1)	北・南部 埋土	紐造。口頸部及び内面無で。体底部不定 方向置削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
396-11 137-11	土師器 壺	口～上 小片	21.3 × - × (6.3)	南西部埋 土	紐造。口頸部無で。体部上位斜方向置削 り。内面横方向置削無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
396-12 137-12	土師器 壺	口～上 小片	21.4 × - × (6.4)	南部埋土	紐造。口頸部強い無で。体部上位横方向 置削り。内面横方向置削無で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
396-13 137-13	土師器 壺	口～上 残	24.0 × - × (10.7)	中央部埋 土	紐造。口頸部強い無で。体部上位斜方向 置削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
396-14 137-14	鉄製品 釘	完	長 5.3 幅 0.4 厚 0.4	北部埋土	断面方形の角釘。	

H46号住居跡 (Fig. 395、397・PL. 137)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	6.67 × -	N-89.5°-E	東壁やや北寄り	

H区の中央部やや西寄りに位置し、51～54H23～26の範囲にある。45号・47号住居跡・5号井戸跡と重複している。新旧関係は45号住居跡・5号井戸跡より旧く、47号住居跡より新しい時期の所産である。また1

号掘立柱建物跡を巡る13号溝により北側は消失している。当区の住居跡の中では比較的大型の住居跡に属すると思われる。壁高は約53cmを測り深い掘り込みを有する。床面は平坦をなすが踏みしまりは弱く軟弱である。住居跡の規模からみて柱穴の存在が予想されたが検出されなかった。また壁下の溝及び貯蔵穴などの諸施設の検出もない。竈は東壁に付設され三角形に掘り込まれた燃焼部に長い煙道部が作り出される。袖部の作りはなく、燃焼部の前面寄りに支脚と考えられる川原石が埋設される。煙道部は燃焼部からゆるい角度で立ち上がり水平に近く延びる。竈燃焼部幅約60cm、奥行約45cm、煙道部長さ約70cmを測る。遺物は比較的少なく竈の周辺に検出されている。

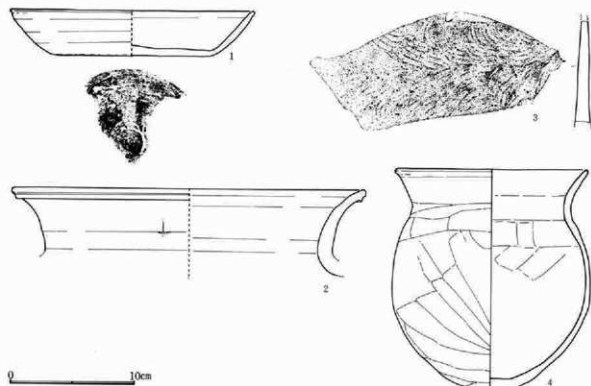


Fig.397 H46号住居跡出土遺物

H46号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
397-1 137-1	須恵器 杯	口～底 小片	19.6 × 12.6 × 4.2	埋土	縦縞。左回転。底部回転箇所有り。	①還元・良 ②黄灰 ③細砂混る
397-2 137-2	須恵器 甕	口～頸 小片	28.2 × — × (6.8)	北東部床 面	横造。口頸部横無で。頸部「+」貫挿、 焼成前。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
397-3 137-3	須恵器 大甕	体 小片		北東部床 面	横造。叩打。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
397-4 137-4	土師器 甕	口～底 片	15.4 × 4.6 × 17.3	南東部床 面	横造。口頸部横無で。体部上位横方向、中 ～下位斜方向、底部不定方向箇所有り。内 面、横～斜方向箇所無で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る

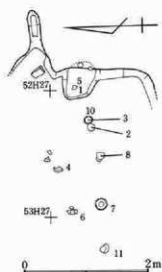


Fig.398 H47号住居跡

H47号住居跡 (Fig. 398、399・PL 138)

H区の中央部やや西寄りに位置し、51～53H26・27の範囲にある。46号住居跡と13号溝との重複によって竈を含む東壁の一部を除きそのほとんどが消失している。このため当住居跡の平面形態及び、その規模は不明である。また床面は竈前面の部分がわずかに確認できただけである。わずかに遺存する東壁から窺われることは壁高は約64cmとかなり深い掘り込みを有する。床面は軟弱であるが平坦をなす。東壁に付設された竈の南側に接して楕円形の穴が設けられている。長径約60cm、短径約50cm、深さ約10cmを測り東側は壁を掘り込んである。これが貯蔵穴か否かは確定できない。竈は東壁にあり楕円形に掘り込まれた燃焼部から長い煙道部が作り出される。袖部にあたる構築の痕跡は見い出されなかった。竈燃焼部幅約70cm、奥行約50cm、煙道部長さ約50cmを測る。遺物は比較的多く竈前面に検出されている。

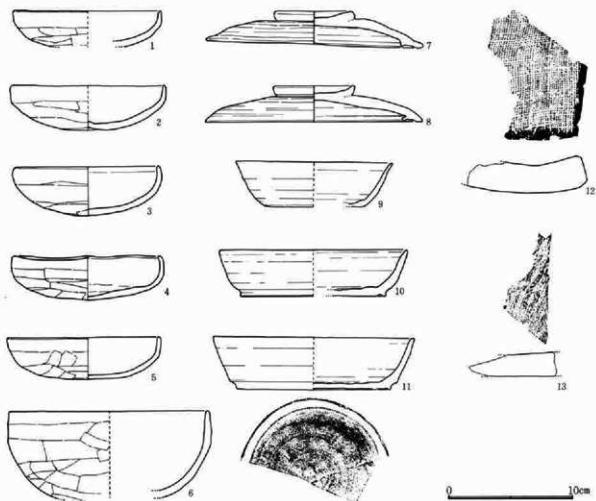


Fig.399 H47号住居跡出土遺物



H47号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 ④その他
399-1 138-1	土師器 杯	口～体 1/5	11.9 × — × (2.9)	南東部穴 内	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
399-2 138-2	土師器 杯	口～底 1/5	12.9 × — × 3.6	北東・中 央部床土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、 底部不定方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
399-3 138-3	土師器 杯	口～底 完	11.7 × — × 3.8	南東部床 面	指押。口縁～体部及び内面撫で。底部不 定方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
399-4 138-4	土師器 杯	口～底 完	11.8 × — × 3.5	中央部床 面	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、 底部不定方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
399-5 138-5	土師器 杯	口～底 1/5	11.7 × — × 3.3	南東部穴 内	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
399-6 138-6	土師器 小片	口～体 小片	15.0 × — × (6.9)	西部床面	紐造。口縁部撫で。体部横方向、底部寄 り不定方向磨削り。内面横方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ～灰黄褐 ③細砂混る
399-7 138-7	須恵器 蓋	横～端 完	17.3 × 横6.4 × 2.5	南西部床 面	轆轤。右回転。頂部2段回転磨削り。横 横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
399-8 138-8	須恵器 蓋	横～端 1/5	17.4 × 横5.8 × 2.9	中央部床 面	轆轤。右回転。頂部2段回転磨削り。横 横撫で。端部折返し。	①還元・軟黄 ②灰 ～灰白 ③緻密
399-9 138-9	須恵器 杯	口～底 1/5	12.6 × 7.9 × 3.6	埋土	轆轤。右回転。底部手持磨削り。	①還元・良好やや高温 ②暗緑灰 ③細砂混る
399-10 138-10	須恵器 小片	口～底 小片	15.0 × 11.6 × 3.7	南東部床 面	轆轤。右回転。削出し高台～底部。回転 磨削り。体部灰被り。	①還元・高温 ②灰 ～浅黄 ③細砂混る
399-11 138-11	須恵器 椀	口～底 1/5	15.1 × 12.3 × 4.2	南西部床 面	轆轤。右回転。削出し高台～底部。回転 磨削り。見込部「×」磨削り。焼成前。	①還元・良好 ②灰白 ～に黄 ③緻密
399-12 138-12	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚2.1	埋土	桶巻印打。前縁及び右側端3段、面取り。 上面布目状。下面鏡撫で。	①加酸化還元・低温 ②に黄 ③砂混る
399-13 138-13	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚1.8	埋土	桶巻印打。上面布目状。下面鏡撫で。	①加酸化還元・低温 ②橙 ③細砂混る

H48号住居跡 (Fig. 400、401・PL. 138)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.08 × —	N—92°—E	東壁やや南寄り	

H区の中央部に位置し、46～49H26～29の範囲にある。1号掘立柱建物跡を巡る13号溝によって西側は消  
失している。また南辺中央部には6号井戸跡が検出されている。13号溝・6号井戸跡より古い時期の所産で  
ある。壁高は約50cmを測り比較的深い掘形を有する。床面は平坦をなすが総じて踏みしまりが弱い。柱穴を

第4章 H区の遺構と遺物

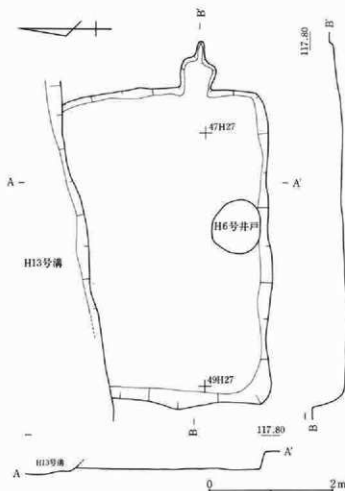


Fig.400 H48号住居跡

はじめ貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。竈は東壁に付設され方形ぎみに掘り込まれた燃焼部から煙道部が作り出される。袖部構築の痕跡はない。燃焼部幅約50cm、奥行約60cm、煙道部長さ30cmを測る。出土遺物は極めて少ない。

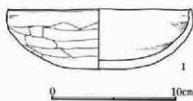


Fig.401 H48号住居跡出土遺物

H48号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口徑 × 底徑 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
401-1 138-1	土師器 大型杯	口~底 1/2	15.0 × — × 4.7	竈内埋土	指押。口縁部及び内面推で。体部横方向、底部不定方向度削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

H49号住居跡 (Fig. 402、403・PL. 138)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.35 × —			

H区のほぼ中央に位置し、49~51H31・30の範囲にある。南半は竈も含め13号溝によってまったく消失している。掘込みは深く壁高約62cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦で踏みしまりは良好である。出土遺物は少なく北東隅に土師器の甕型土器が1点検出されたのみである。



Fig.402 H49号住居跡

- H49号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
  - 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。締る。
  - 3 暗褐色土 締りあり。

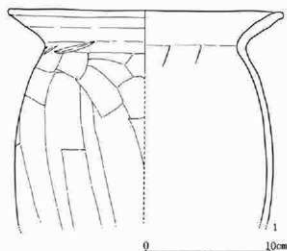


Fig.403 H49号住居跡出土遺物

## H49号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他		
			口径	口径 × 底径 × 器高			①酸化・良好	②澄	③細砂混る
403-1 138-1	土器 壺	口~中 %	22.0 ×	— × (16.7)	北東部 床面	紐造。口頸部強い撫で。体部上位横~斜 方向、中位以下縦方向置り。内面軽い 横方向置撫で。			

## H50号住居跡 (Fig. 404、405・PL. 139)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.25 × —	N—74°—E	東壁やや南寄り	

H区中央部西端に位置し、58~60H29~31の範囲にある。西半は1号掘立柱建物跡を巡る13号溝によって消失していると同時に調査区域外に延び全体の検出はできなかった。平面形は北壁に凸出部が見られ、いわゆる張り出し部を有する形態と考えられる。壁高は約50cmを測り傾斜をもって立ち上がる。張り出し部も含め壁下には幅20cm程度の溝が巡る。深さ5~6cmを測る。張り出し部は北壁から約80cm凸出する。床面は平坦で踏みしまりは良好である。2個の柱穴と考えられる穴が、検出されている。P<sub>1</sub>は穴が一部重複した様相が見られる。南側部分は一方より浅く主柱穴とは思われず、補助穴か柱材の抜き取り痕とも考えられる。P<sub>1</sub>は断面やや漏斗状を呈し柱痕は円形である。上面径46×40cm、深さ50cm、柱痕径20cm、P<sub>2</sub>は38×36cm、深さ48cm、

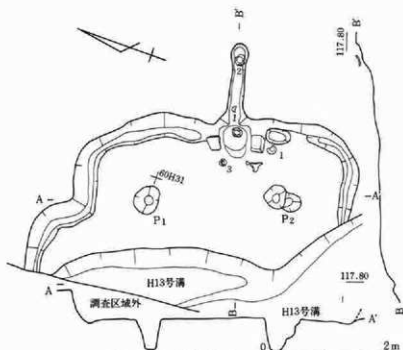


Fig.404 H50号住居跡

柱痕径14cmを測る。P<sub>2</sub>に重なる穴は深さ30cmを測る。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱間は約2mである。竈は東壁に付設され、方形に形づくられた燃焼部から長い煙道部が作り出される。袖部は住居内に張り出す形態をもつ、基盤のLoam層を掘り残しその先端には凝灰岩で長方形の加工材を埋設する。燃焼部中央やや奥寄りには支脚を埋設したと考えられる小穴が検出されている。袖石間内法は約50cm、燃焼部奥行き約40cm、煙道部長さ約1.3mを測る。出土遺物は少ない。

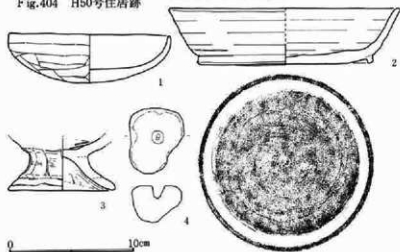


Fig.405 H50号住居跡出土遺物

H50号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	底径			
405-1 139-1	土 師 器 杯	口~底 残	13.0	—	3.9	甕内床面 礫石跡 指押、口縁部及び内面無で、体底部不定 方向窪削り。底部厚い。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
405-2 139-2	酒 志 器 椀	口~底 残	18.1	13.5	4.4	甕 煙 道 床 面 輪縁、右回転。腰~底部回転窪削り。付 高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
405-3 139-3	土 師 器 台付 罌	口~台 付 罌	—	8.7	(4.2)	甕 前 面 床 面 紐造。右部縦方向窪削り後、横方向窪削 で、端部無で。	①酸化・良好 ②赤橙 ③細砂混る
405-4 139-4	石 製 品 不 明	完	縦 5.2	横 4.4	厚 2.9	埋 土 不成形。片面穿孔未完。	角閃石安山岩

H51号住居跡 (Fig. 406~409・PL. 140)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竪 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.60 × 2.88	N—86°—E	東壁ほぼ中央	

H区の北端で西寄りに位置し、54~57H47・48の範囲にある。西側は1号掘立柱建物跡を巡る13号溝北辺によって消失している。また竪の北半は後世の土坑によって破壊されている。壁高は約44cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦をなし踏みしまりも良好である。壁下の溝・貯蔵穴など諸施設は検出されていない。竪は東壁に付設され、燃焼部と煙道部には顕著な変化はなく先細りの状態で煙出しの孔に至る。袖部には左右に袖石が埋設されているがいずれも凝灰岩の加工材である。袖部は壁よりも住居内に張り出す形態のものである。袖石間内法は約45cm、燃焼部奥行約60cm、煙道部長さ約60cmを測る。掘形によれば燃焼部には縦列に3個の小穴が穿たれるが中間のものが深く支脚痕と考えられる。出土遺物は比較的少なく散在的である。



Fig.406 H51号住居跡

## H51号住居跡竪

- 1 暗褐色土 Loam 粒多量・焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 Loam 粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 4 焼土 焼土塊。

## H51号住居跡

- 1 黒褐色土 Loam を含む。
- 2 暗褐色土 Loam 小塊・C軽石炭化物を含む粘性土。
- 3 黄褐色土 Loam 塊を多量に含む。
- 4 暗褐色土 Loam 粒・C軽石を多量に含み炭化物を少量混入。
- 5 暗褐色土 Loam 粒・C軽石を少量粘性あり。
- 6 暗褐色土 Loam 粒を含む粘性土。
- 7 暗褐色土 Loam 小塊粒を含む。
- 8 暗褐色土 7に似る Loam 塊を含む。
- 9 暗褐色土 Loam・C軽石粒を多量に含む。
- 10 黒褐色土 B軽石を含む砂質土。
- 11 黒褐色土 Loam・C軽石を少量含む。
- 12 黒褐色土 Loam 塊・C軽石を含む。
- 13 暗褐色土 Loam 小塊・C軽石粒・炭化粒を多量に含む粘性土。
- 14 暗褐色土 Loam・C軽石を少量含む。
- 15 暗褐色土 Loam・C軽石粒を少量含む。
- 16 暗褐色土 Loam 小塊を含み炭化粒を少量含む粘性あり。

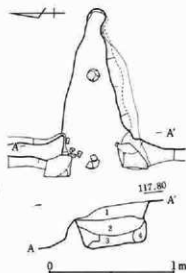


Fig.407 H51号住居跡竪

第4章 H区の遺構と遺物

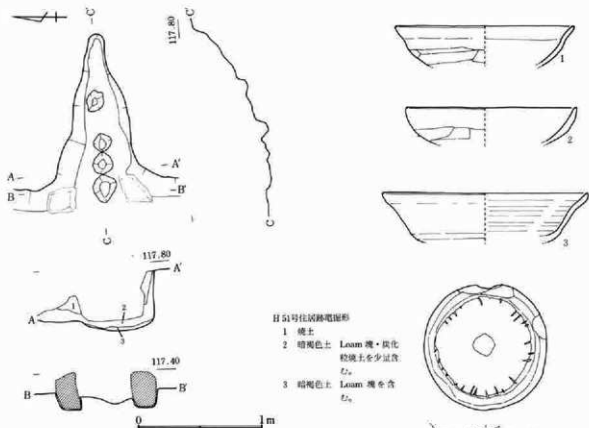


Fig.408 H51号住居跡平面図形

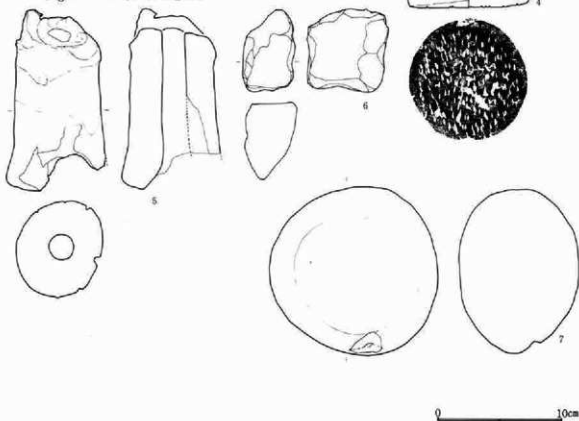


Fig.409 H51号住居跡出土遺物

H51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
409-1 140-1	土師器 杯	口~体 小片	13.3 × - × (2.8)		埋土	指押。口径部及び内面撫で。体部横方向 磨削り。	①酸化・良好 ②灰褐 ③細砂混る
409-2 140-2	土師器 杯	口~体 小片	14.4 × - × (3.3)		竪内	指押。口径部強い撫で、内面撫で。体部 横方向磨削り。	①酸化・良好 ②にぶ い敷 ③細砂混る
409-3 140-3	須恵器 杯	口~体 短	16.6 × - × (3.9)		南部床面	横軸。右回転。	①還元・良 ②灰 ③砂混る
409-4 140-4	須恵器 鉢	底	- × 9.5 × (2.6)		北東部床 面	体部に円盤状底部接合。底部磨削り後、 踵先削突。接合部縦先削。内底研磨痕。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
409-5 140-5	土製品 鬮羽口	先~基 丸	長14.3 幅6.9 厚7.6		南西部床 面	棒付指押。体部引き撫で。先端部溶解物 付着。	①酸化・良好 ②灰黄 ③砂混る
409-6 140-6	石製品 砥	石	長6.5 幅4.1 厚6.0 146.3R		西部床面	砂礫。1面使用。	角閃石安山岩
409-7 140-7	石 一	完	長13.4 幅13.5 厚9.5 1468R		中央部 床面	円盤。用途不詳。砥石原石か。	角閃石安山岩

H52号住居跡 (Fig. 410・411, PL. 141)

H区の西端北側に位置し、60・61H38~40の範囲にある。西側は調査区域外に延び未検出である。また東側は1号掘立柱建物跡を巡る12号溝によって消失している。竪など住居跡に付設されるべき諸施設の検出はならなされていないが、床面の状況、あるいは、遺物の器種や出土状態から一応竪穴住居跡として扱った。上述のように重複や未調査部分が多くその形態は明らかにし得ないが、北壁の一部が凸出する様相が見られ張り出しをもつ住居跡の可能性がある。南北長は3.3m、北壁の張り出しは約80cm、壁高は約16cmを測る。

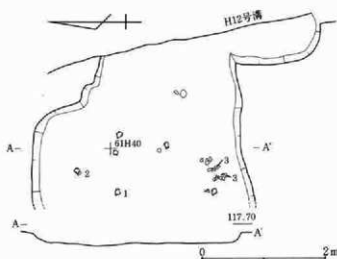


Fig.410 H52号住居跡

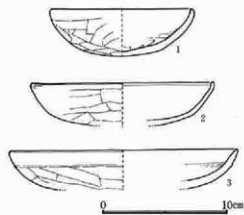


Fig.411 H52号住居跡出土遺物

## H52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
411-1 141-1	土師器 杯	口~底 片	11.2 × — × 3.7	北西部床 面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向磨削り。見込部のみ磨推で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
411-2 141-2	土師器 杯	口~底 小片	14.6 × — × (3.4)	北部床面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
411-3 141-3	土師器 杯	口~体 片	18.3 × — × (3.1)	南部床面	指押。口縁部及び内面、強い無で。体底 部不定方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

## H53号住居跡 (Fig. 412、413・PL. 141)

H区の西端やや北寄りに位置し、59~61H34~37の範囲にある。東壁の一部は1号掘立柱建物跡を巡る12号溝によって消失している。また西側は調査区域外に延び未検出である。12号井戸跡及び54号住居跡と重複しているが、新旧関係は前者より古い時期の所産である。南壁から西壁にかけての一部は54号住居跡の床下より壁下の溝と考えられる溝が検出されている。このことから推定される平面形態は南北方向に長軸をもつ方形の竪穴住居跡で、南北約6m、東西約4.2mの規模である。電は12号溝の壁面に焼土の痕跡が観察されており東壁に付設されていたと考えられる。壁高は約50cmを測り傾斜をもって立ち上がる。54号住居跡の床下に検出された溝は幅約20cm、深さ約4cmを測る。床面は平坦で比較的良好な踏みしまりを呈している。出土遺物は少なく散在している。

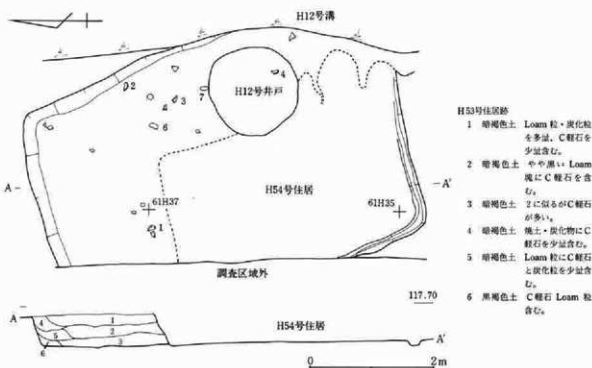


Fig.412 H53号住居跡



第2節 H区の竪穴住居跡と遺物

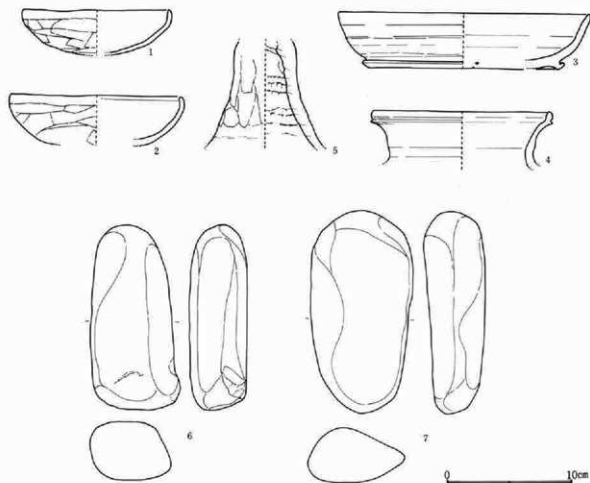


Fig.413 H53号住居跡出土遺物

H53号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
413-1 141-1	土師器 杯	口～底 片	12.0 × — × (3.6)	西部床面	指押。口縁部及び内面側で。体底部近い 右回り旋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
413-2 141-2	土師器 杯	口～体 片	13.6 × — × (4.0)	北東部床 面	指押。口縁部及び内面側で。体部不定方 向旋削り。口唇部内湾。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
413-3 141-3	須恵器 椀	口～底 小片	20.1 × 15.0 × 4.4	北東部床 面	轆轤。右回転。体部下半～削出し高台～底 部。回転旋削り。高台断面鐘状。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
413-4 141-4	須恵器 甕	口～頸 片	14.5 × — × (4.3)	井戸 埋土	紐造。横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
413-5 141-5	土師器 高杯	脚 片	— × — × (8.5)	埋土	紐造巻上。脚部縦方向旋削り。端部撫で。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③緻密
413-6 141-6	石 —	完	長14.7 幅 7.2 厚4.6 736.1g	東部床面	棒状円盤。	流紋岩
413-7 141-7	石 —	完	長16.0 幅 8.4 厚 5.0 831.9g	東部床面	棒状扁平円盤。	流紋岩

H54号住居跡 (Fig. 414~418・PL. 141~143)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.05 ×	N-72°-E	東壁やや南寄り	

H区の西端やや北寄りに位置し、59~61H34~36の範囲にある。西側は調査区域外に及び未検出である。また12号井戸跡及び53号住居跡と重複している。新旧関係は12号井戸跡より旧く、53号住居跡より新しい時期の所産である。東壁から西壁にかけては53号住居跡との関係を確定できないまま調査に入った為明確には

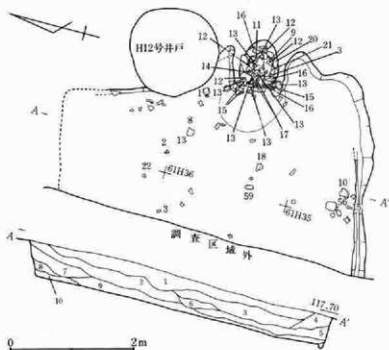


Fig.414 H54号住居跡

し得なかった。壁高は約50cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面は平坦で踏みしまりは良好である。南壁の一部に沿って壁下の溝が検出されている。幅約10cm、深さ約4cmを測る。電は東壁に付設され、袖部が住居内に凸出する形態をもつ。両袖端部には長頭形の川原石が埋設される。煙道部は12号溝によって消失している。袖石間内法は約45cm、燃焼部奥行約90cmを測る。出土遺物は比較的多く、とくに電内に集中して検出されている。

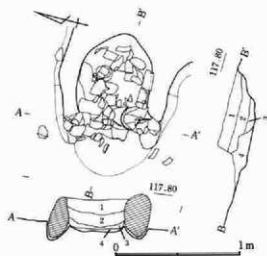


Fig.415 H54号住居跡電

## H54号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、炭化粒少量含む。
- 2 暗褐色土 Loam 炭化粒・焼土粒を含みC軽石が混る。
- 3 暗褐色土 Loam 炭化粒・焼土粒にC軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土 Loam 小塊に焼土・炭化粒を多量に含みC軽石が少量混る。
- 5 黒褐色土 Loam C軽石を少量含む。
- 6 暗褐色土 Loam 粒・炭化粒・炭化粒を少量含む。
- 7 暗褐色土 Loam 炭化粒・焼土を多量に含みC軽石少量混る。
- 8 暗褐色土 Loam 炭・C軽石・焼土を含む。
- 9 黒褐色土 Loam 炭・炭化粒を多量に含みC軽石少量混る。
- 10 暗褐色土 Loam 炭・炭化粒にC軽石を少量含む。

## H54号住居跡電

- 1 暗褐色土 Loam 炭・C軽石・炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 Loam 炭・炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 Loam 炭・炭化粒・焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土

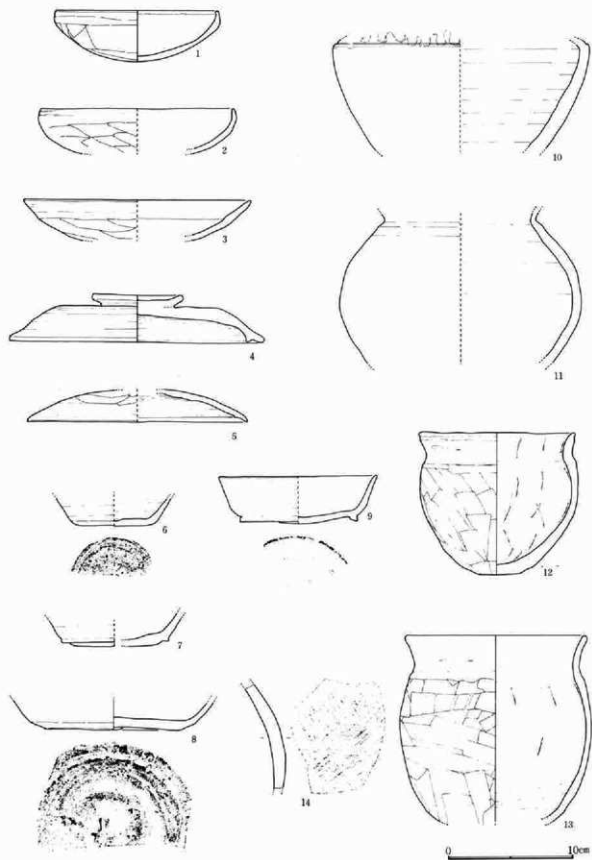


Fig.416 H54号住居跡出土遺物(1)

第4章 H区の遺構と遺物

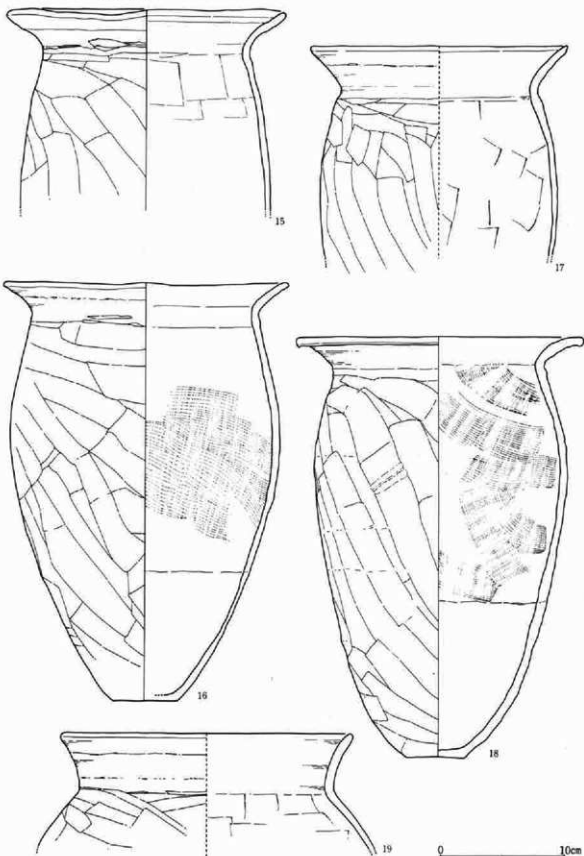


Fig.417 H54号住居跡出土遺物(2)

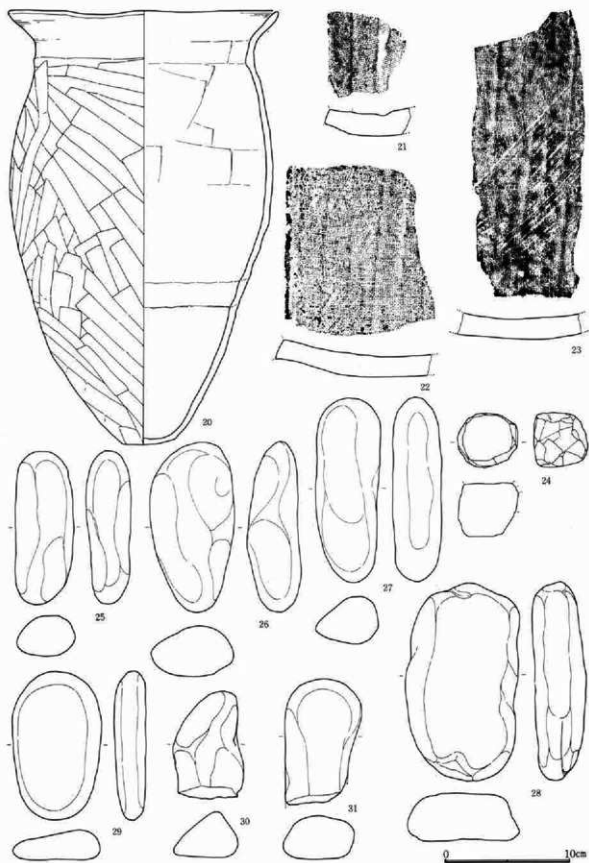


Fig.418 H54号住居跡出土遺物(3)

第4章 H区の遺構と遺物

H54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存位	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
416-1 142-1	土 師 器 杯	口～底 迄	13.1 × - × 4.1	東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向磨削り。内面一部に灰化物付着。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
416-2 142-2	土 師 器 杯	口～底 迄	15.4 × - × (3.6)	南部床面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向磨削り。	①酸化・良 ②にぶ い橙 ③細砂混る
416-3 142-3	土 師 器 杯	口～体 迄	18.2 × - × (3.2)	北西部床 面	指押。口縁部及び内面、強い撫で。体底 部不定方向磨削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
416-4 142-4	須 恵 器 罎	罎～頸 迄	20.4 × 横7.2 × 3.7	壺内床面	轆轤。右回転。頂部2段回転磨削り。横 横撫で。大型。	①還元・良好やや軟質 ②灰白 ③細砂混る
416-5 142-5	須 恵 器 蓋 小片	頂～蓋 小片	17.6 × - × (2.5)	壺 内	轆轤。右回転。頂部手持磨削り。横欠損。	①還元・良 やや軟質 ②灰白 ③緻密
416-6 142-6	須 恵 器 杯	体～底 迄	- × 6.4 × (2.2)	壺内埋土	轆轤。右回転。腰～底部回転磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
416-7 142-7	須 恵 器 椀	体～底 迄	- × 8.6 × (2.5)	壺内埋土	轆轤。右回転。削出し高台～底部。回転 磨削り。	①還元・良好 やや軟 質 ②灰白 ③緻密
416-8 142-8	須 恵 器 大 型 杯	体～底 迄	- × 11.0 × (2.3)	北東部床 面	轆轤。右回転磨削り。腰部回転磨削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
416-9 142-9	須 恵 器 椀	口～底 迄	12.8 × 9.4 × 3.7	壺内埋土	轆轤。右回転。腰～削出高台～底部。回 転磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
416-10 142-10	須 恵 器 短 頸 壺 小 片	上～下 小 片	- × - × (8.5)	壺内床面	紐造。横撫で。肩部に1条沈線。上位灰 被り。	①還元・高温 ②灰白 ③白砂混る
416-11 142-11	須 恵 器 短 頸 壺	頸～下 迄	- × - × (11.8)	北部床面	紐造。体部横方向磨削り。内面撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
416-12 142-12	土 師 器 小 型 罎	口～底 迄	12.4 × 3.5 × 11.3	壺内床面	紐造か。口頸部無で。体部斜～縦方向磨 削り後、上位1段横方向磨削り。内面横 方向磨撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③砂混る
416-13 142-13	土 師 器 罎	口～下 迄	14.5 × - × (14.8)	壺内床面	紐造。口頸部強い撫で。体部上～中位横 方向、下位縦方向磨削り。内面磨撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
416-14 142-14	須 恵 器 小 片	体 小 片		壺内埋土	紐造。体部斜行磨削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
417-15 142-15	土 師 器 罎	口～中 迄	22.4 × - × 16.0	壺内床面	紐造。口頸部無で。体部上～中位、斜～縦 方向磨削り。内面横方向磨撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
417-16 142-16	土 師 器 罎	口～底 迄	22.8 × 5.3 × 33.0	壺 内 床 面	紐造。口頸部撫で。体部上位横、中～下 位斜、底部不定方向磨削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
417-17 143-17	土 師 器 罎	口～中 迄	29.8 × - × (16.7)	壺内床面	紐造。口頸部撫で。体部上位横、中位以 下縦方向磨削り。内面磨撫で。	①酸化・良好 ②橙 ～明黄褐 ③細砂混る
417-18 143-18	土 師 器 罎	口～底 迄	23.0 × 4.4 × 33.9	壺内床面	紐造。口頸部撫で。体部斜方向、底部不 定方向磨削り。内面上半磨撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
417-19 143-19	土 師 器 罎	口～上 迄	23.4 × - × (9.0)	中央部床 面	紐造。口頸部強い撫で。体部上位斜方向 磨削り。内面横方向磨撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

H54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
418-20 143-20	土 器 壺	口～底	21.6 × 4.0 × 34.4		壺内床面	紐造。口頸部断で。体部不定斜方向貫削り。内面横方向旋削で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
418-21 143-21	瓦 平瓦	左側端 小片	— × — × 厚1.8		壺内埋土	縷巻印打。左側端部2段面取り。上面布目痕。下面旋削で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
418-22 143-22	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚1.6		壺内床面	縷巻印打。前縁及び左側端部面取り。上面布目痕。下面旋削で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③砂混る
418-23 143-23	瓦 平瓦	小片	— × — × 厚1.6		壺内床面	縷巻印打。上面布目痕。下面断で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
418-24 143-24	石 製 品 砥 石		長 4.3 幅 4.9 厚 4.2		北西部床面	円磨のほぼ全面使用。	角閃岩安山岩
418-25 143-25	石 —	完	長12.1 幅 4.7 厚 3.6 313.7g		南部床面	棒状円磨。	輝石安山岩(粗粒)
418-26 143-26	石 —	完	長13.5幅 6.8 厚 4.3 490.0g		埋 土	扁平円磨。	溶結凝灰岩
418-27 143-27	石 —	完	長14.6 幅 5.3 厚 4.0 472.2g		南西部床面	棒状円磨。	変質安山岩
418-28 143-28	石 —	完	長15.7 幅 9.1 厚 4.3 883.4g		埋 土	扁平円磨。	溶結凝灰岩(片品川上流産)
418-29 143-29	石 —	完	長11.8 幅 7.1 厚 2.6 337.7g		埋 土	扁平円磨。	輝石安山岩(粗粒)
418-30 143-30	石 —	一端部 欠損	長(8.5) 幅5.6 厚4.1 (235.0g)		埋 土	棒状円磨。	輝石安山岩(粗粒)
418-31 143-31	石 —	一端部 欠損	長(10.0) 幅6.2 厚4.4 (368.8g)		埋 土	棒状円磨。	輝石安山岩(粗粒)

H56号住居跡 (Fig. 419~422・PL. 144)

H区の北東部に位置し、44・45H45~47の範囲にある。住居跡の西側は1号掘立柱建物跡を巡る12号溝によって、また東側は13号溝によって各々消失している。平面形態は、南西部隅がかろうじて検出されており、方形の形態が考えられる。竈は検出されていないが、住居跡の西側床面上や12号溝の壁面に焼土粒の痕跡が認められ西壁に付設されていた可能性がある。竈を中心にした主軸方向は、残存する南・北壁からおおよそN-115°-Wの方向をとると考えられる。住居跡の規模は南北長3.9mを測り東西は不明である。壁高は約34cmを測り垂直に立ち上がる。床間は平坦で踏みしまりは良い。柱穴は4個検出されており、いずれも円形ないしは楕円形の掘形をもつ。P<sub>1</sub>は径40×30cm、柱径12cm、深さ48cm、P<sub>2</sub>は径38×28cm、柱径12cm、深さ50cm、P<sub>3</sub>は径34×30cm、柱径12cm、深さ54cm、P<sub>4</sub>は径32cm、深さ60cmである。P<sub>4</sub>の柱痕は確認できなかった。各柱間の距離はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は1.9m、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は1.8m、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は1.9m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は1.6mを測る。出土遺物は比較的多く、とくに壺型土器が目立つ。住居跡中央やや西寄りに集中して検出された。

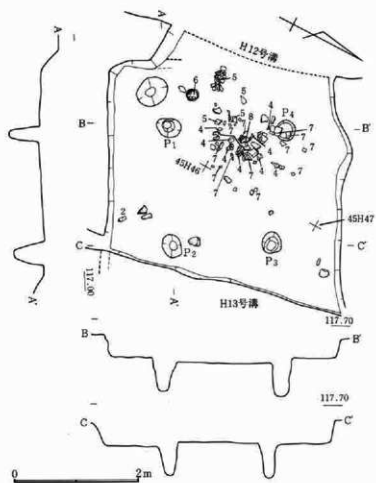


Fig.419 H56号住居跡

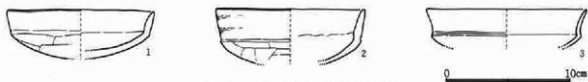


Fig.420 H56号住居跡出土遺物(1)



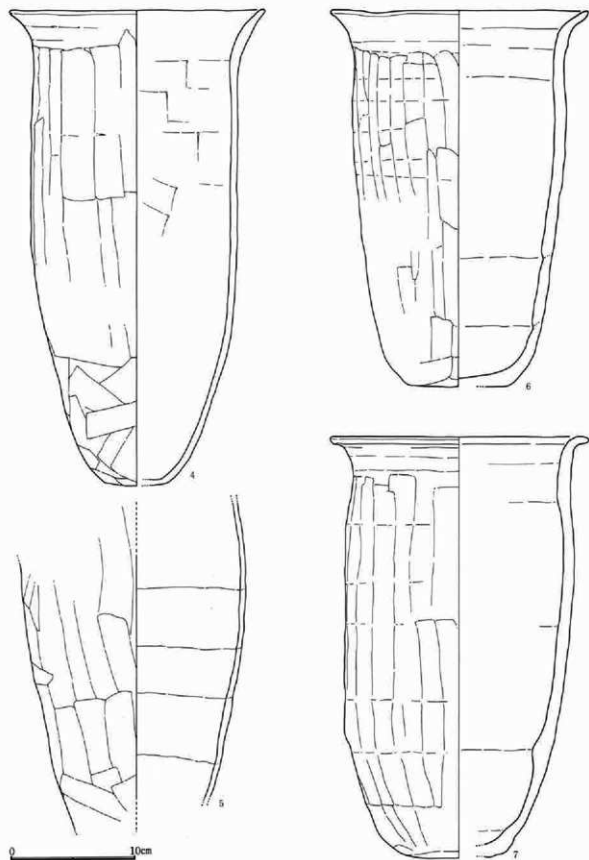


Fig.421 H56号住居跡出土遺物(2)

第4章 H区の遺構と遺物

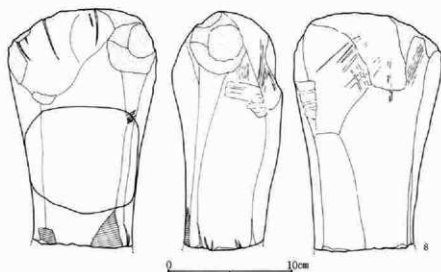


Fig.422 H56号住居跡出土遺物(3)

H56号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存状況	計測値(cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
420-1 143-1	土器 杯	口～底 1/4	11.8 × 11.1 × ( 3.8)	埋土	指押。口縁部及び内面、強い無で。体底部不定方向瓦削り。	①酸化・良・劣化 ②糖 ③緻密
420-2 143-2	土器 杯	口～底 小片	12.0 × 11.2 × ( 4.3)	南東部床 面	指押。口縁部及び内面、強い無で。体底部不定方向瓦削り。見込部指押痕顕著。	①酸化・良好 ②淡黄 ③細砂混る
420-3 143-3	土器 杯	口～体 1/2	12.8 × 12.0 × ( 2.9)	埋土	指押。口縁部及び内面、強い無で。体底部瓦削り、厚減。	①酸化・良・劣化 ②糖 ③緻密
421-4 144-4	土器 壺	口～底 1/2	20.5 × 5.0 × 37.5	中央部床 面	紐造。口頸部無で。体部上中位縦方向、下位不定方向瓦削り。内面無で。	①酸化・良好 ②糖 ③砂混る
421-5 144-5	土器 壺	上～下 1/2	— × — × (26.0)	西部床面	紐造。体部縦～斜方向瓦削り。	①酸化・良好 ②糖 ③細砂混る
421-6 144-6	土器 壺	口～底 1/2	20.6 × 8.2 × 29.9	南西部床 面	紐造。口頸部無で。体部縦方向、最下段のみ横方向瓦削り。内面無で。	①酸化・良好・堅硬 ②明赤褐 ③細砂混る
421-7 144-7	土器 壺	口～底 完	20.7 × 7.5 × 33.3	中央部床 面	紐造。口頸部無で。体部縦方向瓦削り。底部自然欠損ひ。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る
422-8 144-8	石製品 砥石	1/4	長(19.1)幅11.7厚8.9	中央部床 面	大型砥石、中仕上げ。半欠損。刃部調整痕あり。	輝石安山岩(粗粒)

### 第3節 H1号掘立柱建物跡と出土遺物

#### H1号掘立柱建物跡 (Fig.423~478、付図・PL.145~187)

H1号掘立柱建物跡はH区北側の北側に位置しているが区域のおよそ半分の範囲を占めている。一棟の掘立柱建物跡を中心に据え、一重の檼列と大小の堀が三重に巡っている遺構である。西側は調査区域外にかかるため、最も外側を巡る堀の西辺は完掘するに至らなかった。全体の平面はほぼ正方形の形をとると考えられ、全長約50mを測る大規模な構えをもつ。しかしながら、この遺構は創建時から廃棄に至るまでの間一貫してこの規模と施設を保持していたものでないことが調査結果から判明している。中心建物跡の柱穴の幾つかは重複が認められ、少なくとも一度の建て替えが考えられる。またこれを取り巻く他の施設も1度ないしは2度の変革がなされている。以下、それぞれの施設について調査結果に基づいてその様相を述べることにする。

#### 掘立柱建物跡

遺構の中心部に位置するこの掘立柱建物跡の構造は、二重に柱穴が配されて身舎と縁の構えをとる。身舎と考えられる内側の柱列 $P_1 \sim P_4$ で規模は二間×二間である。平面形は正方形に近いが、やや歪んでいる。各辺は長さに若干の違いがみられ、北側列は4.2m・西側列4.8m・南側列4.3m・東側列4.5mを測る。柱間はほぼ等間隔で2.2mを測るが、西側列の $P_3$ と $P_4$ は若干長く2.5mを測る。方位は $N-88^\circ-E$ を示す。柱穴は径約80×80cmの円形の掘形をもち、深さは現状で20~60cmを測り、柱穴によってはかなり差がある。最も深い柱穴は西側列の $P_4$ で60cmを測る。

これから約1mの距離を隔てる縁と考えられる外側の柱列は $P_9 \sim P_{20}$ で、三間×三間で内側と同様にやや歪みがあり相対する各柱筋の距離は同じでやや東西の行が長い。南辺・北辺長は約6.9m、東辺・西辺長は約7.2mを測る。柱間には2種類の規格が考えられ、2.5mと2.2mに統一されている。また、相対する柱筋の柱間にも統一が考えられる。つまり、中央の柱間はお互いに同距離をとり、端部の相対する柱間は異なっている。東辺列の $P_{19}$ と $P_{20}$ は2.5m・南辺列 $P_{18}$ ・ $P_{17}$ と北辺列の $P_{10}$ ・ $P_{11}$ はそれぞれ2.2mを測る。各辺の両端の柱間は2.5mと2.2mの柱間で対置させている。方位は $N-88^\circ-E$ を示し内側の柱列方位と一致する。なお内側の柱穴と柱筋が合うものはない。柱穴の掘形はほぼ円形か楕円形を呈し、規模は径50~80cmと大きさに幅がある。深さは内側のものと比べ、相対的に浅く約30cm程度のものがほとんどである。

#### 10号溝

10号溝は1号掘立柱建物跡の四周を巡り東側の中央部で途切れ、出入口を作り出している。ほぼ正方形を呈し、一辺約12mを測る。建物跡をほぼ中心に置く。掘形はあまり良好とはいえず、壁線や底面はかなりの凹凸が見られ、隅部は丸味をおびる。断面形も壁は緩く立ち上がり、浅いU字形を呈する箇所が多く、全体としてはだれた感が強い。溝幅は1.5~1.7m、深さ約50cmを測る。南辺の中央部はやや浅く約25cmである。また、東辺の一部が70cmと深い。東部中央部で途切れ、東方に向かって開く開口部はその中心が僅かに50cmほど北側に偏っている。開口部の北側は土坑との切り合いによって不明瞭であるが、幅約1.3mを測る。方位は建物跡と殆ど同じ方位をとり、 $N-88^\circ-E$ を示す。掘立柱建物跡の柱筋とは約1~1.2mと極めて近接しており、軒下とも言うべき位置にある。機能的には雨落溝の可能性も考えられるが、建物跡が東を正面とする切妻造の構造をもつとすれば東・西辺に雨落溝が存在する事は考えられない。東辺と南辺で11号溝(柵列)と重複

しており、このことから10号溝は本来的に建物跡を囲む濠として機能していたものとせざるをえない。

#### 11号溝 (欄列)

11号溝は布掘り工法をもつ欄列と考えられ、10号溝の外側を巡る。同じく1号建物跡をかこみ、東中央部で開口する。開口部分は10号溝と一致しており出入口となっている。規模は一辺約14mを測り、ほぼ正方形の平面を呈する。中心部の建物跡からは北西方向におよそ2mほど偏って巡らされ、方位は10号溝とほぼ同一方向をもちN-81°-Eを示す。このため10号溝とは南辺と東辺で重複しているが、10号溝との新旧関係は土層観察によってこれより新しいことが確認された。布掘りの掘形は幅約65cm、深さ50cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近く良好である。底面には柵柱痕が穿たれる。柵柱痕はほとんど円形を呈するが、方形を呈するものも若干ではあるが認められる。柱痕の径は15cm~20cmである。柵柱はおよそ50cm前後の間隔で配置される。

#### 12号溝

12号溝は10号溝や11号溝欄列の更に外側に巡るもので、その規模からみて濠とするほうがふさわしい。東西31m、南北32mの整った方形を呈する。掘形は底面が平坦で両壁の切り立った「箱掘」の形態をなしている。上幅は4.5~5mの範囲にあるが、東辺南側はやや幅広く6mを、底面幅は2~3mを測る。深さはほぼ一定しており約1.8mを測る。東側は10号溝や11号溝 (欄列) と同じように濠が途切れて、陸橋部を形成している。陸橋部は幅約2mを測り、中央から3mほど北側にずれて設けられる。わずかに凹凸のある窪みをなしている。方位はN-80°-Eを示す。濠内には貯水の痕跡は認められず、また導水孔や排水の施設も検出されていない。本来的に貯水の機能はなく空堀と考えられる。この12号溝は東辺から北・西辺にかけて幅約1mの範囲で内側が建物跡の面より約50cmほど低く段状に落ち込んでいる。これは創建時からの形状とは考えられず、溝の掘り直し (拡張) が行われた結果と考えられる。溝内の埋土はほぼ中位で堆積土に違いが認められるが、自然堆積状況を示している。底面から中位にかけて粘性が強く締まりのある褐色土ないしは白灰色土が主な堆積土となっており、これより上位は浅間C軽石を混える粘性の少ない暗褐色土が主体の層になる。遺跡内の基本層序からすれば中位以下の層相は奈良時代に、また上位はこれ以後の時期に比定されるものである。溝の堆積土については、東辺および中位に藁あるいは茅などの草類を主とする炭化層が存在して上述した上下の堆積土を分けている。この炭化層の堆積は内側からの流れ込みの状況を示している。しかしながら、溝外の平坦部にはその痕跡がみられず、内側から廃棄したのち故意に燃したものであろう。炭化層の厚さや周囲の焼土化の微弱さからそれほど多量の廃棄物とは考えられない。この炭化層が建物跡の構築材に関係するものとするれば当該遺構の廃絶期を示している可能性が考えられる。

12号溝の東辺の外側壁には、凝灰岩質層の切り出し痕が検出されている。この痕跡は北壁がとくに著しく、その凹凸によって壁面が本来の姿を留めない程である。切り出し痕には大・中・小の3種類の大きさが見られる。大は30×80×20cm、中は30×50×20cm、小は30×15cmの大ききで、いずれも角材の形状をもつ。この凝灰岩質層の用材は遺跡内に見られる堅穴住居跡の竈構築材として多く用いられているものである。この切りだし痕から伺われる用材はその形状や大ききから大は天井・中は側壁・小は支脚の用材として竈の構築材に供せられたことは十分考えられるところである。また、用材の切りだしを行なった時期については、その痕跡が比較的濠底に近く検出されていることと、切りだし後の用材が濠底に放置されていることなどから、濠が掘削された直後か、完成間も無くの所作と考えられる。

## 13号溝

12号溝から3～3.5mの間隔をおいてさらに13号溝が巡る。西部は調査区域外にかかり検出されていないが平面はほぼ正方形を呈すると考えられる。周辺の遺構との重複が著しく、とくに外周の壁線は不明瞭な箇所が多い。全長約48m、溝幅約4.5m、深さ50～70cmを測る。底面は凹凸が多く、不均一な落ち込みが目立つ。溝の方位は12号溝とほとんど同じ方向をもちN-81°-Eを示す。建物跡を巡る他の諸施設とは異なり、東側に陸橋部を設けることはなく完結していると考えられる。また東辺に限らず、検出された範囲内では橋脚を示すような施設は見いだされない。溝内の堆積土は12号溝にみられた上位の堆積土に極めて近似している。このことは、その配置から建物跡に伴う可能性が大きいことから、創建時の施設とすることは出来ないにしても、建物跡の存続期間中に新たに付け加えられた施設とすることができよう。

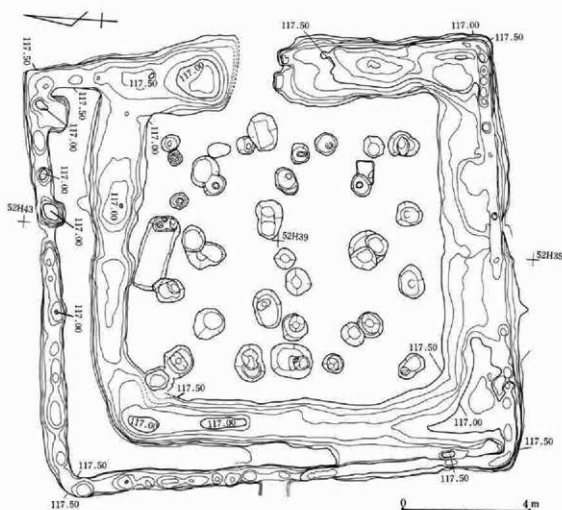


Fig.423 H1号掘立柱建物跡等高線図

#### 第4章 H区の遺構と遺物

当遺構からの出土遺物は土師器・須恵器を主体としてかなり多量にのぼるが、10号溝と11号溝（冊列）の重なる南東部と12号溝の南東部に集中して検出されている。器種は杯・碗・甕類の什・煮沸器がほとんどである。出土状況は前者はその上位に、後者には底から下位にかけての出土であり、ともに一括投棄された様相を呈している。このほか12号溝の底部より長頸壺がおよそ30個体検出されている。出土状況はさほどの規則制は看取できないが、点的で投棄された場合のような集中性がなく破損状態も少ない。意識的に据えられた可能性が強い。また長頸壺については、検出された15個体で頭部の完存品は1個体もなく、総て故意に欠き取られたような形跡が伺われる。このような遺物の在り方は、遺構にかかわる付随的な行為の結果を表すものであろうか。当遺構の性格・機能を考える上で注意すべき現象である。

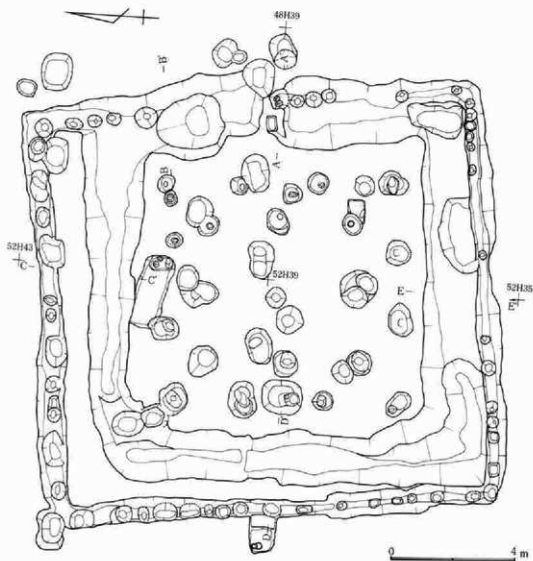


Fig. 424 H I号掘建柱建物跡平面図

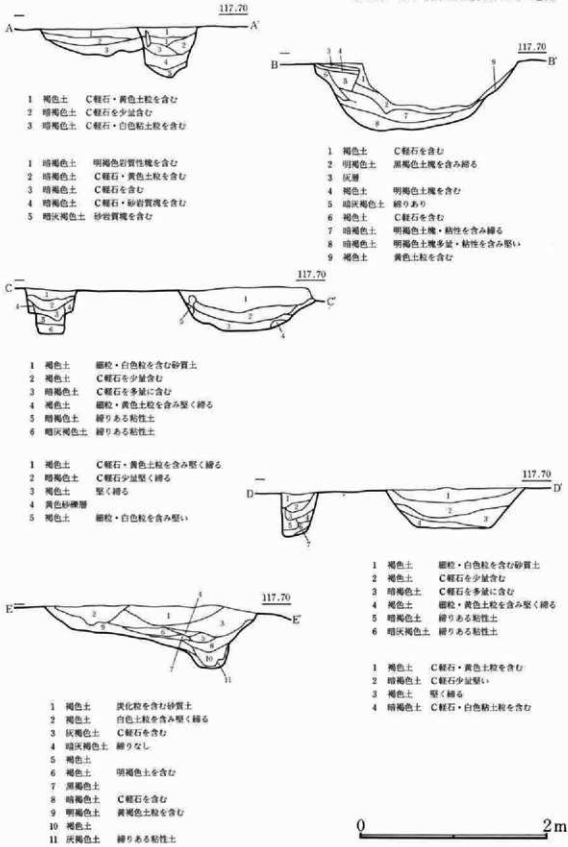


Fig.425 H10号溝・11号溝(推判)土層

第4章 H区の遺構と遺物

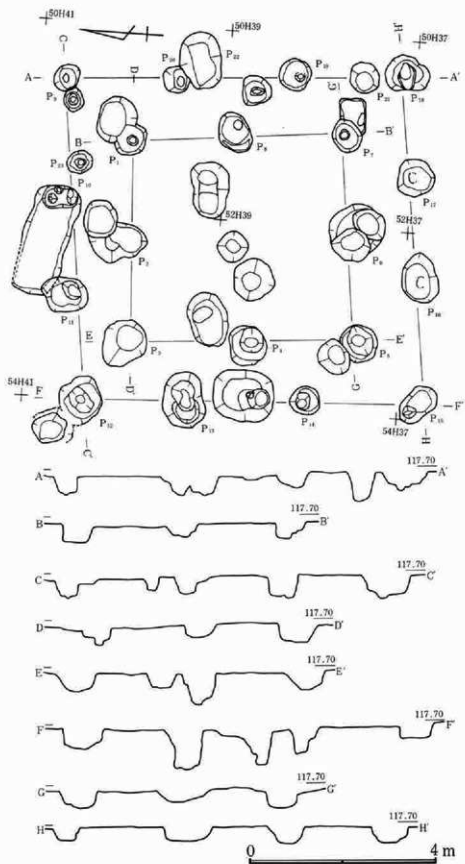


Fig.426 H1号掘立柱建物跡



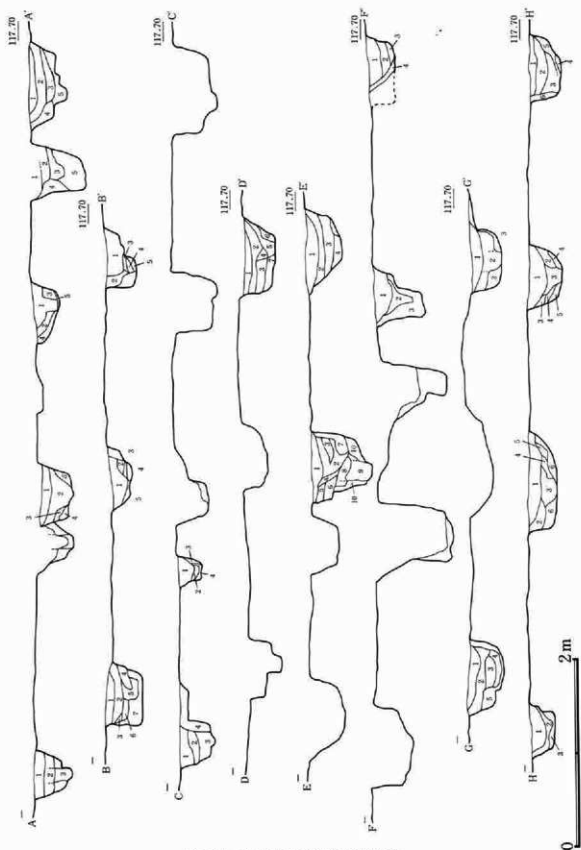


Fig.427 H1号掘立柱建物跡柱穴土層

第4章 H区の遺構と遺物

H1号掘立柱建物跡柱穴土層

- P<sub>1</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 C軽石を含みや粘性あり
  - 3 暗褐色土 砂質質塊(2×2)を含む
- P<sub>1a</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土
  - 2 暗褐色土 黄褐色土粒大粒を含む
  - 3 暗褐色土 C軽石を含みやや締る
  - 4 暗褐色土 C軽石を含み締る
- P<sub>1b</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 3 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 4 暗褐色土 C軽石を含む
  - 5 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
- P<sub>1c</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 黄褐色土粒を含む
  - 3 暗褐色土 砂質質塊・黄褐色土塊を含む
  - 4 暗褐色土 C軽石・粘性を含み締りあり
  - 5 暗褐色土 粘性・締りあり
- P<sub>1d</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土締りなし
  - 2 暗褐色土 C軽石・黄褐色土粒を含む
  - 3 暗褐色土 締りなし
  - 4 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
  - 5 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
- P<sub>1e</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 2 暗褐色土 黄褐色土・砂質質塊(0.5)を含む
  - 3 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 4 暗褐色土 粘性白灰色土塊・横土粒・炭化粒を含む
  - 5 暗褐色土 C軽石少量・粘性を含み締り強い
  - 6 暗褐色土 C軽石少量・粘性を含み締りあり
  - 7 暗褐色土 粘性締り強い
- P<sub>1f</sub>**
- 1 暗褐色土 砂質質塊(0.5)を含み締る
  - 2 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 3 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 4 暗褐色土 粘性土締り強い
  - 5 暗褐色土 黄褐色土粒を含み粘性締りあり
- P<sub>1g</sub>**
- 1 暗褐色土 砂質質塊(0.5)を含み締る
  - 2 暗褐色土 C軽石少量 黄褐色土 粘性土を含み締る
  - 3 暗褐色土 C軽石少量含む
  - 4 暗褐色土 粘性土強い
  - 5 暗褐色土 白色粒を少量含む
- P<sub>1h</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 C軽石を含みや粘性あり
  - 3 暗褐色土 砂質質塊を含む
  - 4 暗褐色土 粘性締りあり
- P<sub>1i</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
  - 2 暗褐色土 黄褐色土粒を含み粘性あり
  - 3 暗褐色土 C軽石・黄褐色土粒を含む
  - 4 暗褐色土 土粒粗い
- P<sub>1j</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を少量含み締りあり
  - 2 暗褐色土 C軽石・黄褐色土を少量含む
  - 3 暗褐色土 C軽石・黄褐色土塊(1×1)を少量含む
  - 4 暗褐色土 C軽石を含み締りあり
  - 5 暗褐色土 C軽石を少量含む
  - 6 暗褐色土 C軽石を含む
  - 7 暗褐色土 C軽石を含みや褐色味あり

- P<sub>2</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 黄褐色土塊(2×2)を含む
  - 3 黄褐色土
  - 4 暗褐色土 C軽石 黄褐色土粒を含む
  - 5 灰褐色土 C軽石を少量含む
  - 6 灰褐色土 C軽石 黄褐色土粒を含む
  - 7 白灰色土 粘性土
  - 8 灰褐色土 C軽石 砂質質塊を含む
  - 9 暗褐色土 C軽石を含む
  - 10 暗褐色土
- P<sub>2a</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 C軽石を少量含み締りあり
  - 3 暗褐色土 灰色土塊を含み締りあり
  - 4 暗褐色土 黄色土塊を含む
- P<sub>2b</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土
  - 2 暗褐色土 締りなし
  - 3 暗褐色土 やや締りあり
- P<sub>2c</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土
  - 2 暗褐色土 C軽石を含む
  - 3 暗褐色土 締りあり
  - 4 暗褐色土 C軽石を含み土粒粗い
- P<sub>2d</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含み締りなし
  - 2 暗褐色土 C軽石を含み締り強い
  - 3 暗褐色土 黄褐色土を含み締り強い
  - 4 暗褐色土 黄褐色土を含み締る
  - 5 暗褐色土 C軽石・炭化粒・黄土粒を含む
- P<sub>2e</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含む
  - 2 暗褐色土 黄褐色土・横土粒を含む
  - 3 暗褐色土 C軽石を少量に含み締り強い
- P<sub>2f</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
  - 2 暗褐色土 C軽石を少量含みや粘性あり
  - 3 暗褐色土 砂質質塊を含み締りあり
- P<sub>2g</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石少量締りなし
  - 2 暗褐色土 C軽石少量や粘性あり
  - 3 暗褐色土 C軽石 黄褐色土塊を含み土粒粗い
  - 4 暗褐色土 C軽石を含む
  - 5 暗褐色土 C軽石を含む
  - 6 暗褐色土 黄色土粒を含み締り強い
- P<sub>2h</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
  - 2 暗褐色土 C軽石を含み締りあり
  - 3 灰褐色土 C軽石を含む
  - 4 暗褐色土 黄白色土塊 粘性土を含む
  - 5 暗褐色土 粘性を含み締り強い
- P<sub>2i</sub>**
- 1 暗褐色土 C軽石を含み締りなし
  - 2 暗褐色土 C軽石を含みやや締りあり
  - 3 灰褐色土 C軽石を含む
  - 4 暗褐色土 黄白色土塊 粘性土を含む
  - 5 暗褐色土 C軽石を含み締りあり
  - 6 暗褐色土 C軽石を含み締りあり

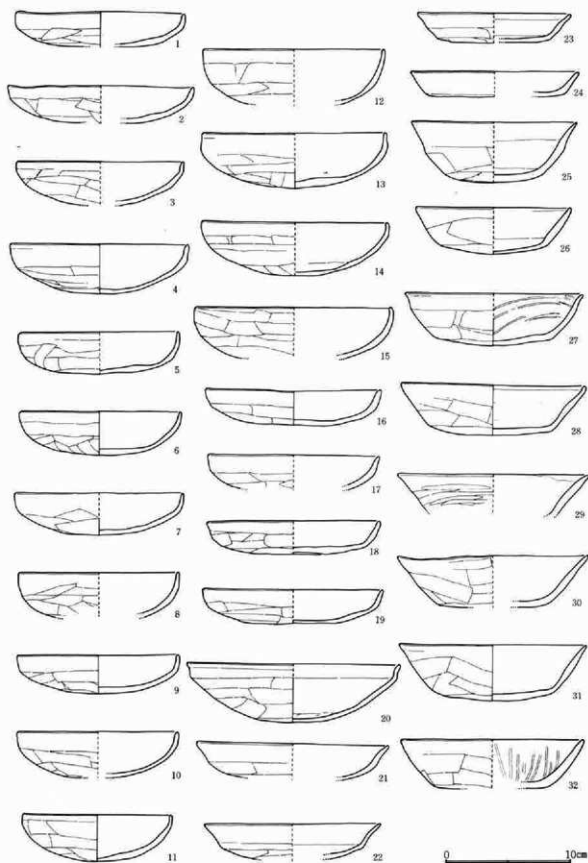


Fig.428 H10・11号溝出土遺物(1)

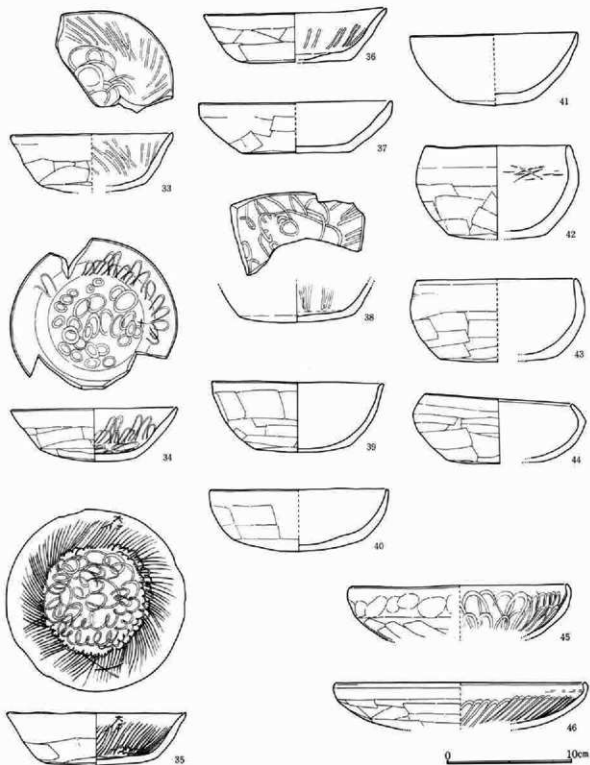


Fig.429 H10・11号溝出土遺物(2)

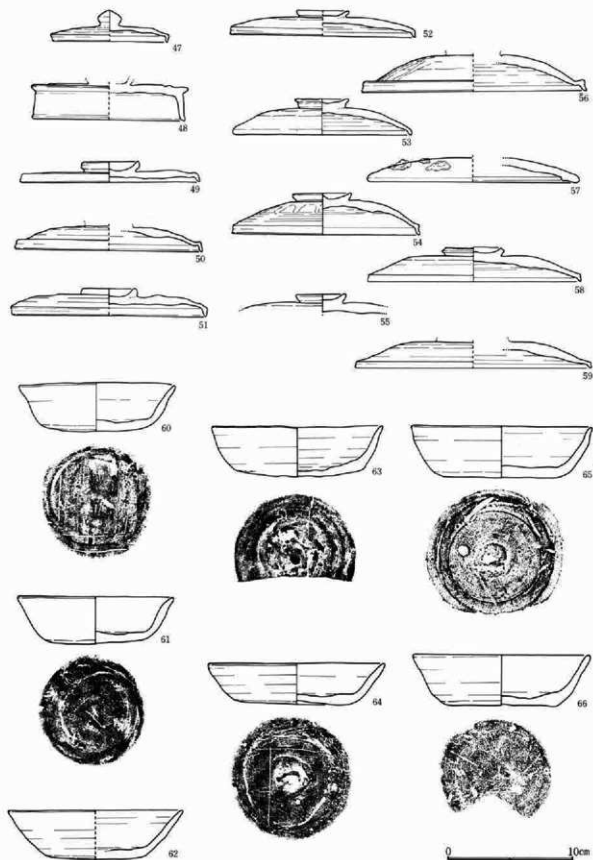


Fig.430 H10・11号溝出土遺物(3)

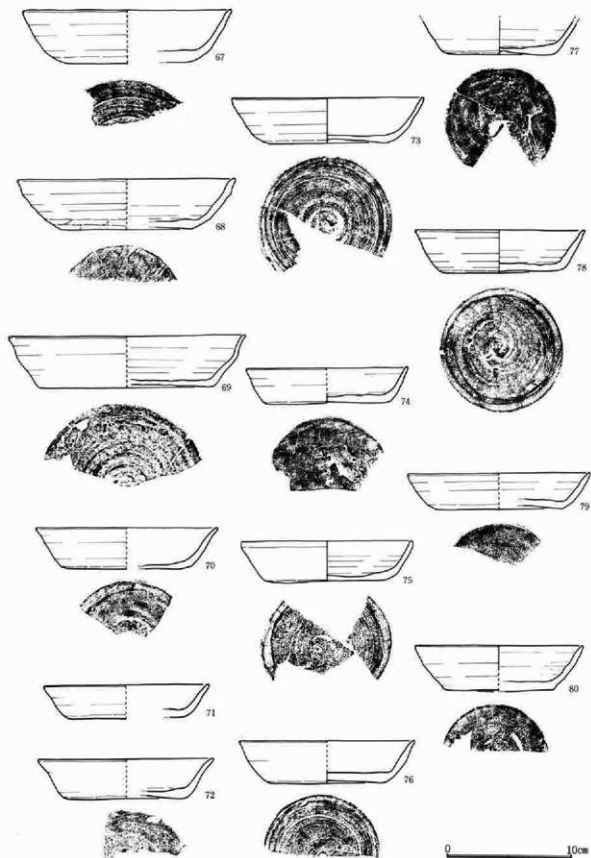


Fig.431 H10・11号溝出土遺物(4)

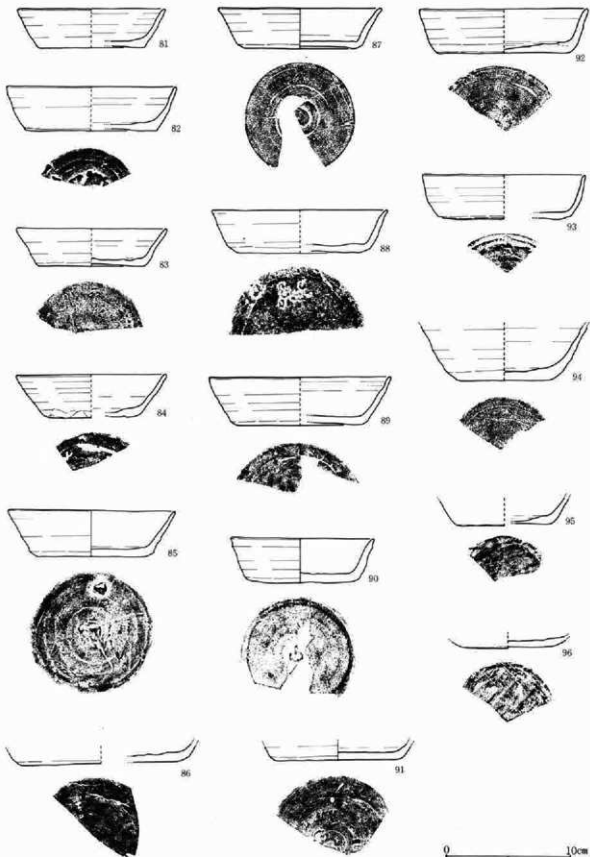


Fig.432 H10・11号溝出土遺物(5)

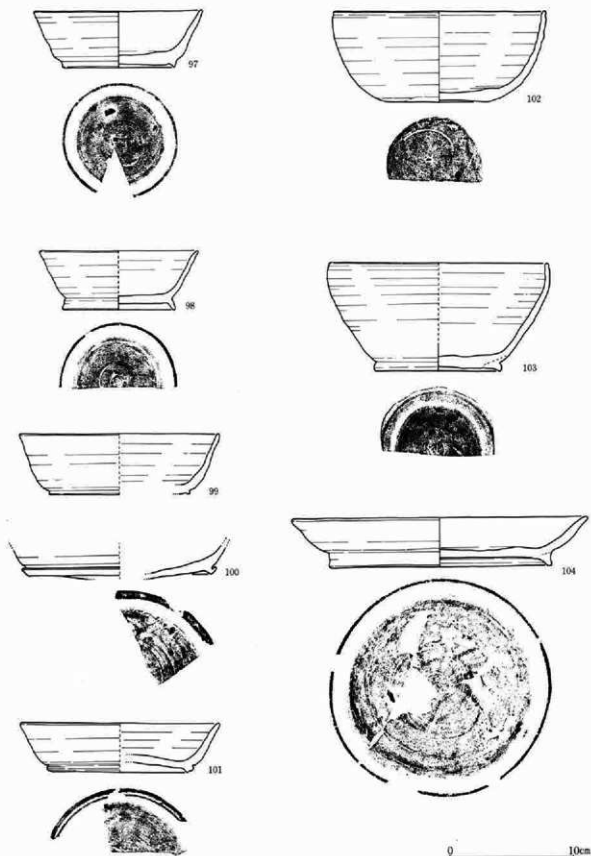


Fig.433 H10・11号溝出土遺物(6)



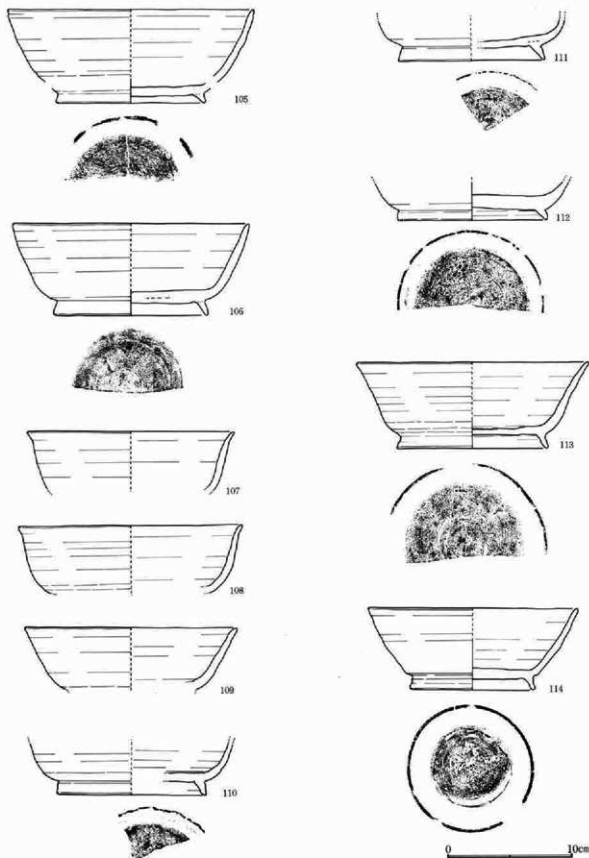


Fig.434 H10・11号溝出土遺物(7)

第4章 H区の遺構と遺物

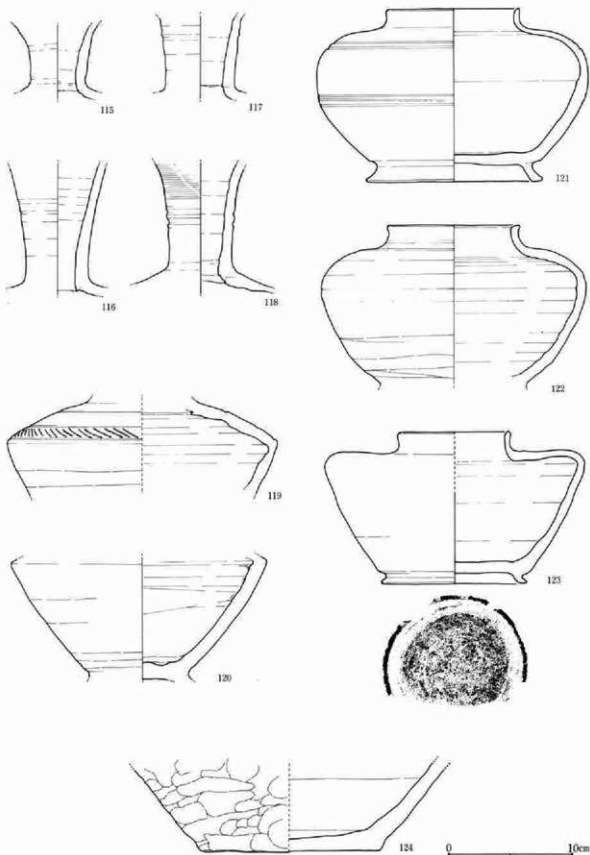


Fig.435 H10・11号溝出土遺物(8)

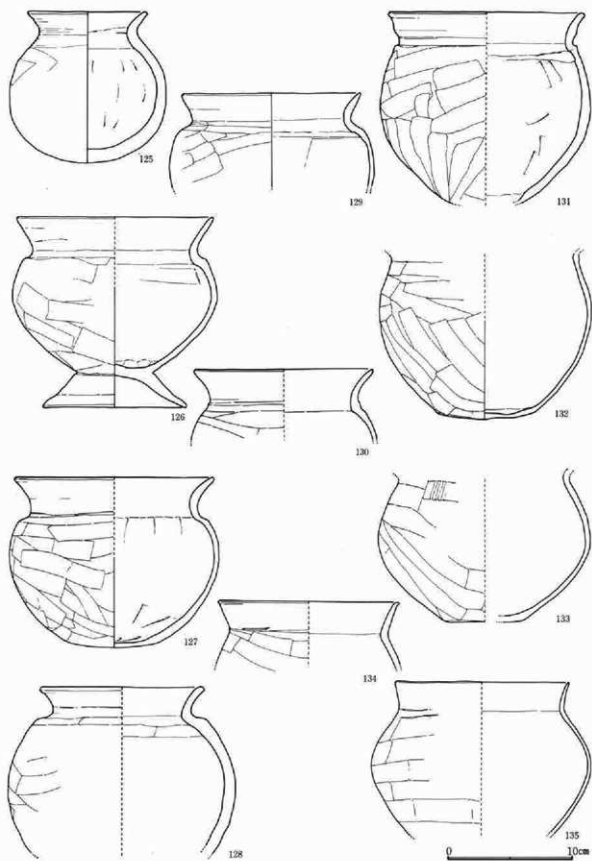


Fig.436 H10・11号溝出土遺物(9)

第4章 H区の遺構と遺物

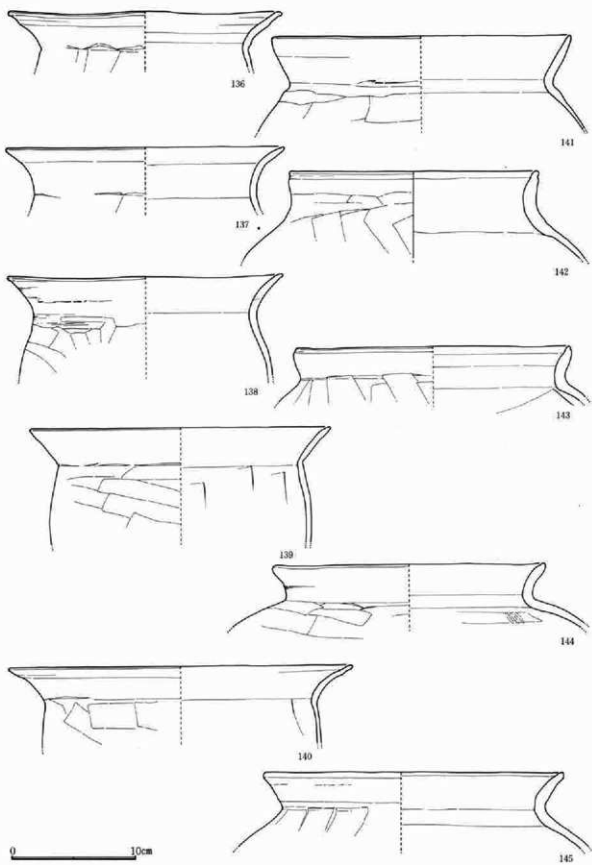


Fig.437 H10・11号溝出土遺物(10)

H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
428-1 150-1	土 師 器 杯	口～底 片	13.4 × — × 2.8	南東部下	指押。口縁部無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
428-2 150-2	土 師 器 杯	口～底 片	14.8 × — × 2.9	埋 土	指押。口縁部無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・劣化 ②橙 ③細砂混る
428-3 150-3	土 師 器 杯	口～底 片	13.2 × — × 3.5	埋 土	指押。口縁部無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙、に よい黄橙 ③細砂混る
428-4 150-4	土 師 器 杯	口～底 片	14.4 × — × 3.9	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部横・不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
428-5 150-5	土 師 器 杯	口～底 片	12.9 × — × 3.3	南 東 部	指押。口縁部無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
428-6 150-6	土 師 器 杯	口～底 片	12.9 × — × 3.5	埋 土	指押。口縁部無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
428-7 150-7	土 師 器 杯	口～底 片	13.6 × — × 3.5	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部幅広不定方向寛削り後全体無で。	①酸化・劣化顯著 ② によい橙 ③細砂混る
428-8 150-8	土 師 器 杯	口～体 片	12.7 × — × (3.6)	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③ 細砂混る
428-9 150-9	土 師 器 杯	口～底 片	13.0 × — × 3.0	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部不定方向寛削り。底部吸灰	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
428-10 150-10	土 師 器 杯	口～底 片	12.7 × — × 3.7	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部横・不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
428-11 150-11	土 師 器 杯	口～底 片	12.0 × — × 3.7	埋 土	指押。口縁部無で。体底部横・不定方向寛削り。	①酸化・劣化顯著 ② によい橙 ③細砂混る
428-12 150-12	土 師 器 杯	口～体 小片	14.4 × — × 4.4	埋 土	指押。口縁部無で。体部横方向寛削り。	①酸化・劣化 ②橙 ③細砂混る
428-13 150-13	土 師 器 杯	口～底 片	14.8 × — × 4.4	南 東 部	指押。口縁部無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
428-14 150-14	土 師 器 杯	口～底 小片	15.0 × — × 4.3	南 東 部	指押。口縁部無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
428-15 150-15	土 師 器 杯	口～体 片	16.0 × — × (4.0)	南 東 部	指押。口縁～体部横方向寛削り。口唇部のみ無で、やや内湾。	①酸化・良 ②黄橙 ③細砂混る
428-16 150-16	土 師 器 杯	口～底 片	14.2 × — × 2.9	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部横・不定方向寛削り。	①酸化・良 ②によい 橙 ③細砂混る
428-17 150-17	土 師 器 杯	口～体 小片	13.7 × — × (2.8)	埋 土	指押。口縁部無で。体部横方向寛削り。	①酸化・一部劣化 ② によい橙 ③細砂混る
428-18 150-18	土 師 器 杯	口～底 片	14.0 × — × 2.7	南 東 部	指押。口縁部無で。体底部寛削り後、無で。	①酸化・劣化 ②橙 ③細砂混る
428-19 150-19	土 師 器 杯	口～底 片	14.5 × — × 2.7	埋 土	指押。口縁部無で。体底部横・不定方向寛削り。	①酸化・良 ②によい 橙 ③細砂混る

第4章 日区の遺構と遺物

H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
428-20 150-20	土器 杯	口~底 片	17.2 × — × 4.7	埋土	指押。口縁部無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
428-21 150-21	土器 杯	口~底 片	15.4 × — × (2.8)	南東部	指押。口縁部無で。体部横方向寛削り。	①酸化・劣化顯著 ② によい橙 ③細砂混る
428-22 150-22	土器 杯	口~底 片	14.2 × 11.2 × (2.8)	埋土	指押。口縁部狭い無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③細砂混る
428-23 150-23	土器 杯	口~底 小片	12.3 × 9.0 × 2.4	埋土	指押。口縁部無で。体部横方向、底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
428-24 150-24	土器 杯	口~底 片	13.4 × 11.2 × 2.0	埋土	指押。口縁~体部無で。底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
428-25 151-25	土器 杯	口~底 片	13.2 × 7.8 × 4.8	南東部	指押。口縁部狭い無で。体部横方向、底部不定方向寛削り。	①酸化・劣化顯著 ② によい橙 ③緻密
428-26 151-26	土器 杯	口~底 片	12.4 × 8.5 × 3.7	南東部	指押。口縁部無で。体部幅広横方向、底部不定方向寛削り。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③細砂混る
428-27 151-27	土器 杯	口~底 片	14.2 × 9.6 × 4.2	南東部	指押。口縁部無で。体部横方向、底部不定方向寛削り。内面弧状隆線。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③砂混る
428-28 151-28	土器 杯	口~底 片	14.8 × 9.8 × 4.1	南東部	紐造巻上。口縁部無で。体部横方向、底部不定方向寛削り。口唇部やや内湾。	①酸化・良 ②橙 ③ 細砂混る
428-29 151-29	土器 杯	口~体 片	15.2 × — × (3.2)	南東部	指押。口縁部無で。体部横方向の強い無で。内面炭化物付着。	①酸化・良好 ②に よい橙 ④細砂混る
428-30 151-30	土器 杯	口~底 片	15.2 × 8.0 × 4.1	埋土	指押。口縁部狭い無で。体部~底部不定方向寛削り。口縁部み顯著。	①酸化・劣化顯著 ② によい橙 ③細砂混る
428-31 151-31	土器 杯	口~底 片	14.9 × 8.5 × 4.5	南西部	紐造巻上。口縁部狭い無で。体部横方向、底部不定方向寛削り。	①酸化・良・劣化 ② 橙 ③白粒砂混る
428-32 151-32	土器 杯	口~底 片	14.6 × 9.3 × 3.9	南東部	紐造巻上。口縁部無で。体部横方向、底部不定方向寛削り。内面放射状隆文。	①酸化・良 ②黄橙 ③緻密
429-33 151-33	土器 杯	口~底 片	13.0 × 8.0 × 4.6	埋土	紐造巻上。口縁部無で。体部~底部狭い削り。内面斜状。見込部円状隆文。	①酸化・良 ②橙 ③ 緻密
429-34 151-34	土器 杯	口~底 片	13.4 × 7.8 × 4.2	埋土	紐造巻上。口縁部無で。体部横~底部不定方向寛削り。内面・見込部円状隆文。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
429-35 151-35	土器 杯	口~底 完	14.4 × 9.0 × 4.2	南東部	紐造巻上。口縁部無で。体部横~底部不定方向寛削り。内面斜状。見込部螺旋状隆文。内面隆文上に「大伴××」景撰き。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③緻密
429-36 151-36	土器 杯	口~底 片	14.6 × 9.0 × 4.2	埋土	紐造巻上。口縁部無で。体部横~底部不定方向寛削り。内面斜状隆文わずかに残る。	①酸化・良・劣化顯著 ②橙 ③緻密
429-37 151-37	土器 杯	口~底 片	15.5 × 8.7 × 4.0	南東部	紐造巻上。口縁部無で。体~底部削り。	①酸化・劣化顯著 ②黄橙 ③緻密
429-38 151-38	土器 杯	口~底 片	— × 9.3 × 3.0	南南東部	紐造巻上。体部横、底部不定方向寛削り。体部放射状・見込部不連続螺旋状隆文。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密

H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
429-39 151-39	土師器 杯	口~底 完	13.8 × 7.6 × 5.6	南東部	紐造垂上か。口縁部無で。体部横方向、 底部不定方向瓦削り。	①酸化・良 ②橙 ③ 細砂混る
429-40 151-40	土師器 杯	口~底 片	14.4 × 10.4 × 4.9	南東部	紐造垂上か。口縁部無で。体部横方向、 底部不定方向瓦削り。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③緻密
429-41 151-41	土師器 杯	口~底 片	13.4 × 6.3 × 5.6	埋土	紐造垂上か。口縁部無で。体部及び底部 瓦削り痕、厚紙のため不鮮明。	①酸化・劣化顯著 ② にぶい橙 ③緻密
429-42 151-42	土師器 鉢	口~底 片	11.6 × 8.0 × 7.4	南東部	紐造。口縁部無で。体部横方向、底部不 定方向瓦削り後、磨で。	①酸化・良好 ②灰橙 ③細砂少混る
429-43 151-43	土師器 鉢	口~底 小片	12.8 × 9.5 × 6.5	南東部	紐造。口縁部無で。体部横方向、底部不 定方向瓦削り。内面磨でいい。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
429-44 151-44	土師器 杯	口~底 片	11.8 × 7.7 × 5.1	南東部	紐造。口縁部無で。体部横方向、底部不 定方向瓦削り。全体に重み顯著。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
429-45 151-45	土師器 大型杯	口~底 小片	17.2 × — × (4.3)	南東部	指押。口縁部無で。体部不定方向瓦削り。 内面螺旋状暗文。口唇部内溝。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
429-46 151-46	土師器 大型杯	口~底 片	29.4 × — × (3.7)	南東部	指押。口縁部無で。体部不定方向瓦削 り。内面螺旋状暗文。口唇部内溝。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
430-47 151-47	須恵器 蓋	胴~底 片	9.5 × 横1.9 × 2.5	埋土	轆轤。右回転。頂部3段回転瓦削り。宝 珠形塊。小型短頸蓋用か。	①還元・良好・型緻 ②灰 ③緻密
430-48 151-48	須恵器 蓋	頂~底 片	12.3 × — × (3.2)	南東部	轆轤。右回転。頂部回転瓦削り。横状塊 欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
430-49 152-49	須恵器 蓋	胴~底 片	14.4 × 横4.6 × 1.6	南東部	轆轤。右回転。平頂部4段回転瓦削り。 横状塊。横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③黒色細砂混る
430-50 152-50	須恵器 蓋	頂~底 片	15.0 × — × (1.9)	南東部	轆轤。右回転。頂部2段回転瓦削り。横 状塊。欠損。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
430-51 152-51	須恵器 蓋	胴~底 片	15.6 × 横4.5 × 2.2	南東部	轆轤。右回転。頂部回転瓦削り。横横無 で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
430-52 152-52	須恵器 蓋	胴~底 小片	14.8 × 横4.2 × 2.0	南東部	轆轤。右回転。頂部回転瓦削り。横横無 で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
430-53 152-53	須恵器 蓋	胴~底 片	14.4 × 横4.3 × 2.8	南東部	轆轤。右回転。頂部4段回転瓦削り。横 横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
430-54 152-54	須恵器 蓋	胴~底 片	15.1 × 横4.7 × 3.3	南東部	轆轤。右回転。頂部2段回転瓦削り。横 横無で。頂部、放射状火だすき文。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
430-55 152-55	須恵器 蓋	胴~頂 片	— × 横4.0 × 1.5	南東部	轆轤。右回転。頂部3段回転瓦削り。横 横無で。	①還元・低温・軟質 ②灰 ③緻密
430-56 152-56	須恵器 蓋	頂~底 片	18.0 × — × (2.9)	南東部	轆轤。右回転。頂部3段回転瓦削り。頂 部放射状火だすき文。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
430-57 152-57	須恵器 蓋	頂~底 片	17.0 × — × (1.9)	南東部	轆轤。右回転。厚手。頂部灰被り。家壁 片固着。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密

第4章 H区の遺構と遺物

H10・11号清出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
430-58 152-58	須恵器 蓋	横～端 %	17.0 × 横 4.9 × 2.7	南東部	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。横有段、横撫で。一部歪む。	①還元・良好 ②灰オリーブ ③細砂混る
430-50 152-59	須恵器	頂～端 %	18.8 × - × (2.1)	南東部	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。横欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③黒粒砂混る
430-60 152-60	須恵器 杯	口～底 完	12.5 × 7.5 × 3.9	南東部	轆轤。右回転。底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②灰 ③細砂混る
430-61 152-61	須恵器 杯	口～底 完	12.4 × 8.0 × 3.8	南東部	轆轤。右回転寛削り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
430-62 152-62	須恵器 杯	口～底 %	14.0 × 8.0 × 3.8	南東部	轆轤。右回転寛削り。底部横で。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
430-63 152-63	須恵器 杯	口～底 %	13.8 × 10.0 × 3.9	南東部	轆轤。右回転寛削り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
430-64 152-64	須恵器 杯	口～底 完	14.2 × 8.5 × 3.2	南東部	轆轤。右回転。底部不定方向寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密、一部細砂混る。
430-65 152-65	須恵器 杯	口～底 %	14.4 × 9.4 × 4.1	南東部	轆轤。右回転寛削り。腰～底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
430-66 152-66	須恵器 杯	口～底 %	14.2 × 7.0 × 4.0	南東部	轆轤。右回転寛削り。腰～底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
431-67 152-67	須恵器 杯	口～底 小片	16.6 × 10.0 × 4.2	南東部	轆轤。右回転。腰～底部、回転寛削り。	①還元・良 ②明青灰 ③細砂混る
431-68 152-68	須恵器 杯	口～底 %	17.4 × 10.0 × 4.0	南東部	底部円柱、体部絶造巻上。轆轤。右回転。底部回転寛削り後、腰部等一部寛削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
431-69 152-69	須恵器 杯	口～底 %	19.0 × 14.0 × 4.1	南東部	轆轤。右回転寛削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
431-70 152-70	須恵器 杯	口～底 %	14.6 × 9.4 × 3.3	南東部	轆轤。右回転寛削り。底部一部横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
431-71 152-71	須恵器 杯	口～底 小片	13.2 × 9.4 × 2.6	南東部	轆轤。右回転寛削り。底部不定方向寛削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
431-72 152-72	須恵器 杯	口～底 %	14.0 × 10.0 × 3.1	埋土	轆轤。右回転寛削り。底部回転寛削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
431-73 153-73	須恵器 杯	口～底 %	15.4 × 9.4 × 3.6	南東部	轆轤。右回転。底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
431-74 153-74	須恵器 杯	口～底 %	13.0 × 10.0 × 2.8	南東部	轆轤。右回転寛削り。底部不定方向寛削り。	①還元・やや低溫 ②灰白 ③緻密
431-75 153-75	須恵器 杯	口～底 %	13.6 × 9.0 × 3.3	埋土	轆轤。右回転寛削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
431-76 153-76	須恵器 杯	口～底 %	14.0 × 9.4 × 3.3	埋土	轆轤。右回転。底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密



H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
431-77 153-77	須恵器 杯	口~底 残	— × 8.8 × (2.7)	埋土	轆轤, 右回転寛切り。底縁部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
431-78 153-78	須恵器 杯	口~底 完	13.5 × 9.5 × 3.5	南東部	轆轤, 右回転寛切り。底部浅い回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
431-79 153-79	須恵器 杯	口~底 残	14.6 × 10.2 × 2.9	南東部	轆轤, 右回転。底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③ 緻密
431-80 153-80	須恵器 杯	口~底 残	13.4 × 8.8 × 3.6	南東部	轆轤, 右回転。底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-81 153-81	須恵器 杯	口~底 残	11.8 × 4.3 × 3.1	南東部	轆轤, 右回転寛切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
432-82 153-82	須恵器 杯	口~底 残	13.6 × 10.6 × 3.5	埋土	轆轤, 右回転寛切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
432-83 153-83	須恵器 杯	口~底 残	12.0 × 8.4 × 3.0	埋土	轆轤, 右回転寛切り。底部浅い回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-84 153-84	須恵器 杯	口~底 残	12.0 × 7.4 × 3.4	南東部	轆轤, 右回転寛切り。腰部手持寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-85 153-85	須恵器 杯	口~底 残	13.4 × 8.7 × 3.7	南東部	轆轤, 右回転寛切り。腰~底縁部回転寛削り。	①還元・良好・やや軟質 ②灰白 ③細砂混る
432-86 153-86	須恵器 杯	底 残	— × 13.0 × (1.4)	南東部	轆轤, 右回転。底部手持寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
432-87 153-87	須恵器 杯	口~底 残	13.2 × 9.0 × 3.2	南東部	轆轤, 右回転寛切り。腰~底縁部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
432-88 153-88	須恵器 杯	口~底 残	14.1 × 9.5 × 3.4	南東部	轆轤, 右回転。底部灰被りのため調整不明。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-89 153-89	須恵器 杯	口~底 残	14.6 × 10.3 × 3.9	南東部	轆轤, 右回転。腰~底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
432-90 153-90	須恵器 杯	口~底 残	11.5 × 8.5 × 3.5	南東部	轆轤, 右回転寛切り。底縁部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
432-91 153-91	須恵器 杯	底 残	— × 10.0 × (1.2)	埋土	轆轤, 右回転寛切り。腰~底部、浅い回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-92 153-92	須恵器 杯	口~底 小片	13.4 × 10.0 × 3.5	埋土	高部円柱状。轆轤, 右回転寛切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
432-93 153-93	須恵器 杯	口~底 残	13.0 × 9.8 × 3.5	南東部	轆轤, 右回転寛切り。腰~底縁部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-94 153-94	須恵器 杯	口~底 残	— × 7.4 × (4.3)	南東部	轆轤, 右回転。底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
432-95 153-95	須恵器 杯	口~底 残	— × 7.6 × (2.1)	南東部	轆轤, 右回転。底部手持寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
432-96 153-96	須恵器 杯	底 底片	— × 7.4 × (0.8)	埋土	轆轤。右回転。底部手持部削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
433-97 154-97	須恵器 椀	口～底 底片	13.5 × 9.0 × 4.5	南東部	轆轤。右回転。腰～高台・底部回転部削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
433-98 154-98	須恵器 椀	口～底 底片	12.8 × 9.0 × 4.7	南東部	轆轤。右回転。底面回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
433-99 154-99	須恵器 椀	口～底 小片	16.0 × 11.2 × 4.8	埋土	轆轤。右回転。腰～高台回転部削り。高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
433-100 154-100	須恵器 椀	体～底 底片	— × 14.6 × (2.6)	埋土	轆轤。右回転。腰～高台・底部回転部削り。内面不定方向撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
433-101 154-101	須恵器 椀	口～底 底片	16.0 × 10.6 × 3.9	南東部	轆轤。右回転。腰～高台・底部回転部削り。高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
433-102 154-102	須恵器 鉢	口～底 底片	17.0 × 8.0 × 7.2	南東部	轆轤。右回転。腰～底部回転部削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
433-103 154-103	須恵器 鉢	口～底 底片	17.4 × 10.0 × 8.6	南東部	轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
433-104 154-104	須恵器 盥	口～底 底片	23.6 × 17.8 × 3.9	南東部	底部円柱造。轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
434-105 154-105	須恵器 椀	口～底 底片	19.8 × 12.0 × 7.5	南東部	轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・低溫・軟質 ②灰白 ③緻密
434-106 154-106	須恵器 椀	口～底 底片	19.0 × 12.0 × 7.3	埋土	轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
434-107 154-107	須恵器 椀	口～体 底片	16.6 × — × (4.7)	南東部	轆轤。右回転。口唇部外反。	①還元・良好 ②灰オリーブ ③緻密
434-108 154-108	須恵器 椀	口～体 小片	18.0 × — × (5.4)	南東部	轆轤。右回転。腰部回転部削り。口唇部外反。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
434-109 154-109	須恵器 椀	口～体 小片	17.0 × — × (4.9)	南東部	轆轤。右回転。	①加酸化還元・良好 ②黄灰 ③細砂混る
434-110 154-110	須恵器 椀	体～底 底片	— × 12.0 × (4.2)	南東部	轆轤。右回転。腰・底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
434-111 154-111	須恵器 椀	体～底 底片	— × 11.6 × (3.2)	南東部	底部円柱造。轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
434-112 154-112	須恵器 椀	体～底 底片	— × 11.9 × (3.0)	南東部	轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
434-113 154-113	須恵器 椀	口～底 底片	18.6 × 12.0 × 6.9	南東部	轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
434-114 154-114	須恵器 椀	口～底 底片	16.8 × 10.0 × 6.5	西部上	轆轤。右回転。底部回転部削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存位	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
435-115 154-115	須恵器 長頸壺	頸	— × — × (5.8)	埋土	紐造巻上げ。横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
435-116 154-116	須恵器 長頸壺	頸	— × — × (10.3)	南東部	紐造巻上げ。横無で。外面灰被り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
435-117 154-117	須恵器 長頸壺	頸	— × — × (6.4)	埋土	紐造巻上げ。横無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
435-118 154-118	須恵器 長頸壺	頸	— × — × (10.2)	南東部	紐造巻上げ。横無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
435-119 154-119	須恵器 長頸壺	上～中 部	— × — × (7.3)	南東部	紐造巻上げ、横無で。上位に3条沈線、橋 先刺突進状文、体部中位横方向寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
435-120 155-120	須恵器 長頸壺	中～下 部	— × — × (9.7)	南東部	紐造巻上げ。横無で。底部回転寛削り。 付高台斜落。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
435-121 155-121	須恵器 短頸壺	口～底 部	10.6 × 14.1 × 13.7	南東部	紐造。横無で。体部上位に2条、中位に 3条沈線。付高台横無で。灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
435-122 155-122	須恵器 短頸壺	口～下 部	10.5 × — × 12.7	南東部	紐造。横無で。体部下部、回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
435-123 155-123	須恵器 短頸壺	口～底 部	9.0 × 11.6 × 12.1	南東部	紐造。横無で。体部下部、回転寛削り。 灰被り。体部上位焼き歪みのため陥没。	①還元・高濃②灰 ③細砂混る
435-124 155-124	須恵器 下～底 部	下～底 部	— × 14.3 × (7.3)	埋土	紐造。指押。内面横方向無で。	①還元・良 ②黄灰 ③砂混る
436-125 155-125	土器 壺	口～底 部	9.5 × — × 12.1	東部	紐造巻上げ。口頸部無で。体底部細削り り後、撫で。内面、寛撫で後、黒色処理。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る
436-126 155-126	土器 台付壺	口～底 部	15.6 × 11.4 × 15.2	南東部	紐造。口頸部無で。体部横～斜方向寛削り。 付高台無で。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
436-127 155-127	土器 壺	口～底 部	16.0 × — × 13.5	南東部	紐造。口頸部強い撫で。体部横、底部不 定方向寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
436-128 156-128	土器 壺	口～下 部	13.2 × — × (13.3)	南東部	紐造。口頸部強い撫で。体部主に横方向 寛削り。内面無で。	①酸化・良 ②赤褐 ③砂混る
436-129 156-129	土器 壺	口～上 部	14.4 × — × (7.5)	南東部	紐造。口頸部無で。体部横～斜方向寛削り。 内面寛撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る
436-130 156-130	土器 壺	口～上 部	14.2 × — × (5.6)	北東部	紐造。口頸部無で。体部横方向寛削り。 内面炭化物付着。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
436-131 156-131	土器 壺	口～下 部	15.5 × — × (15.3)	南東部	紐造。口頸部強い撫で2段。体部上半斜、 下半斜方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
436-132 156-132	土器 壺	上～底 部	— × 7.8 × (13.3)	南東部	紐造。口頸部無で。体部上半横～斜、下 半斜～般方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る
436-133 156-133	土器 壺	上～底 部	— × 6.4 × (11.7)	南東部	紐造。体部上半横、下半斜方向寛削り。 内面無で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H10・11号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成	②色調
			口径 × 底径 × 器高				胎土	その他
436-134 156-134	土師器 壺	口～上 1/2	14.4 ×	— × (5.5)	南東部	紐造。口頸部無で。体部横方向窪削り。 内面磨で。	①酸化・良	②橙 ③細砂混る
436-135 156-135	土師器 壺	口～下 1/2	13.8 ×	— × (12.3)	南東部	紐造。口頸部無で。体部横方向窪削り。 内面磨で。	①酸化・良	②橙 ③細砂混る
437-136 156-136	土師器 壺	口～上 1/2	22.0 ×	— × (5.0)	南東部	紐造。口頸部無で。体部上位縦方向窪削り。	①酸化・良好	②によ い橙 ③細砂混る
437-137 157-137	土師器 壺	口～上 1/2	22.3 ×	— × (5.2)	南東部	紐造。口頸部無で。体部上位縦方向窪削り。	①酸化・良好	②橙 ③細砂混る
437-138 157-138	土師器 壺	口～上 1/2	22.0 ×	— × (8.0)	南東部	紐造。口頸部無で。体部上位縦方向窪削り。	①酸化・良好	②によ い橙 ③細砂混る
437-139 157-139	土師器 口～上 小片	口～上 小片	24.2 ×	— × (9.3)	南東部	紐造。口頸部無で。体部上位横方向窪削り。	①酸化・良	②橙 ③細砂混る
437-140 157-140	土師器 壺	口～上 1/2	27.5 ×	— × (6.5)	埋土	紐造。口頸部無で。体部上位横方向窪削り。	①酸化・良好	②によ い橙 ③細砂混る
437-141 157-141	土師器 壺	口～上 1/2	23.8 ×	— × (7.6)	南東部	紐造。口頸部無で。体部上位横方向窪削り。	①酸化・良好	②橙 ③細砂混る
437-142 157-142	土師器 壺	口～上 1/2	20.0 ×	— × (7.0)	南東部	紐造。口頸部粗い無で。体部上位斜方向窪削り。	①酸化・良好	②橙 ③砂混る
437-143 157-143	土師器 壺	口～上 1/2	22.0 ×	— × (4.4)	南東部	紐造。口頸部無で。体部縦方向窪削り。	①酸化・良	②によ い橙 ③細砂混る
437-144 157-144	土師器 壺	口～上 1/2	21.6 ×	— × (6.0)	南東部	紐造。口頸部強い無で。体部横方向窪削り。	①酸化・良好	②によ い橙 ③細砂混る
437-145 157-145	土師器 壺	口～上 1/2	24.0 ×	— × (6.0)	南東部	紐造。口頸部強い無で。体部縦方向粗い窪削り。	①酸化・良好	②によ い橙 ③細砂混る

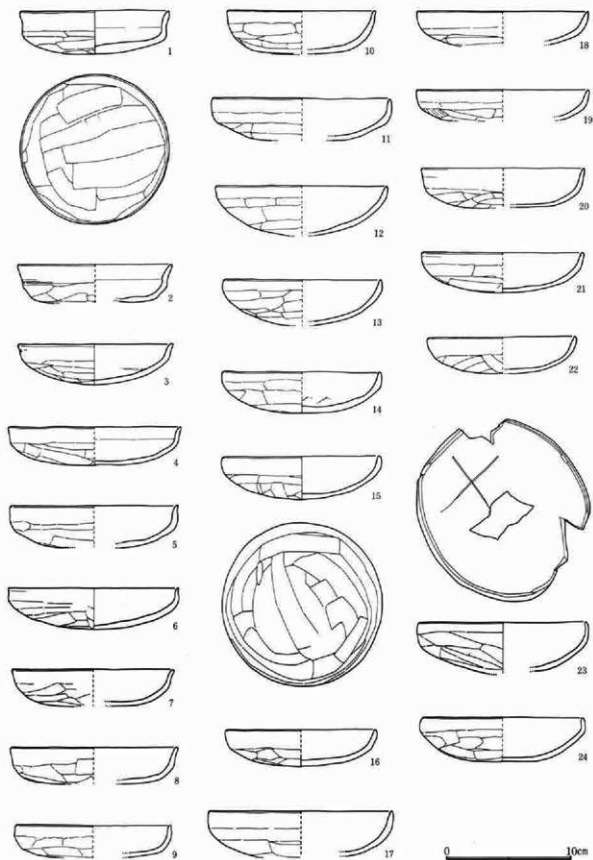


Fig.438 H12号溝出土遺物(1)

第4章 H区の遺構と遺物

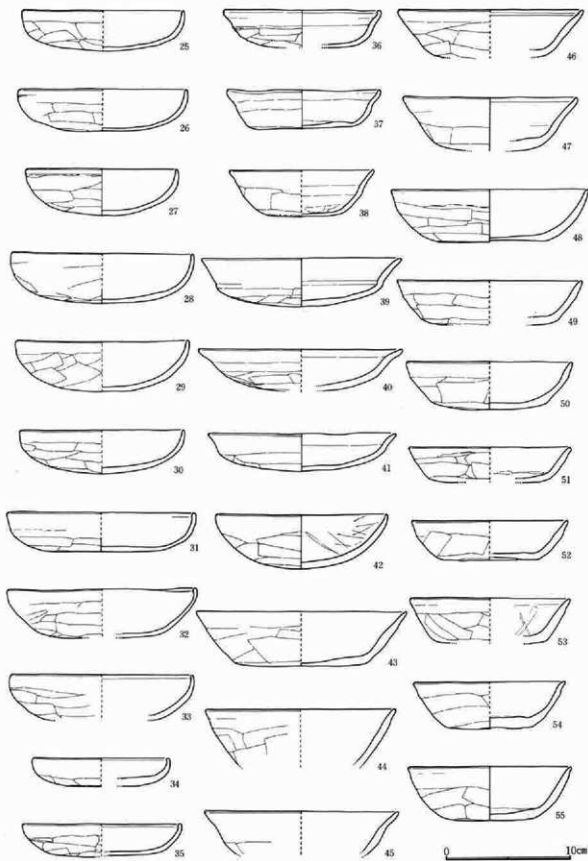


Fig.439 H12号溝出土遺物(2)

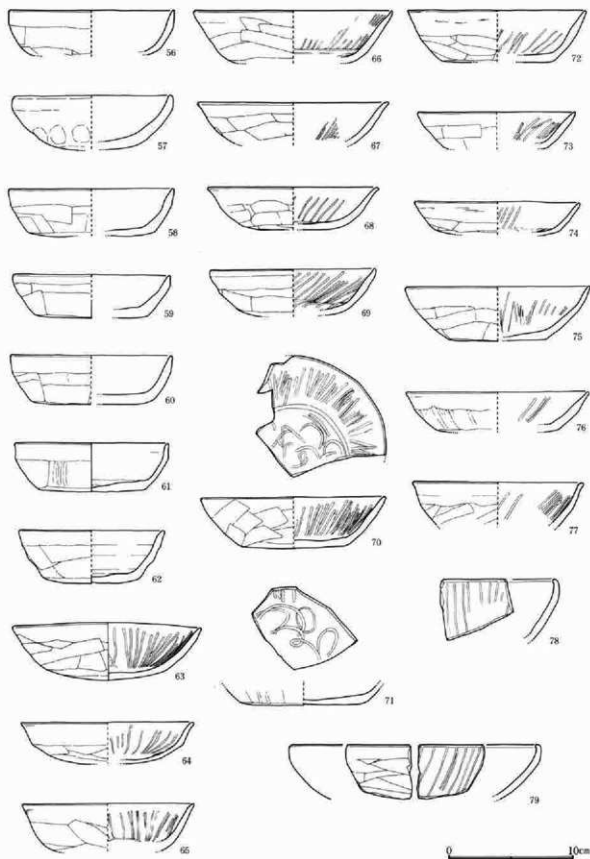
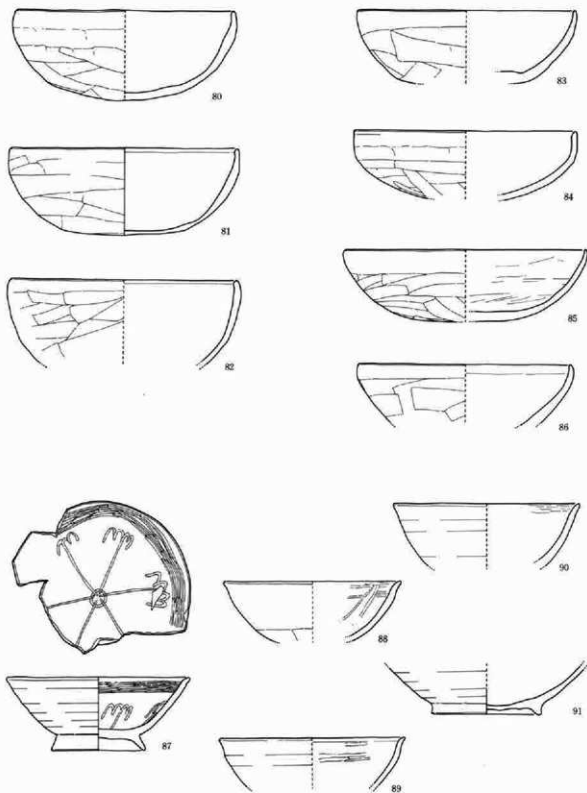


Fig.440 H12号溝出土遺物(3)

第4章 H区の遺構と遺物



0 10cm

Fig.441 H12号溝出土遺物(4)



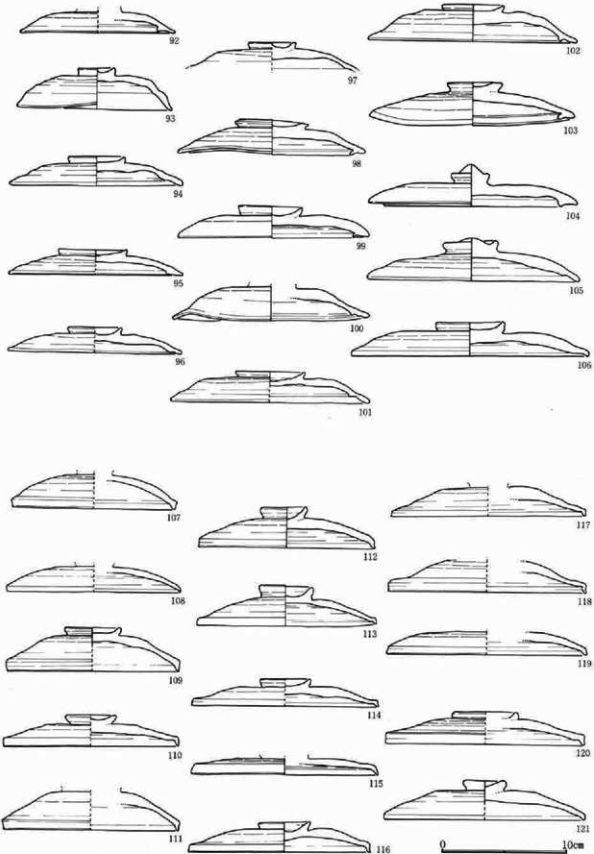


Fig.442 H12号溝出土遺物(5)

第4章 H区の遺構と遺物

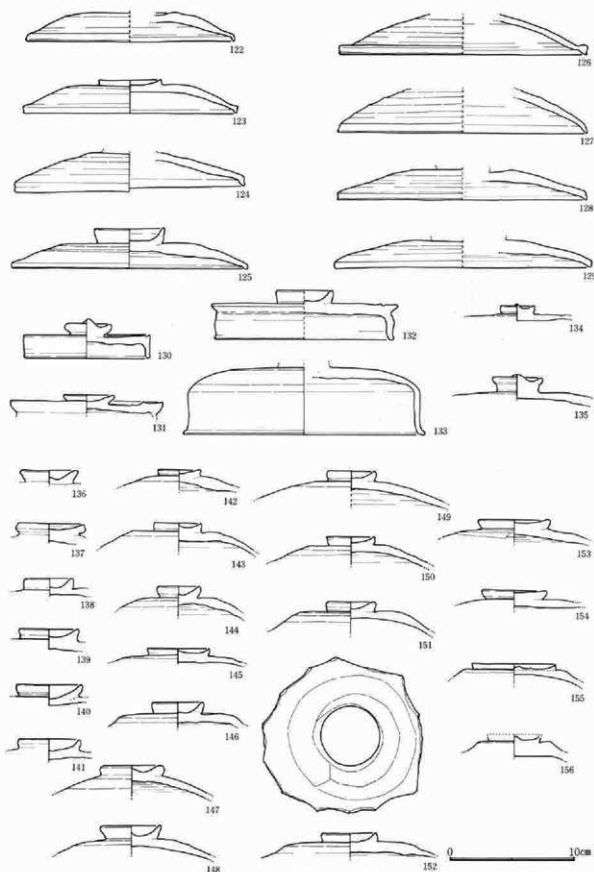


Fig.443 H12号溝出土遺物(6)

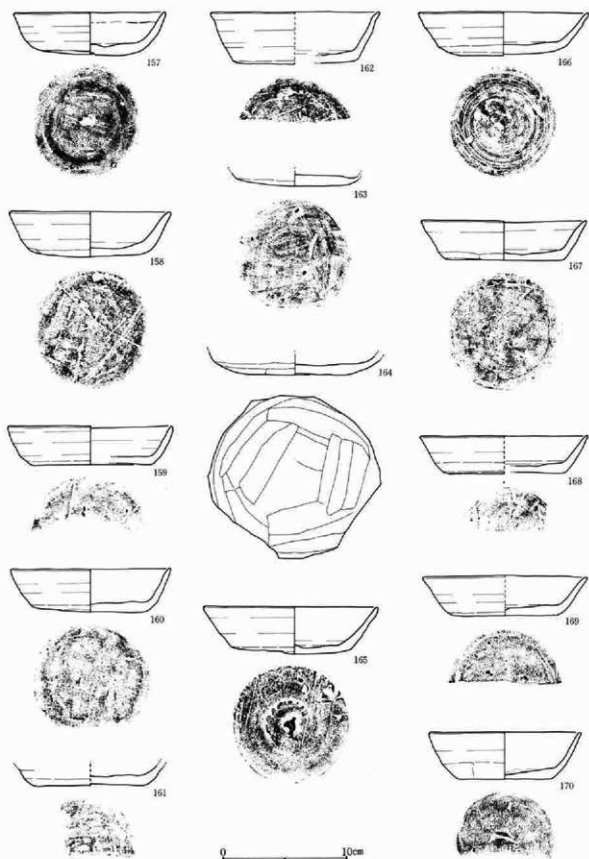


Fig.444 H12号溝出土遺物(7)

第4章 H区の遺構と遺物

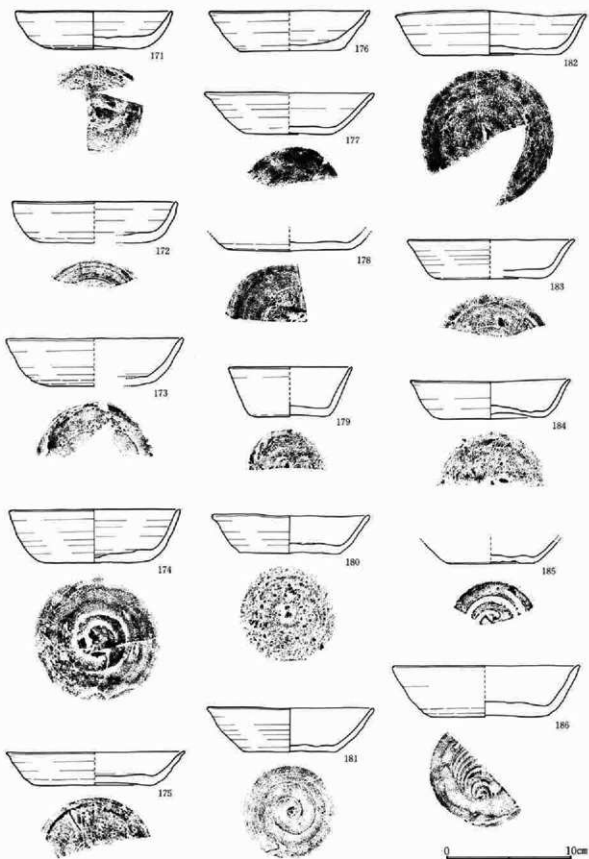


Fig.445 H12号溝出土遺物(8)

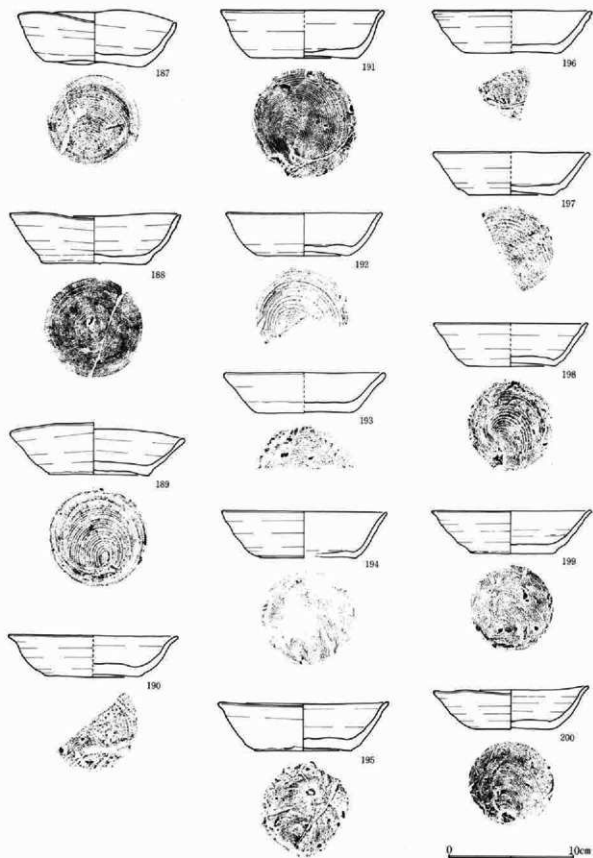


Fig.446 H12号溝出土遺物(9)

第4章 H区の遺構と遺物

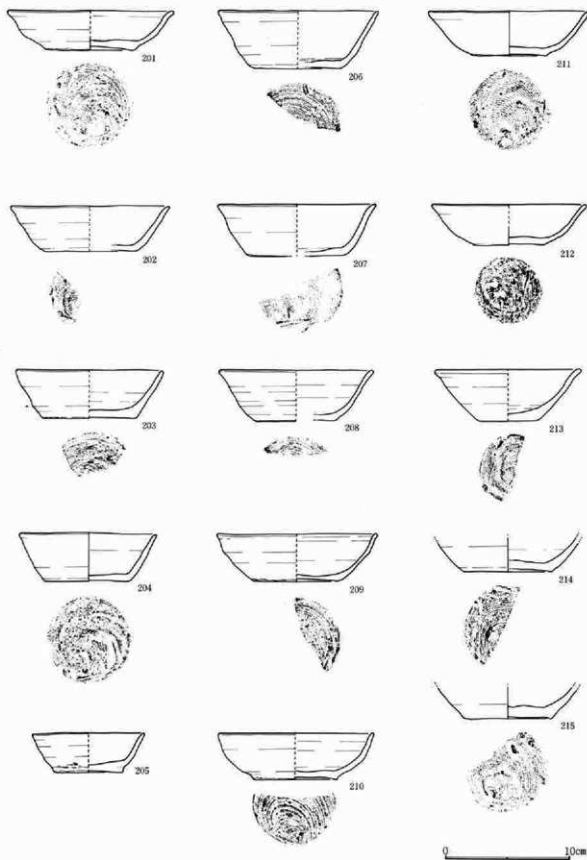


Fig.447 H12号溝出土遺物(10)

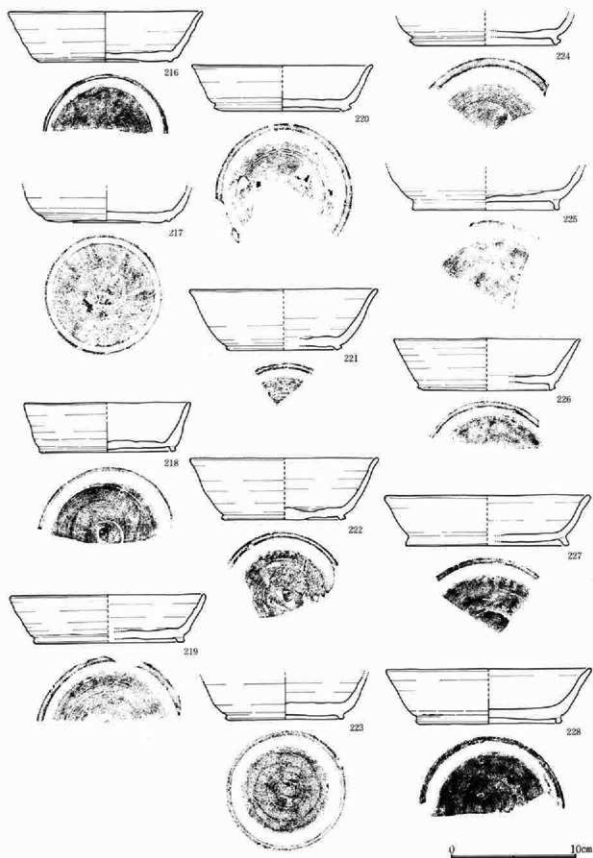


Fig.448 H12号溝出土遺物(11)

第4章 H区の遺構と遺物

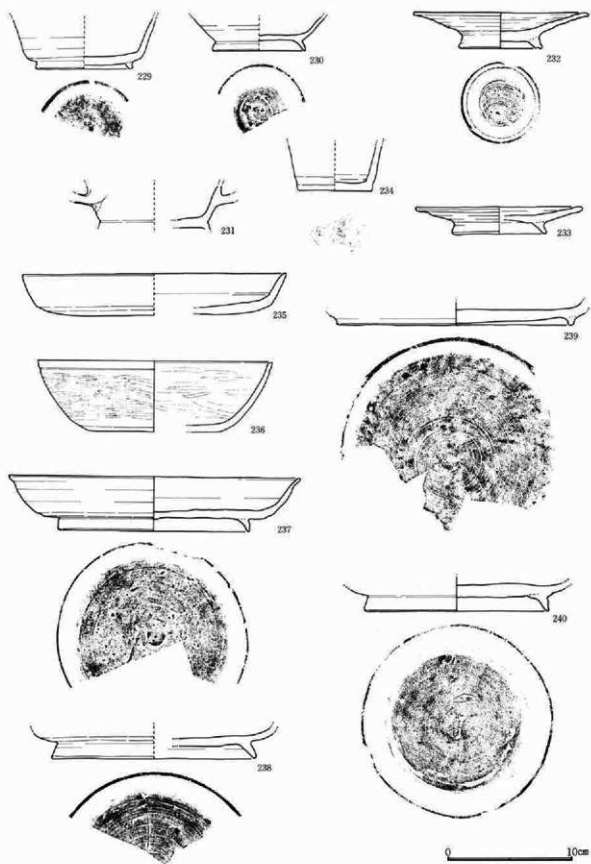


Fig.449 H12号溝出土遺物(12)



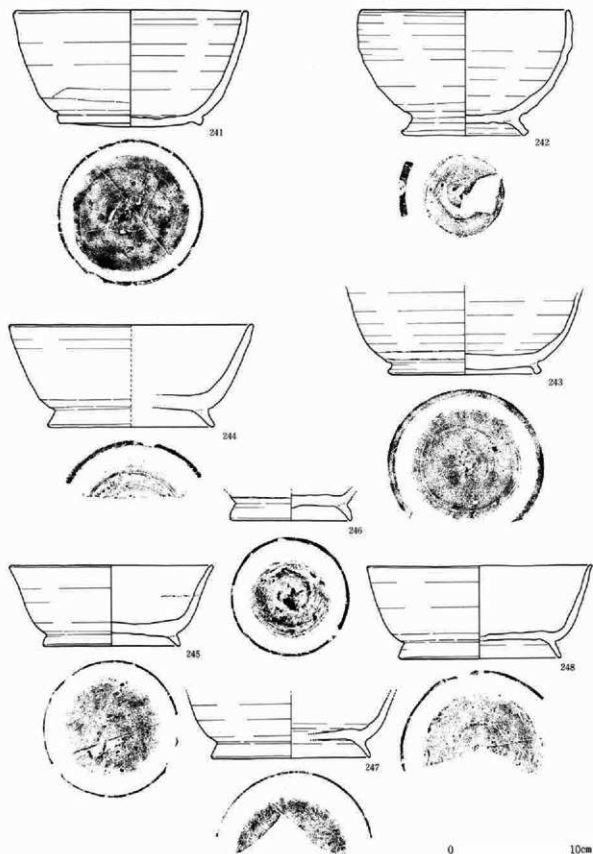


Fig.450 H12号溝出土遺物(13)

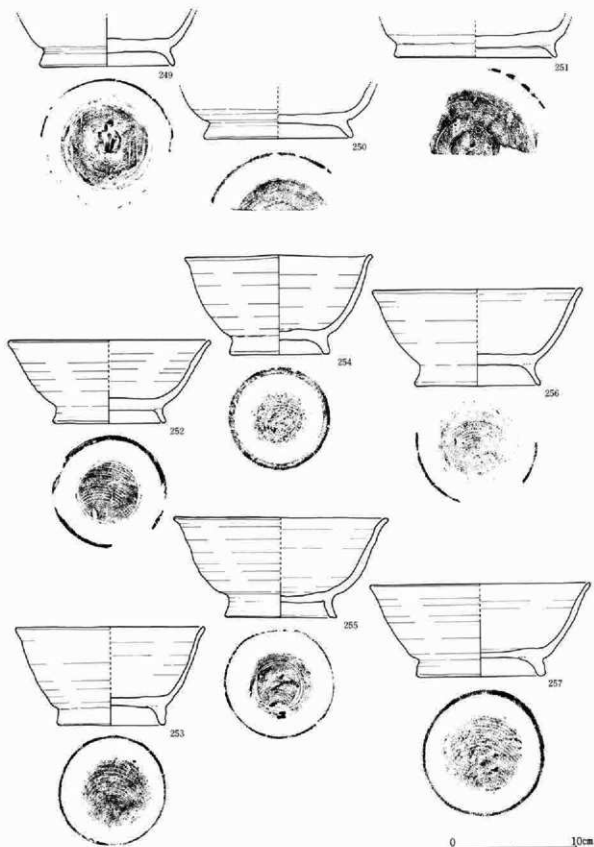


Fig.451 H12号溝出土遺物(14)

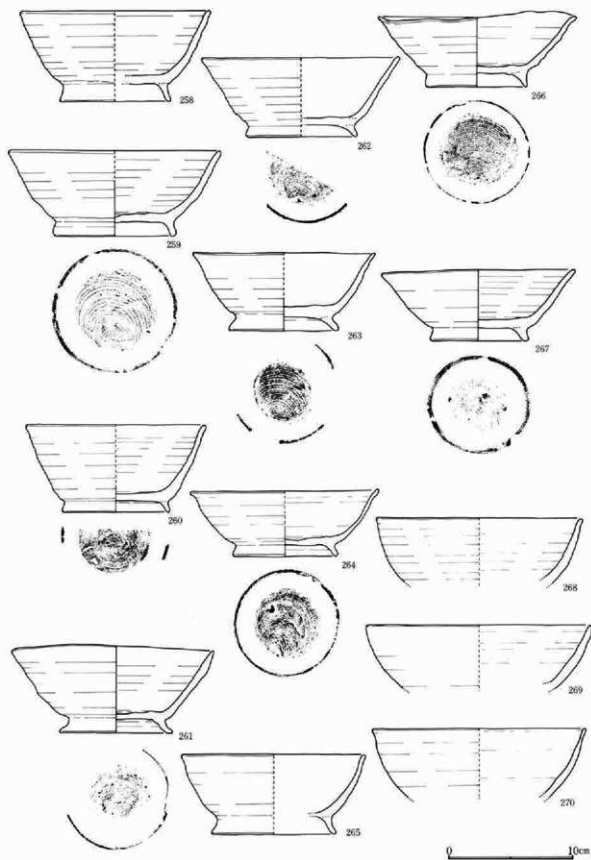


Fig.452 H12号溝出土遺物(15)

第4章 H区の遺構と遺物

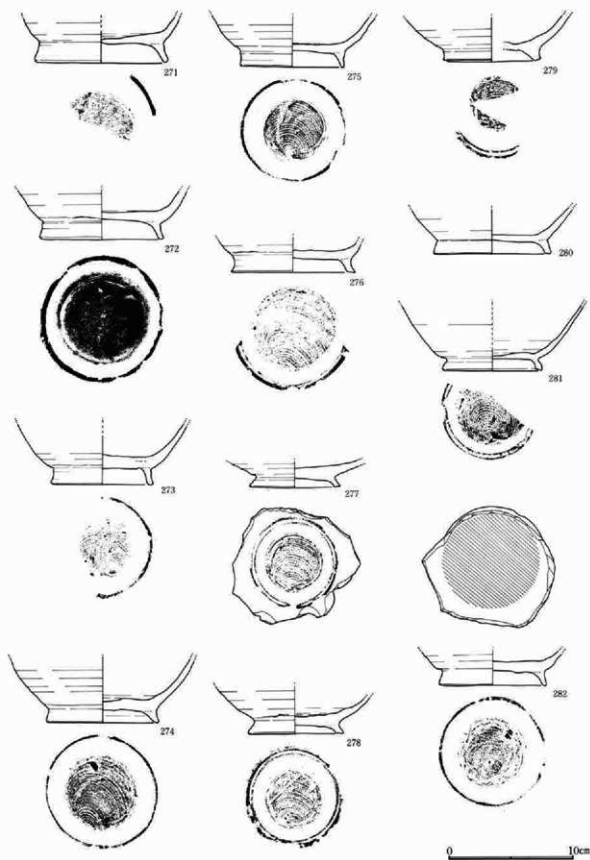


Fig.453 H12号溝出土遺物(16)

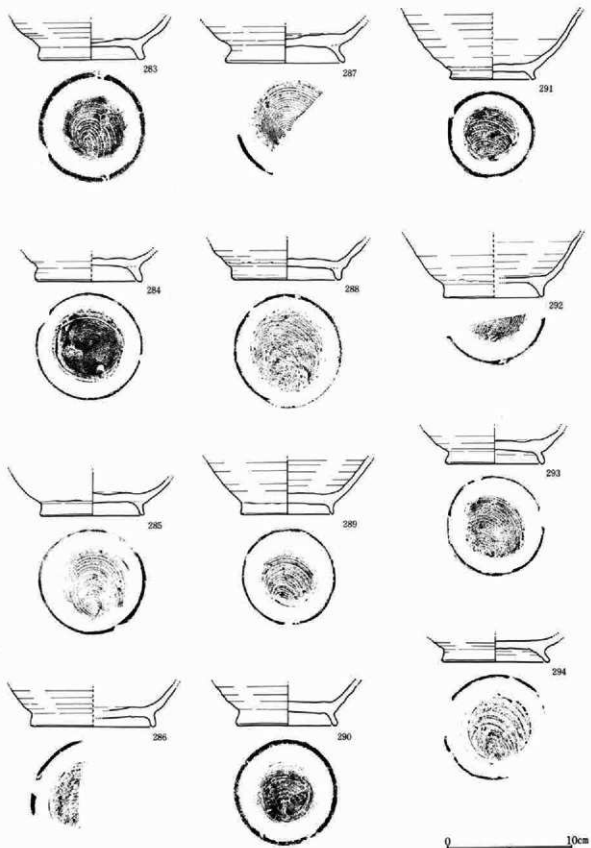


Fig.454 H12号溝出土遺物(17)

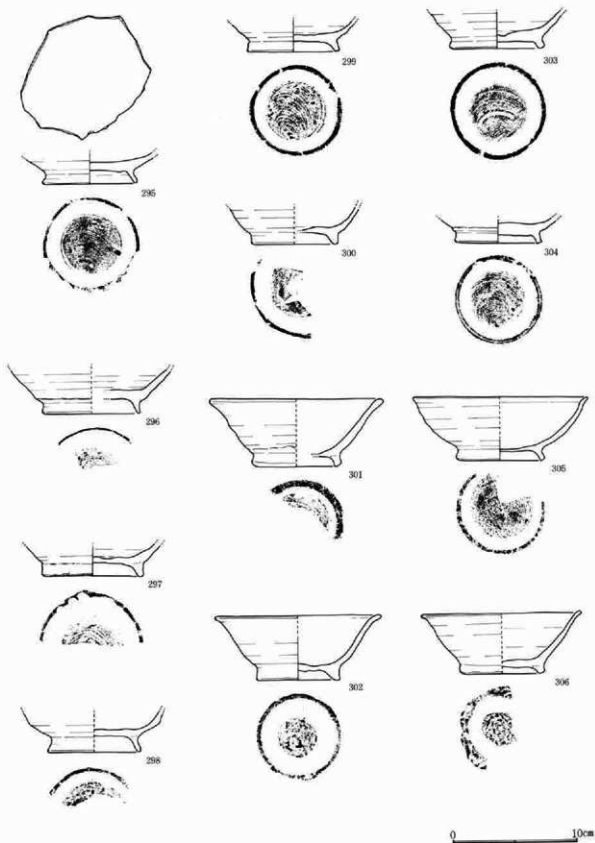


Fig.455 H12号溝出土遺物(18)

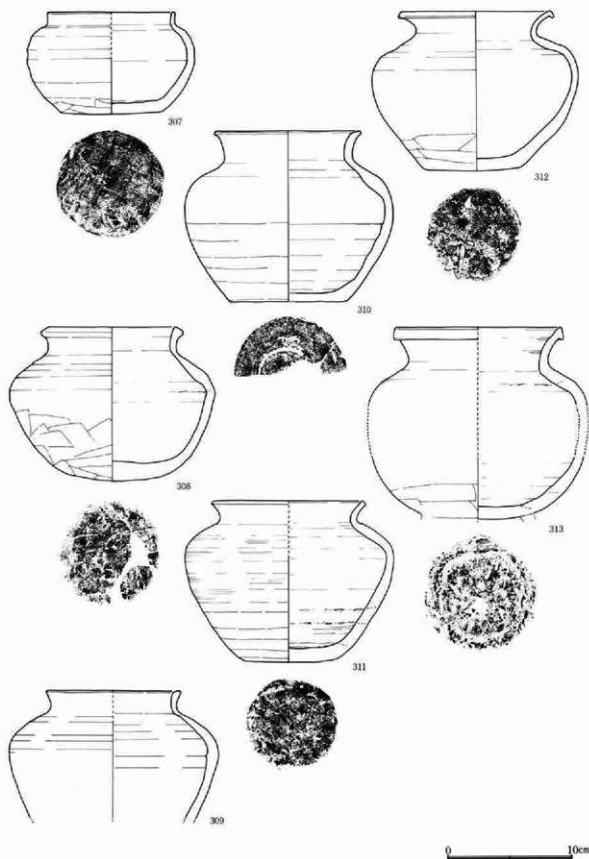


Fig.456 H12号溝出土遺物(19)

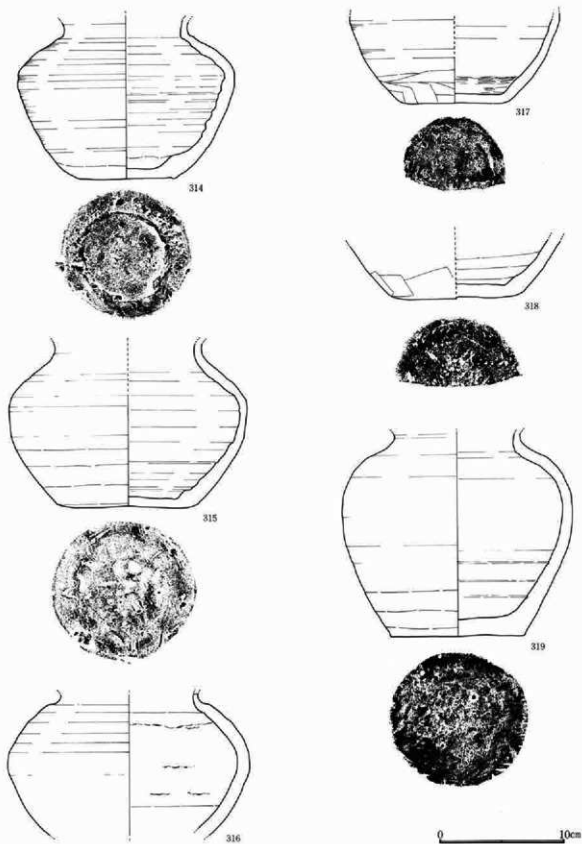


Fig.457 H12号溝出土遺物(20)



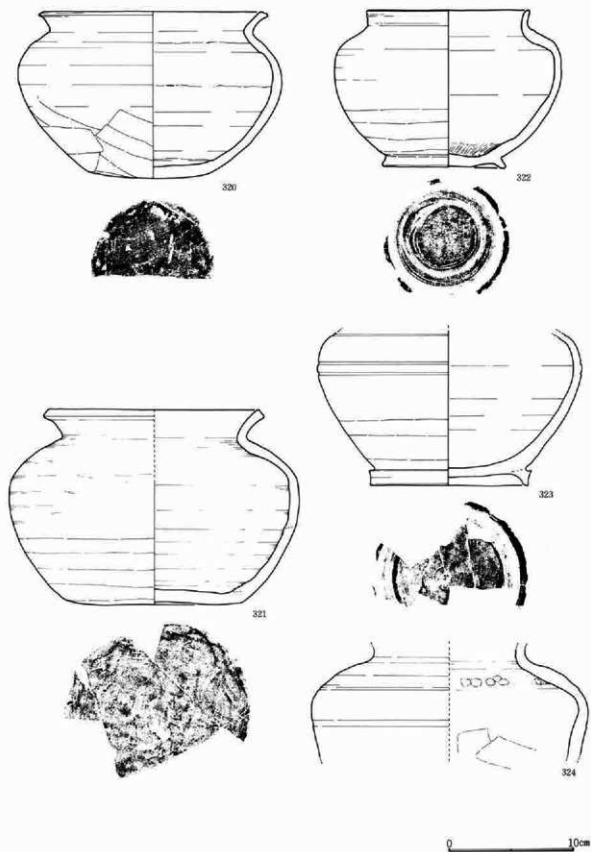


Fig.458 H12号溝出土遺物(21)

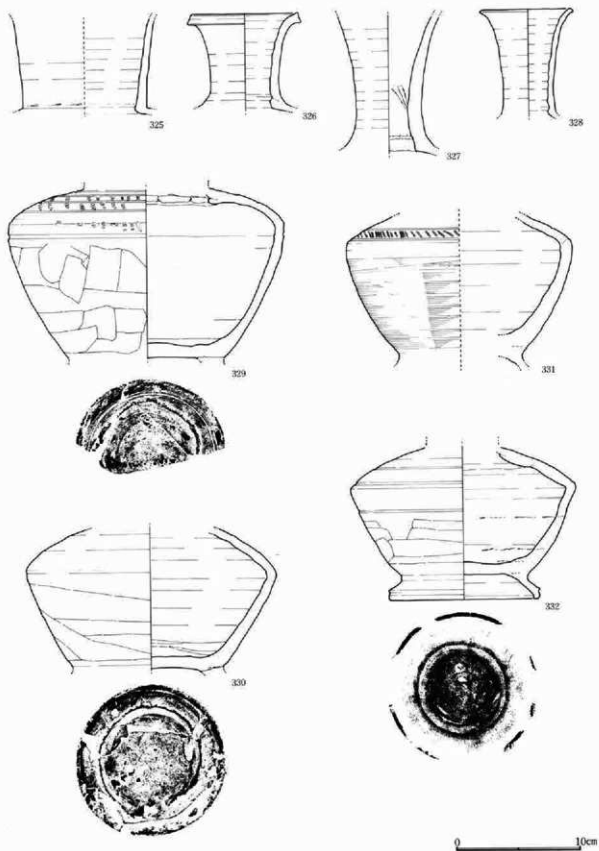


Fig.459 H12号溝出土遺物(22)

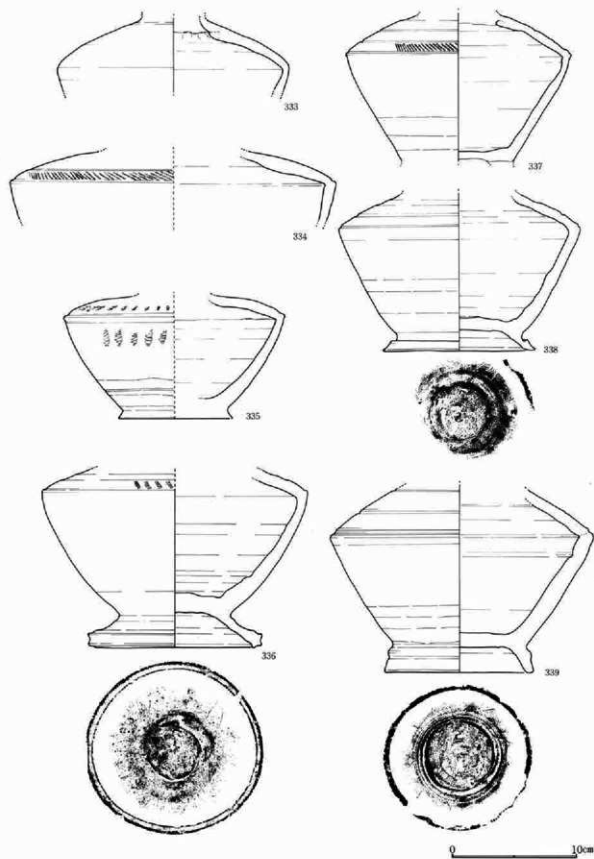


Fig.460 H12号溝出土遺物(23)

第4章 H区の遺構と遺物

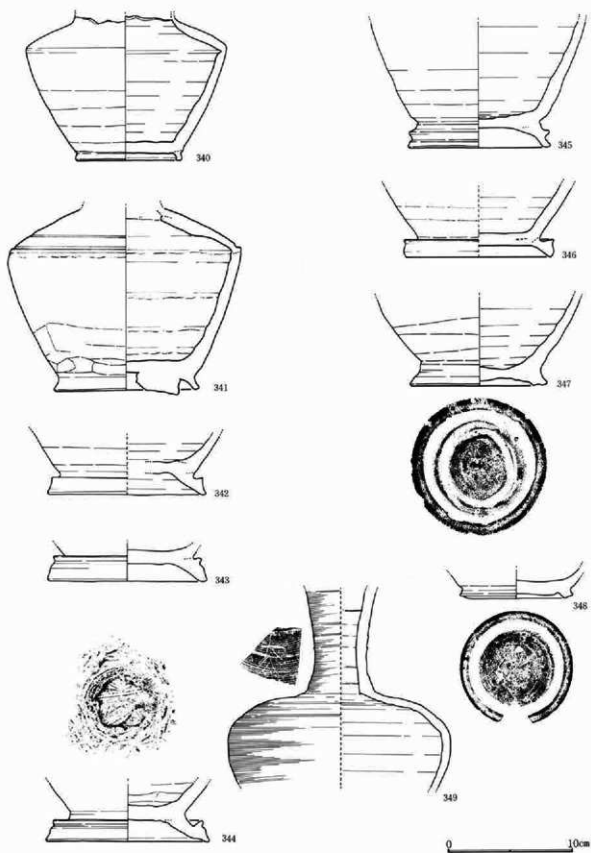


Fig.461 H12号溝出土遺物(24)

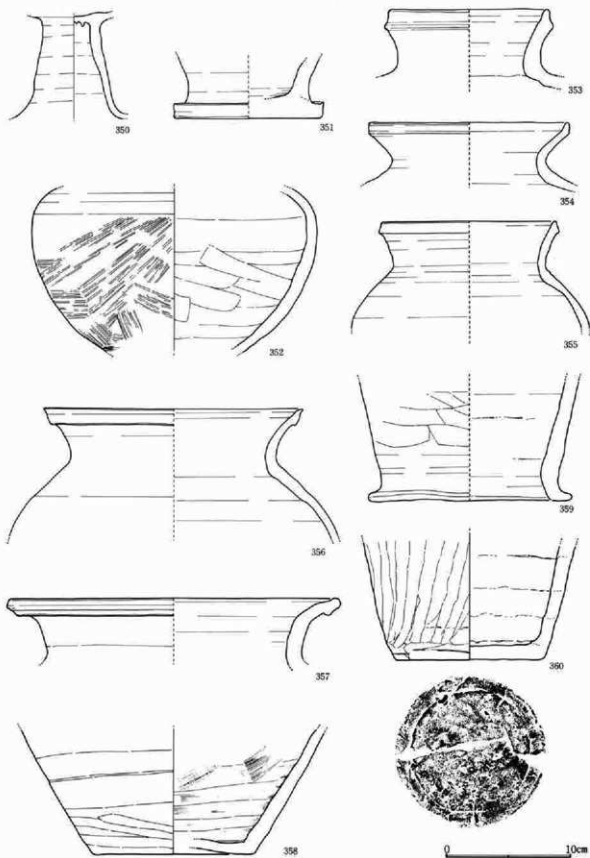


Fig.462 H12号溝出土遺物(25)

第4章 H区の遺構と遺物

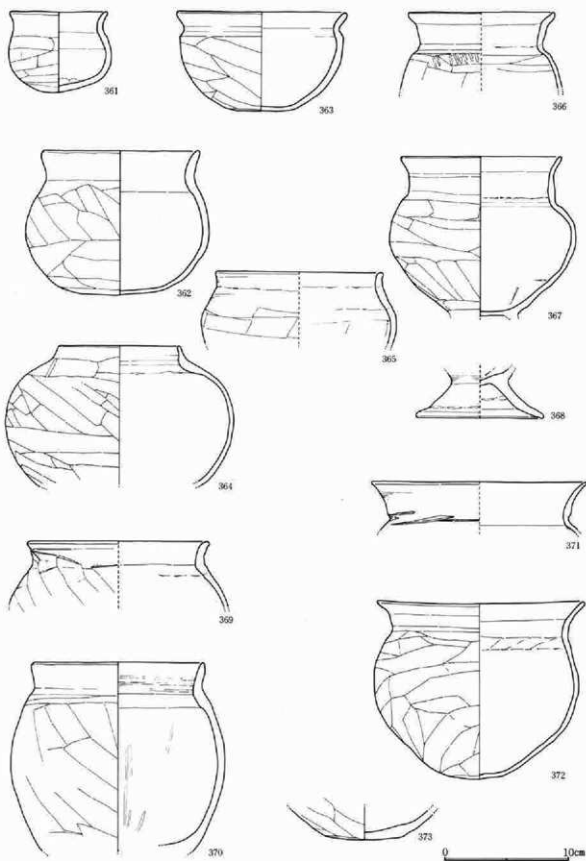


Fig.463 H12号溝出土遺物(26)

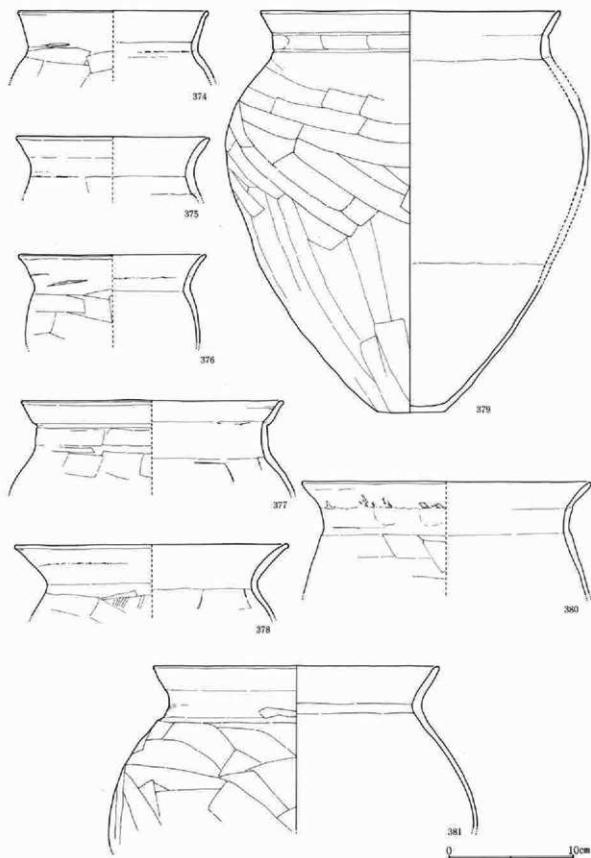
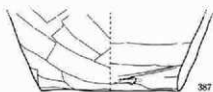
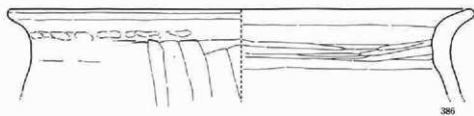
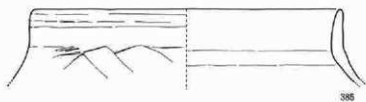
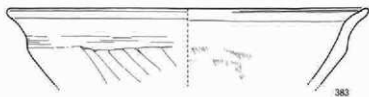
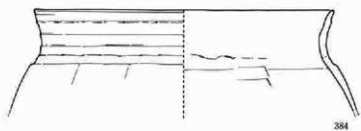
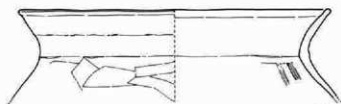


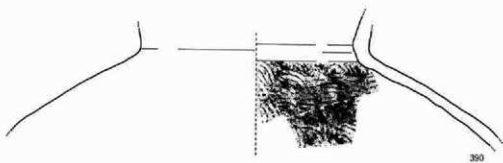
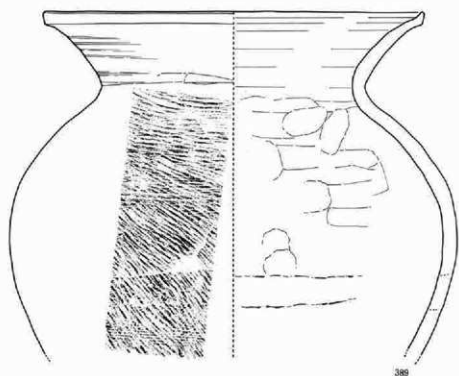
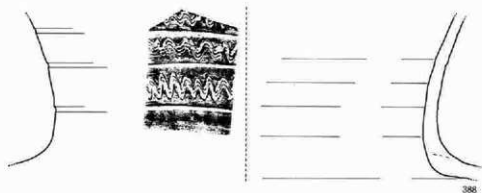
Fig.464 H12号溝出土遺物(27)



0 10cm

Fig.465 H12号溝出土遺物(28)





0 10cm

Fig.466 H12号溝出土遺物(29)

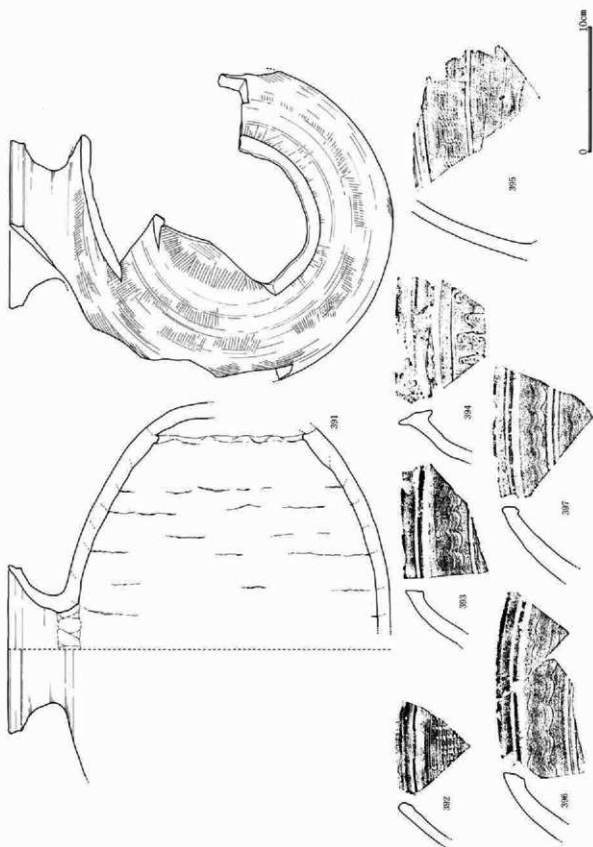


Fig.467 H12号溝出土遺物(30)

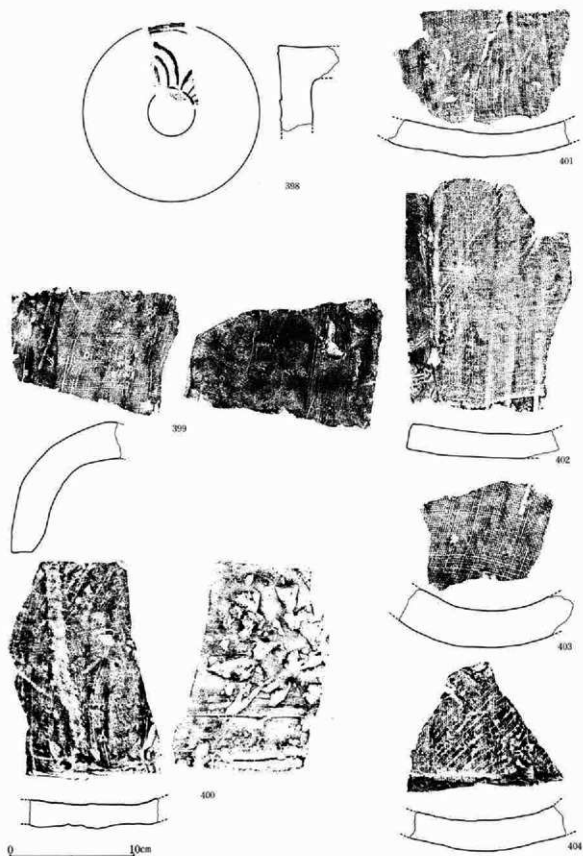


Fig.468 H12号溝出土遺物(31)



Fig.469 H12号溝出土遺物(32)

H12号清出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
438-1 158-1	土 師 器 杯	口~底 完	12.0 × 一 × 3.4	東 南 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、 底部一定方向寛削り。平底。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-2 158-2	土 師 器 杯	口~底 1/2	12.4 × 一 × (3.0)	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、 底部不定方向寛削り。平底。	①酸化・良好 ②にお い性 ③細砂混る
438-3 158-3	土 師 器 杯	口~底 1/2	12.5 × 一 × 3.2	埋 土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-4 158-4	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.8 × 一 × 3.0	東 南 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部横方 向寛削り。	①酸化・良好 ②にお い性 ③細砂混る
438-5 158-5	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.5 × 一 × (3.5)	東南部埋 土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方 向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-6 158-6	土 師 器 杯	口~底 1/2	14.0 × 一 × 3.2	東南部埋 土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部同心 円方向寛削り。	①酸化・良好 ②にお い性 ③細砂混る
438-7 158-7	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.0 × 一 × 3.0	東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。平底。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
438-8 158-8	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.2 × 一 × (2.9)	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。平底。	①酸化・良 ②におい 性 ③細砂混る
438-9 158-9	土 師 器 杯	口~底 1/2	12.4 × 一 × (2.6)	北 東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向 底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②におい 性 ③緻密
438-10 158-10	土 師 器 杯	口~底 1/2	12.0 × 一 × 3.5	北 東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向 底部一定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にお い性 ③細砂混る
438-11 158-11	土 師 器 杯	口~底 1/2	14.5 × 一 × 3.5	東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部横方 向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-12 158-12	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.8 × 一 × 4.0	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、 底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にお い性 ③細砂混る
438-13 158-13	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.0 × 一 × 3.6	東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部横方 向寛削り。	①酸化・良好 ②にお い性 ③細砂混る
438-14 158-14	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.0 × 一 × 3.3	北 東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-15 158-15	土 師 器 杯	口~底 1/2	12.8 × 一 × 3.4	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向、 底部一定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-16 158-16	土 師 器 杯	口~底 1/2	12.0 × 一 × 2.9	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-17 158-17	土 師 器 杯	口~底 1/2	15.0 × 一 × (3.6)	東 部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向 寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-18 158-18	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.8 × 一 × (2.7)	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-19 158-19	土 師 器 杯	口~底 1/2	13.8 × 一 × (2.4)	北 西 部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②にお い性 ③緻密

## 第4章 H区の遺構と遺物

H12号清出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③治 土 その他
438-20 158-20	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.0 × — × 3.1	東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
438-21 158-21	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.0 × — × 3.2	東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向、底部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
438-22 158-22	土 師 器 杯	口～底 1/4	11.9 × — × 2.9	東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部斜方向莖削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
438-23 158-23	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.5 × — × (4.0)	北 西 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定方向莖削り。内面「×」筋線、焼成後。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
438-24 158-24	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.2 × — × 3.5	北 東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
439-25 159-25	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.0 × — × 3.2	東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定方向莖削り。厚減顯著。	①酸化・良・劣化 ② によい橙 ③細砂混る
439-26 159-26	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.4 × — × 3.3	北 東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向、底部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③緻密
439-27 159-27	土 師 器 杯	口～底 完	12.2 × — × 3.7	北 東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向、底部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-28 159-28	土 師 器 杯	口～底 1/4	14.7 × — × 3.9	西 北 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定方向莖削り。厚減。	①酸化・劣化②橙 ③細砂混る
439-29 159-29	土 師 器 杯	口～底 1/4	14.0 × — × 4.1	西 北 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部斜方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
439-30 159-30	土 師 器 杯	口～底 1/4	13.2 × — × 3.5	南 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向、底部不定方向莖削り。	①酸化・良 ②によい ③細砂混る
439-31 159-31	土 師 器 杯	口～底 1/4	15.2 × — × 3.1	東 南 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向、底部不定方向莖削り。平底。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-32 159-32	土 師 器 杯	口～底 1/4	15.2 × 9.6 × 3.9	北 西 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向、底部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
439-33 159-33	土 師 器 杯	口～体 1/4	14.9 × — × (3.6)	北 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
439-34 159-34	土 師 器 杯	口～底 1/4	11.1 × — × 2.3	北 東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定方向莖削り。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
439-35 159-35	土 師 器 杯	口～底 1/4	12.8 × — × 2.5	北 東 部	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方向莖削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
439-36 159-36	土 師 器 杯	口～底 1/4	12.6 × — × 3.0	東 部	指押。口縁部及び内面、強い側で。体底部不定方向莖削り。口唇部内側。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-37 159-37	土 師 器 杯	口～底 1/4	12.3 × 8.0 × 3.1	北 東 部	指押。口縁～体部及び内面側で。底部不定方向莖削り。	①酸化・やや不良 ②橙 ③細砂混る
439-38 159-38	土 師 器 杯	口～底 1/4	11.6 × 6.0 × 3.7	北 東 部	手捏。体底部粗い側で。口縁部側で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る

H12号清出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
439-39 159-39	土師器 杯	口～底 残	16.0 × — × 3.8	北東部	指押。口縁部及び内面、強い撫で。底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-40 159-40	土師器 杯	口～底 残	16.3 × — × (3.3)	埋土	指押。口縁部及び内面、強い撫で。底部不定方向篋削り。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③細砂混る
439-41 159-41	土師器 杯	口～底 残	15.0 × — × 3.0	北西部	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向篋削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
439-42 159-42	土師器 杯	口～底 残	13.8 × — × 4.3	埋土	指押。口縁部撫で。体底部横方向篋削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
439-43 159-43	土師器 杯	口～底 残	16.8 × 10.6 × 4.4	東西部	指押。口縁部撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・劣化②橙 ③細砂混る
439-44 159-44	土師器 杯	口～体 残	15.3 × — × (4.5)	西北部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向篋削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
439-45 159-45	土師器 杯	口～体 残	15.6 × — × (3.6)	北東部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向篋削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
439-46 159-46	土師器 杯	口～体 残	14.9 × — × (3.8)	北東部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向篋削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
439-47 159-47	土師器 杯	口～底 残	14.0 × 8.5 × (4.3)	北東部	指押。口縁部撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
439-48 159-48	土師器 杯	口～底 残	15.8 × 8.8 × 4.2	北西部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-49 160-49	土師器 杯	口～底 残	14.9 × 9.6 × 3.5	北西部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-50 160-50	土師器 杯	口～底 残	13.2 × 9.3 × 4.1	北東部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-51 160-51	土師器 杯	口～底 残	12.3 × 8.9 × 2.9	北東部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
439-52 160-52	土師器 杯	口～底 残	12.6 × 7.8 × 3.1	東南部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
439-53 160-53	土師器 杯	口～体 残	12.8 × 9.0 × 3.6	東南部	指押。口縁部及び内面撫で。体部不定方向篋削り。内面「×」篋削。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
439-54 160-54	土師器 杯	口～底 残	12.2 × 7.0 × 3.7	南西部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向底部不定方向篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
439-55 160-55	土師器 杯	口～底 残	13.2 × 8.0 × 4.3	東南部	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向底部不定方向篋削り。表面摩滅。	①酸化・軟質 ②橙 ③粥状粒混・緻密
440-56 160-56	土師器 杯	口～体 残	13.2 × — × (3.6)	北東部	指押。口縁部及び内面撫で。体部短い篋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
440-57 160-57	土師器 杯	口～底 小片	13.0 × — × (4.3)	北東部	指押。口縁部撫で。底部不定方向篋削り。厚手。	①酸化・良 ②に よい橙 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
440-58 160-58	土器 器	口~底 片	13.4 × 10.2 × 4.1	北西部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向瓦削り。	①酸化・良 ②によい ③緻密
440-59 160-59	土器 杯	口~底 片	12.6 × 9.0 × 3.5	北 部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向瓦削り。	①酸化・良 ②によい ③緻密
440-60 160-60	土器 杯	口~底 片	13.1 × 9.6 × 3.9	北西部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横方向、底部不定方向瓦削り。	①酸化・良 ②によい ③緻密
440-61 160-61	土器 杯	口~底 片	12.3 × 8.5 × 3.9	西南部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部粗い横方向、底部不定方向瓦削り。全体に厚膩。	①酸化・劣化②によい ③緻密
440-62 160-62	土器 杯	口~底 片	11.4 × 7.8 × 4.2	北西部	紐造巻上。口縁部及び内面、強い撫で。体部粗い横方向、底部不定方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
440-63 160-63	土器 杯	口~底 完	14.6 × — × 4.6	南東部	紐造巻上。口縁部撫で。体部横方向、底部不定方向瓦削り。内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
440-64 160-64	土器 杯	口~底 片	13.6 × — × 3.3	東南部	紐造巻上。口縁部強い撫で。体部不定方向瓦削り。内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②によい ③細砂混る
440-65 160-65	土器 杯	口~体 片	13.6 × — × (3.6)	南東部	紐造巻上。口縁部撫で。体部粗い瓦削り。内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②によい ③砂少混・緻密
440-66 160-66	土器 杯	口~体 片	16.0 × — × (4.2)	北西部	紐造巻上。口縁部撫で。体部横方向瓦削り。内面放射状暗文。	①酸化・良 ②によい 黄橙 ③緻密
440-67 160-67	土器 杯	口~体 片	15.4 × — × (3.3)	東 部	紐造。口縁部及び内面撫で。体部横方向瓦削り。内面、放射状暗文わずかに残る。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
440-68 160-68	土器 杯	口~底 片	13.8 × — × 3.4	北西部	紐造。口縁部撫で。体部横方向、底部不定方向瓦削り。内面、放射状暗文。	①酸化・良 ②によい ③細砂混る
440-69 160-69	土器 杯	口~体 片	13.4 × — × 3.7	東南部	紐造。口縁部撫で。体部横方向瓦削り。内面放射状、見込部縦線状暗文。	①酸化・やや軟 ②浅 黄橙 ③緻密
440-70 160-70	土器 杯	口~底 片	14.8 × — × 4.1	南 部	紐造。口縁部撫で。体部斜、底部不定方向瓦削り。内面放射、見込部縦線状暗文。	①酸化・劣化②橙 ③細砂混る
440-71 160-71	土器 器	底 片	— × 10.2 × (1.6)	北東部	底部不定方向瓦削り。見込部縦線状暗文。	①酸化・良好 ②によい ③緻密
440-72 160-72	土器 杯	口~底 片	14.2 × — × 4.1	北東部	紐造。口縁部撫で。体部斜、底部不定方向瓦削り。内面放射状暗文。	①酸化・良 ②によい ③緻密
440-73 161-73	土器 杯	口~体 片	12.6 × 7.8 × 2.9	南東部	紐造巻上。口縁部撫で。体部横方向瓦削り。内面斜線状暗文。	①酸化・良 ②によい ③緻密
440-74 161-74	土器 杯	口~体 片	13.2 × — × (2.6)	南東部	紐造。口縁部撫で。体部横方向瓦削り。内面放射状、見込部一部縦線状暗文。	①酸化・良 ②によい ③細砂混る
440-75 161-75	土器 杯	口~底 片	14.7 × 7.8 × 4.2	北東部	紐造巻上。口縁部撫で。体部横方向、底部不定方向瓦削り。内面不定斜線状暗文。	①酸化・良 ②によい ③緻密
440-76 161-76	土器 杯	口~体 小片	14.6 × — × (3.2)	北東部	紐造。口縁部撫で良好。体部粗い横、底部不定方向瓦削り。内面縦線状暗文。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密



H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
440-77 161-77	土部器 杯	口~体 片	13.6 × - × (3.6)	北西部	紐造。口縁部無で。体部斜方向寛削り。 内面斜状暗文。	①酸化・高温堅緻 ②橙 ③緻密
440-78 161-78	土部器 鉢	口~体 小片	- × - × (4.8)	南東部	紐造巻上。口縁部無で。体部横方向寛削り。 内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
440-79 161-79	土部器 鉢	口~体 小片	20.2 × - × (4.3)	東南部	紐造巻上。口縁部無で。体部横方向寛削り。 内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②によ い橙 ④砂混る
441-80 161-80	土部器 鉢	口~底 片	17.6 × - × 7.2	東部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部底 不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
441-81 161-81	土部器 鉢	口~底 片	18.2 × 9.6 × 6.9	東部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横 底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
441-82 161-82	土部器 鉢	口~体 片	18.2 × - × 6.7	南部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横 ~斜方向寛削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
441-83 161-83	土部器 鉢	口~底 片	17.6 × - × 5.8	南東部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部粗 い荒削り。器面粗い。	①酸化・不良・劣化 ②橙 ③細砂混る
441-84 161-84	土部器 鉢	口~底 片	17.8 × - × (5.5)	北西部	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部底 横方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
441-85 161-85	土部器 鉢	口~底 片	19.4 × - × 5.7	南西部	紐造巻上。口縁部無で。体底部横~不定 方向寛削り。内面荒削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
441-86 161-86	土部器 鉢	口~体 片	17.4 × - × (4.8)	溝内	紐造巻上。口縁部及び内面撫で。体部横 方向寛削り。表面摩滅顯著。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
441-87 161-87	内黒土器 椀	口~底 片	14.7 × 7.4 × 3.8	北西部	轆轤。右回転糸切り。付台模撫で。内 面黒色処理後、わらび手状磨き。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
441-88 161-88	内黒土器 椀	口~体 小片	14.2 × - × (4.8)	北部	轆轤。右回転。体部下位手持置削り。内 面黒色処理。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
441-89 161-89	内黒土器 椀	口~体 片	14.9 × - × (3.9)	北部	轆轤。右回転。内面黒色処理後、横方向 磨き。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
441-90 161-90	内黒土器 椀	口~体 片	15.0 × - × (5.0)	北西部	轆轤。右回転。内面黒色処理。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
441-91 161-91	内黒土器 椀	体~底 片	- × 8.8 × (3.5)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付台模撫で。内 面黒色処理。	①酸化・良好 ②灰白 ③細砂混る
442-92 161-92	須恵器 蓋	頂~端 片	12.5 × - × (1.6)	北東部	轆轤。右回転。頂部2段回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
442-93 161-93	須恵器 蓋	頂~端 片	12.4 × 横 3.0 × 3.3	北東部	轆轤。右回転。横撫で。頂部2段回転 削り。頂部に不定形大だすき。凹凸顯 著。	①酸化・良好 ②灰白 ④一部粗粒混・緻密
442-94 161-94	須恵器 蓋	頂~端 片	13.8 × 横 4.5 × 2.3	北東部	轆轤。右回転。横撫で。頂部回転削り。 削り。	①還元・良好 ②暗青 灰 ③緻密
442-95 162-95	須恵器 蓋	頂~端 片	14.0 × 横 5.5 × 2.0	南東部	轆轤。右回転。大型横撫で。頂部3段 回転削り。横撫で。体部と裏回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①還元 ②色調 ③胎土 その他
442-96 162-96	須恵器 蓋	柄～端 小片	14.0 × 柄 4.4 × 2.0	南西部	轆轤。右回転。横溝で、頂部2段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
442-97 162-97	須恵器 蓋	柄～頂 蓋	(11.1) × 柄 3.8 × (2.2)	北西部	轆轤。右回転。横溝で、やや歪。頂部 4段回転寛削り。端部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
442-98 162-98	須恵器 蓋	柄～端 蓋	15.0 × 柄 5.9 × (3.0)	北西部	轆轤。右回転。横溝で、2重形。頂部 3段回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
442-99 162-99	須恵器 蓋	柄～端 完	15.4 × 柄 5.1 × (2.6)	南東部	轆轤。右回転。横溝で、やや歪。頂部 2段回転寛削り。厚手。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
442-100 162-100	須恵器 蓋	頂～端 蓋	17.8 × — × (2.7)	北西部	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。柄 欠損。全体に至り顕著。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
442-101 162-101	須恵器 蓋	柄～端 蓋	16.0 × 柄 5.6 × 2.4	北西部	轆轤。右回転。横溝で、頂部3段回転 寛削り。	①還元・良好・型緻 ②灰 ③緻密
442-102 162-102	須恵器 蓋	柄～端 片	15.6 × 柄 4.9 × 2.9	北西部	轆轤。右回転。横溝で、頂部3段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
442-103 162-103	須恵器 蓋	柄～端 完	16.3 × 柄 4.4 × 3.4	東部	轆轤。右回転。横溝で、2重形。頂部 4段回転寛削り。体部全体歪り顕著。灰 被り。	①還元・高温 ②灰白 ③緻密
442-104 162-104	須恵器 蓋	柄～端 完	15.6 × 柄 3.1 × 3.3	西西部	轆轤。右回転。横溝で、宝珠形。頂部 2～3段回転寛削り。厚手。灰被り顕著。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
442-105 162-105	須恵器 蓋	柄～端 完	16.9 × 柄 4.4 × 3.4	南東部	轆轤。右回転。横溝で、中央突出。頂 部5段回転寛削り。厚手。	①還元・良好 ②灰 ～青灰 ③緻密
442-106 162-106	須恵器 蓋	柄～端 片	19.0 × 柄 5.5 × 2.6	北部	轆轤。右回転。横溝で、頂部3段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
442-107 162-107	須恵器 蓋	頂～端 片	13.2 × — × (2.7)	南西部 北東部	轆轤。右回転。横溝で、欠損。頂部球 面状。2段回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
442-108 162-108	須恵器 蓋	頂～端 片	13.9 × — × (2.0)	北東部	轆轤。右回転。頂部球面状、3段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
442-109 162-109	須恵器 蓋	柄～端 片	13.9 × 柄 4.5 × 3.4	南東部	轆轤。右回転。横溝で、頂部3段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
442-110 162-110	須恵器 蓋	柄～端 片	14.0 × 柄 4.1 × 2.5	西北部	轆轤。右回転。横溝で、頂部2段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
442-111 162-111	須恵器 蓋	頂～端 小片	14.2 × — × (3.0)	北西部	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。比 径器高、大。	①還元・良好 ②灰 ③黒色粒・緻密
442-112 162-112	須恵器 蓋	柄～端 片	14.2 × 柄 3.8 × 3.3	西北部	轆轤。右回転。横溝で、頂部3段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
442-113 162-113	須恵器 蓋	柄～端 完	14.4 × 柄 4.4 × 3.3	北東部	轆轤。右回転。横溝で、頂部2段回転 寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
442-114 162-114	須恵器 蓋	柄～端 片	15.0 × 柄 4.1 × 2.2	北東部	轆轤。右回転。横溝で、頂部3段回転 寛削り。比径器高小。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 高さ × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成	②色調
						③胎土	その他
442-115 162-115	須恵器 蓋	頂~端 片	15.0 × — × (1.3)	東南部	轆轤, 右回転。頂部3段回転脱削り。平型。灰被り。	①還元・良好	②灰白 ③細砂混る
442-116 162-116	須恵器 蓋	頂~端 片	14.7 × 横 4.2 × 2.4	南西部	轆轤, 右回転。轆轤側で。頂部3段回転脱削り。重みあり。	①還元・良好	②灰白 ③細砂混る
442-117 162-117	須恵器 蓋	頂~端 小片	15.6 × — × (2.3)	東南部	轆轤, 右回転。頂部3段回転脱削り。	①還元・良好	②灰白 ③緻密
442-118 162-118	須恵器 蓋	頂~端 片	15.7 × — × (2.5)	南部	轆轤, 右回転。頂部2段回転脱削り。	①還元・やや低温	②灰白 ③黒色粒・緻密
442-119 163-119	須恵器 蓋	頂~端 小片	16.0 × — × (1.8)	北部	轆轤, 右回転。頂部3段回転脱削り。	①還元・良好	②灰白 ③緻密・起伏
442-120 163-120	須恵器 蓋	頂~端 片	15.8 × 横 5.3 × 2.6	北西部	轆轤, 右回転。轆轤側で。頂部全体、回転脱削り。	①還元・良好	②灰白 ③細砂混る
442-121 163-121	須恵器 蓋	頂~端 片	16.0 × 横 3.4 × 3.1	北東部	轆轤, 右回転。轆轤側で。比較的小型。頂部2段回転脱削り。	①還元・良・やや軟質	②灰白 ③細砂混る
443-122 163-122	須恵器 蓋	頂~端 小片	16.7 × — × (2.3)	南東部	轆轤, 右回転。頂部2段回転脱削り。	①還元・軟質	②青灰 ~灰白 ③緻密
443-123 163-123	須恵器 蓋	頂~端 片	17.2 × 横 5.0 × —	東南部	轆轤, 右回転。轆轤側で。薄型。頂部2段回転脱削り。	①加酸化還元・低温	②灰黄白 ③砂混る
443-124 163-124	須恵器 蓋	頂~端 片	18.4 × — × (3.1)	北西部	轆轤, 右回転。頂部3段回転脱削り。重み顯著。	①還元・良好	②灰 ③細砂混る
443-125 163-125	須恵器 蓋	頂~端 片	19.0 × 横 6.1 × 3.2	東南部	轆轤, 右回転。轆轤側で。頂部3段回転脱削り。	①還元・良好	②灰 ③細砂混る
443-126 163-126	須恵器 蓋	頂~端 片	20.0 × — × (3.2)	南西部	轆轤, 右回転。頂部傾斜、2段回転脱削り。底部内外吸灰。	①還元・軟質	②灰白 ③細砂少量混る
443-127 163-127	須恵器 蓋	頂~端 片	20.0 × — × (3.5)	東南部	轆轤, 右回転。頂部回転脱削り後、無で。	①加酸化還元・良好	②におい赤褐 ③細砂混る
443-128 163-128	須恵器 蓋	頂~端 片	20.0 × — × (2.4)	東南部	轆轤, 右回転。頂部2段回転脱削り。	①還元・良好	②灰白 ③細砂混る
443-129 163-129	須恵器 蓋	頂~端 片	20.6 × — × (2.2)	西部	轆轤, 右回転。頂部3段回転脱削り。	①還元・良好	②灰 ③黒粒砂混る
443-130 163-130	須恵器 蓋	頂~端 片	10.1 × 横 3.7 × 3.2	北東部	轆轤, 右回転。轆轤側で、中央突出。下部轆轤側で。頂部灰被り。	①還元・良好	②灰 ③細砂混る
443-131 163-131	須恵器 蓋	頂~端 片	12.2 × 横 4.1 × (1.5)	北西部	轆轤, 右回転。轆轤側で。頂部回転脱削り。下部部欠損。	①還元・良好	②灰 ③細砂混る
443-132 163-132	須恵器 蓋	頂~端 片	14.9 × 横 4.6 × 3.7	西部	轆轤, 右回転。轆轤側で。頂部回転脱削り。下部部轆轤側で。	①還元・良好	②灰白 ③細砂混る
443-133 163-133	須恵器 蓋	頂~端 片	19.3 × — × (5.4)	南東部	轆轤, 右回転。頂部回転脱削り、灰被り顯著。	①還元・良好	②灰 ③緻密

第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 画 値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 その他
			口径	× 底径	× 器高			
443-134 163-134	須 志 器 蓋	胴～頂	—	× 胴 2.8 × (1.9)		埋 土	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部回転削り。平型。	①還元・良好 ②オリープ灰 ③細砂混る
443-135 163-135	須 志 器 蓋	胴～頂	—	× 胴 4.1 × (2.3)		南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部2段回転削り。	①還元・良好 ②灰～灰青 ③細砂混る
443-136 163-136	須 志 器 蓋	胴	—	× 胴 4.7 × (1.1)		埋 土	縦壁。右回転。胴横溝で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
443-137 163-137	須 志 器 蓋	胴	—	× 胴 5.6 × (1.6)		北 東 部	縦壁。左回転。胴横溝で、下部回転削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
443-138 163-138	須 志 器 蓋	胴	—	× 胴 4.0 × (1.4)		北 東 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部回転削り。	①加酸化還元・良 ②褐灰 ③緻密
443-139 163-139	須 志 器 蓋	胴	—	× 胴 4.8 × (1.7)		南 西 部	縦壁。右回転。胴横溝で、周縁打割。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
443-140 163-140	須 志 器 蓋	胴	—	× 胴 5.3 × (1.7)		北 西 部	縦壁。右回転。胴横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
443-141 163-141	須 志 器 蓋	胴	—	× 胴 5.0 × (1.6)		東 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
443-142 163-142	須 志 器 蓋	胴～頂	—	× 胴 3.4 × (1.7)		北 東 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部2段回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
443-143 163-143	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 3.8 × (2.4)		北 東 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部3段回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
443-144 163-144	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 3.5 × (2.4)		東 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
443-145 163-145	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 5.0 × (1.4)		東 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部4段回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
443-146 164-146	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 4.2 × (1.8)		南 西 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部3段回転削り。灰被り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
443-147 164-147	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 5.1 × (2.5)		西 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部回転削り。	①還元・良・やや軟質 ②灰白 ③緻密
443-148 164-148	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 5.0 × (2.6)		北 東 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部中段のみ回転削り。内面割落顯著。	①酸化・低温 ②灰白 ③細砂混る
443-149 164-149	須 志 器 蓋	胴～頂 小片	—	× 胴 4.0 × (2.8)		東 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部2段回転削り。	①還元・良好 ②緑灰 ③細砂混る
443-150 164-150	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 3.9 × (2.4)		埋 土	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部3段回転削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
443-151 164-151	須 志 器 蓋	胴～頂 片	—	× 胴 4.0 × (2.5)		東 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部4段回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
443-152 164-152	須 志 器 蓋	胴～頂	—	× 胴 4.5 × (1.9)		東 南 部	縦壁。右回転。胴横溝で、頂部2～3段回転削り。周縁端部、意図的打割。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
443-153 164-153	須恵器 蓋	柄～頂 小片	— × 横 5.8 × (1.9)	西北部	轆轤。右回転。筒横撫で。頂部2段回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
443-154 164-154	須恵器 蓋	柄～頂 小片	— × 横 5.2 × (1.4)	東南部	轆轤。右回転。筒横撫で。歪みあり。頂部回転削り。灰被り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
443-155 164-155	須恵器 蓋	柄～頂 片	— × 横 6.6 × (1.6)	北東部	轆轤。右回転。筒横撫で。一部欠損。頂部回転削り。灰被り。	①還元・良好・堅緻 ②オリーブ灰 ③緻密
443-156 164-156	須恵器 蓋	柄～頂 片	— × 横 4.3 × (2.1)	東南部	轆轤。右回転。筒横撫で。大部分欠損。頂部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
444-157 164-157	須恵器 杯	口～底 完	12.1 × 8.0 × 3.5	南東部	轆轤。右回転。底面削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
444-158 164-158	須恵器 杯	口～底 完	12.9 × 9.4 × 3.6	北東部	轆轤。右回転。底部手持削り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
444-159 164-159	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 9.6 × 3.1	北東部	轆轤。右回転。底縁部削り。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③細砂少量混る
444-160 164-160	須恵器 杯	口～底 片	12.8 × 9.7 × 3.5	北東部	轆轤。右回転。底部手持削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
444-161 164-161	須恵器 杯	体～底 片	— × 9.0 × (1.6)	南東部	轆轤。右回転。底面削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
444-162 164-162	須恵器 杯	口～底 片	13.6 × 10.0 × 4.1	北西部	轆轤。右回転。底部手持削り。	①還元・軟質 ②灰白 ③砂粒混・緻密
444-163 164-163	須恵器 杯	底	— × 9.0 × (0.9)	北東部	轆轤。右回転。底部手持削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
444-164 164-164	須恵器 杯	底	— × 8.0 × (1.5)	北西部	轆轤。右回転。底面削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
444-165 164-165	須恵器 杯	口～底 片	14.0 × 9.3 × 3.8	東部	轆轤。右回転。底面削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ～暗灰黄 ③緻密
444-166 164-166	須恵器 杯	口～底 片	13.5 × 7.5 × 3.5	西南部	轆轤。右回転。腰～底部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
444-167 164-167	須恵器 杯	口～底 完	13.0 × 9.2 × 3.2	北西部	轆轤。右回転。底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
444-168 164-168	須恵器 杯	口～底 片	13.4 × 8.8 × 3.0	埋土	轆轤。右回転。底部回転削り後、手持削り。	①還元・良好 ②暗青 灰 ③細砂混る
444-169 164-169	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 8.2 × 3.2	北東部	轆轤。右回転。底面削り。無調整。	①還元・良・やや低温 ②灰白 ③緻密
444-170 164-170	須恵器 杯	口～底 片	12.2 × 7.6 × 3.7	北東部	轆轤。右回転。底面削り。腰及び底部、手持削り。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
445-171 164-171	須恵器 杯	口～底 片	12.6 × 8.0 × 3.1	南東部	轆轤。右回転。底面削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
			口径 × 底径 × 器高				
445-172 165-172	須恵器 杯	口~底 片	13.2 × 8.9 × 3.3		南西部	轆轤。右回転。腰~底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
445-173 165-173	須恵器 杯	口~底 片	14.2 × 7.0 × 3.8		南西部	轆轤。右回転。腰~底部回転削り。	①加酸化還元・良好 ②灰黄 ③細砂混る
445-174 165-174	須恵器 杯	口~底 完	13.7 × 9.0 × 4.2		溝内カマ ド	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好・軟質 ②灰白 ③細砂混る
445-175 165-175	須恵器 杯	口~底 片	14.3 × 9.6 × 2.6		南西部	轆轤。右回転削り。腰~底部回転削り。	①還元・極良 ②暗灰 ~灰 ③緻密
445-176 165-176	須恵器 杯	口~底 片	12.9 × 8.0 × 3.2		東南部	轆轤。右回転。底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
445-177 165-177	須恵器 杯	口~底 片	13.6 × 7.2 × 3.3		北東部	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
445-178 165-178	須恵器 杯	底 片	— × 10.1 × (1.4)		西北部	轆轤。右回転削り。腰~底部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
445-179 165-179	須恵器 杯	口~底 片	9.8 × 6.3 × 3.9		埋土	轆轤。右回転。底部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
445-180 165-180	須恵器 杯	口~底 完	12.7 × 8.0 × 3.1		南東部	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
445-181 165-181	須恵器 杯	口~底 片	13.4 × 7.5 × 3.4		北東部	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
445-182 165-182	須恵器 杯	口~底 片	15.2 × 11.1 × 3.5		北西部	轆轤。右回転削り。底縁部手押削り。 口縁部歪み顕著。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
445-183 165-183	須恵器 杯	口~底 片	14.0 × 8.6 × 3.1		南西部	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
445-184 165-184	須恵器 杯	口~底 片	12.8 × 8.0 × 3.1		南西部	轆轤。右回転削り。底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
445-185 165-185	須恵器 杯	体~底 片	— × 6.8 × (1.8)		埋土	轆轤。右回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂一部混る
445-186 165-186	須恵器 杯	口~底 片	14.8 × 9.4 × 4.1		東南部	轆轤。右回転削り。腰~底縁部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
446-187 165-187	須恵器 杯	口~底 完	12.7 × 8.0 × 3.8		北西部	轆轤。右回転削り。腰~底縁部回転削り。 全体に焼成時の歪み顕著。	①還元・良・低溫 ② 灰~暗赤灰 ③砂混る
446-188 165-188	須恵器 杯	口~底 完	13.6 × 8.3 × 4.0		北東部	轆轤。右回転削り。腰~底縁部回転削り。 一部体部収縮。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
446-189 165-189	須恵器 杯	口~底 片	14.0 × 8.1 × 4.1		北東部	轆轤。左回転削り。底縁部回転削り。 全体に焼成時の歪み顕著。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
446-190 165-190	須恵器 杯	口~底 片	13.5 × 7.8 × 3.3		北東部	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残 存 址	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調査の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 その他	
			口径	× 底径 × 器高				
446-191 165-191	須恵器 杯	口～底 完	13.2 × 8.9 × 3.8	北 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。やや歪む。 体部灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ～灰 ③緻密		
446-192 165-192	須恵器 杯	口～底 片	12.6 × 7.0 × 3.4	北 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密		
446-193 165-193	須恵器 杯	口～底 片	13.1 × 7.7 × 3.2	北 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密		
446-194 165-194	須恵器 杯	口～底 片	13.3 × 8.1 × 3.7	埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③細砂混る		
446-195 165-195	須恵器 杯	口～底 片	13.6 × 7.6 × 3.9	東 南 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る		
446-196 166-196	須恵器 杯	口～底 小片	12.8 × 7.4 × 3.4	北 西 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②緑灰 ③緻密		
446-197 166-197	須恵器 杯	口～底 片	12.6 × 6.8 × 3.4	北 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②暗灰 ～暗黄褐 ③細砂混る		
446-198 166-198	須恵器 杯	口～底 片	12.3 × 7.0 × 3.4	南 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密		
446-199 166-199	須恵器 杯	口～底 片	12.7 × 6.7 × 3.4	埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。内面朱灰 付着。	①還元・良好 ②灰 ③緻密		
446-200 166-200	須恵器 杯	口～底 片	12.3 × 6.5 × 3.0	北 西 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部歪 む。	①還元・良 ②灰白 ～明青灰 ③緻密		
447-201 166-201	須恵器 杯	口～底 片	13.4 × 7.0 × 3.1	北 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②暗オ リーブ灰 ③細砂混る		
447-202 166-202	須恵器 杯	口～底 片	12.7 × 7.0 × 3.6	西 南 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る		
447-203 166-203	須恵器 杯	口～底 片	11.7 × 7.6 × 3.8	南 西 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る		
447-204 166-204	須恵器 杯	口～底 完	11.0 × 7.1 × 3.8	埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ～灰 ③細砂混る		
447-205 166-205	須恵器 杯	口～底 片	9.0 × 5.4 × 3.1	南 西 部	底部内柱。轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密		
447-206 166-206	須恵器 杯	口～底 片	12.8 × 6.8 × 4.6	北 西 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密		
447-207 166-207	須恵器 杯	口～底 小片	12.7 × 7.8 × 4.1	南 東 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密		
447-208 166-208	須恵器 杯	口～底 片	12.4 × 6.4 × 4.1	東 南 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る		
447-209 166-209	須恵器 杯	口～底 片	12.8 × 6.9 × 3.7	東 南 部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る		

## 第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
447-210 166-210	須恵器 杯	口~底 片	12.5 × 6.7 × 3.7	北東部	轆轤。右回転糸切り。無調整。全面横し。	①加酸化還元 ②黒褐 ③砂混る
447-211 166-211	須恵器 杯	口~底 片	12.8 × 6.5 × 3.5	北東部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・良好 ②灰 ③細砂混る
447-212 166-212	須恵器 杯	口~底 片	12.4 × 5.5 × 3.2	北東部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
447-213 166-213	須恵器 杯	口~底 片	11.4 × 4.8 × 4.1	南西部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・良 ②灰白 ③砂混る
447-214 166-214	須恵器 杯	体~底 片	— × 7.0 × (2.6)	西南部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
447-215 166-215	須恵器 杯	体~底 片	— × 6.9 × (2.2)	南東部	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②褐灰 ③細砂混る
448-216 166-216	須恵器 椀	口~底 片	15.6 × 10.7 × 4.0	南東部	轆轤。右回転。削出し高台~底部。回転 置削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
448-217 166-217	須恵器 椀	体~底 片	— × 10.2 × (2.4)	北東部	轆轤。右回転。削出し高台~底部。回転 置削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
448-218 166-218	須恵器 椀	口~底 片	13.3 × 10.9 × 3.9	北西部	轆轤。右回転。付高台~底部。回転置削 り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
448-219 166-219	須恵器 椀	口~底 片	15.6 × 12.0 × 3.8	南東部	轆轤。右回転。底部回転置削り。付高台 横撫で。	①還元・やや低温 ②灰白 ③細砂混る
448-220 167-220	須恵器 椀	口~底 片	14.5 × 11.0 × 3.6	北部	轆轤。右回転。腰部一削出し高台~底部 回転置削り。	①還元・高温 ②灰 ③細砂混る
448-221 167-221	須恵器 椀	口~底 小片	15.1 × 9.2 × 4.8	東南部	轆轤。右回転。腰部一削出し高台~底部 回転置削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
448-222 167-222	須恵器 椀	口~底 片	15.2 × 9.9 × 4.9	北西部	轆轤。右回転。腰部一削出し高台~底部 回転置削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
448-223 167-223	須恵器 椀	体~底 片	— × 9.5 × (3.4)	南東部	轆轤。右回転。腰部一削出し高台~底部 回転置削り。高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
448-224 167-224	須恵器 椀	体~底 片	— × 12.0 × (2.2)	北東部	轆轤。右回転。底部回転置削り。付高台 横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
448-225 167-225	須恵器 椀	体~底 片	— × 11.6 × (3.0)	北東部	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
448-226 167-226	須恵器 椀	口~底 片	14.8 × 10.9 × 4.1	北西部	轆轤。右回転。削出し高台及び底部回転 置削り。高台強い横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
448-227 167-227	須恵器 椀	口~底 片	16.4 × 13.0 × 4.0	南東部	轆轤。右回転。底部回転置削り。付高台 横撫で。	①還元 ②灰白 ③細砂混る
448-228 167-228	須恵器 椀	口~底 片	16.4 × 11.6 × 4.4	南西部	轆轤。右回転糸切り。腰部~底縁部回転 置削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂少量混る



H12号清出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
449-229 167-229	須恵器 椀	体～底 片	— × 7.8 × (4.0)	東南部	轆轤。右回転。底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
449-230 167-230	須恵器 椀	体～底 片	— × 7.4 × (2.7)	南西部	轆轤。右回転余切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
449-231 167-231	須恵器 把手付椀	体	— × — × (3.4)	北西部	轆轤。右回転余切り。付高台横溝で。把手尻削り面取り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
449-232 167-232	須恵器 皿	口～底 片	14.0 × 6.7 × 2.9	北西部	轆轤。右回転余切り。付高台横溝で。底部墨書あるも不鮮明。	①酸化・良・やや軟質 ②灰白 ③緻密
449-233 167-233	須恵器 皿	口～底 片	13.4 × 7.6 × 2.2	北東部	轆轤。右回転余切り。付高台横溝で。見込部に重焼き痕。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
449-234 167-234	須恵器 小型瓶	下～底 片	— × 6.0 × (3.6)	南東部	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
449-235 167-235	須恵器 大型皿	口～底 片	21.2 × 18.6 × 3.3	南東部	轆轤。右回転。底部回転足削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
449-236 167-236	須恵器 大型杯	口～底 片	18.8 × 10.5 × 5.6	埋土	轆轤。右回転。体部内外、横方向の細かい荒磨き。口縁部に沈積、1条。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
449-237 167-237	須恵器 盤	口～底 片	23.6 × 15.4 × 4.3	北東部	底部円盤。轆轤。右回転。底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
449-238 167-238	須恵器 盤	底片	— × 16.3 × (2.4)	南東部	底部円盤か。轆轤。右回転。底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
449-239 167-239	須恵器 盤	底片	— × 19.0 × (1.8)	北西部	底部円盤か。轆轤。右回転。底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
449-240 167-240	須恵器 盤	底	— × 14.7 × (2.2)	南東部	底部円盤か。轆轤。右回転。底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
450-241 167-241	須恵器 鉢	口～底 片	18.5 × 11.4 × 7.2	北東部 埋土	底部円盤か。轆轤。右回転。削出し高台。底部回転足削り。高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
450-242 167-242	須恵器 鉢	口～底 片	16.6 × 10.0 × 10.0	北東部	轆轤。右回転。腰～底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
450-243 167-243	須恵器 大型椀	体～底 片	— × 12.2 × (6.4)	北東部	轆轤。右回転。腰～底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
450-244 168-244	須恵器 大型椀	口～底 片	19.5 × 13.4 × 8.2	南東部	紐造。轆轤。右回転で。付高台横溝で。	①還元・良好 ②オリーブ灰 ③細砂混る
450-245 168-245	須恵器 大型椀	口～底 片	16.3 × 11.0 × 6.4	北東部	轆轤。右回転。底部回転足削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
450-246 168-246	須恵器 椀	底	— × 9.7 × (2.3)	南西部上層	轆轤。右回転。底部回転足削り後、磨削で。付高台横溝で。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
450-247 168-247	須恵器 大型椀	体～底 片	— × 12.8 × (4.8)	北東部	轆轤。右回転。底部横溝で。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調査の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
450-248 168-248	須恵器 大型椀	口~底 底	17.0 × 13.0 × 7.3	北西部	轆轤。右回転。腰~底部回転寛削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
451-249 168-249	須恵器 椀	体~底 底	— × 10.8 × (4.0)	北東部	轆轤。右回転。底部回転寛削り。付高台横撫で。内面炭化物付着。	①還元・良・軟質 ②灰白 ③緻密
451-250 168-250	須恵器 椀	体~底 底	— × 12.0 × (4.0)	南西部	轆轤。右回転。腰~底部回転寛削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
451-251 168-251	須恵器 椀	底 底	— × 13.0 × (3.0)	西東部	轆轤。右回転。底部回転寛削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
451-252 168-252	須恵器 椀	口~底 底	16.3 × 9.1 × 6.6	北西部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②によ い黄褐~灰白 ③緻密
451-253 168-253	須恵器 椀	口~底 底	15.1 × 8.7 × 7.8	北東部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
451-254 168-254	須恵器 椀	口~底 底	15.0 × 8.1 × 7.9	東溝上 北東部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良・やや低溫 ②暗青灰 ③砂混る
451-255 168-255	須恵器 椀	口~底 底	17.1 × 8.9 × 7.9	東南部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良・軟質 ②灰 白 ③緻密
451-256 168-256	須恵器 椀	口~底 底	16.7 × 10.1 × 7.6	西南部 上層	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良・軟質 ②灰白 ③緻密
451-257 168-257	須恵器 椀	口~底 底	17.6 × 10.3 × 7.2	南西部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良 ②灰白 ~灰 ③細砂混る
452-258 168-258	須恵器 椀	口~底 底	15.2 × 8.9 × 7.2	東南部	轆轤。右回転。付高台及び底部、横撫で。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
452-259 168-259	須恵器 椀	口~底 底	17.0 × 9.9 × 6.8	東南部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。内面、油性炭化物付着。	①還元・低溫・軟質 ②青灰 ③緻密
452-260 168-260	須恵器 椀	口~底 底	14.4 × 8.6 × 6.9	北東部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
452-261 168-261	須恵器 椀	口~底 底	16.1 × 9.1 × 7.0	東南部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。口縁部やや歪む。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
452-262 168-262	須恵器 椀	口~底 底	15.9 × 9.0 × 6.3	西南部 上層	底部円柱。轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。見込部、歯車形化胎土。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
452-263 168-263	須恵器 椀	口~底 底	14.6 × 8.8 × 6.1	西南部 上層	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
452-264 168-264	須恵器 椀	口~底 底	15.2 × 8.4 × 5.2	埋土	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。見込部、重焼き痕。	①還元・良・やや軟質 ②灰 ③緻密
452-265 169-265	須恵器 小片	口~底 小片	14.8 × 10.0 × 6.3	東南部	轆轤。右回転。付高台横撫で。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
452-266 169-266	須恵器 椀	口~底 底	15.8 × 8.1 × 6.0	南東部	轆轤。右回転余切り。付高台横撫で。口縁部、歪み顯著。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口徑 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
452-267 169-267	須恵器 椀	口~底 突	15.4 × 7.9 × 5.7	東南部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
452-268 169-268	須恵器 椀	口~体 片	16.4 × — × (5.2)	北西部	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
452-269 169-269	須恵器 椀	口~体 小片	18.6 × — × (5.1)	南東部	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②オ リーブ黒 ③緻密
452-270 169-270	須恵器 椀	口~体 小片	17.0 × — × (5.5)	南東部	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
453-271 169-271	須恵器 椀	体~底 片	— × 10.7 × (3.7)	南西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
453-272 169-272	須恵器 椀	体~底 片	— × 10.0 × (4.0)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
453-273 169-273	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.2 × (4.7)	北西部	底部円柱。轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好・堅緻 ②灰白 ③細砂混る
453-274 169-274	須恵器 椀	体~底 片	— × 9.0 × (5.0)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
453-275 169-275	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.4 × (4.0)	南東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良・やや軟質 ②灰白 ③緻密
453-276 169-276	須恵器 椀	底	— × 10.0 × (2.5)	南西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰オ リーブ ③細砂混る
453-277 169-277	須恵器 椀	底	— × 7.3 × (2.1)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。やや歪む。見込部擦れ。体部意図的打割れ。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
453-278 169-278	須恵器 椀	体~底 片	— × 7.7 × (3.8)	東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
453-279 169-279	須恵器 椀	体~底 片	— × 7.8 × (3.4)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。内端突出。	①還元・良・やや軟質 ②灰白 ③緻密
453-280 169-280	須恵器 椀	体~底 片	— × 9.4 × (3.5)	西南部 上層	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。体部の一部破損。	①還元・不良 ②灰 ③細砂混る
453-281 169-281	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.0 × (5.1)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好・堅緻 ②灰 ③緻密
453-282 169-282	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.7 × (2.7)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。体部意図的打割。見込部厚減。転用痕。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
454-283 169-283	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.6 × (3.1)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低溫 ②灰白 ③砂混る
454-284 169-284	須恵器 椀	底	— × 8.6 × (2.4)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
454-285 169-285	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.3 × (3.4)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低溫 ②灰白 ③緻密

H12号清出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
454-286 170-286	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 10.0 × (3.3)	南東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ～褐灰 ③緻密
454-287 170-287	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 7.6 × (3.3)	南西部 上層	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
454-288 170-288	須恵器 椀	体～底	— × 8.8 × (3.1)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰オ リーブ ③細砂混る
454-289 170-289	須恵器 椀	体～底	— × 7.5 × (4.3)	北東上層	轆轤。右回転糸切り。腰部～付高台横無 で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
454-290 170-290	須恵器 椀	体～底	— × 8.2 × (3.3)	東部上層	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰 ～黄灰 ③細砂混る
454-291 170-291	須恵器 椀	体～底	— × 6.8 × (5.2)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②褐灰 ③緻密
454-292 170-292	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 8.0 × (4.8)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
454-293 170-293	須恵器 椀	体～底	— × 7.9 × (2.7)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
454-294 170-294	須恵器 椀	底	— × 8.6 × (2.0)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・軟質 ②浅黄 ③細砂混る
455-295 170-295	須恵器 椀	底	— × 7.6 × (2.4)	南東部上 層	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。見 込部厚紙。転用痕か。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
455-296 170-296	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 7.8 × (3.5)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
455-297 170-297	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 8.2 × (2.5)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。焼 成前に一部潰れ。	①還元・良好
456-298 170-298	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 7.4 × (3.3)	南東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
455-299 170-299	須恵器 椀	体～底	— × 7.5 × (2.4)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②褐灰 ③砂混る
455-300 170-300	須恵器 椀	体～底 1/4	— × 7.0 × (3.0)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
455-301 170-301	須恵器 椀	口～底 1/4	13.9 × 7.2 × 5.4	南西部上 層	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・不良・低温 ②灰 ③砂混る
455-302 170-302	須恵器 椀	口～底 1/4	13.3 × 6.7 × 5.1	北西部 13号溝南	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰オ リーブ ③砂混る
455-303 170-303	須恵器 椀	体～底	— × 7.6 × (2.8)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・軟質・やや低 温 ②灰 ③細砂混る
455-304 170-304	須恵器 椀	底	— × 7.0 × (1.8)	北西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密

H12号清出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
455-305 170-305	内黒土器 杓	口～底 片	14.0 × 7.1 × 5.1	南西部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で内面黒色処理。	①酸化・良 ②灰黄 ③細砂混る
455-306 170-306	須恵器 杓	口～底 片	12.8 × 6.8 × 4.8	南西溝上	底部円柱。轆轤。右回転糸切り付高台手持撫で。	①酸化・良好 ②にがい ③細砂混る
456-307 171-307	須恵器 短頸壺	口～底 片	10.2 × 8.1 × 8.1	西南部	轆轤。右回転。腹部及び底部、不定方向磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
456-308 171-308	須恵器 短頸壺	口～底 片	11.4 × — × 12.2	西北部	紐造。口頸部～体部上半横撫で。体部下半～底部、不定方向磨削り。丸底。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
456-309 171-309	須恵器 短頸壺	口～中 片	10.7 × — × (10.1)	北東部	紐造。口頸部～中位、横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
456-310 171-310	須恵器 短頸壺	口～底 片	11.8 × 9.4 × 13.5	下層 南西部	紐造。口頸部～体部上半横撫で。下半及び底部回転磨削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
456-311 171-311	須恵器 短頸壺	口～底 片	12.3 × 7.5 × 12.8	西南部	紐造。口頸部～体部上半横撫で。底部回転磨削り。体部下半及び底部磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
456-312 171-312	須恵器 短頸壺	口～底 片	12.4 × 7.5 × 12.7	西北部	紐造。口頸部～体部中位横撫で。体部下位及び底部、手持磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
456-313 172-313	須恵器 短頸壺	口～底 片	13.1 × — × 15.2	南部	紐造。口頸部～体部中位横撫で。体部下位～底部磨削り。丸底。付高台割落。	①還元・不良・低温 ②赤灰 ③砂混る
457-314 172-314	須恵器 頸～底 片	— × 7.8 × (12.4)	南東部	紐造。頸部～体部上半横撫で。下位及び底部回転磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
457-315 172-315	須恵器 短頸壺	頸～底 片	— × 11.0 × (12.9)	南西部	紐造。頸部～体部上半横撫で。下半及び底部回転磨削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
457-316 172-316	須恵器 短頸壺	頸～下 片	— × — × (11.3)	西南部 下層	紐造。頸部～体部上半横撫で。下半叩打後、磨削り及び撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
457-317 172-317	須恵器 短頸壺	下～底 片	— × 7.5 × (7.2)	西北部	紐造。横撫で。体部最下位及び底部手持磨削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
457-318 172-318	須恵器 短頸壺	下～底 片	— × 10.4 × (4.5)	西南部	紐造。横撫で。体部最下位及び底部手持磨削り。	①還元・やや低温・軟 質 ②灰白 ③砂混る
457-319 172-319	須恵器 短頸壺	頸～底 片	— × 10.7 × (16.1)	南西部上層	紐造。横撫で。体部下位回転磨削り。底部手持磨削り。	①還元・良好 ②オリ ープ灰 ③白砂混る
458-320 172-320	須恵器 短頸壺	口～底 片	18.3 × 9.2 × 13.3	西南部	紐造。横撫で。体部下半及び底部、不定方向手持磨削り。広口。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
458-321 173-321	須恵器 短頸壺	口～底 片	16.8 × 14.0 × 15.4	西北部	紐造。横撫で。体部下位及び底部、磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
458-322 173-322	須恵器 短頸壺	口～底 片	12.9 × 9.8 × 12.4	西北部	紐造。口頸部～体部中位横撫で。下位～底部回転磨削り。付高台横撫で。	①酸化 ②にぶ・赤褐 ③細砂混る
458-323 173-323	須恵器 短頸壺	上～底 片	— × 12.7 × (12.1)	西北部	紐造。体部横撫で。底部回転磨削り。付高台横撫で。	①酸化・良 ②残灰 ③砂質土

## 第4章 H区の遺構と遺物

## H12号溝出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存状況	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
458-324 173-324	須恵器 短頸壺	上～中 1/4	— × — × (8.5)	北西部	紐造、体部横撫で。	①還元・良好 ②青白 ③細砂混る
459-325 173-325	須恵器 広口瓶	頸 小片	— × — × (7.5)	北東部	轆轤、右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
459-326 173-326	灰物陶器 壺	口～頸	8.6 × — × (7.8)	北西部	紐造、横撫で。施釉。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③緻密
459-327 173-327	須恵器 長頸壺	頸 1/2	— × — × (10.9)	北西部	轆轤、右回転。	①還元・良・やや低温 ②灰白 ③細砂混る
459-328 173-328	須恵器 長頸壺	口～頸 1/2	7.5 × — × (8.5)	北西部	轆轤、器壁薄い。内外灰被り。	①還元・良好 ②オ リーブ黒 ③細砂混る
459-329 173-329	須恵器 長頸壺	上～底 1/2	— × (12.4) × (13.4)	10号溝 西部	紐造、横撫で。体部上位、沈線間に列点 帯描文。中位縦、下位横方向磨削り。底 部回転磨削り。付高台割落。頸部欠損。	①還元・良好 ②赤灰 ③緻密
459-330 173-330	須恵器 長頸壺	上～底 1/2	— × (12.0) × (11.2)	西南部	紐造、横撫で。体部下半～底部回転磨削 り。付高台横撫で。割落。頸部欠損。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
459-331 174-331	須恵器 長頸壺	上～下 1/2	— × (10.5) × (11.8)	北西部	紐造、横撫で。体部上位、沈線間に列点 帯描文。中位以下、横方向磨削で。頸部 欠損。	①還元・良好 ②緑灰 ③細砂混る
459-332 174-332	須恵器 長頸壺	上～底	— × 12.0 × (12.0)	北西部	紐造。体部横撫で。後、下位横方向磨削り。 底部回転磨削り。付高台横撫で。頸部 欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
460-333 174-333	須恵器 長頸壺	上～中 1/2	— × — × (5.8)	東部	紐造。体部横撫で。灰被り。頸部及び下 半欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
460-334 174-334	須恵器 長頸壺	上～中 1/2	— × — × (5.7)	北西部	紐造。体部横撫で。上位沈線間に列点帯 描文。	①還元・良好・軟質 ②灰白 ③緻密
460-335 174-335	須恵器 長頸壺	上～底 1/2	— × 9.1 × (9.8)	南東部	紐造。体部横撫で。上位～中位粗い列点 帯描文。下位～付高台回転磨削り。頸部 欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
460-336 174-336	須恵器 長頸壺	上～底 1/2	— × 13.9 × (14.0)	西南部上 層	紐造。体部～付高台横撫で。上位沈線間 に列点帯描文。底部回転磨削り。頸部欠 損。	①還元・良好 ②灰 ③白砂混る
460-337 174-337	須恵器 長頸壺	上～底 1/2	— × (8.8) × (11.6)	北西部 南東部下 層	紐造。体部横撫で。上位沈線間に列点帯 描文。下位回転磨削り。頸部・付高台欠 損。	①加酸化還元・良 ②灰黄 ③緻密
460-338 174-338	須恵器 長頸壺	上～底 1/2	— × 12.1 × (12.2)	南西部上 層	紐造。体部横撫で。上位に沈線。下位及 び底部回転磨削り。付高台横撫で。頸部 欠損。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
460-339 175-339	須恵器 長頸壺	上～底	— × 11.8 × (15.0)	南東部	紐造。体部横撫で。上位に沈線。下位及 び底部回転磨削り。付高台横撫で。頸部 欠損。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
461-340 175-340	須恵器 長頸壺	上～底	— × 8.5 × (11.5)	北西部	紐造。体部横撫で。下半、回転磨削り。 付高台小型。横撫で。頸部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存状況	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
461-341 175-341	須恵器 長頸壺	上~底	— × 11.6 × (14.7)	南東部	細造。体部・付高台横撫で。上位に沈層。下位手持足削り。底部に蓋横撫で。頸部欠損。	①酸化 ②灰赤 ③焼裂る緻密
461-342 175-342	須恵器 長頸壺	下~底 片	— × 12.6 × (4.9)	南東部上層	細造。体部下位、回転蹴削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
461-343 175-343	須恵器 長頸壺	底	— × 12.7 × (2.7)	埋土	細造。底部回転蹴削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
461-344 175-344	須恵器 長頸壺	下~底	— × 13.1 × (4.7)	北東部	細造。横撫で。底部回転蹴削り。付高台横撫で。見込部横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
461-345 175-345	須恵器 長頸壺	中~底 片	— × 11.3 × (10.0)	南西部上層	細造。横撫で。付高台横撫で。底部~体部下位灰被り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
461-346 175-346	須恵器 長頸壺	下~底 片	— × 11.6 × (5.5)	北西部	細造。横撫で。体部下位~底部、回転蹴削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
461-347 175-347	須恵器 長頸壺	下~底	— × 11.0 × (6.3)	北西部	細造。横撫で。体部下位~底部、回転蹴削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②暗オリーブ灰 ③細砂混る
461-348 176-348	須恵器 瓶	底	— × 9.0 × (2.4)	北西部	轆轤。右回転。削出し高台~底部、回転蹴削り。	①還元 ②灰 ③緻密
461-349 176-349	須恵器 長頸壺	頸~中 片	(5.5) × — × (15.6)	北東部上層	細造。全面横方向横撫で。体部上位に整形痕跡の除刻。頸部内部におきき肌。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
462-350 176-350	須恵器 高杯	脚 片	— × — × (8.5)	北東部	細造。上げ。横撫で。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
462-351 176-351	須恵器 鉢	下~底 片	— × 11.9 × (4.9)	北西部	底部円盤。体部細造上げ。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
462-352 176-352	須恵器 壺	上~下 片	— × — × 13.0	西部下層	細造。体部上位横撫で。中位以下不定方向蹴削り。内面粗い横撫で。	①還元・良好 ②暗オリーブ灰 ③細砂混る
462-353 176-353	須恵器 壺	口~頸 片	12.8 × — × (6.2)	南東部	細造。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
462-354 176-354	須恵器 壺	口~頸 片	15.9 × — × (5.4)	南東部	細造。横撫で。灰被り。	①還元・高温 ②灰 ③細砂混る
462-355 176-355	須恵器 壺	口~上 片	13.8 × — × (8.5)	南西部上層	細造。横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
462-356 176-356	須恵器 壺	口~上 小片	20.7 × — × (10.2)	南東部	細造。横撫で。灰被り。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
462-357 176-357	須恵器 壺	口~頸 小片	26.4 × — × (5.2)	北東部	細造。強い横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
462-358 176-358	須恵器 壺	下~底 片	— × 12.9 × (9.9)	埋土	細造。横撫で。体部下位及び底部、回転蹴削り。内面横撫で痕跡著。	①還元・良好 ②青灰 ③砂混る
462-359 176-359	須恵器 瓶	下~底 小片	— × 18.0 × (9.5)	西溝上	細造。横撫で。体部下位蹴削り後、胴底部強い横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

## 第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
462-360 177-360	酒 壺 壺	下~底	— × 11.8 × (9.5)		北西部上層	底部円盤及び紐造。体部縦方向の強い指跡で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
463-361 177-361	土 師 器 小 型 壺	口~底	7.8 × — × 6.4		北西部	指押か。体~底部貫刺り後、口頸部強い指跡で。底部吸成。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
463-362 177-362	土 師 器 壺	口~底 1/2	12.6 × — × 11.4		北西部	紐造巻上げ。口頸部無指。体部上半斜方向、下半~底部横方向貫刺り。内面無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
463-363 177-363	土 師 器 壺	口~底 1/2	13.6 × 3.6 × 7.9		東 部	紐造巻上げ。口頸部強い指跡。体部斜方向貫刺り。内面無指。広口	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
463-364 177-364	土 師 器 壺	口~下 1/2	9.8 × — × (11.2)		北東部	紐造巻上げ。口頸部強い指跡。体部斜~横方向貫刺り。内面無指。短頸、球状。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
463-365 177-365	土 師 器 壺	口~上 1/2	13.4 × — × (5.8)		北部上層	紐造。口頸部強い指跡。体部横方向貫刺り後、指で。内面無指。短頸。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
463-366 177-366	土 師 器 壺	口~上 1/2	11.7 × — × (6.0)		北西部下層	紐造。口頸部無指。体部上位横方向貫刺り。台付壁か。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
463-367 177-367	土 師 器 台 付 壺	口~底	12.8 × (5.5) × (12.8)		埋 土	紐造。口頸部無指。体部上半横方向、下半斜方向貫刺り。台部欠損、接合無指。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
463-368 177-368	土 師 器 台 付 壺	下~台 1/2	— × 10.2 × (3.9)		東南部下層	紐造。指で。内面貫指無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
463-369 177-369	土 師 器 壺	口~上 1/2	14.5 × — × (5.0)		東南部下層	紐造。口頸部無指。体部斜方向貫刺り。内面無指。短頸。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
463-370 178-370	土 師 器 壺	口~下 1/2	13.8 × — × (15.0)		西南部	紐造。口頸部無指。体部斜方向貫刺り。内面貫指無指後、黒色処理。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
463-371 178-371	土 師 器 壺	口~頸 (1/2)	17.2 × — × (4.0)		東南部下層	紐造。口頸部無指。体部貫刺り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
463-372 178-372	土 師 器 壺	口~底 1/2	16.5 × 5.0 × 14.1		北西部	紐造巻上げ。口頸部強い指跡。体部~底部斜方向貫刺り。内面貫指無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
463-373 178-373	土 師 器 壺	底	— × 6.4 × (3.1)		北西部	体部下位~底部不定方向貫刺り。内面貫指無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
464-374 178-374	土 師 器 壺	口~上 1/2	15.2 × — × (5.4)		34	紐造。口頸部無指。体部上位横方向貫刺り。内面貫指無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
464-375 178-375	土 師 器 壺	口~上 1/2	15.4 × — × (4.8)		北西部	紐造。口頸部強い指跡。体部上位横方向貫刺り。内面貫指無指。	①酸化・良 ②に よい橙 ③細砂混る
464-376 178-376	土 師 器 壺	口~上 1/2	15.0 × — × (7.0)		南東部下層	紐造。口頸部無指。体部上位横方向貫刺り。内面無指。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
464-377 178-377	土 師 器 壺	口~上 小 片	21.0 × — × (7.3)		北東部	紐造。口頸部無指。体部上位横方向貫刺り。内面貫指無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
464-378 178-378	土 師 器 壺	口~上 1/2	21.9 × — × (5.8)		西南部	紐造。口頸部無指。体部上位横方向貫刺り。内面貫指無指。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る



H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
464-379 178-379	土師器 壺	口～底 欠	23.9 × 5.3 × 31.9	北東部	紐造。2段造。口頸部無で。体部上半横～斜、下半縦、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
464-380 178-380	土師器 壺	口～上 小片	23.1 × — × (9.0)	北東部	紐造。口頸部無で。体部上位横方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
464-381 179-381	土師器 壺	口～上 欠	22.9 × — × (14.3)	北西部	紐造。口頸部横無で。体部粗い不定方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
465-382 179-382	土師器 壺	口～上 欠	25.9 × — × (7.0)	北西部	紐造。口頸部無で。体部横方向寛削り。内面寛削で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
465-383 179-383	土師器 浅鉢	口～上 小片	28.9 × — × (6.1)	南东北部 東側北	紐造。口頸部強い無で。体部斜方向寛削り。内面縦方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
465-384 179-384	土師器 壺	口～上 小片	23.9 × — × (8.0)	南東部上 層	紐造。口頸部4段、強い横無で。体部上位横方向寛削り。内面寛削で。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
465-385 179-385	土師器 壺	口～上 小片	24.6 × — × (5.5)	東部	紐造。口頸部直立、無で。体部上位斜方向寛削り。内面無で。短頸、球状。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
465-386 179-386	土師器 大型壺	口～上 欠	37.3 × — × (6.5)	西南部	紐造。口頸部強い無で。体部上位縦方向寛削り。内面寛削で。厚手。広口。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
465-387 179-387	土師器 壺	下～底 欠	— × 11.2 × (5.8)	北東部 埋土	紐造。体部下位斜方向寛削り。内面指無で痕跡著。周底部直上に焼成前穿孔。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
466-388 179-388	須恵器 大型壺	頸部 欠	頸部口径31	東南部	頸部に3条の沈線通り、周には3本単位の彫線波状文。胴部内面青陶文当て目。	①還元・良好 ②灰 ③砂・小石混る
466-389 179-389	須恵器 壺	口縁部 欠損	口径30.6 最大径36 現高27	12号溝	胴部丸く張り頸部外反。口縁部部直立。外面平行叩き目。内面無で。	①還元・良好 ②灰白 ③小石・砂混る
466-390 179-390	須恵器 大型壺	胴部 欠	頸部口径18.5	南東部	外面叩き目・内面青陶文当て目。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
467-391 180-391	須恵器 横瓮	欠	口径13.2 胴径26.1 器高30.7	埋土	胴部外面平行叩き目の後無で、内面りも作り痕跡に残る。	①還元・良好 ②灰白 ③密
467-392 180-392	須恵器 壺	口縁部 小片		南西下層	口唇部には丸味をもち、下位に低い凸線。口縁部には砲穴文。	①還元・良好 ②灰白 ③変赤
467-393 180-393	須恵器 壺	口縁部 小片		12号溝 埋土	不鮮明な波状文。口唇部下位に沈線。口唇部部直立して鋭る。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る。
467-394 180-394	須恵器 壺	口縁部 小片		12号溝	口唇部直下に6本1条の彫線波状文。口唇部は直立して上下端は鋭る。	①還元・良好 ②暗オ リーブ灰 ③黒色粒多 く混る。
467-395 180-395	須恵器 壺	小片		12号溝 13号溝	上位2本1条・下位体の沈線の間6本1条の列点状彫線文。	①還元・良好 ②灰黄 ③密
467-396 180-396	須恵器 壺	口縁部 小片		12号溝	1条の凸線と不鮮明な波状文。口唇部下位に沈線。口唇部は直立してやや鋭る。	①還元・良好 ②暗緑 灰 ③密

第4章 H区の遺構と遺物

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	遺器 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
467-397 180-397	須恵器 壺	口縁部 小片		12号溝 埋土	1条の凸縁通りに上下に不鮮明な波状文。口唇部下位に沈線。口唇部直立して鋭る。	①還元・良好 ②灰 ③細砂・白色粒混る
468-398 180-398	瓦 軒丸	小片		12号溝	縁帯はほとんどなく2条の細い凸縁を形成。内区に単弁文が2弁残る。	①やや軟 ②灰 ③密 白色粒混る。
468-399 181-399	瓦 丸瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面荒削で。側面荒調整。	①還元・良好 ②灰白 ③織状小石混る。
468-400 181-400	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面荒削で。指頭状の布目圧痕。側面荒調整。	①やや軟 ②灰白 ③ 織状
468-401 181-401	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面荒削で。	①やや軟 ②灰白 ③ 密織状
468-402 181-402	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目横骨痕。凸面荒削り後縁で。側面荒調整。	①やや軟 ②灰白 ③ 白色角石混る
468-403 181-403	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面無で。器内厚い。	①やや軟 ②灰白 ③ 織状軟質
468-404 181-404	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面無で。側面荒調整。	①還元・良好 ②灰白 ③黒色粒混る
469-405 181-405	瓦 平瓦	小片		北辺上面	凹面布目。	①還元・良好 ②灰白 ③織状
469-406 181-406	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。溝で成。荒削で。側面荒調整。	①やや軟 ②灰白 ③ 織状
469-407 181-407	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。	①やや軟 ②灰白 ③ 密
469-408 181-408	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。側面荒調整。	①酸化 ②によい橙 ③織状
469-409 181-409	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面荒削で。指頭状布目圧痕残る。側面荒調整。	①酸化 ②橙 ③軟質 織状
469-410 181-410	瓦 平瓦	小片		北西部下層	凹面布目。凸面無で。	①還元・良好 ②灰 ③白色・黒灰色粒混る
469-411 181-411	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面無で。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
469-412 181-412	瓦 平瓦	小片		北東部	凹面布目。	①還元・良好 ②黄灰 ③白色粒混る
469-413 181-413	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面荒削で。	①還元・良好 ②明黄 ③織状
469-414 181-414	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。416と同一個体か。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒・小石混る
469-415 181-415	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。断面に上下接合痕。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る

H12号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 直径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
469-416 181-416	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒・小石混る
469-417 181-417	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
469-418 181-418	瓦 丸瓦?	小片		12号溝	凹面布目。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
469-419 181-419	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③輪状粗い
469-420 181-420	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
469-421 181-421	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。凸面側で。	①還元・良好 ②灰白 ③黒色粒混る
469-422 181-422	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。器内厚い。	①酸化さみ ②灰白 ③砂混る
469-423 181-423	瓦 平瓦	小片		北東部	凹面布目。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
469-424 181-424	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。	①還元・良好 ②灰 ③白色・黒色粒混る
469-425 181-425	瓦 平瓦	小片		埋土	凹面布目。	①軟 ②によい粒 ③ 織状・白色粒混る
469-426 181-426	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。	①還元・良好 ②黄灰 ③白色粒混る
469-427 181-427	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②青灰 ③やや軟質で白色 小 石混る
469-428 181-428	瓦 平瓦	小片		南東部	凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②灰白 ③黒色粒混る
469-429 181-429	瓦 平瓦	小片		埋土	凹面布目。側面調整。	①酸化・軟 ②粒 ③織状
469-430 181-430	瓦 平瓦	小片		北東部	凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②灰白 ③白色小石混る
469-431 181-431	瓦 平瓦	小片		南西部	凹面布目。	①酸化軟 ②によい粒 ③織状
469-432 181-432	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面布目。	①還元・良好 ②灰 ③黒色粒混る
469-433 181-433	瓦 平瓦	小片		12号溝	凹面細かい布目。	①還元・良好 ②灰 ③黒色粒多く混る

第4章 H区の遺構と遺物

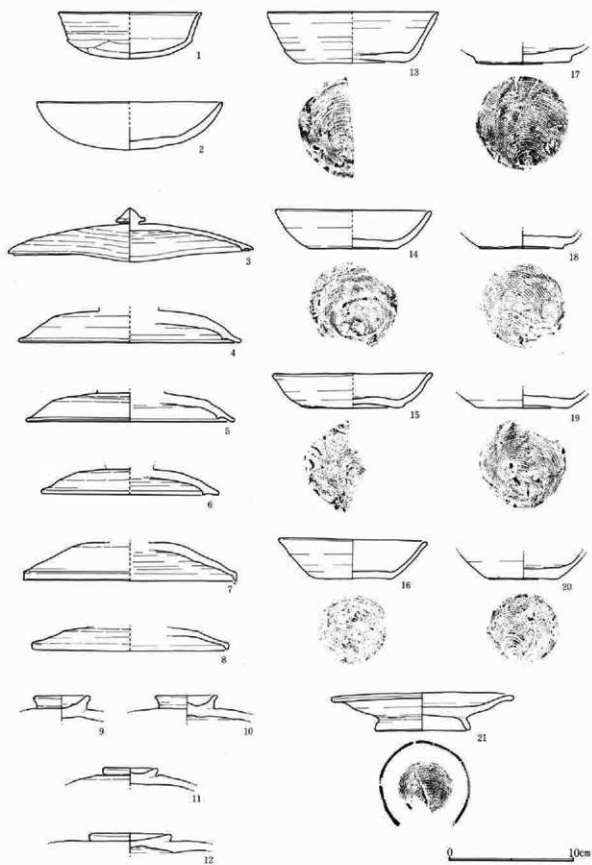


Fig.470 H13号溝出土遺物(1)

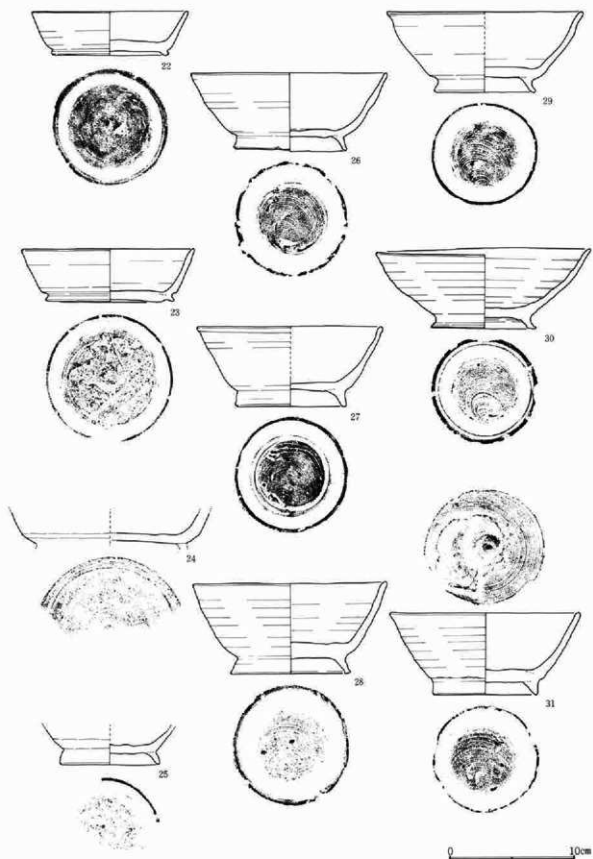


Fig.471 H13号溝出土遺物(2)

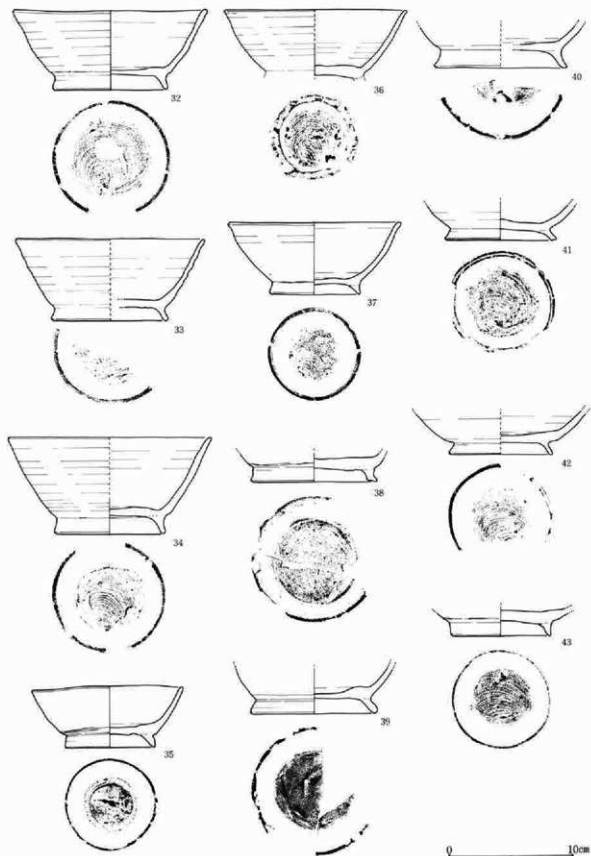


Fig.472 H13号溝出土遺物(3)

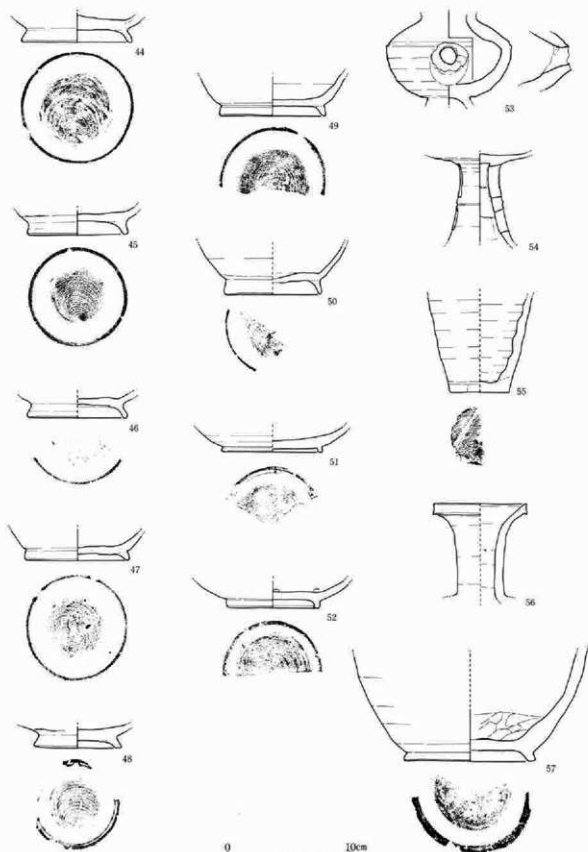


Fig.473 H13号溝出土遺物(4)

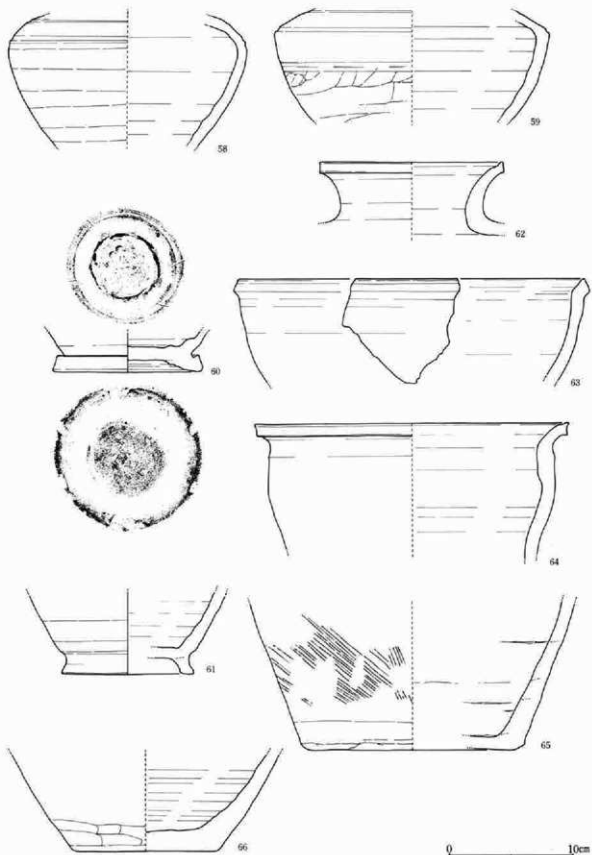


Fig.474 H13号清出土遺物(5)



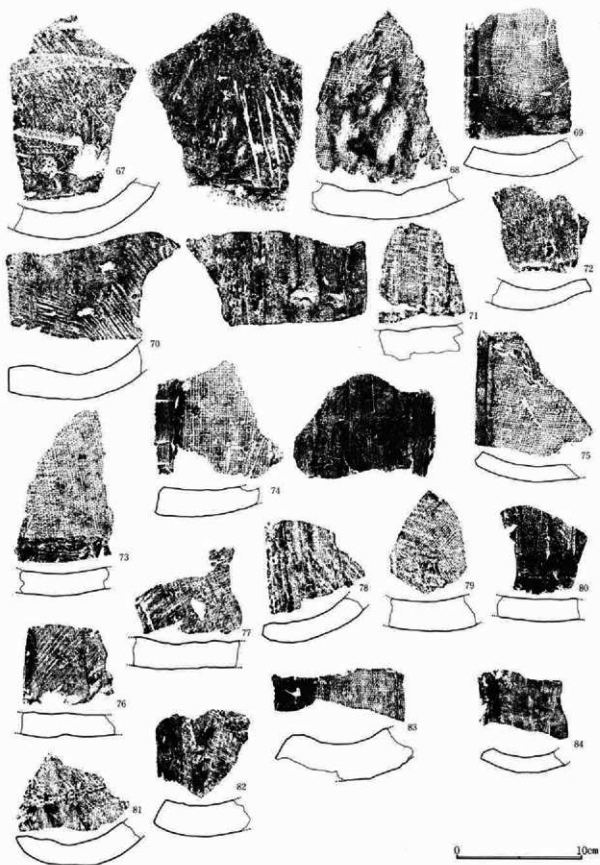


Fig.475 H13号溝出土遺物(6)

第4章 H区の遺構と遺物

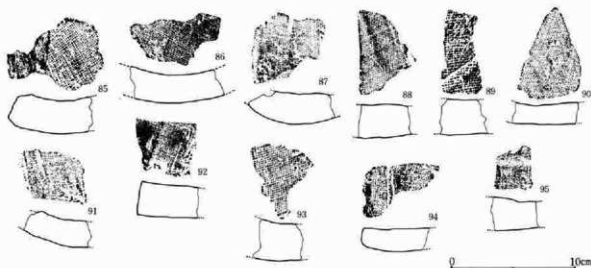


Fig.476 H13号溝出土遺物(7)

H13号溝出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
470-1 182-1	土師器 杯	口~底 片	11.4 × 10.0 × 3.7		南北部	指押。口縁部強い撫で。体底部不定方向 削削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
470-2	土師器 杯	口~底 片	14.8 × - × 3.8		北東部	指押。口縁部撫で。体底部不定方向削削 り。器面荒れ顯著。	①酸化・劣化顯著 ② 橙 ③粗砂混る
470-3 182-3	須志器 蓋	胴~底 完	19.7 × 胴 2.2 × 4.0		埋土	轆轤。右回転。頂部回転削削り。撫、宝 珠形。歪み顯著。	①還元・高温 ②灰 ③緻密
470-4 182-4	須志器 蓋	頂~頂 片	17.8 × - × (2.6)		埋土	轆轤。右回転。頂部2段回転削削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
470-5 182-5	須志器 蓋	頂~頂 小片	16.7 × - × (2.2)		埋土	轆轤。右回転。頂部3段回転削削り。一 部灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
470-6 182-6	須志器 蓋	頂~頂 片	14.2 × - × (2.0)		埋土	轆轤。右回転。頂部2段回転削削り。一 部灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
470-7 182-7	須志器 蓋	頂~頂 片	17.0 × - × (3.0)		東部	轆轤。右回転。頂部2段回転削削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
470-8 182-8	須志器 蓋	頂~頂 片	15.4 × - × (1.9)		SB pit15	轆轤。右回転。頂部1段回転削削り。	①還元・良好 ②青灰 ③粗砂混る
470-9 182-9	須志器 蓋	胴	- × 胴 4.6 × (2.0)		埋土	轆轤。右回転。頂部回転削削り。筒状撫 で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
470-10 182-10	須志器 蓋	胴~頂	- × 胴 5.0 × (2.0)		埋土	轆轤。右回転。頂部回転削削り。筒状撫 で。	①還元・良 ②灰白 ③粗砂混る
470-11 182-11	須志器 蓋	胴~頂 片	- × 胴 4.4 × (1.7)		埋土	轆轤。右回転。頂部回転削削り。筒状撫 で。	①還元・良好 ②灰白 ③粗砂混る

H13号清出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
470-12 182-12	須恵器 蓋	胴~頂 縁	— × 胴 6.6 × (1.5)	埋土	轆轤, 右回転。頂部回転足削り。調整痕 で。大型平頂形。	①酸化・良好 ②浅黄 緑 ③細砂混る
470-13 182-13	須恵器 杯	口~底 縁	13.5 × 9.0 × 4.0	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。	①還元・良好・軟質 ② 灰白 ③緻密
470-14 182-14	須恵器 杯	口~底 縁	12.4 × 7.2 × 3.1	東部	轆轤, 右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
470-15 182-15	須恵器 杯	口~底 縁	12.8 × 7.8 × 2.8	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
470-16 182-16	須恵器 杯	口~底 縁	12.0 × 6.0 × 3.6	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
470-17 182-17	須恵器 杯	底	— × 7.4 × (1.3)	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。体部欠損。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③細砂混る
470-18 182-18	須恵器 杯	底	— × 6.6 × (1.0)	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。体部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
470-19 182-19	須恵器 杯	底	— × 7.4 × (1.2)	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。体部欠損。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
470-20 182-20	須恵器 杯	体~底 縁	— × 5.6 × (2.0)	埋土	轆轤, 右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
470-21 182-21	須恵器 皿	縁~底 縁	14.6 × 7.6 × 3.0	東南部	轆轤, 右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・やや軟質 ② 灰白 ③緻密
471-22 182-22	須恵器 椀	口~底 縁	12.5 × 9.5 × 3.5	東部	轆轤, 右回転。高台~底部回転足削り。	①還元・逆・やや低温 ②灰白 ③細砂混る
471-23 182-23	須恵器 椀	口~底 縁	13.8 × 10.3 × 4.2	西南部	轆轤, 右回転。底部用い足削り。削り出 高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
471-24 182-24	須恵器 椀	体~底 縁	— × 12.2 × (2.4)	埋土	轆轤, 右回転足切り。胴~底縁部回転足 削り。付高台割落。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
471-25 183-25	須恵器 椀	体~底 縁	— × 7.8 × (2.7)	埋土	轆轤, 右回転足切り。胴~底縁部回転足 削り。付高台割落。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
471-26 183-26	須恵器 椀	口~底 縁	15.5 × 9.0 × 6.2	東南部	轆轤, 右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
471-27 183-27	須恵器 椀	口~底 縁	14.8 × 8.9 × 6.4	西南部	轆轤, 右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
471-28 183-28	須恵器 椀	口~底 縁	15.6 × 9.7 × 7.3	埋土	轆轤, 右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
471-29 183-29	須恵器 椀	口~底 縁	15.5 × 8.0 × 6.6	埋土	轆轤, 右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好・軟質 ② 灰白 ③細砂混る
471-30 183-30	須恵器 椀	口~底 縁	17.1 × 8.4 × 6.4	東南部	轆轤, 右回転糸切り。付高台横溝で。重 み顯著。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

第4章 H区の遺構と遺物

H13号溝出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
471-31 183-31	須恵器 碗	口～底 片	15.0 × 8.5 × 6.5	北東部	底部円板造。轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
472-32 183-32	須恵器 碗	口～底 片	15.6 × 9.2 × 6.4	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
472-33 183-33	須恵器 碗	口～底 片	15.0 × 9.2 × 6.5	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
472-34 183-34	須恵器 碗	口～底 小片	16.2 × 9.6 × 7.6	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良・軟質 ② 灰白 ③細砂混る
472-35 183-35	須恵器 碗	口～底 片	12.1 × 7.2 × 4.9	埋土	轆轤。右回転。付高台横撫で。伏焼のため 全外面灰被り。口縁一部歪む。	①還元・高温 ②灰白 ③細砂混る
472-36 183-36	須恵器 碗	口～底 片	14.6 × 8.6 × 5.5	南東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。剥 落。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
472-37 183-37	須恵器 碗	口～底 完	13.8 × 7.0 × 5.8	西南部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
472-38 183-38	須恵器 碗	底	— × 9.8 × (2.2)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
472-39 183-39	須恵器 碗	体～底 片	— × 10.2 × (3.7)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良・軟質 ② 灰白 ③緻密
472-40 183-40	須恵器 碗	体～底 片	— × 10.6 × (3.4)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
472-41 183-41	須恵器 碗	体～底 小片	— × 9.6 × (2.7)	東南部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸還元元・良 ② により黄橙 ③細砂混 る
472-42 183-42	須恵器 碗	体～底 片	— × 8.4 × (3.5)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②明青 灰 ③緻密
472-43 183-43	須恵器 皿	底	— × 8.0 × (2.2)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。外 面吸灰	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
473-44 183-44	須恵器 碗	底	— × 9.0 × (2.1)	3	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
473-45 183-45	須恵器 碗	底	— × 8.0 × (2.2)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
473-46 183-46	須恵器 碗	底 片	— × 8.6 × (1.9)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
473-47 183-47	須恵器 碗	体～底 片	— × 8.2 × (2.4)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
473-48 183-48	須恵器 碗	底 片	— × 7.0 × (1.8)	北東部	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。付 高台胎土は体部と異なる。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
473-49 183-49	須恵器 碗	体～底 片	— × 8.4 × (3.4)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。付 高台～底縁部横撫で。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③細砂混る

H13号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
473-50 183-50	須恵器 壺	体~底 残	— × 7.8 × (3.8)	埋土	横壁。右回転余切り。付高台横無で。	①還元・低温・軟質 ②灰白 ③緻密
473-51 184-51	灰釉陶器 壺	体~底 残	— × 8.0 × (2.0)	埋土	横壁。右回転。底部回転差削り。内面無軸。灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ③精陶土
473-52 184-52	灰釉陶器 壺	体~底 残		38	横壁。右回転。底部回転差削り。内面無軸。	①還元・良好 ②灰白 ③精陶土
473-53 184-53	須恵器 壺	体 残	— × — × (6.5)	北東部	紐造。右回転横無で。体部回転差削り後、注口接合。口頸部及び高台欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③白砂混る・搬入品か
473-54 184-54	須恵器 高杯	底~脚 残	— × — × (7.9)	北東埋土	紐造。横無で。長方形通し2段。体部及び脚端部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③白色土・搬入品か
473-55 184-55	須恵器 壺	中~底 残	— × 4.8 × (7.5)	埋土	横壁。右回転余切り。上半部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
473-56 184-56	須恵器 長頸壺	口~頸 残	7.4 × — × (7.6)	南、埋土	横無で。内面に赤巻復明瞭。全体に灰被り。	①還元・良好・精緻 ②緑黒 ③緻密
473-57 184-57	須恵器 壺	中~底 残	— × 10.5 × (8.3)	埋土	紐造。体部~付高台横無で。内面下位に指押尻。	①還元・良好 ②黒 ③砂混る
474-58 184-58	須恵器 壺	上~下 残	— × — × (10.4)	埋土	紐造。右回転無で。体部下位回転差削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
474-59 184-59	須恵器 壺	上~下 残	— × — × (8.3)	北東部	紐造。右回転無で。体部下位不定方向削り後、上中位横無で。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
474-60 184-60	須恵器 壺	底 残	— × 12.0 × (3.2)	南西部	底部円柱。紐造。底部回転差削り。付高台横無で。底部「×」貫通き。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
474-61 184-61	須恵器 壺	下~底 残	— × 10.6 × (6.2)	埋土	底部円柱。紐造。体部下位~底部回転差削り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
474-62 184-62	須恵器 壺	口~頸 残	13.6 × — × (5.8)	埋土	紐造。右回転無で。一部灰被り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
474-63 185-63	須恵器 広口壺	口~上 小片	28.4 × — × (8.3)	北東部	紐造。右回転無で。横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
474-64 185-64	須恵器 広口壺	口~上 小片	25.2 × — × (10.0)	埋土	紐造。右回転無で。横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
474-65 185-65	須恵器 壺	下~底 残	— × 18.0 × (11.8)	埋土	底部円柱。紐造。外面叩打。内面無で。	①還元・良好 ②灰 ~に白い赤褐 ③細砂 混る
474-66 185-66	須恵器 壺	下~底 残	— × 11.6 × (7.7)	北西部	底部円柱。紐造。体部下位横方向無で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
475-67 185-67	瓦 平瓦	小片			凹面有目。側面無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③小石混る
475-68 185-68	瓦 平瓦	小片			凹面有目。指痕無で。	①還元・良好 ②灰白 ③白色粒混る

第4章 H区の遺構と遺物

H13号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
475-69 185-69	平瓦	小片			凹面布目。側面覓調整。	①還元・良好 ②灰白 ③白色粒混る
475-70 185-70	平瓦	小片			凹面覓削り。凸面平行印跡目。側面覓調整。	①酸化・軟 ②にぶい ③縞状 ④密
475-71 185-71	平瓦	小片		北東部	凹面布目。	①酸化ざみ ②にぶい ③密
475-72 185-72	平瓦	小片			凹面布目。側面覓調整。	①酸化・軟 ②縞 ③密
475-73 185-73	平瓦	小片		北東部	凹面布目。凸面撫で。側面覓調整。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
475-74 185-74	平瓦	小片		北東部	凹面布目。凸面覓削り。側面覓調整。	①やや軟 ②灰白 ③縞状
475-75 185-75	平瓦	小片			凹面布目。側面覓調整。器内薄い。	①やや軟 ②灰白 ③密
475-76 185-76	平瓦	小片			凹面布目。凸面に布目圧痕。側面覓調整。	①酸化ざみ ②灰白 ③密
475-77 185-77	平瓦	小片			凹面布目。凸面撫で。側面覓調整。	①酸化ざみ ②灰白 ③縞状、黒灰色粒混じる
475-78 185-78	平瓦	小片			凹面布目。側面覓調整。	①還元・良好 ②灰白 ③白色小石混る
475-79 185-79	平瓦	小片			凹面布目。	①還元・良好 ②青灰 ③白色粒混る
475-80 185-80	平瓦	小片		北東部	凹、凸面布目。側面覓調整。	①酸化・軟 ②縞 ③密
475-81 185-81	平瓦	小片		北東部	凹面布目。	①還元・良好 ②灰白 ③白色粒、小石混る
475-82 185-82	平瓦	小片			凹面布目。側面覓調整。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
475-83 185-83	瓦 丸瓦?	小片			凹面布目。凸面撫で。側面覓調整。	①酸化ざみ ②灰白 ③密～縞状
475-84 185-84	平瓦	小片			凹面布目。側面覓調整。器内薄い。	①良好 ②灰白 ③黒色粒混る
476-85 185-85	平瓦	小片		北東部	凹面布目。側面覓調整。器内厚い。	①還元・良好 ②灰白 ③白色粒混る
476-86 185-86	平瓦	小片			凹面布目。	①還元・良好 ②黄灰 ③白色粒混る
476-87 185-87	平瓦	小片			凹面布目。凸面撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③白色粒混る

H13号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
476-88 185-88	瓦 平瓦	小片			凹面布目。	①還元・良好 ②灰白 ③黒色粒混る
476-89 185-89	瓦 平瓦	小片		北東部	凹面粗い布目。器肉厚い。	①還元・良好 ②灰白 ③鱗状
476-90 185-90	瓦 平瓦	小片			凹面布目。凸面撫で。	①酸化がみ ②灰白 ③密・鱗状
476-91 185-91	瓦 平瓦	小片		北東部	凹面布目。	①還元・良好 ②灰白 ③白色粒混る
476-92 185-92	瓦 平瓦	小片			凹面布目。側面調整。	①還元・良好 ②灰白 ③黒灰色粒混る
476-93 185-93	瓦 平瓦	小片		北東部	凹面布目。器肉厚い。	①還元・良好 ②灰 ③白色粒混る
476-94 185-94	瓦 平瓦	小片			凹面布目。凸面織目。側面調整。	①還元・良好 ②にぶ い橙 ③鱗状
476-95 185-95	瓦 平瓦	小片			凹面布目。	①酸化がみ ②灰白 ③密

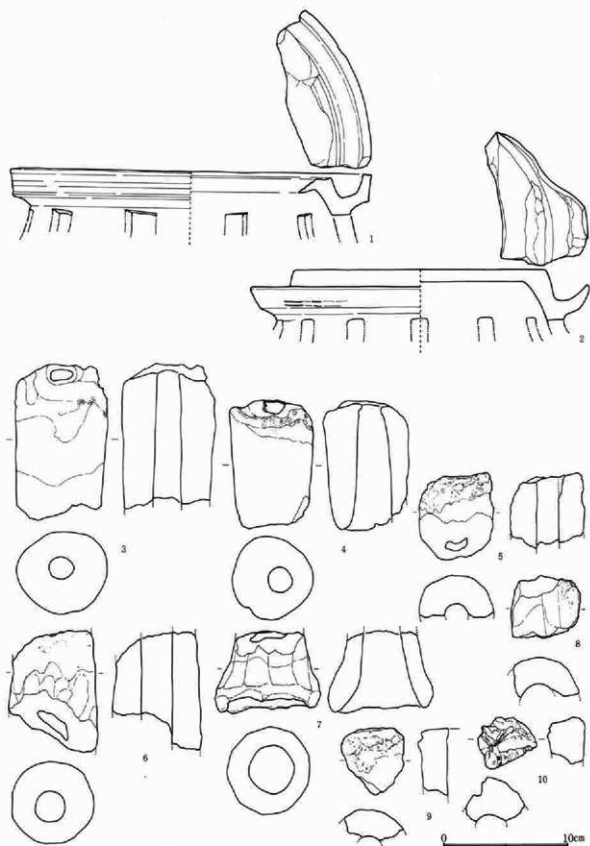


Fig.477 H12号溝出土遺物



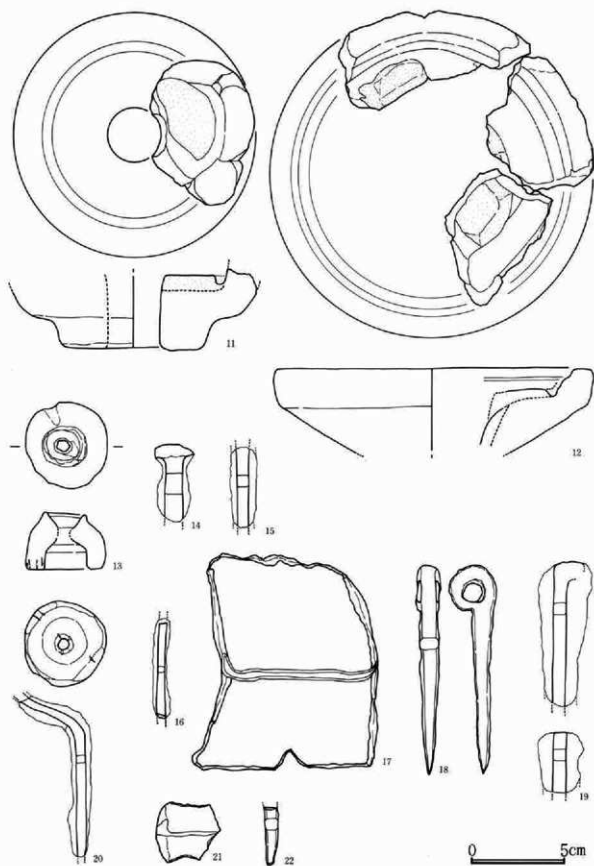


Fig.478 H10・H11・H12号溝出土遺物

## 第4章 H区の遺構と遺物

H10・11・12号溝出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 その他
477-1 186-1	酒 壺 器 圓足凹面碗	圓足部 欠 損	外提径29 碗面径22.4	12号溝 埋 土	外提は碗面より高く直線的に立ち上がる。圓足部は10個の長方形透しを配する。内面に尖垂が付着。	①還元・良好 ②灰白 ③長石、石英粒混る
477-2 186-2	酒 壺 器 圓足凹面碗	圓足部 欠 損	外提径27 碗面径20	12号溝 埋 土	外提は内湾して開き碗面は外提より高い。圓足部は12個の長方形透しを配する。	
477-3 186-3	編 羽 口 基 部	先端部 欠 損	現長12.3 最大径7.4 先端径7.0 孔径1.7~2.2	12号溝 埋 土	先端部磨解。磨解範囲は周辺ほぼ均一。指頸部及び篋による磨で軋。	胎土中に植物質の混入物あり。
477-4 186-4	編 羽 口 完		長さ10.2 基部径5.5 先端径6 孔径1.5~3	12号溝 埋 土	基部に向かい開る。先端部磨解被熱角度20°指頸による成形。	胎土中に植物質の混入物あり。
477-5 186-5	編 羽 口 基 部 欠 損		現長7.0 先端径5.1 孔径1.7	12号溝 埋 土	先端部磨解。気泡多い。指頸による成形。	胎土密 ぶよい小石混る。
477-6 186-6	編 羽 口 先端基 部欠損		現長9.6 径7.1 孔径2.5	12号溝 埋 土	基部やや広がる。指頸による成形	胎土粗く砂、白色粒が多く混る
477-7 186-7	編 羽 口 先端部 欠 損		現長6.5 基部8.4 孔径2.6~6.6	12号溝 埋 土	基部大きく広がる。指頸、篋による成形。	胎土粗く砂、白色粒多く混る。
477-8 186-8	編 羽 口 先・基 部欠損		現長5.0 復元径5.5 孔径2.6	12号溝 埋 土	面取り様の成形。	胎土粗く小石、植物質の混入物あり。
477-9 186-9	編 羽 口 先端部 小 片		現長5.1 先端径5	12号溝 埋 土	先端部磨解。	胎土中に植物質の混入物あり。
477-10 186-10	編 羽 口 先端部 小 片		現長4.1 復元先端径4.7	12号溝 埋 土	厚く磨解物付着。	胎土中に白色粒混る
478-11 186-11	鉢 型 片		外径12.8 内径9.6 孔径2.7	12号溝 埋 土	外縁は欠落、片面張り出し状。内面は0.8cmの厚さに化粧土。	もろく植物質混入
478-12 186-12	鉢 型 片		外径17 内径14 孔径6.4	12号溝 埋 土	外縁はわずかに外傾。体部・孔は漏斗状。内面は0.5cmの厚さに化粧土。	
478-13 186-13	不 明 完		径4.3 高さ3.0 外径1.8・0.7・2.2	12号溝 埋 土	半球状を呈し片端部は突出、孔は漏斗状から細く再び大きく開く。	
478-14 186-14	鉄 器 釘	頭 部	現長4.2 径1.0	10号溝 埋 土	頭部T字形。	
478-15 186-15	鉄 器 釘	両 端 欠 損	現長4.4 径0.6	10号溝 埋 土		
478-16 186-16	鉄 器 釘	両 端 欠 損	現長5.4 径0.4	10号溝 埋 土		
478-17 186-17	鉄 器 板 状		長さ11.4 幅8.4 厚さ0.5	10号溝 埋 土	2枚合せ、長方形を呈し、1辺を軸き周縁は直立して折り曲げる。	
478-18 186-18	鉄 器 釘 状	完	長さ11 基部径1×0.6 環径2.4	12号溝 埋 土	頭部は環状に曲げられ、身部は角ばるが扁平。	
478-19 186-19	鉄 器 釘	先端部 欠 損	現長5.4 径0.	12号溝 埋 土	腐蝕著しく細部不明、頭部はL字状に折れる。	

H10・11・12号溝出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①組成 ②色調	
			口径 × 底径 × 器高				③胎土	その他
478-20 186-20	棒状鉄器	両端部 欠損	現長5.0 径0.4		12号溝	約1/2の部分でL字状に折れ曲がる。		
478-21 186-21	不明鉄器 (鏃) ?	小片 基部	1.5 × 1.7 × 厚0.2		12号溝	基部L字状に折れ曲がる。		
478-22 186-22	釘	先端部	現長3.0 径0.6		12号溝			

## 第5章 I区の遺構と遺物

### 第1節 I区の概要

I区は行政区分上、前橋市元総社町と群馬郡群馬町の同地区にまたがっている。調査区域内のやや南でY字形に東西走る農道がその境界線になる。前橋市分は「弥勒」・群馬町は「稻荷台」の字名である。調査は2期に渡り、昭和57年度は東側だけに建設される側道部分を、また58年度は本線部分の調査を実施した。調査面積は約4650㎡である。区内は自動車道の建設に伴って住宅家屋の移転が行われておりその痕跡がいたるところに遺されていた。

当区で検出された遺構の主なもの古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居跡100軒を中心に、鍛冶工房跡4基・掘立柱建物跡1棟、平安から中・近世にかけての墓跡7基、奈良～平安・中世にかけての大小の溝7条などのほか、多数の土坑類の検出がなされている。

堅穴住居跡は総数100件のうち、奈良期に属すると考えられる遺構が尤も多く54軒、平安期のそれは39軒である。古墳時代に比定されるものは僅かに1軒の検出であった。住居跡の分布はそれほど偏りはないものの、中央部に最も集中しており、重複関係も著しい。

古墳時代の住居跡は88号住居跡である。住居構造は明瞭な4柱穴を有し、長い煙道部をもつ竈が北壁に設けられる。柱穴に関しては24号・28号・40号住居跡に検出されており、これらはいずれも奈良期の所産である。竈の多くは東壁に付設されているが26号・29号住居跡は北壁にみられ、また80号住居跡は南壁に付設されている。竈が付設される方角としては、この80号住居跡のような南壁に付設される例は鳥羽遺跡でも極めて希なことである。奈良から平安期を通じて数例に同一住居内に2基の竈を付設したものが存在するが、それぞれ残存状況に違いが観察されており、住居跡の建て替え、あるいは拡張に伴う現象と考えられる。また奈良期のものに限られるが、6号・24号・79号・90号・103号・105号・108号住居跡には張り出し部が設けられる。

4基の鍛冶工房跡はいずれもその全体形を確認するに至らなかったが、堅穴状遺構の外形を持っていたと考えられる。平面形の一部を確認できた工房跡は3号・4号の2基である。幅約6m、長さ17m以上の規模をもち、長軸の方位は長軸の両壁際に沿って小鍛冶炉跡を配してあり、炉跡には台石が設置されているものも数例検出されている。1号・2号工房跡も炉の配列状態からすれば同様な構造であったと考えられる。また一工房跡の中で炉跡は2～3基の重なり合いが多く、工房跡の存続期間の長さを示しているよう。炉跡は総数130余基を検出している。4基の鍛冶工房跡は同時の操業ではなく遺構の残存状況や台石・その他関係遺物からの遺存から、少なくとも南東部に位置する1号工房跡がやや先行して操業していると考えられる。全体としては二次期に渡っている可能性があるが、その間の大きな断絶は考えられない。鍛冶工房跡からの出土遺物はここで製作したと考えられる製品類はほとんど見られず、羽口や鉄鉋滓類が主である。製品は鉄器が中心と考えられるが、少量の銅滓も検出されており銅器の製作も行われていたようである。工房跡周辺の堅穴住居からは釘・刀子類などの小形鉄製品や銅鏡片が出土している。

工房跡群と周辺の堅穴住居跡の関係は、両者を有機的関連のものとして捕えられなければならないが、その空間的配置については現在のところ規則性を見いだすことは出来ない。細かい時間的な位置付けが必要となる。堅穴住居の遺構としての面からは工房跡に付属する機能はほとんどなく炉跡などが設置された住居は

皆無である。しかし出土する遺物は小形砥石が特に目立ち、一遺構に集中して出土する傾向がある。これは工房跡と堅穴住居とがその作業工程で、粗形製作段階と調整段階とに明瞭に分化していたと考えられる。

掘立柱建物跡は当区唯一の検出であるが、中央部やや北寄りに位置し桁行5間、棟行2間の規模を持つ。桁行方位は鍛冶工房跡とほぼ同一方向のN-Eを示しており、工房跡に関連あるいは付随する施設であろう。

墓跡は区内南部に検出された2号墓跡が特異な形態をもつ。一週約8mの溝によって区画され、中央に伸張葬墓壇が設けられる。墓処の区画や規模から被葬者には一般人とは異なる階層が想定される。

奈良期と考えられる1号溝は当区南寄りに検出され、東西走る。この1号溝を境に南の堅穴住居跡からの鍛冶関係の遺物は少なくなる。1号溝には工房跡を中心とした遺構群とH区に検出された1号掘立柱建物跡等を区画するための目的があった可能性が十分考えられる。

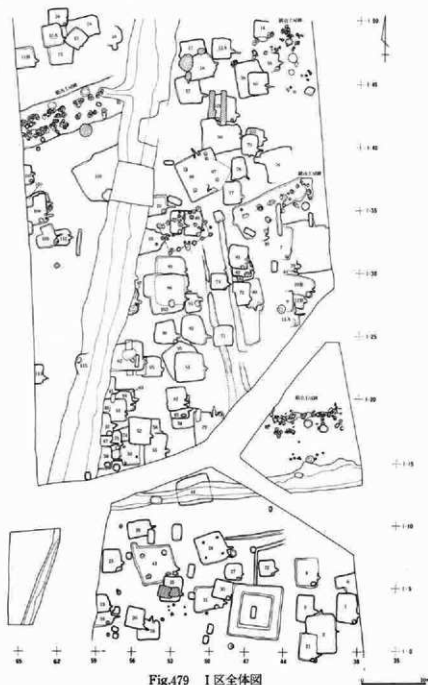


Fig.479 I区全体図

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

I 1号住居跡 (Fig. 480~482・PL. 189, 190)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.75 × 3.25	N- 93° -E	東壁やや南寄り	円形 70 × 65 × 28.5

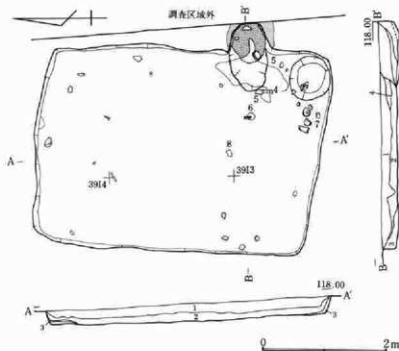


Fig.480 I 1号住居跡

I 区の南東部に位置し、37~39 I 2~4の範囲にある。北側で6号住居跡と重複しておりこれより新しい時期の所産である。長軸を南北方向にもつ。壁高は約28cmを測り直線的に立ち上がる。床面は多少の凹凸はあるが平坦をなす。竈は東壁に付設され、楕円形に作り出される。先端部は調査区域外にあり煙道部は不明である。支脚・袖部等の痕跡はない。燃焼部幅約65cm・奥行きは約50cmまで確認できた。両側の焼土壁の残存状況は良好で、燃焼部内には灰層が厚く堆積している。出土遺物は比較的少なく散在した状態で検出された。

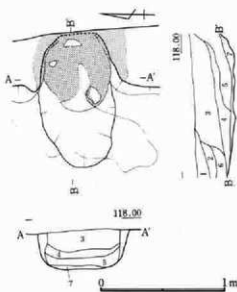


Fig.481 I 1号住居跡竈

I 1号住居跡

- 1 黒褐色土 C 軽石を含む。
- 2 黒褐色土 C 軽石・炭化粒を含む。
- 3 黒褐色土 炭化粒を含む。
- 4 茶褐色土 電磁漆土。

I 1号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C 軽石を含む。
- 2 茶褐色土 電磁漆土。
- 3 黒褐色土 C 軽石・炭化粒・焼土を含む。
- 4 黒褐色土 黄褐色砂質土を含む。
- 5 暗褐色土 灰・炭化粒中土。
- 6 黒褐色土 C 軽石・炭化粒を含む。
- 7 暗褐色土 黒色灰・炭化粒を含む。

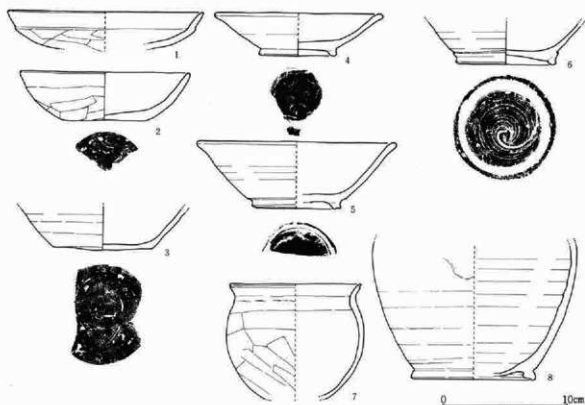


Fig.482 I 1号住居跡出土遺物

I 1号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・R) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
482-1 190-1	土器 杯	口～体 片	15.6 × — × (3.0)	埋土	指押。口縁部内外強い撫で。体底部不定 方向刮削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
482-2 190-2	土器 杯	口～底 片	13.6 × 6.4 × 3.9	埋土	指押。口縁部内外撫で。体部横、底部不定 方向刮削り。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③細砂混る
482-3 190-3	須恵器 杯	体～底 片	— × 8.0 × (3.4)	貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転糸切り。体部下位及び底縁 部回転刮削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
482-4 190-4	須恵器 皿	口～底 片	13.6 × 6.2 × 3.4	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②黄灰 ③細砂混る
482-5 190-5	須恵器 椀	口～底 片	16.0 × 7.2 × 5.3	南東部床 面	轆轤。右回転。付高台横撫で。底中央部 欠損。	①加酸化還元・低温 軟質 ②灰白 ③緻密
482-6 190-6	須恵器 椀	体～底 全	— × 8.0 × 3.3	中央寄床 面	轆轤。右回転刮削り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
482-7 190-7	土器 小型 壺	口～体 片	10.6 × — × (9.2)	南東部南 壁寄床面	紐造。口縁部内外撫で。体部上半横、下 半斜方向刮削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
482-8 190-8	灰輪陶器 壺	体～底 片	— × 10.0 × 10.8	中央寄床 面	轆轤。右回転。体部上位のみ施輪。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

I 2号住居跡 (Fig. 483~486・PL. 191, 192)

I区の南東部に位置し、39~4110~3の範囲にある。北西部で3号住居跡、南西部で21号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は両者より古い時期の所産である。長軸を南北方向にもつ比較的大型の住居跡である。また東壁と北壁にそれぞれ竈と考えられる施設を設ける。壁高は約40cmを測り垂直に立ち上がる。床は平坦をなすが踏み締まりは弱い。住居跡の規模のわりには貯蔵穴・柱穴等は見いだされない。竈は2基

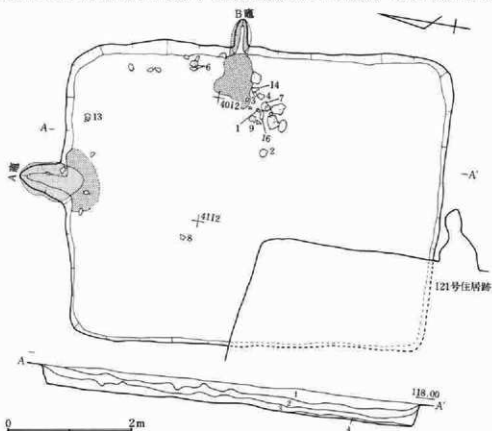


Fig.483 I 2号住居跡

検出されているがいずれも小さく、壁を溝状に掘り込み、通例のもの比べると煙道部にあたる形態を有する。とくに東壁の竈は煙道部を思わせる。2基の竈のあり方については同時使用か、作り変えかの問題は

- I 2号住居跡
- |        |                         |
|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 | C軽石大粒 (5mm前後) を含む。      |
| 2 黒褐色土 | C軽石中粒 (2mm~4mm) 炭化粒を含む。 |
| 3 黒褐色土 | C軽石中粒 (2mm~4mm) を含む。    |
| 4 黒褐色土 | 粘性土。                    |

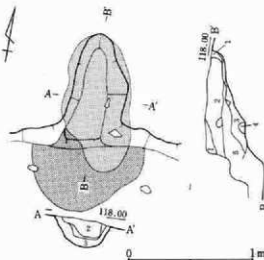


Fig.484 I 2号住居跡竈 (A)

I 2号住居跡竈 (A)

- |        |                        |
|--------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | C軽石を含み、よく締り粘性。         |
| 2 黒褐色土 | C軽石を多量に含む粘土層、崩落焼土を混える。 |
| 3 黒褐色土 | よく締った粘土層。              |
| 4 黒褐色土 | 3に焼土粒を含む粘性土。           |
| 5 暗褐色土 | 焼土塊・炭化灰・少量のC軽石を含む。     |

I 2号住居跡竈 (B)

- |        |                  |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | C軽石・焼土・炭化灰を含む砂層。 |
| 2 暗褐色土 | 1によく似るが、C軽石は少量。  |
| 3 焼土   |                  |

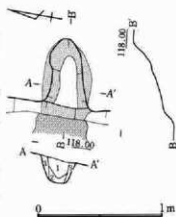


Fig.485 I 2号住居跡竈 (B)



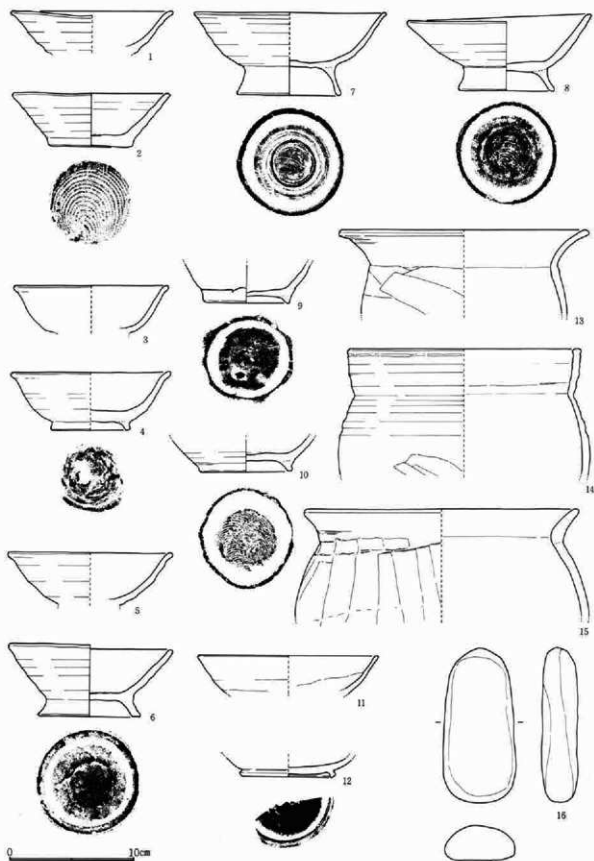


Fig.486 Ⅰ2号住居跡出土遺物

第5章 I区の遺構と遺物

袖部等の痕跡がなく不明である。東壁に付設された竈の前方部に構築材と考えられる凝灰岩および角礫が散乱している。このことからすれば北壁の竈より東壁のものが後に付設されたことが窺われる。東壁の竈は幅約28cm・長さ約65cm。北壁の竈は幅約45cm・長さ約1mを測る。出土遺物は東壁の竈付近に集中して検出されている。

I 2号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 その他
486-1 192-1	須恵器 杯	口～体 片	13.0 × — ×( 3.3)	東中央床 面	轆轤。右回転。内外淡いに染み。	①酸化・良 ②赤黒 ③細砂混る
486-2 192-2	須恵器 杯	口～底 片	12.5 × 6.8 × 4.3	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
486-3 192-3	須恵器 碗	口～体 片	12.4 × — ×( 3.7)	東中央部床 面	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②に よ い橙 ③細砂混る
486-4 192-4	須恵器 碗	口～底 片	12.8 × 6.4 × 4.6	東中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②に よ い黄橙 ③細砂混る
486-5 192-5	須恵器 杯	口～体 片	13.2 × — ×( 4.2)	埋土	轆轤。右回転。高台以下欠損。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
486-6 192-6	須恵器 碗	口～底 片	13.2 × 8.2 × 5.7	北東部東 壁寄床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。口縁部やや重む。	①酸化・良好 ②褐 ③細砂混る
486-7 192-7	須恵器 碗	口～底 片	15.4 × 8.4 × 6.6	東中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台脚高、横撫 で。	①酸化・良好 ②浅黄 ③細砂混る
486-8 192-8	須恵器 碗	口～底 片	14.7 × 7.7 × 6.1	西中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台脚高、横撫 で。口縁部歪み顕著。	①酸化・良好 ②浅黄 ③細砂混る
486-9 192-9	須恵器 碗	体～底 片	— × 6.9 ×( 3.1)	東中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①酸化・良 ②灰～灰 白 ③細砂混る
486-10 192-10	須恵器 碗	体～底 全	— × 7.5 ×( 2.6)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。内外 吸灰処理。	①酸化・良好 ②黒 ③細砂混る
486-11 192-11	灰釉陶器 碗	口～体 小片	14.5 × — ×( 3.1)	埋土	轆轤。右回転糸切り。口縁部内外施釉、 刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
486-12 192-12	灰釉陶器 碗	底片	— × 7.7 ×( 1.5)	埋土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
486-13 192-13	土師器 壺	口～上 片	20.0 × — ×( 6.7)	北東部北 壁寄床面	紐造。口縁部内外撫で。体部鋭削り。内 面荒撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
486-14 192-14	土師器 壺	口～上 片	18.6 × — ×( 10.0)	東中央部床 面	紐造。口頸部～体部、強い横撫で。中位 に一部、指撫で痕。	①酸化・良好 ②に よ い黄橙 ③緻密
486-15 192-15	土師器 壺	口～上 片	21.9 × — ×( 8.5)	埋土	紐造。口頸部内外撫で。体部縦方向荒削 り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
486-16 192-16	石	丸	長12.2 幅 5.8 厚 2.9 359.2g	東中央部床 面	扁平円碑。両端に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)

I 3号住居跡 (Fig. 487~489・PL. 193, 194)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.35 × 2.93	N-86°-E	東壁やや南寄り	

I区の南東部に位置し、41・42 I 2~4の範囲にある。南東部で2号住居跡と重複しておりこれより新しい時期の所産である。壁高は約24cmを測り垂直に立ち上がる。床面は凹凸も少なく平坦をなし踏み締まりも

全体に良好である。貯蔵穴や壁下の溝などの諸施設は検出されなかった。竈は東壁に付設され、方形の燃焼部から短い煙道部が作り出されているが、これは燃焼部からゆるく立ち上がる煙り出し孔と考えられる。支脚・袖部にあたる施設やその痕跡は検出されていない。燃焼部幅約65cm・奥行き約70cm、煙り出し孔径約25cmを測る。遺物は壑内およびその周辺に多く検出された。

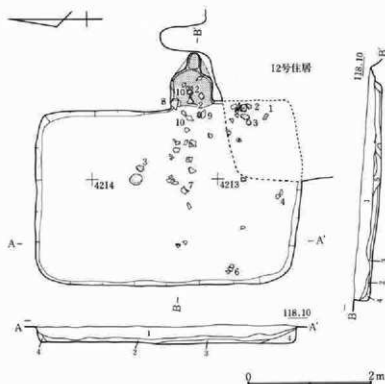


Fig.487 I 3号住居跡

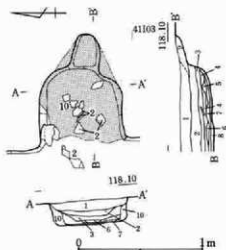


Fig.488 I 3号住居跡竈

## I 3号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 粘性あり。
- 4 暗褐色土 Loam 粒を含み、細りあり。
- 5 暗褐色土 焼土塊を含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を含む。

## I 3号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土・粘土粒を含む。
- 3 赤褐色土 竈部に焼土多く、手前に灰多い。
- 4 黒灰色土 灰層。
- 5 赤褐色土 焼土層。
- 6 灰色土 灰層。
- 7 黒灰色土 灰層。
- 8 赤褐色土 焼土。
- 9 赤褐色土 煙道部焼解層。
- 10 赤褐色土 多量の焼土塊を含む。

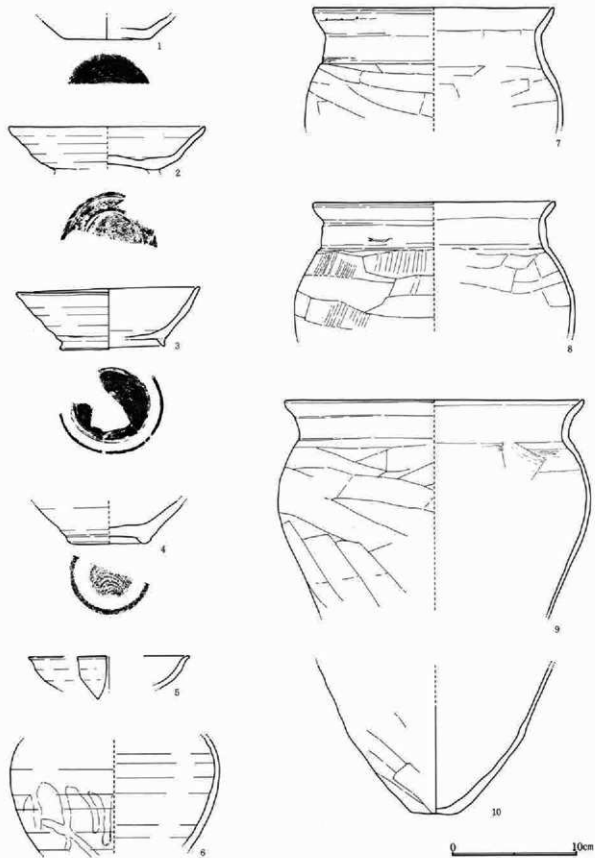


Fig.489 I 3号住居跡出土遺物

## I 3号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
489-1 193-1	須恵器 杆	体~底 片	— × 7.0 × (1.9)	南東部床 面	轆轤。右回転水切り。無調整か。炭灰処理。	①還元・低温 ②オリーブ黒 ③細砂混る
489-2 193-2	須恵器 椀	口~底 片	15.7 × (8.4) × (3.4)	電内	轆轤。右回転。底部段脚で。付高台無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
489-3 193-3	須恵器 椀	口~底 片	14.7 × 8.4 × 5.0	南東・中 央部床面	轆轤。右回転水切り。付高台無で。全体に歪み顕著。	①還元・低温 軟質 ②灰~灰白 ③緻密
489-4 193-4	須恵器 椀	体~底 片	— × 6.6 × 3.4	南西部南 壁寄床面	轆轤。右回転水切り。付高台横断で。内面のみ炭灰処理。	①還元・低温 ②黄褐~黒褐 ③緻密
489-5 193-5	緑釉陶器 椀	口~体 小片	12.8 × — × 2.6	埋土	轆轤。蓋軸良好。美濃産。	①還元・良好 ②オリーブ灰 ③緻密
489-6 193-6	灰釉陶器 壺	体 片	— × — × 9.0	南西部西 壁寄床面	轆轤。上半より指輪、軸差乗れ。	①還元・良好 ②緑 ③緻密
489-7 194-7	土師器 壺	口~上 片	19.3 × — × (9.4)	中央部床 面	紐造。口頸部指頭痕顕著。撫で。体部段削り。内面塗敷で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③緻密
489-8 194-8	土師器 壺	口~上 片	19.4 × — × (10.5)	電内・電 手前床面	紐造。口頸部内外撫で。体部粗い段削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
489-9 194-9	土師器 壺	口~下 片	24.0 × — × (17.0)	電内・電 手前床面	紐造。口頸部内外撫で。体部上位横、中位以下斜方向段削り。内面塗敷で。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③緻密
489-10 194-10	土師器 壺	下~底 片	— × 3.9 × (11.5)	電内	紐造。体部及び底部段削り。内面塗敷で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る

## I 4号住居跡 (Fig. 490~493・PL. 194~196)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.65 × 3.80	N-94°-E	東壁やや南寄り	楕円形 86 × 65 × 20.5

I区の南東部に位置し、41・42 I 5~7の範囲にある。重複関係はなく単独の検出である。調査が2期に渡ったため北東の隅は明らかにはできなかった。形態は比較的整っているが南壁の貯蔵穴部分がやや脹らみ南西隅に歪みが見られる。壁高は約40cmを測り傾斜をもって立ちあがる。床面はわずかな凹凸のみみられるものの総体的には平坦をなす。壁下の溝は東壁と北壁の一部を除き明瞭な形で検出されている。東壁および北壁下にも本来存在していたと考えられるが検出されていない。溝幅約18cm・深さ約6cmを測る。溝内には小穴などの痕跡はなかった。電は東壁に付設されているが壁外への掘り込みはわずかで、煙道部の作り出しもなされていない。また支脚や袖部にあたる施設は掘形においても見出すことはできなかった。このため電の規模については不明な点が多いが、住居内に残る燃焼部の焼土面から、幅約60cm・奥行き約70cmと考えられる。出土遺物は比較的多いが散在的であった。

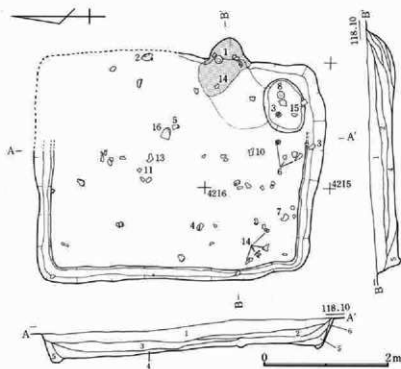


Fig.490 I 4号住居跡

14号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む砂層。
- 2 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 Loam粒を少量含む、やや茶味あり。
- 4 暗褐色土 粘性あり。
- 5 暗褐色土 壁の崩落 Loam塊を含み、粘性あり。
- 6 Loam塊

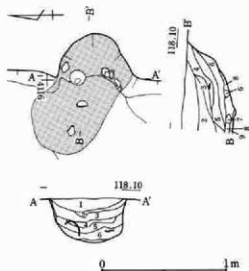


Fig.491 I 4号住居跡窟

14号住居跡窟

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。細りなし。
- 2 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 炭化塊を含み粘性。
- 4 暗褐色土 焼土塊・灰褐色粘性土塊を含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を少量含む砂層。
- 6 暗褐色土 焼土塊・炭化粒を少量含む。
- 7 暗褐色土 C軽石を含む硬質粘性土。
- 8 暗褐色土 焼土粒(2~3mm)炭化粒を少量含む弱粘質土。
- 9 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

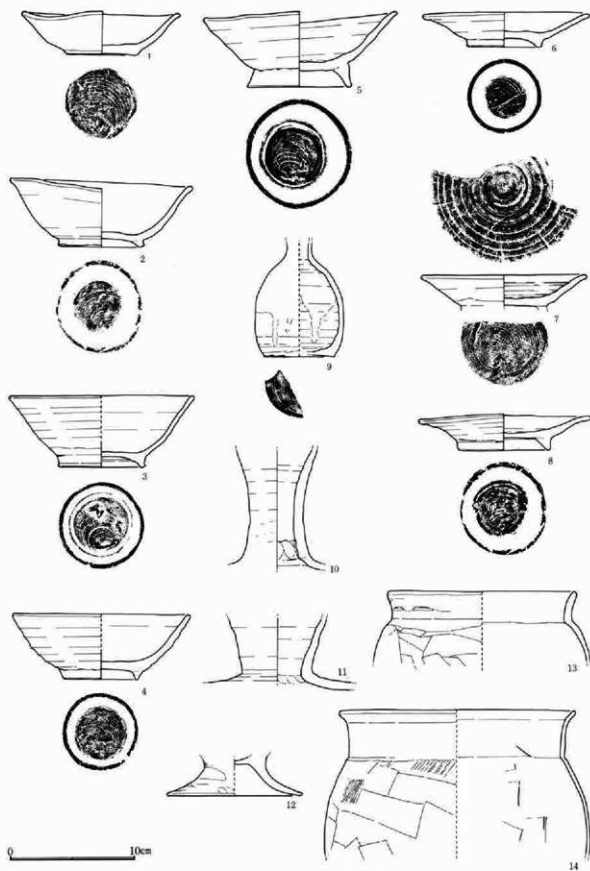


Fig.492 I 4号住居跡出土遺物(1)

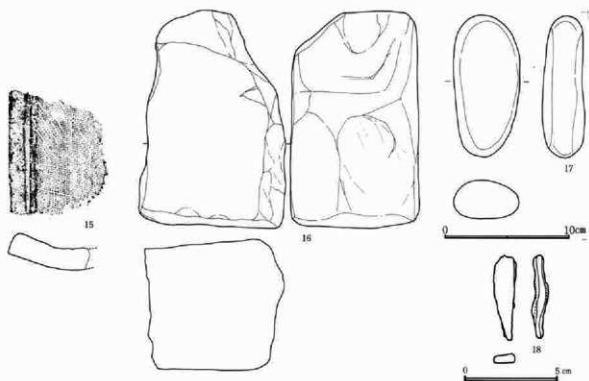


Fig.493 I 4号住居跡出土遺物(2)

I 4号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
492-1 195-1	須恵器 杯	口～底 完	12.7 × 6.0 × 3.5	電内	轆轤。右回転糸切り。無調整。歪み顯著。 内外一部吸炭。	①加酸化還元・良 ② により黄橙 ③細砂混る
492-2 195-2	須恵器 椀	口～底 欠	14.7 × 7.0 × 5.4	北東部北 壁斜流入	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。歪 み顯著。体部一部吸炭。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
492-3 195-3	須恵器 椀	口～底 欠	14.8 × 7.0 × 5.6	南東部貯 蔵穴内等	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂少量混る
492-4 195-4	須恵器 椀	口～底 欠	14.2 × 6.0 × 5.2	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
492-5 195-5	須恵器 器	口～底 完	15.6 × 8.4 × 6.0	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横高。横無 で。歪み顯著。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
492-6 196-6	須恵器 皿	口～底	13.3 × 6.0 × 2.8	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少量混る
492-7 196-7	須恵器 皿	口～底 欠	13.2 × ( 6.8 ) × ( 2.5 )	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。剥 落。吸炭部分斑状。	①加酸化還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
492-8 196-8	須恵器 皿	口～底 完	13.7 × 7.4 × 2.9	南東部貯 蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。歪 み顯著。	①還元・低温 やや軟 ②灰白 ③細砂混る
492-9 196-9	灰胎陶器 小瓶	頸～底 欠	— × 5.6 × ( 9.0 )	埋土	轆轤。右回転糸切り。頸部より抽軸。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密



I 4号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①還元 ②灰 ③胎土 その他
492-10 196-10	須恵器 長頸壺	頸 片	— × — ×(9.5)	南中央部掘形	轆轤。右回転。灰被り。接合部指押。	①還元・良好 ②黄灰 〜黒梅 ③緻密
492-11 196-11	須恵器 横瓶	頸 片	— × — ×(5.5)	北中央部掘形	紐造。轆轤。接合部指押。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
492-12 196-12	土師器 台付壺	台 片	— × 10.8 ×(3.1)	埋土	紐造。撫で。	①酸化・良好 ②に よ赤梅 ③緻密
492-13 196-13	土師器 壺	口へ上 片	15.0 × — ×(5.5)	北中央部掘形	紐造。口頸部内外撫で。体部削削り。内 面撫で。	①酸化・良好 ②に よ橙 ③細砂混る
492-14 196-14	土師器 壺	口へ中 片	18.8 × — ×(11.5)	南西部床 面	紐造。口頸部内外撫で。体部削削り。 内面寛撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
493-15 196-15	瓦 平瓦	小片	厚1.5	貯蔵穴	凸面右目。側面調整。	①還元・良好 ②灰 ③粗・白色粒混る
493-16 196-16	石製品 砥石		長17.2 幅11.8 厚10.3 3,790#	中央部床 面	四角磨減	輝石安山岩(粗粒)
493-17 196-17	石	完	長11.3 幅5.3 厚3.4 302.4#	北中央部掘形	棒状円錐。	石英閃緑岩
493-18 196-18	鉄製品 —		長(4.5) 幅1.1 厚0.5	埋土	扁平角柱状。断面。	

I 6号住居跡 (Fig.494~495・PL.197~199)

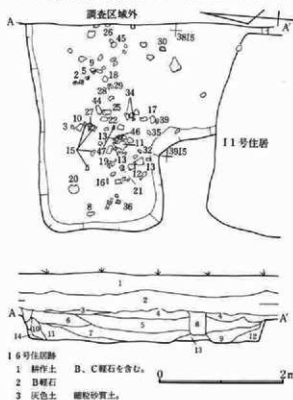


Fig.494 I 6号住居跡

I 1区の南東部に位置し、38・39 I 4・5の範囲にある。住居跡の東側は調査区域外に延び検出されていない。また南側はI 1号住居跡と重複しており消失している。I 1号住居跡より古い時期の所産である。以上のことからその全容を知ることはできない。西壁の一部が突出しており、張り出し部を有する住居形態が考えられる。壁高は約34cmを測りわずかな傾斜をもって立ち上がる。床面の踏み締まりは良好だが凹凸が目立つ。張り出し部は西壁より約1.2m西へ張り出し、幅約1mを測る。遺物は張り出し部を含めた住居跡の北側に多く集中して出土しており、羽口の出土が多い。

- 4 褐色土 細粒砂質土。 12 褐色土 C軽石を  
5 明褐色土 C軽石を含み、細りなし。 多量に含  
6 暗褐色土 C軽石を多量に含み、堅く締る。 る。  
7 暗褐色土 C軽石を少量含む。 る。  
8 暗褐色土 C軽石・炭化灰を含む。 13 暗褐色土 黄褐色土  
9 暗褐色土 炭化灰・粘土を含み粘性。 粒を含む  
10 暗褐色土 砂質土。 砂質。  
11 暗褐色土 炭化灰を含み粘性あり。 14 暗褐色土

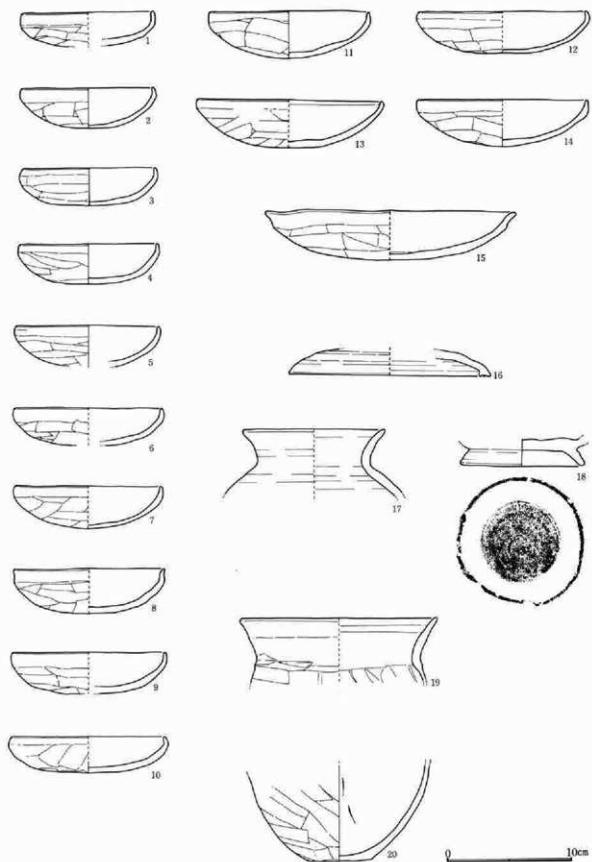


Fig.495 I 6号住居跡出土遺物(1)

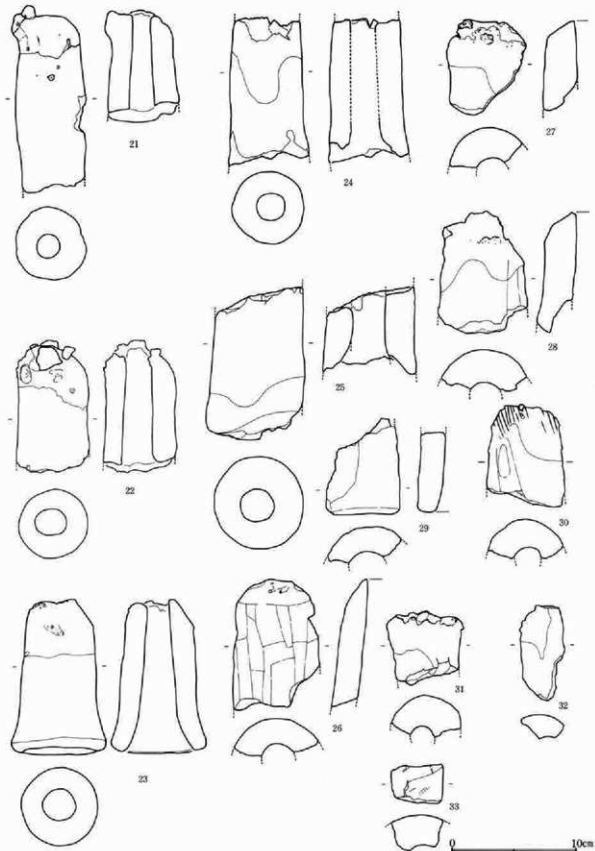


Fig.496 Ⅰ6号住居跡出土遺物(2)

第5章 I区の遺構と遺物

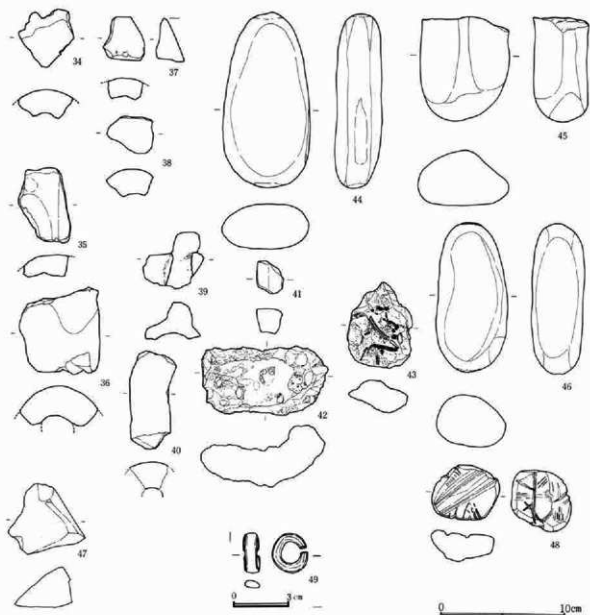


Fig.497 I 6号住居跡出土遺物(3)

I 6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・mm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
495-1 197-1	土器 杯	口~底 片	10.7 × - × 2.7	埋土	指押。口縁部及び内面磨で。体部横、底部不定方向荒削り。	①酸化・良 ②橙 ③緻密

Ⅰ6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
495-2 197-2	土師器 杯	口～底 完	10.7 × — × 3.2	東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
495-3 197-3	土師器 杯	口～底 片	10.7 × — × 3.0	中央部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-4 197-4	土師器 杯	口～底 完	11.2 × — × 3.2	西部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-5 197-5	土師器 杯	口～底 完	11.5 × — × 3.3	東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
495-6 197-6	土師器 杯	口～底 片	11.9 × — × 3.0	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-7 198-7	土師器 杯	口～底 片	11.9 × — × 3.4	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体～底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
495-8 198-8	土師器 杯	口～底 片	12.2 × — × 3.6	西部床面	指押。口縁部及び内面無で。体～底部不定方向寛削り。底部吸炭箇所あり。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
495-9 198-9	土師器 杯	口～底 片	12.5 × — × 3.3	東部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-10 198-10	土師器 杯	口～底 片	12.5 × — × 2.9	中央部床面	指押。口縁部及び内面無で。体～底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
495-11 198-11	土師器 杯	口～底 完	12.8 × — × 3.8	中央部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部幅広く、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-12 198-12	土師器 杯	口～底 片	13.5 × — × 3.3	中央部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-13 198-13	土師器 杯	口～底 小片	14.8 × — × 3.8	中央部床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
495-14 198-14	土師器 杯	口～底 小片	13.7 × — × 3.7	埋土	指押。口縁部及び内面無で。底部不定方向寛削り。底部吸炭箇所あり。	①酸化・良好 ②にぶ い赤褐 ③細砂混る
495-15 198-15	土師器 大型杯	口～底 片	20.0 × — × 4.0	中央部床面	指押。口縁部及び内面強い無で。体部横、底部不定方向寛削り。口縁部やや外反	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-16 198-16	須恵器 蓋	頂～端 片	16.2 × — × ( 2.1 )	中央部床面	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
495-17 198-17	須恵器 蓋	口～上 片	11.4 × — × ( 5.3 )	中央部床面	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
495-18 198-18	須恵器 蓋	底全	— × 10.0 × ( 2.3 )	東部床面	底部回転寛削り。付高台横撫で。	①還元・良 ②暗灰 ③砂混る
495-19 198-19	土師器 甕	口～上 片	15.8 × — × ( 5.0 )	中央部床面	紐造。口縁部内外撫で。体部寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
495-20 198-20	土師器 甕	下～底 全	— × 5.0 × ( 7.5 )	西部床面	紐造。体部及び底部寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 6号住居跡出土遺物観察表

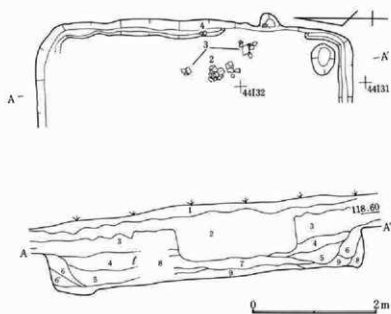
Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎 土 その他
496-21 199-21	土 製 品 陶 羽 口	先～中 1/2	長(14.8)×幅5.6×厚5.8	中央部床 面	棒付筒で、先端部溶解物付着。長身型。	①酸化・良好 ②灰黄 褐～灰～浅黄橙 ③砂 混る
496-22 199-22	土 製 品 陶 羽 口	先～中 全	長(10.5)×幅5.6×厚5.5	中央部床 面	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②緑黒～青灰～橙 ③砂混る
496-23 199-23	土 製 品 陶 羽 口	先～基 完	長(12.3)×幅6.1×厚6.2	埋 土	棒付筒で、先端部溶解物少量付着。	①酸化・良好 ②暗青 灰～黄灰～浅黄橙 ③砂混る
496-24 199-24	土 製 品 陶 羽 口	中～基 全	長(11.7)×幅5.7×厚5.7	埋 土	棒付筒で、長身型。	①酸 化・良 好 ②灰 ～次黄 ③砂混る
496-25 199-25	土 製 品 陶 羽 口	中～基 1/2	長(12.1)×幅7.1×厚7.3	中央部床 面	棒付筒で。	①酸 化・良 ②褐 灰 ～浅黄橙～にぶい橙 ③砂混る
496-26 199-26	土 製 品 陶 羽 口	先～中 1/2	長(10.2)×幅(7.0)×	東部床面	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②黒～灰 ③砂混る
496-27 199-27	土 製 品 陶 羽 口	先～中 1/2	長( 7.6)	中央部床 面	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②暗 灰黄～明黄褐 ③砂混る
496-28 199-28	土 製 品 陶 羽 口	先～中 1/2	長( 9.7)	東部床面	棒付筒で。	①酸化・二次還元 ② 灰～橙 ③砂混る
496-29 199-29	土 製 品 陶 羽 口	中～基 1/2	長( 7.5)	東部床面	棒付筒で。	①酸 化・良 ②褐 灰 ～浅黄橙 ③砂混る
496-30 199-30	土 製 品 陶 羽 口	先～中 1/2	長( 8.0)	東部床面	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②青灰～灰白～浅黄橙 ③砂混る
496-31 199-31	土 製 品 陶 羽 口	先 1/2	長( 5.3)	埋 土	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸 化・良 ② 緑 灰 ～淡黄 ③砂混る
496-32 199-32	土 製 品 陶 羽 口	中 1/2	長( 6.9)	西部床面	棒付筒で。	①酸 化・良 ②灰 白 ～次黄～淡黄 ③砂混 る
496-33 199-33	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長( 7.5)	中央部床 面	棒付筒で。	①酸化・良 ②灰～淡 黄 ③砂混る
497-34 199-34	土 製 品 陶 羽 口	先 小 片	長( 3.7)	埋 土	棒付筒で。	①酸化・二次還元 ②灰 ③砂混る
497-35 199-35	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長( 2.4)	埋 土	棒付筒で。	①酸化・二次還元 ②灰～灰白 ③砂混る
497-36 199-36	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長( 2.8)	埋 土	棒付筒で。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③砂混る
497-37 199-37	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長( 2.7)	埋 土	棒付筒で。	①酸化・二次還元 ②灰 ③砂混る
497-38 199-38	土 製 品 陶 羽 口	先 1/2	長( 4.1)	中央部床 面	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰黄褐～淡黄 ③砂混る
497-39 199-39	土 製 品 陶 羽 口	先 小 片	長( 4.5)	中央部床 面	棒付筒で、先端部溶解物付着。	①酸化・ ②青灰～黄 灰～浅黄橙 ③砂混る

I 6号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
497-40 199-40	土製品 彌羽口	先 小片	長(5.8)	中央部床 面	棒付無で、先端部溶解物少量付着。	①酸化・②によい黄 橙～橙 ③砂混る
497-41 199-41	土製品 彌羽口	中 小片	長(7.8)	埋土	棒付無で。	①酸化・二次還元 ②灰～灰白 ③砂混る
497-42 199-42	鉄 藍滓		長10.0 幅5.0 厚3.2	埋土	椀形藍滓。	
497-43 199-43	鉄 藍滓		長6.8 幅5.1 厚2.1	埋土	椀形藍滓。炭化物付着。	
497-44 199-44	石 叩打具	完	長13.9 幅7.0 厚3.3 581.0g	中央部床 面	扁平長円礫。両端に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
497-45 199-45	石		長(8.3) 幅7.3 厚4.5 353.6g	東部床面	棒状円礫。半欠。	輝石安山岩(粗粒)
497-46 199-46	石 叩打具	完	長11.9 幅5.7 厚4.3 416.2g	中央部床 面	扁平長円礫。両端に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
497-47 199-47	石製品 砥石	完	長5.6 幅6.2 厚3.2	中央部床 面	角礫の4か所使用。粗砥。	角閃石安山岩
497-48 199-48	石製品 砥石		長4.8 幅4.8 厚2.7	埋土	全面使用。刃当很顕著。粗砥。	角閃石安山岩
497-49 199-49	金銅製品 耳環	完	径2.1×1.9 厚0.4	埋土		

## I 7号住居跡 (Fig. 498、499・PL. 200)

I 区の中央部東側に偏って位置し、43・44 I 31～33の範囲にある。調査が2期に渡りその西半は明瞭に検出できなかった。西側で99号住居跡や近世の土坑と重複している。またこの付近一帯は、鍛冶関係遺構と近接しており堆積土の複雑さも手伝って平面形の確認もままならなかった。99号住居跡との新旧関係については、7号住居跡の範囲内と考えられる地点に電が検出されて99号住居跡より古い時期の所産であることが確認された。平面形態や規模については検出出来なかった部分が多く細部についての確定はできない。平面形態はほぼ方形を呈し、南北長約4.9mを測る。主軸はN-97-Eを示す。壁は、検出された東壁および南・北壁の一部では遺存状態は良好で、壁高約60cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は地床を使用しており凹凸があるが安定している。東壁から南・北壁にかけて壁下の溝が検出されており、幅約12cm・深さ約3～5cmを測る。電の南側、南東隅には円形の貯蔵穴と考えられる穴が設けられる長軸約50cm・短軸約38cm・深さ約25cmを測る。電は東壁の南寄りに付設されているが掘り込みは小さく幅約30cm・長さ約20cmで煙り出し程度である。住居内には焼土粒が多少堆積していたが袖部を形成出来るほどの量ではなく燃焼部として確認できる焼土も検出されていない。ただ電の前方面の床面はすり鉢状の窪みが検出されており、燃焼部の可能性がある。住居跡の廃絶時にはかなり徹底した破壊が行われたと考えられる。出土遺物は少ないが電付近に集中して検出されている。



I 7号住居跡

- 1 耕作土 砂質土。
- 2 B軽石
- 3 暗褐色土 C軽石を含む。
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 C軽石を含む。
- 6 暗褐色土 C軽石を少し含む。
- 7 暗褐色土 黄褐色塊を含む。
- 8 暗褐色土 黄褐色塊を含む。
- 9 褐色土 炭化粒を含む。

Fig.498 I 7号住居跡

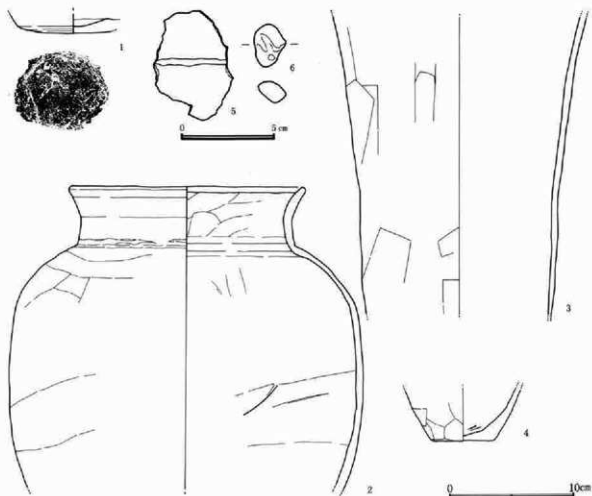


Fig.499 I 7号住居跡出土遺物



## I 7号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・R) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
499-1 200-1	土師器 壺	底全	— × 8.8 × (1.5)	埋土	紐造。底部不定方向削り。	①酸化・良 ②にぶい 黄橙 ③細砂混る
499-2 200-2	土師器 壺	口~中 段	18.9 × — × (23.8)	東中央床 面2	紐造。口頸部無で。体部不定方向削り。 内部荒削り	①酸化・良好 ②にぶい 橙 ③細砂混る
499-3 200-3	土師器 壺	中 小片	— × — × (23.7)	東中央床 面3の所	紐造。体部縦方向削り。内面無で。器 面荒れ顯著。長胴型。	①酸化・良 ②灰褐 ③細砂混る
499-4 200-4	土師器 壺	下~底 段	— × 4.9 × (4.1)	東壁中央 下壁溝内	紐造。体部下位横。底部不定方向削り。 一部吸炭。	①酸化・良好 ②灰黄 褐 ③細砂混る
499-5 200-5	鉄製品 鉄片		長8.8 幅6.0 厚0.9	埋土	板状。用途不明。	
499-6 200-6	鋼粒		長2.3 幅1.7 厚1.0	埋土	鋼粒。錆化。	

## I 9号住居跡 (Fig. 500~502・PL. 201)

I区中央部東側に偏って位置し、43I 27・28の範囲にある。10B号・11A住居跡と重複しているが両者より新しい時期の所産である。7号住居跡と同様、調査が2期に及んだことや、構築地域の堆積土の複雑さから西側は確認されていない。竈を中心とする主軸方向はN-93°-Eを示し、南北長約3.3mを測る。平面形態は南東隅がやや丸みをもつかほぼ方形を呈すると考えられる。壁高は約45cmを測りわずかな傾斜をもって立ち上がる。地床を床面としており安定している。南東隅付近には貯蔵穴と考えられる落ち込みの痕跡が見

られたが確定できない。竈は東壁を小さく掘り込み煙道部ないしは煙出し孔の体をなす。この直下床面には明瞭な焼土面が検出され燃焼部と考えられる。袖部等の検出はされない。出土遺物は竈周辺に集中して検出されている。

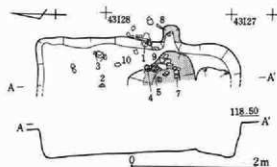


Fig.500 I 9号住居跡

## I 9号住居跡埋

- 1 暗褐色土 C軽石中粒(2~3mm)炭化粒細粒(1mm以下)を含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土、炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 2の同質層。
- 5 赤黒色土 焼土塊を含む固性土。
- 6 黒色土 燻土。
- 7 焼土

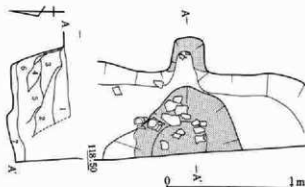


Fig.501 I 9号住居跡竈

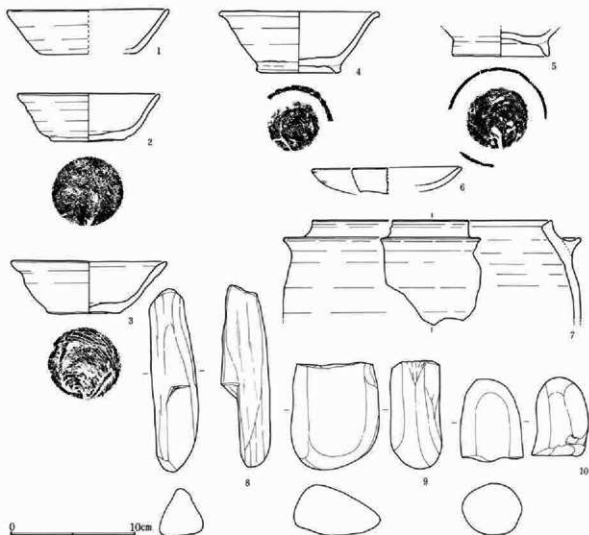


Fig.502 I 9号住居跡出土遺物

I 9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・R) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
502-1 201-1	須恵器 杯	口～底 1/4	13.0 × 7.6 × 3.5	東壁中央 斜流入	轆轤。右回転。底尖部欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
502-2 201-2	須恵器 杯	口～底 5/8	11.4 × 5.8 × 3.8	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
502-3 201-3	須恵器 杯	口～底 5/8	12.4 × 5.9 × 4.1	北東部壁 下埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②よい 黄橙 ③細砂混る
502-4 201-4	須恵器 椀	口～底 5/8	12.8 × 6.8 × 4.9	電手前埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台～底部、横 無で。	①加酸化還元・低溫 ②明褐色 ③細砂混る
502-5 201-5	須恵器 椀	底	— × 7.8 × (2.0)	電手前埋 土	底部円柱、両面に糸切り痕。轆轤右回転 付高台横無で。	①酸化・良好 ②よい 橙 ③細砂混る

I 9号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
502-6 201-6	緑釉陶器 皿	口～体	12.0 × — × ( 2.0)	壑内埋土	轆轤。蓋軸薄。遺存状況不良。	①還元 ②灰青 ③白色粒混る
502-7 201-7	羽蓋	口～上	19.2 × — × ( 7.8)	壑手前埋土	紐造。横軸で。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
502-8 201-8	石		長14.5 幅3.7 厚3.8 273.5#	壑北接遺構外	棒状円礫。一部剥落。	緑色片岩
502-9 201-9	石		長(7.1) 幅8.4 厚4.1 493.5#	埋土	長円礫。半欠。	輝石安山岩(粗粒)
502-10 201-10	石		長(6.6) 幅5.1 厚4.5 161.8#	北東部床面	棒状円礫。半欠。	輝石安山岩(粗粒)

I 10A号住居跡 (Fig. 503、504・PL. 202、203)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	壑位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.55 × 3.17	N-75°-E	東壁やや南寄り	

I区の北西部に位置し、61～63 I 47～49の範囲にある。13号・15号住居跡と重複しており新旧関係は両者より新しい時期の所産である。削平が深く及んでおり東壁はその痕跡を検出できたにとどまった。北東隅は丸みを帯びる。壁高は約25cmを測りやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが、調査時点では湧き

出す水のためかなり軟弱な状態であった。東壁と南壁の一部を除き壁下には溝が巡る。幅約12cm・深さ4～5cmを測る。床面南側には径60cmと30cm程度の穴が検出され、その中には3～5個の長い楕円形の川原石が検出されている。竈は東壁に付設されたと考えられるが削平が著しくほとんど消失している。燃焼部と考えられる箇所には火床下の落ち込みらしき窪みか検出されたのみである。明瞭な焼土面は残存していない。出土遺物は少なく、土器の小破片が散在していた。

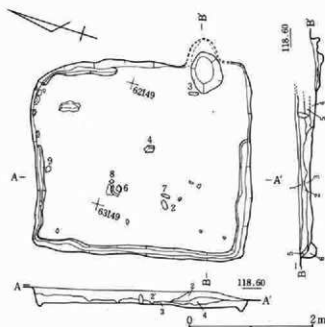


Fig.503 I 10A号住居跡

## I 10A号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒・C粒石を含む。
- 2 暗褐色土 C粒石を含み、埴りなし。
- 3 暗褐色土 埴りあり。
- 4 暗褐色土 C粒石を少量含み、砂質埴りあり。
- 5 暗褐色土 C粒石を含む。
- 6 暗褐色土

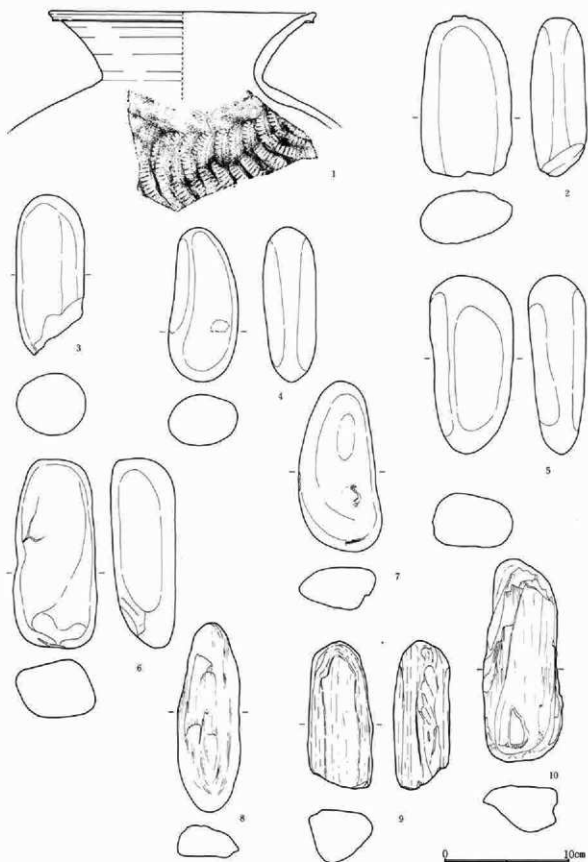


Fig.504 110A号住居跡出土遺物

Ⅰ10A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
504-1 203-1	須恵 甕	口へ上 反	21.3 × — × (9.5)	北西部床 面	紐造。口頸部横撫で。体部叩打。灰被り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
504-2 203-2	石		長(12.8) 幅7.3 厚4.5 649.6g	南東部掘 形 Pit	扁平長円碑。一端部砕欠。	ひん岩
504-3 203-3	石		長(12.7) 幅5.5 厚5.0 541.0g	南東部床 面	棒状円碑。一端部砕欠。	輝石安山岩(粗粒)
504-4 203-4	石	完	長12.2 幅 5.6 厚 4.3 450.8g	南東部掘 形 Pit	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
504-5 203-5	石	完	長14.2 幅 6.7 厚 4.6 680.8g	南東部掘 形 Pit	扁平長円碑。	石英閃緑岩
504-6 203-6	石	完	長15.0 幅 5.8 厚 5.2 802.4g	南東部掘 形 Pit	棒状円碑。	石英閃緑岩
504-7 203-7	石	完	長13.5 幅 6.7 厚 3.4 482.1g	南東部掘 形 Pit	扁平長円碑。	輝石安山岩(粗粒)
504-8 203-8	石	完	長15.1 幅 5.1 厚 2.6 365.1g	南東部掘 形 Pit	扁平長円碑。	珪質準片岩
504-9 203-9	石		長11.7 幅 5.2 厚 4.5 384.7g	南東部掘 形 Pit	棒状円碑。	雲母石英片岩
504-10 203-10	石	完	長16.1 幅 6.5 厚 3.8 616.9g	南東部掘 形 Pit	扁平長円碑。風化顕著。	雲母石英片岩

## Ⅰ10B号住居跡 (Fig. 505~512・PL. 204~206)

Ⅰ区中央部東側に位置し、41~43 I 28・29の範囲にある。南西部で9号住居跡と北西部で40号住居跡と重複しているがこれらよりも古い時期の所産である。調査が2期に渡ったため西壁の検出はできなかった。長軸を東西方向にとり、かなり東西に長い長方形を呈するがやや北に屈曲する形になる。北東及び南東の隅は丸みを持つ。床面は平坦をなし、踏み締まりは良好である。南壁と東壁の一部には壁下の溝が巡り検出はできなかったが、北壁下の溝は本来完全な形で存在していたと考えられる。壁下の溝は幅約14cm・深さ5~7cmを測る。竈は東壁に付設されるが長楕円形に掘り込まれ住居内に短い袖部が作り出される。袖部先端の左右には補強材として左右に凝灰岩の加工材が埋設され、この間には同質の天井材と考えられる加工材が真ん中から折れて倒れ込んでいる。平坦な燃焼部から急角度で立ち上がり、水平に近い煙道部に至る。袖材内法は約50cm、燃焼部奥行き約45cmを測る。燃焼部内にはおよそ40個にも及ぶ長楕円形の川原石が検出されている。これらの石は火・熱を受けた形跡はなく竈の補強材やその他の機能に供する意味合いは窺えない。故意に埋置あるいは投棄されたものと考えられる。またこの種の石は床面にも多く検出されているが当住居内において工房施設など、遺物の性格を窺い得るような諸施設は検出されていない。出土遺物は比較的多量であるが、上述した長楕円形の川原石が大半を占め土器類の検出量は少ない。

第5章 I区の遺構と遺物

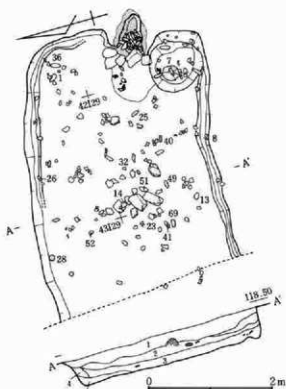


Fig.505 I 10B号住居跡

I 10B号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・砂質白灰色土粒・炭化物を含む。
- 2 暗褐色土 1と似るが、炭化粒が多い。
- 3 暗褐色土 炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 5 暗褐色土 砂質白灰色土塊を多量に含む砂質。

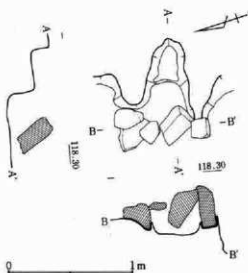


Fig.507 I 10B号住居跡縮図

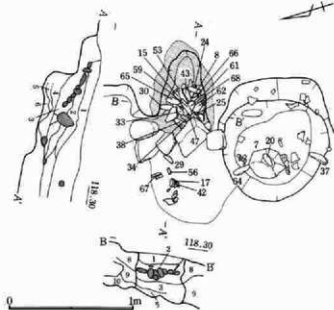


Fig.506 I 10B号住居跡縮

I 10B号住居跡縮

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒・砂質白灰色土粒を含む。
- 2 暗褐色土 砂質白灰色土塊を含む。
- 3 黒褐色土 炭化粒を含む砂質。
- 4 黒褐色土 粘土小塊・炭化粒を含む。
- 5 暗褐色土 粘土塊を含む。
- 6 黒褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 7 暗褐色土 黄砂粘土粒を含み細りなし。
- 8 黄褐色土 砂質土。
- 9 焼土
- 10 暗褐色土 焼土塊を含む。

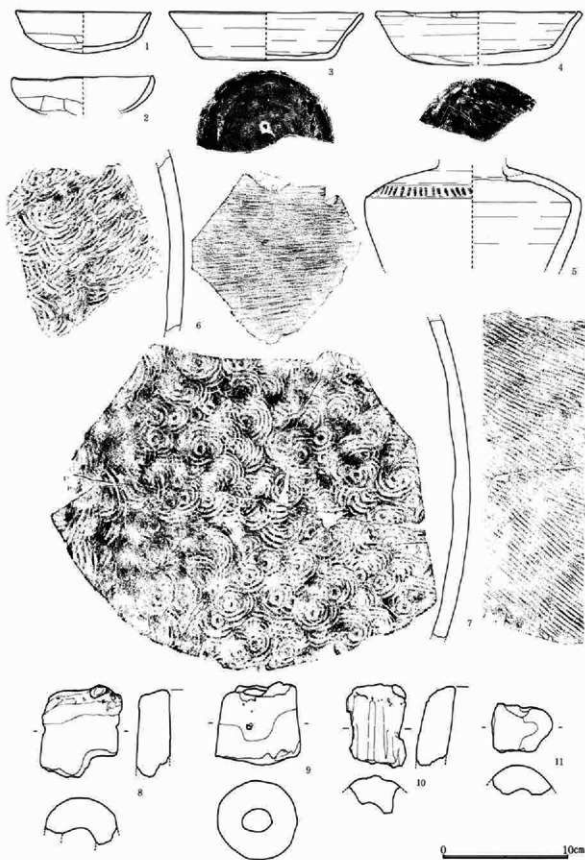


Fig.508 I 10B号住居跡出土遺物(1)

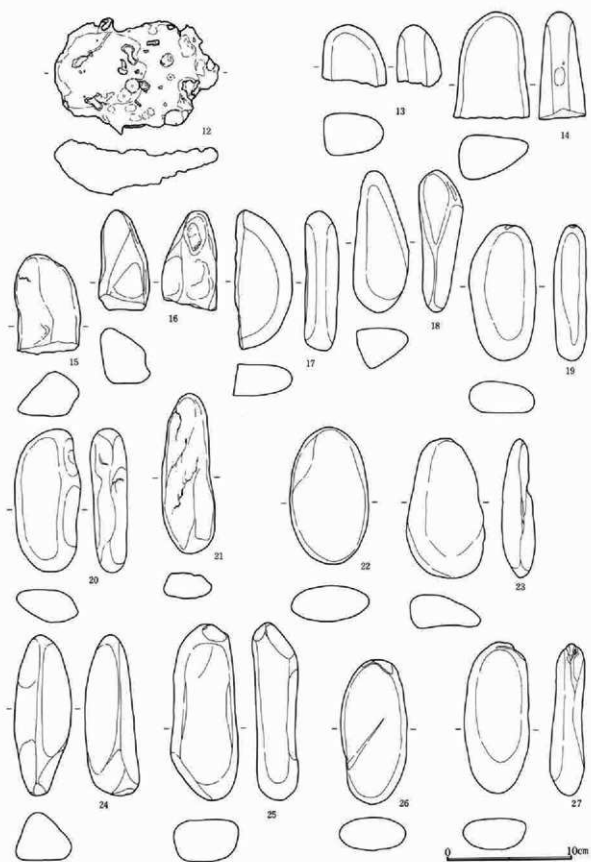


Fig.509 I 10B号住居跡出土遺物(2)



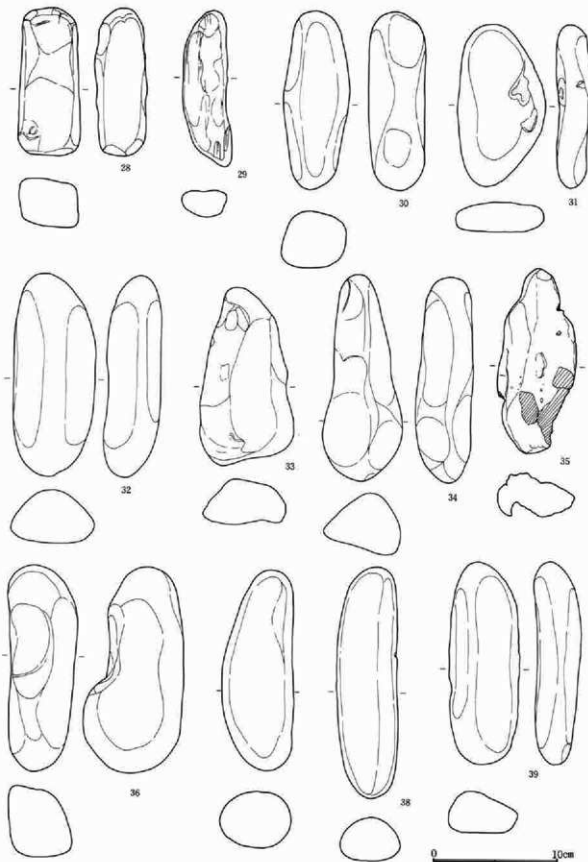


Fig.510 I 10B号住居跡出土遺物(3)

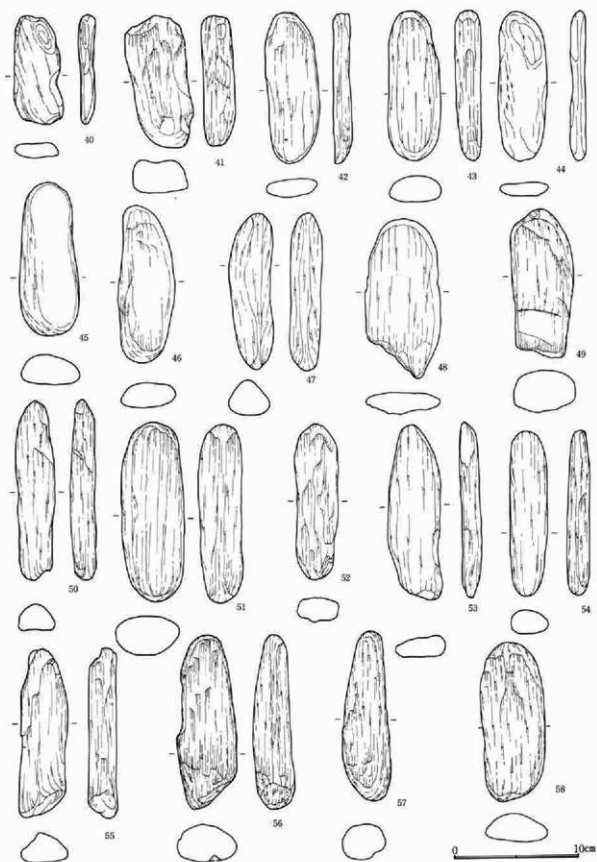


Fig.511 I 10B号住居跡出土遺物(4)

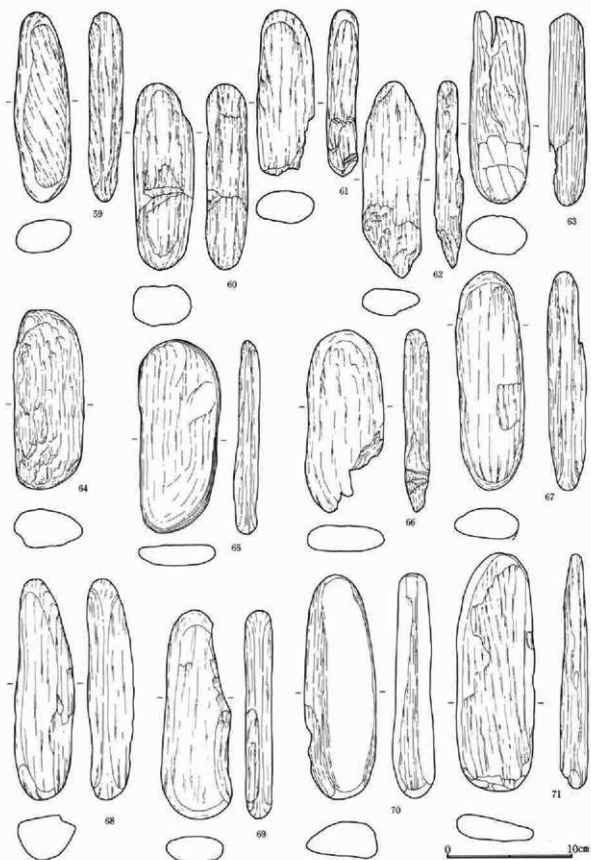


Fig.512 I 10B号住居跡出土遺物(5)

第5章 I区の遺構と遺物

I10B号住居跡出土土物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
508-1 204-1	土器 杯	口~底 片	10.8 × 一 × 3.3	北東部隅 寄床面	指押。口縁部及び内面側で。体~底部、 横~不定方向彫削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
508-2 204-2	土器 杯	口~体 片	11.2 × 一 ×(2.9)	埋土	指押。口縁部及び内面側で。体部横方向 彫削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
508-3 204-3	須恵器 杯	口~底 片	15.6 × 10.7 × 3.8	埋土	轆轤。右回転彫削り。無調整。	①還元・良好 軟質 ②灰白 ③緻密
508-4 204-4	須恵器 杯	口~底 片	16.4 × 10.0 × 4.3	中央部床 面	轆轤。右回転。器部手持不定方向彫削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
508-5 204-5	須恵器 壺	上~中 片	一 × 一 ×(8.0)	埋土	轆轤。横撫で。上位。列点彫削文。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
508-6 205-6	須恵器 壺	体 小片		中央部埋 土	紐造。内外印打。	①還元・良好 ②緑灰 ③細砂混る
508-7 205-7	須恵器 壺	体 小片		南東部床 面	紐造。内外印打。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
508-8 205-8	土製品 輪羽口	先~中 片	長(6.8)	南壁中央 下埋土	棒状無で。先端部溶解物少量付着。	①酸化・二次還元 ②灰~灰黄~浅黄 ③砂混る
508-9 205-9	土製品 輪羽口	先~中 全	長(6.3) 幅6.3 厚6.3	南西部床 面	棒状無で。短身型。先端部溶解物少量付 着。	①酸化・二次還元 ②褐灰~浅黄~橙 ③砂混る
508-10 205-10	土製品 輪羽口	先~中 片	長(6.3)	床面	棒状。縦方向撫で。先端部溶解物少量付 着。	①酸化・二次還元 ②灰~灰白 ③砂混る
508-11 205-11	土製品 輪羽口	中 片	長(3.9)	埋土	棒状無で。	①酸化・ ②浅黄~浅 黄~灰黄褐 ③砂混る
509-12 205-12	鉄 錠		長13.2 幅9.3 厚4.5	中央部床 面	板形錠淨。底面に伊床粘土付着。	
509-13 206-13	石		長(4.9) 幅5.1 厚3.6 111.3g	南西部床 面	円碑。	砂岩
509-14 206-14	石		長(8.5) 幅6.1 厚3.8 273.3g	南西部床 面	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
509-15 206-15	石		長(8.0) 幅5.3 厚3.6 165.7g	竈内一括	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
509-16 206-16	石		長(7.9) 幅4.1 厚4.5 172.8g	竈内一括	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
509-17 206-17	石		長11.1 幅(4.7) 厚2.8 225.9g	中央部床 面一括	扁平長円碑。	輝石安山岩(粗粒)
509-18 206-18	石	完	長11.3 幅4.5 厚3.5 269.3g	竈内一括	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
509-19 206-19	石	完	長10.8 幅5.4 厚2.6 245.5g	竈内一括	扁平長円碑。	輝石安山岩(粗粒)

I 10B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
509-20 205-20	石	完	長11.4 幅 5.4 厚 3.1 258.1g	南東部床 面	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
509-21 205-21	石	完	長12.7 幅 4.3 厚 2.0 154.2g	中央部床 面一括	棒状円盤。	緑色片岩
509-22 205-22	石	完	長10.9 幅 6.3 厚 2.9 250.9g	壺内一括	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
509-23 205-23	石	完	長11.1 幅 6.4 厚 2.7 233.1g	壺内一括	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
509-24 205-24	石	完	長12.8 幅 4.6 厚 4.3 305.3g	壺内一括	棒状円盤。一端に打撃痕。	輝石安山岩 (粗粒)
509-25 205-25	石	完	長14.0 幅 5.4 厚 3.7 307.9g	壺内一括	棒状円盤。両端に打撃痕。	流紋岩
509-26 205-26	石	完	長11.5 幅 5.3 厚 2.7 248.5g	中央部床 面	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
509-27 205-27	石	完	長12.0 幅 5.2 厚 2.7 231.2g	壺内一括	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
510-28 205-28	石	完	長11.8 幅 5.0 厚 4.2 423.0g	南東隅貯 藏穴埋土	棒状円盤。角柱状。	ひん岩
510-29 205-29	石	完	長12.4 幅 4.0 厚 4.2 148.0g	壺手前床 面	棒状円盤。	雲母石英片岩
510-30 205-30	石	完	長14.2 幅 5.3 厚 4.5 564.6g	壺内一括	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
510-31 205-31	石	完	長12.9 幅 7.1 厚 2.8 343.9g	南西部床 面	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
510-32 205-32	石	完	長16.1 幅 5.6 厚 4.6 742.2g	壺 内	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
510-33 205-33	石	完	長14.1 幅 7.6 厚 3.7 570.1g	中央部床 面	扁平円盤。	安賢安山岩
510-34 205-34	石	完	長16.4 幅 6.5 厚 4.6 607.3g	壺内一括	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
510-35 205-35	石		長14.8 幅 6.3 厚 3.5 337.5g	壺内一括	不定形円盤。一部剥離欠損。	安賢安山岩
510-36 205-36	石	完	長15.4 幅 5.7 厚 6.0 991.5g	北東隅埋 土	不定形円盤。	石英閃緑岩
510-37 205-37	石	完	長15.9 幅 5.8 厚 3.6 582.4g	南東部床 面	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
510-38 205-38	石	完	長18.4 幅 5.1 厚 3.5 504.3g	壺内一括	棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)

第5章 I区の遺構と遺物

I 10B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②釉 ③胎土 ④その他
510-39 206-39	石	完	長16.1 幅 5.7 厚 3.8 555.0g	竈内一括	棒状円盤。	点紋緑石片岩
511-40 206-40	石	完	長 8.7 幅 3.9 厚 1.4 74.8g	中央部床 面	扁平円盤。倒端部一部欠損。	緑石片岩
511-41 206-41	石	完	長10.5 幅 5.4 厚 2.8 128.4g	南西部埋 土	棒状円盤。一端部の一部に欠損遺滅。	雲母石英片岩 (黒色片 岩)
511-42 206-42	石	完	長12.0 幅 4.5 厚 6.5 116.4g	中央部床 面一括	扁平長円盤。	雲母石英片岩
511-43 206-43	石	完	長11.4 幅 4.3 厚 2.1 195.3g	竈内一括	扁平長円盤。	黒色片岩
511-44 206-44	石	完	長11.9 幅 3.9 厚 1.4 114.2g	竈内一括	扁平長円盤。	緑色片岩
511-45 206-45	石	完	長12.3 幅 4.8 厚 2.5 194.5g	竈内一括	扁平長円盤。	雲母石英片岩
511-46 206-46	石	完	長12.6 幅 4.6 厚 2.0 174.4g	竈内一括	扁平長円盤。	雲母石英片岩
511-47 206-47	石	完	長12.5 幅 3.7 厚 2.7 222.7g	竈内一括	棒状円盤。	雲母石英片岩
511-48 206-48	石		長12.8 幅 6.0 厚 1.8 184.3g	中央部床 面一括	扁平長円盤。一端欠損。	黒色片岩
511-49 206-49	石		長11.9 幅 5.0 厚 3.4 301.1g	南西部埋 土	棒状円盤。一端欠損。	雲母石英片岩
511-50 206-50	石	完	長14.3 幅 3.2 厚 2.1 140.6g	竈内一括	棒状円盤。細柱状。	黒色片岩
511-51 206-51	石	完	長14.2 幅 5.2 厚 3.9 385.4g	中央部埋 土	棒状円盤。	黒色片岩
511-52 206-52	石	完	長12.4 幅 3.6 厚 2.0 143.5g	北西部埋 土	棒状円盤。	雲母石英片岩
511-53 206-53	石	完	長14.1 幅 4.3 厚 1.8 159.7g	竈内一括	扁平長円盤。	雲母石英片岩 (黒色片 岩)
511-54 206-54	石	完	長13.1 幅 3.1 厚 1.9 207.5g	中央部床 面	棒状円盤。細柱状。	雲母石英片岩 (黒色片 岩)
511-55 206-55	石	完	長13.5 幅 4.1 厚 2.3 168.5g	竈内一括	棒状円盤。	雲母石英片岩 (黒色片 岩)
511-56 206-56	石		長13.8 幅 4.8 厚 3.4 273.9g	竈手前床 面	長円盤。一端欠損。	黒色片岩
511-57 206-57	石	完	長13.5 幅 4.0 厚 2.9 205.4g	竈内一括	棒状円盤。	雲母石英片岩

I10B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
511-58 206-58	石	完	長12.7 幅 5.2 厚 2.3 212.2g	竈内一括	扁平長円磙。	雲母石英片岩
512-59 206-59	石	完	長15.2 幅 4.5 厚 2.9 281.0g	竈内一括	棒状円磙。	黒色片岩
512-60 206-60	石	完	長14.8 幅 4.9 厚 3.6 369.1g	竈手前床 面	棒状円磙。	雲母石英片岩
512-61 206-61	石		長(15.3) 幅4.6 厚2.5 228.2g	竈内一括	扁平長円磙。一端部欠損。	雲母石英片岩
512-62 206-62	石	完	長15.7 幅 5.1 厚 2.3 161.2g	竈内一括	扁平長円磙。	雲母石英片岩
512-63 206-63	石		長(15.2) 幅4.8 厚3.2 324.7g	竈内一括	棒状円磙。一端部欠損。	黒色片岩
512-64 206-64	石	完	長14.3 幅 5.6 厚 3.1 380.2g	南東部床 面	扁平円磙。	雲母石英片岩
512-65 206-65	石	完	長15.3 幅 6.6 厚 1.7 165.7g	南東部東 壁寄床面	扁平円磙。	輝石安山岩(粗粒)
512-66 206-66	石		長15.6 幅 6.4 厚 2.0 276.6g	竈手前床 面	扁平長円磙。破砕。	雲母石英片岩
512-67 206-67	石	完	長17.4 幅 5.6 厚 3.1 412.0g	竈内一括	棒状円磙。平砕。	黒色片岩
512-68 206-68	石	完	長17.6 幅 4.8 厚 3.7 422.8g	竈内一括	棒状円磙。平砕。	黒色片岩
512-69 206-69	石		長15.5 幅 5.7 厚 2.3 338.7g	南西部埋 土	扁平長円磙。側面突出部欠損。	雲母石英片岩
512-70 206-70	石	完	長15.8 幅 5.8 厚 3.4 470.4g	竈内一括	扁平長円磙。	黒色片岩
512-71 206-71	石	完	長19.8 幅 6.3 厚 2.2 343.5g	中央部床 面	扁平長円磙。一端打撃痕。	黒色片岩

## I11A号住居跡 (Fig. 513、514・PL. 206、207)

I1区の中央部東側に位置し、42・43 I 25～27の範囲にある。当住居跡も9号・10B号住居跡と同じく調査が2期に及んだため西側のほとんどは検出できなかった。また北側で9号住居跡と重複しておりこれより古い時期の所産で消失してしまっている。形態・規模については検出できなかった部分が多く詳細は不明であるが、およその平面形態は方形を呈すると考えられる。壁高は約50cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。東壁および南壁下には溝が巡り幅約12cm・深さ約8～10cmを測る。竈は東壁に付設され、長い煙道部を有する。袖部は住居内に張り出す形態をもつが、右袖部は消失しており不明である。左袖部は長さ約40cm・幅約40cmを

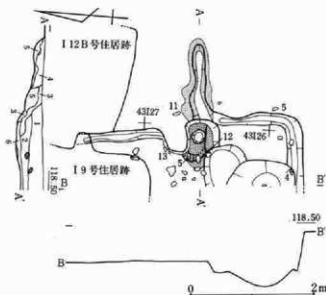


Fig.513 I11A号住居跡

測る。燃焼部は若干窪み、中央部には支脚痕らしき小穴が穿たれる。燃焼部幅約40cm・奥行き約70cmを測り緩い傾斜をもって煙道部に至る。煙道部長さ約1m・幅20cmを測り緩傾斜となっている。竈右前方には楕円形を呈する落ち込みの一部が検出されており貯蔵穴の端部と考えられる。出土遺物は竈周辺に検出されている。

I11A号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒・白灰色粒を含む。
- 2 暗褐色土 白灰白粒・炭化粒を含む。
- 3 白灰色土 焼土塊を含む。
- 4 白灰色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 6 黒灰層

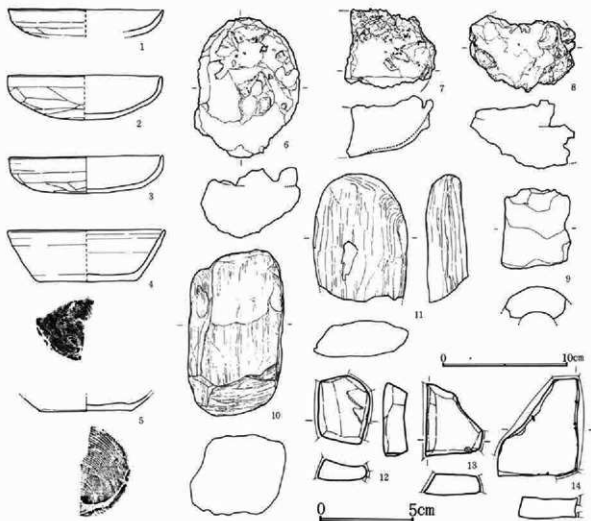


Fig.514 I11A号住居跡出土遺物



I 11A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
514-1 207-1	土師器 杯	口~体 小片	12.4 × — × ( 2.2)	竈内	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向 荒削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
514-2 207-2	土師器 杯	口~底 片	12.3 × — × 3.5	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向荒削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
514-3 207-3	土師器 杯	口~底 片	12.3 × — × 2.9	竈内	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向荒削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
514-4 207-4	須恵器 杯	口~底 小片	12.6 × 8.0 × 4.1	南東部南 壁下埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・灰質 ②灰 ③緻密
514-5 207-5	須恵器 杯	底 片	— × 7.4 × ( 1.2)	南東部東 壁上埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
514-6 207-6	鉄 錠		長11.0 幅 8.0 厚 5.3	埋土	杓形錠片。	
514-7 207-7	鉄 錠		長(6.0) 幅(7.3) 厚4.0	埋土	杓形錠片。	
514-8 207-8	鉄 錠		長8.5 幅(5.5) 厚5.0	埋土	杓形錠片。	
514-9 207-9	土製品 甕口	先~基 片	長 6.4	埋土	棒形筒で。短身型。先端部溶解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②灰~黄灰~橙 ③砂混る
514-10 207-10	石	完	長13.2 幅 7.2 厚 6.3 100.3#	南東部 Pit 埋	角礫。磨滅。	雲母石英片岩
514-11 207-11	石		長(10.2) 幅 7.5 厚 3.4 340.7#	北東部東 壁寄埋土	扁平長円礫。一端部欠損。	緑色片岩
514-12 207-12	須恵器 転用磁石		長 3.5 幅 2.7 厚 1.0	電手前穴 面	破片断面4ヵ所使用。仕上げ。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少量混る
514-13 207-13	須恵器 転用磁石		長 3.8 幅 3.0 厚 1.1	電袖前埋 土	破片断面2ヵ所使用。仕上げ。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少量混る
514-14 207-14	須恵器 転用磁石		長 5.1 幅 4.3 厚 1.1	電袖前埋 土	破片断面3ヵ所使用。仕上げ。未付着。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

I 11B号住居跡 (Fig. 515、516・PL. 207、208)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × 3.12	N- 83° - E	東壁やや南寄り	

I区の北西部に位置し、64・65 I 46・47の範囲にある。住居西側は調査区域外に延び未検出である。北東部は丸味をおびて隅丸方形を呈する。また南東部が小さく張り出す。壁高は約18cmを測り垂直に近く立ち上

第5章 I区の遺構と遺物

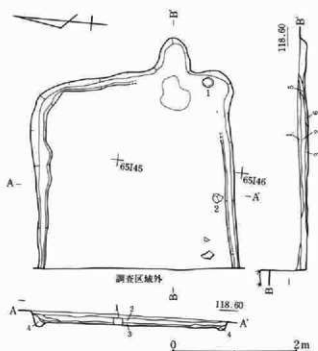


Fig.515 I 11B号住居跡

がる。南東隅をのぞき、各壁下には幅約14cm・深さ約8cmの溝が巡る。調査時の床面は湿気が多く、総じて軟弱であった。竈は東壁を楕円形に掘り込み付設されるが、焼土は少なく、その他補強材などの検出もなく遺存状態は不良であった。煙道部の作り出しはない。竈前面に灰層の広がりがわずかに認められたのみである。焼土部幅約55cm・奥行約60cmを測る。出土遺物は極めて少ない。

I 11B号住居跡

- 1 暗褐色土 Loom 粒を含み、堅く締る。
- 2 暗褐色土 C 礫石を含み、土粒の粗い砂質土。
- 3 灰褐色土 粘性あり。
- 4 灰褐色土 粘性あり。
- 5 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 6 灰層

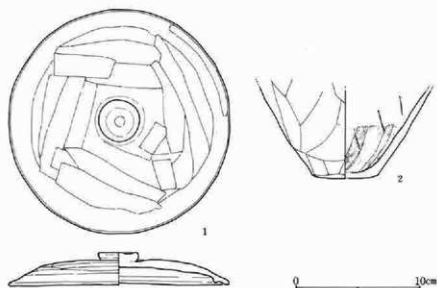


Fig.516 I 11B号住居跡出土遺物

I 11B号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
516-1 208-1	須恵器 蓋	全完	17.7 × 横 3.3 × 2.6	南東部竈 寄床面	楕圓右回転。頂部不定方向風削り。横み 横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少量混る
516-2 208-2	土師器 壺	下~底 片	— × 5.2 × (7.8)	南東部南 壁下床面	紐造。体部及び底部風削り。内面磨撫で。	①酸化・良好 ②に よい ③細砂混る

I 12A号住居跡 (Fig. 517~519・PL. 208、209)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.30 × 3.01	N—88°—E	東壁やや南寄り	

I区の北端近くに位置し、48・49 I 47・48の範囲にある。住居跡南東部で106号住居跡と重複しており新旧関係はこれよりも古い時期の所産である。106号住居跡よりも掘形が深く、全体を検出することができた。壁高は約20cmを測り、僅かな傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが、踏み締まりはやや弱い。壁下の溝は北壁と西壁下におおの認められたが、痕跡程度で検出状況は不良である。貯蔵穴等の検出はされていない。竈は東壁に付設され、楕円形に掘り込まれた燃焼部から長大な煙道部を作り出す。袖部は壁に接して凝灰岩の加工材を埋設してあり住居内に張り出すことはない。また両袖材の間には同質の用材が天井部として渡され、折れて落ち込んだ状態で検出されている。燃焼部には円筒形の支脚が遺存する。これも凝灰岩質の加工材である。僅かに窪んだ燃焼部からほとんど変化のないまま煙道部に至る。煙道部そのものは崩落しており天井部は残されていないが先端近くに煙出し孔を形成する縦方向の焼土壁が見られる。袖材間内法は約50cm、燃焼部奥行き約80cm、煙道部長さ約1m、煙出し孔径28cmを測る。出土遺物は少量である。

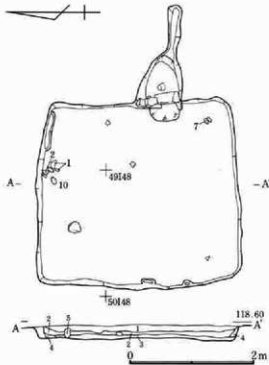


Fig.517 I 12A号住居跡

## I 12A号住居跡

- |        |                  |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | C軽石を多量に含み、粘性あり。  |
| 2 暗褐色土 | C軽石・炭化粒を少量含み、粘性。 |
| 3 暗褐色土 | 炭化粒を含み締りなし。      |
| 4 暗褐色土 |                  |
| 5 暗褐色土 | 粘性あり。            |

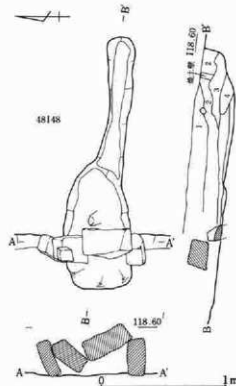


Fig.518 I 12号住居跡竈

## I 12A号住居跡竈

- |        |         |
|--------|---------|
| 1 暗褐色土 | C軽石を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒を含む  |
| 3 暗褐色土 | 粘性あり。   |
| 4 暗褐色土 | 焼土を含む。  |
| 5 暗褐色土 | 粘性あり。   |

第5章 I区の遺構と遺物

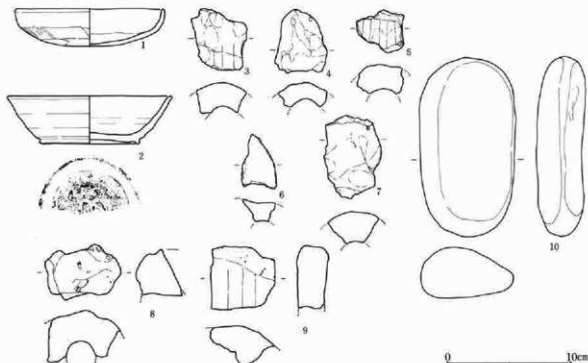


Fig.519 I 12A号住居跡出土遺物

I 12A号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
519-1 209-1	土器 杯	口～底 片	12.0 × — × 3.0	北尖部北 壁下床面	滑判。口縁部及び内面でいらいな態で。 体底部不定方向に削り、内面炭化物付着。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
519-2 209-2	須恵器 口	口～底 片	13.2 × 8.0 × 3.8	北尖部北 壁下床面	轆轤。右回転削り。胴部～削出し高台 ～底縁部、回転削り後、撫で。	①還元・良好 ②黄灰 ③細砂混る
519-3 209-3	土製品 扇羽口	中 片	長(5.0)	埋土	棒付撫で。	①酸化・良好 ②灰 ～黄～橙 ③細砂混る
519-4 209-4	土製品 扇羽口	中 小片	長(5.0)	埋土	棒付撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
519-5 209-5	土製品 扇羽口	中 小片	長(3.4)	埋土	棒付撫で。縦方向撫で痕顕著。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
519-6 209-6	土製品 扇羽口	中 小片	長(4.4)	埋土	棒付撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
519-7 209-7	土製品 扇羽口	基	長(6.6)	南東部床 面	棒付撫で。指痕顕著。	①酸化・不良 ②灰灰 ～黄灰 ③細砂混る
519-8 209-8	土製品 扇羽口	先 片	長(4.4)	埋土	棒付撫で。黒色溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 黒～明褐色 ③細砂混る
519-9 209-9	土製品 扇羽口	先 片	長(5.0)	埋土	棒付撫で。溶解物少量付着。	①酸化・良好 ②黒 ～黄灰～黄褐色 ③砂混る
519-10 209-10	石	完	長14.2 幅7.7 厚4.0 689.8g	北尖部北 壁下床面	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)

## I 12B号住居跡 (Fig. 520, 521・PL. 209)

I区の中央部東側に位置し、42 I 27の範囲にある。9号・11A号・11B号住居跡と重複している。新旧関係は9号住居跡より旧いが他の住居跡との関係は不明である。重複が著しく東・南壁の一部を検出できたにとどまり、形態・規模等の詳細は不明である。また東壁に付設されている竈は確認が遅れ、両袖石と支脚を検出したにすぎない。壁高は低く約7cmを測る。床面は平坦をなすが、軟弱である。竈袖石は壁に接して埋設されて内法約40cmを測る。支脚は大型の置砥と考えられる砥石が転用されている。図示でき得る出土遺物はない。

砥石転用の支脚は、長さ32.9cm端部幅12.2~9cm中央部幅5~6cm、重量3,430gを測る。断面形は台形を定し中央部が細く括れる。三面の使用が著しく横方向の刃部調整痕が著しい。

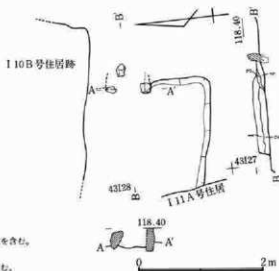


Fig.520 I 12B号住居跡

## I 12B号住居跡産

- 1 暗褐色土 C軽石・粘土粒を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石・粘土粒・炭化粒を含む。
- 3 赤褐色土 焼土塊・炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 炭化物・焼土粒を少量含む。

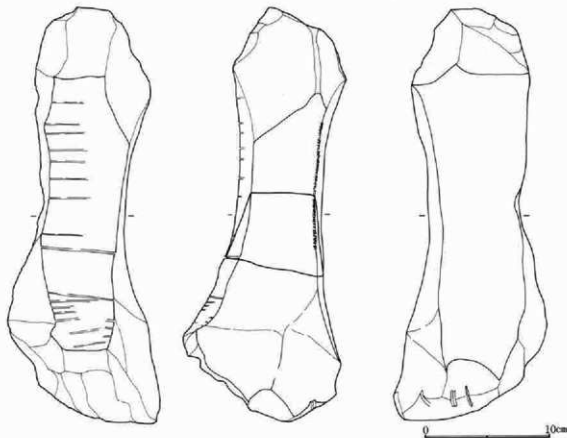
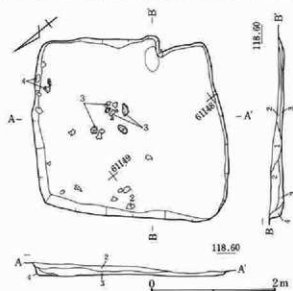


Fig.521 I 12B号住居跡出土遺物

I 13号住居跡 (Fig. 522, 523・PL. 210)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	寛 位 置	貯蔵穴の形跡・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.85 × 2.85	N-132°-E	南東壁やや南寄り	

I 区の北西部に位置し、60・61 I 48・49の範囲にある。10A号・15号・19号住居跡とそれぞれ重複しているが平面確認の段階で新旧関係はとらえることができなかった。出土遺物の検討から10A号・19号住居跡より旧く15号住居跡より新しい時期の所産と考えられる。後世の削平が深く、とくに東・南部住居跡の遺存状態は不良である。北壁で壁高約20cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦をなすが、湿気が著しく軟弱であった。



床土には黄白色の粘土塊を多く混じえる暗褐色土を敷いている。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されていない。竈は東壁に付設されるが、これも削平が深く明瞭にできなかった。右袖部にあたる部分には袖材と考えられる凝灰岩の小塊が残存していた。出土遺物は少なく、住居中央から北半にかけて散在していた。

I 13号住居跡

- 1 暗褐色土 砂質土。
- 2 暗褐色土 粒が粗く練りなし。
- 3 暗灰褐色土 砂質。
- 4 暗灰褐色土。

Fig.522 I 13号住居跡

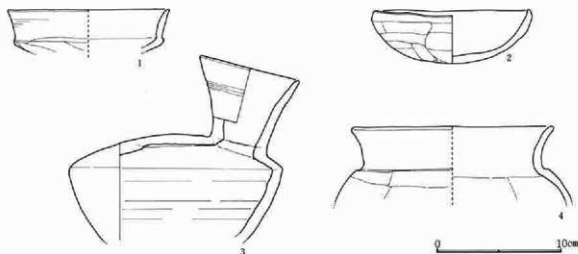


Fig.523 I 13号住居跡出土遺物

I13号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(m・%) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
523-1 210-1	土師器 杯	口~体 小片	12.9 × - × (3.4)	北部隅寄 床面	指押。口縁部及び内面、強い撫で。体底 部窪削り。	①焼成・良好 ②橙 ③緻密
523-2 210-2	土師器 杯	口~底 完	12.5 × - × 4.3	北部西壁 下床面	指押。口縁部及び内面撫で。体部横、底 部一定方向窪削り。口縁部やや歪む。	①焼成・良好 ②橙 ③緻密
523-3 210-3	須恵器 平底 瓶	口~体 残	8.2 × - × (14.6)	中央部床 面	紐造。縦横撫で。3段接合。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
523-4 210-4	土師器 壺	口~上 残	16.1 × - × (5.9)	東部北壁 下床面	紐造。口頸部強い撫で。体部横方向窪削 り。内面窪撫で。	①焼成・良好 ②橙 ③細砂混る

I14号住居跡 (Fig. 524、525・PL. 211)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	階位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.84 × 2.69			

I区の北東部に位置し、45・46 I 48・49の範囲にある。調査が2期に渡り第1期調査のさいに東壁および  
竪部分を破壊してしまったと考えられる。南壁の一部は近世の土坑によって消失している。また南東部では  
3号鍛冶工房跡と重複している。上述したように全体を検出できなかったため平面形態・規模などの詳細に  
ついては不明であるが、南西・北西隅がやや丸みをおびる方形を呈すると考えられる。南北長約2.8m・現存  
東西長約2.7mを測る。壁高は約16cmを測り緩い傾斜をもって立ち上がる。床面はほぼ平坦をなすが踏み締ま  
りはなく軟弱である。出土遺物は住居中央部に  
散在して検出されている。

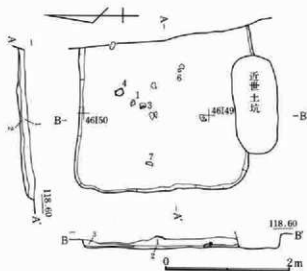


Fig. 524 I14号住居跡

I14号住居跡

- 1 焼褐色土 C紅石を含む黒味のある層。  
2 黒褐色土 粘性あり。  
3 灰褐色土 締りあり。

第5章 I区の遺構と遺物

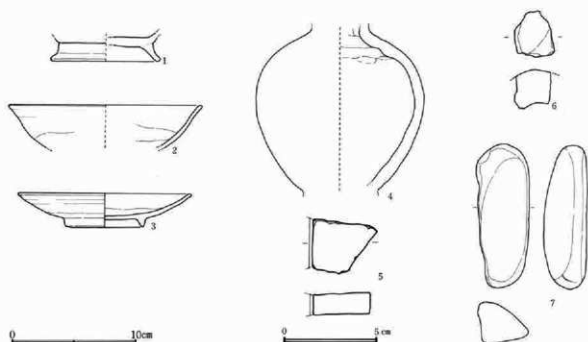


Fig.525 I 14号住居跡出土遺物

I 14号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
525-1 211-1	土 師 器 椀	底 片	— × 8.8 × (2.3)	中央部床 面	付高台側で。全体に磨耗。	①焼成・良好 ②橙 ③細砂混る
525-2 211-2	灰 輪 陶 器 椀	口〜体 小片	15.4 × — × (3.4)	埋 土	横樋。口縁部内外施釉。刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
525-3 211-3	灰 輪 陶 器 皿	口〜底	13.8 × 6.3 × 2.7	中央部床 面	横樋。右回転。口縁部へ体部内外施釉。 刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
525-4 211-4	須 恵 器 壺	体 片	— × — × (12.8)	中央部床 面	紐造。体部手持型削り。内面泡眼痕顯著。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
525-5 211-5	須 恵 器 転用磁石		長 2.9 幅 3.5 厚 1.1	埋 土	裏面部片転用。断面2ヵ所使用。仕上げ	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
525-6 211-6	土 製 品 陶 羽 口	中 小片	長 (3.5)	中央部床 面	棒付割で。先端部寄り。溶解物少量付着。	①焼成・二次還元 ②黒〜桃灰 ③砂混る
525-7 211-7	石	完	長11.4 幅 4.4 厚 3.5 242.4g	西央部床 面	棒状円錐。	輝石安山岩 (粗粒)

I 15号住居跡 (Fig. 526~528・PL. 212)

I 区の北西部に位置し、61~63 I 46・47の範囲にある。10A号・13号住居跡と重複しており、両者より古い時期の所産である。住居跡北半は重複のため消失している。平面形態は方形を呈すると考えられるが、東



第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

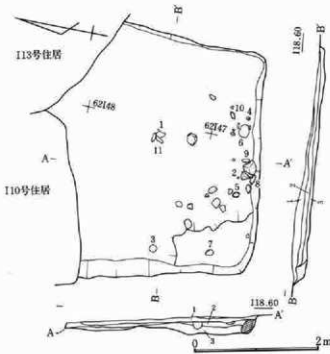


Fig.526 I 15号住居跡

壁はやや開いている。東西長は約4.1m、現存南北長は約2.8mを測る。住居跡の検出範囲では竈の痕跡はなく、その付設は北壁かあるいは東・西壁でも北側に偏ってなされたと考えられる。壁高は約20cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は湿気が多く軟弱である。また南側に向かって余り深くないが窪みをなし、南西隅は不規則な形状で、わずかな高まりが観察されている。この高まりはとくに変化はなく、踏み締まりも他部分の床面と同程度である。遺物は南半部に散在して出土している。

I 15号住居跡

- 1 緑褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗灰褐色土 埴りなし。
- 3 灰褐色土

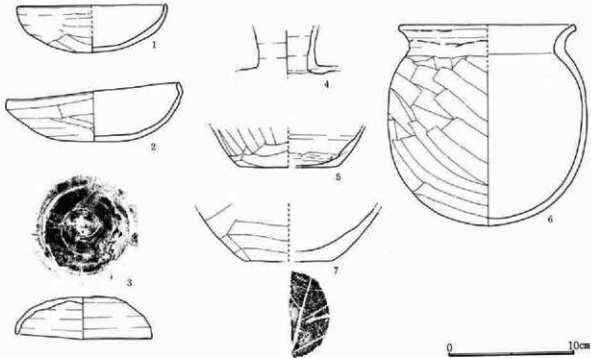


Fig.527 I 15号住居跡出土遺物(1)

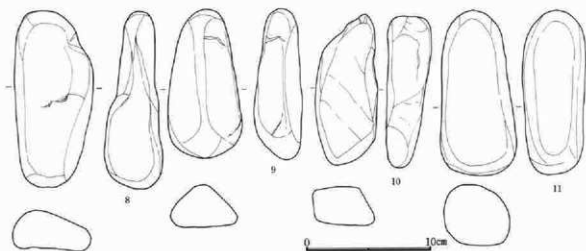


Fig.528 I 15号住居跡出土遺物(2)

I 15号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色黄 ③胎土 その他
527-1 212-1	土器 杯	口～底 片	12.0 × — × 3.7	中央部味 面	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
527-2 212-2	土器 杯	口～底 片	13.8 × — × 4.2	南東部南 壁下床面	指押。口縁部及び内面撫で。体部横、底 部不定方向削り。歪み顕著。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
527-3 212-3	須恵器 蓋	頂～端 完	10.8 × — × 3.3	西西部西 壁下床面	輪轆。右回転策切り。無調整。逆さ杯型	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
527-4 212-4	須恵器 蓋	頸	— × — × (3.4)	南東部南 壁下床面	横轆で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
527-5 212-5	須恵器 蓋	下～底 片	— × 7.8 × (3.0)	南東部操 形	砥造。体部及び底部削り。破砕面上端 及び内面。油性炭化物付着。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
527-6 212-6	土器 壺	口～底 片	14.1 × — × 16.0	南東部南 壁下床面	砥造。口頸部及び内面撫で。体～底部斜 方向削り。丸底。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
527-7 212-7	土器 壺	下～底 片	— × 7.0 × (4.2)	南西部味 面	砥造。体部下位横方向削り。底部木炭 圧痕あり。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③砂混る
528-8 212-8	石	完	長14.0 幅 6.4 厚 4.7 506.2g	南東部南 壁下床面	扁平長円磯。	輝石安山岩(粗粒)
528-9 212-9	石	完	長11.9 幅 6.0 厚 3.9 323.0g	南東部南 壁下床面	棒状円磯。	輝石安山岩(粗粒)
528-10 212-10	石	完	長12.1 幅 5.0 厚 3.6 315.5g	南東部南 壁下床面	棒状円磯。	輝石安山岩(粗粒)
528-11 212-11	石	完	長13.1 幅 6.1 厚 5.2 640.0g	中央部味 面	棒状円磯。	輝石安山岩(粗粒)

I 16号住居跡 (Fig. 529~532・PL. 213, 214)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	方位位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.19 × 2.92	N-88.5°-E	東壁やや南寄り	円形 48 × 43 × 30

I区の北西端、一部J区にまたがって位置し、61・62I49・J0の範囲にある。南西部で10A号住居跡と重複しており、これより古い時期の所産である。後世の削平が深く及んでおり遺存状態はわるい。壁高は約12cmを測る。床面は多少の凹凸がみられ湿気のある軟弱な面をなす。住居跡中央部には不整形の土坑が穿たれるが、土層観察によれば上面に薄い粘土があり床下土坑と考えられる。土坑の規模は94×90cm、深さ約15cmを測る。竈は東壁に付設され小袖部が住居内に張り出す形態である。煙道部の検出はない。燃焼部幅約50cm・奥行き約25cmを測る。遺物は羽口片の出土が目立つ。土器類では竈燃焼部に長胴の変形土器が倒置状態で、また左袖前には丸胴壺型土器が検出されている。

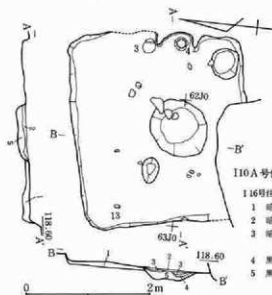


Fig.529 I 16号住居跡

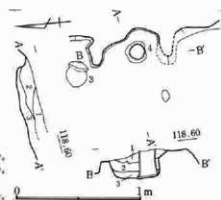


Fig.530 I 16号住居跡竈

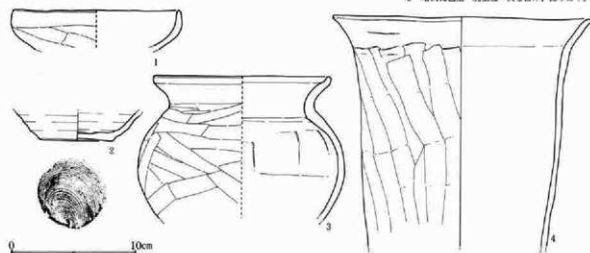


Fig.531 I 16号住居跡出土遺物(1)

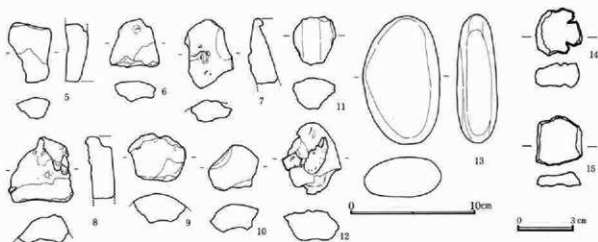


Fig.532 I16号住居跡出土遺物(2)

I16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・R)	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③面土 その他
531-1 214-1	土師器 杯	口~体 片	13.4 × - × (3.2)	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
531-2 214-2	須恵器 杯	体~底	- × 5.7 × (2.3)	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②黄灰 ③細砂混る
531-3 214-3	土師器 壺	口~中 片	14.2 × - × (11.4)	電柱前床 面	紐造。口頸部内外無で。体部横~斜方向 削り後、縦方向無で。内面寛無で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
531-4 214-4	土師器 壺	口~中 片	20.6 × - × (18.2)	電内直立	紐造。口頸部内外無で。体部縦方向削り。 長胴型。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
532-5 214-5	土製品 曬羽口 小片	基	長(4.6)	埋土	棒付。無で。	①酸化・良 ②橙~洗 黄 ③細砂混る
532-6 214-6	土製品 曬羽口 小片	中	長(3.6)	埋土	棒付。無で。	①酸化・良 ②黄灰 ~洗黄橙 ③細砂混る
532-7 214-7	土製品 曬羽口 小片	先	長(5.3)	埋土	棒付。無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 黒 ③細砂混る
532-8 214-8	土製品 曬羽口 小片	先	長(5.0)	埋土	棒付。無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 黒帯~黄灰 ③細砂混 る
532-9 214-9	土製品 曬羽口 小片	中	長(3.5)	埋土	棒付。無で。	①酸化・二次還元 ②黄灰~洗黄橙 ③細砂混る
532-10 214-10	土製品 曬羽口 小片	先	長(3.2)	埋土	棒付。無で。	①酸化・良 ②黄灰 ~洗黄橙 ③細砂混る

I 16号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④色 その他
532-11 214-11	土製品 鬮羽口	小片	長3.8	埋土	胎で	①酸化 ②濁灰 ③細砂混る
532-12 214-12	土製品 鬮羽口	小片	長5.6	埋土	先端部破損物付着	①酸化 ②濁灰 ③白色粒混る
532-13 214-13	石	完	長10.2 幅6.1 厚3.2 290g	北西部 灰	長軸両端・1側縁に叩き痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
532-14 214-14	鉄塊	小片	長2.4×2.4×厚0.5	埋土		
532-15 214-15	鉄塊?	小片	長2.7×2.4 厚0.5	埋土		

I 17号住居跡 (Fig.533、534・PL.215)

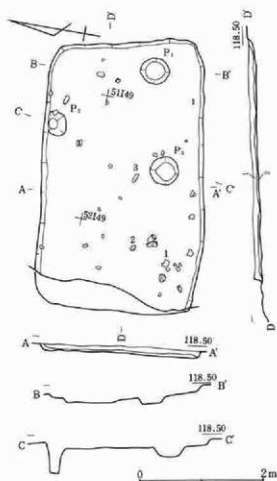


Fig.533 I 17号住居跡

I区北端中央部に位置し、50～52 148・49の範囲にある。西部は2号溝によって消失している。平面形態は北東部隅はやや丸みを帯びるが長方形を呈すると考えられる。長軸は東西方向にあり現存長は4.2m、南北長は2.6mを測る。長軸の東西を基準とする主軸方位はN-78°-Eである。立ち上がりは浅く壁高は約18cmを測る。床面はほぼ平坦をなすが踏み締まりはなく軟弱である。掘形面で南東と北側に3個の円形の穴が検出されている。P<sub>1</sub>は径44cm・深さ14cm、P<sub>2</sub>は径44cm・深さ22cm、P<sub>3</sub>は上面形40cm・底径16cm・深さ46cmの漏斗状である。遺物は小破片が多く散在して出土している。当跡は竈・炉跡等の検出はなく、またその痕跡も見られないため、住居跡であるための条件は整っていない。竪穴状遺構と呼称すべきかも知れない。

## I 17号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石を含み締りあり。
- 2 黒褐色土 粘性あり。

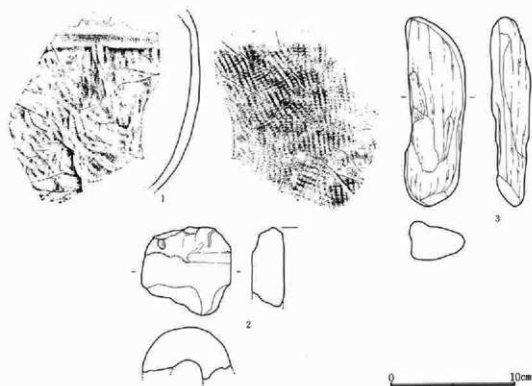


Fig.534 I 17号出土遺物

I 17号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
534-1 215-1	須恵器 甕	体 小片		南西部床 面	叩打。外面格子目状叩目。内面同心円状 あて目。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
534-2 215-2	土製品 籾羽口	先 片	長(7.0)×幅7.1×厚一	南西部床 面	棒状撫で。器壁厚い。先端部冷解物付着。	①酸化・良好 ②黒濁へにふい黄橙 ③細砂混る
534-3 215-3	石	完	長15.1×幅5.0×厚3.3 297.1R	中央部床 面	棒状撫で。	緑色片岩

I 18号住居跡 (Fig. 535~541・PL. 216~218)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	置 置 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.73 × 4.16	(A)N-68°50'-E (B)N-158°-E	東壁やや南寄り 南壁やや東寄り	

I 区の北側中央部に位置し、49~51 I 45~47の範囲にある。57号住居跡と重複しておりこれより新しい時期の所産である。北東部と北西部は現代の攪乱で一部消失している。平面形態は北東壁及び南東壁がやや膨らむような丸をもつ五角形の形態をとる。各壁はその長さを異にしており不整形を呈する。北東壁と南東壁(A)、南東壁と南壁(B)の変換部には各々竈が付設される。北東壁約2.6m、北壁約3.2m南壁約3.6m、南

東壁約1.2mを測る。またおおよその南北長約4m、東西長は4.2mを測る。A電に主軸を求めた場合の主軸方位はN-69°-Eを示し、B電はN-139°-Eの傾きである。壁高は約40cmを測り直線的に立ち上がる。床面はやや凹凸が目立つが地床を床面にするため安定している。2基付設される電は両者とも小規模で袖部・煙道

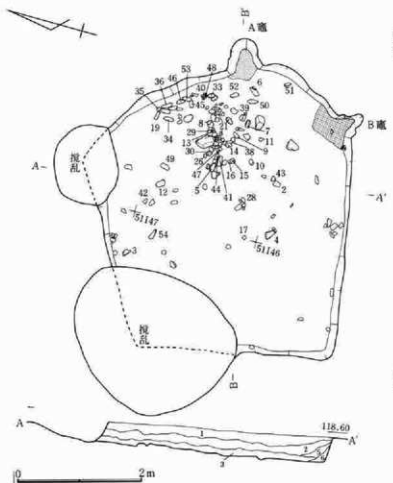


Fig.535 I 18号住居跡

部などの施設もなく燃焼部の範囲も不明瞭である。A電の前面には多くの遺物に混じり数個の人頭大の川原石が検出されており、電構築材の一部と考えられる。A電幅約60cm・奥行き55cm、B電幅約40cm・奥行き約50cmを測る。出土遺物はA電の前面に集中しておりとくに羽口と12cm大の長楕円形の川原石が多い。羽口の出土状態はほとんどのものが床より高い位置からの出土である。

I 18号住居跡

- |   |      |                     |
|---|------|---------------------|
| 1 | 暗褐色土 | C軽石・炭化粒を多量に含み、粘性あり。 |
| 2 | 暗褐色土 | 暗褐色土を多量に含み、粘性あり。    |
| 3 | 暗褐色土 | 粘性あり。               |
| 4 | 暗褐色土 | 黒滓・炭化粒・羽口集中し粘性あり。   |
| 5 | 暗褐色土 |                     |
| 6 | 暗褐色土 | 粘性あり。               |

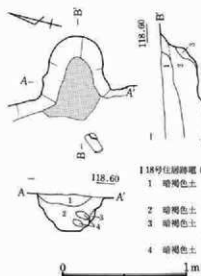


Fig.536 I 18号住居跡竪電(A)

I 18号住居跡竪電(A)

- |   |      |                     |
|---|------|---------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 焼土粒少量・C軽石を多量に含む粘性土。 |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土粒を含む。             |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土粒を少量含み、粘性あり。      |
| 4 | 暗褐色土 | C軽石を含む。             |

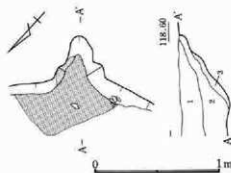


Fig.537 I 18号住居跡竪電(B)

I 18号住居跡竪電(B)

- |   |      |                 |
|---|------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | C軽石を含む、粘性あり。    |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土粒・灰色砂質塊を少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土塊を含む。         |

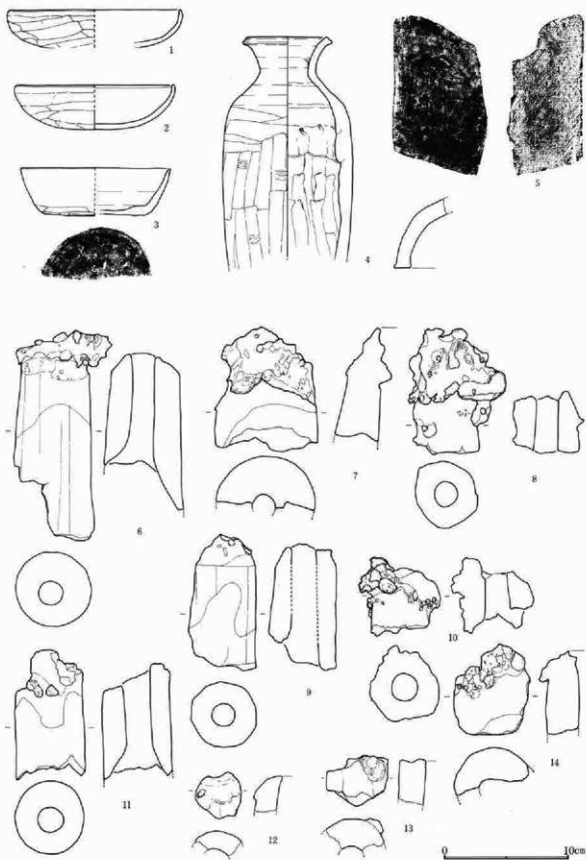


Fig.538 118号住居跡出土遺物(1)



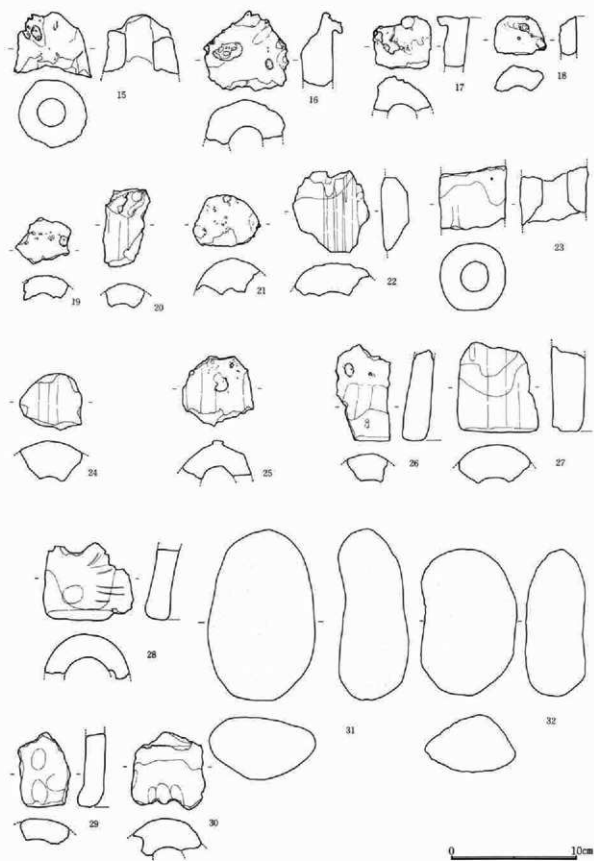


Fig.539 Ⅰ18号住居跡出土遺物(2)

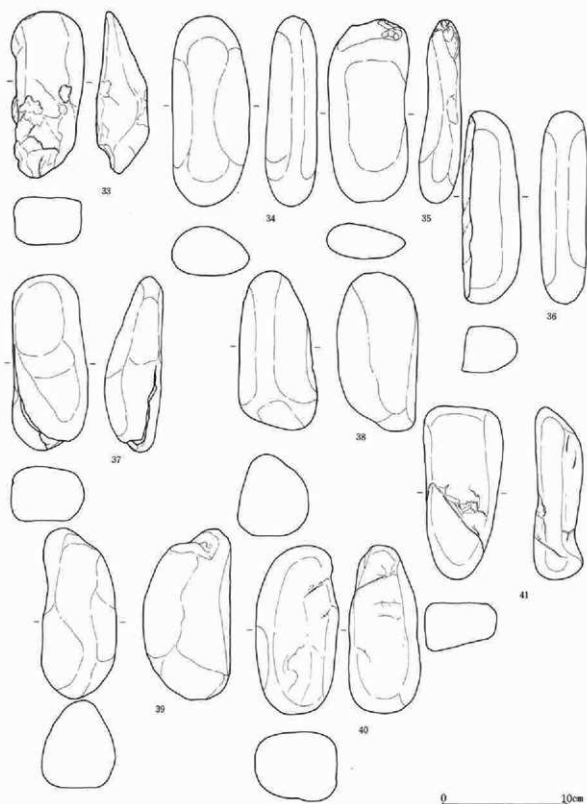


Fig.540 I 18号住居跡出土遺物(3)

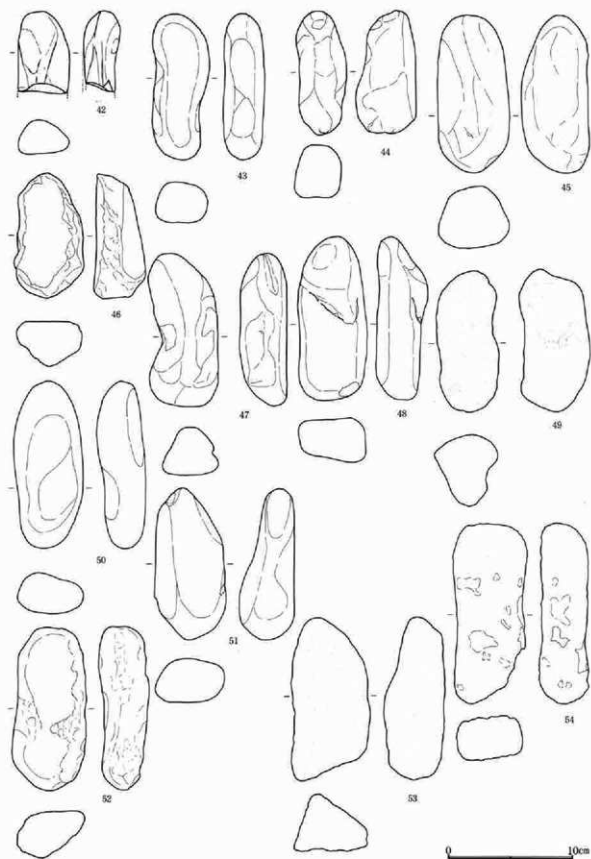


Fig.541 Ⅰ18号住居跡出土遺物(4)

第5章 I 区の遺構と遺物

I 18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
538-1 216-1	土師器 杯	口～底 小片	13.8 × — × 3.0	東央部東 壁下床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定長方向削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
538-2 216-2	土師器 杯	口～底 片	12.8 × — × 3.5	南東部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定長方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
538-3 216-3	須恵器 杯	口～底 片	12.0 × 8.0 × 3.8	北央部北 壁下埋土	縦縞。右回転。腰部～底部、不定方向削 り。	①還元・良 ②灰 ③白色砂混る
538-4 216-4	須恵器 瓶子	口～中	7.1 × — × (18.0)	中央部埋 土	縦造。口頸部横撫で。体部上位横中位以下 縦方向削り。内面縦方向撫で	①中性・良 ②浅黄 ③細砂混る
538-5 216-5	瓦 丸瓦	小片	長(12.8)	東央部埋 土	叩打。外面撫で。内面布目状。	①還元・良好 ②褐灰 ③砂混る
538-6 217-6	土製品 陶羽口	完	長(15.7) 幅 6.0 厚 5.9	壱手前埋 土	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物付着。 基部わずかに欠損。	①酸化・良好 ②灰 ～橙 ③細砂混る
538-7 217-7	土製品 陶羽口	先 片	長(9.9) 幅 7.9 厚 一	東央部埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②灰 ～灰白～橙 ③砂混る
538-8 217-8	土製品 陶羽口	先	長(10.0) 幅 5.0 厚 5.3	東央部埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②淡黄 ③細砂混る
538-9 217-9	土製品 陶羽口	中～基	長(10.3) 幅 5.5 厚 5.8	東央部埋 土	棒付。撫で。	①酸化・良好 ②暗緑 灰～にぶい黄橙 ③砂混る
538-10 217-10	土製品 陶羽口	完	長(10.9) 幅 5.2 厚 5.2	東央部埋 土	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物少量付 着。	①酸化・二次還元 ②暗青灰～灰～橙 ③砂混る
538-11 217-11	土製品 陶羽口	先	長(6.3) 幅 5.5 厚 6.0	東央部埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②改良 ③砂混る
538-12 217-12	土製品 陶羽口	先 片	長( 3.0)	中央部床 面	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②赤橙 ～黒 ③細砂混る
538-13 217-13	土製品 陶羽口	先 片	長( 3.8)	東央部床 面	棒付。撫で。溶解物少量付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
538-14 217-14	土製品 陶羽口	先 片	長( 7.1)	東央部床 面	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③砂混る
539-15 217-15	土製品 陶羽口	先	長(5.3) 幅 5.5 厚 5.3	東央部床 面	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②オリ ーブ黒～淡黄 ③砂混る
539-16 217-16	土製品 陶羽口	先 片	長( 6.4)	東央部床 面	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 暗灰～灰白 ③砂混る
539-17 217-17	土製品 陶羽口	先 片	長( 4.1)	中央部床 面	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②暗緑灰 ③細砂混る
539-18 217-18	土製品 陶羽口	先 片	長( 3.0)	東央部床 面	棒付。撫で。溶解物少量付着。	①酸化・良好 ②淡黄 橙 ③細砂混る
539-19 217-19	土製品 陶羽口	先 小片	長( 3.7)	埋 土	棒付。撫で。溶解物少量付着。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③細砂混る

I 18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(m・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
539-20 217-20	土製品 鬮羽口	先 小片	長( 6.1)	東央部埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰～灰黄 ③細砂混る
539-21 217-21	土製品 鬮羽口	先 片	長( 4.1)	東央部埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②オ リーブ黄 ③細砂混る
539-22 217-22	土製品 鬮羽口	中 小片	長( 6.4)	埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②灰白 ～浅黄橙 ③砂混る
539-23 217-23	土製品 鬮羽口	中	長(5.0) 幅 5.2 厚 5. 3	東央部埋 土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②浅黄 橙～橙 ③砂混る
539-24 217-24	土製品 鬮羽口	中 片	長( 4.0)	埋 土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②橙 ～にぶい黄橙 ③砂混 る
539-25 217-25	土製品 鬮羽口	先 片	長( 5.6)	埋 土	棒付、縦方向撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③細砂混る
539-26 217-26	土製品 鬮羽口	中～基 小片	長( 7.7)	東央部埋 土	棒付、撫で。端部面取り、撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
539-27 217-27	土製品 鬮羽口	中～基 小片	長( 7.1)	埋 土	棒付、縦方向撫で。端部面取り、撫で	①酸化・二次還元 ② 黄橙～橙 ③細砂混る
539-28 217-28	土製品 鬮羽口	中～基 片	長( 6.2)	中央部床 面	棒付、撫で。端部面取り、撫で。	①酸化・良好 ②明黄 褐～にぶい橙 ③細砂 混る
539-29 217-29	土製品 鬮羽口	基 小片	長( 5.9)	東央部埋 土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い黄橙 ③細砂混る
539-30 217-30	土製品 鬮羽口	中 小片	長( 6.1)	東央部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②灰 ～橙 ③細砂混る
539-31 218-31	石	完	長13.6 幅 8.6 厚 4.9	東央部東 壁下床面	扁平円礫。	角閃石安山岩
539-32 218-32	石	完	長11.6 幅 7.3 厚 4.5	北東部床 面	円礫。	角閃石安山岩
540-33 218-33	石		長(6.5) 幅 4.1 厚 3.0 (113.7)g	埋 土	棒状円礫。半欠損。	変質玄武岩
540-34 218-34	石	完	長11.6 幅 4.6 厚 3.3 278.1g	南東部床 面	棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
540-35 218-35	石	完	長 9.8 幅 4.0 厚 4.9 263.0g	北央部埋 土	棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
540-36 218-36	石	完	長12.5 幅 5.7 厚 5.5 587.8g	東央部東 壁下床面	棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)

第5章 I区の遺構と遺物

I 18号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・#) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
540-37 218-37	石	完	長 9.9 幅 5.6 厚 4.2 283.5#	東央部東 壁下床面	角礫。周縁打割。	ひん岩
540-38 218-38	石	完	長12.5 幅 5.6 厚 3.8 374.2#	東央部埋 土	棒状円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
540-39 218-39	石	完	長13.0 幅 5.7 厚 4.1 444.7#	東央部東 壁下床面	扁平長円礫。	ひん岩
540-40 218-40	石	完	長11.2 幅 5.1 厚 5.7 388.3#	北東部床 面	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
540-41 218-41	石	完	長13.2 幅 5.6 厚 3.9 385.9#	南東部電 手前床面	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-42 218-42	石	完	長12.1 幅 5.7 厚 4.4 347.6#	南東部隅 寄床面	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-43 218-43	石	完	長13.0 幅 5.9 厚 4.0 428.3#	南東部電 手前床面	扁平長円礫。	ひん岩
541-44 218-44	石	完	長12.9 幅 6.4 厚 4.9 434.9#	北東部東 壁下床面	三角形長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-45 218-45	石	完	長14.3 幅 6.0 厚 4.0 (551.6)#	北央部埋 土	扁平長円礫。自然剝離断面。	輝石安山岩 (粗粒)
541-46 218-46	石	完	長13.2 幅 5.9 厚 4.3 450.6#	北東部東 壁下床面	長円礫。	変質安山岩
541-47 218-47	石	完	長15.1 幅 6.2 厚 4.1 599.0#	北東部東 壁下床面	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-48 218-48	石	完	長14.5 幅 6.5 厚 3.3 429.6#	北東部東 壁下床面	扁平長円礫。一端に打撃痕。	頁岩
541-49 218-49	石	%	長15.3 幅(4.7) 厚3.8 (443.6)#	北東部東 壁下床面	棒状円礫。長軸欠損。	輝石安山岩 (粗粒)
541-50 218-50	石	完	長13.9 幅 6.2 厚 4.6 565.2#	北東部東 壁床面	長円礫。	ひん岩
541-51 218-51	石	完	長12.6 幅 6.3 厚 6.5 682.6#	東央部埋 土	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-52 218-52	石	完	長13.6 幅 6.0 厚 7.0 732.9#	東央部埋 土	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-53 218-53	石	完	長13.5 幅 6.7 厚 6.8 649.9#	北東部東 壁下床面	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
541-54 218-54	石	完	長13.8 幅 6.4 厚 3.9 547.7#	東央部埋 土	長円礫。	閃緑岩 (?)

I 19号住居跡 (Fig. 542~544・PL. 219, 220)

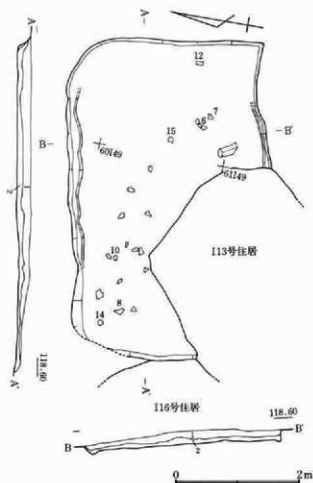


Fig.542 I 19号住居跡

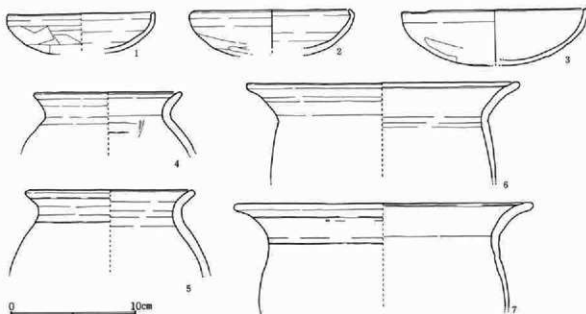


Fig.543 I 19号住居跡出土遺物(1)

I区の北端西寄りに位置し、59~61I 48~J 0の範囲にある。南西部で13号住居跡と重複している。新旧関係の誤認が調査順序を逆転して掘り下げたため南西部が消失してしまったが13号住居跡より新しい時期の所産である。各壁の隅部が明瞭に検出できず不安定であるが、長軸を東西方向にもつ長方形の平面形態をなすと考えられる。東西長約5m・南北長約3.2mを測る。長軸方位はN-81°-Eの方向を示す。壁の立ち上がりは低く壁高約20cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。北壁と南壁の下には部分的に溝が走る。溝幅6~10cm・深さ約6cmを測る。この壁下の溝を除いては電・貯蔵穴・柱穴などの検出はなく竪穴住居跡として断定することは出来ない。出土遺物は散在した状態で検出された。

## I 19号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を少し含む汚れた層。
- 2 暗褐色土 1よりC軽石が少なく締りあり。

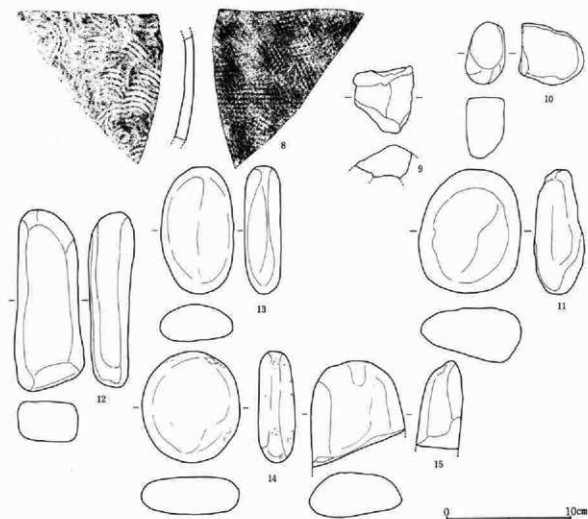


Fig.544 I19号住居跡出土遺物(2)

I19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色 質 ③胎土 その他
543-1 219-1	土師器 杯	口～底 1/4	11.8 × - × (3.1)	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部、不定方向磨削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
543-2 219-2	土師器 杯	口～底 1/4	12.6 × - × (3.5)	埋土	口唇部内傾。指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向磨削り。	①酸化・良 ②にぶい 黄灰 ③細砂混る
543-3 219-3	土師器 杯	口～底 1/4	14.7 × - × (4.4)	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向磨削り。器面寬れ顯著。	①酸化・良 ②黄灰 ～橙 ③細砂混る
543-4 219-4	土師器 壺	口～上 1/4	11.8 × - × (4.8)	埋土	紐造。口頸部斜で。体底部磨削り。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
543-5 219-5	土師器 壺	口～上 1/4	13.6 × - × (6.4)	埋土	紐造。口頸部斜で。体底部磨削り。内面黄灰。	①酸化・良 ②黄橙 ③細砂混る



I 19号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
543-6 219-6	土師器 壺	口～上 1/2	21.8 × — × (7.6)	南東部床 面	紐造。口頸部無で。体部寛削り。	①酸化・良 ②浅黄橙 ～橙 ③細砂混る
543-7 219-7	土師器 壺	口～上 1/2	24.0 × — × (8.2)	南東部床 面	紐造。口頸部無で。体部寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③砂混る
544-8 219-8	須恵器 壺	体 小片	—	北西部埋 土	叩打。外面格子状、内面同心円状叩打痕。 瓶用痕なし。	①還元・良好 ②明オ リーブ灰 ③細砂混る
544-9 219-9	土製品 陶羽口	先 小片	長(5.3)	埋土	棒付。推で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②浅黄 橙～橙 ③細砂混る
544-10 219-10	石	完	長9.8 幅8.2 厚4.2	埋土	扁平円礫。砥石原石か。	浮岩
544-11 219-11	石製品 砥石	完	長5.0 幅3.1 厚4.9	北西部埋 土	円礫の3面使用。黄砥。	角閃石安山岩
544-12 219-12	石	完	長14.4 幅5.6 厚3.7 447.0g	南東部床 面	棒状円礫。	角閃石安山岩
544-13 219-13	石	完	長10.1 幅5.8 厚2.9 261.1g	掘形埋土	扁平円礫。	石英閃緑岩
544-14 219-14	石	完	長8.8 幅7.8 厚3.0 296.5g	北西部床 面	扁平円礫。	輝石安山岩(粗粒)
544-15 219-15	石		長(8.5) 幅7.6 厚3.7 (319.2)g	埋土	扁平長円礫。一端欠損。	ひん岩

I 20号住居跡 (Fig. 545～549・PL. 220～222)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.34 × 3.00	N-99°-E	東壁やや南寄り	

I 区の南端やや西寄りに位置し、54～56 I 1～3の範囲にある。南東部で26号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。わずかながら南北が長くなるが比較的整った方形の平面形態を呈する。壁高は約30cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりも良好である。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されない。竈は東壁の南端に付設され、両袖は住居内に張り出す形態である。平面的には比較的狭い燃焼部からそのまま長めの煙道部が作り出される。電袖には平瓦を補強材として用いてあるが、左袖のものは袖の上面にあり本体を覆う形で、右袖のものは芯あるいは燃焼部の内面壁として埋設してある。右袖本体は掘り過ぎのため消失してしまった。床面よりわずかに窪む燃焼部から急激に立ち上がり浅く延びる煙道部へ続く。焚き口部幅約40cm、燃焼部奥行き約70cm、煙道部長さ約65cmを測る。出土遺物は竈内及び住居跡南半に散在し、瓦の出土量が多い。

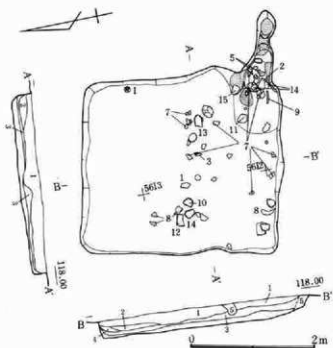


Fig.545 I 20号住居跡

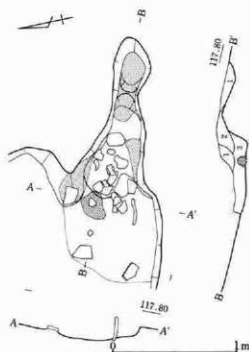


Fig.546 I 20号住居跡電

I 20号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・B軽石を含み、覆瓦多い。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む、壁崩落土。
- 3 赤褐色土 大粒C軽石を含み、粘性のある硬質土、炭化粒も混入。
- 4 暗褐色土 粘状土。
- 5 覆瓦。

I 20号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石・B軽石を含む混入土。
- 2 赤褐色土 天井部の崩落土。
- 3 黒褐色土 灰・炭化粒・焼土粒を含む。

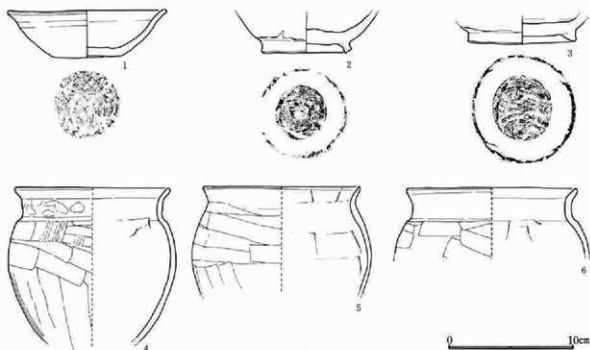


Fig.547 I 20号住居跡出土遺物(1)

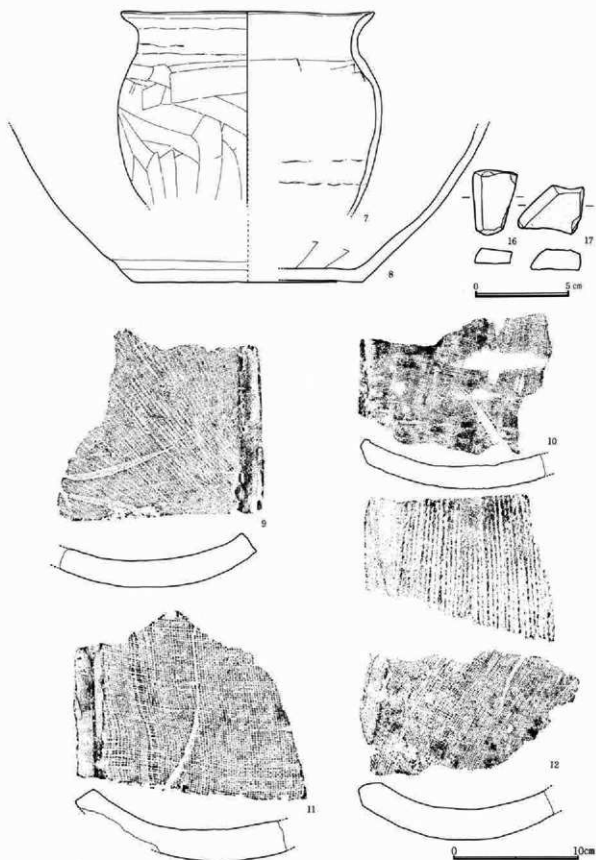


Fig.548 Ⅰ20号住居跡出土遺物(2)

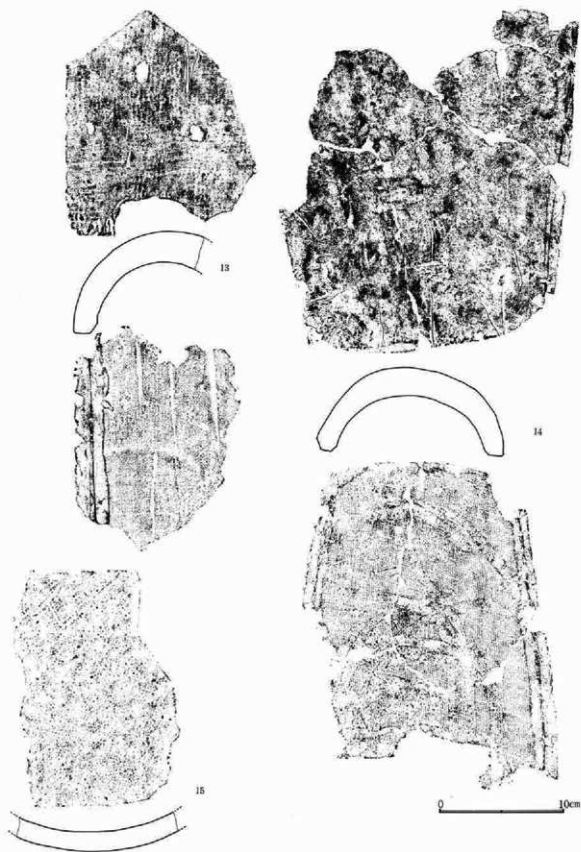


Fig.549 I 20号住居跡出土遺物(3)

I 20号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
547-1 221-1	須恵器 杯	口～底 残	12.7 × 5.5 × 3.8	北東部東 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰 ③砂混る
457-2 221-2	須恵器 碗	下～底	— × 7.2 × (3.0)	電子前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
547-3 221-3	須恵器 碗	底	— × 8.7 × (2.1)	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰 ③砂混る
547-4 221-4	土師器 壺	口～下 小片	12.4 × — × (12.2)	埋土	紐造。口頸部撫で、指押痕顯著。体部上 半横～斜、下半縦方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
547-5 221-5	土師器 壺	口～中 片	12.6 × — × (8.5)	窠内	紐造。口頸部撫で。体部上半横、下半縦 方向寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②に よしい橙 ③細砂混る
547-6 221-6	土師器 壺	口～上 片	13.7 × — × (5.3)	埋土	紐造。口頸部強い撫で。体部上位横方向 寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
548-7 221-7	土師器 壺	口～下 底部欠 損	20.4 × — × (16.0)	中央～南 壁下敷在	紐造。口頸部撫で。体部上～中位横～斜、 下位縦方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
548-8 221-8	須恵器 壺	下～底 片	— × 18.0 × (12.2)	西中央部 床面敷在	紐造。叩打後撫で。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
548-9 222-9	瓦 平瓦	小片	厚 2.0	電子前床 面	轆轤、叩打。上面布目痕。下面撫で。端 部面取り。	①還元・良好 ②灰褐 ③砂混る
548-10 222-10	瓦 平瓦	小片	厚 1.9	西中央部 埋土	轆轤、叩打。上面布目痕。下面轉目叩打 痕。端部面取り。	①還元・良 ②灰褐 ③砂混る
548-11 222-11	瓦 平瓦	小片	厚 2.6	南東部床 面	轆轤、叩打。上面布目痕。下面撫で。端 部面取り。	①還元・良 ②灰褐 ③細砂混る
548-12 222-12	瓦 平瓦	小片	厚 2.4	西中央部 埋土	轆轤、叩打。上面布目痕。下面撫で。端 部3段面取り。	①還元・良 ②灰褐 ③細砂混る
549-13 222-13	瓦 丸瓦	小片	厚 2.4	中央部床 面	叩打。上面撫で、下面布目痕。前部1 段、左側部2段面取り。	①還元・良 ②黒灰 ③細砂混る
549-14 222-14	瓦 丸瓦	小片	厚 2.2	窠内～西 中央部敷在	叩打。上面撫で、下面布目痕。側部2 ～3段面取り。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
549-15 222-15	瓦 平瓦	小片	厚 1.5	電子前床 面	轆轤、叩打。上面布目痕。「人」型指さ り、下面撫で。端部面取り。	①還元・良 ②灰黄 ③細砂混る
548-16 222-16	須恵器 転用磁石		長 3.4 幅 2.4 厚 0.8	埋土	折面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
548-17 222-17	須恵器 転用磁石		長 3.2 幅 2.8 厚 1.0	埋土	断面1、平面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

I 21号住居跡 (Fig. 550~554・PL. 223, 224)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	置 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.56 × 2.84	N-87°-E		楕円形 73 × 45 × 24

I区の南東端に位置し、一部はH区にかかる。40~42H49~I0・1の範囲にある。北東部は2号住居跡と重複している。調査が2期に渡ったため新旧の関係を確定し得ず北東部を消失してしまった。遺物の出土状況を検討した結果、21号住居跡の竈構築材と考えられる川原石が2号住居跡の埋土中に検出されており、21号住居跡が2号住居跡の埋没後構築されたことを確認した。長軸を南北方向にもつ長方形を呈するがやや平行四辺形の形態をとる。壁高は約16cmを測り浅い。床面は平坦で南半は踏み締まりが良好である。検出できた南・西及び北壁の一部には壁下の溝が巡る。幅約10cm・深さ8~10cmを測る。竈は東壁に付設されるが壁の走行方向に対しやや傾いている。楕円形に掘り込まれた燃焼部から煙道部が作り出される。袖部は小さく住居内へ張り出し、長頭形の川原石を埋設するが左袖のそれは残欠のみで消失している。焚口部は若干掘り窪められるが平坦な燃焼部からそのまま緩い傾斜で煙道部へ至る。燃焼部幅約60cm・奥行65cm、煙道部長さ50cmを測る。出土遺物は比較的多く、竈内及びその周辺に集中して検出されている。

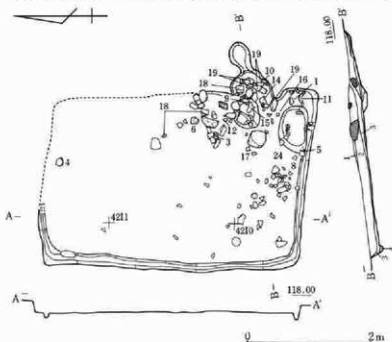


Fig.550 I 21号住居跡

I 21号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 黒褐色土 炭化粒を含む粘土。
- 4 黒褐色土 炭化粒を含む粘質土。

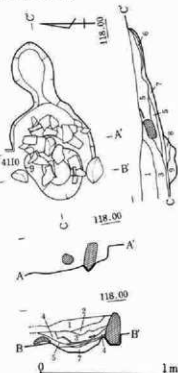


Fig.551 I 21号住居跡竈

I 21号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・粘土粒を含む。
- 2 黒褐色土 1の同質異色土層。
- 3 赤褐色土 焼土・天井梁崩落土。
- 4 黒褐色土 焼土細粒・炭化粒を少量含む。
- 5 暗褐色土 C軽石・焼土細粒・粘土細粒・炭化粒を含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 7 赤褐色土 火床。
- 8 黒褐色土 灰・炭化粒を含む。
- 9 暗褐色土 炭化物・Loam 粒を含む1との境が壊れており上面が火床。

第2節 Ⅰ区の竪穴住居跡と遺物

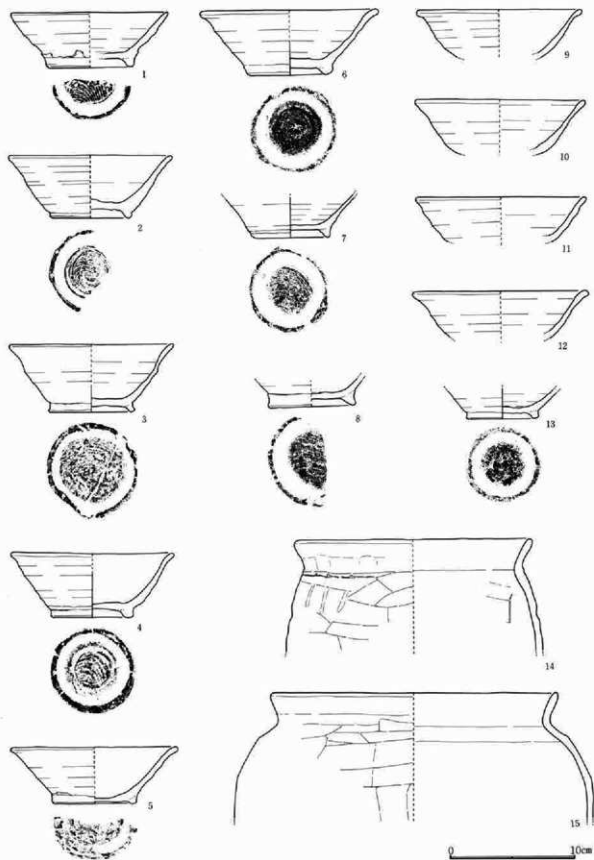


Fig.552 Ⅰ21号住居跡出土遺物(1)

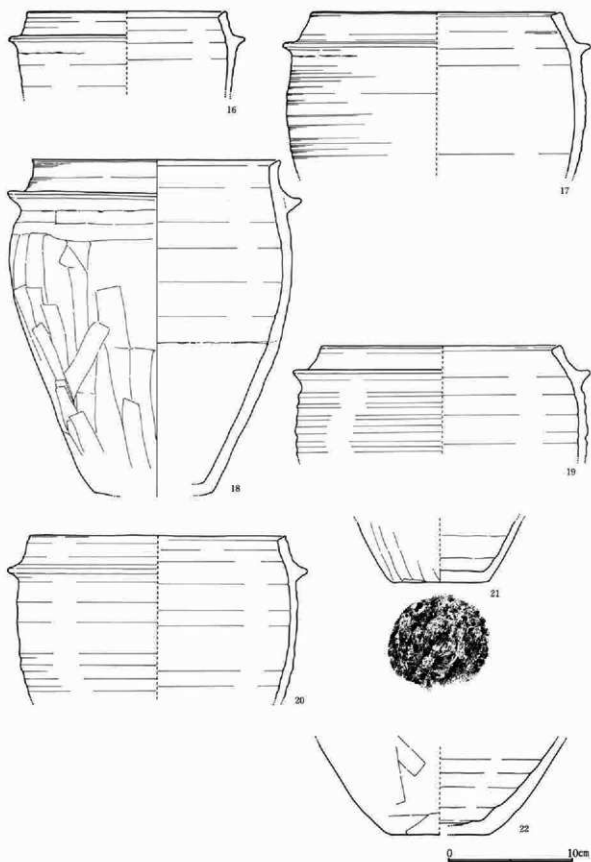


Fig.553 I 21号住居跡出土遺物(2)



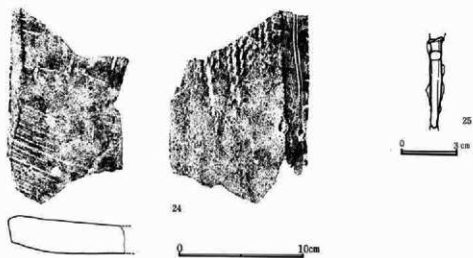
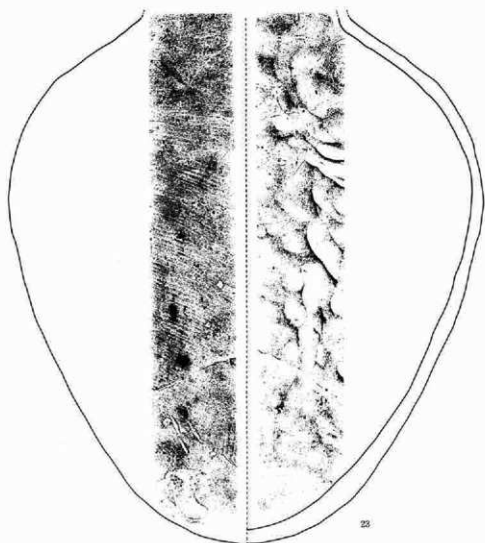


Fig.554 Ⅰ21号住居跡出土遺物(3)

第5章 I区の遺構と遺物

I 21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・#) □径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
552-1 223-1	須 恵 器 椀	口~底 片	12.6 × 7.0 × 4.4	南東部隅 床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
552-2 223-2	須 恵 器 椀	口~底 片	13.2 × 6.5 × 5.0	埋 土	轆轤。付高台無で。	①酸化・低温 ②淡黄 ③細砂混る
552-3 223-3	須 恵 器 椀	口~底 小片	13.2 × 7.0 × 5.4	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
552-4 223-4	須 恵 器 椀	口~底 片	13.2 × 6.6 × 5.2	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。見込 部収束。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
552-5 223-5	須 恵 器 椀	口~底 片	13.4 × 6.8 × 4.5	東東部南 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
552-6 223-6	須 恵 器 椀	口~底 片	14.4 × 7.0 × 5.2	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横 無で。	①加酸化還元・低温 ②黄灰 ③細砂混る
552-7 223-7	須 恵 器 椀	体~底 片	— × 6.4 × ( 3.3)	貯蔵穴内 埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
552-8 223-8	須 恵 器 椀	体~底 片	— × 7.1 × ( 2.1)	東東部南 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横 無で。	①酸化・低温 ②によ い黄橙 ③細砂混る
552-9 223-9	須 恵 器 椀	口~体 片	13.2 × — × ( 3.9)	電 内	轆轤。右回転。内面収束。	①酸化・低温 ②によ い橙 ③細砂混る
552-10 224-10	須 恵 器 椀	口~体 片	13.6 × — × ( 4.3)	電内埋土	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
552-11 224-11	須 恵 器 椀	口~体 片	13.6 × — × ( 3.6)	南東部隅 床面	轆轤。右回転。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
552-12 224-12	須 恵 器 椀	口~体 小片	14.0 × — × ( 3.7)	電手前床 面	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
552-13 224-13	須 恵 器 椀	体~底 片	— × 5.8 × ( 2.2)	貯蔵穴内 埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横 無で。	①酸化・低温 ②淡黄 ③細砂混る
552-14 224-14	土 師 器 壺	口~中 小片	19.0 × — × ( 9.0)	電 内	紐造。口頸部無で。指押成残る。体部横 方向磨削り。内面磨削で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る
552-15 224-15	土 師 器 壺	口~中 小片	23.0 × — × (10.0)	電 内	紐造。口頸部無で。指押成残る。体部横 方向磨削り。球形型。	①酸化・良好 ②によ い赤褐 ③細砂混る
552-16 224-16	羽 釜	口~上 小片	16.0 × — × ( 6.5)	貯蔵穴内 埋土	紐造。横無で。	①加酸化還元 ②淡黄 ③細砂少量混る
552-17 224-17	羽 釜	口~中 小片	20.2 × — × (13.0)	南東部床 面	紐造。横無で。	①加酸化還元・良好 ②橙 ③細砂混る
552-18 224-18	羽 釜	口~底 片	19.8 × 9.5 × 26.7	電内・電 手前床面	紐造。横無で。体部跨下横方向、中~下 位斜方向磨削り。	①加酸化還元・良好 ②黄灰 ③細砂混る
552-19 224-19	羽 釜	口~上 片	19.1 × — × ( 9.0)	電 内	紐造。横無で。	①中性・良好 ②灰白 ③細砂混る

I 21号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
553-20 224-20	羽蓋	口～中 小片	20.5 × — × (13.0)	竈内	紐造。横撫で。	①酸化・良好 ②に よい黄橙 ③砂混る
553-21 224-21	羽蓋	下～底	— × 7.8 × (4.9)	貯蔵穴内 埋土	底部円板、紐造。横撫で。体部下位蔵方 向、底部一定方向削り。	①酸化・良好 ②に よい黄橙 ③砂混る
553-22 224-22	羽蓋 小片	下～底 小片	— × 8.0 × (7.8)	貯蔵穴内 埋土	底部円板、紐造。横撫で。体部不定方向 削り。	①酸化・良好 ②に よい黄橙 ③砂混る
554-23 224-23	須恵器 大型壺	頸～底 片	— × — × (41.6)	竈手前床 面	紐造。印打、内面あて目直粗い。丸底。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
554-24 224-24	瓦 平瓦	小片	厚 2	貯蔵穴内	凹面瓦蓋で、凸面縄目印き	①還元・やや軟 ②灰 ③白色粒混る
554-25 224-25	鉄製品 釘	両端 欠損	長 4.7 厚 0.5	埋土	角釘? 頂部欠損	

I 22号住居跡 (Fig. 555～557・PL. 225)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.70 × 2.67	N—94°—E	東壁やや南寄り	隅丸方形 55 × 50 × 21

I 区の南部やや東寄りに位置し、44・45 I 6・7の範囲にある。当区では比較的小型の住居跡に属する。正方形に近い形態をもつが西壁がわずかに内側へ歪む。壁高は約26cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面は僅かに起伏があり踏み締まりも弱い。竈は東壁に付設され楕円形の燃焼部から急傾斜で直接煙り出し孔に至

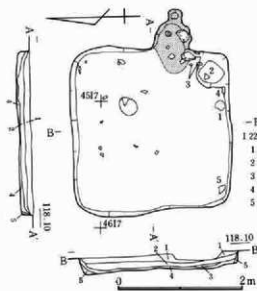


Fig.555 I 22号住居跡

I 22号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 黒褐色土 C軽石・粘土・炭化粒を含む。
- 3 黒褐色土 2に似るが、粘性大。
- 4 暗褐色土 C軽石・炭化粒を少量含む。
- 5 暗褐色土 粘性・硬質黄土。

I 22号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化・焼土粒を含む。
- 2 黄褐色土
- 3 黒褐色土 小粒C軽石・炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 焼土を含み粘性土。
- 5 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

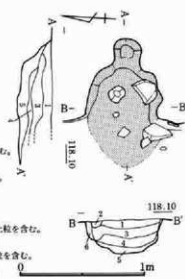


Fig.556 I 22号住居跡竈

第5章 I区の遺構と遺物

る。右袖部には凝灰岩が埋設されるが、左袖部には検出されない。燃焼部奥寄りに支脚痕と考えられる小穴が穿たれる。燃焼部幅約45cm・奥行き約60cm、煙り出し孔径20cmを測る。出土遺物は少なく散在している。

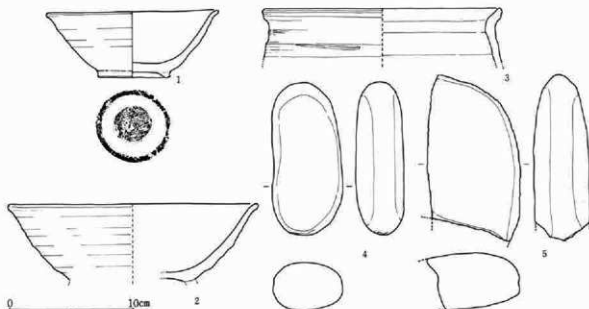


Fig.557 I 22号住居跡出土遺物

I 22号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
557-1 225-1	須恵器 椀	口～底	13.8 × 3.8 × 5.3	南東部南 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。付高台模跡で。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
557-2 225-2	須恵器 大型椀	口～下 小片	20.0 × (10.1) × ( 6.2)	貯蔵穴内 埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台模跡で、剥 落。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
557-3 225-3	土師器 甕	口～頸	19.2 × — × ( 4.2)	南東部床 面	紐造。口頸部2段物で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
557-4 225-4	石	片	長12.1幅 5.8厚 3.8 437.1g	南東部南 壁下床面	扁平長円塊。	輝石安山岩(粗粒)
557-5 225-5	石	片	長(13.2)幅(7.5)厚4.7 (546.7)g	南西部隔 埋土	扁平長円塊。一端及び一側欠損。	輝石安山岩(粗粒)

I 23号住居跡 (Fig. 558～561・PL. 226、227)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.69 × 3.07	N— 89° — E	東壁やや南寄り	楕円形 90 × 67 × 15

I区の南部やや西よりに位置し、56~58 I 5~7の範囲にある。住居跡中央部には後世の擾乱が認められたが床面には及んでいない。平面形態は方形を呈するが北東・南東の隅は丸みがある。壁高は約36cmを測り直線的に立ち上がる。床面は東西方向中央部の狭い部分と北東部が固く踏みしまり、他はやや窪みかげんで踏みしまりも弱い。竈は東壁に付設され楕円形に張り出す。煙道部の作り出しはなく、袖部も検出されない。竈内の火床直上に長楕円形の川原石が8個余り検出されている。これらの石は火・熱を受けた形跡は見られず、その規則制のない出土状況から竈の構築材としての機能はなかったと考えられる。竈の使用が途絶えた直後に投棄されたものであろう。燃焼部幅約50cm・奥行き約55cmを測る。出土遺物は前述した長楕円形の川原石の他、羽口等が検出されている。土器類は少量である。

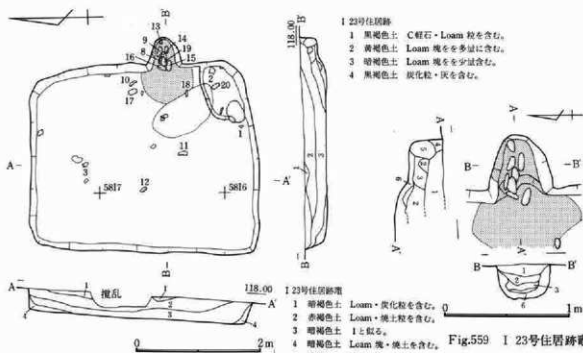


Fig.558 I 23号住居跡

Fig.559 I 23号住居跡竈

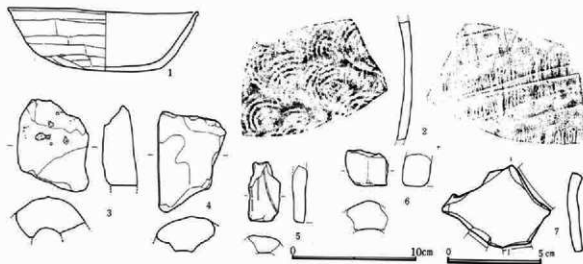


Fig.560 I 23号住居跡出土遺物(1)

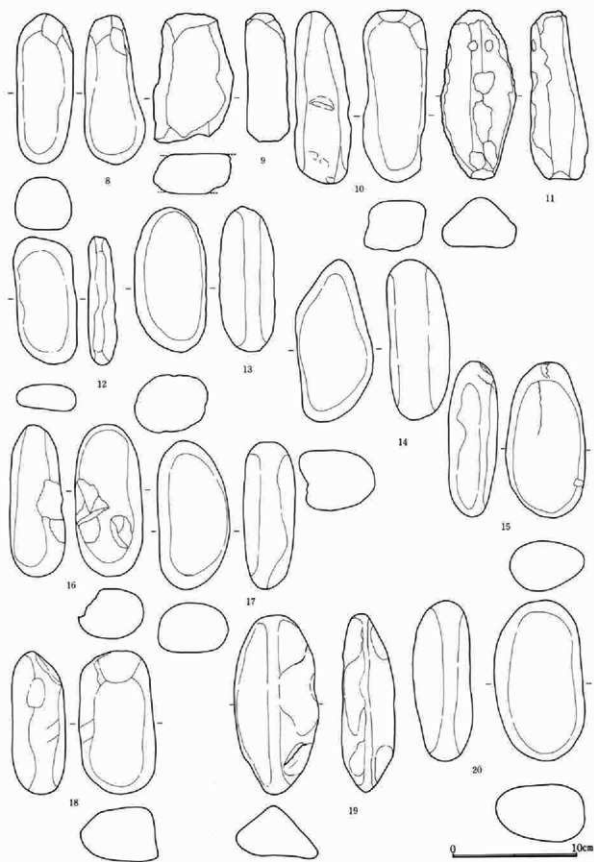


Fig.561 123号住居跡出土遺物(2)

I 23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 特殊形状	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
560-1 226-1	土 師 器 杯	口~底	15.2 × 一 × 4.9	南東部南 壁寄埋土	紐造巻上か。指押。口縁部及び内面磨で。 体部横、底部不定方向彫削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
560-2 226-2	須 恵 器 甕	体 小片		貯蔵穴内 埋 土	叩打。外面叩目痕、内面あて目痕。転用 痕なし。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少量混る
560-3 226-3	土 製 品 彌 羽 口	先 反	長( 7.3)	北東部埋 土	棒付、磨で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②灰黄 ~黄橙 ③砂混る
560-4 226-4	土 製 品 彌 羽 口	中 小片	長( 8.0)	埋 土	棒付、磨で。指押痕残る。	①酸化・良好 ②灰黄 ③砂混る
560-5 226-5	土 製 品 彌 羽 口	基 小片	長( 3.0)	埋 土	棒付、縦方向磨で。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③砂混る
560-6 226-6	土 製 品 彌 羽 口	基 小片	長( 4.8)	埋 土	棒付、縦方向磨で。磨傷あり。	①酸化・良好 ②灰黄 ③細砂混る
560-7 226-7	須 恵 器 転用砥石		長 4.6 幅 4.5 厚 0.9	埋 土	断面 4カ所使用。2カ所定幅。	①還元・良 や軟質 ②灰白 ③緻密
561-8 227-8	石	完	長11.9 幅 4.5 厚 4.8 337.2g	竈内一括	棒状円礫。	溶結凝灰岩
561-9 227-9	石	完	長10.2 幅 6.5 厚 3.5 366.2g	竈内一括	扁平長円礫。周縁打割。	ひん岩
561-10 227-10	石	完	長13.7 幅 5.2 厚 4.6 474.8g	電手前床 面北	棒状円礫。	閃緑岩
561-11 227-11	石	完	長13.4 幅 6.0 厚 4.8 442.0g	中央部床 面	三角棒状円礫。一部表面割落。	閃緑岩
561-12 227-12	石	完	長10.1 幅 5.1 厚 2.3 189.3g	中央部床 面	扁平長円礫。	砂岩
561-13 227-13	石	完	長11.5 幅 5.8 厚 4.5 409.6g	竈内一括	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
561-14 227-14	石	完	長12.8 幅 6.1 厚 5.0 552.0g	竈内一括	長円礫。	石英閃緑岩
561-15 227-15	石	完	長12.3 幅 6.4 厚 3.9 454.8g	竈内一括	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
561-16 227-16	石	完	長12.1 幅 5.4 厚 4.5 446.0g	竈内一括	長円礫。中央割端欠損。	輝石安山岩 (粗粒)
561-17 227-17	石	完	長11.8 幅 5.8 厚 4.1 438.7g	電手前床 面北	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
561-18 227-18	石	完	長11.3 幅 6.2 厚 4.3 517.6g	電手前床 面南	長円礫。	閃緑岩
561-19 227-19	石	完	長14.2 幅 6.7 厚 4.4 480.8g	竈内一括	三角棒状円礫。	輝石安山岩 (粗粒)

I 23号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
561-20 227-20	石	完	長12.8 幅7.2 厚4.8 700.2g	貯蔵穴内 埋土	扁平円碑。	輝石安山岩(粗粒)

I 25号住居跡 (Fig. 562~564・PL. 227、228)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竈位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.32 × 3.07	N-102°-E	東壁やや南寄り	

I区の南部中央に位置し、52・53 I 4・5の範囲にある。43号住居跡と北西部で重複しているがこれより新しい時期の所産である。竈前面から西部にかけて幅約2mで後世の攪乱土坑により床面及び西壁の一部を消失している。平面形態は方形を呈するが、北東・南東隅の丸みが強く、南壁がやや歪んだ形になる。壁高は約18cmを測る。床面は平坦をなすが中央部は不明である。竈は東壁に付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれるが煙道部の検出はない。左右の袖部には各々石を埋設するが左袖は川原石を用い、右袖は凝灰岩の加工材を利用してある。また燃焼部やや左に偏って、円筒形の川原石を支脚として埋設する。両袖間内法は約35cm、燃焼部奥行き約65cmを測る。出土遺物は竈内及びその周辺に検出されている。

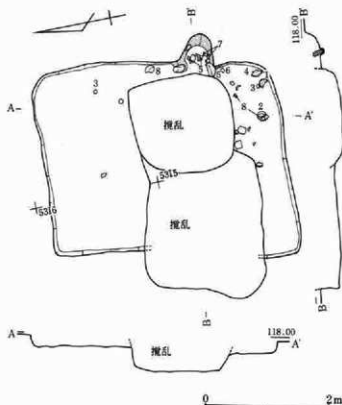


Fig.562 I 25号住居跡

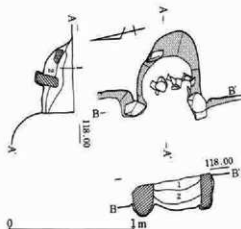


Fig.563 I 25号住居跡竈

I 25号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C緑石・黄褐色土粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を少量含む。



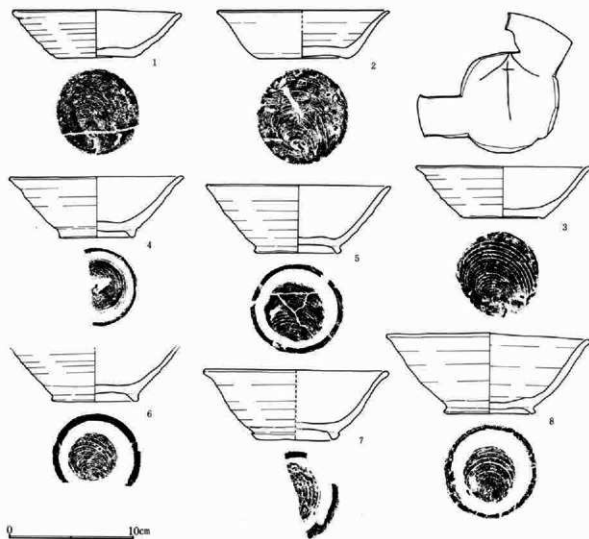


Fig.564 I 25号住居跡出土遺物

I 25号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm-g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎土 ④その他
564-1 228-1	須恵器 杯	口~底 完	13.5 × 6.3 × 3.8	南東部 隅、南央 部散在	轆轤、右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
564-2 228-2	須恵器 杯	口~底 半	13.9 × 7.3 × 3.8	南東部床 面	轆轤、右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
564-3 228-3	須恵器 杯	口~底 半	13.9 × 6.6 × 4.1	南東~北 東部散在	轆轤、右回転糸切り。無調整。見込部に「今」筋揃り。	①加酸化還元・低温 ②浅黄橙 ③細砂混る
564-4 228-4	須恵器 椀	口~底 半	14.0 × 6.1 × 4.9	南東部隅 床面	轆轤、右回転糸切り。付高台無で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
564-5 228-5	須恵器 椀	口~底 半	14.8 × 7.0 × 5.4	壺内~南 袖壁散在	轆轤、右回転糸切り。付高台無で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る

I 25号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②土質 ③胎土 ④その他
564-6 228-6	須恵器 椀	体~底 %	— × 7.0 × (4.0)	南袖陥圧 面	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①加齢化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
564-7 228-7	須恵器 椀	口~底 %	14.8 × 7.0 × 5.6	竈内	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
564-8 228-8	須恵器 椀	口~底 完	16.3 × 7.3 × 6.4	南東~東 中央部散在	轆轤。右回転糸切り。付高台無で。口縁 部に吸尻。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る

I 26号住居跡 (Fig. 565~568・PL. 228, 229)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.60 × 3.37	N-91°-E	東壁やや南寄り	

I区の南部やや西よりに位置し、53~55 I 1・2の範囲にある。北方向に竈が付設される。当概区では数少ない形態の住居跡の一つである。北西部で20号住居跡と重複しているがこれより古い時期の所産である。重複によって北西部と床面の一部は消失している。南壁が他よりやや短く歪みが見られる。壁高は約28cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。貯蔵穴・壁下の溝等は検出されない。竈は北壁に付設され、袖部はわずかに住居内に張り出すが、袖石等の補強材は検出されていない。袖部の断面観察によれば地床を掘り残し基盤としているが直接火を受ける内側には黄白色の粘土材を用いて補強している。燃焼部は先ずぼまりの三角形に掘り込まれ、煙道部との明瞭な区別は為されないまま緩やかに立ち上がる。燃焼部中央には凝灰岩の加工材が埋土中より検出されており支脚材と考えられる。掘形の調査によれば燃焼部から焚口部にかけて数個の小穴が検出されているが、中央部のものが支脚材の埋設痕であろう。燃焼部幅約50cm・奥行き約1mを測る。出土遺物は竈の前面及び住居跡南半に検出されている。

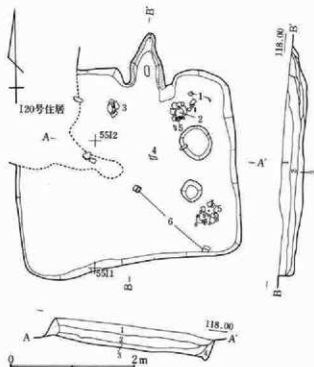


Fig.565 I 26号住居跡

燃焼部は先ずぼまりの三角形に掘り込まれ、煙道部との明瞭な区別は為されないまま緩やかに立ち上がる。燃焼部中央には凝灰岩の加工材が埋土中より検出されており支脚材と考えられる。掘形の調査によれば燃焼部から焚口部にかけて数個の小穴が検出されているが、中央部のものが支脚材の埋設痕であろう。燃焼部幅約50cm・奥行き約1mを測る。出土遺物は竈の前面及び住居跡南半に検出されている。

I 26号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 暗灰褐色土 黄褐色土粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を多量に含む。

第2節 I区の堅穴住居跡と遺物

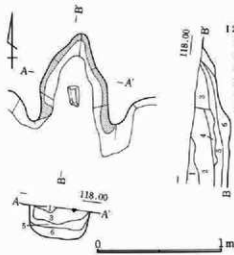


Fig.566 I 26号住居跡画

I 26号住居跡画

- 1 暗褐色土 C 軽石を含み砂質。
- 2 暗褐色土 C 軽石・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土塊。
- 4 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 5 暗褐色土 焼土塊・灰を含む。
- 6 暗褐色土 焼土塊（崩落）。

I 26号住居跡画 形状

- 1 粘土
- 2 焼土粒層

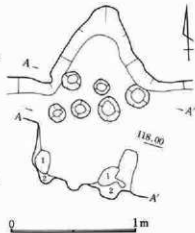


Fig.567 I 26号住居跡画形状

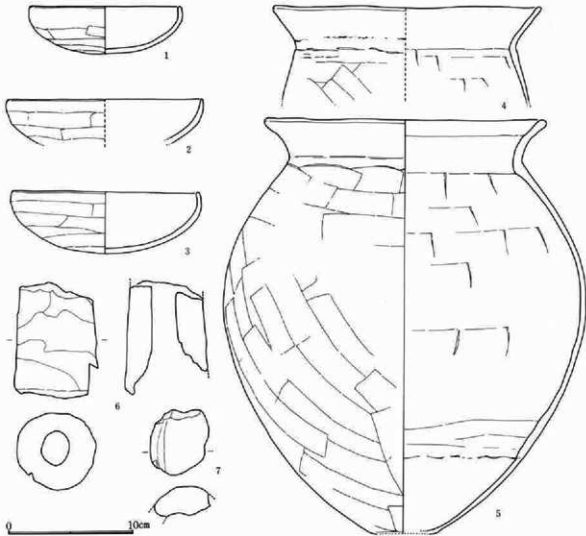


Fig.568 I 26号住居跡出土遺物

## I 26号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
568-1 229-1	土師器 杯	完	12.2 × 一 × 3.8	北東部隅 床面	指押、口縁部及び内面無で。体底部横方 向寛削り。劣化顯著。	①酸化 ②橙 ③細砂混る
568-2 229-2	土師器 杯	口~体 1/2	15.7 × 一 × ( 3.5)	北東部床 面	指押、口縁部無で。体部横方向寛削り。 内面直削で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
568-3 229-3	土師器 杯	口~底 完	15.0 × 一 × 4.9	北西部床 面	指押、口縁部及び内面無で。体底部横方 向寛削り。劣化顯著。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
568-4 229-4	土師器 甕	口~上 1/2	21.4 × 一 × ( 7.5)	中央部床 面	紐造。指押痕あり。口縁部無で。体部横 ~斜方向寛削り。内面直削で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
568-5 229-5	土師器 甕	口~底 1/2	22.6 × 5.3 × 32.8	南東部床 面	紐造。口縁部無で。体部上位横、中~下 位斜方向寛削り。内面直削で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
568-6 229-6	土製品 罌羽口	中~基 1/2	長(9.1) 幅 6.4 厚 6.1	中央~南 東部散在	棒付、断で。指押痕顯著。	①酸化・良好 ②灰黄 褐~橙 ③砂混る
568-7 229-7	土製品 罌羽口	中 小片	長( 5.2)	埋土	棒付、縦方向無で。	①酸化・良好 ②灰 ~浅黄橙 ③砂混る

## I 27号住居跡 (Fig. 569、570・PL. 230)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.82 × 2.64	N- 93° - E	東壁やや南寄り	円形 55 × 52 × 16

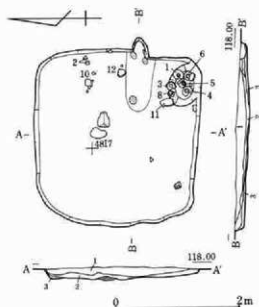


Fig.569 I 27号住居跡

I 区の南側中央部に位置し、47・48 I 6・7の範圍にある。平面形態は隅丸の方形を呈するが西壁は特に強い丸をもつ。壁の立ち上がりは浅く、壁高約18cmを測る。床面は平坦をなすが西半部はやや踏み締まりが弱い。電は東壁に付設され、小さく楕円形に掘り込んである。袖部などの構築材は検出されず、燃焼部と煙道部の区別は出来ない。電幅約25cm・奥行き約35cmを測る。出土遺物は南東隅に設けられた貯蔵穴内より須恵器の杯類が多量に検出されている。

## I 27号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石を多量に含み、堅く締る。
- 2 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 3 黒褐色土 塊状で粘性強い。

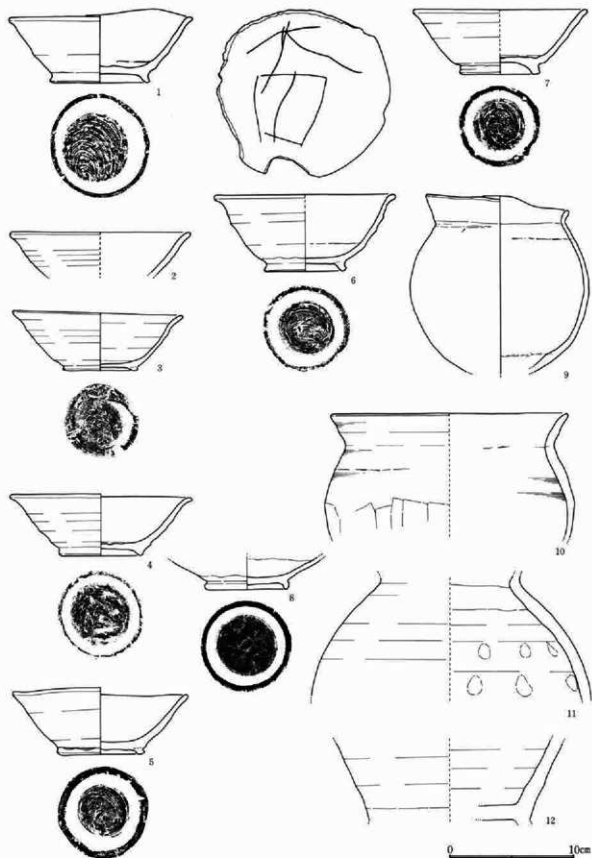


Fig.570 I 27号住居跡出土遺物

第5章 I区の遺構と遺物

127号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
570-1 230-1	須恵器 椀	口～底 完	14.7 × 8.0 × 5.9	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。口縁部の一カ所、大きく歪む。	①還元・低温 ②灰白 ③砂・細砂混る
570-2 230-2	須恵器 椀	口～体 片	14.4 × - ×(3.5)	北東部東 壁下床面	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
570-3 230-3	須恵器 椀	口～底 片	13.7 × 6.1 × 4.8	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。内面に一部吸炭。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
570-4 230-4	須恵器 椀	口～底 完	14.6 × 6.7 × 4.9	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転糸切り。付高台及び底部横撫で。	①還元・低温 ②灰 ③緻密
570-5 230-5	須恵器 椀	口～底 完	14.1 × 7.0 × 5.4	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。口縁部に歪み顕著。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
570-6 230-6	須恵器 椀	口～底 片	14.6 × 6.6 × 6.1	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。見込部「大中」筋揃き。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
570-7 230-7	須恵器 椀	口～底 片	14.0 × 6.5 × 5.2	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
570-8 230-8	灰軸陶器 椀	体～底 完	- × 6.8 ×(2.5)	貯蔵穴内 一括	轆轤。右回転。体部内外のみ施釉。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
570-9 230-9	土師器 小型甕	底部 欠損	11.5 × - ×(14.5)	埋土	紐造。口頸部横撫で。歪み顕著。体部斜方向尻削り。内面炭削。球形型。	①酸化・良好 ②によい焼 ③細砂混る
570-10 230-10	土師器 小鉢	口～上 小片	19.0 × - ×(9.9)	北東部床 面	紐造。口頸部及び体部上位横撫で。中位以下、手持削り。球形型。	①酸化・良好 ②によい焼 ③細砂混る
570-11 230-11	須恵器 甕	上 片	- × - ×(9.5)	南東部床 面	紐造。横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
570-12 230-12	須恵器 甕	下～底 片	- × 12.8 ×(6.3)	東東部東 手前床面	底部円板。紐造。横撫で。付高台剥落。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

128号住居跡 (Fig. 571～577・PL. 231～233)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.76 × 4.64	(4)N-71'-E (5)N-111'-E	東壁やや南寄り 南東壁	

I区の南側中央部に位置し、48～50 I 7～9の範囲にある。竈は東壁と、南東隅の2箇所に付設されている。壁高は約38cmを測り急角度で立ち上がる。床面は平坦をなし比較的踏み締まりは良い。貯蔵穴・壁下の溝はみられないが柱穴(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)の4個が検出されており各柱穴は円形を呈する。南西の柱穴(P<sub>3</sub>)はやや南西に寄り他の柱穴との軸から外れている。P<sub>1</sub>は径34cm・深さ36cm、P<sub>2</sub>は径30cm・深さ28cm、P<sub>3</sub>は径28×24cm・深さ36cm、P<sub>4</sub>は径32×24cm・深さ40cmを測る。各柱間は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は2.3m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は2.4m、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は2.64m、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は2.6mを測る。竈は東壁と南東壁の隅にそれぞれ付設されるがいずれも幅は狭く長い掘り込み

である。また床面からの立ち上がり状態は、急角度でA・Bの高が立ち上がり、水平かあるいは緩い傾斜をもって延びている。このような入り方は竈の構造からすれば、煙道部としての様相が強く、竈としての完結した構造を呈するとは考えられない。両者とも燃焼部にあたる部分は本来住居内に存在しており、住居跡の廃棄時にかなりの破壊を受けた可能性が大である。A竈は幅約40cm・長さ約1.1m、B竈は幅約25cm・長さ約80cmを測る。竈双方が同時に存在したかに関しては、A竈は焼土粒・灰等の残留物が床面上にわずかではあるが流出していたのに対し、B竈はほとんどその痕跡がない。このことはB竈の構築から使用についていくらかの時間差があったものと考えられる。またA竈の付設される東壁の北側部分は、B竈のそれに比べやや張り出し、全体の平面形態を崩す形になっており、A竈の付設に際し東壁の一部を拡張してさらには、B竈の前面を削平するような変更が行われたことも想定される。出土遺物は住居跡内の全体に散在して検出されているが、数量は比較的多い。

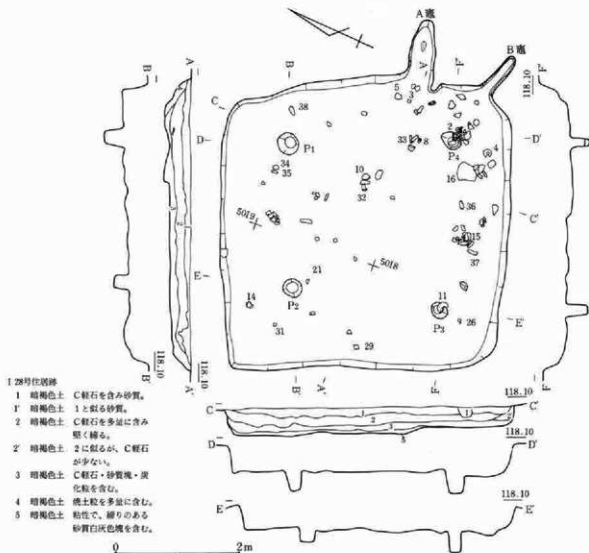


Fig.571 I 28号住居跡

第5章 I区の遺構と遺物

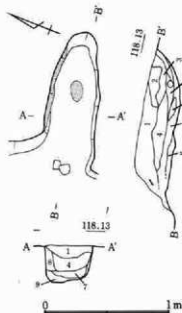


Fig.572 I 28号住居跡竈(A)

I 28号住居跡竈 (A)

- 1 暗褐色土 大粒焼土粒を多量に含む。
- 2 焼土塊
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 4 暗灰色土 焼土粒・灰を少量に含む。
- 5 灰色土 粘性あり。
- 6 焼土
- 7 灰層
- 8 暗褐色土 焼土粒・焼りあり。
- 9 暗灰色土 焼土粒・灰を含む。

I 28号住居跡竈 (B)

- 1 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・灰を少量含む。

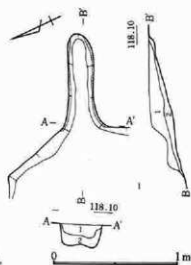


Fig.573 I 28号住居跡竈(B)

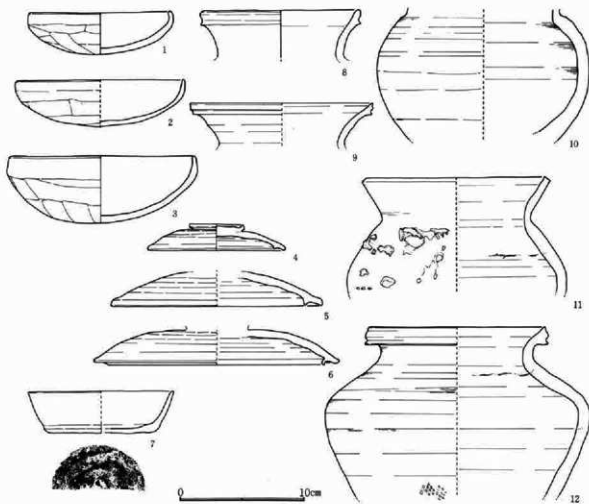


Fig.574 I 28号住居跡出土遺物(1)



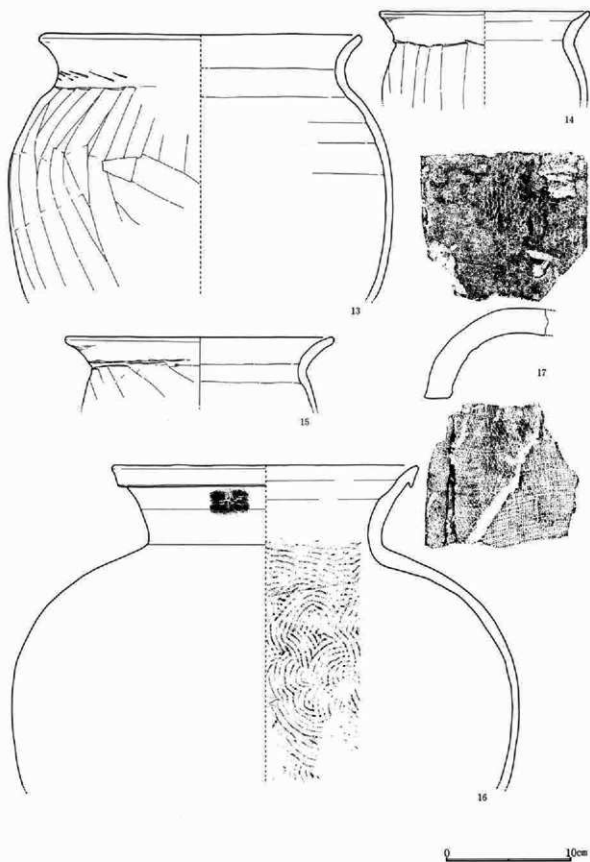


Fig.575 Ⅰ28号住居跡出土遺物(2)

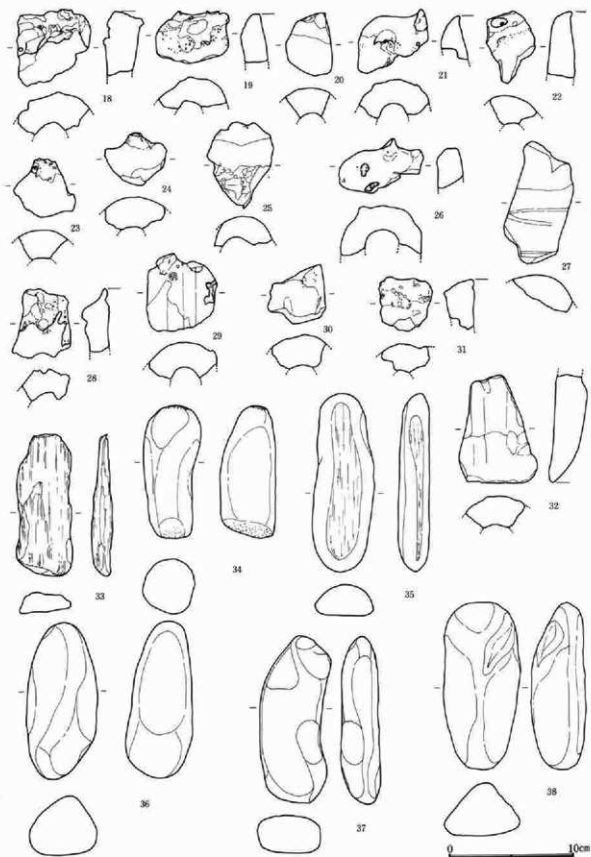


Fig.576 I 28号住居跡出土遺物(3)

第2節 I区の整穴住居跡と遺物

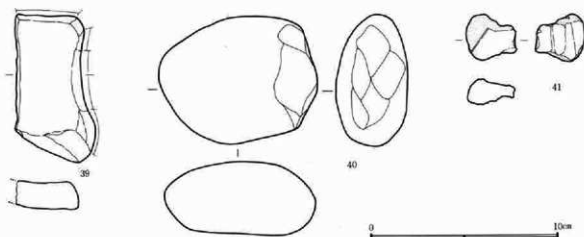


Fig.577 I28号住居跡出土遺物(4)

I28号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・ε) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
574-1 232-1	土器 杯	口~底 1/2	11.5 × — × 3.3	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向寛削り。口唇部やや内傾。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
574-2 232-2	土器 杯	口~底 1/2	13.5 × — × 3.7	東部床面	指押。口縁部及び内面撫で。体部横、底部一定方向寛削り。	①酸化・良好 ②よい ③橙 ③砂混る
574-3 232-3	土器 杯	完	14.9 × — × 5.3	東部床面	紐造巻上。指押。口縁部及び内面撫で。体部横、底部一定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
574-4 232-4	須恵器 蓋	横~端 完	11.1 × 横 4.3 × 2.1	東部床面	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。横横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
574-5 232-5	須恵器 蓋	頂~端 小片	17.0 × — × (2.8)	東部床面	轆轤。右回転。頂部全面回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
574-6 232-6	須恵器 蓋	頂~端 1/2	19.6 × — × (2.8)	埋土	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
574-7 232-7	須恵器 杯	口~底 1/2	11.6 × 8.5 × 3.4	埋土	轆轤。右回転旋切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
574-8 232-8	須恵器 短頸壺	口~頸 1/2	12.8 × — × (3.8)	東部床面	紐造。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
574-9 232-9	須恵器 短頸壺	口~頸 1/2	14.7 × — × (3.3)	埋土	紐造。横撫で。灰被り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
574-10 232-10	須恵器 短頸壺	頸~体 小片	— × — × (10.5)	中央部床面	紐造。横撫で。体部下半横方向寛削り。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
574-11 232-11	須恵器 短頸壺	口~上 1/2	15.0 × — × (9.2)	南部床面	紐造。横撫で。灰被り顯著。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
574-12 232-12	須恵器 短頸壺	口~下 1/2	14.2 × — × (13.5)	埋土	紐造。横撫で。体部下位叩打。	①還元・良好 ②灰褐 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 28号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・R) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
575-13 232-13	土器 壺	口～中 小片	25.8 × — × (20.9)	中央部床 面	紐造。口頸部撫で。体部縦方向寛削り。 内面磨面。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
575-14 233-14	土器 壺	口～上 小片	16.8 × — × (7.2)	西部床 面	紐造。口頸部撫で。体部縦方向寛削り。 内面磨面。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
575-15 233-15	土器 壺	口～上 片	21.5 × — × (5.5)	南東部床 面	紐造。口頸部撫で。体部斜方向寛削り。 内面磨面。	①酸化・良好 ②ぶ い橙 ③細砂混る
575-16 233-16	須恵器 壺	口～中 片	24.5 × — × (25.5)	東部床 面	紐造。口頸部横撫で、「+」寛削り。体部 叩打。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
575-17 233-17	瓦 丸瓦	小片	厚 2.0	西部北壁 中埋土	叩打。上面撫で。下面布目肌。端部2段 面取り。	①
576-18 233-18	土製品 矚羽口	先 片	長(6.1)	中央部床 面	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②明 オリーブ灰 ③砂混る
576-19 233-19	土製品 矚羽口	先 片	長(3.9)	埋土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰 ③細砂混る
576-20 233-20	土製品 矚羽口	先 小片	長(5.0)	埋土	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰白～ぶい橙 ③砂混る
576-21 233-21	土製品 矚羽口	先 片	長(5.1)	中央部床 面	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰 ③砂混る
576-22 233-22	土製品 矚羽口	先 小片	長(5.7)	埋土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②黄褐 ～淡黄 ③細砂混る
576-23 233-23	土製品 矚羽口	先 小片	長(4.7)	埋土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰～黄橙 ③細砂混る
576-24 233-24	土製品 矚羽口	中 小片	長(4.2)	埋土	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ② 暗灰～橙 ③細砂混る
576-25 233-25	土製品 矚羽口	先 片	長(6.9)	埋土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰～黄橙 ③細砂混る
576-26 233-26	土製品 矚羽口	先 片	長(4.3)	南部床 面	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰褐 ③細砂混る
576-27 233-27	土製品 矚羽口	中～基 小片	長(9.6)	埋土	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ② 明黄褐 ③砂混る
576-28 233-28	土製品 矚羽口	先 小片	長(5.5)	埋土	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰白 ③細砂混る
576-29 233-29	土製品 矚羽口	先 片	長(6.2)	西部床 面	棒付。縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 黄灰～オリーブ灰 ③細砂混る
576-30 233-30	土製品 矚羽口	中 片	長(4.6)	埋土	棒付。撫で。	①酸化・良好 ②淡黄 ③細砂混る
576-31 233-31	土製品 矚羽口	先 小片	長(4.3)	西部床 面	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ② 褐～灰 ③細砂混る

I 28号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・K) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
576-32 233-32	土製品 甕羽口	中～基 灰	長(8.5)	中央部床 面	棒付、縦方向製で。	①酸化・二次還元 ② 灰～橙 ③細砂混る
576-33 233-33	石	完	長11.2 幅4.5 厚1.7 105.2g	東部床面	扁平円礫。一部欠損。	雲母石英片岩
576-34 233-34	石	完	長10.5 幅4.6 厚4.4 350.7g	北部床面	棒状円礫。両端に打撃痕。	安曇安山岩
576-35 233-35	石	完	長14.1 幅5.0 厚2.5 254.7g	北部床面	扁平棒状円礫。	雲母石英片岩
576-36 233-36	石	完	長12.5 幅5.8 厚5.3 494.1g	南東部床 面	長円礫。	頁岩
576-37 233-37	石	完	長13.3 幅5.7 厚3.1 360.7g	南東部床 面	扁平棒状円礫。	黒色頁岩
576-38 233-38	石	完	長13.2 幅6.2 厚4.3 490.9g	北部床面	三角棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
577-39 233-39	須恵器 転用磁石		長7.7 幅4.1 厚1.4	埋土	塼体部片転用。断面2ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
577-40 233-40	石製品 磁石		長8.5 幅6.5 厚3.9	埋土	円礫先端部使用。5ヵ所に使用痕。	角閃石安山岩
577-41 233-41	石製品 磁石		長2.4 幅2.5 厚1.3	埋土	小円礫の両面使用。	角閃石安山岩

I 29号住居跡 (Fig. 578～582・PL. 234、235)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.19 × 4.81	N—4'—W	北壁やや東寄り	円形 56 × 55 × 18

I区の中央部やや南よりに位置し、49～51 I 16～19の範囲にある。54号住居跡と重複しているがこれより古い時期の所産である。東壁と南壁のほとんどと西壁の一部にかけては遺跡内を横切る道路で調査が出来ず未検出の為、全体の規模等は不明である。また北壁の一部と床面は後世の土坑により消失している。竈を北壁に付設する少数例の1つである。壁高は約38cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが竈前面を除き踏みまりは弱い。壁下の溝・柱穴の検出はない。竈は北壁に付設されるが、燃焼部と煙道部には平面形では明瞭な区別はなく、先細りの形で約30°前後の勾配をもって立ち上がる。袖部は住居内に張り出し、石材等の補強はされていない。袖部の構築は粘性のある暗褐色土を主体に築かれている。左袖部長さ約70cm、右袖部長さ約60cm、燃焼部幅約60cm、傾斜変換部までを燃焼部とすれば奥行き約90cm、傾斜部(煙道部)の長さ約80cmを測る。出土遺物は多量であるが散在的である。また羽口、磁石等の出土が目立つ。棒状の鉄製品2点を検出したが破損が著しく図示出来ない。

第5章 I区の遺構と遺物

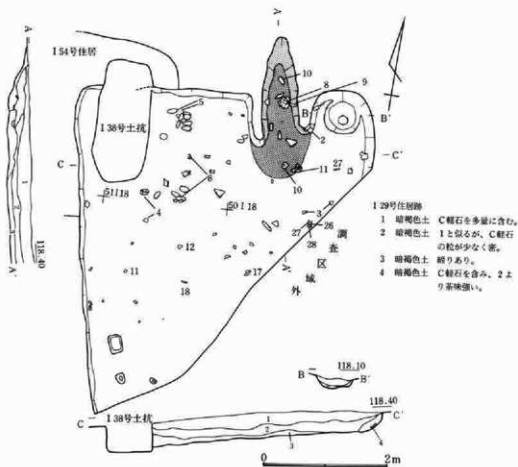


Fig.578 I 29号住居跡

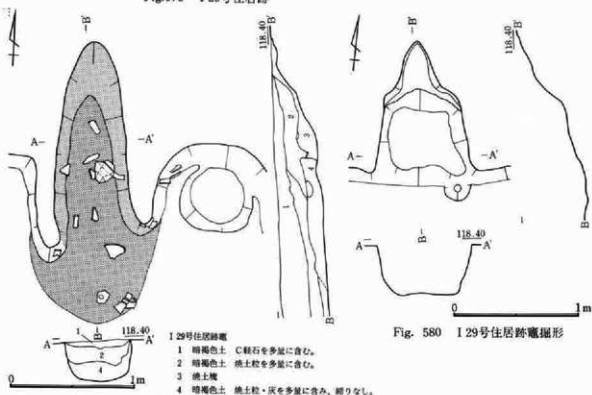


Fig.579 I 29号住居跡

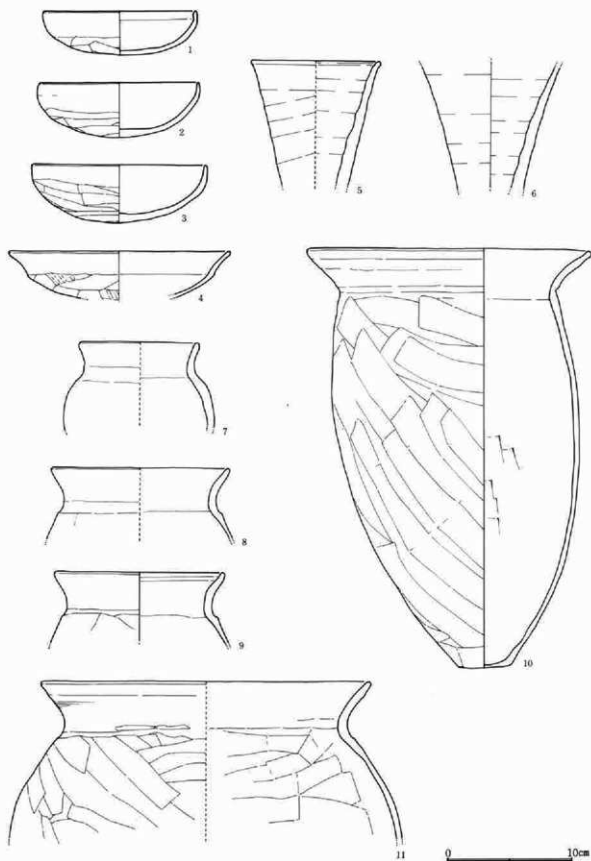


Fig.581 I 29号住居跡出土遺物(1)

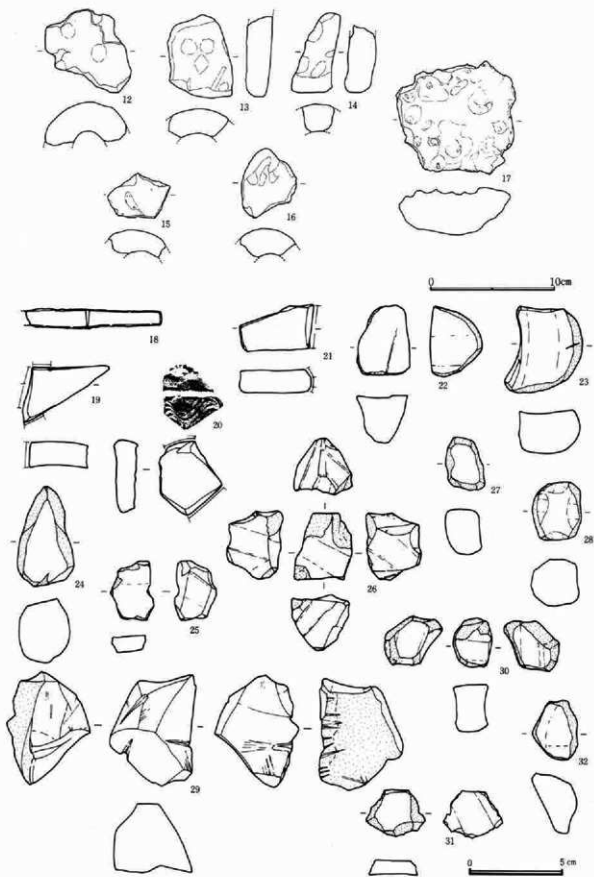


Fig.582 Ⅰ29号住居跡出土遺物(2)



Ⅰ29号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値(cm・#) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
581-1 234-1	土 師 器 杯	口~底 完	12.3 × — × 3.5	貯蔵穴内	指押、口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
581-2 234-2	土 師 器 杯	口~底 完	12.8 × — × 4.4	北東部東 袖付着	指押、口縁部及び内面撫で。体底部横方 向磨削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
581-3 234-3	土 師 器 杯	口~底 完	14.0 × — × 4.6	東尖部床 面	指押、口縁部及び内面撫で、体底部横~斜 方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
581-4 234-4	土 師 器 杯	口~底 欠	17.7 × — × (4.0)	北西部床 面敷在	指押、口縁部及び内面強い撫で。体底部 不定方向磨削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
581-5 234-5	須 恵 器 長 頸 甕	口~頸 欠	10.8 × — × (9.8)	中央部床 面	紐造。轆轤。右回転、横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
581-6 234-6	須 恵 器 長 頸 甕	頸	— × — × (9.6)	中央部床 面	紐造巻上。轆轤。右回転、横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
581-7 235-7	土 師 器 壺	口~上 欠	9.6 × — × (6.5)	北西部床 面 敷 在	紐造。口頸部撫で。体部磨削り、器面荒 れて不鮮明。	①酸化・良好 ②明褐 ③細砂混る
581-8 235-8	土 師 器 壺	口~上 欠	14.2 × — × (5.7)	北 西 部 ~ 電 内 敷 在	紐造。口頸部撫で。体部横方向磨削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
581-9 235-9	土 師 器 壺	口~上 欠	13.6 × — × (5.6)	北 西 部 ~ 電 内 敷 在	紐造。口頸部撫で。体部横方向の粗い磨 削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
581-10 235-10	土 師 器 壺	口~底 完	22.6 × 4.2 × 33.2	電内~電 手前敷在	紐造。口頸部撫で。体部横~斜方向、底 部不定方向磨削り	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る
581-11 235-11	土 師 器 壺	口~上 欠	26.5 × — × (12.5)	西尖~電 手前敷在	紐造。口頸部撫で。体部斜方向磨削り。 内面磨削で、球形型。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
582-12 235-12	土 製 品 輪 羽 口	中 欠	長(6.6)	中央部床 面	棒付、撫で。指押痕残る。	①酸化・良好 ②黄褐 ③細砂混る
582-13 235-13	土 製 品 輪 羽 口	基 欠	長(6.6)	埋 土	棒付、撫で。指押痕顕著。	①酸化・良好 ②黄灰 ③細砂混る
582-14 235-14	土 製 品 輪 羽 口	基 小 片	長(6.3)	埋 土	棒付、撫で。指押痕顕著。	①酸化・良 ②灰白 ~淡黄橙 ③細砂混る
582-15 235-15	土 製 品 輪 羽 口	先 小 片	長(3.5)	埋 土	棒付、撫で。溶解物少量付着。	①酸化・二次還元 ② 増灰~黄褐 ③細砂混る
582-16 235-16	土 製 品 輪 羽 口	中 小 片	長(5.5)	埋 土	棒付、撫で。	①酸化・良②黄灰~黄橙~灰 白③細砂混る
582-17 235-17	鉄 塊形鉄滓		長9.0 幅9.6 厚3.8	南西部西 壁下埋土	炭化物片等、不純物混入。	
582-18 235-18	鉄 製 品 刀 子 ？		長7.2 刃部幅1 柄幅0.7	中 央 部 床		
582-19 235-19	須 恵 器 転用磁石		長3.0 幅4.5 厚1.4	埋 土	甕体部片転用。断面2ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

第5章 I区の遺構と遺物

I 29号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 ③胎土 ④その他
582-20 235-20	直底器 転用砥石		長 3.8 幅 3.3 厚 1.2	埋土	壺口部部片転用、断面2カ所使用。	①還元・良好 ②黒灰 ③細砂混る
582-21 235-21	直底器 転用砥石		長 4.0 幅 2.3 厚 1.2	埋土	壺体部片転用、断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
582-22 235-22	石製品 砥石		長 3.7 幅 2.9 厚 2.5	中央部床面	円錐の尻を使用済。2カ所使用。	角閃石安山岩
582-23 235-23	石製品 砥石		長 4.0 幅 3.3 厚 2.2	埋土	円錐の尻を使用済。3カ所使用。	角閃石安山岩
582-24 235-24	石製品 砥石		長 5.3 幅 3.0 厚 3.4	埋土	2カ所使用。	流紋岩(砥沢?)
582-25 235-25	石製品 砥石		長 3.2 幅 2.3 厚 1.2	埋土	ほぼ全面使用。板状。	角閃石安山岩
582-26 235-26	石製品 砥石		長 3.5 幅 3.0 厚 2.7	中央部床面	円錐の各面を使用。角錐状。	角閃石安山岩
582-27 235-27	石製品 砥石		長 2.3 幅 2.1 厚 2.4	北東部床面 鉄線跡	小礫。	流紋岩(砥沢?)
582-28 235-28	石製品 砥石		長 3.1 幅 2.6 厚 2.5	東東部床面	小礫。4カ所使用。	流紋岩(砥沢?)
582-29 235-29	石製品 砥石		長 5.8 幅 4.4 厚 3.6	埋土	ほぼ全面使用。刃砥痕顯著。角錐状。	角閃石安山岩
582-30 235-30	石製品 砥石		長 2.6 幅 2.1 厚 2.5	埋土	小礫。4カ所使用。	流紋岩(砥沢?)
582-31 235-31	石製品 砥石		長 2.5 幅 3.2 厚 0.7	埋土	2冊使用。板状。	角閃石安山岩
582-32 235-32	石製品 砥石		長 3.1 幅 2.5 厚 3.2	埋土	小礫。1カ所使用。	流紋岩(砥沢?)

I 30号住居跡 (Fig. 583、584・PL. 236)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.03 × 2.94			円形 70 × 70 × 14

I区の南側中央部に位置し、48・49 I 4・5の範囲にある。東側は中世の所産と考えられる2号墓跡と重複しており、これによって東壁の北側部分は消失している。この重複によって竈もそのほとんどが破壊されているが、東壁端部の土層断面には火床と考えられるわずかな焼土床が検出されその位置が確認されている。平面形態は各壁の隅も整っており東西、南北とも約3mを測る正方形を呈する。電が付設されたと考えられる

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

東壁を基軸にした方位はN-103°-Eを示す。壁の立ち上がりは浅く壁高約18cmを測る。床面は平坦をなすが、踏みしまりは総じて弱い。貯蔵穴は南東隅にあり70×64cmの床面からの深さ約12cmを測る。壁下の溝等は検出されていない。上述したように竈の形態及び規模については不明である。出土遺物は少量で出土状態は散在的である。

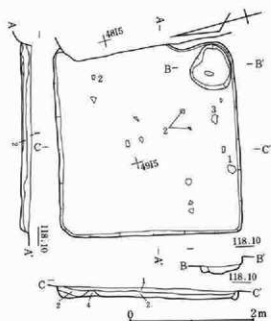


Fig.583 I 30号住居跡

I 30号住居跡貯蔵穴

1 暗褐色土 C軽石を少量含む。

I 30号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む砂質、堅く締りあり。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 砂質。
- 4 黒褐色土 2に似る。

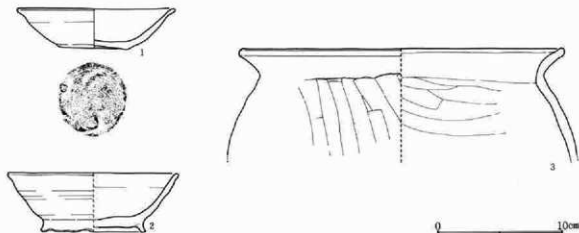


Fig.584 I 30号住居跡出土遺物

I 30号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) □径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
584-1 236-1	須恵器 杯	□~底 片	12.7 × 5.5 × 3.3	南西部南 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①中性・低温 ②浅黄 ③細砂混る
584-2 236-2	須恵器 碗	□~底 片	13.7 × 8.4 × 4.7	中央部床 面散在	轆轤。右回転糸切り。付台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
584-3 236-3	土器 広口壺	□~上 小片	26.0 × - × (9.1)	南東部床 面	紐造。口頸部撫で。体部縦方向寛削り。 内面横方向寛撫で。	①酸化・中温 ②によ い赤褐 ③砂少量混る

I 31号住居跡 (Fig. 585, 586・PL. 237, 238)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.94 × 2.97	N-93.5°-E	東壁やや南寄り	

I 区の南側中央部に位置し、48～50 I 3～5の範囲にある。北東部で30号住居跡と重複しているが、これよりも古い時期の所産であり、東壁及び北壁の一部は消失している。平面形態は隅丸の方形を呈するが、西側はやや膨らみ下膨れを呈する。壁の立ち上がりは浅く約14cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締めりは弱い。竈が付設される東壁を除き各壁下には溝が巡る。溝幅は10～18cm、深さ約10cmを測り明瞭な形をもつ。当住居跡は柱をもつと云われる通例の竅穴住居に伴う柱穴は検出されていないが、北・西・南壁に沿って壁下の溝と重なり、(P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)の穴が穿たれる。穴はその規模にそれほどの差は認められず均一と云える。径約30cm、深さ18～20cmを測る。各穴の間隔はやや異なるもののその配置状態では規則性が認められる。その距離は1.2～1.8mを測る。最も短い間隔はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間で1.2m、最も長い間隔はP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>で1.8mである。これらのいわゆる壁下の溝内に穿たれる小穴と比べ規模及び配置等に違いが見られ機能的に異なる性格のものであろう。住居の上屋構造にかかわる柱穴としての可能性が考えられる。竈は東壁に付設されるが、明瞭な袖部は

設けられず煙道部の検出もなされない。燃焼部幅約40cm・奥行き約50cmを測る。出土遺物は散在して検出されている。

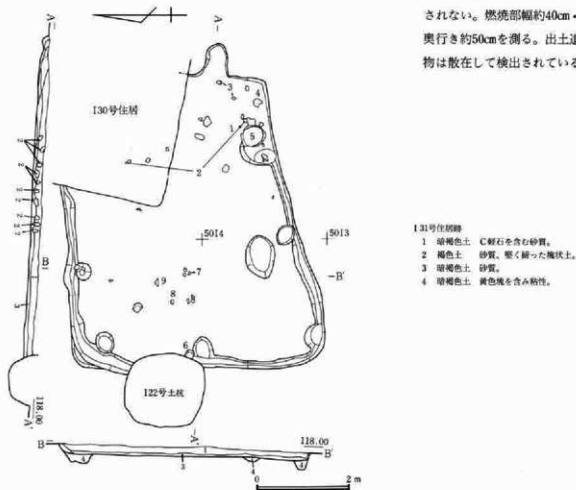


Fig. 585 I 31号住居跡

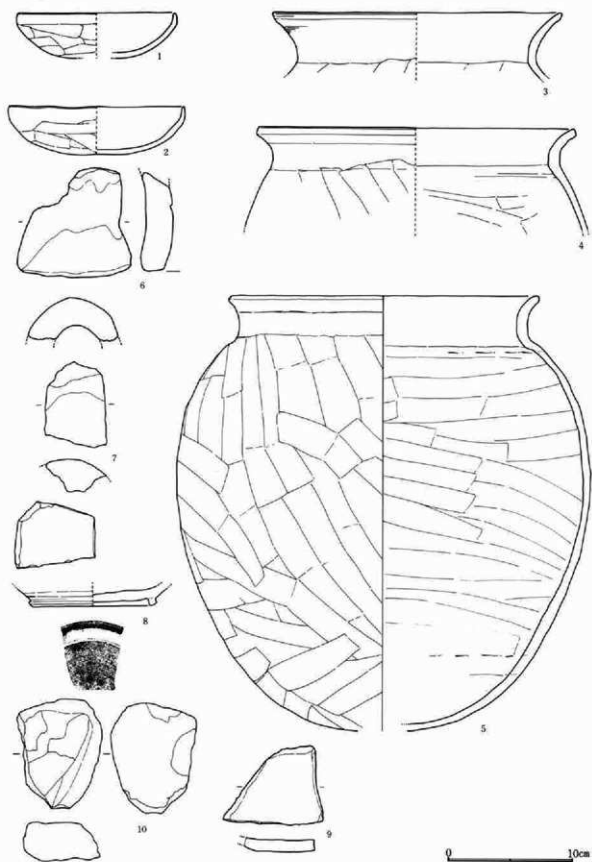


Fig.586 I 31号住居跡出土遺物

I 31号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
586-1 237-1	土師器 杯	口~底 片	12.7 × - × 3.6	南東部 床	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方向瓦削り。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③細砂混る
586-2 237-2	土師器 杯	口~底 片	14.0 × - × 3.8	南東・北 東部 床	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
586-3 237-3	土師器 罍	口~頸 小片	23.2 × - ×( 5.2)	電前床	紐造。口頸部無で。体部横方向瓦削り。	①酸化・良好 ②よい橙 ③細砂混る
586-4 237-4	土師器 罍	口~上 小片	25.3 × - ×( 8.1)	南東部 床	紐造。口頸部無で。体部縦方向瓦削り。内面瓦削り。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③砂混る
586-5 237-5	土師器 罍	口~底 片	24.8 × - × 34.4	南東部 床	紐造。口頸部無で。体部斜~縦方向瓦削り。内面横方向瓦削り。丸底。	①酸化・良好 ②よい橙 ③細砂混る
586-6 238-6	土製品 籬羽口	先~基 片	長 8.7	埋土	棒付、無で。短身型。先端部浴槽物付着。	①酸化・二次還元 ②黒~灰~橙 ③砂混る
586-7 238-7	土製品 籬羽口	中 小片	長( 6.8)	中央部 西 床	棒付、無で。	①酸化・良好 ②黄灰~橙 ③砂混る
586-8 238-8	須恵器・陶 (転用磁石)	底 小片	- × 10.2 ×( 1.6)	中央部 西 床	轆轤。右回転。付高台及び底部横無で。磁石として、断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
586-9 238-9	須恵器 転用磁石		長 6.3 幅 8.0 厚 0.9	西 部 床	壱体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
586-10 238-10	石製品 砥石		長 8.7 幅 6.8 厚 3.1	埋土	扁平円盤。6カ所使用。	角閃石安山岩

I 33号住居跡 (Fig. 587~589・PL. 238)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.89 × 2.27	N-91.5°-E	東壁やや南寄り	

I区の南端西側寄りに位置し、57・58 I 2~4の範囲にある。西側は調査区域外の道路部分にかかり未検出である。また南半は34号住居跡と重複しているがこれより新しい時期の所産である。平面形態は東壁がやや歪み撫で肩になる方形を呈すると考えられる。壁高は約20cmを測りほぼ垂直に近く立ち上がる。床面は起伏がみられ全体に踏み締まりは弱い。貯蔵穴・壁下の溝等の検出はない。竈は東壁を楕円形に小さく掘り込み付設されるが、袖部及び煙道部の作り出しは見られない。掘形面の調査でもその痕跡は認められなかった。燃焼部幅約40cmを測る。出土遺物は少量である。

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

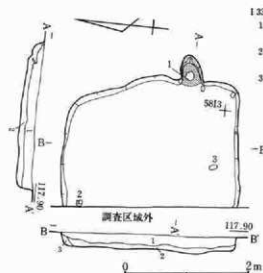


Fig.587 I 33号住居跡

I 33号住居跡

- 1 暗褐色土 黄色土粒・炭化粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒・黄色土粒を含む。1より土粒が粗い。
- 3 暗褐色土 1と似るが、黄色土粒が大量。

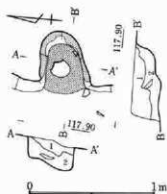


Fig.588 I 33号住居跡

I 33号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・黄褐色土粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・焼。

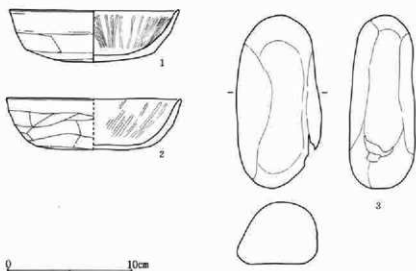


Fig.589 I 33号住居跡出土遺物

I 33号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口徑 × 底徑 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
589-1 238-1	土器 杯	口~底 片	13.6 × 10.3 × 4.1	竈内	紐造巻上。口縁部推で。体部横、底部不定方向貫削り。内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
589-2 238-2	土器 杯	口~底 片	14.0 × 9.0 × 4.1	北西部床面	紐造巻上。口縁部推で。体部横、底部不定方向貫削り。内面放射状暗文残跡。	①酸化・良 ②によい橙 ③緻密
589-3 238-3	石 一	突	長13.7 幅6.9 厚5.2 818.9g	南东部床面	棒状円盤。	輝石安山岩(粗粒)

I 34号住居跡 (Fig. 590~593・PL. 239, 240)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.28 × 3.11	N-80.5°-E	東壁やや南寄り	不整形円形 55 × 55 × 16

I区の南端西寄りに位置し、57・58 I 2・3の範囲にある。住居跡西側は調査区内の道路部分にかかり未検出である。また北側で33号住居跡と重複しており新旧関係はこれより古い時期の所産である。平面形態は南東隅がやや脹らんで丸みを持つがほぼ方形を呈する。壁高は約40cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは比較的良好である。南壁に沿って幅約20cm・深さ約5cmの壁下の溝が廻り東寄りに穿たれる貯蔵穴と考えられる穴に接する。竈は東壁に付設されるが長い煙道部が作り出される。袖部は袖材と考えられる凝灰岩の残欠が検出されているが左右の袖がやや形を異にしている。左袖は住居内に張り出すことなく東壁にそのまま続くのに対し右袖は約50cmの長さをもち住居内に張り出している。平面形態でみられる南東隅の脹らみはこのためと考えられる。燃焼部奥寄りに支脚埋設痕と考えられる穴が穿たれる。袖材間の内法は約60cm、燃焼部奥行きは約50cm、煙道部長さ約1mを測る。土器類の出土状態は散在しているが、竈右前方にある貯蔵穴からは14個ほどの長楕円形の川原石が集中して出土している。

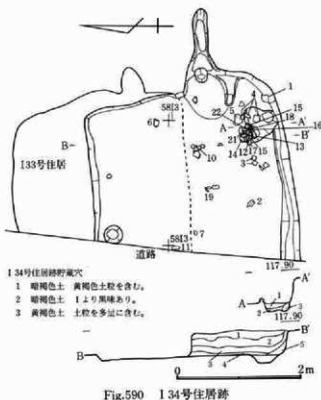


Fig.590 I 34号住居跡

I 34号住居跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒・C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒・炭化粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色土粒を含む。
- 5 暗褐色土

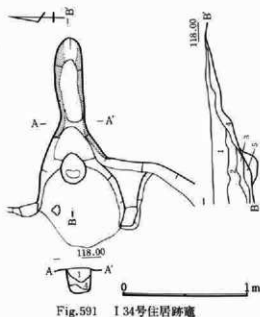


Fig.591 I 34号住居跡竈

I 34号住居跡竈

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒・C軽石・焼土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 焼土塊・灰を含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色土塊を含む。



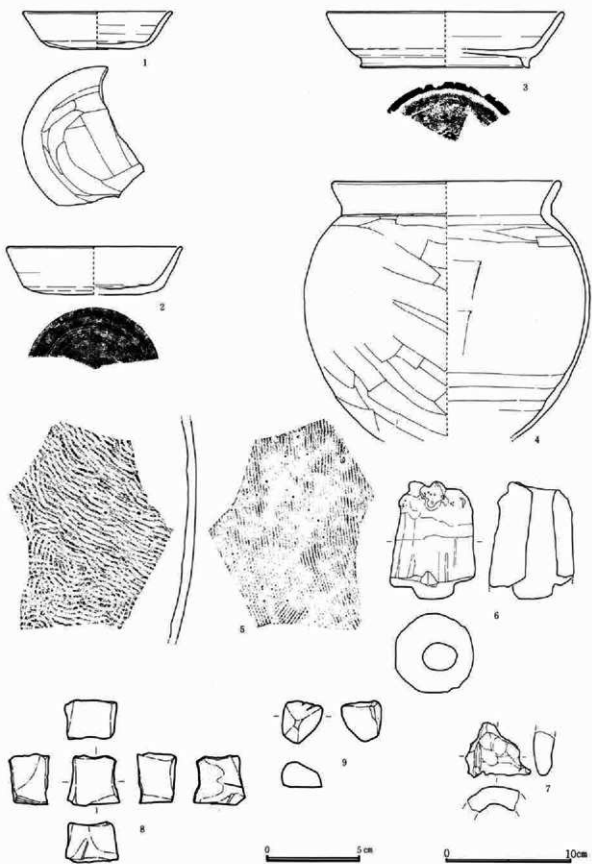


Fig.592 I 34号住居跡出土遺物(1)

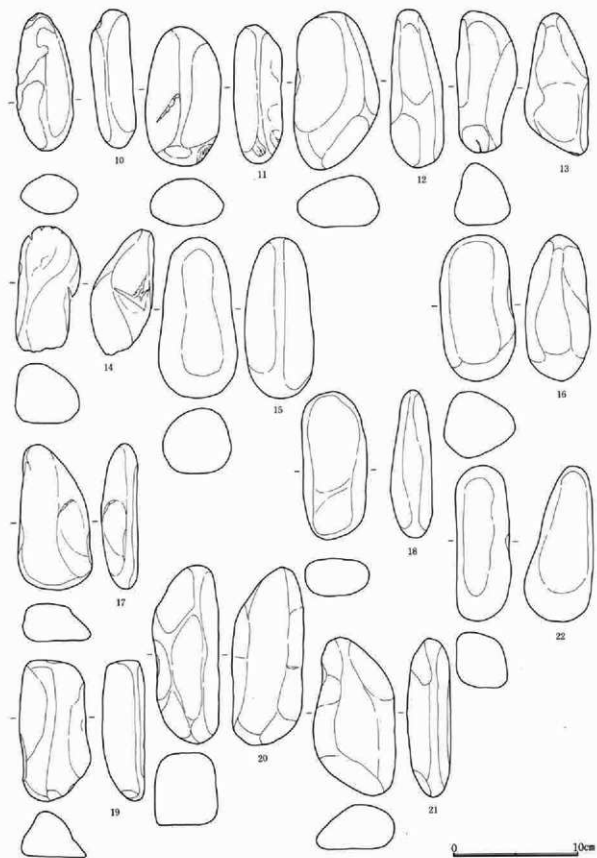


Fig. 593 I 34号住居跡出土遺物(2)

I 34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
592-1 240-1	須恵器 杯	口~底 1/2	12.0 × 8.0 × 3.0	南東部隅 壁下床面	轆轤、右回転貫切り。腰~底部手持莖削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
592-2 240-2	須恵器 杯	口~底 1/2	14.1 × 11.1 × 3.8	南東部P i t埋土	轆轤、右回転。腰~底部回転貫削り。	①還元・良好 ②明紫 灰 ③緻密
592-3 240-3	須恵器 椀	口~底 1/2	19.0 × 13.6 × 4.4	南東部掘 形	轆轤、右回転。底部手持莖削り。付高台 横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
592-4 240-4	土師器 甕	口~下 1/2	18.4 × — × (20.3)	南東部P i t埋土	紐造。口腹部無で。体部横~斜方向貫削り。 内面磨面で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
592-5 240-5	須恵器 甕	体 小片		南東部掘 形	印打。転用認識められず。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
592-6 240-6	土製品 輪羽口	基 片	長(4.1)	西東部掘 形	棒付。縦方向無で。	①酸化・良好 ②橙 ~によい橙 ③細砂混る
592-7 240-7	土製品 輪羽口	先~中	長(9.3)幅 6.2厚 6.3	東東部床 面	棒付。腰で。指押痕顕著。先端部溶解物 付着。	①酸化・二次還元 ②鳴 灰~黄褐色 ③砂混る
592-8 240-8	石製品 砥石		長 2.6 幅 2.7 厚 2.0	埋土	ほぼ全面使用。立方体状。	角閃石安山岩
592-9 240-9	石製品 砥石		長 2.2 幅 2.0 厚 1.3	埋土	ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
593-10 240-10	石	完	長11.0 幅 4.6 厚 3.3 244.4g	南東部掘 形一括	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
593-11 240-11	石	完	長11.1 幅 6.1 厚 3.9 397.8g	西東部掘 形	長円碑。	地質変質岩
593-12 240-12	石	完	長12.5 幅 6.9 厚 4.3 516.5g	南東部掘 形一括	扁平長円碑。	輝石安山岩(粗粒)
593-13 240-13	石	完	長11.2 幅 4.9 厚 5.1 390.5g	南東部掘 形一括	長円碑。	輝石安山岩(粗粒)
593-14 240-14	石	完	長10.5 幅 5.2 厚 4.9 292.3g	南東部掘 形一括	長円碑。	頁岩
593-15 240-15	石	完	長12.8 幅 6.3 厚 5.6 619.6g	南東部掘 形一括	棒状円碑。	輝石安山岩(粗粒)
593-16 240-16	石	完	長11.6 幅 6.0 厚 5.2 543.3g	南東部掘 形一括	長円碑。	輝石安山岩(粗粒)
593-17 240-17	石	完	長11.6 幅 5.9 厚 2.9 296.9g	南東部掘 形一括	扁平長円碑。	ホルンフェルス
593-18 240-18	石	完	長11.8 幅 5.2 厚 3.3 316.6g	南東部掘 形一括	扁平長円碑。	輝石安山岩(粗粒)
593-19 240-19	石	完	長11.2 幅 5.7 厚 3.4 301.8g	中央部掘 形	三角棒状円碑。	溶結凝灰岩

I 34号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
593-20 240-20	石	完	長14.2 幅5.3 厚5.7 596.7#	南東部掘形一括	角棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
593-21 240-21	石	完	長12.6 幅6.6 厚3.5 403.7#	南東部掘形一括	扁平長円礫。	安貫安山岩
593-22 240-22	石	完	長12.3 幅4.5 厚5.5 432.1#	南東部掘形一括	棒状円礫。	輝石安山岩

I 35号住居跡 (Fig. 594、595・PL. 241、242)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.76 × 2.71	N-71°-E	東壁やや南寄り	

I区の南側やや西寄りに位置し、53~55 I 8~10の範囲にある。東西方向に長軸をもつ長方形の平面形態を呈するが、北東および北西隅がやや丸みがある。南東隅は後世の土坑によって消失している。壁高は約28 cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は不規則な窪みが多く平坦ではないが、踏み締まりは比較的良好で

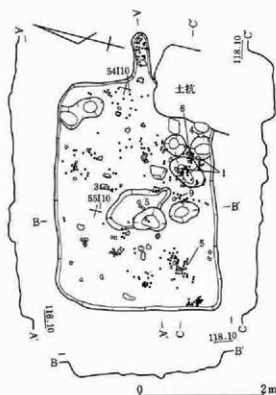


Fig. 594 I 35号住居跡

多量の鍛冶鉾滓が床上あるいは埋土中に分布している。これらには大型品が少なく、多くは鉾滓の中でも残滓として分類される炉壁であろう。また竈の煙道部にもみられ、故意に充填したかのような状況であった。鍛冶工房跡の可能性が考えられたが、竈をはじめ上述した床面の窪みについても工房施設はまったく見いだすことはできず、住居跡破棄の際にこれらを一斉投棄したものと考えられる。壁高は約25cmを測り傾斜をもって立ち上がる。壁下の溝等の諸施設は検出されない。竈は東壁に付設されるが袖部の痕跡もなく、燃焼部にあたる部分の焼土床の状況も不良であった。東壁に突出する部分は竈の煙道部と考えられ、床面より急な立ち上がりをもって浅く、水平に近く延びる。袖部・燃焼部が明確にとらえられることができなかったのは、かなり徹底して竈を破壊したためと考えられる。煙道部長さ約70cm・幅約24cmを測る。出土遺物は鉾滓の他羽口等がある。

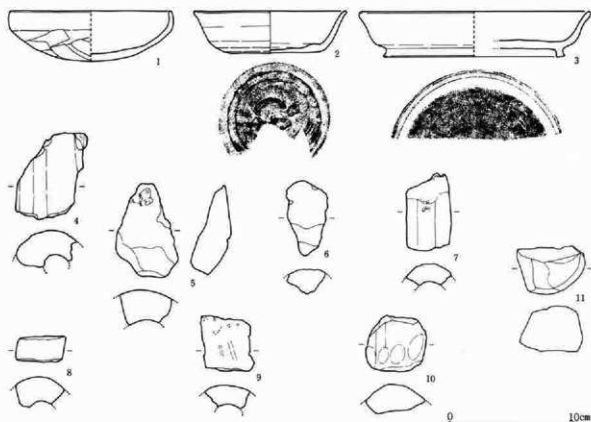


Fig.595 I 35号住居跡出土遺物

## I 35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・mm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
595-1 242-1	土器 杯	口～底 1/2	13.0 × — × 4.0	南央部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向割削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
595-2 242-2	須恵器 杯	口～底 3/4	12.3 × 7.4 × 3.3	埋土	轆轤。右回転切り。腰部～底部回転削 削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
595-3 242-3	須恵器 椀	口～底 1/2	18.5 × 14.4 × 3.6	北央部埋 土	轆轤。右回転。高台及び底部回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③黒粒混る
595-4 242-4	土製品 鞠羽口	中 片	長( 6.8)	南東部埋 土	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ② 灰 ③細砂混る
595-5 242-5	土製品 鞠羽口	中 小片	長( 7.5)	中央部埋 土	棒付。無で。	①酸化・二次還元 ②灰 ～浅黄橙 ③細砂混る
595-6 242-6	土製品 鞠羽口	中 小片	長( 6.0)	南央部埋 土	棒付。無で。溶解部付着。	①酸化・二次還元 ② 黒～橙 ③細砂混る
595-7 242-7	土製品 鞠羽口	先 片	長( 6.1)	埋土	棒付。縦方向無で。先端部溶解部付着。	①酸化・二次還元 ② 灰白 ③細砂混る
595-8 242-8	土製品 鞠羽口	中 片	長( 2.2)	南西部床 面	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ② 灰白 ③細砂混る

I 35号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
595-9 242-9	土製品 罐羽口	先 片	長(4.4)	南東部埋 土	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ② 暗緑灰～黄橙 ③細砂 混る
595-10 242-10	土製品 罐羽口	基 小片	長(4.4)	南西部埋 土	棒付。縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 黒褐～橙 ③細砂混る
595-11 242-11	石製品 砥石		長5.4 幅(3.7) 厚3. 6	埋土	円礫の場。8カ所使用。	角閃石安山岩

I 36号住居跡 (Fig. 596～599・PL. 243～245)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.72 × 2.04	N-88.5°-E	東壁やや南寄り	

I区南部西寄りに位置し、57・56 I 14～16の範囲にある。住居跡の西半は中世以降と考えられる大規模なJ 1号溝によって消失しているため全容を知ることはできない。北側は47号住居跡と、東側は長く延びる甍

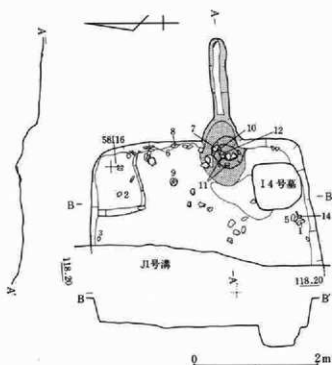


Fig.596 I 36号住居跡

I 36号住居跡甍

- |        |                |
|--------|----------------|
| 1 暗褐色土 | C 軽石・黄褐色土粒を含む。 |
| 2 暗褐色土 | C 軽石・焼土粒を含む。   |
| 3 焼土   | 崩落焼土・灰を含む。     |
| 4 灰層   | 焼土粒を含む。        |

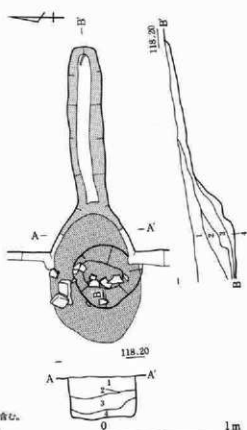


Fig.597 I 36号住居跡甍

煙道部がわずかに59号住居跡と各々重複している。また住居内南東部には近世の土壇墓が重複している。2軒の住居跡との新旧関係は59号住居跡より新しい時期の所産である。47号住居跡との関係は調査段階では明確に得なかったが出土遺物の比較では47号住居跡より古い時期の様相が窺われる。残存する壁は深く壁高約50cmを測り直線的に立ち上がる。床面は凝灰岩質層をその基盤にしているため堅牢である。北東隅部の床面は80×90cm範囲の平面が方形で他の床面より約10cmの高まりをなしている。貯蔵穴・壁下の溝等は検出されていない。竈は東壁に付設され楕円形に掘り込まれわずかに窪む燃焼部から急角度で立ち上がり、水平に近く長く延びる煙道部へと続く。袖部の作り出しはなく、掘形面での調査でも確認出来なかった。燃焼部幅約65cm・奥行き約50cm、煙道部長さ1.25mを測る。遺物は竈内及びその周辺に多く見られるが、土器類の他須恵器片の転用砥石が目立っている。また棒状鉄製品の出土もあるが腐食が著しく図示しえない。

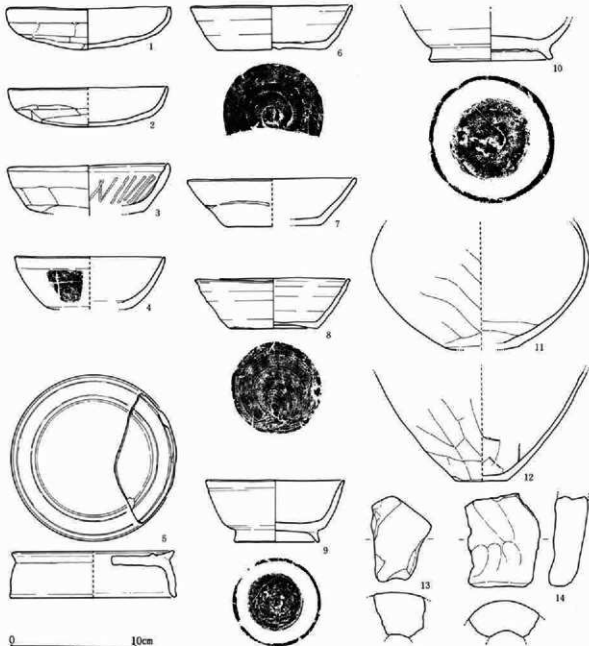


Fig.598 136号住居跡出土遺物(1)

第5章 I区の遺構と遺物

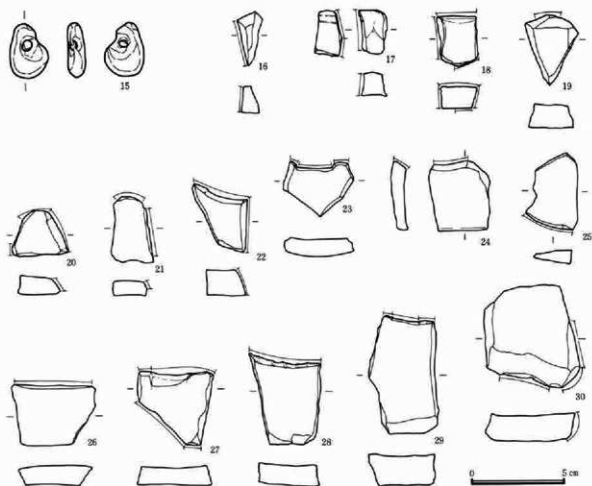


Fig.599 I 36号住居跡出土遺物(2)

I 36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
598-1 244-1	土師器 杯	口～底 欠	13.1 × — × 3.4	南東部兩 壁下床面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向瓦削り。内面指押痕顯著。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
598-2 244-2	土師器 杯	口～底 欠	12.8 × — × 3.1	東央部東 壁下彫形	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向瓦削り。内面指押痕顯著。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
598-3 244-3	土師器 杯	口～底 欠	13.0 × 9.7 × 4.0	北東部東 壁下彫形	紐造。指押。口縁部無で。体部及び底部 粗い瓦削り。内面放射状暗文。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
598-4 244-4	土師器 杯	口～体 欠	12.0 × 6.9 × 4.2	埋土	体部内外、ていねいな無で。体部「+」 瓦削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
598-5 244-5	須恵器 蓋	頂～端 欠	12.9 × 横 — × 3.7	南東部兩 壁下床面	轆轤。右回転。頂部両端瓦削り。轆轤損 で。隅欠損。欠損部厚減成。	①還元・良 ②灰 ③白細粒混る
598-6 244-6	須恵器 杯	口～底 欠	13.0 × 8.7 × 3.5	北東部東 壁下彫形	轆轤。右回転筒切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰 ③緻密



I36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 ③胎土 その他
598-7 244-7	須恵器 杯	口～底 小片	13.6 × 7.8 × 3.7	甕手前床 面	轆轤。右回転。蓋部寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
598-8 244-8	須恵器 杯	口～底 完	12.4 × 7.0 × 4.0	北東部東 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部歪みあり。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
598-9 244-9	須恵器 椀	口～底 完	11.1 × 6.8 × 4.9	北東部床 面	轆轤。右回転寛切り。体部及び底部回転寛削り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
598-10 244-10	須恵器 椀	体～底 完	— × 9.9 × (4.1)	甕手前床 面	轆轤。右回転寛切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
598-11 244-11	土師器 壺	中～下 片	— × — × (10.0)	甕手前床 面	紐造。体部斜方向寛削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る
598-12 244-12	土師器 壺	下～底 片	— × 4.1 × (8.6)	北東部掘 形	紐造巻上。体部斜、底部不定方向寛削り。内面撫で。	①酸化・良好 ②によ い煙 ③細砂混る
598-13 245-13	土製品 鬮羽口 小片	中 小片	長(6.2)	埋土	棒付。撫で。比較的器壁厚い。	①酸化・良好 ②灰白 ～煙 ③細砂混る
598-14 245-14	土製品 鬮羽口 小片	中～基 片	長(7.2)	中央部掘 形	棒付。撫で。指押痕明瞭。端部面取り。	①酸化・良好 ②灰白 ～煙
599-15 245-15	石製品 盃 玉	完	長2.9 幅2.1 厚0.9	甕手前掘 形	扁平小円盤の天然薄部を両面穿孔。	珪質質岩
599-16 245-16	須恵器 転用磁石		長3.8 幅1.0 厚1.4	埋土	断面1カ所使用。	①還元・低温 軟質 ②灰白 ③緻密
599-17 245-17	須恵器 転用磁石		長2.3 幅1.4 厚1.2	埋土	断面2、平面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
599-18 245-18	須恵器 転用磁石		長2.9 幅2.7 厚1.2	埋土	断面3、平面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
599-19 245-19	須恵器 転用磁石		長3.7 幅2.8 厚1.2	埋土	断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
599-20 245-20	須恵器 転用磁石		長2.4 幅3.0 厚1.0	埋土	断面3カ所使用。	①還元・低温 軟質 ②灰白 ③緻密
599-21 245-21	須恵器 転用磁石		長3.5 幅2.2 厚0.7	埋土	断面2カ所使用。1カ所に朱付着。	①還元・良好 軟質 ②灰白 ③緻密
599-22 245-22	須恵器 転用磁石		長3.0 幅3.0 厚1.3	埋土	雙片転用。断面2カ所使用。	①還元・良 ②暗緑灰 ③細砂混る
599-23 245-23	須恵器 転用磁石		長3.1 幅3.9 厚0.8	埋土	断面1カ所使用。定幅使用。	①還元・やや低温 ②灰白 ③緻密
599-24 245-24	須恵器 転用磁石		長3.6 幅3.2 厚0.7	埋土	断面1カ所使用。使用部に朱付着。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
599-25 245-25	須恵器 転用磁石		長4.1 幅2.7 厚0.7	埋土	断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密

I 36号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
599-26 245-26	須恵器 転用磁石		長 3.2 幅 4.5 厚 1.0	埋土	断面1カ所使用。	①還元 ②灰 ③緻密
599-27 245-27	須恵器 転用磁石		長 3.8 幅 4.0 厚 0.9	埋土	断面3カ所使用。1カ所定幅使用。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
599-28 245-28	須恵器 転用磁石		長 4.8 幅 3.8 厚 1.0	埋土	断面1カ所使用。条痕状に6カ所に継分。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
599-29 245-29	須恵器 転用磁石		長 6.3 幅 3.6 厚 1.5	埋土	破片使用。断面1カ所。定幅使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
599-30 245-30	須恵器 転用磁石		長 5.4 幅 5.0 厚 1.4	埋土	破片転用。断面3カ所使用。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密

I 37号住居跡 (Fig. 600, 601・PL. 245, 246)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.67 × 2.05	N—80.5°—E	東壁や南寄り	円形 95 × 75 × 不明

I区の南部西寄りに位置し、57・58 I 16～18の範囲にある。住居跡の西半は、中世以降と考えられるJ 1号溝によって消失しているため、全容は知ることができない。また南側では、47号住居跡と重複しており新旧関係はこれより新しい時期の所産である。壁の立ち上がりは浅く壁高約18cmを測る。床面は細かい凹凸がみられるが、総じて平坦で踏み締まりは良好である。壁下の溝は検出されない。竈は東壁に付設され、

方形に掘り込まれて若干窪みをなす燃焼部から、短く突出した煙道部へ急角度で続く。袖部は検出されず掘り面でも確認出来なかった。燃焼部幅約75cm・奥行き約55cm、煙道部長さ約30cmを測る。出土遺物は、竈前面に設けられた貯蔵穴内とその周辺に多く検出されている。

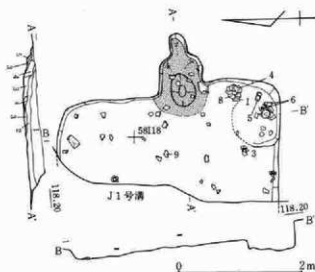


Fig.600 I 37号住居跡

I 37号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 灰・焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 焼土塊。
- 5 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

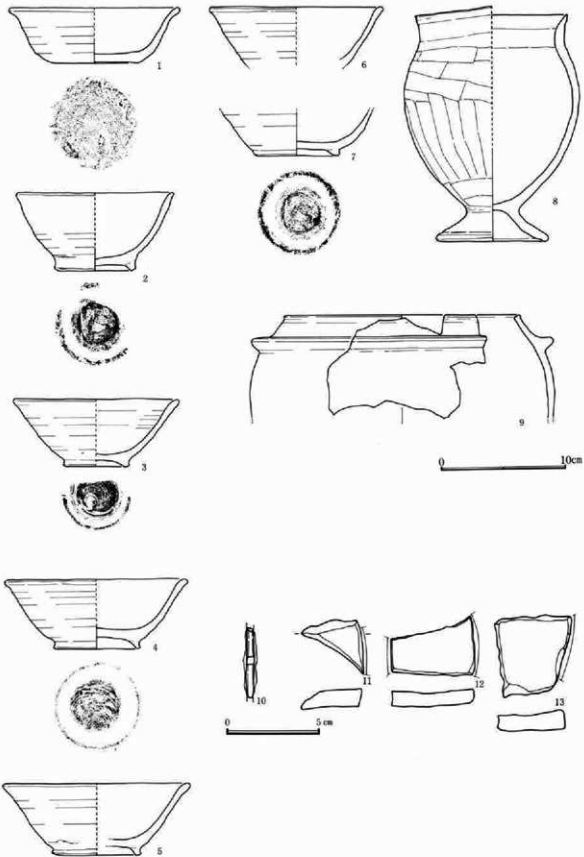


Fig.601 I 37号住居跡出土遺物

第5章 I区の遺構と遺物

I 37号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・#) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
601-1 246-1	酒 恵 器 杯	口～底 片	13.7 × 7.0 × 4.4	南東部電 南脇床面	轆轤。右回転永切り。無調整。	①還元・低温 ②灰 ③砂混る
601-2 246-2	酒 恵 器 椀	口～底 片	12.6 × 6.6 × 6.2	南東部電 南脇床面	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。	①還元・低温 ②褐灰 ③砂混る
601-3 246-3	酒 恵 器 椀	口～底 片	13.3 × 5.3 × 5.4	南東部床 面	轆轤。右回転永切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
601-4 246-4	酒 恵 器 椀	口～底 片	14.7 × 7.0 × 5.5	南東部電 南脇床面	轆轤。右回転永切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
601-5 246-5	酒 恵 器 椀	口～底 片	15.0 × 7.2 × 5.7	貯蔵穴内	轆轤。右回転永切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②にお い橙 ③細砂混る
601-6 246-6	酒 恵 器 椀	口～体 片	14.0 × — × (4.6)	貯蔵穴内	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
601-7 246-7	酒 恵 器 椀	体～底 片	— × 6.8 × (3.4)	中央部床 面	轆轤。右回転永切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②灰黄 ③細砂混る
601-8 246-8	土 師 器 台付壺	口～底 片	12.2 × 9.0 × 18.6	南東部電 南脇床面	組造。口頸部及び台部撫で。体部上位横、 中下位縦方向直削り。口縁歪む	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
601-9 246-9	羽 釜 小片	口～上 片	18.9 × — × (8.1)	中央部床 面	組造。内外横撫で。	①加酸化還元・低温 ②におい黄橙 ③細砂混る
601-10 246-10	鉄 製 品 釘?		長(3.7) 幅0.4	埋 土	内釘	
601-11 246-11	酒 恵 器 転用磁石		長 3.3 幅 2.8 厚 1.0	埋 土	杯頸片転用。断面1カ所使用。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る
601-12 246-12	酒 恵 器 転用磁石		長 4.4 幅 3.1 厚 0.8	埋 土	壺体部片使用。断面2カ所転用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
601-13 246-13	酒 恵 器 転用磁石		長 4.1 幅 4.1 厚 0.9	埋 土	壺体部片使用。断面1カ所使用。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る

I 38号住居跡 (Fig. 602)

I 区の北西部に位置し、46～48 I 44～46の範囲にある。東側で60号住居跡と、また北側に接して2号鍛冶工房跡と重複している。新旧関係は60号住居跡・2号鍛冶工房跡の両者より古い時期の所産である。60号住居跡との重複のため東壁から住居中央部にかけては消失している。平面形は南北に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、南北長約5.5cm、東西長約4mを測る。残存している壁には電の付設はなく、60号住居跡によって消失した東壁にあつたと考えられる。東壁に電の付設を想定した場合の主軸方向はN-83°-Eを示す。壁の立ち上がりは浅く壁高約10cmを測る。床面は凝灰岩質層を基礎にするため極めて堅牢である。遺物は土器類の出土はなく、鍛冶関係の錠跡がわずかに見られたのみである。

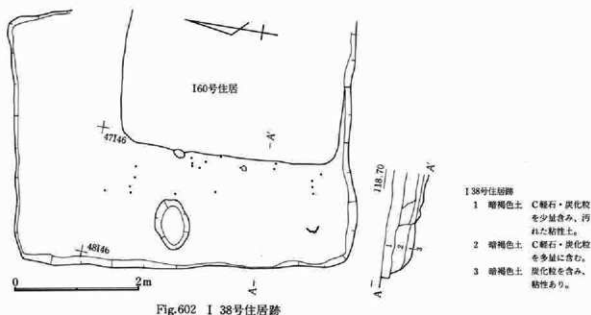


Fig.602 I 38号住居跡

I 39号住居跡 (Fig. 603, 604・PL. 247)

I区の中央部東よりに位置し、42・43 I 29~31の範囲にある。住居跡の南側で40号住居跡と重複しておりこれより古い時期の所産である。また北側に近接して7号住居跡が位置するが、当住居跡東壁の確認が不明瞭で、重複の状況を明確にすることはできなかった。さらに西半は調査が2期に渡り、7号墓跡との重複から

全容を明らかにできず、竈周辺だけの検出となってしまった。竈は東壁に付設されるが、平面形態が通例のものとはやや異なる。焼土帯がほぼ円形に回り、わずかに西で跡切れて開口する。開口部の右端には凝灰岩の加工材が埋設され、袖部を作っている。円形の焼土帯は焼土化の度合いが弱く、内部は崩落焼土及び灰層で埋まり、火床に相当するような面は形成されていない。竈は1号・4号鍛冶工房跡との中間地点に位置しており、これらと性格が通

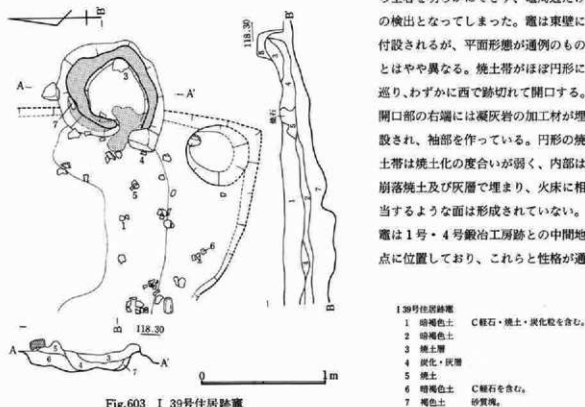


Fig.603 I 39号住居跡

第5章 I区の遺構と遺物

ずるような遺構とも考えられるが明らかでない。焼土帯径約70cm・深さ約20cmを測る。出土遺物は少なく、甕の機能を含め、当跡の様相を窺えるべきものはない。

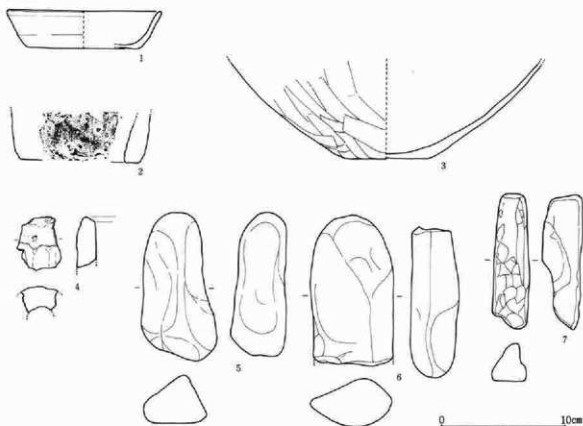


Fig.604 I 39号住居跡出土遺物

I 39号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存址	計測値(cm・R) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
604-1 247-1	酒壺 杯	口～底 片	12.4 × 9.0 × 3.0	甕手前散 在	轆轤。右回転。底部蹴削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
604-2 247-2	不明	下 小片	— × 9.3 × (3.6)	埋土	紐造。縦方向粗いはげ目。内面削で、吸 灰処理。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
604-3 247-3	土器 壺	下～底 片	— × 6.6 × (7.6)	甕内	紐造。体部縦、底部不定方向蹴削り。球 形型。	①酸化・良好 ②灰褐 ③細砂混る
604-4 247-4	土製品 織羽口	先 片	長(4.0)	甕内袖石 脇	棒状。縦方向削で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②褐灰 ③細砂混る
604-5 247-5	石	完	長11.8 幅 6.1 厚 4.5 365.3R	甕内	三角棒状円錐。	溶結凝灰岩
604-6 247-6	石		長(12.0)幅 6.6 厚 3.8 399.8R	中央部埋 土	扁平長円錐。一端欠損。	輝石安山岩(粗粒)
604-7 247-7	石		長10.8 幅 3.0 厚 3.2 140.0R	中央部床 面	三角棒状円錐。一部欠損。	輝石安山岩(粗粒)

## I40号住居跡 (Fig. 605, 606・PL. 247)

I区の中央部東寄りに位置し、42・43 I 29・30の範囲にある。住居跡南側は10B号住居跡と、北側は39号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は両者より新しい時期の所産である。調査が2期に渡ったことや土層識別の難解さと、重複の繁雑さから平面形態を追及することができなかった。検出は竈部分に止どまった。竈も遺存状態が不良で、燃焼部と右袖部分だけを検出した。袖部は住居内に張り出し、先端部に凝灰岩の加工材を埋設する。煙道部の作り出しはない。推定燃焼部幅約50cm・奥行き60cm、袖部長さ約30cmを測る。出土遺物は少量である。

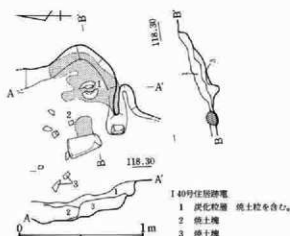


Fig.605 I 40号住居跡画

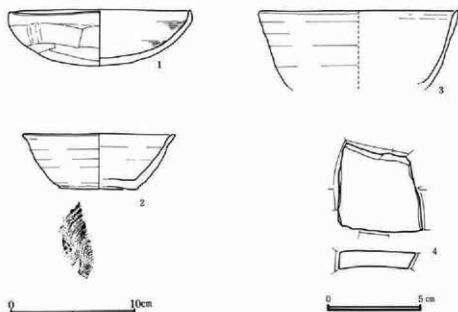


Fig.606 I 40号住居跡出土遺物

## I 40号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
605-1 247-1	土師器 杯	口~底 光	14.6 × — × 4.5	竈内	紐造巻上凸。口縁部及び内面無塗。体底部横~不定向方向彫り。	①炭化・良好 ②にぶ ③胎土 ④細砂混る
605-2 247-2	須恵器 杯	口~底 片	12.2 × 6.4 × 4.4	竈手前散 在	縦縞。右部転米切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
605-3 247-3	須恵器 碗	口~体 小片	16.0 × — × (6.0)	竈手前散 在	縦縞。右部転。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
605-4 247-4	須恵器 転用砥石		長 4.5 幅 4.5 厚 0.8	竈手前埋 土	突体部片転用。断面5ヶ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

I 41号住居跡 (Fig. 607~609・PL. 248)

I区中央部西寄りに位置し57 I 20・21の範囲にある。住居跡の西側ほとんどはJ 1号溝によって、また南東隅は後世の土坑によって消失している。平面形態は方形が想定され、竈を付設する東壁を基線にする主軸方位はN-94'-Eである。東壁長は約2.4cmを測る。壁高は約30cmを測りやや角度をもって立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。竈は東壁にあり、楕円形に掘り込まれた燃焼部から煙り出し孔と考えられる短い凸部が作り出される。袖部の検出はないが、燃焼部内と竈前方に凝灰岩の加工材が出土しており、本来埋設され袖部を形成していたものと考えられる。燃焼部幅約60cm・奥行き約55cm、煙り出し孔と考えられる凸部は燃焼部より約20cm突出する。出土遺物は少ないが、竈内及びその周辺に検出されている。

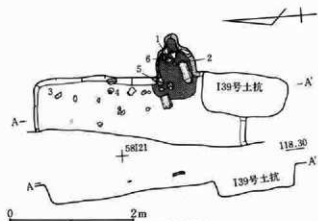


Fig.607 I 41号住居跡

I 41号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1よりC軽石の量が少なく、茶味を帯びる。
- 3 焼土塊
- 4 灰層
- 5 暗褐色土 焼土粒を含む。

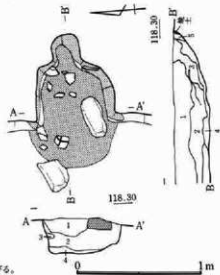


Fig.608 I 41号住居跡竈

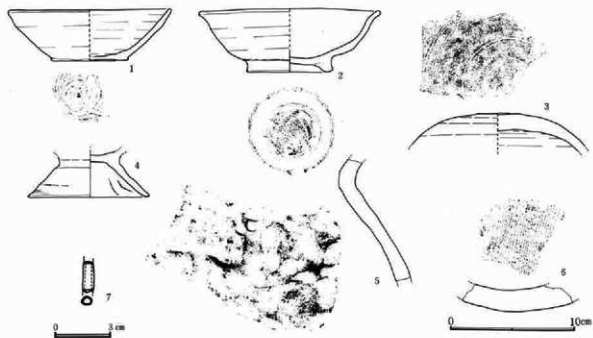


Fig.609 I 41号住居跡出土遺物



I 41号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
609-1 248-1	須恵器 杯	口～底 片	13.1×6.2×4.1	竈内埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
609-2 248-2	須恵器 椀	口～底 片	14.6×6.9×5.0	北東部東 壁下埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台轆轤で。口 縁部やや歪む。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
609-3 248-3	須恵器 (蓋?)	頂 片	—×—×(2.9)	北東部隅 寄床面	轆轤。右回転。回転距離不明。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
609-4 248-4	土師器 台付壁	台 片	—×9.7×(3.6)	北東部東 壁下床面	組造。摺押、捺で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
609-5 248-5	須恵器 小片	上 片	—×—×(9.0)	竈内埋土	組造。叩打。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
609-6 248-6	瓦 平瓦小片		厚1.3	竈内埋土	轆轤。叩打。上面布目肌。下面捺で。	①還元・良 ②灰 ③砂混る
609-7 248-7	鉄製品		長(1.7) 径0.5	埋土		

I 42号住居跡 (Fig. 610～612・PL. 249、250)

平面形	規模(長軸×短軸)m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ)cm
隅丸方形	3.77×3.21	N—87°—E	東壁やや南寄り	

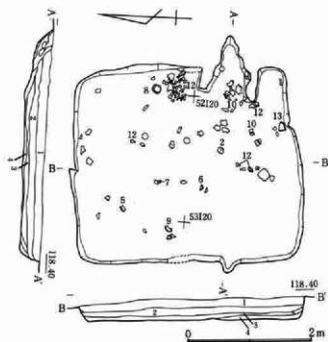


Fig.610 I 42号住居跡

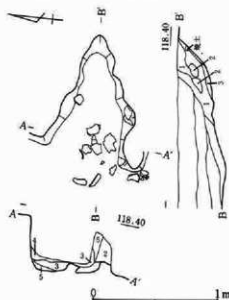


Fig.611 I 42号住居跡

- |          |             |
|----------|-------------|
| I 42号住居跡 | I 42号住居跡    |
| 1 暗褐色土   | C 軽石を多量に含む。 |
| 2 暗褐色土   | 1よりC軽石が少ない。 |
| 3 暗褐色土   | 褐色味が強い。     |
| 4 暗灰褐色土  |             |
|          | I 42号住居跡    |
|          | 1 崩落焼土      |
|          | 2 焼土        |
|          | 3 崩落硬土      |
|          | 4 灰層        |
|          | 5 焼土        |

第5章 I区の遺構と遺物

I区のほぼ中央部に位置し、51~53 I 19・20の範囲にある。南半で45号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。壁高は約34cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴や壁下の溝等は検出されない。竈は東壁に付設され、袖部が住居内に張り出す形態をもつ。平面形からは、燃烧部と煙道部あるいは煙出し孔の区別はなく三角形に掘り込まれる。焚口部がやや窪み、緩く傾斜をもつ燃烧部をへて、急角度で煙り出し孔に至る。袖部の補強材にはやや粘性のある暗褐色土を用いて形成されている。袖部長さ約40cm・袖間内法約55cm、焚口部から先端までの長さ約1mを測る。出土遺物は比較的多いが、散在して検出されている。

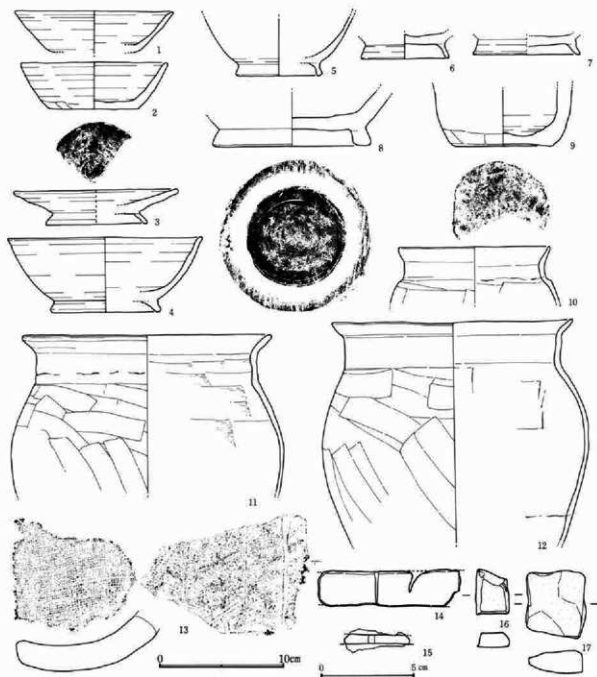


Fig.612 I 42号住居跡出土遺物

I 42号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
612-1 249-1	須恵器 杯	口～体 片	12.8 × 7.0 × 3.2	遺構外西 埋土	轆轤。右回転。	①還元・良好 軟質 ②褐色 ③緻密
612-2 249-2	須恵器 杯	口～底 片	11.8 × 7.2 × 3.8	中央部埋 土	轆轤。右回転寛切り。腰部手持腕有り。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
612-3 249-3	須恵器 皿	口～底 小片	13.2 × 8.2 × 2.7	掘形	轆轤。右回転余切り。付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
612-4 249-4	須恵器 椀	口～底 片	15.6 × 8.9 × 5.9	埋土	轆轤。右回転余切り。付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
612-5 249-5	須恵器 椀	体～底 片	— × 7.0 × (4.6)	北西部埋 土	轆轤。右回転余切り。付高台横断で。	①加酸化還元・良好 ②暗灰黄 ③細砂混る
612-6 249-6	須恵器 椀	底 片	— × 7.1 × (1.9)	中央部埋 土	轆轤。右回転余切り。付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
612-7 249-7	須恵器 椀	底 片	— × 8.6 × (1.5)	中央部埋 土	轆轤。右回転。付高台及び底部横断で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
612-8 250-8	須恵器 壺(転用椀)	底	— × 12.7 × (4.2)	東中央部東 壁寄埋土	高部内板、紐造。轆轤。右回転。付高台 横断で。底部、転用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
612-9 249-9	須恵器 瓶	下～底 片	— × 8.0 × (4.5)	西西部床 面	紐造。轆轤。右回転。横断で。腰部横、 底部不定方向手持腕有り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
612-10 250-10	土師器 甕	口～上 片	12.1 × — × (4.5)	窠内～南 東部敷在	紐造。口頸部無で。体部横方向腕有り。 内面寛断で。	①酸化・良好 ②暗赤 褐 ③細砂混る
612-11 250-11	土師器 甕	口～中 片	20.0 × — × (12.5)	窠内	紐造。口頸部無で。体部横～斜方向腕有 り。内面寛断で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
612-12 250-12	土師器 甕	口～下 片	19.2 × — × (17.5)	窠・龜脇 床面敷在	紐造。口頸部無で。体部横～斜方向の粗 い腕有り。内面寛断で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
612-13 250-13	瓦 平瓦	小片	厚 2.1	南東部南 壁寄埋土	轆轤、叩打。上面布目直、下面寛断で。 端部2段面取り。下面「×」貫抜き。	①加酸化還元・良好 ②にぶい黄褐 ③砂混る
612-14 250-14	鉄製品		長(7.5) 幅1.7	埋土	利器?	
612-15 250-15	鉄製品		長(3.5) 厚0.5×0.3	埋土		
612-16 250-16	須恵器 転用磁石		長 2.4 幅 1.7 厚 0.7	埋土	煮煉体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
612-17 250-17	須恵器 転用磁石		長 3.5 幅 3.1 厚 1.2	埋土	煮煉体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

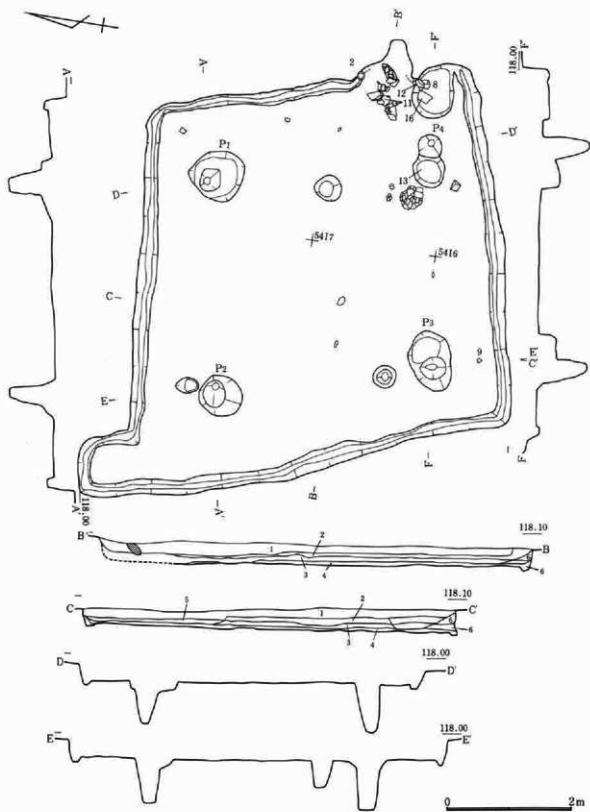


Fig.613 Ⅰ43号住居跡

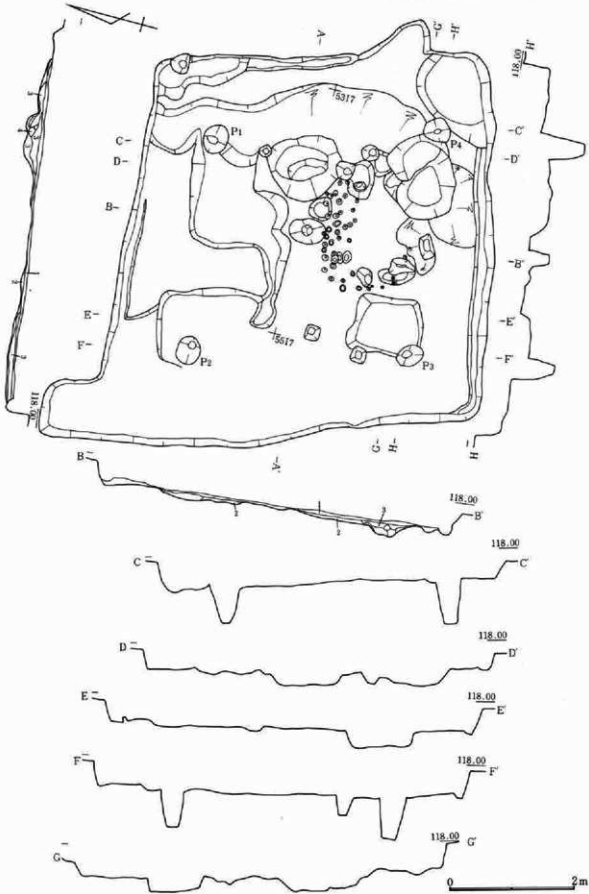


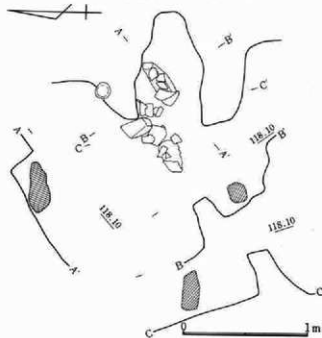
Fig.614 I 43号住居跡掘形

第5章 I区の遺構と遺物

I 43号住居跡 (Fig. 613~617・PL. 250~252)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形 張り出し部	6.38 × 6.24 1.27 × 90	N-75°-E	東壁やや南寄り	楕円形 82 × 67 × 20

I区南側中央部に位置し、52~56 I 58の範囲にある。住居跡南東部で25号住居跡と重複しており、新旧関係はこれより古い時期の所産である。平面形態は西側に向かってやや裾広がりの方角をとる方形を呈する。また北西部隅で北壁が張り出す、いわゆる張り出し部を有する住居跡である。張り出し部は東西幅約1mで北壁から1m程度北へ突出している。壁の立ち上がりは良好で、壁高約34cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦をなし比較的良好な踏み締まりをみせる。張り出し部を含め各壁には、壁下の溝が跡切れることなくかなり明瞭な状態で巡る。溝内には小穴等の痕跡は見あたらない。柱穴と考えられる穴が4個所に検出されている(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。これらの柱穴には被う形かあるいは接するように浅い落ち込みがあり、掘形か柱材の抜き取り痕かは判断としないが、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>からは抜き取り痕の可能性が窺われる。各柱穴は平面形・柱痕形ともに円形を呈する。P<sub>1</sub>は径約30cm・深さ約68cm。P<sub>2</sub>は径36×40cm・深さ約72cm。P<sub>3</sub>は径約40cm・深さ約80cm。P<sub>4</sub>は径約40cm・深さ約78cmを測る。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱間は3.25m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は3.5m、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は3.55m、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は3.65mを測る。電は東壁に付設され、袖部が住居内に張り出す形態をとる。多少破損していると考えられ左袖先端には凝灰岩の加工材が埋設されるが、左袖には検出されない。電内や周辺には用材が散乱している。燃焼部・煙道部の区別は不明瞭で三角形の先細りの形態をもつ。袖部長さは左袖約50cm、右袖約55cmを測る。推定内法は約50cmで燃焼部との差はなく、焚口からの奥行き約95cmを測る。掘形調査では床下は粘性のある白色土粒混りの暗褐色土を5~8cmほどの厚さに敷きつめている。掘形面はかなり凹凸が認められ、土坑と考えられる落ち込みも数個検出されている。また電前面の住居跡中央部近くには、東西に長く1.7mの範囲に焼土化した径5~6cm大の小穴群が検出されている。この小穴群には規則性を見い出すことはできず、性格・機能については不明である。遺物は比較的多量に検出されているが埋土中からの出土も多い。



- I 43号住居跡
- 1 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を多量に含み、土粒が粗い。
  - 2 黄褐色土 灰土・黄褐色土粒を含み、堅く締る。
  - 3 暗褐色土 C 軽石を含み、土粒が粗い。
  - 4 暗褐色土 炭化粒・C 軽石を少量含む。
  - 5 暗褐色土 C 軽石を含み、土粒が粗い。
  - 6 暗褐色土

- I 43号住居跡掘形
- 1 暗褐色土 白色粘土塊を含む。
  - 2 暗褐色土 黄褐色粘土塊を含む。
  - 3 暗褐色土 白色塊・焼土粒を含む。
  - 4 暗褐色土 灰色砂岩塊。

Fig.615 I 43号住居跡電

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

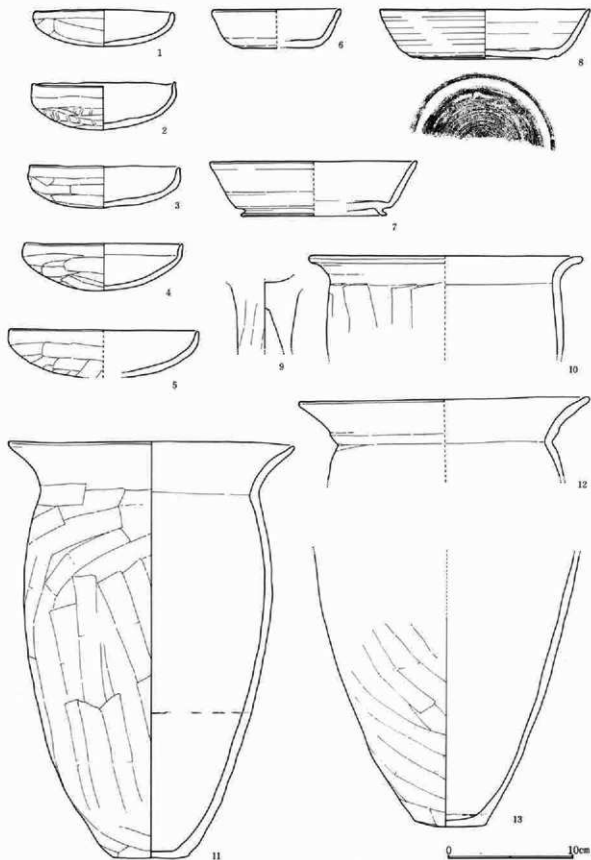


Fig.616 I43号住居跡出土遺物(1)

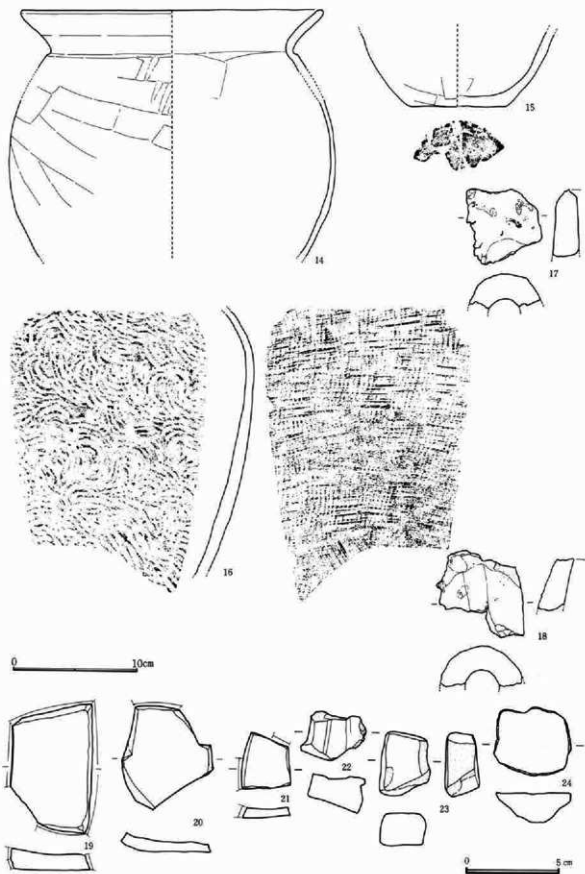


Fig.617 I 43号住居跡出土遺物( 2 )



I 43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
616-1 251-1	土 師 器 杯	口~底 片	11.2 × -- × 2.9	Pit内 埋土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向寛削り。劣化顯著。	①酸化・良 ②橙 ③細砂混る
616-2 251-2	土 師 器 杯	口~底 完	11.5 × -- × 3.8	竈北脇埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方 向寛削り。内面指押痕明瞭。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
616-3 251-3	土 師 器 杯	口~底 片	12.1 × -- × 3.4	掘形Pit 埋土	指押。口縁部及び内面、強い無で。体部 横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
616-4 251-4	土 師 器 杯	口~底 完	12.7 × -- × 3.8	竈 内	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ①によ い橙 ③細砂混る
616-5 251-5	土 師 器 杯	口~底 片	15.2 × -- × (3.8)	掘形Pit 埋土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
616-6 251-6	須 恵 器 小片	口~底 小片	10.4 × 5.7 × 3.1	埋 土	轆轤。右回転。腰部~底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
616-7 251-7	須 恵 器 椀	口~底 片	16.6 × 11.7 × 4.4	掘形Pit 埋土	轆轤。右回転。体部下半~底部回転削 り。付高台横線で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
616-8 251-8	須 恵 器 椀	口~底 片	16.8 × 11.6 × 4.0	竈南袖脇 埋土	轆轤。右回転。底部~高台回転削り。 削出し高台極小。	①還元・良 やや軟質 ②灰白 ③砂混る
616-9 251-9	土 師 器 高 杯	脚 片	-- × -- × (5.5)	竈南袖脇 埋土	紐造。縦方向寛削り。	①酸化・良好 ①によ い橙 ③細砂混る
616-10 251-10	土 師 器 土 壺	口~上 片	21.9 × -- × (7.9)	掘形Pit 埋土	紐造。口頸部無で。体部縦方向寛削り。 内面寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
616-11 251-11	土 師 器 土 壺	口~底 完	22.9 × 6.0 × 33.0	竈 内	紐造。口頸部無で。体部上位横~斜、中 ~下位縦、底部不定方向寛削り。内面寛 削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
616-12 251-12	土 師 器 土 壺	口~上 小片	23.2 × -- × (6.3)	南東部床 面	紐造。口頸部無で。体部寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
616-13 251-13	土 師 器 土 壺	中~底 片	-- × 5.7 × (21.6)	竈 内	紐造。体部斜、底部不定方向寛削り。内 面寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
617-14 252-14	土 師 器 土 壺	口~中 片	24.2 × -- × (19.6)	竈内埋土	紐造。体部横~斜方向寛削り。内面寛削 り。球形型。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
617-15 252-15	土 師 器 土 壺	下~底 片	-- × 7.7 × (5.8)	掘形Pit 埋土	紐造。体部寛削り後無で。内面寛削り。 底部木炭痕。	①酸化・良好 ①によ い黄橙 ③細砂少混る
617-16 252-16	須 恵 器 土 壺	体 小片		貯蔵穴埋 土	紐造。印打。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
617-17 252-17	土 製 品 籬 羽 口	先 片	長(6.0)	掘形Pit 埋土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
617-18 252-18	土 製 品 籬 羽 口	先 片	長(6.9)	埋 土	棒付、縦方向無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②青灰 ③細砂混る
617-19 252-19	須 恵 器 転用磁石		長6.9 幅4.3 厚0.8	埋 土	壺類体部片転用。断面4カ所使用。	①還元・高温 良好 ②灰 ③細砂少混る

I 43号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
617-20 252-20	須恵器 転用磁石		長 5.5 幅 4.8 厚 0.5	埋土	杯類底部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③黒粒混る
617-21 252-21	須恵器 転用磁石		長 3.0 幅 2.6 厚 0.5	埋土	小型壺類体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
617-22 252-22	石製品 磁石		長 2.6 幅 3.4 厚 1.1	埋土	角礫状にはほぼ全面使用。	角閃石安山岩
617-23 252-23	石製品 磁石		長 3.4 幅 2.8 厚 1.7	埋土	角礫状に5カ所使用。	角閃石安山岩
617-24 252-24	石製品 磁石		長 3.6 幅 4.1 厚 1.6	埋土	小円礫の約半分を使用済み。	角閃石安山岩

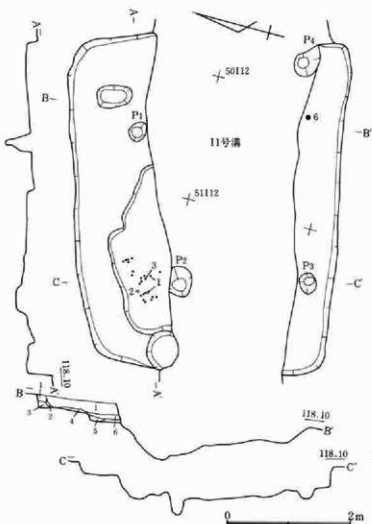


Fig.618 I 44号住居跡

I 44号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 2 赤褐色土 鉄分。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む粘性土。
- 4 黒褐色土 Iに比べC軽石は少なく粘性土。
- 5 暗褐色土 C軽石を少量含む、締りなし。
- 6 暗褐色土 硬質の砂質土。

## I 44号住居跡 (Fig. 618, 619・PL. 252)

I 区の南側中央部に位置し、49～52 I 11～13の範囲にある。当区を東西に横断する1号溝によって、住居跡中央部は東西に分断されている。平面形態は西側にわずかに窄まるが、東西に長軸をもつ長方形を呈する。規模は南・北壁長さ約5.2m、東壁約4.4m、西壁約3.6mを測る。壁高は約20cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面の遺存状態がわるく踏みしまりも弱い。床面には6個の穴が検出されているが、柱穴と考えられるものはP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>である。P<sub>1</sub>は径約30cm・深さ約40cm、P<sub>2</sub>は径48cm・深さ約60cmでP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱間は2.5mを測る。他の穴は位置及び規模から柱穴とは考えられない。北西部に不整形な落ち込みが検出され、小粒な磁滓が出土しているが性格は不明である。竈・灰跡等の検出はなく、出土遺物は少ない。

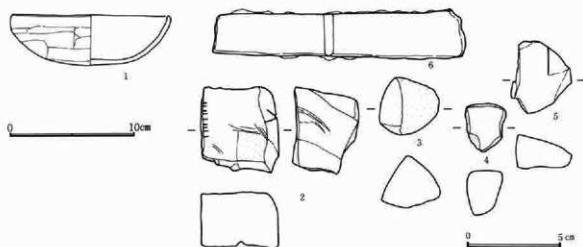


Fig.619 I 44号住居跡出土遺物

## I 44号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
619-1 252-1	土師器 杯	口～底 片	12.8 × — × 4.0	北西部掘 形埋土	指押。口縁部及び内面削で。体部横、底 部不定方向瓦削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂流る
619-2 252-2	石製品 砥石		長 4.5 幅 4.2 厚 3.0	北西部掘 形埋土	角礫状に全面使用。	角閃石安山岩
619-3 252-3	石製品 砥石		長 3.0 幅 3.2 厚 2.7	北西部掘 形埋土	小円礫の約半を使用。	角閃石安山岩
619-4 252-4	石製品 砥石		長 2.6 幅 2.2 厚 2.3	北西部掘 形埋土	小円礫の1カ所使用。	角閃石安山岩
619-5 252-5	石製品 砥石		長 3.8 幅 3.2 厚 1.8	北西部掘 形埋土	角礫状に5カ所使用。	角閃石安山岩
619-6 252-6	鉄器		長13.2 幅 2.5 厚 0.5	南東部 床	板状	

I 45号住居跡 (Fig. 620~623・PL. 253~255)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	座 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.63 × 3.31	N—91°—E	東壁やや南寄り	楕円形 85 × 50 × 20

I区のほぼ中央部に位置し、51~53 I 18~20の範囲にある。北半のほとんどは42号住居跡とまた南側は84号住居跡と重複しており、42号より旧く84号より新しい時期の所産である。42号住居跡より掘形がやや深いため北半の形態を確認できた。壁高は約36cmを測り直線的に立ち上がる。床面は4~5cmの高低で凹凸が著しいが踏み締まりは良好である。壁下の溝は検出されていないが、南東部に長楕円形の貯蔵穴が設けられる。竈は東壁に付設され、袖部がわずかに住居内へ張り出す。燃焼部はほぼ楕円形に掘り込まれ、煙道部の作り出しはない。袖部先端には左右とも用材が埋設されており、左袖には凝灰岩の加工材を、右袖には長頭形の川原石を各々埋設している。袖材間内法は約5.6cm、竈燃焼部約65cm・奥行き約75cmを測る。出土遺物は量・種類とも比較的豊富で、土器類の他鉄器・須恵器片の転用砥石・羽口・土製の埴輪などがある。

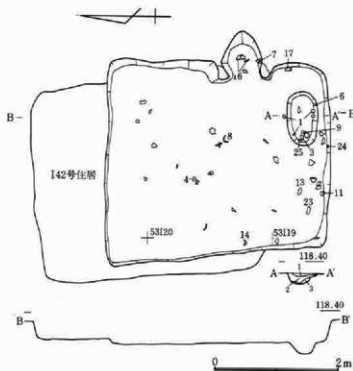


Fig.620 I 45号住居跡

I 45号住居跡貯蔵穴

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒を含み、砂りあり。
- 2 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 暗灰褐色土

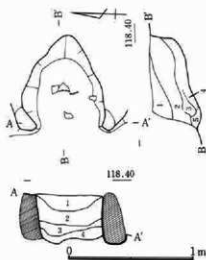


Fig.621 I 45号住居跡竈

I 45号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒・C粒石を少量含む。
- 2 1と似るが、焼土粒多い。
- 3 灰層 焼土粒を含む。
- 4 焼土塊・灰を含む。
- 5 褐色土 焼土粒を含む。

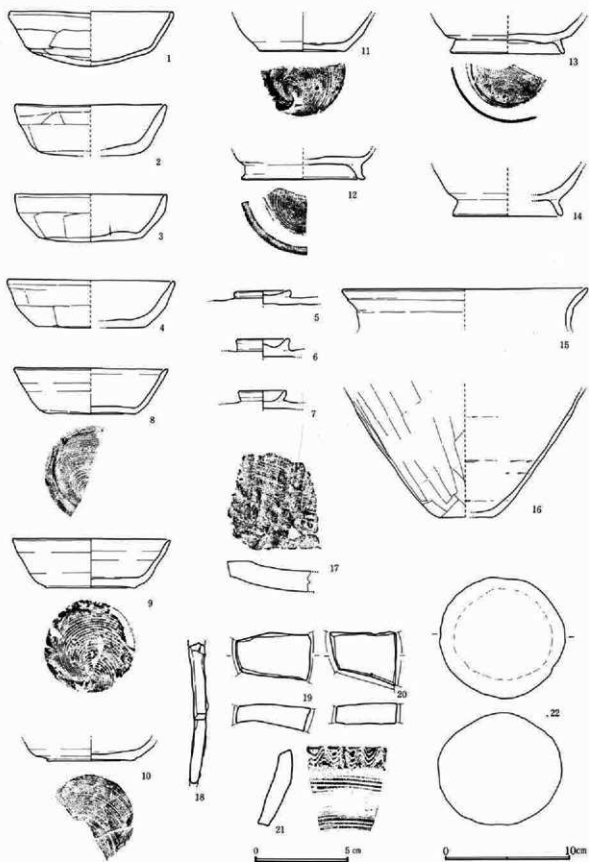


Fig.622 I 45号住居跡出土遺物(1)

第5章 I区の遺構と遺物

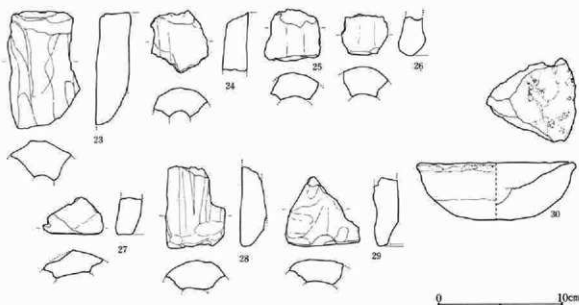


Fig.623 I45号住居跡出土遺物(2)

I45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・#) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
622-1 254-1	土師器 杯	口~底 1/2	13.2 × 10.0 × 4.4	北東部掘 形埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向の粗い埋土。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③緻密
622-2 254-2	土師器 杯	口~底 1/2	12.1 × 8.5 × 4.1	北東部床 面	紐造巻上。口縁部及び内面無で。体部横、 底部不定方向の粗い埋土。	①酸化・良好 ②に よい ③細砂混る
622-3 254-3	土師器 杯	口~底 1/2	12.2 × 8.3 × 3.8	貯蔵穴内 埋土	紐造巻上。口縁部及び内面無で。体部横、 底部不定方向の粗い埋土。	①酸化・良好 ② ③緻密
622-4 254-4	土師器 杯	口~底 1/2	13.4 × 8.8 × 3.8	中央部床 面	紐造巻上。口縁部及び内面無で。体部横、 底部不定方向の粗い埋土。	①酸化・良好 ② ③緻密
622-5 254-5	須恵器 蓋	横	— × 横 4.5 × ( 1.1)	埋 土	轆轤。右回転。頂部回転削り。横溝 で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
622-6 254-6	須恵器 蓋	横	— × 横 4.3 × ( 1.4)	貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転。横溝無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
622-7 254-7	須恵器 蓋	横	— × 横 3.8 × ( 1.5)	中央部掘 形埋土	轆轤。右回転。横溝無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
622-8 254-8	須恵器 杯	口~底 1/2	12.4 × 8.0 × 3.6	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。底縁部無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
622-9 254-9	須恵器 杯	口~底 1/2	12.6 × 7.3 × 3.9	中央・北 東部床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良 軟質 ② 灰白 ③緻密
622-10 254-10	須恵器 杯	底 1/2	— × 7.0 × ( 1.7)	北西部掘 形埋土	轆轤。右回転糸切り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
622-11 254-11	須恵器 杯	体~底 1/2	— × 7.0 × ( 2.6)	南西部南 壁下埋土	轆轤。右回転糸切り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

I 45号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
622-12 254-12	須恵器 碗	底 片	— × 10.0 × (2.2)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
622-13 254-13	須恵器 碗	体~底 片	— × 9.1 × (2.9)	南西部南 壁寄埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
622-14 254-14	須恵器 碗	体~底 片	— × 8.8 × (3.8)	南西部西 壁下床面	轆轤。右回転。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
622-15 254-15	土師器 罍	口~頸 片	19.6 × — × (3.1)	埋土	組造。撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
622-16 254-16	土師器 罍	下~底 片	— × 4.4 × (10.5)	竪内	組造。体部斜。底部不定方向刮削り。内 面磨削で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
622-17 254-17	瓦 平瓦	小片	厚 1.6	南東部東 壁下埋土	橋巻、叩打。上面布目痕、下面撫で。前 端部1段、側端部2段削り。	①還元・良 ②灰 ③砂混る
622-18 254-18	鉄製品		長(7) 幅0.6 厚0.3	埋土	角釘?	
622-19 255-19	須恵器 転用磁石		長 4.0 幅 2.4 厚 1.0	埋土	査察部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
622-20 255-20	須恵器 転用磁石		長 3.5 幅 2.8 厚 1.1	埋土	壘体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
622-21 255-21	須恵器 転用磁石		長 4.4 幅 4.1 厚 0.9	埋土	査察部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
622-22 255-22	石 一		長 9.6 幅10.0 厚 8.9	埋土	円礫。磁石材か。	角閃石安山岩
623-23 255-23	土製品 鬮羽口	先~中 片	長(9.2)	南西部南 壁寄埋土	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物少量付 着。	①酸化・二次還元 ② 灰黒~橙 ③細砂混る
623-24 255-24	土製品 鬮羽口	先 片	長(4.6)	南東部南 壁下埋土	棒付、縦方向撫で。先端部寄り溶解物付 着。	①酸化・二次還元 ② 黒~灰 ③細砂混る
623-25 255-25	土製品 鬮羽口	中 小片	長(4.0)	貯蔵穴内 埋土	棒付、撫で。	①酸化・二次還元②黒 ~褐 ③細砂混る
623-26 255-26	土製品 鬮羽口	基 小片	長(3.2)	埋土	棒付、撫で。指押痕明瞭。	①酸化・二次還元 ② 灰 ③細砂混る
623-27 255-27	土製品 鬮羽口	基 小片	長(2.9)	西央部床 面	棒付、撫で。指押痕明瞭。	①酸化・二次還元 ② 黒褐~灰 ③細砂混る
623-28 255-28	土製品 鬮羽口	基 片	長(6.5)	竪内埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰~にぶい橙 ③細砂混る
623-29 255-29	土製品 鬮羽口	基 小片	長(5.5)	北央部床 面	棒付、撫で。指押痕明瞭。	①酸化・二次還元 ② 灰~橙 ③細砂混る
623-30 255-30	土製品 埴	口~底 片	12.8 × 6.2 × 4.5	南東部南 壁寄埋土	手捏ね。器壁厚く、内面2段構造。溶解 物付着。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る

I 46号住居跡 (Fig. 624~626・PL. 255、256)

I区の中央部やや西寄りに位置し、57・58 I 19の範囲にある。調査段階では数軒の堅穴住居の重複によりその存在すら明らかでなかった。55号住居跡を調査の際、55号住居跡西部の埋土中より焼土の分布と石材の集中が検出され、これが竈の形態をもつ遺構であるとの確認から当跡が住居跡の一つに加えられた。上述のように重複の著しいことからその形態及び規模は不明であり、また西側は55号住居跡ともどもJ 1号溝によってまったく消失していることも明瞭な形で検出できなかった一因となっている。竈は西に開口して左右に長頭形の川原石を埋設し、袖部を形成していると考えられる。燃焼部にあたる周囲に数個の川原石を配する。配される石は袖部のものよりやや高い位置にあり埋設の度合いは少ない。竈の平面形態をはじめ詳細は不明である。袖石間内法は約40cm、燃焼部の奥行きは、奥に配された石までとすると約40cmを測る。遺物は多量に出土しており、角閃石安山岩製の磁石及び須恵器片の転用磁石が多く、竈に集中していた。



Fig.624 I 46号住居跡

I 46号住居跡竈

- 1 砂岩塊
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 白灰色土粒を含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 5 暗褐色土 炭化粒を含む。



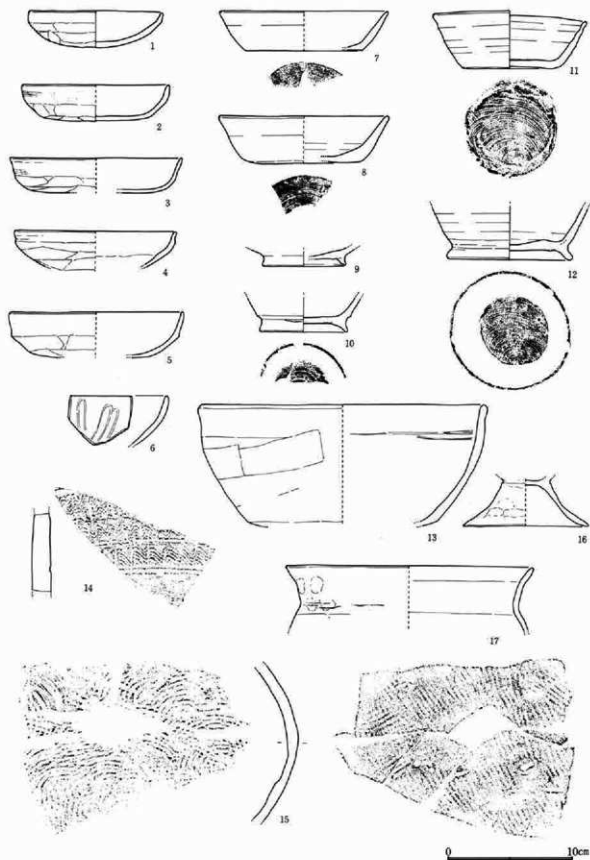


Fig.625 I46号住居跡出土遺物(1)

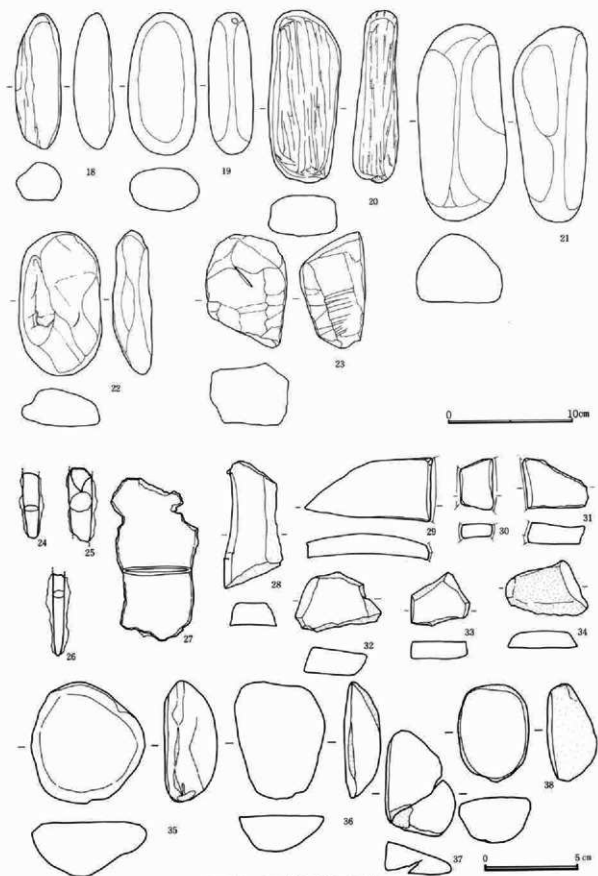


Fig.626 I46号住居跡出土遺物(2)

I 46号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
625-1 255-1	土師器 杯	口~底 (完)	10.8 × — × 3.0	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
625-2 255-2	土師器 杯	口~底	11.8 × — × 2.9	南東部 床面	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
625-3 255-3	土師器 杯	口~底 片	13.8 × — × 2.8	壺内	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
625-4 255-4	土師器 杯	口~体 片	13.0 × — ×(3.1)	北東部 床面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向旋削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
625-5 255-5	土師器 杯	口~底 片	13.9 × — × 3.6	東部 床面	紐造巻上か。指押。体部横、底部不定方向の粗い旋削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
625-6 255-6	土師器 土師器 小片	口~体 小片	17.9 × — ×(3.9)	埋土	紐造巻上か。口縁部及び内面無で精緻。体部旋削り痕不詳。縹変状暗紋。	①酸化・良 ②橙 ③縹部
625-7 255-7	須恵器 杯	口~底 片	13.5 × 9.5 × 3.2	埋土	轆轤。右回転。無調整。	①還元・良好 ②紫灰 ③細砂混る
625-8 255-8	須恵器 杯	口~底 小片	13.7 × 8.8 × 3.8	北東部 床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。器壁厚い。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
625-9 255-9	内黒土器 椀	底 片	— × 6.8 ×(1.3)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。内面黒色処理。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③砂混る
625-10 255-10	須恵器 椀	体~底 片	— × 7.1 ×(2.7)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
625-11 255-11	須恵器 杯	口~底	12.3 × 7.4 × 4.6	東部 床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
625-12 256-12	須恵器 椀	体~底	— × 10.0 ×(4.2)	東部 壁ぎわ	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
625-13 256-13	土師器 鉢	口~体 片	23.1 × 15.1 ×(9.6)	壺前面	紐造。口縁部及び内面無で。体部斜方向の粗い旋削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
625-14 256-14	須恵器 壺	頸 小片		南東部 床面	横位沈線間に波状文。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
625-15 256-15	須恵器 壺	体 小片		埋土	紐造。甲打。外面印目痕、内面めて目痕。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
625-16 256-16	土師器 台付壺	台	— × 10.0 ×(3.8)	埋土	紐造。指押後無で。	①酸化・良好 ②赤橙 ③縹部
625-17 256-17	土師器 壺	口~頸 小片	19.8 × — ×(5.0)	50	紐造。無で。指押痕明瞭。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
626-18 256-18	石一	完	長10.8 幅3.7 厚3.3 178.1g	58	棒状円碑。	砂岩
626-19 256-19	石一	完	長11.3 幅5.5 厚3.6 358.5g	61	扁平長円碑。	輝石安山岩(粗粒)

第5章 I区の遺構と遺物

I 46号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
626-20 256-20	石 一	完	長13.7 幅 5.8 厚 3.6 449.8g	埋 土	扁平角長円礫。	雲母石英片岩
626-21 256-21	石 一	完	長15.6 幅 6.3 厚 6.1 941.0g	埋 土	三角長円礫。	石英閃綠岩
626-22 256-22	石 一	完	長11.4 幅 6.7 厚 3.1 330.5g	東 部 床 面	扁平長円礫。	流紋岩
626-23 256-23	石 一	完	長 9.1 幅 6.6 厚 5.2 281.2g	カマド内	角礫。	輝石安山岩 (粗粒)
626-24 256-24	鉄製品		長(3.4) 幅0.8 厚0.3	埋 土		
626-25 256-25	鉄製品		長(3.8) 径 1	埋 土		
626-26 256-26	鉄製品		長(4.3) 径0.6×0.4	埋 土		
626-27 256-27	鉄製品		長(8.5) 幅3.7 厚0.4	埋 土	利器?	
626-28 256-28	須 恵 器 転 用 砥 石		長 6.7 幅 3.1 厚 1.3	埋 土	断面1カ所、杖状に使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
626-29 256-29	須 恵 器 転 用 砥 石		長 6.7 幅 3.4 厚 1.1	埋 土	断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
626-30 256-30	須 恵 器 転 用 砥 石		長 2.7 幅 1.7 厚 0.7	埋 土	断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
626-31 256-31	須 恵 器 転 用 砥 石		長 3.3 幅 2.7 厚 1.1	埋 土	断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
626-32 256-32	須 恵 器 転 用 砥 石		長 4.4 幅 3.2 厚 1.3	埋 土	断面1カ所、杖状に使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
626-33 256-33	須 恵 器 転 用 砥 石		長 3.1 幅 2.6 厚 0.9	埋 土	断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
626-34 256-34	石製品 砥石		長 4.4 幅 3.0 厚 0.9	埋 土		角閃石安山岩
626-35 256-35	石製品 砥石		長 6.4 幅 6.1 厚 2.9	埋 土	円礫の約片を使用。	角閃石安山岩
626-36 256-36	石製品 砥石		長 6.2 幅 4.8 厚 1.9	埋 土	円礫の約片及び他に2面使用。	角閃石安山岩
626-37 256-37	石製品 砥石		長 5.6 幅 3.7 厚 1.5	埋 土	板状に2面及び管状部1カ所使用。	角閃石安山岩
626-38 256-38	石製品 砥石		長 5.2 幅 3.8 厚 2.4	埋 土	円礫の約片を使用。	角閃石安山岩

## I 47号住居跡 (Fig. 627~629・PL. 257)

I区の南部やや西寄りに位置し、57・58 I 16の範囲にある。住居跡の南側で36号住居跡と、北側で37号住居跡と重複している。また西半はJ 1号溝によって消失している。新旧関係は37号住居跡より古い時期の所産であるが、36号住居跡との関係は遺構の切り合いでは確認できなかった。平面形態については重複関係が著しく竈と東壁の一部がわかるにとどまる。壁高は約20cmを測る。竈は東壁に付設され、方形ぎみに掘り込まれた燃烧部から長い煙道部が作り出される。袖部はわずかに住居内へ張り出し、凝灰岩の加工材が埋設され、燃烧部奥寄りには支脚痕が検出されている。袖石間内法は約50cm、燃烧部奥行き約65cm、煙道部長さ約90cmを測る。出土遺物は須恵器片の転用砥石が目立ち、36号住居跡と共通している。

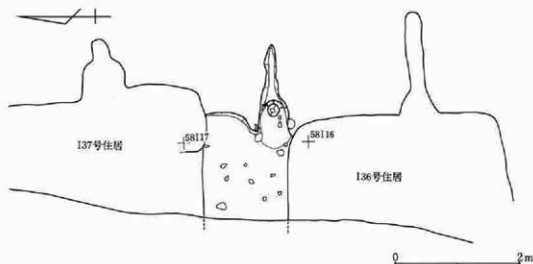


Fig.627 I 47号住居跡

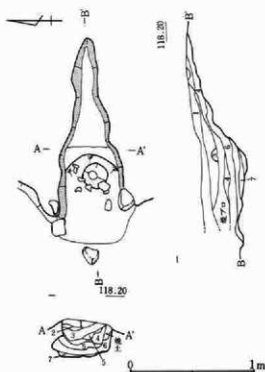


Fig.628 I 47号住居跡竈

## I 47号住居跡竈

- |        |                  |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | C 軽石・焼土粒を含む。     |
| 2 焼土   | 焼土粒を含む。          |
| 3 暗褐色土 | 炭化粒・焼土粒 C 軽石を含む。 |
| 4 焼土   | 焼土塊。             |
| 5 焼土   | 焼土塊。             |
| 6 暗褐色土 | 埴りなし。            |
| 7 灰層   |                  |

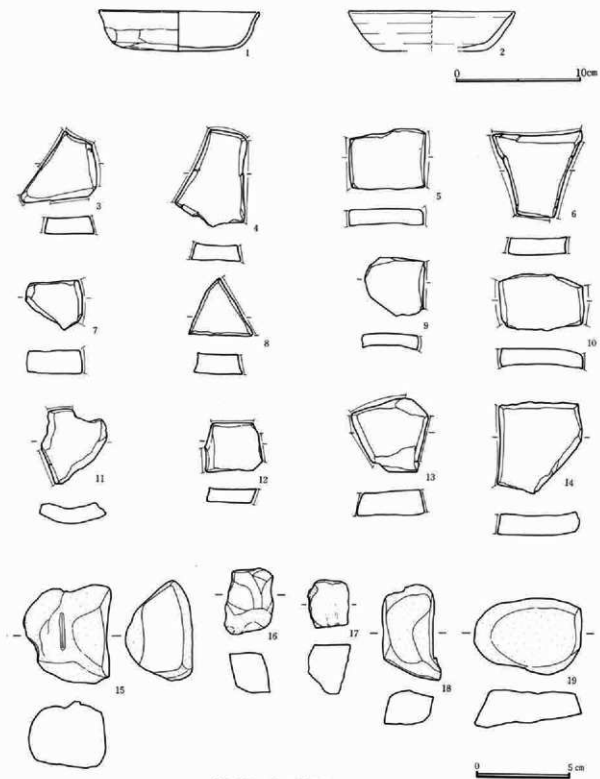


Fig.629 I 47号住居跡出土遺物

I47号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
629-1 257-1	土 師 器 杯	口~底	12.8 × 10.0 × 3.2	埋 土	指押、口縁部及び内面磨で。体部横、底部不定方向寛用り。	①焼成・良好 ②橙 ③細砂混る
629-2 257-2	須 恵 器 杯	口~底 小片	13.3 × 8.0 × 3.2	掘形埋土	輪縁。右回転。底部回転磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
629-3 257-3	須 恵 器 転用磁石		長 4.2 幅 3.6 厚 0.9	掘形埋土	壺体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
629-4 257-4	須 恵 器 転用磁石		長 5.1 幅 3.7 厚 0.9	掘形埋土	壺体部片転用。断面4カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
629-5 257-5	須 恵 器 転用磁石		長 4.0 幅 3.2 厚 0.8	電掘形埋土	壺類部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
629-6 257-6	須 恵 器 転用磁石		長 4.3 幅 4.7 厚 0.9	電子前掘形埋土	壺体部片転用。断面4カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
629-7 257-7	須 恵 器 転用磁石		長 3.0 幅 2.6 厚 1.2	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②黒灰 ③細砂混る
629-8 257-8	須 恵 器 転用磁石		長 3.0 幅 3.2 厚 1.0	掘形埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
629-9 257-9	須 恵 器 転用磁石		長 3.1 幅 3.0 厚 0.6	掘形埋土	壺類部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②黒灰 ③細砂混る
629-10 257-10	須 恵 器 転用磁石		長 4.4 幅 2.9 厚 0.9	掘形埋土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ③暗灰 ③細砂混る
629-11 257-11	須 恵 器 転用磁石		長 3.5 幅 3.7 厚 0.6	掘 形	壺類部片使用。断面2カ所転用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
629-12 257-12	須 恵 器 転用磁石		長 2.6 幅 3.1 厚 0.7	掘 形	壺類部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
629-13 257-13	須 恵 器 転用磁石		長 3.9 幅 4.1 厚 1.3	掘 形	壺体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
629-14 257-14	須 恵 器 転用磁石		長 4.9 幅 4.3 厚 1.0	掘 形	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
629-15 257-15	石 製 品 磁 石		長 5.3 幅 4.7 厚 3.5	掘 形	円縁の1面使用。	角閃石安山岩
629-16 257-16	石 製 品 磁 石		長 3.5 幅 2.5 厚 2.1	埋 土	5カ所使用。	角閃石安山岩
629-17 257-17	石 製 品 磁 石		長 2.5 幅 2.2 厚 2.6	埋 土	2カ所使用。	輝石安山岩(粗粒)
629-18 257-18	石 製 品 磁 石		長 5.1 幅 3.1 厚 1.8	埋 土	側面のみ5カ所使用。	角閃石安山岩
629-19 257-19	石 製 品 磁 石		長 5.7 幅 4.1 厚 1.9	埋 土	板状側面の1カ所使用。	角閃石安山岩



Fig.630 I48号住居跡

を有する。壁高は約20cmを測り、床面は平坦をなすが軟弱である。床面東寄りに凝灰岩の加工材が集中して検出されたが、何等の形態もなさない。出土遺物は少なく、土器類の他数点の石器が検出されている。

I48号住居跡 (Fig.630・631・PL.258)

I区の北端西寄りに位置し、58・59 I 47～49の範囲にある。北側で54号住居跡と重複しており、これよりも古い時期の所産である。また西側は削平が深く及び消失している。このような部分的検出のため竈等の諸施設はなく、竪穴住居跡と確定するには条件が乏しい。平面形態はやや丸みをもち、南壁の一部が幅約80cm・長さ約1m突出して張り出し部

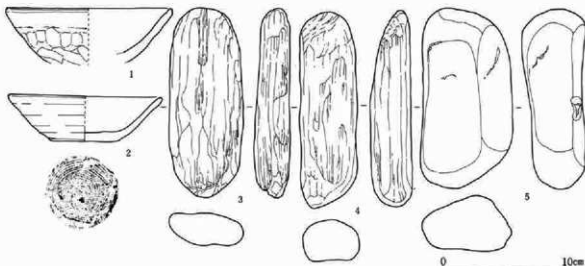


Fig.631 I48号住居跡出土遺物

I48号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
631-1 258-1	土器 杯	□~体 1/2	13.4 × - × (4.2)	南東部埋 土	指折。□縁部及び内面飾で。体部中位指折押痕明瞭。下位窪削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
631-2 258-2	須恵器 杯	□~底 残	12.4 × 5.6 × 3.6	埋土	輪轆。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
631-3 258-3	石 -	完	長15.1 幅6.0 厚2.9 373.5g	中央部床 面	両元長円礫。	霞母石英片岩
631-4 258-4	石 -	完	長15.6 幅4.7 厚3.3 398.5g	中央部床 面	棒状円礫。	霞母石英片岩
631-5 258-5	石 -	完	長14.4 幅7.4 厚5.1 774.9g	中央部床 面	三角長円礫。	輝石安山岩(粗粒)



I 51号住居跡 (Fig. 632~636・PL. 259~261)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	座 位 置	貯藏穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.90 × 3.79	N-90.5°-E	東壁やや南寄り	



Fig.632 I 51号住居跡

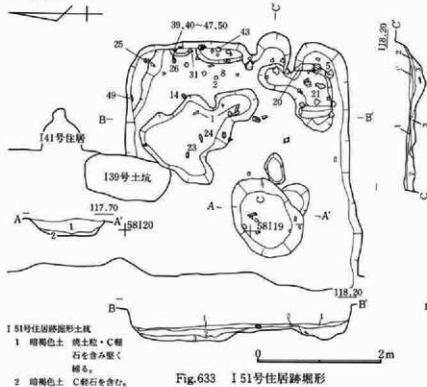


Fig.633 I 51号住居跡堀形

I区の南部西寄りに位置し、56~58 I 18・19の範囲にある。住居跡西南部は37号、北西部は41号、北東部は63号、西部は46号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は37号・41号・46号より新しい時期の所産である。また63号・64号との関係は調査手順の不備から不明である。壁高は約30cmを測りやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。竈は東壁に付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれ、煙道部の作り出しはない。袖部は小さく住居内に張り出し、補強材の埋設はないが、貯藏穴内より長径55cmの川原石が検出されており竈構築材の一部と考えられる。袖部は粘性黄色土混りの褐色土で築かれる。袖部内法約40cm、燃焼部奥行き約55cmを測る。出土遺物は多量で羽刃の他、角閃石安山岩製及び須恵器片の転用砥石がとくに多い。

第5章 1区の遺構と遺物

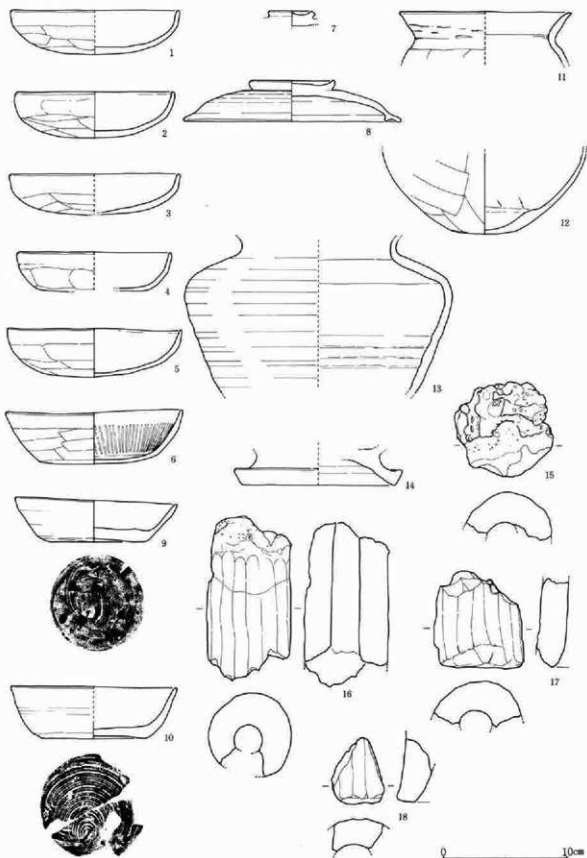


Fig.634 151号住居跡出土遺物(1)

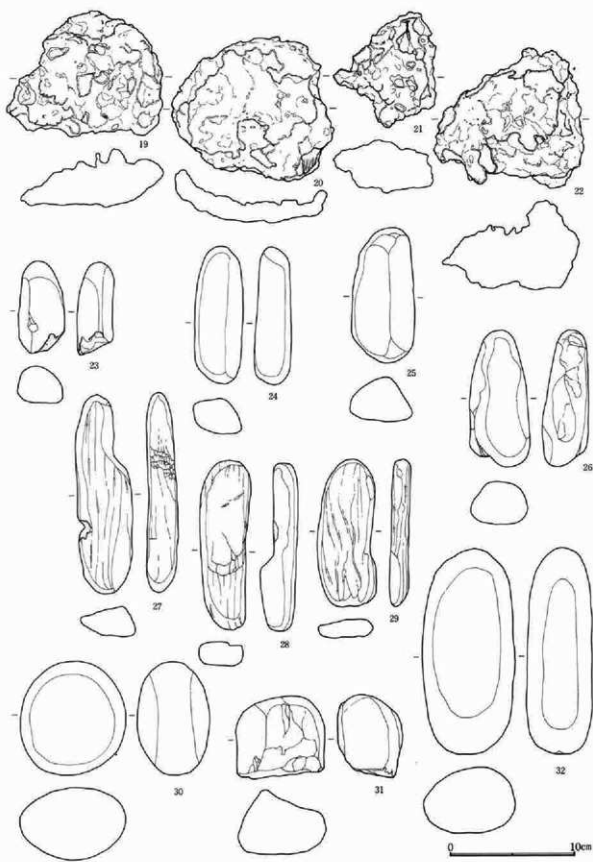


Fig.635 Ⅰ51号住居跡出土遺物(2)



Fig.636 I 51号住居跡出土遺物(3)

I51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
634-1 260-1	土師器 杯	口～底 片	13.6 × — × 3.5	中央部 断面敷在	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③緻密
634-2 260-2	土師器 杯	口～底 片	12.8 × — × 3.7	北東部床 面敷在	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
634-3 260-3	土師器 杯	口～底 片	13.7 × — × 3.2	北西方向 遺構外	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
634-4 260-4	土師器 杯	口～底 片	12.4 × 9.1 × 3.1	中央部床 面	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向の粗い寛削り。平底。	①酸化・良好 ②によい橙 ③緻密
634-5 260-5	土師器 杯	口～底 片	14.0 × — × 3.9	南東部隅 寄張形	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
634-6 260-6	土師器 杯	口～底 完	14.2 × 9.3 × 4.2	北東部床 面敷在	紐造り上か。口縁部側で。体部横、底部不定方向寛削り。内面放射状、見込部螺旋状増文あり。	①酸化・良好 ②によい橙 ③緻密
634-7 260-7	須恵器 蓋	横	— × 横 3.8 × (1.2)	床下埋土	轆轤。右回転。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
634-8 260-8	須恵器 蓋	横～端 片	17.5 × 横 6.9 × 3.3	北東部床 面	轆轤。右回転。頂部3段回転寛削り。横比較的大型。横撫で。	①加酸化還元・良好 ②灰橙 ③細砂混る
634-9 260-9	須恵器 杯	口～底 片	13.0 × 7.6 × 3.4	北東部埋 土	轆轤。右回転。腰～底部手持寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
634-10 260-10	須恵器 杯	口～底 片	13.3 × 8.4 × 4.1	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・やや低溫 ②灰白 ③細砂混る
634-11 260-11	土師器 葉	口～上 片	13.8 × — × (4.0)	北東部床 面	紐造。口頸部及び内面側で。体部横方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
634-12 260-12	土師器 葉	下～底 片	— × 5.2 × (6.5)	北東部床 面敷在	紐造。体部横、底部不定方向寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ②によい赤褐 ③細砂混る
634-13 260-13	須恵器 短頸瓶	頸～中 片	— × — × (12.2)	南東部埋 土	紐造。轆轤。右回転。横撫で。体部下位叩打か。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
634-14 260-14	須恵器 蓋	底 片	— × 12.2 × (2.9)	北東部埋 土	紐造。横撫で。	①還元・良 ②灰 ③砂混る
634-15 261-15	土製品 輪羽口	先 片	長(7.5)	北西方向 遺構外	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
634-16 261-16	土製品 輪羽口	先～中 片	長(13.0) 幅 6.6 厚 6.7	中央部床 面敷在	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
634-17 261-17	土製品 輪羽口	中～基 片	長(7.6)	北東部床 面	棒付。縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
634-18 261-18	土製品 輪羽口	基 小片	長(5.2)	北東部床 面	棒付。縦方向撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
635-19 261-19	鉄 槌形釜津		長 9.8 幅 12.5 厚 3.5	南東部床 面	比較的大型。炭化物付着。	

第5章 Ⅰ区の遺構と遺物

Ⅰ51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④色調 ⑤その他
635-20 261-20	鉄 鏡形銅片		長11.3 幅13.0 厚1.5	南東部東 壁下掘形	大型。薄い。炭化物付着。	
635-21 261-21	鉄 鏡形銅片		長9.1 幅8.2 厚3.8	南東部掘 形	炭化物付着。	
635-22 261-22	鉄 鏡形銅片		長11.0 幅12.0 厚4.5	南東部埋 土	大型。炭化物付着。	
635-23 261-23	石 一		長(7.4) 幅3.7 厚3.0 119.3g	北東部掘 形	小型。棒状円盤。一端欠損。	輝石安山岩(粗粒)
635-24 261-24	石 一	完	長10.9 幅3.9 厚3.0 251.1g	中央部掘 形	棒状円盤。	雲母石英片岩
635-25 261-25	石 一	完	長10.8 幅5.1 厚3.6 268.0g	北東部隅 寄掘形	三角棒状円盤。	輝石安山岩(粗粒)
635-26 261-26	石 一	完	長10.8 幅4.8 厚3.7 280.6g	北東部東 壁寄掘形	棒状円盤。	雲母石英片岩
635-27 261-27	石 一		長15.9 幅4.5 厚2.5 228.0g	北東部埋 土	棒状円盤。一部欠損。	緑色片岩
635-28 261-28	石 一		長13.4 幅4.0 厚(2.9) 251.1g	北東部床 面	棒状円盤。一部欠損。	雲母石英片岩
635-29 261-29	石 一	完	長11.7 幅4.8 厚10.7 142.8g	北西部床 面	扁平長円盤。板状。	雲母石英片岩
635-30 261-30	石 一	完	長9.0 幅8.5 厚5.7 658.0g	南東部埋 土	円盤。	雲母石英片岩
635-31 261-31	石 一		長(6.6) 幅7.2 厚5.3 (312.4)g	北東部北 壁下掘形	長円盤の先端。	溶結凝灰岩
635-32 261-32	石 一	完	長16.3 幅7.3 厚5.2 1054.8g	北西部床 面	長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
636-33 261-33	鉄製品 筒端欠損		長(3.0) 幅0.5 厚0.2	北部床面		
636-34 261-34	鉄製品 釘?		長(3.7) 幅0.5 厚0.3	北部床面		
636-35 261-35	須恵器 転用磁石		長2.9 幅1.9 厚1.4	埋土	整体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
636-36 261-36	須恵器 転用磁石		長2.8 幅2.2 厚0.7	埋土	断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
636-37 261-37	須恵器 転用磁石		長4.4 幅3.2 厚1.7	中央部床 面	整体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②黒灰 ③緻密
636-38 261-38	石製品 砥石		長7.4 幅4.8 厚2.5	電子前床 面	角礫状。1面使用。	角閃石安山岩

I 51号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
639-39 261-39	石 製 品 砥 石		長 2.9 幅 2.6 厚 2.2	北東部東 壁下彫形	角礫状に6面使用。	角閃石安山岩
639-40 261-40	石 製 品 砥 石		長 3.6 幅 3.0 厚 2.3	北東部北 壁下彫形	円礫の3カ所使用。	角閃石安山岩
639-41 261-41	石 製 品 砥 石		長 3.8 幅 2.6 厚 2.2	埋 土	円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
639-42 261-42	石 製 品 砥 石		長 4.0 幅 3.0 厚 1.5	南東部埋 土	角礫の2面使用。	角閃石安山岩
639-43 261-43	石 製 品 砥 石		長 3.6 幅 3.6 厚 3.3	北東部東 壁下彫形	角礫状に5面使用。	角閃石安山岩
639-44 261-44	石 製 品 砥 石		長 6.6 幅 4.8 厚 3.7	北東部東 壁下彫形	円礫の端部を3カ所使用。	角閃石安山岩
639-45 261-45	石 製 品 砥 石		長 7.1 幅 5.1 厚 3.2	北東部東 壁下彫形	円礫。2カ所わずかに使用。	角閃石安山岩
639-46 261-46	石 製 品 砥 石		長 4.6 幅 3.4 厚 3.2	北東部東 壁下彫形	円礫の1カ所。定幅使用。	角閃石安山岩
639-47 261-47	石 製 品 砥 石		長 5.2 幅 3.9 厚 2.2	北東部東 壁下彫形	円礫。2カ所使用。	角閃石安山岩
639-48 261-48	石 製 品 砥 石		長 5.9 幅 4.6 厚 3.7	南東部床 面	わずかに使用痕。	角閃石安山岩
639-49 261-49	石 製 品 砥 石		長 7.6 幅 5.6 厚 3.6	北東部北 壁下彫形	円礫。1カ所定幅使用。	角閃石安山岩
639-50 261-50	石 製 品 砥 石		長 6.5 幅 5.7 厚 4.6	北東部東 壁下彫形	円礫。5カ所使用。	角閃石安山岩

I 52号住居跡 (Fig. 637~647・PL. 262~268)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.33 × 3.66	N-95°-E	東壁やや南寄り	

I区の南部やや西寄りに位置し、54~56 I 16~18の範囲にある。55号・58号・59号・74号住居跡と重複している。新旧関係はこれらの住居跡全てより新しい時期の所産である。南北方向にわずかに長く長軸をもつ比較的整った方形を呈する。壁の掘り込みは浅く約20cmを測り緩く立ち上がる。床面は平坦をなすが踏み跡は弱い。貯蔵穴・壁下の溝等は検出されていない。竈は東壁に楕円形に掘り込まれ、袖部や煙道部の作り出しはされない。燃焼部幅約45cm・奥行き50cmを測る。出土遺物は極めて多量でその数は400点余りにのぼり、住居跡全体に散乱している状況である。埋土中の遺物も多く、竈内にも須恵器の大壺片が検出されているが埋土中の出土状況を示している。遺物の種類も多種にわたり、三足火舎・五葉半弁蓮華文の鏡瓦や平

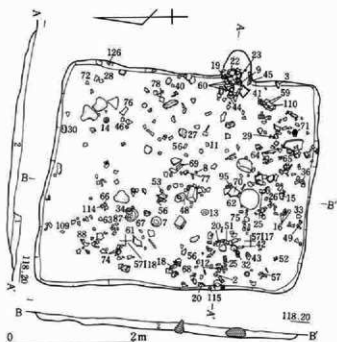


Fig. 637 I 52号住居跡

瓦・羽口・砥石類が目立つ。このような多彩な遺物類と出土状況から窺われることは、これらの遺物は住居跡の廃屋化に伴いあまり時を経ない時点で、遺物の集中的投棄が行われたと考えられる。

I 52号住居跡

- 1 暗褐色土 大粒C軽石を多く含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。

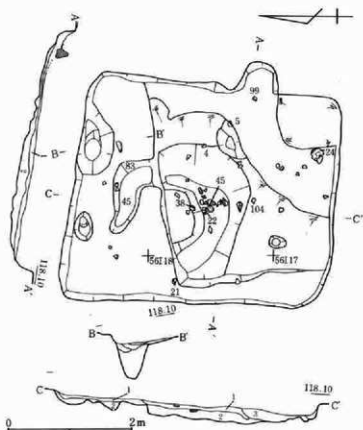


Fig. 638 I 52号住居跡掘形

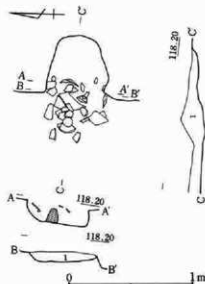


Fig. 639 I 52号住居跡断面

I 52号住居跡掘

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。

I 52号住居跡掘形

- 1 暗褐色土 空く綿る砂質、床面。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
- 3 灰・焼土粒を含む。



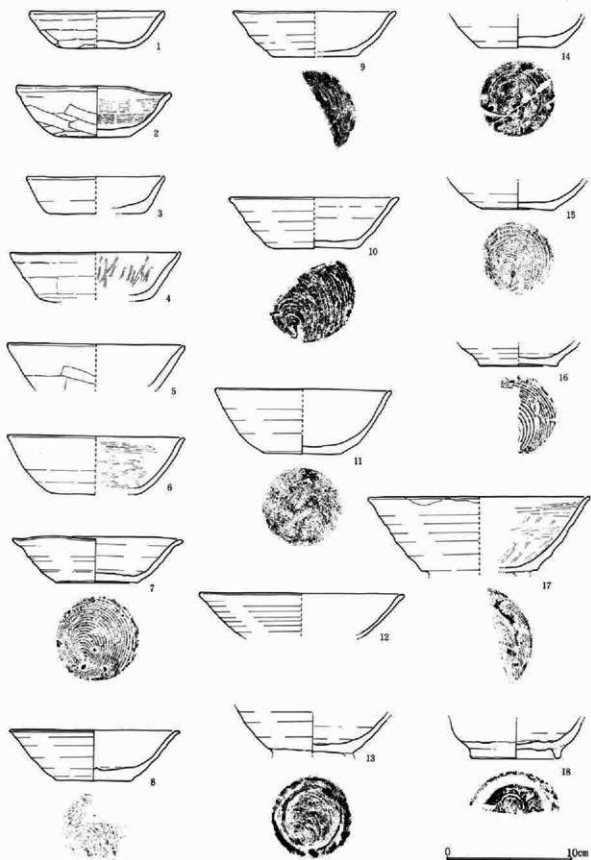


Fig.640 I52号住居跡出土遺物(1)

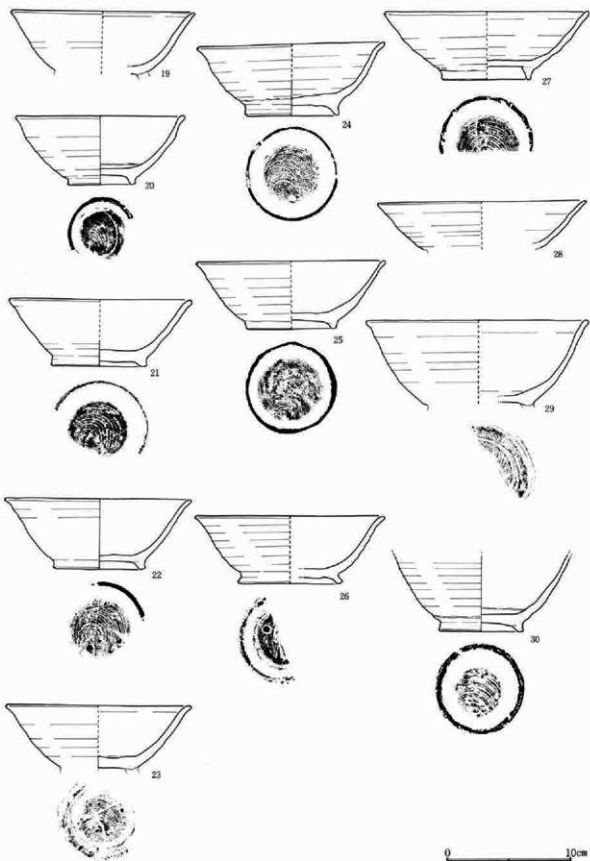


Fig.641 I 52号住居跡出土遺物(2)

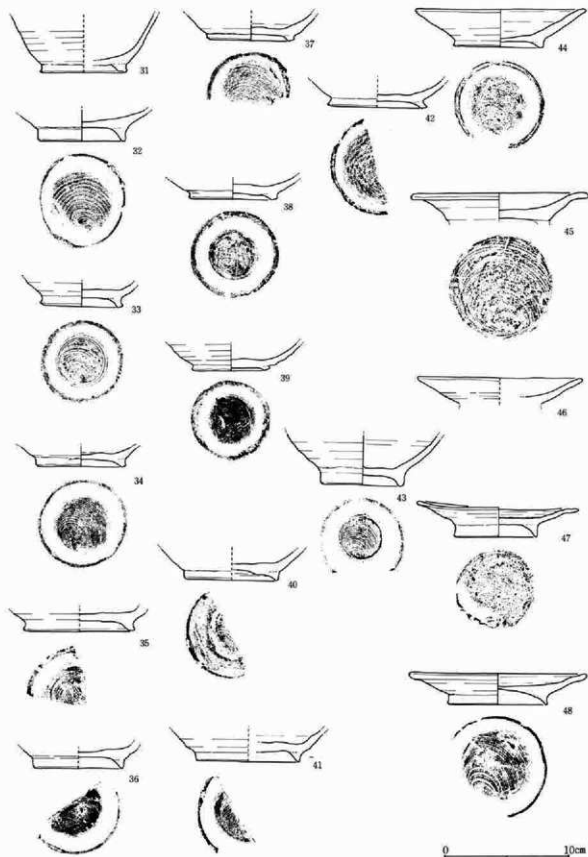


Fig.642 152号住居跡出土遺物(3)

第5章 I区の遺構と遺物

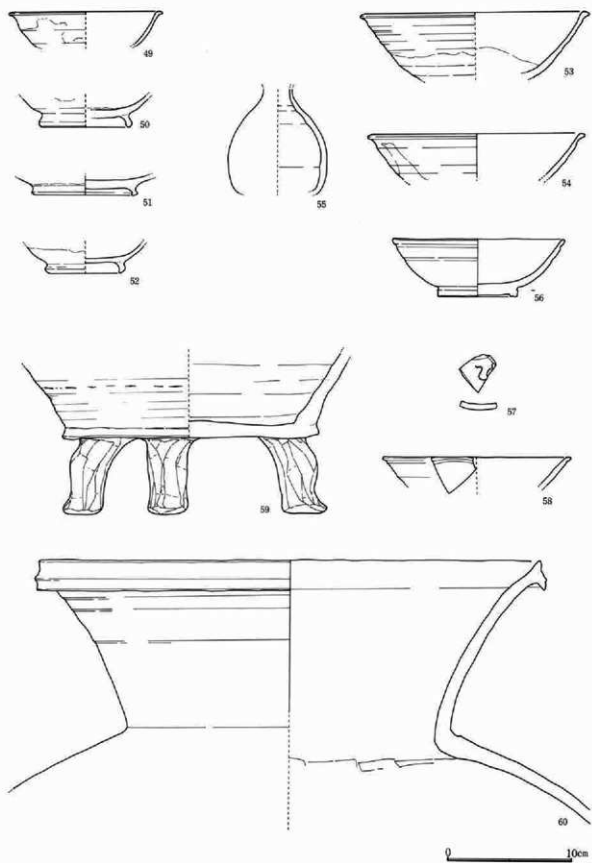


Fig.643 I 52号住居跡出土遺物(4)

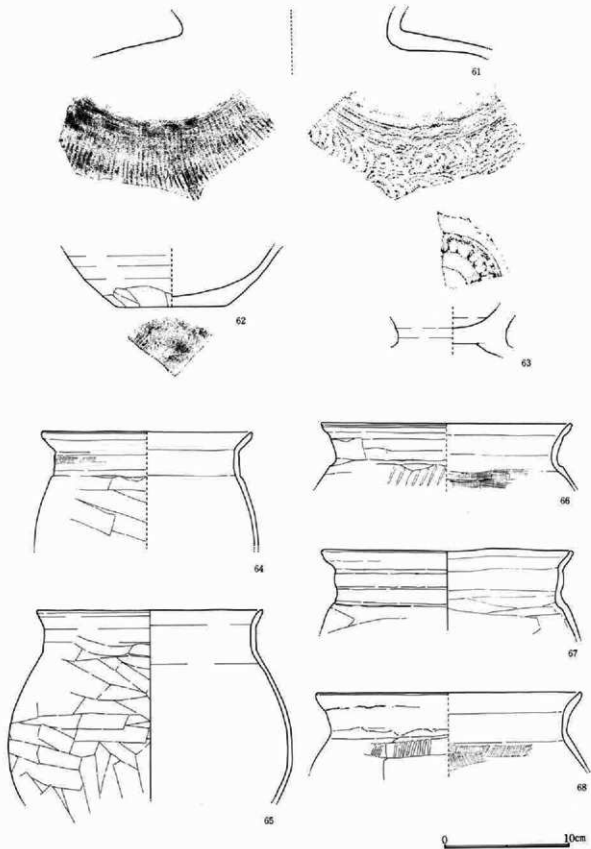


Fig.644 Ⅰ52号住居跡出土遺物(5)

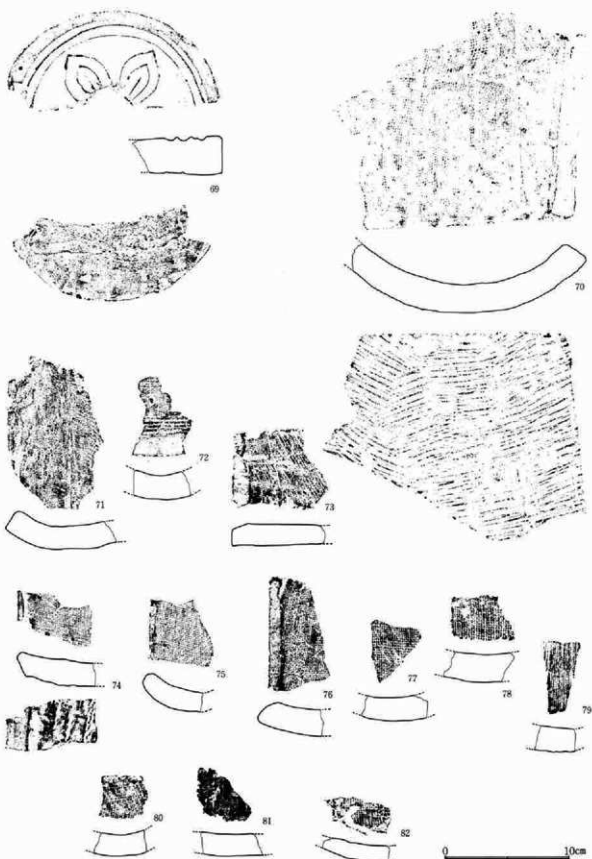


Fig.645 I 52号住居跡出土遺物(6)

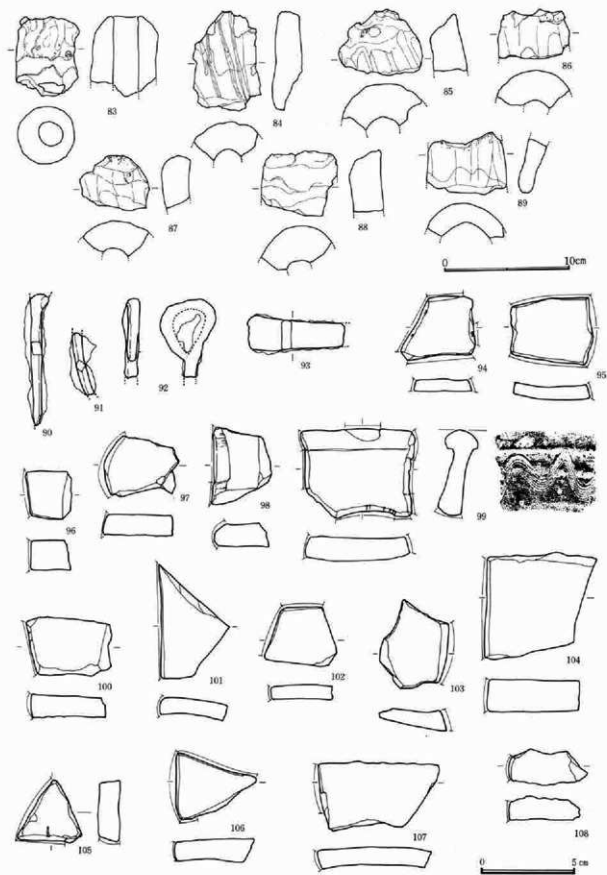


Fig.646 Ⅰ52号住居跡出土遺物(7)

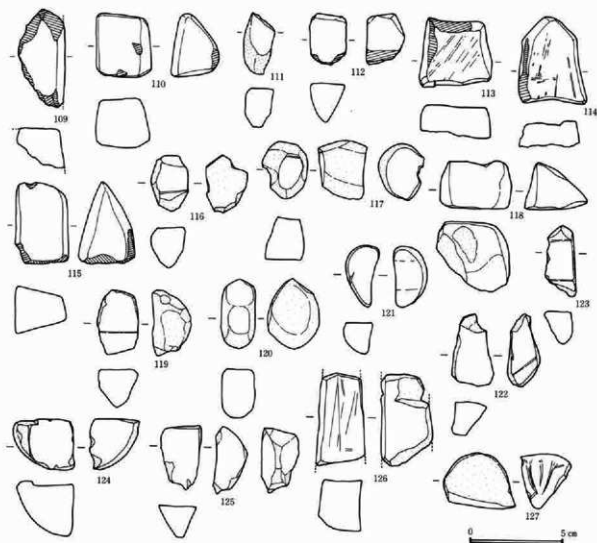


Fig.647 I 52号住居跡出土遺物(8)

I 52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
640-1 263-1	土器 杯	口~底 片	10.8 × 6.8 × 3.0	西央部西 部不定方向 壁下埋土	指押。口縁部及び内面無。体部横、底 部不定方向、手持箇所有り。	①酸化・良好 ②によ い赤褐色 ③細砂混る
640-2 263-2	土器 杯	口~底 片	12.4 × 5.8 × 4.1	南西部埋 土敷在	指押。口縁部及び内面無。体部斜、底 部不定方向箇所有り。口縁部やや歪む。	①酸化・良好 ②によ い黄褐色 ③細砂混る
640-3 263-3	土器 杯	口~底 片	11.1 × 7.4 × 3.0	南東部東 壁下埋土	体部内外横無。底部手持箇所有り。	①酸化・良好 ②粗 ③砂混る
640-4 263-4	土器 杯	口~底 小片	13.6 × 8.9 × 3.9	東央部掘 形	指押。口縁部及び内面無。体部横方向 箇所有り。内面放射状凹凸残る。	①酸化・良好 ②によ い黄褐色 ③細砂混る
640-5 263-5	土器 杯	口~体 片	14.2 × — × (3.4)	東央部掘 形	指押。口縁部及び内面無。体部横方向 箇所有り。	①酸化・良好 ②によ い黄褐色 ③細砂混る



I52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
640-6 263-6	内周土器 杯	口～底 小片	14.1 × 7.0 × 4.6	埋 土	轆轤。右回転。体部下半回転削り。内面黒色処理。横方向寛磨き。	①加酸化還元 ②浅黄橙 ③緻密
640-7 263-7	須恵器 杯	口～底 完	13.6 × 6.5 × 3.7	西央部床面	轆轤。右回転未切り。無調整。口縁部歪む。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
640-8 263-8	須恵器 杯	口～底 片	13.7 × 6.2 × 4.0	中央・南東部床面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①加酸化還元 ②灰白 ③細砂混る
640-9 263-9	須恵器 杯	口～底 片	13.2 × 7.0 × 3.6	竈 内	轆轤。右回転未切り。無調整。	①酸化・良好 ②淡橙 ③細砂混る
640-10 263-10	須恵器 杯	口～底 小片	13.7 × 7.0 × 4.1	埋 土	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・低温 ②明紫灰 ③細砂混る
640-11 263-11	須恵器 杯	口～底 片	14.2 × 6.3 × 5.1	南西部西壁下埋土	轆轤。右回転。底部手持寬削り。	①還元・やや低温 ②灰黒 ③細砂混る
640-12 263-12	須恵器 椀	口～体 小片	16.4 × — × ( 3.4)	南西部塊土敷在	轆轤。右回転。口縁～体部内外、油性灰化物付着。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
640-13 263-13	須恵器 椀	体～底 片	— × ( 6.4) × ( 3.3)	中央部埋土	轆轤。右回転未切り。付高台剥落。	①酸化 ②にぶい橙 ③細砂混る
640-14 263-14	須恵器 杯	体～底 片	— × 6.0 × ( 2.3)	北東部床面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①加酸化還元 ②灰白 ③緻密
640-15 263-15	須恵器 杯	体～底 片	— × 5.8 × ( 2.2)	南央部埋土	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
640-16 263-16	須恵器 杯	体～底 片	— × 6.4 × ( 1.6)	南央部床面	轆轤。右回転未切り。無調整。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
640-17 263-17	須恵器 椀	口～底 片	17.6 × ( 9.2) × ( 6.0)	南央部床面	轆轤。右回転未切り。付高台剥落内面灰処理後磨きに磨き。内周土器を挟す。	①加酸化還元 ②浅黄橙 橙～灰 ③細砂混る
640-18 263-18	須恵器 椀	体～底 片	— × 7.2 × ( 3.0)	西央部埋土	轆轤。右回転。底部回転削り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②にぶい橙 ③細砂混る
641-19 264-19	須恵器 椀	口～体 片	14.7 × — × ( 5.0)	竈 内	轆轤。右回転。付高台剥落。	①酸化・良 ②浅黄橙 ③細砂混る
641-20 264-20	須恵器 椀	口～底 片	13.6 × 5.6 × 5.5	西央部埋土	轆轤。右回転未切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
641-21 264-21	須恵器 椀	口～底 片	14.7 × 7.7 × 5.3	西央部掘形	轆轤。右回転未切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
641-22 264-22	須恵器 椀	口～底 片	14.9 × 7.4 × 5.6	中央部掘形	轆轤。右回転未切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
641-23 264-23	須恵器 椀	口～底 片	14.9 × ( 5.7) × ( 5.1)	竈 内	轆轤。右回転未切り。付高台横撫で、剥落。内面油性灰化物付着。	①加酸化還元・良 ②灰白 ③緻密
641-24 264-24	須恵器 椀	口～底 片	15.0 × 7.5 × 5.7	南東部埋土	轆轤。右回転未切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③細砂混る

第5章 1区の遺構と遺物

152号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・K) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
641-25 264-25	須恵器 碗	口～底 片	15.2 × 7.2 × 5.4	南東～南 中央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で、内 面油性炭化物付着。	①加酸化還元・良 ②灰白 ③緻密
641-26 264-26	須恵器 碗	口～底 片	15.2 × 8.4 × 5.4	南中央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・やや低温 ② 明緑灰 ③細砂混る
641-27 264-27	須恵器 碗	口～底 片	16.4 × 7.2 × 5.4	東中央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
641-28 264-28	須恵器 碗	口～体 小片	16.7 × — × (3.8)	北東部床 面	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰オ リーブ ③細砂混る
641-29 264-29	須恵器 碗	口～底 小片	17.8 × (8.0) × (6.8)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で、剥 落。内面油性炭化物付着。	①還元・良好 軟質 ②灰黄 ③緻密
641-30 264-30	須恵器 碗	体～底 片	— × 6.8 × (6.2)	北東部北 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で、内 外収収。	①還元・良 ②黒 ③細砂混る
642-31 264-31	須恵器 碗	体～底 小片	— × 7.0 × (4.5)	西中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
642-32 264-32	須恵器 碗	底	— × 7.0 × (2.5)	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。体 部意図的打割み。	①還元・良好 軟質 ②灰白 ③緻密
642-33 264-33	須恵器 碗	底	— × 6.6 × (2.0)	南東部南 壁下埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②明オ リーブ灰 ③細砂混る
642-34 264-34	須恵器 碗	底	— × 7.2 × (1.6)	北中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①加酸化還元・良好 ②によい橙 ③緻密
642-35 264-35	須恵器 碗	底 片	— × 8.9 × (1.8)	南中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
642-36 264-36	須恵器 碗	底 片	— × 6.8 × (1.7)	南中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 軟質 ②灰白 ③緻密
642-37 264-37	須恵器 碗	底 片	— × 7.0 × (2.1)	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①加酸化還元・低温 ②によい黄橙 ③細砂 混る
642-38 264-38	須恵器 碗	底	— × 7.0 × (1.8)	中央部掘 形	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。底 部「×」記施さ。	①酸化・良好 ②に よい赤褐 ③細砂混る
642-39 264-39	須恵器 碗	体～底 片	— × 6.2 × (2.1)	西中央部掘 形	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・低温 ②明緑 灰 ③細砂混る
642-40 264-40	須恵器 碗	体～底 片	— × 7.6 × (2.4)	東中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
642-41 264-41	須恵器 碗	体～底 片	— × 8.3 × (2.6)	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
642-42 264-42	須恵器 碗	体～底 片	— × 8.0 × (2.2)	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
642-43 265-43	須恵器 碗	体～底 片	— × 6.7 × (4.0)	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

I52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・K) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調査の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
642-44 265-44	須恵器 皿	口～底 片	13.7 × 7.2 × 3.1	竪内	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
642-45 265-45	須恵器 皿	口～底 片	14.2 × ( 8.0 ) × ( 2.2 )	中央部掘 形	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で、割 落。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
642-46 265-46	須恵器 皿	口～底 片	13.2 × ( 6.5 ) × ( 2.1 )	北東部埋 土	轆轤。右回転。底部、付高台欠損。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
642-47 265-47	須恵器 皿	口～底 完	12.8 × 6.7 × 2.8	南西方向 遺構外	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。口 縁部歪み顯著。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
642-48 265-48	須恵器 皿	口～底 片	14.2 × 8.0 × 2.5	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低溫 ②灰 ③細砂混る
642-49 265-49	灰輪陶器 碗	口～体 片	12.3 × — × ( 2.7 )	南東部清 壁下床面	轆轤。右回転。体部上位内外施釉。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
642-50 265-50	灰輪陶器 碗	底 片	— × 7.3 × ( 2.5 )	西中部埋 土	轆轤。右回転。付高台、底部横断で。施 釉。刷毛塗り。	①還元・良好 ②浅黄 ③緻密
642-51 265-51	灰輪陶器 皿	底 片	— × 8.4 × ( 1.6 )	南西部床 面	轆轤。右回転。付高台、底部横断で。施 釉。刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
642-52 265-52	灰輪陶器 碗	体～底 小片	— × 6.4 × ( 2.3 )	南西部床 面	轆轤。右回転。付高台、底部横断で。施 釉。刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
642-53 265-53	灰輪陶器 碗	口～体 片	18.3 × — × ( 5.2 )	中央部床 面	轆轤。右回転。体部内外施釉。刷毛塗り	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
642-54 265-54	灰輪陶器 碗	口～体 片	17.4 × — × ( 3.5 )	埋 土	轆轤。右回転。体部内外施釉。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
642-55 265-55	灰輪陶器 瓶子	頸～下 片	— × — × ( 8.2 )	埋 土	紐造か。轆轤。右回転。横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
642-56 265-56	緑輪陶器 碗	口～底 片	13.8 × 6.4 × 4.6	中央部埋 土敷在	轆轤。右回転。高台及び基部、回転荒削 り。全面施釉。体部に沈線2条。	①中世・良好 ②浅黄 ③灰土
642-57 265-57	緑輪陶器 碗	体 小片		南西部床 面	轆轤。見込部寄りに、筋形り。	①中世・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
642-58 265-58	緑輪陶器 碗	口 小片		掘 形	轆轤。施釉。	①還元・良 ②緑黄 ③緻密
642-59 265-59	須恵器 火舎	体～脚 片	— × 20.5 × (12.7)	南東部床 面	紐造。体部横断で。脚部削り。内面使用 による自然剥落。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
642-60 265-60	須恵器 壺	口～上 片	39.6 × — × (21.0)	竪内・他	紐造。横断で。	①加酸化還元・良好 ②灰白 ③緻密
644-61 266-61	須恵器 壺	頸～上 小片	— × — × ( 3.7 )	西中部埋 土	紐造。頸部横断で。体部叩打。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
644-62 266-62	須恵器 壺	下～底 片	— × 8.7 × ( 4.5 )	南東部床 面	紐造。横断で。底部回転糸切り。体部下 位、手持部削り。	①還元・良好 ②黄灰 ③細砂混る

## 第5章 I区の遺構と遺物

I 52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm・g) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③胎 土 その他
644-63 266-63	須 恵 器 壺	底 片	— × — × ( 3.8)	北西部床 面	付高台跡で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
644-64 266-64	土 師 器 壺	口へ上 片	16.9 × — × ( 9.0)	南央部床 面敷在	紐造。口頸部無で。体部横へ斜方向削り り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
644-65 266-65	土 師 器 壺	口へ中 片	18.0 × — × (16.8)	南東部埋 土	紐造。口頸部無で。体部上へ中位、斜へ横 方向、下位寄り縦方向削り。	①酸化・良好 ②によ い赤褐色 ③細砂混る
644-66 266-66	土 師 器 壺	口へ上 片	20.0 × — × ( 5.0)	南西部埋 土	紐造。口頸部無で。体部横方向削り。 内面横方向削跡で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
644-67 266-67	土 師 器 壺	口へ上 片	20.1 × — × ( 7.1)	北西部床 面	紐造。口頸部無で。体部削り。内面削 跡で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
644-68 266-68	土 師 器 壺	口へ上 片	21.2 × — × ( 6.0)	西央部埋 土	紐造。口頸部無で。指押痕顯著。体部削 り。内面削跡で。	①酸化・良好 ②によ い黄褐色 ③細砂混る
645-69 266-69	瓦 軒丸瓦	当 片	厚 3.0	中央部床 面	型押。裏面削り。側面削り。	①還元・良好 ②灰白 ③白砂粒混る
645-70 266-70	瓦 平瓦	小片	厚 2.2	南央部埋 土	縁色叩打。上面布目痕。下面交斜状削跡 で。葉部削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
645-71 267-71	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	南東部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。端部削 り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
645-72 267-72	瓦 平瓦	小片	厚 1.9	南東部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。端部削 り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
645-73 267-73	瓦 平瓦	小片	厚 1.6	床面位置 不詳	叩打。上面布目痕。下面横目痕。端部2 段面削り。	①還元・良好 ②褐灰 ③砂混る
645-74 267-74	瓦 平瓦	小片	厚 1.9	北西部床 面	叩打。上面布目痕。下面横目痕。端部2 段面削り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
645-75 267-75	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	南央部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。端部3段 面削り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
645-76 267-76	瓦 平瓦	小片	厚 2.0	北東部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。端部3段 面削り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
645-77 267-77	瓦 平瓦	小片	厚 1.8	中央部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
645-78 267-78	瓦 平瓦	小片	厚 2.2	東央部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。	①還元・良好 ②暗褐 ③砂混る
645-79 267-79	瓦 平瓦	小片	厚 2.0	埋 土	叩打。上面布目痕下面横目痕。	①酸化・良好 ②緑黄 ③砂混る
645-80 267-80	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	東央部床 面	叩打。上面布目痕。下面無で。端部削 り。	①還元・良好 ②暗灰 ③砂混る
645-81 267-81	瓦 平瓦	小片	厚 1.8	埋 土	叩打。上面布目痕無で。下面無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

I52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値(cm・#) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
645-82 267-82	瓦 瓦	小片	厚 1.3	埋 土	印打。上面布目痕。下面無て。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
646-83 267-83	土製品 罐羽口	先端部	長(6.3) 径4.5 孔径2.0	掘 形 北 部	先端部溶解物付着	①酸化 ②褐 ③砂混る
646-84 267-84	土製品 罐羽口	基部 小片	長(7.8)	埋 土	縦方向の隆状凹線	①酸化 ②明褐 ③白色粒混る
646-85 267-85	土製品 罐羽口	先端部 小片	長(5.3)	掘 形	先端部溶解物付着	①酸化 ②赤褐 ③白色粒混る
646-86 267-86	土製品 罐羽口	先端部 小片	長(4.0)	掘 形	面取り状成形痕	①酸化 ②明褐 ③砂混る
646-87 267-87	土製品 罐羽口	先端部 小片	長(4.4)	北 西 部 埋 土	先端部溶解物付着	①酸化 ②灰褐 ③白色粒混る
646-88 267-88	土製品 罐羽口	先端部 小片	長(5.1)	北 西 部 埋 土	先端部溶解物付着	①酸化 ②灰褐 ③小石混る
646-89 267-89	土製品 罐羽口	基部 小片	長(5.0)	埋 土	面取り状成形痕	①酸化 ②明褐 ③砂混る
646-90 267-90	鉄製品 釘	先端部 欠損	長(7.0) 厚0.7×0.5	埋 土	角釘。頂部陥らむ。	
646-91 267-91	鉄製品 釘?		長(3.4) 厚0.4	埋 土	角釘?	
646-92 267-92	鉄製品	環状部	長(4.1) 幅 3.0 厚 0.4	埋 土	断面扁平不定形で、環状。	
646-93 267-93	鉄製品	先	長(5.2) 幅 1.9 厚 0.5	埋 土	扁平短冊状。	
646-94 267-94	須恵器 転用磁石		長 4.0 幅 3.2 厚 0.7	埋 土	蓋頂部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
646-95 267-95	須恵器 転用磁石		長 4.4 幅 3.7 厚 0.7	南東部床 面	壺体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
646-96 267-96	須恵器 転用磁石		長 2.5 幅 2.4 厚 1.5	埋 土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
646-97 267-97	須恵器 転用磁石		長 4.0 幅 3.1 厚 1.2	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
646-98 267-98	須恵器 転用磁石		長 4.1 幅 3.1 厚 1.2	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②褐灰 ③細砂混る
646-99 267-99	須恵器 転用磁石		長 6.1 幅 4.2 厚 1.2	籠手の強 形	大壺口縁部転用。断面5カ所使用。	①還元・良好 ②暗緑 灰 ③細砂混る
646-100 267-100	須恵器 転用磁石		長 4.5 幅 3.0 厚 1.1	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・g) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
646-101 267-101	須恵器 転用磁石		長 6.0 幅 3.6 厚 0.8	南中央部 掘	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
646-102 267-102	須恵器 転用磁石		長 3.8 幅 3.1 厚 0.7	埋 土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
646-103 267-103	須恵器 転用磁石		長 4.7 幅 3.6 厚 1.0	埋 土	蓋頂部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
646-104 267-104	須恵器 転用磁石		長 5.5 幅 5.8 厚 1.7	南中央部掘 形	大壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
646-105 267-105	須恵器 転用磁石		長 3.6 幅 3.3 厚 1.1	埋 土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
646-106 267-106	須恵器 転用磁石		長 4.3 幅 3.5 厚 1.2	掘 形	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②黒 ③細砂混る
646-107 267-107	須恵器 転用磁石		長 6.4 幅 3.6 厚 0.9	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰褐 ③細砂混る
646-108 267-108	須恵器 転用磁石		長 4.2 幅 1.7 厚 1.2	埋 土	小片。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
647-109 268-109	石製品 磁石	小片	長 5.2 幅 3.3 厚 2.0	北西部埋 土	角柱状製品の破片か。2面使用。	流紋岩（磁沢？）
647-110 268-110	石製品 磁石	小片	長 3.4 幅 2.9 厚 2.6	南東部埋 土	全面使用。	流紋岩（磁沢？）
647-111 268-111	石製品 磁石		長 3.3 幅 1.6 厚 2.0	埋 土	小礫。1カ所使用。	角閃石安山岩
647-112 268-112	石製品 磁石	小片	長 2.7 幅 2.0 厚 2.1	埋 土	5カ所使用。	流紋岩（磁沢？）
647-113 268-113	石製品 磁石		長 4.0 幅 3.1 厚 1.7	埋 土	2カ所使用。	輝石安山岩（粗粒）
647-114 268-114	石製品 磁石	小片	長 4.6 幅 3.6 厚 1.2	中央部埋 土	6カ所使用。鉄片付着。	流紋岩（磁沢？）
647-115 268-115	石製品 磁石	小片	長 4.3 幅 3.0 厚 2.7	南西部西 壁下埋土	全面使用。	流紋岩（磁沢？）
647-116 268-116	石製品 磁石		長3.0 幅1.9 厚2.2	掘 形	1面使用。	角閃石安山岩
647-117 268-117	石製品 磁石		長3.0 幅2.1 厚2.3	掘 形	2面使用。	角閃石安山岩
647-118 268-118	石製品 磁石		長2.6 幅3.8 厚3.6	南東部掘 形	多面使用。	流紋岩（磁沢？）
647-119 268-119	石製品 磁石		長3.5 幅2.2 厚2.0	掘 形	1面使用。	角閃石安山岩

I 52号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・R) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
647-120 268-120	石製品 砥石		長 3.7 幅 1.8 厚 2.6	掘形	2面使用。	角閃石安山岩
647-121 268-121	石製品 砥石		長 3.2 幅 1.8 厚 1.6	掘形	2面使用。	角閃石安山岩
647-122 268-122	石製品 砥石		長 3.8 幅 2.2 厚 1.6	掘形	2面使用。刃痕あり。	角閃石安山岩
647-123 268-123	石製品 砥石		長 3.7 幅 1.7 厚 1.7	掘形	1面使用。刃痕あり。	角閃石安山岩
647-124 268-124	石製品 砥石		長 2.7 幅 3.2 厚 3	掘形	3面使用。	角閃石安山岩
647-125 268-125	石製品 砥石		長 3.5 幅 2.2 厚 1.9	掘形	多面使用。	角閃石安山岩
647-126 268-126	石製品 砥石		長 4.8 幅 2.2 厚 2.6	掘形	4面使用。刃痕あり。	洗紋岩(砥沢?)
647-127 268-127	石製品 砥石		長 2.9 幅 3.8 厚 2.5	掘形	2面使用。1面は刃痕のみ。	角閃石安山岩

I 54号住居跡 (Fig. 648, 649・PL. 268)

I 区の中央部や南寄りに位置し、50～52 I 17～19の範囲にある。南側で45号住居跡と、東南側で29号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は45号より旧く、29号住居跡より新しい時期の所産である。竈や炉跡などは検出されず竪穴状遺構に属する。平面形態は東西に長軸をもつ隅丸の長方形を呈する。規模は、東西約4.8m・南北約3m・壁高約20cmを測る。床面は平坦をなすが踏み締まりがなく軟弱である。出土遺物は極めて少ない。

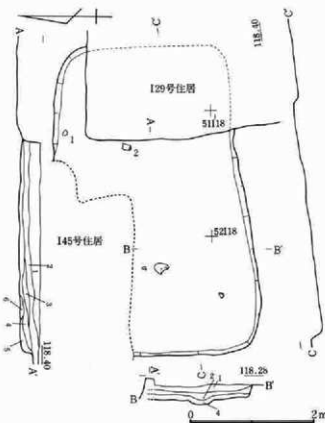


Fig. 648 I 54号住居跡

## I 54号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1 と似るが、締り異味強い。
- 3 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 4 暗褐色土 C 軽石を少量含む、異味強い。
- 5 暗褐色土
- 6 褐色土

第5章 I区の遺構と遺物

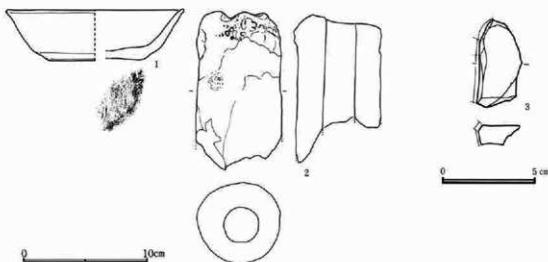


Fig.649 I 54号住居跡出土遺物

I 54号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm・K) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
649-1 268-1	須恵器 杯	口～底 反	14.2 × 7.5 × 4.0	北東部北 壁寄床面	輪軸。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
649-2 268-2	土製品 羽口	先～中	長(12.5) 幅6.7 厚6.5	北東部床 面	棒付け、撫で。先端部浴解物付着。	①酸化、一部二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
649-3 268-3	須恵器 転用磁石		長 4.6 幅 2.2 厚 1.0	埋土	壁体部片転用。断面1ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

I 55号住居跡 (Fig. 650～656・PL. 269～273)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.96 × 3.53	N-88° -E	東壁やや南寄り	

I 区の中央部やや南寄りに位置し、53～55 I 14～17の範囲にある。南側は調査区域内にある道路部分にかかり未検出である。北側から西側にかけては52号・58号・59号住居跡と重複しており、新旧関係は52号住居跡より旧く、58号・59号住居跡より新しい時期の所産である。平面形態は南北に長軸をもつ長方形を呈すると考えられる。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし踏み跡よりは北西部を除いて比較的良好な状態である。貯蔵穴・壁下の溝等は検出されない。竈は東壁に付設され楕円形に掘り込まれる。袖部や煙道部の作り出しはないが掘形調査で左袖にあたる部分から風化の著しい凝灰岩の加工材残欠が検出され、本来は袖石が存在していたと考えられる。燃焼部幅約60cm・奥行き約75cmを測る。出土遺物は比較的多く平瓦が目立つ。その他銅鈴が検出されている。



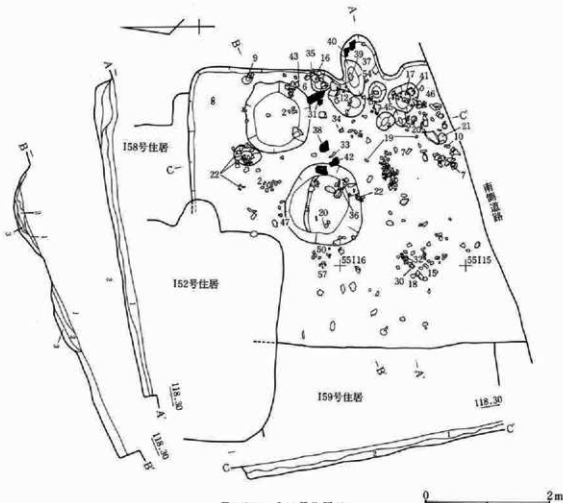


Fig.650 155号住居跡

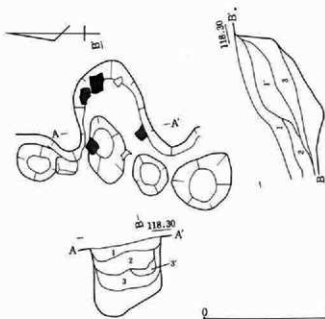


Fig.651 155号住居跡縮

155号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1よりC軽石の量が少なく黒味の強い層。

155号住居跡(土柱)

- 1 暗褐色土 壁く締った床面。
- 2 暗褐色土 1よりC軽石を含む砂質。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化粒を含む。

155号住居跡礎

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 1' 暗褐色土 1よりC軽石が少なく黒味の強い層。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 3 焼土塊。
- 3' 焼土塊。

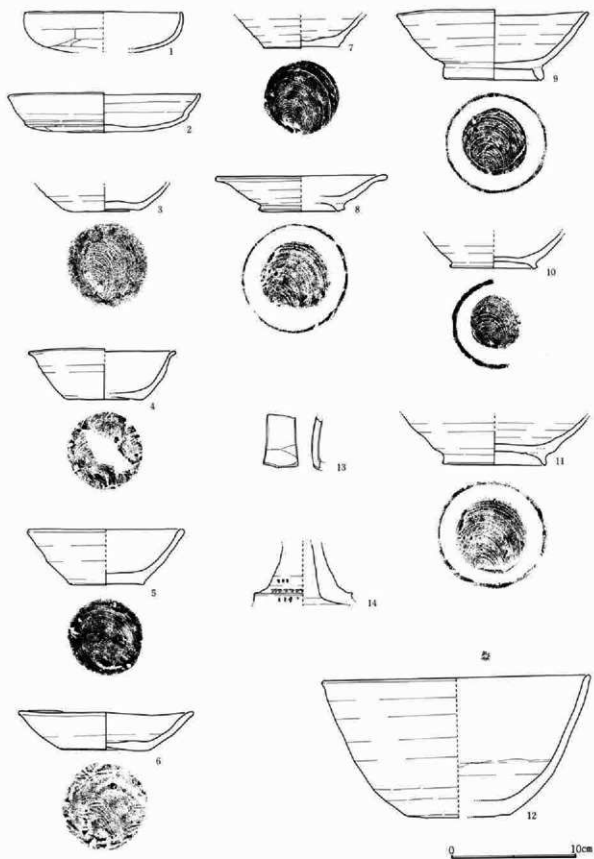


Fig.652 155号住居跡出土遺物(1)

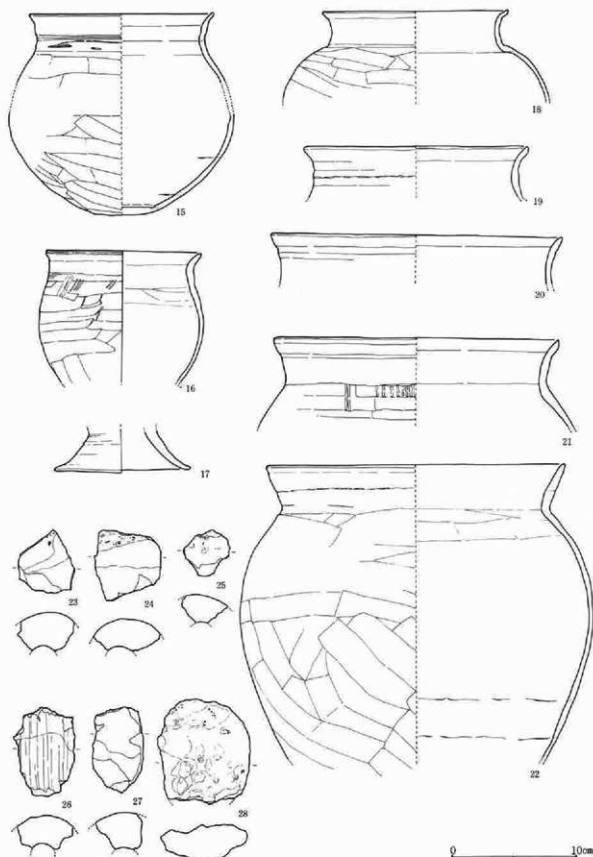


Fig.653 I55号住居跡出土遺物(2)

第5章 Ⅰ区の遺構と遺物

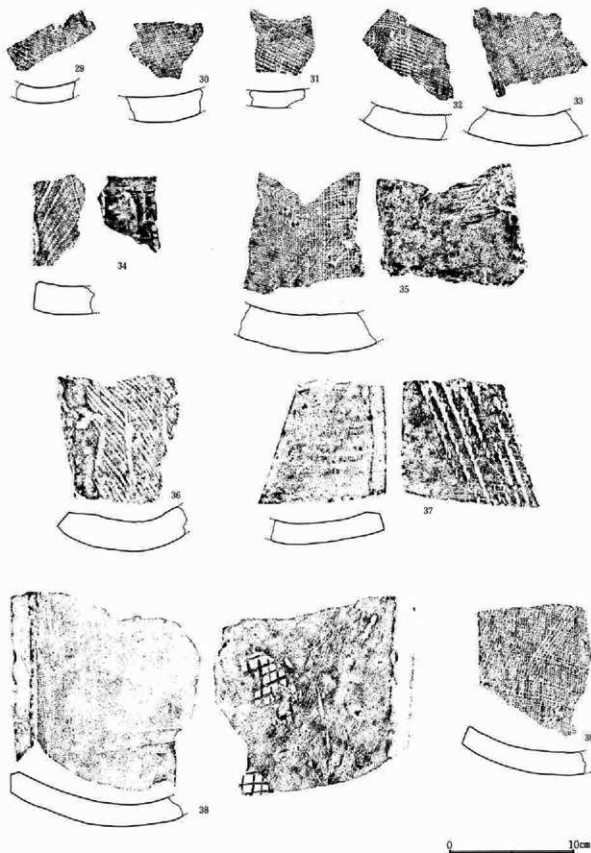


Fig.654 Ⅰ55号住居跡出土遺物(3)

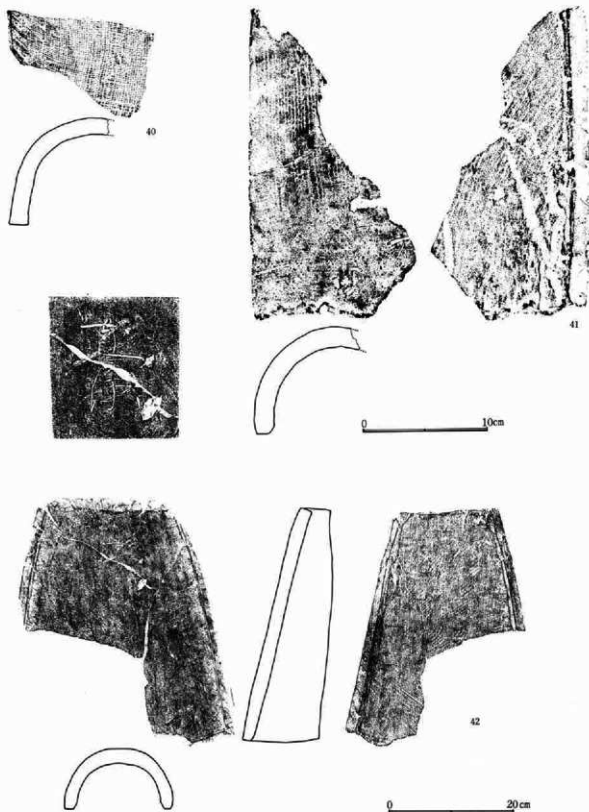


Fig.655 I 55号住居跡出土遺物(4)

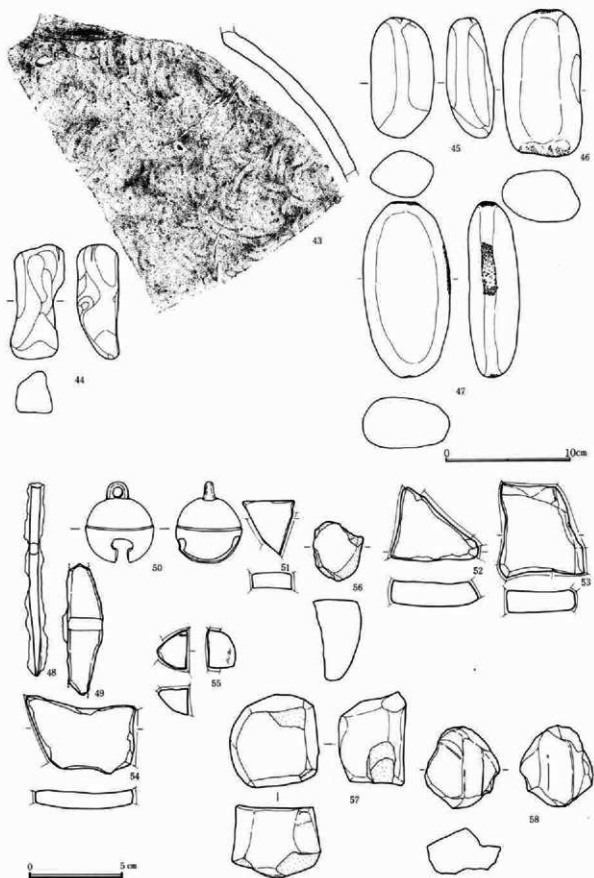


Fig.656 155号住居跡出土遺物(5)

I55号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調
						③胎土 ④その他
652-1 270-1	土師器 杯	口～底 小片	12.7 × — × 3.2	南西部掘 り。	指押。口縁部及び内面無で。体底部削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
652-2 270-2	土師器 杯	口～底 完	15.4 × 12.8 × 3.1	北央～東 央部掘形	紐造巻上。口縁部及び内面、横方向無で。底部不定方向削り。	①酸化・良好 ②にぶ い焼 ③細砂混る
652-3 270-3	須恵器 杯	底部	— × 6.0 × (2.0)	埋土	轆轤。右回転糸切り。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
652-4 270-4	須恵器 杯	口～底 殆	11.8 × 6.2 × 4.0	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部歪む。	①還元・良好 ②暗青 灰 ③細砂混る
652-5 270-5	須恵器 杯	底部	12.5 × 5.9 × 4.4	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②褐灰 ③細砂混る
652-6 270-6	須恵器 杯	(完)	14.0 × 7.0 × 3.2	東央部東 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部歪む。	①還元・良 ②灰 ③緻密
652-7 270-7	須恵器 杯	体～底 殆	— × 6.0 × (2.4)	南央部床 面	轆轤。右回転糸切り。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
652-8 270-8	須恵器 皿	口～底 殆	13.8 × 6.9 × 2.8	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
652-9 270-9	須恵器 椀	口～底 完	15.3 × 8.0 × 5.6	北東部東 壁下床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。付高台は体部と別胎土。口縁部歪む。	①還元・やや低温 ②灰白 ③細砂混る
652-10 270-10	須恵器 椀	体～底 殆	— × 7.0 × (2.8)	南央部掘 形	轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
652-11 270-11	須恵器 椀	体～底 殆	— × 8.3 × (3.8)	南東部埋 土	底部円柱造。轆轤。右回転糸切り。付高台横無で。付高台は体部と別胎土。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
652-12 271-12	須恵器 鉢	口～底 殆	21.4 × 8.0 × 11.1	東央部埋 土	紐造。轆轤。右回転糸切り。体部下位、回転削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
652-13 270-13	灰輪陶器 小瓶	把手		埋土	板状。置り後無で。側面取り。	①良好 ②灰白 ③緻密
652-14 270-14	須恵器 高杯	脚 殆	— × — × (4.6)	埋土	紐造巻上。横無で。列点彫文。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
653-15 271-15	土師器 壺	口～底	14.7 × 3.8 × 15.9	南西部西 壁下面形	紐造。口縁部及び内面無で。体部上位横、中位以下斜方向削り。	①還元・良好 ②にぶ い焼 ③細砂混る
653-16 271-16	土師器 壺	口～下 殆	12.4 × — × (10.5)	東央部東 壁床面	紐造。口縁部及び内面無で。体部上～中位横、下位斜方向削り。小型。	①還元・良好 ②にぶ い焼 ④緻密
653-17 271-17	土師器 台付壺	台	— × 10.9 × (3.3)	南東部埋 土	紐造。指押後横方向無で。下部部歪む。	①酸化・良好 ②にぶ い焼 ③細砂混る
653-18 271-18	土師器 壺	口～上 殆	14.9 × — × (7.0)	南西部西 壁下面形	紐造。口縁部及び内面、横方向無で。体部上位横方向削り。球状体部。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
653-19 271-19	土師器 壺	口～頸	17.9 × — × (4.0)	中央～南 央部床面	紐造。口縁部及び内面、横方向無で。	①酸化・良 ②にぶ い焼 ④緻密

第5章 I区の遺構と遺物

I55号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
653-20 271-20	土師器 罎	口～胴	23.3 × ー × ( 3.8)	南東～西 中央部	紐造。口頸部及び内面、横方向撫で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
653-21 271-21	土師器 罎	口～上	22.8 × ー × ( 7.0)	南東部床 面	紐造。口頸部及び内面撫で。体部上位横 方向撫用り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
653-22 271-22	土師器 罎	口～中 身	13.8 × ー × (24.7)	北尖部床 面	紐造。口頸部撫で。体部上半横、下半斜 方向撫用り。内面横方向撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
653-23 271-23	土製品 陶羽口	先 身	長( 5.0)	埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
653-24 271-24	土製品 陶羽口	先 身	長( 5.6)	埋 土	棒付、撫で。指押痕残る。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
653-25 271-25	土製品 陶羽口	先	長( 3.7)	埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②灰黄 褐 ③砂混る
653-26 271-26	土製品 陶羽口	中	長( 7.0)	埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②灰黄 ～橙 ③細砂混る
653-27 271-27	土製品 陶羽口	中	長( 6.8)	埋 土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②明褐 ③細砂混る
653-28 271-28	鉄 碗形煎鉢	全	長(6.1)×幅7.4×厚2.7	埋 土	碗底部に植物繊維付着。鉄分少量。	
654-29 272-29	瓦 平瓦	小片	厚 1.2	埋 土	上面布目痕。下面撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
654-30 272-30	瓦 平瓦	小片	厚 2.0	南西部埋 土	轆巻、印打。上面布目痕。下面撫で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
654-31 272-31	瓦 平瓦	小片	厚 1.3	東尖部埋 土	上面布目痕。下面撫で。	①酸化・良好 ②によ い黄橙 ③細砂混る
654-32 272-32	瓦 平瓦	小片	厚 1.9	南西部埋 土	上面布目痕。下面撫で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③砂混る
654-33 272-33	瓦 平瓦	小片	厚 2.4	中央部埋 土	上面布目痕。下面撫で。	①酸化・良好 ②によ い黄橙 ③砂混る
654-34 272-34	瓦 平瓦	小片	厚 2.2	東尖部床 面	轆巻、印打。上面布目痕。下面撫で。側 端部2段面取り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
654-35 272-35	瓦 平瓦	小片	厚 3.0	東尖部東 壁下埋土	上面布目痕。下面撫で。	①還元・良好 ②黒灰 ③砂混る
654-36 272-36	瓦 平瓦	小片	厚 2.3	中央部掘 形	上面布目痕。下面掘削り。側端部2段面 取り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
654-37 272-37	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	竈内埋土	上面布目痕。下面粗い轆目印打痕。前 端部1段、側端部2段面取り。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
654-38 272-38	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	中央部埋 土	上面布目痕上、黄撫で。下面格子目状印 打痕上、黄撫で。側端部2段面取り。	①酸化・良好 ②によ い黄橙 ③細砂混る



I 55号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口徑 × 底徑 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③胎土 ④色調 ⑤其他
654-39 272-39	瓦 平瓦	小片	厚 1.8	竈内埋土	上面布目痕、下面磨で。端部面取り。	①酸化・良好 ②黒灰 ③砂混る
655-40 272-40	瓦 平瓦	小片	厚 1.6	竈内埋土	上面磨で。下面布目痕。端部面取り。	①還元・良好 ②暗灰 ③砂混る
655-41 272-41	瓦 平瓦		長(25.0) 厚 1.6	南東部埋土	上面縄目印打後、磨で。下面布目痕。側端部2段面取り。	①還元・良好 ②灰白 ③磨密
655-42 272-42	瓦 平瓦		長38.0×幅17.5×厚 9.5	中央部埋土	上面なで、下面布目痕。端部面取り。上面に「真浄」?、磨込み。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
656-43 273-43	須恵器 大	肩部		埋土	印打。	①還元・良好 ②暗灰 ③砂混る
656-44 273-44	石 一	完	長 9.1×幅 4.3×厚 3.4 172.9g	西中央部床面	棒状円礫。	磨結凝灰岩
656-45 273-45	石 一	完	長 9.6×幅 5.1×厚 3.8 247.0g	東中央部床面	長円礫。	石英閃緑岩
656-46 273-46	石 一	完	長11.7×幅 6.3×厚 4.1 530.7g	南東部床面	扁平長円礫。面端打撃痕。	石英閃緑岩
656-47 273-47	石 一	完	長14.0×幅 7.0×厚 4.2 607.0g	北西部埋土	扁平長円礫。両端・側縁打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)
656-48 273-48	鉄製品 釘?	頂部欠損	長(10.2) 厚0.6	埋土	角釘?	
656-49 273-49	鉄製品		長(6.9) 幅1.8 厚0.7	埋土		
656-50 273-50	銅製品 鈴	完	径 3.6 総高 0.9 鈕孔径0.5 厚0.1	西中央部床面	胴中央におわずかな段。内部に鉄玉入る。	
656-51 273-51	須恵器 転用磁石		長 2.8 幅 2.8 厚 0.8	埋土	蓋頂部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
656-52 273-52	須恵器 転用磁石		長 4.5 幅 3.8 厚 1.2	埋土	蓋頂部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
656-53 273-53	須恵器 転用磁石		長 5.0 幅 4.5 厚 1.1	埋土	壺体部片転用。断面6カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
656-54 273-54	須恵器 転用磁石		長 5.9 幅 3.2 厚 0.8	竈内埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
656-55 273-55	石製品 砥石		長 2.2 幅 1.7 厚 1.6	埋土	ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
656-56 273-56	石製品 砥石	小片	長 4.2 幅 3.1 厚 2.6	埋土	円礫の1カ所。靴状に使用。	流紋岩(砥紙?)
656-57 273-57	石製品 砥石		長 4.7 幅 3.6 厚 4.6	埋土	ほぼ全面使用。気泡多く粗い。	角閃石安山岩
656-58 273-58	石製品 砥石		長 4.3 幅 4.0 厚 2.2	埋土	円礫。6カ所使用。	角閃石安山岩

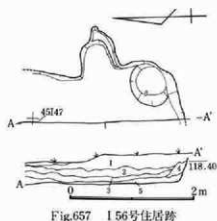


Fig.657 I 56号住居跡

I 56号住居跡 (Fig. 657, 658・PL. 273)

I区の北東部に位置し、44 I 46の範囲にある。調査が2期に渡ったことと2号鍛冶工房跡との重複のため、住居跡の北側及び西側を明瞭に検出できなかった。検出された範囲では竈を東壁に付設され、方形を呈する平面形態と考えられる。壁高約15cmで浅い掘り込みである。南東壁には円形の貯蔵穴が穿たれ、径約35cm・深

I 56号住居跡

- 1 暗褐色土 白灰色砂質塊・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 白灰色砂質塊を多量に含む。
- 3 暗褐色土 埴り粘土あり。
- 4 暗褐色土 C顆石を含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒を含む。

さ約12cmを測る。竈は楕円形の燃焼部から短い煙道部が作り出される。燃焼部幅約60cm・奥行約60cm、煙道部長さ30cmを測る。出土遺物は少ない。

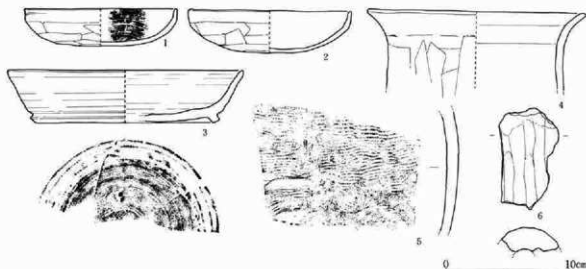


Fig.658 I 56号住居跡出土遺物

I 56号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存法	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 ④その他
658-1 273-1	土師器 杯	口～底 片	12.2 × - × 3.0	埋土	指押。口縁部及び内面施で。体部横、底部不定方向寛削り。内面「×」貫通。	①酸化・良好 ②よい黄橙 ③細砂混る
658-2 273-2	土師器 杯	口～底 片	13.1 × - × 3.4	埋土	指押。口縁部及び内面施で。体部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
658-3 273-3	土師器 鉢	口～底 片	18.9 × 15.1 × 4.2	埋土	横縁右回転糸切り。高台～底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
658-4 273-4	土師器 甕	口～上 片	17.5 × - × (6.2)	埋土	組造。口頸部施で。縦方向寛削り長胴形。	①酸化・良好 ②よい黄橙 ③細砂混る
658-5 273-5	須恵器 壺	体小片	- × - × (9.5)	埋土	組造。叩打。転用不明。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂少量混る
658-6 273-6	土製品 編羽口	中片	長(8.0)	埋土	棒付。縦方向施で。	①酸化・一部二次還元 ②灰～黄灰 ③細砂混る

I 57号住居跡 (Fig. 659~662・PL. 274, 275)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.70 × 3.90	N-80.5°-E	東壁やや南寄り	

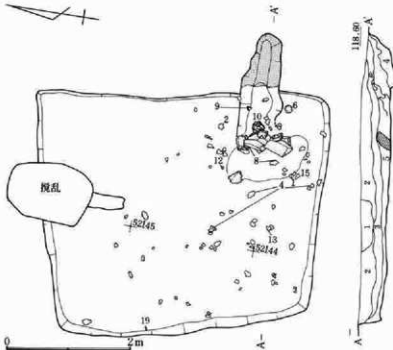


Fig.659 I 57号住居跡

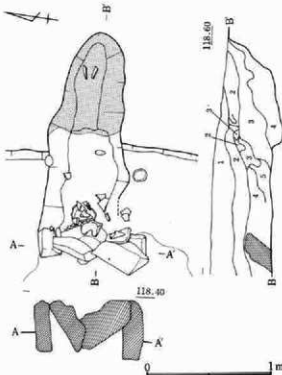


Fig.660 I 57号住居跡竪穴

I 区の北側中央部に位置し、50~52 I 43~45の範囲にある。住居跡北東部に18号住居跡と重複しているがこれよりも新しい時期の所産である。また北壁の一部は掘乱によって破壊されている。壁高は約40cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面は凹凸のある凝灰岩質層面に灰褐色土を固く敷きつめている。貯蔵穴・壁下の溝は検出されない。竪穴は東壁に付設され、袖部は長く住居内に張り出し、煙道部は幅広く長く作り出される。

袖の検出は不明瞭であったが、東壁から約60~80cm内側に袖材及びそれにかかる天井部の構えが残されておりすくなくとも焚口部がこの位置にあったことを窺わせる。用材は全て凝灰岩の加工材である。袖材間内法約60cmを測り、燃焼部もこの幅で細長く作られる。奥行き80cm、幅50cmを測る。出土遺物は両側に多いがとくに竪穴周辺に集中する。

## I 57号住居跡

- 1 暗褐色土 汚れたB軽石・砂・土  
灰埋土。
- 2 暗褐色土 焼土粒・C軽石を含み  
汚れた層。
- 3 暗褐色土 Iと似るが、粘性層あり。
- 4 暗褐色土 炭化粒を含む。
- 5 暗褐色土 餅りあり。

## I 57号住居跡竪穴

- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化粒・C軽石を含み、汚れた層。
- 2 暗褐色土 焼土粒・C軽石を多量に含み、餅りあり。
- 3 暗褐色土 焼土塊。
- 4 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 5 暗褐色土

第5章 Ⅰ区の遺構と遺物

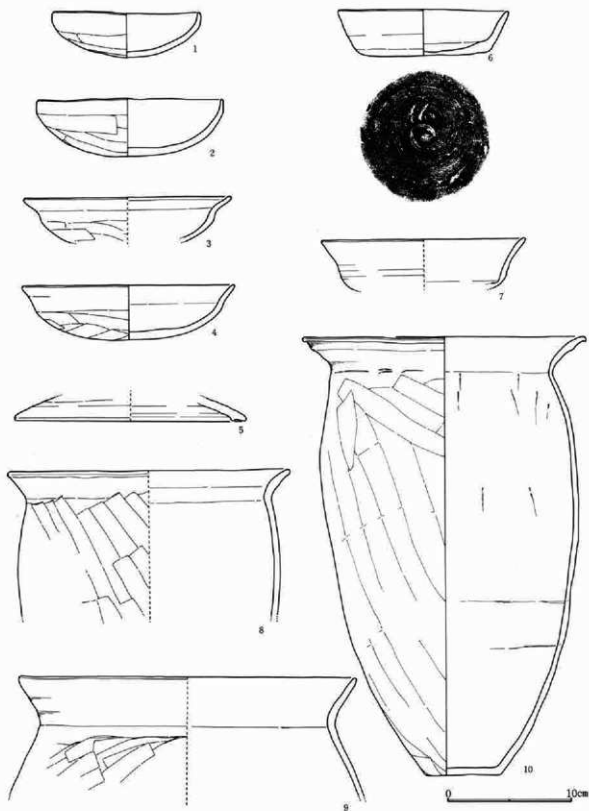


Fig.661 I 57号住居跡出土遺物(1)



Fig.662 157号住居跡出土遺物(2)

157号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
661-1 274-1	土器 杯	口～底 %	11.7 × — × 3.8	竈内・南 中央部床面	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向磨削り。	①酸化・良好 ②横 ③粗砂混る
661-2 274-2	土器 杯	口～底 %	11.9 × — × 4.6	東尖部床 面	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向磨削り。	①酸化・良好 ②横 ③粗砂混る
661-3 274-3	土器 杯 小片	口～体 小片	16.6 × — × (3.6)	竈内	口縁部強く外反。横撫で。体底部不定方 向磨削り。	①酸化・良 ②横 ③精密
661-4 275-4	土器 杯	口～底 残	17.0 × — × 4.3	南尖部埋 土	口縁部外反。横撫で。体底部不定方向磨 削り。	①酸化・良好 ②横 ③粗砂混る
661-5 275-5	須恵器 蓋	小片	18.6 × 横 — × (1.9)	掘形埋土	轆轤右回転。頂部、不定方向磨削り。	①還元・低溫 ②によ い黄橙 ③緻密

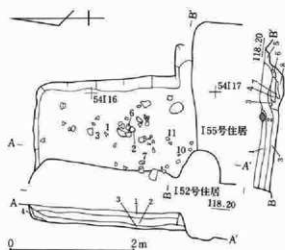
第5章 I区の遺構と遺物

I 57号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
661-6 275-6	須置器 杯	口~底 完	13.6 × 9.5 × 3.7		南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。底部回転滑り。	①酸化・良好 ②に よ赤褐色 ③細砂混る
661-7 275-7	須置器 杯	口~体 片	16.3 × — × (4.0)		南東部掘 形	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
661-8 275-8	土師器 壺	口~中 片	22.6 × — × (11.8)		南東部埋 土	紐造。口頸部曲で。体部斜方向寛削り。 内面横方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
661-9 275-9	土師器 壺	口~上	27.0 × — × (9.4)		埋土部 埋土	紐造。口頸部曲で。体部斜方向寛削り。 内面曲で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
661-10 275-10	土師器 壺	口~底 片	22.7 × 6.0 × 34.7		電内	紐造。口頸部曲で。体部斜~縦方向寛削り。 内面横方向寛削り後、撫で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
662-11 275-11	石製品		長 5.2 幅 2.3 厚 7.3		中央部埋 土	土製羽口先端装着用か。両面穿孔中止。 紡車車輪としては孔径過大。	角閃石安山岩
662-12 275-12	土製品 編羽口	先端	長 7.0		南東部方 向遺構外	棒付け。撫で。先端部溶接物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰 ③細砂混る
662-13 275-13	鉄 輪形鍔		長 7.5 幅 7.9 厚 3.5		南東部埋 土	気泡孔多。炭化物混入。	
662-14 275-14	石 一	完	長 9.6 幅 5.7 厚 2.8 240.2g		中央部掘 形	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
662-15 275-15	石 一	片	長(7.4) 幅 4.6 厚 4.1 (210.9g)		南東部床 面	三角棒状円盤。平欠。	砂岩
662-16 275-16	石 一	完	長12.2 幅 5.8 厚 2.8 284.4g		電内掘形	扁平長円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
662-17 275-17	石 一	完	長14.0 幅 6.2 厚 6.2 753.9g		電内掘形	三角棒状円盤。	輝石安山岩 (粗粒)
662-18 275-18	石 一	完	長13.2 幅 6.1 厚 4.0 455.5g		電内掘形	扁平長円盤。	石英岩
662-19 275-19	鉄製品 釘?		長(5.7) 厚 0.4		西壁下 床	角釘。身部湾曲。	

I 58号住居跡 (Fig. 663, 664・PL. 276)

I 区の中央部やや南寄りに位置し、53・54 I 17・18の範囲にある。住居跡西側は52号と南側は55号住居跡とそれぞれ重複しており、両者より古い時期の所産である。そのため北東部を除きそのほとんどは消失している。平面形態は竪を東壁にもつ方形を呈すると考えられる。壁高は約24cmを測りやや傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが、竪の前方部を除き全体の踏み締まりは弱い。竪は東壁に付設されるが、南半分は55号住居跡によって破壊されており詳細は不明である。袖部の存在はなく、楕円形に掘り込まれやや窪みをもつ燃焼部より急角度で立ち上がり、煙道部ないしは煙り出し孔を作り出す。出土遺物は羽口や角閃石安山岩製の砥石が多い。



I 58号住居跡

- 1 暗褐色土 細粒C砂石を含む。
- 2 暗褐色土 C砂石・炭化粒を含む。
- 3 黄褐色土 粘性あり。
- 4 暗褐色土 粘りあり。
- 5 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 7 暗褐色土 炭化粒を含む。
- 8 焼土塊 灰を含む。

Fig.663 I 58号住居跡

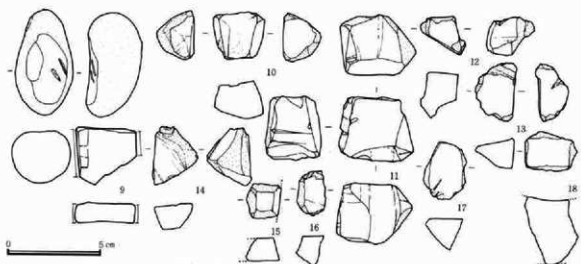
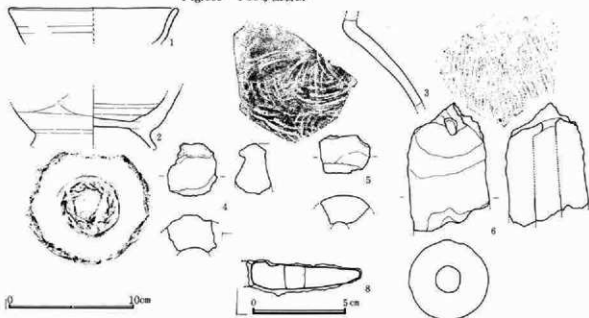


Fig.664 I 58号住居跡出土遺物

第5章 I区の遺構と遺物

I 58号住居跡出土遺物観察表

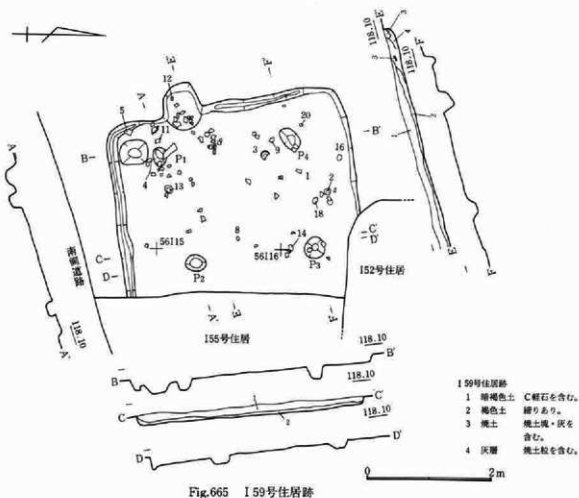
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
664-1 276-1	須恵器 杯	口 1/2	13.6 × — × ( 2.6)	北東部埋 土	轆轤, 右回転。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
664-2 276-2	須恵器 瓶	底 1/2	— × — × ( 4.5)	東中部埋 土	底部円板。紐造。体部回転寛削り。付高 台横溝で。	①還元・良 ②灰 ③粗粘土
664-3 276-3	須恵器 壺	肩部 小片		北東部埋 土	叩打。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
664-4 266-4	土製品 陶羽口	先 小片	長( 4.1)	南東部埋 土	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・良 ②灰黒 ③砂混る
664-5 276-5	土製品 陶羽口	中	長( 2.9)	埋 土	棒付。撫で。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
664-6 276-6	土製品 陶羽口	先～中	長(60.2)×幅6.3×厚6.4	東中部埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 黒～灰 ③細砂混る
664-7 276-7	石製品 砥石		長11.0 幅 6.2 厚 5.4	東中部埋 土	円盤の1面使用。	角閃石安山岩
664-8 276-8	鉄製品		長( 6 ) 幅 1.2 厚1	北東部埋 土		
664-9 276-9	須恵器 転用砥石		長 3.0 幅 3.3 厚 1.1	埋 土	大盛器部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
664-10 276-10	石製品 砥石		長 2.5 幅 2.7 厚 2.0	東中部埋 土	3カ所使用。刃当痕あり。	角閃石安山岩
664-11 276-11	石製品 砥石		長 2.5 幅 2.0 厚 2.5	埋 土	3カ所使用。	角閃石安山岩
664-12 276-12	石製品 砥石		長 3.1 幅 2.1 厚 1.5	埋 土	2面使用。	角閃石安山岩
664-13 276-13	石製品 砥石		長 3.1 幅 2.4 厚 1.3	埋 土	靴状に2面使用。刃当痕1。	角閃石安山岩
664-14 276-14	石製品 砥石		長 3.4 幅 4.0 厚 3.2	東中部埋 土	立方形状に各面使用。刃当痕1。	角閃石安山岩
664-15 276-15	石製品 砥石		長 1.8 幅 1.8 厚 1.2	埋 土	3面使用。	輝石安山岩(粗粒)
664-16 276-16	石製品 砥石		長 2.3 幅 1.8 厚 1.2	埋 土	1面使用。刃当痕1。	角閃石安山岩
664-17 276-17	石製品 砥石		長 3.0 幅 2.2 厚 1.7	埋 土	3面使用。うち1面は靴状。	角閃石安山岩
664-18 276-18	石製品 砥石		長 2.8 幅 2.1 厚 3.5	埋 土	砕砕か。1面使用痕。	輝石安山岩(粗粒)



I 59号住居跡 (Fig. 665, 666・PL. 276)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.06 × 2.71	N-103.5'-S	西壁やや南寄り	楕円形 46 × 36 × 23

I 区の中央部やや南西寄りに位置し、55～57 I 14～16の範囲にある。北東部から東部にかけては52号・55号・74号住居跡と、また西部では36号住居跡の竈煙道部の一部が重複している。新旧関係はいずれの住居跡より古い時期の所産である。当跡は唯一西壁に竈を付設する遺構である。掘り込みは浅く壁高約12cmを測る。床面は平坦をなすが全体に軟弱である。東壁から南壁にかけて幅約12cm、深さ約6cmの壁下の溝が巡る。柱穴と考えられる穴が4箇所に検出されている。いずれも円形ないしは楕円形を呈する。P<sub>1</sub>は径28×22cm・深さ18cm、P<sub>2</sub>は径32×26cm・深さ20cm、P<sub>3</sub>は径35cm・深さ10cm、P<sub>4</sub>は径40×26cm・深さ12cmを測る。いずれも浅い掘形である。柱間はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は1.8m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は1.9m、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は1.7m、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は2.1mを測る。竈は西壁の南寄りに付設され、楕円形に掘り込まれる。袖部・煙道部などは検出できなかった。焼焼部はすり鉢状に窪み幅約60cm・奥行約70cmを測る。出土遺物は散在して検出されている。



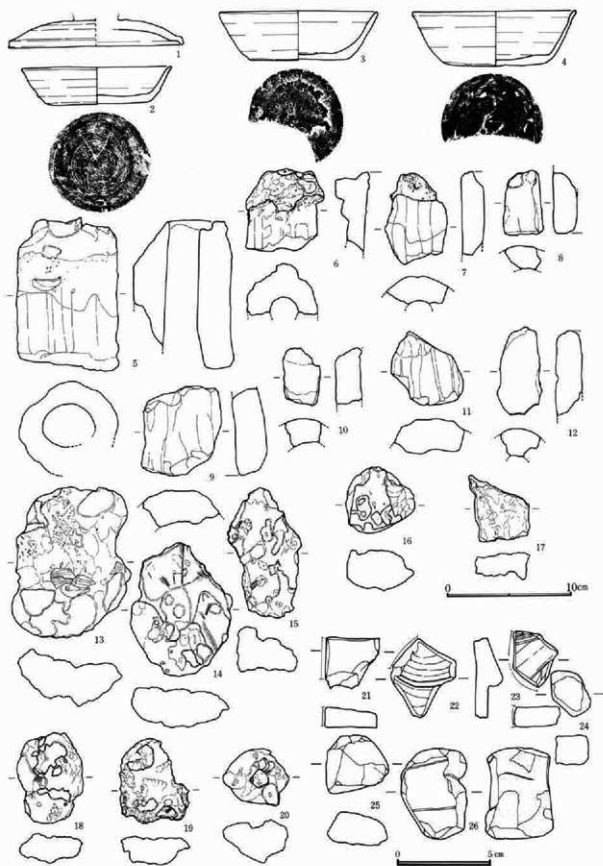


Fig.666 Ⅰ59号住居跡出土遺物

I59号住居跡出土遺物観察表

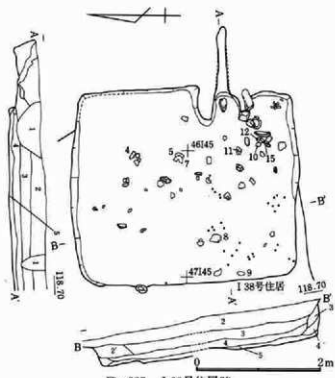
Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口徑 × 底徑 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
666-1 276-1	須 恵 器 蓋 (転用器)	頂～端 片	14.0 × 横一 × ( 2.2)	北西部床 面	轆轤。右回転。頂部2段回転削り。内 面裏に転用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
666-2 276-2	須 恵 器 杯	口～底 完	12.0 × 8.3 × 3.0	北中部床 面	轆轤。右回転。腰～底部回転削り。底 部「×」寛磨き。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
666-3 276-3	須 恵 器 杯	口～底 片	12.7 × 7.8 × 3.9	北西部埋 土	轆轤。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
666-4 276-4	須 恵 器 杯	口～底 片	13.1 × 8.3 × 4.5	南西部床 面	轆轤。右回転削切り。無調整。体部一部 吸炭。	①還元 ②灰 ③緻密
966-5 276-5	土 製 品 陶 羽 口	先～基	長11.5 幅 7.9 厚 7.5	北西部隅 寄床面	棒付、縦方向無で。先端部より基部まで ほぼ同一径。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②黒～ にぶい橙 ③粗砂混る
966-6 276-6	土 製 品 陶 羽 口	先～中 片	長(6.5) 幅 5.6 厚一	埋 土	棒付、縦方向無で。器壁、比較的薄い。 先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
966-7 276-7	土 製 品 陶 羽 口	先～中 片	長( 7.2)	埋 土	棒付、縦方向無で。先端部溶解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②灰～淡黄③粗砂混る
966-8 276-8	土 製 品 陶 羽 口	基	長( 5.1)	中央部床 面	棒付、無で。	①酸化・良好 ②淡黄 橙 ③粗砂混る
966-9 276-9	土 製 品 陶 羽 口	基 片	長( 7.0)	北西部埋 土	棒付、縦方向無で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
966-10 276-10	土 製 品 陶 羽 口	先	長( 4.5)	埋 土	棒付、無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 白 ③砂混る
966-11 276-11	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長( 5.9)	南西部床 面	棒付、縦方向無で。溶解物少量付着。	①酸化・一部二次還元 ②黄灰 ③砂混る
966-12 276-12	土 製 品 陶 羽 口	中	長( 6.9)	埋内埋土	棒付、無で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
966-13 276-13	鉄 椀形磁滓		長12.0 幅 9.5 厚 3.0	南西部埋 土	炭化物混入、大型滓。	
966-14 276-14	鉄 椀形磁滓		長10.6 幅 8.2 厚 3.1	北中部埋 土	炭化物混入。	
966-15 276-15	鉄 椀形磁滓		長10.4 幅 5.9 厚 3.2	埋 土	炭化物混入、長型滓。	
966-16 276-16	鉄 椀形磁滓		長 5.2 幅 5.6 厚 3.2	北西部北 壁寄床面	球状、小型滓。	
966-17 276-17	鉄 椀形磁滓		長 5.3 幅 4.4 厚 2.2	埋 土	錆化顯著。	
966-18 276-18	鉄 椀形磁滓		長 7.1 幅 5.2 厚 2.4	北中部埋 土	炭化物混入。	
966-19 276-19	鉄 椀形磁滓		長 6.8 幅 5.5 厚 2.2	埋 土	炭化物混入。	

I 59号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
666-20 276-20	鉄 摩		長 5.4 幅 5.3 厚 3.4	北西部床	球塊粒状。	
666-21 276-21	須恵器 転用磁石		長 2.7 幅 2.8 厚 1.0	埋土	巻胴体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
666-22 276-22	須恵器 転用磁石		長 4.2 幅 3.9 厚 1.5	埋土	巻胴部周辺転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
666-23 276-23	須恵器 転用磁石		長 3.0 幅 2.9 厚 1.1	埋土	巻胴部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
666-24 276-24	須恵器 転内面子		長 2.7 幅 1.8 厚 1.5	埋土	妻体部片転用。周縁部打割。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
666-25 276-25	石製品 砥石 小片		長 2.8 幅 3.2 厚 1.7	埋土	小牌。2面使用。	流紋岩 (砥沢?)
666-26 276-26	石製品 砥石		長 4.8 幅 3.5 厚 3.4	埋土	円盤。上下2面使用。	角閃石安山岩

I 60号住居跡 (Fig. 667~670・PL. 277, 278)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.75 × 3.29	N-91.5°-E	東壁やや南寄り	



I 区の北西部に位置し、45~47 I 44・45の範囲にある。38号住居跡と重複しておりこれよりも新しい時期の所産である。壁の掘り込みは深く約50cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面は比較的良好に踏み締まるが若干の起伏がみられる。貯蔵穴・壁下の溝は検出されない。竈は東壁に付設され、住居内に張り出す袖部と細く長い煙道をもつ。右袖先端部とそれに続く縦列には凝灰岩の加工材が埋設されている。左

I 60号住居跡

- 1 灰瓦
- 2 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を少量含む粘性土。
- 3 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を多量に含む粘性土。
- 4 暗褐色土 炭化粒を含む粘性土。
- 5 暗褐色土 粘性・締りあり。

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

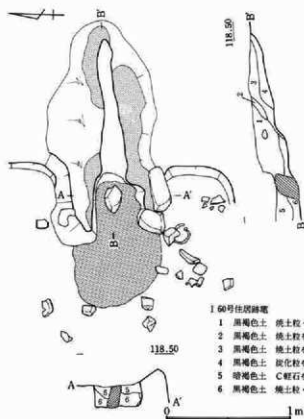


Fig.668 160号住居跡遺

袖部には同質の残欠が認められたが、袖部本体は粘性のある暗褐色土や白色粘土で構築されている。燃焼部中央には支脚として凝灰岩の角柱が埋設されている。燃焼部からはゆるい傾斜をもって煙道部を形成する。袖部内法約35cm、燃焼部奥行き約55cm、煙道部長さ約1.1mを測る。出土遺物は散在して検出されている。

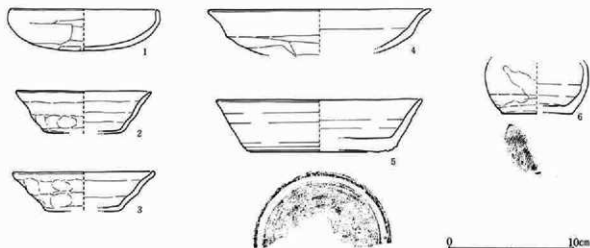


Fig.669 160号住居跡出土遺物(1)

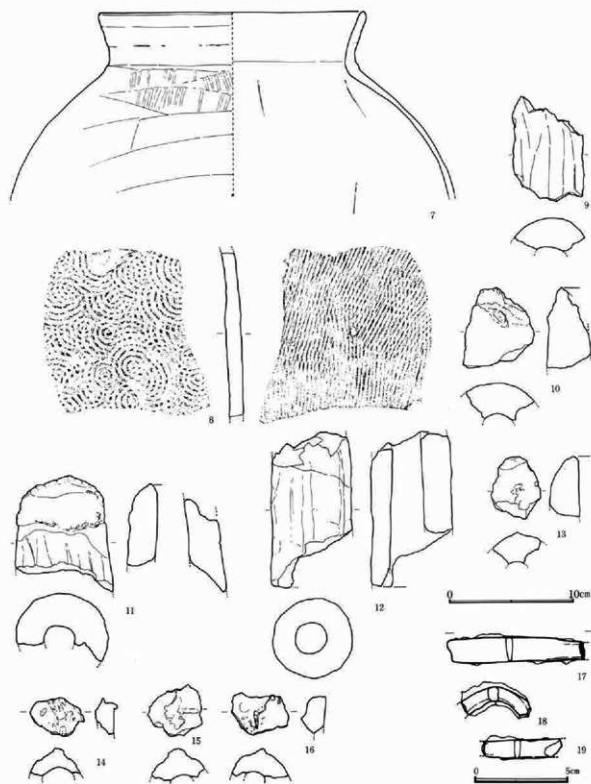


Fig.670 I 60号住居跡出土遺物(2)

I 60号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
669-1 277-1	土師器 杯	口~底 小片	11.8 × — × 3.3	西央部遺 構外	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向割削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
669-2 277-2	土師器 杯	口~底 片	10.8 × 6.4 × 3.4	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部指押痕 明瞭。底部粗い割で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
669-3 277-3	土師器 杯	口~底 片	11.4 × 6.0 × 3.1	埋土	指押。内面無で。体部全体に指押痕明瞭 底部粗い割で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
669-4 277-4	土師器 杯	口~体 片	17.8 × — × (3.5)	北東部床 面	紐造巻上か。口縁部及び内面無で。体部 横方向割削り。	①酸化・良好 ②橙 ③胎密
669-5 277-5	須恵器 椀	口~底 片	16.5 × 11.6 × 4.1	中央部床 面	轆轤。右回転。底部及び高台、回転割削 り。割出し高台は小。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
669-6 277-6	灰物陶器 小 瓶	体~底 片	— × 5.6 × (3.7)	埋土	轆轤。右回転未切り。体部上位より胎軸。	①還元・良好 ②灰白 ③胎密
670-7 277-7	土師器 壺	口~中 片	20.6 × — × (15.5)	中央部床 面	紐造。口頸部無で。体部横方向割削り。 内面横方向割削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
670-8 277-8	須恵器 大 壺	体 小片	—	西央部床 面	紐造。可打。転用痕不明。	①還元・良好 ②青灰 ③砂混る
670-9 277-9	土製品 鬮羽口	中 片	長(8.4)	南西部床 面	棒付。縦方向無で。	①酸化・一部二次還元 ②ふい黄橙 ③砂混る
670-10 277-10	土製品 鬮羽口	先 片	長(6.4)	電内	棒付。割で。先端部溶解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②褐灰~橙 ③砂混る
670-11 277-11	土製品 鬮羽口	先~中 片	長(9.2) 幅7.4	南東部埋 土	棒付。縦方向無で。先端部溶解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②褐灰~赤褐 ③砂混る
670-12 277-12	土製品 鬮羽口	中~基	長(12.1) 幅6.4 厚6.3	南東部床 面	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ②褐灰~にふい褐 ③砂混る
670-13 278-13	土製品 鬮羽口	先 小片	長(4.7)	埋土	棒付。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰黄褐 ③砂混る
670-14 277-14	土製品 鬮羽口	先	長(2.9)	埋土	棒付。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
670-15 277-15	土製品 鬮羽口	先	長(4.1)	埋土	棒付。溶解物付着。	①酸化・良好 ②淡黄 橙 ③砂混る
670-16 277-16	土製品 鬮羽口	先 小片	長(2.9)	埋土	棒付。割で。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
670-17 277-17	鉄製品 刀子?		長(7.3) 幅1.2	埋土		
670-18 277-18	鉄製品		長(3.6) 厚0.5×0.7	埋土		
670-19 277-19	鉄製品		長(4.2) 幅1.0 厚0.3	埋土		

I 61号住居跡 (Fig. 671~679・PL. 278~283)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	窟 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.79 × 4.69	N-87.5°-E	東壁やや南寄り	

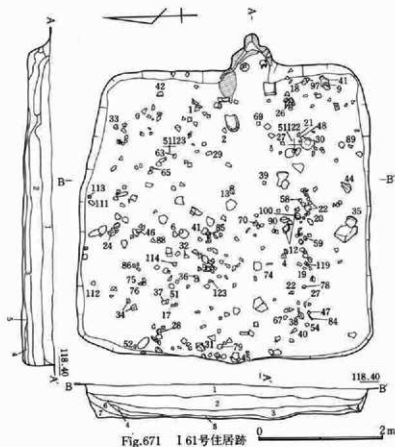


Fig.671 I 61号住居跡

I 区の中央部に位置し、50~52 I 21~23の範囲にある。北西半は95号住居跡と重複しており、新旧関係は95号住居跡より新しい時期の所産である。平面形態は北壁がやや広がる方形を呈する。壁の掘り込みは深く約54cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面は全体に堅く踏み締まり平坦をなすが南壁に沿って幅約1mの範囲がわずかに(4.5cm)高くなる。貯蔵穴や壁下の溝等の諸施設は検出されない。竈は東壁に付設され、方形状に掘り込まれた燃焼部から丸く凸状に煙道部あるいは煙出し孔部が

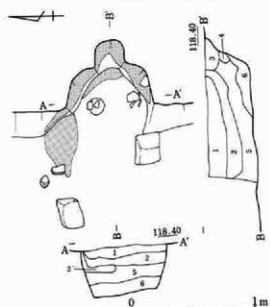


Fig.672 I 61号住居跡竈

I 61号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石小粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石大粒を多量、焼土粒を少量含む締る。
- 3 暗褐色土 C軽石を含む締りあり。
- 4 暗褐色土 灰白色粒を含む。
- 5 暗褐色土 焼土塊を含み締る粘土性。
- 6 暗褐色土 C軽石、炭化粒を含む。
- 7 暗褐色土 C軽石を含む。

I 61号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石小粒・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 3 焼土塊
- 4 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 6 焼土



第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

作り出される。袖部については左袖は不明瞭であるが、右袖は住居内に突出する形で凝灰岩の角柱加工材が埋設されている。また燃焼部中央をやや左に寄って同じく凝灰岩の角錐形加工材が支脚として埋設される。左袖部に関しては掘形面では不整形ながら袖材が据えられたと見られる窪みが右袖部とともに検出されている。煙道部については、やや窪みのある燃焼部から急角度で立ち上がり、緩い傾斜で再び立ち上がっている。これは煙道部とするよりは煙り出し孔とするほうが適切であろう。燃焼部幅約50cm・奥行き約75cm、煙り出し孔径約26cmを測る。掘形面では数個の土坑状の窪みが検出され、各々の土坑内より若干の遺物が検出されている。いずれも埋土は固くしまった暗褐色土となっている。出土遺物は比較的多く羽羽・砥石類が目立つ。住居跡内全体に検出され、床面出土のものが多いが散在的な出土状況である。

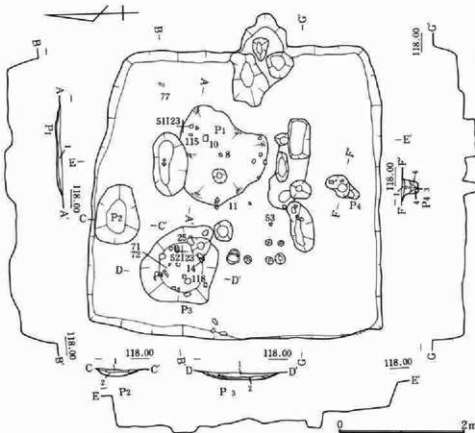


Fig.673 I 61号住居跡掘形

I 61号住居跡掘形P 1

- 1 暗褐色土 C 軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
- P 2
- 1 暗褐色土 C 軽石を含む。
- 2 黒褐色土 C 軽石・炭化粒を含み締る。
- P 3
- 1 暗褐色土 C 軽石を含む。

2 黒褐色土 砂岩塊を含み締る。

- P 4
- 1 床面
- 2 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C 軽石を少量含む。
- 4 黒褐色土 粘性あり。

第5章 I区の遺構と遺物

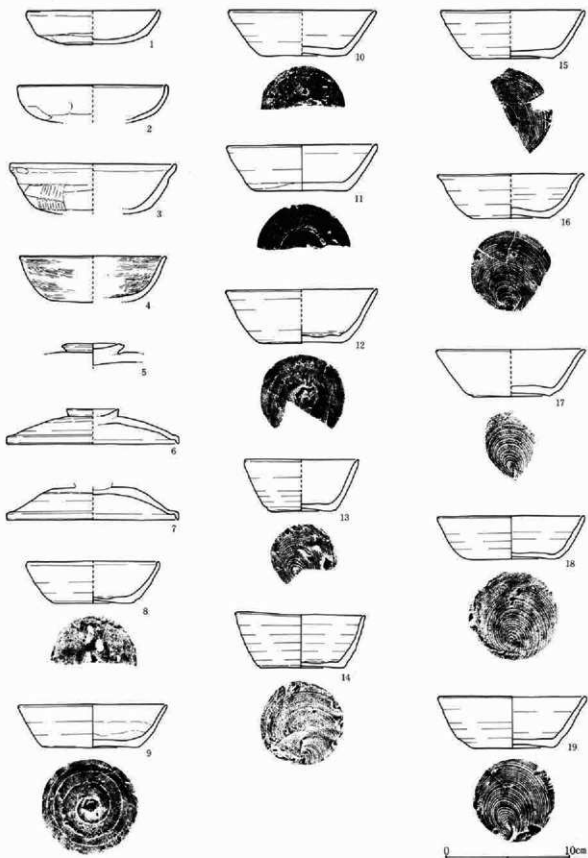


Fig.674 I 61号住居跡出土遺物(1)

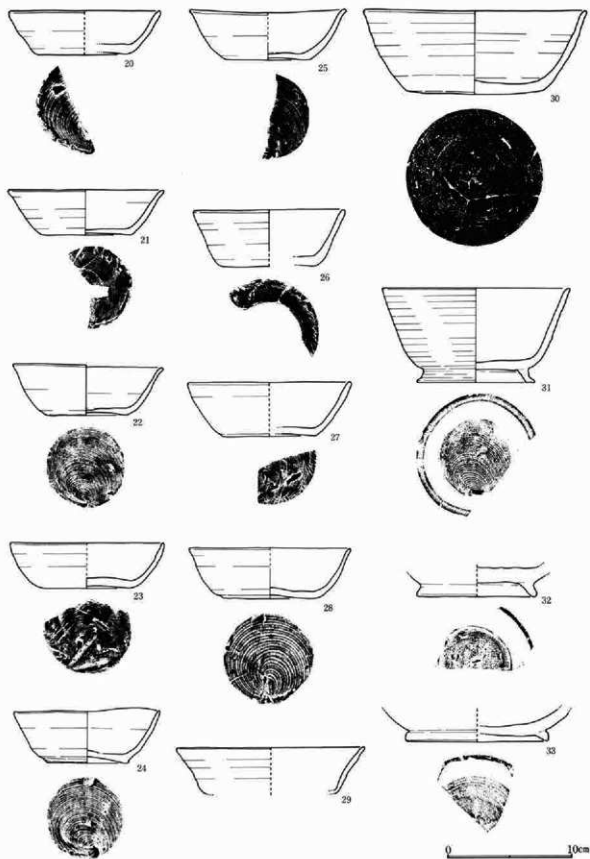


Fig.675 Ⅰ61号住居跡出土遺物(2)

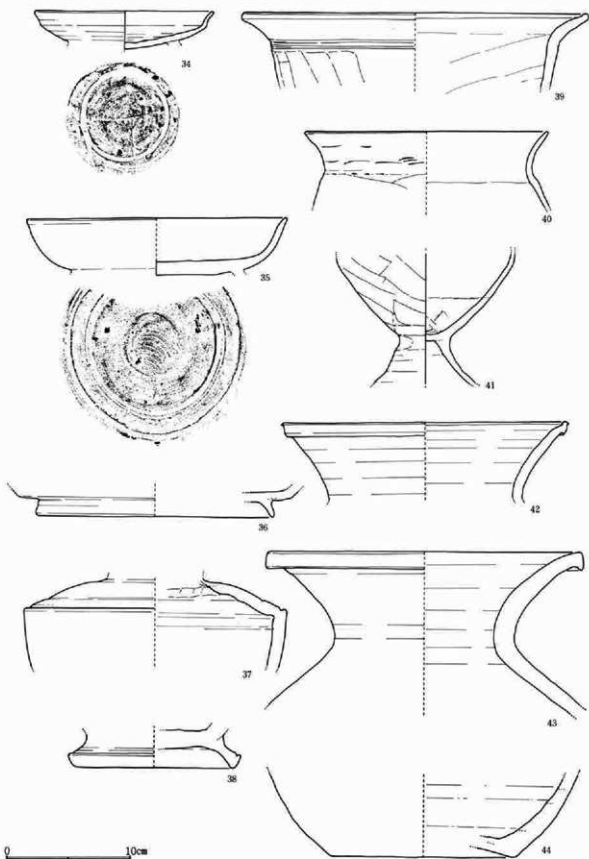


Fig.676 I 61号住居跡出土遺物(3)



Fig.677 Ⅰ61号住居跡出土遺物(4)

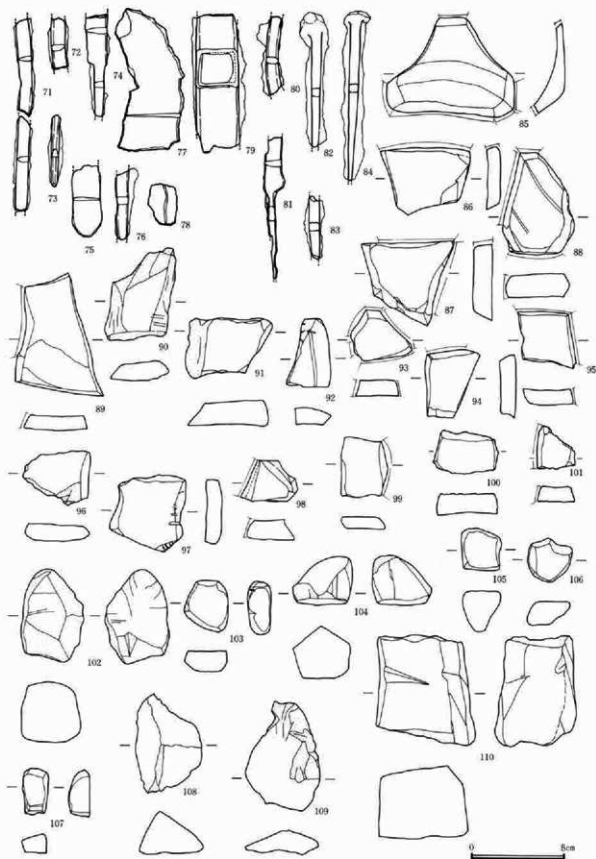


Fig.678 I61号住居跡出土遺物(5)

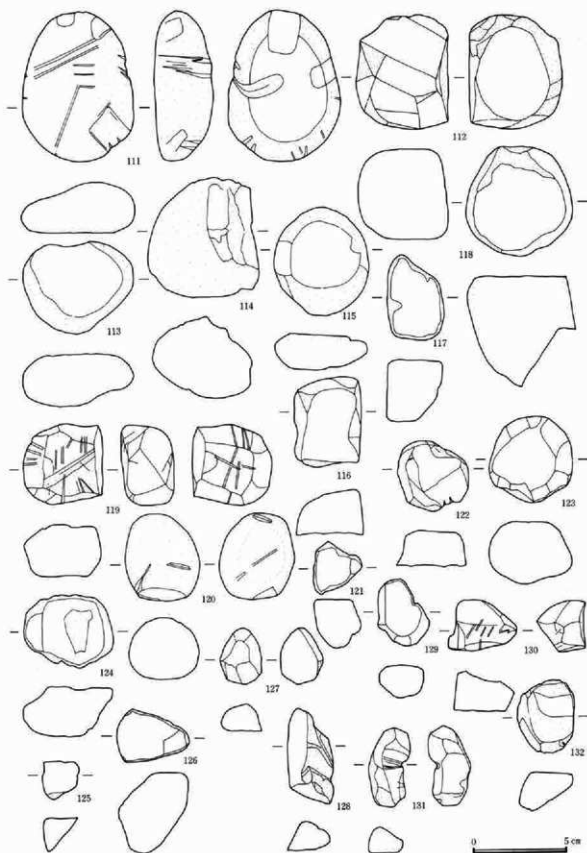


Fig.679 Ⅰ61号住居跡出土遺物(6)

第5章 I区の遺構と遺物

I 61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 直径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
674-1 279-1	土師器 杯	口～底 小片	10.8 × — × 2.7	東北部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。底部不定方 向置削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
674-2 279-2	土師器 杯	口～体 小片	12.1 × — × (3.0)	東北部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 置削り。	①酸化・良好 ②黄褐 ③細砂混る
674-3 279-3	土師器 杯	口～体 片	13.4 × 9.4 × (4.0)	埋 土	紐造巻上か。口縁部及び内面無で。体部 横方向の粗い置削り。	①酸化・良好 ②にお い赤褐 ③緻密
674-4 279-4	内黒土器 杯	口～底 片	11.8 × 7.4 × 3.7	南東部床 面	轆轤。内外吸灰処理後、細かな置削り。	①還元・良好 ②暗灰 ③緻密
674-5 279-5	須恵器 蓋	胴	— × 胴 5.0 × (1.7)	埋 土	轆轤。右回転。横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
674-6 279-6	須恵器 土	胴～端 片	13.8 × 胴 4.2 × 2.8	中央部埋 土	轆轤。右回転。頂部2段回転置削り。胴 横無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
674-7 280-7	須恵器 蓋	胴～端 片	13.8 × — × (2.6)	埋 土	轆轤。右回転。頂部2段回転置削り。胴 欠損。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
674-8 280-8	須恵器 杯	口～底 小片	10.7 × 6.5 × 3.3	中央部埋 土	轆轤。右回転置削り。底縁部手持置削り	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
674-9 280-9	須恵器 杯	口～底 完	12.0 × 7.7 × 3.4	南東部床 面	轆轤。右回転置削り。無調整。体部に吸 灰。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
674-10 280-10	須恵器 杯	口～底 片	11.9 × 7.2 × 3.6	東北部埋 土	轆轤。右回転置削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
674-11 280-11	須恵器 杯	口～底 片	12.1 × 7.6 × 3.6	中央部埋 土	轆轤。右回転置削り。腰部～底縁部、回 置削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
674-12 280-12	須恵器 杯	口～底 片	12.2 × 6.4 × 4.2	南東部床 面	轆轤。右回転置削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
674-13 280-13	須恵器 杯	口～底 片	9.2 × 5.4 × 4.1	中央部埋 土	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
674-14 280-14	須恵器 杯	口～底 片	10.5 × 6.6 × 4.4	西北部埋 土	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
674-15 280-15	須恵器 杯	口～底 小片	11.6 × 6.5 × 3.8	南東部埋 土	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
674-16 280-16	須恵器 杯	口～底 片	11.8 × 6.2 × 3.5	西北部床 面	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰 ③緻密
674-17 280-17	須恵器 杯	口～底 片	12.0 × 7.0 × 3.7	北西部埋 土	轆轤。右回転余切り。無調整。灰横り。	①還元・良好 ②明赤 灰 ③緻密
674-18 280-18	須恵器 杯	口～底 体部片	11.8 × 7.0 × 3.4	南東部床 面	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
674-19 280-19	須恵器 杯	口～底 完	11.9 × 6.6 × 4.1	北西部床 面	轆轤。右回転余切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密



I61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
			口 径	底 径 × 器 高			
675-20 280-20	須 恵 器 杯	口～底 底	12.2 × 7.4 × 3.5	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密	
675-21 280-21	須 恵 器 杯	口～底 底	12.5 × 7.2 × 3.6	南東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密	
675-22 280-22	須 恵 器 杯	口～底 底	12.0 × 6.4 × 4.1	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
675-23 280-23	須 恵 器 杯	口～底 底	12.4 × 7.0 × 3.6	埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
675-24 280-24	須 恵 器 杯	口～底 底	11.7 × 6.6 × 4.4	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。口縁部歪 む。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
675-25 280-25	須 恵 器 杯	口～底 底	12.6 × 6.7 × 4.0	北東部掘 形	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密	
675-26 280-26	須 恵 器 杯	口～底 底	12.2 × 8.0 × 4.5	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密	
675-27 280-27	須 恵 器 杯	口～底 底	13.2 × 7.6 × 4.3	南東部床 面・他	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
675-28 280-28	須 恵 器 杯	口～底 底	13.0 × 7.4 × 4.0	北西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密	
675-29 280-29	須 恵 器 杯 (小片)	口～体 小片)	15.2 × — × (3.7)	東東部床 面	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
675-30 280-30	須 恵 器 鉢	口～底 底	17.8 × 11.0 × 6.7	南東部床 面	轆轤。右回転。腰部～底部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
675-31 281-31	須 恵 器 椀	口～底 底	15.0 × 9.5 × 7.5	西東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
675-32 281-32	須 恵 器 椀	底 底	— × 9.6 × (2.3)	中央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
675-33 281-33	須 恵 器 椀	底 底	— × 11.4 × (2.6)	北東部埋 土	轆轤。右回転。底部回転寛削り。付高台 横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密	
675-34 281-34	須 恵 器 鉢	口～体 底	14.3 × — × (3.0)	北西部埋 土	轆轤。右回転。底部回転寛削り。付高台 割落。	①還元・良 ②灰白 ③砂混る	
675-35 281-35	須 恵 器 鉢	口～底 底	20.8 × — × (4.6)	南東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。縁部回転寛削り。 付高台横溝で。割落。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る	
675-36 281-36	須 恵 器 鉢	底 底	— × 19.2 × (2.2)	南東部埋 土	轆轤。右回転。付高台横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
675-37 281-37	須 恵 器 長 頸 壺	胴 部 底	— × — × (7.1)	北西部埋 土	紐造。横溝で。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密	
675-38 281-38	須 恵 器 壺	底 底	— × 13.8 × (3.0)	南西部埋 土	底部回転寛削り。付高台横溝で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る	

第5章 I区の遺構と遺物

I 61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
676-39 281-39	土 師 器 甕	口～上 ¼	27.8 × — × ( 5.8)	南東部床 面	紐造。口縁部及び内面無で。体部縦方向 寬削り。	①酸化・良好 ②にぶ い黄橙 ③細砂混る
676-40 281-40	土 師 器 甕	口～上 ¼	19.5 × — × ( 6.0)	南西部埋 土	紐造。口頸部及び内面無で。体部縦方向 寬削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細密
676-41 281-41	瓦 台 付 甕	下～台 全	— × — × (10.3)	南東部床 面	紐造。体部縦方向寬削り。台部横方向無 で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③緻密
676-42 281-42	須 恵 器 甕	口～頸	22.9 × — × ( 6.0)	北東部埋 土	紐造。横無で。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
676-43 281-43	須 恵 器 甕	口～上 小片	15.1 × — × (12.8)	埋 土	紐造。口頸部横無で。体部叩打後無で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
676-44 281-44	須 恵 器 甕	下～底 ¼	— × 14.8 × ( 6.6)	南東部床 面	紐造。体部紐削り後無で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
677-45 282-45	土 師 器 甕	胴 部 ¼	— × — × (19.1)	西東部床 面	紐造。体部寬削り。内面無で。体部球状、	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
677-46 282-46	土 製 品 罐 羽 口	先～基 完	長10.5 幅 6.2 厚 6.4	中央部床 面	棒付、縦方向無で。ほぼ等径同筒型。先 端部溶解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②灰白～にぶい橙 ③砂混る
677-47 282-47	土 製 品 罐 羽 口	先～中 全	長(7.7) 幅 7.5 厚 7.8	北西部床 面	棒付、無で。指押痕明顯。先端部溶解物 付着。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③砂混る
677-48 282-48	土 製 品 罐 羽 口	基	長(6.1)	北東部埋 土	棒付、縦方向無で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
677-49 282-49	土 製 品 罐 羽 口	基	長(6.0)	南西部床 面	棒付、無で。	①酸化・一部二次還元 ②褐灰～黄橙 ③砂混る
677-50 282-50	土 製 品 罐 羽 口	先 ¼	長(4.0)	南東部床 面	棒付、無で。指押痕明顯。	①酸化・良好 ②黄橙
677-51 282-51	土 製 品 罐 羽 口	先	長(6.1)	中央部掘 形	棒付、無で。	①酸化・良好 ②赤灰 ③砂混る
677-52 282-52	土 製 品 罐 羽 口	中 ¼	長(9.0)	埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ②褐灰 ③細砂混る
677-53 282-53	土 製 品 罐 羽 口	先	長(6.0)	埋 土	棒付、無で。溶解物付着。	①酸化・ ②黒 ③砂混る
677-54 282-54	土 製 品 罐 羽 口	先 ¼	長(4.3)	北西部埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ②褐灰 ③砂混る
677-55 282-55	土 製 品 罐 羽 口	先	長(5.3)	南西部埋 土	棒付、無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③砂混る
677-56 282-56	土 製 品 罐 羽 口	中	長(5.2)	埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ②明赤灰 ③砂混る
677-57 282-57	土 製 品 罐 羽 口	先 ¼	長(5.6)	埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ②明褐灰 ③砂混る

I 61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④色調 ⑤その他
677-58 282-58	土製品 罐羽口	中 反	長(4.6)	南西部床 面	棒付、縦方向撫で。	①二次還元 ②褐灰 ③砂混る
677-59 282-59	土製品 罐羽口	基	長(6.5) 幅7.4 厚6.8	東北部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・一部二次還元 ②褐灰～浅黄橙 ③砂混る
677-60 282-60	土製品 罐羽口	中	長(3.1)	埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③砂混る
677-61 282-61	土製品 罐羽口	先 反	長(6.0)	埋土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。	②二次還元 ②明黄灰 ③砂混る
677-62 282-62	土製品 罐羽口	先	長(4.8)	埋土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②赤灰 ③砂混る
677-63 282-63	土製品 罐羽口	先	長(7.2)	北東部埋 土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②灰～淡黄 ③砂混る
677-64 282-64	土製品 罐羽口	中 反	長(5.8)	南東部床 面	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②灰黄 褐～橙 ③砂混る
677-65 282-65	土製品 罐羽口	中	長(5.0)	北西部床 面	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③砂混る
677-66 282-66	土製品 罐羽口	中 反	長(5.3)	西北部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②淡黄 ③砂混る
677-67 282-67	土製品 罐羽口	中 小片	長(4.9)	南西部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②淡橙 ③砂混る
677-68 282-68	土製品 罐羽口	中	長(5.0)	埋土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②黄灰 ③砂混る
677-69 282-69	土製品 罐羽口	中	長(4.5)	東北部床 面	棒付、撫で。寛幅き「×」	①酸化・一部二次還元 ②褐灰～橙 ③砂混る
677-70 282-70	土製品 罐羽口	中	長(7.0)	中央部埋 土	棒付、撫で。	②二次還元 ②灰 ③砂混る
678-71 282-71	鉄製品		長(10.2) 幅0.8	北西部床 下土坑内	片縁は刃部?72と同個体の可能性あり	
678-72 282-72	鉄製品		長(2.7) 幅0.8	北西部床 下土坑内	片縁は刃部?71と同個体の可能性あり	
678-73 282-73	鉄製品		長(3.8) 厚0.4×0.3	埋土		
678-74 282-74	鉄製品 刀子		長(5.4) 刃部幅1.1 柄部幅0.5×0.3	中央部や 南西部床		
678-75 282-75	鉄製品 刀子?	先端部	長(3.8) 幅1.5	北西部床 面		
678-76 282-76	鉄製品		長(3.7) 厚0.6×0.4	北西部床 面		

第5章 I区の遺構と遺物

I 61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③面土 その他
678-77 282-77	鉄製品 鎌	基部 欠損	長(7.5) 幅 3.0	掘形 北東部		
678-78 282-78	金剛製品 小片		(2×1.5) 厚 0.1	南西部床 面	片面のみ健全。	
678-79 282-79	鉄製品		長(7.3) 幅 2×2	西部床 面	空孔。2重に巻き込む。	
678-80 282-80	鉄製品		長(4.2) 幅 0.6×0.3	埋土		
678-81 282-81	鉄製品 刀子?		長(7.5) 刃部幅 0.8 柄部0.7×0.3	埋土		
678-82 282-82	鉄製品 釘	先端部 欠損	長(7.0) 厚0.5	埋土	角釘。頂部張らむ。	
678-83 282-83	鉄製品 釘?		長(3.4) 厚 0.5×0.4	埋土	角釘?	
678-84 282-84	鉄製品 釘	先端部 欠損	長(9.0) 厚 0.5	南西部床 面	角釘。頂部T字状	
678-85 283-85	須恵器 転用磁石		長 6.8 幅 5.1 厚 0.7	中央部埋 土	杯体～底部片転用。断面5カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
678-86 283-86	須恵器 転用磁石		長 5.6 幅 4.8 厚 0.7	北西部埋 土	杯類体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
678-87 283-87	須恵器 転用磁石		長 5.0 幅 4.5 厚 1.0	埋土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-88 283-88	須恵器 転用磁石		長 5.4 幅 3.8 厚 1.2	北西部埋 土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-89 283-89	須恵器 転用磁石		長 6.5 幅 4.8 厚 0.7	南東部埋 土	壺類体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
678-90 283-90	須恵器 転用磁石		長 4.7 幅 3.1 厚 1.0	中央部埋 土	壺体部片転用。片面使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-91 283-91	須恵器 転用磁石		長 4.5 幅 0.9 厚 1.2	埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-92 283-92	須恵器 転用磁石		長 3.7 幅 2.3 厚 0.8	竈内	壺類体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
678-93 283-93	須恵器 転用磁石		長 3.3 幅 2.7 厚 0.8	埋土	壺類体部片転用。断面5カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
678-94 283-94	須恵器 転用磁石		長 3.6 幅 2.9 厚 0.9	竈内	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-95 283-95	須恵器 転用磁石		長 3.0 幅 2.9 厚 0.8	埋土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

Ⅰ61号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
678-96 283-96	須恵器 転用磁石		長 3.5 幅 2.8 厚 0.9	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-97 283-97	須恵器 転用磁石		長 4.1 幅 3.9 厚 0.8	南東部埋 土	壺体部片転用。断面3カ所使用、刃当痕 あり。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
678-98 283-98	須恵器 転用磁石		長 3.0 幅 2.3 厚 1.0	P i t 2 内埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
678-99 283-99	須恵器 転用磁石		長 3.2 幅 2.4 厚 0.6	埋 土	杯碗部片転用。断面1カ所使用。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
678-100 283-100	須恵器 転用磁石		長 3.4 幅 2.2 厚 1.0	南東部床 面	壺体部片転用。断面2カ所靴状に使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
678-101 283-101	須恵器 転用磁石		長 2.3 幅 2.0 厚 0.8	埋 土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
678-102 203-102	石製品 砥 石	小片	長 5.0 幅 3.4 厚 3.3	埋 土	角礫状に、ほぼ全面使用。方向は不定。	流紋岩 (砥沢?)
678-103 283-103	石製品 砥 石	小片	長 2.7 幅 2.4 厚 1.2	埋 土	各面全面使用。扁平。	流紋岩 (砥沢?)
678-104 283-104	石製品 砥 石	小片	長 3.2 幅 2.6 厚 2.8	埋 土	角礫状に、ほぼ全面使用。	流紋岩 (砥沢?)
678-105 283-105	石製品 砥 石	小片	長 2.2 幅 2.2 厚 2.2	埋 土	方錘形状に全面使用。	流紋岩 (砥沢?)
678-106 283-106	石製品 砥 石	小片	長 2.3 幅 2.3 厚 1.2	埋 土	ほぼ全面使用。方向一定。	流紋岩 (砥沢?)
678-107 283-107	石製品 砥 石	小片	長 2.4 幅 1.3 厚 1.0	埋 土	楔状に全面使用。方向一定。	流紋岩 (砥沢?)
678-108 283-108	石製品 砥 石	小片	長 5.3 幅 3.5 厚 2.2	埋 土	砕礫の3面使用。	流紋岩 (砥沢?)
678-109 283-109	石製品 砥 石		長 5.8 幅 4.0 厚 1.3	埋 土	板状。4カ所に使用痕。	輝石安山岩 (粗粒)
678-110 283-110	石製品 砥 石		長 4.9 幅 5.3 厚 4.4	埋 土	角柱状製品の中心、両端を欠く。4面使 用。刃当痕残る。	輝石安山岩 (粗粒)
679-111 283-111	石製品 砥 石		長 8.0 幅 6.0 厚 2.7	北東部床 面	扁平長円礫の使用はじめ、刃当痕あり。	角閃石安山岩
679-112 283-112	石製品 砥 石		長 6.0 幅 5.0 厚 4.8	北西部床 面	肆状礫を多面角礫に全面使用。方向一定。	角閃石安山岩
679-113 283-113	石製品 砥 石		長 5.9 幅 4.7 厚 2.7	北東部床 面	扁平円礫の3カ所使用。	角閃石安山岩
679-114 283-114	石製品 砥 石		長 6.4 幅 6.0 厚 4.3	北西部床 面	円礫の1カ所使用。	角閃石安山岩

第5章 1区の遺構と遺物

161号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
679-115 283-115	石製品 砥石		長 5.7 幅 5.1 厚 1.9	北東部掘形	扁平円礫の1面及び5カ所使用。	角閃石安山岩
679-116 283-116	石製品 砥石		長 4.8 幅 3.2 厚 2.5	埋土	角礫状に使用。一面破砕面を残す。	角閃石安山岩
679-117 283-117	石製品 砥石		長 4.4 幅 3.0 厚 3.2	埋土	角礫状に全面使用。	角閃石安山岩
679-118 283-118	石製品 砥石		長 5.8 幅 5.7 厚 5.8	北西部掘形	中型円礫の2面使用。一部欠損。	角閃石安山岩
679-119 283-119	石製品 砥石		長 4.3 幅 4.2 厚 2.7	南西部埋土	角礫状に全面使用。刃当直多数。	角閃石安山岩
679-120 283-120	石製品 砥石		長 4.6 幅 4.0 厚 3.3	埋土	円礫の2カ所使用。刃当直3カ所。	角閃石安山岩
679-121 283-121	石製品 砥石		長 2.8 幅 2.6 厚 2.6	埋土	全面使用。	角閃石安山岩
679-112 283-122	石製品 砥石		長 3.8 幅 3.8 厚 1.8	埋土	扁平円礫状に全面使用。	角閃石安山岩
679-123 283-123	石製品 砥石		長 4.6 幅 4.4 厚 3.3	西中央部埋土	円礫縁辺部を細かく使用。	角閃石安山岩
679-124 283-124	石製品 砥石		長 4.8 幅 3.9 厚 2.6	埋土	全面使用。	角閃石安山岩
679-125 283-125	石製品 砥石		長 2.0 幅 1.9 厚 1.7	埋土	三角柱状全面使用。	角閃石安山岩
679-126 283-126	石製品 砥石		長 3.9 幅 2.8 厚 4.2	埋土	ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
679-127 283-127	石製品 砥石		長 3.0 幅 2.3 厚 1.4	埋土	全面使用。	角閃石安山岩
679-128 283-128	石製品 砥石		長 5.1 幅 2.5 厚 1.5	埋土	3面使用。刃当直2条あり。	角閃石安山岩
679-129 283-129	石製品 砥石		長 3.6 幅 2.5 厚 1.7	埋土	全面使用。凹面使用部あり。	角閃石安山岩
679-130 283-130	石製品 砥石		長 3.6 幅 2.7 厚 2.1	埋土	全面使用。刃当直5条あり。	角閃石安山岩
679-131 283-131	石製品 砥石		長 4.2 幅 1.9 厚 1.4	埋土	勾玉形状に全面使用。断面丸形使用部あり。	角閃石安山岩
679-132 283-132	石製品 砥石		長 3.9 幅 3.0 厚 2.1	埋土	扁平礫の2カ所使用。	角閃石安山岩

I 62号住居跡 (Fig. 680~683・PL. 284, 285)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	寛 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.13 × 4.73	N-90°-E	東壁やや南寄り	

I 区の中央部やや西寄りに位置し、54~57 I 22~24の範囲にある。住居跡の東南部で65号住居跡と重複しておりこれよりも新しい時期の所産である。また西端はJ 1号溝によって切られ消失しており住居内竪前方部は近世の土坑が掘られる。平面形態は東西に長軸をもつ長方形をなすが、北壁はうねりが見られ不整形を呈する。壁の立ち上がりは比較的深く、壁高約40cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面はやや起伏があり総じて軟弱である。貯蔵穴や壁下の溝は検出されなかった。竈は東壁に付設され円形に掘り込まれた燃烧部から短く突出する煙道部が作り出される。袖部の痕跡は見られなかった。燃烧部は住居内に向かって大きく開き幅約80cm・奥行き約40cmを測る。竈内より灰層が広く流れ出しているが火床の痕跡は希薄で燃烧部の奥行きについては再考の余地がある。出土遺物は竈の周辺に多く検出された。

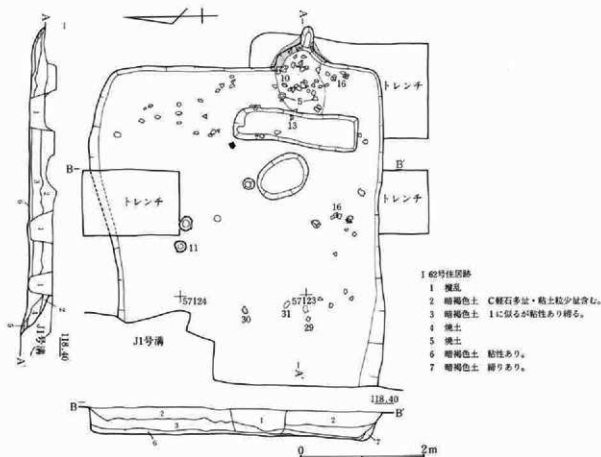


Fig.680 I 62号住居跡

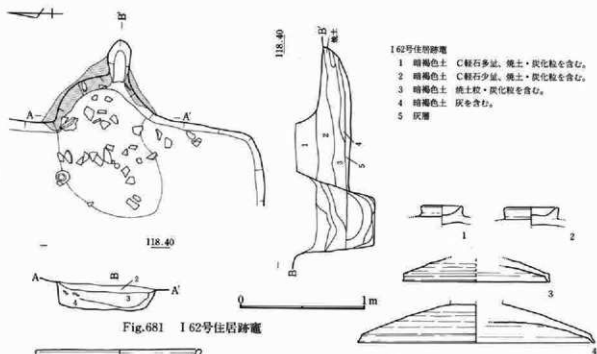


Fig.681 I 62号住居跡

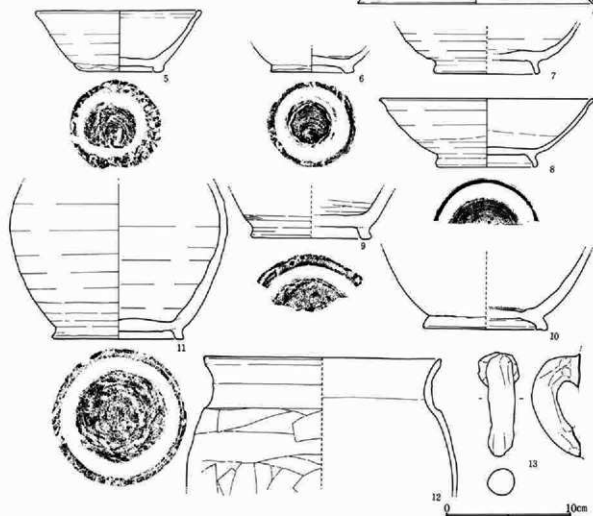


Fig.682 I 62号住居跡出土遺物(1)





Fig.683 I 62号住居跡出土遺物(2)

第5章 I区の遺構と遺物

I 62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	底径	器高			
682-1 284-1	須恵器 蓋	柄	—	× 口径 3.4	× (1.5)	埋土	横線。右回転。横線で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
682-2 284-2	須恵器 蓋	柄	—	× 口径 4.4	× (1.5)	埋土	横線。右回転。横線で。	①還元・軟質 ②明オ リーブ灰 ③細砂混る
682-3 284-3	須恵器 蓋	頂～端 長	11.8	× —	× (1.9)	埋土	横線。右回転。頂部1段及び端部直上、 回転部閉り。横欠損。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
682-4 284-4	須恵器 蓋	頂～端 長	19.0	× —	× (3.1)	埋土	横線。右回転。頂部1段粗い回転部閉り。 横欠損。	①還元・良好 ②明オ リーブ灰 ③細砂混る
682-5 284-5	須恵器 椀	口～底 長	13.3	× 7.1	× 4.9	甕手前床 面	横線。右回転糸切り。付高台無で。潰れ、 内外ほぼ全面吸灰。	①酸化・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
682-6 284-6	須恵器 椀	体～底 長	—	× 6.7	× (2.0)	埋土	横線。右回転糸切り。付高台無で。	①還元・低温 軟質 ②灰白 ③細砂混る
682-7 285-7	須恵器 椀	体～底 長	—	× 8.5	× (3.8)	埋土	横線。右回転糸切り。付高台横線で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
682-8 285-8	灰胎陶器 椀	口～底 長	17.2	× 8.2	× 5.5	埋土	横線。右回転。底部回転部閉り。付高台 横線で。体部内外のみ刷毛塗り施粉。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
682-9 285-9	須恵器 壺	下～底 長	—	× 9.7	× (3.9)	埋土	紐造。横線で。体部下位右回転部閉り。 底部手持ち部閉り。付高台横線で	①還元・良好 ②暗青 灰 ③細砂混る
682-10 285-10	須恵器 壺	中～底 長	—	× 10.5	× (12.0)	北尖部埋 土	紐造。体部及び付高台横線で。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る
682-11 285-11	須恵器 壺	下～底 長	—	× 10.9	× (6.0)	甕手前埋 土	底部円板。紐造。体部及び付高台横線で。	①還元・良好 ②灰 ③黒粒混る
682-12 285-12	土師器 壺	口～中 長	19.0	× —	× (10.5)	南尖部床 面	紐造。口頸部及び内面無で。体部上位、 中位縦方向部閉り。	①酸化・良好 ②粘 ③細砂混る
682-13 285-13	須恵器 肥手持付壺	把手	長(8.1)	幅 2.1	厚 2.0	甕手前埋 土	紐造。無で。指押痕顯著。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
683-14 285-14	瓦 平瓦	小片			厚 2.1	埋土	叩打。上面布目肌。下面無で。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
683-15 285-15	瓦 平瓦	小片			厚 2.1	埋土	叩打。上面布目肌。下面無で。	①還元・良好 ②灰褐 ③砂混る
683-16 285-16	瓦 平瓦	小片			厚 1.2	甕手前床 面	叩打。上面布目肌。下面無で。側端部面 取り。	①還元・良 ②によい 褐 ③砂混る
683-17 285-17	瓦 平瓦	小片			厚 2.2	埋土	叩打。上面布目肌。裏無でか。下面裏無 で。側端部面取り。	①還元・良好 ②褐灰 ③粗砂混る
683-18 285-18	土製品 鬮羽口	小先片	長(4.2)			埋土	棒付。無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
683-19 285-19	土製品 鬮羽口	先	長(2.8)			埋土	棒付。無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰褐 ③細砂混る

I 62号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存址	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
683-20 285-20	土製品 鬮羽口	先	長(4.0)	埋土	棒付、縦方向無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③砂混る
683-21 285-21	土製品 鬮羽口	先	長(5.2)	埋土	棒付、無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰黄 ③砂混る
683-22 285-22	土製品 鬮羽口	中 小片	長(3.4)	埋土	棒付、縦方向無で。	①酸化・二次還元 ②灰 ③砂質土
683-23 285-23	土製品 鬮羽口	中 片	長(5.5)	埋土	棒付、無で。	①酸化・良好 ②淡黄 ③細砂混る
683-24 285-24	土製品 鬮羽口	中	長(6.0)	埋土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ②灰褐 ③細砂混る
683-25 285-25	土製品 鬮羽口	中 片	長(5.1)	埋土	棒付、無で。	①酸化・良好 ②灰白 ③砂混る
683-26 285-26	土製品 鬮羽口	基	長(5.1)	埋土	棒付、無で。指押痕明瞭。	①酸化・良好 ②淡黄 ③細砂混る
683-27 285-27	土製品 鬮羽口	中～基 片	長(8.2)	埋土	棒付、無で。指押痕明瞭。	①酸化・良 ②にぶい 橙 ③細砂混る
683-28 285-28	石製品 砥石		長 6.1 幅 4.9 厚 3.0	埋土	自然円礫の3面使用。	角閃石安山岩
683-29 285-29	石製品 砥石		長(7.3) 幅 5.0 厚 5.4	南西部床 面	側面5使用。両端欠損。	溶結凝灰岩(?)
683-30 285-30	石 一		長(8.7) 幅 7.3 厚 4.0 (334.3)g	西中部床 面	扁平長円礫。片欠損。	輝石安山岩(粗粒)
683-31 285-31	石 一		長13.8 幅 7.0 厚 4.2 563.3g	西中部床 面	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
683-32 285-32	鉄製品		長(4.2×4.5) 厚0.3	埋土	板状	

I 63号住居跡 (Fig. 684～686・PL. 286、287)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.50 × 2.81	N— 87° — E	東壁やや南寄り	

I区の中央部やや西寄りに位置し、55～57 I 19・20の範囲にある。住居跡の北西から南西部にかけては41号・51号の住居跡と重複しているが新旧関係は41号住居跡より古い時期の所産で、51号との関係は不明である。また、東壁に付設される竈の右脇には64号住居として扱った竈が一部重なりあって存在していた。双方を同一住居の施設としてみるか否かについては不確定であったが、床面の高さに若干の差が認められており

第5章 1区の遺構と遺物

一応調査時の所見に従い別個のものとする。住居跡の平面形態は隅丸の方形と考えられ、東西長さ約2.4mを測る。竈を基軸にとる主軸方位はN-87-Eを示す。壁高は約28cmを測り垂直に近く立ち上がる。床面は多少の起伏がみられ南半は踏み締まりにやや不安定な面がある。貯蔵穴などは検出されない。竈は東壁に付設され燃焼部は楕円形に掘り込まれる。袖部は約35cmほど住居内に張り出すが袖材の埋設は見られず、煙道部の作り出しもない。燃焼部幅約50cm・奥行き約1mを測る。遺物は散在して出土しており羽目・砥石が多量に検出されている。

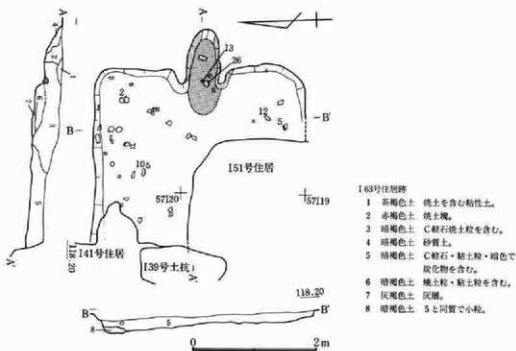


Fig.684 I 63号住居跡

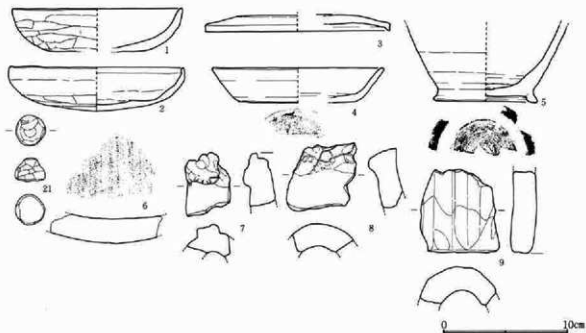


Fig.685 I 63号住居跡出土遺物(1)

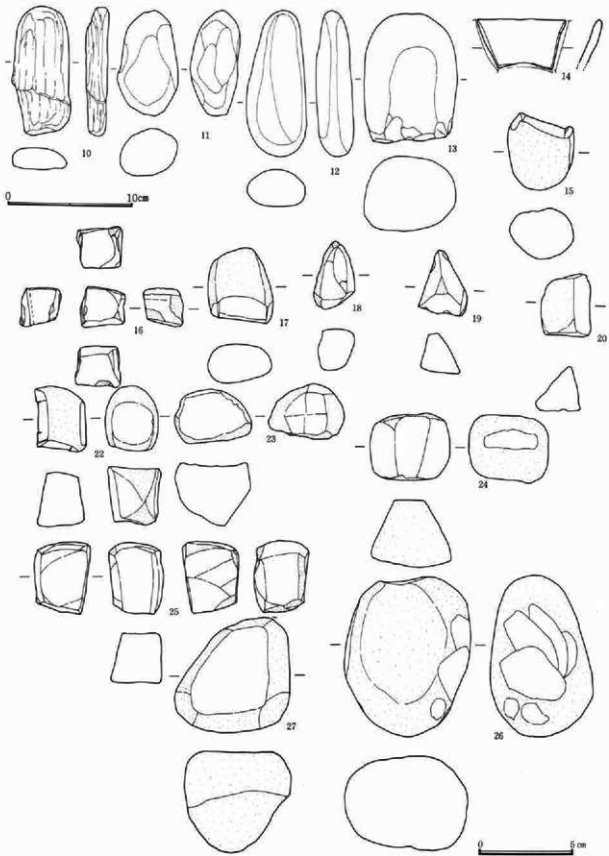


Fig.686 Ⅰ63号住居跡出土遺物(2)

第5章 I区の遺構と遺物

I 63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) □径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
685-1 286-1	土器 杯	口～底 片	13.6 × — × 3.4	埋土	指押。口縁及び内面撫で。体へ底部粗い 磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
685-2 286-2	土器 杯	口～底 片	14.0 × — × 3.5	北東部床 面	指押。口縁～体部及び内面撫で。底部不 定方向磨削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
685-3 286-3	須恵器 蓋	頂～端 片	14.8 × 横 — × ( 1.4)	北東部埋 土	轆轤。右回転。頂部回転磨削り。反振り	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③緻密
685-4 286-4	須恵器 杯	口～底 片	13.8 × 9.3 × 2.8	埋土	轆轤。右回転。底部手持り磨削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
685-5 286-5	須恵器 長頸瓶	下～底 片	— × 8.4 × ( 6.2)	南東部埋 土	超過りか。体部下位及び底部回転磨削り。 付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
685-6 287-6	瓦 平瓦	小片	厚 1.9	北東部埋 土	桶巻、印打。上面布目及び桶巻痕、下面 撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
685-7 287-7	土製品 陶羽口	先 小片	長(4.1)	埋土	棒付、撫で。先端部浴解物付着。	①酸化・二次還元 ②暗赤灰 ③緻密
685-8 287-8	土製品 陶羽口	先 片	長(4.5)	埋土	棒付、撫で。先端部浴解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③砂混る
685-9 287-9	土製品 陶羽口	中～基 片	長(6.6)	埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～橙 ③細砂質土
686-10 287-10	石 一	完	長10.3 幅4.8 厚10.8 134.4g	北東部床 面	扁平長円礫。	雪母石英片岩
686-11 287-11	石 一	完	長8.4 幅4.9 厚4.0	埋土	小型長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
686-12 287-12	石 一	完	長11.6 幅4.8 厚3.0 231.9g	南東部床 面	棒状円礫。	輝緑岩
686-13 287-13	石 一	完	長(10.3) 幅7.5 厚5.8 (778.7)g	北東部埋 土	円礫。一端を欠く。	石英閃緑岩
686-14 287-14	須恵器 転用磁石	長4.7 幅2.6 厚0.4	埋土	杯類口縁部片転用。断面3ヵ所使用。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密	
686-15 287-15	石製品 砥石	長4.0 幅3.4 厚2.6	埋土	小円礫の1端を使用。	角閃石安山岩	
686-16 287-16	石製品 砥石	長2.4 幅2.1 厚2.1	埋土	立方体状に、ほぼ全面使用。	角閃石安山岩	
686-17 287-17	石製品 砥石	長4.0 幅3.4 厚2.0	埋土	小円礫の両端を使用。	角閃石安山岩	
686-18 287-18	石製品 砥石	長3.6 幅2.2 厚2.2	埋土	小円礫の側面を5ヵ所使用。	角閃石安山岩	
686-19 287-19	石製品 砥石	長3.3 幅2.6 厚2.0	埋土	三角錐状に、ほぼ全面使用。	角閃石安山岩	

I 63号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
686-20 287-20	石製品 砥石		長 3.3 幅 2.6 厚 2.4	埋土	小三角柱状に3面使用。	角閃石安山岩
686-21 287-21	石製品 砥石		長 2.4 幅 2.3 厚 1.8	埋土	小円礫をスタンプ状に加工し、下面を使用。	角閃石安山岩
686-22 287-22	石製品 砥石		長 3.4 幅 2.7 厚 2.9	埋土	小円礫の3か所使用。	角閃石安山岩
686-23 287-23	石製品 砥石		長 4.1 幅 2.8 厚 3.2	南東部床 面	小円礫の3か所使用。	角閃石安山岩
686-24 287-24	石製品 砥石		長 4.3 幅 3.5 厚 3.5	南東部床 面	小円礫の4か所使用。	角閃石安山岩
686-25 287-25	石製品 砥石		長 3.8 幅 2.8 厚 2.5	埋土	小円礫を、立方体状にほぼ全面使用。	角閃石安山岩
686-26 287-26	石製品 砥石		長 8.5 幅 6.7 厚 5.0	竪内	中円礫の主に側面を使用。	角閃石安山岩
686-27 287-27	石製品 砥石		長 6.2 幅 6.0 厚 5.3	埋土	中円礫の1面を使用	角閃石安山岩

I 64号住居跡 (Fig. 687~692・PL. 286~288)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竪位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.19 × 2.01	N-87.5°-E	東壁やや南寄り	



Fig.687 I 64号住居跡

I 区の中央部やや西寄りに位置し、前出の63号住居跡とほぼ重なり、41号・51号と重複する。63号と同じく41号住居跡より古い時期の所産で3号住居跡との関係は不明である。平面形態は南東部隅がわずかに張り出す隅丸の方形が想定される。東壁に付設された竪を基軸にする主軸方位はN-87.5°-Eを示す。東西長さ約2mで63号住居跡よりやや小さくなる。竪は先細りの三角形に掘り込まれ、約50cm(右袖)の袖部が住居内に張り出す。袖材等の埋設はない。焼部幅約40cm、奥行き約90cmを測る。出土遺物は須恵器片の転用砥石あるいは角閃石安山岩製の砥石が特に多く、南東・北東・北西部の3箇所の床面上に集中的な出土状況であった。

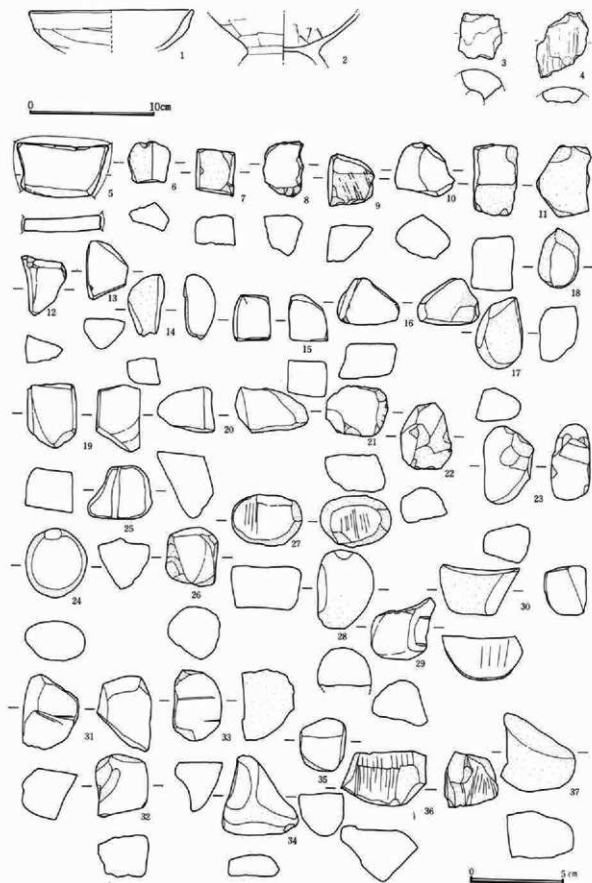


Fig.688 I 64号住居跡出土遺物(1)



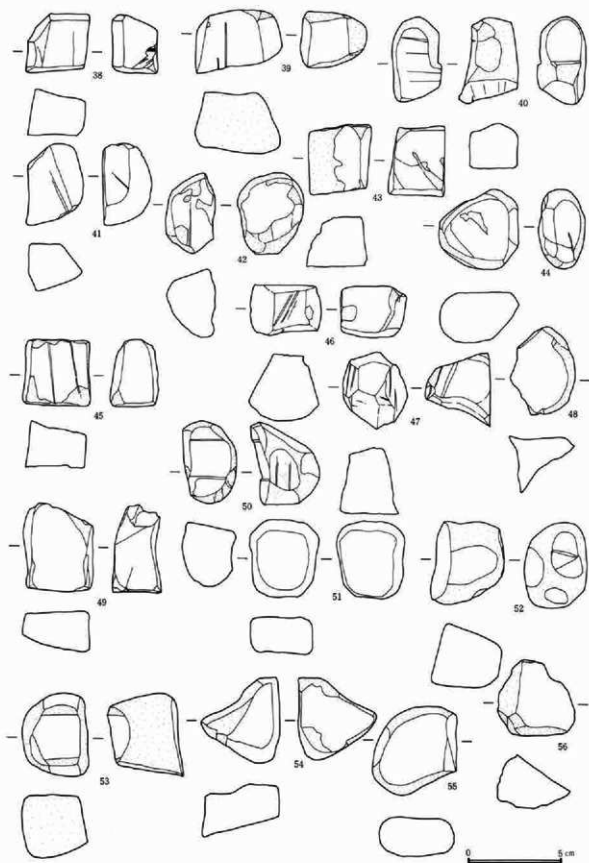


Fig.689 I 64号住居跡出土遺物(2)



Fig.690 I 64号住居跡出土遺物(3)



Fig.691 I 64号住居跡出土遺物(4)



Fig. 692 I 64号住居跡出土遺物(5)

I 64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 ④その他
688-1 287-1	土 師 器 杯	口~体 1/4	13.2 × — × (3.2)	埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方 向削り。	①酸化・良好 ②にぶ い褐 ③細砂混る
688-2 287-2	土 師 器 台付壺	下 1/4	— × — × (3.9)	南東部床 面	紐造。体部削り。内面無で。台部無 で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③緻密
688-3 287-3	土 製 品 麴羽口	中	長(3.6)	南東部床 面	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰~赤褐 ③砂混る
688-4 287-4	土 製 品 麴羽口	中	長(5.3)	床下埋土	棒付、縦方向無で。	①酸化・良好 ②褐灰 ~洗黄登 ③細砂混る
688-5 287-5	須 恵 器 転用磁石		長 4.8 幅 2.8 厚 0.7	北西部床 面	查類体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
688-6 287-6	石 製 品 砥 石	小 片	長 2.2 幅 2.1 厚 1.3	北東部床 面	小礫。4カ所使用。	流紋岩(砥沢?)
688-7 287-7	石 製 品 砥 石	小 片	長 2.2 幅 2.0 厚 1.5	北東部床 面	立方体状に全面使用。	流紋岩(砥沢?)
688-8 287-8	石 製 品 砥 石	小 片	長 2.9 幅 2.1 厚 2.1	南東部床 面	小礫。1カ所使用。	流紋岩(砥沢?)
688-9 287-9	石 製 品 砥 石	小 片	長 2.7 幅 2.5 厚 1.9	南東部床 面	小使。3カ所使用。角痕あり。	流紋岩(砥沢?)
688-10 287-10	石 製 品 砥 石	小 片	長 3.2 幅 2.8 厚 2.2	南東部床 面	小円礫の3カ所使用。	流紋岩(砥沢?)
688-11 287-11	石 製 品 砥 石		長 3.8 幅 2.4 厚 3.0	北東部床 面	角礫。2カ所使用。	
688-12 287-12	石 製 品 砥 石		長 3.2 幅 2.4 厚 1.4	北東部床 面	角礫。2カ所使用。	角閃石安山岩
688-13 287-13	石 製 品 砥 石		長 3.1 幅 2.2 厚 1.6	埋 土	小円礫の4カ所使用。	角閃石安山岩
688-14 287-14	石 製 品 砥 石		長 3.3 幅 2.0 厚 1.4	南東部床 面	小円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
688-15 287-15	石 製 品 砥 石		長 2.4 幅 2.0 厚 1.8	北東部床 面	小円礫。立方体状に4カ所使用。	角閃石安山岩
688-16 287-16	石 製 品 砥 石		長 3.3 幅 2.5 厚 1.8	北東部床 面	ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
688-17 287-17	石 製 品 砥 石		長 3.8 幅 2.5 厚 1.7	埋 土	小円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
688-18 287-18	石 製 品 砥 石		長 3.2 幅 2.1 厚 2.8	南東部床 面	小円礫の1カ所使用。	角閃石安山岩
688-19 287-19	石 製 品 砥 石		長 3.5 幅 2.6 厚 2.1	埋 土	小円礫を角礫状にほぼ全面使用。	角閃石安山岩

第5章 I区の遺構と遺物

I 64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残 存 量	計 測 値 (cm) 口 径 × 底 径 × 器 高	出 土 位 置	器 形・成 形及び 調整の 特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
688-20 287-20	石製 砥 石	品 石	長 3.0 幅 2.4 厚 3.3	南東部床 面	小円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
688-21 287-21	石製 砥 石	品 石	長 3.8 幅 2.7 厚 2.0	南東部床 面	小円礫の1カ所使用。	角閃石安山岩
688-22 287-22	石製 砥 石	品 石	長 3.5 幅 2.7 厚 1.7	北東部床 面	小円礫の4カ所使用。	角閃石安山岩
688-23 287-23	石製 砥 石	品 石	長 4.1 幅 2.7 厚 2.0	埋 土	小円礫の3カ所使用。	角閃石安山岩
688-24 287-24	石製 砥 石	品 石	長 3.7 幅 3.3 厚 2.1	南東部床 面	小円礫の1面使用。	角閃石安山岩
688-25 287-25	石製 砥 石	品 石	長 3.5 幅 2.9 厚 2.7	南東部床 面	砕礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
688-26 287-26	石製 砥 石	品 石	長 3.1 幅 2.7 厚 2.5	南東部床 面	小円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
688-27 287-27	石製 砥 石	品 石	長 3.8 幅 2.7 厚 2.2	南東部床 面	小円礫の上下2面使用。	角閃石安山岩
688-28 287-28	石製 砥 石	品 石	長 4.2 幅 3.0 厚 2.0	北東部床 面	小円礫の4の、2カ所使用。	角閃石安山岩
688-29 287-29	石製 砥 石	品 石	長 3.3 幅 3.0 厚 2.1	南東部床 面	小円礫の4カ所使用。	角閃石安山岩
688-30 287-30	石製 砥 石	品 石	長 4.2 幅 2.6 厚 2.3	南東部床 面	小円礫の5カ所使用。	角閃石安山岩
688-31 287-31	石製 砥 石	品 石	長 4.0 幅 3.0 厚 2.5	北東部床 面	小円礫の4カ所使用。	角閃石安山岩
688-32 288-32	石製 砥 石	品 石	長 3.3 幅 2.8 厚 2.3	南東部床 面	小円礫の2面使用。	角閃石安山岩
688-33 288-33	石製 砥 石	品 石	長 3.8 幅 2.6 厚 2.6	北西部床 面	小円礫の1面使用。刃当りあり。	角閃石安山岩
688-34 288-34	石製 砥 石	品 石	長 4.2 幅 4.1 厚 1.1	床下埋土	扁平円礫の3カ所使用。	角閃石安山岩
688-35 288-35	石製 砥 石	品 石	長 2.8 幅 2.5 厚 2.3	北西部床 面	小円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
688-36 288-36	石製 砥 石	品 石	長 4.6 幅 2.9 厚 2.9	北東部床 面	小円礫を角礫状に各面使用。乗積多数。	角閃石安山岩
688-37 288-37	石製 砥 石	品 石	長 4.2 幅 4.0 厚 2.5	北東部床 面	小円礫の1面使用。	角閃石安山岩
689-38 288-38	石製 砥 石	品 石	長 3.2 幅 3.0 厚 2.5	北東部床 面	小円礫を角礫状に全面使用。	角閃石安山岩

I 64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
689-39 288-39	石製品 砥石		長 4.6 幅 3.0 厚 3.0	南東部床 面	円礫の3カ所使用。刃当直あり。	角閃石安山岩
689-40 288-40	石製品 砥石		長 4.5 幅 3.1 厚 2.4	南東部床 面	円礫の4カ所使用。垂直数あり。	角閃石安山岩
689-41 288-41	石製品 砥石		長 4.3 幅 3.1 厚 2.5	南東部床 面	円礫の4カ所使用。	角閃石安山岩
689-42 288-42	石製品 砥石		長 4.3 幅 3.5 厚 2.6	埋土	円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩
689-43 288-43	石製品 砥石		長 3.5 幅 3.4 厚 2.6	北西部床 面	円礫を角礫状に5面使用。	角閃石安山岩
689-44 288-44	石製品 砥石		長 4.3 幅 4.3 厚 2.7	南東部床 面	円礫の3面、7カ所使用。	角閃石安山岩
689-45 288-45	石製品 砥石		長 3.6 幅 3.5 厚 2.5	北東部床 面	円礫を角礫状に上面使用。刃当直あり。	角閃石安山岩
689-46 288-46	石製品 砥石		長 3.8 幅 2.7 厚 3.5	南東部床 面	円礫を角礫状に5面使用。垂直数あり	角閃石安山岩
689-47 288-47	石製品 砥石		長 4.1 幅 3.5 厚 3.5	南東部床 面	円礫を多角礫状に使用。ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
689-48 288-48	石製品 砥石		長 4.7 幅 3.5 厚 2.9	南東部床 面	砕礫の1面使用。	角閃石安山岩
689-49 288-49	石製品 砥石		長 4.6 幅 3.7 厚 2.2	南東部床 面	円礫を角礫状にほぼ全面使用。	角閃石安山岩
689-50 288-50	石製品 砥石		長 4.3 幅 2.8 厚 3.2	埋土	円礫の4カ所使用。1面定輪使用。	角閃石安山岩
689-51 288-51	石製品 砥石		長 4.1 幅 3.7 厚 1.9	北東部床 面	円礫の上下両面使用。	角閃石安山岩
689-52 288-52	石製品 砥石		長 4.4 幅 3.6 厚 3.3	北東部床 面	円礫の5カ所使用。	角閃石安山岩
689-53 288-53	石製品 砥石		長 4.4 幅 3.5 厚 3.3	北東部床 面	円礫の5カ所使用。	角閃石安山岩
689-54 288-54	石製品 砥石		長 4.6 幅 4.2 厚 2.6	北東部床 面	扁平礫のほぼ全面使用。	角閃石安山岩
689-55 288-55	石製品 砥石		長 4.6 幅 4.5 厚 2.0	南東部床 面	扁平礫の1面及び2カ所使用。	角閃石安山岩
689-56 288-56	石製品 砥石		長 4.0 幅 4.0 厚 3.8	南東部床 面	円礫の7カ所使用。	角閃石安山岩
690-57 288-57	石製品 砥石		長 4.1 幅 4.0 厚 2.5	南東部床 面	円礫の全面使用。	角閃石安山岩

I 64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土 ②色調 ④その他
690-58 288-58	石製品 砥		長5.7 幅4.7 厚2.4	北東部床 面	小範囲使用。	角閃石安山岩
690-59 288-59	石製品 砥		長4.2 幅4.3 厚3.4	北東部床 面	多面使用。刀痕あり。	角閃石安山岩
690-60 288-60	石製品 砥		長4.5 幅4.0 厚1.9	北東部床 面	使用面は不明瞭。	角閃石安山岩
690-61 288-61	石製品 砥		長4.8 幅4.0 厚3.7	北東部床 面	多面使用。刀痕あり。	角閃石安山岩
690-62 288-62	石製品 砥		長4.8 幅4.1 厚3.0	北東部床 面	多面使用。刀痕あり。	角閃石安山岩
690-63 288-63	石製品 砥		長5.8幅4.8厚3.0	北東部床 面	2面使用。	角閃石安山岩
690-64 288-64	石製品 砥		長6.7 幅3.5 厚3.1	北東部床 面	多面使用。	角閃石安山岩
690-65 288-65	石製品 砥		長4.5 幅4.2 厚2.0	北東部床 面	使用面不明瞭。	角閃石安山岩
690-66 288-66	石製品 砥		長4.0 幅3.5 厚3.5	北東部床 面	3面使用。刀痕あり。	角閃石安山岩
690-67 288-67	石製品 砥		長 6.4 幅 4.2 厚 2.7	南東部床 面	円礫。4カ所使用。	角閃石安山岩
690-68 288-68	石製品 砥		長 6.1 幅 3.7 厚 3.2	北東部床 面	扁平円礫。欠損部以外、ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
690-69 288-69	石製品 砥		長 4.6 幅 4.0 厚 3.0	北東部床 面	円礫。一部以外、ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
690-70 288-70	石製品 砥		長 5.7 幅 4.1 厚 2.6	南東部床 面	幹行礫の片面を使用。	角閃石安山岩
690-71 288-71	石製品 砥		長 5.8 幅 4.6 厚 3.7	北西部床 面	円礫。角礫状に、ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
690-72 288-72	石製品 砥		長 5.0 幅 4.3 厚 3.4	南東部床 面	円礫の側面を段階的に使用。	角閃石安山岩
691-73 288-73	石製品 砥		長 5.0 幅 4.5 厚 4.1	北西部床 面	円礫の1面使用。条痕多数。	角閃石安山岩
691-74 288-74	石製品 砥		長 5.5 幅 4.9 厚 2.9	埋 土	円礫を三角形状に側面使用。	角閃石安山岩
691-75 288-75	石製品 砥		長 5.2 幅 4.6 厚 3.2	北東部埋 土	円礫の側面2カ所使用。	角閃石安山岩
691-76 288-76	石製品 砥		長 7.9 幅 4.0 厚 3.2	南東部床 面	長円礫の両端を使用。	角閃石安山岩



I 64号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
691-77 288-77	石製品 砥石		長 6.2 幅 4.5 厚 3.9	北東部床 面	円礫。側面3カ所使用。	角閃石安山岩
691-78 288-78	石製品 砥石		長 5.9 幅 4.8 厚 4.1	南東部床 面	円礫。2側面以外、角礫状に4面使用。	角閃石安山岩
691-79 288-79	石製品 砥石		長 6.6 幅 5.3 厚 4.1	南東部床 面	円礫。2カ所わずかに使用。	角閃石安山岩
691-80 288-80	石製品 砥石		長 5.0 幅 3.7 厚 3.4	北西部床 面	円礫。5カ所使用。	角閃石安山岩
691-81 288-81	石製品 砥石		長 5.0 幅 3.9 厚 3.6	南東部床 面	円礫。2面使用。条痕多数。	角閃石安山岩
691-82 288-82	石製品 砥石		長 5.5 幅 4.5 厚 2.7	南東部床 面	扁平円礫。1カ所使用。	角閃石安山岩
691-83 288-83	石製品 砥石		長 5.2 幅 4.6 厚 4.2	北東部床 面	円礫。2面使用。刃当痕あり。	角閃石安山岩
691-84 288-84	石製品 砥石		長 5.5 幅 4.5 厚 2.1	埋 土	扁平長円礫。両面及び両端、両側を使用。	角閃石安山岩
692-85 288-85	石製品 砥石		長 6.1 幅 5.8 厚 4.0	南東部床 面	長円礫の両端使用。	角閃石安山岩
692-86 288-86	石製品 砥石		長 7.4 幅 5.0 厚 3.0	南東部床 面	扁平長円礫の両端使用。	角閃石安山岩
692-87 288-87	石製品 砥石		長 8.2 幅 6.8 厚 5.3	北西部床 面	円礫の1面及び周縁8カ所使用。	角閃石安山岩
692-88 288-88	石製品 砥石		長 6.1 幅 5.0 厚 4.4	北西部床 面	円礫を角礫状に使用。刃当痕あり。	角閃石安山岩
692-89 288-89	石製品 砥石		長 7.4 幅 6.7 厚 5.0	北東部床 面	長円礫の両端使用。刃当痕あり。	角閃石安山岩
692-91 288-91	石製品 砥石		長 6.8 幅 6.7 厚 6.9	北西部床 面	円子の両端、ことに1端は多面使用。刃当痕あり。	角閃石安山岩
692-92 288-92	石製品 砥石		長 6.1 幅 5.2 厚 2.9	北東部床 面	扁平円礫の両面及び側面1カ所使用。	角閃石安山岩

I 65号住居跡 (Fig. 693~696・PL. 289、290)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.33 × 3.24	N-89.5°-E	東壁やや南寄り	

第5章 I区の遺構と遺物

I区の中央部やや西寄りに位置し、53～55 I 21～23の範囲にある。住居跡西側で62号住居跡と、北東でわずかに92号住居跡と重複している。新旧関係は62号より旧く92号住居跡より新しい時期の所産である。壁高は約50cmを測り垂直みに立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴や壁下の溝は検出されない。竈は東壁に付設され不整な半円形に掘り込まれ、袖部や煙道部の作り出しはない。燃烧部幅約70cm・奥行き約40cmを測る。遺物は散在して出土している。

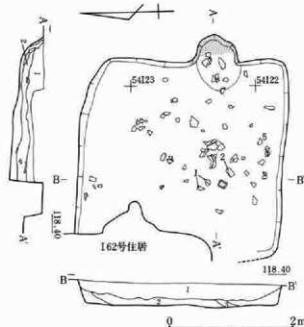


Fig.693 I 65号住居跡

I 65号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 灰層

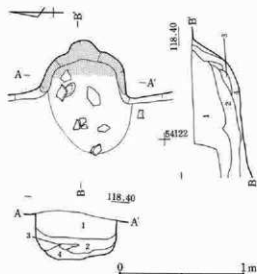


Fig.694 I 65号住居跡竈

I 65号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石多量、焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・灰を含む。
- 3 焼土
- 4 灰層

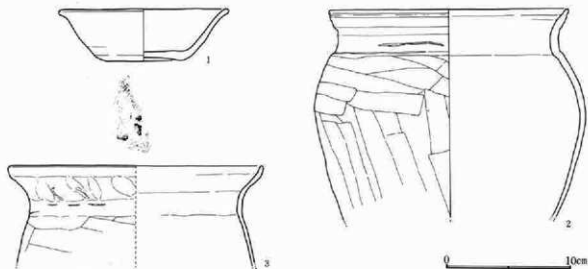
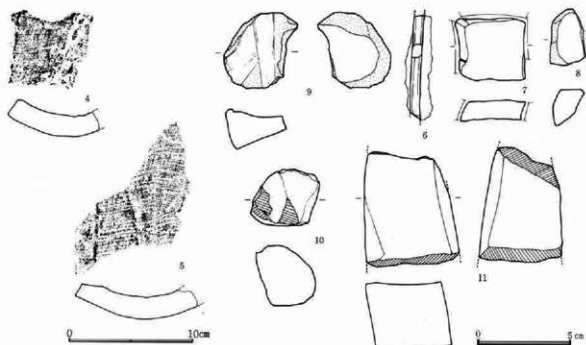


Fig.695 I 65号住居跡出土遺物(1)



I 65号住居跡出土遺物観察表

Fig.696 I 65号住居跡出土遺物(2)

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
695-1 289-1	須恵器 杯	口~底 片	13.6 × 6.2 × 4.1	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③緻密
695-2 289-2	土師器 壺	口~中	19.2 × — × (16.5)	南尖部床 面	紐造。口頸部強で。体部上位横、中位縦 方向寛削り。内面寛無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
695-3 289-3	土師器 壺	口~上	20.4 × — × (7.7)	埋 土	紐造。口頸部強で。指押痕残る。体部上 位横方向寛削り。内面寛無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
696-4 290-4	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	埋 土	桶巻、叩打。上面布目縦、下面無で。端 部面取り。	①還元・良好 ②青灰 ③細砂混る
696-5 290-5	瓦 平瓦	小片	厚 1.7	南尖部埋 土	桶巻、叩打。上面布目縦、下面無で。 端部2段面取り。	①還元・良好 ②青灰 ③砂混る
696-6 290-6	鉄製品 釘	両端 欠損	長(5.5) 厚 0.7×0.5	北尖部床 面	角釘。	
696-7 290-7	須恵器 転用紙石		長 3.7 幅 3.3 厚 1.0	埋 土	裏体部片転用。断面3ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
696-8 290-8	石製品 砥		長 3.0 幅 1.9 厚 1.9	埋 土	小円礫。2ヵ所使用。	角閃石安山岩
696-9 290-9	石製品 砥		長 4.0 幅 3.2 厚 2.1	埋 土	小円礫。上下両面使用。	角閃石安山岩
696-10 290-10	石製品 砥	小片	長 3.3 幅 3.0 厚 3.2	埋 土	欠損部以外、全面使用。	凝灰岩(紙沢?)
696-11 290-11	石製品 砥	小片	長(6.1) 幅 4.0 厚 3.5	電手前埋 土	角柱状。両端欠損。4面使用。	硬質砂岩

第5章 I区の遺構と遺物

168号住居跡 (Fig. 697~703・PL. 290~294)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.77 × 2.43	N-100°-E	東壁やや南寄り	不整楕円形 65 × 48 × 21

I区のやや北部に位置し、51~53 I 33・34の範囲にある。住居跡の東側で89号住居跡と、南側のほとんどは1号掘立柱建物と重複している。新旧関係は両者より新しい時期の所産である。また上面には近世の溝及び土坑が存在していた。長軸を南北方向にもつ隅丸の長方形を呈する。壁高は約30cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦をなし、踏み跡よりは良好である。竈は東壁に付設され、凝灰岩の加工材による構築である。竈の一部あるいは天井部が遺存する。煙道部は陥没することなく煙り出し孔まで明瞭に検出されている。竈の右側壁は4個の加工材を縦列に埋設して構成される。左側壁は遺存していないが、竈内や住居内に同質の用材が検出されており本来は左右壁とも同じように構築されていたと考えられる。右袖先端部の用材はやや開きぎみに埋設され、焚口部を形成していたと思われる。左側壁の用材は最深部のものが1個だけ遺存しており、右壁のそれと対になり角柱の天井材が渡っている。この最深部は燃焼部と煙道部との交換部となっている。燃焼部推定幅は側壁間で約35cm・奥行き約50cm、煙道部長さ約55cm・幅は燃焼部に最も近い箇所約20cm・煙り出し孔径約15cmを測る。出土遺物は住居内の全体に散布しており、かなり多量である。とくに羽釜が多く鈔付きで底が大きく開く単孔の甑も出土している。

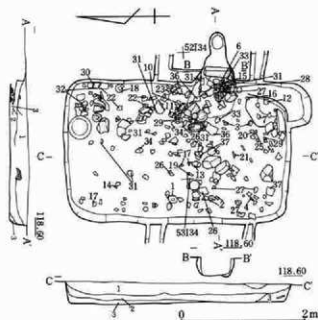


Fig.697 I 68号住居跡

I 68号住居跡

- 1 暗褐色土 細粒・白色粒を含む砂質土。
- 2 黒褐色土 C 紅石を少量含む粘性あり。
- 3 褐色土 粘性あり。

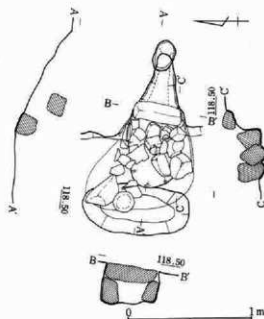


Fig.698 I 68号住居跡竈

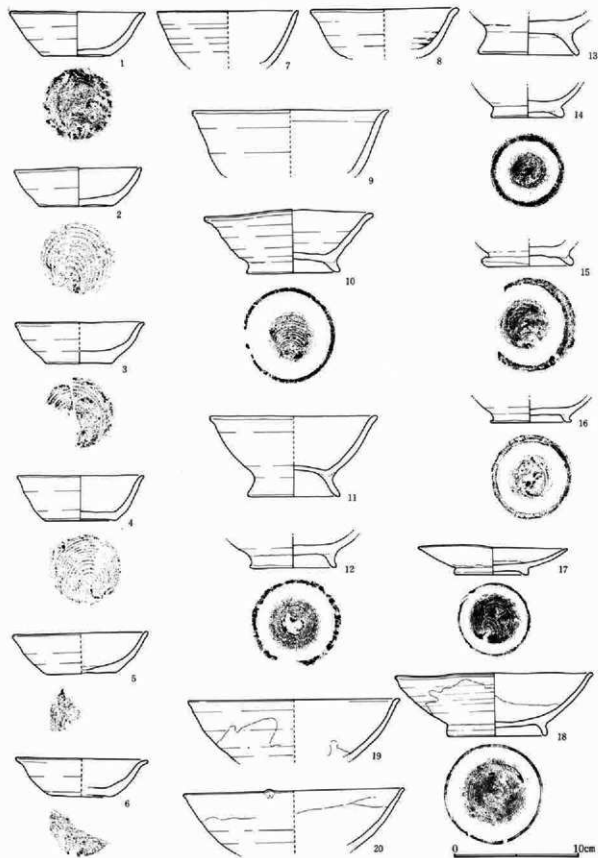


Fig.699 I 68号住居跡出土遺物(1)

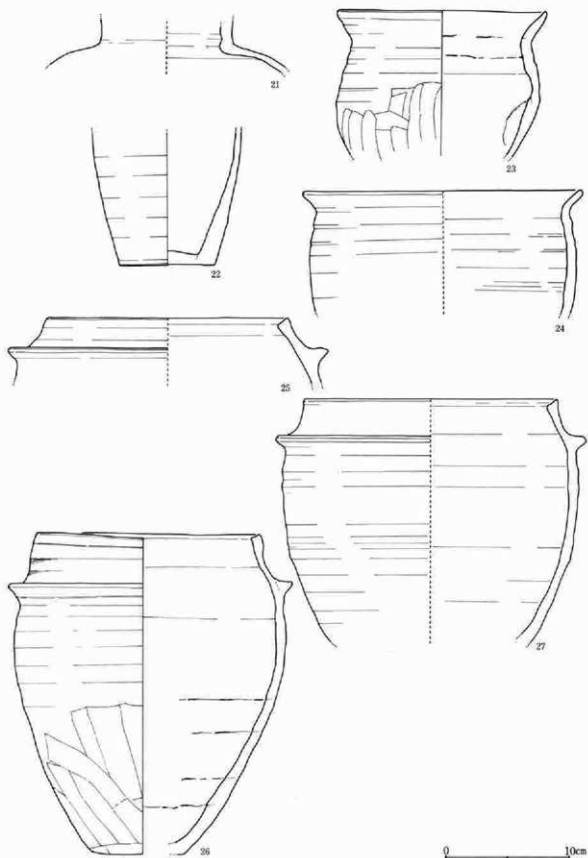


Fig.700 I 68号住居跡出土遺物( 2 )

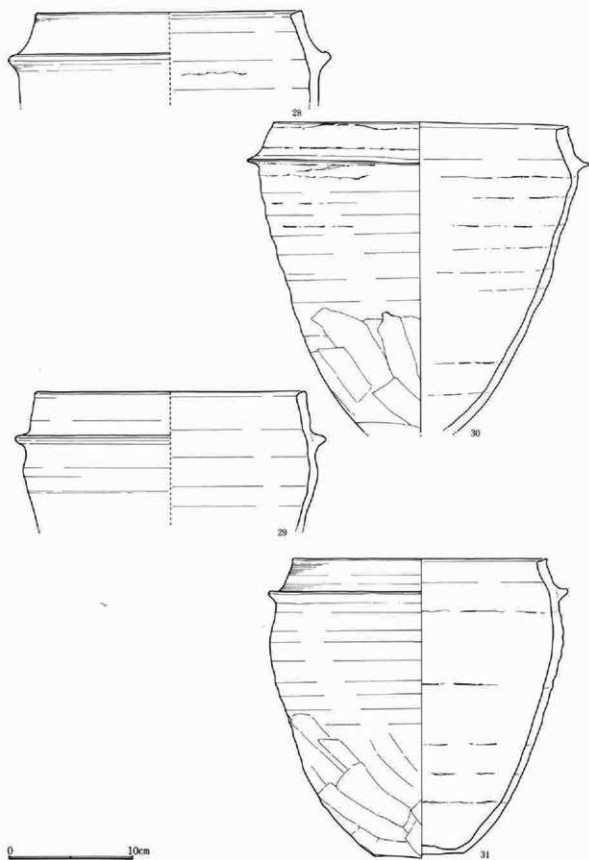


Fig.701 Ⅰ68号住居跡出土遺物(3)

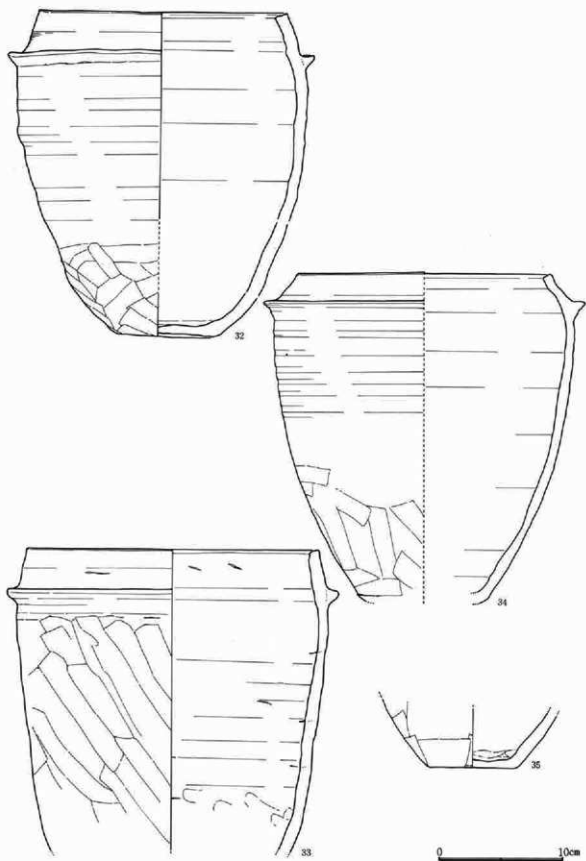


Fig.702 I 168号住居跡出土遺物(4)



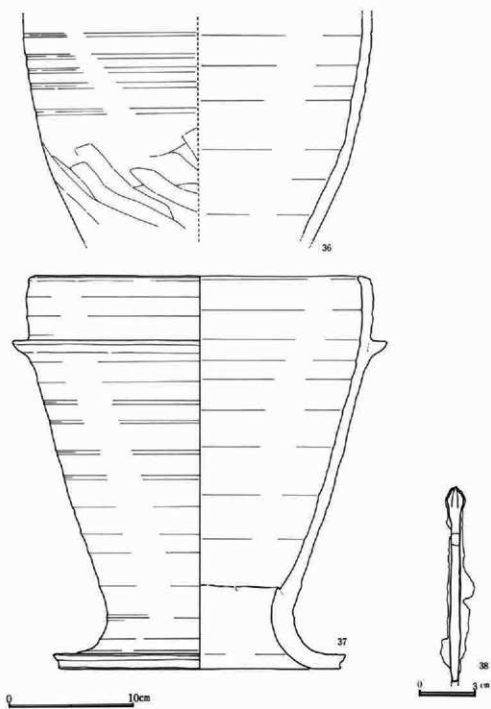


Fig.703 I 68号住居跡出土遺物(5)

第5章 I区の遺構と遺物

I 68号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存部	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
699-1 291-1	須恵器 杯	口～底 底	19.8 × 5.3 × 3.6	西尖部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良 ②に よい黄橙 ③細砂混る
699-2 291-2	須恵器 杯	口～底 底	10.2 × 5.9 × 3.2	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
699-3 291-3	須恵器 杯	口～底 底	10.3 × 5.4 × 3.3	南東部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
699-4 291-4	須恵器 杯	口～底 底	10.2 × 5.6 × 3.6	南西部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
699-5 291-5	須恵器 杯	口～底 底	19.8 × 5.6 × 3.2	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②に よい黄橙 ③細砂混る
699-6 291-6	須恵器 杯	口～底 底	10.6 × 4.6 × 3.0	窠内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
699-7 292-7	須恵器 碗	口～体 底	11.4 × — × (4.3)	南東部貯 蔵穴内	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る
699-8 292-8	須恵器 碗	口～体 底	11.9 × — × (3.9)	埋土	轆轤。右回転。内外吸灰。	①酸化・良好 ②に よい黄 ③細砂混る
699-9 292-9	須恵器 碗	口～体 底	15.8 × — × (5.1)	埋土	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
699-10 292-10	須恵器 碗	口～底 底	13.6 × 7.5 × 5.0	塚手前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。口縁部歪む。	①酸化・良 ②に よい黄橙 ③細砂混る
699-11 292-11	須恵器 碗	口～底 底	13.5 × 7.4 × 6.4	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る
699-12 292-12	須恵器 碗	底	— × 7.0 × (2.6)	南東部貯 蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る
699-13 292-13	須恵器 碗	底	— × 8.1 × (3.0)	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
699-14 292-14	須恵器 碗	底	— × 5.8 × (2.4)	北西部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。	①酸化・良好 ②淡 黄 ③細砂混る
699-15 292-15	須恵器 碗	底	— × 7.3 × (1.6)	東尖部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。焼成時に潰れ。	①酸化・良好 ②に よい黄 ③細砂混る
699-16 292-16	須恵器 碗	底	— × 6.5 × 1.8	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。端部潰れ。	①還元・良 ②灰 白 ③細砂混る
699-17 292-17	灰輪陶器 皿	口～底 底	11.9 × 6.0 × 2.4	中央～北 西部床面	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。体部内外施釉。つけ掛け。歪む。	①還元・良好 ②灰 白 ③緻密
699-18 292-18	灰輪陶器 碗	口～底 底	15.7 × 7.9 × 5.0	北東部東 壁下床面	轆轤。右回転。底部回転筒作り。付高台撫で。口縁部内外施釉。	①還元・良好 ②灰 白 ③緻密
699-19 292-19	灰輪陶器 碗	口～体 底	17.0 × — × (4.8)	中央部床 面	轆轤。右回転。口縁部内外施釉。つけ掛け。	①還元・良好 ②灰 白 ③緻密

I 68号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存址	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
699-20 292-20	灰胎陶器 輪花機	口～体 小片	17.8 × — × (4.8)	南東部床 面	轆轤。右回転。口縁部内外施軸。口唇部 輪花弁状引き出し。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
700-21 292-21	灰胎陶器 広口壺	頸～上 片	— × — × (4.0)	南東部埋 土	紐造。轆轤。横撫で。外面施軸。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
700-22 292-22	須恵器 瓶	中～底 片	— × 7.6 × (10.5)	北東～東 中央部床 面	底部円板。紐造。轆轤。右回転横撫で。	①還元・軟質 ②褐灰 ③細砂混る
700-23 292-23	土師器 甕	口～中 片	16.8 × — × (11.6)	東東部床 面敷在	紐造。口頸部～体部上位。横撫で。中位 縦方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
700-24 293-24	土師器 甕	口～中 片	22.4 × — × (9.8)	埋 土	紐造。横撫で。羽釜と同質。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
700-25 293-25	— 羽 釜	口～上 片	19.5 × — × (5.2)	南東部埋 土	紐造。横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
700-26 293-26	— 羽 釜	口～底 片	18.0 × 7.3 × 25.4	床面広範 圍に敷在	紐造。横撫で。体部下平縦方向瓦削り。	①加酸化還元・良好 ②明褐色 ③細砂混る
700-27 293-27	— 羽 釜	口～下 片	20.4 × — × (19.3)	竈内・南 西部床面	紐造。横撫で。体部下位縦方向瓦削り。	①酸化・良好 ②に よい赤褐 ③細砂混る
701-28 293-28	— 羽 釜	口～上 片	21.4 × — × (7.3)	竈 内	紐造。横撫で。	①酸化・良好 ②に よい黄褐 ③細砂混る
701-29 293-29	— 羽 釜	口～上 片	21.8 × — × (10.7)	南東部床 面	紐造。横撫で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
701-30 293-30	— 羽 釜	口～下 片	23.5 × — × (24.6)	北東部東 壁下床面	紐造。横撫で。体部下位、粗い縦方向瓦 削り。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
701-31 293-31	— 羽 釜	口～底 片	20.3 × 7.2 × 23.7	中央部埋 土	紐造。横撫で。体部下半、斜方向瓦削り。	①加酸化還元・良 ② 灰白～橙 ③細砂混る
702-32 294-32	— 羽 釜	口～底 片	19.8 × 7.5 × 25.7	竈内～竈 手前床面	紐造。横撫で。体部下位、斜方向瓦削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
702-33 294-33	— 羽 釜	口～下 片	23.4 × — × (24.0)	竈手前床 面	紐造。横撫で。体部跨下より粗い斜方向 瓦削り。	①酸化・良好 ②に よい赤褐 ③細砂混る
702-34 294-34	— 羽 釜	口～底 片	20.4 × 10.6 × 26.0	東央～中 央部床面	紐造。横撫で。体部下位、不定方向瓦削 り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
702-35 294-35	— 羽 釜	下～底 片	— × 7.0 × (5.4)	埋 土	紐造。横撫で。不定方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
703-36 294-36	— 羽 釜	中 片	— × — × (17.8)	東東部床 面	紐造。横撫で。下半、斜方向瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
703-37 294-37	— 羽 釜 (横)	口～底 片	27.4 × 22.6 × 31.0	中央～南 西部床面	紐造。横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
703-38 294-38	鉄製品 先端部 欠損	長(10.2) 厚0.5		北東部埋 土	頂部扁平になる。	

I 69号住居跡 (Fig. 704~707・PL. 295~297)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形 (カマド部分突出し)	4.26 × 3.70	N-59.5°-E	東壁やや南寄り	

I 区のやや北側に位置し、53~55 I 31~33の範囲にある。住居跡の東側で1号掘立柱建物跡と重複しているがこれよりも新しい時期の所産である。西側はJ 1号溝によって消失し全容は不明である。平面形態は東壁が突出しており不整形形を呈する。残存状況からすれば東西に長い形態になろう。南北長は約2.4m測る。東壁は南北の壁の変換部からすれば約1m程度張り出している。竈を基軸にする主軸方位はおよそN-59.5°-Eを示す。壁高は約30cmを測り直線的な傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなし比較的固く踏み締まる。貯蔵穴・壁下の溝などは検出されない。竈は不整形に張り出す東壁に付設されるが、袖部の確定は出来なかった。火床面は住居内にあり、幅狭く長い燃焼部から急角度で立ち上がり短く水平な煙道部ないしは煙り出し孔に至る。燃焼部幅約60cm・奥行き約60cm、煙道部(煙り出し孔)長さ約20cmを測る。なお1号掘立柱建物跡の西辺柱穴の中央の柱穴は火床面下から検出されている。出土遺物は多量で竈周辺のほか住居中央部からも多く検出されている。

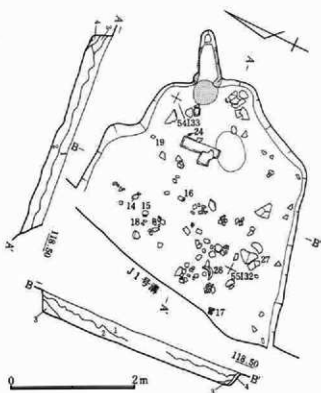


Fig. 704 I 69号住居跡

I 69号住居跡

- 1 黒褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C 軽石を含む。
- 4 黒褐色土 C 軽石を多量に含むボソボソの層。

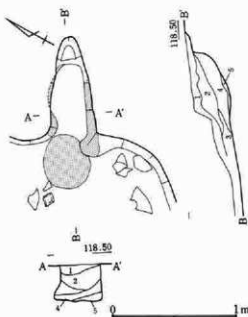


Fig. 705 I 69号住居跡竈

I 69号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C 軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C 軽石・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 網りある層。
- 4 焼土
- 5 灰層 焼土粒・灰を含む。



Fig.706 Ⅰ69号住居跡出土遺物(1)

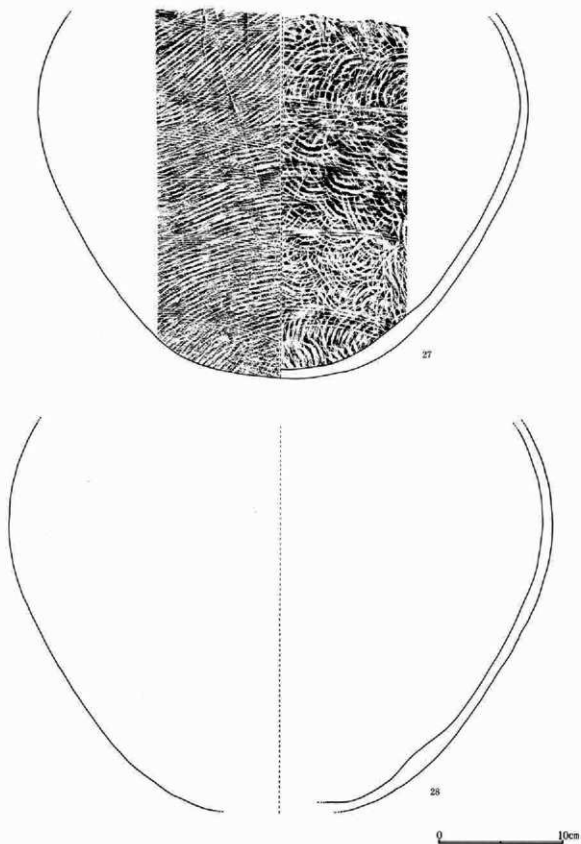


Fig.707 169号住居跡出土遺物(2)

Ⅰ69号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存位	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
706-1 296-1	土 師 器 杯	口～体 小片	11.2 ×	— × (3.3)	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体部横方向 寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-2 296-2	土 師 器 杯	口～底 片	10.1 ×	— × 2.9	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体底部横方 向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-3 296-3	土 師 器 杯	口～体 小片	11.6 ×	— × (2.2)	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体部横～斜 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-4 296-4	土 師 器 杯	口～体 片	12.2 ×	— × (2.8)	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体底部不定 方向寛削り。口唇部内傾。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-5 296-5	土 師 器 杯	口～底 片	12.0 ×	— × 3.7	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底 部不定方向寛削り。底部比較的厚い。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-6 296-6	土 師 器 杯	口～体 小片	12.5 ×	— × (3.2)	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体部横方向 寛削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
706-7 296-7	土 師 器 杯	口～底 片	13.0 ×	— × 4.0	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体部横、底 部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-8 296-8	土 師 器 杯	口～底 片	12.6 ×	— × 3.8	埋 土	指押。口縁部及び内面側で。体底部粗い 寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-9 296-9	須 恵 器 蓋	胴～頂	— × 胴 6.2 × (1.4)		埋 土	轆轤。右回転。横側で。平頂部回転寛削 り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
706-10 296-10	須 恵 器 蓋	端 片	16.6 × 胴 — × (2.3)		南西部泥 形	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
706-11 296-11	須 恵 器 蓋	頂～端 小片	18.4 × 胴 — × (2.2)		南西部泥 形	轆轤。右回転。頂部回転寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
706-12 296-12	土 師 器 甕	口～下 片	21.4 ×	— × (24.8)	西尖部泥 面	紐造。口頸部側で。体部斜～縦方向寛削 り。内面寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-13 296-13	須 恵 器 甕	中～底 片	— × 14.5 × (13.9)		龍南脇泥 面	紐造。体部横側で。底部不定方向寛削り。 付高台横側で。内面寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
706-14 296-14	鉄 滓		径9.1×7.0 厚2.4	170 #	西部床面	炭化物入る。	
706-15 296-15	鉄 滓		径8.8×8.4 厚2.4	220 #	西部床面	炭化物入る。	
706-16 297-16	土 製 品 編 羽 口	中～基	長(6.7) 幅5.2 厚5.0		中央部埋 土	棒付。縦方向側で。先端部欠損、溶解物 付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
706-17 297-17	土 製 品 編 羽 口	中～基 片	長(5.7) 幅6.5		南西部泥 面	棒付。縦方向側で。指押痕残る。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
706-18 297-18	土 製 品 編 羽 口	基	長(4.4)		北西部埋 土	棒付。横で。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③細砂混る
706-19 297-19	土 製 品 編 羽 口	先 片	長(4.2)		北東部埋 土	棒付。横で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒灰 ③砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 69号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存状況	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
706-20 297-20	土製品 鬮羽口	中	長(4.8)	埋土	棒付、縦方向溝で。	①酸化・二次還元 ② 灰～洗黄橙 ③砂混る
706-21 297-21	土製品 鬮羽口	中	長(6.6)	中央部埋土	棒付、器で。指頭痕顯著。	①酸化・二次還元 ② 灰～洗黄橙 ③砂混る
706-22 297-22	土製品 鬮羽口	先	長(5.6)	埋土	棒付、器で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
706-23 297-23	土製品 鬮羽口	中	長(3.5)	埋土	棒付、器で。薄手。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
706-24 297-24	土製品 鬮羽口	先 ¼	長(3.8)	竈手前床 面	棒付、器で。粒状溶解物付着。	①二次還元 ②灰～灰 黄橙 ③細砂混る
706-25 297-25	土製品 鬮羽口	中	長(5.2)	埋土	棒付、器で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
706-26 297-26	土製品 鬮羽口	中	長(2.8)	埋土	棒付、器で。	①酸化・二次還元 ② 灰白～橙 ③細砂混る
707-27 297-27	須恵 器大 壺	上～底 ¼	— × — × (28.4)	南西部床 面	細造。叩打。丸底。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
707-28 297-28	須恵 器大 壺	上～底 胴部¼	— × — × (30.6)	西西部床 面	細造。叩打。丸底。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

I 70号住居跡 (Fig. 708～712・PL. 297、298)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.44 × 2.66	N— 95° — E	東壁やや南寄り	円形 75 × 70 × 24

I 区の中央部やや北寄りに位置し、52～54 I 34～36の範囲にある。住居跡西側は J 1号溝によって消失しているため全容は知りえないが、長軸を東西方向にもつ長方形の平面形態を呈すると考えられる。北側に張り出し部が検出されているが住居の床面に比べ約30cm程度高くなっており、当跡に付属するものかどうかは不明である。壁の遺存は良好で壁高約40cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は中央部がやや低くなるが堅く踏み締まる。壁下の溝は幅約20cm・深さ約6cmを測り東壁から北壁にかけて巡る。南壁には検出されていない。竈は東壁に付設され、楕円形に掘り込まれた燃焼部から緩い傾斜で立ち上がり水平で長い煙道部が作り出される。袖部の構築材は検出されていないが左右袖部には24×16cm程度の長方形の窪みがあり袖材の埋設が想定される。埋設痕内法は約45cm、燃焼部奥行き約80cm、煙道部長さ約80cmを測る。出土遺物は貯蔵穴内に集中するほかは散在して検出された。



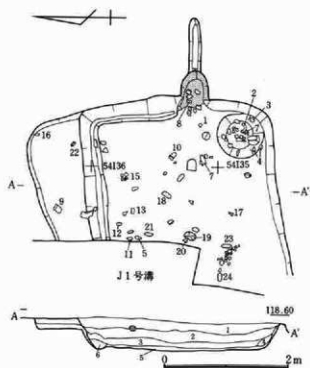


Fig.708 I 70号住居跡

I 70号住居跡

- 1 暗褐色土 細粒・C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 C軽石多量、炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・焼土粒・炭化粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 C軽石を含み粘りあり。
- 5 暗褐色土 粘る粘性土。
- 6 暗褐色土 粘りのある層。

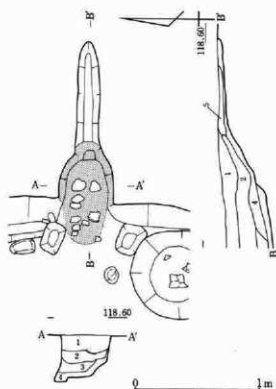


Fig.709 I 70号住居跡竪

I 70号住居跡竪

- 1 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土
- 4 焼土
- 5 暗褐色土 焼土粒を含む砂質土。

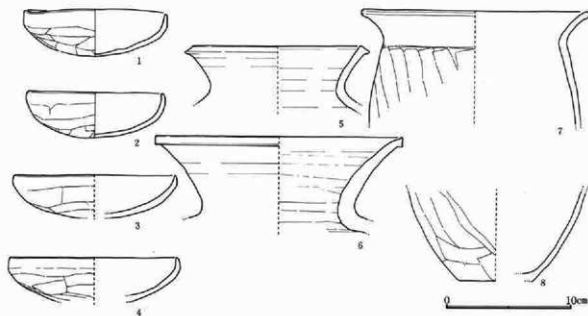


Fig.710 I 70号住居跡出土遺物(1)



Fig.711 Ⅰ70号住居跡出土遺物(2)

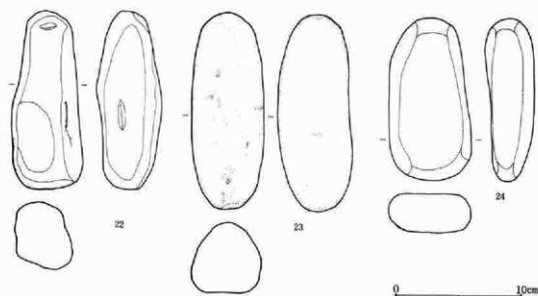


Fig.712 Ⅰ70号住居跡出土遺物(3)

Ⅰ70号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 その他
710-1 298-1	土器 杯	口～底 完	11.0 × — × 3.6	電子前床 面	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ③緻密	②明赤 褐
710-2 298-2	土器 杯	口～底 欠	11.4 × — × 3.8	南東部貯 蔵穴埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ③緻密	②明赤 褐
710-3 298-3	土器 杯	口～体 小片	13.0 × — × (3.4)	南東部貯 蔵穴埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向 寛削り。	①酸化・良好 ③緻密	②橙
710-4 298-4	土器 杯	口～体 欠	13.5 × — × (3.5)	南東部貯 蔵穴埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横、底 部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ③細砂混る	②橙
710-5 298-5	須恵 壺	口～頸 欠	13.7 × — × (5.2)	北尖部埋 土	紐造。轆轤右回転、横撫で。	①還元・良好 ③細砂混る	②灰白
710-6 298-6	須恵 壺	口～頸 欠	19.8 × — × (7.6)	北尖部北 壁上埋土	紐造。轆轤。右回転、横撫で。	①還元・良好 ③砂混る	②灰
710-7 298-7	土器 壺	口～上 片	18.2 × — × (9.0)	南東部埋 土	紐造。口頸部撫で。体部縦方向寛削り。 内面寛撫で。	①酸化・良好 ③細砂混る	②橙
710-8 298-8	土器 壺	下 片	— × 6.2 × (7.0)	電 内	紐造。体部縦方向寛削り。内面寛撫で。	①酸化・良好 ③細砂混る	②橙
711-9 298-9	土製品 籬羽口	先～基	長16.9幅7.1厚7.1	西尖部遺 構外埋土	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る	
711-10 298-10	土製品 籬羽口	先～基	長12.2幅6.8厚7.0	東尖部埋 土	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る	

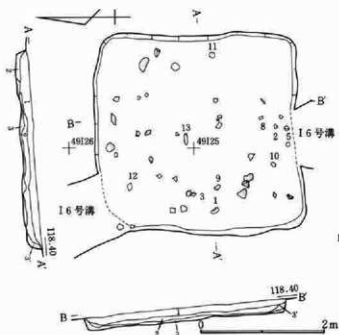
第5章 I区の遺構と遺物

I 70号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
711-11 298-11	土製品 陶羽口	先～中 長	(8.1)	北中央部埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
711-12 298-12	土製品 陶羽口	基	長(6.3)	北中央部埋 土	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
711-13 298-13	土製品 陶羽口	中～基 長	(7.7)	北中央部埋 土	棒付、縦方向撫で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
711-14 298-14	土製品 陶羽口	中～基 長	(6.2)	北中央部埋 土	棒付、縦方向磨削り。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
711-15 298-15	土製品 陶羽口	中 長	(8.8)	北東部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
711-16 298-16	土製品 陶羽口	基 長	(5.5)	北東部遺 構外埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②灰白 ～橙 ③砂混る
711-17 298-17	石製品 砥石	完	長 6.8幅 4.2厚 1.7	中央部埋 土	板状に両面使用、また側面12カ所のうち 11カ所は丸筋。	流紋岩(砥沢?)
711-18 298-18	石	完	長13.9幅 6.2厚 4.7 583.9g	中央部床 面	長円礫。中央部両側打痕、1端に打撃痕 あり。	輝緑岩
711-19 298-19	石	完	長17.7幅12.0厚 9.4 1,056.6g	中央部埋 土	円形礫。一部に擦痕あり。	輝石安山岩(粗粒)
711-20 298-20	石	完	長12.3幅 5.9厚 3.3 381.2g	中央部埋 土	扁平長円礫。縁辺部割離。	石英閃緑岩
711-21 298-21	石	完	長13.9幅 5.9厚 4.9 561.4g	南西部床 面	棒状円礫。	溶結凝灰岩
712-22 293-22	石	完	長14.0幅 5.7厚 5.2 538.2g	北東部遺 構外埋土		砂岩
712-23 298-23	石	完	長15.4幅 5.7厚 5.5 744.1g	南東部埋 土	棒状円礫。両端部打撃痕あり。	輝石安山岩
712-24 298-24	石	完	長12.7幅 6.6厚 3.9 516.6g	南東部埋 土	扁平長円礫。	石英閃緑岩

I 71号住居跡 (Fig. 713、714・PL. 299)

I 区の中央部に位置し、48・49 I 24・25の範囲にある。南北方向に走行する6号溝と重複しているがこれよりも新しい時期の所産と考えられる。竈・炉などの痕跡がなく住居とする条件は欠如している。竪穴状遺構の規範に属しようか。平面形態は正方形を呈し、1辺約3.1mを測る。東壁を基軸にする主軸方位はおおよそN-90-Eを示す。壁高は約20cmを測りやや傾斜をもって立ち上がる。床面は起伏があり安定せず踏み締まりも弱い。出土遺物は鉋滓・須恵器片の転用砥石等が検出されているが散在している。



- I 71号住居跡
- 1 暗褐色土 C 軽石を含み粘性あり。
  - 2 暗褐色土 C 軽石少量、粘性あり。
  - 3 暗褐色土 粘性の強い層。

Fig.713 I 71号住居跡

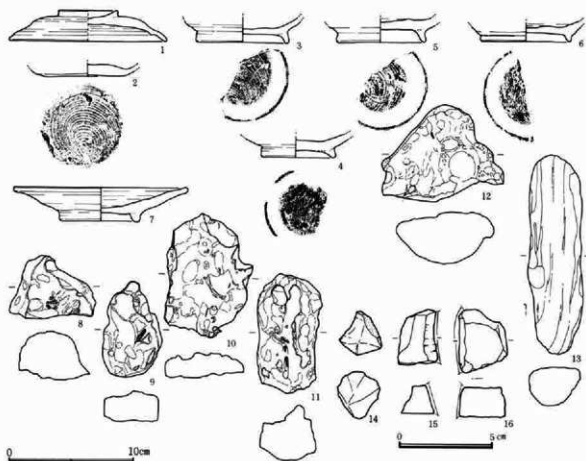


Fig.714 I 71号住居跡出土遺物

第5章 Ⅰ区の遺構と遺物

Ⅰ71号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測量 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
714-1 299-1	須恵器 蓋	隅へ端 片	12.7 × 隅 4.7 × 2.4	西中央部 埋土	轆轤。右回転。頂部2段回転段削り。隅 横撫で。	①還元・良好 ②灰黄 ③細砂混る
714-2 299-2	須恵器 杯	底	— × 6.4 × (0.9)	南中央部 床面	轆轤。右回転糸切り。底部比較的厚い。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
714-3 299-3	須恵器 椀	底 片	— × 7.4 × (2.0)	西中央部 床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰オ リーブ ③細砂混る
714-4 299-4	須恵器 椀	底 片	— × 6.0 × (1.9)	埋土	轆轤。右回転糸切り。底部横撫で。付高台 横撫で。	①加酸化還元・低温 ②灰オリーブ ③細砂混る
714-5 299-5	須恵器 椀	底 片	— × 7.2 × (1.9)	南中央部 床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
714-6 299-6	須恵器 椀	底 片	— × 7.3 × (1.6)	南西部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
714-7 299-7	須恵器 皿	口へ底 片	14.0 × 6.5 × 2.7	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰白 ③緻密
714-8 299-8	鉄 椀形磁滓		長 6.8 幅 5.0 厚 3.7	南中央部埋 土	小型。炭化物混入。	
714-9 299-9	鉄 椀形磁滓		長 7.5 幅 4.5 厚 2.3	西中央部 床面	小型。炭化物混入。	
714-10 299-10	鉄 椀形磁滓		長 9.5 幅 4.7 厚 3.2	南西部床 面	長形型。炭化物、粒状物混入。	
714-11 299-11	鉄 椀形磁滓		長 9.8 幅 6.8 厚 2.0	東中央部床 面	溶解物付着。	
714-12 299-12	鉄 椀形磁滓		長(7.7) 幅 9.6 厚 4.0	北西部床 面	溶解物付着。気泡空洞多し。	
714-13 299-13	石	完	長15.8 幅 4.1 厚 3.0 305.0g	中央部床 面	棒状円錐。側部一部剥離。	雲母石英片目
714-14 299-14	石製品 磁石		長 2.4 幅 2.3 厚 2.0	埋土	ほぼ全部使用。	輝石安山岩(粗粒)
714-15 299-15	須恵器 転用磁石		長 2.9 幅 2.1 厚 1.5	埋土	裏体部片転用。断面1ヵ所使用。	①還元・良好 ②褐色 ③細砂混る
714-16 299-16	須恵器 転用磁石		長 3.3 幅 2.6 厚 1.5	埋土	裏体部片転用。断面1ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

Ⅰ72号住居跡 (Fig. 715~718・PL. 300, 301)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.78 × 2.83	N-94.5°-E	東壁やや南寄り	

I区の中央部に位置し、46~48 I 27~29の範囲にある。住居跡の東半は80号住居跡と、また西側は5号溝と重複している。新旧関係は80号住居跡・5号溝より新しい時期の所産である。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴・壁下の溝は検出されない。竈は東壁に付設され、燃烧部は半円形に掘り込まれる。袖部・煙道部の作り出しはない。燃烧部幅約70cm・奥行き約50cmを測る。出土遺物は竈内およびその前方に検出されている。

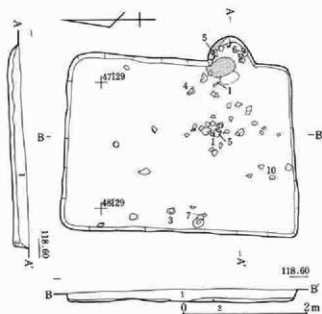


Fig.715 I 72号住居跡

I 72号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 灰を含む。

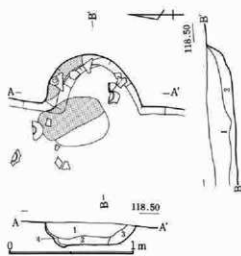


Fig.716 I 72号住居跡

I 72号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 灰を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 4 焼壁

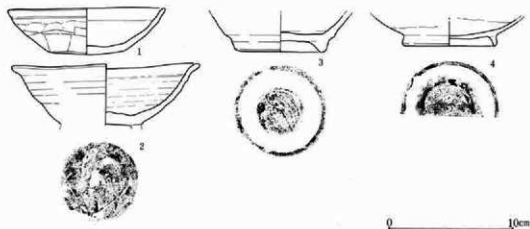


Fig.717 I 72号住居跡出土遺物(1)

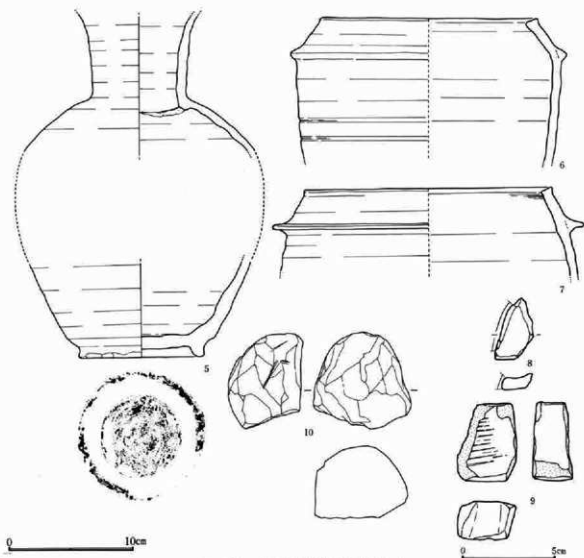


Fig.718 Ⅰ72号住居跡出土遺物(2)

Ⅰ72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
717-1 300-1	須恵器 杯	口～底 片	12.6 × 6.0 × 3.7	床面広範 回散布	轆轤。右回転。体部傾。底部不定方向の 粗い手持攪削り。	①酸化・良好 ②によ い稀 ③砂混る
717-2 300-2	須恵器 椀	口～底	15.0 × (6.5) × (5.0)	西央部床 面	轆轤。右回転未切り。付高台剥落。付高 台剥落後、長期に使用か。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
717-3 300-3	須恵器 椀	底	— × 7.2 × (2.7)	西央部床 面	轆轤。右回転未切り。付高台傾で。	①還元・低温 ②灰 ③轆密
717-4 300-4	灰釉陶器 椀	体～底 片	— × 7.6 × (2.2)	電手前床 面	轆轤。右回転。付高台。体部内外施釉。 刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰白 ③轆密
718-5 301-5	須恵器 短頸壺	頸～上 片	— × 10.0 × (27.6)	窠内・中 央部埋土	紐造。轆轤。右回転横傾で。底部回転攪 削り。付高台横傾で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る



I72号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
718-6 300-6	— 羽釜	口~中 残	17.4 × — × (11.4)		電内	紐造。横撫で。	①焼成・良好 ②に よい赤褐色 ③細砂混る
718-7 300-7	— 羽釜	口~上 残	19.8 × — × (7.0)		中央~西 央部床面	紐造。横撫で。	①焼成・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
718-8 301-8	石製品 砥石		長 3.2 幅 2.0 厚 0.6		埋土	断面1カ所使用。	
718-9 301-9	石製品 砥石		長 4.1 幅 3.2 厚 2.0		埋土	角礫状に4面使用。	角閃石安山岩
718-10 301-10	石製品 砥石		長 7.8 幅 7.7 厚 5.7		南西部床 面	中円礫。多面使用。	角閃石安山岩

I73号住居跡 (Fig. 719~722・PL. 301, 302)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.74 × 2.66	N—91°—E	東壁やや南寄り	不整形円形 40 × 35 × 18

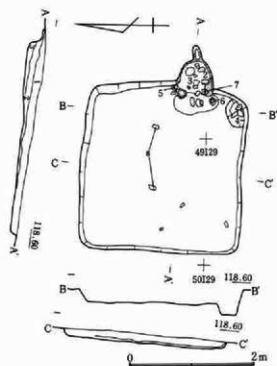


Fig.719 I73号住居跡

I区の中央部に位置し、48・49 I 28・29の範囲にある。東端は5号溝と重複しているがこれより新しい時期の所産である。壁高は東壁の遺存がよく約30cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦をなし電前面は固く踏みしめる。電は東壁に付設され楕円形の燃焼部から急角度で立ち上がり、短く浅い煙道部が突出する。袖部は遺存していないが掘形面では電前にその痕跡があり袖材が埋設されていたと考えられる。燃焼部左奥に偏って支脚材が認められたが本来の位置(中央部)から動いている。燃焼部幅約55cm・奥行き約50cm、煙道部長さ約25cmを測る。遺物は電内及び貯蔵穴より集中して出土しており、須恵器片の転用砥石が多い。

## I73号住居跡

- 1 暗褐色土 粗粒、C 軽石を含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C 軽石・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土

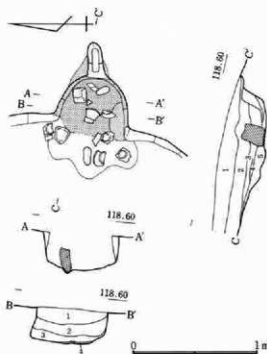


Fig.720 I 73号住居跡竈

I 73号住居跡竈

- 1 暗褐色土 細粒、C粒石を含み厚く締る。
- 2 暗褐色土 C粒石・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土
- 4 焼土 灰を含む。

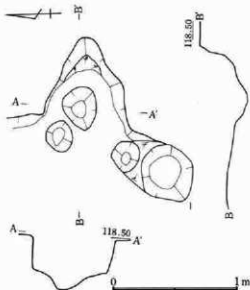


Fig.721 I 73号住居跡竈堀形

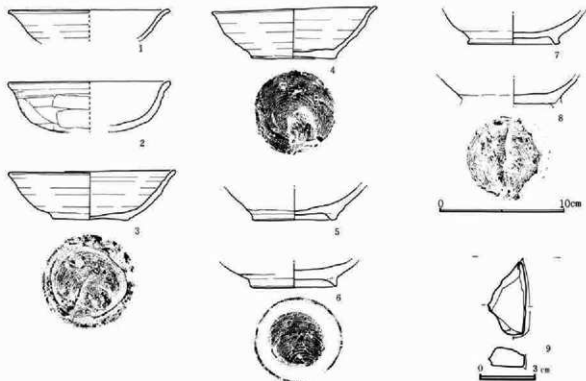


Fig.722 I 73号住居跡出土遺物

I73号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
722-1 302-1	土師器 杯	口～体 残	13.0 × — × (2.3)	南西部埋 土	横溝で、薄手。	①酸化・低温 ②浅黄 ③細砂混る
722-2 302-2	土師器 杯	口～底 残	13.0 × — × (4.0)	堀内	指押。口縁部及び内面無で、体部横方向 粗い荒削り。	①酸化・良好 ②赤褐 ③緻密
722-3 302-3	須恵器 杯	口～底 残	13.4 × 6.2 × 4.0	堀内	横溝。右回転永切り。無調整。口縁部 歪む。	①還元・良好 ②暗オ リーブ灰 ③砂混る
722-4 302-4	須恵器 杯	口～底 残	13.2 × 6.8 × 4.2	南東部の 竪穴内	横溝。右回転永切り。無調整。口縁部 歪む。	①還元・やや低温 ② 灰白 ③粗砂少量混る
722-5 302-5	須恵器 椀	体～底 残	— × 6.8 × (2.5)	堀内・電 手前床 面	横溝。右回転永切り。付高台及び器部 横溝で。	①加酸化還元 ②灰黄 褐 ③細砂混る
722-6 302-6	須恵器 椀	底	— × 6.9 × (1.8)	電手前床 面	横溝。右回転永切り。付高台横溝で。	①加酸化還元 ②浅黄 ③細砂混る
722-7 302-7	須恵器 椀	体～底 残	— × 7.4 × (2.4)	堀内	横溝。右回転永切り。付高台無で。	①酸化・良 ②浅黄 ③細砂混る
722-8 302-8	須恵器 椀	体～底 残	— × — × (2.0)	中央部床 面散在	横溝。右回転永切り。付高台横溝で、削 落。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
722-9 302-9	須恵器 転用砥石		長 3.8 幅 2.0 厚 1.0	埋土	要体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

I74号住居跡 (Fig. 723、724・PL. 302、303)

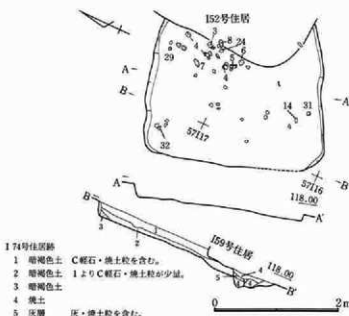


Fig.723 I74号住居跡

I区の南側やや西寄りに位置し、56・57 I 16・17の範囲にある。住居跡の東部で52号と、また南部では59号住居跡とそれぞれ重複している。新旧関係は52号より旧く、59号より新しい時期の所産である。東壁は52号住居跡によって消失しているが、平面形態はほぼ正方形に近い構えをとると考えられる。規模は南北長約2.8m、壁高約20cmを測る。床面は中央部が若干の高まりをなすが、踏み締まりは総じて良好である。竈などの施設は検出されていないが東壁に存在したと考えられる。出土遺物は、須恵器片の転用および角閃石安山岩製の小形砥石が多く検出されている。

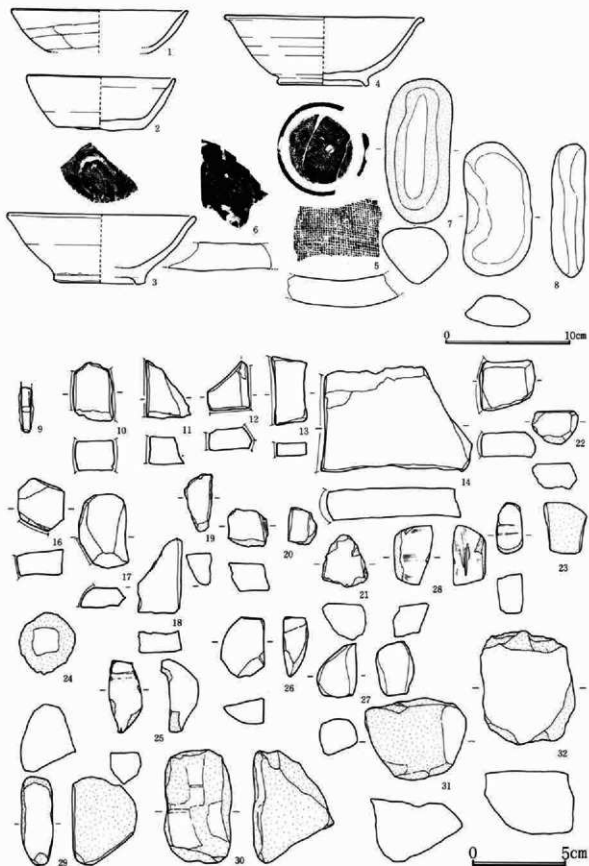


Fig.724 I 74号住居跡出土遺物

I74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
724-1 303-1	土師器 杯	口～体 片	14.2 × 8.2 × 3.4	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
724-2 303-2	須恵器 杯	口～底 片	12.0 × 6.7 × 4.3	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
724-3 303-3	須恵器 模	口～底 小片	15.1 × 7.3 × 5.5	中央部埋 土	轆轤。右回転。付高台及び底部模無で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
724-4 303-4	須恵器 模	口～底 片	16.0 × 7.4 × 5.5	中央～北 央部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台模無で。	①還元・低温 ②灰黄 ③細砂混る
724-5 303-5	瓦 平瓦	小片	厚 2.1	中央部埋 土	栞巻、弓打。上面布目肌、下面無で。	①加酸化還元 ②によ い赤褐 ③砂混る
724-6 303-6	瓦 平瓦	小片	厚 2.2	中央部埋 土	上下両面無で。	①加酸化還元 ②によ い黄褐 ③砂混る
724-7 303-7	石	完	長11.5 幅 5.2 厚 4.5 475.2g	北央部埋 土	三角長円碑。4カ所に磨り面あり。	輝石安山岩 (粗粒)
724-8 303-8	石	完	長10.7 幅 5.2 厚 2.4 218.6g	北央部床 面	扁平長円碑。	埴質安岩
724-9 303-9	鉄製品		長(2.3) 厚0.5×0.3	埋土		
724-10 303-10	須恵器 転用砥石		長 3.2 幅 2.1 厚 1.6	埋土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②オ リーブ黒 ③細砂混る
724-11 303-11	須恵器 転用砥石		長 3.1 幅 2.3 厚 1.5	埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
724-12 303-12	須恵器 転用砥石		長 2.5 幅 2.2 厚 1.1	埋土	壺類体部片転用。断面4カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
724-13 303-13	須恵器 転用砥石		長 3.6 幅 1.9 厚 0.7	埋土	壺類体部片転用。断面1カ所弧状に使用	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
724-14 303-14	須恵器 転用砥石		長 8.0 幅 5.2 厚 1.5	南西部床 面	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
724-15 303-15	須恵器 転用砥石		長 2.9 幅 2.6 厚 1.3	埋土	壺体部上位片転用。断面1カ所使用。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
724-16 303-16	須恵器 転用砥石		長 2.7 幅 2.5 厚 1.2	埋土	壺類体部片転用。断面5カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
724-17 303-17	須恵器 転用砥石		長 4.0 幅 2.5 厚 1.0	埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③緻密
724-18 303-18	須恵器 転用砥石		長 3.9 幅 2.3 厚 1.1	埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
724-19 303-19	石製品 砥石		長 3.1 幅 1.5 厚 1.7	埋土	小砂礫の1面使用。	直紋岩 (砥沢?)

I 74号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
724-20 303-20	石製品 砥石		長 2.0 幅 2.0 厚 1.5	埋土	3面使用。	輝石安山岩 (粗粒)
724-21 303-21	石製品 砥石		長 2.5 幅 2.2 厚 1.9	埋土	小礫の1面使用。	角閃石安山岩
724-22 303-22	石製品 砥石		長 2.5 幅 1.8 厚 1.4	埋土	小礫の1面及び2カ所使用。	角閃石安山岩
724-23 303-23	石製品 砥石		長 2.7 幅 1.4 厚 2.1	埋土	扁平小円礫の両端使用。刃面崩あり。	角閃石安山岩
724-24 303-24	石製品 砥石		長 3.6 幅 3.3 厚 (3.0)	中央部埋土	小円礫の1カ所使用。	角閃石安山岩
724-25 303-25	石製品 砥石		長 3.8 幅 1.8 厚 1.6	埋土	小円礫の1面使用。	角閃石安山岩
724-26 303-26	石製品 砥石		長 3.1 幅 2.3 厚 1.3	埋土	小円礫の2面及び2カ所使用。	角閃石安山岩
724-27 303-27	石製品 砥石		長 2.8 幅 2.1 厚 1.7	埋土	小円礫の一部を除き、ほぼ全面、多面使用。	角閃石安山岩
724-28 303-28	石製品 砥石		長 3.2 幅 1.7 厚 1.6	埋土	砂角礫の4面使用。硬質。	頁岩
724-29 303-29	石製品 砥石		長 4.6 幅 3.4 厚 1.8	北東部床面	扁平小円礫の側面2カ所使用。	角閃石安山岩
724-30 303-30	石製品 砥石		長 6.1 幅 3.5 厚 4.2	埋土	砂礫の1面を一定方向に部分使用。	流紋岩 (磁沢?)
724-31 303-31	石製品 砥石		長 5.4 幅 4.4 厚 3.3	南西部床面	円礫の1面使用。	角閃石安山岩
724-32 303-32	石製品 砥石		長 6.0 幅 5.0 厚 3.3	北西部床面	円礫の2カ所使用。	角閃石安山岩

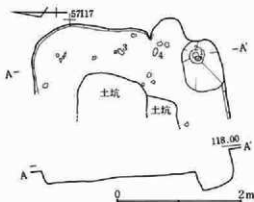


Fig.725 I 75号住居跡

I 75号住居跡 (Fig. 725、726・PL. 304)

I 区の中央部やや西寄りに位置し、57116・17の範囲にある。住居跡の西側で37号・47号・59号住居跡と重複している。新旧関係は37号・47号より旧く、59号住居跡より新しい時期の所産である。西半は消失しているが北東・南東隅は丸みを帯び、隅丸方形の形態が想定される。南北長は約3mを測り、電を基軸とする主軸方位はおおよそN-90°-Eを示す。壁高は約20cmを測る。床面は平坦をなすがやや踏み締まりは弱い。電は東壁に付設されるが重複して

いるため明瞭には検出されなかった。袖部などの痕跡はない。燃焼部幅約60cm・奥行きは40～50cmと考えられる。出土遺物は少なく散在して検出された。

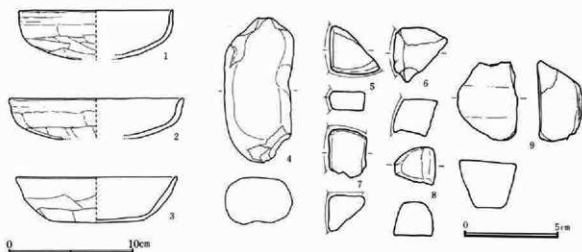


Fig.726 I75号住居跡出土遺物

I75号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 検出位置	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
726-1 304-1	土師器 杯	口～底 片	12.4 × — × (3.8)	南東部貯 蔵穴内	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
726-2 304-2	土師器 杯	口～底 片	14.0 × — × (3.2)	南東部貯 蔵穴内	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 削り後、無で。底部不定方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
726-3 304-3	土師器 杯	口～底 片	12.9 × 7.4 × 3.6	東中央埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
726-4 304-4	石	突	長11.5 幅5.3 厚3.7 379.4g	東中央埋 土	長円碑。両端打撃による欠損か。	ひん岩(?)
726-5 304-5	須恵器 転用磁石		長2.7 幅2.5 厚1.0	埋土	壺胴体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
726-6 304-6	須恵器 転用磁石		長3.0 幅2.9 厚1.9	埋土	壺口頸部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
726-7 304-7	石製品 磁石		長2.6 幅2.0 厚1.9	埋土	小礫。各面使用。	流紋岩(磁沢?)
726-8 304-8	石製品 磁石		長2.2 幅1.9 厚1.8	埋土	小礫。各面使用。	輝石安山岩(粗粒)
726-9 304-9	石製品 磁石		長4.2 幅3.0 厚2.2	埋土	円礫の片。1面及び2カ所使用。	角閃石安山岩

第5章 I区の遺構と遺物

I76号住居跡 (Fig. 727~729・PL. 305, 306)

I区の北部やや東寄りに位置し、45・46 I 37・38の範囲にある。調査が2期に渡っており、前半の調査では東半分は検出されていない。このため積極的に住居跡とする根拠はない。平面形態は方形を呈すると考えられる。南北長約5.1mを測る。西壁の北側が一部突出しており張り出し部を作り出す。壁高は約45cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱い。張り出し部の北辺は約1m、南辺は約1.8mと長さが異なる。西辺の走行線はその北と南では段差を生じている。張り出し部には上面径約45cmの漏斗状の落ち込みがあり上位からは埴塼が検出されている。出土遺物は少なく埴塼のほか羽口・鉾渾が検出されている。遺構には出土遺物から想定されるような諸施設は見いだされていない。

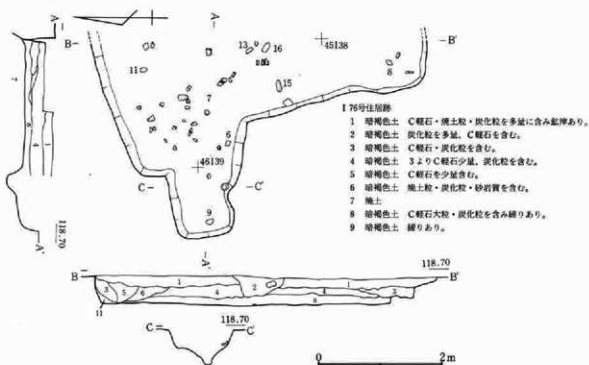


Fig.727 I76号住居跡

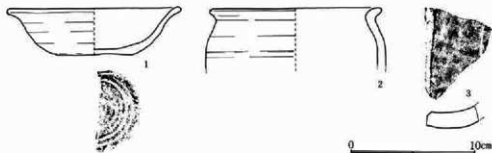


Fig.728 I76号住居跡出土遺物(1)



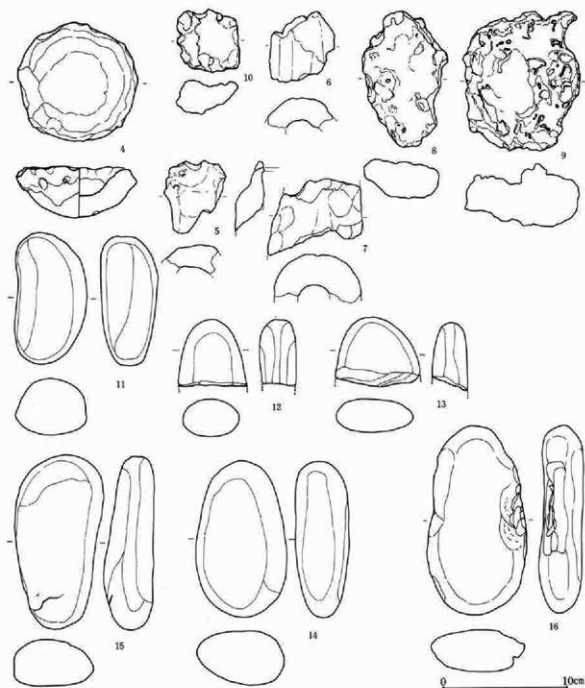


Fig.729 I76号住居跡出土遺物(2)

I76号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
728-1 305-1	須恵器 杯	口～底 1/2	13.9 × 6.0 × 3.7		壇土	織織。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰青 ③細砂混る
728-2 305-2	土師器 壺	口～上 1/2	13.8 × — × (4.7)		埋土	紐造。横断で。無頸。内面吸灰。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 76号住居跡出土遺物観察表

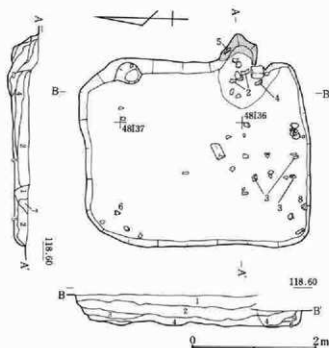
Fig. No PL. No	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口徑 × 底径 × 器高				
728-3 305-3	瓦 平瓦	小片	厚 1.3		埋 土	上面布目肌。下面磨で。隅部2段面取り	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
729-4 305-4	土 器 埴 塼	口一底	9.6 ×	— × 4.0	北西部出土	手捏ぬ。厚手。小腕状丸底。口縁部及び内面、副成分物解物付着。	①酸化・一部二次還元 ②褐灰 ③砂混る
729-5 305-5	土 製 品 編 羽 口	先	長(5.8)		埋 土	棒付。磨で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
729-6 305-6	土 製 品 編 羽 口	中 尾	長(5.6)		北西部埋土	棒付。縦方向磨で。	①二次還元 ②灰褐 ③砂混る
729-7 305-7	土 製 品 編 羽 口	中 尾	長(6.1)		北西部埋土散在	棒付。磨で。指押痕明確。	①酸化・良好 ②褐灰 ～橙 ③細砂混る
729-8 305-8	鉄 板形蓋滓		長10.8 幅 6.9 厚 2.9		南西部埋土	粒状雑物混入。	
729-9 305-9	鉄 板形蓋滓		長11.1 幅 9.4 厚 5.0		北西部出土	粒状雑物、炭化物混入。	
729-10 305-10	鉄 板形蓋滓		長 5.0 幅 4.9 厚 2.6		埋 土	雑物混入。	
729-11 306-11	石	完	長10.5 幅 5.6 厚 4.5 371.2g		北西部埋土	長円鏡。	溶結凝灰岩
729-12 306-12	石		長(5.2) 幅 5.5 厚 2.9 (108.8)g		北西部床面	扁平長円鏡。半欠。	輝石安山岩(粗粒)
729-13 306-13	石	完	長(5.5) 幅 6.8 厚 2.6 (135.8)g		西央部床面	扁平長円鏡か。半欠。	輝石安山岩(粗粒)
729-14 306-14	石	完	長12.4 幅 7.2 厚 4.2 510.8g		埋 土	扁平長円鏡。	輝石安山岩(粗粒)
729-15 306-15	石	完	長13.8 幅 6.9 厚 8.7 538.9g		西央部床面	扁平長円鏡。	ひん岩
729-16 306-16	石	一 部 欠 損	長15.0 幅 7.9 厚 3.2 634.7g		西央部床面	扁平長円鏡。両側縁部表面割離。	黒色頁岩(陸質頁岩)

I 77号住居跡 (Fig. 730~732・PL. 306、307)

平面形	規 模 (長軸×短軸) m	主 軸	方位位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.76 × 3.00	N- 92° -E	東壁やや南寄り	

I区の中央部北寄りに位置し、47・48 I 35~37の範囲にある。北西部で88号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。北東および北西の隅はやや丸みが強く隅丸を呈する。壁高は約45cmを測りやや傾斜をもって立ち上がる。床面は南半がわずかに低くなり全体に踏み締まりは弱い。貯蔵穴や壁下の

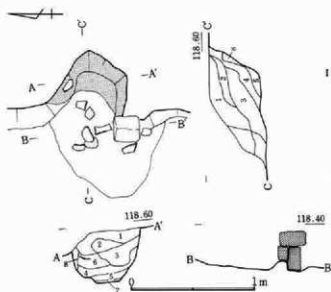
溝は検出されていない。北東部には東壁に接して径約40cm・深さ約30cmの穴が検出されたが当跡に伴うか否かは不明である。竈は東壁に付設され燃焼部は不整形円形に掘り込まれる。煙道部の作り出しはない。右袖部には凝灰岩の加工材が埋設され、これに続いて側壁にも同質の用材が埋設してある。右袖には天井材の一部と考えられる残欠が乗っている。左袖部には構築材およびその痕跡は見られない。電燃焼部幅約50cm・奥行き約70cmを測る。出土遺物は少なく散在して検出された。



I 77号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・炭土粒・炭化粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土 埴りなし。
- 3 黒褐色土 黒味の強い層。
- 4 暗褐色土 粘性のある層。
- 5 黒褐色土 粘土層を含む。
- 6 黒褐色土 粘性土。
- 7 暗褐色土 B軽石主体。

Fig.730 I 77号住居跡



I 77号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・炭化粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 凝土粒・灰を少量含む。
- 5 黒灰色土
- 6 暗褐色土 粘土層を少量、粘土細粒を含む。
- 7 赤褐色土 凝土。
- 8 赤褐色土 凝土壁。

Fig.731 I 77号住居跡竈

第5章 Ⅰ区の遺構と遺物

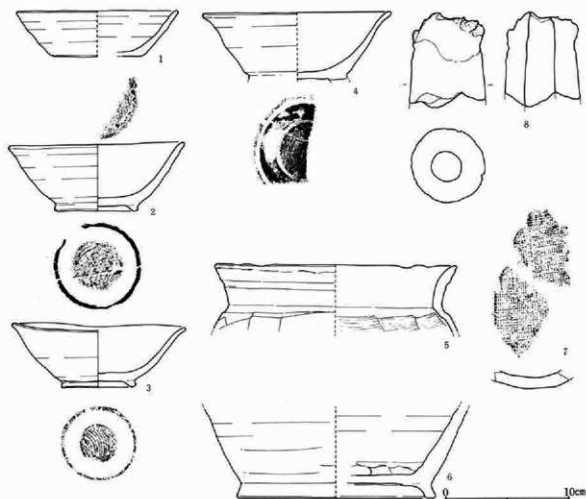


Fig.732 Ⅰ77号住居跡出土遺物

Ⅰ77号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存域	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②土質 ③胎土 その他
732-1 307-1	須恵器 杯	口～底 片	12.9 × 7.2 × 3.6	南央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。体部一部 内外に灰炭。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂質
732-2 307-2	須恵器 椀	口～底 片	14.1 × 6.7 × 5.5	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横狭で。口 縁部歪む。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂質
732-3 307-3	須恵器 椀	口～底 片	13.9 × 6.0 × 5.2	南央部埋 土散在	轆轤。右回転糸切り。付高台横狭で。口 縁部及び体部、歪状に歪む。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂質
732-4 307-4	須恵器 椀	口～底 片	15.1 × 7.9 × 5.4	電手前埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台極めて低い、 横狭で。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
732-5 307-5	土師器 甕	口～上 片	19.4 × — × (5.2)	窠内埋土	紐造。口縁部強い擦で。体部横方向歪削 り。内面磨面で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂質

I77号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
732-6 307-6	須恵器 壺	下~底 片	— × 15.9 × 7.1	北西部埋 土	紐造。体部磨蝕で、下位横方向瓦削り。 付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
732-7 307-7	瓦 平瓦	小片	厚 0.8	埋土	上面布目状。下面無で。薄手。	①酸化・良好 ②よい ③砂混る
732-8 307-8	土製品 罌羽口	先~中	長(7.5) 幅 5.9 厚 5.9	南西部南 壁下床面	棒付。無で。先端部溶解物付着。袖長型	①二次還元・良好 ②褐灰 ③細砂混る

I78号住居跡 (Fig. 733~736・PL. 307, 308)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.49 × 2.78	N-132'-E	南東壁	

I区の北部に位置し、46~48 I 37~39の範囲にある。住居跡の西側で87号・88号住居跡と重複している。新旧関係は88号より新しく、87号住居跡より古い時期の所産である。平面形態は南北に長軸をもつ長方形を呈する。西壁の南側が突出して張り出し部と考えられる施設が認められる。重複のため規模などの詳細は不明である。壁高は約30cmを測り緩い傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが踏み跡よりは弱い。貯蔵穴などは検出されない。竈は南壁と東壁の変換部に付設され、軸方向は南・東壁の辺のいずれとも照応していない。燃焼部は幅狭く約40cm・奥行き約40cmを測り、急角度で立ち上がって水平な煙道部に至る。煙道部長さ約60cmを測る。袖材埋設の痕跡はなかった。出土遺物は散在して検出された。



Fig. 733 I78号住居跡

## I78号住居跡

- 1 黒褐色土 C 軽石・焼土粒・炭化粒を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 3 黒褐色土 C 軽石を含む。
- 4 暗褐色土 粘性あり。

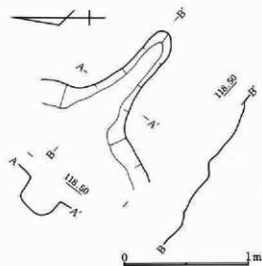


Fig. 734 I78号住居跡竈

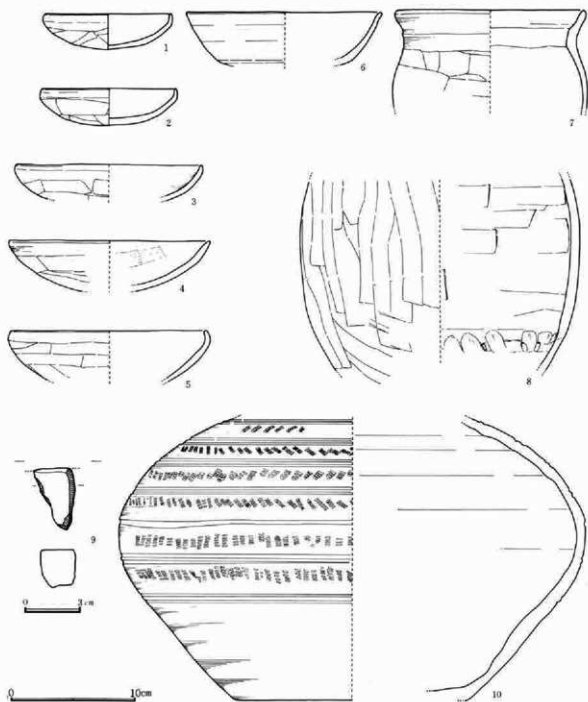


Fig.735 I 28号住居跡出土遺物(1)

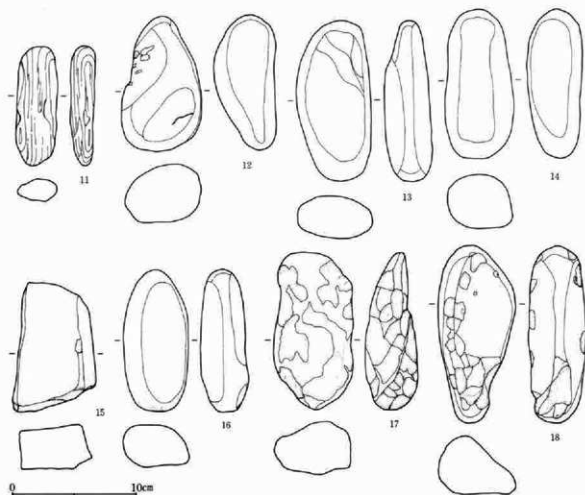


Fig.736 I 78号住居跡出土遺物(2)

I 78号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
735-1 308-1	土器 杯	口~底	10.2 × — × 2.9	北東部埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向脱削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
735-2 308-2	土器 杯	口~底	10.8 × — × 2.9	北尖部埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横、底部不定方向脱削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
735-3 308-3	土器 杯	口~体	14.9 × — × (2.7)	南尖部埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横方向脱削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
735-4 308-4	土器 杯	口~体 片	15.8 × — × 4.1	北東部埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体部横、下方不定方向脱削り。口唇部内傾。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
735-5 308-5	土器 杯	口~底 小片	16.2 × — × (4.0)	埋土	指押。口縁部内外撫で。体底部不定方向脱削り。内面脱撫で。	①酸化・良 ②にぶい ③緻密
735-6 308-6	須恵器 杯	口~体 片	15.7 × — × (4.2)	北西部埋土	轆轤。右回転。腰部回転脱削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 78号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 口径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
735-7 308-7	土師器	口へ上	15.4 × — × (7.8)	中央部埋土	紐造巻上。口頸部及び内面撫で。	①軟化・良好 ②によい性 ③細砂混る
735-8 308-8	土師器 壺	中 片	— × — × (16.0)	北中央部埋土	紐造。体部中位縦、下位斜方向段削り。内面指押、塗敷で。	①軟化・良好 ②によい性 ③細砂混る
735-9 308-9	石製品 砥石		長 3.2 幅 2.1 厚 2.0	埋土	小礫。2面使用。	流紋岩（砥沢？）
735-10 308-10	須恵器 壺	体～底 片	— × 18.5 × (22.4)	中央～南中央部埋土	紐造。二条比線6、一条比線1。各比線間に列点帯接文。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
736-11 308-11	石	完	長 9.5 幅 3.4 厚 1.9 87.8g	埋土	棒状円礫。小型。	青母石英片岩
736-12 308-12	石	完	長10.6 幅 6.5 厚 4.9 429.5g	中央部埋土	不定形円礫。	輝石安山岩（粗粒）
736-13 308-13	石	完	長12.7 幅 6.1 厚 3.8 424.0g	中央部埋土	扁平長円礫。	輝石安山岩（粗粒）
736-14 308-14	石	完	長11.9 幅 5.6 厚 4.4 451.7g	西中央部埋土	長円礫。	輝石安山岩（粗粒）
736-15 308-15	石	片	長(10.3) 幅6.7 厚3.6 (373.0)g	南中央部埋土	長円礫。両端欠損。	輝石安山岩（粗粒）
636-16 308-16	石	完	長11.3 幅 5.2 厚 3.9 331.9g	中央部埋土	長円礫。	輝石安山岩（粗粒）
736-17 308-17	石	完	長12.4 幅 6.5 厚 4.2 453.7g	南東部埋土	長円礫。	閃緑岩
736-18 308-18	石	完	長14.1 幅 6.2 厚 4.6 497.4g	南東部埋土	三角長円礫。	石英閃緑岩

I 79号住居跡 (Fig. 737～740・PL. 309, 310)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.49 × 2.80	N-102' - E	東壁やや南寄り	

I 区の北部に位置し、45～47 I 39・40の範囲にある。西側と北側でそれぞれ90号・102号住居跡と重複している。新旧関係は両者より新しい時期の所産である平面形態は方形を呈するが、北壁から西壁にかけては脹らみぎみに弧を描き隅丸を呈する。壁高は約30cmを測りやや角度をもって直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦で踏み締まりは良好である。貯蔵穴・壁下の溝等は検出されない。竈は東壁に付設され、円形に掘り込まれた燃焼部からゆるい傾斜をもって立ち上がり煙道部に続く。煙道部先端には煙り出し孔が確認されている。左右袖部には凝灰岩の角柱状の加工材が埋設されている。さらに燃焼部奥壁の左右には同質の加工材が



第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

配置され、煙道部との区切りとしている。この左右に配された構築材の上には、同じく凝灰岩のやや幅広く偏平な加工材が天井部として遺存している。また、竪前方部には長い角柱の加工材が検出されており袖間の天井材と考えられる。燃焼部の中央には2個の支脚材が並列して埋設される。袖材間内法は約40cm、燃焼部幅約55cm・奥行き約50cm、煙道部長さ約50cm、煙り出し孔径約15cmを測る。出土遺物は南東隅に集中して検出されている。

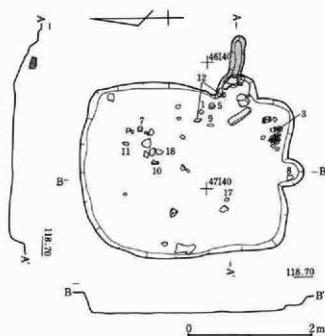


Fig.737 I 79号住居跡

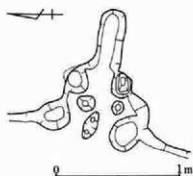


Fig. 739 I 79号住居跡竈棚形

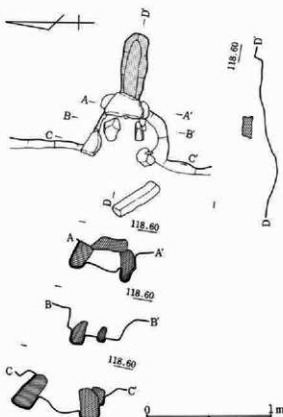


Fig.738 I 79号住居跡竈

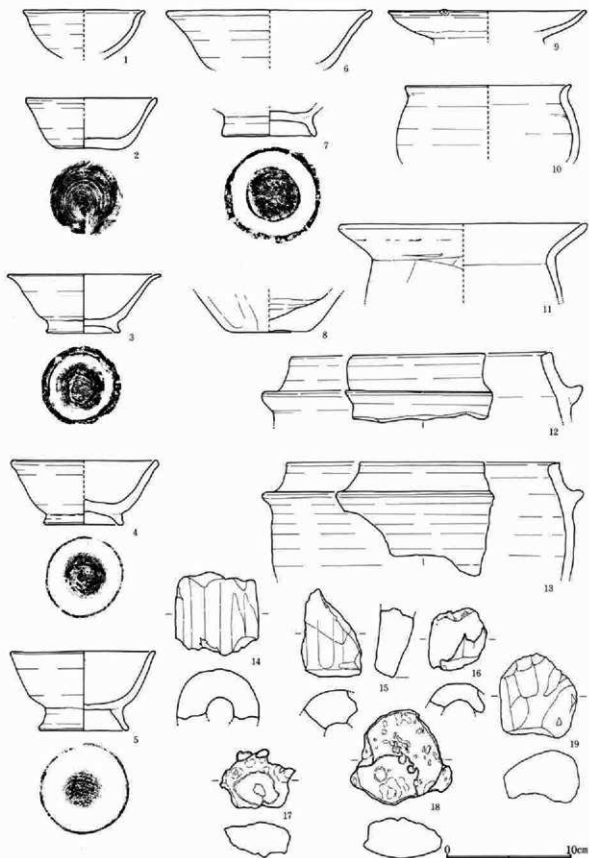


Fig.740 I79号住居跡出土遺物

I 79号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
740-1 309-1	土師器 杯	口～体 片	9.7 × — × (3.8)	東央部床 面	口縁部及び内面撫で。体部削り後、撫 で。内面張炎処理。	①酸化・良好 ②灰黄 褐 ③緻密
740-2 309-2	須恵器 杯	口～底 片	10.5 × 5.6 × 4.0	電内	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
740-3 309-3	須恵器 碗	口～底 片	12.3 × 5.9 × 4.6	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②淡黄橙 ③緻密
740-4 309-4	須恵器 碗	口～底 片	11.7 × 6.4 × 5.1	電内	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。見 込部中央突出。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
740-5 309-5	須恵器 碗	口～底 片	11.6 × 7.2 × 6.3	東央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
740-6 309-6	須恵器 碗	口～体 片	16.5 × — × (4.6)	電内	右回転。	①酸化・良好 ②黄橙 ③細砂混る
740-7 310-7	須恵器 碗	底	— × 7.6 × (2.2)	北央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
740-8 310-8	土師器 甕	底 片	— × 6.2 × (3.7)	南央部張 出床面	尻削り後、撫で。	①酸化・良 ②にぶい 黄 ③砂混る
740-9 310-9	灰釉陶器 皿	口～体 小片	15.9 × — × (2.4)	東央部埋 土	轆轤。右回転。口唇部削り引き出し。体 部内外施釉。胡毛塗り。	①還元・良好 ②明オ リーブ灰 ③緻密
740-10 310-10	土師器 壺	口～上 片	13.3 × — × (5.9)	北央部埋 土	紐造。広口無頸。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
740-11 310-11	土師器 甕	口～上 片	19.9 × — × (5.9)	北央部埋 土	紐造。口頸部撫で。体部横方向削り。 内面塗黒で。長頸形。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
740-12 310-12	— 羽蓋	口 小片	20.9 × — × (5.4)	電内・東 央部床面	紐造。横撫で。	①加酸化還元・良好 ②淡黄橙 ③細砂混る
740-13 310-13	— 羽蓋	口～上 小片	21.8 × — × (9.0)	埋土	紐造。横撫で。	①加酸化還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
740-14 310-14	土製品 籬羽口	中 片	長(6.6) 幅6.6	埋土	棒付。縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～黄橙 ③微混る
740-15 310-15	土製品 籬羽口	基	長(7.0)	埋土	棒付。縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰～橙 ③細砂混る
740-16 310-16	土製品 籬羽口	先 片	長(4.9)	埋土	棒付。縦方向撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰～淡黄 ③細砂混る
740-17 310-17	鉄 輪形磁埴		長 4.7 幅 6.0 厚 2.8	南西部床 面	小形。気泡孔あり。	
740-18 310-18	鉄 輪形磁埴		長 7.5 幅 8.2 厚 3.2	北央部埋 土	炭化物混入。	
740-19 310-19	石製品 砥石		長 6.4 幅 6.1 厚 3.5	埋土	円盤。1ヶ所使用。	角閃石安山岩

I 80号住居跡 (Fig. 741~744・PL. 310, 311)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竈 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.32 × 2.95	N- 81' - E	南壁ほぼ中央	

I 区の中央部やや東寄りに位置し、45~47 I 27~29の範囲にある。西側と北側で72号・83号住居跡とそれぞれ重複しているが、両者より古い時期の所産である。北壁の東側の一部は検出できなかった。平面形態は南北に長軸をもつ長方形を呈するが、当区では唯一の南壁に竈を付設する住居跡である。壁高は約38cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面はやや起伏があり、踏み締まりは良好とはいえない。貯蔵穴等の検出はない。竈は南壁に付設されるが、三角形に掘り込まれ住居内に張り出す袖部を有する。左袖の遺存は良好だが、右袖に関しては明瞭な形では検出できなかった。燃焼部から傾斜をもって立ち上がり、煙り出し孔に至る。推定袖間内法は約80cm、燃焼部奥行き約1.1m、煙り出し孔径約25cmを測る。出土遺物は散在して検出されたが、羽口・磁石類が多い。



Fig.741 I 80号住居跡

I 80号住居跡

- 1 暗褐色土 砂質黄白色泥を多量に含み締る。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 6 黒褐色土 焼土・灰を含む。
- 7 黒褐色土 灰・黄白色土を含む。

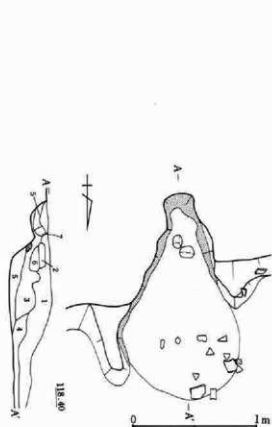


Fig.742 I 80号住居跡竈

I 80号住居跡竈

- 1 黒褐色土 C軽石を含み堅く締る。
- 2 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 3 黒褐色土 焼土塊・灰を含む。
- 4 黒褐色土 灰を含む。
- 5 黒褐色土 灰・黄白色土粒を含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 7 焼土

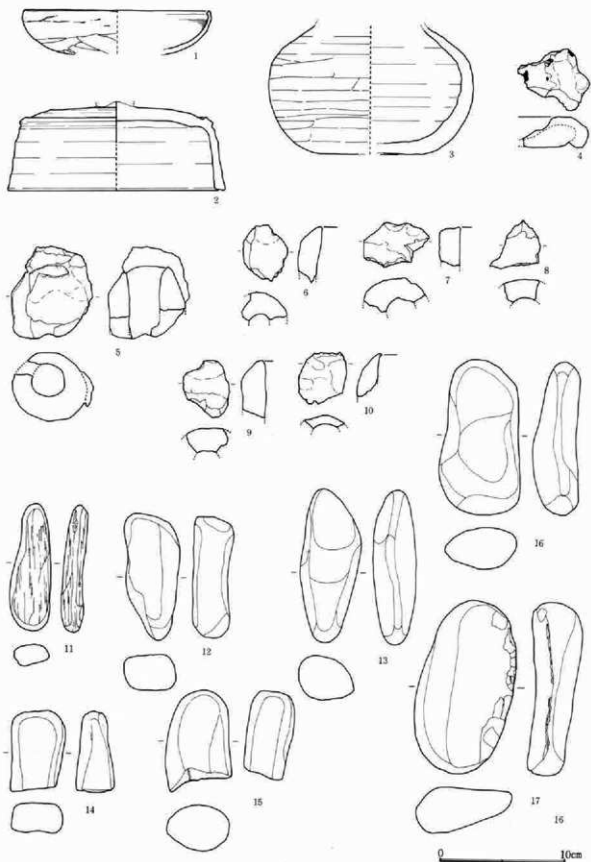


Fig.743 180号住居跡出土遺物(1)

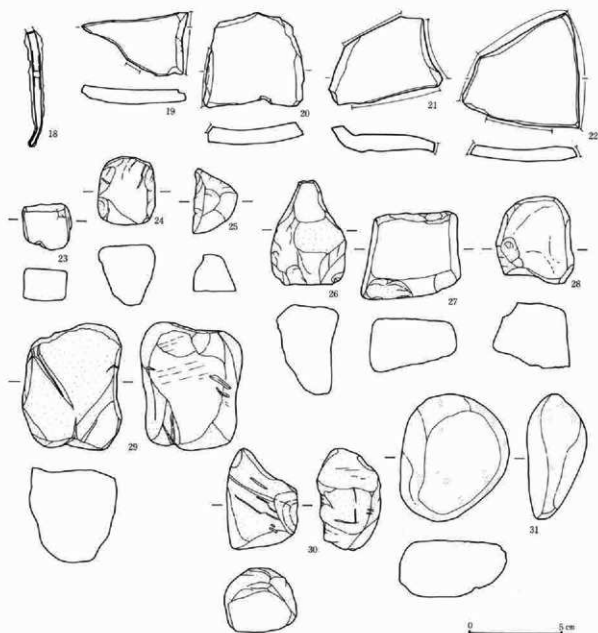


Fig.744 I 80号住居跡出土遺物(2)

I 80号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
743-1 311-1	土師器 杯	口~底 片	15.0 × - × (3.4)	東尖部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向旋削り。	①還元・良好 ②によ い赤褐色 ③緻密
743-2 311-2	須恵器 蓋	頂~端 片	17.4 × 圓 - × (7.1)	西尖部埋 土	轆轤。右回転。頂部回転旋削り。横欠損	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
743-3 311-3	須恵器 壺	上~底 片	- × 8.2 × (10.1)	壺内・中 央部埋土	轆造。横無で。体部中位~底部、手持覚 削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

Ⅰ80号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
743-4 311-4	土器 埴	口~体	— × — × (4.0)	埋土	手捏ね。溶解物付着。	①酸化・良好 ②灰 ③砂混る
743-5 311-5	土製品 籬羽口	先	長(7.2) 幅6.0 厚5.4	南中央部床 面	紐造。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③細砂混る
743-6 311-6	土製品 籬羽口	先 片	長(4.4)	埋土	紐造。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②黒灰 ③細砂混る
743-7 311-7	土製品 籬羽口	先 片	長(3.5)	埋土	紐造。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰 ③砂混る
743-8 311-8	土製品 籬羽口	中	長(3.7)	埋土	紐造。	①酸化・二次還元 ②灰白 ③細砂混る
743-9 311-9	土製品 籬羽口	先 小片	長(4.5)	埋土	紐造。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 茶~灰白 ③細砂混る
743-10 311-10	土製品 籬羽口	先	長(4.0)	埋土	紐造。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②黒 ③細砂混る
743-11 311-11	石	完	長10.1 幅3.3 厚1.8 86.3g	東中央部床 面	棒状円盤。	雲母石英片岩
743-12 311-12	石	完	長10.1 幅4.5 厚3.3 210.5g	中央部床 面	棒状円盤。	変質安山岩
743-13 311-13	石	完	長12.2 幅4.9 厚3.5 271.4g	東中央部床 面	棒状円盤。	輝石安山岩(粗粒)
743-14 311-14	石	片	長(6.4) 幅4.3 厚3.0 (128.3)g	南西部埋 土	扁平長円盤。半欠。	石英凝岩
743-15 311-15	石	片	長(8.1) 幅5.4 厚4.0 (196.5)g	東中央部埋 土	長円盤。半欠。	溶結凝灰岩
743-16 311-16	石	完	長12.3 幅6.5 厚3.7 402.2g	中央部床 面	扁平長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
743-17 311-17	石	片	長13.8 幅8.1 厚4.2 (632.4)g	西中央部床 面	扁平長円盤。長軸5割離。	輝石安山岩
744-18 311-18	鉄製品 釘	頭部 欠損	長(6) 厚0.4	埋土	先端部わずかに曲がる。	
744-19 311-19	須恵器 転用磁石		長5.6 幅3.3 厚0.7	南中央部床 面	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
744-20 311-20	須恵器 転用磁石		長5.4 幅4.9 厚0.7	中央部床 面	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①加酸化還元・良好 ②灰白~淡黄 ③緻密
744-21 311-21	須恵器 転用磁石		長5.8 幅3.9 厚0.9	埋土	壺体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
744-22 311-22	須恵器 転用磁石		長6.2 幅6.0 厚0.6	埋土	壺体部片転用。断面4カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

180号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
744-23 311-23	石製品 砥石	小片	長 2.5 幅 2.4 厚 1.7	埋土	立方体状全面使用。	流紋岩 (砥沢?)
744-24 311-24	石製品 砥石	小片	長 3.6 幅 3.1 厚 3.2	中央部埋土	小円礫。1面使用。刃当痕あり。	流紋岩 (砥沢?)
744-25 311-25	石製品 砥石		長 3.4 幅 (2.4) 厚 1.9	埋土	欠損以外、全面使用。	角閃石安山岩
744-26 311-26	石製品 砥石	小片	長 5.5 幅 4.0 厚 4.6	南西部南壁下埋土	2カ所使用。他は表面剥落か。	流紋岩 (砥沢?)
744-27 311-27	石製品 砥石	小片	長 5.3 幅 4.5 厚 2.8	埋土	上面及び3側面使用。	流紋岩 (砥沢?)
744-28 311-28	石製品 砥石		長 (4.6) 幅 4.1 厚 3.4	北中央部床面	円礫。欠損部以外、全面使用。	角閃石安山岩
744-29 311-29	石製品 砥石		長 6.7 幅 5.3 厚 4.9	中央部床面	円礫。3カ所使用。刃当痕明瞭。	輝石安山岩 (粗粒)
744-30 311-30	石製品 砥石		長 5.3 幅 3.7 厚 3.4	北中央部床面	円礫。各面使用。刃当痕多数。	輝石安山岩 (粗粒)
744-31 311-31	石製品 砥石		長 6.8 幅 5.8 厚 3.2	中央部床面	扁平円礫。一面及び1カ所使用。	輝石安山岩 (粗粒)

181号住居跡 (Fig. 745~748・PL. 312~313)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.34 × 3.20	N-93.5°-E	東壁やや南寄り	円形 60 × 58 × 不明

1区の中央部やや東寄りに位置し、47・48 I 30~32の範囲にある。住居跡の南側で82号・83号住居跡と、西側では5号溝と重複している。新旧関係は、82号より新しく83号住居跡より古い時期の所産である。なお5号溝との関係は不明である。平面形態は方形を呈するが、北西・南西の隅は丸みを帯びる。壁高は約26cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は南壁沿いがわずかに低く窪み全体の踏み締まりは良好とはいえない。貯蔵穴や壁下の溝は検出されない。竈は東壁に付設され、袖部が住居内に張り出す形態である。楕円形に掘り込まれた燃焼部から短い煙道部が作り出される。左袖部の先端には川原石が埋設されているが、右袖には検出されない。電構築材と考えられる石材 (川原石) は竈内や住居内に多く散乱している。袖部長さ約40cm、燃焼部奥行き約50cm、煙道部長さ約20cmを測る。出土遺物は少量の検出である。



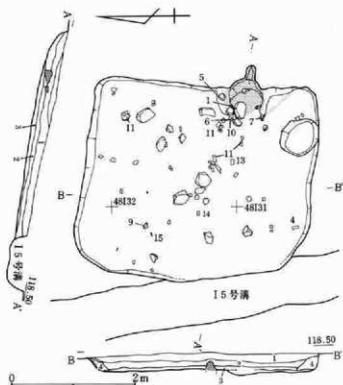


Fig.745 I 81号住居跡

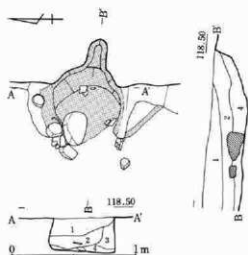


Fig.746 I 81号住居跡

I 81号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・白色粒を多量に含み堅く締る。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量含む。
- 3 暗褐色土 2よりC軽石が少量含む。
- 4 暗褐色土 1に似る。

I 81号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土塊を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 4 焼土

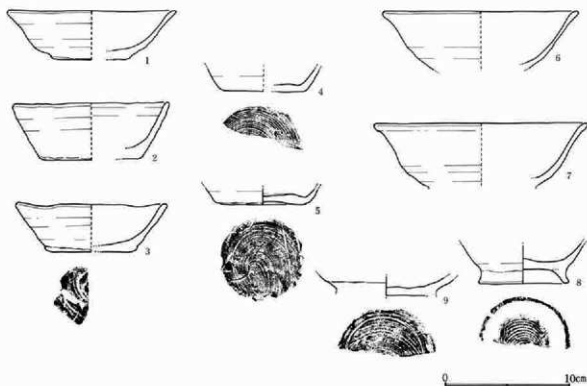


Fig.747 I 81号住居跡出土遺物(1)

第5章 Ⅰ区の遺構と遺物

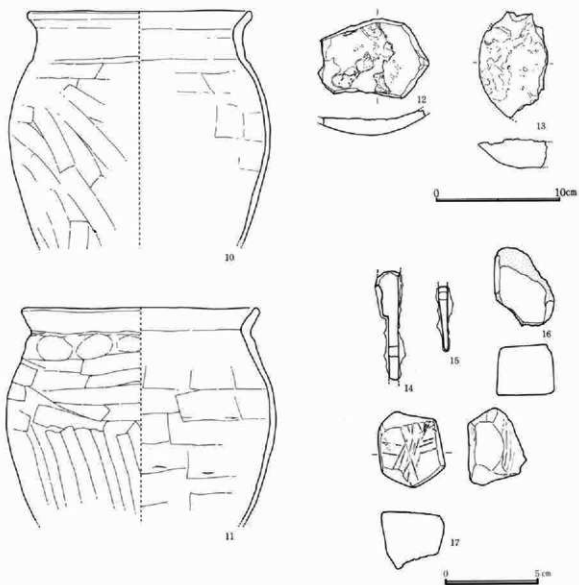


Fig.748 Ⅰ81号住居跡出土遺物(2)

Ⅰ81号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
747-1 312-1	須恵器 杯	口~底 1/4	13.4 × 5.8 × 3.9	厩北袖上 付着	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
747-2 312-2	須恵器 杯	口~底 1/4	12.5 × 8.4 × 4.5	埋土	轆轤。右回転糸切り。内外横し。	①還元・低温 ②オ リーブ黒 ③細砂混る
747-3 312-3	須恵器 杯	口~底 1/4	10.5 × 5.8 × 3.9	埋土	轆轤。右回転糸切り。内外横し。口縁部 波状に至む。	①還元・低温 ②オ リーブ黒 ③細砂混る
747-4 312-4	須恵器 杯	体~底 1/4	— × 7.0 × (1.8)	南西部南 壁寄埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③細砂混る

I 81号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
747-5 312-5	須恵器 杯	底	— × 7.0 × (1.2)		東北袖上 付着	縹。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
747-6 312-6	須恵器 碗	口～体 底	15.5 × — × (4.7)		東北袖手 前床面	縹。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
747-7 313-7	須恵器 碗	口～体 底	17.2 × — × (4.9)		南東袖手 前床面	縹。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
747-8 313-8	須恵器 碗	体～底 底	— × 7.2 × (3.2)		埋土	縹。右回転糸切り。付高台模倣で。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
747-9 313-9	須恵器 碗	底 底	— × (8.0) × (1.5)		北西部埋 土	縹。右回転糸切り。付高台制落。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
748-10 313-10	土師器 罍	口～下 底	17.9 × — × 19.0		竈内	紐造。口頸部無で。体部上位横。中～下 位斜～縦方向彫削り。内面磨撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る
748-11 313-11	土師器 罍	口～底 底	19.0 × 4.0 × 15.4		東中部床 面敷在	紐造。口頸部無で。体部上位指押え。中位 横。下位縦方向彫削り。内面磨撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い粒 ③細砂混る
748-12 313-12	須恵器		長 8.8 幅 6.2 厚 1.3		埋土	器体部片転用。内面及び断面に溶解物付 着。転用増産?	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
748-13 313-13	鉄 粗網	片	長(8.4) 幅(5.5) 厚2.2		南東部埋 土	網状粗網。不純物混入。光沢、重量あり。	
748-14 313-14	鉄製品 釘?	先端 欠損	長(5.7) 厚0.5		中央部 床面	頂部張らむ。角釘?	
748-15 313-15	鉄製品 釘	先	長(3.5) 厚0.4		北西部 床面	角釘	
748-16 313-16	石製品 砥石	小片	長(3.7) 幅 3.4 厚 2.6		竈内埋土	4面使用。両端欠損。	砥石紋(砥石?)
748-17 313-17	石製品 砥石		長 4.0 幅 3.3 厚 3.1		竈内埋土	角礫状に全面使用。刃当痕多数。	輝石安山岩(粗粒)

I 82号住居跡 (Fig. 749～752・PL. 314、315)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.53 × 3.09	N-84.5°-E	東壁やや南寄り	隅円形 65 × 50 × 30

I区の中央部に位置し、46～48 I 29～31の範囲にある。81号・83号住居跡と重複しており、新旧関係は両者より古い時期の所産である。81号住居跡より掘形がやや深く北半の部分も検出できた。平面形態は方形を呈するが東西の壁線がわずかに傾いている。壁高は約25cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなし南壁寄りの貯蔵穴周辺は踏み締まりが弱くやや低くなっている。とくに貯蔵穴の南辺は軟弱である。竈は

第5章 I区の遺構と遺物

東壁に付設され、楕円形に掘り込まれた燃焼部から急角度で立ち上がり短い煙道部が突出する。袖部は東壁線に合わせるように凝灰岩の角柱加工材が埋設されている。燃焼部やや左寄りに同じく凝灰岩で円柱加工の支脚が埋設される。袖材間内法約50cm、燃焼部幅約65cm・奥行き約60cm、煙道部長さ約15cmを測る。出土遺物は少なく貯蔵穴周辺に分布している。

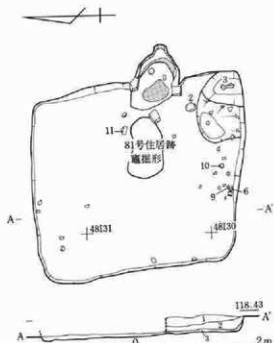
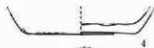
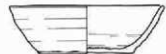
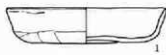


Fig. 749 I 82号住居跡

I 82号住居跡

- 1 暗褐色土 C 軽石・白色砂岩を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・白色砂岩を含む。
- 3 暗褐色土 灰・焼土粒を含む。



0 10cm

Fig. 751 I 82号住居跡出土遺物(1)

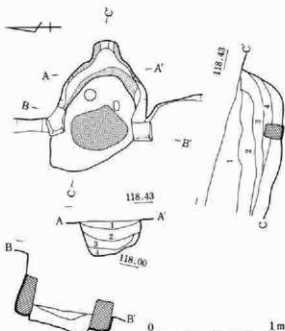


Fig. 750 I 82号住居跡竈

I 82号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C 軽石・白色砂岩を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・白色砂岩を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 4 焼土

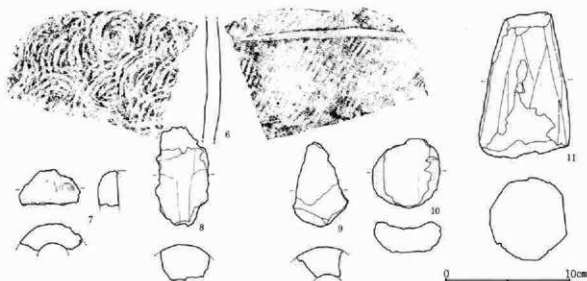


Fig.752 I 82号住居跡出土遺物(2)

## I 82号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存域	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 ③土質 ④胎土 その他
			口徑 × 底徑 × 器高				
751-1 315-1	土 師 器 杯	口～底 片	12.8 × 9.5 × 2.8		甕 内	指押。口縁部及び内面無で。体部及び底部不定方向割削り。	①酸化・良好 ②にぶい性 ③緻密
751-2 315-2	須 恵 器 杯	口～底 片	12.4 × 7.7 × 3.8		南東部掘形埋土	底部円柱か。轆轤。右回転糸切り。底部片断で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
751-3 315-3	須 恵 器 杯	口～底 片	13.4 × 7.6 × 3.6		貯蔵穴内埋土	底部円柱。轆轤。右回転。底部回転削削り。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
751-4 315-4	須 恵 器 杯	体～底 片	— × 8.8 × (1.8)		中央部掘形埋土	底部円柱。轆轤。右回転糸切り。無調整体部破成。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
651-5 315-5	土 師 器 台付 罌	底	— × — × (2.8)		甕 内	無で。体部及び台部欠損。	①酸化・良好 ②明赤褐 ③緻密
752-6 315-6	須 恵 器 罌	体 片			南東部南壁寄埋土	紐造。叩打。転用材か。	①還元・良好 ②明オリープ灰 ③細砂混る
752-7 315-7	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(2.8)		掘形埋土	棒付。撫で。溶解物付着。	①酸化・良好 ②性 ③砂混る
752-8 315-8	土 製 品 鬮 羽 口	中 小 片	長(7.9)		南西部掘形埋土	棒付。撫で。	①酸化・良好 ②にぶい黄緑 ③砂混る
752-9 315-9	土 製 品 鬮 羽 口	先～中	長(6.7)		南東部南壁寄埋土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②性 ③細砂混る
752-10 315-10	石 製 品 砥 石		長 5.5 幅 5.3 厚 1.9		南東部南壁寄埋土	扁平小円盤。両面使用。刃当痕あり。	角閃石安山岩
752-11 315-11	土 製 品 支 脚		長(11.4) 幅6.1 厚6.5		東東部床面	多角錐状錐土。縦方向割削り。。基部欠損	①酸化・良好 ②にぶい性 ③細砂混る

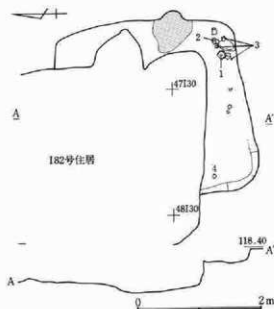


Fig.753 I 83号住居跡

I 83号住居跡 (Fig. 753, 754・PL. 315)

I区の中央部に位置し、46・47 I 29・30の範囲にある。81号・82号住居跡と重複している。新旧関係は両者より新しい時期の所産である。平面の確認段階で切り合いを誤認したため前2基の住居跡と重複する部分は消失してしまい、全容は不明である。平面形態は方形を呈すると考えられ、東西長約2.9m・南北長約2.8mを測る。主軸の方位はおよそN-85°-Eを示す。遺構全体に遺存状態が悪く、南西隅で壁高約15cmを測るほかは痕跡程度の検出であった。電は東壁に付設されるが火床面が辛うじて認められたのみで、形態・規模など詳細は不明である。出土遺物は少なく南東部に若干数が集中している。

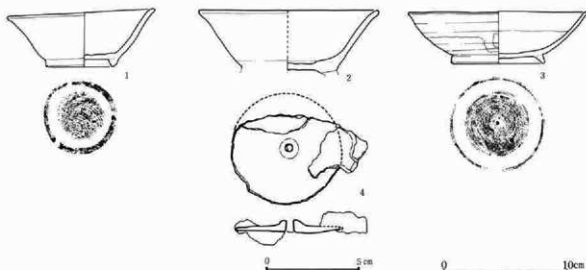


Fig.754 I 83号住居跡出土遺物

I 83号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
754-1 315-1	須恵器 椀	口~底 片	11.8 × 5.4 × 4.4	南東部隅 床面	轆轤、右回転糸切り。付高台無で、歪みあり。	①加温化還元・低温 ②灰青 ③細砂混る
754-2 315-2	須恵器 椀	口~底 片	14.4 × ( 7.6 ) × ( 5.0 )	南東部隅 床面	底部円柱。轆轤、右回転糸切り。付高台無で、欠損。	①加温化還元・低温 ②洗青 ③細砂混る
754-3 315-3	灰軸陶器 椀	口~底 片	14.4 × 7.5 × 4.1	南東部隅 床面散在	轆轤、右回転。底部回転度削り。口縁部内外施釉、刷毛塗り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
754-4 315-4	鉄 紡錘車	紡錘	径 6 厚0.6 孔径0.4 床面	南西部床 面	片面の孔周縁凸	

I87号住居跡 (Fig. 755~758・PL. 316, 317)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	竪位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.05 × 3.78	N—206.5°—W	南壁ほぼ中央	

I区の北部に位置し、48~50 I36~38の範囲にある。88号住居跡の範囲に全く重なり、その平面形態を確認することができなかった。88号住居跡の埋土中に焼土痕が認められ、竪の存在を確認できたものである。平面形態は不明であるが土層と床面の範囲から、南北長約4mの方形を呈すると考えられる。壁高は土層観察から約30cmを測る。床面は起伏がみられ踏み締まりは良好とはいえない。貯蔵穴や壁下の溝は検出されなかったが、南北方向の土層断面には南壁下に溝の痕跡が認められ本来存在していた可能性がある。竪は南壁に付設され当区では数少ない形態である。燃焼部は楕円形に掘り込まれ、やや角度をもって立ち上がり水平で短い煙道部を作り出す。袖部には左右に凝灰岩の加工材をそれぞれ埋設している。袖部内法は約50cm、燃焼部奥行きは約55cm、煙道部長さ約40cmを測る。出土遺物は散在的で長楕円形の石類が多い。

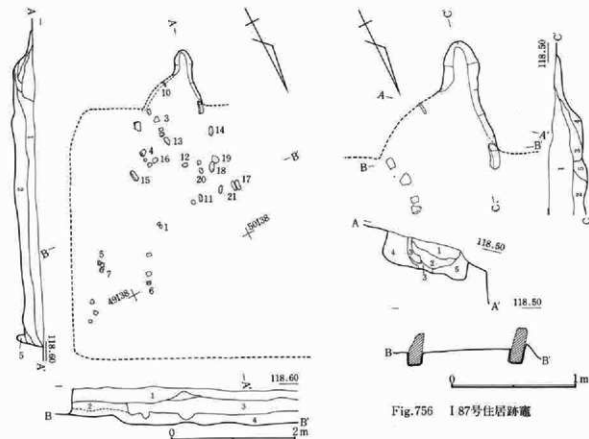


Fig.755 I87号住居跡

## I87号住居跡

- 1 暗褐色土 砂質土粒粗い。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む粘性土。
- 3 暗褐色土 炭化粒多量。C軽石を含む。
- 4 暗褐色土 粘性褐色土を含む。
- 5 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。

## I87号住居跡竪

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 1よりC軽石少量
- 3 焼土
- 4 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 5 砂岩

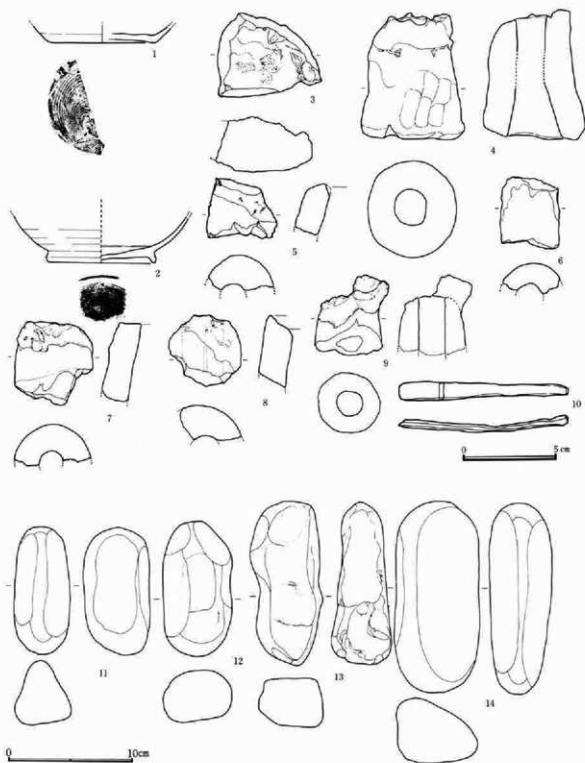


Fig.757 187号住居跡出土遺物(1)



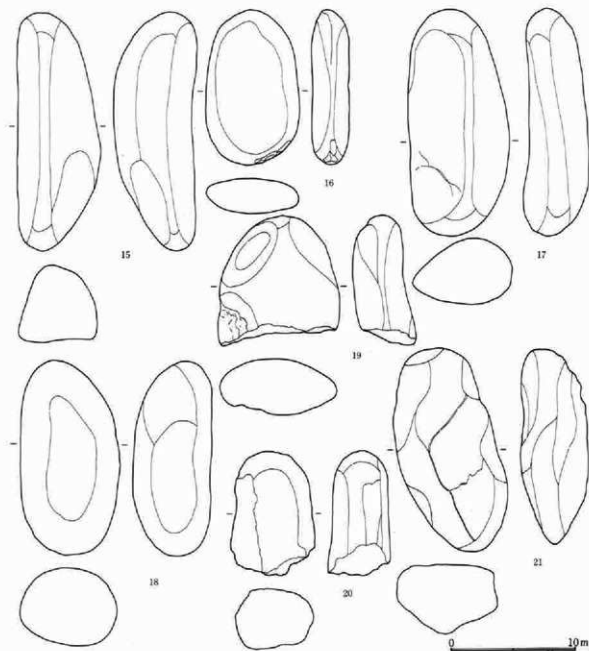


Fig.758 I 87号住居跡出土遺物(2)

I 87号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
757-1 316-1	須恵器 杯	底片	— × 8.6 × (1.3)	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
757-2 316-2	灰輪陶器 椀	体~底 片	— × 8.8 × (3.6)	埋土	轆轤。右回転。底部即転削削り。口径部 内外施釉。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
757-3 316-3	鉄 模形瓦片		長(8.4) 幅(6.7) 厚4.5	南東部竪 手前埋土	粒状不純物混入。	

第5章 I区の遺構と遺物

I 87号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
757-4 316-4	土製品 罎羽口	完	長10.3幅7.1厚7.6	南東部埋土	棒付、胴で。指押痕明瞭。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
757-5 316-5	土製品 罎羽口	先 1/4	長(4.6)	北東部埋土	棒付、胴で。溶解物付着。	①二次還元・良好 ②灰黒 ③砂混る
757-6 316-6	土製品 罎羽口	中～基 1/4	長(5.7)	北東部埋土	棒付、胴で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
757-7 316-7	土製品 罎羽口	先～中 1/4	長(6.5) 幅7.2	北東部埋土	棒付、胴で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
757-8 316-8	土製品 罎羽口	先～中 1/4	長(5.6)	埋土	棒付、縦方向胴で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②褐色 ③砂・礫混る
757-9 316-9	土製品 罎羽口	先	長(3.7)幅5.0厚4.8	埋土	棒付、縦方向胴で。先端部溶解物多量に付着。	①二次還元・良 ②灰 ③細砂混る
757-10 317-10	鉄製品		長(9) 幅0.9 厚0.3	堀内埋土	片端やや幅広になる。	
757-11 317-11	石	完	長10.2 幅4.6 厚5.4 353.4g	中央部床面	三角長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
657-12 317-12	石	完	長10.8 幅5.6 厚4.4 394.9g	中央部床面	長円盤。	変質安山岩
757-13 317-13	石	完	長13.0 幅5.9 厚4.9 475.1g	南東部床面	長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
757-14 317-14	石	完	長15.2 幅6.9 厚5.1 824.3g	南東部床面	三角長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
758-15 317-15	石	完	長18.9 幅6.8 厚6.9 1,131.2g	南東部床面	三角長円盤。	変質安山岩
758-16 317-16	石	完	長12.3 幅7.5 厚3.0 429.9g	南東部床面	扁平長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
758-17 317-17	石	完	長17.9 幅8.1 厚5.4 1,112.3g	中央部床面	扁平長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
758-18 317-18	石	完	長15.5 幅8.1 厚6.3 1,033.6g	中央部床面	長円盤。	輝石安山岩(粗粒)
758-19 317-19	石	1/4	長(10.3) 幅9.8 厚5.2 (600.0)g	中央部床面	扁平円盤。一端欠損。	輝石安山岩(粗粒)
758-20 317-20	石	完	長(9.9) 幅6.8 厚5.1 (473.3)g	中央部床面	長円盤。一端欠損。	輝石安山岩(粗粒)
758-21 317-21	石	完	長16.2 幅9.1 厚5.5 949.8g	中央部床面	長円盤。	輝石安山岩(粗粒)

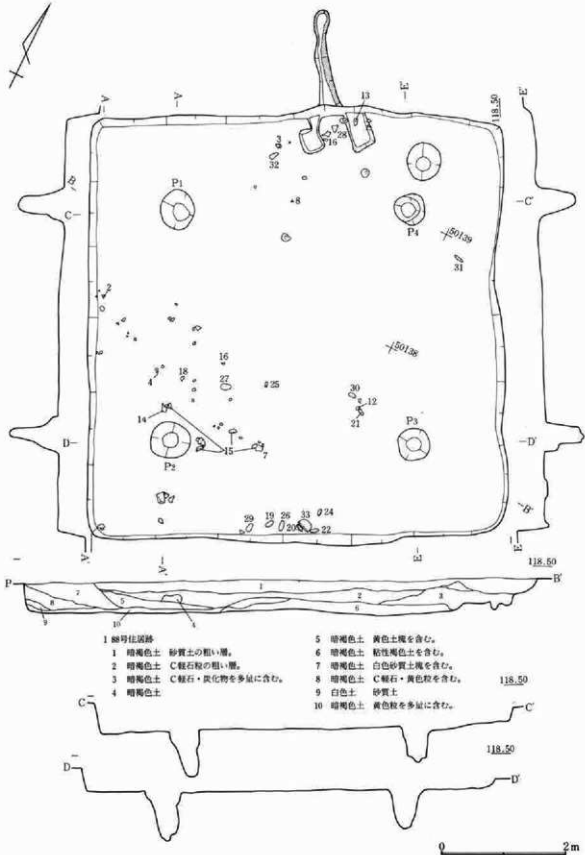


Fig.759 I 88号住居跡

188号住居跡 (Fig. 759~763・PL. 317~319)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	窟 位 置	貯蔵穴の形・規模(長軸×短軸×深さ) cm
圓丸方形	7.03 × 6.99	N—29°—W	北壁やや東寄り	

I区の北部に位置し、48~52 I 35~41の範囲にある。南東部で77号・78号と、中央部では87号と、また北部で90号住居跡とそれぞれ重複している。前4者のいずれよりも古い時期の所産である。平面形態は整った方形を呈し、当区では大型の住居の部類に入る。壁は掘り込みが深く、壁高約50cmを測り垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好だが、とくに中心部は堅く締まる。北東寄りに円形の穴が検出されているが、貯蔵穴とするには大きさおよび深さがなく、確定することはできない。柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個が確認されている。いずれも円形を呈し、P<sub>1</sub>は径54×60cm・深さ約70cm・柱痕径約20cm。P<sub>2</sub>は径約60cm・深さ約78cm・柱痕径約24cm。P<sub>3</sub>は径約50cm・深さ約60cm・柱痕径約20cm。P<sub>4</sub>は径約40cm・深さ約60cm・柱痕径約20cmを測る。柱間は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は約3.6m・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は約3.9m・P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は約3.7m・P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は約3.65mである。壁下の溝や間仕切りの施設は検出されない。竈は北壁に付設され、住居内に張り出す袖部と長大な煙道部を作り出す。袖部は石などの補強材などの使用はなく、白色粘土を粘性のある暗褐色土と混ぜ合わせて形成している。煙道部は天井が完存状態にあり、断面径17×13cmの楕円形を呈している。燃焼部からわずかに立ち上がり、緩い傾斜の後、垂直ぎみに煙り出し孔へぬける。袖部内法約60cm、燃焼部奥行き約80cm、煙道部長さ約1.6m、煙り出し孔径35×25cmを測る。遺物は散在的な状態で検出されている。滑石製の有孔円板および白玉の出土があり、多くはP<sub>2</sub>の周辺部にあった。

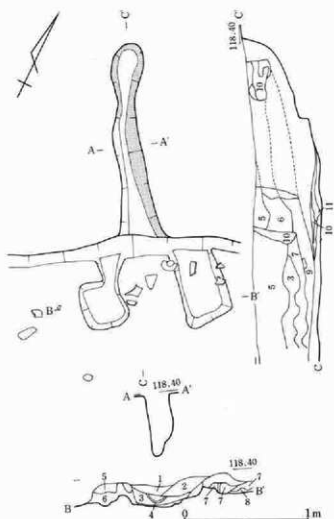


Fig.760 188号住居跡

188号住居跡

- 1 灰黄色土 焼土塊を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰・白色粒を含む。
- 4 白色土
- 5 暗褐色土 粘性締りあり。
- 6 暗褐色土 白色C軽石を含む。
- 7 暗褐色土 焼土粒多量、灰を含む。
- 8 灰層
- 9 灰 灰多量、焼土粒を含む。
- 10 焼土
- 11 灰層面

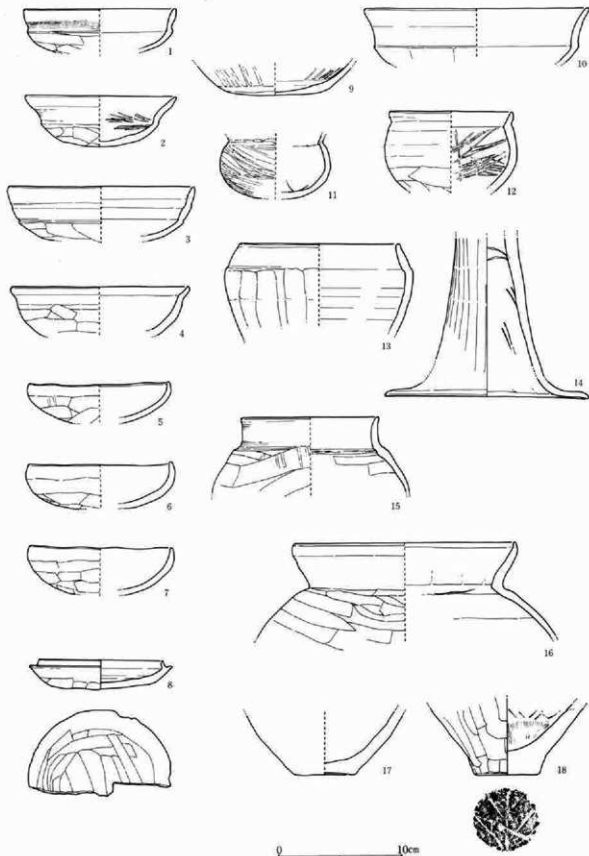


Fig.761 188号住居跡出土遺物(1)

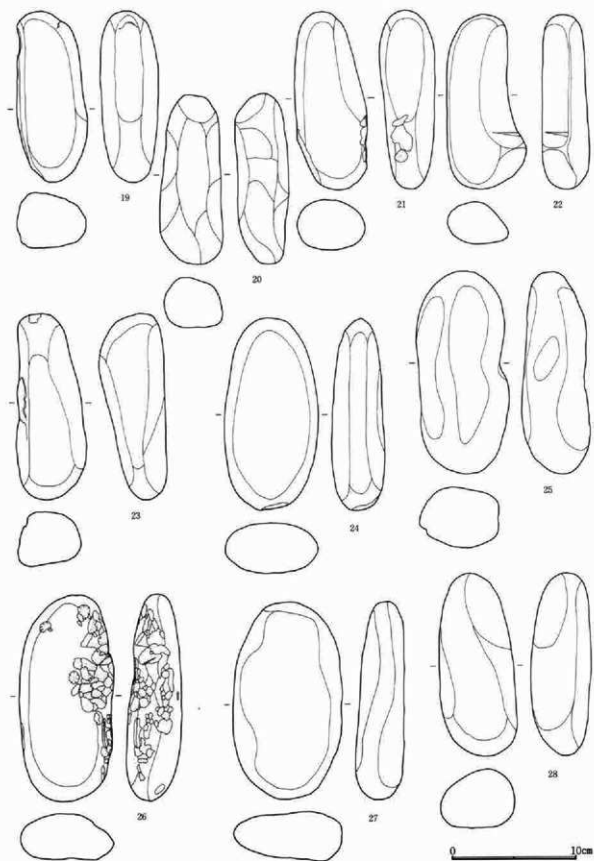


Fig.762 I 88号住居跡出土遺物(2)

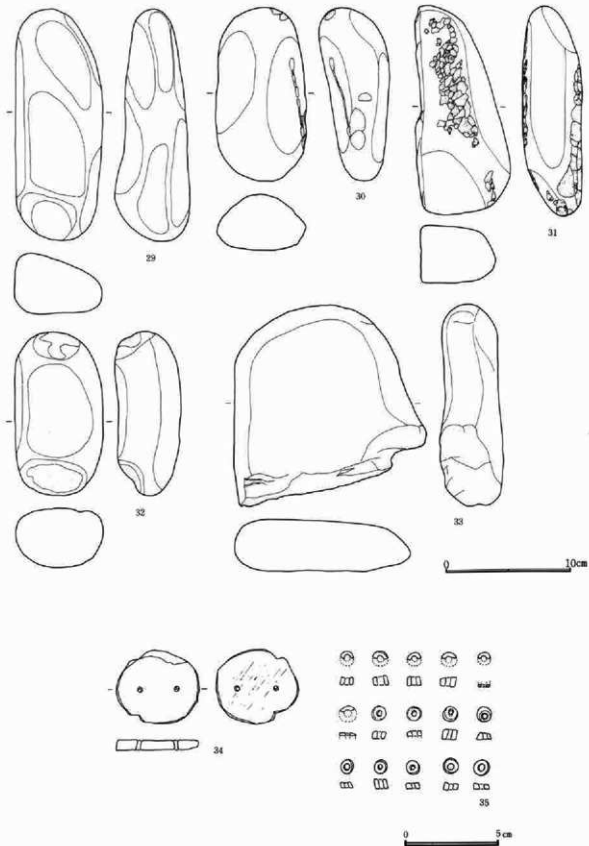


Fig.763 I 88号住居跡出土遺物(3)

第5章 I区の遺構と遺物

I 88号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
761-1 318-1	土師器 杯	口～体 ¼	12.2 × — × ( 3.5)	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 寛無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
761-2 318-2	土師器 杯	口～底 ¼	12.0 × — × 4.0	西尖部西 壁下埋土	指押。口縁部内外無で。体部寛無で。底 部不定方向寛削り。内面寛磨き。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③緻密
761-3 318-3	土師器 杯	口～体 ¼	15.0 × — × ( 4.2)	北尖部電 西脇床面	指押。口縁部内外2段無で。底部不定方 向寛削り。	①酸化・良 ②に よい橙 ③細砂混る
761-4 318-4	土師器 杯	口～体 ¼	14.2 × — × ( 3.8)	南西部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横方向 寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
761-5 318-5	土師器 杯	口～底 ¼	11.4 × — × ( 3.2)	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
761-6 318-6	土師器 杯	口～底 ¼	11.4 × — × ( 3.6)	南尖部南 壁下埋土	指押。口縁部及び内面無で。底部不定方 向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
761-7 318-7	土師器 杯	口～底 ¼	11.6 × — × ( 3.8)	南西部埋 土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
761-8 318-8	酒志器 杯	口～底 ¼	9.9 × — × 2.3	南東部埋 土	輪軸右回転。底部不定方向寛削り。合子 型杯部。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
761-9 318-9	土師器 杯	体～底 ¼	— × 9.0 × ( 2.5)	埋土	体部横。底部不定方向粗い寛削り。内面 放射状文わずかに残る。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
761-10 318-10	土師器 杯	口～体 小片	18.0 × — × ( 4.3)	埋土	指押。口縁部内外強い無で。体部横方向 寛削り。大型。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
761-11 318-11	土師器 埴	体～底 ¼	— × — × ( 5.1)	南西部床 面	紐造。体底部細かな寛磨き。内面無で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
761-12 318-12	土師器 埴	口～体 ¼	9.9 × — × ( 6.3)	南東部埋 土	紐造。口縁部及び体部上半横方向無で。 下半寛削り。内面寛磨き。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
761-13 318-13	土師器 罌	口～上 ¼	12.8 × — × ( 7.5)	電東袖上 付着	紐造。口縁部及び内面横方向無で。体部 縦方向寛削り。無頸。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
761-14 318-14	土師器 高杯	脚 ¼	— × 16.4 × (12.5)	南西部埋 土	紐造巻上か。脚部縦方向寛削り。端部横 方向無で。内面寛無で。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
761-15 319-15	土師器 罌	口～上 ¼	11.0 × — × ( 6.2)	南西部埋 土散在	紐造。口縁部強い横方向無で。体部横方 向寛削り。内面寛無で。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
761-16 319-16	土師器 罌	口～上 ¼	18.0 × — × ( 8.5)	電内・中 央部埋土	紐造。口縁部無で。体部横方向寛削り。 内面寛無で。	①酸化・良好 ②に よい黄橙 ③砂混る
761-17 319-17	土師器 罌	下～底 ¼	— × 5.2 × ( 5.0)	圓形	紐造。器面劣化顕調整不明。木葉底。	①酸化・不良 ②に よい橙 ③砂混る
761-18 319-18	土師器 罌	下～底 ¼	— × 5.2 × ( 6.2)	南西部埋 土	紐造。体部縦方向寛削り。内面寛無で。 木葉底。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る
762-19 319-19	石	完	長13.6 幅5.7 厚4.6 501.6g	南尖部南 壁下床面	長円錐。	輝石安山岩(粗粒)



I 88号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 類	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
762-20 319-20	石	完	長13.5 幅 5.1 厚 4.3 459.0g	南東部埋 土	長円磯。	輝石安山岩 (粗粒)
762-21 319-21	石	完	長14.1 幅 5.8 厚 4.4 468.4g	南東部南 壁下床面	長円磯。	輝石安山岩 (粗粒)
762-22 319-22	石	完	長13.9 幅 6.4 厚 3.8 452.2g	南東部南 壁下床面	長円磯。長勾玉形。	グラノファイナー
762-23 319-23	石	完	長14.8 幅 5.6 厚 5.0 562.1g	埋 土	長円磯。	輝石安山岩 (粗粒)
762-24 319-24	石	完	長15.2 幅 7.5 厚 4.2 760.4g	南東部南 壁下埋土	扁平長円磯。一端打撃痕。	輝石安山岩 (粗粒)
762-25 319-25	石	完	長16.0 幅 7.4 厚 5.6 862.9g	中央部埋 土	長円磯。	石英閃綠岩
762-26 319-26	石	完	長16.3 幅 7.6 厚 4.5 771.5g	南東部南 壁下埋土	扁平長円磯。細刻磨顕著。	輝石安山岩 (粗粒)
762-27 319-27	石	完	長15.6 幅 8.9 厚 3.9 763.3g	中央部床 面	扁平長円磯。	珩質黄貫岩
762-28 319-28	石	完	長14.5 幅 6.3 厚 4.8 645.9g	電内底面	長円磯。	ひん岩
762-29 319-29	石	完	長18.3 幅 7.0 厚 6.0 1,119.5g	南東部南 壁下床面	扁平長円磯。	閃綠岩
762-30 319-30	石	完	長13.8 幅 7.3 厚 5.7 714.1g	南東部床 面	長円磯。	石英閃綠岩
762-31 319-31	石	欠	長16.6 幅(7.7) 厚4.7 (916.3)g	北東部埋 土	扁平長円磯。長軸欠損。剝離痕あり。	輝綠岩
762-32 319-32	石	完	長13.0 幅 7.0 厚 5.3 755.9g	北東部電 西脇床面	長円磯。両端打撃痕。	輝石安山岩 (粗粒)
762-33 319-33	石	欠	長(15.9) 幅(15.5) 厚 5.1(1,627.1)g	南東部南 壁下床面	扁平円磯。大型。	ひん岩
762-34 319-34	石製模造品 有孔円板	完	縦 4.0 横 4.3 厚 0.5 孔 0.2	床 面	周縁打割後磨き。2孔は両面穿孔。	雲母石英片岩
762-35 319-35	石製模造品 白玉	完~欠		床 面	表面及び周縁研削。両面穿孔。1~6一部欠損。	滑石
			1 縦(0.4)横 0.7 厚 0.4 孔 0.25 2 縦(0.4)横 0.8 厚 0.5 孔 0.35 3 縦(0.4)横 0.7 厚 0.5 孔 0.25 4 縦(0.3)横 0.8 厚 0.5 孔 0.25 5 縦(0.35)横 0.65 厚(0.1)孔 0.25 6 縦(0.35)横 0.8 厚(0.15)孔 0.2 7 縦 0.75 横 0.75 厚 0.4 孔 0.25 8 縦 0.75 横 0.75 厚 0.3 孔 0.25		9 縦 0.8 横 0.75 厚 0.55 孔 0.2 10 縦 0.75 横 0.8 厚 0.4 孔 0.2 11 縦 0.75 横 0.7 厚 0.3 孔 0.2 12 縦 0.7 横 0.7 厚 0.5 孔 0.25 13 縦 0.7 横 0.7 厚 0.35 孔 0.15 14 縦 0.8 横 0.8 厚 0.4 孔 0.2 15 縦 0.8 横 0.8 厚 0.35 孔 0.25	

189号住居跡 (Fig. 764~767・PL. 320, 321)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.04 × 3.09	N-98.5'-E	東壁やや南寄り	円形 60 × 55 × 14

I区の中央部やや北寄りに位置し、50~52 I 33・34の範囲にある。住居跡の西側で68号住居跡とさうに全体を1号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は68号住居跡より旧く、1号掘立柱建物跡より新しい時期の所産である。西壁の一部は68号住居跡によって消失している。壁高は約30cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが北側はやや軟弱である。竈は東壁に付設されわずかに壁を掘り込んでいる。その先端には燃焼部から急角度で小さく立ち上がり、傾斜角度をやや緩くして小さい突部を作り出し煙道ないしは煙出し孔としている。袖部の構築は検出されていないが東壁を掘り込んだ範囲では燃焼部分にはなく、本来は住居内に張り出す形で袖部が存在していたと考えられる。現存燃焼部幅約60cm・奥行約30cm、煙道部長さ約20cmを測る。出土遺物は散在しているが、貯蔵穴内にやや集中している。

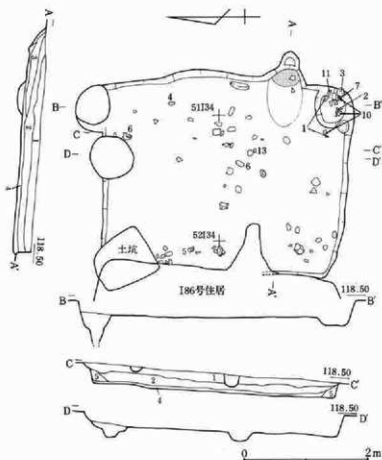


Fig.764 I 89号住居跡

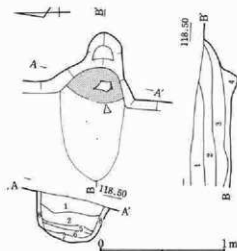


Fig.765 I 89号住居竈

I 89号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 4 暗褐色土 やや粘性あり。
- 5 暗褐色土 黄色砂質土を含み粘りあり。

I 89号住居竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・灰を含む。
- 4 暗褐色土 やや粘性のある層。
- 5 灰層
- 6 焼土 焼土粒を含む。
- 7 焼土 灰
- 8 焼土 壁

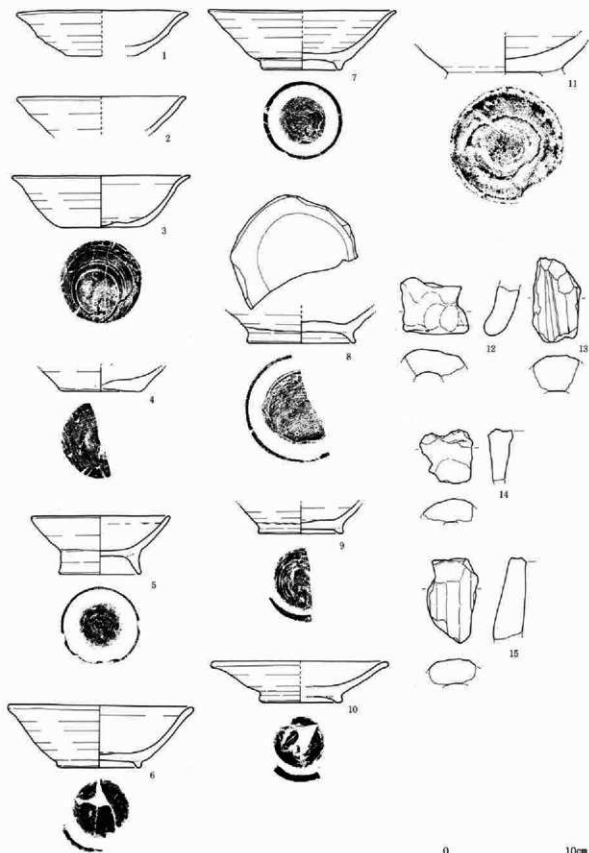


Fig.766 I 89号住居跡出土遺物(1)

第5章 I区の遺構と遺物

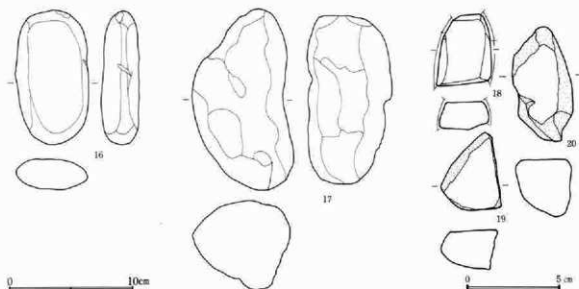


Fig.767 189号住居跡出土遺物(2)

189号住居跡出土遺物観察表

Fig. No Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高				
766-1 320-1	須恵器 杯	口~体 片	13.7 × 5.8 × 3.7		貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転。口縁部やや歪む。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
766-2 320-2	須恵器 杯	口~体 片	13.5 × — × (2.9)		貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転。	①酸化・良好 ②に よい黄緑 ③細砂混る
766-3 320-3	須恵器 杯	口~底 片	14.2 × 6.0 × 4.1		貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転余切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
766-4 320-4	須恵器 杯	体~底 片	— × 6.4 × (1.8)		北東部床 面	轆轤。右回転余切り。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
766-5 320-5	須恵器 椀	口~底 片	11.1 × 6.6 × 4.7		北西部床 面	轆轤。右回転。付高台及び底部横割で。	①酸化・良好 ②浅黄 緑 ③細砂混る
766-6 320-6	須恵器 椀	口~底 片	14.9 × 6.8 × 5.0		北東部北 壁寄埋土	轆轤。右回転余切り。付高台横割で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
766-7 320-7	須恵器 椀	口~底 片	15.0 × 6.6 × 4.7		貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転余切り。付高台横割で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
766-8 320-8	須恵器 椀	体~底 片	— × 8.8 × (2.8)		掘形埋土	轆轤。右回転余切り。付高台横割で。見 込部摩滅。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
766-9 320-9	須恵器 椀	体~底 片	— × 6.9 × (3.2)		貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転余切り。付高台横割で。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
766-10 321-10	須恵器 皿	口~底 片	14.3 × 6.7 × 3.3		貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転余切り。付高台横割で。	①加酸化還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
766-11 321-11	須恵器 盥	底	— × (9.2) × (2.9)		貯蔵穴埋 土	横割で。付高台割落。	①還元・良 ②灰白 ③砂混る

I 89号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計 測 値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
766-12 321-12	土製品 罎羽口	基 瓦	長(4.5)	掘形埋土	棒付、撫で。指頭痕明顯。	①二次還元 ②灰～砂 白 ③細砂混る
766-13 321-13	土製品 罎羽口	中	長(6.8)	中央部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①二次還元 ②灰～褐 灰 ③細砂混る
766-14 321-14	土製品 罎羽口	先	長(4.3)	掘形埋土	棒付、撫で。先端部溶解物少量付着。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
766-15 321-15	土製品 罎羽口	先～中	長(6.6)	埋 土	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物少量付 着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
767-16 321-16	石	完	長10.6 幅 5.9 厚 3.0 289.5g	中央部床 面	扁平長円礫。	砂岩
767-17 321-17	石	完	長14.4 幅 8.2 厚 6.8 754.6g	西中央部床 面	不定形長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
767-18 321-18	須恵器 転用磁石		長 3.7 幅 2.9 厚 1.4	埋 土	裏面部片転用。全新面使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
767-19 321-19	石製品 砥石		長 4.1 幅(3.1) 厚 2.1	埋 土	小型扁平円礫。1面使用。半欠。	埴貫炭貫者
767-20 321-20	石製品 砥石		長 6.0 幅 3.1 厚 3.0	埋 土	小円礫。4カ所使用。	輝石安山岩(粗粒)

I 90号住居跡 (Fig. 768～772・PL. 321～324)

平面形	現 棟 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	6.73 × 5.44 張り出し部 3.28 × 1.58	N-110.5°-W	(A)東壁ほぼ中央	

I区の北部に位置し、47～50 I 39～42の範囲にある。住居跡東側で79号・102号住居跡とさらに南西側で88号住居跡と各々重複している。新旧関係は79号・102号より旧く、88号住居跡より新しい時期の所産である。南壁から西壁の一部にかけては平面確認ができず調査段階で消失してしまった。壁線にやや凹凸があるが長軸を東西方向にもち、西側がやや広がる様相を呈し不整の台形になろう。北壁の西端が突出しておりいわゆる張り出し部を有する形態である。壁高は約30cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが南西部は踏み締まりが弱く不安定である。貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。張り出し部は幅約2mで北壁から約1.6m突出する。張り出し部の床面は小さな凹凸が目立った。竈は東壁に付設され、袖部が住居内に張り出す形態をもつ。燃焼部形成のための壁への掘り込みはなされない。両袖部先端には縦列に2個の凝灰岩の加工材が埋設されている。焚口部には天井材と考えられる長い角柱が見られる。煙道部は79号住居跡との切り合いのためか消失している。袖部長さ約70cm・袖材間内法約50cm、燃焼部奥行き約60cmを測る。出土遺物は多く竈内および散在的ではあるが住居内南半に集中して検出され羽口類が多い。

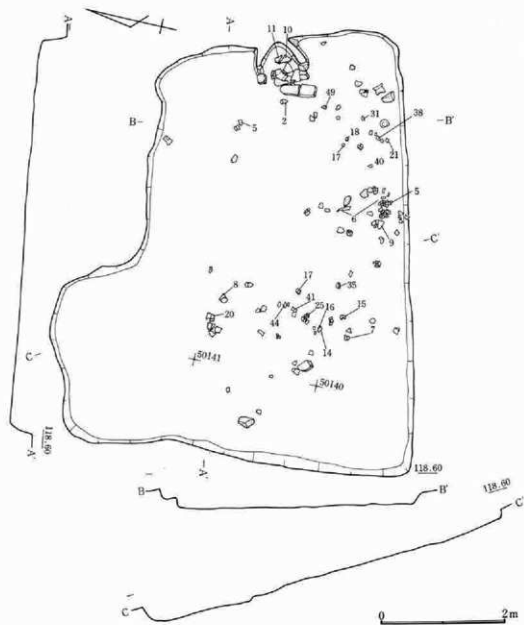


Fig.768 I 90号住居跡

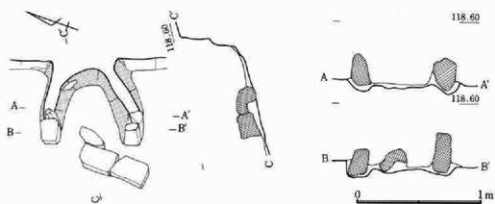


Fig.769 I 90号住居跡電

第2節 Ⅰ区の竪穴住居跡と遺物



Fig.770 Ⅰ90号住居跡出土遺物(Ⅰ)

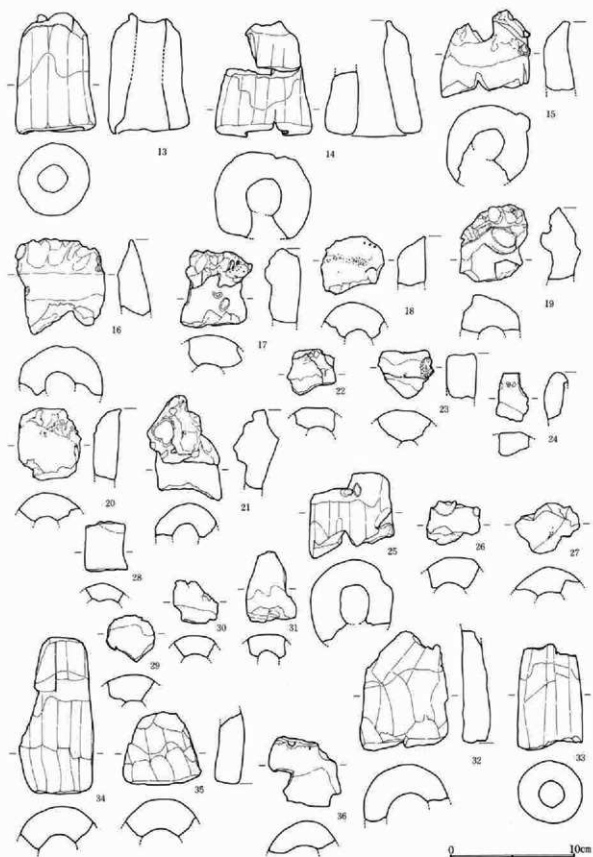


Fig.771 I 90号住居跡出土遺物(2)



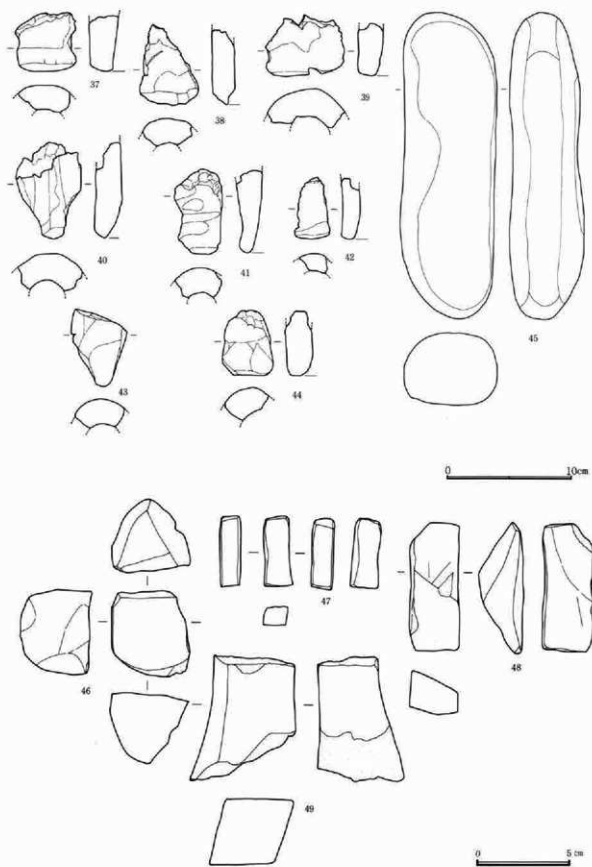


Fig. 772 I 90号住居跡出土遺物(3)

I 90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
770-1 322-1	土師器 杯	口～底 ⅔	12.0 × — × 2.6	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体部横、底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
770-2 322-2	土師器 杯	口～底 ⅔	12.0 × — × 2.8	甕手前床	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
770-3 322-3	土師器 杯	口～底 小片	12.9 × — × 3.8	南東部床 面	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定方向寛削り。	①酸化・良 ②橙 ③粗い砂混る
770-4 323-4	土師器 杯	口～底 ⅔	15.6 × — × 3.3	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体底部横方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③砂混る
770-5 323-5	土師器 杯	口～底 ⅔	16.4 × — × 5.5	東半部床 面敷在	鉢状大型。粗造巻上か。口縁部及び内面無で。体底部粗い斜方向寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
770-6 323-6	須恵器 蓋	横～端 ⅔	20.5 × 横 6.6 × 3.5	南尖部床 面敷在	縷織。右回転。頂部広範囲に回転削り。猶大きい。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
770-7 323-7	須恵器 杯	口～底 ⅔	13.0 × 8.0 × 3.6	南西部埋 土	縷織。右回転。底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
770-8 323-8	須恵器 杯	口～底 ⅔	11.4 × 8.0 × 3.5	南西部埋 土	縷織。右回転。底部手持削り。	①酸化・軟質 ②灰白 ③緻密
770-9 323-9	須恵器 壺	口～下 ⅔	17.0 × — × (22.1)	南尖部床 面敷在	細造。可打。口頸部及び体部上半横無で。体部下半及び内面可打痕残る。	①還元・良好 ②灰黄褐 ③細砂混る
770-10 323-10	土師器 壺	口～中 ⅔	21.9 × — × (20.0)	甕内一括	細造。口頸部無で。体部上位斜、中位以下縦方向の長い寛削り。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
770-11 323-11	土師器 壺	口～底 完	21.3 × 5.0 × 34.3	甕内一括	細造。口頸部強い無で。体部斜方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②明褐 灰 ③細砂混る
770-12 323-12	土師器 壺	下～底 ⅔	— × 5.2 × ( 8.3)	中央部横 形	細造。体部斜、底部不定方向寛削り。内面無で。	①酸化・良好 ②によい橙 ③細砂混る
771-13 323-13	土製品 陶羽口	先～基 完	長 9.4 幅 5.8 厚 5.7	南東部南 壁下掘形	棒付、縦方向無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～黄橙 ③砂混る
771-14 323-14	土製品 陶羽口	先～基 ⅔	長 9.0 幅 7.7 厚 —	南西部埋 土敷在	棒付、縦方向無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
771-15 324-15	土製品 陶羽口	先 ⅔	長(6.2) 幅 6.5 厚 —	南西部埋 土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②褐灰 ③細砂混る
771-16 324-16	土製品 陶羽口	先 ⅔	長(7.5) 幅 6.8 厚 —	南西部埋 土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②褐灰 ～灰 ③細砂混る
771-17 324-17	土製品 陶羽口	先 ⅔	長(6.1)	南西部埋 土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰～灰 白 ③砂混る
771-18 324-18	土製品 陶羽口	先 ⅔	長(4.3)	南東部埋 土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③緻密
771-19 324-19	土製品 陶羽口	先 ⅔	長(6.0)	埋土	棒付、無で。溶解物多量に付着。	①二次還元 ②黒灰 ③砂混る

Ⅰ90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
771-20 324-20	土 製 品 鬮 羽 口	先 尻	長(5.7)	南西部埋 土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
771-21 324-21	土 製 品 鬮 羽 口	先 尻	長(8.5)	南東部埋 土	棒付、無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
771-22 324-22	土 製 品 鬮 羽 口	先 尻	長(3.6)	埋 土	棒付、無で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
771-23 324-23	土 製 品 鬮 羽 口	先 尻	長(3.7)	埋 土	棒付、無で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
771-24 324-24	土 製 品 鬮 羽 口	先 尻	長(3.8)	埋 土	小片、溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
771-25 324-25	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(6.8) 幅 6.5	南西部埋 土散在	棒付、縦方向無で。先端部寄り溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～赤褐 ③砂混る
771-26 324-26	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(3.5)	埋 土	棒付、無で。欠損部にも溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
771-27 324-27	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(4.0)	埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ② 灰～赤褐 ③細砂混る
771-28 324-28	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(3.8)	埋 土	棒付、丁寧な無で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
771-29 324-29	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(4.6)	埋 土	棒付、無で。	①二次還元 ②灰～淡 黄 ③細砂混る
771-30 324-30	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(3.3)	埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
771-31 324-31	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(5.6)	南東部埋 土	棒付、無で。	①酸化・良 ②によい 橙 ③砂混る
771-32 324-32	土 製 品 鬮 羽 口	中～基 尻	長(9.1)	南東部南 壁下埋土	棒付、不定方向無で。	①二次還元 ②灰～淡 黄 ③細砂混る
771-33 324-33	土 製 品 鬮 羽 口	中 尻	長(8.4) 幅 5.1 厚 4.9	南西部埋 土	棒付、縦方向無で。	①酸化・二次還元 ②灰～褐 ③細砂混る
771-34 324-34	土 製 品 鬮 羽 口	中～基 尻	長(12.3)	南東部南 壁下埋土	棒付、縦方向無で、3段。	①酸化・二次還元 ②灰～黄橙 ③砂混る
771-35 324-35	土 製 品 鬮 羽 口	基 尻	長(5.7)	南西部埋 土	棒付、縦方向無で。指頭痕顯著。	①酸化・良好 ②黄灰 ～によい橙 ③砂混る
771-36 324-36	土 製 品 鬮 羽 口	先 尻	長(5.2)	埋 土	棒付、無で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
772-37 324-37	土 製 品 鬮 羽 口	基 尻	長(4.6)	埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ② 灰～淡赤橙 ③砂混る
772-38 324-38	土 製 品 鬮 羽 口	基 尻	長(6.2)	南東部埋 土	棒付、無で。	①酸化・二次還元 ② 灰～赤褐 ③細砂混る

I 90号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①構成 ②色調 ③胎土 その他
772-39 324-39	土製品 縄羽口	基 片	長(4.8)	南西部埋 土散在	棒付、撫で。	①酸化・良好 ②黄橙 ～赤褐 ③緻密
772-40 324-40	土製品 縄羽口	基 片	長(7.6)	南東部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～褐 ③細砂混る
772-41 324-41	土製品 縄羽口	基 片	長(6.7)	南西部埋 土	棒付、横方向撫で。	①酸化・良好 ②赤褐 ③細砂混る
772-42 324-42	土製品 縄羽口	基 片	長(4.9)	埋土	棒付、撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
772-43 324-43	土製品 縄羽口	基 片	長(6.1)	埋土	棒付、不定方向撫で。	①二次還元 ②灰～灰 白 ③細砂混る
772-44 324-44	土製品 縄羽口	基 片	長(5.2)	南西部埋 土	棒付、撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
772-45 324-45	石	完	長24.3 幅7.6 厚6.0	南東部強 形	大型棒状円盤。叩打痕等なし。	輝石安山岩(粗粒)
772-46 324-46	石製品 砥石		長4.4 幅4.0 厚3.6	埋土	円盤の3カ所使用。	角閃石安山岩
772-47 324-47	石製品 砥石		長3.7 幅1.3 厚1.0	埋土	細角棒状。4面使用。	砂岩
772-48 324-48	石製品 砥石	小片	長6.8 幅2.5 厚1.7	埋土	三角長体。4面使用。	波紋岩(砥沢?)
772-49 324-49	石製品 砥石	片	長(6.6)幅(5.7)厚(3.5)	南東部埋 土	長方体砥石の中間部欠損部の4面使用。	

I 91号住居跡 (Fig. 773~777・PL. 325、326)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.26 × 2.58	N—77—E	東壁やや北寄り	

I 区の中央部に位置し、50・51 I 26~28の範囲にある。南側で92号住居跡と重複しており、これよりも新しい時期の所産である。当区では小規模な住居跡の類になる。平面形態は東壁の南側がやや張り歪んだ方形を呈する。壁の掘形は南壁を除いて遺存状態は良好で、壁高約38cmを測り直線的に立ち上がる。床面は平坦

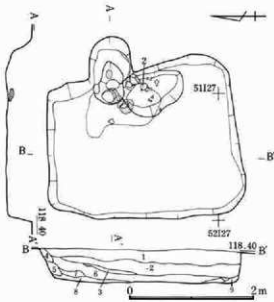


Fig.773 I 91号住居跡

I 91号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 焼土 焼土粒。
- 4 黒褐色土 C軽石を少量含む。
- 5 暗褐色土 C軽石を含み締る。
- 6 暗褐色土 C軽石を含む。
- 7 暗褐色土 C軽石を含む灰色砂質土。
- 8 暗褐色土 C軽石を少量含む。
- 9 暗褐色土 C軽石を含む。

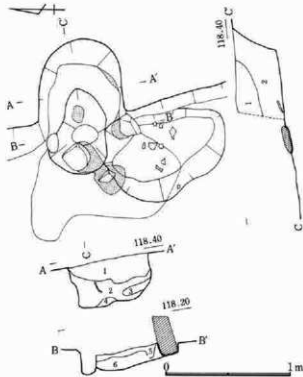


Fig.774 I 91号住居跡遺

I 91号住居跡遺

- 1 暗褐色土 C軽石を含み堅く締る。
- 2 焼土 焼土粒。
- 3 明褐色土 砂質土。
- 4 焼土
- 5 焼土 灰を含む。
- 6 暗褐色土

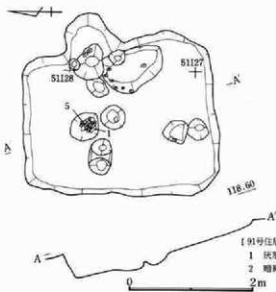


Fig.775 I 91号住居跡掘形

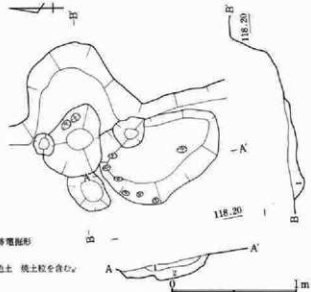


Fig.776 I 91号住居跡竪断面形

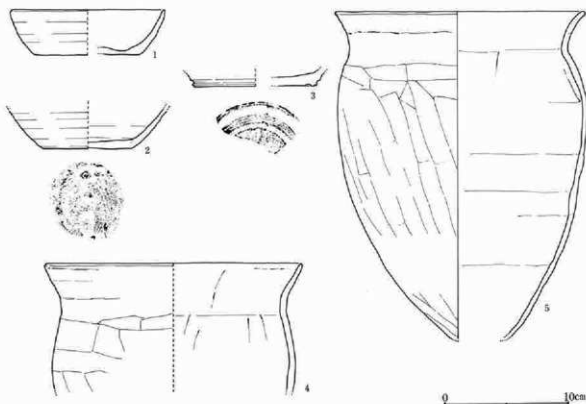


Fig.777 I 91号住居跡出土遺物

をなし、踏み締まりは良好である。床下には数個の穴状落ち込みが検出されているがその中の1つより土師器の壺型土器が1個体出土している。甕は東壁に付設されるが、付設位置が多くの場合同じ東壁でも南寄りになされるのに対し、当跡ではむしろ北寄りにあり、希な例である。燃焼部は楕円形に掘り込まれるが煙道部の作り出しはない。袖部は右袖に凝灰岩の加工材が埋設され、左袖には埋設痕が検出されている。袖部内法約45cm、燃焼部奥行き約85cmを測る。

I 91号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成	②色 調
			口径 × 底径 × 器高	出土位置			土	その他
777-1 326-1	須恵器 杯	口~底 片	12.4 × 8.4 × 3.6	掘形P i I内	轆轤。右回転。	①還元・良好	②緑灰	③細砂混る
777-2 326-2	須恵器 杯	体~底 片	— × 7.0 × (3.2)	竈南手前 床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好	②灰白	③細砂混る
777-3 326-3	須恵器 椀	底 片	— × 10.0 × (1.2)	竈内埋土	轆轤。右回転。底部及び高台、回転置用 り。	①還元・良好	②暗灰 黄	③細砂混る
777-4 326-4	土 師 器 壺	口~上 片	20.6 × — × (10.0)	竈内埋土	紐造。口頸部無で。体部上位横方向置削 り後、撫で。内面横方向置撫で。	①酸化・良好	②褐	③細砂混る
777-5 326-5	土 師 器 壺	口~下 片	20.0 × — × (25.9)	掘形P i I内一括	紐造。口頸部無で。体部上位横、中位以 下急斜方向置削り。内面置撫で。	①酸化・良好	②橙	③細砂混る

I 92号住居跡 (Fig. 778~782・PL. 326~328)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	窪 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.64 × 4.15	N- 94° -E	東壁やや南寄り	

I 区の中央部に位置し、50~52 I 24~26の範囲にある。北側で91号とまた西側で98号住居跡とわずかに重複している。新旧関係は91号・98号住居跡より古い時期の所産である。西壁から北壁にかけては検出が不明瞭でその痕跡が観察できたにとどまる。平面形態は各壁が丸味をおびて不整な楕円形を呈する。遺存状態の良好な南壁で壁高約50cmを測り傾斜をもって立ち上がる。床面は平坦をなすが踏み締まりは弱く不安定である。貯蔵穴・壁下の溝などの検出はない。竈は東壁に付設され楕円形に掘り込まれた燃焼部からゆるく立ち上がり、水平に近い煙道部が作り出される。袖材は検出されていない。燃焼部幅約65cm・奥行き約60cm、煙道部長さ約45cmを測る。出土遺物は土師器の他、角閃石安山岩製砥石や須恵器片の転用砥石が多量に検出されたが、多くは埋土中からのものである。

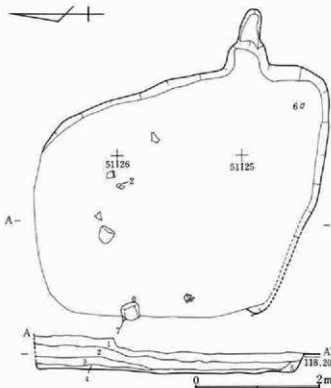


Fig.778 I 92号住居跡

## I 92号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を多量に含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・黄褐色塊を含む。
- 4 暗褐色土 やや粘性あり。
- 5 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。

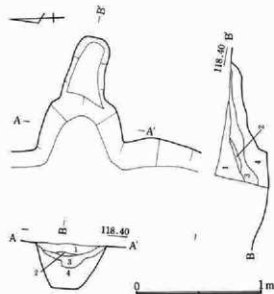
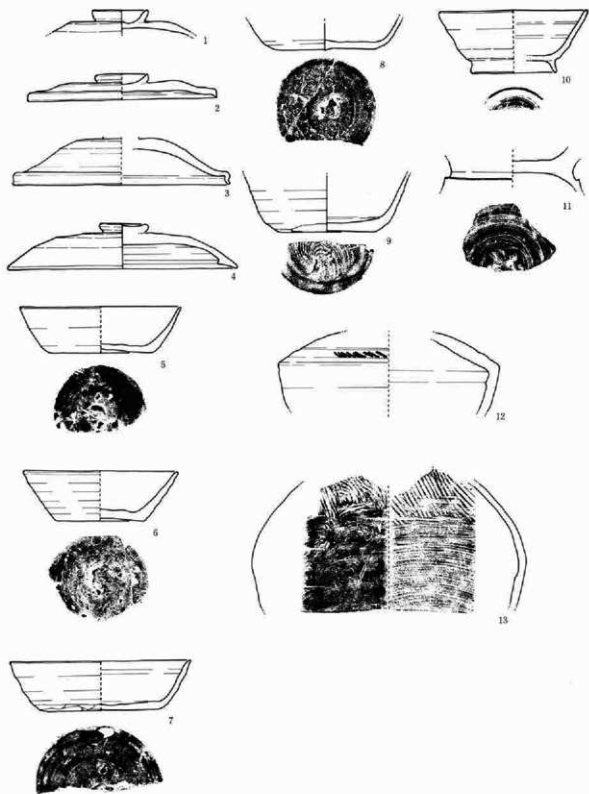


Fig.779 I 92号住居跡竈

## I 92号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
- 2 焼土
- 3 暗褐色土 1よりC軽石少量含む。
- 4 暗褐色土 C軽石・焼土粒を多量に含む。

第5章 I区の遺構と遺物



0 10cm

Fig.780 I92号住居跡出土遺物(1)



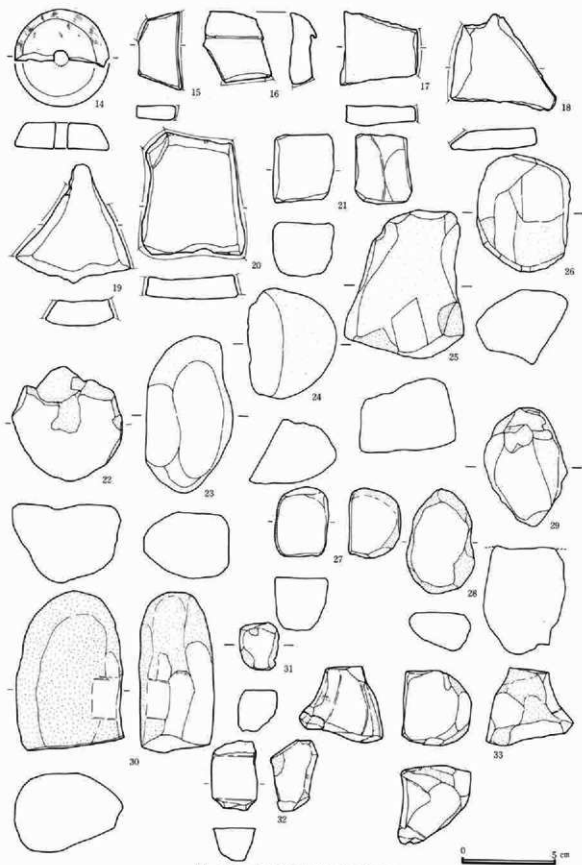


Fig.781 I 92号住居跡出土遺物(2)

第5章 I区の遺構と遺物

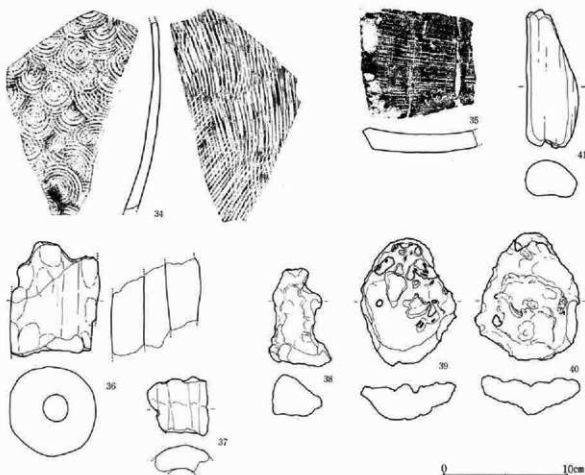


Fig.782 I 92号住居跡出土遺物(3)

I 92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 ③胎土 ④調整 ⑤その他
			口径 × 底径 × 器高	口徑 × 底径 × 器高			
780-1 327-1	酒志器 蓋	口～頂 片	— × 口 4.5 × (2.1)	埋土	轆轤。右回転。頂部2段磨面削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る	
780-2 327-2	酒志器 蓋	口～頂 片	15.2 × 口 4.3 × 2.0	北東部床 面	轆轤。右回転。頂部2段磨面削り。器 高扁平。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密	
780-3 327-3	轆轤蓋	口～頂 片	17.4 × 口 — × (3.7)	埋土	轆轤。右回転。頂部3段磨面削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る	
780-4 327-4	酒志器 蓋	口～頂 片	18.4 × 口 4.0 × 3.6	埋土	轆轤。右回転。頂部3段磨面削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る	
780-5 327-5	酒志器 杯	口～底 片	12.9 × 8.2 × 3.7	埋土	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密	
780-6 327-6	酒志器 杯	口～底 片	12.4 × 7.2 × 4.0	南東部埋 土	轆轤。右回転削り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る	

I92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
780-7 327-7	須恵器 杯	口~底 片	14.5 × 9.3 × 3.9	西部遺構 外	轆轤。右回転旋切り。腰部手持ち。底部 回転痕有り。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
780-8 327-8	須恵器 杯	体~底 片	— × 8.0 × (2.3)	北西部遺 構外	轆轤。右回転旋切り。底部回転痕有り。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
780-9 327-9	須恵器 杯	体~底 片	— × 7.7 × (4.5)	北西部遺 構外	右回転糸切り。腰部手持ち有り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
780-10 327-10	須恵器 碗	口~底 片	11.9 × 6.9 × 5.0	埋土	轆轤。右回転。腰部回転痕有り。付高台 横溝で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
780-11 327-11	須恵器 壺	底 片	— × — × (3.0)	埋土	付高台横溝で。下端部欠損。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③緻密
780-12 327-12	須恵器 長頸壺	上~中 片	— × — × (6.5)	埋土	紐造。体部上位、平行沈降間に列点帯 文。	①還元・良好 ②暗緑 灰 ③緻密
780-13 327-13	須恵器 壺	上~中 片	— × — × (9.7)	埋土	紐造。叩打。上位かき目。内面上位のみ 無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
781-14 327-14	石製品 紡錘車	輪 片	上径4.0 下径5.1 厚1.4	北西部遺 構外	両面研磨。側面、細面取り後研磨。両面 穿孔あり。	蛇紋岩
781-15 327-15	須恵器 転用砥石		長4.1 幅2.1 厚0.7	埋土	蓋頂部使用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
781-16 327-16	須恵器 転用砥石		長3.8 幅3.2 厚1.1	埋土	壺口縁部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
781-17 327-17	須恵器 転用砥石		長4.1 幅3.8 厚1.1	埋土	壺頸部転用。断面1カ所使用。	①酸化・良好 ②に よい赤褐 ③緻密
781-18 327-18	須恵器 転用砥石		長5.6 幅4.5 厚1.0	埋土	壺体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
781-19 327-19	須恵器 転用砥石		長6.3 幅6.0 厚1.2	埋土	壺体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
781-20 327-20	須恵器 転用砥石		長6.5 幅5.5 厚1.1	埋土	壺体部片転用。断面周縁全カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
781-21 328-21	石製品 砥石		長3.8 幅3.4 厚2.7	埋土	角礫状に全面使用。	角閃石安山岩
781-22 328-22	石製品 砥石		長6.1 幅5.8 厚4.1	埋土	円礫。約1/2使用。	角閃石安山岩
781-23 328-23	石製品 砥石		長8.3 幅4.6 厚3.4	埋土	長円礫。側面等4カ所使用。	角閃石安山岩
781-24 328-24	石製品 砥石		長5.9 幅4.8 厚3.4	埋土	円礫。約1/2使用。	角閃石安山岩
781-25 328-25	石製品 砥石		長7.8 幅6.4 厚3.7	埋土	長円礫。数カ所使用。	角閃石安山岩

第5章 I区の遺構と遺物

I 92号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器 種 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
781-26 328-26	石 製 品 砥 石		長 6.2 幅 5.0 厚 3.9	埋 土	円礫。9カ所使用。	角閃石安山岩
781-27 328-27	石 製 品 砥 石		長 3.7 幅 2.8 厚 2.8	埋 土	小円礫。1面及び2カ所使用。	角閃石安山岩
781-28 328-28	石 製 品 砥 石		長 5.5 幅 3.6 厚 2.0	埋 土	小円礫。1面使用。	角閃石安山岩
781-29 328-29	石 製 品 砥 石		長 6.0 幅 6.0 厚 4.3	埋 土	円礫。3カ所使用。	角閃石安山岩
781-30 328-30	石 製 品 砥 石		長 8.2 幅 5.8 厚 4.0	埋 土	長円礫。先端部及び3カ所使用。	角閃石安山岩
781-31 328-31	石 製 品 砥 石		長 2.5 幅 2.1 厚 2.2	埋 土	小礫。4カ所使用。	角閃石安山岩
781-32 328-32	石 製 品 砥 石		長 2.6 幅 2.1 厚 2.0	埋 土	小礫。1面及び2カ所使用。	角閃石安山岩
781-33 328-33	石 製 品 砥 石		長 4.4 幅 3.7 厚 3.8	埋 土	円礫。不定形角礫状に使用。	角閃石安山岩
782-34 328-34	須 恵 器 壺	小 片		北東部埋 土	紐造。印打。転用痕認められず。磁石等の 転用材か。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
782-35 328-35	瓦 平 瓦	小 片	厚 1.4	埋 土	柄杓。印打。上面布目状。下面撫で。	①加酸化還元 ②明赤 褐 ③砂及び細礫混る
782-36 328-36	土 製 品 圓 羽 口	中	長(9.1) 幅 7.0 厚 7.1	北西部遺 構外	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
782-37 328-37	土 製 品 圓 羽 口	中 小 片	長(4.7)	埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
782-38 328-38	鉄 粗 礫		長 7.7 幅 3.1 厚 4.7	埋 土	不純物混入。	
782-39 328-39	鉄 碗 形 盆 滓		長10.1 幅 7.6 厚 2.8	埋 土	比較的薄い。炭化物付着。	
782-40 328-40	鉄 碗 形 盆 滓		長10.1 幅 8.2 厚 2.3	埋 土	比較的薄い。不純物混入。	
782-41 328-41	石		長(10.7) 幅4.1 厚2.9 (211.7)g	埋 土	棒状円礫。1端及び側部の一部を欠損。	緑色片岩

I 93号住居跡 (Fig. 783~785・PL. 329, 330)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	竪 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.88 × 3.82	N—87°—E N—107°—E	東壁やや南寄り 東壁より南寄り	

I区の中央部に位置し、51~54 I 29~31の範囲にある。住居跡の南側で96号・103号住居跡と重複しており、南半は消失している。96号住居跡よりも古い時期の所産である。103号住居跡との新旧関係は不明である。平面形態は方形を呈すると考えられるが、北東部隅はかなり丸みが強い。壁高は約38cmを測り直線的に立ち上がる。床面は平坦をなし踏み跡まわりは良好である。北壁から西壁の一部にかけて壁下の溝が巡り、溝幅約12cm、深さ約5cmを測る。竈は東壁に付設されるが並列して2基存在する。右側に付設される竈は楕円形に掘り込まれ燃焼部から急角度で立ち上がり、浅く水平な煙道部に続く。右袖部に長頭形の川原石が埋設されているが、左袖部には残っていない。燃焼部幅約60cm・奥行き約50cm、煙道部長さ約38cmを測る。左側の竈は燃焼部の痕跡は認められず、通例のものの煙道部と考えられる掘り込みが検出されている。幅約26cm・奥行き約30cmを測る。このような2基の竈のあり方は前後関係を示すものであろう。すなわち左側に付設された

竈の使用停止後、右側の竈が作られている。その際、住居の建替えないしは拡張がなされ従来の竈は煙道部を残す形でとり払われたと考えられる。北東部隅の丸みもその結果生じた可能性がある。出土遺物は散在的であるが、羽口は多量に検出されている。

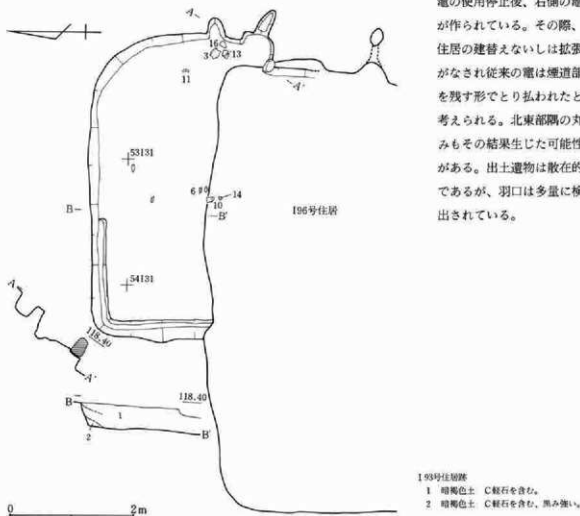


Fig. 783 I 93号住居跡

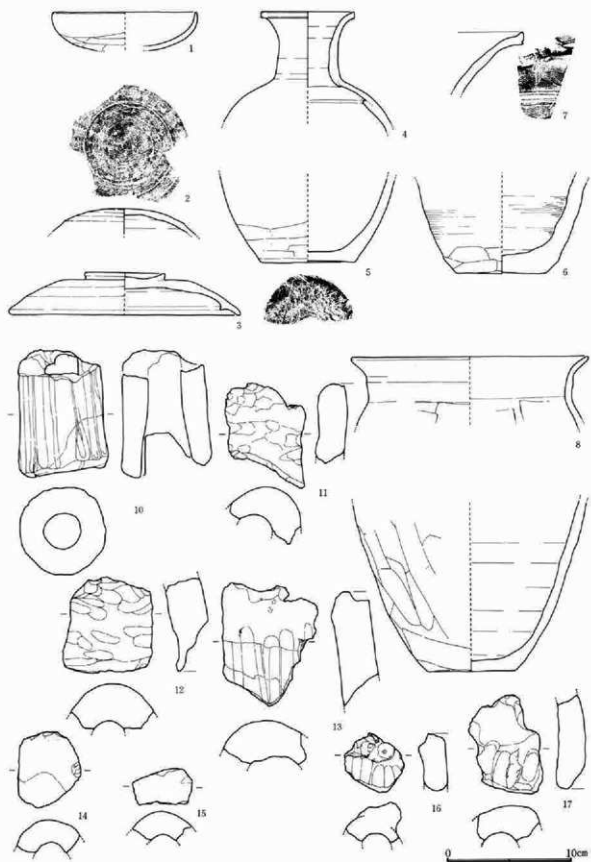


Fig.784 I 93号住居跡出土遺物(1)

## 第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

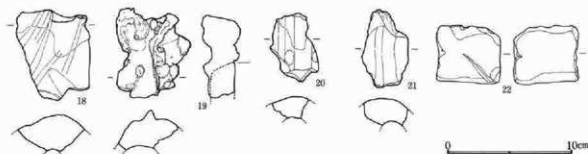


Fig.785 I 93号住居跡出土遺物(2)

## I 93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
784-1 329-1	土師器 杯	口～底 1/4	11.6 × — × (3.1)	埋土	指押。口縁部及び内面無で。体底部不定 方向寛削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐色 ③細砂混る
784-2 329-2	須恵器 蓋	頂 1/4	— × 横 — × (7.0)	埋土	轆轤。頂部右回転永切り。	①加酸化還元 ②黒 ③細砂混る
784-3 329-3	須恵器 蓋	横～端 1/4	18.6 × 横 6.5 × 3.4	電手前床 面	轆轤。右回転。頂部回転寛削り。横大型 横削で。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
784-4 329-4	須恵器 瓶	口～上 1/4	7.4 × — × (9.1)	埋土	紐造。轆轤右回転。横削で。	①還元・良好 ②明オ リーブ灰 ③緻密
784-5 329-5	須恵器 壺	下～底 1/4	— × 7.6 × (6.8)	埋土	紐造。轆轤。右回転。横削で。体部下位 及び底部寛削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
784-6 329-6	須恵器 瓶	下～底 1/4	— × 7.2 × (7.5)	中央部 床面器内 肥厚。造 成不明		①酸化・良好 ②に よい橙 ③細砂混る。
784-7 329-7	須恵器 蓋	頂～頂 片	—	埋土	紐造。横削で。	①還元・良好 ②暗緑 灰 ③細砂混る
784-8 329-8	土師器 壺	口～上 1/4	19.0 × — × (5.4)	埋土	紐造。口頸部無で。体部横方向寛削り。 内面横方向寛削で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
784-9 330-9	須恵器 羽釜	底 1/4	— × 7 × (13.4)	埋土	紐造。1本脚方向削削り。	①酸化・良好 ②淡黄 褐色 ③砂混る
784-10 330-10	土製品 輪羽口	中～底	長(10.1)幅6.9厚7.9	中央部床 面	棒付。縦方向削で。基部斜行。	①酸化・二次還元 ②明黄褐色 ③砂混る
784-11 330-11	土製品 輪羽口	先～中 1/4	長(8.3)	電手前埋 土	棒付。無で。指押痕明瞭。先端部溶解物 付着。	①酸化・二次還元 ② 灰白～淡黄 ③砂混る
784-12 330-12	土製品 輪羽口	中～基 1/4	長(7.6)	電手前埋 土	棒付。縦方向削で。指押痕明瞭。	①酸化・不良 ②灰白 ③細砂混る
784-13 330-13	土製品 輪羽口	先～中 1/4	長(9.7)	電手前床 面	棒付。縦方向削で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰～赤褐色 ③細砂混る
784-14 330-14	土製品 輪羽口	中 1/4	長(6.0)	中央部埋 土	棒付。無で。	①酸化・二次還元 ② 灰～淡黄 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 93号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
			口 径 × 底 径 × 器 高				
784-15 330-15	土 製 品 陶 羽 口	中	長(2.9)		埋 土	棒付、撫で。	①二次焼成 ②暗青灰 ③細砂混る
784-16 330-16	土 製 品 陶 羽 口	先	長(4.8)		電手前床面	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物附着。	①二次焼成 ②灰 ③細砂混る
784-17 330-17	土 製 品 陶 羽 口	中～基 反	長(7.4)		電手前床面	棒付、縦方向の強い撫で。	①酸化・二次還元 ② にぶい橙 ③細砂混る
785-18 330-18	土 製 品 陶 羽 口	基 部	長(7)		埋 土	笈状工具の成形痕	①酸化 ②明橙 ③白 色粒混る
785-19 330-19	土 製 品 陶 羽 口	先端部 小 片	長(7.5)		埋 土	先端部溶解物顕著。	①酸化 ②黒灰 ③白 色粒混る
785-20 330-20	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長(5.5)		埋 土		①酸化 ②橙 ③密
785-21 330-21	土 製 品 陶 羽 口	中 小 片	長(6.2)		埋 土		①酸化 ②にぶい橙 ③密植物質混る
785-22 330-22	石 製 品 砥 石		長 5.0 幅 4.5 厚 2.0		埋 土	楔形状に全面使用。	角閃石・安山岩

I 95号住居跡 (Fig. 786～789・PL. 330～332)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.91 × 4.58	N-21.5°-E	北壁ほぼ中央	

I区の中央部に位置し、50～53 I 21～24の範囲にある。南東部で61号と西部で65号の各住居跡と重複している。新旧関係は両者より古い時期の所産である。平面形態は北西・南西の隅がやや角をもつのに対し、東壁は大きく張りみ壁線は丸みをもつ不整形を呈する。東壁から南壁にかけては61号住居跡との切り合いによって痕跡程度の検出である。良好に遺存する北壁で壁高約40cmを測り緩い傾斜で立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴・壁下の溝などの諸施設は見られない。竈についても明瞭な形では検出されなかった。東壁のやや北寄りに小さい掘り込みが見られたが、焼土・灰層などの残存は少ない。竈とするには積極的な根拠がない。残存状態からすれば、むしろ竈の煙道部にあたるものと考えられる。幅約30cm・奥行き約60cmを測る。出土遺物は羽口・須恵器片の転用砥石が多い。これら多くは埋土中のとり上げ遺物である。



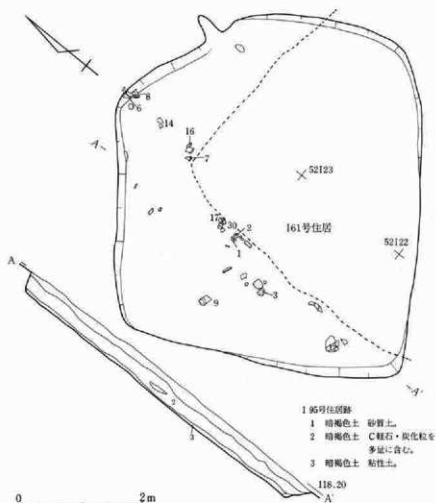


Fig.786 Ⅰ95号住居跡

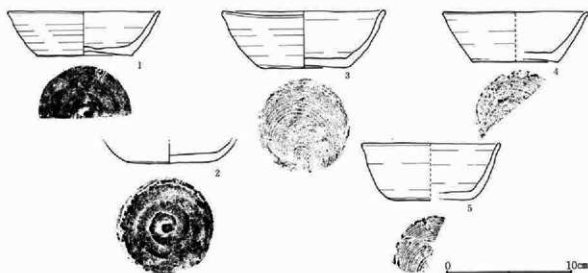


Fig.787 Ⅰ95号住居跡出土遺物(1)



Fig.788 I 95号住居跡出土遺物(2)

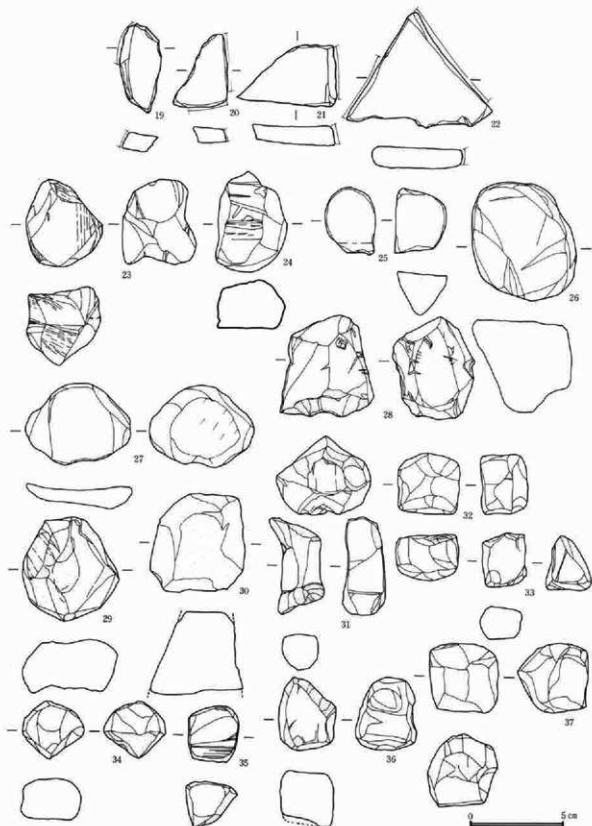


Fig.789 I 95号住居跡出土遺物(3)

第5章 1区の遺構と遺物

195号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
787-1 331-1	須恵器 杯	口～底 底	12.2 × 7.8 × 3.5	西中央部床 面	織織。右回転歪切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
787-2 331-2	須恵器 杯	底	— × 7.1 × (1.7)	西中央部床 面	織織。右回転歪切り。無調整。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③緻密
787-3 331-3	須恵器 杯	口～底 底	13.2 × 7.0 × 4.5	西中央部床 面	織織。右回転歪切り。無調整。口縁部や や歪む。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
787-4 331-4	須恵器 杯	口～底 底	11.6 × 6.8 × 4.0	埋土	織織。右回転歪切り。無調整。	①還元・良好 ②青灰 ③緻密
787-5 331-5	須恵器 杯	口～底 底	11.1 × 6.5 × 4.5		織織。右回転歪切り。無調整。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
788-6 331-6	須恵器 梗	口～底 底	15.8 × 10.0 × 4.1	北西部隔 埋土	織織。右回転。底部回転歪削り。付高台 横割で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
788-7 331-7	須恵器 盤	口～底 底	23.0 × 15.0 × 4.2	北西部床 面	織織。右回転。底部回転歪削り。	①還元・良好 石灰白 ③緻密
788-8 331-8	土製品 鬮羽口	先～基 完	長12.5幅 8.0厚 8.5	北西部隔 埋土	棒付、斜方向撫で。先端部灰等、溶解物 付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
878-9 331-9	土製品 鬮羽口	先～基	長13.5幅 8.0厚 7.8	西中央部埋 土	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②黄灰～橙 ③砂混る
788-10 331-10	土製品 鬮羽口	先 底	長(3.9)	埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
788-11 331-11	土製品 鬮羽口	先 底	長(6.1)	埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②暗青灰 ③細砂混る
788-12 331-12	土製品 鬮羽口	中～基 底	長(10.4)	埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰白～橙 ③細砂混る
788-13 331-13	土製品 鬮羽口	中～基 底	長(7.6)×幅 6.6	埋土	棒付、撫で。基部外反せず。溶解物少量 一部に付着。	①酸化・二次還元 ② 灰白～橙 ③細砂混る
788-14 331-14	土製品 鬮羽口	先 底	長(8.8)	北西部床 面	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
788-15 331-15	土製品 鬮羽口	先 底	長(3.3)	埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒 ③細砂混る
788-16 331-16	土製品 鬮羽口	基 底	長(7.3)	北西部埋 土	棒付、不定方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰～黄灰 ③細砂混る
788-17 331-17	土製品 鬮羽口	基 底	長(5.1)	西中央部床 面	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰～赤褐 ③細砂混る
788-18 331-18	土製品 鬮羽口	中 底	長(4.8)	埋土	棒付、撫で。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
789-19 332-19	須恵器 転用磁石		長 4.8幅 2.2厚 0.9	埋土	裏面片転用。断面1ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

I 95号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
789-20 332-20	須恵器 転用磁石		長 3.9幅 2.8厚 0.8	埋 土	裏体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
789-21 332-21	須恵器 転用磁石		長 5.4幅 3.2厚 1.0	埋 土	裏体部片転用。曲面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
789-22 332-22	須恵器 転用磁石		長 7.8幅 6.0厚 1.1	埋 土	裏体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
789-23 332-23	石製品 磁石		長 4.6幅 4.1厚 3.9	埋 土	円盤。多面角礫状に全面使用。	角閃石安山岩
789-24 332-24	石製品 磁石		長 5.4幅 3.7厚 2.9	埋 土	円盤。2面を多方面に使用。刃当破使用	角閃石安山岩
789-25 332-25	石製品 磁石		長 3.5幅 2.7厚 2.2	埋 土	円盤。使用済。	角閃石安山岩
789-26 332-26	石製品 磁石		長 6.2幅 5.5厚 4.8	埋 土	円盤。2面使用。	角閃石安山岩
789-27 332-27	石製品 磁石		長 5.6幅 4.3厚 0.7	埋 土	円盤。表裏面完全使用か。扁平。	角閃石安山岩
789-28 332-28	石製品 磁石		長 5.4幅 5.0厚 4.2	埋 土	円盤。多面角礫状に全面使用。刃当破も あり。	角閃石安山岩
789-29 332-29	石製品 磁石		長 5.4幅 5.1厚 2.5	埋 土	砂礫の周縁。7カ所使用。	輝石安山岩(粗粒)
789-30 332-30	石製品 磁石		長 5.1幅 5.0厚 4.3	西尖部状 面	角礫。4カ所使用。	不詳
789-31 332-31	石製品 磁石		長 5.2幅 1.9厚 1.9	埋 土	周縁以外使用済。	砂岩
789-32 332-32	石製品 磁石	小片	長 3.7幅 3.3厚 2.4	埋 土	立方体状に近似。全面多方向使用。	流紋岩(磁沢)
789-33 332-33	石製品 磁石	小片	長 2.9幅 2.3厚 1.7	埋 土	全面使用。	流紋岩(磁沢)
789-34 332-34	石製品 磁石	小片	長 2.8幅 2.6厚 2.1	埋 土	全面使用。	流紋岩(磁沢)
789-35 332-35	石製品 磁石	小片	長 3.0幅 2.7厚 2.4	埋 土	全面使用。	流紋岩(磁沢)
789-36 332-36	石製品 磁石	小片	長 3.9幅 3.0厚 2.8	埋 土	一部を除き、使用。	流紋岩(磁沢)
789-37 332-37	石製品 磁石	小片	長 3.6幅 3.6厚 3.7	埋 土	全面使用。	流紋岩(磁沢)

I 96号住居跡 (Fig. 790~793・PL. 332, 333)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	5.16 × 3.24	N- 87 -E	東壁やや南寄り	

I区の中央部に位置し、52~57 I 27~30の範囲にある。住居跡のほぼ全体が103号住居跡と重なり、調査時には電部分と北壁を除き壁線の検出はできなかった。遺物の出土位置と103号住居跡との壁線の変化からおおよその平面形態を推定した。平面形態は竈が東壁の南に偏って位置し、方形を呈すると考えられる。103号住居跡との新旧関係はこれよりも新しい時期の所産である。壁高は約44cmを測り直線的に立ち上がる。床面は電前面がとくに堅く踏みしめる。貯蔵穴・壁下の溝等の諸施設は検出されない。東壁に付設される竈は燃焼部を方形に掘り込み、急傾斜で立ち上がり浅い煙道部に至る。袖部等の構築材は残されていないが、電前方の床面には凝灰岩の加工材が多量に散乱しており使用停止直後に破壊されたものと考えられる。燃焼部と煙

道部の変換部左側には長頭形の川原石が埋設される。電燃焼部幅約70cm・奥行き約40cm、煙道部長さ約50cmを測る。出土遺物は比較的多いが散在した状態で検出されている。

出土遺物 (Fig. 793・PL. 333)

鉄器は2点検出されているが、いずれも埋土中の出土である。21は5×3.4cm厚さ0.4cmを測る。22は8.6×6cm厚さ0.6cmでいずれも板状製品である。

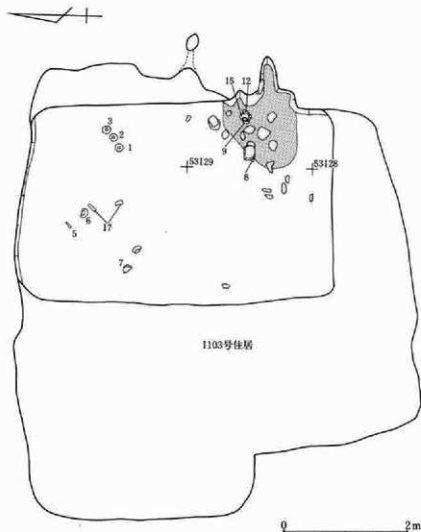


Fig. 790 I 96号住居跡

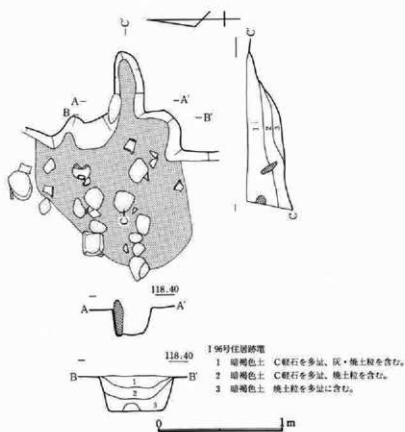


Fig.791 I96号住居跡画

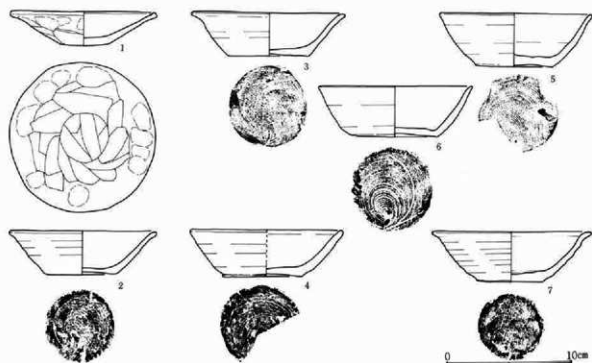


Fig.792 I96号住居跡出土遺物(1)

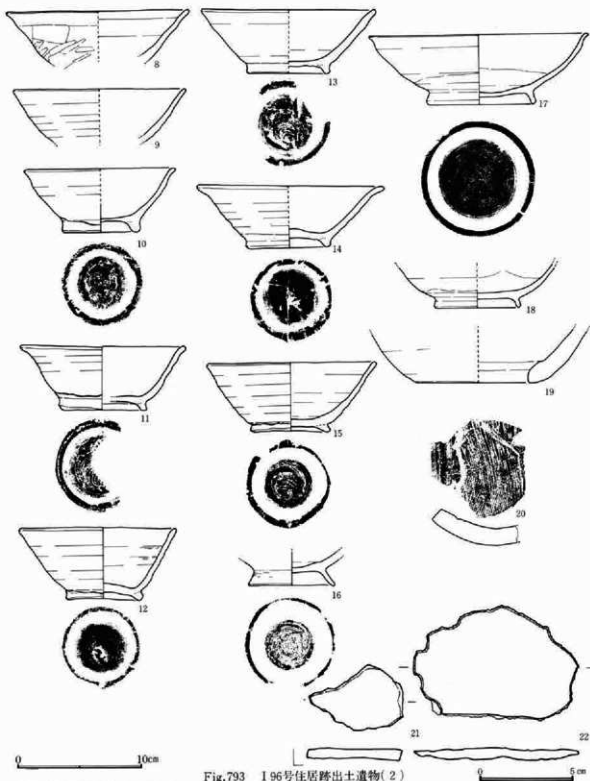


Fig.793 I 96号住居跡出土遺物(2)

I 96号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値(cm) 口径×底径×器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
792-1 333-1	土師器 杯	口~底 完	11.8 × 3.9 × 2.7	北東部床 面	指押。口唇部及び内面無で。体部指押痕 明瞭。体部下半及び底部磨削り。	①酸化・良好 ②によ い褐 ③細砂少混る



I 96号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 ④その他
792-2 333-2	須恵器 杯	口～底 1/2	11.8 × 5.8 × 3.5	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②にぶい褐色 ③砂混る
792-3 333-3	須恵器 杯	口～底 完	12.4 × 6.5 × 3.5	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰 ③砂混る
792-4 333-4	須恵器 杯	口～底 1/2	12.2 × 6.5 × 3.8	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・低温 ②灰黄 ③砂混る
792-5 333-5	須恵器 杯	口～底 1/2	12.1 × 6.2 × 4.3	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
792-6 333-6	須恵器 杯	口～底 1/2	12.3 × 6.3 × 4.0	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
792-7 333-7	須恵器 杯	口～底 1/2	12.7 × 5.3 × 4.0	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低温 ②灰白 ③緻密
792-8 333-8	須恵器 杯	口～体 1/2	14.6 × — × (4.0)	電手前床 面	轆轤。右回転。体部下半段削り。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
792-9 333-9	須恵器 杯	口～底 小片	13.8 × — × (4.3)	電手前床 面	轆轤。右回転。	①加酸化還元 ②灰白 ③細砂混る
792-10 333-10	須恵器 杯	口～底 1/2	12.2 × 6.3 × 5.1	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低温 ②灰 ③細砂混る
792-11 333-11	須恵器 椀	口～底 1/2	13.2 × 6.8 × 5.1	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で、不均一。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
792-12 333-12	須恵器 椀	口～底 完	12.6 × 6.2 × 5.7	電手前床 面	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。	①酸化・良 ②にぶ い橙 ③細砂混る
792-13 333-13	須恵器 椀	口～底 1/2	14.0 × 6.7 × 5.1	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・不良 ②にぶ い橙 ③砂混る
792-14 333-14	須恵器 椀	口～底 1/2	15.0 × 6.8 × 5.1	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②暗赤 褐 ③細砂混る
792-15 333-15	須恵器 椀	口～底 完	13.6 × 6.4 × 5.5	電手前床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②にぶ い橙 ③細砂混る
792-16 333-16	須恵器 椀	底	— × 7.0 × (2.7)	埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
792-17 333-17	灰輪陶器 椀	口～底 1/2	17.6 × 8.8 × 5.6	北東部床 面散在	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。体部内外施釉。刷毛塗り。光ヶ丘期。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
792-18 333-18	灰輪陶器 椀	体～底 1/2	— × 6.9 × (3.5)	埋土	轆轤。右回転。体部下位～底部回転削り。付高台横撫で。体部内外施釉。	①還元・良好 ②灰黄 ③緻密
792-19 333-19	須恵器 椀	下～底 1/2	— × 10.2 × (4.2)	埋土	紐造。甲打。底縁部及び破孔部で。把手付か。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
792-20 333-20	瓦 平瓦	小片	厚 1.3	埋土	桶巻。甲打。上面部目肌。下面側で。端部2段面取り。	①酸化・良好 ②にぶ い黄橙 ③砂混る

197号住居跡 (Fig. 794~796・PL. 334)

I区の中央部やや西側に位置し、55・56 I 24~26の範囲にある。わずかに竈部分を残し、住居跡の大半はJ1号溝によって消失している。このため、住居跡の形態・規模などの詳細は不明である。竈と、これを付設する東壁を基軸とする主軸方位はおよそN-97°-Eを示す。竈の右側には、円形で径約60cm・深さ約30cmのすり鉢状の貯蔵穴が設けられる。竈は東壁を楕円形に掘り込み、先端には煙り出し孔を突出させる。袖部は住居内に張り出す形態で、右袖の先端には凝灰岩の角柱加工材が残る。左袖は消失している。袖部長さ約65cm、燃焼部幅約55cm・奥行き約90cm、煙り出し孔径約20cmを測る。出土遺物は少なく、主に貯蔵穴内に検出されている。

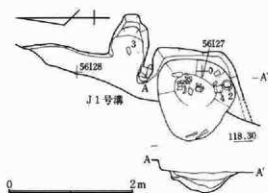


Fig.794 197号住居跡

197号住居跡貯蔵穴

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化大粒を含む。

197号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石・焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土塊を含む。
- 4 黄色土 粘性黄色土塊を含む。
- 5 焼土

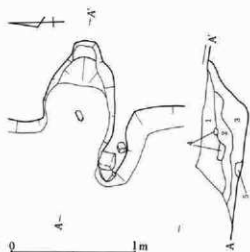


Fig.795 197号住居跡竈

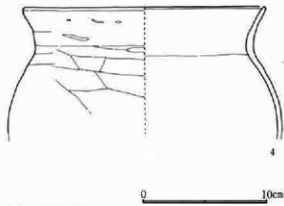
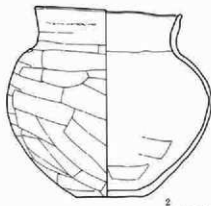
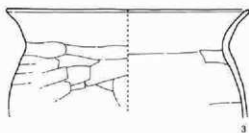
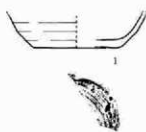


Fig.796 197号住居跡出土遺物

I 97号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調査の特徴	①焼成 ②色調
						③胎土 その他
796-1 334-1	須恵器 杯	体～底 1/2	— × 6.8 × (2.5)	貯蔵穴内 埋土	縦縞。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
796-2 334-2	土師器 壺	口～底 完	11.8 × 5.4 × 14.7	貯蔵穴内 埋土	細造。口頸部断て。体部横～斜、底部不 定方向寛削り。内面、炭化物多量附着。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
796-3 334-3	土師器 壺	口～上 1/2	19.4 × — × (8.0)	竈内埋土	細造。口頸部断て。体部横方向寛削り。 内面磨面。	①酸化・良好 ②明赤 濁 ③細砂混る
796-4 334-4	土師器 壺	口～上 1/2	19.4 × — × (10.0)	貯蔵穴内 埋土	細造。口頸部断て。体部横方向寛削り。 内面磨面。	①酸化・良好 ②明赤 濁 ③細砂混る

I 98号住居跡 (Fig. 797～802・PL. 335～337)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.80 × 3.66	N—81°—E	東壁やや南寄り	円形 58 × 52 × 9

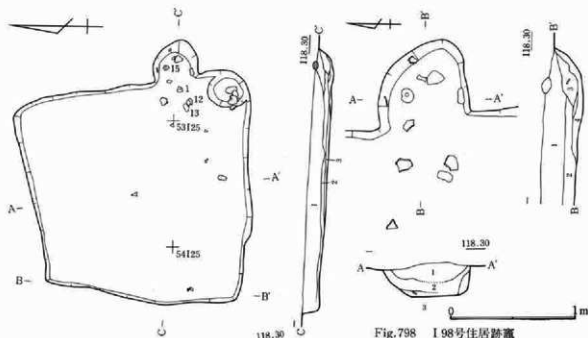


Fig. 797 I 98号住居跡

Fig. 798 I 98号住居跡竈

- I 98号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
  - 2 暗褐色土 C軽石を含み掃りあり。
  - 3 床面
  - 4 暗褐色土 炭化粒を多量に含む。I 98号住居跡竈
- I 98号住居跡竈
- 1 暗褐色土 C軽石を含む。
  - 2 暗褐色土 C軽石を含み掃りあり。
  - 3 暗褐色土 焼土粒を含む。
  - 4 灰層





Fig.800 Ⅰ98号住居跡出土遺物(2)

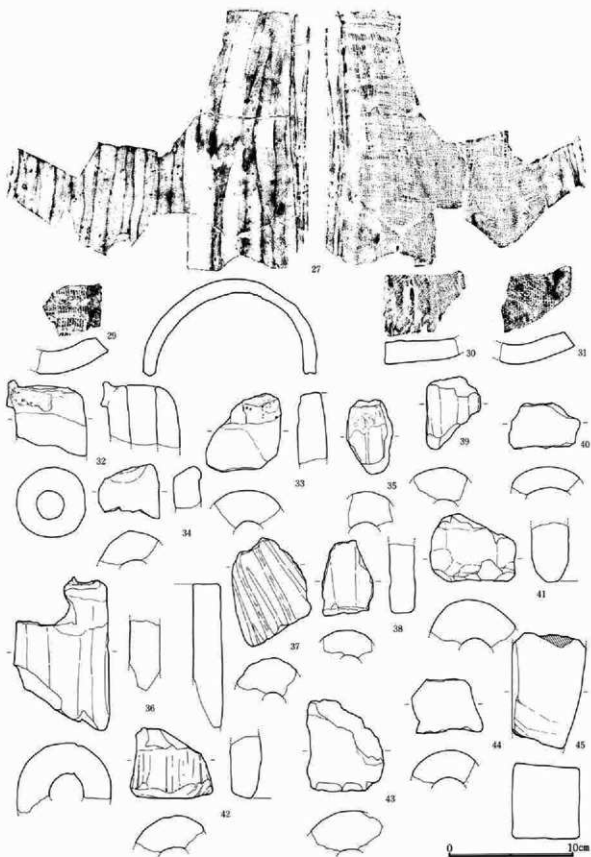


Fig.801 I 98号住居跡出土遺物( 3 )

第2節 I区の竪穴住居跡と遺物

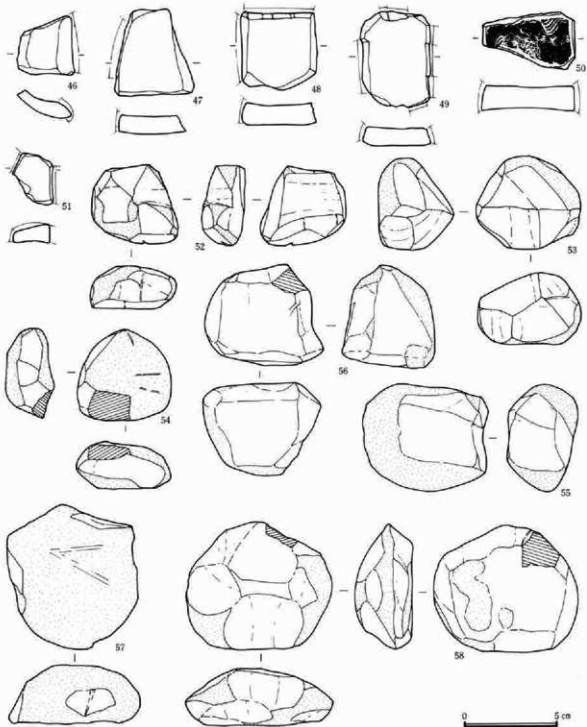


Fig.802 198号住居跡出土遺物(4)

198号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
801-1 335-1	土器 酒杯	口縁 片	11.7 × — × ( 3.2)	電手前床 面	指押。口縁部及び内面磨で。体部粗い瓦 削り。口唇部やや内傾。	①酸化・良好 ②粗 ③緻密

第5章 I区の遺構と遺物

I 98号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存址	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
799-2 335-2	土師器 杯	口~底 片	13.8 × 9.0 × (4.2)	埋土	紐造巻上。口縁部強い撫で。体~底部直削り。内面放射状陰文。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
799-3 335-3	須恵器 蓋	横~頂 片	— × 横 3.5 × (1.9)	埋土	轆轤。右回転。頂部1段回転削り。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
799-4 335-4	須恵器 蓋(転用碗)	横~端 片	13.2 × 横 4.4 × 2.5	埋土	轆轤。右回転。頂部1段回転削り。横撫で。内面中央研磨。縦転用か。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
799-5 335-5	須恵器 蓋	頂~端 小片	15.6 × — × (1.8)	埋土	轆轤。右回転。頂部1段大きく回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
799-6 335-6	須恵器 杯	口~底 片	12.0 × 6.7 × 3.6	埋土	轆轤。右回転。底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
799-7 335-7	須恵器 杯	口~底 片	14.6 × 9.0 × 4.0	埋土	轆轤。右回転。底部回転削り。器面劣化顕著。	①還元・やや低温 ②灰白 ③砂混る
799-8 335-8	須恵器 杯	口~底 片	14.2 × 7.8 × 4.3	埋土	轆轤。右回転糸切り。腰部及び底縁部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
799-9 336-9	須恵器 杯	口~底 片	14.6 × 8.0 × 3.7	埋土	轆轤。右回転糸切り。腰部及び底縁部回転削り。	①還元・軟質 ②灰 ③緻密
799-10 336-10	須恵器 碗	口~底 片	13.0 × 10.0 × 3.5	埋土	轆轤。右回転。底部回転削り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
799-11 336-11	須恵器 碗	口~底 片	12.8 × — × (3.9)	埋土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
799-12 336-12	須恵器 碗	口~底 片	13.9 × 7.5 × 4.7	貯蔵穴内	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・やや低温 ②灰 ③砂一部混る
799-13 336-13	須恵器 碗	口~底 片	15.9 × 7.7 × 5.8	電手前床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①加酸化還元・低温 ②にぶい黄橙 ③緻密
799-14 336-14	須恵器 碗	体~底 片	— × 10.9 × (4.7)	埋土	轆轤。右回転削り。付高台及び底部横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
800-15 336-15	須恵器 底	底	— × 7.0 × (2.5)	電内	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・軟質 ②灰 ③緻密
800-16 336-16	須恵器 碗	底 片	— × 7.3 × (2.3)	南中央床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
800-17 336-17	須恵器 碗	底	— × 9.6 × (2.0)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。体部意匠的打削りか。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
800-18 336-18	須恵器 高杯	脚 片	— × — × (5.0)	埋土	紐造巻上。轆轤。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
800-19 336-19	須恵器 高杯	脚 片	— × — × (5.5)	埋土	紐造巻上。轆轤。横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
800-20 336-20	須恵器 長頸壺	頸 片	— × — × (5.0)	埋土	紐造。轆轤。横撫で。平行沈線。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密



Ⅰ98号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類	部 位 残存量	計 画 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
800-21 336-21	須 恵 器 提 形 甕	口～頸 片	9.7 × — × (7.0)	埋 土	轆轤。右回転。	①還元・良好 ②暗灰 ③緻密
800-22 336-22	須 恵 器 短 頸 壺	上～下 片	— × — × (11.0)	埋 土	紐造。轆轤。横無で。体部回転瓦削り。 上位平行沈没間に列点彫文3段	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
800-23 336-23	土 師 器 壺	口～上 片	12.4 × — × (5.4)	埋 土	紐造。口頸部無で。体部瓦削り。内面瓦 無で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
800-24 336-24	土 師 器 壺	下～底 片	— × 4.8 × (2.9)	埋 土	紐造。体～底部瓦削り。内面瓦無で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
800-25 336-25	土 師 器 甕	口～上 片	22.8 × — × (6.0)	埋 土	紐造。口頸部無で。体部瓦削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
800-26 336-26	土 師 器 広 口 甕	口～上 片	15.6 × — × (5.6)	埋 土	紐造。口頸部無で。体部縦方向瓦削り。 内面瓦無で。	①酸化・良好 ②に よ い 橙 ③細砂混る
801-27 337-27	瓦 丸 瓦	中 片	長(20.7) 幅13.9 厚7.6	埋 土	叩打。上面粗い縦方向瓦削り。内面布目 痕。側端部面取り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
800-28 337-28	瓦 平 瓦	基	長(10.4) 幅10.9 厚5.4	埋 土	叩打。上面無で。内面布目痕。側端部面 取り。	①還元・良好 ②黒褐 ③細砂混る
801-29 336-29	瓦 平 瓦	小 片	厚 1.8	埋 土	叩打。上面布目痕。下面無で。側端部面 取り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
801-30 336-30	瓦 平 瓦	小 片	厚 1.5	埋 土	横巻叩打。上面布目痕。下面無で。側端 部面取り。	①還元・良 ②灰白 ③緻密
801-31 336-31	瓦 平 瓦	小 片	厚 1.5	埋 土	横巻叩打。上面布目痕。下面無で。側端 部面取り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
801-32 337-32	土 製 品 編 羽 口	先	長(5.7) 幅 5.5 厚 5.6	埋 土	棒付。無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②暗灰 ～灰白 ③細砂混る
801-33 337-33	土 製 品 編 羽 口	先 片	長(6.1)	埋 土	棒付。縦方向無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
801-34 337-34	土 製 品 編 羽 口	先 片	長(4.3)	埋 土	棒付。無で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒 ③砂混る
801-35 337-35	土 製 品 編 羽 口	中 小 片	長(5.9)	埋 土	棒付。縦方向無で。溶解物少量付着。	①二次還元 ② ③砂混る
801-36 337-36	土 製 品 編 羽 口	先～中 片	長(12.0) 幅 7.5	埋 土	棒付。浅い縦方向無で。先端部溶解物少 量付着。	①酸化・二次還元 ②灰～褐 ③砂混る
801-37 337-37	土 製 品 編 羽 口	中～基 片	長(7.7)	埋 土	棒付。斜方向無で。	①酸化・良好 ②に よ い 橙 ③砂混る
801-38 337-38	土 製 品 編 羽 口	基	長(5.8)	埋 土	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ②灰白～橙 ③緻密
801-39 337-39	土 製 品 編 羽 口	中	長(5.8)	埋 土	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ② 灰～明褐灰 ③砂混る

I 98号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 器 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 その他
801-40 337-40	土 製 品 輪 羽 口	中	長(3.6)	埋 土	棒付、煮で。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
801-41 337-41	土 製 品 輪 羽 口	基 瓦	長(5.3)	埋 土	棒付、煮で。指押板残る。	①二次還元 ②灰～灰 白 ③細砂混る
801-42 337-42	土 製 品 輪 羽 口	基 瓦	長(5.5)	埋 土	棒付、縦方向無で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
801-43 337-43	土 製 品 輪 羽 口	中～基 瓦	長(7.3)	埋 土	棒付、煮で。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
801-44 337-44	土 製 品 輪 羽 口	中 瓦	長(4.2)	埋 土	棒付、縦方向無で。	①二次還元 ②灰白 ③緻密
801-45 337-45	石 製 品 磁 石	両 端 欠 損	長(9.0) 幅 5.4 厚 5.9	埋 土	4側面使用。	角閃石安山岩
802-46 337-46	須 恵 器 転 用 磁 石		長 3.0 幅 3.2 厚 0.8	埋 土	轆轤底部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
802-47 337-47	須 恵 器 転 用 磁 石		長 4.6 幅 4.3 厚 0.9	埋 土	轆轤体部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
802-48 337-48	須 恵 器 転 用 磁 石		長 4.0 幅 4.0 厚 1.0	埋 土	轆轤体部片転用。断面2カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
802-49 337-49	須 恵 器 転 用 磁 石		長 5.1 幅 3.8 厚 1.0	埋 土	轆轤体部片転用。断面3カ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
802-50 337-50	須 恵 器 転 用 磁 石		長 4.9 幅 3.1 厚 1.2	埋 土	轆轤体部片転用。両端使用。	①還元・良好 ②オ リーブ灰 ③緻密
802-51 337-51	石 製 品 磁 石	小 片	長 2.7 幅 2.2 厚 1.0	埋 土	3カ所使用。	流紋岩(紙沢?)
802-52 337-52	石 製 品 磁 石		長 4.6 幅 4.2 厚 2.2	埋 土	円礫。ほぼ全面使用。	角閃石安山岩
802-53 337-53	石 製 品 磁 石		長 5.6 幅 4.9 厚 3.7	埋 土	円礫。10カ所使用。	角閃石安山岩
802-54 337-54	石 製 品 磁 石		長 5.0 幅 4.8 厚 2.5	埋 土	円礫。端部のみ5カ所使用。	角閃石安山岩
802-55 337-55	石 製 品 磁 石		長 6.7 幅 5.7 厚 3.7	埋 土	円礫。端部6カ所使用。	角閃石安山岩
802-56 337-56	石 製 品 磁 石		長 6.4 幅 5.3 厚 4.9	埋 土	円礫。9カ所使用。	角閃石安山岩
802-57 337-57	石 製 品 磁 石		長 7.7 幅 6.8 厚 3.1	埋 土	扁平円礫。端部使用。	角閃石安山岩
802-58 337-58	石 製 品 磁 石		長 7.8 幅 6.7 厚 3.0	埋 土	扁平円礫。ほぼ全面使用。	角閃石安山岩

## I99号住居跡 (Fig. 803~805・PL. 338, 339)

I区の中央部やや東寄りに位置し、44・45 I 32・33の範囲にある。周辺の堆積土の複雑さから重複の関係は不明瞭な部分もあるが、前出の7号住居跡とさらには北側で4号鍛冶工房跡とそれぞれ重複している。新旧関係は7号住居跡より新しい時期の所産である。4号鍛冶工房跡との関係は不明である。竈は東壁に付設されていると考えられる。袖部はわずかに住居内に張り出し、燃烧部は先細りに掘り込まれる。煙道部の作り出しはなされない。竈内には天井材として用いられた凝灰岩の加工材が落ち込んでいる。袖部長さ約40cm、燃烧部幅約45cm・奥行き約80cmを測る。出土遺物は竈周辺に多く検出されている。

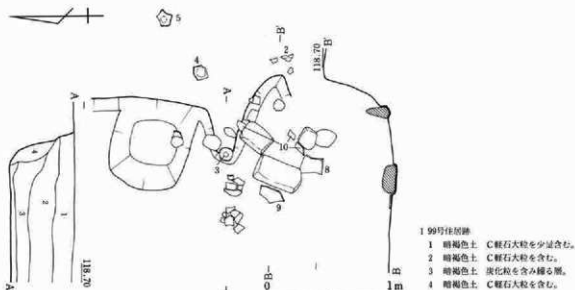


Fig.803 I99号住居跡竈

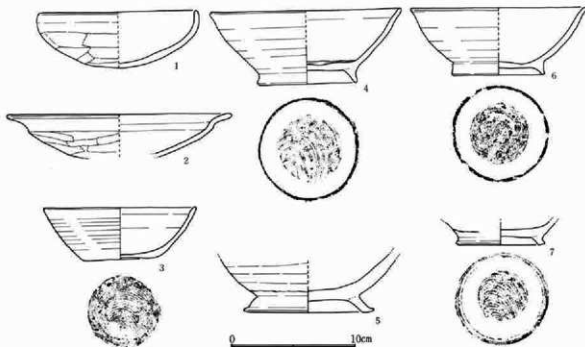


Fig.804 I99号住居跡出土遺物(1)

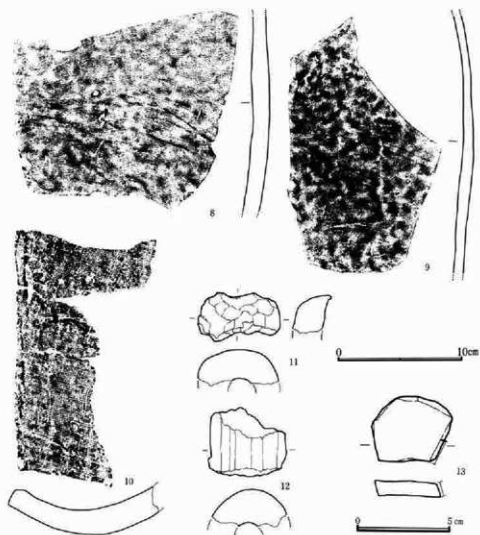


Fig.805 I 99号住居跡出土遺物(2)

I 99号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
804-1 338-1	土師器 杯	口~底 片	12.8 × — × 4.5	埋土	指押。口縁部及び内面撫で。体底部不定方向削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ③緻密
804-2 338-2	土師器 杯	口~底 小片	18.0 × — × (3.5)	東部遺構 外	指押。口縁部及び内面強い撫で。体底部不定方向削り。	①酸化・良好 ②に よい橙 ④細砂混る
804-3 338-3	須恵器 杯	口~底 完	12.2 × 5.9 × 4.2	壺北袖付 着	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元・良好 ②灰黄 ③細砂混る
804-4 338-4	須恵器 杯	口~底 片	15.3 × 8.0 × 5.9	東部遺構 外	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②黄灰 ③緻密
804-5 338-5	須恵器 杯	体~底 片	— × 10.5 × (4.6)	東部遺構 外	轆轤。右回転糸切り。体部回転削り。付高台及び底部横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

I 99号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②土 ③胎土 ④色調 ⑤その他
804-6 338-6	須恵器 椀	口<底 片	14.0 × 7.4 × 5.4	北東部土 坑埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。 内面吸炭処理。	①還元・良 ②灰白 ③細砂混る
804-7 338-7	須恵器 椀	底	— × 7.1 × (1.9)	埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
805-8 338-8	須恵器 壺	体 小片		電束袖	紐造。印打。内外灰被り。転用不詳。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
805-9 339-9	須恵器 壺	体 小片		電手前床 面	紐造。印打。外面瓦撫で。転用不詳。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
805-10 339-10	瓦 平瓦	小片	厚 2.1	竈内敷在	桶巻。印打。上面布目肌。下面撫で。側 端部2段面取り。	①酸化・良好 ②明焼 ③砂混る
805-11 339-11	土製品 鬮羽口	先 片	長(3.8)	埋土	棒付。縦方向撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰黄 ③細砂混る
805-12 339-12	土製品 鬮羽口	中 片	長(5.4)	埋土	棒付。縦方向撫で。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
805-13 339-13	須恵器 転用磁石		長 3.5 幅 4.3 厚 0.8	埋土	杯類蓋部片転用。断面1カ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る

I 101号住居跡 (Fig. 806~808・PL. 339~341)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	座 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	4.50 × 3.55	N— 88° — E	東壁やや南寄り	

I区の北側に位置し、48・49 I 42・43の範囲にある。住居跡の中央部で西端は南北走する幅約90cmの近世土坑によって分断、あるいは消失している。遺存状態は悪く壁高約10cmを測る。床面の踏み締まりは比較的良好である。住居内には数個の穴が検出されているが柱穴となるような配列は見られない。その中で南壁に沿うように東側と西側に設けられた穴は、ともに方形を呈する。竈は東壁に付設されるが遺存状況は極めて悪く、火床にあたる焼土面を辛うじて検出したに止どまった。形態・規模など詳細は不明である。出土遺物は住居跡中央部の床面と、南壁の西寄りに穿たれた穴の中から主に検出された。

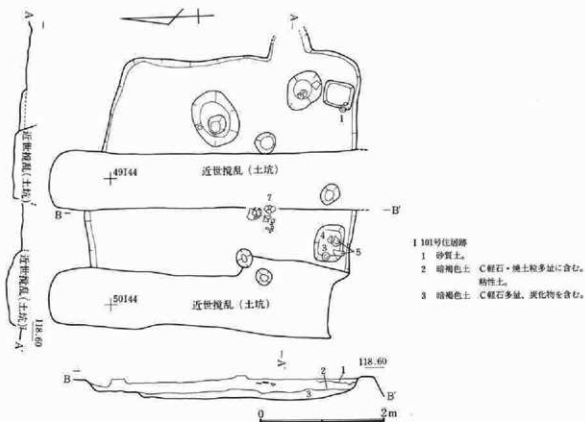


Fig.806 I 101号住居跡

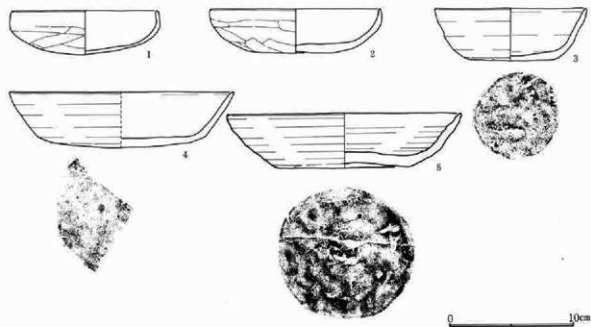


Fig.807 I 101号住居跡出土遺物(1)

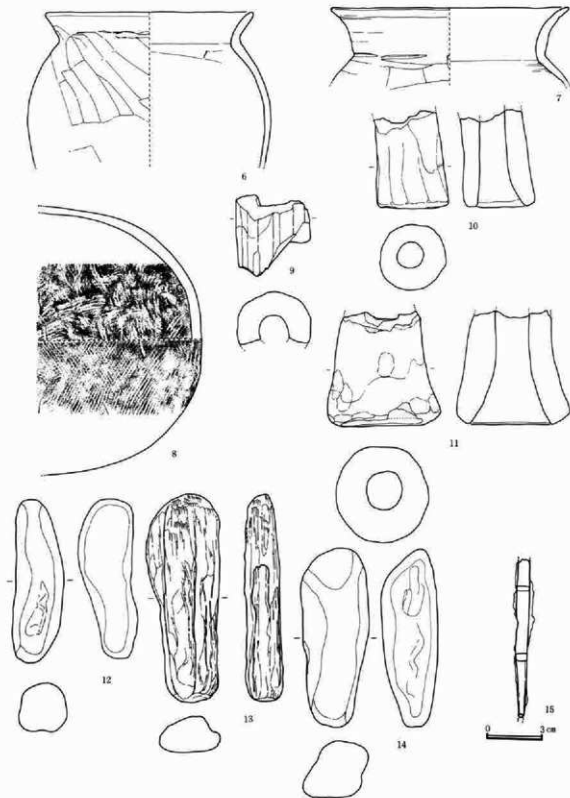


Fig.808 I 101号住居跡出土遺物(2)

第5章 I区の遺構と遺物

I 101号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
807-1 340-1	須恵器 杯	口～底 %	11.8 × — × 3.5	南東部土 坑縁床面	指押、口縁部及び内面無で。底部外向内 方向寛削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
807-2 340-2	土師器 形土坑内	口～底 %	13.7 × — × 3.5	南東部掘 形土坑内	指押、口縁部及び内面無で。体部横、底 部不定方向削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
807-3 340-3	須恵器 杯	口～底 完	12.2 × 7.0 × 4.2	南西部土 坑内	轆轤。右回転。底部手持削り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
807-4 340-4	須恵器 盤	口～底 %	18.0 × — × 4.4	南西部土 坑内	轆轤。右回転。底部手持削り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
807-5 340-5	須恵器 盤	口～底 完	18.8 × 10.5 × 4.3	南西部土 坑内	轆轤。右回転削り。底部手持削り。 見込部磨減。	①還元・良好 ②灰 ③細密
808-6 341-6	土師器 形土坑内	口～中 %	16.6 × — × (12.7)	南東部掘 形土坑内	細造。口頸部無で。体部斜方向削り。 内面寛削り。	①酸化・良好 ②に よ赤褐 ③細砂混る
808-7 341-7	土師器 壺	口～上 %	19.0 × — × (6.5)	南西部掘 土	細造。口頸部無で。体部斜方向削り。 内面寛削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
808-8 341-8	須恵器 横瓶	体 %	— × — × (21.2)	南西部掘 形埋土	細造。叩打。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
808-9 341-9	土製品 罎羽口	中 %	長(6.4) 幅5.9	南西部近 世土坑内	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
808-10 341-10	土製品 罎羽口	中～基	長(7.7) 幅5.3 厚5.2	南西部床 面	棒付。縦方向無で。先端部寄り、溶解物 少量付着。基部外反せず。細身型。	①二次還元 ②灰～褐 ③細砂混る
808-11 341-11	土製品 罎羽口	中～基	長(9.1) 幅7.4 厚7.6	西尖部掘 形埋土	棒付、無で。指押痕顯著。	①酸化・二次還元 ② 灰白～黄橙 ③砂混る
808-12 341-12	石	完	長13.0 幅4.3 厚4.7 317.8#	北東部掘 形埋土	棒状円礫。	輝石安山岩(粗粒)
808-13 241-13	石	完	長16.5 幅5.9 厚3.0 429.5#	南西部掘 形埋土	棒状円礫。	霏母石英片岩
808-14 241-14	石	完	長14.2 幅5.5 厚4.5 474.3#	南西部掘 形埋土	不定形長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
808-15 341-15	鉄製品 両端欠損		長(8.3)幅7 厚0.2～0.3	埋土	先端部厚く、片端はやや偏平。	

I 102号住居跡 (Fig. 809～812・PL. 342, 343)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	電位置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.10 × 2.94	N-98.5°-E	東壁ほぼ中央	

I区の北側に位置し、45～47 I 40・41の範囲にある。住居跡の南側に79号住居跡と重複しており、新旧関



係はこれより古い時期の所産である。平面形態は隅丸のほぼ正方形を呈するが、北壁がやや脹らむ形となる。遺存の良好な北・南壁で壁高約40cmを測る。床面は平坦をなし踏み締まりは良好だが、西側はやや軟弱である。貯蔵穴等の諸施設は検出されない。竈は東壁に付設されるが通例のものとは異なり、東壁の中央にある。方形に掘り込まれた燃焼部から直に立ち上がり短い煙道部へと続く。袖部の構築材は見られなかった。竈の前方部はすり鉢状に窪み、焚口部と考えられる。燃焼部幅約47cm・奥行きは約30cmであるが、焚口部と考えられる窪みを含めれば約65cmとなる。煙道部長さ約25cmを測る。出土遺物は住居跡の北半と竈の周辺に検出されている。

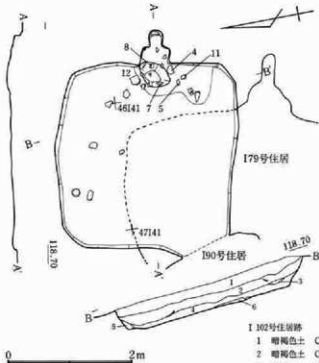


Fig.809 I 102号住居跡

- I 102号住居跡
- 1 暗褐色土 C軽石小粒を含む。
  - 2 暗褐色土 C軽石大粒を含む。
  - 3 焼土 焼土粒を含む。
  - 4 暗褐色土 C軽石を含み締る粘性土。
  - 5 暗褐色土 堅く締る砂質土。
  - 6 灰層

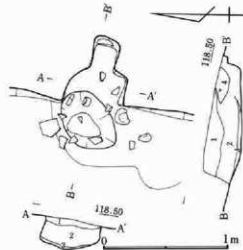


Fig.810 I 102号住居跡竈

- I 102号住居跡竈

- 1 暗褐色土 C軽石大粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石を含む。
- 3 灰層
- 4 焼土 焼土塊を含む。

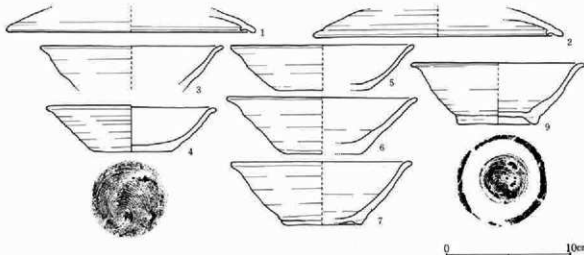


Fig.811 I 102号住居跡出土遺物(1)

第5章 I区の遺構と遺物

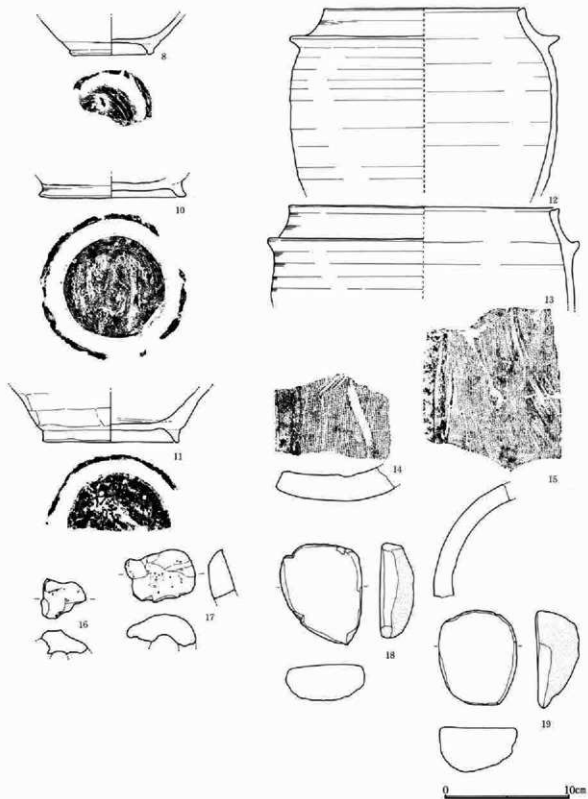


Fig.812 I 102号住居跡出土遺物(2)

I 102号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
811-1 343-1	須恵器 蓋	端	20.0 × 横一 × (1.8)	南東部東壁下掘形	轆轤。右回転。頂部回転彫り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
811-2 343-2	須恵器 蓋	端 反	20.0 × 横一 × (2.1)	南東部南壁下掘形	轆轤。右回転。頂部回転彫り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
811-3 343-3	須恵器 杯	口～体 反	14.6 × 一 × (3.3)	埋土	轆轤。右回転。	①酸化・良 ②によい 黄褐 ③細砂混る
811-4 343-4	須恵器 杯	口～底	13.6 × 6.3 × 3.7	電手前床面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
811-5 343-5	須恵器 杯	口～底 反	14.7 × 7.6 × 3.6	電手前埋土散在	轆轤。右回転。体部一部貫通で。	①加酸化還元 ②灰黄 褐 ③細砂混る
811-6 343-6	須恵器 杯	口～底 反	15.3 × 6.0 × 4.5	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・低溫 ②灰白 ③細砂混る
811-7 343-7	須恵器 椀	口～底 反	14.5 × 6.2 × 5.0	電手前埋土	轆轤。右回転。付高台及び底部横撫で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
812-8 343-8	須恵器 椀	体～底 反	一 × 6.8 × (2.9)	電内	轆轤。右回転糸切り。付高台横撫で。	①酸化・良好 ②明黄 褐 ③細砂混る
811-9 343-9	須恵器 椀	口～底 反	13.9 × 6.6 × 4.9	北東部埋土	轆轤。右回転糸切り。付高台撫で。内外 吸灰。	①酸化・良好 ②褐灰 ③細砂混る
812-10 343-10	須恵器 甕	底	一 × 11.8 × (1.4)	北西部埋土	底部回転彫り。付高台横撫で。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
812-11 343-11	須恵器 壺	下～底 反	一 × 10.9 × (4.3)	南東部床面	紐造。轆轤。右回転糸切り。体部下位及 び底部彫り。付高台撫で。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③細砂混る
812-12 343-12	羽 釜	口～中	16.0 × 一 × (15.0)	電手前埋土	紐造。横撫で。	①還元・低溫 ②灰 ③細砂混る
812-13 343-13	羽 釜	口～上	21.6 × 一 × (7.6)	埋土	紐造。横撫で。	①酸化・良好 ②浅黄 橙 ③細砂混る
812-14 343-14	瓦 平瓦	小片	厚 2.0	埋土	桶巻。甲打。上面布目状。下面撫で。端 部3段面取り。	①酸化・良好 ②に よい黄褐 ③砂混る
812-15 343-15	瓦 丸瓦	小片	厚 1.3	埋土	甲打。上面撫で。下面布目状。端部削取 り。無調整。	①還元・良好 ②暗灰 ③細砂混る
812-16 343-16	土製品 籬羽口	先	長(3.1)	埋土	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒灰 ③細砂混る
812-17 343-17	土製品 籬羽口	先 塚	長(3.5)	電下	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
812-18 343-18	石製品 砥		長 8.0 幅 6.5 厚 2.8	埋土	扁平円礫。1面及び別端部3ヵ所使用。	角閃石安山岩
812-19 343-19	石製品 砥		長 7.5 幅 6.2 厚 3.5	埋土	扁平円礫。1面及び端部2ヵ所使用。	角閃石安山岩

I 103号住居跡 (Fig. 813~818・PL. 344~346)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主 軸	窟 位 置	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	6.98×5.57 張り出し部 3.89×1.54	0°N-98.5°-E	東部ほぼ中央	

I 区の中央部に位置し、52~55 I 27~30の範囲にある。93号・96号住居跡と重複しているが、新旧関係は93号より新しく96号より古い時期の所産である。96号住居跡とその範囲を同じくするため調査時にはその規模や形状を認識することができなかった。遺物の分布や当該期の住居形態の例から、大型で、西壁の一部が突出する張り出し部を有するものと判明した。壁高は約40cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床面は96号住居跡よりやや高いため重複部分は明らかでないが、遺存する範囲では平坦で踏み締まりも良好である。貯蔵穴・柱穴などは検出されていない。張り出し部は西壁の北側にあり、幅約3.6mで約1m張り出している。竈は東壁に付設され半円形に掘り込まれた燃焼部から長い煙道部が延びて煙り出し孔に至る。燃焼部の掘り込みは小さいが、これは96号住居跡の構築の際に竈の前半部分が破壊されたためと考えられる。燃焼部幅約50cm・奥行き約25cm、煙道部長さ約50cm、煙り出し孔径約20cmを測る。出土遺物は主に張り出し部に集中して検出され、土器類の他、羽口・砥石・鉄器(鉄)・銅網など多種にわたる。

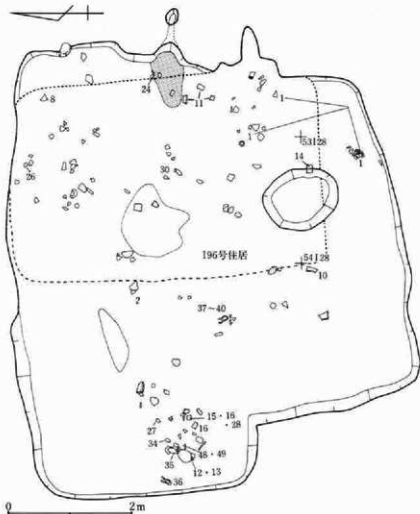
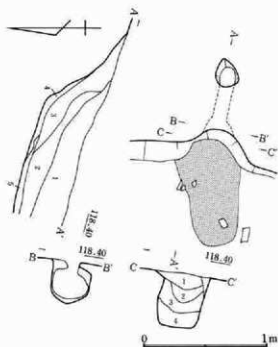


Fig.813 I 103号住居跡



I 103号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石を多量、焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 C軽石少量、炭化粒・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 やや粘性あり。
- 5 焼土 焼土粒・灰を含む。

Fig. 814 I 103号住居跡電

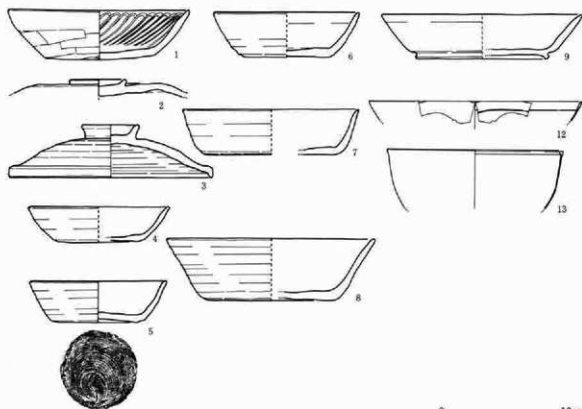


Fig.815 I 103号住居跡出土遺物(1)

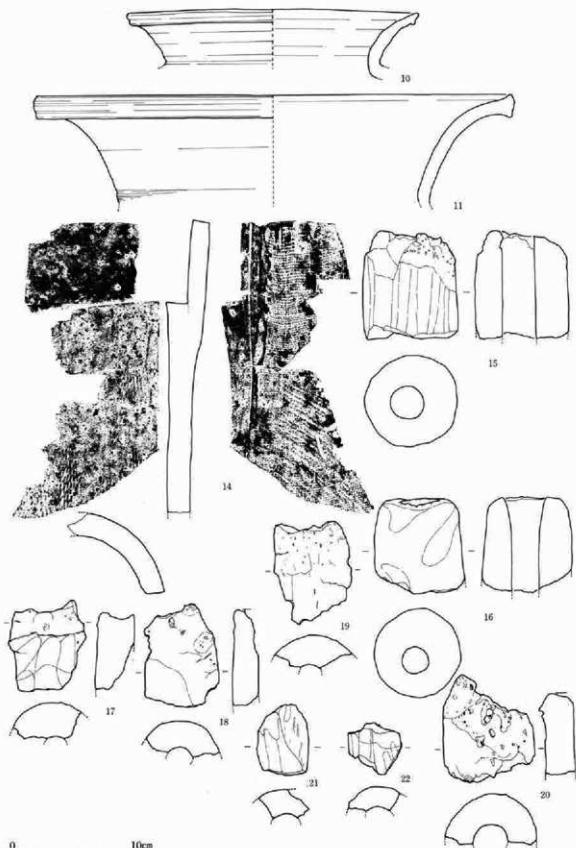


Fig.816 I 103号住居跡出土遺物(2)

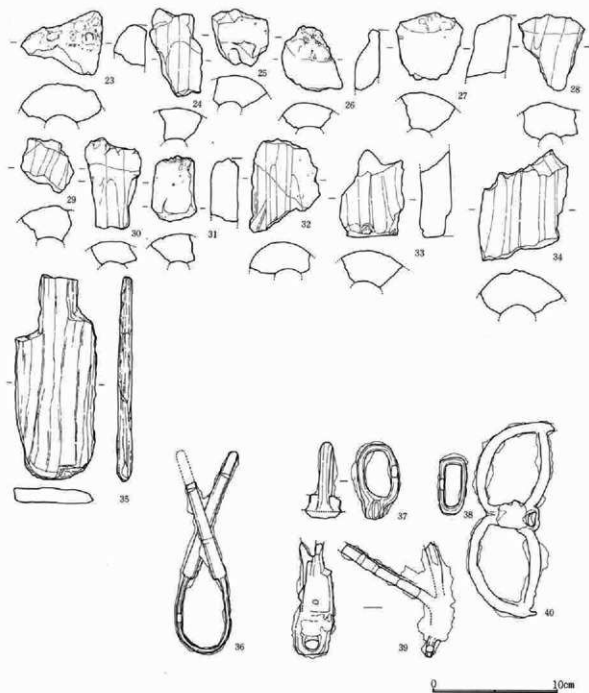


Fig.817 I 103号住居跡出土遺物(3)

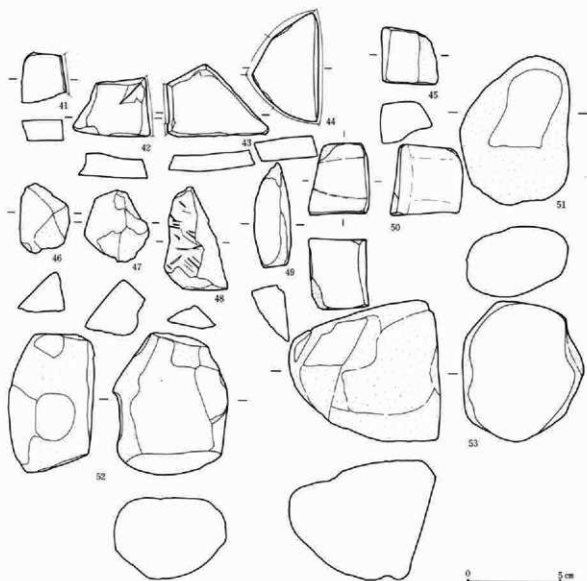


Fig. 818 I 103号住居跡出土遺物(4)

I 103号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
815-1 344-1	土師器 杯	口~底 完	14.5 × 8.8 × 4.0	張出部床 面	紐造巻上ホ。口縁部撫で。体部横、底部 不定方向磨削り。内面長螺旋状、見込部 螺旋状暗文。	①酸化・良好 ②にぶ い槽 ③細砂混る
815-2 344-2	須恵器 蓋	胴~頂 1/4	一 × 胴 4.6 × (1.3)	中央部床 面	縦軸。右回転。頂部2段回転磨削り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
815-3 344-3	須恵器 蓋	胴~端 小片	16.3 × 胴 4.6 × 4.2	埋土	縦軸。右回転。頂部3段回転磨削り。胴 横撫で。端部及び内面吸炭。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
815-4 344-4	須恵器 杯	口~底 1/4	11.3 × 6.4 × 2.9	埋土	縦軸。右回転直切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
815-5 344-5	須恵器 杯	口~底 1/4	11.0 × 6.3 × 3.3	埋土	縦軸。右回転直切り。無調整。	①還元・良 ②灰 ③緻密



I103号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
815-6 344-6	須恵器 杯	口～底 片	11.8 × 7.0 × 3.6	埋土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
815-7 345-7	須恵器 杯	口～底 片	14.2 × 10.6 × 3.6	埋土	轆轤。右回転。底部回転距離有り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
815-8 345-8	須恵器 杯	口～底 小片	16.8 × 10.2 × 5.0	北東部埋 土	轆轤。右回転。底部手持見無で。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
815-9 345-9	須恵器 椀	口～底 小片	16.0 × 10.6 × 3.6	埋土	轆轤。右回転。底部回転距離有り。付高台 横溝で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
816-10 345-10	須恵器 壺	口～頸 片	23.4 × — × (5.5)	南西部床 面	紐造。轆轤。横溝で。口縁部歪む	①還元・良好 ②暗赤 灰 ③細砂混る
816-11 345-11	須恵器 壺	口～頸 片	38.1 × — × (8.5)	埋土	紐造。轆轤。横溝で。	①還元・良 ②暗青灰 ③砂混る
815-12 345-12	銅器 小片	小片	17 × — × (1.5)	西 部 埋 土	器内極薄。口縁端部丸くやや肥厚。内面 口縁下に凹溝。	
815-13 345-13	銅器 小片	小片	14 × — × (4.5)	西 部 埋 土	器内極薄。口縁端部角状に肥厚	
816-14 345-14	瓦 丸	小片	長(23.5)	南東部床 面	叩打。上面縄目叩打。玉縁無で。下面布 目痕。端部歪取り。	①還元・良好 ②灰白 ③砂混る
816-15 345-15	土製品 罎羽口	先～中	長(8.3) 幅7.4 厚7.3	張出部床 面	棒付。縦方向無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰～灰 白 ③細砂混る
816-16 345-16	土製品 罎羽口	先～中	長(7.5) 幅6.9 厚7.1	張出部 床 面	棒付。無で。使用短期間で欠損廃棄の。	①酸化・二次還元 ② 淡黄 ③細砂混る
816-17 345-17	土製品 罎羽口	先～中 片	長(7.0)	埋土	棒付。縦方向無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰～褐 ③細砂混る
816-18 346-18	土製品 罎羽口	先～中 片	長(8.3)	埋土	棒付。無で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
816-19 346-19	土製品 罎羽口	先～中	長(8.0)	埋土	棒付。無で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
816-20 346-20	土製品 罎羽口	先 片	長(8.6)	埋土	棒付。無で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰白 ③砂混る
816-21 346-21	土製品 罎羽口	蓋	長(5.6)	埋土	棒付。縦方向無で。	①酸化・良好 ②淡黄 橙 ③砂混る
716-22 346-22	土製品 罎羽口	中	長(4.1)	埋土	棒付。縦方向無で。	①酸化・良好 ②淡黄 ～明黄褐 ③細砂混る
817-23 346-23	土製品 罎羽口	先 片	長(5.1)	埋土	棒付。無で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
817-24 346-24	土製品 罎羽口	中	長(6.9)	竈手前埋 土	棒付。縦方向無で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～橙 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 103号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
817-25 346-25	土製品 彌羽口	中	長(3.8)	埋土	棒付、撫で。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
817-26 346-26	土製品 彌羽口	先	長(5.1)	北東部北 壁埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
817-27 346-27	土製品 彌羽口	先	長(5.3)	張出部床 面	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
817-28 346-28	土製品 彌羽口	中 片	長(6.0)	張出部床 面	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③細砂混る
817-29 346-29	土製品 彌羽口	中	長(3.5)	埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
817-30 346-30	土製品 彌羽口	中	長(7.2)	中央部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～橙 ③細砂混る
817-31 346-31	土製品 彌羽口	先	長(5.3)	埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰～褐 ③砂混る
817-32 346-32	土製品 彌羽口	中 片	長(7.2)	埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～橙 ③細砂混る
817-33 346-33	土製品 彌羽口	基	長(6.9)	埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰～淡黄 ③細砂混る
817-34 346-34	土製品 彌羽口	中 片	長(7.8)	張出部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ② 褐灰～橙 ③砂混る
817-35 346-35	石		長(16.2) 幅6.6 厚1.3 219.3g	張出部埋 土	鹿状長円礫。1端及び周縁を欠く。	雲母石英片岩
817-36 346-36	鉄製品 鉄	片端 刃欠損	長16.1 刃部長10.5 幅0.9	西壁張出 部埋土	刃部交差し、刃は内側に付く。基部は刃 部と直にぬじれる。	
817-37 346-37	鉄製品 環状		長(6) 環径4.5×3.7	中央部埋 土	環状の一端は欠損し、他と接続する。接 続部は空洞。	
817-38 346-38	鉄製品 環状		径4.5×2.1	中央部埋 土		
817-39 346-39	鉄製品		長(9)	中央部 埋土	環状部からY字に棒状部が延びる	
817-40 346-40	鉄製品 環状		長10.5 環径6.9×6.2	中央部 埋土	環状の環部両端及び中央部は欠損	
818-41 346-41	須恵器 転用磁石		長 2.2 幅 2.4 厚 1.1	埋土	壺腹部片転用。断面1ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
818-42 346-42	須恵器 転用磁石		長 3.1 幅 4.1 厚 1.2	埋土	壺体部片転用。断面1ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
818-43 346-43	須恵器 転用磁石		長 5.4 幅 3.8 厚 0.9	埋土	蓋頂部片転用。断面2ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る

I 103号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
818-44 346-44	須恵器 転用磁石		長 5.8 幅 3.6 厚 1.1	埋 土	裏体部片転用。断面5ヵ所使用。	①還元・良好 ②灰白 ③磁粉混る
818-45 346-45	石製品 磁石		長 2.9 幅 3.1 厚 2.2	埋 土	小円蹄。4面使用。	角閃石安山岩
818-46 346-46	石製品 磁石		長 3.7 幅 2.7 厚 2.0	埋 土	小蹄。1面使用。	角閃石安山岩
818-47 346-47	石製品 磁石	小片	長 3.8 幅 3.5 厚 2.9	埋 土	小蹄。3面使用。	流紋岩（磁沢?）
818-48 346-48	石製品 磁石	小片	長 5.4 幅 3.1 厚 1.1	張出部床 面	扁平。刃当痕多数。	流紋岩（磁沢?）
818-49 346-49	石製品 磁石	小片	長 5.4 幅 3.1 厚 1.8	張出部床 面	割片。2面使用。	流紋岩（磁沢?）
818-50 346-50	石製品 磁石		長 3.7 幅 3.1 厚 3.8	南西部埋 土	円蹄。立方体状に各面使用。	角閃石安山岩
818-51 346-51	石製品 磁石		長 7.9 幅 5.8 厚 3.5	埋 土	扁平円蹄。1ヵ所使用。	角閃石安山岩
818-52 346-52	石製品 磁石		長 7.5 幅 6.1 厚 4.3	埋 土	円蹄。8ヵ所使用。	角閃石安山岩
818-53 346-53	石製品 磁石		長 8.1 幅 7.4 厚 6.2	埋 土	円蹄。3ヵ所使用。	角閃石安山岩

I 105号住居跡 (Fig. 819~823・PL. 347, 348)

平面形	規模 (長軸×短軸) m	主 軸	電 位 置	貯蔵穴の形態・規模 (長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.51 × 3.41	N-68.5'-E	東壁やや南寄り	不整形円形 85 × 60 × 20

I区の中央部西端に位置し、61~63I 31~33の範囲にある。住居跡の東側で111号住居跡と重複しておりこれよりも新しい時期の所産である。平面形はいわゆる張り出し部をもつ方形であるが、遺構自体が小規模で住居の主体と張り出し部の区別はつけにくい形である。北壁と西壁間で屈曲してL字を呈する。壁高は約35cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面は中央部がやや低くなるが踏み締まりは良好である。南東隅には不整形な土坑が設けられるが貯蔵穴と考えられる。東壁から北壁の一部にかけて壁下の溝が回り幅約10cm・深さ約5cmを測る。張り出し部に関しては、住居跡全体から見ると北壁の凸部を充てることが妥当と考えられる。その理由は、東・北壁下のみに溝が巡ること、壁線が南・西壁は不安定で丸みを帯びるのに対して、非常に直線的であることなどからである。すなわち、幅2mで約1m突出する張り出し部である。甕は東壁に付設されるが袖部もなく、燃焼部の焼土化も不完全である。煙道部は細長く約1mを測る。出土遺物は散在して検出され羽口の出土が多い。

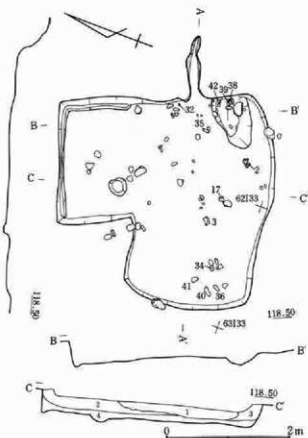


Fig.819 I 105号住居跡

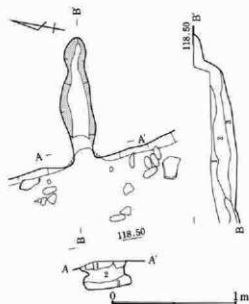


Fig.820 I 105号住居跡電

I 105号住居跡電

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 灰を含む。
- 3 焼土塊
- 4 焼土

I 105号住居跡

- 1 黒褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む赤色土。
- 3 暗褐色土 C軽石。
- 4 黒褐色土

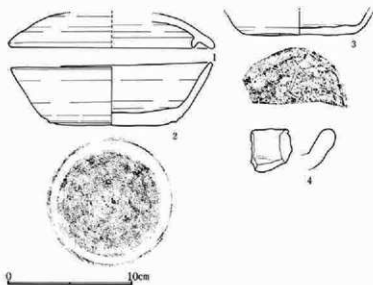


Fig.821 I 105号住居跡出土遺物(1)

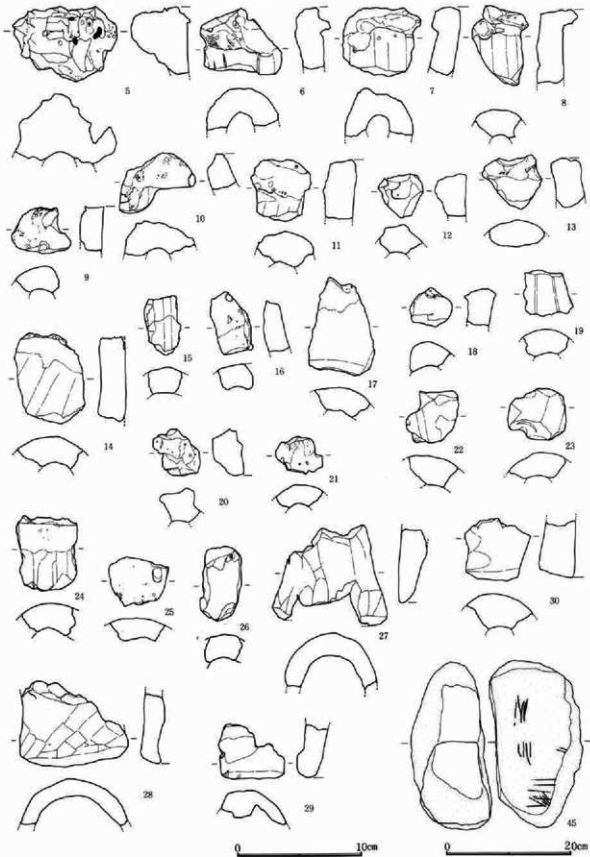


Fig.822 Ⅰ105号住居跡出土遺物(2)

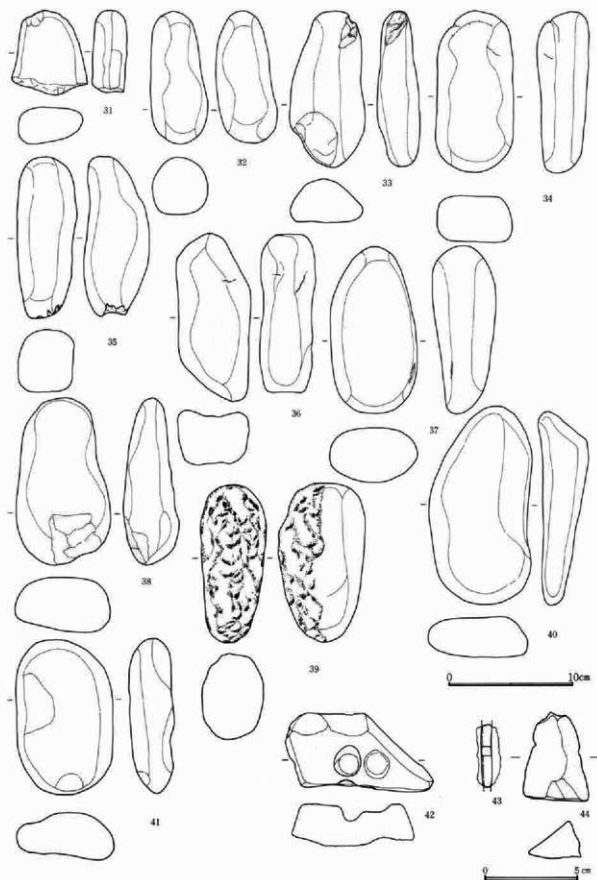


Fig. 823 I 105号住居跡出土遺物(3)

I105号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口徑 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色 調 ③面 土 その他
821-1 347-1	須 恵 蓋	頂~端 片	16.5 × 柄 - × (2.7)	西部遺構 外	轆轤。右回転。頂部回転痕有り。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
821-2 347-2	須 恵 器	口~底 片	16.1 × 10.2 × 5.0	南東部床 面	轆轤。右回転。底部及び高台、回転痕有 り。	①還元・良好 ②灰 ③砂混る
821-3 347-3	須 恵 杯	底 片	- × 9.0 × (2.0)	南東部床 面	轆轤。右回転。底部忠持痕有り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
821-4 347-4	土 製 品 埴 埴	口~体 片	- × - × (3.0)	埋 土	手捏ね。胴部解物付着。	①酸化・二次還元 ②褐灰 ③砂混る
822-5 347-5	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(5.3)	埋 土	棒付。撫で。溶解物多量に付着。	①二次還元 ②黒灰 ③砂混る
822-6 347-6	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(5.6)	甕 内	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
822-7 347-7	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(5.4)	甕 内	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
822-8 347-8	土 製 品 鬮 羽 口	先 小 片	長(6.4)	埋 土	棒付。縦方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 灰~洗灰 ③細砂混る
822-9 347-9	土 製 品 鬮 羽 口	先 小 片	長(3.5)	甕 内	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒灰 ③砂混る
822-10 347-10	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(4.8)	埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
822-11 347-11	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(4.9)	埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②褐灰 ③砂混る
822-12 347-12	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(4.4)	埋 土	棒付。撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
822-13 347-13	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(3.4)	埋 土	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒灰 ③砂混る
822-14 347-14	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(6.7)	埋 土	棒付。斜方向撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・二次還元 ② 暗灰~黄橙 ③砂質土
822-15 347-15	土 製 品 鬮 羽 口	中 片	長(4.7)	甕 内	棒付。縦方向撫で。	①酸化・二次還元 ②灰~橙 ③細砂混る
822-16 347-16	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(4.9)	甕 内	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
822-17 347-17	土 製 品 鬮 羽 口	中 片	長(7.8)	南東部床 面	棒付。撫で。溶解物少量付着。	①酸化・二次還元 ② 青灰~黄橙 ③砂質土
822-18 348-18	土 製 品 鬮 羽 口	先 片	長(3.1)	埋 土	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
822-19 348-19	土 製 品 鬮 羽 口	中 片	長(3.7)	甕 内	棒付。縦方向撫で。全体に灰成り。	①二次還元 ②黒灰 ③細砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 105号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ③胎土	②色調 ④その他
822-20 348-20	土製品 陶羽口	先	長(3.7)	竈内	棒付、撫で。溶解物付着。		①二次還元 ②にぶい ③細砂混る
822-21 308-21	土製品 陶羽口	先	長(3.0)	埋土	棒付、撫で。溶解物付着。		①二次還元 ②にぶい ③細砂混る
822-22 348-22	土製品 陶羽口	中	長(4.0)	竈内	棒付、縦方向撫で。溶解物付着。		①二次還元 ②灰白 ③砂質土
822-23 348-23	土製品 陶羽口	中	長(4.1)	埋土	棒付、撫で。		①酸化・良好 ②にぶい ③砂質土
822-24 348-24	土製品 陶羽口	中	長(5.8)	埋土	棒付、縦方向撫で。溶解物付着。		①二次還元 ②灰黄 ③砂混る
822-25 348-25	土製品 陶羽口	先	長(3.9)	埋土	棒付、撫で。溶解物付着。		①二次還元 ②灰黄 ③細砂混る
822-26 348-26	土製品 陶羽口	先	長(5.8)	南尖部床面	棒付、撫で。溶解物付着。		①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂質土
822-27 348-27	土製品 陶羽口	基 片	長(8.1)	埋土	棒付、撫で。広く外反する。指押痕明瞭。		①酸化・良好 ②赤褐 ～浅黄橙 ③砂混る
822-28 348-28	土製品 陶羽口	基 片	長(7.0)	埋土	棒付、撫で。斜方向指押痕明瞭。		①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
822-29 348-29	土製品 陶羽口	基	長(4.4)	竈内	棒付、撫で。		①二次還元 ②明褐色 ③細砂混る
822-30 348-30	土製品 陶羽口	基	長(4.9)	埋土	棒付、撫で。指押痕残る。		①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
823-31 348-31	石	片	長(6.7) 幅 6.1 厚 2.9 165.7g	竈北脇床面	扁平長円礫。片を欠く。		輝石安山岩(粗粒)
823-32 348-32	石	完	長10.5 幅 4.6 厚 4.8 324.7g	竈北脇床面	長円礫。		輝石安山岩(粗粒)
823-33 348-33	石	完	長12.5 幅 6.2 厚 3.4 317.6g	南西部埋土	三角長円礫。		輝石安山岩(粗粒)
823-34 348-34	石	完	長12.9 幅 6.2 厚 4.3 519.9g	南西部埋土	長円礫。		溶結凝灰岩
823-35 348-35	石	完	長12.8 幅 4.8 厚 5.2 486.6g	竈手前床面	長円礫。		輝石安山岩(粗粒)
823-36 348-36	石	完	長13.4 幅 6.0 厚 4.4 477.6g	南西部床面	長円礫。		ひん岩
823-37 348-37	石	完	長13.2 幅 6.9 厚 5.1 672.8g	貯蔵穴内	扁平長円礫。		輝石安山岩(粗粒)
823-38 348-38	石	完	長13.3 幅 7.6 厚 4.5 593.1g	貯蔵穴内	扁平長円礫。1端に打撃痕あり。		閃緑岩



## I105号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径 × 底径 × 器高					
823-39 348-39	石	完	長12.5 幅 5.3 厚 7.0 582.4g	貯蔵穴内	長円礫。		ひん岩	
823-40 348-40	石	完	長15.7 幅 8.3 厚 4.1 642.3g	南西部床 面	扁平長円礫。		輝石安山岩 (粗粒)	
823-41 348-41	石	完	長12.4 幅 7.8 厚 3.7 552.8g	南西部床 面	扁平長円礫。		輝石安山岩 (粗粒)	
823-42 348-42	石製品 砥石		長11.8 幅 6.0 厚 3.2	貯蔵穴内	側面を使用。		砂岩	
823-43 348-43	鉄製品		長(3.2) 厚0.5	埋土	角釘?			
823-44 348-44	石製品 砥石		長 4.6幅 3.5厚 2.0	埋土	1面を使用。		角閃石安山岩	
822-45 348-45	石製品 砥石		長26.5 幅13.8 厚13.3	西壁上	置き砥。2面使用。1面は刃痕のみ。		4,500g	

## I107号住居跡 (Fig. 824~826・PL. 348、349)

I区の北側西端に位置し、64 I 36~38の範囲にある。西半は調査区域外に延び検出できなかった。平面形態は東壁から南壁にかけてやや脹らみをもつ方形を呈すると考えられる。規模は南北長約3.3mを測り、竈と東壁を軸にする主軸方位はN-73°-Eを示す。壁高は約45cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。南東隅には方形の貯蔵穴が設けられる。径60×44cm・深さ約20cmを測る。竈は東壁に付設され、燃焼部は楕円形に掘り込まれるが煙道部は作り出されない。袖部は短く長さ約30cmで住居内に張り出している。燃焼部幅約50cm・奥行約55cmを測る。遺物は散在的出土で羽口もある。

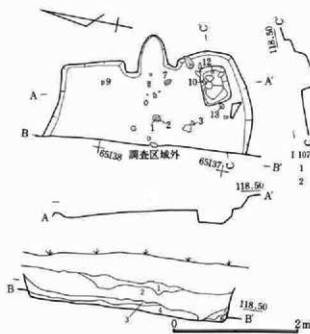


Fig.824 I107号住居跡



Fig.825 I107号住居跡

- I107号住居跡
- 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を含む。
  - 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を含む。
  - 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を含む。
  - 暗褐色土 C 軽石・炭化粒を含む。
  - 暗褐色土 C 軽石を含む。
  - 暗褐色土 黄白色砂岩質を含む。

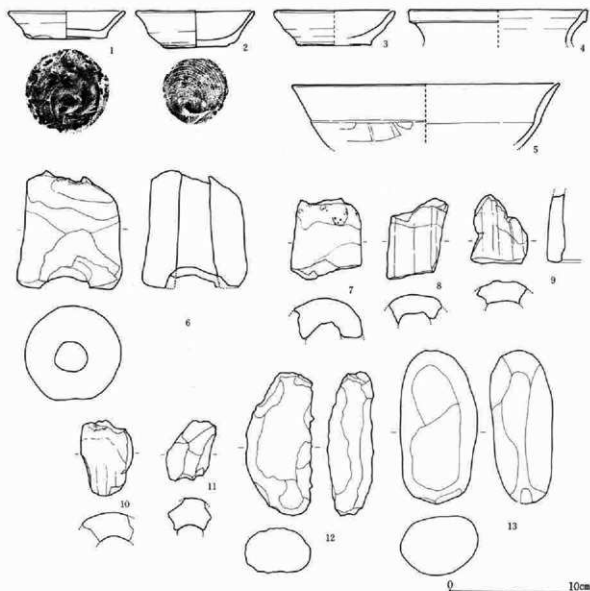


Fig.826 I 107号住居跡出土遺物

I 107号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②胎土 ③釉土 その他
826-1 349-1	土器 杯	口~底 完	9.4 × 6.2 × 2.2	電手前埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③緻密
826-2 349-2	土器 杯	口~底 完	9.5 × 5.4 × 3.0	電手前埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②灰白 ③緻密
826-3 349-3	土器 杯	口~底 小片	9.7 × 6.0 × 2.8	南東部床 面	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
826-4 349-4	須恵 壺	口~頸	14.4 × - × (2.6)	電内	紐造。轆轤。横断で。灰被り。	①還元・良好 ②褐灰 ③細砂混る

I 107号住居跡出土遺物観察表

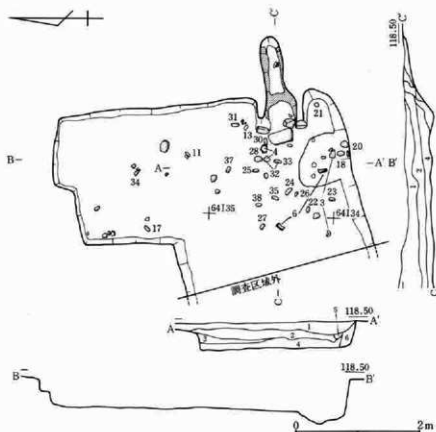
Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)		出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	口径 × 底径 × 器高			
826-5 349-5	土製品 杯	口〜体	21.4 × — × ( 5.0)		竈内	組造、撫で。口径部内外強い横撫で。体部荒削り。大型。劣化顯著。	①酸化・不良 ②にぶい橙 ③緻密
826-6 349-6	土製品 陶羽口	先〜基	長 9.3 幅 8.5 厚 7.5		埋土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。短身。	①酸化・二次還元 ②灰白〜橙 ③砂混る
826-7 349-7	土製品 陶羽口	先〜中 尾	長(6.4)		竈手前埋土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。短身。	①二次還元 ②灰オリーブ〜淡黄 ③砂混る
826-8 349-8	土製品 陶羽口	中	長(6.4)		埋土	棒付。縦方向撫で。	①二次還元 ②灰〜黄橙〜灰白 ③砂混る
826-9 349-9	土製品 陶羽口	基	長(5.4)		北東部床面	棒付。縦方向撫で。薄手。	①二次還元 ②灰白〜灰黄 ③細砂混る
826-10 349-10	土製品 陶羽口	先	長(6.0)		貯蔵穴内埋土	棒付、撫で。	①二次還元 ②灰黄 ③砂混る
826-11 349-11	土製品 陶羽口	中	長(5.4)		貯蔵穴内埋土	棒付、撫で。	①二次還元 ②灰白 ③砂混る
826-12 349-12	石	完	長11.3 幅 5.4 厚 3.7 283.7g		南東部床面	長円形。表面割離。	石灰閃緑岩
826-13 349-13	石	完	長12.3 幅 6.1 厚 5.0 398.2g		南東部床面	長円形。両端に打撃痕。	輝石安山岩(粗粒)

I 108号住居跡 (Fig. 827〜831・PL. 349〜351)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	3.24 × 3.08 張り出し部 2.24 × 1.79	N-82°E	東壁やや南寄り	楕円形 82 × 55 × 22

I区の北側西端に位置し、62〜64 I 33〜36の範囲にある。住居跡の西側は調査区域外に延び検出されない。また、110号住居跡と重複しており新旧関係はこれより新しい時期の所産である。平面形態は北壁が突出し張り出し部をもつ形態である。壁高は約40cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦で踏み跡よりは良好である。張り出し部は幅2.1mで北壁より1.5mほど突出し、さらにこの突出部の東側は幅1.1mで約40cm張り出す2段構造となっている。床面は変化なく平坦である。竈は東壁に付設され、楕円形の燃焼部から緩い角度で立ち上がり、水平で長い煙道部へ続く。袖部は住居内に張り出し、その先端部には凝灰岩の加工材が埋設される。袖材内法約45cm、燃焼部奥行き約60cm、煙道部長さ約90cmを測る。出土遺物は羽口の他、長楕円形の川原石が多く検出されている。

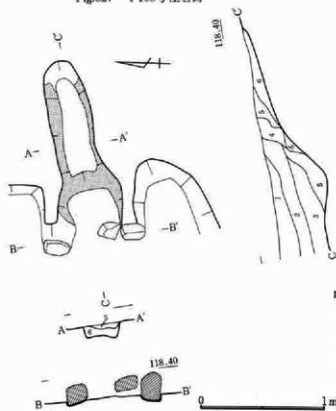
第5章 I区の遺構と遺物



I 108号住居跡

- |        |                    |
|--------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | C軽石少量含む軟質土。        |
| 2 黒褐色土 | C軽石・炭化粒を含む。        |
| 3 暗褐色土 | C軽石を含む。灰土塊、下位に灰あり。 |
| 4 黒褐色土 | C軽石大粒を含む。          |
| 5 暗褐色土 | C軽石を含む。粘性土。        |
| 6 暗褐色土 | C軽石を含む。粘性土。        |

Fig.827 I 108号住居跡



I 108号住居跡竈

- |        |             |
|--------|-------------|
| 1 黒褐色土 | C軽石を少量含む。   |
| 2 黒褐色土 | C軽石・炭化粒を含む。 |
| 3 黒褐色土 | 粘土塊を含む。     |
| 4 暗褐色土 | 焼けた砂粒を含む。   |
| 5 黒褐色土 | 灰土塊・竈の天井崩れ。 |
| 6 黒褐色土 | 竈の天井崩れ。     |

Fig.828 I 108号住居跡竈

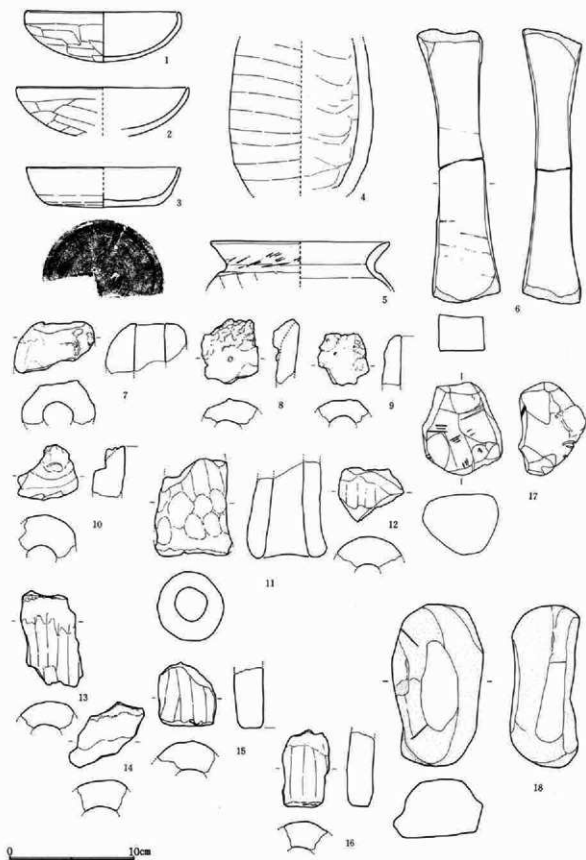


Fig.829 1 108号住居跡出土遺物(1)

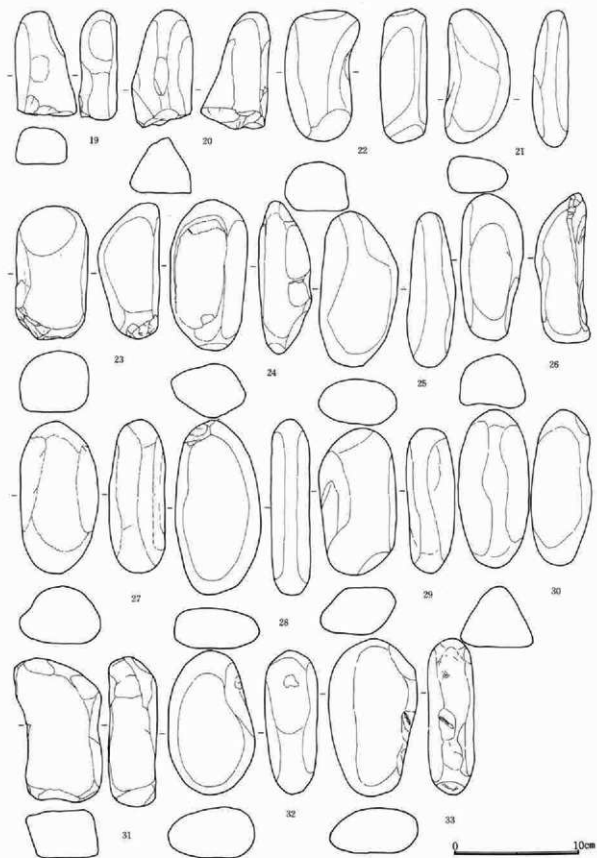


Fig.830 I 108号住居跡住居跡出土遺物(2)



Fig.831 I 108号住居跡出土遺物(3)

I 108号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
829-1 350-1	土師器 杯	口~底 完	12.4 × — × 4.0	電手前埋 土	指押。口縁部及び内面飾。体~底部横 方向直削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
829-2 350-2	土師器 杯	口~底 小片	13.8 × — × (3.9)	埋土	指押。口縁部及び内面飾。体~底部直 削り。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
829-3 350-3	須恵器 杯	口~底 片	12.3 × 8.8 × 3.2	南部埋土 散在	轆轤。右回転。腰~底部回転削り。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密

I 108号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
829-4 350-4	須恵器 瓶	体 片	— × — × (11.8)	甕手前床 面	紐造巻上げ。横撫で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
829-5 350-5	土師器 甕	口~上 片	14.4 × — × ( 3.6)	埋 土	紐造。口頸部強い撫で。体部斜方向置削り。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
829-6 350-6	石製品 砥		長21.9 幅 2.9 厚 3.6 588.1g	南高床面 散在	据砥石。中折後、各片毎に継続使用。	砂岩
829-7 350-7	土製品 鬮羽口	先 片	長(4.0)	甕煙道部 埋土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。	①酸化・良好 ②に ぶい粒 ③粗砂混る
829-8 350-8	土製品 鬮羽口	先 片	長(5.1)	北半中央 埋土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
829-9 350-9	土製品 鬮羽口	先 片	長(4.1)	北半中央 埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②黒灰 ③砂混る
829-10 350-10	土製品 鬮羽口	先 片	長(4.4)	北半中央 埋土	棒付、撫で。先端部溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
829-11 350-11	土製品 鬮羽口	中~基	長(7.8) 幅 5.3 厚 5.5	北半西壁 下埋土	棒付、撫で。指頭痕明顯。	①酸化・良好 ②に ぶい黄粒 ③細砂混る
829-12 350-12	土製品 鬮羽口	中 片	長(4.3)	北半中央 埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②粒 ③細砂混る
829-13 350-13	土製品 鬮羽口	先~中 片	長(7.6)	竈北袖脇 床面	棒付、縦方向撫で。先端部溶解物混入。	①酸化・二次還元 ② 黒灰~粒 ③細砂混る
829-14 350-14	土製品 鬮羽口	中	長(5.2)	北半中央 埋土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰~灰 白 ③細砂混る
829-15 350-15	土製品 鬮羽口	基 片	長(5.1)	北半中央 埋土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②粒 ③砂混る
829-16 350-16	土製品 鬮羽口	基	長(6.1)	北半中央 埋土	棒付、縦方向撫で。	①二次還元 ②黒灰 ~灰白 ③砂混る
829-17 350-17	石製品 砥	完	長 7.4 幅 6.3 厚 4.7	北半西壁 床面	円礫。数ヶ所使用。刃当痕もあり。	角閃石安山岩
829-18 350-18	石製品 砥	完	長12.9 幅 7.3 厚 5.5	貯蔵穴内 埋土	長円礫の2面使用。	角閃石安山岩
830-19 350-19	石	片	長(8.3) 幅 5.0 厚 3.1 (180.2)g	埋 土	長円礫。1端を欠く。	石英閃綠岩
830-20 350-20	石	片	長(9.4) 幅 5.0 厚 5.5 (268.1)g	南半中央 床面	三角長円礫。1端を欠く。	輝石安山岩 (?)
830-21 350-21	石	完	長10.7 幅 5.3 厚 2.9 233.2g	甕煙道部 埋土	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
830-22 350-22	石	完	長10.4 幅 6.0 厚 3.8 374.2g	南半中央 床面	長円礫。	黒色頁岩



I 108号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. Pl. No.	器 種 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼 成 ②色 調 ③胎 土 ④その他
			口径	× 底径	× 器高			
830-23 350-23	石	完	長10.7	幅 5.9	厚 5.0	南半南壁 寄床面	長円礫。一端に打撃痕。	石英閃緑岩
830-24 350-24	石	完	長12.0	幅 6.2	厚 4.4	南半中央 部床面	長円礫。	ひん岩
830-25 350-25	石	完	長12.4	幅 6.3	厚 3.9	南半中央 床面	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
830-26 350-26	石	完	長11.6	幅 5.1	厚 4.5	南半中央 床面	長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
830-27 350-28	石	完	長12.1	幅 6.3	厚 4.5	南半中央 床面	長円礫。	角閃石安山岩
830-28 350-28	石	完	長13.8	幅 6.7	厚 3.1	南半中央 床面	扁平長円礫。1端に打撃痕。	輝石安山岩
830-29 351-29	石	完	長11.7	幅 6.3	厚 4.0	埋 土	長円礫。	溶結凝灰岩
830-30 351-30	石	完	長12.6	幅 6.8	厚 4.9	電手前床 面	三角長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
830-31 351-31	石	完	長11.4	幅 7.0	厚 3.9	電北地臨 床面	四角長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
830-32 351-32	石	完	長11.4	幅 6.9	厚 4.3	南半中央 床面	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
830-33 351-33	石	完	長12.5	幅 7.1	厚 4.8	南半中央 床面	扁平長円礫。	頁岩
831-34 351-34	石	完	長10.2	幅 8.1	厚 3.8	北半中央 埋土	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
831-35 351-35	石	完	長12.0	幅 6.9	厚 3.9	南半中央 床面	扁平長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
831-36 351-36	石	完	長12.2	幅 6.9	厚 3.8	南半中央 床面	三角長円礫。	石英閃緑岩
831-37 351-37	石	完	長11.5	幅 5.9	厚 4.5	南半中央 床面	三角長円礫。	輝石安山岩(粗粒)
831-38 351-38	石	完	長12.9	幅 6.3	厚 4.7	南半中央 床面	三角長円礫。	溶結凝灰岩
831-39 351-39	石	完	長17.6	幅 5.2	厚 4.8	埋 土	棒状円礫。	黒色頁岩
831-40 351-40	石	完	長13.5	幅 6.1	厚 5.1	埋 土	三角長円礫。	輝石安山岩(粗粒)

第5章 I区の遺構と遺物

I 109号住居跡 (Fig. 832~835・PL. 351, 352)

I区の北側やや西に偏って位置し、58~60 I 36~39の範囲にある。東側はJ1号溝によって消失しており南側は覆乱部分が多く明確にはできなかった。平面形態は方形を呈すると考えられるが上記したように消失部分が多く詳細は不明である。東西6.4m・南北6.8m以上の規模を持つと考えられる。東西方向を軸線とする方位はN-57°-Eを示す。壁高は約40cmを測り直線的に立ち上がる。床面は凹凸が著しく不安定である。とくに中央部は不整形に窪み、遺物の集中度が高い。出土遺物は羽口と長楕円形の川原石が多い。

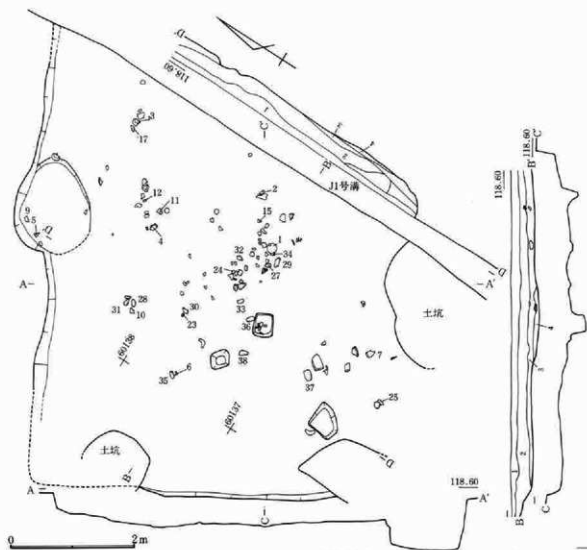


Fig.832 I 109号住居跡

I 109号住居跡

- 1 暗褐色土 炭塵・磁片を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒大粒を多量に含む。
- 4 暗褐色土 炭化粒大粒を含む。

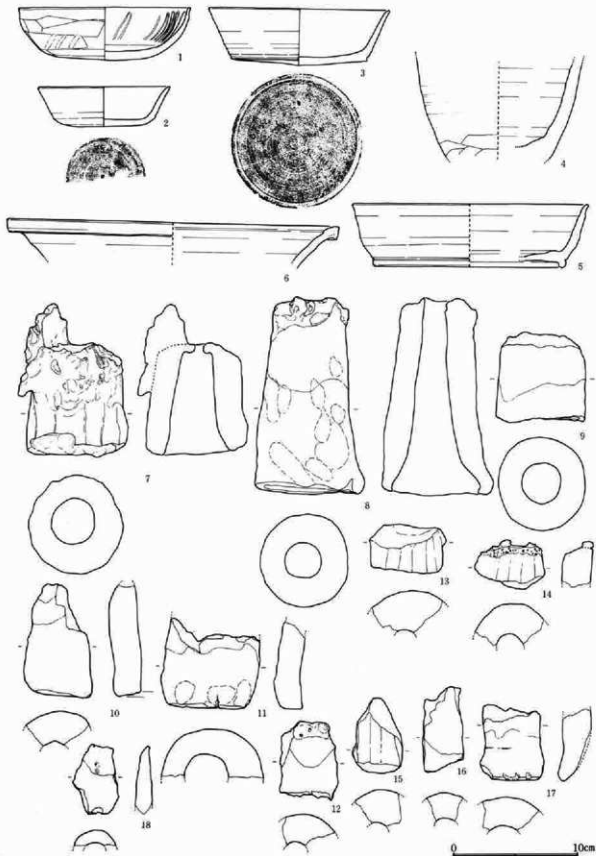


Fig.833 Ⅰ109号住居跡出土遺物(1)

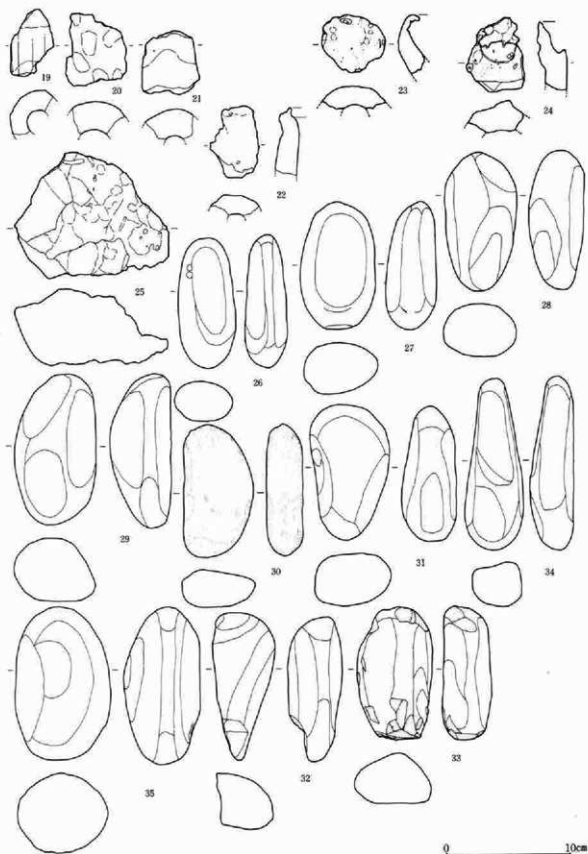


Fig.834 I 109号住居跡出土遺物(2)

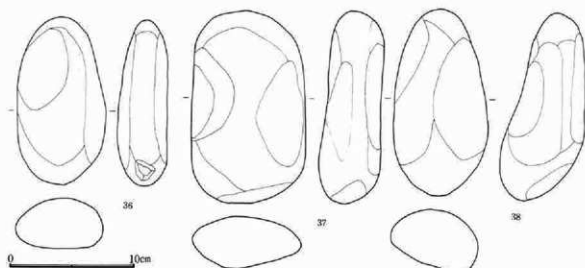


Fig.835 I 109号住居跡出土遺物(3)

## I 109号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
833-1 352-1	土器 杯	口～底 完	13.8 × — × 4.2	中央部埋 土	紐過巻上。口縁部無で。体部横、底部不 定方向旋り。内面螺旋状暗文。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
833-2 352-2	須恵器 杯	口～底 1/2	10.6 × 3.2 × 6.6	中央部掘 形	轆轤。右回転。脚部～底部回輪旋り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
833-3 352-3	須恵器 椀	口～底	14.5 × 11.0 × 4.5	北東部埋 土	轆轤。右回転。底部及び高台回輪旋り。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
833-4 352-4	須恵器 瓶	中～下 1/2	— × — × (7.8)	北東部埋 土	紐造。底部割落。横無で。下位斜方向旋 り。	①還元・良 ②灰黄褐 ③緻密
833-5 352-5	須恵器 盤	口～底 1/2	18.8 × 15.3 × 5.0	北東部北 壁下埋土	轆轤。右回転。腰部、高台、底部回輪旋 り後、高台横無で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
833-6 352-6	須恵器 甕	口	26.6 × — × (3.0)	北西部埋 土	紐造。轆轤。横無で。	①加酸化還元 ②によ い黄橙 ③砂混る
833-7 352-7	土製品 鬮羽口	先～基 完	長9.0 幅7.6 厚7.8	南西部埋 土	棒付。鬮で。外面全体に溶解物附着。短 身。	①二次還元 ②灰 ③砂混る
833-8 352-8	土製品 鬮羽口	先～基	長15.7 幅7.0 厚7.3	埋土	棒付。鬮で。指押痕明顯。先端部溶解物 附着。長身。	①二次還元 ②灰～灰 黄 ③細砂混る
833-9 352-9	土製品 鬮羽口	中	長(7.2) 幅7.0 厚7.4	北東部北 壁下埋土	棒付。鬮で。短身か。	①酸化・二次還元 ②灰白～橙 ③砂混る
833-10 352-10	土製品 鬮羽口	先～基	長(8.9)	北西部埋 土	棒付。鬮で。先端部溶解物附着。短身。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
833-11 352-11	土製品 鬮羽口	基 1/2	長(7.0)	北東部埋 土	棒付。鬮で。基部に指押痕残る。	①酸化・二次還元 ②灰～灰橙 ③砂混る

第5章 I区の遺構と遺物

I 109号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器 種 類 形	部 位 残存量	計 測 値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
833-12 352-12	土製品 陶羽口	先	長(6.2)	北東部埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①酸化・二次還元 ②灰～淡橙 ③砂混る
833-13 352-13	土製品 陶羽口	先 片	長(3.9)	埋 土	棒付、縦方向撫で。	①酸化・良好 ②黄橙 ③細砂混る
833-14 352-14	土製品 陶羽口	先 片	長(3.5)	埋 土	棒付、縦方向撫で。溶解物少量付着。	①二次還元 ②灰黒 ③細砂混る
833-15 352-15	土製品 陶羽口	中	長(6.0)	中央部埋 土	棒付、縦方向撫で。	①二次還元 ②褐灰 ③細砂混る
833-16 352-16	土製品 陶羽口	中	長(6.7)	埋 土	棒付、撫で。	①二次還元 ②灰白 ③緻密
833-17 352-17	土製品 陶羽口	基	長(5.9)	北西部埋 土	棒付、撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰～淡橙 ③細砂混る
833-18 352-18	土製品 陶羽口	先	長(5.5)	埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②褐灰 ③細砂混る
834-19 352-19	土製品 陶羽口	先 片	長(5.4)	埋 土	棒付、縦方向撫で。溶解物少量付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
834-20 352-20	土製品 陶羽口	中	長(5.8)	埋 土	棒付、撫で。指痕残存。	①二次還元 ②灰白 ③細砂混る
834-21 352-21	土製品 陶羽口	中	長(5.1)	埋 土	棒付、撫で。	①酸化・二次還元 ② 灰～黄橙 ③細砂混る
834-22 352-22	土製品 陶羽口	先	長(5.7)	埋 土	棒付、撫で。全面溶解物付着。	①二次還元 ② ③緻密
834-23 352-23	土製品 陶羽口	先	長(4.1)	北西部埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰白 ③砂混る
834-24 352-24	土製品 陶羽口	先	長(5.3)	中央部埋 土	棒付、撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る
834-25 352-25	鉄 板形煎 鉢		長12.4 幅 9.8 厚 6.1	南西部埋 土	炭化物付着。大型。	
834-26 352-26	石	完	長10.4 幅 4.6 厚 3.5 208.1g	北西部埋 土	長円鏡。	輝石安山岩(粗粒)
834-27 352-27	石	完	長10.1 幅 6.1 厚 4.2 347.7g	中央部埋 土	長円鏡。	デイサイト
834-28 352-28	石	完	長12.0 幅 5.9 厚 4.4 389.3g	北西部埋 土	長円鏡。	溶結凝灰岩
834-29 352-29	石	完	長12.0 幅 6.6 厚 5.0 534.4g	中央部埋 土	長円鏡。	グラノファイヤー
834-30 352-30	石	完	長10.5 幅 5.7 厚 3.0 279.3g	北西部埋 土	扁平長円鏡。	石英閃緑岩

## I 109号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm)			出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
			口径	× 底径	× 器高			
834-31 352-31	石	完	長10.8	幅6.5	厚4.3	北西部埋土	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
834-32 352-32	石		長(11.8)	幅(5.0)	厚4.4	中央部埋土	長円礫。側～1端を欠く。	輝石安山岩 (粗粒)
834-33 352-33	石	完	長10.6	幅6.1	厚4.0	中央部埋土	三角長円礫。両端に打撃痕。	石英閃緑岩
834-34 352-34	石	完	長13.7	幅4.8	厚3.5	中央部埋土	棒状円礫。	石英閃緑岩
834-35 352-35	石	完	長12.2	幅7.7	厚6.1	北西部埋土	長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
835-36 352-36	石	完	長13.4	幅7.2	厚4.0	中央部埋土	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
835-37 352-37	石	完	長15.3	幅9.2	厚5.3	南西部埋土	扁平長円礫。	輝石安山岩 (粗粒)
835-38 352-38	石	完	長14.9	幅7.5	厚6.7	北西部埋土	扁平長円礫。	ひん岩

## I 110号住居跡 (Fig. 836~838・PL. 353)

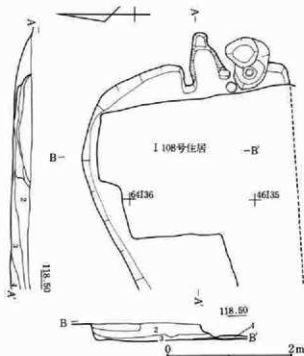


Fig.836 I 110号住居跡

I区の北側西端に位置し、62～64 I 34～36の範囲にある。西半は調査区域外に延び未検出である。108号住居跡と重複しており新旧関係はこれより古い時期の所産である。床面のほとんどと南壁はこのため消失している。平面形態は東壁から北壁にかけて脹らみをもち不整形を呈する。規模は南北長約2.4m・東西長約3.5mを測る。主軸方位はN-73°-Eを示す。竈は東壁に付設され、袖部は住居内に張り出す。焼焼部は

## I 110号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 黒褐色土 C軽石・焼土・炭化粒を含む粘性土。
- 3 黒褐色土 炭化粒・粘土を含む。
- 4 暗褐色土 炭化粒を含む粘性土。

第5章 I区の遺構と遺物

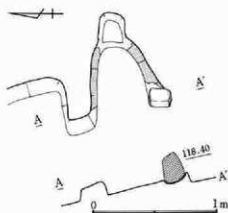


Fig.837 I 110号住居跡

楕円形に掘り込まれ先端部には煙り出し孔が作り出される。袖部は長さ約45cmで右袖先端には凝灰岩の加工材が埋設される。袖間内法は約40cm、燃焼部奥行き約60cm、煙り出し孔径約20cmを測る。出土遺物はわずかであるが土製埴場の破片が検出されている。

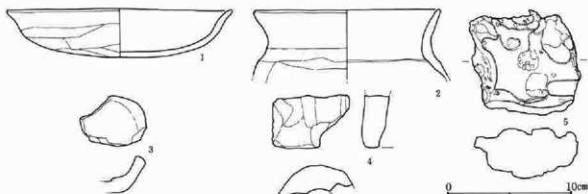


Fig.838 I 110号住居跡出土遺物

I 110号住居跡出土遺物観察表

Fig. No PL. No	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
838-1 353-1	土師器 杯	口～底 片	18.1 × — × 4.0	竈内袖手 前床面	紐造、巻上げか。口縁部及び内面強い振 で。底面不定方向方向削り。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
838-2 353-2	土師器 壺	口～上 全	14.9 × — × (5.3)	貯蔵穴内	紐造。口頸部強い振で。体部横方向削 り。内面削で。	①酸化・良好 ②明赤 褐 ③細砂混る
838-3 353-3	須恵器 杯(埴場)	体～底 小片		埋土	体部削り。内外及び断面に溶解物付着。 破片再利用か。	①還元・良 ②灰 ③細砂混る
838-4 353-4	土製品 編羽口	蓋	長(4.2)	埋土	挿付。振で。指頭痕残る。	①酸化・二次還元 ②灰～橙 ③砂混る
838-5 353-5	鉄 柄形軀幹		長 8.4 幅 7.9 厚 2.5	埋土	炭化物付着。不純物多し。	

I 111号住居跡 (Fig. 839～842・PL. 354)

平面形	規模(長軸×短軸) m	主軸	方位	貯蔵穴の形態・規模(長軸×短軸×深さ) cm
隅丸方形	2.78 × 2.41	N—89°—E	東壁ほぼ中央	



I区の中央部西寄りに位置し、60～62 I 32・33の範囲にある。住居跡の西側で108号住居跡と重複しておりこれより古い時期の所産である。このため西壁は消失している。平面形態は各壁とも丸みを帯び楕円形を呈すると考えられる。壁高は約30cmを測り垂直に立ち上がる。床面は中央部がやや低くなるが、総じて良好である。貯蔵穴などの諸施設は検出されていない。竈は東壁に付設され、袖部はハの字に開き住居内に延びる。燃焼部はやや方形ぎみに掘り込まれて緩い傾斜で立ち上がり、水平で長い先細りの煙道部へ続く。左右袖部はその長さを違えている。左袖の長さは約50cmを測り、右袖はそれに比べ20cmほど短い。左袖の先端には凝灰岩の加工材が配されるが埋設状態ではない。袖間内法約55cm、燃焼部奥行き約60cm、煙道部長さ1.15mを測る。出土遺物は少量である。

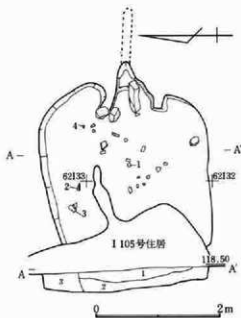


Fig.839 I 105号住居跡

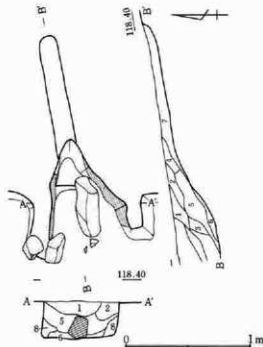


Fig.840 I 111号住居跡竈

I 111号住居跡

- 1 暗褐色土 C軽石を含む砂質土。
- 2 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 3 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。

I 111号住居跡竈

- 1 暗褐色土 焼土粒を少量含む砂質土。
- 2 赤褐色土 焼土、煙道の天井部。
- 3 暗褐色土 焼土を含む砂質土。
- 4 赤褐色土 2と同じ。

- 5 赤褐色土 焼土・炭化粒を含む。
- 6 黒褐色土 炭・灰を含む砂質土。
- 7 暗褐色土 粘土。
- 8 暗褐色土 焼土を少量含む砂質土。

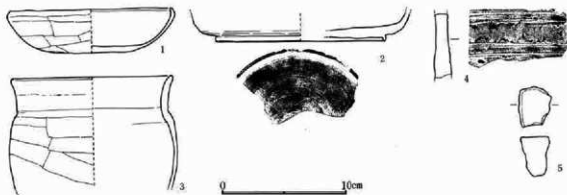


Fig.841 I 111号住居跡出土遺物

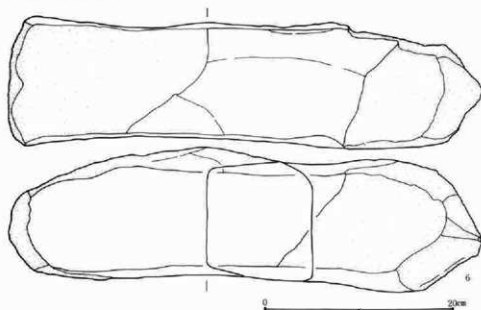


Fig.842 I 111号住居跡出土遺物(2)

I 111号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器名	部位 形状	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 ④その他
841-1 354-1	土器 杯	口~底 片	13.0 × — × 3.5	中央部床 面	指押。口縁部及び内面削で。体部横、底 部不定方向蹴削り。口唇部内傾。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
841-2 354-2	須恵器 壺	底 片	— × 13.6 × (2.2)	北部埋土	轆轤。右回転。腰部、底部、高台回転蹴 削り後、高台横削で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
841-3 354-3	土器 壺	口~上 片	12.9 × — × (8.9)	北部埋土	紐造。口唇部削で。体部横方向蹴削り。 内面横削で。	①酸化・良好 ②橙 ③細砂混る
841-4 354-4	須恵器 壺 小片	頸 小片	長7.5 幅4.9 厚1.3	電北袖壁 床面	波状文。転用痕不詳。	①還元・良好 ②灰 ③緻密
841-5 354-5	石製品 砥	小片	長2.1 幅1.7 厚2.1	埋土	小塊。一面使用。	流紋岩(砥沢)
842-6 354-6	石製品 砥 石		長56.4 幅11.2 厚12	電内	電材に転用。4面使用。置き砥	砂岩

I 113号住居跡 (Fig. 843~845・PL. 355)

I 区の中央部に位置し、62・63 I 21・22の範囲にある。住居跡の西半は調査区域外に延び全容は知ることが出来ない。平面形態は方形を呈すると考えられ、南北長約3mを測る。主軸方位はN-96-Eを示す。壁高は約50cmを測り垂直に立ち上がる。床面は平坦で踏み締まりは良好である。南東隅には不整形の落ち込みが検出されたが、深さがわずかで貯蔵穴とするには心もとない。電は東壁に付設され、鋭角ぎみに掘り込まれた燃焼部より緩く立ち上がり短い煙道部に至る。右袖には長頭形の川原石を埋設してあり、左には埋設痕が残る。燃焼部には支脚痕が検出されている。燃焼部幅約50cm・奥行き約60cm、煙道部長さ約20cmを測る。遺物は散在した状態で検出されている。

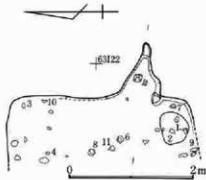


Fig.843 I 113号住居跡

I 113号住居跡地

- 1 暗褐色土 C軽石・炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 1と似るが灰・焼土を含む。
- 3 暗褐色土 焼土・灰を含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 5 黄土

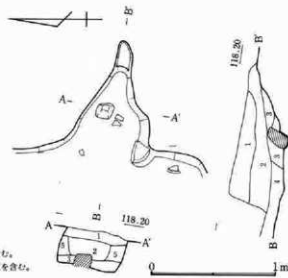


Fig.844 I 113号住居跡地

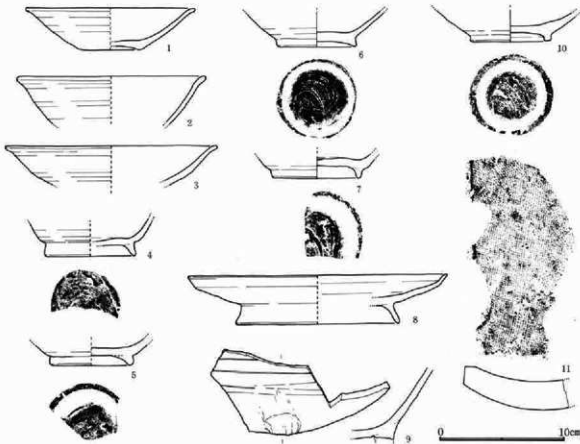


Fig.845 I 113号住居跡出土遺物

## I 113号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
845-1 355-1	須恵器 杯	口~底 片	13.6 × 5.1 × 4.3	貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転糸切り。無調整。	①加酸化還元 ②によ い橙 ③細砂混る
845-2 355-2	須恵器 椀	口~体 片	15.2 × — × ( 3.9)	貯蔵穴埋 土	轆轤。右回転。	①加酸化還元 ②によ い黄橙 ③細砂混る
845-3 355-3	須恵器 椀	口~体 小片	17.0 × — × ( 3.2)	北東部隅 埋土	轆轤。右回転。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
845-4 355-4	須恵器 椀	体~底 片	— × 7.4 × ( 3.0)	北東部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③細砂混る
845-5 355-5	須恵器 椀	底 片	— × 6.8 × ( 2.2)	窰内	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①酸化・良好 ②によ い橙 ③細砂混る
845-6 355-6	須恵器 椀	体~底 全	— × 6.4 × ( 2.8)	中央部埋 土	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰黄 ③細砂混る
845-7 355-7	須恵器 椀	底 片	— × 6.1 × ( 2.0)	南東部隅 床面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰白 ③砂混る
845-8 355-8	須恵器 椀	体~底 片	— × 6.4 × ( 2.5)	中央部床 面	轆轤。右回転糸切り。付高台横断で。	①還元・低温 ②灰黄 ③細砂混る
845-9 355-9	須恵器 大皿	口~底 小片	20.8 × 13.2 × 3.9	南東部南 壁下床面	轆轤。右回転。付高台横断で。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
845-10 355-10	陶質土器 脚付炭	体~底 小片	— × — × ( 5.5)	北東部東 壁下床面	紐造。体部回転埋削り。脚部直削り。欠 損。	①酸化・良好 ②橙 ③緻密
845-11 355-11	瓦 平瓦	片	厚 2.2	中央部埋 土	轆轤、叩打。上面布目肌。下面削で。隅 部面取り。	①還元・良好 ②灰黄 褐 ③砂混る

## I 115号住居跡 (Fig. 846, 847・PL. 356)

I区の中央部西寄りに位置し、60 I 22・23の範囲にある。東側のほとんどはJ 1号溝によって消失している。わずかに北壁から西壁の一部にかけての検出である。竪穴住居とするには何等の条件もなく決定は出来ない。壁線はかなり丸みを帯びている。壁高は浅く15cm程度である。北西には円形の落ち込みがみられ、径約90cm・深さ約15cmを測る。出土遺物は少なくこの落ち込みに集中している。

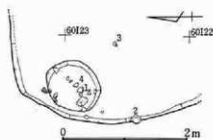


Fig.846 I 115号住居跡

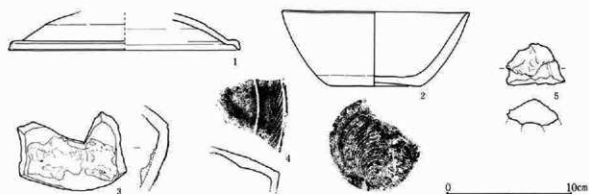


Fig.847 I 115号住居跡出土遺物

I 115号住居跡出土遺物観察表

Fig. No. PL. No.	器種 器形	部位 残存量	計測値 (cm) 口径 × 底径 × 器高	出土位置	器形・成形及び調整の特徴	①焼成 ②色調 ③胎土 その他
847-1 356-1	須恵器 蓋	頂～端 小片	18.5 × 横一 × (3.0)	P i t内 埋土	轆轤。右回転。頂部回転痕有り。	①還元・良好 ②灰 ③細砂混る
847-2 356-2	須恵器 杯	口～底 片	15.0 × 7.3 × 5.9	西壁流入 付着	轆轤。右回転糸切り。腰部荒撫で。内面 炭化物付着。	①還元・低温 ②灰白 ③細砂混る
847-3 356-3	須恵器 短頸甕	上 小片		床 面	内外溶解物付着。転用可能か。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
847-4 356-4	須恵器 短頸甕	上 小片		P i t内 埋土	沈線間に列点帯線文。転用或不詳。	①還元・良好 ②灰白 ③緻密
847-5 356-5	土製品 刷毛口	先	長(3.3)	埋 土	棒付。撫で。溶解物付着。	①二次還元 ②灰 ③細砂混る

## 第6章 成果と課題

### 第1節 上野国府の外郭構造と鳥羽遺跡の位置付けにむけて

本書に記載した報告は鳥羽遺跡のほぼ中央部に位置するG・H・Iの三区画である。また、発掘調査によって検出された諸遺構のうち、竪穴住居跡と、H区に検出されたH1号掘立柱建物跡を本報告書の主なものとした。今回報告できなかった他の遺構については、刊行予定の続刊に合わせて行う計画である。

G・H・I区より検出された竪穴住居跡は総数230軒で遺跡全体からすれば約3分の1にすぎず、遺跡全体を通しての集落構造や各種の考察分析に十分な資料操作を行えなかった。

本稿ではとくにH区に検出されたH1号掘立柱建物跡についてその性格や時代背景にふれ、若干の問題点の提示をもって本報告のまとめとしたい。

H1号掘立柱建物跡は第5章第3節に調査による事実関係の項で述べてある。この遺構からの出土遺物は編年的な資料分析を行っていないため明らかではないが、8世紀中葉から9世紀代にかけての年代が考えられる。遺構の概略は外側から、1辺が各々約50m・30m・12mの3重の方形区画の濠を巡らせ、さらに布掘り工法をもつ同じ方形欄列を配する。中心部には2間×2間の掘立柱を内に、それを囲んで3間×3間の柱穴を配する。3間×3間の柱穴は内側のもとは比べ、柱直径・深さなどの点でやや小規模な掘形であり、建物の構造からすれば2間×2間の身舎に、四周総廊付あるいは四周に縁を巡らす建物<sup>(1)</sup>が考えられる。しかしながら、建物跡は終始この規模と構えをもっていたものではない。最も外側を巡る方約50mの13号溝は出土遺物から最終段階に設けられたと考えられるし、欄列(11号溝)は10号溝と重なりこれを切って設置されているようである。少なくともこの遺構は、1度ないし2度にわたってその構えを変えている可能性があり、建物跡の構造変換には次のような段階が考えられる。1段階、中心部の建物を巡り、浅い10号溝と箱掘形跡の深い12号溝。2段階、同じく建物跡に布掘り工法による欄の設置と12号溝。この段階では10号溝はほぼ埋没している。3段階、一番外側の13号溝が掘られ平面規模が最大になる。この時、欄列が存続していたかどうかは不明である。また12号溝はかなり埋没しており、埋没したままの状態<sup>(2)</sup>で拡張が行われたようである。以上がH1号掘立柱建物跡の概要とその変遷である。

当遺構の性格・機能については、決め手になるべきものがなく不明点が多い。出土遺物の面からも土器類が主であるため、積極的な指針にはならず、建物跡に対する明確な性格認識に至っていない。平面形態や規模などの面では管見した限り、当遺構に類似するような史資料を得ることができなかった。調査中より現在に至るまで各方面の多くの方々より有益な御助言を頂き、幾つかの可能性が考えられている<sup>(2)</sup>。

考えられる可能性の主なもの<sup>(3)</sup>は① 倉庫跡、② 寺院(お堂)跡、③ 神社跡などである。いずれも絶対的な条件を満たすものはなく、いまだ決定を見ていない。ここでは幾つかの問題点を上げて、当遺構のもつ性格・機能を考えるに際し、より焦点を絞った形で今後への検討課題としたい。

1. 倉庫跡 令巻第九 倉庫令 第廿二に(凡倉。皆於 高燥処。置之。側開。池溝。去。倉五十丈丙。不。得。置。館倉。-)とある。立地、付帯設備、規定である。ここに上げた倉庫令は律令機構に則った国衙あるいは郡衙など官制的機構内に属するものをその対象にしているであろうことは言を要さないと考える。しかし、倉庫という建物の機能的側面を考慮した場合、その建造には官制以外のものもこれに準じた規制とも言える傾向が存在したと考えられる。これを参考にして当遺構を照らし合わせると、立地の面では(於。高燥処-)の

条件には合致するとしてよい。遺跡の東辺を南流する染谷川の河岸段丘状の台地に位置しており、高機とは言えないまでも、少なくとも湿気の多い地勢とはなっていない。(開池渠)とする項目に対しては、当遺構は前述したいずれの段階においても溝の存在が認められており、これまた条件に合うと言える。だがここに1、2の問題点が生じる。条文にある池・渠の実体が不明なことである。池・渠とするからには、そこには常に水が蓄えられていたと想定され、また、水を蓄え防火の目的があったと考えられる。このような機能、目的をもった池・渠などに対し、① 調査の所見では10号・12号・13号溝のいずれからも溜水、流水の痕跡を認めることができず、また導水孔あるいは導水路などの施設も検出されていない。② 倉庫令に見る池・渠の形態・規模については何等の記載もされず知ることはできない。はたして当遺構のごとく四周を明瞭な形をもって囲むものか不明と言わざるを得ない。令にある(側)とは脇にとか、付近に、といったことだろうと考えられる。③ また発掘調査による倉庫跡の検出は多くの場合群としてとらえられようと考えられるが、当遺構は単体で存在した可能性が高い。

2. 寺院(お堂)説 『日本書紀』によると寺院関係の用語には「寺」「山寺」「お堂」と使い分けがなされていると考えられている。これによれば「お堂」は「寺」「山寺」と比べ、村落との関係が強く窺われ、里名や村名を堂の名とするものが多くその土地との結びつきが深いのではないかとされる。鳥羽遺跡の地内には「弥勒」の地名が伝わり、その地名からは寺院関係の施設が存在したことが連想されるのである。『上野国郡村誌』によれば「弥勒、村ノ西南ニアリ、東西六町四十間、南北四町三十間、南鳥羽村、西西塚田村に接連ス。」とある。また、『蒼海城古図』によれば同地内に弥勒寺を示し、弥勒寺の造営を文治元年(1185)と伝える。しかしながら今日弥勒寺なる建造物は残されておらず、その明確な地点も定かではない。弥勒の地名、あるいは弥勒寺とH1号孤立柱建物跡との関連を考える場合、その名称の発生時期も問題となる。当遺構が8～9世紀代の所産になるとすれば、弥勒や弥勒寺の名称はむしろ蒼海城の築城により強く係わりをもつと考えた方が無理がないと思われる。一方、当遺構が寺院的建造物(お堂)の前身的な存在であったとも考えられる。しかしながら当該期における寺(お堂)の外見の実体は不明であり、柱穴配置による建物構造や全体的な構えからの比較検討は現在のところ不可能とせざるをえない。

3. 神社跡 当遺構の性格については調査中より、最も強くこの神社跡説が考えられていた。孤立柱の配列からする建物の構造は出雲大社本殿にその類似が見いだされ、また、11号溝として検出された柵列は『群書類従』『神祇部』造殿儀式にみえる端垣の記載として想定が可能であろうか。こうして見ると神社としての可能性が大であるかのように考えられるが、ここにも幾つかの問題点が指摘されている。信仰対象・拝殿などの祭場空間の欠如・その他溝の機能・社殿の規模など神社跡説にとっては不定的な要素も多々ある。

H1号孤立柱建物跡からはこの遺構の性格を直接に示唆するような遺物資料は検出されていない。よって性格を規定する場合建物跡を単独で検証するには限界が生じている。近接する他の遺構や、国府周辺域としての立地などの諸要素の検討が不可欠であろうと考えられる。

まず上野国街域の外郭景観として、当遺構をとらえる方法がある。方八町を国府城としてその推定南限のほぼ西方、西限域から西へ染谷川を挟んで約370mほどの距離にあり、国府城の南西隅に位置する。また前橋市教育委員会によって推定国府城作業線北限にごく近い地点で東西走る上幅7m・深さ2mの大溝が確認されている。この溝はN-89°-Eの方向を示すとされる。出土遺物は瓦・須恵器が8～9世紀、土師器は10～11世紀代とされ、この溝は上野国府の衰退期と合わせ注目されている。H1号孤立柱建物跡の溝・柵囲は開口部を東にもち、この方向を正面とする構えである。つまり、西方の国府を意識して建てられたことが考えられる。また、正面方位はN-80°-88°-Eの方向範囲を示し、とくに孤立柱の配列はN-88°-Eと関係

樋遺跡で検出された溝跡と極めて近似する方向性をもつ。この溝が上野国府の府城を画するものとするれば、国府城の地割りに対して、当遺構はかなり強い規制が意識のもとで建造された建物跡とみることができる。国府城の外郭景観は府城の推定のために、古地名の考証や文献が主流だった従来の研究にいつそう具体的で有力な根拠としての地位が与えられ、今日の国府研究には不可欠な分野となっている。米倉二郎の近江国府城の想定作業の中には「四隅に神地が配置され」とあり、方八町の近江国府城推定に現存する神社の位置が参考とされたのである。現存する地物と、発掘調査によって検出された考古資料とではその扱いを同列に論ずることが出来ないことは言うまでもない。しかしながら、鳥羽遺跡に検出された遺構の性格を考えるうえで、近江国府城の景観は大きな示唆となるのではないだろうか。また国府城の外郭には周防国府跡のように社祠のほか、十王堂なる寺院関係の建物の存在も知られている。先のお堂説の成立にも十分注意をはらわれなければならない。

遺跡内におかれた当遺構の環境面については、竪穴住居跡を中心とした遺構分布のありかた、また北側に近接して検出されたI区の鍛冶工房跡群との関係が注目される。

竪穴住居跡はかなりその偏在性が窺われる。南に続くG区と北側のI区とにともにそれが顕著に現れている調査結果からはH1号掘立柱建物跡との明確な地割り区画のような空間配置はできない。しかし、7世紀後半あるいは10世紀後半から11世紀代の時期に属すると考えられる住居跡は別にして、当該期(8～9世紀)と考えられる住居跡は意識的に居住空間を選定しているような傾向が窺われ、両者の間には有機的な関連が想定される。しかしながら、近接する竪穴住居跡からはH1号掘立柱建物跡との関係を直接示すような遺物類の検出はされておらず今後の検討課題である。

I区に検出された鍛冶工房跡は4群であるが、各工房跡は重複関係もなく同時存在のものかは現在のところ不明である。換業期に関しては、遺構そのものから時代を判定できる土器類の出土が少ないが、一応8世紀代を中心に考えている。全体を検出できた工房跡はなく、確認できた範囲では長さ18m以上・幅約6mの規模をもち平面形態は長方形を呈すると考えられる。浅い竪穴状の掘形に炉跡と台石を配した構造をもっている。H1号掘立柱建物跡とはその最も南よりに位置する工房跡はおおよそ50mの距離を隔てるが、H1号掘立柱建物跡の12号溝より羽口・鋳造鋳型などの鍛冶関係の遺物が出土しており、少なくともある時期両者は同時に存在していた可能性は十分に考えられる。また、鍛冶工房跡はその長軸方向をほぼ東西にもつが北に傾く角度はH1号掘立柱建物跡に極めて近似している。この鍛冶工房跡群の成立は上野国府と密接な関係にあるとの見通しから、国衙機構とどのような拘わり合いのなかでどのような成立意義があったのか、律令政治の歴史的背景をも視点に置かなければならない。このことはH1号掘立柱建物跡の性格・機能の解明にとって大きな指針となるのではないだろうか。

以上とまらなく問題点や検討課題のみの列記になってしまったが、今後当遺構自体の検証とともに集落内における時間的・空間的な位置づけや、鍛冶工房跡群との関連が究明課題となる。このことは、西方に隣接する国府や北方附近にある国分二寺の成立とともに律令期における上野国府城の外郭構成に鳥羽遺跡がいかなる位置を占め、どのような役割を荷っていたかも大きく関わってくる問題である。

## 注

- (1) 掘立柱建物跡の上層構造については国立奈良文化財研究所宮本長二郎氏のご指導を受けた。
- (2) 宮本長二郎・岡田精司・船橋和也・西宮壽紀・神保倫史・石井栄一の各氏からご助言をいただいた。
- (3) この条項は現実にはそれほど拘束力がなかったと考えられる。従来官が関係遺跡の調査例でも必ずしもこの条件に合わないものが多い。
- (4) 畿名類聚抄に東は溝と同じとあり漢字名云田間之水日漢古候反疑横相交稱也。



## 第1節 上野国府の外部構造と鳥羽遺跡の位置付けにむけて

- (5) 平安時代初期の仏教説話集 僧草成撰
- (6) 直木孝次郎「日本書紀にみえる「お堂」について」『奈良時代の諸問題』昭和58年福書房  
寺——官・国・有力貴族・豪族の建てたもの。  
山寺——奈良時代では僧侶の修業の場。  
お堂——村基単位の信仰。
- (7) 『上野国郡村誌』『上野国西群馬郡元総社村大字別館章』明治15年
- (8) 書海城古図 長尾一尖所藏 江戸中期？にみられるが現在の地勢からはその地を同定することはできない。
- (9) 『上毛伝説雜記』泰享安永三年
- (10) 『群馬県古城遺址研究上巻』山崎一昭和53年 永享元年（1429）長尾景行の築城は修築の意味で、以前に城郭の萌芽があったとある。文治元年の弥勒寺造営も書海城存在期から見た伝承とするほうがより妥当ではなかろうか。
- (11) 宮本長二郎氏の御教授による。
- (12) 『類聚神祇本源』度合家行
- (13) 三重大学教授の岡田精司氏から御指摘をいただいた。
- (14) 前原 豊地『関泉橋遺跡』『前橋市文化財調査報告書』第13集 前橋市教育委員会 1982
- (15) 岸田治男『元総社明神遺跡Ⅰ』前橋市教育委員会 昭和58年
- (16) 米倉二郎『近江国府の位置に就いて』『考古学』六一八 1935
- (17) 『滋賀県文化財調査報告書』第6冊 滋賀県教育委員会1977 府城南西側に建部大社があり近江国一の宮で方二町の社地をもつ。
- (18) 『周防の国衛』防府市教育委員会 1967

## 別稿 鳥羽遺跡の神殿建築について

宮本長二郎

本項では鳥羽遺跡の2重の濠と1重の柵囲いをともなう建築遺構について、建築学上の立場からその機能的性格、建築構造の復元的考察を加える。遺構の詳細は前章に記してあるので重複するが、はじめに遺構の概要について必要最小限に記し、次いで類例を求めて当遺構の性格を明らかにしたい。

建築遺構の平面形式は方二間(一辺約4.4m)の身舎の四周に方三間の柱列が巡る、ほぼ正方形の掘立柱建物である。内側と外側で柱筋は揃わないが、柱間寸法をほぼ等しくとり、内外の柱列の間隔は狭い(1.2~1.3m)。また、平面形は正方形ではなく、やや歪みをもち、柱径(12~20cm)は細く、柱間寸法も一定でないなど、やや粗雑な造りをもつ。

建替えは同じ柱位置で1回あり、建物周囲の施設も1~2回の変更を受けている。第1期は、建物に接近して内濠と外濠の2重の濠をめぐらせ、2期には、内濠を埋め立てて、内濠よりやや広めの柵囲い(一辺約14m)に改める。3期は外濠(一辺30m)の外側にさらに濠(一辺約48m)を加えて2重濠に復している。2期は3期に降る可能性を否定できないが、出土遺物等から、造営時期は1・2期を真間期、3期は国分期と考えられる。柵は溝状の掘形に柱を約50cm間隔に立て並べた形式をもち、東面中央部は約2mの間隔で溝状掘形が途切れている。

1期~3期を通して内濠、外濠ともに東面中央部を陸橋としており、全期間を通して東面に出入り口を設けて、東を正面とする建物であったと考えられる。

以上のように、この遺構は特異な平面形式と敷地構えを示しており、他に類例の極めて少ないものである。

正方形平面をもつ建物の類例には、奈良県明日香村水落遺跡があり、方四間(一辺11.2m)の総柱建物の四周を立派な石敷大溝で囲う形式をもつ。柱は掘立柱であるが、柱底には礎石を据え、礎石間を石で連結して頑丈な基礎地業を行っている。建物中央に木製の水槽を設け、水槽への導水管(銅製)や排水溝も設けられて、時間を測り、時を告げ、天体を観測する漏刻であることは明らかである。<sup>(1)</sup>

正方形平面の建物の四周を溝で囲う形式は、鳥羽遺跡と水落遺跡に共通する性格を窺わせる。しかし、建物の質と機能は全く異なることは柱配置や柱径を比較して明らかで、鳥羽遺跡の建築は漏刻ではないが、その構えから漏刻と同様に公共的な性格を備えた建物である可能性は指摘できる。<sup>(2)</sup>

周濠と柵によって敷地を区画する例は、鳥羽遺跡と同じ群馬県内にある群馬町三ツ寺遺跡(古墳時代後期)がある。一辺約60mの方形の敷地を大濠で囲い、濠に沿って柵木、板柵、掘立柱柵の3重の柵を設けて厳重な防備を施した豪族居館跡である。柵木は溝状掘形内に角材を隙間なく立て並べた形式をもち、鳥羽遺跡と同時代の東北地方の城柵に防禦壁として継承される。

鳥羽遺跡の丸太を一定の間隔を置いて溝状掘形内に掘立てる柵木の形式は、三ツ寺遺跡の伝統を受け継ぐが、防禦的な性格は三ツ寺遺跡と較べて薄れ、境界を示し格式を誇示する役割を備えたものといえる。<sup>(3)</sup>

一種の建物を環で囲う例は、滋賀県新旭町針江北遺跡(弥生時代末~古墳時代初期)、滋賀県大津市穴太遺跡<sup>(4)</sup>(古墳時代後期)、平城宮第一次朝堂院下層遺跡<sup>(5)</sup>(古墳時代前期)がある。

針江北遺跡は外濠に囲まれた大きな集落遺跡で、周辺部に堅穴住居を配し、集落の中央に直径約30mの円形に縦板壁で囲い、中央に桁行二間以上、柱間一間の掘立柱建物を配置する。北半分が未発掘であるため縦板

塀がどのような形で全周するのか、塀の出入り口、建物の規模などは分からない。掘立柱建物の隅柱に板状材を用い、他を丸柱とする特異な形式をもつことから、この縦板塀で囲まれた一郭は、集落の中心にあって、祭祀を営む場であった可能性は高い。

平城宮下層遺跡には個々の竪穴住居の周辺を囲う溝状遺構がある。この溝は細く深い形状からみて針江北遺跡と同様の縦板塀の痕跡と考えられ、三棟の住居をそれぞれに囲う構状遺構はいずれも東側を開いている。

平城宮下層遺跡は縦板塀囲いの竪穴住居・掘立柱建物・高床倉・棟持柱付き建物が集落の中心部分を構成し、周辺に板囲いのない竪穴住居を配置している。このような配置形態から、板塀囲いの竪穴住居は他の竪穴住居より格式の高い建物であると推定され、この集落の首長の主屋としての性格が窺える。

穴太遺跡の屋敷構えは、一辺約10mの方形平面をもつ平地式の大規模住居を中心にして二重の柵囲いをもつ。柵木はいずれも杭で1m前後の間隔をあげ、内側の柵は大型住居に接している。外側の柵は不整形に広い敷地を囲い、柵の内側に沿って一定の間隔に植木がある。従前からこの地域は渡来系氏族である穴太氏の本拠地であるとされ、大型住居の形式と二重の柵をもつ屋敷構えは朝鮮半島伝来のものと考えられ、有力氏族の居館として遜色ない構えをもつ。

以上の五つの遺跡例から建物で囲う形式は、公共的なものかまたは、格式が高く、族長と同等以上の構えをもつものと言える。

(6) 奈良県天理市の高塚遺跡(6世紀前半)で発見された建築遺構は、1.4m四方の小建築であるが、四周に垣をめぐらせた切妻造り屋根の小建築であり、濠をもたないが鳥羽遺跡に最も類似した建築遺構である。

針江北遺跡や高塚遺跡は確実に神殿建築遺構であるとは言えないが、その可能性の高いものとするれば、伊勢神宮や住吉大社をはじめ、神社にみられる玉垣、堀垣で神殿を囲う形式は遅くとも古墳時代初頭期にすでに成立していたことになり、鳥羽遺跡の二重の濠と柵で四周を囲う構えは、上記二例よりもさらに神殿としての形式化の進んだものとする事ができる。但し、身を清める為に、河川の清流の近くに神域を営むのが普通で、濠で神殿を囲うのは不自然であるとの指摘があり、この点では問題が残る。

鳥羽遺跡と現存神殿との類似点を求めると、住吉大社の玉垣、および出雲大社本殿の平面形式をあげることができる。

住吉大社は5棟の本殿からなり、各社殿には軒に接するほど近くに玉垣をめぐらせている。このように神殿に近接して玉垣を設ける現存例は少なく、古式を残すものと言えよう。

出雲大社本殿の平面形式は方二間の正方形平面をもち、四周に縁をめぐらせ、切妻造り、妻入の高床建築である。古代に通る創建時の規模は巨大なものと伝えるが平面形式は変わらない。

出雲大社本殿と同様の方二間、切妻造り本殿は住吉大社の近くの鳳神社本殿がある。この本殿形式をもって、大鳥造りの名称を与え、古式神殿を伝えるものとされるが、現本殿は残念ながら明治年間に火災焼失し新しく建替えたものである。

住吉大社・出雲大社・鳳神社はいずれにしても古代的な形式を伝える神殿建築であり、鳥羽遺跡との類似点が多く認められることは、鳥羽遺跡の神殿としての具体的な建築形式を知る上で参考となるであろう。柱配置の形式によって二通りの建物が考えられる。一つは方二間の身舎に四面庇をもつ、方三間平面の仏堂的な形式であるが、仏堂に近接して塀や柵で囲う例や、身舎を方二間とする仏堂例もなく、仏堂とは考えられない。

したがって、この建物は、方二間の身舎の四方に縁をまわし、建物の四周に柵をめぐらせた切妻造り妻入りの高床神殿建築で、正面を東面させ、神殿の四周を囲う玉垣は丸柱に貫を通した柵として、東面開口部の丸

柱を鳥居とする門構えをもつ別宮のような形式に復元するのが妥当と考える。

奈良時代の記録で、大中小諸社の規模を定めた宝龜二年（771）二月十三日の大政官符がある。「統々群書類従卷一」の「類聚神祇本源卷十一」の一、大中小社差別事を以下に抜すする。

この文書は鎌倉時代末期に外宮の禰宜度会家行が述したもので、内容については寸法等に疑わしい点があり、宝龜二年の官符を正確に伝えるものではないとされる。しかし、鳥羽遺跡は正殿一字、瑞垣一重、鳥居一基とする太政官符の小社と一致する構成を示し、時代的にも符号している。従って、細かい数値はともかくとして、宝龜二年太政官符の骨格は大きく変えられていないことが鳥羽遺跡によって、実証されたとも言えよう。

以上は、古墳時代に遡る発掘遺構と現存建築遺構、文献資料によって鳥羽遺跡が神殿であることを考証した。奈良時代以前の祭祀関係遺跡は、これまで神殿をともなわず、特殊な形態をもつ土器や石造物等の遺物の集中出土箇所をもって祭祀遺構とされることが多かったが、ここ数年の間に上記例以外に、祭祀に関わる建築——棟持柱をもつ建物——と考えられる遺構も発見されるようになった。

鳥羽遺跡や本項で取り上げた他の遺跡のように、特異な形態をもっていて神殿であると判定するのは比較的容易であるが、ごく普通の建物を神殿としていたこともあり得るし、未報告ながら、そのような例も発見されはじめている。古代の神殿建築遺構は近年、ようやくその姿を現しはじめたのであるが、鳥羽遺跡はなかでも最も神殿らしい遺構であると言える。

#### 一 大中小社差別事

大政官符神祇官并五畿七道諸國司

應早定 置天下諸社大中小少神殿雜舍瑞垣珠垣鳥居并四至内地町敷

#### 一事

正一位正三位以上爲大社

從三位從四位以上爲中社

正五位從五位以上爲少社

一 大社四至限九町三間檜皮葺正殿一字高一丈二尺在 堅魚木八丸長五

九千木四支長一丈瑞垣一重方一丈珠垣二重方五丈内外鳥居一基內本

高丈六尺外丈九尺三間檜皮葺幣殿一字高八尺一本尺五間草葺拜殿一字尺八

五間板葺幣殿一字尺八五間板葺直會屋二字尺八壹葺板舍二字 三間

草葺盛屋二字在戸左右板葺廊一字各高五間外舍二字尺八五間馬屋

二字

一 中社四至限八町 三間檜皮葺正殿一字高一丈一尺在 堅魚木六丸長

七千木四支長一丈瑞垣一重方一丈五玉垣一重方三丈内外鳥居一基內本

七三間板葺幣殿一字尺八三間板葺拜殿一字尺七五間同體殿一字尺四

三間同直會屋二字高七五間外舍一字

一 少社四至限四町三間板葺正殿一字高七尺在 堅魚木四丸長四尺

木四支長一丈瑞垣一重方一丈鳥居一基高六尺三間草葺拜殿一字尺七三間

板葺幣殿一字尺七五間雜舍二字尺四

右板一左大臣宣一備奉、勸請國神社正殿雜會并四至町敷所定如

件宜仰在國司以正稅物數令追進自今以後不可違失若有

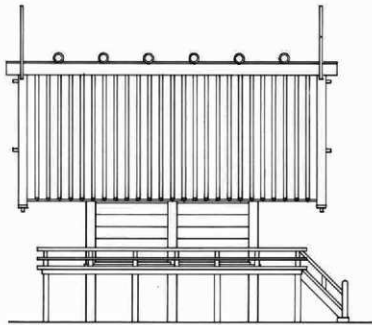
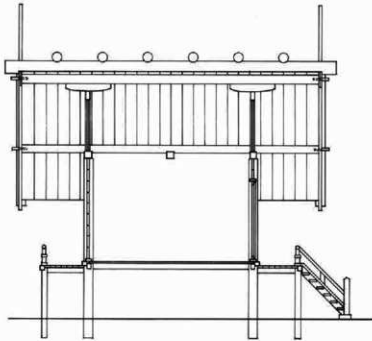
破損者應令社司修造無其勤者料大減解却見任官直承

知依宣行之符到奉行

正四位上行大辨兼右兵衛督藤原朝臣

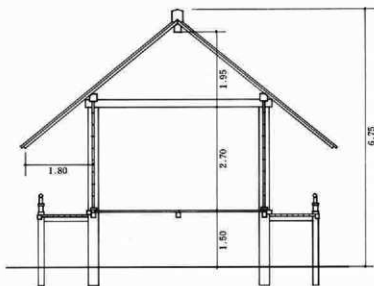
右大臣外正六位上阿倍志兼連東人

寶龜二年二月十三日

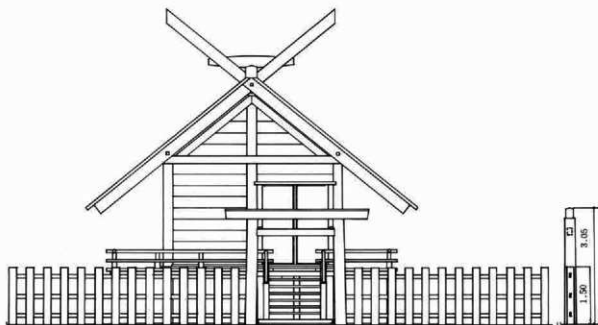


神殿桁行断面図(上)、神殿側立面図(下) 1/100

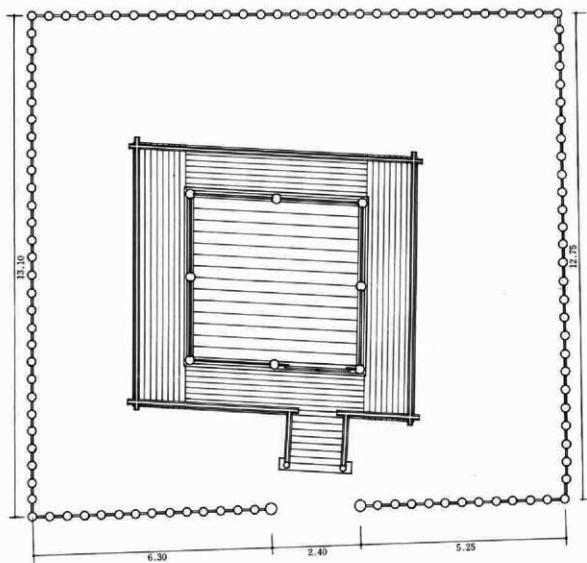
別稿 鳥羽遺跡の神殿建築について



神殿梁行断面図 1/100



神殿正面図



神殿・瑞垣・鳥居平面図

註

- (1) 「飛鳥の水時計」飛鳥資料館目録第11冊 昭和58年
- (2) 「群馬県三ツ寺1遺跡調査概要」『考古学雑誌』第67巻第4号 1982, 3
- (3) 「高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要」滋賀県教育委員会 1986
- (4) 滋賀県教育委員会 林博通氏の指示による。
- (5) 平城宮跡第171次発掘調査「平城宮跡発掘調査部発掘調査概要」奈良国立文化研究所 1986
- (6) 「高塚遺跡発掘調査現地説明会資料」天理市教育委員会 1985
- (7) 三重大学岡田龍司教授の指示による。





# 鳥羽遺跡

G・H・IX

《本文編》

一関越自動車道(新海線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集一

昭和61年10月20日 印刷

昭和61年10月30日 発行

編集／群馬県教育委員会  
前橋市大手町1丁目1番1号  
電話 (0272) 23-1111

助群馬埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

頁 ・ 行	誤	正
184頁17行目	欄列	冊列
184頁18行目	欄列	冊列
184頁20行目	短頸壺と頸部	短頸壺と長頸壺
207頁	H10号住居跡 (Fig. 297~299・PL. 103)	H10号住居跡 (Fig. 297~300・PL. 103)
241頁10行目	短かい部	短い凸部
243頁6行目	短かい	短い
269頁2行目	短かい	短い
278頁	H45号住居跡 (Fig. 395・PL. 137)	H45号住居跡 (Fig. 395、396・PL. 137)
285頁2行目	凸出部	突出部
285頁4行目	凸出する。	突出する。
289頁4行目	凸出する	突出する
292頁10行目	凸出する	突出する
297頁6行目	床間は	床面は
411頁	I6号住居跡 (Fig. 494~495・PL. 197~199)	I6号住居跡 (Fig. 494~497・PL. 197~199)
421頁4行目	状態であつた。	状態であつた。
439頁9行目	台形を定し	台形を呈し
476頁1行目	当概区	当該区
481頁1行目	A・Bの裏が	A壺の壁が
526頁7行目	約5.6cm	約56cm
769頁17行目	弥 <sup>レ</sup> 寺	弥勒寺